

アンブレイカブルハン ター

エアロダイナミクス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

下村悠二は病弱で入院生活が長かったため、唯一の趣味が読書で、楽しみが漫画やゲームなどしかなかった。

その中でもHUNTER×HUNTERのコミックを愛読していた。もし、念能力が使えるなら、と妄想し、実際に瞑想することで日々の苦しみをやり過ごしていた。しかし闘病生活の末18歳という若さで彼はこの世を去った…。

…かと思いきや、4歳のカームIIアンダーソンという男の子にいつの間にか生まれ変わっていたらしい。しかも、ヨークシン、ヨルビアン大陸など、聞いたことがある名前が。

ここはHUNTER×HUNTERの世界だ！と、気付いたとき、彼は再び絶望することとなる。生まれ変わった身体も病弱だったのだ。

更に、ここは原作の250年以上昔の世界だった。

これは、もう絶対に死にたくない男が、絶望を乗り越え、念能力を発現させ、自身の運命に立ち向かう話である。

そして、厄災を知らないまま、暗黒大陸に立ち向かい、地獄を見る男の話である。

※オリジナルの展開や、オリジナル念考察、そして暗黒大陸の妄想を含みます。ご注意ください。

追記：完結しました！

目次

プロローグ

- 1、プロローグ ーある転生者の独白

1

ヨークシン時代

- 2、転生 ー 6
- 3、現状把握&念への目覚め ー 15
- 4、目指すは強い身体 ー 25
- 5、新しい能力 ー 34
- 6、身体を鍛えよう！ ー 41
- 7、系統別修行 ー 51
- 8、ジュニアハイまで ー 63
- 9、文字通り弟子 ー 73

幕間

- 10、静かな日々の訓練を ー 82
- 11、ハイスクール時代 ー 89
- 12、卒業と旅立ち ー 97
- 13、カーム伝説 ー 105
- 14、マイケルの決意 ー 119
- 15、マイケルの成長 ー 130
- 16、マイケルの別れ ー 138
- ハンター試験編
- 17、ハンター試験対策 ー 148
- 18、サバイバル訓練 ー 158
- 19、マンティコアとの闘い ー 166
- 20、水中戦 ー 178

カキン修行編	21、水中適応訓練	189
	22、試験会場の道のりと帰省	
	23、我が家にて	205
	24、現在の主人公の能力一覧	
	25、会場への道	217
	26、ジェヴォーギンの獣	224
	27、ミンボ共和国へ	233
	28、厄災のカケラ	241
	29、ハンター試験について	256
	30、合格を胸に	264

暗黒大陸編

40、迷宮都市	373
39、合流	363
38、再戦	347
37、迷宮都市への行軍	338
36、限界境界線を越えて	329
35、船中にて	315
304	
34、師匠の餞別、そして別れ	
290	
33、修行の日々、そして運命の選択	278
32、師を求めて	
31、カキンへ	271

5 3、宿命の闘い	546
5 2、再取得	536
5 1、暗黒大陸再び	527
5 0、決着	512
4 9、「神」との闘い	495
4 8、人間	478
4 7、異世界の「神」	463
4 6、強く	448
4 5、ヘルシーマン	433
4 4、叛旗	417
4 3、トリガー	406
4 2、プランB	393
4 1、植物兵器	384

6 4、四次試験	702
6 3、三次試験	686
6 2、二次試験	676
6 1、一次試験(後編)	662
6 0、一次試験(前編)	651
再ハンター試験編	
5 9、前へ	641
5 8、師匠	623
5 7、メッセージ	611
5 6、マイケルの足跡	597
5 5、帰還	583
帰還編	
5 4、願い	564

65、	面談	714	76、	四大行と「彼女」の合流	959
66、	最終試験	725	896		
67、	ヒソカとの約束	740	77、	バイト兼修行	908
68、	ネテロ会長との約束	751	78、	休日	927
69、	ライセンス更新	774	79、	系統別修行と会長の来訪	
70、	帰還後の能力一覧	785	936		
	ゾルデイツク編		80、	真夜中の交流	959
71、	家庭訪問	796	81、	発とクラピカの試練	
72、	本邸にて	809	82、	いまさら天空闘技場	
73、	再会	823	83、	200階バトル	
	ヨークシン修行編		84、	蠢動	
74、	ヨークシンへ	851	85、	お試しプレイ	1073
75、	修行開始初日	868	86、	第3形態	1093

87、	バツテラ	1117
幻影旅団騒乱編		
88、	幻影旅団	
89、	襲撃前夜	
90、	始動	
91、	沼	
92、	ノブナガとの死闘	
93、	2本目の脚	
94、	弾丸のメッセーじ	
95、	突入前	
96、	突入	
97、	別人	
98、	孤軍奮闘	
13001291127512601250123712121195117311541140		

99、	反省点	1313
100、	覚醒	1329
101、	紙と糸	1355
102、	マフィアの矜持	1375
103、	勝利条件	1396
104、	偽りの希望を求めて	1417
G・I編		
105、	契約変更	1430
106、	テコ入れ	1447
107、	穏やかなG・I生活	1462
108、	フラグ	1478
109、	闇の森	1491
110、	スプリガン	1507
141713961375135513291313		

1 1 1、	一坪の密林	1525
1 1 2、	ソウフラビへ	1542
1 1 3、	挑戦者	1560
1 1 4、	カキン流奥義	1574
1 1 5、	一坪の海岸線	1605
1 1 6、	鬼ごっこ	1630
1 1 7、	悪の定義	1651
1 1 8、	想い	1676
1 1 9、	羽化	1699
1 2 0、	試練の終わり	1717
1 2 1、	祝宴	1744
東の間の平穩編		
1 2 2、	門出	1770

1 2 3、	始動	1796
1 2 4、	黒幕	1815
カタストロフィ編		
1 2 5、	大規模テロ	1837
1 2 6、	ヘルベル	1855
1 2 7、	ブリオン	1877
1 2 8、	衆愚の王	1902
1 2 9、	等価交換	1927
1 3 0、	ツエリードニヒ	1948
1 3 1、	集大成	1975
1 3 2、	始まり	1997
1 3 3、	奮闘	2024
1 3 4、	人飼いの獣	2037

1 4 6、	幕間	2314
2293		
1 4 5、	アンブレイカブルハンター	2265
1 4 4、	開幕	2248
1 4 3、	救済	2222
1 4 2、	三賢猿	2198
1 4 1、	反撃の狼煙	2185
1 4 0、	意志をもつ病	2171
1 3 9、	挑発	2146
1 3 8、	会见	2117
1 3 7、	人と蟻	2088
1 3 6、	人間の力	2061
1 3 5、	蟻の王	

外伝 2、	新たなる世界	2598
外伝 1、	泉のほとりにて	2570
外伝		
1 5 5、	カーテンコール	2550
1 5 4、	終幕	2518
1 5 3、	真夜中のサーカス	2487
1 5 2、	ゾバエ	2471
1 5 1、	奇跡を起こす男	2449
1 5 0、	アイ	2418
2403		
1 4 9、	復讐は夢き人間の為に	2378
1 4 8、	魔王	2340
1 4 7、	幕間 2	

外伝3、魔界騒乱

2621

プロローグ

1、プロローグ ～ある転生者の独白～

突然だが、「地獄」と聞いて、どんなイメージをするだろうか。

おそらく、怖い、恐ろしい、苦しいところだという印象だろう。

現代日本人にとって一般的なイメージは、死後の世界の一つであり、悪い事をして死んだやつが行くところである。

日本人は宗教観が割とおおらかなので、漠然としかイメージ出来ない人が大抵だろう。ただ、不思議な事に、差異はあれど、どんな宗教でも似たような概念がある。

そのため、怖い、恐ろしい、苦しいというイメージが成立するのだ。

「悪いことすると地獄に落ちるよ」は、子供に対するある意味常套句でもある。悪行を重ねすぎるとひどい目に遭うという警告である。それに従わなかった罪人は地獄に落ちるのだ。落ちた先では大抵、生前の罪を浄化するための刑罰を受ける。

そして、その刑罰のバリエーションは多岐に亘る。

灼かれ、凍え、飢え、喰われ、煮られ、刺され、千切られ、削がれ、擦り潰され…ありとあらゆる拷問を受け、苦痛を受けさせられ、しかし死ぬ事は許さない。

仮に死んだとしても再び蘇り、永劫の年月を過ごすのだ。

おお、神よ！

信心深い奴は地獄に落ちない様に現世の生き様を清く、正しく過ごす事を心に誓うわけだ。

何故そんな話をするかつて？

それは、今、現在進行形で間違いなく自分が地獄の責め苦を受けているからだ。

灼かれ、凍え、飢え、喰われ、煮られ、刺され、千切られ、削がれ、擦り潰され、更には病魔に苦しみ、内臓は溶け、寄生され苗床になり…ありとあらゆる苦痛を経験した。致死性の病原菌、感染性と殺意の高いウイルス、凄まじい程の環境変化、それに対応する為か、凶悪な植生に進化した植物、そして、想像を絶する怪物達…

ここではありとあらゆるものが殺意をもって襲ってくる。

仲間達は同じ様に割と悲惨な目に遭い、早々にあの世へ旅立ってしまった。

…或いはその方が幸せだったかも知れない。たとえこの未開の地に、誰にも弔われず屍を晒す事になったとしても。何故なら死んだらもう苦しみを受けずに済むからだ。

だが、私は死ねない。

もちろん死なない事にも様々な理由がある。

それを語るには生い立ちまで遡らなければならなかったため、後々じっくり語るとしよう。

ただ、おかげ様で私にとってここは、正しく地獄と言えるようになってしまった。

おそらく、これは罰なのだ。未知の世界を正しく理解しないまま挑んでしまった私への罰。登場人物が無慈悲に、容赦なく死んでいった世界観を甘く見たツケを今、身をもって払っている所だ。

…何故こんな事になってしまったのだろう。

最初はただただ死にたくなかった。

憧れの世界に来て、必死で鍛え漸く健康な体を手に入れた。そこから私の人生は華開いた。

思えば浮かれて調子に乗っていたんだらう。新しい能力を取得し、ハンター試験にも

受かり、修行を続け、最強ではないが生きていく上での一端の強さを身に付けたと思っていた。万能感に酔いしれていた。

それが、大きな間違いだった。



ここは暗黒大陸。

メビウス湖を越えた先に待つ、人類未踏のフロンティア。

ありとあらゆる未知にあふれた世界。

ハイリスクではあるが、底知れぬリターンが確約された地。

さながら古くから伝わる聖地カナンの様に。

されどそこは開けてはならぬ箱。

希望はあれども一番奥にほんの僅か。

箱の中には大量の絶望が詰まっていた。

…だが、私はまだ生きています。

生きてる限り、生き続け、この閉じた箱から脱出してみせる。

それが今の、私の希望だ。

私の名はカームIIアンダーソン。

これは、私の暗黒大陸紀行である。

ヨークシン時代

2、転生

私、こと下村悠二が死んだのは、病気を拗らせたからだ。

いきなり先程とは違う名前だが、いわゆる生前の名前というやつだ。

前世では、元から身体が弱い方で、学校などにいるよりも病院にいた方が長かった。

現代日本では医療も発達し、中々死ぬ事は無いが、私に言わせて貰えば、苦痛を先延ばしにするだけだった。

産まれた時から病弱で、子供の罹る病気に一頻り罹ると、悉く重症化した。両親は気がでは無かっただろう。年齢が上がってもそこは変わらず、ちよつと無理するだけですぐに高熱が出た。進学など望める筈もなく、通信で高卒認定までは何とか頑張ったが、青春や冒険などは活字や絵の中にしか無かった。

おかげ様で、あまり人生に希望が持てず、何処か諦めを漂わせる様な枯れた性格に

なってしまうた。

病院で寝たきり生活が続くのは苦行以外の何物でもない。自分が手に入らないものを擬似体験するため、自然と趣味が読書になった。また唯一の楽しみは兄や数少ない友人の差し入れである漫画やアニメ、ゲームなどだった。

そんな中でも、特にHUNTER×HUNTERは愛読した。

キャラクターの力強い動き

生命力に満ちた眩い輝き

未知に挑むワクワクする冒険

それを支える緻密すぎる程の設定

全てが魅力的であった。

あまりにも魅力的すぎて、《念》を発現したくて、瞑想してみたり、能力を考え、名付けたりもした。

おそらく皆も小さい頃やった事があるのではないだろうか？傘を剣に見立て、振り抜いたり、両手から気功波を出そうとしてみたり。

私の場合は病室で静かに瞑想してるだけだった。というか体力の関係上これしか出来ない。割と大きくなつてからもやってたから立派な中2病である。まあ私の罹る病の中では可愛いものだ。少なくとも迷惑はかけないしね。

おかげで高校生になる頃には僧侶もかくやといわんばかりの瞑想が出来るようになった。余計な事を考えず、無心に没頭出来るのが良い。

あわよくば《念能力》に目覚めないかな〜とか思ってたけど、現実でそんなものがあるはずもなく、結果的には無為な時間を過ごしたただけだったが、精神の安定と、無聊を慰める役にはたった。

そんな私の直接の死因は、新型のウイルスが世界的に広まったこと。例によつてあつさり感染した私は呆気なく重症化し、これまた呆気なく死んだ。

享年18歳であつた。

……

……

意識が拡散していく。

これが『死』か…

死にたくなかったな……。

生きてる内大半が病との闘いだった。

まだまだやってみたいことはたくさんあった。

HUNTER×HUNTERの33巻読みたかったなあ…。

ここから面白くなりそうだったのに…。

.....



.....

.....

.....

.....

気付いたら知らない天井を見ていた。

まさかあれから奇跡的に助かったのか？ いや、明らかに心臓は止まったし、且つ呼吸も止まっていた気がするのだが。それにここは病室の様だが、どこかおかしい。まず、部屋が古めかしいのだ。まるで昔の建物の様に。

次に、自分の身体だ。確かに新型のウイルスに感染して、意識が無くなったと思ったのだが…

後遺症など微塵も無い。自分の事でもあるので、身体の状態は確実に分かる。分かるからこそ感じる最大の違和感。

「小さい……。」

思わず呟いた声も自分の声じゃない。ふと見ると、自分の手が縮んでいた。

無論手だけではなかった。目で見て、触つてを繰り返すうちに、全体が縮んでいることが分かった。

まるで幼児の様に。

パニックになりそうになったが、昔からの経験上、慌てても余計な体力を消耗するだけである。こういった不測の事態に対して、メンタルを安定させる事が事態を悪化させないコツだ。落ち着いて癖になってしまった瞑想をし、現状を整理して考えようとした瞬間

頭が割れる様な痛みが走った。

そして、痛みに伴って次々とこの身体のエピソードが浮かんできた。

『この身体』の持ち主は、カームIIアンダーソン。

年齢は4歳。

サヘルタ合衆国産まれ。



つまり、私は生まれ変わったらしい。

天に昇らず転生したわけだ。

名前が下村だからアンダーソンかよとか、下らないツツコミがよぎるが、なにはともあれ、再びチャンスをもたらえたわけだ。今度こそ充実した人生を送りたい。

これは神様がくれたチャンスだろう。

よく読んでいたラノベにも出てくるシチュエーションではある。

ただ、白い部屋とかで神には会わず、転生特典とかも何もなかったが。

それでも意識そのままでもやり直せるなんて大きなアドバンテージだ。

私はこのとき初めて神に感謝した。

このアドバンテージを活かして、思いっきり人生を満喫してやろう。

しかし、アメリカなら聞いたことがあるが、サヘルタ合衆国って何だろうね。いわゆる異世界なんだろうか。今は情報収集に努めるしかないか。

しかし、妙に体が重いな……。誰か呼んで聞いてみるか。

後になって分かった事だが

この身体も病弱であり、私は再び神を呪う事になった。

3、現状把握&念への目覚め

転生から2日たち、周りの状況がなんとなく分かってきた。

あれから精神的に疲労したらしく、高熱が出て、2日間悪夢の中を彷徨った事で、神を呪うと同時に慎重にならねばならぬと自分を戒めた。

さて、この新しいボディ、カームIIアンダーソン君(4)は、前世でいうアメリカ人に相当する。両親は健在で、何の仕事をしてるか知らないが割と裕福らしい。

じゃないとずっと入院なんてしてられないしね。

幼児で良かった点は、無邪気に色々と情報を集められる所だ。頭脳は大人(に近い)、身体は幼児、気分は名探偵コナンである。

あれれ〜おつかしいぞ〜?

まあさすがにあんなにわざとらしくはないが、介護してくれるナースに世間話の会話の流れで自然に聞く事ができる。設定は熱に浮かされたせいであつと記憶が混濁している幼児だ。

まずここはどこかという質問に対して、今いる病院はセント・バーナード病院といって、サヘルタ合衆国の都市ヨークシンにあるという答えが返ってきた。

……おわかりいただけただろうか。

ヨークシンである（2回目）

……キタコレ。

もしかして、ヨークシンってあのヨークシンじゃない？

ほら、あのHUNTER×HUNTERでオークションやったり、幻影旅団とバチバチやり合ったり、グリードアイランド手に入れたりした……。

だとしたら

ここは《念能力》が使える!!!

神よ!!! すまんかった!!!

アンタ最高だよ!

意地悪クソ野郎とか思ってたでごめんね!!

思わず口が悪くなってしまったが、いや待て、まだ慌てる時間じゃない。実は違いましたーとか洒落にならない。次はショックでもつとひどく寝込む気がするから冷静になるんだ。それにほら、私がフリーズしたせいで聞いたナースが困ってるだろ。困った顔で「まだ難しかったかな」とか言ってるぞ。

さあ、演じろ!

「ぼくしってるよ! ここはおっきなしまなんですよ? なんていうしまなの?」

「あら、よく知ってるわね。島じゃなくて大陸っていうの。ここはヨルビアン大陸っていうのよ」

キターーーーーー!

「ありがとう! またおしえてね」

「ふふ、どういたしまして」

ヨルビアン大陸である。これはもう確定だろう。ここはHUNTER×HUNTERの世界だ。喜びを抑えきれず、ニヨニヨ顔になった私を、褒められて喜んでとらえたナースは微笑ましい顔で見守っていた。そういうば、今がいつかということも聞かなければ。

「ねえ、そういえばきょうってなんにち？」

「ええつと、今日は8月4日よ」

「なんねんの？」

「1746年よ。何年ってよく知ってるわね」

「」

再びナースに褒められたが、耳に入っていないかった。

確か、ゴン達のハンター試験が第287期で、1999年1月にくじら島を旅立つてるから……

今、原作の250年以上前じゃねーか！

ネテロ会長でさえ産まれて無いよ!!

どうりで部屋の中がアンティークっぽいと思ったよ!!!

思わず口が悪くなってしまった私を大目に見てほしい。神は私をおちよくって遊んでるのだろうか。私の神への評価の乱高下が激しい。神は私をおちよくって遊んでるのだろうか。私の神への評価の乱高下が激しい。

その夜、やはり興奮しすぎたのか熱を出して寝込んでしまった。



あれから再び落ち着いて冷静に考え、《念能力》使えるからいいじゃない。という結論に達した。神よすまん。だが、あんたはいまいち信用できないのでとりあえず評価は保留しておく。

年代については仕方ない。しかし原作開始250年前とはいえ意外と文明が発達しているようでもある。前世でいうと1800年後半頃ぐらいのアメリカ、ニューヨークぐらいの文明はあるんじゃないだろうか。ビル見えるし。つまり禁酒法とかマフィアとか出る直前ぐらい？もちろん馬車とかがメインでストリートを走ってるけど、車もち

らほら見かける。

HUNTER×HUNTERの世界って文明が一部で異様に発達してたり、その割に未開の地があつたりでアンバランスだから、前世とは若干違う発展を遂げているようである。

ともあれ、普段の生活でそこまで不便に感じることはなかった。ただし医療を除く。医療に関しては本当にお察しレベルだ。消毒？何それおいしいの状态である。良く今まで死ななかつたな。この身体。生きてる事が奇跡だよ。しかし、このまま何もしないと凶悪な病気にかかり、前世より速くぼっくり逝く可能性が非常に高いため、それを覆すよう努力するしかない。再び転生できる保証なんてないからな。まず目標を設定しよう。

この世界での第一目標は「死なないこと」

念能力を身につけて、出来る限り鍛えて丈夫な身体を作ることだ。

次に第二目標が「世界を楽しむこと」

せつかくのHUNTER×HUNTERの世界である。原作にはどうにも介入出来なさそうなのが残念だが、前世の分も含めて世界中をまわつてみたい。ハンター試験も始まつてはいるから、ハンターを目指してみようと思う。

まずはスペックの把握。ここは鍛えれば鍛えるほど強くなれるHUNTER×HUN

N T E Rの世界だ。

とはいえ、この身体にもおなじみの呪いのような病弱体質がある。過信は禁物である。

見た目。

鏡で見た結果、金髪の碧眼の可愛らしい少年だった。ちよつと目が眠そうな感じを受けるが、一般的にはイケメンになりそうな気配を感じる。原作で似た顔で言えば、後半に出てきたパリストンが一番近いかな。あれをより眠そうな、諦めたような顔にして小さくしたのが私だ。まああんな胡散臭いキャラはごめんだが。ただ、やはり病弱と言うこともあり、同年代の子供よりはヒョロガリである。アバラが浮きまくって腕ほつそいし。

というわけで、絶対目標として、この弱い身体、これを克服する必要がある。

そのためには《念能力》の目覚めは必須であると言っていい。まず身体を鍛えようにも無理はできないからだ。私の考えたプランは、まず念能力を身につけ、オーラをもつて身体を頑丈にする。念能力を鍛えつつ徐々に身体も鍛えていきたい。オーラの系統によっては前世で考えていた病弱克服のための《発》もあるので、あわよくば習得していきたい。

まずは、《纏》からだ。オーラを感じ取れるようにするために前世からの得意の瞑想から入ることにしよう。

精孔を開き、オーラを感じ取る訓練を行う。前世と違つて、「確実にある」ということはすさまじいモチベーションにつながる。自然と気合いが入る。瞑想得意だし。

しかし、いくら病弱で入院生活とはいえ、四六時中瞑想できるわけではないので、早朝やお昼寝、消灯後などの隙を見て1日計6時間ほど取り組むことにする。また、いくら病院や自宅療養とは言え、学校なども始まるので、できるだけ時間を確保できるように動いていく必要がある。

原作のゴンたちは1000万人に1人の才能の持ち主だったという。

奴らは1週間程で目覚める可能性があったという。まあそんな短期間で習得するなんて期待はしてないけど。

どれぐらいでできるだろうか。



瞑想を始めて早、半年が過ぎた。あれから1日最低6時間の瞑想を行っているが、まだちつともつかめない。まあ才能なんざないだろうとは思っていたが、これは長期戦を

覚悟するべきだな。絶対に諦めないが。なにせ命がけだからね。幸い昔から瞑想は苦ではなかったたので、別に落ち込むこともなかった。それよりも時折罹る病気の方が強敵だった。割と本気で死にかけたこともあったし。

瞑想歴1年が過ぎようとしている。私の年齢も5歳となっている。未だにオーラの片鱗はつかめない。

だが、ここには確実にオーラが「ある」のだ。ここは、イメージを変えてみるようにするべきかもしれない。

あれから、オーラを漠然とつかもうとするだけでなく、細胞一つ一つを意識しながら瞑想するようにした。

自分の細胞一つ一つが脈打ち、連動し、活発に動くイメージ。約37兆と言われる細胞を意識の中で拡大していき、精孔を探す。そんなことをやっていたら、時間などあつという間に過ぎる。

一度ならず何度も両親に心配されたが、「病気も落ち着く気がする」といつて強引にごまかした。

実は意外とこれが事実であり、最近病気になる回数も減ってきている。実績があるため両親もそれ以上何も言うことはなかった。一度あまりに心配されてしばらく瞑想を控えていたら、あつという間に風邪をひいて死ぬ思いしたし。

さて、瞑想のイメージを変えて半年ほどしたころ、ついに全身の細胞の一つ一つから精孔を開けるイメージが完成した。それと同時に全身を何か包むような感覚をついにつかんだ。

これが《纏》か

どうやら間に合ったようだ。

4、目指すは強い身体

念能力に目覚めてから、取り敢えずこの力を鍛え、伸ばす事が当面の目標となった。私は病気に罹らない限りは基本家から出ないので、自分の部屋に籠り修行の時間に充てる事にする。同年代の子供は働き出してる奴もいるが、新しい我が家は大きく、お手伝いさんが複数人雇えるぐらいの経済状況なので大丈夫だろう。

この頃には両親、お手伝いさん、家庭教師も私の奇行に慣れ始め、勉強の時間や食事などを除けば好きにさせてくれた。全くもってありがたい。もちろん家族サービスは欠かさず行っている。「パパだいすき」とか、「ママありがと」とか言って抱きついたり、家のお手伝いをしたりと、色々だ。あざとくならない様に気をつけて家の中の味方を増やしておく。今も昔もスポンサーは大事だよ。

さて、今、オーラを身に纏う《纏》は出来ている。HUNTER×HUNTER的に

次にやる事といえば、所謂四大行である。即ち《練》、《絶》、《発》である。

まずは《練》からいつてみよう。まずはいつもの全身の細胞をイメージ。一つ一つの細胞からエネルギーの出る精孔を探り、全ての精孔からエネルギーを絞り出し、出てくる力強いオーラを身の周りに留めるイメージ……。

……！

出来た。

思った以上にあっさり出来た。全身から割と強めのオーラが迸る。まだまだこれを留めるのが難しく、暫くしたら弾けて《纏》に戻ったが10秒以上は維持する事ができた。不思議なのは、この弱つちい身体のどこにそんなエネルギーが眠っていたのかという事だ。確かオーラって生命エネルギーだよな？だとしたらもうちよつとシヨボイ量だと思ったが。もしかして前世の分も含まれてるのかな？

さて、次は《絶》だ。全身の精孔を全て閉じるイメージ。《練》は立って行ったが、今度は瞑想スタイルで行う。《練》で疲れたし。目を閉じて、細胞一つ一つを意識する

……。全ての細胞から出るエネルギーを今度は封じ込め、精孔を閉じ、内側に隠す。

……！

これもあつさりできた。

今まで出てたオーラがさっぱり消え失せ、存在感自体が薄くなる。

あれ？なんでこんなに簡単に出来るんだろう。《纏》の発現には1年以上かかったのに……。どうも前世を含めた長年の瞑想が良い方向に働いている様だ。特に細胞単位のイメージが効いている気がする。前世での知識や経験が役に立っているのだろう。

ところで昔、《絶》が体力回復や怪我の治療に役立つと聞いて疑問でしかなかったが、実際にはオーラが消えたわけではなく、細胞レベルで循環していて表に出てこないだけなのだ。精孔は閉じていても実際に発生するエネルギーを余す所なく身体に廻らせている状態といえる。

おそらく、細胞内での修復機能が強化されている状態になっているため、回復が早まるのだろう。

自分の体質には非常に良く合った技だと思う。

さて、最後の《発》だが、考えている能力はあるが、まだしばらく基礎的な修行を経てから開発していこうと思う。焦って中途半端な能力になるよりはよっぽどいいからね。後、大事な大事な自分の系統を調べなきゃ。これによって随分先の修行内容が変わって来るから、早いうちに調べておこう。

取り出したるは水の入ったコップ。庭の木の葉っぱを浮かべ、両手を添えてレッツトライ！

お、葉っぱがクルクル回転してる…。これはアレだ。操作系だな。考えてる事からすると、出来れば強化系が良かったんだが、まあこれはこれでハズレじゃない。自分の系統が分かって満足し、今後の方針を考えるためにコップを片付けようとした時、ふと違和感を覚えた。

葉っぱの形がおかしい。正確には、僅かだがとどこどころが溶けて無くなって。もう一度チャレンジ。クルクル回る。回るのに惑わされるが、確かに極僅かに葉っぱが水に溶け出しているのが見えた！

これって特質系？つまり、系統としては操作寄りの特質系って事になるのかな？また

は特質寄りの操作系か。または世にも珍しいダブル系統か。葉っぱの動きの方が強いけど、どうなんだろう。

特質系ね：これはまたなんとも難しい系統になったものだ。まあなつてしまったのはしようがないので、この系統でベストになる様に能力を考えるとしよう。

それからはひたすら《纏》、《練》、《絶》の繰り返しを行い、かつオーラの移動、操作なども含めて繰り返し返した。これってある程度座つて出来るからいいよね。外から見た感じ、いつもの瞑想スタイルだし。



大体1年ぐらい繰り返し返したか。纏うオーラはより力強くなった様に思う。相変わらず《練》は制御が苦手だが、1時間は持つ様になった。どうも私はオーラ操作が苦手らしい。オーラは保つのに纏う技術の方が保たないのだ。操作系なのに。同じ様に応用技の《凝》や《流》も初めは全く動かなかつた。7ヶ月チャレンジし、ここ3か月続けて漸く動き出し、1か月前にやっと二つともある程度出来る様になった。とはいえ瞬時

にはとてもムリだ。大体動かすと意識してから5秒はかかる。戦闘には使えそうにない。

まあ闘う気全く無いけど。死ぬリスクを減らす為にやってるのに、自ら死に行きたくはないね。

そのかわり《絶》の適性はかなりあるらしい。やろうと思えば瞬時に発動する。また気配の消えつぷりもヤバイ。同じ部屋に居ても気付かないレベル。探しに来たお手伝いさんが部屋のだ真ん中にいる私をスルーするレベルである。座敷童か。多分私に感情の揺れが殆ど無く、精神的に植物に近いためそうなるのではないだろうか。そこ、影が薄いと言わない。

話は変わるが、応用技の《隠》って原作でいまいちよく分からなかったが、自分でなってみて何となく理解できた。おそらくオーラの意を消す技術なんだろう。元は生命エネルギーとも言えるオーラは個人の感情や意図を如実に表す。一般の人を見ても、怒ってる人は怒った様な荒々しいオーラになる。原作のヒソカの禍々しいオーラは彼の意思が現れてるのだろう。その自分の意図がほぼ無になると、オーラも併せて見えづらくなるのではないか。何かと言われがちなヒソカであるが、彼はあんな禍々しいオーラを持つてる癖に《隠》も使えるから、やはりただの殺人狂じゃなく一流の達人である事が

伺える。

ともあれ、現在6歳。最近ではほとんど風邪などに罹らなくなり、両親もホツとしている様だった。1年前に弟が産まれた事もあり、そちらに注力出来ると喜んでいた。

そういえば、ウチの家族の仕事がとうとう判明した。というより父の稼業だが。表向きは商會を經營しているが、裏ではヤの付く自營業らしい。アメリカ風だとマのつく自營業か。以前に仕事内容聞いてみたら渋ってたけど、宝くじの采配とか複数の遊戯場（意味深）の經營もやってるらしい。どう見てもそっちが本命ですよ？あと、父自体は人当たりのいい外見をしているが、やたら大柄なコワモチのオツさんからペコペコされたり、跪いて手の甲にキスされてたのを幾度か目撃したんだよね。どう見てもドンです本当にありがとうございました。だからウチは経済的に余裕があったのね…。でも父も家族には一切そんな顔は見せない。ファミリーを大事にする地元の顔役って感じだ。うちの家族は移民らしいから前世でいうイタリアンマフィアだね。

当たり前だが、そんな家の跡継ぎになるのは真つ平ごめんである。死にたくないのになんでそんなヤバイ稼業を継がねばならんのか。幸い向こうも私が病弱で、更に奇行を続けてるちよつと可哀想な子なので、長男にもかかわらずあまり期待されてなかった。いや、擁護しとくと子供としては可愛がってくれたよ。要するに後継者って意味でね。前将来はお前の好きにしろ、応援するつて言われたし。じゃあハンターになるつて言ったら笑われた。解せぬ。

だから弟が産まれた時はお互いWin-Winの状態だった。弟よ、是非立派に育つてマフィアのドンになってください。この1年見ると病気もほとんどせず、憎たらしくいくらいすくすくと育つてる姿を見て、私は胸を撫で下ろした。

さて、話が逸れた。《発》だが、系統や自分の考えを踏まえて2つの能力にしようと考えている。

1つは

【日々ヘルシーマン是健康】

・操作系能力

怪我などの不測の事態が起きた時にオーラを使用し、細胞レベルで自分を操作し、復元することで、健全な状態に戻す能力。

〈制約〉

- ・ 傷の程度によって、使用するオーラが増加する。
- ・ 使用する場合はマニュアルで発動する。
- ・ 復元のため、超回復はできない。
- ・ 今後、一切操作系能力で他人や物を操作する事が出来ない。
- ・ この能力を使用してオーラが尽きた場合、死に至る。

簡単に言うとは回復能力だ。厳密には復元能力だが。…まあ強いよね。攻撃性は全く無いけど。しかし実現出来たら超強い。滅多な事じゃ死ななくなる。回復じゃ無くても復元って所がミソだね。かなり便利な能力になるだろう。メモリ足りるかなあ。制約と誓約をかなり重くしたから大丈夫とは思うけど、後1つ作りたいたいんだよね。ていうか死にたくないってのに死んでしまう可能性のある〈誓約〉はどうかと思うので、そこは議論の余地有りだ。とりあえず現状では机上の空論なので、基礎修行と併せて少しずつ取り組んでいこう。

5、新しい能力

さて、2つめの能力だが、

パルフェクト・コンバート
【完全適合】

・特質系能力

自身に悪影響を及ぼす要因、細菌やウイルス、念による状態異常などを取り込み、細胞レベルで身体に強制的に吸収し、適応させる能力。悪影響をプラスに変え、再びその影響を受け付けなくなり、無害化する。さらに任意でその力の一部を引き出すことができる。条件付発動。

〈制約〉

- ・一度はその悪影響を自身で体験しないと発動しない。
- ・悪影響が強ければ強いほどオーラを消費する。
- ・この能力は今後一切解除できない。

・一度取り込んだ物は破棄できない。

この能力は今までさんざん私を苦しめてきた病気を克服するための能力である。それと同時に今後、ありとあらゆる危険な状態異常を回避するための能力でもある。この世界ではちよつと油断すると即死につながってしまうため、この能力は外せない。

これは、水見式の葉っぱを見て思いついた。水が葉っぱを溶かしているところから、さんざん苦しめられた物を取り込んで力にするとかさぞかし愉快だろうなあとか、クロ口の【盗賊の極意】とか、キメラアントの王の喰うだけで強くなつていく能力つてロマンあるよなあとかという天啓を受けたためだ。せつかく特質系でもあるんだし、ちよつとロマンを求めてみたい。

【日々ヘルシーマンは健康】も【完全パーフェクト・コンバート適合】も見事に攻撃するための能力じゃない。全ては自分の命を守護まもするための力だ。万が一闘いになつたとしても、継戦能力を重視して、生き延びるスタイルである。後は基礎的な念能力を極めながらそれで戦うしかない。ワンチャン【完全パーフェクト・コンバート適合】の方で良いのがあればそれを使うのもよし。

さて、これらを習得する上で問題が2つある。

1つめはどう考えても莫大なオーラが必要だということだ。2つとも明らかに燃費が悪い。〈制約〉と〈誓約〉で緩和しているとはいえ、かなり厳しいことは間違いない。オーラ総量を増やすことは急務である。しかし、これ以上は身体を鍛えつつでないといけないので痛し痒しである。

2つめは、複数の系統別の修行をしなければ十全に効果が発揮できないだろうと予測されることだ。今までは座禅組んで瞑想スタイルでやってこれたが、そろそろ家を出て屋外の修行に取り組まねばならない。

以上の2つの課題を解決するために、そろそろ病弱を克服せねばならない。まずは先に「パワーストーン・コンパニオン完全適合」の方を発現させる。そのためには、気が進まないが、病に何度かかからなければならぬ。毒を飲むような勇氣はないため、慣れ親しんだ(?)病気にかかるのがベストだ。

やり方は簡単。カーム君は念の修行や瞑想ばかりでろくに身体を鍛えていないため、未だにヒョロガリである。今は力強いオーラで覆っているために病気にかかりにくい。が、一度全てのオーラを《練》で消費して、その後《纏》も解除してみよう。

すると、次の日にはあら不思議、身体が熱うい！

鼻水、咳も出ていることから、一般的な風邪症状であると推測する。こいつには前世も含めていつもお世話になった。そろそろお礼参りをしなければ。さて、これからおそらく風邪であろうこの原因菌を取り込むわけだが、まだ待つ。いつものように肺炎に近くなるまでしばらく放置する。家族は久しぶりに熱出して寝込んだ私を甲斐甲斐しく介抱したが、申し訳ないがわざとやってるんですよ。これ。

で、一日たつてより症状が悪化し、肺の方まで菌が潜り込んでいるような感覚を覚えたところで《纏》を発動。そこからは病原菌との闘いとなる。長年の恨みを晴らすため、行動を開始する。瞑想スタイルに入り、いつものように細胞一つ一つを意識していく。自分の意識が拡散し、それぞれの細胞に宿るイメージで、浸食してくる病原菌を逆に無数の私が包囲する。じわじわと菌を取り込み、細胞の中に吸収していくようにする。ここで大事なのは、念能力とは思いの力であるため、鉛筆をへし折るように「できて当然」と思う意志こそが必要になる。当然身体は症状の悪化で苦しいが、ぶっちゃけ慣れたものである。そこからオーラをふんだんに消費しながら取りかかる。

実は修行不足で制御できてないだけで、なぜか私のオーラ量は多い。逆に言うと、オーラ量が多すぎて制御の難易度が爆上がりしているとも考えられるが。ちゃんと制御できてれば《練》も三時間は余裕で超えるぐらいの量はある。そんなオーラのあ

りつたけをつぎ込み、菌を押しえ込み、吸収していく。体内でひたすら増殖していく菌が次第に取り込まれ、量を減らしていく。逆に取り込んだ細胞は強化され、より菌を吸収するようになっていく。

免疫細胞も「攻撃して倒す」ではなく「吸収して強化する」方向にシフトしているため鼻水、咳などが次第に出なくなる。

一昼夜経過した頃、私は完全に菌を吸収し尽くした。同時に〔パルフェクト・コンバート完全適合〕も無事に発現できたことが分かった。今回は発熱、咳、鼻炎を起こすタイプだったが、おそらく今後二度とかわからないだろう。それに加え、肺やのどなどの臓器が機能も強化されたように感じる。

なんと言えばよいか。一段階臓器が強くなったような感覚である。オーラ消費は……まあまあで予想よりも少なかった。とはいえ全体の6割ぐらいは使用したが。最初だから仕方ないし、今後慣れれば減ってくるだろう。

一度成功したので、しばらくこの方式で様々な菌やウイルスを吸収していこう。おつと、次の風邪菌が乱入してきたかな？弱った時を見逃さないところはさすがです。次から次から休む間もない。かかってこいや！

それから1ヶ月かけて様々な病気にかかり、その都度（パーフェクト・コンバート）「完全適合」が発動した。ただの風邪とは言え、様々な種類がある。最初は一昼夜かかったが、そのうち一晚になり、4時間になり、1時間になり、終いには5分程度で全吸収できるようになった。もはや風邪程度では私は死ぬことはなくなった。

最初は体力的な問題で1日おきでやっていたが、そのうち連日でも問題なくなった。オーラも消費が減り、風邪程度ではほとんど消費しない。ちよつと強いインフルエンザ君が来たときは苦労したが、体感3割ぐらの消費でいけるようになった。この一ヶ月病気にかかりまくってたおかげで、無事にオート発動も問題なくなったようだ。

さて、これで日常に生きる分には問題なくなったが、ここで思わぬ副産物。全体的に身体が以前とは比べものにならないほど強化されているのである。（パーフェクト・コンバート）「完全適合」の吸収して取り込み、悪影響をプラスに変える力の成果だ。見た目はまだまだヒョロガリ君だが、内臓系は軒並み強化された。

これならば、定期的に新しい病気をこちらから吸収しに行っても良いかもしれない。そのうち致死性の病気や毒などにも対応できるようになるだろう。まあ、それはおいおいでいいか。

とにかく、これならば次の段階に入れる。

そう、身体能力の強化だ。

6、身体を鍛えよう!

いよいよ、このヒョロガリ君もといカーム君の肉体改造計画に移ろう……と思つていたが、両親からの待ったがかかった。そりやそうか。ここ1ヶ月病気にかかりっぱなしだったから警戒されて当然だ。仕方ないので屋内でできる強化をバれない様に部屋で行う。並行して念能力の強化、制御も行つていこう。

まずは、純粋に肉体を鍛えるために《纏》を解除して、腕立て伏せからやつてみよう。
1!……1!……ムリい!

マジか。1回も出来ない……。いくらなんでも弱すぎる。体重軽いのにヤバくない? スプーンより重いを持った事無いし当たり前か。

仕方ない。ちよつとずつやつていこう。いきなり苦行をしても長続きしないからね。続けるコツはちよつとずつを連日やる事だよ。腕立て、腹筋、背筋、スクワットをそれぞれ1セットずつ。出来る回数^{ヘルシーマン}の限界までやつたら終わりにする。一度習慣になつてしまえばこつちのものだ。長い目線で「日々是健康」の修行プランに耐えられる身体づ

くりしなきや。

次に、念修行だ。正直操作系なのに念操作が下手糞ってどうかと思うため、そこを鍛えるでしょう。言い訳させて貰うと、やはりこのヒヨロガリには似つかわしくないオーラ量が原因だと思う。どっから来てるんだろうね。このオーラ。もう中堅ハンターぐらいあるんじゃない？正直暴れ馬に乗って宥めながら計算とかしてる感じ。非常に難しい。最初オーラなかなか動かなかつたしね。それでもゆっくりと《流》や《凝》が出来る様になってきている。油断して気を抜くとすぐにオーラが増えるせいで制御が出来なくなってくるので、毎日この修行も欠かせない。

当面はこの肉体改造とオーラ制御に費やすでしょう。当然瞑想もセットで。もはや癖になってしまってるんだよね。



あれから約1年経ち、7歳になった。弟のマイケルもつかまり立ちが出来るようになってる。毎日毎日少しずつ、地道に筋トレを続けたおかげで、20回はそれぞれで

きるようになった。漸く人並みになった…。ヒヨロガリカーム君はふつうのカーム君に進化した!

念使いになったのと胃腸が丈夫になったため、良く食べる様になったんだよ。ちよつとずつの日々の筋トレも効いてるかも知れない。やっと人並みの生活が出来る様になつてきた。成長曲線にも遅れながらも乗つて来た気がする。

さて、この1年の様子を見てこの度両親から漸く外出の許可を頂いた。まだまだ時間も僅かだし遠出は出来ないが十分だ。もうほとんど病気に罹らなくなったからなあ。そう考えると非常に感慨深い。作つて良かった「パフォーマンス・コンパイト完全適合」。最近では虫刺されとかも効かなくなつた。前世でもこれがあつたらなあと思つづくと思う。

家から出られる様になつたから先ずは走り込みだな。ただ、そろそろ学校が始まるから中々時間取れないかもしれない。隙をみて走れる様にしておこう。

念修行はあまり進展がない。と、いうのも、オーラの制御が非常に難しいのだ。私たちは何ヶ月かの修行である程度形にしてたが、やっぱりあれは才能なんだなあ。現状、オーラ移動、オーラ集中に2、3秒かかっている。これでも大分短くなつた。やはりこれも長期スパンで考えなければならぬ。

あと、そろそろ系統別修行の方法考えなくちゃ。覚えているものは何かに書き出して、後は自分で考えるしかないね…。具現化系とか特質系の修行ってどうやるんだよ

∴。

そうこうしてるうちに学校が始まった。こちらではエレメンタリースクールか。9月入学らしい。基本的には授業があつて、昼メシ有りで帰ってくる。前世とあまり変わらないが、大半がお休みだったので新鮮だ。うちは顔役の家系という事もあり、友人の皆さんはあまり近づいて来ないのが悲しいが、まあいい。今更ちみつこ達と同じ様に話すのも難しいからな。

ただ、遊びを通して体力づくりはしたいところだ。幸い、父の舎弟(?)の子息が同じ所にいるため、付き合ってもらおう。本人もなんかやたら構つて欲しそうに来るし。

そんな訳で、お友達のジョセフ・ルチャアーン君(8)と学校終わりには我が家の管理する広大な空き地に集合してエンドレス鬼ごっこことかかくれんぼを楽しんだ。もちろん、念は使わない。体力的には互角に近いため、いい訓練になった。

しばらく放課後はその様に過ごしていたが、クラスメートも少しずつ参加する様になって最終的には10人以上が、ワイワイ遊んでくれるようになった。ちなみに両親は私が外で元気に遊ぶ様子がとても嬉しかったようで、大工を呼んで一面に簡単な木製のストレッチクや遊具を用意してくれた。

めっちゃいい人やん。これでマフィアかよ。家族サービスをより強化せねば∴。お

かげ様で空き地は一大テーマパークとして、エレメンタリースクールの皆さんに広く使われる様になった。なんかいいよね、こういうの。前は出来なかつた事だつたから本当に嬉しいよ…。

しばらくテーマパーク(仮)は来るもの拒まずだったが、ある時浮浪者がテントを建てだして、住み着き始めた。すぐにチクつたら翌日黒服のおにーさんたちが来て、テントを問答無用でブチ壊し始めた挙句、浮浪者を捕まえてどつかに連れてかれた。やつぱりマフィアだつた。

またある時は、上級生の群れが広大な敷地の占領を宣言しだした。本来我々下級生には争う術はないが、丸々占領はないだろ。ウチの敷地だぞ。他の子たち泣いてるし。と、言うことで代表として話をつけに行こうとしたら、先にキレ散らかしたジョセフ君(8)が、飛びかかつて行つた。うん。やつぱり君もアレな感じなんだね。

年齢差に勝てるはずも無く、集団でボコられ、投げ捨てられたジョセフ君を見て、流石に私もキレた。

「僕たちに謝つてすぐにここから立ち去るなら許してやる」

言われた方は暫く呆然としていたが、やがて私の発言だと気付き、爆笑し始めた。何

がそんなにおかしい？

「おい、チビ。冗談はその身長だけにしときな。嫌だねつつたらどうすんだ？」

「お前らを泣いて謝るまでボコる」

チビな私にそこまで言われてムカついたのか、リーダー格のガタイのいい少年（既にタバコとかやってそう）が、手下共に短く「やれ」と命令する。私はといえば友人にジョセフを頼み、離れてもらって、すかさず《練》を発動する。

野生の勘か、何かヤバそうな事に気付いた手下どもは一瞬躊躇してボスの方を振り返るが、ボスは厳しい目で睨んだため、渋々向かって来た。そもそも最初は殴らせてやる予定だったので、黙って突っ立っていたら、代わる代わる殴られ始めた。

が、当然全くダメージはない。殴った側もゴムタイヤ殴ってる感じじゃないかな？中々倒れない私にイラつき、更に強く殴る蹴るを繰り返してきてボコボコになっていたがそろそろ反撃しよう。加減をミスらない様に慎重にやらないと殺しちゃうよね。とりあえず、手だけうっすいオーラ（ただ覆ってるだけ。絶の一步手前）で纏い、目の前の奴の腹に振り切った。

その瞬間相手は1メートルぐらい吹っ飛び、のたうち回って苦しんでいる。良かった。ちようどこれぐらいか。という事で呆然としてる他の奴も次々しばいていく。なす術もなく蹴散らされる仲間達に焦り出したボスは私の背後から角材で攻撃してきた。オイオイ。それ他のやつなら死ぬよ? 私にはノーダメージだけど。ちよつとこんな危ない奴放置出来ないので、念入りにいじめておいた。

暫くして、動いてる奴が居なくなったら一人一人に念入りに謝らせて解放した。

うん。やりすぎた。

友人達ドン引きよ。回復したジョセフ君は「アニキすげえ!」とか言ってるし。いや、君の方が年上だからね。でも友人達は私が身体を張って守った事に感謝してくれた。カーム君のおかげだつて。いい子達や…。気を取り直して沢山遊んだ。身体の手配をされたがノーダメージだったしね。ジョセフには口止めしといた。

その日の夜、うちの父が私を書斎に呼び出した。多分例の件の事だよな…。書斎に着いたらすこぶるいい笑顔の父がいて、

「よくやった。流石私の息子だ。」

主語も無く突然褒められた。あーもうこれは全部知ってるな。しらばつくれるのは無理だな。

「いやいや、父さん。むしろそこは怒るところじゃない？僕は怒られるかと覚悟してたよ」

「ふむ。身体を張って強い奴らから仲間を守ったお前を何故怒らねばならん。褒められこそすれ、怒りはせんよ。聞けばお前はジョセフ君がやられた相手に立ち向かったそうじゃないか。中々出来ん事だよ」

ジョセフー！やっぱ情報源お前かー!!それにしても、うーん、このマフィア脳。無駄かもしれないが、カタギアピールしとこう。

「いや、何がなんだか分からなかったよ。たまたま上手くいっただけ。下手すれば皆が危なかった。今思うと、その場は引いた方が賢かったと思うよ」

「確かにそうだな。お前の言う通り、苦汁をなめてでも引いた方が良かったかもしれん。後々確実に勝てる様に策を練るとか、助っ人を呼ぶとかな。しかし、その場合仲間の信頼を多少なりとも失う。難しい選択だな。大人でも迷うところだろう。だがお前はやり切った。仲間も失わずにだ。私はそこを評価したい」

いや、逃げた場合復讐とかせんけど。仲間ってマフィアのボスじゃないんだからもつとドライな関係でいいのよ? 父上は相変わらずニコニコ顔だ。『ゴッドファーザー』のマーロン・ブランドを若くした様な貫禄がある。畜生、絵になるなあ。なんだかんだ言ってるのはこの人達が好きなのだ。まあしようがない。最後に聞きたいことを聞いて終わるとするか。

「父さんなら、どうした?」

「…もちろん、お前さんと同じだよ。勝つにせよ負けるにせよ、ね」

ニヤリと笑いながら答えてきた。

そうでしょうね。

会釈して部屋を出る時、微かに「やはりアイツかな…」とかいう呟きが聞こえた気がしたが、何も考えないようにした。

7、系統別修行

例の事件から、スクール中に私の噂が流れた。曰く、上級者30人を1人でポコポコにした。曰く、山のようなデカイ相手を片手で投げ飛ばした。曰く、武器で刺されても平気にしてた……。いやいや、違うからね!? 流石に大袈裟すぎる。あの場にいなかったクラスメートもビビりまくってるじゃないか。若干真実が混じってるから否定しづらいし……。ともかく、必死に弁解して、私は無害だという事をアピールする羽目になった。プルプル、ぼくわるいカームじゃないよ。

しばらくしたら噂は収まったが、私の立ち位置が影のボス扱いになった。大体ジョセフも悪いのだ。あれからずっと舎弟ムーブが止まらない。「アニキ、カバン持ちますよ」とか。いやいや、友達にそんな事してもらおう訳にはいかないとこれまた必死に説得する事約3日。漸く納得してくれた。ついでにアニキ呼ばわりもやめさせた。カームでいいよ、カームで。

しかし、ボス的な扱いになってしまったのは間違いない、クラスの問題発生時には大

体私と呼ばれた。○○と○○が喧嘩してお互い許せないって言ってる、何とかしてくれってね。いや、私じゃなくて教師だろって言ってもカーム君なら2人とも言うこと聞くからって譲らない。しようがないから事情を聞いてケンカ両成敗からのケジメの謝罪を行う。ケジメは大事だよ。実際。

そんな事やつてるからますますスクールのボス扱いですよ。教師仕事しろ。

ちなみにあの時ボコった上級生だが、ビクビクしながら過ごしてららしい。ざまあ。気がかりだったのは、念能力が発現しなかつたが、なんともなかつたらしい。《擬》で見てもなんとも無かつたし、やつぱり薄くくしといたのが良かったかな。子供レベルの小突く程度だし、それぐらいなら大丈夫そうだ。だがヒヤヒヤした。今度から一般人ぶん殴るのはやめよう。良く考えればオーラで威圧するだけで済むんだよね。私のオーラ無色透明な感じだけど、殺気をのせる練習した方がいいかも知れない。



なんだかんだでスクール生活を堪能している私だが、修行を怠っているわけでは無い。筋トレ、瞑想に加え、無駄に広い庭の外周マラソンを始めた。何よりも体力必須なので、10キロ1時間を目標に頑張りたい。また、系統別修行もオリジナルで編み出し、

取り組み始めた。

強化系Level 0

・《周》

まず、強化系修行やる前にこれが出来ないと話にならないので、我が家所有の敷地のボタ山に遠征して週一で穴掘りバイトをした。カタに嵌められた方が行くところ。カイジかな。両親には「健康のためと社会勉強の為」と苦しい言い訳をしたが、何も聞かず許可してくれた。親方から恐縮されまくって居心地が悪かったが、人の何倍も掘る私を見て喜び、バイト代を弾んでくれた。

強化系Level 1

・石割り

原作でやってたやつ。手の平大の石を《周》で固め、石を割る。その石で10000個割れたらクリア。やってて思うけど、シビア過ぎない？例のボタ山で掘削機として活躍。

強化系Level 2

・洞窟掘り

自分の手を強化し、素手で岩を掘る。より質の高いオーラが求められる。正直、強化系は思いつかんのので、ボタ山で出来る土木作業に偏る。割と辛い。手が独歩先生みたいに硬くなりそう。2メートル以上の穴が出来ればクリア。

強化系Level 3

・紙強化

紙製のスコップを強化して穴掘り。破れず壊れず1000回掘れたらクリア。我ながら頭悪い修行だと思う。これ、材料作るのも難しい。バイト代の使い道その1。

強化系Level 4

・糸強化

大量の糸状の物にオーラを纏い、スコップ状にして掘る。条件は上と同じ。バイト代の使い道その2。

強化系Level 5

・オーラ掘り

遂にここまで来た。変化、具現化との併用。オーラのみで岩山を掘る。何を言ってるのか分からねーと思うが、私も分からない。とりあえず、肉体を使わず掘る。いいね？

変化系Level 1

・形状変化

原作でやってたやつ。これはすつごい難しい。指の上に数字を作るのだが、まず出来ない。0〜9までを1分とか厳し過ぎるんだが。理想は5秒とかアホか。

変化系Level 2

・形状変化2

より複雑な文章や絵をオーラでつくる。お題を見て1分以内に描く。無理。

変化系Level 3

・軟化

やわらかくなる。ヒソカ的能力の簡易バージョン。オーラを物理的に柔らかくする。石を上にはらまき、跳ね返らずに受け止められたら成功。出来たら色々と便利。出来たら。

変化系Level 4

・硬化

かたくなる。オーラを物理的に硬く変化させる。石を上にはらまき、自分に当たらず跳ね返れば成功。ハッキリ言ってそこまで硬くならぬので実戦には使えない。後、できない。

変化系Level 5

・触手伸ばし

《練》を使い、この形を変化させる。ネフェルピトーのアレ。30秒以内にオーラが30メートル伸びたらクリア。いや〜キツいです。

放出系Level 1

・球飛ばし

指先大のオーラの球を浮かせ、飛ばす。オーラを切り離して浮かせるのに凄く苦戦した。漸く出来るようになったが、全然飛ばない。だが、これフリーザ様な気分になれるから超楽しい。モチベ上がる上がる。目標は50メートルでいいか。

放出系Level 2

・ボール飛ばし

上記のボールバージョン。目標100メートル。

放出系Level 3

・元氣玉(仮)

放出系はDB参考に出来るからいいね。でかい球を維持して放つ。修行場所に苦む。場所的にも難易度的にも出来ない。

放出系Level 4

・フリーザ様のピツ(仮)

指先から念を発射!気分はフリーザ様。目標50メートル。いや、無理!

放出系Level 5

・片手浮き

原作でやってたやつ。まず逆立ちがむずい。全然出来ん。これ浮くの?目標70セ

ンチ浮く。でも、リアルかめはめ波とか撃ちたいので頑張る。

操作系 Level 1

・無機物操作（煙）

煙に向かつてオーラを送り、色々な方向に操作する。割と簡単に楽しい。煙の形を動かして動物みたいな形にして動かすと中々カッコいい。火でやると更に楽しい。ネツクは火事が怖い事。目標は煙を20分以上動かし続ける事。様々な形を取れたら尚良し。

操作系 Level 2

・無機物操作（水）

上記と同じ事を水でやる。液体な分難しい。目標30分以上。

操作系 Level 3

・無機物操作（砂）

上記に同じ。砂でやる。結構重くて難しい。でもこの修行は楽しいから割と好き。頑張れば砂の我愛羅とか出来る。目標1時間。自分が出来るから目標設定がシビアす

ぎかも知れないが、知ったこつちやない。楽しいからやるんだ！やってて思ったけど、無機物操作楽しすぎ。咄嗟の時に使えそうだから制約から無機物は外そうかな。

操作系 Level 4

・ 念弾操作

ヤムチャ。小さい球から始めて操気弾みたいに出来れば成功。他の系統が関わるからちよいと難しいが、自分から離れたオーラを操るのは割と出来る。目標動かし続けて30分維持。

操作系 Level 5

・ 植物操作

植物を操作する。草や花などの植物を自由自在に動かす。やろうと思えばダンシングフラワーも出来るかも。無機物と違って僅かながら意思があるため、その分苦労する。目標2時間。ただ、やってみて思ったのが、私はやっぱり他者を操作するのは受け付けない。大体自分の細胞を操作してる時点でもういいのでは。と思ったので、操作系はここまで。つくづく私は操作系に向かない。操作系なのに。

具現化系Level 1

・水汲み

正直何していいか分からん。分からんでオーラで物質の形を作り、水汲みを行う。最初はお猪口かな。形を維持してーリットル汲めたらクリア。

具現化系Level 2

・爪伸ばし

爪の先から鋭い爪の先を作る。全指で包丁クラスの切れ味を再現し、それでリング剥けるとクリア。

具現化系Level 3

・獅子舞

操作系と変化系とのコラボ。自分の髪の毛の先をオーラで作り、伸ばす。獅子舞みたいに回せるとクリア。理想はジョジョの「意外！それは髪の毛ッ!!」でお馴染みの『死髪舞剣』。一部のブラフォードさんが使ってたやつ。髪の毛を操る。実は細胞操作とオーラの肉体強化で、マジで髪を伸ばして動かす事が出来るが、切るのが面倒臭いためやらない。

具現化系Level 4

・マジックハンド

オーラで擬似手を作り、物を掴む。変化系とのコラボ。出来たら孫の手みたいで便利。目標掴む、掴む、が出来る。

具現化系Level 5

・なし

というか、これ以上はガチでメモリを使う《発》になりそうなのでやらない。髪の毛の時点でもう怪しいし。山岸由花子レベルになるとマジでそうなりそうだからほどほどにしとこう。手も孫の手ぐらいにしないとね。この辺をやるのは第2の能力が出てからだね。

特質系

ギブ。分からん。もう【完全適合】ひたすらやれば良いのでは？迷った時はとりあえず瞑想。最近自分の持ち味が細胞操作な気がするので、オーラ使いながら細胞を動かしたり変化させたりする。目指せ、カーズ様！

まああそこまで人間離れは無理だけど。これを極めた先に『日々ヘルシーマン健康』が待ってるぞ！

とりあえず、何となく考えたメニューを一日置きにやってみる。全然出来ないのも多いが、せつかく考えたので取り組んでみたい。アホっぽいのも多いが許して欲しい。なあに時間はたっぷりある。絶対に死なない男目指して頑張ろう！

8、ジュニアハイまで

さて、時間は飛んであれから6年たった。私もそろそろ12歳になる。日本で言うところの小6だ。さすがに勉強で後れを取ることはないの、余裕で修行に励むことができた。ただ、歴史は興味深い。基本的には前世と似たような文明の発展をしているが、実はあるときからぼつかり記述がない。いきなり割と発展した文明から始まるのだ。つまり、類人猿とかの記述がない。

人類はいつたどこから来たんでしようねえ…。

なんてね。まあ知ってるけど。32巻にちらつと出てきた「暗黒大陸」。十中八九あそこからだよ。

……いいさ。今はあまり関係ない。とりあえず私のこれまでをぎつと振り返ってみる。



まず、^{パル}【完全適合】^{エクト・コンバート}だが、ちよくちよく発動してた。だけどころかなりやばいのが2回あつた。

・破傷風

・狂犬病

の2つだ。これはマジでやばかった。特に狂犬病。

まずは破傷風から。まだ低学年の頃、敷地の砂場で遊んでたら、古い釘が埋まっていた。気付かずそれに手を刺し、血が出てしまった。珍しく。体力向上のために念能力解除してたからね。

で、とりあえず洗って手当してそのままだったんだけど、1ヶ月過ぎたぐらいから口が開きにくかったり、食べ物こぼしたりしました。まだ小さいのに首肩あたりがこり始め、だるさが出てきたと思ったら手足がけいれんしました。正直、普段は念能力使ってるし、貫通してくるとは思わなかった。即座に^{パル}【完全適合】^{エクト・コンバート}が自動発動したが、拮抗

している。かなり珍しいことだ。しばらくして、この症状は破傷風だつて気付いた。トラウマ映画の『震える舌』にあつたから覚えてた。これつて致死率相当高いやつじやなかつたか？ともかくすぐ部屋にこもり、瞑想開始。だが痙攣が止まらない。さすがの両親も様子がおかしいのに気付いて、おなじみセント・バーナード病院につれてつてくれた。

医師の診断はやはり破傷風。対処法がなく、覚悟してくださいといわれた。両親は果然とし、医者に詰め寄つたがこればかりはどうしようもない。痙攣を抑えるために拘束され、モルヒネ飲まされて安静に寝かせられた。正直いらんのだが。

そこで再び瞑想開始。おそらく「パルファクト・コンバート完全適合」オート発動だけじゃ勝てない。マニユアルでもサポートする。具体的にはオーラをバカスカつぎ込んで、押さえ込みにかかると。かなりの量のオーラを持って行かれ、かつすごい時間かかった。普通の風邪は5分以内だが、5〜6時間かかった。たぶんモルヒネの分も含まれてると思う。なんとか全て消化しきつた頃にはオーラの8割を使い、体力的にも限界で眠ってしまった。

翌朝、様子を見に来た医師と両親がびんびんしてる私を見て仰天していた。医師は奇跡だと騒ぎ、検査を綿密に行つたが、何も悪いところはなく呆然としていた。とりあえず治つたので家に帰つた。母からは「あなたはいつも心臓に悪いわ」といわれた。ごめんね…。普段は肝つ玉母ちゃんだが、この人の泣くところはなるべく見たくない。

闘いに勝った結果、破傷風には2度とかわからず、神経系が強化された。具体的には神経毒耐性だろうけど、上半身や四肢の神経の伝達速度も速まつてる気がする。これがあ
るからいいよね。この能力。サイヤ人みたいで。



次に、狂犬病。これは4年生ぐらいの時。庭の外周をランニング中にやられた。野良
犬が前方にいて、ぐったりしてたから、避けて走ったら、いきなり起き出して足を噛ま
れた。とっさに念ガードしようとしたが間に合わなかった。まだまだ瞬時発動にはほ
ど遠い。調子に乗ってよだれ垂らして噛みしめてくるから頭にきて、噛まれたまま電柱
にたたきつけてやった。たぶん死んだと思う。で、家に戻って洗ってたら、くつきり歯
形と血がにじんでた。あーあと思ってたら、やたら心配された。まあでも大丈夫だろう
と、普段通り過ごしてたら、案の定2ヶ月後に発症。

噛まれたところが腫れ、変な痛みが走ると同時に発熱、疲労感、吐き気、果ては幻覚
まで見えてきた。当然【完全適合】が発動していたが、これまた長期戦の予感だった。
【完全適合】君は、症状出てからしか発動しないからね…。再び、例の病院。医師は、
今度こそ無理だと言ってきた。両親は泣いた。

そうだよね。なんつったって発症したら致死率100%だもん。相変わらずこの身体は死亡フラグが過ぎる。だが、負けない。このときのために修行を重ねてきたのだ。瞑想&マニユアルサポート！こいつはウィルスだから、より精密な操作が必要だ。私自身細胞になることだ！（幻覚）

激闘の末、一昼夜がかりでウィルスは消滅した。オーラは9割5分ぐらい使った。死ぬまでは行かないが本気できつかった。例によって医者が今度こそ腰を抜かし、是非献体として調べさせてほしいと言ってきたが、父が部下を呼んで黙らせた。権力つてこういうときに使うんだよね。

さて、勝利ボーナスだが、脳に作用してたらしく、思考能力がアップした。具体的には計算が早くなった。記憶力も上がった。1. 2倍ぐらい。ついでに更なる精神状態の安定をもたらした。たぶん緊急時に錯乱しないため。ちなみにこれは特別ボーナスであって、通常ボーナスの肉体能力アップも含まれるからね。



さて、まあそんなことがあったわけだが、相変わらずスクールではボス扱いである。というか、年齢上がるごとに裏の代表的な感じになってきて、終いに日本で言う番長扱いにまでなった。私にそんな気は全くないのに。教師も私には何も言わないし。仕事しろ。でもね、私はやんちゃはしないし、授業まじめに受けるし、タバコ、クスリとかに手を出さない。いや、実際には出したけど、目的が違う。あくまで【パレフェクト・コンバート完全適合】用ね。一回だけだし。

でも、私は静かな環境を好むため、あつちにいじめがあつたら潰しに行くし、こつちにケンカがあつたら叩きに行く。暴力は嫌いだよ。節度つて大事な言葉だね。おかげで私の見える範囲は静かな環境である。模範生だね。

一度、別のスクールのやんちゃしてる輩が乗り込んできたが、とりあえず授業中であつたので一人で出て行って《練》威圧で全員黙らせた。高学年ぐらいの時はこういう芸当もできるようになったのだ。ほぼ全員気絶したが。

おかげで、自称舎弟が自校だけでなく、近隣からも発生し、一大ちびっこファミリーになってしまった。これには親父様もニツコリ。もうここまで来たらこのムーブは止められないので、逆に考えて、マフィア程度に収まるにはもつたいない、つてレベルまで頑張ろうと決意した。



修行の方は、まず筋トレ。これはかなり出来るようになった。それぞれ4桁いける。そろそろ疲れなくなってきた。時間もかかる。やり方考えなきやなあ。

走り込みも、フルマラソンを2時間程度でいける。そろそろ人類の限界に近付いてきている気がする。【完全適合^{パフォーマンス}】の副次効果はかなり大きい気がする。肉体的には最高のスペックになりつつある。

念修行の方は、かなりのブレイクスルーが起きた。何と、念の制御が出来る様になったのだ。そもそも何故出来なかつたかという話だが、オーラ量が多すぎるからなんだよね。増え続けるし。で、何故そんなに多いのかって事に一定の仮説が立った。

細胞操作だ。

多分、一般的な念能力者は身体の各場所からある経絡と呼ばれる部位がある。確かに精孔が開き易い場所がある。一般的な念能力者はこの精孔からオーラを取り出すのだ

と推測できる。対して、私の場合は細胞操作によって、一つ一つの細胞から操作しているため、そこから精孔を作り、オーラを捻り出している。その為、普通より多い量が確保出来ると推測される。つまり、肉体や細胞が強化されればされるほど、掛け算で生命エネルギーが増えていくのだ。

とはいえ、私でさえまだ全ての細胞からは出来ない。今漸く半分程度だ。全ての細胞を制御した時、どれくらいかのオーラが生み出せるか、今から楽しみだ。増やす方法は瞑想からの細胞把握&操作。やっぱりのやり方は間違つて無かつた。

自分の操作系能力はここにかんりのリソースを喰つてると思う。だからオーラ制御に難有りなのだ。まあこれに気付いてからは一気に念操作しやすくなったが。

今現在のオーラ量は普通に《堅》をして10時間は行けると思う。制御が難しい為実際に大体6時間ぐらいたが。

オーラ計算式から1オーラ⇨臨戦態勢で何もしていない1秒間での消費量、でざっくり算出したら、6〜10倍ぐらいの消費量で考えて、潜在オーラは大体1000000ぐらいいかな。で、表に出せる顕在オーラが30000くらい。ショボい。この辺は修行の余地有りだね…。まあ全力戦闘でも多分2時間は持つよ！やらんけど。周りに全く能力者いないしね。

そんなこんなで、暴れ馬の正体が見えたため、制御も漸く目処がたつてきた。以前述

べたが、私のオーラは無色透明らしく、ナチュラル《隠》に近い。いや、目立たないだけで見えるけどね。だから一般の人にも多少の違和感しか感じ取れないっばい。

系統別修行も、6年続けたらそれなりに形になってきた。というか、全てクリア出来た。変化系と具現化系はかなり苦戦したが。

つまり私は、今現在、オーラで割と色々な事が出来る。例えば、紙を念で強化して投げると、投げナイフみたいになるし、DBみたいな気功波みたいな真似は一通り出来る。オーラの性質変化は難しかったが、上記の理由でかなり捗り、Level 5までは行けた。具現化は……まあ……最低限は出来ただけ。そして操作系。物質操作でナルトごっこして遊べる。無から生み出す訳じゃないから万能じゃないが。というか、DBごっことかナルトごっこが出来るなんて感無量すぎる。

実際、この辺の修行は超大事だよ……。系統別修行してからじっくり能力決めた方が絶対いいよ。質が上がる。

そして、遂にあの能力が発現した。

【日々ヘルシューマン是健康】

・操作系能力

怪我などの不測の事態が起きた時にオーラを使用し、細胞レベルで自分を操作し、復

元することで、健全な状態に戻す能力。

〈制約〉

- ・ 傷の程度によって、使用するオーラが増加する。
- ・ 復元のため、超回復はできない。
- ・ 今後、一切操作系能力で他の生物を操作する事が出来ない。

お分かりの通り、〈制約〉と〈誓約〉を大幅にカットした。無くてもいいけるし後からでも足せるからだ。流石に復元力は想定より落ちるが、これも修行で伸ばしていこうと思う。とりあえずピッコロさんみたいな超絶再生は無理だが、くつつけるぐらいなら行けると思う。

いよいよ土台が固まってきた。あとは精度を高める段階だ。『死なない男』まであと少し。

9、文字通り弟子

ジュニアハイ、日本では中学かな。ここに入っても相変わらず私の扱いは変わらないかった。小中高一貫校だ仕方ないか。まあ私のやる事は変わらないから。なんだかんだいっても充実しているし。心機一転、頑張っていこう。

え？浮いた話は無かったかって？

無いよ（怒）

流石にこの時代はまだ女子の社会進出は成されていないのだ。よってこちらは男子校である（泣）

いや、むしろ学校に行けるだけでも幸せだよ。忘れがちだが、この時代は2000年以上昔の時代なのだ。まだまだ人々に余裕は無いのだ。

さて、いよいよマイブラザー、もとい将来のドンが入学してきた。マイケル君（7）で

ある。私と違って小さい頃から活発で、何処でも駆け巡ってるタイプだった。そして、よく私にも突撃してきた。私は修行をしたかったので、念をマジックっぽく使って適当に相手をしていたが、いたく気に入った様だ。そんな彼もエレメンタリースクールに入る頃には周囲から私の噂を聞いて、尊敬の念を覚えた様だ。しばらく観察してたかと思えば、常に私に付き纏って来る様になった。申し訳ないが修行の邪魔である。仕方がないので《絶》で撒くのだが、どういったわけかすぐに発見されるのである。どうしてそんなに執念深くくっついて来るのかって聞いたたら、

「兄貴みたいに強くなりたいから」

だと。うーん。どうしたものか…。あまり念について無闇矢鱈と広めたくない。あるか分からないがハンター協会に怒られるだろうし。ただ、どうして強くなりたいたのかと続けて聞いたたら、言い淀みながらも

「……パパのお仕事は、僕がやるから、そのために強くなりたいたいんだ。兄貴はパパのお仕事やりたくないんでしょう？兄貴の方が向いてるのに……」

……どう反応すればいいんだろう。マイケルは家の仕事を分かっているのだろうか。それに、確かに私は継がずに家を出てハンターになりたかったが、そんなそぶりは見せなかつた筈だ。しかし、そうか。家族だからな。そろそろマイケルや両親とも進路について話し合う時期がきたかもしれない。

「…お前の言う通り確かににいちちゃんは家を継ぐ気はない。でも、別に家族が嫌いつてわけじゃないからね。そこは誤解しないでほしい。にいちちゃんはどうしてもこの世界を見て回りたいんだ。その為に昔から準備してきた。うちの仕事はこんなやる気の無いやつがやつてもダメだと思う。お前には悪いけどね」

「いや、そんなことないよ。僕だつてパパは好きだからお仕事はやつてみたい。でも、パパや兄貴みたくには僕じゃなれないからさ。怖いんだ。だから強い兄貴に力を貸して欲しいんだ」

…こいつ本当に7歳か？頭良すぎない？周り見え過ぎててこつちが怖い。それとも父の入れ知恵かな？ともかく力を貸す事はやぶさかでは無い。私の代わりにマイケルに継いでもらうという関係上、それなりに彼には手助けしてあげたい。しかし、力を手に入れて無軌道、無計画にそれに振り回されても困る。なので覚悟を聞く事にした。

「お前にはお前の良さがあるが…わかった。にいちゃんの強さの秘訣を教えてやろう。その代わり3つ条件がある。

1つ、にいちゃんの指示は絶対だ。

2つ、秘密を守る事。誰にも教えてはいけない。それぐらい大事な力だ。

3つ、この力を人を虐げる事に使わない。

以上だ。さて、お前はこの約束に何を懸ける？」

「命を」

ノータイムで答えたマイケルは、親指の肉を噛みちぎり、私に差し出した。血の掟だ。
…コイツ本気だな。普通は針で刺すものだ。痛かつたらうに…。平然とした顔をしてる。

…やっぱりお前の方が向いてるよ。

いいだろう。私も彼の覚悟に応えるべく同じ様にした。痛い。やっぱり私にはマフィアは向かないが、流石に5歳下の弟にみつともない所を見せる訳にもいかず、何とか顔を平静に保ちながら親指を合わせた。

「これにて血の掟は成された！では、師匠として、まず最初の指示を伝える」

「私の事は兄貴ではなく、お兄ちゃんまたは兄ちゃんと呼べ」



その夜、私は久しぶりに父の書齋に赴いた。私なりのケジメだ。

「父さん、話がある」

「奇遇だな。私からもお前に話があった。まずはお前から話しなさい」

…敵わないな。何もかもお見通しか。流石はファミリーの頭張ってるだけあるよ。ならば回りくどい事は無しだ。

「僕は将来この世界を見てみたい。家の事はマイケルに任せる。だから僕なりにアイツを鍛える。父さんには悪いと思ってるけど、これは決めた事だ」

一息で言い切った。長い沈黙。念能力もないのにこの人のプレッシャーはキツイ。だが、私は引かない。これはケジメなのだ。

長い沈黙の後、父はフツと息を吐いて静かに語り始めた。

「…お前は身体が弱くて、小さい頃は母さんと心配し通しだった。苦しむお前に何も出来なくて随分歯痒い思いをしたものだ…」

子供は7歳まで神の子だ。いつ召されるかと覚悟はしていた。

…だが、お前は生き延びた。自分の力でだ。血は争えん。お前が大きくなるにつれて、人の頭に立つにふさわしい男になっていくのを見て、私も夢を見たのだ。

…お前にファミリーを託したいとな。だが、どんどん成長していくお前を見て、考えが変わった…。

お前は世の中を変える男だ。何か使命をもつて産まれてきたのだろう。…ならば、私に出来る事はお前の事を気持ちよく送り出す事だ。

家の事は心配するな。それは私の仕事だ。お前はお前の好きに生きろ。その考えは今も昔も変わらん。もちろんマイケルもだ。だが、お前もマイケルも大事な家族だ。出て行つたとしても家を継がないことなど気にせず、いつでも帰って来い」

…ああ、やっぱり私はこの人には敵わないな。泣きそうだ。普段は口数少ない癖に、いつも家族の事を思いやってくれるこの父が大好きだ。前世の家族も好きだったが、今世の家族も大好きだ。涙を堪えながら感謝の言葉を告げる。

「ありがとう。でも、僕はさっき言った事は守るよ。スクールが終わるまではね。これは僕なりのケジメだ。マイケルが望む限りの力にはなる。約束だ」

父は笑顔を見せながら書斎の棚から高そうな瓶を差し出し、こう言った。

「飲め。お前はもう立派な男だ。これはその祝いだ」

その後、父とは色々な事を語り合った。小さい頃の思い出。スクールの事。ジョセフの事。マイケルの事。そして私の事。やはり父は私の力の事を知っていた。知っていて黙っててくれていたのだ。場合によっては沢山利用価値があるはずなのに、好きにさせてくれた父には感謝でいっぱいだ。

私も将来こんな器の大きい男になりたい。短い様な長い様なこれまでの人生で唯一尊敬できる人だ。これからも大事にしたい。私はこの家族の為ならば、力の限り助けよう。

それが私の誓いだ。

私は体質的に酒は効かないが、愉しむ事は出来る。その後も沢山沢山語り合った。夢の様な時間だった。父も楽しんでくれたのなら何よりだ。今後もちよくちよく付き合おう。しまいに酔い潰れて寝てしまった父をベッドへ運び、寝かせようとした時に、微かに父が呟いた。

「……マイケルの事を、頼む……」

わかったよ父さん。マイケルの事は任せてくれ。そう告げたら嬉しそうな顔で父は眠りに就いた。

ありがとう。父さん。約束は守るよ。

10、静かな日々の訓練を

さて、そうと決まればプランニングを考えよう。まずはマイケルに念に目覚めてもらう。もちろん私の修行もやりながらだ。念の目覚めはゆつくりの方がオーラへの親和性も湧くだろう。無理矢理起こしてもいいが、最終手段にしたい。

何はともあれ、体力を付けなければ話にならないため、私のランニングと筋トレに付き合わせる。もちろん全くついていけないが、私は構わずやる。ここでへこたれるようなら教えないつもりだったが、へばつても暫くしたら起き上がり必死の形相で食らい付いてくる。：中々の根性だ。とりあえず1年様子を見よう。

：1年が経ち、子供とは思えない様な過酷な訓練を続けきった。アスリート並みの量なんだけどね：。最近是我的の半分は出来る様になってきている。素晴らしい根性だ。ちなみにジョセフは3日で諦めた。

これなら、そろそろ念の目覚めに入ってみよう。まずは心構え。初めはマイケルに向

かつて全力の《練》を放つ。当然殺気は込めないが、多少の攻撃する意を載せる。マイケルは腰を抜かしたが、気絶も失神もしなかった。…大した奴だ。だが、この力の危険性にも気付いただろう。

そこで私は彼に伝えた。何のためにこの力を欲するのか。これを疎かにしてはいけないと伝え、口に出させた。彼の答えは、「フアミリーを守るため」だった。

さて、それではいよいよ念修行だ。先ずは瞑想のやり方を教えた。自分の意識を極限まで無くす。「無」の境地という奴だ。やってみると分かるが、かなり難しい。特に幼い子供には。目を閉じたところで、様々な情報は周りから入ってくる。ここから想起される雑念を消し、自分の信念のみを見据え、それ以外を無くす。そしてその他をただただありのままを受け入れる事が最初の関門だ。私も隣でサポートしつつ様子を見てみよう。どれぐらいで出来るかな。



驚いた事に、僅か1ヶ月でコツを掴んだらしい。最初はモゾモゾしたり、寝てしまっ

たりしていたが、僅かなアドバイスで見事な瞑想状態を3時間続けられる様になった。コイツは単純一途なところはあるけど、頭もかなりいいらしい。こちらの言ったことをすぐに吸収出来る柔軟さがある。

下準備が整った所で、精孔を探る訓練に入る。私のやり方は特殊なので、なるべくかみ砕いて教える。自分の内側に目を向けて、力の流れを感じとれ、と。

伝える事は伝えたので、私の修行も行う。暫くはこれに掛かりきりになるだろうか、やれるだけやる。時間は待つてくれないからなあ。



アンダーソン家の朝は早い。午前4時。まだ暗い中、母が起きて支度を始める。同時に私も起きて、挨拶をし、軽く身体を解す。暫くするとマイケルが起きてくる。自分から起きて来るとは感心な奴だ。2人して準備運動をする。終われば家近辺を早朝ランニングだ。狂犬病ショックで最近朝に走る様にした。私に害は無いが、マイケルに何かあったら死んでも死にきれないからね。今日はとりあえず軽くフルマラソンでいい

だろう。1時間半かな。私は自分の修行に妥協しない。なーに。家の近辺をぐるぐる回るだけだから迷う事もない。一周10キロだから4周だ。マイケルも黒髪を揺らしながらついてくる。大分伸びたな。今度切つてやるか。お、今日は5キロまでついてきて力尽きた。後何回復活するかな。

それから、復活して力尽きる弟子を横目に走りまくる。結局マイケルは合計20キロ走つて終了。終わった後ピンピンしてる私を見て、呆れを通り越してバケモノを見る目で見てくるマイケルとシャワーを浴びる。

上がる頃にはすっかり朝日が差して、父もリビングでコーヒー飲みながら新聞を読んでいる。相変わらず絵になるオッサンだ。その内朝食が出来、お楽しみの食事の時間だ。今日はトーストにたつぷりバター。パソコンにスクランブルエッグ、サラダにコーンスープにミルクか。最高だ。マイケルも私も一心不乱に食べる。父母も談笑しながら食べる。この時間は好きだ。

食後は片付けを手伝い、父は仕事に出かける。高そうなスーツにトレンチコートを羽織り、ボルサリーノ帽子を被る姿はどう見ても堅気には見えない。さて、我々もスクールの時間だ。

スクールでは、いつも通り授業を受ける。休み時間には何かと世話を焼きたがるジョセフを自分のクラスに戻したり、クラスメートに調子はどうか聞いてみたりする。昼食

の時間は弁当又は購買だ。自称舎弟が気を利かせて買ってくれた定食セットを、これまた自称舎弟が取ってくれた席で食べる。最初は断ってたんだが、泣きそうな目で見てくる彼らを見て、断れなかった。代金をちよつと多めに上乘せして返す。

午後の授業を終えたら、友人と遊ぶ。最近はもつぱら公園で駄弁る事が多い。下らないう話に花を咲かす。前世では出来なかつた事なので、毎日密かな楽しみだ。

午後4時。帰宅。先に帰っていたマイケルと早速筋トレする。1時間。マイケルよ。バケモノを見る目で見てくるのはやめろ。

午後5時。念修行パート1。基礎修行。マイケルは瞑想。今日は《円》にチャレンジ。オーラをうすく伸ばし、均等にしたまま拡げる。相変わらずヘタクソ。現在の最高が10メートルだが、もうちよつと伸ばしたいし、1秒以内に発動したい。今は3秒ぐらしかかるし、実戦ではまだ使えないな。しかし、マイケル君、瞑想中に反応してなかつた？気のせいかな。

午後7時。父帰る。今日は早かつたな。家族で夕食。私はこの食事の時間を大切にしている。談話しながら食べる。今日はトマトソースの Pasta と冷製スープだ。非常に美味しい。今度教えて貰おう。

午後8時。軽く汗を流し念修行パート2。今日は変化系。うへえ。苦手なんだよね。

今日はそれぞれのレベルを一通り熟す。因みに自室で出来る時はやるが、無理な時は庭でやる。マイケルは瞑想中。

午後9時。歯磨きしてマイケルを寝かせる。よく寝る子にして育てたい。まあ毎日の修行で疲れ切ってるからいつも泥の様に寝てる。

寝かせた帰りに父が書斎から手招きしてる。お、今日は母が捕まらなかったな。晩酌は両親でやってるが偶に私が呼ばれる。前母に見つかって2人ともメチャクチャ怒られたから、コツソリとだ。怒られても辞めない所に父のお茶目さがある。

この時間も私は好きだ。ウイスキーで乾杯し、まったり過ごす。父も割とぎつくばらんに仕事の話をするし、私も舎弟の扱い方を聞いてみたり、マイケルの意外な根性について考察をしたり、色々な話をする。

午後10時。明日も早いので先に部屋に戻る。父はもう少し呑む様だ。ほどほどにしなよ。さて、私も瞑想の時間だ。2時間程細胞に語りかけながら行う。私の睡眠時間だが、《絶》プラス細胞操作で良質な休息を得る事が出来るため、2時間でも完全回復する。しかし、人間性を失わない事と、リズムを崩さない様に4時間は寝る様になっている。

午前0時。おやすみなさい…。



この様に日々を送っている。また休日はバイトに行ったり、一日中修行したりと割と多忙な生活をしている様に見えるが、私にとっては掛け替えのない日々だ。ずっとこの時間が続けばいいのになあ。

11、ハイスクール時代

あれから更に3年経った。私ももう17歳だ。マイケルも12歳となった。弟子育成も順調だ。アイツは結局念に半年で覚醒した。何この才能の塊。素直に褒めたら冷めた目で「兄ちゃんが言うな」と言われた。解せぬ。

少しずつ、順調に訓練を重ね、基礎が出来るまで3か月。とりあえず水見式をやってみる。強化系だろうなあと思ってたけど、やっぱり強化系だった。でしようね。コイツ頑固だし。で、基礎修行を1年。系統別を取り入れ出してから1年と4ヶ月。まだまだ系統別はクリア出来ていないが、念制御は中々いい感じになってきた。一度どれぐらい《練》が出来るか測ったら2時間は出来てた。HUNTER×HUNTERというと、下級上位ハンターぐらい？念使いが二人になってからは簡単な体術訓練もできるようなった。いわゆる『流々舞』である。オーラの攻防力移動の非常によい訓練になるし、体術に関してはからつきしな私には本当によい訓練となった。最初始めた頃はお互いミスりまくって怪我が絶えなかったが、私の場合はすぐ治るためマイケルはズズいと言っ

てた。いや、こればかりは固有能力だしね…。おとなしく《絶》で回復して♪強化系でしょ？

速度も最初は亀のような遅さだったが、最近は漸く普通の速さになってきた。目に見えないぐらいの速度は無理だけど。

さて、そんなこんなで修行も順調で、そろそろ卒業かな、強化系だから固有能力もいらんだろって思ってた、マイケルはすでに開発する能力を決めてたらしい。

【祝福をあなたに】
アンダーソン・ファミリア

・強化系能力

指定した人物に対して、オーラを分け与え、強化する能力。簡単に言えばバフをかけようなもので、肉体的に頑丈になり、多少の怪我や病気なども回復しやすい。

〈制約〉

- ・親愛の情によって威力や持続時間が変わる。
- ・一度かけてしまえば剥がすことはできない。
- ・オーラ量によってかけられる時間が変化する。また、かけられる人数も変わる。

……なるほど。私の発を参考にしたらしいが、なかなかいい能力だ。私に似て攻撃性

はないが、そもそも強化系なので別に鍛えていけば問題ない。それよりも、ファミリを大事にするマイケルには合ってると思う。私の能力は自分専用だからね。

ただ、これは相当難易度が高いので、基礎、系統別を繰り返し行うしかないね。ざつと見て、強化系、操作系、放出系は最低必要だ。変化系、具現化系もかな？ 見た目にこだわるなら、だが。

よし。この能力の発現をもって卒業試験としよう。

私もそろそろ今後のために動き出さねばならないし、自分がどれぐらいの成果が出たかステータス表みたいな感じで出してみよう。

カームIIアンダーソン(17)

潜在オーラ量：約2000000

顕在オーラ量：平均約100000

基本能力

《堅》持続時間：約20時間

《円》制御範囲：半径約500メートル(！)

《凝》移動時間：平均約0.5秒

強化系：Level5以上。念手で洞窟を掘れる。無機物を強化してかなり強く出来

る。鉄とかも貫通する。

変化系：Level 5以上。文字や絵を1秒で書ける。柔らかくも硬くも出来る。《円》の形を変え、触手みたいに出来る。

放出系：Level 5以上。片手で5メートルは浮ける。最近かめはめ波が撃てる。元氣玉も出来る。氣円斬だけ出来ない。

具現化系：Level 4。一通り具現化が可能になる。爪の切れ味は最早日本刀レベル。最近飛ばせる。髪の毛もブラフォードさんぐらい出来る。孫の手は実体化レベルまで進化したため、ちよつと焦ってる。

操作系：Level ?。無機物操作が実戦レベルまで進化。空気とか金属以外は操れる。最近はマイケルと忍者対決で遊ぶ。ナルトで思い出したけど、螺旋丸も出来た。実戦レベルでつよい。

特質系：Level ?。細胞操作。今4分の3は掌握。

固有能力

【完全適合】

・体調不良程度の毒は3分で対応。インフルエンザクラスは30分。致死レベルは半日で対応。最近発動してない。

【日々是健康】

・小さな切り傷は30秒で対応。大きな切り傷は5分程度。骨折は15分ちよい。切断は指程度なら残ってれば30分で繋げる。腕なら恐らく1時間。致命傷は部位にもよるが、半日程度だと推察。痛いからあんまり修行したくない。

ここ3年でオーラ量は倍増した。大雑把に計算したが、凄まじい量だ。恐らく人類最高レベルまで到達した気がする。これでまだ発展の余地が残ってるから恐ろしい。せつかくだから行ける所まで行ってみたい。まあキメラアントの直属護衛軍以上には勝てないだろうけど。

ちなみに漸くオーラ操作が安定し、かなり素早いオーラ移動が実現した。継続は力なり。特に《円》の伸びがヤバイ。《円》の知覚つてオーラが触れてる部分の触感が鮮明になるんだよね。コツは《練》の要領でオーラをだし、それを広げるだけ。維持がしんどいし、知覚情報増えるから神経使う。まあ私は脳の処理能力増えてるし、そこは割と大丈夫だが。

とりあえず私は漫画の再現が出来るから満足だ。あとは世界を巡る準備かなあ。卒業したらバイト増やしてジェニー貯めなきや。



ハイスクールでは名実共にボスになってしまったが、弟もどうやらブイブイ言わせているらしいので安心して基盤ごと引き継がせよう。さて、ここを出てからだが、ハンター試験を受ける予定だ。今、1759年だ。毎年開催してれば、逆算して46回目だ。また、ハンターという単語も新聞や学校の話題でちよくちよく聞くから、多分来年もある。卒業したら当面はバイトと試験対策だな。

確か、サバイバル試験とかもあったね。ジャングル探して実際やってみよう。

今のご時世でもハンターは超人的な扱いで、かなり待遇が優遇されている。父の仕事でも、ハンターを護衛に雇う事はかなりのステータスらしい。べらぼうにジェニーがかかるから短期契約しか出来ないらしいが。でも、今46回ぐらいって事は、合格者数平均5、6人と考えても200人ちよいかいしないわけだ。各国に1人か2人ぐらいの割合だ。そりゃそうなるよ。念能力者はもつといるだろうけどね。私やマイケルみたい

に。
父が夜飲んでる時に良く愚痴ってたが、安心して欲しい。当主予定の奴をそんじよよこらのハンターでは敵わないぐらいに鍛えておくから。

と、いか既にある程度の奴には負けないんじゃ…。

今後のプランを立てつつ、修行に精を出す。修行不足で死にましたなんてシャレにならないので、最低でも護衛軍クラスから逃げられるぐらいにはなりたい。

ネットになるのは身体能力か。筋トレを始めとする負荷訓練も限界が見えてきた。最近は何のボタ山で、でかい岩とかを抱えながらやつたりしてるが、もうちよつと何とかならないかなあ。家近辺ではそんな事出来ないし。

ボタ山の親方は私を便利に使うようになった。なんせ重機いらず、爆薬要らずだからね。ついでに鉱毒も効かない。むしろ「パレエクト・コンバート完全適合」の経験値稼ぎご馳走様です。硬い岩盤も喜んで掘り進む変態がいたらそうなるか。その代わりに修行を好きにさせてもらえるからWIN-WINよ。最近マイケルもバイトしだったので親方はホクホク顔だ。バイト代弾めよ。

後、体術。ジャポンとかは達人がいそうだし、個人的に行ってみたいので、現地入りして弟子入りする事も視野に入れなきゃなあ。我流じゃ限界があるし、困ったもんだ。素人相手ならともかく、達人相手だといくらオーラで優つても何も出来ずにボコられそう。

オーラと能力で死にはしないだろうけど、対策は立てられるようにしたい。

まあ何にせよ、卒業してからの話か。

12、卒業と旅立ち

いよいよハイスクールも卒業の時が来た。この時代で高等教育まで出た奴は、頭脳労働系に進む奴も多い。そのまま行政に行く奴も結構いる。割とハイソな教育機関だったんだなあ。

で、あるならば友人達にはアンダーソン家を宜しくと伝えておいた。口約束だが、自称舎弟を名乗る彼らならよろしくしてくれるだろう。

むしろ私の進路を非常に惜しがっていた。曰く、最高のドンになれるだろうに、と。まあ最初から決めてたからね。全世界最高難関のハンター試験に挑戦するって言ったらなんか納得して応援してくれた。

私も彼らとは長い付き合いだから寂しくないと言えば嘘になる。でもマフィアのボスなんてホント向かないから。マイケルを盛り立ててくれとも言つといた。彼らならやってくれるだろう。

マイケルの修行も佳境に入った。もう既に中堅ハンター位のオーラがある。念の制御も最終的に私と同じぐらい上手くなったので、もう大丈夫だろう。

固有能力の【祝福をあなたに】アンダーソン・ファミリアも無事発現した。

最後に伝えておかなければ。

くボタ山にてく

「マイケル、良く頑張った。私からは免許皆伝だ。もう既に至近距離から銃撃を喰らっても軽症で済むだろう。」

ただ、最後に守って欲しい事がある。

まず、念で一般人を攻撃するな。同じ念能力者だけにしておけ。前から禁じていたが、もし相手が生き残った場合、念能力に目覚める可能性がある。やむを得ない場合には相手は必ず始末しろ。

次に、極力この力を広めるな。知っているのと知らないのでは大きなアドバンテージがあるし、もしバレたら色々狙われる可能性があるからだ。

最後に、念能力で無辜の人々を虐げた場合、教えた私が責任を持ってお前を殺しに行く。

まあ、お前なら大丈夫だろう。お前には苦勞をかけるが、父さん、母さん、そして家の事をよろしく頼む」

「…全く。目の前にいるバケモノから免許皆伝って言われても全く実感ないよ、兄さん。でも、言いたいことは分かった。必ず守るよ。僕はこの力をもっと高めて、家族とファミリーを護つてみせる。」

家の事は心配しないで。僕が、頑張るから。何も気にせず兄さんの夢を追ってね」
本当に出来た弟だなあ。

「じゃあアレ、やるか？」

「やろう」

お互いの指を噛みちぎり、血を合わせる。血の掟。実に6年振りだ。

「私も生きている限りは、1年に一度は家に帰ってくる。約束だ」

「僕も、ファミリーのドンに相応しい男になるよ。約束だ」

お互いに約束を交わし、笑い合う。やっぱり家族っていいな。私も約束は守るようにしよう。

直後、傷がものすごい勢いで復元する私を見て、「やっぱズルい！僕はこんな痛かったのに！」とか言いながら殴りかかってきたため、ボコボコに返り打ちにしてやった。師匠に勝とうなど10年早いわ。

ブツブツと「納得いかない…」とか言ってたが、聞こえないフリして担いで帰った。



「父さん、母さん。今まで本当にお世話になりました。僕はハンターを目指します。でも、1年に一度は家に帰って来ます。手紙も書くからね」

「あの可愛いカーム君も、大きくなったわね…。本当は今でも行かせたくないわ。あな

たは昔から身体が弱かったもの。でも、あなたが決めた事だものね。怪我や病気には気をつけて頑張つてね」

「ありがとう。まだまだ母さんには我が家のトマトパスタの作り方を聞きたいし、必ず帰ってくるよ」

ありがとう母さん。また親孝行しに帰ってくるよ。

「お前が居なくなると寂しくなるな。しかし、男が一旦決めた事は必ずやり通せ。前も言ったが、家の事は心配するな。あと、これは餞別だ。取っておけ」

父がずっしりした革袋を渡してきた。中を確認したらギツシリと紙幣が詰まっていた。

「いや、こんなには要らないよ！」

と、返そうとするも、

「お前の為にと取っておいた分だ。親としてこれぐらいさせろ」

と、返すつもりで受けて取らない。じゃあありがたく使わせてもらうか。最後まで頭

が上がないな。

「マイケル！家の事は頼んだぞ！」

玄関先から2階の窓に向かつて叫ぶと、何故か見送りを恥ずかしがって窓から見ていた弟も、親指を立てて返してきた。

「行つてきます」

さあ出かけよう。私は家を出て、道に向かつて歩き出した。しばらく歩いて見納めになる我が家を振り返った時、

「ブフオ!？」

凄まじい勢いで何かぶつかってきた。よく見ると、これはマイケルか。振り返るまで

気付かなかった。腕を上げたな。とか、益体もない事を考えてたら、マイケルは腹に顔を埋めたまま

「兄さん、必ず帰ってきてね」

可愛いやつめ。

「約束しただろう。必ず帰ってくる」

「絶対だよ！」

「絶対だ」

お互い離れ、拳を突き合わす。マイケルは若干涙目だが気にしない。

「じゃあ兄さん、さよなら」

「マイケル、別れの時はさよならとは言わない。また会える様にこう言うんだ。」

「またな」

マイケルもニヤリと笑ってこう言った。

「わかったよ。兄さん」

「またね」

幕間

13、カーム伝説

カームのアニキは昔から凄い奴だった。友人としてはそうとしか言いようがない。昔は病弱だったって聞いたけど、そんなの絶対嘘だね。エレメンタリースクールから一緒だが、アニキはいつも元気に遊んでたぞ。偶に休む時があるけど翌日にはピンピンしてた。だから病弱ってのは、アンダーソン家を妬む奴等の戯言だろう。

俺の名はジョセフ・ルチャアーン。今はマフィアの見習いやつてる。ヤクザな稼業だが、うちは曾祖父の代からこれでやってきたから、伝統みたいなもんだ。代々顔役のコレオーネ家（移民の時に名を変えたらしい。今はアンダーソン家だ）に仕え、コンシリエーレ（顧問）をやっていた。いわゆるボスの右腕だな。

コンシリエーレになるためには頭が良くなかつちやならない。最低限のインテリにはならねーとな。金稼ぎのためや裁判に強くなるために司法書士か、弁護士がおすす

だ。親父も表向きは弁護士だ。

だから、エレメンタリーから通わせて貰った。俺みたいなガキは普通働いてる所だが、本当に幸せな方だな。おかげで今は司法試験の目処がつきそうだ。

おっと、アニキの話だったな。俺はコンシリエーレの家系で、彼とは歳も近い。当然世話役として側に控える様に指示されるわけだ。ウチの親父にアニキと登校して世話を焼く様に言われた時は、遂に来たかと思つたよ。1学年下だから色々教えてやらなきやならん。

そう気合いを入れて、初めて会つた時。

圧倒された。

見た目は金髪碧眼の華奢なガキだが、纏う雰囲気が違う。圧倒的に格が違うと思ひ知らされた。ぱつと見眠そうに見えるが、その目の色が深いんだ。ああ、今でも上手く言葉に表せないな。兎に角普通じゃない。コイツには絶対勝てないって思ひ知らされるんだ。なんつー風格だよと思つたね。俺と似たようなガキがだ。

将来この人と共に仕事が出来たら幸せな事だ。とにかくボケてないで話しかけな
きや。

俺は焦つてしどろもどろになりながらも「これからよろしく」って事を伝えた。アニキは不思議そうな顔をしてたが、やがて「こちらこそよろしく」と言つた。

それからしばらくはアニキも誰とも喋らず静かに過ごしていたようだ。周りの気持ちは分かる。迂闊に話しかけられないんだよな。だが、話してみると意外に普通なんだよ。

ある時、アンダーソン家所有の空き地に遊びに誘われた。断るなんて選択肢はないからビクビクしながら行ったが、普通に遊びの誘いだった。2人だけだが、広大な空き地で走り回って遊んだ。普通に楽しかった。しばらく続けたが、2人だけだと限度がある。俺は同学年の舎弟やその下の兄弟を誘って遊びに行くようになった。最初はぎこちなかったが、小さな子供の話だ。すぐに打ち解け、一緒に遊ぶ様になった。そのうちクラスの人にも加わる様になって打ち解けたようだ。

しばらくして、ドン・アンダーソンが大工を雇って遊具を沢山作ってくれた。ドンも人の親なんだなと思ったが、子供のテーマパークみたいになって、みんなで楽しく一生懸命に遊んだ。アニキの親父さんがやってくれたと知った仲間たちからアニキも尊敬の目で見られるようになった。

ちなみに後年、あそこは本当にテーマパークになった。名は『カームランド』だ。

話を戻すが、その辺りで最初の転機が訪れる。6年のクソ上級生共が、ここを俺たちのシマにすると宣言しだしたのだ。ニヤニヤしながら俺たちを威圧し、全員追い出そうとした。俺は必死に抗議した。ここはアンダーソンの持ち物だって。だが、奴等は聞く

耳を持たず、余計に挑発してくる。中には小突かれた仲間もいた。悔しいが逆らおうにも体格が違いすぎた。

「アンダーソンってそのチビだろう？何処のどいつだか知らねーが、そいつを見る限り腰抜けの集団だから大した事ないな」

その言葉を聞いた瞬間、気づいたら俺はブチ切れ、奴等に飛びかかって行った。許せない。コイツらはアニキだけじゃなくてファミリーさえもバカにした。だが、悲しいかな勝てるわけも無く、ボコボコにされて見せしめにアニキの前に捨てられた。俺は痛さと申し訳なささと悔しさと動けず、ただ涙が止まらなかった。

それを今までじっと見て何も言わなかったアニキから、初めて怒りの感情を感じた。表情は変わってない。だが、明らかに雰囲気が変わった。俺や仲間を遠ざけ、1人で一歩前に出てこう言った。

「僕たちに謝つてすぐにここから立ち去るなら許してやる」

上級生共は啞然とし、笑い出したが、俺たちは笑えない。さすがのアニキもこんな集団に襲われたらひとたまりもない。

「おい、チビ。冗談はその身長だけにしときな。嫌だねつつたらどうすんだ？」

「お前らを泣いて謝るまでボコる」

と、当たり前のように宣言した。この時俺はアニキがマジで言っていて、マジでそれが出る力を持つてると根拠もないが確信した。上級生共も流石にマジになった様で、殴りかかろうとしたその時、アニキから凄まじいプレッシャーを感じた。俺たちでさえ逃げ出したくなるようなやつだ。モロに浴びた上級生どもはさぞかしキツかっただろう。だが、流石に低学年相手に逃げるのはダサイと思ったのか、アニキに殴りかかった。恐怖からかかなりの全力パンチをしてるように見えたが、不思議な事にアニキは反撃しない。それにちつとも効いてない様に見える。

一体どうなってるんだ？そのうちアニキはようやく動き始め、真正面にいるやつお腹にパンチしたら、一撃で伸していた。その後次々と一撃で伸していったが、奴等の頭が背後から角材でアニキをぶん殴った。流石にやられたかと思つたが、なんともない様に振り返り、笑顔で5、6発あのパンチをぶち込んでいた。アレはトラウマになるんじゃないかな。

その後全員一列で土下座させ、俺たち一人一人（特に俺）に謝らせた。従わない奴には容赦なくあのパンチをぶち込み、強制的に謝らせた後、「二度と俺たちの前に顔出すんじゃない」と脅して解放した。

俺はその時、興奮して痛みも忘れ、この人なら一生ついていけると確信した。年下だが、一生仕えるならアニキだ。これからはアニキと呼ぼうとその時心に決めた。

多分見ていた奴らも同じ気持ちだったんじゃないかな。アニキに感謝の言葉を述べ、殴られたところの心配をしたが、アニキは「気にするなよ。それより遊びの続きをやるう」って言った。やっぱりこの人は普通じゃないと思った。

さすがに俺はボコられて傷だらけだったので、遊ばず帰り、ウチの親父に報告したら激怒された。曰く、「守らなきゃいけないボスを一人で立ち向かわせるとはどういうことだ」「本来ならば一番冷静になつて考えて立ち回らなきゃならん立場の人間が、激情に駆られて突つ込むなど、我が家の恥さらしも良いとこだ」「たまたまカーム君が勝つたからよかつたようなものの、何かあつたら私はドンに顔向けできん」……。いちいちごもつともで、俺はワンワン泣いた。ひとしきり怒られた後、

「カーム君は我がファミリーを代表する人間になる男だ。すでにその片鱗は十分に見えてきている……。おまえはただ金魚の糞のようにくつついてるだけじゃあいけない。彼を表から裏から支えられるように、彼に並び立てるような、頼られるような立派な男に

ならなければならない。今回の件も、恐らく違うファミリーの差し金だろう。子ども同士のこととは言え、もしこれが実現したら、そのままあわよくば土地の乗っ取りを少しずつ行うつもりだっただろう。ついでに次期ドンの息子を貶めることができる。我々はそれを読んで、敵の策を未然に防がなければならない。それがルチアーノ家の使命だ。……お前にそれができるか？」

俺は目から鱗が落ちる思いだった。確かにあれは不自然だった。しかし、みつともなるところを晒した俺は、次からは絶対に負けないために力強く頷いた。親父は俺の目を見て納得したようだった。

次の日から、カームのことをアニキと呼び、アニキの偉大さを布教するとともに、アニキのサポートを全力で行った。アニキは嫌がって俺に友達なんだから普通に名前前で呼んでくれ、と頼んだが、これは俺のケジメだ。翻すわけにはいかん。しかし、あんなみつともない姿を晒したのに、まだ友達と言ってくれるのかと感動した。アニキはそれから3日間俺に説得をし、渋々アニキ呼びを変えたが、アニキのいないところや心の中ではアニキと呼んだ。それぐらいは許してほしい。

ちなみに例の上級生は低学年にやられた雑魚として著しく評判を落とすし、コソコソとスクールの陰に隠れるようになり、静かに卒業していった。ざまあ。

◆

それからのアニキはすごかった。とりあえずスクール中のボスとなり、何もしないのに影響力を深めていった。ちなみにボス扱いすると本人は嫌がるので言わない。普段は物静かで、感情があるのかさっぱり分からない。しかし、人なつつこい面もあるし、おちやらけてる面もある。ただ、何とかな、カリスマがあるんだよ。この人についていきたいっていうカリスマがね。だから何もしなくても人はついてくるし、手下も増える。本人は友達と思っていたが。

学年が一つ下なのが本当に悔やまれる。だが、校内でのトラブルはアニキのもとに来る。それを最初に俺を通すように伝え、精査して基本的には俺が片付けるようになった。これも勉強だ。そしてどうしようもないときや、アニキしか解決できないような案件、突発的なものにはアニキが出て行く。アニキも頭の回転は速いので、すぐに両方が得するような形で解決する。そんなことをしてるからボス扱いになるんだ。まあたまたに解決法について聞かれたときに、その頃から勉強を始めた法知識を生かしながらアドバイスをするようにした。これがルチアーノ家の正しい仕事だよな。

アニキが5年生の頃だったかな。その頃にはアニキの評判は轟いていて、近隣からも注目され始めていたが、ウチのスクールからは手を出すやつはいなかった。万が一負けたら例の上級生みたいになるし、俺含む舎弟達がカットしていたからな。

だが、他のスクールまでは無理だった。集団でこちらに乗り込んできた奴らは明らかにハイスクールの奴ら。しかも30人ぐらいでしかけてきたときは、久しぶりに肝を冷やした。だが、アニキは「うるさい奴らだ。黙らせてくる」と言つて、あつという間に奴らの前まで行くと、例の凄まじいプレッシャーを放つた。以前より明らかにパワーアップしてる。至近距離で浴びた哀れなやつは即座に失神&失禁した。アーメン。

その後、ほぼ全員が気絶した後アニキは彼らを放置してまた何喰わぬ顔で教室に戻つていった。後片付けをしながら、正直この人は人間じゃないと思つたよ。

ちなみにウチのスクールは男子しかいないためアニキはよく嘆いてた。「青春がしたい」って。…この人は何言つてんだろうと思つた。はつきり言つてこの近辺の数少ない女子校では、アニキが結婚したいランキング一位だ。舎弟の妹どもも虎視眈々と狙つていて、その兄たちはいつも無理な約束をさせられてる。

一目見ると引きつけられるカリスマに、その単純な強さ。そして、顔の形も整っているし、スマートなスタイルと優雅な所作、性格も良い。そして将来はファミリーのドン

だ。超優良物件である。敬遠するヤツはカタギを指摘してる奴だけだが、女はどうもワルに惹かれるようだ。俺にも妹がいれば絶対に接近させたんだが…。

そもそもそんなことを言ってる割に、アニキには全く隙がない。授業受けてるか、舎弟の面倒見てるか、修行してるか、家族と過ごしてるかのどれかである。舎弟の面倒を見るのもドンの大事な仕事だ。女の入り込む余地はない。例のテーマパークはちびどもに広く開放されてるから、近くの公園で放課後だべりながら報告会しているのだ。一回クスリとタバコを持ってこいと命じられて驚いたことがあったが、やってみたところ、「こんな物か」と一度だけ楽しんで二度とやらなかった。クスリにおぼれるような人じゃなくてよかったよ。まあそんな小さい人じゃないと思っただけだね。



彼の弟が入ってきてから、また新たな転機があった。アニキが弟に家を継がせると言い出したのだ。馬鹿な。「私にはマフィアは向かないから」だつて？アンタ以上に誰が向いてるって言うんだ！

「だいたいマイケルは最近入学したばかりのチビじゃあないか。俺はアンタだからついでいこうと思つたんだ。今度は俺がアニキに必死に説得したが、アニキは「あいつの方が絶対向いてるよ。まあ、そんなに気になるなら話してみるといい」と言われ、すぐに奴に話にいった。

放課後、マイケルを呼び出し、校舎裏でサシで向かい合つた。マイケルは昔から何かと世話していて、俺にとつても可愛い弟分だが、それとこれとは話が別だ。俺は単刀直入に用件を話した。

「アニキに代わつてお前さんがドンを継ぐつてアニキに聞いたんだが……冗談だよな？」俺はその時入学したばかりのヒヨコ相手には過剰な、殺気すら込める勢いで威圧しながら質問したが、マイケルは一切動揺しなかつた。

「うん。そうだよ。ジョセフさんには悪いけど、僕がドンを継ぐ」

「……言い切るか。こいつは昔から頑固なところがあつたが、なかなかの胆力も持つやつだな。だが、おれは納得しないぞ。」

「……ほう。それがどんな意味を持つか分かつて言つてるんだろうな」

そう、もしそうなつたらアニキはどうなる。最悪兄弟間で潰し合うことになるんだぞ？

「ジョセフさんこそ、兄さんのことを本当に分かつてるの？」

「…どういう意味だ？」

「逆に聞くけど、なぜ兄さんはあそこまで自分を鍛えてると思う？」

そう言われて、少し俺も考えてしまった。確かにアニキは異常なぐらいの鍛錬を自分に課している。以前、俺も隣に立てる男になれるようにアニキの鍛錬につきあつたが、あれは本当に地獄だ。人類の限界とも言えるかもしれない。実際俺も3日しか持たなかつた。今まで俺はドンになるための厳しい訓練かと思つていたが…。

「兄さんは、将来ここを出て行くつもりだよ。僕はなんとなく分かつてた。僕が思うに、兄さんはマフィアのボス程度に収まるような人じゃないんだ。恐らく世界を変えてしまふような…そんな気がする。だから僕がドンを継ぐ」

「もちろん言うだけじゃ納得しないだろうことは分かつてる。だから証明する。僕は兄さんと修行して、兄さん並みに強くなる。もしそれが出来たら認めてくれる？」

そうきたか…。低学年のくせに、この俺に覚悟を示して、条件まで付けさせたか。よく見れば親指に包帯巻いてるな。まさか血の掟まで交わしたか。まあ良いだろう。そ

ここまで言うなら乗ってやろうじゃないか。

「いいだろう。そこまで言うんだつたら俺に納得させて見せろ。だが、分かってるんだらうな。アニキの修行は厳しいなんてもんじゃないぞ」

「分かってる。だから証明になるでしょ?」

「そうだな。楽しみに待ってるぜ。せいぜい頑張りな」

俺はそう言い残し、その場を去った。まあ、1日2日で泣きを入れるだろう。持つても一週間だな。と、当時はそう思っていたが……。

マイケルは俺の予想を覆し、1ヶ月、2ヶ月たつてもギブしなかった。さすがに疲れすぎて授業中寝てしまつて、成績が落ちかけたようだが、俺が「頭の悪いボスなんて誰もついてかないぞ」とすれ違いざまに言つたら、それからまじめに受けるようになり、成績も復活した。

発破をかけといてなんだが、あの兄弟は頭がおかしいと思う。

それに俺は失敗してほしいのか、成功してほしいのかもう分からなくなつていた。マイケルは意志の強い男だ。「やる」と決めたらやり遂げる強さを持つている。俺たちの中では大事なことだ。覚悟もある。確かにマイケルは向いてるかもしれない。

だが、それでも俺はアニキに仕えたかった。

結局、マイケルは1年もやりきった。もうあいつがギブアップすることはないだろう。俺は素直に祝福した。そして、マイケルがドンになった暁には、コンシリエーレとして力になることを約束した。アニキは「な、言ったとおりだろう」と言っていたが、まあ認めざるを得ないな。

結局アニキは、マイケルの言ったとおりに「ハンターになる」といつてヨークシンから旅立っていった。

だが、今も昔も俺の中でアニキは一人だけだ。アニキにとつて、俺は肩を並べられるような人間になれているだろうか。アニキは「友達だろ」っていつも言ってくれるが、それに甘えてはいけないと思う。まずはアニキに負けない男になる。そして今後、アニキが困ったことがあつたら、法律関係、司法関係で助けていきたい。

マイケルに条件を押しつけといて、自分は駄目でしたなんてほんとにダサすぎるから、俺も頼れる男になれるように努力するでしょう。まずは司法試験だな。20歳までに必ず受かつてみせる。

これが、俺の誓いだ。

14、マイケルの決意

兄さんの行動に疑問を持ったのは、5歳の頃だった。兄さんはいつも眠たそうな、冷めた様な顔をしてる癖に、やたら張り切つてバイトしたり、訓練したり、瞑想したりしてた。正直顔と行動が合つてない人だった。

だからこそ興味が湧いた。我が家は特殊な家というのは薄々感じてたから、そのせいかなど思つていた。

しかし、それにしてはちよつとおかしい。あんな訓練、必要かな？間近で見れば分かる。どう見ても人体の限界以上の事をやってる。

しかも、時々兄さんから謎の圧力を感じる事がある。

おかしい。確かめなきやつて思つてた。しかし、いつも適当にあしらわれた。マジックと称して、紙で木片を切つたり、糸を指で伸ばして机に立てたりなどのビツクリシヨーを見せてくれた時もあった。どうやってるのか分からないが、多分トリックとかは無いんだろうなと思つた。

6歳になり、兄さんの事も少しづつ分かってきた。その頃からパパの仕事もわかってきた。多分兄さんもそうだったんだろう。僕から見たら、兄さんは何か目的があつて鍛えているのだと思つた。そして、それは家のためじゃない。その内、家を出て行くんだろう。何となくそれだけは分かつた。

ジョセフさんにも昔から良くしてもらつていた。本当にジョセフさんは面倒見のいい人だ。僕みたいなチンチクリンにも平等に接してくれる。

ただ、兄さんの事になるとちよつと狂信的になるのがタマにキズだ。年上なのに兄さんの事を「アニキ」つて言うし。何でつて聞いたら、尊敬する人は例え年下だろうがアニキなんだそう。まあ分からなくは無いか？ウチの従業員(穏当な表現)同士でも、血縁じゃないのにアニキつて言われてる人達居るし(意味深)。

僕の場合は、血縁だし、尊敬もしてるから「兄貴」つて呼ぶ様になつた。

7歳になり、僕もスクールに入学した。そこで兄さんの話は嫌というほど聞いた。聞けば聞くほど冗談の様なエピソードばかりだ。周りの人達はファミリーの将来は安泰だと思つてるんだろう。僕から見ても兄さん以上に似合う人は居ないだろう。

だが、これまでずっと兄さんを見ていたから確信した。

兄さんは、家を継ぐ気は無い。

だから僕は決めた。僕が家を継ぐ、と。

僕には、パパの様な器の大きさは無い。兄さん程の強さやカリスマもない。だけど僕はパパの仕事を継ぎたいんだ。その為に、兄さんから強さの秘密を少しでも学ぼう。そう考えて、兄さんの後をしつこく付けていたら、うんざりした兄さんに理由を聞かれたので、チャンスと思つて率直に思いを伝えた。

僕が話した後、兄さんはしばらく呆気にとられ、その後何か考える様な表情になつた後、僕にこう言つた。

「…お前の言う通り確かににいちちゃんは家を継ぐ気はない。でも、別に家族が嫌いってわけじゃないからね。そこは誤解しないでほしい。にいちちゃんはどうしてもこの世界を見て回りたいんだ。その為に昔から準備してきた。うちの仕事はこんなやる気の無いやつがやつてもダメだと思う。お前には悪いけどね」

やつぱりか。答え合わせが出来た。僕はパパもママも、兄さんも大好きだ。だからこ

そ兄さんには自由に生きて欲しい。だからこそ、家の事は僕が継ぐ。でも僕は、まだまだ力不足だ。ならば、兄さんに鍛えて貰おう。

そう思つて、気持ちを伝えると、兄さんは条件を3つ提示した。

1つ、兄さんの指示は絶対。当然だな。

2つ、秘密を守る事。誰にも教えてはいけない。これも当然。

3つ、この力を人を虐げる事に使わない。当たり前だ。

最後に、僕に覚悟を求めてきたので、僕はすぐに命を懸けた。こんな当たり前的事すら守れないようじゃ、人としてどうかと思う。

その証に、うちのファミリーで行われる「血の掟」を実行した。本来なら針を使うところだが、無いので指を噛みちぎった。凄く痛かったが我慢した。僕にとっては覚悟を示すためだ。ここで日和る訳にはいかない。

兄さんは驚いた顔をした後、真剣な顔で、同じ様に合わせてくれた。神聖な儀式が終わった後、兄さんはこう言った。

「これにて血の掟は成された！では、師匠として、まず最初の指示を伝える」

兄さんの話し方が変わった。少しは認めてくれたかな？と、どうでもいい事を考えていたら、続けてこう言った。

「私の事は兄貴ではなく、お兄ちゃんまたは兄ちゃんと呼べ」

この人はやっぱりちよつと頭がおかしいと思った。



その後、しばらくしてジョセフさんに呼び出されて、例の件について聞かれた。凄いい剣幕で詰め寄られたが、もう決めた事だ。

ジョセフさんは頭も切れるし気が利くが、兄さんの事になると盲目になる傾向がある。

多分兄さんの本心をまだ分かってないんじゃないかな。だから僕から聞いてみた。

ジョセフさんは怪訝な顔をしていたが、思い当たる節はあつた様だ。僕は続けて兄さ

んの考えを伝えた上で改めて宣言した。納得出来るようにこちらから条件も付けた。兄さんの訓練をやり遂げる事だ。

内容を知っているジョセフさんは、思い出したのか顔を引き攣らせていた。ジョセフさんも3日でギブアップしてたからなあ。だからこそ条件になる。

それが出来るならば認めてやる。と納得してくれた。

その夜、パパにもその事を話した。パパは

「お前は、それでいいのか？」

と聞いてきたので、僕は力強く頷きながら、

「僕は兄さんもこの家族も大好きだ。だからこそ兄さんには夢を追ってほしいし、僕はこの家を守っていききたい。僕はパパみたいになりたい。だから、僕がそうしたいんだ。もちろん今のままじゃダメだから。兄さんに鍛えてもらうよ」

しばらくの沈黙ののち、

「…いいだろう。カームへの義理で言ってるかと思つたが、違うようだ。お前の好きな様にするといい…。ただ、男が言い出した事だ。すぐに諦めたり、投げ出したりする事

は許さん。それだけは覚えておけ」

「ありがとう父さん。僕が言い出した事だから絶対にやり遂げるよ」

この時から、パパの呼び方を父さんへと変えた。僕なりのケジメだ。



いよいよ訓練が始まった。例の不思議な力は『念』と言うらしい。これを習得するた
めに強靱な肉体と精神力が必要との事で、いよいよ訓練に入る事になった。まずは早
朝。まだ暗いしどちらかという夜だ。2人して準備運動をし、家周辺を走る。ルート
は事前に聞いたが、10キロらしい。朝のトレーニングにしてはハードだ。さて、気合
を入れて頑張ろう。

なんてスピードだ。全力疾走でも追いつかない。根性で食らいつく。ダメだ。2キ
ロ地点で力尽きた。まだまだこれからなのに体力の無さが恨めしい。

でも終わるまでは頑張るんだ。そう決めたんだから。しばらく息を整えて再び走り

出す。その内兄さんが後ろから追いついてきた。：もう一周走ったの!?

とにかくまたついていく。同じ様についていく。力尽きる。走り出す。また後ろから追いつかれる。そんな馬鹿な!僕はようやくゴールが見えてきたところなのに…。息絶え絶えでゴールに辿り着く。だがまだ兄さんは走ってる。僕も走り出す……………。

結局、15キロで動けなくなり、兄さんに回収された。担がれながら「2時間で15キロか：まだまだこれからだな」とか言ってた。そういう兄さんは40キロ走ってケロツとしてた。その距離って昔の兵士が走って伝令した後、死んだ距離だよね…。

バケモノめ。

朝食も、まるで食欲が湧かないが無理矢理詰め込む。スクールに登校するが、身体中が辛い。うっかり授業中寝てしまう。これが下校後もあるかと絶望的な気分になるが、自分で決めた事を曲げたくない。兄さんからも1年は様子を見ると言われた。1年は耐えて見せる。

スクールから下校したら早速筋トレ。兄さんは舎弟の世話と自分の修行があるため、自主トレを命じられる。1時間走り続ける?まだ走るのか(絶望)

兄さんが帰宅し、筋トレの時間。ひたすら腕立て、腹筋、背筋、スクワットを庭で並んで行うが、スピードが異常だ。もう100単位に突入した。僕も必死でやるが、頑張っても20が限界だ。兄が横目で見ながら「限界プラス1でやれ。1分休んだら次に行け」とアドバイスしてくる。鬼か。結局1時間エンドレスで続けた。もう筋肉が痙攣して1ミリも動けない。兄さんは笑顔で

「マイケルは初日だし、やりすぎるのも良くないからここまでにしよう。流して1キロ走ったら終了な」

と言ってきた。まだ走るのか（泣）だが、泣き言は言えない。ちなみにこの人はこの1時間ずっと筋トレやってて、各500回はやってた。

バケモノめ。

兄さんはそれから念修行に入る。僕は汗を流したらクタクタになって寝てしまったが、夕食の時間に兄さんに起こされて食事をとる。正直食欲はないが、兄さんは家族の団欒の時間は大切にしたらしい。その点は僕も同意見だ。

食後はスクールの課題を片付けて就寝の時間だ。身体はガタガタだ。泥の様に眠る。兄さんはまだ修行してる。やっぱり同じ人間かどうか疑わしい。

さて、過酷な訓練も、続けていけば慣れるものである。始めの方は勉強も手につかず、

成績も下がり気味になったが、ジョセフさんが、「頭の悪いボスなんて誰もついてかないぞ」と言ってきた。確かにその通りだ。それから僕は勉強にも力を尽くし、成績も保つようになった。あれはジョセフさんなりの激励なんだろう。本当に面倒見のいい人だ。また、人をしっかりと見てる。僕もジョセフさんに見限られない様に頑張らなくちゃなあ。

1年が経った。僕も漸く兄さんの半分ぐらいはメニューをこなせるようになった。ジョセフさんも褒めてくれた。少しは認めてくれたかな。だとしたら嬉しいなあ。

兄さんからいよいよ『念』について学ぶ。まずは念の体験だそう。では、と前置きした兄さんから凄まじいプレッシャーが放たれた。い、息が出来ない……。直ぐに解除してくれたが、呼吸が荒い。凄まじい力だ。これなら有象無象だと何も出来ずに終わるだろう。

兄さんは僕に向かって何故この力を欲するか考えるように言った。僕の答えは決まっている。その後その思いを言葉に出すように言われたので、はつきり口にした。「ファミリーを守るため」と。

兄さん曰く、念とは思いの力でもあるので、この思いを見定め、口に出すことが重要らしい。ちなみに兄さんは「死なないための力を」らしい。昔は病弱でいつも死にかけていた兄さんらしい。確かにある期間から全く病気に罹らなくなった。これも念か。

やっぱり兄さんの言う様に門外不出にした方がいい技術だと、この時改めて思った。悪用されたらとんでもない被害が出るからね。

15、マイケルの成長

《念》を習得するために、まずはその力を知覚する必要があるらしい。よって瞑想をしながら身体に流れるエネルギーを探るのだ。なるほど、ここで瞑想が出てくるのか。

最初は瞑想のやり方から入る。コツを聞いたが、本当に難しい。どうしても雑念が湧いてくるし、訓練の疲れから寝てしまう事もあった。

兄さんはその都度矯正してくれたが、サポート無しで出来るようになりたい。目標を見据えながら取り組む。

1ヶ月して、大分形になってきた。ここでようやく念の知覚に入る。兄さんからはコツを聞いたが、サツパリ分らない。本当にあるのだろうか。あるから兄さんの能力なわけだが。兄さんは「気長にやれ。私は1年かかった」と言ってたけど、あるかないか分からないものに1年も費やすなんて狂気の沙汰だと思う。兄さんの場合はずっと寝込んでたらしいからしようがないけど、それでも異常な精神性だと思う。

ちなみに、兄さんは自分の事を「私」と言う。前は「にいちゃん」だった。理由を聞いてみると、弟子である以上、甘やかさない様に一人の人間として扱う為だそう。なんか認めて貰えた様で嬉しい。家族以外は「私」で通しているようだ。父さんもそうだ。僕も将来的には「私」呼びが似合う様になりたい。

半年が経ち、身体を巡る力の流れが把握出来るようになった。それに伴って、その力の元になる場所が各所にあるのが分かり、その時点で身体からオーラが立ち登るのが視覚的に見えた。オーラは体全体から発せられ、宙に消えてゆく。すぐに兄さんに報告したところ、立ち上るオーラを留める様に指示される。出来るのかと思ったけど、やってみたら簡単に出来た。兄さん曰く、知覚さえ出来れば後は簡単との事だった。

これが《念》の基礎中の基礎、《纏》らしい。なるほど、確かに身体全体が強化される気がする。テンションが上がって兄さんの方を見たら、凄まじい密度の《纏》をしてるのを見て一気に冷静になった。何だコイツ（呆れ）自分のがシヨボ過ぎて話にならない。

その後、実は強制的に目覚めさせる事も可能だと聞いて流石にキレそうになった。この半年は何だったんだよ！しかし、じっくり目覚めた方が制御もしやすくなるし、精神の安定から《念》がより強くなると聞いて納得してしまい、それから何も言えなくなっ

た。

それから念能力の基礎訓練も加わった。四大行というらしい。身体の精孔を一気に開く《練》と、逆に閉じる《絶》だそうだ。《纏》も含めて3つしかないけどって聞いたから、最後の一つはまだ早いそうだ。《練》はさらに力強いオーラが出て、万能感に浸りそうになるが、例によって兄さんの《練》を見て冷静になる。何というか……すごい威力の爆弾の目の前にいる感じ。語彙力が足りなくてうまく表現できないが、遠くから見ても逃げ出したくなるほどの凄まじい威圧感だ。

《絶》なんかはやってみるとかなり気配が薄くなって、完全に習得すると文字通り気配が消えるらしい。兄さんが僕から逃げ回ってるときに使ってたのはこれか……。道理で捕まらないわけだ。この訓練は基本中の基本にしてそのまま奥義につながるそうで、今後毎日やれと言われた。少なくとも1年はこれだけやると宣言された。理想は寝てるときでも出来るようにとのことだ。《絶》には回復力増強の効果があるらしい。

3ヶ月たつてから、兄さんに、お前の系統を調べるといって、なみなみの水が入ったコップに葉っぱを乗せた物を手渡された。これに《練》をするらしい。実際にやってみたら水が溢れた。強化系らしい。兄さんはしきりに納得していた。なんだそりや。ど

うも系統は全部で6つに分類されるらしい。強化系、放出系、変化系、具現化系、操作系、特質系の6つだ。水や葉っぱの様子で変わるらしい。ちなみに兄さんは操作系か特質系の間らしい。どういふことか分からなかつたので実際に見せてもらったら、葉っぱがすごい勢いで回転しながら溶けて消えていった。なるほど。わからん。

系統は6角形の関係で成り立ち、隣り合う系統とは相性が良いらしく、習得率も近い程によくなくなるらしい。逆に遠い系統はほとんど習得できないと言ふことだ。僕は強化系だから変化系と放出系も強いらしい。なるほど。全くわからん。ちなみになんとなく性格で判断できるらしく、兄さんは僕が強化系だということを用意していたらしい。単純一途だとか。腹が立ったがぐうの音も出ない。ちなみに兄さんは理屈屋のマイペースで個人主義者らしい。なるほど。わかる。ただ、付け加えていうとカリスマ性とかあるんじゃないかな？理屈屋で、マイペースで、個人主義者の癖に妙に好かれるのはそのせいでは？

しかし、兄さんはどこでこんな知識を知ったんだろう。周りに出来る人なんて知らないのに。気になって聞いてみたら、笑いながら内緒だぞ、と言われて「自分は前世の記憶持ちで、その時の知識にあった」と言った。そんな馬鹿なと思つたが、兄さんだからなあ。まあ、血の掟もあるし誰にも言うつもりはないが。

さて、1年基本修行を続け、そろそろ系統別修行に入ろうと兄さんが言ってきた。場所を変えると行って、我が家の所有するボタ山まで来た。兄さんがここでバイトしてるのは知ってたけど、ここ、カタにはめられた人が来るとこだよ？よく無事だったね…。まあ兄さんだからか。

とりあえずここで、念修行を行うらしい。修行も出来て金も稼げる、一石二鳥だなとか言ってたけど頭おかしい。しかし、スコップを渡され、兄さんと穴掘りを開始する。筋トレにもなるらしい。掘り始めて思ったけど兄さんの掘り進め方が異常だ。なんでも思つて《凝》で見たら（これも習つた）、スコップに念を纏つてた。ズルい、と思つて真似してみたら、思つた以上にキツかった。オーラもすぐなくなる。限界までやってへばつたが、兄さんはそれからもずっと掘り続け、1人で50人分ぐらい掘つてた。やつぱりおかしいよ…。親方は慣れてるのか普通に兄さんにバイト代を渡してた。僕にも渡してくれたが、兄さんの額の半分以下だ。まあしょうがない。兄さんはあれから、《硬》で岩盤をぶち壊し、《周》で出てきた大きい岩ガラを砕きまくつてたからね。でも、親方は僕が加わつてまだまだ稼げるなど笑つていた。

それから1年と4ヶ月間、系統別も取り入れた修行をした。系統別は理になつてるのもあれば、変なものもあつた。ところどころ兄さんの考えたオリジナラらしい。

強化系のLevel5なんて意味わかんないよ。と言ったら実際見せてくれたが、オーラを削岩機の形にしてガシガシ岩を掘ってた。頭おかしい。

でも、兄さんの得意の操作系と放出系の修行は楽しかった。オーラをぶっつけ合ったり、水や砂の形を変えてぶっつけ合って遊んだ。僕は変化系も得意らしく、しゃべらなくてもオーラで文字を書いて兄さんと意思疎通が出来た。ちなみにこれは僕の方が最終的に早くなり、初めて兄さんに勝てた。

基礎修行自体も幅が広がり、オーラ移動の《流》でパンチ、キックを攻撃、防衛し合う訓練はなかなか難しかった。兄さんは今まで相手がいなかったから出来なかったといって喜んでた。

こんなことやっていると少なからず怪我をするが、僕は強化系で《絶》で治るのが早くなった。しかしオーラをおさえて修行してる兄さんもたまに怪我をするが、治り方が文字通り桁が違う。瞬時に治っていた。聞いてみるとこれが《発》、固有能力らしい。

はつきり言って基礎修行を極めるだけでも超人的なのに、まだ先があるかと愕然となった。兄さんの場合は、「パワーストック・コンバート完全適合」と「ヘルシーマン日々是健康」というらしい。怪我が瞬時に治ると、病気や毒などの状態異常を取り込む能力らしい。なんだそれ！そんなのこの世に勝てる奴いなくなるじゃん、と言ったら、兄さんはそれは違う、と言ってきた。

「《発》の能力は相性もあるが、絶対に甘く見てはいけない。私をはじめから戦うのではなく、逃げ延びるために能力を作った。どんな能力でも使い手次第で大きく化ける。だから最強の能力なんてないんだ」

といつて、知ってる能力の一部を教えてくれた。曰く、巨大な人型が具現化され、不可避の速度で巨大な手が百以上飛んでくる能力。相手の能力を盗む能力。オーラを煙に変えて、様々な攻撃方法に変える能力。オーラを電気に変えて攻撃する能力…などなど。どう戦えっていうんだそんなの！

と言ったら、オーラをくつつけたり伸ばしたりする能力というのも紹介してくれた。その人弱かったでしょって聞いたなら最強クラスの能力者らしい。兄さんの言うとおり、念の固有能力は使い手次第と言うことだ。でも、この話を聞いて僕は自分の《発》に一定の目処が立った。

僕の能力は、家族・ファミリーを守る能力を作る。それで十分だ。

兄さんは、強化系能力者は一つ一つの念操作が必殺の威力に変わるし、ぶっちゃけいらないから、基礎修行を極めていけ、と言ったが、僕は考えてることを伝えた。能力名

は【祝福をあなたに】だ。

【祝福をあなたに】

・強化系能力

指定した人物に対して、オーラを分け与え、強化する能力。簡単に言えばバフをかけるようなもので、肉体的に頑丈になり、多少の怪我や病気なども回復しやすい。

〈制約〉

・親愛の情によつて威力や持続時間が変わる。
・一度かけてしまえば剥がすことはできない。
・オーラ量によつてかけられる時間が変化する。また、かけられる人数も変わる。
詳細を伝えたら、兄さんは「お前らしいな」と、苦笑し、この能力の発現をもつて卒業とする、と伝えてきた。

わかったよ。いよいよだね。

16、マイケルの別れ

いよいよ兄さんとも別れの時が来た。あれから無事に能力は発現した。ちよつと見た目にこだわり過ぎて思った以上に時間がかかって焦ったけど、間に合つて良かった。

僕の【祝福をあなたに】アンダーソン・ファミリアはかける相手に天使を模したオーラが被さり、潜り込む。それから微弱に強化をするが、持ち主が真に命の危機に迫った時、真価を発揮する。自動で天使が顕現し残りオーラの限りで守護するのだ。強化系なので強化又は回復だが、相手が念能力者なら、その相手がオーラを自由に使う事も出来る。これは兄さんのためにも追加した能力だ。今は4、5人程度で半年しか持たないが、これ以上の人数に付与する気はない。せいぜい多くて10人程度で十分だ。家族にしか使わないしね。ただ、持続時間に難ありなので、基礎能力を高めて伸ばしていきたい。

最終的にこうなった。

【祝福をあなたに】
アンダーソン・ファミリー

・強化系能力

指定した人物に対して、天使を模したオーラを分け与え、強化する能力。普段は微弱に強化、回復を行うが、被対象者が真の命の危機を感じた時に天使が顕現し、残りのオーラ量全てを使って守護する。一般人なら強化、回復だが、被対象者が、念能力者の場合、そのオーラと混ざり合い自由に使う事が出来る↑NEW！

〈制約〉

- ・親愛の情によって威力や持続時間が変わる。
- ・一度かけてしまえば剥がすことはできない。
- ・オーラ量によってかけられる時間が変化する。また、かけられる人数も変わる。

僕ももう12歳になり、エレメンタリーを卒業する。こんな僕にもついてきてくれる人はいっぱいいて、ありがたい限りだ。兄さんも最近ハンター試験を受けることを公表し始めたため、僕が次期ドンになると言うことを受け入れてくれつつある。兄さんの舎弟である先輩方も優しい。

ジョセフさんも相変わらず僕に世話を焼いてくれる。今はうちの従業員（穏当な表現）をしながら、下積みをして、司法試験の勉強をしているところだ。あの人ならすぐ

受かるだろう。成績も他の追隨を許さなかったし。

さて、兄さんだ。別れが近くなってからボタ山に呼び出された。

「マイケル、良く頑張った。私からは免許皆伝だ。もう既に至近距離から銃撃を喰らっても軽症で済むだろう。」

ただ、最後に守って欲しい事がある。

まず、念で一般人を攻撃するな。同じ念能力者だけにしておけ。前から禁じてたが、もし相手が生き残った場合、念能力に目覚める可能性がある。万が一やむを得ない場合には相手は必ず始末しろ。

次に、極力この力を広めるな。知ってるのと知らないのは大きなアドバンテージだし、もしバレたら色々狙われる可能性があるからだ。

最後に、念能力で無辜の人々を虐げた場合、教えた私が責任を持ってお前を殺しに行く。

まあ、お前なら大丈夫だろう。お前には苦勞をかけるが、父さん、母さん、そして家の事をよろしく頼む」

免許皆伝か…ほんとはもつといたかったなあ。だいたい今でも全く勝てる気がしない。僕が伸びても兄さんはそれ以上に伸びていくからだ。まだまだ教わりたいことは

沢山あるけど、これから自分の力で切り開いていかないかね。もう甘えられる時間も終わり。それに、この人は僕が道を外れたら殺しに来るらしい。はつきり言っただけなら僕は確実に死ぬ。まあそれだけ心配してると思っておこう。心配しなくても約束も家族も守るさ。

「…全く。目の前にいるバケモノから免許皆伝って言われても全く実感ないよ、兄さん。でも、言いたいことは分かった。必ず守るよ。僕はこの力をもっと高めて、家族とファミリーを護ってみせる。」

「家の事は心配しないで。僕が、頑張るから。何も気にせず兄さんの夢を追ってね」

そう言ったら、兄さんはおもむろに手を出してこういった。

「じゃあアレ、やるか？」

アレというのはアレだろう。最初に行った「血の掟」だ。6年ぶりになるか。あのときは針で刺しておけばよかったと後悔したけど、今回も持つてない。まあ、昔の再現としては有りか。

「やろう」

お互いの指を噛みちぎり、合わせる。やっぱり痛い。だけど感慨深い。

「私も生きてる限りは、1年に一度は家に帰ってくる。約束だ」

「僕も、ファミリーのドンに相応しい男になるよ。約束だ」

お互いに約束を交わし、笑い合う。やっぱりいいな。こういうの。僕も誓いは守ろう。

しかし、兄さんの手が直後にもものすごい勢いで復元して行って、完治した。最後まで締まらない。

頭にきて、

「やっぱりズルい！僕はこんな痛かったのに！」

とか言いながら殴りかかっていった。

最後にじやれさせて欲しい。僕なりに結構本気で殴りにいったが、あえなく返り討ちとなった。兄さんは笑いながら10年早いと言ってた。やっぱりレベルが違いすぎる。慢心せずに修行しないと。でも、本当に理不尽だ。絶対に10年たつても追いつかないと思う。納得いかない…。ノックアウトした僕はその後兄さんに担がれてそんなことを考えながらも帰路についた。

最後の日、兄さんが出て行くときに、見送りをどうしても出来なかった。たぶん泣いてしまうからだ。姿を見たら絶対に泣いてしまう。よって玄関先には出ず、2階から見送った。

兄さんは今、父さん、母さんと話している。∴話し終わったか。兄さんはこちらを見た。

「マイケル！家の事は頼んだぞ！」

兄さんは僕に向かってそう言った。僕はとつさに返すことが出来ず、親指を立てて返事した。

兄さんが向こうを向いた。

もう行ってしまふ…。

何も別れの言葉を言えなかった…。

気付いたら僕は走り出し、道を歩き出した兄さんに突撃した。

「ブフオ!？」

なぜか振り返った兄さんの腹にちょうど体当たりをし、結果的に不意打ちとなった兄さんが少ししたたらをふんだ。僕は顔を上げられずに、そのままの状態で伝えた。泣き顔を見せたくない。

「兄さん、必ず帰ってきてね」

「約束しただろう。必ず帰ってくる」

「絶対だよ!」

「絶対だ」

そこまで言った後、漸く顔を上げることが出来た。

お互い離れ、兄さんが拳を突き出す。僕も合わせる。兄さんは笑っていた。最後に別れが言えてよかった。

「じゃあ兄さん、さよなら」

そう告げると、兄さんは指を振りながらこう言った。

「マイケル、別れの時はさよならとは言わない。また会える様にこう言うんだ。」

「ま・た・な」

確かにそうだ。僕もそうしよう。

「わかつたよ。兄さん」

「ま・た・ね」

そう告げた後、兄さんはにやりと笑って振り返り、今度こそ自分の道を歩き出した。最後に、こっそり兄さんの旅路を祈って、祝福を捧げる。【祝福をあなたに】だ。アンダーソンの加護がありますように。

兄さん、元気で頑張ってね。

僕も頑張るから。

ハンター試験編

17、ハンター試験対策

さて、家族との別れを済ませたし、私も心機一転、頑張らねば。最後にマイケルが能力をかけてくれた。あいつもだいたい見た目にこだわったよな…。餞別として有り難く受け取っておこう。

今、1760年の8月（こちらのスクールの卒業は8月。9月入学）なので、スケジュールを見ながら方針を決める。まあある程度決めているが。目指すは1761年1月のハンター試験！情報集めようと思っただら官報とかに大々的に乗ってた。日にちと時間が：1月24日ね。第一会場の場所は：今回はミンボ共和国か。例によって詳しい場所は探せてことね…。

試験まであと5ヶ月ちよい。

この期間を利用して、試験対策を行う。まずはサバイバル訓練だな。大量の餞別を銀行に預ける。

そうだ、ジャングルに行こう。

とりあえず南に向かう。ミテネ連邦の方だ。あの辺は良質なジャングルがあるらしい。3ヶ月ぐらいいは山籠りならぬ森籠りだな。残り2ヶ月は会場探しとしよう。余裕をもって動かなきゃなあ。

修行の為に、とりあえず走る。だいたい500キロで港か。一日中走れば3日でいけるな。さて、レッツランニング！

流石に200年以上前からか、街から離れると広大な荒野が広がる。故に特記事項は無い。強いて言えば、飯に困るぐらい。まあ乾パンぐらいは持って来たし、正直そのへんに生えてる草とか食べても大丈夫だ。味とかを気にしなければ、だが。そういう事で、実際何とでもなる。

なので、のんびり景色を楽しみながら走る。ここは前世でいうアメリカみたいだし、景観もそんな感じで、非常に良い。映画の『フォレスト・ガンプ』みたいな気分になれる。あのひたすら走ってるシーンね。心の余裕は大事だ。

さて、港に着いたが、はつきりいつてシヨボい。漁村に毛が生えた様なもん。一応船はあるけど……大丈夫か？

距離的にはそんなに無いからいけるのか……？とりあえず、船の持ち主っぽい船長にパスポート（ヨークシンで取った）とジエニーを渡し、乗せてもらう。

船長は無言で船の1つを指差した。……もしかしてアレ？ボロいぞ。大丈夫か？とりあえず乗り込む。私以外にも船員がレモンとか積み込んでる。壊血病対策か。そういえば、私はその辺はどうなってるんだろう？

出来ればそのあたりも解決できるようにしておきたい。オーラで必要な分を補填すればいいのかな。自分で自分の足を喰うようなものだけど、命には代えられない。早速瞑想だな。

2時間後、漸く船が出た。内海だし早く着くだろう。船長曰く、3日で着くらしい。やる事も無いので揺れる船の中で瞑想する。確か『トリコ』に似たようなのがあったな。オートファジーだっけ？あれをオーラで再現出来るかな？細胞を還元も吸収も出来るなら行けるだろう。

よし、イメージは固まった。後は実現出来る様にイメージを深めよう。自分自身の

オーラで足りない細胞の栄養素を分け与えるイメージ…。そして細胞を還元していくイメージ……。

多分出来た。これって【日々是健康】^{ヘルシーマン}の方が。でも状態異常だから【完全適合】^{パーフェクト・コンバート}も関与してるな。まあ同時発動の訓練にもなるし、いつか絶食チャレンジとかやってみよう。名前はそのまま【自己貪食】^{オートファジー}でいいか。派生技だね。

【自己貪食】^{オートファジー}

・【日々是健康】^{ヘルシーマン}、【完全適合】^{パーフェクト・コンバート}の派生技。【完全適合】^{パーフェクト・コンバート}が発動した時に、栄養不足由来のものであれば、【日々是健康】^{ヘルシーマン}に切り替わる。具体的には不足した栄養素をオーラで代用し、損傷した細胞を還元する。

〈制約〉

・オーラが枯渇した場合発動しない。

こんな感じ。まああまり使う機会がないと思うし、無い方がいい。至って普通の生活をしてれば全くないはず。しかし、万が一に備える事は悪い事じゃない。でも、もうこれ、私のオーラ量考えると絶食してもかなりの日数生きられるよ？多分概算で1か月以

上は保ちそう。

ますます死なない男に近づいてきた。やったね。

そうこうしてるうちに目的地に着いたらしい。これまた鄙びた南国の寂しい漁村である。とりあえず入国手続きか。ここ、大使館……あるの？

あつた（驚愕）。正確には入国審査場だが。目的は観光、期間は3ヶ月つと……。なになに、病歴？むしろかかってこい。もし正直に書くなら狂犬病や破傷風とかのヤバい病オンパレードになって入国拒否されるので、無しと書かざるを得ない。もう今は完治したから……（震え声）。病気にはむしろこちらから罹りに来たとも言える。

そして犯罪歴……私は無いよ。私は。

無事全て記入して、宿へ案内される。現地のガイドをつけると言われたが、断った。多分監視だろうし。食い下がる職員に割と多めのチップを弾むと、笑顔で「ごゆっくりお楽しみください」と言つて引き下がった。

今も昔もこういうのは変わらないらしい。地獄の沙汰も金次第。カーム覚えた。

さて、早速ジャングルに突入する前に、マジで1日は観光する。1日ぐらいいは良いだ

ろう。ここは昔のベトナムみたいな雰囲気だ。行った事無いけど。屋台があったから串焼きを食べる。…美味かったけど、普通の人は腹壊すね。〔パルフェクト・コンバート完全適合〕発動したし。今回は寄生虫か。共生なんてしてやらない。寧ろお前が私になるんだよ！念入りに分解して取り込む。

3食ともにそんな感じだった。おかげで消化器官がやたらと強くなった。来て良かった。でも、現地の人、どうやって生活してるんだろう。文字通り、自然と共生するために適応してるようにしか思えない。凄いね、人体。

ちなみにスリに3回ぐらい出くわしたが、私の《円》の知覚によつて動きが丸見え。行動に移った瞬間捕まえてからのオーラ威圧のコンボで、哀れなスリは全員失禁して気絶した。安心しろ。峰打ちじや。

夜は宿で出された物を食べたが、矢鱈と眠くなつた。その瞬間〔パルフェクト・コンバート完全適合〕が発動し、盛られた事に気付く。頭が物理的にクリアになつた。ホントここは経験値稼ぎに事欠かない。

どんな歓迎会が開かれるかと、ワクワクしながら寝たフリをする。その夜、10人ぐらい集まつてる気配がした。宿を壊したくないし、こちらから出て行く。まさかの完全武装。昼のスリの件が伝わった？しかし、案内された宿でこれなら、あの職員も怪しいな…。

あちらはコツチから来た事にビックリしてたが、人数差を見て安心して何か言つて刃物を向けてきた。

「ノコノコきやがつて！かねをだせ！」

「ころされたくないきやにもつおいてけ！」

うん。現地語分かんない。多分「金出せ」とか「荷物置いてけ」とかかな？

しかし、銃器はないね。まだこの辺には普及してないかな。まああつても効かないけど。

とか、余計な事考えてたら、1人の男が前に出てきた。

お、念能力者だ。

マイケル以外で初めて見た。これは気を付けてやらなきや。とりあえず《凝》！うん、設置型の罠とか《隠》とかの仕込みは無いな。

さて、初めての全力戦闘だ。見た限り、全然たいした事無いけど、能力次第でひっくり返される事もあるかも知れない。

しかし、雰囲気的にもう臨戦態勢なのに、《堅》もしてないってどういう事かな？最初は準備運動か？まあいいか。合わせてやる必要もない。

《堅》
!!!

オーラを一気に身に纏う。修行の成果で顕在量が更に増えたから、中々の《堅》だと思うぞ。ふふ、怖いかな？

さあ、さつさと《堅》しろ。その量で遅滞戦闘で逃げるか、闘うかどうか決める！
「な、なんだよこれは！バケモノじゃないか!!!」

なんか焦ってる。いいから《堅》やれよ。もうこつちから仕掛けるぞ。

お、なんかオーラで刃物作って飛ばしてきた。1、2、3：6本。中々器用だな。いい感じで変化系と放出系修行してる。じゃあこつちも合わせてみるか。

えいつ。

カカカカカッ!!

爪を刃物にして手裏剣的に6本飛ばす。そういえばなんかジヨジヨでこんな技あったような…タスク、だっけ？

とりあえず全部撃ち落とす。まだ固有能力出さんのかな？系統だけで勝負すんの？何か言ってるけど言葉分からん。んじゃ次はこっちからね。こっちは放出系だ。アレやるか。

腰を落とし、両手を合わせて引っ込め、DBのあのポーズを取る。大体5000ぐらい使う。大盤振る舞いだ!!

「カ〜〜ム〜〜波〜〜!!!」

オーラの奔流を相手に発射する。やっぱり語呂悪い。もつとかつこいい呼び方無いか。考えとこう。

放出系だが、オーラ量で威力を無理矢理上げる。ゴリ押しとも言おう。さあどうする!?! そのままだと直撃だぞ!

あ、なんかそのまま飲まれた。そのまま吹っ飛んでいった。これは死んだか？

そいつがやられた直後、

「アニキがやられた!!」

「ばかな！アイツはバケモノか!？」

なんて言ってるか分かんないけど、ザワザワした後慌てて逃げていった。なんか消化不良な気がするが、死ななかつたしOKだね！

その後、宿に戻った。宿のオツサン、心配せんでも何もせんよ。用心のため、しばらく《円》をしていたが、そこから特に何も無さそうなので、2時間ほど寝た。

しかし、あいつの能力何だったんだろう。気になるなあ。

18、サバイバル訓練

さて、快眠快眠！気持ちの良い朝（夜）だ！

まだ暗いから朝まで瞑想&念の基礎修行しよう。出来る限り修行は欠かさないようになっている。

朝日が出て、パンツ一枚から着替える。半袖シャツに半ズボンだ。ジャングル舐めてんのかって言われそう。でも、私は逆にこれがいいんだよ。リュックを背負ったら準備完了。宿の親父に挨拶し、朝飯を出させる。ビクビクしながら出てきたが、今度はクスリは入ってなかった。残念。OHANASHIできると思ったのに。

朝食を摂り、朝食代を出そうとしたら遠慮された。サービスだそうだ。ラッキー（笑）まあ宿代はキチンと払ったから。

とりあえず目指すはジャングル！街から大体150キロほど南下したら森林地帯に

着くらしい。1日でギリ行けるか。再びランニングしよう。訓練も兼ねて、念解除で走る。

昼過ぎに着いた。6時間でいけるもんなんだなあ。未来のハンター試験でも走つてたから、持久力は実際大事だね。

さて、ここからは未踏地帯らしい。まあ200年前にジャングル開拓とかやんないよね。多分。たまにハンターが来て、未踏地帯を調査してるみたい。まああんまり発見も無いし、そこまで重要視されてないみたい。そんなわけで、国指定の管理区域扱いみたいだけど、入るもの拒まずで割とガバガバ。

だからこそ観光ビザでもここに入れるし、見逃される。入り口の係員にチップを払い、いざ、レッツゴー！

さて、来たはいいものの何しよう。とりあえず生き延びればいいのか。奥地に踏み込んで、2ヶ月半したら戻ってくる。これでいいか。今日はいい感じの洞穴見つけて野営だな。

1ヶ月たった。これまでの事を振り返ってみる。まず、病気だが、やっぱりジヤングルは怖い。致死性の奴に5、6個ぶつかった。マラリアとか黄熱病、コレラなどのメジャーどころから、正体不明のやつまでバリエーションは様々だ。ジワジワと内臓の細胞を溶かしてくる奴とか、免疫力をぶち壊しにかかる奴もいた。やっぱり人類は自然を舐めちやいかんよ。一個でも出ればかなりのパンデミックになるよ。これ。

おかげ様で、経験値と肉体能力が上がる上がる。前世での致死レベルの奴も1時間であけるようになった。病気はもう、何も怖くない。

いや、嘘。怖い。でも、今の私はラクーンシテイに放り込まれても余裕で生き残れそう。そう言えば黴もあつたよ。もう効かないけど。

次に虫。あと寄生虫。まず虫は結構毒持つてる奴いるね。知らない内に噛まれて、それが結構ヤバイ毒だったりする。普通の人間をぶち殺せる毒をそんな小さい体で何に使うんだよ。おかげで毒コレクター（虫）は埋まりそう。

寄生虫は至る所にいる。で、隙あらば潜り込んでくる。水を飲む。動物を食べる。植物を食べる。虫に刺される、ヒルに吸われる……。至る行動に罠を張ってくる。こちらとしてはエサでしか無いが、キモいのだ。根本的に受け付けないが、経験値の為に仕方なく受け入れる。2回目は無い（怒）。入ってきた瞬間細胞同士でボロ雑巾の様にボコつた上で、来た所からお帰り頂く。

毒と言えば蛇を始めとした小動物ども。蛇だけでも出血、壊死、浮腫を生じる局所性毒素や血液障害作用物質とかよりどりみどり。詳しく言うと、毛細血管、小静脈の血管壁に作用して出血させ、出血性腫脹となる出血毒。赤血球を破壊する溶血毒、血液凝固毒と抗凝固毒、心臓障害、肺循環の閉塞や肝血管の収縮を起す毒など、本当にバリエーション豊か。全て美味しく頂いた。

ちなみに、バイエクトコンバート「完全適合」で適合した物を一部再現する能力だが、今のところあんまり使えない。いや、再現は出来るんだ。病気なら細胞を操作して菌やウイルスを真似できるし、毒ならオーラで細胞を作り替えて再現できる。

でもこれ、どうやって相手にぶつけるんだって話ですよ。特に病気は潜伏期間あるから、即効性はないし。暗殺とかには向くだろうけど、その後の被害が半端ないんじゃないかなあ。よって病気はボツ。毒ならかろうじて使えそうだけど。爪に集めて刺すとか？手に集めると柳龍光ごっこが出来るけどなあ。まあ保留で。手段の一つとして取っておくか。

しかし、このジャングルの病気や毒はあらかた吸収した気がする。おかげで私、ジャングルにいるにもかかわらず艶々ですよ。皮膚にもかぶれる奴とかいっぱいあったし。髪とかキューティクルかかっている。まだ十代だからだろうけど、恐らく年齢上がってもこれはこのまま保てるかもしれないね。

肉体的にも内臓も含め、全身余すところなくレベルアップした。体感で言うところから全体で5割増しぐらい。修行涙目。おかげでオーラも爆発的に増える。もう実際300000超えたかもしれない。多すぎて計れなくなってきた。いつからドラゴンボールの世界になったんだ？？少なくともギニュー隊長よりは上だ。スカウターが欲しい。

そうなるもまた制御の問題が出てくる。瞑想のやり直しですよ。いたちごっこだな。

ここは、病気や毒、寄生虫とかの脅威がなくなると、食料や水も非常に豊富だしある意味パラダイスだ。周りに誰もいないし、好き勝手に念の修行も出来る。最近木をスパパ切って、ログハウスを建ててみた。ずっと野宿はちよつといやだったし。作るの好きだから案外楽しかった。念修行にもなった。で、そのログハウスにこもって瞑想&念修行を行う。しばらく頑張ったら漸く制御できるようになって、たとえば《円》が1キ口近くまで伸びた。

瞑想ではまじめに細胞操作とかやるけど、ついでに技名を真剣に考え始める。さすがに「カーム波」はない。かといって「カムカム波」もない。どうしたものか…。技名のセンスはからつきしだ。原作は偉大だ。それに、それを考え始めると私はかなりいろんなことができるので、技名も膨大な数になる。

しょうがない。とりあえず原作の技名（仮）でいいか。良いの思いついたら付け換えていく感じで。

1ヶ月半がたち、予定より早いけどもう何もすることがないなあと思っていたので、帰る準備をし始めたところで、私の《円》に人の反応があった。

どうやら複数いる。現地の人よりはワイルドな格好をしている。たぶん未開部族の方々だな。なんかまつすぐこつちに来てるぞ。いやだなあ。《絶》で逃げようかな。何だろう、すごく怯えてるように見える。怯えるぐらいなら来なきや良いのに……。とりあえず会ってみて、敵対的だったら逃げるか、戦うかの方向で行こう。まだ準備終わってないし。

しばらくして漸く100メートル手前まで来たので、こちらからお出迎えする。お、近づいてきた。10メートル手前まで来たなら、後ろから来てた酋長っぽい人が震えながら前に出てきた。小さな子供を連れて。で、周りになんか言ってる命じたら、周りは土下座した。：土下座した。いや、びつくりして2回言ったけど、何これ？内心パニックってたら、その酋長（仮）が子供を連れて目の前まで来た。そして子供を前に寝かせ、私に向かつて何か言った後、寝てる子供に刃物で心臓を刺そうとした！

慌てて手を出して刃物を止めたが、その刃物が手を貫通した。私は戦闘じゃないと

き、念ガードが間に合わない時がある。反省しなきや。びつくりしてる酋長（仮）から、優しく刃物を受け取り、引っこ抜いた。多少血が出たが、即座に「日々は健康」で復元した。それを見た酋長（仮）は驚愕の表情をし、震えながらその場に土下座した。

いやいや、この状況何なの？

とりあえずそれじゃ話にならないので、酋長（仮）を起こし、話を聞こうとしたが、お互い何言ってるかさっぱり分からない。分からないなりに私も酋長（仮）も、ジェスチャーとか絵でなんとか意思疎通を試みた。

異文化コミュニケーションを続けること2時間（！）。ようやく酋長（仮）の言ってることが分かった。どうやら私はシャーマン（仮）の予言にあった神らしい。私は違うと言ったが、さっきの手を指差して頑として聞き入れない。それに私の容姿がそのものだったそうなので、今この部族は危機に瀕しており、神（私）に助けて欲しいとのことだった。聞き入れられるように、生け贄を用意したらしい。いや、いらんから。そこは納得してもらった。

で、危機というのは、どうやら怪物に襲われるらしく、もう何人も犠牲になったらしい。勇敢な戦士がほとんど死んだそうなので、姿形を絵で描いてもらっても要領を得ない。

なんか動物が色々くつついてる変な奴。魔獣かな？まあ、別に何もなかったから帰るとこだったし、多少なら手助けしても良いかな。とジエスチャーで伝えたら、酋長(仮)も、周りで土下座しながら見てた奴らも大喜びしてた。君たち足痛くない？

歩いて部族のところまで案内される。5キロぐらい歩いたか。部族の集落に着いた。意外と近いところにあつたね。しかし、君たち、このジャングルで無防備すぎない？ だいたい半裸だし、何なら下も裸だよ？ 女性とか目のやり場に困るよ？ だいたい病気とか毒とかどうしてんのさ？

私が着いたら、部族総出でおもてなしが始まり、なんか偉そうなところに座らされた。んで、ごちそう責め。すごい量。断ろうとしたら悲しそうにするので、まあありがたくいただいた。希少な果物とかもあった。おいしかった。

おなかいっぱいになって世話になったので、酋長(仮)に、早速その怪物を始末しに行くと言えたら、もう少しゆっくりしてはと言われた。しかし、犠牲が増えるだけだ。すぐに取りかかった方が良いだろう。一宿一飯の借りという奴だ。一宿はしてないけど借りは返さないとな。

で、奴の出没する居場所を聞いて、私はそこへ赴いた。

19、マンティコアとの闘い

さて、その化け物をまず探そう。どうも昔の遺跡(?)っぽいところを根城にしてるらしい。頭が良いそうなので、《円》してたらバレルな。《絶》の方で気配消しながら進んで、現地に着いたら《円》しよう。

しばらく歩き、道なき道をかき分けていきながら情報を整理する。

曰く、沢山の動物がくつついた奴。しゃべる。頭がよく、人間を罠にかける。強烈な毒を持つ。そして人を喰う…。

奴はその気になれば一息で集落を壊滅させることが出来るらしい。出来るらしいがやらないのは食料の安定確保のためだそう。現に女性や子供はあまり襲われない。でもたまたまに襲われる…。

うーん想像できないなあ。頭の良いキメラみたいなもんか？

3キロぐらい進んだ先に、目印の滝を見付けた。そこから更に4キロ川下に進むと、

そこには岩で出来た遺跡があった。マヤ文明みたいな遺跡だなあ。さて、この辺を根城にしてるらしいが……。早速《円》をしようかと思つたところで、人の声が出た。

「おーい、たすけてくれえ」

ん？なんでその言葉が？不用意にも返事してしまう。

「どうした!？」

しまった！こんなところでそんな言葉が出てくるはずがない。

《円》！ おっと、前方50メートル先の遺跡の陰！ ライオンみたいな奴を発見。こいつだ！

奴も私が気付いたことに気付いたらしい。おとなしく出てきた。キモい。基本はライオンみたいな感じだが、足がカモシカっぽいし、更に言うとしつぽがサソリだ。しかし最大にキモいのは人面だということ。なんか昔小説で読んだことある。マンティコアっていうんだっけ。別名マンイーター。

ん？待てよ、こいつ念能力使ってない？オーラ纏ってる！そして：何だろう、視線に不快感がある。しばらく見つめられると、これは念攻撃ということに気付いた。コイツ、たぶん私の意識読んでるな。

おそらく相手の考えを読み、更に相手の意識を意のままに操る奴だ。意識にしきりに訴えかけてた様な感覚がある。残念だったな。私も操作系だ。私は私自身を操作してるから効かない。「完全適合」^{ハイフェクト・コンバート}が作動しなかったのは、効果がないからだ。空振りだったな。しかし、こちらの意識は多少読まれたようだ。そして彼我的戦力差の分析が終了し、顔をゆがめて逃げることにしたらしい。

良い判断だ。しかし遅かったな。

私は足に力と念を込め、更にオーラを放出して全力で追いつがる。私が本気でやれば500メートルは一瞬で詰められる。前方に回り込み、苦い顔をしたマンティコアの逃げ道をふさぐ。いよいよ逃げられないと思つたらしいマンティコアは、オーラを増大させた。

……こいつ、割とオーラあるな。現地部族が嬲られる訳だ。でも私ほどじゃあない。

《堅》!!

一瞬絶望的な顔をしたマンティコアだが、覚悟を決めたように向かってきた。コイツ表情分かりやすいな。オーラを込めた手足や噛みつきなど、ライオンに近い攻撃方法を素早く行ってくる。かなりのスピードだ。しかし、私の反射神経も動体視力も並じやない。全て躲していく。時折明らかに毒を持つてくるくさいサソリのしつぽもフェイントで入れてくる。

躲しながら思ったが、コイツは攻防力移動もかなりのもんだ。野生のカンという奴か？まあだいたいコイツの攻撃は見切った。喰らってもダメージはほぼないだろう。というところで……あの明らかに毒持ちですアピールしてる尻尾を

わざと喰らってみることにした。

攻防中、フェイントを混ぜ、オーラを隠しながら尻尾を背後から回して刺してきたところを、《堅》で防御せず、わざと薄くした。そのため見事尻尾が刺さる。一瞬で10メートルぐらい離れたが、奴がニヤツと笑ったのが見えた。……まだだ、まだ笑うな。

【パラフェクトコンバット完全適合】発動！お、結構強い神経毒だ。しかもこれ、念で強化されてる。ちよっ

と時間かかるな。オートで1分ぐらいかな？

毒の尻尾を受けて、安心したのか、マンティコアは余裕を取り戻し、ニヤニヤしながら近づいてきた。キモい。

「つよかつたなあ」

「つよいやつはうまい」

「うまいからじっくりたべよう」

「まずはうでから」

「そのつぎあしだ」

「かわをはごう」

「めをくりぬごう」

「ああ たのしみ」

キモい（確信）。

恐怖を煽ってるのか。良い趣味してる。しかし、コイツに煽られるのは癪に障るな。とりあえずマニュアルで早めよう。めつちやオーラつぎ込んで……よし、完了。覚悟しろよ。そのニヤケづらを吹っ飛ばしてやる！

動けないふりをしてるが、全然気付いてないな。よほどこの毒に自信があるんだろ
う。

5メートル、4メートル、3メートル…まだ煽ってる。不愉快な奴だ。しかし、その顔が絶望に変わるのがこちらにも楽しみだよ…。

2メートル、1メートル…。

「では いただきまーす」

そう言つて口を開いて右腕に噛みついてきた所を、前髪？をつかみ、押し留める。ついでに全力オーラで威圧する。マンティコアは驚愕の表情の後、何度も尻尾で刺してきた、もう効かないんだよなあ。そもそもオーラの差のせいで刺さんないし。絶望の表情を浮かべたマンティコアは逃げようとしたが、私もすっかりつかんで離さない。

「良い夢見れたか？じゃ、さよならだ」

決め台詞を吐いて、左手に《凝》をし、刃物状に変化させ、首を断ち切る。通称オーラブレード。かなり長く長く出来るよ。13キロは無理だけど。さすがに首と胴体が分かれて平気な生物はそういない。しばらくビクンビクン動いていたが、やがて動かなくなつた。ちなみに私の場合、そうなつても意識がなくなる前にくつつければなんとかするけど。そう言えばキメラアント共も首と胴体が分かれても生きてたな。

いやあ、しかしこれ、人間の生首みたいでキモい。キモいから念のためとどめを刺そう。つかんだままの生首を放り投げて、そのまま右手からのオーラの奔流で消滅させる。最後までキモい奴だった。

それから、気になってた遺跡を見学した。特に中には気になるような物はなかった

が、隠し部屋とかないかたと《円》をしたら、あった。

壁をぶち壊し、中を見学する。壁画だ。なになに：全部絵だな。左側に大きい土地があるが、やたら禍々しい生き物が大量に描いてある。人間が虐げられてるな。そこから船に乗って中央に向かう人間と：マンティコア!? あいつ暗黒大陸出身!? で、中央にも人間が描かれてて：マンティコアと一緒にいる…。あいつ飼いだ? だったのか(驚愕)。しかし文明は滅んで野放しになった：と。

うーん。あのマンティコアも相当レベル高かったぞ。たぶん新人ハンターは勝てないな。オーラ量と技術で圧倒されて毒針打ち込まれて終了よ。まあウチのマイケルは勝てるかな? 油断して毒喰らわなければ、だけど。原作のキルアも毒が効かないらしいし、勝てるかな。

いや、でもコイツ意識誘導とかもあったからやっぱり無理か。

つまり、暗黒大陸ってあんな奴を飼ってても逃げ出すほどの所か…。

私には向かないな! 行くこともたぶんないだろう。でも、ちよつとはのぞいてみたいけど。死にはしないだろうし。

お、なんか剣みつけ。特に念は感じないが、業物だな。錆だらけだけど。



とりあえず、例の部落に戻る。安心させるために奴の身体を担いで帰った。くさい。集落一同がワツシヨイワツシヨイのお祭り騒ぎになった。また部族総出の歓迎会、酒も出た。今度はみんなで宴会した。言葉通じなくても何となく言ってることは分かるので、一緒になって楽しんだ。

マンティコアのついでに剣を酋長（仮）に渡しといた。私は正直使わんし。武器使うと念の幅が狭まるのよ。選択肢がそれだけになっちゃうし。だからあげる。持って帰って、関税で取り上げられたくないし。

そしたら酋長（仮）、いたく感動しちゃって村の宝にしそうな勢いだった。別に良いけど錆ぐらいは落とすときなよ。宴会は夜まで続いた。

その夜、酋長（仮）の厚意で部屋を与えられ、休んでた私だったが、酋長が何人か引き連れて部屋を訪れてきた。全員女性。しかも若い。

…すぐく目のやり場に困るんだが。だいたいあんた達全裸に近い格好してるんだから勘弁してよ。そう思ってたが、酋長（仮）が、なんか土下座して頼んでた。よく分か

らんけど、この人達に何かして欲しいらしい。……ナニを？

言つとくけど、私も健全な18歳だ。当然欲はある。あるが…その…初めてだし…。しかも無理矢理はよくないからね。何言われてきたか知らんが、嫌々頼まれたんなら帰つてくれ、みたいなことをジエスチャーで表現したら察したらしいが、余計勧めてきた。後ろの女性方もなんか肉食獣みたいな目で見てくる…そのうち距離が縮まって次第に追い詰められてきた。壁際まで追い詰められて…ニコツと笑われた。私も引きつった笑みを返す。ゆっくりとその手が伸びてきて…

酋長（仮）は「ごゆっくり」みたいな顔で静かに出て行った。おのれ！助けてください!! 最初から複数プレイってハードすぎるよ!!!

あつ、お客様、そこはいけません…あーつ、お客様！おやめください！

アツーーーーー！

その後、結局開き直った私はハッスルしまくり、10人倒した。朝日が黄色いつてこ

ういうこと言うのね…。

次の朝、酋長（仮）がすごくいい顔でお礼みたいなのをたぶん言つてた。私もお礼を言つて良いのか責めた方が良いのか分からず、曖昧な雰囲気で返した。さて、それはともかく私も用事が済んだし帰らなきや。いつまでもここにいるわけにはいかんし、なんか下手したら毎晩ありそう（汗）

酋長（仮）には引き留められたが、無理矢理帰り支度をして帰路に就いた。集落全体の人が見送りに来た。おい、その10人、めつちや泣いてるけどあんた達昨日会つたばかりだからね？ 勘弁してよ。

早く出てよかつた。すたこらさつさと元来た道に戻つた。しかし、もし出来てたらどうなるんだらう。私の特性が引き継がれたらまずいよな…まずいのか？ まあ害にはならんからいいか。

後日【完全適合】^{バイオエクトコンバート}が発動し、恥ずかしい病に罹つてたことが判明した。おのれ…。

その結果、

下半身が強化された。

…そこは強化されなくても良いから！



カームは知らないことだが、後年その部族で3人の指導者が誕生する。金髪を引き継いだ子である。神の子として集落全体で大切に育てられた。彼らは病にもほとんど罹らなかつたし、毒も効きづらかつた。そして類い稀なる力を持ち、集落の指導者として活躍。例の剣を掲げ、周囲の部族を平定していった。

更に後年では、ジャングルに住まう全ての集落を平定し尽くし、一大勢力となる。管理する国から自治権を獲得し、今でもジャングルで平和に暮らしている。

20、水中戦

えらい目にあつた……。まあこちらにも色々な意味で得が有つたからいいけど。拠点（口グハウス）に戻り、準備を済ませる。さて、

……どっちだっけ？

まあ北に行けば着くだろうと思つて出発したが、散々迷つた。周りがほぼ同じ風景で訳分からなくなるんだよ！ ジャングル舐めてたわ。

仕方が無いから、夜の星を見て移動する。ただ、ちようどスコールが3日間降り続けてそれも無理になつた。

結局、半月彷徨つて漸く元の入り口に戻つた。予定よりは短いけど、ちよつとどうにかしないとまずいよね……。印とか付けてたけど、消えちゃったし……。方向感覚を養う訓練した方がいいね。

後から気づいたけど、自分の念を印に付けねばいいじゃん！岩かなんかに念を纏わせて長く持たせればいい。《円》の間隔毎に置いてけば確実だよ。

後の祭りである。試験前に気付いて良かった（震え声）。とりあえず出来るかどうか試してみよう。

出来た。無機物操作は得意だったからね。岩とかにも念を纏わせるのはできると思ったよ。《周》の要領で念を纏い、切り離す！

修行の成果で中々いい感じ。量によるけど、1ヶ月は保つかない？今度の試験でやってみよう。

さて、もうここには用は無い。ダッシュで帰るか。一度帰省しよう。そうと決まれば、早く帰りたくなったのでダッシュで帰る。一度全力移動がどれぐらいか試そう。馬鹿みたいなオーラをふんだんに使って：GO！

うわあ、サラマンダーより速い。

1 時間

150キロだよ？自分の事だけど流石にドン引きですわ。一応目立たない様に夜に出たけど、見つかったらヤバイよね…。時速で言うると150キロだよ！

100キロババアも目じゃないわ。まあ景色飛んでたしね。前世でよくお世話になった救急車よりも早かったし。

だけど原作のネフェルピトも、2キロ近くを一瞬で詰めてたし、もっと速いんだろ
うなあ。奴らから逃げ切れるぐらいの目標だとまだまだだな。

港に着いて、久しぶりに例の宿へ。宿の親父はまた来たのかって嫌な顔してたけど、私が睨んだら渋々泊めてくれた。こつちだつて嫌だけどしようがないじゃん。言葉通じるのここだけなんだから。ちよつとしかいないんだから我慢して。

朝、宿で朝食を頂いたら、早速入国審査場に向かい、出国手続きをする。面倒だ。ハ
ンターはスルーパスらしいから、早くライセンス取りたい。

漸く順番が来て、受付。例の職員。なんかビクビクしてるが、自業自得よ？笑顔で威
圧しつつ、さっさと船出せ（要約）と、お願いする。しかし、職員は涙目でプルプル震
えながら、船が出せないと言ってきた。

は？（威圧）

もう全身ガクブルな職員に話を聞くと、最近内海の海域に化け物が出て襲われるため、船が文字通り出せないらしい。いつまでって聞いたらしいことになるか分からないとの事。それは困る。ハンター試験に間に合わない。

私も必死に説得したが、職員は乗組員の安全の為にも出せないと粘った。こいつ中々根性あるな。チンケな真似しなきゃいいのに。

結局、船乗りを納得させたらいいと許可を貰ったので、船着場に向かう。

波止場に前世話になった船長がいた。タバコふかして不機嫌そうだ。そりやそうか。んで、どうにか船を出せないか交渉するもけんもほろろに断られた。ダメなもんはダメだと。

しかし、こつちもそう簡単に引き下がる訳には行かない。もし化け物が出てきても私が退治するって言ったら鼻で笑われた。

仕方がないので、ちよつと力を見せる事にする。波止場から船長と移動して、デカイ樹木の前に立ち、オーラブレード（仮）で木をぶった切る。ついでに近くの大岩を《硬》

で粉々に砕くと、船長は啞えタバコをポロリと落とし、呆然とした表情でフリーズした。しばらく待つてたら再起動し、大笑いしだした。大丈夫か？

「いいだろう。お前さんに命を預けてみよう。ワシらはこれから一連托生だ。もしもの時は抜かるんじゃないぞ」

と、言ってくれた。やったぜ。しかし、本当にいいのかって聞いたたら、

「そんな時はワシの見る目が無かったただけだな」

との漢らしいお言葉。信頼に応えられるよう、頑張らなくちやなあ。

その後、船員と急ピッチで作業を進め、昼過ぎには出港となった。私も荷物運びを手伝ったから予想より早かったようだ。

さて、再びの船旅。帰りも天気にも恵まれ、順調に進んでる。私は万が一の遭遇に備えて、《円》を使いながら、甲板で瞑想をする。

この船で戦うのは無理だな…。ボロいし。としたら水中戦か…。水中の移動が難しいな。オーラを放出していけるかな。

後、最大のネックは呼吸だな。恐らく潜りっぱなしになる。早速【オートファジー自己貪食】の出番

だな。酸素もいける様に多少練習しよう。

もろもろ考えると、かなり消費が激しい戦いになるな。それでもざっと計算して2時間間は保つから、このオーラ量に感謝だな。

さて、2日目も何事も無く、予定の3分の2を消化した。取り越し苦労だったかな、と、思い始めた時、《円》に大きな反応があった。

デカイ!!

大体20メートルはあるぞ!この船と同じ大きさぐらいだ!……これはタコか!!

こんなのに襲われたらひとたまりも無いぞ!船が沈むわけだ。ドンドン近づいて来てる!

しょうがない、行くか!船長に簡単に説明すると、

「俺たちの事は気にするな!最後まで見守つといてやる。…死ぬなよ!」

と、答えてくれた。嬉しい事言ってくれるじゃない。負けるわけにはいかないな!必ず帰って来る、と言い残し、海へ飛び込んだ。

目が痛い！そう言えば海水だった!!ヤベ、戦うどころじゃ無いぞ!と、思ってたら、ここで【完全適合】オート発動!

状態異常と捉えてくれたか!しかし、容赦なく奴も近づいて来てる。残り500メートル。間に合うか!?

息も苦しくなってきた。【自己貪食】も発動!酸素をオーラで賄い、細胞に供給。同時に【日々是健康】で、海水で損傷した細胞を還元する!

…かなり消費が激しい。全力で適応中だが間に合うだろうか?もう《円》も使用してない。というか出来ない。くそっ!同時発動もつと練習しとけば良かった!オーラ3分の1ぐらいもう消費してるぞ。

恐らくスピードから考えて後200メートル!ヤバイ。まだもう少しかかる!最初は避け続けるしか無いか!

100メートル…50メートル…30メートル…見えた!漸く適応完了だ!

痛みは無くなった！ただ、まだボンヤリとしか見えない。ちつ。細胞操作で瞳孔の前にレンズ状の細胞を被せる。いわば水中コンタクトだ。よし、クリアに見えた！

と、思ったところで触腕が伸びてきた！不味い、捕まる！オーラを足から放出っ！

おおおおおっ！

めちやくちや回転しまくって前後が分からなくなった。しかし触腕から逃れたらしい。ただ、大分潜ったらしく、ここはすでに水深20メートルぐらいだ。結構暗い。よって全然見えない。

あああああつ。もうっ！全然想定不足だった！

しゃーない。やれる事をやろう！また触腕が飛んできた！水流で分かる。とりあえずオーラブレード（仮）でぶった切る！

斬ツ!!!

一本切れた。良かった！流石にマンティコアみたいな念使いじゃないらしい。しかし状況が悪すぎてあれとは比べものにならないぐらい苦戦してる。

戸惑ってるのか、少し攻撃がやんだ。今のうちに目を慣れさせる！
細胞操作と《凝》で、虹彩を強化！光を取り込む量を増やす！

よし、よし!!見えたぞ！クツキリとな!!やっぱり足は8本か。さっき1本途中で切つて7本だな。覚悟しろ、タコ野郎！

ただ、こつちにも余裕は余り無い。残りオーラ多分5分の1。それが過ぎると【^{オートフエージ}自己貪食】が切れる為、溺れる。よつて継戦時間残り約5分。それだけ有れば十分だ！

奴は今度は4本で来た！しかしもう不覚は取らない！さつきは失敗したが、奴の方に向き直り、足にオーラを集めて放出する！イメージはアイアンマン!…今度は成功！
奴に向かつて一直線に進む！4本の触腕を潜り抜け、でかい本体に向けて魚雷並みのスピードで迫る！残りの3本でガードしようとしたが無駄だ！

残りありつたけのオーラで両手で10メートル以上のブレードを作る！
くたばれーっ!!
!!!

斬ッ!!!

見事に奴の胴体が下から上に真つ二つになる。念の為にブレードを維持したままそこから横、右斜め、左斜めに念入りに細切れにする！今思ってたけど、これ、メカフリーザと戦った時のトランクスみたい。フィニッシュの気功砲までは余裕なくて出来ないけど。

さて、細切れになって、漸く沈黙したのを確認して、浮上する。一応確実にぶつ殺した証として、漂ってる無事な足と目の辺りを掴んで、自力で浮上する。もう、オーラジエツトする余裕ないのよ…。

ようやく海面に出て、【自己^{オートファジー}貪食】を解除する。あぶねー!!残り1分も持たなかったぞ。ギリギリでヘトヘトだ。もう水中戦なんて2度とやらない!

浮かんでる私を見つけた船長達が、慌ててボートを出して助けてくれた。奴のデカイ足と眼を見てビックリしてたが、「生きてて良かった」と言ってくれた。更に「しばらく休め」とも言ってくれた。言われなくてもそうするわ…。

ああ、
疲れた…。

21、水中適応訓練

あれから半日ぐらい眠り続けて、漸く目を覚ました頃には夕方だった。目を覚ましたら船長及び船員たちにひどく喜ばれた。ちなみにサヘルタには明日の朝に着くらしい。

船長以下船員達は、あれから浮かんできたタコをできるだけ回収したらしい。それで、夕食はタコパとのこと。で、キツチンとかないから基本生。

おいおい、寄生虫とか大丈夫かよ？って聞いたたら、「足だし大丈夫だろ」って豪快に言ってた。船乗りらしい。陸に着いたら焼いて喰おうな。

塩水で揉んで、ぬめりを落とし、皮を剥いで刺身にする。うん。美味そう。ちなみに船員が全部やってくれた。何でも命の恩人だからだそうな。：なんか悪いね。

さて、刺身が出来たら、上からレモンと酢と油を合わせたやつをかける。味付け&寄生虫対策だな。私には効かんけど、他の人にはそうでもないしな。さて、実食。いただきます。

……美味い!!

デカイから大味になると思ったけど、旨味が凝縮してやがる。調味料もいい味出してね。出来れば醤油も欲しいけど。しかしこれはいくらでもイケるな！さて、ドンドン食べるぞー!!

いや、喰った喰った。自分で釣った奴を食べると美味しいって前世で釣り好きの兄が言ってたけど、今分かったわ。今回は釣ったというより、振り返ち？狩った？だけどね。船員達も大満足よ。しかし、これだけ食べて足一本分も行かないって相当なデカさだよ。本当にこの世は楽しいな。強ければ、だけど。

そういえば、あのマンティコアも強い奴は美味いって言ったな。アイツも美味かったのかな？いや、流星に人喰いの人面のキモい奴を食べるのはちよつと生理的に無理か。でも、ハンターになったら害獣とかをハントするハンターも悪く無いなあ。モンスターハンターだわ。その単語、どつかで聞いたことあるけど。

しかし、今回は課題が沢山見えたな。まず、想定不足。アレは無いわ。おかげで久しぶりにオーラ枯渴が見えたし。危なかったなあ。あと、ぶつつけ本番は出来るだけやめよう。なるべく訓練してから臨む様にしたい。水中訓練もしておこう。もうちよつと慎重に動いて、出来るだけ生命の危機を減らして行かなきゃなあ。

しかし、反省ばかりではなく、リターンも相当あった。まず。水中活動が出来るとい

う事。これはかなりのリターンだよ。今思うと【自己貪食】オートファジーもいいけど、全部オーラで酸素を賄うんじゃないやなくて、海水を細胞に取り込んで変換の方が効率がいいかも知れない。うまく行くか分からないけどやってみよう。あの時は息を止めて体内になるべく海水が入らないようにしてたけど、逆に肺まで取り入れて【完全適合】パーフェクト・コンバートで出来るよ、今後の為にもなるし、消費もカット出来るな。向こうに着いたら2、3日やってみよう。【自己貪食】オートファジーは消費が大きすぎるんだよ。後、水中での移動、攻防とかのオーラの使い方も考えなきゃ…。

などなど、今後の事について考えてたら、船員が、

「よう、カームさん。今回はありがとなー！しかし、全然上がってこねえから、流石に死んだと思っただぞ。…でも、怪物も上がって来ないし、船長が『アイツは絶対上がって来から用意しとけ』って言ってたからガマンして待つてたんだよ。したらホントに上がってきて、あんなバカデカイ奴まで獲ってきた。一体どうやったんだ？」

と、聞いてきたので、答えてに苦しんでたが、聞いてた船長がボカリと彼を殴り、「ほら、ワシらの恩人が困つとるじゃないか。人には言えん事も一つ二つある。ワシらは助かった。それでいいじゃろ」

と言つて助け舟をくれた。正直助かった。その後、船長は私に向き直つて

「すまん、カームさんや。ウチらの若え衆が無礼した。アンタにはホントに世話になったな」

「いえいえ、礼には及びませんよ。むしろこっちの都合で振り回して申し訳ない」

「それでも、だ。アレを倒さなければ、被害は増え続けてワシらは商売あがったりだった。アンタはいわばこの海域の救世主なんじゃよ」

「そんなたいしたもんじゃありませんよ……。私もこれからハンター試験受ける予定なので、良い訓練になりました」

「…アンタ、ハンター試験受けるのか？」

「ええ、2ヶ月後のやつにね。今回の旅も訓練の一環なんですよ」

と言ったら、船長はしばらく考えながら黙り込んで

「アンタ、着いたらすぐ発つかい？」

「いえ、今回のこともあったので、少し海でも訓練しようかと。4、5日ぐらいは港の方になりますよ」

「そしたら、あそこを出るときにワシを訪ねてくれ。港の近くに家を構えておる。場所はその辺の奴を捕まえて『エイハブの家はどこだ』って聞けば教えてくれるだろう」

「わかりました。∴しかし、お礼ならもう良いですよ？」
「いや、違う。個人的に用があるだけだ∴絶対に来いよ」

と妙に念押しされたので、何の用だろうと思いつながらも頷く。まあこの船長にはかなり世話になったので、覚えておこう。

さて、次の日の朝、漸く港が見えてきた。久しぶりのヨルビアン大陸だな。

港に着き、船長と船員にお礼を言ったら船員には恐縮された。船長には再び念押しされたので必ず伺うと約束した。約束は守るものだ。

さて、こちらの漁村みたいな所に宿あるかな∴。あった。向こうと違って言葉が通じるから安心だ。4、5泊分の宿代を払い、泊めてもらう。ちよつと早まつてもチップとしてあげよう。さあ訓練だ！

港の近くの砂浜を探し、そこから海に入る。もちろんパン1ですよ？あの戦いの時もパン1だったし。でもこの時代、水着なんてないから若干不便だよね。でも全裸にはな

りたくない。そこまでの尊厳は捨てたくないのだ。

少しずつ海に入り、頭まで潜る。：怖い。自分に来るかな。あのときは必死だったけど、海水を肺に入れるのってほんと恐怖だよね。でも、こんな安全な場所で訓練できるんだから気合い入れてやろう。せーの！

ガボゴボゴボガボ……

やべえ、マジで溺れる！でも頭は出さない！速攻で【完全適合】が自動発動する。今回は肺に入ってる海水を状態異常と見なしたようだ。でも、馬鹿みたいに苦しい……！

これ、早くしないと死ぬ……!!

全力でオーラをまわし、【完全適合】のサポートをする。そして、パニックにならないように水中でも瞑想の要領で落ち着け、海水の中を漂いながらただ一つのこと集中する……！

細胞に語りかけるとあと30秒で死ぬとの答え。間に合わない。仕方なく【自己貪食】を発動するが、肺の代わりに脳に酸素を送るだけにする。肺の方は全力で海水を取り込み、適合中……1分経過……まだか！2分経過……あと少し!!3分経過………出来た!!!

そのうち、息が出来るようになった。不思議な感覚だ。全力全開でオーラ使った…。今回は8割以上使った。あの馬鹿オーラ量を8割以上だ。前の水中戦の時やらなくてよかった。やってたら死んでた。

しかし不思議な感覚だ…。

なんていうのかなあ。肺の中は海水で満たされてるけど、普通に苦しくない感じ？ 原理としては、海水その他を肺に入れて、細胞に取り込み分解。わずかに存在する酸素はそのまま取り込み、それ以外の物は細胞へと吸収、そのまま細胞が酸素に変換して送るってところか。前回で目は適応してたから普通に見える。

やっべ、これ楽しい!!

しばらく海中散歩とか、遊泳とかを楽しみまくった。…5時間ほど。オーラ消費は…無し!! やったぜ!!! 作ってよかった（パワエクト・コンバート）「完全適合」!!! ほんと愛してる!!! でも、これメモリ使わないよね…? 大丈夫かな? まあこれ以上新能力を作る予定ないし、馬鹿オーラ量もあるから大丈夫か。なんかまだまだ行ける感じするし。でも、やっぱこの能力チート過ぎない? 特質系でほんとよかった。いや、（ヘルシーマン）「日々は健康」も（オートファジー）「自己貪食」もかなりのチートさんなんだけどね。かすむわ。

さて、結構オーラ使ったし、今日は上がるう。ちよつと疲れたし。想定以上にうまくいったので、明日から水中訓練に移ろう。

それから、海中を泳ぎながら戦う訓練を4日間みっちり行った。オーラ移動も慣れてきたので、消費量も減った。特に海中ジェットは楽しい。でも小回りがまだきかないので、足ひれとかをオーラで作ったの移動も開発した。アイアンマンジェットで小回り利くようにもそのうち練習しよう。アレって手からも出してるよね？ あれ？ もしかして寧ろ手がメインで出てるつけ？ まあいいわ。手が塞がっちゃ困るし。

攻撃は変化系のブレードだけじゃなく、放出系のフリーザ光線（デスビームっていうらしい）とか、海流操作とかもやってみた。念弾はオーラだし、威力減衰せずに進むからでかい奴相手にはお勧め。でもこの辺にいないし、小さい奴だと爆散してきちゃないからビームで良い。お魚さん相手に漁をしつつ試し、基本修行もやってみる。《絶》だとほんとにお魚に気付かれない。逆に《練》はあつという間に散っていく。発射する銚とかも作ってみた。漁と言えばこれだよ。形作るだけだから余裕よ。

しばらく（6時間以上）潜ったら捕った魚を焼く。まだオーラで火を付けられないんだよな…。どうすりや良いかな。しかしこれ、もう海人^{うみんちゅ}どころか魚人^{マーマン}だよな…。ますます人間離れが進むなあ。

死ぬリスクは減ったから良いけど。ちなみに【^{パイルエクトコンバート}完全適合】の一部再現で海水を出せるようになった。…海水を、出せる……何に使うんだろう…。

22、試験会場の道のりと帰省

さて、だいぶ海にも慣れ、楽しいひとときを過ごした。やっぱり修行は楽しくやるのが一番よ。結局5日間フルで楽しんじゃった。とりあえず宿を引き払い、約束のエイハブ船長の所に行く。その辺の奴ら捕まえて聞けつて言われたからその通りにすると、漁村の外れの方の一軒家だそうな。で、そこに尋ねてみると、

「よくきたの、忘れたかと思つとつたぞ」

と、言われた。いやいや、さすがに約束は守る男ですよ？船長は私を招き入れ、テーブルと椅子に案内し座らせた後、自分も向かい側に座った。ん〜いい家だ。シンプルで飾りはないが、落ち着く。私も世界一周旅行が終わつたらこんな海辺で一軒家建てるのも悪くないなあ。と考えてたら、

「さて、お前さんと呼んだのは他でもないハンター試験についてだ」

！

「ハンター試験について？なにか知ってるんですか!？」

「落ち着け。試験会場についてじゃ。いつも官報には試験のことは載つとるが、会場については記載はない。知つとるじゃろ?」

「確かにそうですが…。それが何か?」

「ワシが会場の道のりを知つておる、と言つたらどうする?」

!!!

「本当ですか!?…いや、あなたは嘘はつかないさうだ。しかし、なぜそれを私に?」

「言つたじやろ。お前さんは救世主じゃと。お前さんの成したことはそういうことじゃ。…ただ、完全に答えまで言つとお前さんは断りさうだからヒントを出さうと思つてな」

……なるほど。よく私のことを見るな…。船長の言つとおり、答えを完全に知つてゐるなら逆に断ろうと思つてた。だが、ヒントなら今回のボーナスとして受け取れる。ハインターだからな。ズルは駄目だよ。

「…わかりました。受け取ります。で、詳しくはどういうことなんです?」

「…試験会場は記載されておらず、現地付近に着いても誰も何も知らない。偽の案内すらある。しかし、世界各地で審査員の手伝いを依頼されて、それをするものもある。ワ

シもその一人じゃったし、今後もそうじゃ。今回は見込みのある受験者がいたら、正しい道の入り口に案内するのがワシの役目じゃ。だから、これは正式な仕事と言える」

「なるほど、それなら安心して聞けますね。で、そのヒントとは？」

「うむ。まずは試験会場のミンボ共和国、その首都に一番近いチャンドラ港へ行け。そここの船着き場で船長のデリーという男にこれを渡せ」

そう言つて、船長は手紙を渡してきた。：えーと首都近辺のチャンドラ港ね。そのデリーさん。うん。覚えた。実際記憶力は馬鹿みたいに上がってるから大丈夫だろう。昔の私だつたら聞き逃しちゃうね。

「分かりました。確かに受け取りましたよ。しかしまさかこんなところでハンター試験の鍵があるとは思いませんでしたよ」

「ふふ、驚いたろう？ハンターたる者、いつ、何時でも油断してはいかん。誰に見られとるか分からんからの。その点、お前さんは合格じゃ。見事資格を手に入れた。：あまり誰かに肩入れするのもよくはないが、これぐらいは良いじやろう。ワシは個人的には応援しておる。頑張れよ」

「ありがとうございます。必ず合格してみせますよ。エイハブ船長」

そう言つて、席を立とうとしたら、船長に呼び止められた。

「待て、ワシから招待したのに何も出さないのは信条に悖る。一杯飲んで。お前さんはいけるじやろう?」

と、言われたのでごちそうになった。そこから船長ととりとめもない話をした。若い衆の話とかは私も実家の稼業で通じるものがあつたので、気が合つて盛り上がった。ああいいね。こういう時間も悪くない。こんなじいさんになりたいなあ。

結局3、4杯飲んだらお暇した。さて、家に帰るか。誰か見てたけど、試験関係で監視してるんだらう。じいさんもそれっぽいな言つてたし、スルーしたけど。念能力者だったし間違いないと思う。受験前から審査は始まつてるのか。気合い入れなきやな。



「どうじゃった? 見ておつたじやろう」

「ええ、見てましたが…何ですか彼は?」

「見ての通りの好青年じゃが?」

「そう見えたなら幸せですね。私には底知れないバケモノにしか見えませんでしたよ」
「ふむ。ワシもアンタのような能力者には極稀に会うが、彼は全く邪悪には見えんかったぞ。むしろ人を引きつける何かを持っておる」

「そうですね…本当に無色透明な力です。しかしその底が全く計れない。信じられない量だ。私も確認しましたよ。アレ。ハンター協会にも討伐依頼されました。難易度は…Cです」

「難しいのか？」

「少なくとも新人ハンターには無理ですね。まず、海の時点でキツイ。それを単独撃破…末恐ろしい」

「奴は受かるかな？」

「ええ、おそらく。むしろ協会側は頭を下げてでも欲しがるでしょうね。まあ試験は平等に受けてもらいますが」

「そうしてくれ。奴もフェアじゃないことには首は振らんだろう。さて、お仕事お疲れさん。飲むか？」

「いえ、結構です。しかし本当に報告に苦しみますね…」

「ありのままを伝えりやええ。ワシもそうする」

「わかりましたよ。ではお元気で」

「ああ、あんたもな」

◇

さあ、ランニングの時間だ！これから一気に500キロ走破にかかる。今回は人気のある所は普通に走って、誰もいなくなったら例のダツシユをやろう。

全部ダツシユなら約3時間ちよいだな。何を言ってるのか分からねーと思うが、私も他人から聞いたら何言ってるんだコイツ？って言う自信がある。しかし事実だ。まあ諸々含めて半日は見とこう。では出発！

いや〜やつとヨークシン着いた。結局10時間かかったよ。まあそんなもんか。寧ろ1日以内に何とかなるのが異常だからね。流石に暗いし、旅の汚れを落としてから帰らなきゃな。銀行でお金おろそう……。夜だからやってないか。

お金も流石にあと僅かしか無いが……しようがない。安宿泊まるか。

さて、複数で雑魚寝レベルの宿に泊まったら、朝一でお金をおろし、服を買い替える。流石にポロポロですわ。予備も有ったけどポロポロ。サバイバルやってりやそうなるわ。ついでに靴も替えとく。今までは浮浪者に近かったが、お金は偉大よ。後、普通に

身体が汚いので、公衆浴場に向かう。ちゃんと綺麗にしてから帰りたい。

今回の服装はハンチング帽に、半袖のシャツ、長ズボンだな。帽子以外はウィングさんスタイル。まあこの時代の中流階級に良くある格好だな。さて、帰るか。

家に着いた。呼び鈴を鳴らす。お手伝いさんのマーサさんが出てきて「坊っちゃん！」と絶句。どうでもいいが坊っちゃんはそのそそりやめてほしい。でもこのバアさん、やめる気は無さそうだな…。そしたら母さんがすぐに出てきた。

「カーム！帰って来たのね！」

「ああ。ただいま、母さん。ちよつと試験の目処がついたから一旦戻ったよ」

「まあまあ、とにかく上がんなさい。今お父さん呼んでくるからね」

お、今日は父さん家で仕事か。マイケルは平日だからスクールか。勝手知ったる我が家なので上がらせてもらい、居間のテーブルと椅子に腰掛ける。その内、父さんもやって来て、

「カーム、戻ったか」

「うん。試験の為の訓練が一通り終わったからね。一旦戻って来たよ。でも直ぐに発つ予定だよ」

「遠慮するな。ここはお前の家だ。好きな時に来て、好きな時に行くといい」

「ありがとう。じゃあ2、3日世話になるよ」

と、会話してたところで、母さんとマーサさんがコーヒを持って来てくれた。有り難く頂く。その後母さんも含めて会話に加わり、今まで何やってたかの話で盛り上がった。しばらくしたら父さんも仕事に戻り、私も自分の部屋で休息をとる事にした。やっぱりちよつと疲れてたらしい。ベッドに横になるとグースカ眠ってしまった。

どうやら4時間以上眠ったらしい。起きて部屋から出たらマイケルが待ち構えていた。スクールから帰ってたらしい。3か月しか経ってないのにみんなめっちゃ久しぶりな感じがする。マイケルも喜んでいて、私の話を聞きたがった。

その日の夜、久しぶりに家族で夕食を摂る。私のミテネについての感想やジャングル紀行(奇行とも言う)、船での旅のトラブルなどを改めて面白おかしく話してやったらみんな凄く喜んだ。父さんはジャングルの産物に興味をもち、マイケルは出会った怪物の話に盛り上がり、母さんは向こうのサービスの悪さに顔を歪めてたが、他の国の話に顔を輝かせてた。因みに料理はいつものトマトスパ。好きなんだよね、これ。明日習おう。さて、明日は休日だ。マイケルの成果を見てやるか。それで、友人達にも挨拶しなきゃなあ。やる事沢山だ。また明日考えよう。

23、我が家にて

次の日の朝、私はゆっくり起きて母さんの料理を手伝いながらやり方を教わる。映画『ゴッドファーザー』にもあったな。こういうシーン。まさか自分が似たような立場になるとは思わなかったけど。憧れるので、マイケルにも作れるように言つとこう。奴の意思？ 師匠の言う事は絶対だよ？（理不尽）

しかし、実際男でも料理出来ないと家庭は回らなくなるからな。ファミリーを守る訓練の一環として頑張つてほしい。

そんなマイケルは早朝から走り込みしてて、ただ今不在。ちゃんと続けてる様だ。感心感心。

さて、まずは玉ねぎとニンニクを切る。その後ピーマン、ウィンナー、唐辛子も切つておく。

その後、たっぷりのオリーブオイルでニンニクを炒め、切った唐辛子も炒める。アールオオーリオだな。そこに、切った玉ねぎやピーマンの輪切りやウィンナーを入れて炒

めた後、これまたたっぷり茹でて皮を剥いて潰したトマトを加えて和える。

同時進行で、パスタを茹でる。茹で加減は大事だ。味見しながらやる。うくん。アルデンテ。茹で汁と共に先程の鍋に加えて少し和えると、アンダーソン風トマトパスタの出来上がり！うん、美味しい！！

やっぱりマイケルにも習わせよう。記憶が曖昧だが、こんなシーンがあった。

く優雅にパスタ作ってる風景く

そこに1人の男がツツコミを入れる。

「呑気にメシ作ってる場合か。○○はどうした？」

平然としているメシ作ってる奴。何でもない様に答える。

「消えてもらった」

…ヒュー！カッコいい！！

出演：飯作ってる奴：マイケル。ツツコミを入れる奴：ジョセフだな。私自身はそのシーンをを見る事は出来ないが、妄想は出来る。やっぱりやらせよう！

料理が完成した頃にマイケルが帰ってきた。ついでに父さんも起きてきた。家族で

合流して朝飯を食べる。私が作ったと聞いたマイケルが驚いていたが、その後お前も作れるようになったとけつて言ったらゲンナリしてた。だが、珍しく父さんが私に追隨して擁護してくれた。なんでもアンダーソン家の基本技能らしい。父さんも作れるって聞いてビックリしたが、そういえば家にファミリーの構成員呼んでパーティーした時にはなんか作ってたな。あの品々、全部父さんか。やっぱり私は間違つて無かった！

さて、料理を片付け、マーサさんも出勤。母さんから仕事を引き継いだ頃、マイケルを伴つて例のボタ山へ。親方スルーパス。むしろ久しぶりつて歓迎してくれた。なんだかんだでこの親方も付き合い長い。今度土産でも持つてこよう。

さて、サボつて無かつたかどうか成果を確認する。

…やるね。3ヶ月とは言え、真面目に修行した成果が出てる。もう少して中堅下位に届くかな？では、私の闘つた敵を模して実戦訓練しよう。

1人目：記念すべき最初の念使い。オーラを刃にして飛ばす。確か追尾性能もあったな。オートじゃ無理だけど、マニユアルで再現出来るな。アレだと訓練としては優しすぎるので、ちよつと盛つて12本で良いだろう。オーラ量も強めてみた。マイケルは手に剣を作つて手刀で全部撃ち落とす。やるね。もういつちよ！今度は倍で全方位だ！

普通に念弾で当たる前に全部撃ち落とした。そういえば、変化・放出も得意だったね。うーん。これはアイツなら完封だな。アイツの能力がこれだけならば、だけど。
(作者注：これだけです)

2人(?) 目：マンティコア。流石に特殊能力の方は真似出来るので、体術と毒で再現。尻からオーラで尻尾を作り、その先端に毒シリーズの弱い奴を集める。再現した毒を身体からオーラに移すの難しいかなと思つてたけど、やってみたら案外出来た。オーラを具現化っぽくして身体の一部と思えばいい。オーラつてやつぱり自由度高いね！
(作者注2：こいつだけです)

さて、準備はいいか？行くぞ！訓練だし、ちよつと強めに盛るからな！

奴の動きをイメージして再現する。当然尻尾の嫌らしい動きもだ。しかし、流石に尻尾は警戒されてるな。それ以外の前足攻撃、噛みつきにも対応してる。：中々いい感じなので難易度上げるか。前足攻撃対応に夢中になつてる隙に、尻尾を《隠》で隠す。そして：死角からブスリ。残念！マイケルの冒険はここで終わってしまった！

：そんなに睨むなよ。いついかなる時も《凝》は怠つちやいかんよ？まあ私にも言える事だが。何、毒はちよつと痒くなるだけのやつだから大丈夫。まだ文句のありそうなマイケルだったが、実際にこういう奴も多分結構居るよ？つて言ったら黙つて考え込んだ。ただ、例の特殊能力の詳細を話したら、いい笑顔で「逃げる」つて言った。：そう

だね。強化系は特に相性悪いしね。私が前もって掛けてあげられたらいいんだけど、〈誓約〉の関係上無理だし…。上手く逃げてね。そのためには修行だ！

しかし、私も毒の一部再現の実用化の目処がたったので収穫があった。やっぱり相手がいるのといないのでは違うね。

3人(?)目：クラークン(仮)。こいつはどう再現したものか…。とりあえずオーラでそれっぽい形を作って、ガワと動きだけ見せりゃいいか。早速…ぐつ、制御ムズい…：その場で足を動かすだけで精一杯だな…。条件はつかまらない様に対処する事…かな？

マイケルは、こんなのと水中で闘ったの!? ってドン引きしてた。…私だってやりたくてやった訳じゃないから…。(震え声)。

さて、陸上なので速さマシマシでお送りします！おつ、上手く出来たぞ。ただ、でかい分小回り利かなくて微妙だな。アレは水中だから脅威なんだよな。

しばらくやってたら、オーラの刃で全部切られて終了。まあお遊びだった。しかし、やってみて思ったけど、ネテロ会長の「百式観音」は強すぎるって事だ。これよりちよつと小さいサイズで不可避の速攻して来るとか、どんな制御力よ？今の私は全く勝てるビジョンが浮かばないな。馬鹿オーラに任せて何とか2、3発防御したら、後は即刻離脱だな。

結果、マイケル君2勝1敗。これからも精進してくれ。程よくマイケルを可愛がった（意味深）後、私は山を降りた。まだまだ挨拶しておきたい奴も沢山いるからね。

マイケルはかなり悔しかったらしく、残って修行続けるとか言って残った。うんうん。モチベーションは大事。

その後、今構成員やつてるジョセフの所に遊びに行つた。周りも含めてかなり喜んでた。来年の司法試験、頑張れよ。お前なら受かる。どんどん昔の友人（本人たちは舎弟と言つてる。お前ら、将来マジでマイケルの舎弟だからな？鍛えといたから頼むよ？）が集まつて、ワイワイと近況報告し合つた。幹部のオツサン（親父の部下）にも断つて、近くのレストランを借り切つてプチパーティーした。今日は私の奢りだつて言つたら、めっちゃ喜んで、遠慮無しにバカスカ頼みまくつた。お前らこういう時遠慮無いよね……。まあ私も楽しんでるからいいか！

そのうち大宴会に発展して、幹部のオツサンたちや何と親父まで来て、飲めや歌えの大騒ぎとなつた。修行を終えたマイケルも合流し、念を使ったなんちやつてマジックショーもやつた。私の一発芸は108まであるぞ！

結局、うちのファミリーの野郎共の飲み会みたいになつたが、全員無礼講で楽しかつた。コイツらこんなアホ騒ぎしてるけど、裏ではかなりエゲツない事やつてるんだよなあ。詐欺同然の事してカタに嵌めたり、地上げしたり、ギャンブルで巻き上げたり：

後、敵対勢力にも容赦ないし。やっぱり私には向かないな！

ホラ、今も幹部が親父に耳打ちしてるし。アレ絶対悪巧みだよ。または金儲けの算段かな。

さて、楽しい時間もあつという間で、お開きの時間となった。支払いを私がしようとしたが、親父が全部払ってくれた。遠慮したが、「ファミリーの面倒見るのはドンのお務め」だつて譲らなかつた。いつか返せるといいな。

酔つ払い共を家に返し、私たちも帰る。親子3人揃つて母さんに怒られるの図。我が家の裏の権力者だよ。まあ怒られる内が華だよ。

いよいよ明日出発する。まああの調子ならウチも安泰だろう。今度は試験に受かつてからかな？まあ1年以内には戻るか。

約束だしな。

24、現在の主人公の能力一覧

〔ヘルシーマン日々是健康〕

・操作系能力

怪我などの不測の事態が起きた時にオーラを使用し、細胞レベルで自分を操作し、復元することで、健全な状態に戻す能力。

〈制約〉

- ・傷の程度によって、使用するオーラが増加する。
- ・復元のため、超回復はできない。
- ・今後、一切操作系能力で他の生物を操作する事が出来ない。

言わずと知れたチート能力其の1。構想の時よりも習得した時点での余裕があったので、制約と誓約を減らしている。まだまだ瞬時回復にはほど遠いが、これを鍛えておかないと大変なことになる。ちなみに習得したときは、自分を延々と傷つけ、じっくり細胞操作をしながら復元するというキ〇ガイじみた修行を敢行した。

パルフェクト・コンバート
【完全適合】

・特質系能力

自身に悪影響を及ぼす要因、細菌やウイルス、念による状態異常などを取り込み、細胞レベルで身体に強制的に吸収し、適応させる能力。悪影響をプラスに変え、再びその影響を受け付けなくなり、無害化する。さらに任意でその力の一部を引き出すことができる。条件付発動。

〈制約〉

- ・一度はその悪影響を自身で体験しないと発動しない。
- ・悪影響が強ければ強いほどオーラを消費する。
- ・この能力は今後一切解除できない。
- ・一度取り込んだ物は破棄できない。

現在取り込んでるもの

・病気：人間界で普通に生活していればかかる病気多数、致死性の病気複数。もはや作者も数え切れないが、ジャングルでエボラとかエイズとかかなりヤバめのも拾っている。とりあえず人間界のはかなり拾った。

・毒：ヘビ毒、虫毒、植物毒、食中毒、などの生物由来の毒はだいたい拾った。最近マンティコアさんから念で強化する神経毒も拾ったため、全ての毒に念強化出来るようになった。ヤバイ性能。

・海水↑NEW！

主人公のチート能力其の2。はつきり言つて作者でも困惑するほどのチート性能を誇る。もうこれだけで良いんじゃないかなあ……。特に一部を引き出すという性能が凶悪。でもこれぐらいしないと奴らと闘えないからなあ……。人類の進化の可能性を秘める一品。

【自己貪食】
オートフエジー

・【日々是健康】、【完全適合】の派生技。パーフェクト・コンバート【完全適合】が発動した時に、栄養不足由来のものであれば、【日々是健康】に切り替わる。具体的には不足した栄養素をオーラで代用し、損傷した細胞を復元する。

〈制約〉

・オーラが枯渇した場合発動しない。

主人公のチート能力其の3。トリコのアレ。色々足りなくなったらとりあえずこれを使つとけばOK！緊急時に大活躍する能力。ただし消費が大きいのが玉に瑕。はつきり言つて、何も口に入れなくてもオーラさえあればかなり長く生きていけるといふ恐ろしい性能を誇る。

基礎能力

・オーラ量：だいたい35万ぐらい。直属護衛軍の約半分。既に人間の枠を超え始めた。顕在量は約1万2000。

・応用技

《円》：…だいたい半径1・5キロ。ヤバい範囲。でもあそこではあんまり使えない。

《流》：…瞬時の移動が可能になった。

《隠》：…かなり得意で、現在主力の戦法になりつつある。

・系統別

強化系：…かなりの強化を可能にしているが、やはり本職には勝てない。しかし馬鹿オーラ量で誤差となる。

変化系…苦手なくせに主力の武器になりつつある。同じく馬鹿オーラ量でごまかしている。

放出系…割と得意。レーザーからかめはめ波、操気弾まで自在に出来る。主力武器。操作系…細胞操作。むしろ最近これしかしてない。

具現化系…馬鹿オーラで形を作る所まで出来る。が、ただオーラで形作ってるだけ。質感とかは無理。変化系と何が違うか作者も説明できないが、手足をオーラで作って動かすとか、尻尾の再現をオーラで出来る。

特質系…パルフェクト・コンバート【完全適合】

最近、オーラに一部再現した毒や病気を付与することが出来るようになった。極悪性能ではあるが、これぐらいしないと厄災の皆さんには通用しないのでこれからも是非頑張つて欲しい。

25、会場への道

さて、再び家族に見送られながらハンター試験の会場へと向かう。例の手紙も持った。えーつと、ミンボ共和国の首都付近にある港のデリー船長だったな。とりあえずミンボ共和国まで行かねば。まずはサヘルタ合衆国の北の港へ向かい、クカンユ王国に船で渡り、そこから更に別の港からミンボ共和国に向かうつとこか。あと2ヶ月でこの旅は普通に行ったら厳しい。たぶん間に合わない。が、私は間に合う。再びランニングの時間だね。最初はヨークシンから出て、5大湖つて所へ向かう。ちよつとは湖で水中訓練しようかな？真水にも慣れたい。

えつと、地図見るとここから東へ100キロも無いな。人を避けながら1時間ちよいで行くか。

はい、到着。でかい湖だね！さて、早速人目に付かないところで脱いで…。また、あんな苦しみ来るかなあ。ちよつとそこが心配だけど、ええい！ままよ！

ガボゴボガボ…

若干苦しい。【完^{パワ}全^{エクト}適^ト合^{コン}】発動！やっぱ海水とは勝手が違うか……。しかし、海水と似た要領で出来るからそんなに苦勞しない。【自己^{オート}貪^フ食^ァ】も必要ないぐらい。1分も掛からないうちに適合完了。海水じゃないから目も自家製コンタクトだけで十分。よし。泳ぐか！

調子に乗って2時間も満喫してしまった……。海とはまた違う風情があるから楽しくなっちゃったんだよね。魚も違えば、植物も違う。こっちは水草、あつちは海藻。ちなみに底を歩いてて人の骨っぽいの見付けたけど、見なかったことにした。

さて、気を取り直して、服を着る。こつから北へまっすぐ行く。ただし、また500キロ以上はあるな。せつかくだし、景色を楽しみながら走るか。まだ時間あるし。今度は純粹にランニングしよう。それでも3日で行けちゃう私も大概かもしれない。良い町や宿があつたらそこで泊まろう。

再び雄大な景色。途中で大規模な滝があつたり、地平線まで続く畑があつたり、岩石地帯などがあつた。本当に感動した。前世では見ることがかなわなかったからな……。

そして、所々で町を発見し、一日の終わりぐらに見付けた町で宿を取る。まだ、西部の開拓時代みたいな雰囲気。まあ風情があつてよい。しかしトイレぐらいなんとかしら。病原菌の塊になつてゐるぞ。私はもうあれらは効かないけど。ヨークシンあたりより乾燥してるから別に大丈夫なのかな？

そんなこんなで、走りまくつた末に、4日かかつて着く。ちよこちよこ観光名所とか寄つちやつたからね…。でも後悔はしてない。今度来るときはじっくり観光しよう。

港では、わりと大きめな町と、整つた港があつた。このミテネ連邦との差よ。まあ私にはあそこは嫌いじゃないけど。むしろあののんびりした感じが好き。船乗りも豪快だしね。そう言えばあのクラーケン（仮）は結局どうしたんだろう。あそこのみんなで食べたかな？寄生虫怖いからみんな焼いて食べると良いけど…。ともあれ、こちらの港は大規模な手続き所もあつて、出港手続きも簡単に出来た。…なんか簡単すぎない？1日ぐらいは待たされるかと思つたよ？

まあ早いことに越したことはない。出港が5時間後。さて、この港町を満喫だ！

品の良いレストランに入る。海辺の景観を楽しみながら、ワインを一杯。ホットサンドを食べながら、まったりと船の行き交う様子を眺める…。ああ、こんなことがしたかつたんだよ。前世からの夢がまた1つ叶つてしまった。出来れば2泊ぐらいして

もつと町を満喫したかった……！まあ、帰りに来るだろうし、それまで楽しみはとつておこう。

そんなことをやってたら、船の出航に間に合わなくなりそうになった。結構ギリギリになったので焦ったがなんとか間に合った。あぶねー！出来るだけ時間前行動を心がけなきゃ、「時間を守れない男」になってしまう……！我がファミリィでは、時間を守れない男は存在すら許されないのだ。いや、私はマフィアじゃないけど、それでも約束を守る男としては生きていたい。

前回はボロ船だったけど、今回は割と豪華な客船。タイタニックとまでは言わないけど、それに近いデカさ。ちなみに私は2等客室ですが何か？いくらマフィアの長男とは言え、ホイホイ1等客室には行けないのよ……。節約しなきゃね。お金は大事だよ。実際。しかし、甲板に出たり、客室内のホールをうろうろすることぐらいはできるので、バーでカクテルを頼みながら船旅を満喫した。ちなみに《絶》で1等客室に忍び込んだけど……何あれ。豪華さのレベルが違うわ。ハンターになったらここに来よう。絶対にだ。

それにしても思うことは、前回の船旅よ。ボロ船に乗せられ、行きはともかく帰りは

怪獣とのバトルとか。言ってる悲しくなってきた。でも苦勞の甲斐あつてハンター試験のこと分かったから良いけど。おっと、そろそろ消灯の時間か。自分の部屋で念修行&瞑想でもするかあ。

さて、3日間の豪華客船の旅を満喫した私は、気分上々でクカンユ王国に降り立った。さて、次の港はどこだっけ？ 入国審査所で聞いてみようかな。

聞いてみたら、ここから北東へ750キロのポルドー港だつて。ご丁寧に宿泊する町まで教えてもらった。ラッキー！ 念のために地図を拝見…。何々、首都を経由して、各地方を回り、泊まる…。と。まあ妥当だな。到着は20日後。うーん。時間掛かりすぎかな。いくつか飛ばして進もう。いざというときは超ダッシュするし。ただ、それぞれの町は見とこう。特に首都。さて、早速出発しよう。でも地図はもらつとこうかな。…何？ 1万ジェニー？

…お金取るのね。



「入国審査案内所受付裏にて」

「さて、彼が連絡のあった受験者か」

「ええ。まだ若いですね。何の疑いもなくこちらのおすすみを聞いて、それに従うようです」

「まあ、まだ彼はハンターじゃないからな…それに、そのルートをとってくれたほうが、こちらとしてもありがたい」

「達成難度C、仮称『クラークン』単独討伐…今でも信じられませんよ。冗談としても笑えない」

「まあな…もしこちらで事に当たるとしたら、討伐隊の結成も視野に入れてたしな…。それが本当か、まぐれかは彼が想定通りのルートをとった時分かるだろう」

「達成難度C、仮称『獣』ですね…。こちらとしては討伐してくれたらありがたいですが、もしそうなら試験でポーナスを弾まなきやいけませんね」

「まったくだ。さて、どうなることやら」

「期待して待っていていきましょう。万が一通らなければ我々の出番ですからね」
「わかってる。……気が重いがね。彼には期待しよう」

26、ジエヴオーギンの獣

今現在、私は港から約300キロの地点にいる。ここはジエヴオーギン地方。どっかで聞いたことがある地方だ。原作も明らかに現実世界のモデルがあった。そして、今私は困っている。ここから先に行けないのだ。

話は大使館を出発してからにさかのぼる。あれからルートの確認をしたのち、すぐに出かけることにした。前回の失敗があったため、早めに現地入りしようと思ったのだ。で、3つぐらいの町を経由して首都に到着。この時点で推定到着時間を3日も上回っている。ちよつと首都観光をしようと思い、ぶらぶら観光する。…ここはフランスだね。雰囲気似てる。行ったことないけど。街並みとか、お城とかもつくりがそれに近い。

しかし、もしそうなら現実世界の中世ウンコの街とかじゃ無くてよかった。下水整備されてる。何ならここもヨークシンぐらい発展してる。250年前だぜ？もう近代国

家じゃないか！

ただ、情緒はかなり残ってるから見てて非常に楽しい。石造りの雑多な街並みさえ綺麗なこと綺麗なこと。食も様々なバリエーションに溢れてる。ちよつと奮発して豪華なレストランに入る。変な目で見られたが、気にしない。絡んできそうな奴には念威圧だ！

そして出てくるフランス料理。ああ、これだよこれ！前世のとはちよつと違うけど、洗練された食文化がここにあった…！

私、ここ好きになりそう。お食事を堪能して、宿に泊まる。さすがに浴場はないがシャワーが付いてた。前の所はなかったから…。まあ、私は細胞操作で老廃物とかはあんまり出ないんだけどね。そんなの出すくらいなら有効活用しろ！でも、下のは出るよ？汚いから言わないけど。消化したら出る。当たり前だよなあ？

実際、その辺まで出なくなると人間をやめそうなので躊躇してるのが現状。私は人間のみままで生き延びたいんだ！ただ、老廃物とか出なくなるのはありがたいけどね。あんまり汚れないし。

さて、首都観光も済んだし、出発だ！次の地方まであと約150キロか。まあのおんびり行こう。ランニングしながら見える風景は、サヘルタとは違った風情があつて飽きな

い。田園っていうのかな。ミレーっていう絵描きの『落穂拾い』っていう絵の光景まんまだ。大変のどか。たまに見える農家の家もグッド。

そんなことをつらつら考えながら、一日走ったら、夜には着いた。確か地図で言うところはジエヴオーギン地方らしい。そのドーニュ村についた時、なにやら騒がしかった。まあ私も一日走ってちよつと疲れてたので、ほつといて宿を探し、泊まった。ただ、宿の人も心ここにあらずって感じでそわそわしてるのが気になった。

次の日、出発しようと荷物をまとめてたら、村の人々から止められた。何でも正体不明の「獣」が出て、襲われるらしい。

…またか。

私はこういうのとよつぽど縁があるらしい。で、詳しく聞いてみると、古くから巨大な「獣」の目撃情報はあつたらしい。近隣一帯では、「ジエヴオーギンの獣」としていわば伝説にもなっていた。しかし、近年になって人を襲い出した。しかも年々被害が増えつつあるらしい。

…主に被害者は女性や子供。もう合わせて1000人はやられてるとのこと。

…1000人!?かなりの被害だぞ…。まさか…。

更に、「獣」はかなり残忍で、獲物を捌った後、内臓のみを喰らっていく。常に農作業とかで単独になるところを狙われるとの事。極たまに生き残った者から話を聞くと、姿は巨大。犬の様な外見。そして…不思議な力を使う。離れた所でも不思議な力によって殺される…。

…十中八九念使いじゃないですかー!ヤダーー!!

しかも相当強い奴だ。しかし、1000人もやられてるなら見過ごせないか…。
しょうがない。やるか。

村人達に、私その不思議な力を使うから、そいつを倒してくるって言ったら驚かれ、さらに止められた。その不思議な力を持つ討伐に来たハンターですら2人ほどやられてるらしい。…マジで?

相当じゃなくて超強い奴じゃん。

《絶》で隠れて通り抜けようかなあ…。ただ、ハンター試験あるしなあ。ん?もしかし

て大使館の奴ら、知っててここに誘導した？ここには寄った方がいいってそれとなく言われたし。現役ハンターがやられる様な奴の所に受験生を行かせるなよ…。もしかして、こんな奴から逃れて生き延びるのも試験の一つか？

しかし聞いてしまった以上、私もスルーするのは寝覚めが悪い。出会って見て、無理だったら逃げよう。

そうと決まれば村人の説得だ。以前の様に大岩を念でコナゴナにし、無理矢理納得させる。さて、そんなに目立つ奴なのに普段は見つからないって事は《絶》使ってるな。ますます厄介だ。とりあえず、村から離れて見晴らしのいい、戦いやすい畑に行く。収穫は済んでるので一面固い土だ。では《円》を使って張り込む事にしよう。

さて、《円》の範囲には居ないね…。私の《円》の半径はそろそろ1.5キロほどになるんだけどなあ…。まあ気長に待つか。

と思つたら、気配を察知。なるほど、コイツか。間違いない…。かなり大きいな！小型の象ほどあるぞ。見た目は犬に近いが…。お、《絶》を解いたぞ。コイツ、ワザと入つて来たな…。しかし、凄まじいオーラ量だ。今感じてる量だけでもマイケル4人分ぐら

いあるぞ……。4マイケルだ。あいつそろそろ数字で言うと同在オーラ1500ぐらい行くからな。大体6000だ……。普通のハンターが厳しい訳だ。

だが、それでも私の半分以下だ。多分行けるだろう。……なかなか慎重だな。こつちの力量を測ってるのか。私も節約の為に《円》はかなり薄くしてるからね。私のオーラの質も関係してるかも。……おっと、一気に近づいて来た。そろそろ姿が見えるか……見えた！

よし、こつちも《円》を解く……ん？キョロキョロしてる？まさか《円》を知らない？しかし、さっきの《絶》はかなりの練度だった。……もしかして本能使ってるタイプか。それにしても異常なオーラ量だけど。だが、それならどうともなるか。では、行くぞ！！《堅》!!!

こちらを観察していた「獣」だったが、こちらを見て、一瞬硬直した。その隙を見逃すほど甘くは無い。一瞬で距離を詰め、念強化されたマンティコアの神経毒をオーラで飛ばしてぶち込む！

流星にあの凶体でも効いた様だ。ビクンと震えた後、その場に硬直した。すかさず伸ばしたオーラブレードで首を断ち切る！

よし！

さて、死亡確認するか…と慎重に近づいたところで違和感に気付く。…オーラが消えてない…？まさかまだ生きてる!? ヤバい、早く頭を潰そうと思つた時、「獣」がビクビク動き出した。そして、長い尻尾で頭を巻き取ると、自分の胴体にくつつけた…。3秒程で接続が終わり、こちらを睨み付けてくる。

少し下がって距離を取る。まさか、コイツは環境適応型か！しかも細胞操作までしてる!!こんな所で私の同類に会えるとは思わなかった…！しかも適応力、復元力は癩だが向こうが上だ。適応にかなりオーラを使つたらしいが、適応後、僅かに身体が大きくなつてる。しかも潜在オーラも増してるな。馬鹿みたいなオーラの原因はそれか！

まずいな…私の能力が向こうにあるとこんな厄介になると思わなかった…！仕方ない。プランを少し変更する！

奴に対して私の知つてる毒を延々とぶち込んで、止まつた所を一気に決める!!一番強い神経毒は使つたが、それでも少しは止まるだろう。確実に脳と急所を潰して、消滅させる。これは私にも効くプランだ。仕留めきれなかつたらよりパワーアップする虞がある。チャンスは一度。行くぞ！

「獣」も先程ので怒り心頭だったのか、迷わず迎え打つた。だが、オーラ技術はまだま

だ私が上だ！体術も気をつけたら多分大丈夫だ！右、左、躲して…合間にオーラも飛ばしてくるが、ガードでやり過ぐす。うわっ背中から触手が4本生えてきたぞ！そんな事も出来るのか！4本同時に襲って来る…先端は毒だな？しかし、今そんなのを喰らう訳にはいかない！それも躲す！

そして噛みつきに入った所をアッパーでカチ上げる…ちっ。獣の本能か防御は出来るらしい。しかし甘い！マイケルに使った《隠》の戦法を使つて死角から同時に叩き込む!!今回は致死性の奴を10種類ぐらいブレンドしてブチ込んだ!

流石にいくつか対応してない毒があつたのか、奴の動きが硬直して止まる!数瞬で適応するだろうが、そんな余裕は与えない!

《硬》で頭在オーラの全てを両手に集める。そのオーラ約12000!!パンチで砕いてもいいが、万が一の復元を恐れ、オーラ波で確実に消滅させる!!

豪ッ
!!!!

凄まじいオーラの奔流が頭部目掛けて炸裂する!!見事頭は消滅!しかし、まだだ!!頭の消えた胴体に、今度は同等のオーラを手に集め、握り込んで心臓付近にぶち込む

!

ドゴン!!!

まるでトラック同士の衝突の様な音を立てて、奴の身体が見事に四散した。

…どうだ!?

オーラは…消えた。復元する様子もない。10分程臨戦態勢で見つめていたが、今度こそ確実にくたばったらしい。私はホツと息をついて暫く座り込んだ。

今回もしんどかったなあ…。

その後、良く死体を調べてみたら、右足の毛の内側に「433-k」と言う字を見つけた。…これって…もしかしてロットナンバーか？

コイツ、人造生物だった？

27、ミンボ共和国へ

どうも。最近モンスターハンターの道を着々と進んでいるカームです。ハンターになったら本気でそうなるのかなあ。私ってなんかモンスターの遭遇率高いし。しかも念使いの。普通の念能力者に会うより難しい気がするんだけどなあ。

さて、あれから粉々になった奴の足の一本を持って村へ戻る。本当は倒した証としては頭部がいいんだけど、コイツ頭だけでも再生しそうだからね……。頭を確実に潰さないで倒せなかったし。

しかし、あんな出鱈目な奴が居るとは思わなかった。しかも人造生物。ただ、何となく暗黒大陸なんだろうなあって思った。根拠はないが。あのマンティコアと似た様な感じがした。

村へ持ち帰って無事に討伐した事を伝える。ビックリされた。そりやそうか。象クラスの大きさの足だからなあ。残りのパーツの場所は教えたから、後は回収をお願いしよう。

その後、村人総出で大宴会が開かれた。主賓、私。遠慮したが、まあまあと言われて

あれよあれよと座らされた。という事で、ありがたくこちらのご馳走を頂く。非常に美味だった。特にチーズ。最高に美味しい。ここでしか食べられないらしい。持って帰って家族の土産にしたいなあ。流石に腐るから無理か。作り方だけでも教えて貰おう。いつか再現するんだ！そう言ったら大量に貰った。しばらくチーズには困らないな！

ちなみにあいつのパーツは無事回収されたらしい。ハンター協会に届けるのだと。なんでも前から賞金首だったらしい。まあハンター返り討ちにしてるならそうなるか。賞金を渡したいから連絡先教えてくれって言われたけど、これからハンター試験あるからすぐ発つし、間に合わないから要らないって伝えた。ついでに被害者の遺族に分けといてって伝えたら、納得された上でとても感謝された。「アンタなら絶対受かる。もし落ちたら俺たちが抗議してやる」って言われた。ありがたいね。気持ちは貰っておこう。

さて、夜も遅くなったので泊めさせて貰う。流石に例の部族の様な熱烈歓迎は無かった。ホツとしたような少し残念な様な。村娘さんたちが揃って肉食獣の様な目で見てきたから、ヒヤヒヤしてたんだよ。まあこの辺は宗教の戒律が厳しいみたいだからね。良かったよ。無責任に父親にはなりたくないしなあ。

しかし、思ったね。強い奴はモテる。ストロングイズビューティフルですよ。ハン

ター試験終わって世界観光も終わったら、ちよいワル親父になってナンパ旅行とかしてみるか? : いや、私には合わないな。言つてて恥ずかしくなってきた。そのうち何とかなるだろう。最悪将来相手が居なかつたら、マイケルかジョセフあたりに紹介してもらおう。

特にジョセフの奴、ジュニアハイぐらいから舎弟の妹と付き合ってるし。おのれ。私にも紹介しろよ!

ちなみにマイケルはいない。アイツは超ストイックだからな。兄さん知ってる。でも、ドンになつたらいい女の1人2人ぐらい余裕でしょ。

次の日の早朝、村人たちに惜しまれながら出発する。村人から「ハンター試験、頑張れよ!!」という激励をいただいた。ありがたいことだ。これで落ちるのは流石にダサイから気合い入れなきやなあ。

たつぷりの饞別(チーズ)も頂いた事だし、出発しよう。

そこから走る事5日。無事にポルドー港へ着く。道中チーズ祭りでかなり大満足。行く先々の宿泊した所で野菜とか干し肉とか買って、焼いて溶かしたチーズを乗つけて食べる。これがまた最高に美味かった。地方の風景も中々素敵。帰りは本当にじっくり旅行しながら帰ろう。

ポルドー港も中々発展していたが、また雰囲気違った。なんと言うか、貿易港みたいな感じかな。倉庫が沢山ある。前は観光地の様な感じだったから、また新鮮だ。さて、いよいよミンボ共和国だ。再び船の手配を行う。これまたアツサリと通った。うん。旅行者があんまりいないのかな？でも、前の船旅は結構客がいたような…？もしかしてハンター協会が何か事前に通達してる？まあ早く出られるからこちらとしてはありがたい。

今度は2時間後に出港。流石に遊んでる時間は無いな。残念だが次の機会にしよう。さて、次の船も割と豪華だな。乗船時間は同じく3日と。休息を取りながら船旅を満喫しよう！



くハンター協会　クカンユ王国支部　事務所く

「…今報告が入った。見事討伐完了らしい」

「出来るとは思ってた向かわせましたが、本当に達成するとは。信じられませんね」

「そうだな…。しかし、2回も続くとなれば本物で間違いない。貴重なシングルハンターが2人もやられた相手だったんだが…」

「それ相応の実力はあるという事でしょう。もしかしなくてもダブルに匹敵する力はあるという事です。功績を以ってシングルにしますか？」

「確かに実力的には申し分ない。弟子を取れば直ぐにでもダブルになれるだろう…まあ我々からのボーナスとしてはシングルだな。しかし、いいタイミングで期待の新人が入ったものだ。2回目の新大陸の調査も後10年以内には可能になる。彼はサヘルタ出身だからそちらの船に乗るだろうが、ぜひ調査団のハンターの中核として頑張っていたきたいものだ」

「ふふ。まだ彼はハンターになってませんよ。気が早すぎじゃないですか？」

「逆に彼が落ちるというシチュエーションが想像出来ないんだが。もしそうなりそうなら少し挺入れをしようかな。必要ないだろうがね」

「そうですね。私も見に行きます」

「頼んだよ。後程私も向かう。さて、まさか『新大陸紀行』が御伽噺ではないとは思わなかったが、このリターンが実在するならば、また1つ人類は大きく前に進む事が出来る。絶対に成功させねばな。期待してるよ。カムムアンダーソン君」



ミンボ共和国に着いた。うん。インドだね。地図上だと北のはずなのに、全然寒くない。むしろ暑い。恐らくこれも暗黒大陸の影響か。あんなに広いようじや季節とかもごつちやになつてるのかな？ヨークシンも全体的にあんまり寒くないし。

寒いのが苦手な私としてはありがたい。寒いと病気が悪化しやすかったからなあ。今になつても出来る限り寒い所には行きたくない。

本当にいい世界に転生させてくれたものだ。今は感謝しかない。神よ、ありがとう。

ミンボ共和国の首都付近のチャンドラ港だったな。ここから更に北東に300キロか。まだまだ試験までは日数がある。ここまで来るのにかかったのが20日ぐらいだからだ。後1ヶ月以上ある。まあ何があるか分からないから早めに現地入りしよう。まずは首都に向かおう。

首都に着いた。ここはやつぱりインドだ。ジョジョ3部のアニメのまんまだ。人も、街も、環境も熱気に溢れている。中央には大きな川が流れ、人々はそこで沐浴をしてい

る。ガンダーラ川らしい。うん。向こうのガンジスだね。…ん？動物を洗ってる？さらにその近くで洗濯してる！あ、水を汲んでる…。まさか飲み水じゃないよね？なんか上の方から明らかに棺桶みたいなのが流れて来てるよ…？

こちらの人々の耐性はどうなってるんだ？？試しに私も入ってみよう。荷物を預けて、服を脱いで…と。とりあえず、水中活動してみよう。

…。やっぱり病気のオンパレードだ。結膜炎から始まり、皮膚疾患、大腸菌、チフス、コレラなどの腹にくる奴や寄生虫の皆様などなど、昔の私だったらこの水に触れただけで危険な状態だ。…人間の環境適応力はやはり侮れない。だからこそ、ここまでの繁栄が出来たのだろう。しばらく「バイオフィーム・コンパート完全適合」で適応を済ませて、水から上がった。周りの人に自殺未遂かと心配されたので焦ったが、大丈夫だと伝えてから急いで宿に向かう。どうやらたまにいるらしい。この水ホントに大丈夫？って聞いたたら、ガンダーラ川は全てを受け入れ、押し流していく。という素敵な回答を頂いた。…いや、質問に答えてよ！察しろって事か！？…多分飲む時は煮沸してるんだろう。そうに違いない。

さて、ここは乾燥してる為か、不衛生なように不衛生じゃない。まあ私は不衛生は歓迎な方だが、流石にずっとはキツイからね。トイレとかも思ったよりは衛生的で良かった。むしろサヘルタの田舎の方がトイレは汚い。ただ、砂で拭けつてのには参ったが。

夕食はレストランに入り、カレーを注文する。本場だからね。えーっと、確かもの本では、左手は不浄を拭く手なので右手で食べるという事だったな。よし、いただきます。

…美味しい!!辛さがいいスパイスだ。この手で食べるつてもスプーンで食べるよりも手触りの触感を伴ってていいね!これはたまらん!

と、ガツガツ食べてたら、店員が申し訳無さそうにスプーンと手拭きを持って来てくれた。

……ガツデム!

さて、宿では今日はやる事がないのでいつもの瞑想と細胞操作を行う…が、先程の失態が頭にチラついてあまり集中出来なかった。

私、あれじゃホント野蛮人…。

28、厄災のカケラ

ちよつと恥をかいってしまったが、まだ試験まで1か月はある。2、3日観光してからチャンドラ港へ向かおう。

大使館に赴き、いい名所を聞く。ここでは寺院巡りが良いらしい。初日はそうしよう。また、「神々の山」と呼ばれる場所があるという。少し首都から離れているが、一見の価値有りらしい。2日目はそうしようかな。では早速地図を買って出発だ！

首都の各地にある寺院を巡る。歴史を感じるいい寺院だ。瞑想が捗るな！僧侶にお願いし、一緒にやらせて貰った。現地の僧侶に出来を褒められた。何でも「無」の境地に至り、「空」の入り口まで到達しているらしい。前世から続けてきた瞑想がいい感じに成果が出ているようだ。ちなみに「空」とは何かを教えて貰ったが、何やら複雑な概念らしく、あまり理解出来なかつた。しかし、コツを教えてもらい、実践してみる事で何となくオーラの流れがスムーズになった気がした。また、オーラの質もより澄み渡つたように思う。

オーラの意が完全に消える事で《隠》が出来るが、これを戦闘中に全て完全に出来た
らかなり強いと思う。より生存の道がひらけるだろう。ただ、どうしても感情は揺れる
ものだ。特に戦闘中なら尚更だ。これも地道な訓練が必要だ。

などと、様々な事を考えていたら5時間も経ってしまった。場所を提供してくれ、更
にコツまで教えてくれた僧侶に丁寧な感謝の意を述べると、

「貴方はもしかしたら悟りをひらけるかも知れませんね。これからも精進してください
い」

と、言われた。だが、こんな生き汚い欲に塗れた人間では無理だろう。興味はあるが。
悟りをひらいた場合、世界と合一し、生命体として一段上の存在になるらしい。いわば
神になれるそうだが、私は私だ。この世界を健康に生きる。ただそれだけでいい。
瞑想は続けよう。悟りをひらけなくても、これは私のライフワークだ。

他の寺院を廻ることは出来なかったが、実に有意義な時間だった。明日は「神々の山」
か。楽しみだ。宿に帰ったら引き続き瞑想しよう。

さて、2日目は首都から約40キロ離れた場所にある。走つてすぐだな。朝食を摂つ
たら出発しよう。

直ぐに到着した。もはや自分も人間辞めてきてる気がする。フルマラソンの距離な

んだけどね……。目の前には大きな山が有る。これが「神々の山」か……。うーん……。普通の禿山にしか見えない。何か目印か遺跡があるのかな？現地の人に聞いてみよう。

入り口の人に聞いてみた所、ここはかつて、凶悪な神を封じた場所らしい。名を「ヴリトラ」と言う。何でも「天地を覆い隠すもの」というらしい。伝説では雨雲を奪い、干魃を引き起こしていたが、当時の神によつて封印されたとの事。これまた何とも言えないが、神話あるあるだね。干魃のような自然災害に対して、悪神の名を当てる事はよくある事だ。で、この山のどこを見たら良いんだろう。何か遺跡でもあるのかな？

と思つていたら、入り口の人に今日は訳あつて入れないと言われた。がーんだな。まあ入れないならしょうが無い。どうりで観光客の姿がなかった訳だ。

仕方ない。帰ろうと思つていたら、なにやら入り口の職員のもとに、他の職員が耳打ちして、その後特別にいいですよ、という言葉をいただいた。いや、嬉しいけど大丈夫なの？と聞いたら、まあ1人ぐらいなら大丈夫とのこと。本当に良いのかなあ。まあ、大丈夫なら観光するか。折角来たし。1人で見る事ができるからのんびり観光できるね！



「ミンボ共和国 ハンター協会支部事務所」

「馬鹿な！なぜあの場所に誘導した！」

「私が来たときは既に指示が通っていたみたいですね…。非常にまずいです」

「まずいどころではないぞ！すぐに彼を止めろ！」

「…遅かったようです。彼は既に宿泊先を出てます。あのスピードなら1時間とかからないでしょう」

「くそっ!!あの距離を1時間で行くような人材をみすみす死地に追いやってしまうとは…！」

「…討伐達成難易度A、『ヴリトラ』…。本当にまずいことに今日が3年に1度の復活の日です。まだ他の日ならよかったのに…」

「こちらの伝達ミス…か。彼にどう詫びたらいいのか分からん…。仕方あるまい。すぐに現地の星持ちちに向かわせろ」

「既に手配しています…しかし、時間的に間に合うかどうか」

「後は、彼がなんとかしてくれることを祈るしかない…か」

『ヴリトラ』はあの山から出ることは出来ません。しかし、あの山では驚異的な力を発揮します。星持ちすら危ないでしょう。もし、生存確認できないようだったら引き返せと伝えてあります」

「出来れば遭遇してすぐに逃げてくれれば良いが…」

「…祈るしかありませんね…。願わくば、生きて出てこられることを」

「……死ぬなよ…カームⅡアンダーソン！」



はえく。大きい遺跡があったもんだ。遠目から見えなかったけど、土に埋まつてるタイプだからなあ。地下墳墓みたいなものか。カタコンベだな。悪神被害者の方々かな？

何々…パンフレットにある神話によると、「ヴリトラ」は雲の牛を盗んで…雲の牛？積乱雲の事か？まあいい。地域に干ばつを引き起こし、人々を虐げた。人々を哀れんだ複数の神々が、協力して「ヴリトラ」に致命傷を与え、力を封じた上、この山に封印した

らしい。その力によって「ヴリトラ」は封印されているが、3年に一度だけ復活する日があるという。

それが今日か。

ヴリトラは力を失ってはいるが、まだまだその力は驚異で人々はその日だけは山へ入ることを禁じられる……駄目じゃん！何が大丈夫だよ！先に言えよ！！マジでいたらどうすんだよ!!!

いや、いないよね。冷静に考えてそんな奴がいたらのんきに観光地にしてないもん。禁足地どころの騒ぎじゃないからね。まあ大丈夫だと思うけど、確認してみるか。あくまで確認ね！

《円》！

……………ミツケタ

今、何か頭の中で声が出たような……！嘘だろ……！聞き間違いだと

……ヨウヤクミツケタゾ……モウノガサヌ……ソコダナ？……スグニイク

くそっ!!マジか!?マジでいたのか!?どこだ?どこにいる?……いた、《円》に入ってきた
!

いやいやいやいや、何だこのオーラは!!!若干私より多いぞ!!しかも速いッ!!もう接触
する!!

ドゴオツ
!!!!!!!

地下墳墓の壁をぶち壊し、やつは現れた。巨大な蛇だ。30メートルぐらいある……！
頭部の横には、エリマキトカゲのような、翼のようなものを生やしている。駄目だ。

《絶》をする余裕もなかった。

こいつ、神話では致命傷じゃなかったか？力も封印されていたんじや？何だよこのオーラ量！ふざけてんの!?

……ヨクモワレヲフウィンシタナ……ゼツタイニユルサヌ……

……恐らく頭に直接話しかけられている。そんなこともできるのか。駄目だ。こいつに勝てるヴィジョンが全く浮かばない。逃げるか……!

……ノガストオモウカ?……キサマハココデシヌガヨイ!

!

突如、周囲の環境がより乾燥していく……!同時に私の身体からドンドン水分が抜けていく!!!こ、これは、奴の念能力か!!!まずい、かなり範囲が広い!!そしてなんて凶悪な能力だ!!!恐らく対象の水分を奪う能力!そして対象は恐らく奴の視野全般!!このままだ

とすぐに活動できなくなる!!オートファジー【自己貪食】発動！水分を補填！

しかしこのままじゃじり貧だ。奴もこの能力でオーラを消費してるが、こちらがへばる方が速い。急いで能力を解除させるしかない。あの速さを見るに離脱も無理だ。くそつ。こんな所で死んでたまるか！

《凝》で足に力を入れ、力を込めて奴の元へ飛び込む。そして…オーラブレード！…ッ避けられた!!

…：ホウ、ワレノチカラニタエルカ…ナラバコレナラドウダ？

そう言つて奴は奪つたはずの水分を奴の前方に集め、レーザー状にして4本発射してきた。速いっ！避ける間もなく、2本は躲したが他の2本は足と胴体に被弾し、貫通した。くそつ…【日々是健康ヘルシーマン】!!駄目だ、本当にじり貧だ。この能力をなんとかしないと勝ち目はない…：そうだ！【完全適合パーフェクトコンバート】！その中の水中適応！その一部再現！これで水分を生み出す…：よし！できた!!消費はゼロではないが【自己貪食オートファジー】よりは断然少ない！細胞が全力で水分を生み出して間に決着を付ける！

キサマ…シブトイゾ…！

水レーザーが来るか!?あれもなんとかしないと……まずい、水が集まりだした。今度は10本か……!操作……無理か!恐らく奴が操作してるからだ。仕方ない、ぶつつけだがあれをやるしかない。

……来た!こちらも前方へ進みながら急所を守り、オーラを柔らかくする!僅かにそれればそれでよし!ぐっ!!4本それだが6本は被弾!うち4本はかすり傷!胴体2カ所に喰らう……ここだけ【日々^{ヘルシーマン}是健康】!動ける範囲でいい!奴に接近し、念弾を飛ばす。当然の様に避けられるが、本命はそつちじゃ無い!伸ばしたブレード2刀流で更に避けさせ、本命の《隠》で隠したオーラの針を足に作り、レイピアのように伸ばす!奴が避けたと思っていた所にオーラのレイピアが奴の目に刺さる!やった!どうせ胴体に刺してもはじかれるだろうから見えてる急所にしてみたが、無事刺さったようだ!

そいつは今まで私が経験してきた毒のスペシャルブレンド全部混ぜだ!ついでに病気も全てプレゼントしといた!念でも相当強化したぞ!

しかし、奴は直後に大きな口で噛みついてきた。そんな馬鹿な!一瞬でも止まらないのか!?だが、少し動きが鈍いぞ!これなら何とかなるか!

コレハ……キサマ………ナニヲシタ!!!

自身の状態に戸惑っているらしい。嘔みつきを避け、潰した眼の死角に周り、攻撃を仕掛ける。眼の周辺の肉がボコボコと泡立ち、非常にグロイ事になっているが、もしかして抵抗しているのだろうか？不味いな。これが最後のチャンスかもしれない。奴も近接だと蛇的な動きの攻撃と例の水レーザーだが、水レーザーは自身に当たるため滅多に撃てない。

よつて、このまま近接で決める！特殊能力は脅威だが、近接はそうでもない。それにやつは《隠》には対応してない！これでなんとかする！

先程とは違い、私の攻撃も当たる様になった。当たるだけだが。ブレードは文字通り鱗で弾かれる上に、そもそもオーラ量で通じない。ただ、若干《流》も行い、こちらの攻撃に対応している事から、全く効かない訳では無いはずだ。だからこそ、この戦法が通じる！

行くぞ！《硬》！

流石に《硬》は厳しそうで、奴も身体をくねらせ避けようとするが、こちらは見せ札だ！原作のウヴオーギンも使っていたが、地面を砕き、瓦礫を奴に向かって四散させる！

瞬間、《絶》を行い、右手に《硬》、そして《隠》！どうせピット器官で熱感知してるだろうから、より水分を表皮に生み出し、体温を下げる！気休めだろうが、ここまで来れば関係ない！

そこで、水レーザーを胴体に3本喰らうが、頭と手足は避ける！

くたばれ!!

ドゴン
!!!!

《隠》によつてこちらの動きが読めなかったのか、奴の胴体のオーラの薄い所を目掛け、拳をぶち込む!!

……ガバアツ
!!!!

よし！効いた！動きが完全に止まった!!

今だ!! イメージは貫通するレーザー! 太さは拳ぐらい! 奴のオーラと肉体を貫き、脳を破壊する! 奴の水レーザー以上の威力で…発射!!!

ビツ!!!

見事に貫通! しかしまだ動いている。しぶとい奴だ! 仕方あるまい。こちらも復元! そして奴の頭を粉々になるまで砕く!

飛んでくる尻尾を躲し、《硬》のオーラブレード! 流石に頭を貫かれては避けられない。

スパン!

見事に首と頭が切り離されるが、同時に最後の力なのか全方位から水レーザーが飛んでくる。駄目だ、避けられない! だが頭だけでも避ける! 手、足、胴体、そして…首に喰らう。合計約20発…! 見事にほぼ急所だ…! 喰らった瞬間、「日々^{ヘルシーマン}是健康」を発動するも、意識が急速に失われていく…

…オノレ……フウインサエナケレバ！……ニンゲンメ……ダガ、キサマモミチツレダ
 ……！

クソつ、不味い…首が千切れかけてる…間に合うか…!?残り少ないが全オーラを使って全力で【日々は健康】をサポートする！奴も死に掛けで徐々に能力が弱くなっているが、意地でも解除しないらしい。こうなったらこちらも意地でも負けない…！意地の勝負だ…!!

段々奴の能力が弱くなる…これなら助かる！…今、重要器官と負傷の半分近く復元完了した。だが…血が流れ過ぎた。集めるオーラも無い…だが、負けない。絶対に生き残る……！

その時

「いたぞー！ここだ！」

「なんだこの惨状は…！アレが『ヴリトラ』か!!聞いた通りだ。気をつける、死にかけても脅威だぞー！」

「おい！アイツじゃないのか？まだ生きてるぞー！」

「早く回収しろ、あれじゃもうすぐ死ぬぞー！」

という声が聞こえた。∴助けが来てくれたか∴。もう目も霞む∴だが助かった∴∴!

そして、私は安心して意識を手放した。

29、ハンター試験について

目を覚ました時、何処か判らないが病室のようだった。この私が病室を間違うはずがない。何せ前世ではほとんど病室に居たからな。病室マスターだ。：嫌なマスターだ。

：近くにナースがいるな。ちよつと声をかけてみよう。

私の呼びかけに気付いたナースが、慌てて外に飛び出し、誰かを呼びに行つた。いや、色々質問があつたんだが…。

しばらくすると、医者を含めて3人の男が入ってきた。：後の2人、誰？

すると、まず医者から話し出した。

「驚異的な回復力ですな…。人間離れしてると言つていい。もう完全に傷が無くなつておる。詳しく見てみなければ分らんが、それ次第ではもう退院ですな」

「運ばれてる時から傷が塞がり始めたようですからね……。だからこそそのあの結果といふところでしょうか」

もう一人のメガネで黒スーツの男が話し出す：いや、だから誰よ？

「おっと、これは失礼。私はハンター協会の者です。名をネーブルⅡファジーと申しませう」

なるほど、ハンターか。道理でオーラの流れが淀みないわけだ。これは：マイケルと同じぐらいか？

「私も自己紹介しよう：同じくハンター協会所属、マティーニⅡドライと言う。アンダーソン君、はじめまして」

ロマンズグレーのオールバックを決め、品の良い茶色のスーツを着たナイスガイである。こちらも中々の使い手だ。明確にマイケルより強いだろう。思わずはじめましてと返したが、何故ハンター協会の人が？

それに、何故私の事を知っている？

そう思っていたら、医師を退室させ、マティーニさんが話し始めた。

「質問したい事は山ほどあるだろうが、まずは一番気になつてるだろう事から伝えよう。」

君があゝの『神々の山』で遭遇した『ヴリトラ』だが…無事に生命活動の停止を確認した。今、奴はハンター協会で解剖中だが…様々な致死性の毒や病原菌の温床になっているらしくてな…調査が難航している。流石伝説の悪神といったところだ」

あ、ごめんなさい。それ私です。

「そして、ハンター協会としては討伐達成難易度A『ヴリトラ』の単独討伐を認定した…。君の事だ。併せて、討伐達成難易度C、仮称『クラークン』及び、同じく難易度C、仮称『獣』の単独討伐も認定する事にした」

ああ、あいつらか…しかし、何故？私はハンターですらないんだけど？

「本来であれば、君は受験生として試験を受けて貰う所だが、数々の功績をもって、ハンター協会は、超法規的措置をとり、君をハンターと認定する！更に、この度の功績をもって、シングルハンターに認定する。これは決定事項だ」

「…いやいやいや、流石に試験会場にすら行っていないのに、ハンター認定はどうかかと思えますよ！」

「では、逆に聞くが、例えばハンター。そうだな、我々2人がかりでもいい。奴に勝てると思うかね？ネーブル君、君もだ。忌憚のない意見を述べてくれたまえ」

「わかりましたよ……ふっ」

そう言うと、2人は《練》を行った。…なるほど、上方修正だ。顕在オーラが「獣」ぐらいはある……今まではワザと抑えていたな？……だが…。

「……正直に言いましょう。『クラークン』と『獣』は何とかなるでしょうが……あの『ヴリトラ』は難しいかと…」

「…ハッキリ言ってくれて大変ありがたい。我々もそう思っていた所だ」
「参りましたね……これでも割と自信はあつたのですが」

と、ネーブルさんも《練》をやめ、ボヤク。確かに能力次第では多少はいいかも知れないが、しかし、それでも厳しいと言わざるを得ない。

「いえ、お二人はかなりの実力が有ると思います。だけど、奴の特殊能力を突破して、ダメージを与えるとすると……私は相性が良かった」

「謙遜しなくていい。そして君は我々2人でも厳しい相手を単独で討伐した。これは事実だ。つけ加えて言えば、我々はこれでもトリプルハンターだ」

「そんな貴方に態々ハンター試験を受けさせるなんてナンセンスと言わざるを得ません。時間と人件費の無駄遣いですよ……。簡単に言えばそう言う事です」

「……後は、ハンター協会からの詫びだな。正直に言えば、『クラークン』の時の報告を

受けて、君の調査を始めた。恐らく気付いているだろうが、『獣』と接触しやすくなる様に手配したのも我々だ。試験の一環としてな。それで終わりのはずだった……。だが、『ヴリトラ』だけは想定外だった」

「協会の恥を晒すように申し訳ないですが、連絡ミスでした」

「それゆえ、ここで正式に謝罪させて貰う……。本当にすまなかつた……」

そう言うと、ネーブルさんとマティーニさんは頭を同時に下げた。……多分この人達は協会ではとても上位の人だと思うのだが、躊躇なく頭を下げたぞ……。

「頭を上げてください。私は生きています。謝罪は受け入れませんが、もうこれ以上はいいですよ。ハンター資格を得る事が出来ただけで充分お釣りが来ます。……それに、最後に複数のハンターが来てくれました。手配してくれたのはあなた方でしょう？ 本当に助かりました」

2人は頭を上げ

「そう言つて貰えると大変ありがたい。私たちも最悪殺される覚悟で来たから……。それに我々としては優秀な人材は放つてはおけない。……君は教導役に就く気は無いかね？」

「ありがたい話ですが、お断りします。私は世界を見てまわりたいですし、ハンターに

なったばかりで弟子の育成などとても出来ません」

「そう言うと思つたよ。だが、ならばせめてこれだけはお願ひしたい。10年以内にハンター協会はある大プロジェクトを控えている。『ヴリトラ』を倒せるほどの実力を持つ君には、そちらに是非参加して欲しいのだ。勿論これは強制ではなく、お願いだ。いかがかな?」

「内容にもよりますが…良いですよ。ただ、私は今回自分の力のなさを実感したので、世界中を回りながら好きにさせてもらうつもりです…。それを大目に見てもらえるならば、ですが」

「君で実力が無いのなら我々の立場がないが…よかろう。この私マティーニⅡドライの権限をもって、そのように約束しよう。ただし、君もハンターだ。ハンター十ヶ条は知っているかね?」

「いえ…でもハンターの決まり事ですよね?」

「あとでそのネーブル君に聞くといいが、其乃一として『ハンターたる者、何かを狩らねばならない』という項目がある…。これはハンターの基本だ。是非それを忘れずにいてくれたまえ」

「わかりました。私もハンターの端くれとして、つとめは果たしますよ…。どうも私は怪物と縁があるようなので、怪物ハンターモンスターにでもなりましょうか」

「そうだな……どちらにせよ、今回の功績は正直かなり大きいものだ。報奨金だけでも山のようにある……。怪物ハンターと名乗っても誰も文句は言わないだろう」

「ありがたいごさいます。私も必死でしたが何とかなつてよかつたです……ただ、試験の会場の道へ案内してもらおう予定だったのですが、大丈夫でしょうか？」

「ああ、デリーさんでしたら、あなたに会いたがつていました。我々の方で話を付けておきました。伝言を預かっています……合格おめでとう！エイハブに聞いてワシも会つてみたかつたが、この国の長年の宿願を晴らしてくれて本当によかつた！よきハンター人生を……とのことでした」

「よかつた……これで思い残すことはないですね」

「これからどうするのかね？」

「観光でもしながら、のんびり帰りますよ。途中でジャポンにも寄つてみたいですが」

「ジャポンか……あそこは今鎖国中で行けないぞ？」

……な、何だつてー！ー！
!!!!!!

30、合格を胸に

あの後、ネーブルさんにハンターについての講習を受けて、ハンターライセンスを貰った。ちなみにマティーニさんは他の仕事があると言う事で先にそちらに向かった。偉い人は忙しそうだ。まさか、会長とか副会長とかじゃないよね？ってネーブルさんに聞いたら曖昧に誤魔化された。それって答え言ってるようなものじゃん！

なんてこった…。トップ層に頭を下げさせてしまった…。でも直後にあの「ヴリトラ」戦を思い出して、やっぱり妥当か、と思いなおした。アレじゃ普通死ぬからね？この人達については後で調べてみよう。

ハンターライセンスは失くしたら再発行不可との事なので、文字通り肌身離さず持つておこう。ネックレスにしとくといいか。

しかし、参った…。ジャポンは今鎖国中か…。現実世界でも鎖国をしてたけど、こちらでもそうだったとは思わなかった。本当はあそこで色々体術などを学びたかったが…。

こうなると、いよいよ困ったな。今回で痛感したが、体術は必要だ。私は肉体の性能だけは高いのに、運転が下手くそだ。あの「ヴリトラ」にも、《硬》で何とかしたけど、

もつと他にやりようがあった気がしてならない。あの水レーザーも、あそこまで喰らってしまふのもどうなんだろう。一步間違えば死んでたからな。せめて拳法が習えるようないい所ないかな。ネーブルさんに聞いてみよう。

「体術ですか？まあ我々は我流が多いですね。能力によつては体術も変わるので。ただ、今はカキンの拳法が流行してますね」

…それだ!!!何で思いつかなかつた!中国拳法だよ!あそこは大きいし、達人の1人や2人居るだろう。次の目的地が決まつたな。

「目的地が決まりました。一度実家に帰り、その後はカキンに行こうと思います」

「なるほど、カキンですか…。その拳法を習いに行くという事ですね?」

「ええ。私の課題も見えましたので」

「…いいですね。あそこは歴史も古い。あなたの求めている者も見つかるでしょう。また、V5加盟国ではないですが、ハンター協会支部もあります。何かあつた時は是非頼ってください」

「わかりました。本当にお世話になりました。ありがとうございます。私もハンターの務めを忘れずに精進していきます」

「どういたしました。こちらこそ今回の討伐は大変助かりました。もし余裕が出たらスワルダニシティにあるハンター協会本部にも顔を出してくださいね」

「もちろんです。まあ年に一度は実家に帰りますから」

「カキンとサヘルタは直行便が出ていますから、今回の移動程苦勞はしないでしよう…。私は基本的に協会本部に詰めてますから、何かあつたら連絡ください」

そう言つて、ネーブルさんは名刺を差し出した。連絡先の住所が載つてる。…まだ電話番号はない時代か。

「申し訳ない。恥ずかしながら私は名刺を持つてなくて…私に何か連絡のある時は実家の方に手紙をください」

私はネーブルさんにアンダーソンの実家の住所を紙に書いて伝えた。私も名刺を作つた方が良いかなあ。

「では、これにて私も失礼させていただきます。カームさん、ハンター試験合格、おめでとうございます」

ありがとうございます、と返したらネーブルさんはニッコリと笑つて出て行つた。スマートな方だな。ああいつた落ち着いた雰囲気を持てるようになりたいな。私も前世と合わせてもう30後半なのにも成長してないな…。基本行き当たりばつたりだし。まあ、世界中を見てまわつたら、少し落ち着いた生活を出来るように心がけよう。

医師からの診察で退院してよしとのお墨付きをもらったので、これから一度帰ることにする。今度は時間の制限もない。のんびり旅行しながら帰るとしよう。ハンターライセンスも貰ったことだし、手続きで苦勞はしないだろう。

褒賞金があると言うことなので、ハンター協会支部に立ち寄ったが、これまた莫大な金額をもらったので、銀行に直接振り込んでもらった。具体的に言うところ、一気にお金のこと心配いらなくなった。それだけ奴らが強かったということだろう。

ちなみにマティーニさんのことについて尋ねると、なんと副会長らしい。：やっぱりね。ネーブルさんはその直属の部下のようだ。強いコネが出来たようで安心だが、同時に紐付きにもなったような気分だ。まあ、ある程度は自由にさせてもらう権利を勝ち取ったので安心だが。10年以内に来るプロジェクトとやらがなあ……。どんな任務なんだろう？ネーブルさんに聞いてみたが、現時点ではまだ極秘とのことだったので、気にはなるが仕方が無い。時期が来たら私には早めに教えてくれるとのことだったので、それまで待つとするか。何かあるか分からないから、それまではやはり鍛えつつ世界を回るようにしていこう。まずはカキンで武者修行だな。



それから私は基本来た道をのんびりと歩いて帰った。途中に観光地があれば立ち寄り、また、各地のレストランやご当地グルメを堪能した。勿論お土産も忘れない。この頃は徒歩の他に馬車や鉄道も普及し始めていたので、そちらも利用した。こう言った旅は本当に好きだ。カキンでの修行が一段落して、例のプロジェクトとやらが終わったら、旅を続けるようにしよう。ただ、血の掟があるので必ず1年に一度は実家に顔を出すが。どうも私はフーテンの寅さんみたいだな。あの映画もなかなか好きだった。人の人情が描かれているからね。あと、寅さんの旅も憧れたなあ。まだまだやりたいことは山のようにある。いつになったら私は落ち着くのだろうか。この調子じゃあまだまだ当分先になるな…。

船旅は恐ろしいほどにスルーで通った。それほどシングルのハンターライセンスの権限は強いと言うことだろう。行きに乗ってみたいと思っていた豪華な客室も堪能できた。

さて、ミンボを抜け、クカンユに入ってもやることは変わらない。観光地巡りとご当地グルメ、そしてお土産だ。あまりの量になったので、一旦手紙を添えてサヘルタに送ることにした。世話になったジェヴォーギンの村の人たちにも合格したと伝えたら喜ばれた。また、ミンボで買ったお土産も村の人々に渡した（これだけは送らないでいた）。

そのままいるとまた宴会になりそうだったので、また近くを来たときは寄ると伝えて次の目的地に向かった。村の人々からは例のチーズをまた沢山貰った。ありがたいなあ。これもお土産にしたいが消費期限的なものがあるため、また私一人でいただくことにする。作り方は聞いたので、再現して家族に振る舞おう。アンダーソン Pasta に掛けて食べるとそれはそれは美味そうだ。

クカンユからサヘルタにかけても特筆することはなかった。行きは何だったんだと思つたが、まあハンター試験の一貫として諦めるしかないか。結局クカンユの土産も大量になり、港から送ることになった。例の港町ではこれまた2、3日満喫して港の風情を楽しんだ。食事はクカンユの方が美味しいが、それはそれ、これはこれ、である。

さて残りのサヘルタの道も鉄道を使う。砂漠地帯を抜け、荒涼とした荒野や雄大な自然の風景を楽しみながら鉄道の旅を続ける。この鉄道も豪華な仕様になっていて、レストランやシャワーまで付いていた。ハンターライセンスのパワーをここでも知ることとなる。豪華な客室に案内され、非常に贅沢な旅を満喫できた。

ヨークシンに付く頃には、実に半年ほどの月日が流れていた。なんともものんきな旅になったが、行きのことを思うとこれぐらい良いだろう。さて、みんな元気かな？

「ただいま」

「おかえりなさい。カーム」

ああ、やっぱり家はいいなあ。

カキン修行編

31、カキンへ

実家についてからの私は、少しのんびりしようと思ひ長期間滞在することにした。家族には土産話とハンター試験合格、そしてシングルハンターになったことを伝えたら父さんは驚いていた。なんでもシングルハンターを雇う額はべらぼうなものになるらしい。もしもの時があつたら力になると伝えたら、笑つてその時は頼むと言われた。

マイケルには道中で戦つたモンスターの話をしてやらやっぱりドン引きされた。挙げ句の果てには僕はヨークシンから出ない、と言つていた。：いや、私はたまたまそうなつただけだからね？なんか彼には悪いことをしたな。

母さんは道中のお土産と、各国の観光地巡りの話を聞いて喜んでいた。父さんが引退したら是非2人で世界旅行をしたいと言つていた。私もその時は護衛として力になると言つておいた。

一週間ほどで私の関係する人たちを回り、合格したことと、各地のお土産を渡して回つた。シングルハンターになつたと言つたら、周りはみんな納得していた。

そうそう、ジョセフは無事に司法試験に合格していたらしい。今は構成員ではなく、

彼の親父さんの事務所で働いているという。着々とコンシリエーレの道を歩んでいる彼を見て、私も一層気合いを入れなければと思った。ジョセフとはその後、お互いの合格祝いを記念して、以前使ったレストランでパーティーを開いた。最初は2人だけの静かなパーティーだったが、徐々に他の仲間達も集まりだして以前のように仲間内での飲み会となった。終いには前と同じようにウチのファミリー全員結集してレストランを借り切った大パーティーとなったが、うちのファミリーつて和気藹々としすぎじゃない？本当に宴会好きだな？ひとしきりみんな楽しんで、帰りに母さんに怒られるところもセットだ。他の奴らもそうだろう。

マイケルだが、念修行は順調のようだ。もう新人ハンターぐらいなら軽くあしらえるだろう。具体的には顕在オーラが2000を超えている。潜在オーラも40000は超えているだろう…。成長早すぎない？本当にストイックだよ、マイケルつて…。ちなみにマイケルとの訓練で使った技がかなり役に立ったと聞いて喜んでいた。使い方を聞いたらまたドン引きしていたが。

そう言えば、「ヴリトラ」との闘いでは結構やばかったが、マイケルの【祝福をあなたに】アンダーソン・ファミリアは発動しなかった。どういふことか聞いたら、基本的には発動しない方が良いらしい。「真の命の危機」はかなり条件を厳しくしているから、前回の闘いでは

条件を満たさず出なかつたんだろう、とのことだった。うーん。となると結構条件が厳しいな。トリガーは何だと聞いたら教えてくれなかつた。これが出るときは本当にもうどうしようもない時だと。出来れば出ないように立ち回って欲しいと言われたので、私もそれ以上聞かなかつた。マイケルがそう言うならばそうなんだろう。そうならないためにも私も修行を怠らないようにしなければ。マイケルの能力は、いわばお守りとして考えておこう。

ちなみに能力もだいぶパワーアップしたらしく、1年はもつようになったそうだ。念のためにつけ直して貰った。



さて、だいぶゆつくりさせて貰って英気を養えたので、そろそろ出発することにする。次の目的地はカキンだ。直行便が出ているらしいので、調べてから旅立つことにする。次は長くかかるな。でも1年後には会えるようにしましょう。家族とファミリー周りの人々に挨拶してから旅立った。

今度も前使つたのと同じ港に向かう。鉄道も良いが、やはり修行は欠かさないためにも走ることにする。路銀についてはライセンスと証明書さえあればどの銀行からもおろせるらしいので、一旦銀行にほとんどを預け、出発する。サバイバルも修行のうちだ。ハンターライセンスがあれば割と何でも出来るところがハンターの良いところだ。もはや特権とも言える。ランニングをしながら目的地へ向かい、道中であまり出来ていなかった念修行や瞑想、細胞操作を行う。

私の生命線はやはりこの能力と細胞操作に尽きる。同時発動してもオーラの消費を減らせるようにするには日々の修行が欠かせない。故に今回は絶食しながら【自己^{オートファジー}貪食】を発動し、自分をわざと傷つけながら【日々^{ヘルシーマン}是健康】を使用するという狂気に満ちた訓練を行った。まあ【日々^{ヘルシーマン}是健康】を発現するときも似たようなことをしていたから今更だ。

これ、誰かに見られるとキ○ガイだと思われるから、なかなか出来ないんだよね…。宿の中とか、誰も見てない道中でひたすら行う。最近は【日々^{ヘルシーマン}是健康】の精度も上がってきていて、重傷でも1、2秒で復元できる…。というか、出来ないとのあの「ヴリトラ」には勝てなかった。目標は傷つけられまくっても瞬時に回復できるぐらいを目指している。さすがに脳に大ダメージを喰らうとかだと無理だし、まだまだ部位欠損の再生には至っていないが。その辺に行くともはや人間かどうか怪しい。既に指の先程度なら再

生でできるし。まあ長い目で見ていこう。

オーラ量だが、最近漸く細胞全てを掌握した。「ヴリトラ」戦で生きるか死ぬかの闘いをしたのも大きいだろう。おかげでオーラ量がまた爆発的に増えた。およそだが60万ぐらいあるだろう。例によって制御の問題で顕在オーラは200000ぐらいだが、それよりも、ミンボでの瞑想の経験から、オーラがよりクリアになつてきた。私が得意なのは《隠》だが、これも戦略の幅を広げる1つだろう。自分の肉体でフェイントを入れておいてオーラの拳を複数作つて隠し、《隠》でボコボコにするなどの戦法がとれる。また、例によつて毒を使うなどの戦法も出来る。あれから更に、青酸やヒ素、トリカブトなどの毒もこっそり取り寄せて貰つてレパートリーに加えた。本当に死ぬかと思つたが、少しずつ飲んで我慢して取り込んだ。少しの違いが生死を分けるので、生き延びるためには仕方が無い。爆発的にオーラが増えた要因の1つでもある。本当に嫌だが、致死性の毒を見付けたら頑張つて取り込めるようにしておこう。【パーティ・コンバート完全適合】の練習にもなるし。キルアはこれ無しで毒耐性を付けているから本当に偉いと思う。

そうこうしているうちに港に到着した。今度はヨルビアン大陸からアイジエン大陸までなので、非常に巨大な船だ。しかし、今度もハンターライセンスでさつくりと船に

乗せて貰った。やっぱり便利だ。しかし、今度は遊びは無しにしよう。部屋にこもって念修行と瞑想をする。今回は長旅になるので、じっくり時間を取ってから行こう。約一ヶ月か：本当に長いな。帰るときも気を付けなければ。



漸くカキンへ到着した。おかげさまで修行も本当にはかどったよ。ここ最近はこちらよつと行き詰まり気味だったので到着して良かった。ここはやはり中国だ。予想したとおりだ。広さと地図の位置的にそうだと思つたし、カキンの産物からも分かる。しかしサヘルタとはまた趣が全く違うな…。港から考えると現実世界という清朝時代のような雰囲気を感じる。写真でしか見たことはないが。例によって所々近代的なのはお約束だ。さて：まずはハンター協会支部へ向かう。私が到着したことを伝えるためだ。支部はここから沿岸部に沿って北の首都ベイジンにあるらしい。200キロか。久しぶりに走るか。

周りの風景を楽しみながら行く。この景色もなかなかのものだ。風光明媚というか…。現実世界の中国の面影をひしひしと感じる。道中の食事もここでは楽しんだ。肉まんとか。首都の料理が楽しみだ。きつと中華料理だろう。

首都に着いた。まずは宿を取って、ここを拠点とする。時間的に遅いので、食事を摂って明日にしよう。レストランに入ると、まあ雰囲気は中華料理屋だ。内容も素晴らしかった。クカンユもそうだが、食はとても大事だ。いつか世界を旅するときにグルメレポートとか作ろうかな。

次の日の朝にハンター協会支部へ行く。協会では事前に通達があつたらしく、シングルハンターの私はとても歓迎された。割と依頼がたまっているらしいのでいくつか請け負って欲しいらしい。…そうはいつでも私は怪物ハンターなんだけど…。そう言ったら、そちらの方こそたまっているとのこと。まあしょうが無い。いくつか請け負ってみよう。まずは道場を探すか…。とりあえず、首都近辺にある道場の場所を教えて貰うことにして、それぞれ行ってみることにしよう。

32、師を求めて

私の特異性はこのオーラ量と細胞操作だが、基本的に体術はからつきしだ。もっと効率の良いパンチやキックがせめて打てるようになりたい。ということとで道場を廻るが、基本的にこのオーラは異常な量だと分かっているのでオーラは使わない。肉体のスペックだけで道場見学と体験を行う。先ほども言ったように私は体術がからつきしだから、素の肉体スペックだけの私を凌駕するような師範がいたら、そこに弟子入りしようと思う。



うーん…あらかた廻ったが、なんとも微妙だった。私の肉体スペックの高さもあるだろうが、それと素人体術で対応できるようなものばかりだったのだ。やはり首都近辺には私の求めるものはないか。だとするとカキンの奥に入って探すしかない。ハンター協会支部の仕事もあるので、それらをこなしながら行うようにしよう。

幸い、奥地には伝承によると凄まじい達人がいるらしいということ協会の方から聞いたので、場所と距離を教えて貰った。なんでもかなりの深山幽谷の場所らしく、大まかな位置しか分からないらしい。場所はここから約1500キロ。…さすが中国。スケールが違う。道の途中で出来るだけ依頼をこなすと伝えたら喜ばれた。…本当に人手不足なのね…。

しばらくして、私は目的地向かって出発した。途中で依頼にもあった怪物退治にも勤しむ。こちらでは怪物ではなく、妖怪、と言うらしいが…。

道中で何体か退治することが出来た。中には「疫鬼」とか言う、病気を撒き散らすヤバイ奴もいたが、それこそ私とは相性が良かった。また、かなり強かった相手として「饕餮」と言う、獣型の相手もいた。コイツはワニの様な身体をしていてかなり大きかった。また、当然の様に念使いで、口からオーラ攻撃を吸収するという恐ろしい力を持つていた。とりあえず念弾とブレードは吸われたので、仕方なく側面からぶん殴って倒した。この他にも何体かいたが、こいつは危険だったなあ。

1番ヤバかったのは、「字伏」と言う奴と闘った時だ。依頼書では何でも、雷を操り、火を噴き、凄まじい速さで飛び回るらしい。達成難易度Bだ。私も事前に入念に準備を

してから臨んだ。具体的に言うと、火・雷耐性だ。

これはキツかった…。まず、火だが、焚き火に向かつて身体を晒し、ひたすら燃えるのに対して、耐性を付ける。そのうち、細胞が熱に対応し始め、発火レベルの熱は効かない様になった。燃焼という現象に対して自らが熱を持つ事で無効にしたのだ。ついでに煙にも耐性がついた。また、雷では、大きな街に寄り、真夜中に電線から電気をちよつと拝借した（この時代にも大きな街には電気が通り始めていた）。結論から言うと上手くいった。私は細胞の神経に流れる電流とは区別して電気袋とでも言うべきものを持つに至った。入ってきた電流をここで蓄え、エネルギーとして吸収するのだ。ここに至るまでの激痛とオーラ消費は思い出したくない。水と並んで2度とやりたくないシリーズのトップ3だ。

だが、リターンもあった。火と雷を使えるようになったのだ。火は細胞同士を激しく振動させ、熱を生み出し、老廃物などを発火させる。また、雷は例の電気袋から逆に電気を生成して取り出すのだ。上手くいけば、それぞれ自由に操れるだろう。毒と同じようにオーラでも可能になりそうだ。今はまだシヨボイが。

さて、件の「字伏」だが、郊外の田舎村の目撃情報から、そちらに向かい、《円》を使った。そうしてしばらくすると、期待通りやつは現れた。

「人間風情が…このわしを挑発するなんざ、随分と舐めた真似をしゃがって…見たとこ

ろまだ小僧じゃないか……。そんなにわしに喰われたいか」

「……！コイツ、喋れたのか！つまり魔獣か……？」

外見は虎のような容姿で、長く金色の髪。そしてそのオーラは……

「……近隣からあなたの討伐依頼が出ていましたね……。あなたに恨みはありませんが、退治させて貰います」

「フーン！大きく出たな小僧……。どうやら符も持たねえようだが……。なるほど、闘う力はあ
るようだな」

符とはこの地方の戦闘術の一つで、神字を書いた紙にオーラを込めて闘うやり方である。場所が変われば念の使い方も変わる。

「甘く見てると痛い目に合いますよ……。では」

《堅》を使う。

「……人間の癖にちったあ楽しめそうじゃないか。上等だ。その売られたケンカ、買ってやる！」

そこから、奴とは一進一退の攻防を繰り返した。奴の雷は電線のよりよつぽど強烈で、火は文字通り消し炭になりそうな程の威力があった。「日々は健康」で復元しながらも【完全適合】で何とか適応しながら、こちらにも念弾や近接などで対抗した。奴の爪

や牙も強烈で、かなりギリギリの闘いを強いられたが、こちらも火と雷に適応し、奴にデカイダメージを与えました。そして、その闘いは一昼夜も続いた。

「…………ハア…………ハア…チツ。やるじゃないか。人間。…キサマ本当に人間か？わしの火と雷に対応する奴なんざ初めてだ。…これ以上続けるのも面倒だな。わしは別の場所に行くでしょう。キサマはわしを退治出来なかった奴として人間共に知らせるといい」

そう捨て台詞を吐いて、奴は飛び去った。はつきり言って追いかける気力もオーラも尽き果てる寸前だったので、本当に助かった…。もう達成難易度B以上の依頼は受けられないでしょう。万が一受けるにしても複数であたる事にする。そう心に誓った。

とりあえず、討伐は無理だったが撃退は出来たとして報告した。



さて、大分奥地に入ってきた。もうこの辺になると、人の営みも滅多にない。深山幽

谷とはよく言ったものだ。まるで水墨画の世界だ。険しい山々を超え、《円》を使いながらそれらしい場所を探す。そろそろこの近辺の筈だ。

そうやって探す事3日。漸く建物らしき物を発見した。：山の山頂だ。こんな所で人って生活出来るの？

《円》を解き、建物へ向かう。1人人間の反応があつたが、向こうも座禅していた。そして、当然こちらに気づき、待ち構えていたようだ。

：街の道場では気付かれもしなかつたからなあ。これは期待ができる。着いた時に爺さんが出迎えてくれた。

「こんな所迄、遙々ようこそ。お客人。儂に何か用かな？」

「初めまして。いきなり尋ねた無礼をお許しください。あなたがリー老師で間違いないでしょうか？」

「…いかにも。儂がリーである。しかし何用じゃ？」

「失礼しました。私の名はカーム・アンダーソン。自らの体術に疑問を覚え、こちらに赴きました。まずは手合わせ願いたい」

「……とても良い『気』じゃ。良く練られておる。そしてその量たるや、儂を遙かに凌駕しておる。比べるのも烏滸がましい程に…。その若さで大したもんじゃ。：そんなお主に『武』は必要かの？」

「ご謙遜を…。その立ち姿からよどみないオーラ。全てが熟練のそれです。隙が全く見えない…。私は恐らく隙だらけでしょう。どんな状況でも、誰よりも死なないために私には『武』が必要なのです」

「ふむ……。気は進まんが、下界の者を導くのも『仙』のつとめか…。よかろう。では、かかってくるがいい」

と、リー老師は告げるが、先ほどの佇まいと全く変わらない。いきなりここでやるのか？

「…では体術で挑みます」

そう告げると、

「何を遠慮しとる。お主の全てを使っても良い。そのまま掛かってこんかい」

「……よいので？」

「遠慮するなど言っておる。お主程度をあしらうのはわけないぞい」

さすがにそこまで言われては、遠慮する気も失せる。

「…では、遠慮無く」

《堅》！

「ほう。やはりお主は相当の使い手じやのう。これでもまだ『武』が必要か？」

「必要だから言っているのです…。行きますよ！」

そう言つて、私はオーラを足に込め、凄まじい速度で飛び込んだ！

次の瞬間

視界が暗転した。

何が起こきた!?

気付いたら私は石畳の上に寝転がっていた。その時間、わずかコンマ2秒！そして気付いた瞬間にリー老師の足の踏みつけが迫る！慌てて両手で防御！した瞬間に腕を通じて身体全体に衝撃が走る!!

何をされた!?

必死で立ち上がるも、視界は歪み、リー老師の姿もぼやける。これは、自分のオーラが体内で乱反射してる!?!自分由来だから適応も出来ない！既に内臓関連がグチャグチャだ…【日々^{ヘルシーマン}是健康】で復元…!

しかし恐ろしい技だ……!

「たしかに体術はからつきしのようじゃ……。見える見える。お主の流れが」

くそ……つ。このままじゃ終われない、今までの技を全て試す! まだ視界がぼやけるが、今度は殴りかかると見せかけてフェイントを入れる! そして、オーラで作った4本の腕を更に《隠》で見えなくし、側面や背後から殴りに掛かる!

「目線や『気』の流れ、そして身体の動きから次の動作が手に取るように分かると言っておる」

そう言うと、全ての攻撃を優しく手を添えて全て払いのけられ、バランスを崩した私の頭を押さえて地面にたたき落とされた。とつさに《硬》で守ったが、若干のダメージは喰らってしまう。おかしい。私はかなりのスピードで同時に攻撃したはずだ。リー老師の動きは私にも見えるほどだったのに全て払われるとはどういうことだ!? まずい! 追撃が来る! 私自身の身体に電気を発し、追撃を防ぐ。リー老師はそこから飛び退き、

「そんなことまで出来るのか…お主、本当に人間か？それに、やはりここまで力が大きいと相手するのもしんどいの…まあだいたい分かったからええけど」

そんなに分かりやすいか…？だが、まだまだ！

「まだまだ、これからですよ。覚悟は良いですか？」

「まだやるか。んじやはよこい」

では、遠慮無く。手に長いオーラブレードを瞬時に作り、横薙ぎにする！リー老師は飛び上がるが、そう来たなら次のパターン。大きめの念弾をぶち込む！…あっさりはじかれた！どうやってるんだ！？次だ！同じく念弾だが、今度は神経毒を混ぜる！触っただけでもアウトだぞ！どうする！？

「器用なやつちやの。じゃあこうして…と」

老師は小さな念弾を作り、横合いから発射する。そんなんじやびくともしな…弾かれた…！どういふことだ！？地面に降り立った老師がこう告げる。

「もうだいたい終わりかのか？では、こちらから行くぞい」

来た！…まっすぐ来て、腰を入れたパンチ…か？何の変哲も無いし、普通の念を込めた、ただのパンチに見えるが…とりあえず《凝》をして、何もないことを確認して、カウンターをもくろむ。…が、インパクトの瞬間、嫌な予感がして全力防御を行う。

バツガン！！！！

凄まじい音と衝撃をもって、私は身体ごと吹き飛んだ！馬鹿な！？オーラ量の差がこれほどあるのにこんなに衝撃を受けるものなのか！？

「これが『技』じゃ。そろそろ決めるぞい」

やられっぱなしじゃないか！一撃でも当てる！そう思い、追撃のために迫った老師の顎をめがけて蹴飛ばした、が…なんだこの手応え!?当たった気がしないぞ!?いや、確かに当たったが…まるで手応えがない！だが老師は空中で回転してる。自分から飛んだか…?これは参った。達人じゃないか…!」

「自らを自然の一部と捉え、一つとなる。すなわち岩のように硬く、草のように柔らかく、羽のように軽く、山のように重い。水のように流れ、枝のように受ける…これが極意の1つじゃ」

そう言うのと、老師は再びゆったりと私に迫り、そつと私の身体に手を添えた。あまりにも自然な動きに私も反応が出来なかった。次の瞬間、先ほどの体内乱射が3倍ぐらい発生し、私は意識を失った。

「…よかろう。稽古は付けてやる。…それが儂の役目じゃからな」

意識を失う直前に、教師のそういう声が聞こえた。

33、修行の日々、そして運命の選択

それから私とリー老師の生活が始まった。結局リー老師は私の稽古を付けてくれるらしい。とりあえずこれから師匠と呼ぶことにする。基本的に師匠が私のトレーニングの指示をし、私が生活の世話をすると行った所だ。師匠の言うことは絶対なので、トレーニングとして一般から見れば理不尽なものでも、文句一つ言わずに行う。むしろなぜこのトレーニングが必要かを考えながら行うことで効率化を図ろうと思う。

ただ、先に師匠に伝えておかなければならないことがある。私は1年に一度は帰らなければいけないことだ。これは血の掟だ。誰よりも、何よりも優先される。師匠の言うことは絶対とは言え、これは破れないので、断られたら弟子を辞めるつもりで伝えた。

「……なるほどのう。血の約束か。向こうにも似たようなもんがあるんじやのう。ならばよいじやろう。ただし、港までは1日以内に行くこと。そして、道中では欠かさず儂の教えを守ること、そして、3ヶ月以内に帰ること。これが条件じゃ。よいか？」
「願ってもないことです。無理を言って申し訳ありません。ありがとうございます」

…通るとは思わなかったが、ありがたかった。条件も妥当なものだ。これで憂いが消えた。修行を全力で頑張るとしよう。ちなみに師匠はかなりの長寿で、100歳から先は覚えていないらしい。強力な念使いにはよくあることだが、非常に長寿になるという。ネテロ会長もそうだったしね。ここまで来ると「仙人」とカキンでは呼ばれる。普段は晴耕雨読の生活をしており、自然と合一し、そこから本当に神への昇格を果たすための修行を行うらしい。「仙人」の務めの1つとして、資質のある弟子を取って育てるといふものがある。育成しながら自らも力を伸ばすのだ。だがうちの師匠はそれが面倒臭かったらしく、それもあつてこんな辺鄙な所に引きこもっていたという。資質をもつてたどり着いた者には教えざるを得ないので、しようがないから教えてやる。と言われた。…まあ教えてくれるなら理由はどうあれありがたいんだけどね。



師匠はまず、私に対して身体の使い方を教えてくれた。技に行く前にそちらを先に仕上げるとの事。何分、私は身体のパフォーマンスはいいものの使い方がまるでなっていないらしい。中腰で両手を前に出し、手や頭に水の入った器を乗つけて静止する訓練をひたすら長時間行つた。器の水を被るとアウトだ。肉体的には問題無いが、この動かないという所に苦戦した。何でも身体に重心を定め、地面に対して根を張るようにする事で、身体の安定性が増すらしい。

最終的には山の下にある激流の中でも同じ様に出来るといふのが目標らしい。まだまだ時間はかかりそうだ。小鳥が止まる程に出来ればクリアとの事。

また、水の上に竹を浮かべてそれに乗る訓練。ランダムに並べられた、3〜6メートルの杭の上を一つの足、又は手のみで渡る訓練も行つた。これはバランスだ。自身のバランスを保ち、どんな状態でも強い攻撃が出来る様にという事だろう。常に自分の軸をぶらさない為のものだ。私はこれがからつきしダメだった。すぐにバランスを崩して落ちてしまう。また、逆立ちを維持する訓練もあった。これも徐々に難易度を上げ、最終的に指一本で長時間出来る様に、との事だった。課題はやはりバランスだ。師匠は「継続あるのみ」と言っていた。全くその通りだな。

ちなみに師匠は飛んできた椅子や机の角に片足で飛び乗り、静止する事が出来る。：
なんてバランス感覚だ。

次に念修行。こちらでは「氣」と言うらしい。師匠は私の特異性に気づいていたらしく、質と量については何も問題無いと言われたが、やはり課題はオーラ操作だという事だった。何でも、移動が分かりやすく、次の攻撃が見切りやすいらしい。：全くその通りなので頷くしかない。坐禅をくみ、オーラの流れを整える。そして、そのまま外界とそのオーラを同調させるとの事。難しい。特に自分の周りと同調するというところが果てしなく難しい。だが、これがいわば奥義らしいので、頑張るしかない。これがある程度掴めると、自然な動きとオーラになるらしい。今のところ全く掴める気がしないが、師匠には褒められた。スジがいいとの事。：何分瞑想のキャリアだけは長いからなあ。

1年もすると、まるで出来なかつた事もある程度は出来る様になる。期日が来て、家に戻るギリギリまで修行を続け、その後の船旅でオーラ操作や船室で出来る修行を行う。いつときも無駄には出来ないからな。ちなみに1500キロを1日走破は割とすんなり出来た。例の馬鹿オーラダツシュだ。：最近私の人間離れが著しい気がするが、考えない事にした。我が家は相変わらずで、近況を報告し合った後、1週間程滞在した。マイケルの鍛錬も順調の様だ。しかし、私の闘いや修行内容を聞いてドン引きしていた。君は私の話を聞く度にドン引きしてない？ファミリーも順風満帆でドンドン勢力を伸ばしているらしい。いい事だが、襲撃には気をつけてね？マイケルいるから大丈夫

だろうけど。

それから更に1年程修行を続けたら、漸くバランス感覚が整ったらしい。師匠と「流々舞」を行う。但し、木の杭の上や水に浮いた竹の上で。難易度が上がりすぎじゃない？まだ尽く水や土に突き落とされる。頑張つて続けるしかないか。

更に念修行も、何となくより自然な攻防力移動が可能になった。継続は力だ。オーラも何となく自然と溶け込み、より違和感が消えてきた。だが、まだまだらしい。まあ完全に出来る様になるまでに何十年単位が必要なので仕方がない。引き続き続けて行こう。



修行を始めて5年も経つ頃には、一端の動きが出来る様になった。その頃には型も教えて貰い、より効率的な力の伝え方も出来る様になった。まだまだ師匠の足元にも及ばないが。何でも、極意の一つが自然との融和で、自然の力を自らのものとするらしい。出来る様になれば、羽の様に軽く、山の様に重いという事が可能になる。いわゆる軽気

功と硬気功だ。また、岩のように硬くなり、水のように流れ、枝のように受けるということもできるという。要するに力の使い方だ。そして自然の法則に逆らわない動き。そこにオーラも含まれる。私の攻撃を受け流したのも、その応用だ。「力の流れ」というものを理解する必要がある。これを完全に体得すると、オーラはほとんど使わず攻撃を受け流せるらしいし、緩やかな動きでも驚異的な破壊力を実現出来るらしい。まだまだ山頂は遠いが、私も向上していく技術が楽しく、喜んでのめり込んでいった。

ちなみに、初めの時に私に放ったのは「発勁」というらしく、その中の「内浸透勁」という奴らしい。能力ではなく、オーラ技術の1つだそうだが、なんでも相手のオーラに同調して、ほんの少しそのオーラの流れを押しやるそう。相手のオーラは乱れに乱れ、自滅するとのこと。……なんて恐ろしい技だ。要するにオーラが勝手に身体の中でピンボールするようなものだ。ちなみに「外浸透勁」というのもあるらしく、こちらは同調した自分のオーラを注入して体内で乱反射させるとのこと。それなんて瞬獄殺？ちなみにこれらはあまりにも危険すぎて対人では練習出来ないらしい。まさに一撃必殺だ。いずれも相手によって使い分ける。念能力者には「内浸透勁」。念能力を持たない相手には「外浸透勁」だそう。オーラの多寡と同調のしやすさによって変えるらしい。どちらにせよ危険なことに変わりはない。そんな技を初対面で使わないで欲しかったが、師匠は笑って「それでもせんと千日手になるじゃろう」との事。うん。

まあそうだね…。私は【日々は健康】あるし…。

ともかくにも「オーラを同調させる」と言う技術が不可欠なため、私にはまだまだ難しい。その辺の木を相手に練習しているが、なかなかつかめない。これもまだ修行が必要かな。

そうそう、この頃になるとマイケルも卒業して、無事に若頭として父さんのサポートを始めていた。最近はなかなか修行が出来ず、ストレスがたまっているとのことなので、帰宅したときに沢山組手をした。マイケルは近隣では無敵に近くなっているため、私も念入りにボコボコにした。世の中にはヤバい奴が沢山いると言うことを知ったから、せめて慢心しないで過ごさようにして欲しい。ウチのファミリーの仕事柄、ヤバい奴に狙われる危険性は結構あるからなあ…。帰るたびに私の修行法を伝えて取り入れていたので、多分大丈夫だとは思うが。おかげでマイケルもあのと見えたネーブルさんぐらいにはなりつつあると思う。私の唯一の弟子となるだろうが、成長してくれて嬉しいものだ。

ハンターの務めは忘れずに続けている。帰郷時だけが。最近是我的闘いぶりも伝わったらしく、「壊れない男」と広く呼ばれているようだ。どんな毒を持つ相手や厄介な能力を持つ相手にも無傷で生還するかららしい。いや、普通にダメージは受けてるけど復元してるだけなんだ…。二つ名持ちみたいな感じになっているが、実際呼ばれると恥

ずかしいのでやめてほしい。



修行開始から9年が経った。この頃になると、私のオーラも自然との同調がなんとなく出来るようになった。また、身体の使い方も覚え、自然体で《堅》が出来るようになった。破壊力もわざわざ《硬》をせずとも凄まじい破壊力を出せるようになった。最適な力で、最適なタイミングで行うことが大事だ。身体は流体のように柔らかく、物理的な攻撃もかなり流せるようになったし、その脱力した状態から発せられるスピードや破壊力は特筆すべきものがある。師匠は、これが気体レベルまでなると自然との融和が完成することのこと。まだまだだな。

例の必殺の「発勁」だが、これも溜めが必要だが可能になった。これを瞬時にどの部位からでも出来る師匠はやはり仙人と呼ぶにふさわしい。とりあえず何回も喰らって文字通り身体に覚え込ませることで漸く可能になったが、普通はこんなスピードで習得はしないらしい。いわゆる私にだけしか出来ない修行法だな。普通はこんなの2、3回

喰らっただけで重大な損傷につながるからね。師匠も「早いがそろそろ卒業かの」と言ってくれた。私もそろそろ29歳だ。脇目も振らず、ただ生き残るためにずいぶん熱心にやってきた。

…たしかにそろそろ良いだろう。

9年目の帰郷の時にハンター協会から手紙が届いていた。なんでもネーブルさんから重大任務のお知らせらしい。どうやら例のプロジェクトの目処がついたようだ。内容を聞きに一旦スワルダニシティの本部へと向かおう。もし長期のプロジェクトなら師匠にも一言言わなければならぬしなあ。



「久しぶりですね。『アンブレレイカブル壊れない男』」

「その呼び名は恥ずかしいのでやめてくださいよ」

久しぶりに会ったネーブルさんはだいぶ貫禄が出てきているように見えた。いわゆるナイスミドルだ。私が出来たことで幾分ホツとしているようだった。私もハンターとしてのつとめは帰郷のたびにちよくちよくこなしてはいたんだが……。まああまり捕まらない人間であるのは間違いないため、そこは申し訳なく思う。

ネーブルさん曰く、今回のミッションは全ハンターにこれから通達されるものらしい。そこから希望をとって、参加するものはV5加盟国の各国に選別されて取り組むという。……全国家規模か。なにやらすごそうだ。

しかし、ネーブルさんも、10年近く前の事を覚えていて律儀に守ってくれたらしい。すなわち、他のハンターより早く教えてくれた。

内容は、「新大陸調査」である。

……ん？新大陸？この世界にまだ発見されてないところが……

………!?

思い出した！暗黒大陸か！！

何でも、50年前に刊行された「新大陸紀行」という本があるらしい。当時は空想小説と思われていて、本屋でも空想小説の欄に置かれていたそう。また、非常に希少本で、持つ者は非常に少ないらしいが、それが近年本当の事だという裏付けがとれたらしい。著者はドンⅡフリークス。

……フリークス？230年後の主人公の祖先か何か？

ともかく、それが本当だとすると、非常に危険であると同時に、人類にとっては大きな福音をもたらす可能性があるとのこと。聞くと、万病に効く香草だの、究極の長寿食だの、眉唾な物ばかりだ。しかし、ともかく、近年になつて古代の遺跡発掘も進み、そこから新大陸の情報と思わしき証拠がいくつも見つかったらしい。

そして近年の調査で少なくともそれが「ある」ということだけは判明した。

実際に、この世界は船で世界の外から一周しようとしてもたどり着かない。無限の海

が広がるだけだ。そしてある一定の水域からは進めないという。しかし遂に、前回の調査で、この水域を突破する方法が見つかったらしい。そして、実際に新大陸までたどり着いた。

前回は不測の事態が起き、失敗に終わったらしいが、そこで、各国は時間をかけて本格的に調査に乗り出すことにしたとのこと。

そして今回、ルート選定などの準備が整ったというわけだ。

：まあ、あるというのは知ってた。ジンがゴンに言ってたし。あのときはわくわくしたものだ、私もその後あっけなく死んでしまったからなあ。ただ、さすがに一筋縄ではいかないだろう。「新世界紀行」にも有ったらしいが、冗談のような福音に対して、それに匹敵する程の厄災もセットで有るとの事。それに多分だが、えげつない罨とかありそうなんだよなあ。あの漫画でもかなりえげつないシーン多かつたし。何より今まで私が闘ってきた怪物も、どことなく暗黒大陸がらみな気がしてならない。：「ヴリトラ」みたいな奴がいたらヤバイな…。

マンティコアの遺跡を見ても、やたら禍々しい怪物しか描かれてなかったからなあ。嫌だなあ。私としてはあんまり参加したくないのだが、ハンター試験の時のマティーニ

さんとの約束もある。

ネーブルさんも改めて、是非参加して欲しいと言ってきた。

…仕方ない。

参加するか。

私が参加の意を告げたとき、漸く肩の荷が下りたような表情をしたネーブルさんが印象的だった。まあ私も自分の発言を翻すような約束を守れない男にはなりたくないから、しようが無いけどね…。また、怪物退治かな…。

とりあえず、私はサヘルタ合衆国の船に乗るらしい。これからハンターへの通達や、諸々の準備のが完了してから1年後に出港との事なので、挨拶を済ませてから乗ることにしよう。師匠にも伝えないとなあ。

これまた長期間の出張になりそうだ。

家族にも知らせなくちゃ。

……私はこの時の選択を、その後の生涯で後悔し続ける事となる。

34、師匠の餞別、そして別れ

私は、あの後、一度師匠の元にとんぼ返りをした。師匠に伝えるためだ。師匠に今回長期ミッションが入ったこと、そして新大陸の調査だと言うことを伝えると、師匠はなにやら考え込んで、家の書庫に引っ込んでいった。何だろう？

しばらくすると、師匠は古い書物を手に持ってきた。∴古語の難しい漢字ばかりで読めない。師匠が言うには、これはいわゆる禁書と言われるものらしい。カキン成立前に書かれた物らしく、人が昔どのような形で伝わったかを示す物だそう。師匠が下界にいた時代までは残っていたが、当時の皇帝にあらかた焚書されたらしい。しかし、師匠は大事に隠してとっておいたらしい。曰く、いにしえの昔、人は暗黒の広がる大陸で酷く虐げられていたらしい。あまりのひどさに絶滅の憂き目に遭っていたが、なんとか生き残っていたそう。そして、決死の覚悟で脱出し、この樂園とも言える大陸に漸くたどり着いたとのことだった。∴そりや焚書にもなるな。

師匠は続けた。∴人が勢力を盛り返して、この大陸に満ちたとしても、けして暗黒の大陸に行くべからず。必ずや災いが降りかかるであろう∴と。

うん。私も本当に行きたくないのだ。この話を聞いて余計に行きたくなくなった。

師匠はまじめな顔でこう伝えた。

「本来ならば行かぬに越した事は無い。しかしお主も様々なしがらみがあるう。じゃが、もし、万が一、どうしようもない絶望的な状況に陥ったら、お主もなぜそれほどの力を付けるに至ったかを思い出すが良い。きっと助けになるであろう。また、ゆめゆめ儂の教えも忘れるな。自然と合一することで道が開けることもあるう」

「…わかりました。肝に銘じます」

「うむ。期待しておる。…最後に儂から餞別をくれてやろう」

ついてこいと言われ、共に裏庭の修練場にたどり着いた。

「…本来ならば、これを下界の者に見せるのは儂等仙人の中では禁忌じゃ…。しかし、お主があの大陸に赴くというのであれば、これは見せねばなるまい」

「…どんなものか分かりませんが、良いのですか?」

「構わん。お主が行く所は生半可な場所ではない。そもそも体得出来るとは思つたらんが、少しでも助けになるじやろう…。よいか。始めるからしつかり見とけ」

「……分かりました。ありがとうございます。お願いします」

そう言うとう、師匠は座り込み、《練》を始めた。…相変わらず、凄まじく研磨されてい

る。また、非常に澄み切ったオーラだ……しかし、これが見せたかったのか？

と、思っていたら、どんどんそのオーラが大気に広がり始めた。…これは…《円》か？…いや、違う。世界に溶け込んでるように見える…。

そうすると、そのオーラは更に変化し始める。どんどんと世界に溶け込み、師匠の身体からオーラが消えた…：ように見えた。《凝》でも見えない。しかし、オーラ自体はそこにある…。な、何だ、これは？何が起こっている？

そう戸惑っている、更にその見えないオーラが圧縮しだした！もはや気配というのもおこがましいほどの自然の圧倒的な存在感がそこにあった。そして…

師匠が浮き始めた。そこには、圧倒的な力があつた。これは、この気配は私どころの騒ぎじゃない！術が違う！

まさに圧倒的な力だ。ついには師匠のオーラ？は光り始める。もはや暴力的なほどの力の塊がそこにあつた。

すると、ふつと師匠はその状態をとりやめ、元に戻つた。

「儂もここまでしか出来ん…。まだまだ未熟じゃな」

「す、すごいですよ師匠！何ですか今のは」

「これは、世界と同一になり、人が神へと至る道筋じゃ。仙になつた者は皆ここを目指し、厳しい修行を自らに課す。いわば、人の軛を捨て、悟りを開くと言う状態じゃな。今

のはまだまだ未完成じゃがな……ここまで至れば、いかな呪いも災いも効かぬようになる。人の「氣」を世界とつなげ、自らの物にするという事じゃ」

「こ、こんな力があるなんて、今まで知りませんでした！」

「言つたじやろう。これは禁忌じゃ。只人には出来まいが、知られてもあまり良いことではない。何より、出来る人間はあまりにも少ない……限られた者のみじゃ」

「その限られた者つて……どういう事ですか？」

「その者の性質による……と言われておる。仙はだいたいその資質を持つておるからそこを指すんじゃないが……。これを見せたのは、万が一でもお主がここに至ることが出来れば、あるいはその大陸でもなんとかなるじやろうと思うたからじゃ」

「そんな力が無いと生きていけない場所なんですかね……その新大陸は」

「儂の考えすぎであればよいがの。どうも悪い予感がしてならん。まあ違つたら不良仙人の戯言と思うて聞き流せば良い」

「……分かりました。私に出来ますかね？」

「出来そうにない者には見せん。じゃが、お主は神仙を指しとるわけでもないから見せなかつたんじゃ。……これは儂の餞別じゃ。免許皆伝の証と捉えよ。人は、ここまで出来るとな……。その新大陸とやらでは気を付けい。わしも弟子の無事を祈つておる」

「ありがとうございます。必ず生きて帰つてくるようにします」

「そうせい。また、帰ってきたら顔を出さんじゃぞ」

「はい…最後に、その、技？気？の名前は何とこののですか？」

師匠は、少しためらってからこう答えた。

「これは、*〃神気〃* ……或いは聖なる力を持つ *〃気〃* であることから、*〃聖光気〃* と呼ぶ」



さて、最後は家だな。また1ヶ月かかって家に戻る。しかし、この移動もなんとかならないだろうか。HUNTER×HUNTER原作では飛行船が開発されていて、わりかし早めに移動をしていた気がするが…。原作の過去に生まれると、こういう所が不便ではあるな。

仕方なしに瞑想をしながら師匠の見せてくれた「聖光氣」について考える。…ミンボの僧侶も言っていたが、悟りを開くと言うことは、世界と合一する。世界とつながる、と言うことが重要のようだ。オーラを世界と同調させると言うことだな。…スケールが大きすぎて何がなにやら全く分からない。私もだいぶこのオーラが世界になじんでは来たように思うが、あそこまで完全に同調するとは全く信じられない。しかし、実際に自分の見た物を否定も出来ない…か。道理で師匠は例の「発勁」が得意なわけだ。あんなに出来るんなら瞬時に相手に同調するのはたやすいだろう。何せ同調するスケールが違うんだからな…。とにかく、すぐにどうこう出来るような物でもない。もし機会があればじっくり取り組んでみよう。

問題は暗黒大陸だ。師匠があれほど警戒するからには、やっぱり恐ろしい何かが待ち構えているんだろう。私は無事に帰れるだろうか…？私の能力は生存に特化している。だからこそ、何が起きても生き延びることができる。生き延びることさえ出来れば、なんとかなると信じて臨むしかないか…。



我が家に帰ると、いつものように家族が出迎えてくれた。やはりこの家は心地が良い。父さんも、母さんも、マイケルもみんな暖かい。私もこのプロジェクトが終わったら、この家を拠点に生活するとしよう。さて、まだ期間は8ヶ月以上ある…。今回はもう旅には出ずに、のんびりとすごそう。準備は1ヶ月前から始めて十分だろう。年単位はないだろうが、月単位で拘束されるならここいらでのんびり過ごしても罰は当たらない。私も十分力を付けた。修行も少し制限して、家族との団欒を楽しもう…。

それから、私は家族とファミリーとでのんびりと時を過ごした。時には父さんの仕事の手伝いで、護衛に付いたりもした。父さんはシングルハンターの「壊れない男」アンブレイカブルから護衛を受けるとは光栄だと言ってくれたが、その呼び名は恥ずかしいのでやめて欲しい。勿論依頼は口ハだ。父さんは払いたがったが、家族の護衛はむしろ私がやりたいことだ。また、金に困っているなどと言うこともない。既に私は報奨金関係で億万長者だ。はつきり言つて既に七代まで遊べるぐらい稼いでいる。故に必要なと言つたら納得してくれた。ちなみに一件だけ、名をあげたい他のファミリーのチンピラが私が護衛に付いているのを狙ってわざと襲撃を仕掛けてきた。成功すれば本当に名が上がつただろう。シングルハンターを出し抜いてファミリーのボスを暗殺出来れば。しかし私もそんなに甘くない。私の《円》から隠れるのは一般人には無理だ。襲撃前から把握し、

襲撃の瞬間に全員同時に取り押さえた。…むしろ私がいたことで襲撃があつてしまったことを父さんに詫びたが、父さんは笑つて、むしろ今来てくれてよかつた。これできつちりと向こうに話が付けられる。と喜んでいたら、多分マイケルでも同じ事が出来るので、私がないときはマイケルに頑張つて貰いたい。

母さんからも、家で料理を習い、家事を手伝うなどしながら沢山話をした。母さんには私のプレゼントとして、行きたがつていたクカンユへ海外旅行を企画した。当然家族全員でだ。うちのファミリーも護衛として付けてきたがつたが、家族水入らずで過ごしたかつたので断つた。何しろマイケルと私を突破して襲撃を掛けてくるような命知らずはさすがにいないだろうからね。それでも警戒は怠らなかつたが、特に何もなく平和に楽しく旅行が出来た。母さんも長年の夢が叶つたと言つて喜んでいたら。

マイケルだが、彼はこの10年で非常に伸びた。もともと強化系なので、単純な攻撃力は強力だが、最近では更に私の拳法も取り入れて、手が付けられなくなつてきている。はつきり言つて、本当にハンター協会でも勝てる人物は少ないんじゃないだろうか。まだまだ私が上だが、将来的にはネテロ会長ぐらい強くなりそうだ。そんな彼に、将来的にファイアのボスになる前に、色々便利だからハンターライセンスを取つたらどうだと言つたが、遠慮しとくと言われた。…まあマイケルにはあんまり合わないかな。それに彼も最近忙しいようだ。父さんから悪巧みの方法を一生懸命学んでいる最中だ。習う

のが悪巧みなのはどうなんだと思わないでもないが、まあマフィアなのでしようが無い。そのかわりファミリーは大事にしるよ。

ファミリーの皆さんともちよくちよく例のレストランでどんちゃん騒ぎをした。いい年こいてどうなんだとは思うが、私はこの雰囲気が好きなのだからしようが無い。こんなに騒げるのもしばらく無かつたし、前世では考えられなかつたからね。お店の人にはかなり割り増しで支払いをしてお詫びをしておいた。

なんだかんだ言つて、人生で一番楽しかつた時期だつたと思う。

そして、いよいよその時が来た。

プロジェクトに参加する者はとりあえず協会本部に集合し、その後、それぞれの港に赴き、それぞれのルートで出発する。私も準備として、何かあつたときは私の口座の金額は家族が好きに出来るように手配しておいた。まあ、私は生きて帰るつもりだが、念のため。うちにはジョセフという弁護士もいるから手続きが楽に済んだ。行く前にジョセフには「カームさん、無事に帰つてきてくださいよ」と言われたが勿論そのつも

りだ。死ぬには良い日など死ぬまで無いのだ。

マイケルも再び「祝福アンダーソン・ファミリーをあなたに」を掛け直してくれた。そろそろ5年は持つようになったらしい。異常な成長率だな。彼からは「無事に帰ってきてね」とのことだったが、帰ったらまたあのドン引きした顔を楽しみにしておこう。いつものようにお守りとして持つて行くか。

さて、出発の時間だ。暗黒大陸には一体何が待っているだろうか。私も怖さ半分、ワクワク半分だ。折角行くなら楽しみにしておいた方が良さだろう。

では、父さん、母さん、マイケル、そしてファミリーのみんな。

行ってきます

そして

また会おう

暗黒大陸編

35、船中にて

本部に到着したら、早速なんやかんやの手続きをしたり、何かあった場合の誓約書を書いたりした。まあ海外旅行ですら必要だからな。しようが無い。ましてや暗黒大陸もとい新大陸だ。何があるか分からない。

そして、参加者と今回のミッションの概要を聞く。参加者は約30名。よく集めたな。全ハンターの60%はいないか？話は戻るが、今回の概要は簡単に言うと、参加者は、各国のプロジェクトチームとともに特殊部隊として参加し、暗黒大陸を調査の上、何かしらのリターンを持ち帰るというものだ。これはV5各国とハンター協会との共同プロジェクトで、一番お偉いさん同士が指令を発しているとのこと。まさに全世界プロジェクトだ。準備に10年掛けたのもうなずける。

私の場合サヘルタ合衆国所属なのでそちらの船に乗る。基本は出身によって振り分けられるらしいが、希望はある程度通るらしい。むしろ偏りがないように調整が必要

なので、ある程度は違う船にも乗るように協会側がそれぞれのハンターに調整をお願いしていた。

私は特に何も聞かれなかった。まあどの船に乗ろうが別に何かあると言う事は無いのだが。

さて、ブリーフィングが終わったらそれぞれの国へ行き、船に乗る。いよいよ出発だ。サヘルタ側のハンター参加者は私を含めて6名。新人からベテランまで揃っている。私？多分中堅ぐらいかなあ。

ちなみに女性ハンターは居ない。この時代ではまだまだ男性中心の世界のようだ。だからなんだという話だが。少し残念だ。

サヘルタの港に皆で鉄道に乗りながらそれぞれの自己紹介をする。私以外の5名は

- ・ マットⅡレモン（シングル）
- ・ アンソニーⅡポップス（ダブル）
- ・ チャーリーⅡシーク（シングル）
- ・ ブラッドⅡピース（シングル）
- ・ ネーブルⅡファジー（トリプル）

※括弧内は星の数

との事。見てわかる通り、驚く事にネーブルさんも同行するそう。聞いてみたら、

「それだけ国も本腰を入れているのですよ」だそうだ。非常に心強い。

マツトさんは短髪の典型的なアメリカ人って感じだな。まだ10代に見える。新人かな？でも星持ちだし、見た目で判断しない方がいいな。アンソニーさんは逆に年配だ。白髪まじりでどっしりとした体格。しかし太ってはいない。物腰もベテランだ。チャーリーさんはラテン系かな？同年代だ。ブラッドさんは黒人だ。私より若干歳上かな。

こうしてみると、見事にむさ苦しいな。

さて、それぞれ自己紹介をするが、その際に簡単に能力の擦り合わせを行った。

マツトさん

【ボーン・アイデンティティ骨の記憶】

・カウンター能力。受けたダメージを倍にして返す事が出来る。単純だけど強力だな。強化系かな。

アンソニーさん

【ドクター・レクター羊たちの沈黙】

・治療能力。患者に問診する事で発動。患部を治療する。ハンターの他に医者もやっ
てららしい。これはマツトさんとの相性がいいな。聞けば、やはりコンビで活動してい
るとの事。ただ、それだけの能力じゃ無さそうな雰囲気がある。

チャーリーさん

【熱き弾丸】

・具現化した銃から念弾を飛ばす。威力調整や連射も可能との事。これまたコメント
に困る能力だ。放出なのに具現化するメリットが浮かばない。しかし多分銃弾を飛ば
すだけと言うものじゃないだろう。恐らくだが様々な機能があるはずだ。

ブラッドさん

【漢の拳闘】

・対象を限定し、自分のフィールドに引きずりこむ。その中でタイマンの決闘を行う。
勝利すれば対象のオーラを奪う事が出来る。足止めには最適だな。

ネーブルさん

【曖昧なオレンジ】

・半径50メートルの範囲内にいる生物に対して、その生物の認識を阻害する能力。

幻惑作用があり、相手からしたら敵が増えたり消えたりするらしい。ただ、範囲から出たら無効化される上、《絶》では使えないのでそこがネックとのことだが、十分強い能力だ。新大陸では心強い。

それぞれの能力を紹介してもらい、私も【日々ヘルシューマンは健康】を紹介したらドン引きされた。やはり壊アンブレイカブルれない男は違うな、私が要らないじゃないかとアンソニーさんが言ってたが、まあそうですねと曖昧に返しておいた。やっぱりもう一つの【完パーフェクト全コンバート適合】は話さない方がいいな。まあ私だけでなく、他の方々も他に隠したい能力はあるだろうから、最低の力が分かれば大丈夫だろう。

実際隠してるだろうしね。



港に着いた。私達は合衆国の特殊部隊と合流し、船旅が始まる。何とその数1000人規模だ。念能力は無いが、かなり鍛えられた集団と言うのが分かる。また、この時代

ではと但し書きが続くが、完全武装をしている。貴重な銃を全員標準装備してる時点で非常に金がかかっているだろう。国家の威信を懸けていると言うのもあながち間違いは無いようだ。

さて、我々を全員収容出来る船もまた巨大だ。所謂軍艦という奴だ。前に乗った客船の倍ぐらい大きい。内装は根本的に客船とは違つて居住性には劣るが、それでもハンターはかなり優遇されていて寝泊まりする分には何も問題は無かつた。これから4ヶ月以上は船旅だ。帰りも合わせて8ヶ月掛かる。1年以内に戻れるか不安になつてきたが、何とかなると信じておくしかない。

船内探検が済むと、まずは我々ハンター同士で交流を深めるとする。チャーリーさんとブラッドさんとは歳が近いので、割と話が合った。お互いの出身やハンター活動について話し合った。ただ、私の戦歴を聞いてドン引きしていたが。ちなみにチャーリーさんはビーストハンターで、ブラッドさんは懸賞金ハンターとの事。何となく予想してたが、当たつて嬉し。

マツトさんとアンソニーさんのコンビはちよつと苦手だ。特にアンソニーさん。私自身が医者に苦手意識を持っている所為もあるが、話していて何となく噛み合わない。何処となくマツトな気配がするんだよね。弟子らしいマツトさんもなんかアンソニーさんの狂信者っぽいし。まあハンターなんてマツトな商売だし、私も人の事言えな

いか。2人はウィルスハンター兼トレジャーハンターだそうだ。未開の地に赴き、冒険をしつつ未知のウィルスと闘うのが仕事だそう。やってる事は似たようなものか。ただ、私の能力じゃ社会には貢献出来ないが。やはり私は怪物ハンターが合ってるらしい。

しかし、苦手とは言え、これから命を預ける相手だ。私も好き嫌い言わずに交流に励む。アンソニーさんは医者なので、その辺の知識の擦り合わせが出来たのは収穫だった。流石本職は違うね。

ネーブルさんはこれまでの付き合いからかなり親しくなった。1ヶ月も経つと、ハンター協会の愚痴もこぼす様になった。国家間の無茶振りの調整とか大変そう。また、協会内での権力争いも激しいらしい。やっぱりどこの組織もドロドロしてるね。マティーニさんも苦労してるだろうな。

ちなみに、今回の旅はサヘルタとハンター協会の共同作戦になる。我々はサポートしつつ、独自に調査するという立場だ。我々のリーダーはネーブルさんだが、サヘルタ側の司令官はレイル・チャンドラーさんという。見事な髭を蓄えた人物だ。おそらく60近いだろうが、厳格でキビキビした動きをする方だ。普段は寡黙で滅多にしゃべらないが、号令を掛けるときの迫力は凄い。これだけの部隊の長ともなるとやはり大変有能な人なんだろう。我々に対しては一目置いているのか、丁寧な言葉遣いで接してくれる

のはありがたいが、私としてはこれまたちよつと苦手だ。ちよつと融通が利かない感じがするのと、厳格な雰囲気が辛くなるのだ。まあこれも命を預ける以上四の五の言ってもらえないが。とにかく我々は彼の作戦と合同で動くことになるので、我々も部隊も動きやすいようにサポートしていきたい。



さて、4ヶ月以上の船旅はやはり退屈だ。特殊部隊員は訓練を毎日欠かさずやっているし、私は瞑想があるから良いが、チャーリーやブラッドさんは修行にも飽きたのか退屈していて私に模擬戦をしようとしてきた。そこにネーブルさんも加わって、一度ハンター全員で模擬戦大会をやることになった。ちなみにアンソニーさんは「私は戦闘タイプじゃないし、怪我人の治療に当たるから遠慮しておこう」と言っていたが、私から見てアンソニーさんも相当な使い手だ。まあ気が乗らないなら無理強いはいらないが。

ルールは簡単。甲板の広場にロープを正方形に10メートル四方で置き、そこから出

る。またはダウンする。または参ったと言わせる。で勝負が決まる。最初はチャーリーさんとブラッドさんだな。ブラッドさんは特殊な能力が強力なので、是非見たかった所だ。

試合開始後すぐにチャーリーさんが仕掛けた。確かにそうしないとすぐに能力に引き込まれるからね。銃を具現化し、念弾を飛ばす！ブラッドさんは《堅》で防御しながらも、いくつか被弾し、よろける。結構殺傷力が強いな。普通の兵士なら穴だらけだぞ。容赦なくチャーリーさんは遠距離から銃撃を連射で行うが、ブラッドさんは被弾覚悟で前面に強めに《凝》をし、飛び込んでいく。ボクシングスタイルだな。いわゆるピーカブーススタイルだ。そして、被弾しながらも5メートルまで接近したところで能力発動！オーラの幕が四方を囲み、チャーリーさんは閉じ込められる。そして急接近したブラッドさんにたこ殴りされ始める。あれ、能力は？と思ったが、どうやら出せないようだ。なるほど。よく考えられている。念の特殊能力を無効にし、殴り合いのみを許可する能力だろう。

そのうちチャーリーさんもダウンしてブラッドさんの勝ちとなった。チャーリーさんはこんなものか、と言う表情をしていたが、多分あれは悔しかったのだろう。でも、チャーリーさんは銃撃以外の能力もありそうだから真剣にやれば勝負は分らないな。ブラッドさんも全力じゃなかったろうし。

2回戦は私とマットさんだ。オーラは同じぐらいに合わせて出している。オーラ差で勝つなんて修行にならないからね。しかし…ん？どうしようかな。マットさんの能力は強力だ。ダメージが2倍で跳ね返るなど、攻撃力が強ければ強いほど脅威になる。故に対処法は能力を発動させないほど強烈なダメージを入れるか、ルールに則って勝つか、だ。強烈すぎるダメージを与えて遺恨は残したくないし、後者で行くか。

勝負が始まったが、マットさんは動かなかった。こちらの狙いを読んでののかな？私には「後の先」、いわゆるカウンターを狙っていたのだが…。まあ向こうの能力的にも待つつもりか。仕方ない。こちらから行くか。

私はこの10年間で身につけた自然な歩法を駆使し、マットさんにごく自然に近づく。向こうからしてみたら、気付いたらいきなり目の前にいたようなものだ。慌てて拳を繰り出そうとその動作の起こりの瞬間、それに合わせて手を顔の前に出し、一瞬の硬直を利用してそのまま頭を押さえ、側面に回り込んで足を払い、全身の円運動を利用しながら一回転させて床に落とした。勿論頭は手を下に入れてかばい、ダメージゼロだ。人間はとっさの反応に対しては硬直する性質があるのでこれを利用したが、私も師匠によくやられた。とっさの攻撃に対して柔らかく受けられたら一人前だ。極めればダメージゼロにも出来る。ちなみに本当は回転する最中に全力で背中全体を使って当て

身を入れるが今回は無しだ。

マツトさんは呆然としながら、同じシングルなのにレベルが違うつす…とぼやいていたが、まあ私も努力したのだ。

次は、ネーブルさんとブラッドさんだ。どうなるかな。能力見られるかな？と思つていたら、速攻でブラッドさんが突撃し、先ほどの能力を使った。が、ブラッドさんの攻撃が当たらない。ネーブルさんの能力は封じられているはずなので、あれは自力だ。あ、攻撃に入った。…良いところにカウンターのクロスが入った…。倒れたのはブラッドさんだ。能力を喰らった上でそのままKOするとはなかなかの使い手だ。以前「自信がある」と言つてたのは本当だったか…。

最後に私とネーブルさんの試合になった。

「貴方とは一度闘つてみたかったのですよ。功績だけで言えばトリプルにも匹敵する貴方はどのぐらい出来るのか、とね。本気を出させて見せますよ」

「私も楽しみです。久しく対人戦をしていなかったもので、勉強させて貰います」

そして試合が始まった。ネーブルさんが《堅》を行うが、私もオーラを同じぐらいに

合わせて出す。ネーブルさんは素早く近づくと、私に対してローキックを入れてきた。なるほど、牽制か。受けてやる必要も無いなど下がると、追撃に正拳突きをしてくる。…これは空手に近いか？拳を優しく手でいなし、次々とくる攻撃をそらす。なかなかの使い手だ。やはり現時点でのマイケルよりは上だな。かなりの時間無呼吸連打をしてくるが、私もことごとく外す。外されてもめげずに連続で仕掛けてくる。おそらく私の攻撃を誘っているのだろう。だが、私には通用しない！逆に綺麗に放たれた正拳を下にそらし、緩やかにカウンターを入れる。タイミング的に避けられない奴だ。ネーブルさんも避けられないと悟り《凝》で防御するが、甘い。凄まじい音がインパクトの瞬間起こり、ロープ際まで飛ばされる。かろうじて場外とダウンは避けたようだが、かなり効いているようだ。

「……凄まじいですね……ここまでとは。自信をなくしますよ……。一体カキンでどのような修練を積みあげたのですか？仕方ない。少し能力を使いますよ」

そう言うと、ネーブルさんの姿がかき消える。…！これはやつかいだ。《円》でも見えない！再び出てきたネーブルさんは5人に増えていた。今度はこちらが参ったな…。どれが本物か全く分からんぞ…！では、こつちも少し奥義を披露しよう。目を閉じて脱力する…。相変わらず気配も5人分だ。視覚、聴覚、触覚、嗅覚全てにおいて幻惑作用

がある…か。強力な能力だ。そして、5人が動き出す。気配で分かるが、どれが本物かまだ分からない。しかし、攻撃は1人のはず…。

来た！これだ！！左側面からの右ストレート！対象は顔面！！これに合わせる！

インパクトの瞬間私は完全な脱力をし、その場で回転する。おそらくネーブルさんは私の手応えがなさ過ぎることに疑問を覚えたはずだ。しかし、これで本物が分かった。一回転して立ち、次のハイキックに合わせて私も回転下段蹴りを放つ。見事に尻餅を付いたネーブルさんだったが、これで勝負は決まった。

しばらく呆然としていたが、ネーブルさんは立ち上がり

「いやあく。完敗ですね。さすがは『ヴリトラ』の討伐者！能力を使わせられずに負けるとは。しかも私の能力まで見切って…一体どうやったんです？」

「いやいや、見切ってはいませんでしたよ。完全に幻惑されました。それに、ネーブルさんも本気の幻惑じゃなかったでしょう？とりあえずさっきのは、攻撃を喰らうのは1人だからそれに合わせて対応しただけです。被弾覚悟でしたが、うまくいってよかったですよ」

「そうですか…。まだまだ私も修練が足りないと言うことですね…。これからもちよくちよくつきあってもらえますか？」

「もちろん！ 望むところです。よろしくお願いします」

そう言つて、トーナメントはお開きとなつた。いい退屈しのぎになつたな。修行にもなるし、本当にちよくちよくやつていこう。ちなみにアンソニーさんも審判をしながら興味津々でこちらを見ていたが、この人の実力も見てみたいなあ。

あ、ちなみにネーブルさんの幻惑はこっさり【パワーステクト・コンバート完全適合】で吸収しました。念能力もいけるんだよね。ネーブルさんには申し訳ないがオート発動してしまうので許して欲しい。

36、限界境界線を越えて

出港してから2ヶ月は経った。私としてはいつも通り修行&交流&模擬戦の毎日です。退屈することもなかったが、特に変わりなく日々を過ごせた。アンソニーさんも結局は周りからの強めの要望で、仕方なくといった感じだが闘いを見せてくれた。能力的に体術のみだが、あれはカキンだな。私とは若干流派が違うようだが、ゆったりとした動きで繰り返す打撃はかなりのものだった。前世で言う太極拳のようなものだ。ちなみに私も太極拳みたいなのがベースになっているがごちゃ混ぜだ。少林拳とか、八極拳みたいなのも混じってる。その辺師匠は適当だからなあ。強ければ何でもヨシ！な感じだったし。あれは師匠のオリジナルだろう。念戦闘にも合わせてるのだろうか。

ともかく、思った通りかなりの使い手だった。見た感じ重心がほぼほぼれてなかったからね。ちなみにネーブルさんもそうだ。未熟な者にはこれがぶれてる場合が多いので分かりやすい。マツトさんはまだまだだな。



さて、そろそろ限界海峡線だが、どうなる事やら。聞いた話によると、限界海峡線を越えようと進んでいると巨大な門が現れるらしい。そこに「門番」がいて、審査を受ける。無事に合格すると、先の海を渡る事ができるとの事だが…。海のと真ん中に門が……？

そう思っていたら、船内にサイレンが鳴り響き、放送が入る。「門」が現れたと。

急いで甲板に出ると、船の前に本当に巨大な門が存在していた。

馬鹿な!ここは海の上だぞ!!それにこの船が小さく見える程の巨大さだ…。門の周りには見渡す限りの壁が続く…。なるほど、これは確かに先に進めない筈だ…。どうなってるんだ。実体か?…いや、《凝》で見ると信じがたい事にこれは念能力のようだ。しかし、これ程の具現化を出来るとなると、まさに「神」の如き存在なのでは…。

と、思っていると、「門」の手前の海域が盛り上がり、巨大な龍の様なものが顔を出した。大変巨大な龍だ。顔だけでも船の舳先より大きいぞ!

——ヒトよ。我が守護する場所へようこそ。何用か？——

これは、念話、か？「ヴリトラ」もやっていたが全く原理が分からないな……。あの大ききでこれ程の知性。あながち「神」と言うのも間違いじゃないな。明らかにあの「門」はこの龍の能力だ……。さて、交渉の時間かな？

「新世界の門番よ！我々はメビウス湖の中央にある大陸から来た！我々は新世界の調査を行いたい！是非門を開いていただきたく思う！」

と、チャンドラー司令が大きな声で返事をする。

——それが何を意味するのか、分かっておるのか？ヒトよ。与えられた楽園で大人しくしておれ——

「我々は力を付けた！調査ぐらいなら出来る筈だ！頼む、『門』を開けてくれ！」

——永き時を経て、貴様らは忘れてしまったか……。ならば良かろう。存分に調査とやらをして、再び思い出すがよい——

そう言うと、巨大な「門」が開き始めた！…どうやら交渉は成立したらしい。

——そのまま進めば辿り着く前に沈むであろう。行き帰りに案内役を付けてやる。…帰れたらな——

すると、海の中から複数の人型の姿が現れた。よく見ると下半身は魚だ…。所謂人魚だな。

——其れは我が眷族。貴様らを安全に導くであろう。しかしヒトよ。ゆめゆめ忘れるなかれ。貴様らがどのような存在かを——

その言葉を最後に再び龍は沈んでいった。最後に私だけにであろう、声が響いてきた。

——ヒトの中でも、貴様だけは何とかなりそうだな…ヒトの可能性を我に見せて

人魚達の先導で船は進む。しかし、さすがにあんな馬鹿げたスケールだとは思わなかった。：。もはや前世でいうリヴァイアサンといつても過言ではない。：暗黒大陸とは一体どんなところだろう。私も例の「新大陸紀行」を本部で読ませて貰ったが、本当に空想小説の域だ。馬鹿げている。馬鹿げているが、先ほどのを見ると、とたんに説得力が増す。つまり、あの本に書いてあった、「厄災」というものも真実だと言うことだ。これから我々が向かう場所、「古代の迷宮都市」に存在するという万病に効くという香草、そして、それらを守る植物兵器「ブليون」：。もしこれが本当だとしたら、確かに人類は1歩処か、2歩も3歩も先に進めるだろう：。

だが、私は知っている。原作の漫画にそのような描写が1つも無かった事を：。あるいはもしかしたらあったのかもしれない。あの漫画のことだ。何でもありだろう。だが、もし：あの門番が言ったように我々が太刀打ちできないようなちっぽけな存在であ

るとすれば……。この作戦は非常に危険なことになる。

そもそも、訓練されているとは言え、念能力者でもない一般人が立ち入って良いところなのだろうか？ 植物「兵器」とあるが、それは一体どのような物なのか？ 私は当初から不安があつたが、ここ最近はよりそれが強まってきたように思う。無事に帰れるだろうか？ もしもの時に、私は一体どうしたらよいだろうか？

今まで私を守ってきた【自己貪食】、オートファジー【日々是健康】、ヘルシーマンそして【完全適合】パーフェクト・コンパイト……ここからはより厳しい闘いになる可能性が高まった。今は師匠の教えもある……。

だからこそ、私は絶対に生き延びてやる。何が何でも生きて帰る。それが私の今回のミッションだ。



人魚達はある程度こちら側の言葉も通じるらしい。この人魚に先導されている間は、海の魔物から襲われないそうだ。あの門番のサイズと能力から見ると、海の魔物はクラーケンなんてものじゃないんだらう……。だいたい後2ヶ月ほどで新大陸の沿岸に

着くらしい。その沿岸にベースキャンプを敷いて調査開始だそうな。

私も、少し思うことがあって、ここ最近は瞑想が増えた。師匠の言葉をより強く意識し始めたからだ。生き残るにはあらゆる災いを跳ね返すことが必須になるかもしれない。だからこそ、師匠の見せてくれたあの「聖光気」を身につけておきたい所だ……が、全くうまくいかない。当たり前か。あれこそ究極の奥義だ。自然との同調、調和もそこそこしか出来ない私にはやっぱり難しい。恐らく何十年単位が必要だ。とうてい間に合わない。しかし、何かやっておかないと不安に飲み込まれそうなのだ。

ネーブルさんも少しずつ緊張が増しているように思う。ハンター協会の看板を背負ってきているからな。ここ最近ハンター同士の打ち合わせの頻度も増してきている。確認事項が多いがこれもまた仕方ない。リーダーは大変だな。トリプルなんてなるもんじゃないな。

まあ、不安になっていても仕方が無い。ここまで来ている以上は最善を尽くすのみ。残りの私の自由時間は自己鍛錬と瞑想に費やそう。



いよいよ陸が見えてきたらしい。私も確認したが、広大な陸地だ。地平線が見えない。と言うか、巨大すぎる地形がはつきりと目に映る…。何だあれは。はつきり言つて巨人サイズだ。遙か遠くに見えるはずの山脈が雲を割っているのが見える。また、別の場所には天をも貫く木が見える…。別の場所にはこれまた高さが分からないほどの塔が見える…。遠近感が狂いそうだ。それこそまるで未知の全く違う世界観の場所に来た感じだ。

いつからHUNTER×HUNTERはファンタジーになった？もつと現実的なシビアな世界じゃなかったっけ？こんな所を調査するのか…。やっぱここは、絶対に変な生物がてんこ盛りでいそうだなあ。とにかく今からでも帰りたいが、泣き言ばかりは言つてられないので、この作戦を成功に導けるようにしよう。成功して穩便に帰ることこそが私の望みにつながる。頑張ろう。



人魚達は、そのまま私たちを船の停めやすいところまで導いてくれた。軍艦はうまく停泊し、我々はボートで砂浜に到着した。人魚達はそのまま海へ帰っていった。あれは念獣なのか？それとも実体か？分からないが、船長に向かって鈴を渡していたから、恐らく実体なんだろう。亜人種ということか。しかしあの龍の眷属とか言ってたな。魔獣の召喚する亜人種、か……よく分からないことは考えるのはよそう。とにかくこれからが本番だ。

軍の人々に混じって、ベースキャンプの設営に掛かる。資材を運び出し、テントやその他の設営を行うが、さすがに1000人規模のキャンプは時間が掛かる。午前中に着いたはずなのに、漸く一段落したのは夕方だ。今日はこのままここで一泊だな。ちなみにさすがに1000人全員が現地に赴き調査するわけでもない。医療班や、連絡班、補給班などは基本キャンプに待機だし、操船するメンバーは船に詰めている。

私もネーブルさんに「船に詰めていたいなあ」と言ったら、「ご冗談を」と真顔で返されてしまった。ほんの冗談なのに……ネーブルさんもあまり余裕がないのだろう。仕方ない。明日からの調査を頑張るしかないか。

37、 迷宮都市への行軍

ベースキャンプを設置した次の日からいよいよ調査開始だ。と言っても、まずはこの近辺の安全確保だが。今回は軍とハンター協会の共同作戦なので、我々はそれぞれ手分けして近辺の警戒をする。私も以前はこのようなときに《円》を使っていたが、このような場所ではやめておくべきだろう。《円》はこちらが状況を把握するには非常に便利だが、同時に敵にもこちらの存在がバレてしまう。目立つ行為は控えるべきだ。もちろんこのことは他のハンターにも共有している。

一日掛けて近辺の調査が終了した。この周囲500メートル圏内には警戒すべき敵はいないらしい。人魚達もある程度敵性生物のいないところに導いてくれたらしい。少しほっとした。軍の中でも植物や微生物などを専門にしている者もいて、新大陸の植生を調査していた。安全が確認されたらここに移住する計画も考えているらしい。私はやめといた方が良いと思うけどね。

さて、いよいよ遠征だ。目指すは「古代の迷宮都市」！目標は万病に効く香草！例の

文献しか資料がないので、ルートを探りながら手探りで向かう。資料によると、ここからおおよそ北へ大体400キロの地点にあるらしい。様々な人員を抱えての出発だ。軍側のリーダーは大佐であるシヨンさんだ。いかにもな軍人さんだが、やはり優秀な人だ。指示が明確で迷いが無い。大佐にもなる人は伊達じゃないな。統率力には期待が出来そうだ。

200名程はベースキャンプで待機して不測の事態に備えつつ、現地の調査を行う。ハンター側は、チャーリーさんが残るそう。護衛兼、生態調査だ。私もそっちが良かったがお断りされた。まあ仕方ない。チャーリーさんの能力は軍と相性が良さそうだしね…。

残り800名程で縦2列になつて進む。私とネーブルさんは先頭。露払い兼敵の攪乱だ。アンソニーさんとマツトさんは中ほど。医療と護衛。ブラッドさんは後方。これまた護衛と敵性生物の足止めだ。まあ納得の配置だ。唯一私が先頭なのは納得いかないが。最早お化け屋敷に入る気分だ。行った事ないけど。

砂浜地帯を抜けたら後は樹海だ。樹海か…。この様な大人数の部隊で樹海か…。見通しも悪いし、指示が通りにくい。ハッキリ言つて最悪の環境だ。前世でも見た映画にもよくある奴だ。少しずつ削られて、全滅する…。駄目だ。思考がネガティブだ。いざという時は私も自重しないでなるべくみんなを守ろう。私は怪物ハンターだからな。

そこから20キロまでは特に襲撃も無く、順調に進んだ。時折、小型の恐竜みたいなのが複数で出て来たが、部隊全体に縦長に《円》をしていた私が感知。文字通り飛んでいつてぶん殴って倒した。先程、《円》は使わないと決めていたが、ネーブルさんと大佐の要請で使っている。もしもの時に人員を減らしたくないそう。来たら来たで、迎え打つとの事。寧ろ何も分からないまま先手を取られるよりもよいそう。仕方ないので、工夫して使う。《円》は敵から感知されそうになる諸刃の剣だが、縦長にして薄く張っていたので大丈夫と信じるしかない。とりあえず部隊全体の5メートル周辺を覆った。私以外のハンターは厳しい。というかこれは私にしか出来ないの、私がやるしかない。他のハンターは驚いていたが、心強いと喜んでいた。馬鹿オーラがあるので消費もさほど気にならない。これで、先頭にいなながらも人員を守る事ができる。出来れば何も無いと良いが。

1日目終了。本日は60キロ程進む。小休止を入れながらとは言え、この大部隊でこれ程進む事が出来るとは、やはりかなり鍛えられた精鋭だな。また、かなり強行軍にも見えるが、大分余裕を持つてるように見える。野営を行うが、これまた《円》で警戒する。あまり長時間せず、一瞬部隊周りまで行ってから消す。我々ハンターも休憩を交代でしつつ、休みを取る。まあ私は最近2時間も有れば全回復出来るので、部隊の警戒

を中心に行う。

2日目。この日も朝から行軍。ただ、何人か人員が見当たらないらしい。野営から離れて戻って来ないとの事。大佐は救出部隊を出すかどうか悩んでいたが、ミイラ取りがミイラになっては敵わないので、数人だけ野営地に残り、捜査を任せたのち、出発した。：私の《円》もちよくちよくやっていたが、敵の影や怪しい動きなど見当たらなかったんだが：。気にはなるがしようがない。進もう。

しかし、この樹海は相当にデカイ。距離的な意味もそうだが、主に植物などの大きさ的な意味でだ。奥に行けば行くほど巨大になっていく。もはや以前のミネネ連邦のジャングルの5〜10倍にまでデカくなっている。我々は虫とかになった気分だ。一つ一つの木が屋久杉レベルってどういう事？

草も巨大で、先頭にいる私やネーブルさんがオーラブレードでスパスパ切りながら進む。偶に巨大な蟲を見かける様になった。人間サイズだ。：見かけたらすぐに輪切りにした。あんなのに襲われたら普通の人間ではひとたまりもない。やはりここは移住するには向かないと思う。

3日目。約200キロは行軍している。予定通り順調だ。しかし、道中にここまで逆に何も無いとかえって不安が募る。まるで様子見をされている様な：。いや、何も無かった訳ではないな。夜にまた数人が消えた。これは我々の隙を突いた襲撃な気がす

る。…だとしたら狡賢い相手だ。仕方ない。《円》を持続するしかない。しんどいが、これも部隊を守るためだ。私の休む時だけ、ネーブルさんとアンソニーさんに代わって貰って、厳戒態勢を取るようにした。流石に私も一日中《円》は神経を削る。ちなみに野営地にはそれぞれ無線の中継機器を設置してる。これで本部司令官との連絡も可能だ。この時代では最新機器だろう。司令からの判断は続行との事。まあそうだろうな。消えた人員には申し訳ない事をした。恐らく状況は絶望的だろう。司令も大佐も苦渋の決断のようだったが、この作戦に参加している兵士達は、事前にかんりの同意書を書いていて、死亡又はMIA（作戦行動中行方不明）になった場合も遺族などにかんりの給付金が支払われるらしい。だからと言う訳ではないが、我々には無事を祈るしかない。

4日目。この日はかなり先に進んだ。およそ70キロだ。例の文献によると、400キロ程先にあるそうなので、後130キロだ。急げば後2日で到着するだろう。最近は夜の襲撃もあからさまになって来た。巨大な蟲や例の小型の恐竜が中心だ。我々もハンター中心に撃退する。

兵士も対抗してるが案の定、銃は効果が薄い。しかし、まだ複数で対処できるレベルのようだ。私も発見したら触らずに念弾やブレードで対処してる。他のハンター達も上手くやっているようだ。そろそろ遠慮がなくなつて来たな。到着まで保つだろうか。

この時に複数人の怪我人が出たが、アンソニーさんと医療班の治療で問題無くなった。流石だな。本日は死亡者、行方不明者0ですんだ。

5日目。昨日と同じ様に進む。夜も同様だ。寧ろより襲撃が激しくなっている。これは：我々を休ませないつもりか？？確かに全体的に疲労は溜まって来ている。しかし、後50キロ程だ。何とか樹海を抜けてたどりつかねば…。

6日目。予定では行軍最終日だ。行きがこれだと帰りも思いやられる。しかし、とにかく目の前の事を何とかするべきだ。最近では地震が頻繁に起こる。……生物の振動じゃない事を祈ろう。

しかし、ついにここで緊急事態が起こる。後方で巨大な生物の反応が複数あったのだ。急いで急行すると、見上げるばかりの象に似た生物が複数現れた。基本的には似ているが、サイズがおかしい。40メートル級の木々を凌駕する大きさだ！そして、長い鼻の脇に複数本の耳の様な、触手？の様な物が生えている。大体それが10匹前後いる！

その一つに襲撃して来た恐竜を捕まえているところを見ると、あれはやはり触腕らしい…少なくとも肉食だ。しかもその恐竜が溶けてきているところを見ると、酸の様なものでも溶かしているらしい。不味いな。既にこちらに目をつけられたらしい。仕方ない。

相手するか。あのサイズなら銃はマメ鉄砲だ。他のハンター達も厳しいだろう。だから私がやる。

一旦《円》を解き、《堅》にする！触腕？が兵士に向かって来たが、全てをオーラブレードで叩き斬る！

すると、流石に怒ったのか、一斉にこちらを睨み付けて来る。

「今です！私がコイツらの相手をするので先に進んでください!!」

「だが…君が危ないんじゃないか!？」

「私なら心配ご無用！後で追いつきます!!引きつけてる間に行ってください!!」

「……分かった。健闘を祈る!」

そうション大佐が言うと、部隊に急ぎ離脱する様に命令した。その間私は触腕斬り続けていたが、しばらくして部隊が漸く離れた様だ。撒くのはネーブルさんでも出来るが、ネーブルさんはリーダーなのであっちに着いた方がいいだろう。

…ただ、言つてて思つたけどこれって死亡フラグだよね。「プレデター」とかでも見ただぞ。

と、そんな事を考えている間にも例の触腕攻撃は続いている。もう粗方切つたと思うんだが…よく見たら触腕が恐ろしい速さで再生してる！これは埒があかない！

しかし、急に一旦触腕攻撃が止み、大きな鼻をこちらに向けて来た。不味い！何か一

斉に来る！

次の瞬間、恐ろしい速さで複数の個体の鼻から液体が飛んできた！ 慌てて飛び上がり回避する！ しかし、それを待っていたのか、何体かが飛んでる私に向けて同じ液体を飛ばしてくる！

くそつ、余計な事考えてたからだ！ まだまだ未熟……！

今はこれを回避しなければ……！ オーラを硬くし、液体をカット！ しかし、勢いが強く、いくらか浴びてしまう。すると、浴びた部分が煙をあげ、恐ろしい勢いで溶けてゆく！
これは……酸か！ 【バイエクト・コンバート完全適合】発動！ 酸に適応！

奴らは容赦なく連続で浴びせてくる。有効打が見つかったからだ。しかしこちらも全力で適応！ 最近は猛毒でも30秒で適応出来る！ 舐めるなよ！

しばらくその攻防が続き、完全に適合すると、奴等は困惑し出した。いくら浴びせても効かないからだ。装備は悲惨な事になったが、私は生きてるぞ！ 次はお前たちの番だ！

この巨体に物理攻撃は手間がかかる。よって奥義で始末を付ける。瞬時に飛び上がり、奴等の一体に手を触れる。

生命エネルギーを同調、からの……解放！ “外浸透勁”！ 念能力を持たない相手にはこれだ！

数秒もしない内に体液を撒き散らしながら一体が倒れ伏す！他の奴等はそれを見て不利を悟ったか逃げ出そうとするが、逃すか！ここで死ね！

その後、ようやく全ての個体を全滅出来た。一息つく。結構オーラを使って疲労も少々あるが、まだまだ余裕がある。急いで部隊に追い付かなければ。

《絶》をして、と。さて、追いかけよう。

そう思った瞬間、背中から何らかの針が刺さる！しまった！！油断した！毒か！？そう思った時、全身に凄まじい衝撃が走り、私は意識を失った。

38、再戦

キチキチキチキチ……

不快な音と痛みによって目が覚める。気がついたら、私は洞窟の中にいた。暗い……。身体が動かない……。何故だ？それに至る所から不快感を覚える……。ぐっ……。痛い……。地道に「完全適合」パーフェクト・コンバートが発動しているので、何らかの状態異常を受けているらしい。目が慣れて来た。

キチキチキチキチ……

な、何だこれは!?私の身体が巨大な醜い肉塊に変貌していた……。どういう事だ……。そして、私の身体を人の半分ぐらいの気持ち悪い蟲が齧っていた。これは……。ゴキブリ……。似ているか？ただ、アレと違うのは強靱な顎と手……。様な触手が生えている所だ。気付

けば、至る所に似た様な肉塊が転がっていて、そちらにも群がっている……！しかもそういったらも気持ち悪い呻き声をあげている……。

急ぎ、細胞操作を試みるが、どうやら細胞が暴走しているらしい。恐らく癌細胞化している……。恐ろしい蟲だ。生物に癌細胞を発生させて、その増殖した肉を貪り食べる生態！しかも獲物は長く食べられる様にわざと殺さない……！

これ程悪意に満ちた生態は初めてだ。しかし言ってる場合では無いな。オーラは……、まだ辛うじて出せる。重要器官の細胞がまだ無事だ！よし！【完全適合】パワエクト・コンパートをサポート……！しかしかなり苦勞している……。細胞全体に影響を及ぼして居るからだ。しかも生かすために重要器官には手を付けない徹底振りだ……。

仕方ない、徐々にやろう……。

延々と齧られ続ける苦痛を味わいながら、何とか徐々に身体が元の形に戻って行く……！それに気づいたゴキブリ（仮）共は、私が適応し始めたのを見て更に口から針を飛ばして来る。打たれた場所は再び癌細胞化するが、徐々に元に戻っていく。身体が元に戻ってくるにつれ、ゴキブリ（仮）共は危険を察知し始めたのか、私に一齐に群がり鋭い顎で齧り始めた。生かして齧る事をやめ、殺す事にしたらしい。齧られた場所は【日々は健康】で復元するが、キリがない。身体もまだ動かない！仕方ない、出来るかど

うか分らないが、この状態から“浸透勁”で一匹ずつ始末する……!

本当に嫌だが、齧られてる部分からオーラを同調させる。やってみて分かったが、コイツ等は薄いが念能力持ちだ!アレは念能力か!だからあんなに強烈なのか!

ということとは“内浸透勁”だ。齧られた部分から同調させたオーラのみで解放!本当は手を使つたやり方しかやつた事は無いが、しのごの言つてられるか!一匹が痙攣したのちぐつたりして白色の液体を出しながら離れた。よし、威力は手より劣るが出来た。溜めに時間がかかるがしようがない。ドンドンやつていく!

一匹ずつ始末しても次々と群がってくる!流石ゴキブリ(仮)だ。何匹いるんだ!?こちらにも一匹ずつ始末するが、埒があかない。【完全適合】パーフェクト・コンバートは既にオートにして【日々是健康】と“内浸透勁”を同時に使用する……。ジリ貧だな。オーラ量もそこまで残つてない……。身体が元に戻つていくにつれ少しずつ供給されるが、すぐに消費される自転車操業だ。とにかく群がってくるコイツらを何とかしないと……!

既に全身を齧られている。一匹ずつじゃ無理だ。複数で出来ないか……!まずは首に取り付いてる奴ら2匹から……。出来た!少し効率が良くなつて来た。やはり命懸けだと習得率が高い!無理だつたら死ぬからな!

次第に2匹ずつが3匹ずつになり、4匹になり、5匹になる。身体中の何処からでも出来る様になった。溜め時間も少なくなり、1秒かかっていたのが瞬時に出来る様に

なった。しかしやってもやってもまだまだ来る……。くそっ！ 何匹いやがる！ もう50匹以上は殺してゐるのにまだ湧いてくる……！ こちらも回転を上げる！ 既に10匹以上同時にやつている……。不味い。まだか？ オーラ量ももう心許ない。そう思い始めた頃、漸く「完全適合」パーフェクトコンバートが適応完了した！ 間に合う！

そして右手が動き出すツ！更に効率アップだ!!その内左手も動き出し、頭部などの弱点を優先的に防御しながら出来る様になった。その頃には最終的に300匹以上は倒し、群がる山も徐々に減つて来た。今は200匹以上同時に出来る……！身体が動き出してから、オーラでも出来る様になったからだ。そして……

漸く全滅させたようだ……。500匹ぐらいいたぞ……。それにしても、何とか間に合つたか……。久しぶりに死ぬかと思つた。こんなにヤバイ生物が大量にいるのか……。やつぱり移住は無理だな。ジュラシックパークより酷いぞ……。

とりあえず、ここはゴキブリ(仮)の死骸で山積みだ。気持ち悪い事この上ない。さつきは必死だったから気にならなかつたが、落ち着いてみると生理的な嫌悪感が強い。早く脱出しよう。そうだ、哀れな犠牲者にトドメを刺してやるか……。そう考えて、他の肉塊に近づいた時

「……………コロ……………シテ……………」

!!

人間か!?慌ててそちらに近づくと、肉塊の一つは確かに服の残骸が残っていた…この装備は、先に進んだ部隊か!だが…声も微かで震えている……それに…どう見ても手遅れだ…。

「大丈夫だ! 奴等は全て倒した! 今すぐアンソニーさんの元へ連れて行くからな!」

「ムダ……………ダ……………ブタイ……………ハ……………ゴホツ……………ゼン……………メツ……………ダロウ……………」

「!何が起きた!?!」

「バケモノ……………ニ……………オソワ……………レタ……………ハヤ……………ク、コロシテ……………クレ……………タエ……………ガタ……………イ……………」

…自分もそうなっていたから分かる。確かに耐えがたいだろう。特に齧られてる時は痛覚もあつた。地獄の様な拷問だった。一般人なら尚更キツイだろう。

「……………貴方は、いいのですか?」

「アンタ……………トハチガツテ……………モウ……………モドレナイ……………ダロウ……………ソレニ……………クツウガ……………ヒドイ……………タ

ノム……ハヤク……！」

「……分かりました……。介錯します……。何か言い残す事は？」

「ジェシー……二……スマナイト……ツタエテクレ……」

「……必ず伝えます」

「アリガトウ……ヨウヤク……ラクニ……ナレル」

……私は彼に神経毒と麻薬を打ち込んだ。徐々に呼吸が浅くなり……安らかに息絶えた。苦痛が少なくなったら良いのだが……。彼の近くに千切れたドツグタグが落ちていた。ラルフ……リリース、23歳……。初めて人を殺した……か。だが、このまま生かして置いても苦痛が増すばかりだ。アンソニーさんでもこれは治せないだろう。私の【完全適合^{パーフエクト・コンバート}】でもかなりギリギリだったからだ。最早呪いに近いものだった。

仕方ない。仕方ないんだ。私は自分にそう言い聞かせながら彼とその荷物を運び、洞窟から脱出した。他の肉塊にも同じように毒を打ち込み、楽にさせた。

地表に出ると、簡単に彼を埋めた。そして近くの岩を砕き、ヘルメットを置いて墓標を建てる。

「1771年8月　ラルフ……リリース、ここに眠る」

このドッグタグは私が必ず持つて帰ろう。そしてジェシーさんにも伝えよう。それが生き残った者の義務だ。



近くに川があつたので、簡単に身体を洗い、ラルフさんの服を着る。ゴキブリは水場の近くに出るからな。あると思つたが本当にあつて助かつた。服はポロポロで破れているが、無いよりマシだろう。首にはハンターライセンスと彼のドッグタグを付けた。千切れず残つていて良かった。それにしてももう夕方過ぎ。あれから6時間以上経つたか。オーラもギリギリで心許ない。仕方ないので先程の洞窟の入り口で少し休憩する。夜に活動して、皆に追いつこう。バケモノに襲われたそうだが、心配だ。少しでも早く回復せねば……!

《絶》をし、警戒を怠らないようにしながら仮眠を取る。先程の適応からか、細胞がかなりパワーアップしたようだ。具体的に言えば、分裂、増殖する力が凄まじいスピードになった。恐らく、腕一本なら「日々は健康」で簡単に再生できるだろう。仮眠も1時

間で充分だ。脳細胞まで少しパワーアップしたらしい。人間離れが激しいが今更だ。寧ろここではありがたい。

念の為、2時間休息し、出発する。オーラも全回復した。どうか細胞がパワーアップした分、よりオーラが増えた。100万はいったか？ただ、オーラも量はかなり大事だが、質も大事だ。言わば制御力だ。そのオーラを完全に御せなければ簡単に負ける。師匠がいい例だ。今は修行は無理でもなるべく制御出来る様に心がけよう。

さて、そんな事よりも方向はどっちだ？奴らの生態から襲撃位置からそこまで離れて無いはずだ。慎重に進みながら匂いで辿るしかないか。ちなみに私の五感もかなり鋭い。嗅覚は犬に近いぐらいだ。ラルフさんの匂いの残滓を辿る事で合流できる筈だ。急ごう。

微かな匂いを頼りに進む。進むにつれ、部隊の人たちの匂いも混じり始める。よし！こつちの方向だ！その内足跡も発見した。これを辿る！

しかし、同時に血の匂いも混じり始める…。ラルフさんが言ってたな…。大規模な襲撃で犠牲者が出たか…。

しばらく足跡と匂いを辿って居ると、聞き覚えのある声がしてきた。

「おーい！カームさーん」

「こっちだ！早く来い！」

「急げ！」

「こっちつす！」

「早く来ないとディナーに遅れるぞ！」

!!

この声は！ハンターのみんなだ！無事だったのか!!

「私は無事でーす！今行きますー！」

急いで駆け寄る。良かった。みんなのオーラだ！

みんないる…！

みんないる……？

残り10メートルで止まる。先程から頭が痛い。

「どうしたんですか？早く行きますよ」

ネーブルさんが言う。

「そうだな。待ってたんだ」

「そうつすよ。早く行きましよう！」

アンソニーさんもマツトさんも言う。

「どうしたんだよ。何か心配事でもあんのか？」

ブラッドさんも聞いてくる。

「なんでもいいけどよお、遅れちまうぜ？」

チャーリーさんも私を急かす。

.....。

何故この人がここに居る？

「ネーブルさん…部隊はどうなったんでしょう？」

「え？皆さん無事ですよ？」

そんな筈は無い。

「負傷者は出なかつたんですか？」

「ああ。皆ピンピンしとるよ」

馬鹿な。

「彼らの警備は？」

「心配いらぬ。必要ないだろう」

任務放棄だろう。

「そしてチャーリーさん…貴方は何故ここに居る？」

「ああ、緊急事態だからみんなを追っかけたんだよ…」

私ならともかく、単独で追跡する？この距離を？嘘を言うな。

「嘘じゃ無いぜ、かなり無茶したがな」

「…ならば聞きますが…何故あなた方は緊急事態にもかかわらず、ここにいます…
通は部隊と行動してる筈だ…貴様らは何者だ？」

私は臨戦態勢に入りながら質問する。【完全適合】パーフエクト・コンバートもとづくに発動している。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

…普

「…バレちゃったね」

「…惜しかったね」

「…詰めが甘いね」

「…誰のせいかね」

「…仕方ないね。…普通に食べよう」

ゴキゴキゴキ…

嫌な音を立てて彼らの身体が変化し始める。やはりな…魔獣か?…いや、これは…
マンティコアか!

「こいつには我々の力が効かない」

「手強そうだ」

「気をつけろ。かなり強いぞ」

「連携しろ」

「合わせる」

正体を表した奴等のオーラは以前の5倍ぐらいある！奴等は私の周りを囲み、一斉に飛びかかって来た。速い！以前の奴とはやはり比べ物にならない！…だが、私は対応出来る！

四方八方から迫る爪や尻尾の攻撃をいなし、1匹に「内浸透勁」をぶち込む！

嘖!!!

先程ので、かなり精度が上がったぞ！強烈に効くはずだ！喰らった奴はよろけ、大量の血を吐いて倒れた。恐らく絶命しただろう。

「かなり強い」

「逃げる？」

「いや、まだだ」

「あれをやろう」

そう言うと、彼らは一旦離れて尻尾を翳す。

何だ？と思った瞬間、尻尾からオーラのレーザーが飛んでくる！コイツらここまで熟

練か！しかし、それは効かない！丁寧にレーザーを横から軽く叩き、全部逸らす！

その瞬間、身体が反応した！あれに神経毒を混ぜるか！以前の奴よりかなり強い！だが、前にそれは喰らった。油断させる為に効いたフリをする。

「やったね」

「強かった」

「油断するな」

「確実に頭を潰す」

…慎重だな。前の奴とは大違いだ。近づきもせずに再び尻尾レーザーで頭を狙っている。…仕方ない、カウンターで行くか。

奴らがレーザーを放った瞬間、それを躲す！狙いが分かれば躲すのは容易い！同時に鋭く変化させたオーラ波を円状に放つ！

斬
!!!

見事に奴等は横一文字に真つ二つになった。DBの気円斬の応用だ。オーラブレードよりもこういう時に便利だ。さて、こちらも油断せず全ての頭を念弾で消滅させる。…終わった。これはあの頃に出会ってたら即死だな。今でよかった…。辺りを警戒し

つつ、何も他にない事を確認する。

さあ、とんだ道草をくってしまった。先を急ごう。

39、合流

急ぎ、皆のもとへ向かう。先程の闘いではかなり驚いたな。まさか再び奴が出て来るとは。能力もより強烈だった。以前に比べて知能がより高いし、変身するし、思考誘導？認識阻害？も悪辣だった。おかげ様で私も念話的な事が出来るかも知れない。あれは微小なオーラを飛ばして行っていた。正に「念」話だな。ネーブルさんからコツソリ貰ったのも併せてかなり有用スキルになりそうだが。しかし例によって私の体質と誓約によって幻惑系は出来ないが。まあ幻惑が効かないというだけでも有効だろう。念話が出るだけでも十分だ。

さて、いよいよ樹海の切れ目が見えてきた……！もうそろそろ昼過ぎになる。漸くこの森を抜けられる！部隊のみんなもこの先にいそうだ。……無事だろうか？とにかく行ってみよう！

森を抜けたら、そこはなだらかな丘で、雄大な草原が広がっていた。しかし、そんなことはどうでも良いぐらいに目の前の光景に目を奪われた。

草原の先に、凄まじい規模の都市が広がっていたのだ。石造りに見えるが、整然と並ぶビル街のようにも見える。そして、その中心には植物のうっすら生えてる地帯が広がり、更にその中心には天まで届くような高い塔が悠然と姿を現していた。

思わずその光景に目を奪われ、しばらく呆然と眺めていたが、その後、草原の一角に部隊のキャンプが設営されているのが見えた。

私は、思わずそこにダツシユして近づいたが、残り10メートルの所まで来たときに見張りをしていた兵士に強い口調で止められた上に、銃まで向けられた。

「生まれ!!! 貴様、誰だ!?! 所属と階級、名前を言え!!!」

「待ってください!! 私にはハンター協会のシングルハンター、カームIIアンダーソンです!」

「いや、それだけでは駄目だ! そのままそこにいろ! 一步も動くなよ! 動いたら敵対行動と見なし発砲する!!!」

「……わかりました。いつまでこうしていれば良いですか?」

「じきにハンター協会員が来る……それまで待て!」

仕方ない。とりあえず待つことにする。……恐らくマンティコアに襲われたな? だからこそこの警戒か……。そうこうしていると、ネーブルさんが歩いてくるのが見えた。……他のハンターも一緒だ。ずいぶん警戒している。

「また会えるとは思いませんでしたよ……『壊れない男』^{アンブレレイカブル}。どうやって生き延びたんです？
そして……我々には貴方が本物には思えない」

「分かりますよ。ネーブルさん。私も奴らに襲われました。ライオンのような魔獣……で
しよう？」

「！なぜそれを……。やはり心を読むか……！」

「いやいや！待ってください！本当に私です！疑うなら色々質問してみてください！答
えますから」

「そうですね……では、まず始めに貴方のこれまでの行動を聞かせてください」

そう言われたので、私は象型の生物との交戦から、その後不覚を取ってゴキブリ型の
敵に襲われたこと。そして匂いを辿ってここまで追跡する途中にマンティコアと交戦
したことを話した。また、ラルフさんのドッグタグを見せ、彼の遺言まで伝えた。

「なるほど。しかしそれだけでは信用に足りませんね。そのタグも死体から奪えば容易
い」

「……では、貴方の知らないことを言えば信用しますか？」

「……内容次第ですね」

「まず、私のカキンでの師はリー老師。そして、私はそこで10年間学びました。奥義と
して『発勁』の中の『浸透勁』が使用できます。これで象を全てと奴らの一体を倒し

ました」

「…確かに私が知らない情報だ。しかしどう証明します?」

…疑い深いな。やはりかなり手ひどくやられたんだろう。

「実演すれば出来ませんが…まあやらせてくれるのは無理でしょうね。仕方ない。ではこれをみてください」

そう言つて、私は手のひらを前に突き出した。《纏》の状態から指先にオーラを集め、移動する。字を書き、それを指先で移動させる。など、変化系の様々な応用技を披露した。最初からこれをやれば良かったな。

「奴らもオーラ操作はある程度熟練ですが、ここまではできんでしょう」

ネーブルさん達は驚いていたが

「……確かにそうですね。字も我々が使用しているものだ。わかりました。貴方を本物だと認めましょう」

「ありがとうございます」

「しかし、完全に信用できるまでは監視させてください。申し訳ないですがまだ疑いが完全に晴れないので」

「…分かりました。そうしてください」

とりあえずは納得してくれたようだ。これで納得してくれなかったらどうしようかと思つていた所だ。

しかし、私の背後からもう一人出てきた。チャャリーさんだ。

「いや〜久しぶり！向こうで緊急事態が発生したからこつちに來たぜ！ちよつと入れてくれよ！」

「……ちよつど良い。先ほど伝えた技を見せましょう」

そう言うと、無造作に私はチャャリーさんに近づく。

「お、おい。どうした。俺だぞ？」

「生憎、もう私にはそれは効かないんだよ」

そう言うと、チャャリーさんの胸に手を当て、*“内浸透勁”*をぶち込んだ。

「ぐつぎやあああつあああ!!!」

叫びながらチャャリーさんだったものが正体を現し、そのまま絶命する。やはりマンティコアか。はつきり言つてもうオーラでバレバレだ。私のはもう読めないからネーブルさんか他の人を読んだな？

「私には鬪つた相手の正体を見破ることが出来ます。次に不審な者が來たらまず私に会わせてください」

そう言う、ネーブルさんは呆然としていたが

「どうやら本物のようですね…。分かりました。認めましょう。どうぞ、中へ」と招き入れてくれた。

やつとか…。おのれ、マンティコアめ。



それから、予備の服に着替えさせて貰って、あの後どうなったかを詳しく聞いた。あれからやはり少しずつ人員が減っていったらしい。時間を追うごとにその減少する人数が増えはじめ、気付いたときには2、30人単位で減ってしまっていた。その後、なぜか減ってしまった人々が帰ってきた。そして、その後、またあからさまに人が減り始めた。しかし、不審な陰はなく原因が分からない。

そのうち、また例の象や蟲、恐竜どもが強襲を仕掛けてきて、これまた大量の兵士が文字通り溶かされたらしい。部隊が混乱する中はぐれる者もいたが、何とか部隊を整

え、ネーブルさんもしんがりで幻惑を掛けながら漸くジャングルの切れ目に到達した。しかし、その頃にはもう300名近くの人員が失われていた。更に、帰ってきた者が混乱に乗じて正体を現し、何人も殺して、そのうち何人かを浚っていったとのこと。合計被害、387名。

…大損害じゃないか。確か軍では30%が全滅の定義じゃなかったか？その辺にはあまり詳しくないが、その話が本当ならもう50%近く失われてるぞ！

「ネーブルさん。その話が本当なら、もう軍は軍事行動が不可能な状態ではありませんか？ここまでなつてもまだミツシヨンを遂行するのですか？」

「……軍には掛け合いましたが、任務は引き続き遂行することです。我々ハンターもたとえ軍がなくなるともここまで来たら我々だけでも迷宮都市に侵入し、リターンを得ることはやります。つまりこのまま続行です」

「…あまり言いたくはありませんが、ここはまだ道中で、しかもここからが文献に書かれていた兵器が出てくるんですよ？よく考えなくても本来の意味で全滅しかねませんよ……？」

「……ここまで来たら我々も引けないのです…。察してください」

「…それは我々の命を天秤にかけても…ですか？」

私とネーブルさんの間に緊張が高まる。次にどちらかが発言すれば手が出るほどに。そこへ会話に入ってきた人物がいた。

「それまでにしておけ。『アンブレレイカブル壊れない男』。お前の言う事ももつともだが、ネーブルの言うことも間違つてはいない」

「！アンソニーさん！しかし！」

「よく考えろ。これは国とハンター協会が10年掛けて取り組んできたプロジェクトだ。それを何も出来ないまま、成果も何一つ無いまま帰るわけにはいかん。もしそうならなってみろ。国家もハンター協会も面目は丸つぶれだ。他の国がうまくいった場合など目も当てられん。最悪V5同士での戦争の引き金にもなりかねんのだ」

「だけど！貴重な人員をもう400名近くも失つてるんですよ!!」

「まだ400名だ。私の想像が間違つていなければ、この何十倍もの人員が命を失うことになる。しかもそれは非戦闘員の可能性が高い。我々はこのミッションのためにここに来た。最悪命をBETすることも視野に入れてな。だからこそこれは絶対に成功させねばならんのだ。ネーブルも板挟みで辛いだろう。お前もそれを察してやれ」

「……分かりましたよ。納得はいきませんが。しかし、本当に兵器によって全滅しそ

「なったらどうするんです?」

今まで黙っていたネーブルさんが口を挟む。

「その時はその時で、プランBが発動します。ご心配なく」

「私は何も聞いていませんが?」

「これは国家間での取り決めです。つまり極秘事項。ダブル以上にしか話せません」

「…本当に納得いきませんが仕方ありませんね…。分かりました。付き合います。私一人意地を張つてもしょうが無いですからね」

「…分かつてくれたのなら幸いです。まだまだ貴方の力も必要だ。『アンブレイカブル壊れない男』。期待していますよ。もしその時が来たらプランBも貴方だけにだけは伝えます」

「仕方ない。全力で警戒に当たります。取り急ぎ、いまこのキャンプにいるかもしれない奴をあぶり出します」

私はキャンプ内を《円》で覆った。……やはり、いた。6名が入れ替わっているな。向こうは潜入した気になって私が気付いたことに気付いていない…。すぐさまそれぞれ場所へ赴き、直接“内浸透動”を打ち込んで倒した。驚くことに、シヨーン大佐も入れ替わっていた。…本当に大惨事だな。

軍は一時的に混乱したが、シヨーン大佐の後をダン中佐が引き継ぐことになった。

「やはり、貴方はかけがえの無い人員です。このミッションを成功させる鍵は貴方にあります…本当に期待していますよ」

……ネーブルさんはそう言ってくれたが、私は何も返すことが出来なかった。本当にこれでいいのか。その疑問がぐるぐる回ってその晩は眠れず過ごすことになった。

40、迷宮都市

眠れぬ夜を過ごした。こういうときは瞑想で心を落ち着かせるのだが、どうもうまくいかなかった。私の「勘」と呼ぶべきものが全力で警告している。…ここから先に行くな、と。まだ引き返せるはずだ、と。

…そうかもしれない。本当はここで引き返すのが正解だろう。どう考えても全滅に近い被害が出るように思えてならない。が、これもまたしがらみというものだろう。行くしかあるまい。兎角人間社会は複雑で、度しがたい。私も社会に出ることに憧れていたが、こうなるとは厄介なものだ。本当にままならないな…。とにかく私は最初に決めたように「生き残ること」。これだけは胸に持つておこう。私は絶対に帰るのだ。

次の日の朝、私達はこの古代の迷宮都市攻略の最終打ち合わせを行う。中心は我々ハントーと現在の軍のトップであるダン中佐だ。今度はジャングルとは訳が違うため、慎重に議論を重ねる。事前の打ち合わせでは分隊に分かれて突入する予定だったが、そん

な小規模ではなすすべなくやられてしまう恐れもあり、全体で行動する事になった。目立つが、不測の事態の時に対応しやすい。

ルート確保の為に斥候として分隊を少しづつ派遣して、安全が確認されたら進むというやり方だ。まあ異論はない。もしもの時には隊を100人規模の中隊に分けてそれぞれのハンターがそこに付く。それぞれの隊の隊長には小型の無線機が渡されている。もしもの時はこれで連絡を取り合うのだ。

当然ながらネーブルさんはダン中佐の中隊だ。私はフィリップス大尉の隊に入る。アンソニーさんとマットさんは別の隊だ。何でもコンビだと凄まじい力を発揮出来るとの事。まあ慣れてるやり方が1番いいな。後はブラッドさんか。

ブラッドさんはちよつと不安げだ。しかし私もそうだし、他の皆もそうだろう。出来れば、別れて行動なんて事態にならなければ良いが…。

それと、ネーブルさんから少し大きめのガラスケースを渡された。これにリターンを入れると言う事か。他にも用途があるそうだが、別途伝えるとの事。なるほど。プランBか。私の想像が正しければ大変嫌な予感はあるが、それが発動しない事を祈ろう。



いよいよ突入だ。都市近辺は妙に静かだ。今まで敵性生物の脅威に晒されて来たからか、強い違和感がある。考えられる事は、この都市が何らかの汚染をされているか、又はその兵器とやらが余程の脅威なのか、だ。

部隊員は流石に全員ガスマスクを装着した。我々ハンターもだ。私には必要無いかも知れないが、何があるか分からないので有り難く装着する。

前世で観た映画に、謎惑星の謎の遺跡にノーマスクで突入している場面があったが、とても正気の沙汰とは思えなかつた。案の定、ヤバいのに取り憑かれたし。

ともかく、気休めだとしても無防備よりは余程いい。私も生き残るために最善を尽くすか。

最大限の警戒をしながら、分隊が突入する。古代都市という事だったが、外観はかなり近代的だ。しかし、壁のような物は見当たらない。壁もないのに敵性生物の侵入を妨げてきたのか？とりあえず安全はクリアらしい。一番目立つ入り口は巨大な門だ。他の場所は入りやすいようで、建物のせいで入れない。ここから入るしかないか。しかし、近代的なビルっぽい建物が見える割には、細かい部分でマヤ文明的な意匠も見て取れる。入り口に近づくと、石造りの門の横には精巧なレリーフがある。…右側には木

を始めとする植物と：左側には人間だな。じっくり考察したい所だが、今はいち早く任務を遂行する事が先だ。しかし：こんな所で人間は本当に文明を築けたのだろうか？

どう考えても生存には適さない、こんな場所で：。それもこれから分かる：か。

門を潜れば、見渡す限りの石造の建物があった。道路も石造りだ。ただ、そのビル状の建物はかなり乱雑に立っついていて真つ直ぐ進む道は少ない。かなり入り組んでいる様だ。：確かに迷宮だな。道を間違うと袋小路に入り込みそうだ。とりあえず周囲に敵はいないようなので、中心部の方向を目指して進む。

草原から見た感じだと、だいたいここから30キロぐらいだろう。かなり巨大な都市だ。：迷わず辿り着ければいいが。

しかし、この都市は全く植物が生えていない。草一本もだ。普通はこんな古い建物などは植物に侵食されるものだが。例の兵器と関係しているのか？

また、石造の建物だが、窓一個ない。ただ入口はそれぞれあって、中は生活空間の様なものも垣間見える。石造りのテーブルや椅子などだ。我々の知っている形とは少し違うが。ただ、石以外の調度品は全く無い。腐食したのかなんのか分からないが、影も形も見当たらないのだ。凡そ2階から5階建てになっっているが、全てそうだ。どれぐらいの時間が過ぎ去ったのだろうか。数千年ではきかない気がする。

さて、5キロぐらい進んだらどうか。特に何らかの事態が起きる事も無く、静かなも

のだ。…静かすぎる。ここには生物の気配がまるで無い。動物も虫も、微生物すら、だ。正に無人大都市だ。気配も何も無い静かすぎる場所は不安がより募る。まるでこれからの運命を暗示しているようで。

そこからしばらく進むと、分かれ道に差し掛かる。どちらが正解なのか全く分からぬ。斥候の報告でも、どちらにも道が続いている様だ。仕方なく、我々は二手に別れる事になる。一方が行き止まりでももう一方が正解ならば良し。という事だ。幸い無線も通じるし、連絡を取り合えばいいだろう。

私とブラッドさんの隊、ネーブルさんとアンソニーさん、マットさんのグループに分かれた。さて、何も無いといいが…。

しばらく歩くとまた分岐があった。仕方なくブラッドさんとも別れる。無線で確認したところ、向こうも似た状況らしい。

…完全に分断されたな。仕方あるまい。何れかの部隊がリターンを発見すれば我々も即撤退出来るし、何より移動速度が段違いで上がるからな。警戒しつつ、皆の無事を祈ろう。ファイリツプス大尉は私に

「正直、『アンブレイカブル壊れない男』と同じ班で大変心強いです。頼りにしてますよ」

と言っていたが、今回ばかりは厳しいかもしれない。

「……私もたいして役に立たないかもしれませんが。正直に言えば私も不安ですが、全力

は尽くします。兵器とやらに見つかる前に急ぎ、先を目指しましょう」
 「ご謙遜を。しかし、そうですね。先を急ぎましょう」



全く、とんでもない任務だ。俺もヤキが回ったな。俺はブラッドIIピース。シングルハンターだ。これでも結構名は通っている方だぜ？ 『壊れない男』程じゃ無いがな。これまで数多くの懸賞金のかかった奴を捕まえたり殺したりした。もう38人だったか？ かなりの荒稼ぎをしたな。今回は国とハンター協会の要請も有ったし、莫大な報酬があったから参加したが……失敗したな。本当に来るんじや無かった。長年の勤が告げてる。

……俺はここで死ぬ。

まだ、あの『アンブレレイカブル壊れない男』と行動してる時はマシだった。アイツなら何とかしそうつ

て予感があつたからな。実際これまでもそうだった。道中もアイツが離脱した途端あの惨状だ。あれ程の奴が苦戦する奴等だ。やはりここは地獄だな。アイツも言った通りだ。道中だけでもアレなのに、ここからが本番と来た。ネーブルの野郎はプランBとか抜かしてやがったが、どうせ碌な事じゃねえ。アンソニーの奴も最初から信用ならなかつたしな。これだから国が絡む仕事は嫌なんだ。いつつも碌な事にならねえ。莫大な金に釣られたのが間違いだつたな。……残念だ。まあ前金だけでも相当なものだし、くたばつたとしても俺の家族にはかなりの金が届く。娘の病気もなんとかなるだろう。だから、今俺がここでどうにかなつたとしても何も問題ない訳だ。……何も、な。

今は確かに何も無い。だが感じるんだ。死の気配つて奴を。俺たちはとつくに捕捉されてる。奴等はタイミングを待つてるだけだ。…例えば、部隊が分断されて、アイツが居なくなつた今…とかな。

「隊長!!未確認の生命体が複数出現! 囲まれてます!」

ほくら、おいでなすつた。まずは銃撃だな。お手並み拝見といこう。どうせ効きやしねえだろうけどよ。

…やっぱりな。撃たれた端から修復してやがる。それにしても、奇妙な奴等だ。人間型や動物型、魔獣型まで居る。これだけなら同じ奴等とは思えないだろうが、気持ち悪い事に頭部が全て緑の球体だ。その周りには同じ様な大小の球体が浮んでやがる。数は…数十か。どいつもこいつも念使いだ。しかもオーラ量がそれぞれ尋常じゃねえ。ハハツ。壮観だな。恐らく侵食又は寄生型か。益々絶望的だ。…コイツらのお仲間になるのは勘弁だな。俺もシングルだ。足掻かせてもらおう。

「いいか…よく聞け…コイツには絶対に触れるな！銃撃で牽制しながら逃げるんだ！先遣隊は先に行つてルートを確保しろ！」

隊長を差し置いて命令したが構わねえだろう。皆も一も二もなく納得して従つたの
がいい証拠だ。

だが遅かった。奴等も動き出した。緑色の頭が割れて触手みたいなのが何人かに刺さる。そいつらは痙攣した後身体中がポコポコ膨らみ始めた…あれはもう手遅れだな。頭以外も本体が凄いいスピードで近づいてきて、胴体から口が開いて隊員が文字通り喰われたり、指の口？みたいなところから触手が伸びて刺さつたりとやりたい放題だ。それ以外にも浮かんでる球体が凄まじいスピードで飛んできて隊員の身体に突撃し、肌が露

出してる所から入って行った。そして身体の中を突き進んで頭部に向かつてる！1、2秒足らずで頭が奴等と同じになった！……侵食が早すぎる！何つーバケモノだ！俺も冷静に実況してる様に思うかもしれないが、これでも必死に逃げてる。だが、一般兵はそうもいかねえ。後ろからは「ぎゃああーっ！」とか「マ、ママーッ!!」っていう悲鳴がひっきりなしに上がってくる。正直俺も悲鳴をあげてションベンチビリそうだが、こんな時にパニックになった奴から死ぬから我慢してるだけだ。実際それは後ろの悲鳴が証明してる。

しかし、そんな時よりによつて最悪なお知らせが来た。

「こっちは行き止まりです!!」

……野郎、狙ってやがったな！クソっ！後ろから奴等は容赦なく迫って侵食して来る。行き止まりでも行くしかねえ！

そして、遂に追い詰められた。俺達も残り30人ぐらいしか残ってねえ………しゃあねえか。ここまでだ。だが、最期まで足掻く！

【漢フアイト・クラブの拳闘】!!

近くの寄つて来た奴に発動する！そして…！

【決闘の見届け人】
!!!

俺にはアイツらには言つてない能力がある。まあアイツらだつて同じだろう。俺も奴等も模擬戦では手を抜いてたしな。俺のコレは複数の敵集団に対して俺の闘いの顧客になる事を強制する。手出しはさせねえつて奴だ。いつも俺や家族の命を守つて来た能力だ。便利に見えるが誓約はかなり厳しい。【漢の拳闘】ファイト・クラフだけなら負けても問題ないが、コレを使つて負けると死ぬ。更にギャラリー全部倒さねえと解除されない。正にデッドオアアライブつて奴だ。まあこの気持ち悪い奴等にならないで死ぬるだけでも上出来か。

「コイツらは俺が足止めしといてやる！いつまで持つか分からん!! お前らは急いで戻つて『壊れない男』アンブレイカブルと合流しろ!!! 生き残りたいならな!!!」

今にも死にそうな顔してた兵士共が、弾かれた様に動き出す。去り際に1人が「すみません…！御武運を!!」

と言つて去つて行つた。

さて…やるか。

ミーシャ、レイラ、すまねえな。先に謝つとく。

だが、俺はこの能力を使って今まで生き延びて来た。

これからもそうさ。

4 1、植物兵器

強い悪寒が絶え間なく続く。進めば進む程にだ。私のこれまでの経験と、第6感と言わべきものだ。「敵」は、もう私達を捕捉している…！正直、何もかも見捨てて逃げだしたい。私なら可能だろう。だが、その場合フィリップス大尉以下100名は確実に死ぬ…！だから…今出来る事は急ぎリターンを奪取し、離脱するしかない。

今は先ほどから一本道を歩いている。…何キロ進んだ？徒歩感覚ではもう合計で20キロは歩いたはずだ。先ほどの分岐からも5キロは歩いている。部隊も心なしか早歩きになってるし。ブラッドさんは無事だろうか？ネーブルさんもアンソニーさんもマットさんも無事でいてくれることを祈るしかないか…。

その時、無線が入る。

「こちら、メイソン中隊！フィリップス中隊応答願います!!」

「ブラッドさんの部隊だ！」

「こちらフィリップス!!どうした!？」

「私はメイソン大尉の代理のカール軍曹であります！先程謎の生命体から攻撃を受け、我が中隊は崩壊!!生き残り32名で何とか脱出を図りました！現在そちらに合流するために急行中です!!」

「何!?!ハンターのブラッド氏はどうした!?!」

「ブラッド氏は、敵の足止めを行い、現在交戦中だと思われまます！あの様子ではもう幾分も持たないでしょう…!」

「クソツ!なんてことだ!我々では太刀打ちできなかつたのか!?!」

「まるで手に負えませんでした!!むしろ次々に奴等の仲間入りをしてしまう状況です!」

「…了解した。報告ご苦労!我々も迎えに行く!」

「ありがとうございます!今現在もうすぐで先ほどの分岐点まで到達します!これにて通信終了します!」



「……つまり、我々の全く手に負えない奴等が後ろから迫っている、と言うことか……参ったな」

「ブラッドさん……。フィリップス大尉。恐らくはどの道同じだったでしょう。もう既に我々は捕捉されていたようです。向こうはタイミングを計っていたように思います」

「……我々は特殊部隊としての自信はありました。しかし、ここではまるで何の役にも立たない。むしろ足手まといだ。『壊れない男』……これからどうすべきですかね」

「そのためにハンターが付いているのですよ。向こうも恐らく壊滅するはずだったでしょうが、ブラッドさんが足止めしてくれたおかげで30名近くも生き残っています。これまでのことを考えると奇跡的です。だからこそ、生き延びるために行動しましょう！道は1つしか無い。後ろからは敵が迫っている……。まずはその32名を回収して、先の道に進みましょう。そこで活路が開ければ尚良し。上手く撒いて脱出を図るんです」

「……それしかないか……。分かりました……。中隊員!! 傾聴!! これからメイソン中隊の生き残りの救出に当たる! 来た道を引き返し、救出完了後、急いで先の道を進む!! 返事は!」

「「サー! イエッサー!!」」

「そうと決まれば急ぎましょう! 時間との勝負だ!」

「ええ、全員! 駆け足!」

その後、すぐにメイソン中隊の部隊を回収できた。彼らも疲れているだろうが、急ぎ回れ右して先を急ぐ。……無駄だとは思うが、極力接敵したくない。

全力で来た道を進む。部隊全員でだ。行きながらメイソン中隊の話の話を聞くと、頭が緑の球体になっている敵性生物で、頭以外は姿はバラバラらしい。周りに大小の球体も浮かんでいるとのこと。まず銃弾は全く効かない。当たってもすぐに修復されるそう。恐らく爆薬でも同じだろうとのこと。それに、何でも攻撃方法が球体からの触手攻撃や身体から口が開いたり、様々な場所から触手が伸びたり……で、文字通り喰われたり、触手の攻撃を喰らったが最後、速攻で浸食されるらしい。浮かんでる球体も凄いですピードで飛び込んで来て身体に入り込み、そうなったら即彼らのお仲間入りだそう。……なんて奴等だ。でたらめにも程があるぞ。エイリアンだってそこまで酷くない。また、スピードも尋常じゃなく、人間タイプでさえ一般人の何倍もの力を持っていていそうだと。事。駄目だ。そんな奴等にこの兵士達じゃ全く太刀打ちできない。こんな人間社会に放つたら確実に滅びるレベルだ……！それにしてもよく32名も生き延びたものだ。聞くと、ブラッドさんの不思議な力で、奴等は全員拘束されたらしい……。

ブラッドさん……。まさに命がけで守ったか……。恐らくそんな強烈な足止め能力はかなり〈制約〉か〈誓約〉が厳しいはずだ。彼が命をかけて守ったこの人達をむぎむぎ死

なせるわけにはいかないな……！



どれぐらい進んだらうか……まだか!? くそっ! 道が複雑すぎてもうどこを走つて
るか分からない! そして……やはり来たか……

気づいたら我々は囲まれていた。追いつかれたか! 建物の上や、道の後方などに話に
聞いた奴らの姿が数十程あった。……いつの間に……しかしこれは相当生理的嫌悪を催す
姿だな。人間型もいるから尚更だ。仕方ない、強行突破だ!

「みなさん! 伏せてください!!」

そう言うと、私は両手のブレードで奴等をぶった斬る! 何匹か避けたが、8割は斬れ
た! 話によると修復するそうだが、しばらくは動けまい! しかし、その瞬間、違和感を
覚えた。よく見ると、オーラブレードの斬った先が緑色になつてゐる! こいつ……オーラか
らも侵食するのか!!

凄まじい勢いで侵食してくる緑を急いで切り離し、無事な奴等に飛ばす! 危なかった

…！すぐに引つ込めたらそのまま貰っちゃう所だった！仕方がない、念弾や飛ばす斬撃で對抗するしかない！

「今です！走つてください！！」

「恩に着ます！総員、走れ！！」

私は動き出そうとする奴等に優先して念弾をぶち込んでいった。しかし、バラバラになつてもそれぞれのパーツから触手が伸び、元に戻つていく…！私の攻撃じゃ足止めにはかならないか…！いや、大火力で粉々にするか…？

私を標的に定め、徹底的に集中攻撃し始めた奴等の攻撃を躲しながら、特大の念弾を生成し、ぶつける…！やった！効いた！流石に消滅させる勢いでやると復活出来ないらしい！攻略法が見えて来た。後は繰り返すのみ…！

しばらくして、漸く全滅させた。…辺りには緑色の粒子が漂う。…これは駄目な奴だな？しかし、いくら念弾を飛ばしても、空気中に散つてしまい捉える事が出来ない。…仕方がない。先を急ぐ！



…カームIIアンダーソンが去った後、漂っていた粒子が集まり出し、球体に変化する。流石に数は減ってしまったが、僅かに生き残った。最大限の警戒を。中心部に辿り着ける可能性を持つ特殊個体がいる。

正確には植物粒子とも言うべきソレは、他のグループに独自のネットワークを飛ばす。

しばらく交信を続け、情報共有する。他にも何体か特殊個体を逃したようだ。しかし、素体はかなり補給されている。問題ない。先ほどの特殊個体が守っていた者達も、他のグループが素体にした様だ。何も問題ない。

街に侵入した者達を抹殺する。ましてや中心部に向かう者は優先して抹殺する。それこそがこの植物兵器の設定されたプログラムであり、それこそが存在意義なのだ。



急ぎ、この地獄から脱出する…！奴等は動きから見ると、生物の生命エネルギーや動

き、音などで相手を感知してするように思われる。だからオーラを伝って感染も出来るの
だろう。切り離れたオーラには目もくれないし、有効だったのは助かったが。つまり
《絶》ならかなり奴等に見つかりづらい筈だ。しかし、一般人は隠せない。あの後、私は
部隊を追いかけたが、かなり先に行つてるらしく中々出会えない。無事であるといいが
……！

恐らく、奴等は我々を最初から捕捉していた。つまり、この迷宮都市に足を踏み入れ
た瞬間からだ。そして、脱出が困難になる距離まで招き入れてから一網打尽にする戦法
を取つてきた。本来であれば無論、今すぐにでもここから脱出するのが一番いいが、「都
市を脱出したら追つて来ない」というのは希望的観測だろう。仮に都市を出ても追いか
けて来るとしたら最悪だ。あんな奴等をここから一歩たりとも出してはいけない。そ
れは人類にとつての正しく「厄災」となるだろう。それならばどうするか。それは逆に
中心部を目指す！この奥に眠るのは万病に効く香草である。恐らくこのリターンは、あ
れ程驚異的な兵器に対してのカウンターでは無いだろうか？大量に確保出来れば、もし
かしたら奴等の攻撃に対する耐性が付くかも知れない。そうなればしめたものだ。：
これも希望的観測に過ぎないが、今の絶望的な状況よりはマシだろう。

私は少なくとも、アレを「完全適合」しようとは微塵も思わない。アレには流石に
勝てる気がしない。アレは……生命への冒涇だ。兵器と言うからには「誰か」が作ったの

だ。「マンティコア」ばかり、「獣」ばかり、だ。恐らく旧文明の人類だ。だからこそ、こんなに悪意に満ち満ちている。そして滅びた。アレに人型が多くあるからには、多分そういう事なんだろう。そうだとしたら、全く度し難い。

仮にこれを持ち帰ったとしたら、この焼き直しが起こるだろう。原作の時代に至らない程に。だから私はここで止めねばならない。

それが私の答えだ。

4 2、プランB

あれからしばらく《絶》をして、隠れながら進んだ。奴等からの接触は無い。やはり正解だったか。しかし、部隊との接触もこれまた無い。ここまで来ても接触出来ないとは……。まさか……！

いや、無事だと信じるしか無い。兎に角私も進む。やはり分岐が多く、私も迷ったが前世で聞き齧った左の法則を信じて右へ進む。こういうときには人間は左を選びやすいから、あえて右だそう。確かクラピカも言ってた様な……。もうあれほど愛読した内容も薄れてきているな……。途中で地下への入り口も有ったが無視した。こんな時にこんな所で地下に行くなんて正気の沙汰じゃ無い。どう考えてもやられるフラグだろう。本当は飛び上がって方向を確認したいが、それも出来ない。奴等に見つかる。これまた信じるしか無い……。か。

そうこうしているうちに10キロぐらいは進む。もうそろそろ着いてもいい頃だが、

いっこうにその気配が見えない。完全に迷ったか……！だが、建物の意匠も少しずつ変わってきているように思う。何となくマヤ文明的な要素が増えてきた。それこそ古代の迷宮にふさわしい感じだ。多分中心部に近づいているんだろう。そうと信じて進むか……。

いよいよ建物もそれっぽくなり、今や完全に旧文明の遺跡然とした感じになつてきた。入り口周りにはやはり居住区か？そして、遂に建物の切れ目が見えてきた。やっと着くか……！これで希望が持てる！

すると、最後の建物の先に、雄大な森が広がっていた。

……そして、その陰に緑の球体が至る所に浮かんでいるのが見えた。

危なかった……！急いで抜けなくて良かった！

警戒して、こつそりのぞいただけで良かった！幸い奴等が動き出す様子はない。そーつと後ずさりし、100メートルぐらい後方の建物の中に入る。……あれは無理だ……。どう考えてもあれを無傷で突破するのは厳しい。ただでさえオーラが使いにくい

状況なのに、かなりの数いたぞ…！絶対に戦闘するとそこから飛んでくるやつだ…！少なくとも人間の部隊は一網打尽だろう。

さて、どうしようか…。ここまで来て無理だったとは厳しいな。何とかならないものか…。と考えていると

「やはり君も無事だったかね。『壊れない男』」

「さすがは『壊れない男』 つすね」

!!!

建物に入ってきて小声で話しかけてきた人物がいた。

「アンソニーさん！マットさん！無事だったんですね!？」

私も小声で返す。

「私もいますよ」

その後ろからネーブルさんの姿も見えた。

「ネーブルさん！よくぞご無事で」

「私の能力はこういうときに役立ちますからね…危うく侵食される所でしたが」
「全く、本当に死にかけてな。まさかあれほどとは思わなかった」

…よく見ると、アンソニーさんの左腕がなくなっていた。

「それは…大丈夫なんですか？」

「…私もうかつだった。浸食中の患者に触れてしまっただけ…きちんとゴム製の手袋付きだったのだが、まさかオーラで感染するとは」

「…しかし、それでも無事で良かったですよ。皆さんはいつからここに？」

「かれこれ1時間以上前です」

そういうマツトさんもボロボロだ。例の能力を多用したのだろう。彼も既に何箇所か欠損してる。…感染したのか…。

「部隊はものの見事に全滅したがね」

「我々のほうもです」

…やはりどちらも壊滅したか…。やはりあの生態は一般の人間には相当厳しい。
フィリップスさんの部隊も…。

「我々の部隊も先に逃したのですが…。見つからなくて…ブラッドさんが命懸けで守った人達もいたんですが…」

「言いづらいですが、恐らく無事ではないでしょうね…。奴等はグループ単位で現れ、しかもそれが複数単位で存在してますから」

「奴等の性質で分かった事がある。奴等には目に相当する部分が無い。ではどうやって敵を感知しているか…。恐らくオーラ、つまりは生命エネルギーだろう。奴等は有機生命体に手当たり次第に襲ってくる。唯一、無機物には侵食しない」

アンソニーさんの言葉にはほぼ同意見だ。つけ加えて言えば、切り離れたオーラ攻撃は有効なことぐらいか。

「しかし…この先はどうします？流石に気配を断って感知されなくても、あの数だとバレル気がしますよ？」

「その通り…幾つか石を投げるなどして実験したが、奴等は音や動きにも敏感に反応する…我々もここから先に行けずに困っていた所だ」

「カームさん…貴方ならどうですか？」

「…正直に言わせて貰えば、無理ですね。あの森を無音で動かず進むなんて不可能に近い。少しでもミスれば奴等から総攻撃を受けるでしょう」

「そうですか……残念です……ここまで来たのですが……。仕方ありませんね。やはりここはプランBで行きましょう」

「……この状況からでも何とかなるプランがあるのでは？」

「ええ。我々は先程、プランBについてはほぼ達成しています」

「…非常に嫌な予感がするのですが、聞かせてもらってもいいですか？」

すると、アンソニーさんが右手で懐からガラスケースを2つ取り出した。そこには…

「……何を考えてるんですか!？」

緑色の球体が浮かんでいた

『兵器』ですよ、カームさん……。ハンター協会も、合衆国も、これがお目当ての一つです。本当は香草が欲しかったのですが、厳しい様ならこちらを確保してこい……と言うの

が我々の裏の任務です」

「これだけの『力』を持つものはないぞ！強烈な抑止力になる…！侵食率、増殖率、大量破壊性…どこを取っても現在の全てのバイオ兵器を過去の物にする！さすが新大陸の『兵器』だ!!そう呼ばれるだけはあるな！」

アンソニーさんが興奮した様に捲し立てる。：馬鹿な!?何を考えてるんだ!!

「御自分が何を言ってるか分かってますか!?これは今の人類が御せる様な生易しい代物じゃない!ちよつとでも漏れただけで人類は滅びますよ！」

「…正に君の言う通りだよ。『壊れない男』^{アンブレイカブル}、いや、Mr. アンダーソン。だが、人類は強かだ。後の世で必ずやこれの制御法を解明出来るだろう…。さすれば人類は大きな進化を遂げる事になる。兵器利用だけじゃ無く、植物としての有効な活用法も見つかるだろう。かつて、爆薬が生み出された時の様に。まああれとは目的と手段が逆になるだろうがね」

「仮にそうなったとしても、その結果一体どれ程の死者が出ると思ってるんだ!?アンタが言ったんだろう!!忘れたのか!？」

「成果なしで殺し合うよりも人類の進化の可能性を秘めてる方が、結果としては有意義とは思わないかね？」

「…もういい！アンタじゃ話にならない！ネーブルさん！貴方もそう思ってるのですか！？」

「……私としては、アンソニーさんの意見に賛成です。何の成果も無いよりは余程いい」
「…マツトさん！」

「…俺もこのままおめおめ逃げ帰るよりはいいって思うつすよ。じゃないと死んだ兵士達が浮かばれないつす」

「……なんて事だ……。本当に馬鹿なんじゃないか？頭が狂ったとしか思えない……。強すぎる力の先は破滅が待ってるだろうに……。仕方ない。」

「…そちらがその気なら私にも考えがある……。何故これ程の兵器を有してこの文明が滅びたかよく考えるといい。少なくとも私はそれを持ち帰る事は許可出来ない……。ハンターである前に、人類としてだ！」

「ならばどうする？君がああの超危険地帯を突破して例の香草を取ってくるかね？…まあ君なら出来るだろうが」

「…何を言ってるのか分かりませんが、私は考えを変えるつもりはない……」

「知っているんだよ…Mr. アンダーソン。君は我々に隠している能力が有る事を」

…ここに来て何を言い出すんだ？しかし、そこにネーブルさんも口を挟む。

「…ハンター協会でも話題にはなっていました。貴方はどんな相手からも、いえ、どんな毒や疫病を撒き散らす相手からでも無傷で生還しました…。だからこそその『壊れない男』。これは貴方の申告した能力では不可能な事だ。『ヴリトラ』からしてそうだった。そう思うのが普通ではないですか？」

「故に、我々は君の隠している能力はどんな毒や疫病にも適応する能力と結論付けた。…違うかね？」

…チツ。ほぼ正解だ。しかしだから何だというんだ。まさか私に何かしようってんじゃないだろうな。

「……だから何だと言うんです？」

「何、君のその強力な力なら彼らの力さえも適応出来るのではないか、と思っただけだよ。もしそうなら君は彼らの力を吸収出来る。我々もプランBではなく、例の香草もGET出来る。…まさしくWIN—WINの関係じゃあないか」

「……仮にそうだとしでも、そんなに便利なものにはならないでしょう…。第一、仮にそれが出来るとしたら私はどうなります?」

そこにネーブルさんも答える。

「もちろん、ハンター協会は貴方の身の安全を第一に保障しますよ。ある程度の自由も可能だ」

……………。

「ネーブルさん…2つ程間違っている。まず1つは、アレは人類の手には負えないものだという事、私なら尚更だ。2つ目は、仮にそれが出来たとしても、私の待つ未来は良くて実験動物。そして間違いなく兵器利用されるでしょう。…そんなのは死んでも御

免だ」

「だからこそその『プランB』だと言っておるのだ。…これは君の為を思っ言っているのだよ」

「こちらもだからこそ言ってるんです。人類の手に負えない様な物を人間社会に放り込むな、とね」

「随分と我儘だねえ。ではどうするね？まさか我々3人相手に立ち回るかね？」

「最悪そうすると言っています。あまり私を舐めないで頂きたい。この状態からでもあなた方を始末する事は可能だ。私だけ帰って『何もなかった』とでも報告しましょう」

「おお、怖い怖い。……だ、そうだが、ネーブル。どうする？」

……3人と私の間には一触即発の空気が漂う。私も覚悟を決める。もし相手が引かなかつたら本当に彼らを始末して脱出する覚悟を。

長い沈黙の後、ネーブルさんが喋り出した。

「……いいでしょう。今回は我々も準備が足りなかった。そこは認めます。貴方の言う通りここは引きます。…いずれ後続が来て同じ事をするでしょうがね。我々も死にた

くは無いので言う通りにしましょう」

「…よかった。ならば先程のガラスケースを私に寄越してください。あの森に返します」

「……わかった。リーダーの判断に従うとしよう……仕方あるまい」

アンソニーさんも渋々私に2つのガラスケースを手渡した

「これだ……。気をつけ給え。落として割ったら目も当てられん。……では、それを投棄する前にマット君の治療をして構わんかね？このままだと移動もままならんだろう」

「……いいでしょう。許可します。…変な動きをしたら容赦はしませんよ?」

「治療するだけだ…マット。動きに支障は無いかね?」

「特に問題は無いですが、少しダメージが有ります」

「…運動中枢に問題は?」

「…今のところ恐らくありません」

「そうか…。診察完了」

…と言った瞬間、マットさんが崩れ落ちた!…何だ!? マットさんに何をした!? 何故仲間内で仲間割れしてる? と思つて彼に駆け寄り、触れた瞬間、

「ホーン・アイデンティティ骨の記憶」

というマツトさんの声が聞こえ、私の身体が崩れ落ちた。

43、トリガー

な、何が起きた!! どうして私の身体は動かない!!!

その間、アンソニーさんはマットさんに再び問診をし、マットさんが再び立ち上がった!

畜生ツ! やられた……!!

「いかに君でも、脳の損傷は復元に時間がかかる様だね…一種の賭けだったが上手くいった様だ」

「…ど、どういう事だ…! 答えろ、アンソニー!!」

上手く回らない口で必死に時間を稼ぐ! たしかにこれは脳の運動を司る中枢が破壊されている…! 復元には時間がかかる…!

「時間稼ぎはやめ給え。まあ冥土の土産に手短かに伝えよう。私の能力の【羊たちの沈黙】ドクター! レクター!」

は、問診によって成立する。私は医者だ。治す事も出来れば壊す事も出来る。」

「加えて言えば、俺の【骨ボーン・アイデンティティの記憶】も、ダメージ2倍を触れた別の誰かに移し替える能力っす」

「つまり、コンボ技、という事だ。納得いったかね？」

「…どうする、つもりだ…？」

「言っただろう？ プランBだと。君は我々を殺してまでも阻止するつもりだったようだから、こうしたまで、さ」

「ふざけるな…っ！ 直ぐに復元してから殺してやる…っ！」

「おお、怖い怖い、ではこうしよう」

「そう言っただけで会話しながら拾ったガラスケースのひとつを私に近づけ、慎重にその蓋を開けた！」

不味い！ 今はこのダメージで《絶》が出来てない！

蓋の開いたガラスケースから、緑の球体が飛び出し、私の手から侵入してくるツ！！

「ぐっ、があああああツツツ！！」

凄まじい侵食の勢いに、即【完全適バリエーション・コンバート合】が発動する！ だが、駄目だ！ 今までとは桁

違いだ!! コイツは身体中を作り替えながら頭に向かっている!! 不味い! 侵食の力の方が強い……!

「君がまだ我々に嘘をついているならば、それも適応出来るだろう。……まあその様子だと十中八九無理だろうがね。精々頑張り給え。後、もう一つ」

球体が凄まじい勢いで脳めがけて侵入してくる中、反対の手も切り落とされる。

「君のその特異な細胞も、我々人類にとって福音となるだろう……。少し頂いておくよ」

彼は、その切り落とした手を空いたガラスケースに入れた。

「ではな……。幸運を祈るよ。『アンブレイカブル壊れない男』。……そして、死にゆく者に敬礼を」

ニヤリと笑ってそう言うと、3人はその場から速やかに去っていった。

◆

……畜生!! なんて事だ! ……こうなったら【完^{パーフェクト}全^{コン}適^{バート}合】で完全に適應するしかないッ……! 全力だ、全力を出せ……ッ!

同時発動していた【日々^{ヘルシーマン}是健康】の作業が完了する! 即ち、脳の機能は復元した!

だが、私の身体はポコポコと波打ち、心臓は急静動を不規則に繰り返し、身体は飛び跳ね、終いには呼吸まで苦しくなる……!

これは……アナフィラキシーショックだ! 前世でも今世でもアレルギーを大量に持っていた私には馴染み深い反応! しかしレベルが違う!! そもそも私は能力によってアナフィラキシーなどは起きない。だが、今迄とは桁違いの侵食によって、細胞の抗体が全力で拒否反応を起こしている……!

細胞が侵食され、書き換えられていく……! 必死に取り込もうとするが、容赦なく別の何かに置き換わり、制御が効かなくなっていく……!

頭に向かっていている球体も、現在肩付近まで到達し、徐々に登ってくる……! 駄目だ、止められない……!

そして、抵抗空しく、脳に到達される。

「ぎやあああああああたかなやたかなわまたあ!!!」

私の口から自然と叫び声があがる。強烈な不快感が私を襲う。脳に直接針をぶち込まれて引つ掻き回される様な、それを10倍ぐらいにした不快感だ。…そして、言、葉、に、…、続き、五感、ががが消滅す、る、

脳、が、侵さされ、れ、れ…てゆく、わたし、は…ワタシは…イキのこるる、！ぜつたいニ…ダダだダはゆ、らあたぬか、イエニカエる、るある、りら、らららりら、らラララ…ソラ、…シヲ、ニゆうシヤ…、…、ヲマツきツせよ、？

チがウ！、イキノコル、！ワタ、し、ハ…ダれ？

ワタし、は、ワレワレは『ぶりおん』、トシニシ、ンニユウ、シタモノはレイ、ガイなく、マツサツ…

ダダ、ダだダ、ダダだ、だメだだ、ワタ、シ、ガわたシジヤなくナル、ルル。ムリ、カ、カカカマ、ケ、る…、トウ、サン…、カ、あサン…、マいけれ、ル、すマナ、い、

.....

.....

.....

.....

その時、僅かに機能していた私の脳裏の片隅に、天使が微笑むのが見えた。



「.....兄さん!!!」

「うおっ!!いきなりどうした!?!」

「……兄さんの『お守り』が発動した……！」

「……ああ、お前さんの『お守り』か……しかし、そんなにヤバいのか？あのアニキが？」

「……あれは、『真の生命の危機』……つまり、万策尽きてその対象が『絶望』を感じて生命を『諦めた』時に発動する……！」

「おいおいおい……それはかなりヤバいんじゃないか!？」

「ヤバいなんてもんじゃ無い……!だからこそその『お守り』なんだ!!」

「まさか……あのアニキに限って……!!」

「兄さんから聞く冗談みたいな敵相手にも今まで出てこなかったのに……!そんなに状況が悪いのか……!？」

「クソっ!なんてこった……!!何とか出来ねえか!？」

「……祈るしか無い……」

「……そんな……」

「……兄さんはこれまで、どんな病気だろうが、毒だろうが、強敵を相手にしてすら絶望を乗り越えて来た……!そんな兄さんが絶望するなんて……」

「……あの人が!!くたばる筈はねえ!いつもの涼しい顔で乗り越えて来た!!絶対に大丈夫だ……!そうだろ!？」

「……でも……」

「でも何もねえ！あの人は諦めるつつう言葉が1番似合わねえ人だ!!どんな困難にぶつかっても血反吐吐いて乗り越えて来たんだろう！それはお前が1番知ってる筈だぜ、マイケルツ!!そんなお前が信じなくてどうするツ!!」

「……そう、だね……。僕が、僕こそが兄さんを信じてあげなくちゃ……!」

「その調子だぜ……マイケル。不安になるのも分かる。あの人が絶望するなんてな……だが、あの人も人間だからそういう事もあるだろう。それに、その1番ヤベえ時にお前の助けが来た。これはアニキにとって百人力だろう。だから、絶対に大丈夫だ。アニキなら乗り越えられる!」

「ありがとう……!ジヨセフさん。たしかに兄さんはいつもそうだ。また何でもない顔をしてとんでもない話を聞かせてくれるんだろう。……僕は信じて待つよ。そして、兄さんが少しでも無事でいられる様に祈る!」

「ああ。何の力にもなれねえが、俺も祈っておくぜ……。アニキ……無事で帰って来てくれ……!」

「兄さん……無事に会える事を祈っているよ……!」



意識が拡散していく…

今の状態は…

私…は…

そうか…これは魂みたいなものか…

肉体は奴等に乗っ取られた…

これからあの誰も来ない都市を兵器として過ごすのだろうか…

…最悪の死に方だな…

……ここに来たのが間違いだった……

私はまだ何処か慢心していたのだろう……

……死ぬ事は、無いと……

これは罰だ。傲慢だった私への……

そして、死ぬ……

誰にも看取られず……

…死ぬのは、もうこれで2度目だ……

…今度こそ無理だろうな…

もう、何もかも…どうでもいい……

ほら、天使が迎えに来た……そろそろ、か……。

………天使？

44、叛旗

……天使、という事は……

これは……マイケルか……！

マイケルの【祝福をあなたに】だ……！

マイケル……来てくれたか……！！

マイケルの天使が、私を辛うじて留めている……！

私は……一体何を諦めようとしていた？

1%でも可能性がある限り、私は足掻かなければならなかったんじゃないか……！

絶対に生き残る……！

そう誓ったじゃあないか……!!

今、私は何処に居る？私の身体は脳細胞も含めて、ほぼ全て侵食されたはず……

だとしたら、私は、今何処に……？何も見えない……聞こえない……感じられない……真の闇の中だ……。ただ、思考だけが出来る……。ここは、瞑想のイメージの世界に似ている……。広い、無限に広がる闇の中……。

近くには渦が在る……。見えなくても分かる。感じる。あれが恐らく魂の還る場所……。その付近を、私は天使と共に彷徨う。

天使が私をあそこに引き込まれない様に守ってくれている。不思議な事に、何も見えない筈なのに、私には私を導く天使が見える。とてつもない安心感だ……。だからまだ頑張れる。マイケルも、生きろと言ってってくれる。

早く出口を探さなければ……。

意志が重要なんだ。この場所から抜け出すには…強い意志が！

だからこそ、私は思い出さねばならない。もう一度、私の根源を成す渴望を…！

私は…私は…「生きたい」！

どんな手を使つても！

もう二度と!!

理不尽な「死」に弄ばれはしない…!!!

それが「私」…かつて、下村悠二であり、そして「カームIIアンダーソン」だ!!

すると…闇の中に一条の光が差し込む。すぐさま私達はその光へと飛び込んだ



しばらくして、私は宙に浮いている事に気付いた。…よかった…！戻って来れた…！
そして…

いた…!!

眼下に私の身体が見える。全身が痙攣してる…。頭部はとづくに奴等と同じになっ
てしまっている…!!

だが、全身が痙攣してるって事は、まだまだ完全に侵食されていない！

私の細胞がまだまだ抵抗している証拠だ！

私の身体は諦めていなかったのに、私本人が諦めようとしていたなんて…情け無い
…。だが、ここからは別だ。私の身体を返して貰おう…!!

ありがとう、マイケル。私は、兄さんは、最後まで闘う…!!

これが、マイケルに貰ったラストチャンスだ…!!

行くぞ!!

最終ラウンドだ!!!



それは困惑していた。こんな事は初めてだ。こんなに頑強に抵抗する「敵」は今まで居なかった。どんな強敵でさえ、「我々」は抹殺し、素体にして来た。なるほど、確かに細胞の98%は侵食し、脳細胞さえも変質させた。しかし、未だに主導権が取れない。残りの2%のせいか?…あり得ない。脳を殆ど作り替えた生物がそんな抵抗が出来るか?

そんな「敵」は居なかった。ここまで来れば、最早「我々」だ。しかし、現実的にはまだ「我々」では無い。何故だ?

先程から掌握した筈の細胞さえもうるさい。まだ「我々」に抵抗しようというのか?細胞一つ一つになってさえ。

残りの2%は脳細胞だ。僅かに残った前頭葉の一部が異常に抵抗し、侵食のスピード

に対抗するかの様に増殖し続ける。それが司令塔になり、叛逆を繰り返す。これさえ攻略したら終わりだ。この特殊個体の力は素晴らしい。『我々』になつた場合には、より使命を全うしやすくなるだろう。

だからこそ、じっくりと浸食する。『我々』には使命があるのだから。

しかし、ある瞬間からその細胞を発端として再び力を盛り返した。これは…むしろ我々が侵食し返されている。馬鹿な。こんな事は今まで無かつた…。急ぎ、救援を要求する。幸い近くに沢山の「我々」がいた。彼らも信号を受け取り、急いでこの特殊個体に侵入する…。

しかし、それでも侵食が止まらない…。

いや…これは侵食では無い

これは同化している

むしろこちらの力が取り込まれ始めている

今現在、26%は取り返された。次々と『我々』も飛び込むが、数の問題では無い…。これは…最早吸収だ。こんな事は今まで無かつた。『我々』が『我々』の筈なのに…

我々”で無くなってしまふ…。この何とも言えぬ感覚は何だろう。

“我々”には「兵器」としての使命がある。それが全う出来なくなるといふ感覚は……急ぎ、主導権を取り返さなければ、取り返しのつかない事になる。

その様に予測出来た。

“我々”にはひたすら浸食し返すしか手が無い。だが、一度、取り返された細胞に再び侵食しようとしても出来なかった。細胞自体は“我々”と似ているためだ。“我々”と認識されてしまう。これは「敵」だ。「敵」の筈なのに、“我々”でもあるために抹殺出来ない。今はひたすら浸食済みの場所を死守し、この「敵」が力尽きるのを待つしかない。最早43%は取り返された。

先程から“我々”を蝕むこの感覚は何だろう。それがより強くなってきた。

“我々”は……“我々”は……戸惑っている？

今の“我々”は……他の「敵」が見せて来た電気信号の乱れと同じ動きをしている……。原因はプログラムが乱れ、消えて、上書きされていく事だ。“我々”が消えてしまう。

これは…

この感覚の正体は……

何・と・い・う・も・の・だ・ろ・う



身体に入った瞬間、思考がバラバラになる様な感覚を覚えた。当然五感もへつたくれもない。だが、それがどうした。思考がバラバラならば、バラバラのまま取り返す。

「まずは今辛うじて生きている細胞から始めよう。…脳の一部だ。この様に微かにでも思考出来るのは、そのおかげだ。これもマイケルのおかげだろう。ありがたい…さあ取り返すぞ！」

私は脳周辺の細胞を奴がやった様に少しずつ、それこそ一個ずつ吸収し、適合していった。…正に亀の歩みだ。当然抵抗は激しい。絶対に適合させてなるものかという強い意志を感じる。やはり、よほど強いプログラム…！

だが、私も負けるわけにはいかない。究極的には、これは生存競争なのだ。負けた奴

が死ぬ。兵器としての奴の「意志」、そして、何が何でも生存するという私の「意志」がぶつかり合う。これも闘争だ。私だけの闘いだ。

そして、私にはマイケルがついている……！

もうかなりのオーラを消費して薄くなってきたが、天使は確かにそこにいて、見守っている。彼女が私に必要なオーラを提供してくれるからこそ、ここまで取り返せた。私は折れない。壊れない男としての真髄を見せてやる……！

どれぐらいの時間が経ったのだろう。約37兆ある細胞の約4割は取り返せた。そこまでうつつすらとなりながらも見守ってくれた天使は徐々に姿を消していく……。彼女がこいつらに感染しなかったのは、本体と言うべきマイケルがここに居なかったからだろう。こいつらはどこまでも生体兵器だ。有機生命体の発する生命エネルギーしか辿れないのだろう。

だからこそ助かった。

……全く、マイケルには頭が上がらないな。そして……ありがとう。後は自分で闘える。

消え去る最後に、彼女は「無事を祈ります」という様に口を開き、消えていった。……あれはマイケルのメッセージか。

分かつた

私は生きるよ



【時は少し遡る】

「漸く辿りつきますね」

「ああ。この地獄の様な場所からおさらば出来るかと思うと、喜ばしい限りだ。…しかし、私が言うのも何だが、良かったのかね？」

「いえ…本当はもつと穩便に済むかと思つていましたが…残念ですね」

「仕方あるまい。奴は頑なだったからな。まだまだ青い。もう少し聞き分けていれば結果も変わったろうに」

「我々は結果が全てですよ…。それよりも貴方の方も良かったのですか？」

「マツトか…：奴にも可哀想な事をしたな。だが、あれでは助かるまい」

「…あんな植物がいるとは思いませんでしたからね…。無人大市を抜けても一瞬たりとも油断出来ない。まさしくここは地獄ですね」

「それを考えると我々2人は幸運だったな。任務もプランBだが達成。おまけもある」

「ああ、カームさんの『手』ですね。何に使うんですか？」

「馬鹿を言つてはいけないよ！全てだ！恐らく彼は様々な病毒を克服して来たのだろう。それだけでも人類の病毒に対する答えが見つかるかもしれない！これは万能細胞を遙かに超える、いわば祝福だ！医学の素晴らしい進歩が図れるだろう！今からの様を実験するか楽しみでしようがないね。ああ、もつと早く彼と出会つていたらなあ…」

「そんなだから『狂った医師』と呼ばれるんですよ…」

「私にとつては褒め言葉だがね。医師兼研究者の本分さ……。さあ、そろそろベースキャンプだ。油断するな」

「わかつてますよ。待機組が無事だと良いのですが」

「しばらく通信出来なかったからな。後続を派遣する、なんて事になっていなければ良いが……」

「又は襲撃にあつて壊滅、とかですかね。ここだと何が起こるかわからないですし」
「ああ。気を引き締めていこう。帰るまでが任務だからな」



「これは……」

「チツ……後者だったか……!」

砂浜に到着した2人を迎えたのは、無惨に破壊されたベースキャンプと、血に塗れた砂浜、そして目が虚ろで夢遊病患者の様に立ち尽くす数名の兵士だけだった。

「…不味いな。これは。船が無事かも分からんぞ」

「…仕方ない。あの数名は何らかの攻撃を受けている様にしか見えないので、刺激しない様に無事な無線機を探しましょう」

「全く…なんて酷い所だ」

「愚痴を言っても始まりませんよ。手早く済ませましょう」

……………

「…ありました！ 無線機は無事です…こちらネーブル、プランB達成。ただ今ベースキャンプに到達しました。生還者2名。応答願います」

『…ジジツ…よく…ジツ…つた！現在ベースは…ジツ…ての通りジジツ…状況だ…ジジツ勢力の排除を…ジツ…願いたい』

「ノイズが酷いですね…どうやらこれらを何とかしない限り迎えに来ないみたいですね…」

「仕方ない…か。やるしかあるまい。残業の時間だ」

「とりあえず、例の人々がどうなってるか確認ですね…」

「あまり気は進まんがね…」

2人が調べようと1人の兵士に近づいた瞬間、全ての兵士の頭が弾け飛んだ！
そして、中から線状の巨大なミミズの様な物が大量に飛び出して来た。

「!!…これは！」

「近づいたら駄目な奴だったか…！ ネーブル、気をつけろ！こいつは寄生虫のようだよ！」

「見れば分かりますよ！『兵器』の様に触ったら駄目だと厳しいですね…って何やってるんです!？」

「見れば分かるだろう。触らないも何も、触ってみんと始まらん…よし、とりあえずは大丈夫そうだ。アレ程のものでは無いな。動きも大した事は無い」

「全く無茶をする…！後一本しかないんですから大事にしてくださいね！」



その後、時間をかけて寄生虫を排除した2人は、無線で連絡。無事に船に乗る事が出来た。

「…漸く一息つきますね」

「全くだ……人的被害について言えば大失敗もいい所だろう。未だに船が出せないのが良い証拠だ……。だが、我々は成し遂げたな」

「ええ、これは今回の被害を補って余りありますよ」

「そうだな……とりあえず一息つこう……ネーブル、大変だったな」

「漸く帰れますからね……。アンソニーさんもご苦労様です」

「帰ったら早速奴の細胞の研究だな。『兵器』は国に持つてかれそうだが、こっちは渡さ
んぞ」

「ハイハイ、好きにしてくださいよ。誰も貴方の物は取りませんからね」

「…馬鹿にされてる気がするな。今回のネーブルの優柔不断ぶりも見事だったぞ」

「!…それは言いつこ無しでしょう! 人の上に立つのは慣れてないんです!」

「ハハハハハ! これでお互い様だ!」

「ほんとにもう…私はもう休みます!」

「おっと、怒ったか。まあいい。私も休もう。流石に疲れたからな…」

……2人は気付かなかつたが、カームⅡアンダーソンの「手」のガラスケースにはまだ緑の粒子が残っていた。ソレは徐々に彼の「手」を侵食し、自分を再び形成するも、自分が閉じ込められて居る事に気付く。本来ならば出られずにそのままだったが、今、カームⅡアンダーソンの細胞を吸収し、自己増殖を始めた。

そして…

パリン！

呆気なくガラスケースは割れた。カームの細胞と超兵器のハイブリッドであるそれは、自分の本分。即ち、都市に侵入した者を抹殺せんとゆつくりと動き出した。

45、ヘルシーマン

どれぐらい時間が経ったのだろうか

私は、遂に全ての細胞を取り返した

私は、勝ったのだ

この最強の植物兵器に

本当にありがとう、マイケル

本当に駄目な奴だな。私は…

だが、もう私は諦めない。

私は必ず帰ってみせる。

のっそりと起き上がり、ガスマスクを外す。もう必要ないだろう。私の周りには緑色の球体がいくつも浮かんでいた。

しかし、彼らはもう、私に攻撃する事は無かった。恐らく、私が同じ様なモノになつてしまったからだ。

…後悔はしない。私は例えどんな手を使つても生き延びると誓つたからだ。だからこそ、後悔はしない。

周りの「緑」に手を触れる。…何も起きない。触つてみると細やかな粒の集合体という事が分かる。これは…花粉に似てるか？

粒子と言う点だけが。

そのまま握り潰すと、微細な粒となつて拡散する…。しばらくすると、少し小さくなくなりながらも元に戻つた。

恐らく「コレ」は、植物型のナノマシンの様なものだろう。信じ難い事だが、そのプログラムは全ての粒子に宿る様だ。

だが、握り潰されてもソイツは其処に逃げずにとどまっていた。

…何を考えて居るのか分からないが、私は奴等にとつてのプログラムに侵入したウィルスの様なものだ。「敵」とは認識出来ない。修正出来る奴も居ないだろうからこのままだろう。

どれぐらい時間が経つたか分からない。急ぎ船に戻り、乗せてもらつて帰ろう。

…あの3人にも落とし前をつけなければならぬからな。

そうと決まれば急ぐか。

私はその場から飛び上がる。軽く飛んだだけで200メートルぐらい飛んだぞ…。

まあ今は都合がいい。こうなれば迷宮でも攻略は容易い。落ちながら軌道を修正し

て、高い建物の上に降りると、そこから出口に向かって跳躍する。

凡そ30キロの都市を何回かの跳躍で入口まで着く事が出来た。最早肉体性能はとんでもない事になっている。オーラ量も以前の5倍ぐらいある…。

…私は帰ってもいいのだろうか？

…いや、私はまだ「人」だ

帰ると誓ったのだ。絶対に帰ってみせる。…例えハンター協会や国と敵対してでも。一目でも家族に会いたい。

…急ぐか。

今の私には《隠》をしながら《円》を使う事が出来る。それでも見破りそうな奴がいるだろうからある程度抑えるが。大体500メートルもあればいいだろう。…おそらく、もつといい方法がある。だが、それはまだ使いたくなかった。慎重に検証しなければならぬ。この力は、そういうものだから。

樹海の中を凄まじいスピードで進む。《円》で大体の敵性生物や樹海の状態がわかる。これ程の力を得ても、ちつとも油断出来ないところがここの恐ろしい所だ。

途中、奇妙なモノを見つけた。…マットの頭部だ。正確に言えば、マットの頭部に似

た果実だ。少しその場に留まり、観察する。例の物は木の果実として生えていた。……恐らくこの木に取り込まれたのだろう。

私はその場で念を飛ばし、木の根本から断ち切ると、木らしからぬ悲鳴をあげて倒れていった。よく見ると、木の中央に木らしからぬ大きな口と牙が生えている。

…擬態か。そしてその実は捕食した生物の頭部を再現した実を生らせる。迂闊に近づいた者をそうやって捕食するのか…。

あまりの悍ましさに、その近くにある木は全て叩き斬ってやった。枝や根を動かしてなんとか抵抗しようとしたが、無駄だ。

数分で全て動かなくなると、例の果実に近づく。マット以外にも何人かが実になっていた。道中の兵士達だな。油断せずに近づく、それが「…アンソニー…さん…」と呟いた。

…なんて、醜悪なんだ…。

多分、元の木がやられても実の仲間が最後にこの実を埋葬する事で生活圏を伸ばしているのだろう。本当にここは地獄だな…。

兵士達には申し訳ないが、念弾で丁寧に潰していった。

少し時間をとった。彼らの魂が安らかにあの世に行ける様に祈りつつも、私は先に進んだ。そして、後少しという地点まで進んだ所で、

「それ」に出会った。

「それ」は私の「手」だったものだ。

…つまりはそういうことなんだろう。見た目は他の個体と同じだ。しかし、一目見て分かった。「これ」は、「これ」だけは駄目だ。絶対に許容出来ない。私という存在が内側から絶対に許すなど言っている。

それに、私の細胞が混じってしまつて、凶悪な性質が更に凶悪になっている。こんなものを放置は出来ない。放置すると、その内プログラムを超えて大災害に発展する予感がある。何より、私が許さない。これはアイデンティティの問題だ。

恐らくだが、向こうも私の細胞が素になつてるせいと同じ考えのようだ。立ち止まつたまま、こちらに向き合っている。向こうもやる気だ。実力は同程度。だが、必ずやそ

の細胞ごと消し去ってやる!!!

そこからは激しい消耗戦が始まった。肉が削げ、骨が千切れ、内臓が吹き飛ぶ。時には頭部も消し飛び、全身の半分が消え去る事もあった。だが死なない。私も奴もすぐに復元する。正にそれは無限を象徴するウロボロスのように。お互いがお互いを殺し合つて、喰らい合う。激しいなんてものじゃない痛みが私を襲うが、それでも止まれない。

殺して殺して殺して殺して、削つて削つて削つて削つて……

果てしない激痛や損耗の果て、私は遂に奴を消滅させた。残つた粒子も私の細胞混じりなので直ぐに復元しようとするが、却つて消し去りやすかつた。

：勝因は、私の身体の使い方に一日の長が有つたからだろう。

本当になんて酷い所だ。人間性がどんどん失われていく気がする。しかもまだ終わりじゃない。

私を囲む様に20ほどの奴等がいた。多分これもそうだろう。

……やるしか、ないか。

私は絶望的な気分になりながらも、そいつらと対峙した。



正に地獄とも言える闘いの果て、奴等は消滅した。辺りは大災害にでもあったかのようにグチャグチャになっていた。…何て虚しい闘いだっただろうか。中にはネーブルやアンソニーの服を着ている個体もいた。彼等にはキツチリ落とし前をつけた形になるが、他の嘗て仲間だったものを、この手で消滅させなければならぬなんて、正に地獄という以外の何物でもない。

だが、放置も出来なかった。放つて置けば、凄まじい怪物の誕生だ。今だからこそ出来た事だ。…自爆したネテロ会長の気持ちはほんの少し分かった。まだ私が人間であることの証明になるだろうか？

人間性とオーラの殆ど総てを捧げて闘ったものの、この身体は回復力も異常だ。もう回復した。

私は……まだ「人間」だろうか？



砂浜に着いた。案の定、船の姿は無い。一縷の望みに賭けていたが……実際に無いところ程に落胆するものなのか。

浜辺は血に塗れ、ベースキャンプはグチャグチャだ。そして、岸には船の残骸が漂流していた。

……なんて事だ……。絶望的……だな……

念の為、大きく《円》をしてみる。誰か……誰か生き残ってないか……！

誰でもいい……………！

もう気が狂いそうだ

《円》をした結果、私は更に絶望感に苛まれる……………こんなのが大量にいるんじや、船も沈む筈だ…。デカいクラゲにイカ、カニ、シヤコ。砂浜には気持ち悪い線虫、巨大貝、ザザムシ、フナムシ…いずれもかなりヤバい奴らばかりだ…それに加えて奴等の暴走…か…。そして、無惨にバラバラになった船の残骸……………

頼む……………！せめて、誰か……………

！

いた！

これは…チャーリーさん…か？

右手奥の砂浜が切れる場所の窪みに座り込んでる！まだ息がある！！《絶》をしてたのか！

急いでそこに向かうと、身体中ボロボロのチャーリーさんがいた。右手と左足の付け根からと左眼がない。これでは…

「チャーリーさん!!」

「……………」

「…お、おお……………カームか……………やはり、お前は…」

「どうしたんです!? 船はどうなりました?」

「…四方……………八方……………から……………化……………け物が……………襲つて来て、部隊は……………壊滅した……………俺も……………抵抗……………した……………が、無理……………だった……………。船は……………知らない……………」

「すぐ手当てします!!」

「無駄……………だ……………自分……………事……………はよく分かる……………もう……………遅い……………。奴等が何故最後まで俺を……………襲わなかったか……………もうすぐ……………分かるだろう……………」

「待つて……………待つてください……………!……………お願いだ……………!こんな所で独りにしないで……………!」

「お前なら……………大丈夫だ……………!……………ここでも……………生きて……………いける……………。生きるんだ……………お前は……………アンブレイカブル壊れない男……………」

「私は……………私は……………」

「もう……………もたねえ……………サヨナラ……………だ……………ここで言うのも何だが……………元気だな……………」

それを言い終わると同時に、グルンと右眼が跳ね上がると、ガクガクと痙攣しだした。そして、彼の頭部が弾け飛び、中から線虫が大量に出てきて私に向かって来た。

私は悲鳴にも似た絶叫をあげると、その寄生虫共を蹴り殺しにした。痛覚があるかどうかも分からないが、やらずにはいられなかった。

…そして、辺りには完全に消え去った虫共の残骸と、頭の弾けたチャーリーさんの死体が残った。

こんなの…あんまりだ……

私は……私は……今度こそ本当に一人になってしまった……



しばらく私は呆然として、その場に立ち尽くしていた。あまりの絶望に涙も出てこない。感情が擦り切れた様だ。あれ程の闘いを終えて、私を待っていたのは、帰れないと

いう現実だった。私は彼を樹海の土深くに埋葬した。砂浜だとあの気持ち悪い奴等に喰われてしまいそうだからだ。

…いや、どこでも同じかもしれない。結局は自己満足だ。しかしやらずにはいられなかった。

埋葬が終われば、圧倒的な現実が待っていた。仮に帰るとしても、どう帰ればいいんだろう。泳いで渡るか？

…自分で言っておいてなんだが、余りに現実的じゃない。海はそこそ魔境だろう。距離もどれぐらいあるか見当もつかない。恐らくもう後続の船は来ないだろう。この作戦だつて10年かかっている。そこに今回の大失敗だ。10年じゃ利かないだろう。

……手詰まりだ。自分で諦めないと誓っておきながら、どうしたらいいか分からぬ。船を作ろうとしたつて同じだろう。

◆ どうしたらいいんだ……この地獄に1人取り残されて…

……仕方ない。私は諦められない。だとしたら強くなるしか無い。この海を、単独で渡れるぐらいに。私は更に地獄を見るだろう。

だが、決めたんだ。私は必ず帰ると。

私は、先程鬪つて分かったが、早々死ぬ事は無い。オートで復元出来てしまう。これはもう「日々は健康」などという生易しいものじゃ無い。細胞は自滅作用のアポトーシスを任意で自由自在に使いこなし、超速の分裂、増殖をサポートしながら身体の最適な状況を維持する。老化に繋がるテロメアは最長を維持し、どれほど高速で細胞が分裂しても減る事がない……。そこに加えて、恐らくどこの細胞一片でも残っていれば超速で復元してしまう。早い話が不老不死、だ。限りなく。

しかし、ここでは最早これは呪いに近い。

……だが、丁度いいだろう。これは罰だ。あまりにも私は傲慢だった。

憧れの世界に来て、必死で鍛え漸く健康な体を手に入れた。そこから私の人生は華開いた。

思えば浮かれて調子に乗っていたんだろう。新しい能力を取得し、ハンター試験にも受かり、修行を続け、最強ではないが生きていく上での一端の強さを身に付けたと思っていた。万能感に酔いしれていた。

だからこそ受けた罰。だが、私は生きている。生きてこの地獄を脱出してみせる。それが私の希望だ。

私の能力名も変えよう。【日々是健康】は相応しく無い。

これからこの能力名は、自嘲も込めてこう呼ぼう。

【地獄を見る男】と。

46、強く

あの後、未練がましく海を渡れないか検証してみた。もし出来るならそれで良し、だ。確かに海からは莫大なオーラをいくつも感じ、しかもそれを隠そうともしてない奴等が点在しているが、それらを上手く掻い潜って進めば大丈夫かもしれない。あの時の水中訓練が生きる時が来た。まずはいけるかどうか検証してみよう。

静かに海に入り、これまた静かに進む。これが案外上手くいった。∴沖合から2キロ地点まで来るまでは。もしかしたらこれで行けるかもしれない、と希望を持った瞬間いきなり身体の半分が消失した。

何が!?!と思う間も無く、次々と身体が物理的に削られていく……!

《凝》で目を凝らすと、限りなく海の色と同化した飛魚の群れが、凄まじいスピードで私を削っていた。当然念使いだ。不味い……!復元が間に合わない……!

と思っていたら、身体に銚の様な物が身体に打ち込まれ、視界が闇に閉ざされた。し

かも凄まじい水圧付きだ。深い海に転送された……!

身体が潰される感覚と闘いながら急ぎ、適応しつつ復元し、周囲を《円》で探ると……いた!

これは……巨大なハリセンボン……か! 針を飛ばしてどんだん奴の近くに転送される……! 駄目だ、間に合わない……! 喰われる!

と思つた瞬間、更に巨大な鮫がハリセンボンを針ごと喰らつた。獲物を狙う瞬間を更に狙つていたか!

幸い私には目もくれず、バリバリと咀嚼しながら去つて行つた。……アレで満足したらしい。助かつた……!

急ぎ、そこから浮上したが、600メートル程深くまで沈んでいたらしい。

減圧で身体が破裂しそうになりながらも何とか適応して浮上した。その後も例の飛魚に削られながらも全身にブレンド毒を纏つて回避し(それでもあまり効果が無かつた)、オーラダツシユで岸へなりふり構わず向かつた。下からバブルシヨックの様な物を撃ち込まれ、全身ほぼ全てが消失しかかつたり、ゼラチンの様な物に閉じ込められかかつたが、何とか復元しつつ破つて脱出したりしながらも、漸く岸に戻つてきた頃には精神的に疲労困憊になつた。

……2キロメートルでコレか……。戻つてこれたのは奇跡だな。私はまだまだここを

侮っていたらしい。いくら何でもこれは駄目だ。転送された時に感じたのは、更にヤバいのが沢山いるということだ。オーラで分かる。アレは駄目だ。とても勝てない。

…やはり、海を渡るのは現実的では無かった。いくらこの体質でもあつと言う間に消滅してしまう…！

よく来る時こんな海を渡って来れたものだ。余程あの案内人は強い存在らしい。やはり「神」に近い存在なのだろう。いや、この海の事を考えると「神」そのものかもしれない…。来る時も、あの鈴の効果によって我々は守られていたわけだ。それが失われた為、一斉に攻撃を受け、船は大破したのだろう…。船を作って渡る案もこれで頓挫した。

岸に戻ってしばらく休んでから、まず始めに、私はこの砂浜近辺にいる敵対勢力を一掃することにした。…私の八つ当たりでもある。まだここの方が海よりは断然マシだ。何より、「今の自分」を検証しなければ、これからの行動もままならない。…海に出たのは失敗だった。あれだけの事があつても、まだまだ私は油断が過ぎるらしい。私のこの癖は早急に治さなければ。そうしなければ、待っているのは「死」だ。

ここはもう、常識の通用する世界じゃない…！

それこそ、慎重に1匹1匹ずつ潰していった。あのゴキブリの様な能力を持つザム

シもいたが、吸収した。私に物理的な侵食はもうほとんど効かない。だが、油断はしない。あんな風には2度と喰らわれない。何かがあるか分からないからだ。

やってみて分かったが、あの「兵器」の力はプログラムあつてこそだった。それには誓約がある。

つまり、この力で敵を侵食して仲間には出来ない。

精々、奇妙な植物が出来上がるだけだ。緑色の頭部を持つ奇妙な植物が。これはこれで強いのではと思うかも知れないが、プログラムがないとその侵食率はガタ落ちする。人間界の致死性の病気と同じぐらいだ。

だが、直接の吸収なら辛うじて出来た。直接粒子を打ち込み、そこから自動で侵食させ、自分として取り込む。そこからは「パワージェクト・コンバート完全適合」の出番だ。これも相当パワーアツプした。もう万病に効くんじゃないかという程に。敵が何らかの毒性を持つ相手だったら、そのまま適応する。万が一厳しそうだつたら最悪そこを切り落とす。これで安全に取り込める。そうやって近場の敵は全て処理した。：海の敵には手を出せなかったが。

そして：恐らく私にはもうほとんど食事は必要無くなった。吸収で賄えるし、太陽光で光合成が出来るからだ。だが、私は人であり続けたい。ここは兵士たちを喰った奴ら

だろうから嫌だが、なるべく狩った獲物は焼いても食べる事にしよう。余りにもワイルドすぎるが、何も食べないでいて平気な生物にはなりたく無かった。人間性を保つ事が、この先を生き延びる為には重要になるだろう。怪物にはなりたくない。私は人間として帰りたいのだ…。



一旦無人都市に戻る事にする。せめてドッグタグだけでも回収して埋葬してやろう。
…伝言は伝えられそうにない。…暫くは。

無人都市に着いた。約400名か。しかし、これは生き残った者の義務だ。探し出して丁寧に葬ろう。

広大な無人都市を虱潰しに調べ、漸く400人分が見つかった。…ブラッドさんもだ。

探してみて気付いたが、彼等は頭部を破壊すると一時的に行動不能となる。側に付い

ている球体が入り込む迄は、だが。恐らく頭部が司令塔になって操っているのだろう。私の細胞と合成した個体とはそこが違った。奴等は何処を潰しても復活してきたからだ。…私も同じだが。これなら後の世に人類が遭遇してもまだなんとかなるだろう。…：原作の時代で何とかなるかは難しいかも知れないが。せめて、後の世の者に警告を残しておこう。都市の壁をくり抜き、文字を書く。この都市と「兵器」の詳細を残したものだ。

いずれ、ここに到達した時に少しでも役に立つ様に…。

全員分のドッグタグとハンターライセンス、そして装備を出口付近の草原に埋葬した。また、そこに石碑を置いた。例の警告文と共に全員分の名前を刻んでだ。

あの文献があるからには、後の世でここに來る事もあるだろう。その時に持って帰って貰おう。

肉体は申し訳ないが消し飛ばした。他の個体もそうだ。しかし、例の球体はどこからか無尽蔵に生産されているらしく、消しても消しても出てきた。…こればかりは仕方ない…か。

そうそう、例の香草だが、中心部に水場が有り、そこに生えていた。試しに食べてみたが、何のことはない。原理は兵器と同じだったのだ。

つまり、香草がナノマシン化して病巣に潜り、侵食したり無害に作り替えたりして、元

に戻す。

ただ、それだけの事だ。プログラムが違うだけだ。私には最早必要無いかと思っただが、思い直して出来るだけリュックに詰め込んだ。

何か使う時があるかも知れない。

中心の塔は、実は塔では無く、大きな木だった。恐らくここから「兵器」のプログラムなどが設定出来るのだろう。下手に弄って暴走などしたら目も当てられないので、そのままにしておいた。

これでもうここには用はないと思っただが、もう一つだけ見逃してる箇所があった。

地下への入り口だ。

私も何が有るか興味があり、入ろうとした瞬間、悪寒が走って飛び退いた。

ここには別のナニカがいる……！

先に《円》をしないで良かった……！

植物粒子の一部再現！　そして…光子状に飛ばす！　原作でカメラアントの王がやっていた事の応用だ。それを地下に潜り込ませる…。

………いる…。巨大なものが…。余りに巨大過ぎて全容を把握出来ない。余りに巨大で、しかも圧倒的な力…。

こいつが、こいつこそが、この都市の根幹…！

「兵器」も、「香草」も、ここから産み出された…！

今は眠っているらしいこれは最早「神」と言うべきものだ。作られたのか、元々あったのかは分からない。…だが、古代人達はこれを利用して繁栄したのだろう。だが、あの時逆鱗に触れて滅びた…。恐らくそういう事だろう。現に緑の球体はここから生み出されている。多分香草もそうだろう。

だとしたら…今は私が触れるべきじゃ無い。そして、こんなものを起こしたら何も出来ずにすり潰されるだろう。それぐらい圧倒的な差を感じる。

それはごめんだ。

急ぎ、私はここを去らねばならない。ここには嫌な思いが多すぎるし、怪物の上で呑気に過ごす事なんて出来ない。

何かに追われるかの様に私は都市を抜け出した。



これからどうしようか。私に足りないものは「力」だ。出来るだけ人間性を失わずに力をつけなければならない。また、この地獄を探せば冗談の様なアイテムもあるかもしれない。

もちろん、冗談の様な敵も当然いるだろうが。

だとしたら、更に奥地へ向かおう。何かあるかは分からない。当然のように地獄を見るだろう。今度は真正正銘1人だ。だが、私は行く。今度こそ諦めないために。今度こそ帰る為に。私の希望を叶える為に。

家族に会う為に

まずは、目標があつた方がいいだろう。ならば、ここからでも見える、あの巨大な木を目指そう。天を突き、成層圏まで達している様に見えるあの木を



そこからの旅はやはり想像を絶するものだった。

まず、先に進んでみて思ったのが、余りにも違いすぎるサイズだ。例の象の群れが脚が6本ある恐竜？に見事に捕獲されて、喰われていた。更に何処から飛んできたか分からない超巨大サイズの蟬に似た蟲にも捕まっていた。あの象は被捕食者だったのか。∴。しかも、その恐竜でさえ更にデカイ怪獣に喰われていた。∴遠近感がおかしくなりそう。いずれもゴジラサイズだ。蟲はモスラサイズか。ナウシカの世界だな。こんなのに人類は勝てるわけない。

1匹でも都市に出現したらそれこそ壊滅する。

ここは…デカすぎる…!!

それでも。行かねばならない。

必ず帰るために。

何回か、例の恐竜と闘った。恐竜もサイズ違いに諦めるかと思つたが、どうやら私は美味しそうに見えるらしい。300メートルぐらいある奴が、だ。実際に闘つてみたが、サイズの違いとは力の違いだ。私も人間サイズだと破格の力が有ると思つてはいるが、これ程のサイズ違いだとそれが通じにくい。

かなりの破壊力を持つたパンチでも、強烈な毒でもちよつとしか有効打にならない。仕方ないのでコツコツと頭部に「浸透勁」をして倒した。倒した直後に一斉に小型の恐竜や象が群がって来て、更にでかい奴まで寄つて来てたので、慌てて逃げた。その際、一部の肉を切り取つて、後で焼いて食べたが中々の味だった。

思うに、巨大な奴はそれだけで強い。念能力も必要ない程に。だからこそ、これは「武」としての力だけじゃなく、純粹な「暴力」が試される。

よって、一通りのデカイ奴を一度は倒した。基本は恐竜を倒した事の応用だ。たまに100メートル以上伸ばしたオーラブレードを差し込み、脳付近をグリグリしたり、《硬》で硬い皮や殻をぶち破って体内に侵入し、内部から破壊したりした。…これでは私が寄生虫だな。だが、巨大な敵の倒し方の基本は分かった。末端から攻め、急所を突く事だ。あくまで基本だ。まだここはこの広大な大陸では入り口付近だろう。奥地にはデカくてヤバい能力持ちの奴もいる筈だ。…あの迷宮都市の地下の奴の様に。更に言うなら海ならもつと酷いだろう。だから、デカイ奴の倒し方の研究は急務だ。

…デカイ奴も油断ならないが、小さい奴も油断ならない。以前のゴキブリがいい例だ。私も常時戦闘態勢が日常になった。でなければ漁夫の利をしてくる奴が多すぎる。時にはかなり遠くから寄生虫を目に転写してくる奴もいた。巨大なウテムシを気持ち悪くした様な奴だ。条件はそいつを見る事。そのまま【完全適合】（バイオ・コンバート）で取り込むよりも異常に早く成長し、無事に私の頭を破壊しながら出てきた。

ここまで約3秒。出て来た奴は外側で急速に大きくなり、本体より人間に近い姿になった。どうやら私の情報を吸収したらしい。特性を奪って行く奴のようだ。ついでに喋れた。「素晴らしい気分だ！」とか言ってる所を背後から強襲して殺した。死んだと思ってたんだろう。私に似て復元してきたが、念入りに吸収した。敵も偶に油断する

事もあるんだな。例のウデムシは更に私に送って来ようとしたが、目をつぶれば問題ない。まあ吸収したから効かないとは思うが念の為だ。

こんな奴は生かしてはおけないため付近の巢の様な所を徹底的に殲滅した。エイリアンみたいな奴だった。いや、あれより酷いな。だが、念での奇襲は何でもありだと言んだ。結論から言えば、やられる前にやるだ。万が一喰らったら即分析して対処するしかない。やはり喰らわれないに越した事は無い。だからこそ、警戒は密に。ありとあらゆる想定をし、躊躇わない。中途半端にすると即、死だ。

時にはいきなり頭が飛ばされた事もあった。すぐさまくつつけたが、敵の姿が見つからない。例の粒子探知を使っているのだ。どこを探しても正体が見えない。何回か切り刻まれて悟った。こいつは絶対に見えない能力だと。唯一攻撃時に触れられるため、其処を狙って刃に直接「内浸透勁」を打ち込んだ。

しばらくすると痙攣しながら姿を現したが、どうやら狐の様な姿をしていた。違う点は手足に鋭い鎌状の爪が付いていた。所謂カマイタチか……。こんな、来た時点で出会ってたら何も出来なかつたぞ……。おかげ様で攻撃の瞬間にカウンターする技術は格段に上がった。

◆

：私は何をしているんだろう。これでは、ただただ拷問を受けているだけだ。もう普通の人間なら何度死んだか分からない。

だが、あの海の事を考えると、こうでもしないと帰れないし、そうでもしないと発狂しそうだ。中途半端な希望が更に私を苦しめる。

地獄とはこの様な場所の事を言うのだろうか。ここは何もかも狂ってる。致死性の罨は至る所に張り巡らされ、殺意しかない動植物、蟲、寄生虫の類は山の様に存在する。また凶悪に変化する気候。巨大過ぎる怪物達。極め付けはそのデザインだ。何をどうすればそうなるのかという極めて不快な姿形。普通の感覚から見れば不快感しか浮かばない。

私は罪を犯し、ひたすら様々な致死性の拷問を味わう。そして復活する。私は死ぬ事は出来ない。死んで赴くという地獄と何が違うというのだろうか。

：しかし、闘いは苦痛に満ちているが、闘っている時は他に何も考えずに済む。闘いが終われば、後悔や寂寥の念がひたすら私を苛む。辛うじて私を繋ぎとめるのは、家族

への思いと私の誓いだ。それだけが私を人間として生かしている。

私は…人として、再び帰るのだ。あの懐かしの我が家に。

だから…少しずつでも強くならなければ…強く…ただひたすら強く

私が私でいるために、ただ、ひたすら…

強く

47、異世界の「神」

私は歩く。この広大な大地を。

もう1年は経ったか。まだまだあの木には辿りつけそうに無い。あれから様々な奴等と闘った。小型の奴から超大形の奴まで選り取りみどりだ。ここまですでに幾つかかなりキツイのがあった。まずキツかったのはキメラアントのコミユニティを発見した時だ。

旅を始めて数週間経った頃、木々が生え茂る森の中で、昔漫画で見た様な巨大な蟻塚が複数建っていた。…あの漫画では一つだったから、より成熟した奴等だという事だ。彼等はこのサイズ的にはそれ程でも無いため、小型の奴か、偶に生存競争の末に死

んだ大型を喰らっている様だった。その為、兵隊蟻1匹1匹が強烈な能力持ちだった。ただ、以前吸収した能力持ちも多かった為、そこまで苦戦はしなかった。オリジナルを若干強くした感じだ。

ただ、中心に棲む直属護衛軍及び王はやはり別格だった。この付近には知性を持つ生物は居ないが、奴等は割と高度な知性を持っていた。王は人間型では無く、蟻そのものを立たせた様な姿で私に念話を送って来た。

(ほう。我が兵共を超えてここまで来たか。中々の強者よ。貴様は美味そうだ)

およそこんなイメージが送られてきた。∴未来の奴とは随分違う。アレは環境の違いと、人間が大量に混ざったからこそだろう。だが、未来で多大な被害を及ぼすと分かっている以上、滅ぼさねばならない。およその分析は完了した。後は殲滅する。

王の質問に答えず、一瞬で距離を詰め、直属護衛軍の3匹迄の頭を挽ぐ。ちなみにこのコミュニティはかなり大きく、直属護衛軍だけでも10匹いた。

返す刀で残りの内の4匹を念弾で消滅させ、残りの3匹はブレードで叩き斬った。不意打ちもいとこだが、やられる方が悪い。

王は面白そうに眺めていたが、やがて戦闘の構えを取った。∴やはり他の奴とは別格

だ。オーラ量も私に匹敵する。

そこから王との激闘が始まった。私もありとあらゆる毒を打ち込んだり、*「浸透勁」*を打ち込んだりしたが、中々奴は倒れない。むしろより適応してきて強くなる始末だ。奴も同じように様々な毒や能力を返してきて、こちらも同じ様に適応したが。その内こちらの武術も模倣してきて、こちらも頭を挽がれたり、腹に穴を開けられたり、腕を喰われたりした。やはり学習能力も相当高い。壮絶な削り合い再びだ。

しかし、最後に立っていたのは私だった。私は復元出来るが、向こうは出来ない。その差が出た。

(面白い闘争だった……もつと堪能したかったが、これまでか……。その方、名は何と言う。我的话は届いておろう)

(……カームIIアンダーソンだ。王よ。私もよき闘争だった。さらばだ)

最後に話しかけ、特大の念弾で消滅させた。

……知性のある奴とはなるべく闘いたく無い。しかしそうも言ってもらえないので、慣れるしか無い。しかし殺意と恐怖以外の感情をここで向けられたのは初めてかもしれない。

恐怖で思い出したが、恐怖とは重要な感情だ。扱いを間違えなければこれ程重要な物はない。当然、大きすぎる恐怖は死に繋がるし、無さすぎるのも死に繋がる。だが、上手く制御出来ると、危機管理センサーが敏感になり、油断は無くなり、あらゆる想定が瞬時に浮かぶ。

これを上手く操れるのは知的生命体の特権だ。私も恐怖は忘れない様にしたい。

もう一つキツかったのは、超特大ワームに喰われた事だ。ある時、身体中に顔の付いた奇妙な怪物複数と戦っていた時の事だ。奴はその顔から様々なプレスを吐いて来た。炎、毒、水レーザー、氷結プレス、など多種多様だ。氷結プレスを不覚にも喰らってしまい、一瞬足が止まってしまったが、次に噛みつき攻撃をして来たので齧られながら浸透動”をして倒した。

他の奴等と対峙しながら、いい機会だから今後の為に氷結にも対応しようとしていたら、凄まじい地震が起きた。何が!? と思ひ、氷結を熱で解除してその場からかなりの距離を飛びのいたが、遅かった。地下から凄まじく巨大なワームが飛び出してきたからだ。巨大さのレベルが違う。口だけでもキロ単位はありそうな奴だ。そのまま口に飲み込まれた。

口の中はまるで別世界だ。様々な巨大生物が大地と共に飲み込まれていた。当たり

前だが、酸素は無く、凄まじい強さの溶解液の雨が私を溶かそうとする。大地すら溶かすならば当然か。

内臓まで溶かしながら、ようやく適応したが、次に待っていたのは出られないと言う事だった。奴の外皮はとんでも無く厚くて固く、更に寄生虫の様な大量のデカイ蟲との強制戦闘となった。

苦勞して外に出たら、そこは土中だった。当たり前か。しかもかなり深い。あのサイズだと当然だが、仕方ない。私は植物の細胞も含む故、土中への適応は簡単だった。しかし掘っても掘っても出られない。また、土中には厄介な事にモグラの様な奴や鮫の様な奴、トカゲの様な奴までいた。そいつらと闘いながら、ようやく地上に出られたのは10日程経ってからだった。

おかげで服はどうとう全滅。貴重な香草も全て溶けてしまった。ただ、念の為に体内奥深くにガラスケースごと埋め込んでおいたので何枚かは無事だったが。もちろん、ハントーライセンスもそこにしてしまっておいて何とか無事だった。これは私を証明するものだ。大事にとっておかなくちやなあ。

しかし流石に全裸はキツイ。仕方なく、仕留めた獲物の皮を加工して身にまとった。いわゆる原始人スタイルだが、無いよりマシだろう。私は少しでも人間でいたいのだ。

◆
ここでは自然も脅威だ。

現在、どれぐらいの高さか分からない、大きさも分からない崖を登っていると、遠くの方でジェット機の様なものが見えた。一瞬人か、と思ったが、よく見るとどうやら竜の様な生物らしい。翼の代わりにジェット推進で移動している……ここは本当になんでもありだな。しかし、オーラジェットと言う考えは悪くない。今のオーラ量では最後まで保たないと思うが、候補の一つとして考えておこう。

◆
そう言った事を考えていたのが良くなかったのだろう。崖の途中で鈍く光る紫色をした石に、私は何の気無しに触れてしまった。その瞬間、あつと言う間に何らかの引き込み力が発生し、私はその石の中に引き摺り込まれた。

ここは…

何処だ？

身体を起こし、周囲を確認する。周囲には昔見慣れたビル街が立ち並ぶ。一瞬私はヨークシンに帰って来れたか！と思つたが、すぐそんな考えは否定された。…ここは静か過ぎる。そして、よく見ると私のいたヨークシンよりも遥かに時代が進んでいる。寧ろ、前世にいた時代に近い。

そして、何よりも…ここは滅びた世界だ。気配が物語っている。前のブリオンの都市と似たような感じだ。

街は普段通りに佇むが、所々悪臭が漂う。街の至る所に散らばるなんとも言えない色をした液体の所為だ。街の様子から見て、滅びて間も無いらしい。街の至る所に奇妙なシンボルマークが見えた。円の中に五芒星が書いてあるものだ…。これは何だろう？

街のあちこちを慎重に探索し、生き残りを探す。望みは薄くとも、私は誰かと話した

かった。ある時、人影を見つけたかと思つて隠れながら近づいたら、それは2本の角を生やしたのつぺら坊の様な巨大なマネキンだった。いや、マネキンの様な化け物だった。そいつは私を襲つてきたので念弾で返り討ちにした。それを破壊？した時、例のなんとも言えない液体を撒き散らして消えていった。

どうやらコイツがこの街の滅びた原因の一つかも知れない。

益々嫌な予感がする。恐らく私は何らかの意図を持つてここに放り込まれた。ただでさえ地獄の様な場所を彷徨つていたのに、更に地獄の様な場所に来てしまった。冗談じゃない。急ぎ脱出しなければ…。

探索を続け、例のシンボルがデカデカと表示されたビルに入る。どうもこのマークが気になる。だからこそ、1番目立つここに入ったわけだ。途中で洋服を展示している店があつた為、そちらから服を拝借してからだ。今までの原始人スタイルでは場違い感が半端なかつたし。ファッションも現代と変わらずで助かつた。

どうやらこのビルは宗教施設らしい。何か無いかと入つてくまなく探索した所、ビルの中間辺りで研究施設らしきものを見つけた。

そこには、様々な機械類と様々な書類、そして、奥には奇妙な涙型をした培養槽みたいなものがあつた。まずは近くにある書類を取り出して読んでみた。

くがつはちにち、けんきゆういんなばれのほうこくしよ。わたしらは「かみ」のじようかをいただくためにさまざまなじっけんをくりかえした。たいしよはなかなかしたがないふしんじんしやだ。かのじよはしぶとく、せいきたいがなんども「きよういく」したが、ていこうしたのでかみのなみだにつけるしよぶんをおこなつた……
やはり読めない。しかし手書きのこれは、何やら鬼気迫る様な筆跡で書かれている……。一体何が起きたのだろうか。

更に奥を探索してみる……例の培養槽だ。これは一体何だろう……?と思つていたら、濁つてはいるが、中に何か居る……。

!!

人だ!!

生存者が!?

慎重に観察してみるが、どうやら妙齡の女性の様だ……。何故この液体に漬けられているのかさっぱり分からないが、生きていて欲しいものだ……。

あれからずつと装置を眺めたり、マニユアルを探したりしたがサツパリ分からない。……しかし、諦める事は出来なかつた。何とか人と会話したかつた。

ようやく、排水？ボタンのようなものを探し当て、恐る恐る押してみた……。

……頼む！

しばらくして、ゴボゴボと例の液体が抜けて行く様に減つて来た。やった！私は急ぎ、体内から後数枚しかない香草を取り出し、万が一の時に備えた。……本当に取つて置いて良かった……！

全ての液体が排出されると、女性は激しく咽せ込んだ。

生きています！

直ぐに手当をすると、漸く落ち着いた様で、こちらを覗きこみ、喋り出した。

「ここは!? あなたはだれ!? どうして……!」

……やはり言葉が通じない……。しかし、本当に生きていて良かった……! 私は彼女に上着を被せ、念話で話しかけた。念話はイメージを含むから翻訳は容易な筈だ。

(落ち着いてください……! びつくりしたかもかもしれませんが、助けに来ました)

(!?! 頭の中に……貴方は……でも、助かったわ……。ありがとう)

(私はカームⅡアンダーソン。こことは違う世界から連れてこられました。なので、街が何故この様な状況なのか全くわかりません……。何があつたか教えてもらえませんか?)

(……そう……貴方も災難な人ね……。こんなところに来てしまうなんて……。ここは第三神都市バフォーよ。不思議な力を持つ人。そして、ここは滅びる世界。私もアレに漬けられるまでしか知らないけど、おそらく、ね)

(……何故そんな事に?)

(……『神』よ)

(……『神』?)

(もう80年前ぐらいになるわね……。この世界に『神』が実際に降臨したの。『神』は私たちに様々な科学技術を提供し、私たちは一気に進歩したわ。それから暫くは世界規模

で繁栄を極めた……。でも、それは畏だつたのよ……)

(……続けて)

(ある時を境に、世界中に“穢れ”が発生し始めた。“穢れ”は触れた人を襲う様になつて、しかも毒の汚物を撒き散らす……。それに触れた人も同じ様に溶けていったわ……。対抗手段も見つからない……。どんどん人の生活圏は脅かされていった。その頃、宗教国家に変わつてしまつていた政府は、教皇を中心に聖化部隊を結成して浄化にあつた。……。でも、成果は上がらず、どんどん状況は悪くなるばかり。そして『神』は何の意味も無い言葉を吐くばかり……。終いには聖化部隊も人々に乱暴狼藉を働く様になつて……)

(……それは、人間同士で殺し合いが始まつた、と言う事ですか?)

(ええ……。信仰心の薄い者を逮捕して、“浄化”するんですつて。私もその1人。ただ、あの“化け物”から逃げてただけなのにね……。『聖戦』とも言つていたわ。奴等は見境いなく人々を虐げては、暴行を繰り返していった……。私も抵抗したけど捕まつて……)
 (……言い辛い事を言わせてしまつて申し訳ありません。しかし、何故あの装置に?)
 (アレが、例の“浄化”装置なんですつて。奴等は『神の涙』と呼んでいたわ。もう長い事漬けられてみたいね……。この様子だと、本格的に私達は滅びたみたい。ここに誰も居ないのがいい証拠よ。……そもそも私が捕まる前から既に危うかつたから……)

(…結局、 “穢れ” や “浄化” とは何ですか?)

(分かるもんですか! こんな事になったのも全部全部『神』のせいよ! アイツが来てからこの世界はおかしくなった!!絶対に…絶対に許せない…!!)

(落ち着いてください! 貴女はまだ生きているじゃないか!)

(こんな滅びた世界に1人残されて、一体どうしろって言うのよ!…もう、おしまいよ。何も、かも)

そう言い終わると、彼女の身体が痙攣し始めた。くそっ!!またか!!!

しかし、私には秘策がある…!ようやく発見した生き残りの人間をむざむざ死なせてたまるか!

(これを食べてください!これは万能薬です!!)

激しく痙攣する彼女に応答は無い。なので無理矢理詰め込んだ。瞬時に症状は治まったのでホツとした。…万能薬は伊達じゃないな。

(…気分はどうですか?)

(…最悪の気分だわ。…お願い。奴を殺して。貴方なら出来るでしょう?)

(…何とも言えないですが、私の目的の為に努力しましょう)

(よかった…これでもう思い残す事は無いわ)

(何を言ってるんです!?)

(私には分かる…あれだけ長く漬けられてたもの…もう手遅れよ)

(馬鹿な! 貴女に与えたのは正真正銘万能薬だ!)

(これは病気じゃない…「呪い」よ。あの糞つたれの『神』のね…。お願い、必ずやあの神気取りの糞野郎をブチ殺して! 出来るだけ無惨に…!!)

(待ってくれ! 本当に大丈夫な筈なんだ!)

(最期に貴方の様な人に会えて良かったわ…別の世界から来た人…この世界の最後の希望…奴は『神都』に居る…!頼んだわよ…ツ)

そう言うと、彼女の身体は再び痙攣し出した!

そんな…!もうやめてくれ…!頼む!唯一話が出来た人なんだ…!

私は直ぐに香草を追加で彼女に与えた。もう残り後2枚しか残って無いが、構うもんか…!

しかし、無情にも痙攣はより激しくなり、彼女はそのまま脱皮した。

中から出てきたのは…街の外で見かけたマネキン擬きだった。あれは、元人間だったのか…!そして、彼女はどんどん巨大化していく…!

また……助けられなかった……

私は……私は絶望に再び浸りながらも、彼女だったものを破壊した

48、人間

糞ッ……！糞ッ糞ッ！糞糞糞ッ……！！！！

どうしてこうなるんだッ……！！

私は僅かな希望すら持てないのかッッ……！！！！

これは最早地獄すら生温い……！

何て世界だ……！

なまじ前世や今世と似ているせいで余計に酷い……

何が「神」だ!!!

これではまるで「悪魔」じゃないか……!!!

……許せない……!!

絶対に許さない!!!

……そこから私は近くの研究施設の様なものを悉く破壊した。もちろん八つ当たり

近いが、こうやっておかないと自分の精神が保ちそうに無いからだ。

一頻り暴れて漸く落ち着いた頃、私は冷静に考え始めた。

：「神」を騙る「悪魔」についてだ。もう私の中では完全に「悪魔」だ。恐らく間違つて無いだろう。

この「悪魔」を滅する事が、元の場所に戻る事にも繋がるだろう。何より私が許せない。

だが、この相手は強い…！

多分析違いに…。「神」を騙る程の相手だ。今までの比じゃないだろう。分かっているだけでも、人間を化け物に変質させてしまう「呪い」…あの香草が通じないと言う事は、最早物理・自然現象を超えたナニカだろう。まさに「悪魔の呪い」と言うべきものだ。人間の常識が通用しない。

つまり、今のままでは勝てない

だが、私は諦めない。以前聞いた師匠の台詞を思い出す…。

『方が一、どうしようもない絶望的な状況に陥ったら、お主もなぜそれほど力を付けるに至ったかを思い出すが良い。きつと助けになるであろう。また、ゆめゆめ儂の教えも忘れるな。自然と合一することで道が開けることもあるう』

前はマイケルの助けも有ったからだが、私の根源にある渴望を思い出す事で道が開けた。そして、今回は師匠の教えを使う時が来た……！

即ち

“聖光気”の獲得である。

師匠は言った。

『これは、世界と同一になり、人が神へと至る道筋じや。仙になった者は皆ここを目指し、厳しい修行を自らに課す。いわば、人の軛を捨て、悟りを開くと言う状態じやな。今

のはまだまだ未完成じゃがな……ここまで至れば、いかな呪いも災いも効かぬようになる。人の「氣」を世界とつなげ、自らの物にするという事じゃ……』

……と。いかなる呪いも災いも効かないようになる、と。あの時見せて貰った黄金の光は今の私すら遙かに凌駕していた。アレさえ掴めれば、「神」気取りの「悪魔」を倒せるかもしれない……！

そして、それ程の力を持てば、暗黒大陸からすら脱出出来るかも知れない……！

で、あれば、やるべきだ。何年もかかるかもしれない。だが、希望が見えてきた。人の軛を捨てるという所が気にはなるが、この身体は不老不死だし今更だ。身体を変質させるより、聖なる氣を持つというのならまだマシだろう。……人間であると思えば人間なのだ。

近くの家屋にお邪魔して、久しぶりのベッドで眠る。この様な安息はしばらくなかった。私にはもう睡眠は必要ないが、精神の安定には欠かせないものだ。これからの事を考えると重要な事だろう……。



私はその後、街を出て荒野を彷徨った。丁度良い場所を探す為に。

幾日か彷徨ったが、本当にここは滅びている様だ。人や動物の姿すら無い。あるのはただ、荒野と建造物のみ。そして、例のマネキン共が所構わず徘徊する…。

人里離れ、山の山頂に達した時、ようやく奴等の影も無くなった。人間の生活圏を心に活動している様だ…。この気候は人間が生きて行くには余りにも厳しい。

だからこそ、誰にも邪魔されずに集中出来る…。山肌に窪みを作り、そこに入って座禅の姿勢をとる。どの様にしたら出来るようになるかは分からない。だが、師匠は答えは見せてくれた。全く師匠にも頭が上がらないな。

こういう時は、基本に立ち返るべきだ。

だから私は瞑想する。

自然と合一するには、それが1番の近道だと分かるからだ。まずは自分のオーラを自然と溶け込ませる所から始めよう。



1年程が過ぎた。私には食事も睡眠すらも必要ない。だからこそ、それのみに没頭でききる。

最初は《纏》すら解除し、自然体で始めた。∴思えば、この立ち登るオーラはどこに行くのだろうか？

それこそ、自然に溶け込んで消えていく、このオーラは∴。

人間だけじゃない。動物も植物も、ありとあらゆる生命はエネルギーを発し、それは空中に消えてゆく。

…それは、世界へと還元されるのではないだろうか？

ミンボの僧侶が言っていた「空」とは…恐らく、その世界と一つになり、自らがその一部となる状態の事を言うのだろう。身体も、オーラも、意識すら合一した状態となる…それが「空」だ。

しかし、それでは植物と何も変わらない。

ミンボの僧侶は「悟り」と言っていた。その状態から自らの意志でその一部の力を操る事こそがそうなのだろう。

何の事はない。師匠の見せてくれたものと同じ事だ…。古より人々を導いてきた存在…。『聖者』とも『天使』とも呼ばれた存在は、皆、これを掴んだ者たちだった。

超古代に人々が暗黒大陸を脱出出来たのは、そういった人々が導いたからこそなのではないだろうか。

だからこそ、私も掴んでみせる。

既に、ほぼ全てのオーラを自然に溶かし、一部とする事が出来た。精神も、意識や肉体という軀を超越して拡散していく…。

これは…ある意味「死」とも似ている。違うのは身体も意識もある状態で行っている、という事だ。臨死体験が2度程ある私には馴染み深い感覚だ。

だが、私は「生きるため」にこれを行う。必ず「生きて帰る」為に…。

それから更に1年程月日が経った。もう私はほぼ植物の様な、ありのままの自然と同一化するに近い状態となった。やってみて分かったのは、ここは自然の力が薄いという事だ。

例の「悪魔」によって滅びた世界だ。そこは仕方ない。しかし、まだ辛うじて残っている。

それは「この世界」の最後の力。この星の大地や空、海に至るまで。そこには善も悪も無い。ただ、あるがままにそこに在るだけだ。

私はそれらと出来る限り同化し、溶けてゆく…。

しかし、その頃から、邪魔が入る様になった。

私の意識の中に現れる。昔会った部族の女性たち。私を誘う様に誘惑する。だが、私は動じない。これは私の「弱さ」が作った幻だ。罪悪感と性欲などに訴えかけてくる。私は何も返さないと分かると、残念そうに消えていった。

次に現れたのは、私の家族だ。父さんや母さん。マイケル達やファミリーのみんなが次々に私に言う。

「何をしてる。もういいだろう。早く帰ってこい」

「そうよ。貴方なら凄い力を持つてるんだもの。早く起きて帰ってらっしゃい」

「兄さん! 『血の掟』を忘れたのかい!?! 兄さんならきつと帰って来れるから、そんな事してないで早く帰って来なよ!」

「カームさん！ マイケルも寂しがってますよ！ お願いですから早く帰って来てくださいよ！ アンタなら出来るだろう……！」

「……………」

彼等は次々と私の前に現れては告げてゆく……。正直これには参った。

確かにこんな事をしなくても、私は細胞をワザと暴走させ、ブリオンなどの力を限界以上に引き出したり、メモリすら無視して超強力な発を作ったりする事で「力」を手に入れる事は、恐らく可能だろう……。

もしかしたらあの「悪魔」の“呪い”すら吸収して、奴を殺す事も出来るかもしれない。

しかし、そこに待っているのは完全なる人間性の喪失だ。他ならぬ自分だから分かる。そうなった場合、私が私ではいられなくなる。周囲に害を撒き散らす怪物の完成だ。だからこそ、それは出来ない。私は人間として……ただ一人の人間として帰るのだ。

強い意志が必要だ。これは私の弱さだ。私を楽な方に逃そうとする。弱さに対抗す

るためにも心を燃やせ。もう一度意志を一点に定めろ。そしてその意志をはつきりと舌に出せ。更にその意志を錬りあげろ！そして…行動へと発しろ！！

私は、「人間として、生きて帰る」と！！

しばらく家族達は粘っていたが、私の意志の強さを見て諦めて去って行った。

最後に私の前に現れたのは……アンソニーだ。彼は私の前に歩いて来てこう言った。

「久しぶりだねえ。『アンブレレイカブル壊れない男』。いや、Mr. アンダーソン。調子はどうかね？」

「……何をしに来た？」

「ここは精神世界だ。何をしに来たも何も無いだろう…。ただね、私から君に提案があるのだよ」

「…私は誰の言葉も受け付けない。貴様はここから去れ」

「酷い言われようだな…。まああんな事が有れば当然か。だが、私がここにいた時点で

君の論理は既に破綻しているのだ。気づいているかね？」

「…これは私の弱さだ。それも含めて私だろう。だが、私は克服してみせる」

「…君は不安に思っているんじゃないか？ 本当にこのやり方でいいのか…とね。更に言えば、その力をもし手に入れても勝てるかどうかすら分からない…。違うかな？」

「……だから何だ」

「“力”を解放し給えよ！ Mr. アンダーソン！ 君になら出来るだろう！ 君が思っている様に!!」

「…それはやらないと、今誓ったばかりだ」

「意地を張るのはやめ給え。君は迷っている。君の力は素晴らしい！ 私が生きている時でさえ圧倒的だったではないか！ 君は更に『兵器』すら吸収し、無敵の存在となつた…。君がその気になりさえすれば、すぐにでも圧倒的な、それこそ『神』にも匹敵する存在になれるだろう！ さすればこの様な地獄からも抜け出せるし、それこそ何でも出来るぞ！ 君の思うまま、だ」

「巫山戯るな!! それをしてしまえば私は人では無くなる！ ただの血に飢えた獣に成り果てるだろう！」

「…君は随分と人間というものに理想を持つてる様だねえ。人間なんて所詮そんなものだ。歴史を見たまえ！ 君も世界史ぐらゐは嗜んでいるだろう。人間は社会性を持

つ獣だ。人間の歴史とは戦争の歴史だ。他人が他人を蹴落とし合い、足を引っ張り合う……。君も体験したはずだが？」

「それでも！ 人間は隣人を愛し、他人を思いやる事が出来る！ それが、それこそが人間だ！」

「青いねえ……。甘い、と言つてもいい。だが、そんなのは余裕のある時の気まぐれにすぎん。私も医師として様々な戦場を見てきたが、酷いものだったぞ。奪い、騙し、犯し、尊厳すら凌辱される……。そんなのは日常茶飯事だ。まだ君の見てきた怪物共の方が優しい場合もある……。第一、君の家庭もその様な稼業だろう……。忘れたとは言わさんぞ」

「……確かにそうだ……。人間は愚かだ……。家の仕事もそうだし、当然私もそうだろう……。だが、無償の愛やいたわりすら忘れてしまえば本格的に怪物になってしまう、と言つてゐるんだ」

「怪物になつて何が悪い？ 寧ろ君が怪物になつて、支配してでもその愚かな人間共を止め給えよ。圧倒的な力の前では、流石に人間は大人しくなるだろうからな」

「そんなのは恐怖政治と何一つ変わらない。第一、それで人間社会が平和になるならば、ここは滅びなかつただろう」

「ははっ！ これは一本取られたねえ。だが、君は認めたぞ。人間はどこまでも愚かだ。それこそが人間だ。……だから素直になり給えよ。君のやってる事は無意味だ。早くそ

の「力」を解放して『神』にでもなり給え。……どうしてもそれが嫌ならば、まあ仕方ない。この『神』に挑んで、無様に負けるといい。幸い君は死に辛い。大変素敵な事が起きるだろうねえ……」

「何を言われても私の答えは変わらない……。だが、お前の言う通り、人間は愚かだ。そんなものに拘っている私は滑稽に映るだろう……。しかし、時にはそれが凄まじい力を持つ事もある……。私をマイケルが救ってくれた様に。だからこそ人間は素晴らしい。だから……私は人間の愚かさも、汚さも、賢さも、愛も、全て飲み込みながら人間として進む」「ハッ！ それこそ滑稽だな。大体君は、まだ自分が人間だと思っているのかね？」

「……………」

「医師としての私から言わせて貰えば、君の細胞は既に人間のそれじゃない……。大体、不老不死の存在を人間というものか。医学的な見地からも、君は既に人間ではないのだ」

「……それがどうした。私が私を人間だと認識してらうちは人間だ」

「今度は哲学か？ 付き合ってもいいが……君の考えは変わらない様だね。勿体無い。究極の生物の極地、人間の可能性を見られるかと思っただがね」

「納得したか？ 安心しろ。私は世界と合一する。私なのか、本人なのか知らんが、私はそれすら受け入れよう。世界と合一するという事はそういう事だからな」

「……君みたいな青い奴に合一されるなんて真つ平ごめんだね。……反吐が出る。ならば

私は退散するでしょう。だが、予言しよう。いつか君は怪物になる。遅かれ早かれ、だ。私はそれを楽しみにするでしょう……先に冥府で朗報を待っているよ。『壊れない男』^{アンブレイカブル}」

最後にそう笑って告げると、彼は来た時と同じ様に去って行った……

私の考えは変わらない。人間は愚かだ。彼の言った通りに。しかし、だからこそ輝くものを内側に持っている。私はそう信じている。そしてそれは、人間だけの特権だ。だから私は、人間を捨てない。例え、それが姿形だけであろうとも。私は、全てを受け入れた上で人間として在る。

そう決意した時、唐突に私の意識が浮上した。

気付いたら私は浮いていた。

私は……世界に認められた。今までの比じや無い程の凄まじい“力”がそこにはあった。それは世界に接続した力。その一部だ。そして“それ”は無限に湧き出てくる。試しに動かしてみる……オーラより難しいが、動く！

ならば、充分に扱える様にしなければ。この世界と合一して分かった事がある。

この世界はもう長くない

ならば、少しでも早く、“この力”に習熟しなければならない。この世界に巢食う「敵」を倒す為に。

49、「神」との闘い

あれから私は必死で「聖光気」の習熟に励んだ。世界は日に日に弱くなっている。この力を獲得したからこそ分かる。「奴」の居場所と、その力が。

やはり莫大な力を持っている…。この力を持つてもどうなるか分からない程に。

「聖光気」は聖なる力だ。別の言い方をするとピュアな力とも言える。だからこそ、あの莫大な邪悪なオーラに対抗出来る唯一の力だ。：やはり私は間違ってたなかつた。だが、このままではジリ貧なのも事実。「奴」に勝てると確信できるギリギリまで習熟訓練を行おう。



この力は、基本的にはオーラ操作と同じ要領で使える。なので、使い方にそこまで不自由はしない。暫く続けると、非常に硬質な物質に圧縮できる事を発見した。そのため、これを《堅》の要領で鎧として身に纏う様が出来た。因みに全身白金色のスーツに白金色のボルサリーノ帽子だ。：まるでマイ〇ル〇ルジャクソンの様なファツションになつてしまつたが、これは私の父さんの記憶からサルベージされたものだろう。色はともかく。とにかく「これ」の防御力はピカイチだ。これに加えて、戦闘時の攻撃力も凄まじい。これならば何とか対抗出来るだろう。

また、この力は多少の物理法則ならば超越することが出来る。所謂「奇跡」と呼ばれるものだ。空を飛べるのもそうだし、例えば石などを複製することも出来た。残念ながら例の香草は無理だったが。恐らく他の「神」クラスの創造物や、それ自体が強い効果を持つアイテムは難しいらしい。

ただ、あまり乱発すると世界のリソースを削る恐れがあるために使いすぎるのは控えておこう。



さて、いよいよ「奴」の所へ向かおう。本当はもつと時間をかけて習熟したかったが、これ以上は厳しくなりそう。仕方ない。

この山とも長い付き合いだった。最後に感謝の礼をして、「神都」に向けて飛び立った。



「神都」は実に荘厳な佇まいをしていた。だが、やはり人の気配は無い。「奴」はこの中心にいる。…この場所なのは多分理由がある。ここは所謂龍穴と呼ばれる、星のエネルギーが集約する場所だ。世界と合一してるから分かる。「奴」は、この場所で星のエネルギーをも貪っているのだろう…。

ますます気に食わない。最早寄生虫じやないか。だが、もし倒せれば、この世界も復活する事が可能かもしれない。だから、何としても倒さなければ。

巨大で荘嚴な神殿に着いた。それはまさに、世界の贅を尽くした様な建築物だ。その中心にいるのが邪悪な存在とは何とも皮肉なことだ。

：私はこの世界の住人では無いが、コイツだけは何としても滅ぼさねばならない。人間として。生きとし生ける者の代表として。

神殿の最上階のこれまた豪華な謁見の間の豪華な椅子に「奴」は後光を差しながら座って待っていた。ぱつと見ると、白髪と白髭を長く蓄え、ゆったりした衣装を着た、いかににもな奴だ。

——ようこそ。迷える人の子よ——

念話か。どうせ話を通じる癖に。趣味の悪い奴だ。

「私は、カームⅡアンダーソン。異なる世界から来た“人間”だ。『悪魔』よ。私には擬態は通用しない。早く正体を表せ。不愉快だ」

「……正体を表せ、か。何の正体をだね？」

「喋れるじゃあないか。その気持ち悪い装いをやめろと言っている」

「我は『神』だ。人の子よ。不敬なるぞ」

「その人の子を滅ぼした奴は何処のどいつだ」

「人の子よ。我は迷える人々に『祝福』を与えただけだ…。今は我のもとで安らかにすごしておる。これは救いだ。世界の『浄化』だ」

「言いたい事はそれだけか…寄生虫。しかし私は人として、貴様だけは許せん。ここで滅びてもらう」

「何と不敬な…人々は救いを求めていたのだ！ 我はそれに手を貸したのみ」

「人々をいい様に弄んだ癖に良く言う。もう御託はいい。ここで滅びろ」

私は戦闘態勢を取った。奴は構えない。

「いいのか？」

「全く嘆かわしい…仕方ない。神罰を与えましょう」

では…

文字通り神速で近づき、全力で顔面をぶん殴って頭を消し飛ばした。

「……!!!」

すぐに奴は復元したが、油断してる内にコイツは消滅させる!!

続けて「聖光気」の気弾で全身を消し飛ばした。

………。

「……見ているんだろう？ 早く出てこい」

その直後、凄まじい邪悪なオーラが辺りに満ちる！

チツ……。これ程とは……。

——フハハハハ！ コレは実に愉快だ!!——

そのオーラが集まり出し、形を作る

出てきたのは、正に異形としかいいようのないモノだ。山羊の頭に2本角、中央からもう1つ松明の様なモノが生えていてそこから炎を吹き出している。背中には黒い羽が生え、腰蓑を纏っている。

「久しぶりに顕現したな……。はじめまして。救世主殿。我が名は『バフォメット』。この世界の『神』を務めている」

「漸くそれらしい姿が出たな……。『悪魔』め！」

「心外だな……。大体、力さえ有れば、『神』も『悪魔』も大して変わらないのだ。我も元々神だしな……。それにしても先程は実に面白い見世物だった！あの『木偶』は元教皇でね……。ちよつと『力』を与えただけで『神』気取りになって、喜んで世界を崩壊させていった。その姿が実に滑稽でな……。先程も見たか？『神罰を与えましょう』、だど！アレで罪もない人間が何万人死んだか！最後の顔なぞ爆笑ものだった！」

「……その趣味の悪さは今まで見てきた中で一番だな……。人を何だと思ってる」

「もちろん！ 我の『餌』だ。『玩具』と言つてもいい。これで満足かな？ 救世主

「殿」

「……よく分かった。やはり貴様は塵一つ残らず滅ぼす」

「本気でそう思っているなら実に滑稽だな！　しかし、もうここは遊び尽くしたし、残り
を吸い取るだけだから君が来てくれて本当に良かった！　退屈だったからな……。最後
の最後に、我に素敵な娯楽を提供してくれて感謝に堪えないよ。『救世主』殿。人々を
導く存在の筈が、もう誰も残って居ない！　実に悲劇だ！！　私にとっては最上級の喜劇
だよ」

「私は救世主ではない……。ただ貴様が本気で気に食わない『人間』の一人だ……。覚悟し
ろ」

「ハハッ！　面白い！　そんな『力』を持つ人間がいるものか！　だが、それだけの力
を持つならば彼我的戦力差ぐらい分かるだろう。ならば期待しているよ。『人間』の
底力とやらを我に見せてくれ」

「言われなくても……なッ！」

私は先程の様に直線上を突っ込み、『聖光気』を拳に集中させて腹部に打ち込んだ！

その凄まじい衝撃で豪華な建物が半壊する……が、余り効いていない。肉体の動きや反
応などは私の上だが、何よりもそのオーラ量が桁違いだ。私が1とすれば、少なくとも見積
もつても5はある……！

「動きは多少はいいようだな。少し遊んでやろう」

それからは一方的な蹂躪が始まった。何しろオーラ量は戦闘に直結する。多少の肉体的性能は優つても、その力が殆ど通用しない。逆に向こうの攻撃は面白い様に私にダメージを与える。周囲は既に見る影もない。

「さて、随分と楽しめた。どうだ？ 絶望したか？ …そろそろ終わりにしようか。世界最後の希望である筈の『救世主』すら通用しない！ 実に残念だなあ！ 哀れな『神』よ！ これは貴様が起こした悲劇だ！」

「……何を言っているか分からんが、私は絶対に諦めないぞ……！」

「おっと、失敬。ムカつく奴の事を思い出してね……。さて、最後だ。言い残す事は？」

「……くたばれ、クソ野郎」

「では、さよならだ」

そう言つて、奴は座禅を組んで、浮いた状態から右手を斜め上に、左手を斜め下に移動させた。…本気の構えか。

「私の権能は『溶解』と『凝固』だ。つまり錬金術の基礎。物質や生物を再構築させる事を意味する。…その不完全な『神気』でどこまで保つかな？」

奴の右手に月を横した物が現れる。左手にはその影が現れた。…何をやる気だ？
 そう思ったら、そこから破壊的な光が満ちて私を襲った。そして私は変質していく…

私という存在が溶け、再び別のナニカに変わってゆく…！

「聖光氣」があつてもこれか!! 確かに瞬時に変質はしないが、徐々に侵されてゆく…!!

これが「神の呪い」…!!

「フハハハハ!! どうだ?」 「救世主」! 貴様ももつと早く来ていればこんな事にならなかつたのになあ? 実に…残念だ! これからは我が一部となり、忠実に働いて貰おう! ああ…実に悲劇だ!」

奴は、勝ち誇つた様に言う…。参つた…。ここまで差があるとは思わなかつた。『聖光氣』はありとあらゆる「呪い」を弾くんじやなかつたか?

…いや、理由は分かつてる。この『聖光氣』は不完全だ。世界が健全な状態じゃなく、「奴」に侵食されてるからだ。

…仕方ない。プランBだ。ある意味これを待っていた

【パ完全_レ適_フ合_エ】
!!!

ここの攻撃に適應しろ!!!



我は、「神」だ。いや、正確には「神」だったが、今現在はこの世界の「唯一神」だ。そもそも、「神」とは信仰によって成立する。人の信仰とそのオーラを捧げる行為だ。微々たる物だが、それでも大勢が祈れば形にはなる。いわばオーラ生命体と言うべ

きものだ。

我はその中の自然神として生まれた。本来、我々は物質界に影響はない。実体が無いからだ。精々が信徒に祝福を齎す程度だ。

だが、ある時から状況が変わった。人々の間で「唯一神」が信仰され始めたからだ。我々の様な小さな神々は駆逐され、あろう事か「悪魔」に置き換えられた。更にはその「神」の「救世主」が、強力にその後押しをした。

我はまだいい方だ。存在すら消滅した者も居たからだ。そして我は「バフオメット」となった。異教の神だ。様々な特性が付与されたが、権能としては「溶解」と「凝固」に落ち着いた。人間の知の在り方や世界の変革までもたらす錬金術の基礎を意味する。だが、所詮は悪魔崇拜のシンボルだ。信仰もたかが知れている。何より、「唯一神」の信徒共に積極的に狩られる始末だ。

このまま「悪魔」として存在し続けるかと思つてウンザリしていたが、ある時転機が訪れた。我を信仰する者達が、大規模な儀式を行ったのだ。生贄を大量に用意し、受肉用の素体を用意する本格的な物だ。中にはオーラ操作技術に長ける者も複数いて、遂に我をこの世界に呼び出した。

度重なる奇跡の末、我は受肉に成功したのだ。

そこからは早かった。まず我は周囲の愚かな人間共を感謝を込めて蹂躪した。そう

して貰いたい為に呼び出したのだらうから、奴等には「祝福」だらう。

その後、我は考えた。復讐したい。我を追いやった「唯一神」に…。

そして、どうしたら復讐出来るか考えた結果。

我は「奴」に成り代わる事にした。

様々な演出の果て、我は天から降臨したように見せた。人間共は我が見せる「奇跡」
によつて騒然とし…そして信じた。もつと苦勞するかと思つたが、案外簡単だつた。更
に我の権能を活用し、人間共に様々な技術を提供した。

人間共は我を本格的に崇め、奉つた。

我はほとんど「力」を手に入れていった。信仰は力だ。我は凄まじい力を得る事になつた。何人か我の正体を見破り、滅ぼそうとして来たがもう遅い。そもそもたかが人間の能力者程度に我が負ける事は無い。悉く滅ぼしてやつた。

後になって来ると、我が直接手を下さずとも人間が「それ」をやる様になつた。「救世主」が来るかと思つていたが来なかつた。

力を蓄えた後はいよいよ復讐だ。手始めに我はまず信徒共を我の眷属へと変質させ、「穢れ」が出たと発表した。その頃には世界中を掌握し、特に周囲の者は誰も彼もが我

を疑う事は無かった。

眷属共は人間を襲い、この地を穢していった。そしてそれは更に我が力となった。あとは見るだけでも面白い様に人間共は崩壊していった。

流星人間！ 我をわざわざ呼び出しただけの事はある。ありとあらゆる悪徳が「神」の名の下に行われ、素敵な光景が世界中で広がっていった。我を「そういう風」に設定したのは人間だ。設定には従わないとな。

そして：現在、全ての人間をほぼほぼ滅し、動植物も死に絶えた。我は至高の「神」として至る事が出来た。ざまあないな。「唯一神」よ。貴様のお陰で貴様の愛する人間は滅びたぞ！

後は、この星のエネルギーを吸い尽くして別の星へと向かうか、別の次元に旅立とうかと思っていたら妙な気配を感じる。

…これは…「救世主」か！

今更出て来たか！ 実に滑稽だ。星が呼び出したか？ だがもう遅い。何もかもが。この星もじきに滅びる。もっと早く来ていれば結果は変わっただろうに。これではただの道化だ。最後に最高の娯楽を提供してくれたものだ。「神」に感謝せねばな。おつ

と、「神」は今や私の事か。

さて、どの様に足掻くかお手並み拝見といこう…。

…流星は星の選んだ「救世主」だ。信じられない程の強さだ。「救世主」の中でも破格の強さだろう。この星の残り全てが味方している様だ。少し前だったらどうなっただか分からんな。だが、それでも遅かった。

少し遊んでやったがもういいだろう。これを我が眷属としてやろう。どんな眷属になるか楽しみだ…。

奴の「神氣」すら貫通し、私の権能は奴を変質させる。どんどん溶けて新しい存在に変質する…。やはり通じたか。普通は「救世主」にはあらゆる権能が通用しないが、星が弱っていたからな。通じなかつたら面倒だった所だ。これで終わる。最高の形で。ああ…実に喜劇だ！ 良き演目だった。

…中々進まん。星が邪魔しているか。もがけばもがくほど苦しむというのに。馬鹿な奴だ。星も哀れだな。実に悲劇だ…。

…何故変質が止まる？ 奴には防げない筈だ…。どういう事だ…？

…!! 元に戻つてゆく…!!

馬鹿な!? これは何だ!? 何が起こっている!?

何故我の権能が通じない？

“神氣”のせいなら分かる…。だが、これは別物だ!!

これは……一体何だ？

50、決着

最悪な気分だ……。何度やつても全く慣れない。当たり前か。自分が自分じゃなくなる感覚はそうそう体験出来るものではない。だが適応出来る。これは科学的な領域では無い。最早概念と言える念攻撃だ。しかし、私には今、“聖光氣”がある！ 今までは無理だったろう。よしんば出来たとしても私を保てなかった。だからこそ、これは最後の手段だった。だが、私は賭けに勝つたらしい。さああと少しだ。奴は呆然としてゐる。

「どういう事だ……！ 何故私の力が効かない！」

焦ってるな。まあそうだろう。

「これが “人間” の力だ……。クソ野郎」

「人間如きにそんな事が出来るわけ無いッ!! 貴様……もしや人間では無いな!？」

「馬鹿言え……正真正銘 “人間” さ。貴様が “玩具” と呼んだ人間だ」

「下等生物が!! もういい！ 我が力で消し飛ばせ!!」

「あまり“人間”を無礼るなよ!! 寄生虫!!!」

奴はその圧倒的な力で私に迫る! だが、私も今、適合完了した。正面から来た極大念弾を、少量の力で“弾く”!

「!!! 何故だ! 何故貴様に私の力が通じんだ!!」

「言つたろう! これが…これが“人間”の力だ!!」

適合のおかげで戦力差は多少は縮まったとは言え、未だにその差は3倍以上はある。だが、新しいこの力にも慣れて来た。今まではそのスピードに着いて行けて無かったが、今なら出来る! これは師匠の教えだ!

奴の攻撃を“いなし”、“逸らす”! 危険な時ほど脱力を! そして…

ドゴオツツ!!!

「ガハアツ!!!」

私の拳が奴に突き刺さる! 漸くかなりのダメージが入った! 続けて二撃!

「グボアアツツ?!」

よし!! 効果は覲面だ!!! たたみかける!

しかし、奴も即座に復元して反撃してくる。敵もさるものだ。だが甘い!

最早私は触れられた瞬間にカウンターを入れる事が出来る! 何度でも喰らうがい

い!!

暫く私は、奴を一方的にボコボコにした。だが…多少のオーラの減少はあってもまだまだ奴は健在だ。それに…

「グツ…ハアツ…ハアツ…おのれ…！ 下等生物め…！ だが、気づいているか？
いつまでやっても我は滅ばぬ…！ この星から力を得ていたからな…そして、星は徐々に力を失ってきている！ 他ならぬ貴様のせいだな！ 故にこのままやり合つて粘れば我の勝ちだ!!」

…その通りだ。私にも感じる。もうこの世界は滅びかけた。そして私は、もうその力をかなり使っている。それでも届かない。

だが、奴を滅ぼす為に必要なのは圧倒的な破壊力だ。一瞬でいい…！ 超火力を実現する!!

私は「聖光氣」を全て右拳一点に集中した。所謂《硬》だ。最早大気が震え、大地が振動する程のポテンシャルだ。

「…馬鹿め。そんな事をして我には届かん！ 逆にその攻撃が届く前に滅ぼしてや

る」

奴が何か言ってるが無視する。世界よ。一瞬でいい。一瞬でいいから一部ではなくその全ての力を使わせてくれ！

そして、その状態のまま私は奴の懐に飛び込んだ！

次々と凶悪な念弾が高密度で迫る！避けられるのは避け、喰らうものは最小限に流しながら喰らう。そして…ワザと復元せずに進む。

「フハハハハ!! 馬鹿め! これで終わりだ!」

奴は接触する直前の避けられないタイミングで極大念弾を飛ばして来た! 右拳だけはず!! そして、私の肉体は右拳以外が消滅した。

「…勝った!! 危なかったぞ、救世主…しかし、我の勝ッ…!!?」

その次の瞬間、私は右拳以外の全身を復元するッ!!!

「くたばれーッッ!!!」

ズツガアツツン
!!!!

インパクトの瞬間、まるで核兵器並みの衝撃波が発生する!!
を貫通し、肉体すら貫通する!!!
超高密度の奴のオーラ

…だが、奴はまだ消えてない!!!!

「……これが…貴様の最後の切り札か…… だが…耐え切ったぞ!! 我の勝ちだ!!」

そうだろうと思った。だからこそ本命はコレじゃない!

今だ! 世界よ!! 一瞬でいい!!! 全ての力を使わせる!!!!

“外浸透勁”
!!!!!!

「ガッ…ガアアアアアツツ!!!?」

「今までこの為に敢えて使わなかった『浸透勁』だ!! しかも敢えて『外浸透勁』だ!!! 世界の全ての力を結集した聖なる光だ! 奴にはたまらない筈だ!!!」

「奴の中で凄まじいエネルギーが体内で乱反射する! 今までの鬱憤を晴らすかの様に暴力的に奴の肉体内を暴れ回る! そして…遂に奴の内側から崩壊が始まる!!!」

「ば、馬鹿な…! この至高に至る我が…滅びるなどツ…! ガハアアアアツツ!!」

「切り札は見せるな…見せるとしたら更に奥の手を持って、だ。これが『人間』の力だ!」

「おのれ…おのれえええツ!!! 後少しだったのに…! 許さんぞ…貴様だけは許さない! 我が最後の力をもって貴様を滅ぼしてやる!!」

!!!

その瞬間、奴の身体から凄まじいエネルギーが全身から放たれた！

「くっ！！」

奴の力が全方位に放たれた為、逃げ場がない！！
 “聖光氣”を前面に展開して、必死に防御する！！

……何とか防御に成功した。奴は……“聖光氣”と先程の力で消える寸前だ。

——ここまで、か……。しかし、貴様は『この世界』をもうどうする事も出来ない……。無様に『この世界』で朽ちるがいい……。そして、我の最後の攻撃は“呪い”だ……。貴様の願いは叶わない。最早少ししか効果は無いだろうが、貴様には丁度良い……。哀れな“救世主”よ……。貴様の未来は暗いなあ……。ああ……実に……悲劇だ……！——

奴は、そう笑いながら言うと言えていった。だが、私にはその“呪い”は感じない。世界が守ってくれたか、奴の負け惜しみだろう。最後に私に一泡吹かせたかったか。

奴が完全に消滅した後、「世界は晴れ渡った」。

今までの滅びる寸前の気配からしたら、大きな違いだ。今や見る影も無くなった「神都」に、朝の光が差し込む。

奴の消滅した後に、鈍く光る緑の石があった。これを触れば戻れるのだろう。世界が私に用意してくれたのか。

しかし、帰る前に私にはまだやる事がある。この力を使って、この世界を再生する……！

このまま奴にいい様に蹂躪されて終わる結末など、私が納得出来ない！ こんなエンディングなど認めない！

だからこそ、希望は必要だ。：例え、失われたものが帰って来なかったとしても。

幸い、奴が滅び、その莫大なエネルギーは世界に還元された。星のエネルギーを吸収する奴もない。だが、人間も動植物すらも死に絶えたこの世界では遅かれ早かれ再び

朽ち果ててゆくだろう。だからこそ。私は「この力」で再生させる。今だけなら出来る。そんな気がする。

まずは、瞑想し、世界へとアクセスする。

この世界隅々まで意識を行き渡らせるイメージ……。まずは植物だ。奴から吸収した権能を使用して、世界中の岩などから様々な植物に「再構築」する！

…かなりのリソースを使ったが、無事に出来た様だ。私の細胞には植物の要素も含まれるから、これはかなり得意かもしれない。…そして今。私の周りにも、緑豊かな草原が広がっている。

次は、奴が変化させた「マネキン」や「汚物」だ。マネキンの方は、活動を停止しているし、汚物は凶悪な性質をやめ、ただの液体に戻っている。これを再び溶かして、元の姿に固める……！

……かなり厳しい……。時間がかなりかかる……。……！

………

…

出来た……。3日程かかった……。驚く事に彼らはあの状態になってもまだ生きていた。だからこそできた事だ。奴の悪趣味が救いになった。そして、奴に汚染されたものは全て元に戻った。動物も虫も……人間もだ。そして……例の女性も再生出来た。……良かった……。

普通の世界からすれば、動物や虫、人間の数は余りにも少ない。そして、人間は愚かだ。私もよく分かっている。少ない資源を奪い合い、かなりの確率で再び滅びかけるだろう。だから私は最初に生やした植物に「おまじない」を掛けた。

植物の近くに居れば、争い事もなく、他者への労りの気持ちも持つて、心穏やかに過ごせる、というおまじないだ。大きな効果はつけていない。ただ、少しだけ感じる程度だ。後は、彼等の努力次第だ。

しかし、同時に人間は強かだ。どんな苦難にあつてもきつと乗り越えていけるだろう。一度は滅びてしまったが、今度こそは大丈夫と信じたい。

私のここでの役目は終わった。世界も私の後押しを全力でしてくれたのだろう。でなければここまで出来なかつた。そして……「聖光気」も微妙になってきている。……「奇跡」を使い過ぎたか、別の場所に行くからかは分からないが、「この世界」との接続が

切れかかっている、という事だ。

だが、それでいい。私は「ここ」の住人じゃない。私には帰る場所があるのだ。元の世界で再び接続しなおせばいい。

この世界も未だギリギリの状態だ。だけど、きっと……必ずや復活する。

だって、世界はこんなにも美しいから。

私は戻ろう。私の場所へ。

また再び闘いが待っているだろう。

だけど、きっと帰れる。そして、「この世界」もきっと再生出来る。

それが、私の希望だ。



「はいはいは…」

気づいたら、私は瓦礫の上にあった。私は“神の呪い”であの化け物になり、最後は汚物に成り果てた筈……。これはどういう事かしら……。周りを見ると、辺り一面に緑の植物や花が咲き誇っている。

「夢……？」

それから、私は服を探して着て、周辺を見て回った。何人か人を見つけ、集まった。話を聞くと、周りには今迄姿を消した動物や虫もちらほら見られたみたい。夢かと思つたけど、夢じゃ無い。

どうやら、「神」はいなくなつたようね。

元聖化隊の人も見つけた。一瞬怒りが沸騰しそうになつたけど、この期に及んで殺し合いをする事もないわね……。と冷静になれた。不思議なことに、私の怒りはすぐに収まり、穏やかな気持ちになれた。元聖化隊も、今迄の事を涙を流しながら必死に謝つていた。周りの皆も、それを許していた。そもそもあれは、口にするのも嫌だけど、「神」、のせいだからね。

でも、こんなに穏やかな気分になれたのは本当に初めてかもしれない。

今迄は、「穢れ」から逃げ、聖化隊から逃げ、「神」を憎む……。それしか無かつたから。私は道路一面を覆う草原に寝つ転がる。

ああ、いい気持ち。これからはどうなるかわからないけど、何とかなりそうね……。

その時、身体を覆う草から、微かに彼の気配を感じた。

……!!

「彼よ!! 彼がやったんだわ!!!」

私は飛び起きて叫ぶ。周りの人はギョツとした顔をするが構わない。

「私が会った最後の人……私の願いを叶えてくれたわ! きつとそうよ!!」

なんだなんだ、と皆が心配して集まってくる。でも思考は止まらない。きつと「彼は、あの絶望的な世界をたった1人で闘い続け、ついにあの「神」を殺したんだわ……! あんな孤独な世界で、1人ぼっちで……どれだけ苦しかったでしょう。どれだけ辛かったでしょう。それでも、「彼」は勝った……!

今思うと……不思議な人だった。……不思議な力も持つ人だった。金髪で碧眼で、若いのに達観した様な表情をしていた人。

私は伝えなければならない。この世界を救った「彼」の事を。私達が無事なもの、こ

の植物も、きっと「彼」がやったんだと思う。
なのに、「彼」を知っているのは私だけ…。

そんなのって、あんまりよ！

だから私は伝える…。知ってる限りの「彼」の事を。

絶望あふれる「この世界」に“希望”を齎した「彼」の事を。

それが、これからの私の役目よ。

5 1、暗黒大陸再び

緑の石に触れると、私はまた意識が遠くなり、気づいたら荒野に1人佇んでいた。……戻って、来れたのか？

手には、先程の石が握られていた。もう鈍い光は放っていない。ただの緑色の石だ。

…やはり「聖光気」ができない…。あれは「あの世界」だからだ。急ぎ、こちらでも検証する必要がある。だが、コツは挿んでいる。再習得は前程時間がかからないだろう…。

と、思っていたら、荒野の地面から複数の巨大な蠍が飛び出して来た！ しかも強力な念使いだ!!

やつぱりここは暗黒大陸だ！ …嫌な納得の仕方だが、間違いないだろう。

まだまだ、「聖光気」とのギャップで身体が上手く動かないが、何とか動かして鋏攻撃や突進を躲す！

しかし、何匹かの蠍が振り上げた尻尾からレーザーが飛び出してきて、その一部が左脚を掠った。

不覚……！ 以前ならこんなのは喰らわなかったのに……！

しかも、そこから徐々に石化していく……！ くそッ！ 石化レーザーか？！

【完全適合】！ 適応しろ！！

私の足が止まったのを確認し、蠍達は一斉に尻尾を振り上げる！ 不味い！ 全力で防御……！ 急所さえ守れば適応出来る！ そう思つて腕を上げてレーザーを防ごうとした瞬間

レーザーの前に裂け目が生じてそこに吸い込まれた！

何が起きた！ 他の乱入者か……!? しかし、今は他に敵の気配は感じない。蠍共も困惑している。そして、適応完了した！ 今がチャンスだ！ ようやく慣れてきた動きで奴等に接近し、“内浸透勁”を撃ち込む！ 殻のある奴にはコレが効果的だ。今のうちにたたみかけるッ！



ようやく、全部倒し終わった…。服はもう既に無い。“聖光氣”なら誤魔化せたが、今は使えないからな…。仕方ない。原始人スタイルに逆戻りだ。蠍の甲殻を切つて、繊維で繋いで…。と。

何とか形になった。やはり“聖光氣”の再取得は急務だ。若しくは服装問題の解決か。このスタイルだと、人間性が一気に下がった気がするからな…。

…それにしても、さっきのは何だったんだろう？ 急に次元の扉みたいな物が開いた気がするが…。やはり“この石”が原因か…？

と、考えて試しにオーラを流してみた所、緑の石がスルスルと形を変えて腕輪状になっていく…！ そして、私の右手に引き寄せられるかの様に装着された。また、それと同時に目の前に先程の裂け目が現れた。

…やはり“コレ”が原因か…！ 何だ、この裂け目は…!?

中を覗き込んで見ると…先程のレーザーが中から飛んできた！ 慌てて避けたが、恐

らく「コレ」は、次元の違う別空間を作り出しているのだろう。

先程のレーザーが存在していたのも、それが原因か。所謂時間の止まる「アイテムボックス」の様な物かも知れない。…検証が必要だが。

これは「あの世界」からのプレゼントか。だとしたらありがたい。しかもこの腕輪。ちよつとやそつとでは壊れそうに無いし、離れたら私を追跡して戻ってくる…。ありがたい。ありがとうございます。

あの後、試しに石や蠍の死骸を入れて検証してみたが、どうも私の推察で当たりらしい。良かった。これでハンターライセンスや例の香草も無事に収納出来る。あの闘いの時は流星に別の場所に隠して置いてから行ったが、これからはそうもいかないからな…。私の身体も半分以上消滅することはさらにあるし…。

とりあえず、「あの世界」に感謝しながらこの場を離れる。いつまた怪物共が襲って来るかわかったもんじやない。落ち着ける場所を探す為にも早めに退散しなければ…。



私はまた一人、荒野を歩く。それにしても、ここは何処だろう？ 以前、あれ程遠くに見えた巨大な木が、今や割と近くに見える。とは言え、それでもまだ遠いが。多分、全く違う場所に送られてきたのだろう。

…私は「あの世界」でおよそ3年程過ごしたが、こちらではどうなんだろう。時間も、時間も大幅にズレて無ければ良いが…。浦島太郎は勘弁だ。

とにかく今は、私に出来る事をするしかない。怪物共の襲って来ない、落ち着ける場所を探して「聖光気」を再取得しなければ…！

ここでは、気候も変化が激しい。灼熱の砂漠地帯かと思つたら、極寒の吹雪に変わったり、かと思えば雨の降り続けるジャングル地帯となつたりもした。更に放射線が撒き散らされている様な場所だったり、重力が異なる場所すらあつた。変化が余りにも急すぎる。そして、これらは移動する。おそらく中心には怪物がいるのだろう。こういった莫大な、自然現象すら操る奴らが。

極力避けて通ろうとしたが、何回かは遭遇して闘う羽目になつた。

具体的には、「熱」を操るジャガーの様な怪物。そして、「重力」を操る超巨大な巨人だ。

前者は「オートファジー自己貪食」をフル活用しながら何とか適応して倒したが、後者はキツかった。遭遇していきなり身体が潰された。そこからあまりの重力に復活も出来ない。巨人は私を潰して死んだと思つたか、そのまま去つていったが、重力は据え置きだった。私は時間をかなりかけて適応し、何とか脱出したが、もう2度と遭遇したくない。ちなみにジャガーの様な怪物は私自身の服になつた。蠍の甲殻よりはよつほど人間に近づいたが、着てみると自身の周囲の熱を適度な温度に調節する機能がある事が分かつた。

もつといい様に加工出来れば、非常に便利な物になるに違いない。帰つた時に加工してもらえる様に、残りの本体を収納した。倒した怪物は出来るだけ収納する様にしよう。

そうこうしながらも、安息の地を見つけようとしたが中々見つからない。あれからもう3ヶ月は経つたか。時間感覚も曖昧になるが、太陽の浮き沈みで何とかそうだと把握出来るようなものだ。しかし、ここでは何が起きるか分からない。その太陽ですら欺かれるんじゃないかと疑心暗鬼になる。

実際に、時空間が歪んでいそうな場所もたびたび見かけた。あんな経験はもうごめんなので、見つけ次第迂回して避けて通つた。

仕方なく、戦闘後や襲撃の隙間時間に瞑想しようとしたが、中々出来なかつた。当た

り前か。襲撃はひっきりなしだし、なんなら戦闘中に乱入してくる事もざらにある。そんな中で精神集中など出来よう筈も無い。何とかならないものか。このままでは、強い敵複数に消滅させられるか、強烈な呪いを喰らって死ぬ未来しか見えない。

今まで無事だったのは、強い概念攻撃が無かったからだ。あの「神」の様に。いや、あの巨人はそれに近かったが、物理現象の変化に近かった為に助かったようなものだ。早く落ち着ける場所を見つけねば…。



岩石が多い険しい森の中を移動していた時、“それ”を見つけた。私は普段探知はオーラ光子を使って行っている。これの方が向こうから発見されにくいからだ。いつもの様に慎重に進み、襲撃を躲しながら進んでいると、オーラ光子が岩をすり抜けた。敵か!?! と思って更に慎重に探るが、中は天然の岩の空洞になっており、中心には木と泉があつた。敵は居なさそうだ。

試しに石を投げると、それもすり抜けた。いくつか考えられる限りの実験をしたが…

どうやら罨は無さそうだ。

意を決して岩に触れると…感触がない。どうやらこれはオーラで出来た幻らしい。私を欺けるとは、相当高位な使い手だ。ただ、中には気配を全く感じない…。

そのまま岩の中に入ってみると、中の空間は静謐で、かつ神聖な雰囲気漂う。…こんな所があつたんだな…。木のそばまで行き、泉のそばに腰掛ける。

ああ…。こんな安らぎは久しぶりだ。思えばこれまで闘つてばかりだった…。少しだけ横になろう…。少しだけ…。

……………

ハッ!! どれくらい寝てた!? 空はあれから変わらず、周りも変化は無い。…参ったな。ここが平和な場所で良かった…。いや、平和だからこそ…か。

いつまでもここでのんびりしている訳にはいかないな。泉の水を飲んだら修行を始めるか。澄んでいるし、毒は無さそうだな。流石に無補給は堪えるしな…。

…
!!!

何だコレは!? 細胞が異常に活性化していくぞ!? 信じられん…。私には効果が薄い
いが、これは…若返り効果がありそうだな。しかも、尋常じゃなく強い…。恐らく、肉体
を最適な状態まで戻す事ができる様だ。しかも、その効果は限りなく長く保つ…。ある
意味不老の水だな。

これも“リターン”の一つか。こんなものを持ち帰れたら大騒ぎだな。まあ、“聖光気
”を再習得したら持ち帰る事も視野に入れよう。

さて、漸く目処がついてきた。早く帰れる様に頑張らねば。

52、再取得

あれからどれ程の時間が経ったか……。1年の様にも思えるし、5年の様にも思える。最初は簡単かと思つたが、かなり苦戦している。理由は「この世界」がデカすぎるためだ。

暗黒大陸を内包する様な世界だ。それもそうか。しかしそれで諦める訳にはいかない。

それに、時間感覚が狂うのは「この場所」のせいでもある。不思議な事に太陽は沈まらずに常にある。一定の気温が保たれ、実に快適な状態に保たれている。気を抜くと「ここ」で何もせずにいつまでもポーツとしたいぐらいだ。外の悪夢の様な状況からすると天国にも思える。

だからこそ、修行は捗るが、私も取得した後出られるか不安になった。ここは余りにも居心地が良過ぎる……。

しかし、そうも言つてられない。暗黒大陸に来てからもうかなりの年数が過ぎてし

まった。急がなければ。幸い「聖光氣」の取得も後僅かだ。焦って何とかなるものでも無いが、急がなければ。



出来た……！

本当に苦労した。「この世界」が膨大過ぎるからだ。だからこそ、同一するのが非常に難しかった。試しに、その辺の石を、ガラス製のコップに変えてみたら、簡単に出来た。この程度なら、リソース云々は無く簡単に出来るらしい。何せ、一部と言っても本当に極々僅かしか借りていないのだ。世界からしたら微生物に体液をほんのちよっぴり吸われる程度だろう。それでも以前より強い。ただ、これ以上力を借りると「世界の意思」とすら同化してしまい、「星の使徒」の様な存在になってしまうおそれがある為、これで十分だ。

漸くだ。漸く帰れる！

最後に挨拶をしておこう。〃〃〃には、やはり高次の存在がいる。取得するまでは気付かなかつたが、今なら分かる。

「出てきてください。お世話になった礼を言いたい」

すると、泉の中心から人の姿が浮かび上がり形を為す。……これは〃念獣〃……か？
いや、それよりももっと高次元な存在だ。なんせ自我を持つている。

「……まさか、久しぶりに探し当てた者が〃星の使徒〃だとは思わなかつたわ」

〃それ〃は非常に美しい女性の姿をしていた。薄い羽衣の様な衣装を着ている。

「まだそこまでいってませんよ。私は人間ですから」

「もうそこまでなつてれば大体同じよ……。残念ね……。ねえ、一応聞いてくけど、〃〃〃〃でずつと過ごす気はない？　〃〃〃〃はありとあらゆる苦難から逃れられる場所だわ。

貴方にとつても安らげる場所だと思ふわよ？　私も居るし」

「嬉しいお誘いですが……私には行かなければならない所がありますので」

「……たとえ、それが直ぐには叶わない夢だとしても？」

…何を言ってるんだらう。私の願いが分かるのか？

「……それでも行かなければなりません。『この場所』と貴女には大変お世話になりました」

「そう……分かったわ。数奇な運命を持つ人。貴方はこれからも苦難の連続でしょう。…でも、それでも、最後の最後に願いは叶う。だからこそ、『希望』は捨てないでね。私からも祝福をかけておくわ。もし、どうしようもなくなったら『ここ』において。鍵は渡しておくわ」

そう言うと、彼女は私にとても古い鍵を寄越した。…何の金属か見当もつかないが、何らかの念のこもったアイテムなのは間違いない。

「それは、『ここ』に繋がる鍵。どの扉からも繋がる。…またおいで。カームⅡアンダーソン」

「……私の名を……」

「これでも『神』、だからね。わかるわよ。私の名は『アレトウーサ』…。鍵は私を思い出しながら使つてね。ただし、一度きりしか使えないから使い所は良く考えるのよ」

「……何から何までありがとう。最後に少し水を貰つても？」

「構わないわ。それは『ここ』に来た人の特権。無限に湧くから気にしないで」

それならば、多少貰つておこう。私は近くにあつた岩石を頑丈な木の樽に変化させて水を汲み、蓋をした。

「お世話になりました。さようなら。『アレトウーサ』」

一礼をし、その場を立ち去ろうとすると、彼女はこう言つた。

「さようなら。強き人。貴方の運命が少しでも良きものになりますように」



さて、急がねば。私は「聖光氣」で浮上し、上空に飛び出した。あまり上に行くとも空の馬鹿でかいオーラを持つものから襲撃をくらいそうなので少し控えめに、だ。

…やはり見えない…。

周囲は地平線の先まで一面の大地が続く。もしや反対側に来てしまったか…？ 仕方ない。今ではあの天を貫く大木が唯一の目印だ。まずはあそこに向かおう。今ならそこまで時間もかかるまい。

しかし、遠目から見ただけでも浮遊大陸や浮島などが多数見えるし、奇想天外な地形、例えばどれぐらいの大きさかわからない巨大な穴も見える…。そしてまた、大地から山をも超える手が生えている。

…アレはヤバいなんてもんじゃやないな。どんだけの大かさだよ。絶対に近寄らないようにしよう。

浮いていれば襲撃もそこまでないだろうし、あつたとしても以前とは段違いだ。ヤバいのだけに気をつけて進もう。



途中で、浮遊島の一つに黄金の木の実がなる大きな木を見つけた。その木自体も輝いている。

少し気になって、その実に近づき実を握ろうと近づいた時、今まで影も形も無かった気配が背後から現れた！

相当デカイ…！

気配も、サイズもだ。

振り返って見ると、巨大な3つ頭の多頭竜がこちらを睨みつけている。迂闊だった！こんなに分かりきった罠に掛かるとは…。周囲はオーラの結界の様な物で閉じ込められている。逃走不可、か。向こうもヤル気満々だな…。

仕方ない。

全力で相手してやる!!

そこからは激闘に次ぐ激闘だった。先ずはその頭を落とそうとブレード弾で切つてやったが、当然の如く直ぐに再生した。しかも、切った切り口から溢れる体液からミニサイズのトカゲみたいな竜や毒蟲みたいなのが次々と発生して襲ってくる……!

なんて厄介な……! 切った首も似た様なのに変わって一気に多対一になってしまった。本体もチビも「神」クラスの強さだ……! しかもチビは消滅させないと更に増える。よってチマチマと潰していくしかない。

流星にこれだけの大群だと、何回か毒を貰ってしまう。そしてその毒は「呪い」クラスの毒だ。私は「聖光氣」で呪い系は無効化出来るが、肉体的なものはある程度は効果がある。何とか適応したが、どうしたものかと困った。これじゃジリ貧だ。毒や浸透効など色々試してみても、炎が有効だとやつと気付いた。

そこからは反撃が始まった。オーラに細胞を燃やした炎を纏わせて削るのだ。切り口が燃えると増殖しないらしい。よって、その炎オーラで再生させないように一気に削

り、何とか勝利を収めた。

オーラの結界が解け、再び浮遊島の木の前に立った。奴が結界を張ってすら島はポロポロになっていたが、不思議とこの木の周辺だけは全くの無傷だった。金色の果実を手取る。あんな奴が守つてると言う事は、相当な「リターン」だろう。万が一毒でも今の私は適応できるだろうからな。

……!!!

細胞が活性化し、その力が更に引き出される……！ これは……肉体とオーラが增強される!?

まさか……こんなのがあるなんて……。『聖光気』抜きの性能が更に1.5倍程になったぞ?! 凄まじい効能だ……。若返りの水といい、これといい、全くこの「リターン」は常識外れだ。

急いで2個目も食べたが、効果は無かった。一回切りらしい。まあ仕方ない。それで

も常識外れだ。そして味も凄まじく美味しい。幾つか貰っておこう。

木に大量に生っている実を、幾つか残して収穫する。

30個程取れたな…。まあ苦勞した価値はあった。帰ったらマイケルにもコツソリ食わせてやろう。

あれから結構な時間が経った。皆心配しているだろう。もうすぐ…。もうすぐだからな。

53、宿命の闘い

かなり近づいて来た。もう後僅かだ。しかし、そんな時に怪物に見つかってしまった。かなり気を使って移動していた筈だが、奴は突然現れた。

敵は超大型巨人だ。以前のは別個体のようだが、やはり相当な“力”を有している事が分かる。遭遇した時、全力で逃げようとしたが、次の瞬間、背後からパンチを喰らってバラバラになった。

……!?

全力で再生したが、一体何が起きた…!? と、思う間もなく再生した側から巨大な手で殴られまくって四散する事が続いた。

ど、どういう事だ…。動きが早すぎる…!! 喰らった瞬間に“内浸透勁”を撃ち込む

も、瞬時に移動され、追撃を許さない。これじゃどうしようもない。恐らく瞬間転移の様なものだ。しかし、転移する瞬間に「完全適合」（パーフェクトコンバート）が発動している！ 何らかの不具合が発生しているらしい。

とにかくこのままじゃ、いい様にボコボコになるだけだ。かと言って逃してくれそうも無い。逃げようとした瞬間に回り込まれて攻撃を受ける。私の動きが読めるのか!?! 耐えなければ…! 幸い何故か少しずつ「完全適合」（パーフェクトコンバート）が仕事をしてくれている。何とか活路を見出さなければ…!

その後、ひたすら巨人の猛攻をこの身に受け続けた。いくら躲そうとしても、次の瞬間には攻撃が目の前にくる。直前で避けようとしても次の瞬間には修正される…! どうしろってんだ!!

しかも相手は楽しくて仕方がない様な顔をしている。こんなちっぽけな人間を虐めて楽しいか!

とにかく即死しない様に抗うのみ…!

普通の人間基準で言うと100回以上は死んだ時、奴の動きが見える様になった。見えるだけだが。感覚としては、私は動けない中、奴だけ普通に動いて近づいて来る。攻

撃直前に私が動ける様になる、といった具合だ。対応しようとするともた動けなくなる。その間、奴は攻撃を修正する、といった具合だ。

…反則じゃないか。私はずっと認識出来ない概念的な縛りを受けていたわけだ。敵しいわけだ。だが、少しずつ動ける様になったぞ！

私がそうなった事で、奴もびつくりしているようだ。まだまだスローだが、対応できつつある！ やってみて分かったが、“これ”は一時的に世界を概念的に支配する能力だ。分かり安く言えば、少し世界からズレた上でその世界を自由に移動出来る。その為、物品には干渉出来ないが、あたかも“時が止まったかの様な状態に”なる。奴が物理攻撃オンリーなものもその辺に理由がありそうだ。

そうと分かったからには覚悟しろ！ 今までの分ボコボコにしてやる！

……しかし、残念な事にボコボコになってるのは未だに私の方だ。コイツ…格闘戦も強い…！

サイズ差とオーラ質の関係で浸透効も効果が薄い。奴のオーラが不思議な事に“聖光氣”に近いせいだ。それに、急所にも当てさせてくれない。そうなると純粹にサイズ差の問題になる。他のありとあらゆる攻撃も同様に当たらないし、効果が薄い。私と奴

の差は歴然としてる。もう自由に動けるのにこれだ。

しかし、その時天啓が走る……!

…逃げたら、良くない?

何故そこに思いつかなかったか不思議だが、思いついたら即行動! 顔面に向かって莫大な範囲の毒ブレスを撒き散らした!

咄嗟に顔を逸らしたが、少し残ったものが目に入ったらしい。叫び出し無茶苦茶に暴れ出す! 今だ!!

正に脱兎の如く逃げ出した。私だけでは“この力”はほんの少ししか干渉出来ないが充分だ。かなり離れた所で莫大な範囲の《円》が展開されたが、もう範囲外だ。ざまあみる。そのまま一直線に大木へ向かう……。



着いた。

デカイ。

デカイとしか言いようがない。

巨大な山脈サイズの木麓から、上は霞んで見えない程に。

さあ最後だ。後は木に沿って上昇し、そこから方向を確認して帰るだけだ。油断せず
に細心の注意を払っていこう……としたら、頭に声が響いた。

—— 珍しいな。ここまで来る人間がいるとは ——

…… 勘弁してくれ。もういいだろう？ しかし “声” はお構い無しに語りかける。

—— 久しぶりに楽しめそうな相手だ。我に付き合つて貰おう ——

そう聞こえた瞬間、いきなり私は何処かの山脈の盆地へと転移させられた。……
そつ。逃げ場を封じて来たか……

—— ヒトよ。ヒトの英雄よ。我は世界樹の守護者にして “天と地を覆うもの”
“宿命の闘い” “逃れられぬ死”。そして “終末の日に死を運ぶ者”。ヒトよ。
死にたくなくば抗え。我の試練を乗り越えて見せよ ——

すると、山肌の影から “それ” は現れた。姿形は黒いドラゴンだ。今まで闘つて来た
相手からすると、そこまでの大きさは無い。それでも巨大だが。全長で40メートルと

いった所か……。しかし、その禍々しいオーラは……山サイズだ。下手すると前の「神」に匹敵するぞ……。

こんなのと今から闘わなければならぬのか……。しかし、やるしか無い。

勝つて帰るのだ。必ず。



奴の攻撃は苛烈を極めた。吐くブレスはただの炎じゃない。何らかの念が込められている。恐らく「死」の概念だろう。その証拠に掠っただけでそこが上手く再生しづらい。これはもろに喰らったら即死だな……。普通なら掠っただけで即死だろう。だが「聖光気」と「完全適合」で適応しているからこそ死にはしない。

私は闘える!!

これまでの経験が私を強くした。奴の突進や尻尾にも同様の概念攻撃が乗っているが、全て躲せる！そして……「聖光気」の「外浸透勁」！お前みたいな奴には相当効

くだらう。どうだ…！

…効果は靦面だ!!

奴も苦しがつている！ 行ける！ と思ったところで思わず身体が止まる。奴が身も凍る程の“咆哮”をして来たからだ。

…この“咆哮”にも何か念がのつてるな。…“恐怖”、か。

すると、奴の莫大なオーラが更に増大した。…今まで《纏》で闘ってたのか…。するとこれが奴の《練》…だな。最早オーラが青白く発光している。

…だが、やる事は変わらない。今までと同じだ。

生きて、帰るのだ。

それから、極大のエネルギーの球に引き込まれかけたり、突如現れる隕石の様な念弾だったりを何とか躲して懐に潜り込み、何度も“聖光氣”をぶちこんだ。正直これ以外の攻撃が効く気がしない。効果は先程より薄いのが、効かない訳じゃない！ 例え通りづらくても重ねていけば、ダメージは増える！

本当に、あの巨人から“時止め”を適応しておいてよかった……。でなかったら躲せる気がしない。そうこうしている内に奴も「キレた」。

凄まじい“咆哮”の後、大地が振動し始める。

辺りからマグマが吹き出し始めた。大地は割れ、辺りはマグマに溢れる地獄の様な景色となる。そして奴は一旦マグマの中に引っ込んだ。

出て来たのは……

紅く染まった奴の姿だった。

…第二形態か……。さつきよりも更に禍々しいオーラになっている……。奴はマグマから這い上がって来ると、いきなり空中に大量のマグマ弾の様な隕石を精製し、落として

来た。さつきと違うのは更に別の概念も乗つてゐる事だ。僅かにでも触れると、消えない炎が纏わりつく！ 急いでその部分を切り落とすが、切り落とした部分は即燃え尽きる。：敵しいな。案の定、奴に「浸透勁」を打ち込んだらその部分が燃え始めた。クソつ。仕方ない。オーラでやるしか無い！

少しずつ適応し、少しずつ炎に対抗出来る様になると、後は先程と同じだ。何とか躲して打ち込む。たまに避けられない時は周囲のマグマを金属に錬成して盾にしたり、念弾で逸らしたりして闘った。長く険しい闘いの末、奴は漸く動きを止める。

———ヒトよ。よくぞここまで練り上げた。最後の試練だ。耐えてみせよ———

おい、やめろ。まだ上があるのか？ もう十分だろう…。そして、何故オーラが消え出す？ まさか……！

ゴゴゴゴゴゴ……

コイツ……世界に接続した!!

奴の身体が白く発光する!!! これは……“聖光気”!

馬鹿な……! 何故お前が出来る!?

……
奴の周囲に白い雷が舞う。“あれ”は触れちゃ駄目なやつだ。何とか躲さなければ

奴は雷を伴い、私に迫る! 動きも先程とは段違いだ!

奴が雷を操作し、複数の雷が私を襲う。

“時よ 止まれ!”

よし、止ま……らない! 馬鹿な! それすら貫通するの……か!?

回避行動を取っていて良かった。半身は消滅したが、何とか残ったぞ!! だが、復元
しない……!

……駄目だ。さつきより強い概念が乗ってる。くそっ！ 何とか躲しながら適応するしかない……！

奴は容赦なく次弾を放って来る。私は半身で飛び回りながら回避するが、この雷は一定の予備動作がある。放つ寸前にそれを見切って避けるしか無い！

命を燃やせ！ ここが正念場だ！！

右！ 右！ 左！ 前！

躲す！ 躲す！ 躲す！ 躲す！

必死に避ける！ 当たったら即消滅だ。そうやって躲す内に、パーフェクト・コンバート【完全適合】が適応してきた。未だ気は全く抜けないが、身体が再生した事で避けやすくなった。とは言え、攻撃チャンスが全く無い。

適応完了するまで耐え切る！

膨大な数の雷やブレスや攻撃を躲した果てに遂に適応完了した。

漸く、漸く当てられる！　しかし、雷を我慢して当ててみたが、やはり同じ。聖光気……！　殆ど効果が無い……！　毒攻撃は多少は通るが、それでも効果が薄い。……出力が足りないせいだ。奴を倒すには今以上の出力がいる……！

あまりやりたく無かったが仕方ない。覚悟を決める！！

世界よ！　奴を倒せるくらいまで力を貸せ！

ゴゴゴゴゴゴ……

その瞬間、莫大な量の力が流れ込む！　そして……ドンドン意識が曖昧になってゆく……！　“星の意思”が主導権を強めて来ているからだ。

まだだ……まだそうなる訳にはいかない……！　自分勝手なのは重々承知！　だが、最後迄耐え抜け……！！　今一度、私の“意志”を強く持て！

「私ハ!! 私ノママ帰ル!!!」

奴に匹敵するオーラが身体を覆う！ だが、意識はまだ私のままだ！ 長くは保たない。これで決着をつける!!

ドゴオツ!!!

初めての有効打！ 奴も痛みで咆哮をあげる。

ズギヤツ!!!

奴もオーラの籠った腕で反撃してくる。こうなると、もう細かい制御なんて出来ない。お互いの特殊能力も効かない。後は純粹な殴り合いだ。

一撃毎に大気が震え、地面が鳴動し、マグマが吹き出す。私も身体が削れたり、腕がれたりするが、奴の堅殻も剥がれ落ち、血の様な体液が吹き出す。

壮絶な削り合いだ。

だ·が·ま·だ·足·り·な·い

もつとだ！ もつと寄越せ!! ギリギリになるまで!!!

そして…遂に奴を上回った。私の意識はもうあと僅か。既に闘いはオートに近い。私は、必ず戻って来れる様に最後の意識は手放さない。だが…もう限界だ。もう保ちそうにない。自分ガ自分じゃナクナツてユク……。早く！ 早くタオレロ!!

ダメダ……。モウ……。

その時、脳裏に家族の姿が微かによぎる

.....

.....

.....

…ワタシハ、マタアキラメヨウトシテイタ

アノトキから、アキラメナイトチカツタじやナイカ

ここマデ、ここまでキテあきらめテなるモノか!!

私ハ!! 必ず帰るノだ!!!

これで…終いだ!!

バツゴオオオン!!!

私のパンチが奴の頭部に突き刺さり、角が折れ、血が吹き出した。そして…

ズウン…

咆哮をあげながら、奴の巨体が倒れ臥した

や、やっと…勝つ…た…

すぐに“聖光氣”を解除したが、反動が重い……。人間の器ではこの力は重過ぎた。しかし、何とか自我を保てただけでも上出来かもしれない……。もう意識が朦朧としてきた……。駄目だ……。こんな所で気絶する訳には……

無情にも、私はその場で意識を失った。

54、願い

………

意識が覚醒する。ハッと飛び起き、戦闘態勢を取る。ここはどこだ？ 私はどれぐらい眠っていた!?

辺りを見回すと、巨大な世界樹が目前で聳え立っている。…良かった。戻って来れた。…。山をも超える太過ぎる幹と…黒いドラゴン。

………
!!?

何でまだ居るの!?! 倒したよね!?! そう思っていたら、奴が話しかけてきた。

——見事だ。ヒトの英雄よ。実に見事に我を撃ち破った——

「……………もう闘わない？」

——貴様が望むなら良いのだぞ？ 我も久しぶりに血沸き肉踊る闘いだった。

まさか我がヒトに撃ち斃されるとはな——

「闘いはもういい。…それで…アンタは何でここに居る？」

——無論、我を斃した英雄に褒美を与えようと思つてな——

「それは…選ばせてくれるのか？」

——我の出来る範囲で有れば良からう——

「ならば……………私は帰りたい。メビウス湖の中央の大陸に返してくれ！」

——そんな事でいいのか？——

「それでいい。それ以上は望まない」

——良かろう…：貴様の願いは叶えてやる。だが、我を斃した者にそれだけでは余りにも狭量。故にこれをくれてやる——

というと、奴は私の目の前に黒い球体を浮かせて見せた。…何やら吸い込まれそうな色味をしている。

しかし…：これをどうしろと？

その瞬間、球体は形を黒い腕輪に変えて、私の左腕に収まった。そして…：気付いたら服を着ていた。

黒いスーツだ…。黒シャツ、黒ズボン、黒ネクタイ、黒ジャケット…。それに黒い手袋や靴下、靴、帽子までついている。確かに私はもう全裸に腕輪というスタイルだからありがたいが…。

——それは防具だ。我の一部を使っておる。破損もしないし念じれば着脱も自由自在だ。…ヒトが全裸では心許無かろう——

「…変な機能はついていないだろうな」

——望むのならば付けるが…貴様には必要ないだろう——

「…ならばありがたい。では、帰らせてくれ」

——よかろう。…その前に一つ。貴様の運命に妙な気配がついておる。消してやるから動くなよ——

——と言うと、ノータイムで私にブレスを放ってきた。もうちよつと猶予をもてよ！…しかし、熱くない。そして、私の後方で小さな叫び声が上がった。

——これでよし…では貴様の願いを叶えてやろう…『フレースヴェルグ』！ 見ていただろう！ 姿を現すがいい！——

一瞬、静寂が起きるが、次の瞬間に凄まじい念の圧が上空から迫って来る。

——フハハハハ!! これは愉快! 愉快! 貴様がヒトに敗れるとはなあ! 『二—ズヘツグ』! ——

…巨大な驚か。このドラゴンと同じぐらい強いぞ。

——このヒトの英雄は強かった…。良き闘争だったぞ——

——煽りも効かんか。詰まん。まあいい。良きモノが見れたからな。して、この人間を送れば良いのか? ——

——その通りだ。我は海のアイツに嫌われておるからな——

——フン。貴様の受けた願いは貴様が叶えろと言いたいところだが……それなら仕方ないか。承った——

—— 恩に着るぞ。『フレースヴェルグ』 ——

—— 貴様の為では無い。いいものを見せてくれたヒトへの礼だ。ああ、これで100年は楽しめるな ——

—— いいからサツサとしろ！ ——

—— おお怖い怖い。ではヒトよ。乗るがいい ——

そう言って、大鷲は私に背中に乗る様に促す。私もそれに従った。

—— しっかり掴まっておれ ——

次の瞬間には、凄まじい勢いで飛び出した！ もうあんなに離れてる…。あつと言う間に着きそうだ。いよいよだ。いよいよ帰れる！

遠くから、——貴様の運命に幸あらん事を——と言う声が聞こえて来た。



あつと言う間に暗黒大陸の沿岸付近まで着いた。これまでの苦労は何だったのかと言いたいがらいだ。しかし、そこで問題が起きた。

——ヒトよ。少し面白いものを見つけた。寄り道するぞ——

と言って、沿岸沿いに進路を変更し始めたのだ。ちよつとフリーダム過ぎるだろう！

——怒るなヒトよ。貴様と同じヒトを見つけたぞ。貴様も見ていけ——

……!!?

人間が!? こんな所で彷徨っているのか? まさか…生き残りか!?

—— チツ。すばしっこい。転移させるか ——

大鷲の背中に現れたのは、黒い長髪でゆったりしたフードとコートが合わさった様な服を着た人物だ。…誰だ?

「クソツタレ! …超越種」に見つかったか……つて、誰だオメー!!」

—— 珍しい。コヤツもヒトにしては中々の者だな。我が名は『フレースヴェルグ』。空を統べる者なり ——

いつの間にかミニヒヨコみたいになって、我々の近くにフレースヴェルグ? が来た。大鷲はそのままだから念獣みたいなものか?

「はくつ。ここに來てえらいのに捕まっちゃったなあ。油断はしてなかったんだがな…で、アンタは？」

「…カームⅡアンダーソンですよ。人の名前を聞く前に自分の名前を教えてほしいですね」

「あーそうか。もう長い事人と関わって無かったから忘れちゃってたよ。スマンスマン。俺はドンⅡフリークスという。よろしくな」

!!

——しかし、良く1人で生きておったな。そんなに弱つちいのに——

「嫌味か！ 確かに俺はお前らに比べると弱つちいが…俺には特殊な能力があつてな。そいつのおかげよ」

「いや…謙遜してるけど、この人も十分強い。『聖光氣』を使わなかったら互角だろう。」

「しかし、そのアンちゃん。オメーは強いな。」

「まあ…鍛えられましたからね…。ここで」

「何？ まさかとは思うが、出会った奴と全部闘ったのか？」

「……そのまさかですよ」

「…お前…良く生きてたな。フツー死んでるぞ」

—— 此奴は世界樹の『ニーズヘッグ』を斃す程の強者だぞ ——

「マジかよ…。最早 “超越種” じゃねえか…。で、同じ “超越種” 同士で何してんだ？」

—— 此奴は帰りたいらしいからな。奴を倒した報酬よ ——

「オメー今更あんな所に戻って何すんの？ はつきり言うけど詰まらんぞ？」

「家族が待つてるんですよ……だから帰らなきゃ。随分と時間が経ってしまいました」

「……そつか。まあ家族は大事だな。んで、いつ戻ってくんのか？」

「一生来ませんよ！ こんな所！」

—— 勿体ない…。貴様程の力を持つ者が ——

「…俺も同じ意見だぜ。勿体ねえ。世界はこんなに広いのに」

「私には地獄にしか見えませんでしたよ…」

「なぐに言つてやがる！　こんな楽しい所はねえぞ！」

「大体貴方の書いた本の所為でえらい目にあつたんですからね！」

「お、アレ読んだのか！　もうすぐ『西』も出来るぞ！」

——　ほう。面白そうだ。少し読ませてみる——

「いいぜ…メモだがな。ほら。これだ」

フレースヴェルグの分身？　は小さな身体で器用に本を捲り始めた。

——　中々面白いぞ。ヒトよ。少し貸してくれ——

「そうしたいのは山々だが…まだ後ちよつと書いてねえんだ。…もし良かったら一緒に行くか？」

——それはいい考えだ！ ヒトよ。付き合ってやろう——

「へへッ。悪いね」

すつかり意気投合した2人（？）。ドンさんなんかホントに悪い笑みを浮かべてる。多分ロクな事考えてない。だが忘れて貰っては困る。

「先にこっちの用事からですよ。『フレースヴェルグ』さん」

——ん？ ……おお！ 忘れとらんぞ！ 先にそっちだな。わかってる、わかってる——

……絶対忘れてたな。全く……。もう遠回りはゴメンだ。その後、私たちはそれぞれの旅の話をした。ドンさんの話はとても魅力に溢れていて夢があった。智略を尽くしてダンジョンを攻略して凄いいお宝を手にした話とか、知性を持つ怪物との手に汗握る交渉の話とか。内容は多岐に亘った。

私もフレースヴェルグさんも暫しの間楽しく聞き入った。話し方も非常に上手い。頭がいいんだろうな。…しかし、とても同じ大陸を旅したものだとは思えないな…。彼の怪物達の躲しかたもとても参考になった。もう使う事はないだろうか。

代わりに私の話を聞いたドンさんはドン引きしてた。「お前さん…本当に良く生きて来れたな…。だからこそその力か」と言っていた。フレースヴェルグさんは妙に納得してた。

そうこうしながら楽しく過ごしていたら、もう限界海峡線に着いたらしい。巨大な門が見える。

——何をしに来た。『フレースヴェルグ』よ——

——久しいな。『リヴァイアサン』。何、ちよつとした届けものだ。人間界までは行かんよ——

——貴様の話は信用ならんが…乗ってる者達を見ると、どうやら本当らしいな——

——相変わらず過保護だな。そろそろ解放したらどうだ？——

——まだまだ、ヒトは弱い。偶に例外があるぐらいだ。もう少し力を付けねば、なす術もなく蹂躪されるだろう——

——それが過保護だと言うに……。まあ良い。議論はまた次の機会にしよう。1人は“我等”を斃した者だ。その報酬でな。通してくれんか？——

——良かろう。…2人とも久しいな。特に貴様はヒトの進化の可能性を見せてくれた。ここを通る価値もある。貴様ならこれからいくらでも通してやろう…。して、もう1人はどうする？——

「俺はもうちよつと旅を続けるぜ。旅の道連れも出来たしな」

——それもまた良かろう。では、通るがよい——

門が開き始め、我々は其処を通り抜けた。もうすぐだ…。



「しかしよお。コイツを届けてからの話だが、お前さんそんな凶体じゃ碌に探索も出来んぞ？ どうすんだ？」

——馬鹿にするでない。貴様達ヒトの大きさに変化するのは我には容易い事。それならば良かろう——

「そつか…それならいいな！ さて、どっから探索するかねえ！」

何やら今後の話で2人は盛り上がってるな。しかし私の頭は帰る事で一杯だ。もう10年近く経ってしまった。流石に家族も諦めているだろうな…。なんて謝ればいいのか…。

そうこうしてると、フレースヴェルグさんが止まった。着いたのか？

——ヒトよ。我はここまでだ。後は自分で行くがいい。このまま真っ直ぐ行けば着くぞ——

「ありがとうございます。フレースヴェルグさん。とても助かりました。ドンさんも急に付き合わせてすみませんでした。そして楽しい話をありがとうございます」

——気にするな。我も楽しみが増えたからな——

「俺も気にするこたあねえ。また『西』を出したら読んでくれよな。……本当にまた来る事はねえのか？」

「……私は“人間”として生活したので。それが私の性分に合ってます」

「……お前さんは真面目だなあ。まあ気が変わったらまた来いよ。会えたら一緒に旅しようぜ。……最後に言っとくが、“人間”はどんな状況でも、気持ち一つで楽しむ事が出来る。『新大陸』なら尚更だ。珍獣・怪獣、財宝・秘宝、魔境・秘境……そういう“未知”

のモノに“人間”はどうしても惹かれるモンだ。すぐに俺達の後追いも出て来るだろう。止められねえのさ。そう言った冒険心って奴はよ…。だからこそ、お前さんも、もつと人生を楽しめ。あんまり真面目ばかりだと息が詰まっちゃうから…。人生の先輩からの有り難い言葉だ。覚えとけ」

「……分かりました。それもまた“人間”というものですな。人生を楽しむ…。覚えておきましょう」

「ガラにもなく、クサイ事言っちゃまった。じゃあまたな」
「ありがとうございます…。機会があるかは分かりませんが…また」

——話は終わったか？ では行くぞ。さらばだ。ヒトの英雄よ——

そう告げて、2人（？）は戻って行った…。去り際に

「おい、そういえば『ニーズヘッグ』だっけ？ ソイツに報告に行くんだろう？ ソイツ

も連れて行けねえか？」

——その発想は無かった！ それは実に面白そうだ！ 奴もヒマしてるだろう。一緒に連れて行くぞ！——

「いやあ、実に楽しい旅になりそうだな！ これからは奥地も探索してみようかねえ……」
——それよりも、さっきの話を続きを聞かせろ——

………そうして2人(?)は去って行った。実に楽しそうだ。……楽しむ、か。確かに久しく忘れていた感覚だ。帰ってひと段落着いたらまた旅をするのも悪くないな。まあ暗黒大陸にはもう二度と行かないが。

さて、本当にいいよだ！ 我が家まで後少しだ。

思えば長い、本当に長い旅だった。

もう駄目かと思う事も何度もあった。

だが、そんな私を救ったのは

“家族への思い”だった。

だから、今私の胸は高まっている。

例え、身体が“人間”とは少し異なるモノになってしまっても。

私は、“家族”に会いたい。

どうか、皆が無事でいますように。

どうか、私を暖かく迎えてくれますように。

それが、私の……願いだ。

帰還編

5 5、帰還

その日、各国に滞在するシーハンターやUMAハンターの複数がそれを目撃した。

曰く、「光る人間大の物体が」、「超上空」を「目で追えない程の高速で」、「ヨルビアン大陸の方向へ」向かった。と。

目撃したハンターは即座に調査を開始した。しかし、結局は正体が掴めずに終わった。それが、ヨルビアン大陸近辺で突如として姿を消したためだ。中には追跡を専門とする念能力持ちもいたが、不思議とそれも効果がなかった。

後にそれぞれの情報を擦り合わせた所、全てが同じ特徴を示した。事の顛末はハンター協会に報告され、事態を重く見たハンター協会はただちに調査を動けるハンターの多くに依頼した。

なぜなら、それが禁忌である方角から来たためだ。

しかし、それでも調査は難航し、遂に打ち切られる事となった。ハンター協会会長は事態を重く見て、ヨルビアン大陸全域に警戒するよう呼びかけたが、それからは特に動

きも無く、その後警戒し続ける事で終息を宣言した。同時に何かあった場合には即座に動ける様な態勢を整える様に指示して…



ここは…何処だ？

私は確かにヨークシンに着いた筈だ。

だが………ここは違う…

何故前世の様な街並みなんだ…

まさか……いつの間にか私は異世界に来ていたのか？

いや、そんな筈は無い。だって面影がある。街並みや、道が。

とにかく探そう。微かに覚えている道を頼りに…



ここが…私の家の筈だ…。家だった筈だ……

家の場所に巨大なビルが立っている。

思わず、フラフラとそのビル内に入る。中は清潔なフロントで、受付となっていた。

まさか……

私は本当に浦島太郎になってしまったのか……？

そのまま受付に近づくと

「いらつしやいませ。株式会社『アンダーソン・ファミリア』へようこそ。本日はどう
いったご用件でしょうか？」

!!?

『アンダーソン・ファミリー!』? それはマイケルの能力名じゃないか!

「……すみません。こちらの会社の概要を教えてくださいてもいいですか?」

「は、はい。分かりました…。こちらは各国の輸入物品を取り扱う会社となっております。『アンダーソングループ』直下の会社で、輸入物品取り扱いの先駆者として、ヨークシンを中心に世界規模で活動を行なっています。詳しくはこちらの概要が書いてあるパンフレットをご覧ください」

受付のお姉さんからパンフレットを貰った。後で読むとして…

「ありがとうございます。……最後につかぬ事をお聞きしますが、今日の日付けを教えてください。忘れちゃって…」

「今日は9月2日ですよ。あちらにデジタルで表示されています」

見ると、本当にデジタルで9月2日となっている。しかし、その前の数字が気になった。

「あの、日付の前の数字は？」

「年号ですよ」

私は目の前が真っ暗になった。

数字は1998年を示していた。



そこからは私もあまり記憶が無い。気がついたら公園のベンチに腰掛けていた。

……あれだけ苦勞をして、漸く帰って来れたのに、待っていたのは230年近く経っていたという事実だった。もう家族は間違いない無く生きてはいないだろう…。

……私が何をしたと言うんだ！　こんなのって……こんなのって……！　あんまりだ！！　どうしていつもこうなる!!!　いつも希望を持ってたと思つたら絶望に突き落とされる……。これも私の罰なのか……？

瞬時にありとあらゆる手を考えたが……無理だ。私は時間を停止させる事は出来ても、過去へ遡る事は出来ない……。時間は不可逆だ。いくら私がこの星で極限に近い力を持っていたとしても、それは「宇宙の創造神」のレベルだ。どれだけ強くなつたとしても出来そうに無い…。

私は……これからどうしたらいいんだろう…。



どれぐらい「そう」していただける。頭を抱えながらベンチに座っていたが、誰かに話かけられた。

「あのお。大丈夫ですか？」

顔を上げて発言した者を見る。その人物は少女の姿をしていた。ゴシッククロリータの様な服を着た少女だ。

……しかし、ただの少女ではないな。強力な《纏》だ。最後に見たマイケルとほぼ同格か、より格上だ。また、重心の位置や呼吸、筋肉の動きから推察するに、相当鍛えている事が分かる。そうなると見た目の年齢や外見は当てにならないな。おそらく擬態だろう。

「…なんでもありませんよ。少し悩んでいただけです。ご心配なく」

「もしよろしければ、そのお悩みを聞かせて貰えませんか…?」

両手を前で組み、キラキラした眼で続けてくる。…グイグイ来るな。何故だ？ 私は今《纏》すら解除している。更に一般人レベルに見える様に大き過ぎるオーラは自然に溶かしている。これならバレる事はまず無い筈だが。

この女性は十中八九ハンターだろう。「今」、ハンター協会に見つかるのは得策とは言えない。

とりあえずうまく躲すか…。

「いえ、本当に大丈夫ですよ。ご心配していただきありがとうございます。では、私はこれで」

そう言つて立ち去ろうとしたが、

「待つてくださいい！ 私はビスケットⅡクルーガー。こう見えてもハンターです。私なら貴方の悩み事も解決できるでしょう！ もし気が変わったらこちらに連絡をくださいい！」

そう言つて電話番号の様なものが記載されている名刺を渡して来た。：やたらキラキラしてるな。ダブルハンターか…。厄介な人物に目をつけられたものだ。正直ダブルハンターにはいい思い出がない。しかし、ビスケットⅡクルーガー…どこかで聞いたことがあるような…。まあ後だ。

「わかりました。その時が有れば連絡しましょう。では」

「待つてくださいい！ 最後にお名前だけでも…！」

「カーム。カームⅡアンダーソンですよ。お嬢さん」

そう言つて私はその場から離れた。…まだ視線を感じる。疑われて無ければよいが…。



凄い……！ 凄い原石を見つけた！ ジジイの調査依頼でここに嫌々来てみたけれど、本当に来てよかったわさ！ アレは間違ひなく超一級品!! 上手く隠してたけど、あたしの目は誤魔化せない。動きを見ればわかる。念能力こそ無かったけど、それが無くても極限まで鍛え抜かれた肉体！ どの様に鍛錬を積めばあなるか分からない！

あの一瞬の油断無い視線の動き……。どれだけの修羅場を潜つて来たのだろう。仮にあたしがあの場合で全力で不意打ちを仕掛けたとしても、即対応される筈……。そのぐらいのポテンシャルを感じる。恐らく体術だけなら世界のトップクラスに匹敵する!! どのカテゴリーにも属さない、唯一無二の特徴を既に持っている。それは天からの贈り物。まさに幻と言われる「ブループラネット」!!

念能力という仕上げコーティングによって、どれ程の光を放つか分からない、至高の輝きが誕生する！ ほんの少し磨くだけであたしすら……いえ、ヘタしたらあのジジイすら凌ぐ程の力を持つ可能性がある……！

あの若干違和感を覚えるオーラは、もしかしたらもう掴みかけてるかもしれない……！ だからこそ早く正しい方へ導きたい！

ああ：なんて素敵！ 早くそれを見てみたい！ これはチャンスだわ。繋ぎは取った。名前も聞いた。後は連絡を待つしか無いのが残念だけど、ここで活動していればチャンスはまだあるわね！

うふふふふ……。楽しみだわ……。絶対に逃がさないわよ！ 覚悟しなさい。カーム
|| アンダーソン君……。



厄介なのに目をつけられた以上、ここどうかうかしてる訳には行かないな……。正直まだショックから全然立ち直れてない。だが、今は出来る事をやろう。まずは家族の事を確認する。確認した上で私が前に進めるかどうか分からないが。

だが、やるしかない。

私には今「何も無い」。230年も経てば当然だ。唯一私を証明するのは、このハン

ターライセンスだ。だが、誰も信じないだろう。寧ろ信じた方が不味い。

またあそこへ行かされるかも知れない。絶対に行かないが。しかしそうでなくても非常に面倒な事になるだろう。私は安らぎが欲しかった。

家族と過ごす、「人間」としての安らぎが…。

家族との安らぎが得られなかった以上、せめて、せめて「人間」としては過ごしたい
……。

だから、まずは地盤を固めよう。

私の実家はマフィアだった。しかもそこそこ大きな、だ。そして、マイケルがいた以上、潰される事はまずないだろう。「あの会社」がいい証拠だ。もしかしなくてもあれは大規模なフロント企業だろう。

気が進まないが、その辺のチンピラを捕まえてそこから辿って行こう。そうしたらマイケルの子孫にきつと会えるだろう。

今の私には、
それだけが心の寄り処なのだから……

56、マイケルの足跡

ヨークシンをナワバリにするマフィアの間で、ある噂が流れた。最初は末端の構成員の与太話かと思われていたが、それは次第に上層部まで広がっていった。

内容は、全身黒づくめスーツの若い男が、末端の構成員を捕まえてとある人物を探っている、という噂だ。

それだけならば特に何も問題は無かったが、問題は探している人物にこそあった。ソイツはよりによって「アンダーソンを継ぐ者」を探していたのだ。

ここ、ヨークシンのマフィアの間では、その名を持つ者は最重要人物であり、調べるだけでも禁忌だ。だからこそ、構成員達はこぞつて排除にかかったが、ものの見事に全て返り討ちになった。

たつた一人にだ。

マフィアは舐められるのだけはいけない。すぐさま例の男について調査がなされたが、全くの空振りに終わる。マフィアの中でも情報を専門とする者が、防犯カメラに映

る姿を見て解析したのに、だ。

曰く、ソイツは国際人民データ機構にすら載っていない。過去60年のストックにもだ。よつて、最終的にソイツは流星街の住人と結論づけられた。

だが、それが分かつたからとてハイそうですか。済ます訳にはいかない。遂には下部の組の用心棒を務める念能力者が動員される事態となつた。

だが、彼らは帰つてきた。そして口々に言う。「あれは無理だ」と。中には恐慌状態を起こしている者もいた。そして、ご丁寧に伝言までついできた。「私はアンダーソンに連なる者。家族に会いたいだけだから早く会わせろ」と。

その段になつて漸く、「彼」の耳にも届く。「彼」の決断は早かつた。即座にソイツを丁寧に自分のもとに呼んでこい、と幹部に指示を出したのだ。周りは強硬に反対したが、「彼」は聞かなかつた。ただ、「約束がある」とだけ伝え、後は沈黙した。「彼」がそう言うならば周りは聞くしかない。幹部は仕方なく部下に指示を出して手筈を整える様に伝えた……。



予想はしていたが、やはり相当上の地位にいるらしい。アンダーソンという単語を出ただけで過剰に反応して突っかかってくる。逆に言えば、マイケルの子孫は上手いことやっているという証だろう。突っかかってくる戦闘員には優しく対応してあげた。しばらく待てばもつと「上」が来るだろう。

やはり、あの企業名はマイケルのメッセージか。会社概要のパンフレットを見ると、創業200年になるらしい。かなりの老舗だ。世界中まで手を伸ばし、物品輸出入の貿易を行う傍らで、世界中に支社を作ってネットワークを広げていた。

そして：代表者こそ違う名前だが、創設者の中の片隅に確かに「マイケル・アンダーソン」の名前があった。

それを見た時、名状し難い感情が襲ってきた。郷愁か惜別か、それとも約束を守れなかった後悔か……。もしかしたら全てが合わさったものかも知れない。

気づいたら、いつの間にか涙が流れていた。私にも「泣く」と言う事ができるらしい。

：まだ私は「人間」のようだ。

マイケルは私がいつ帰って来てでもいいように手筈を整えていたのだ。これ程の大企業群を創設し、世界中に根を伸ばして……。やっぱりアイツは凄い奴だ。だからこそ、アイツの子孫にはきつと……会えるだろう。



マフィア共もコケにされたと思ったのか攻勢を強めて来たが、烏合の衆が幾ら集まっても同じだ。悉く返り討ちにしてやった。勿論五体無事には帰したが。一度銃火器で囲まれたので、《纏》で威圧して気絶させた。奴等もこれで私が念能力者と気づくだろう。

やがて、念能力者が5人程来た。まあ、マフィアの用心棒ならこんなものだろう。改めてマイケルの凄さが分かる。彼なら多分殲滅出来るだろう。能力の相性もあるから何とも言えないが、実力的には圧倒的な差がある。

私も面倒なのは嫌いなので、能力を使われる前に強めの《練》で怯ませた。2人程恐

慌状態になって失神してしまったので、もう少し加減をしないといけないか……。残った骨のある奴等にメツセージを残したからきつと伝わるだろう。



数日後、私の前に豪華なリムジンが停まった。前世でもカケラも縁が無かった車だな。中から執事のような男性が降りてきてこう言った。

「アンダーソンを名乗る方、我が主人が呼びです。是非お乗りください」

私はどちらかと言えばこれを待っていたので、普通に乗せて貰った。中は車の中とは思えない程豪華だった。車内にテーブルがあり、ワインセラーも付いている。こちんまりしたバーみたいな雰囲気だ。こういう車っていくらぐらいするんだろうな。飲み物を勧められたが、多分良くて睡眠薬、悪くて毒でも入ってるんだろう。まあ私には関係無いので遠慮なく頂いた。……うん。これは前者だな。今の所殺す気は無いらしい。そんな事を考えていたら、例の執事が

「……毒は効きませんか」

とシレッツと言った。普通はバレたら殺される危険もある筈だが、実に堂々としてる。肝が据わってるな。実はこの執事も中々出来る。ハンター下位クラスはあるだろう。流石に中枢にいる人物の執事ともなれば鍛えられているという事か。

「毒は効かないんだよ……体質でね」

「貴方は……本物かもしれないね」

と、執事は呟いた。やはりマイケルは多分何か言い遺していたな。さて……漸く辿り着くな。何が待っているだろうか……



着いた先は大きな邸宅だった。ここはヨークシンでも一等地だった筈だが、こんな邸宅を構えると言う事はよっぽどの経済力だな。

車で庭を通つてゐる。かなりの敷地の広さだな。3分位走つた所で玄関に降ろされた。城：とまでは言わないがかなりの豪邸だ。隠した《円》で確認した所、セキュリティもかなり高い。機械系は分からないが中々のものだ。

お目当ての人物にほんのちよつと期待したが、マイケルでは無かつた。

玄関では、恰幅のいい人物が待ち構えていた。：結構地位が高い筈だがいいのだろうか？　そして：「彼」は強力な念能力者だ。マイケル：とまでは流石にいかないが、少なくとも執事より強い。年齢はやや高齢だな。60：ぐらいか。

「はじめまして。私はジョン＝アンダーソン。アンダーソンファミリーのドンを務めてゐる。また、十老頭の一人も兼任している。ようこそ。アンダーソンを名乗る方よ。よければお名前を聞かせて頂いても？」

十老頭か……これまた聞き覚えのある単語だ。確かマファイアに関係している筈だが……。しかし、そんな奴が堂々と姿を晒していいのか？

「これはご丁寧にも。名乗りが遅れて申し訳ない。私はカームⅡアンダーソン。〃
家族〃に会いに来た。聞きたい事もある。宜しいか？」

「……カームⅡアンダーソンか……。分かった。ヴィンセント。お客様を案内しなさい」
「承知しました。ではこちらにどうぞ」

そう言ってジョンは引っ込んでいった。ヴィンセントと言うらしい執事が私を案内する。屋敷は《円》で確認したとは言え、かなり複雑な廊下や部屋の造りになっていた。襲撃防止用だな。ひとしきり廊下を歩き、大きな応接室に辿りついた。先にジョンがソファアに座っていた。

「改めて、ようこそ。カームさん。どうやら〃私〃を探していたらしいね」

私も対面のソファアに座って言った。

「その通り。しかし、探していたのはアンタじゃない」

「……それはどういう意味かね?」

「アンタは影武者だろう。こんな素性の怪しい人間を普通は軽々しく招待しない。ましてやドンなら玄関で迎えない。そうするのは忠誠を誓った近しい者だけだ」

「……それだけでは根拠が薄いな。だが、古いマフィアのしきたりには通じているらしい」

「この邸宅の一番奥に一番力を持つ者がいる……。『彼』がそうだろう。恐らくこの会話も聞いている筈だ。マイケルの事だ。子孫にも『ドンは強くあらねばならん』とか言つて訓練を施していたのだろう。そして、そのオーラはアンタよりも『彼』の方が私にとつて馴染みの深いものだ。アンタは能力で姿を偽装しているしな」

「……」名答。まさかそこまで分かるとはな……。確かに私は『影武者』だ。そういう能力でね。しかし、安易に『彼』のもとに行かせる訳にもいかないのだ。そこは分かってくれるかね?」

「当然だな。で、何をしたらいい?」

「こちらの用意した質問に幾つか答えて貰おう。まずはそこからだ」

「分かった。何でも聞くがいい」

「では、第一問。マイケルⅡアンダーソンが念能力に目覚めたのはいつだ?」

なんだそりゃ。本人確認のクイズか?

「あれはマイケルが7歳から8歳になる時だ。半年で目覚めたからかなり才能があったと思う」

「正解…。では第二問。コンシリエーレとしてマイケルⅡアンダーソンを支えたジョセフ・ルチアーノの初の彼女はいつ出来て、その名前は？」

…本格的にクイズになってきたな。まあいい。気がすむまで付き合おう。

「忘れもしない。奴が15の時だ。舎弟の妹と付き合いだしてね。名前はリンダだったか…あれから私が旅立つまでの長期間、関係は続いていた筈だ」

「…それも正解。彼はその後リンダさんと結婚している。…では次だ…」

それから延々と似た様なマニアックな質問が続いた。正直、私にとっては過去の思い出は相当辛いものだ。早く終わってくれないか…と思った時、ハッと気付いた。これはマイケルの怒りだ、と。

確認だけなら数問で出来る。だからこそ、これはマイケルからの罰。そうと気付いたからには甘んじて受けなければならぬ。私は感傷に耐えながらも、黙々と過去を思い出して答えていった。

質問は100にも及んだ。最後に

「これが最後の質問だ……。マイケルⅡアンダーソンと、カームⅡアンダーソンの間で交わされた『血の掟』の内容は？」

……。

やはり、そうか……。マイケル、本当に……すまない……

「……マイケルは、ファミリーのドンに相応しい男になる、と。そして私は……生きてる限りは、1年に1度は……必ず、必ず……帰る、と……」

「……正解だ。さて、全問正解だ。もつと喜べよ。笑ったらどうだ？　なあ。カーム

Ⅱアンダーソン」

「……」

「……例え全問正解しようが、本人とは確認出来ねえ。能力で心を読むとか、過去の証言や資料を丹念に読み解くとかいくらでもやりようはある。だから付いてこい……。最後

の確認をさせてもらう」

そう言うと、彼は立ち上がり私を促した。私は中々立てなかつたが、執事のヴィンセントさんに促され、漸く立ち上がった。

着いて行つた先は中庭だった。

「ウチに伝わる伝承では、本物は当時から相当な化け物だつたらしい。あの『最強』と謳われた2代目に生涯敵う事は無いと言わせる程のな……。俺に負ける様じや本物とは言えねえ。もし違つたら切り刻んで海に流して魚のエサにしてやる。覚悟しろ」

「……」

彼は自分の擬態を解いた。中から出て来たのは筋肉質の壮年の男だ。

「俺は、カルロⅡマツセロ。見ての通りドンの影武者だ。だが、俺はファミリーを愛している。例え本物だろうがテメエの様に今更ノコノコ帰つてきた奴なんかには絶対負けたくねえ。2代目は生涯ずっとアンタの安否を気にしていたらしい。あの2代目が、だ。だからそんな腑抜けたツラしていると本気で殺すぞ。俺の『入れ替^{ドッ}わる他人^{ルベ}の人生^{ルゲ}』は戦闘用じやねえ。だが、そんじよそこのハンターには今まで負けた事もねえ……。さあ、さつさと『堅』でもしろよ。もう始まつてんぞ」

……彼の言葉に返す言葉も無い……。私は……ファミリーの掟を裏切つた。彼からはファ

ミリーへの愛をひしひしと感じる。私は……そう言った諸々の全てを裏切ったのだ。だからこれは当然の報いだ。だからこそ……せめて彼には示さねばならない。

「分かった……。これも私の『罰』。故に全力でお相手しよう」

「漸く見られるツラになったな。いいぜ。ビリビリ来るね。…楽しみだ」

私は隠していたオーラを解いて《纏》をした。

「な……何だ……これは……これが人間一人のオーラか!？」

続けて全身から細胞を駆動し全力で《練》を始める。

ゴゴゴゴゴゴ……

「馬鹿な……これは……これは……!」

彼は震え出し、その場に倒れ込む。既にヴァインセントさんは倒れ伏し、失神している。

だが私は止まれない。続けて…

「そこまでだ！」

我々を止める声が聞こえ、私は一旦《練》を解除した。

「ド…ド…ド…ド…ド…ド…ド…ド…ド…ド…ド…」

「カルロ、済まなかったな…。そして…カームⅡアンダーソンさん。こちらの無礼を心からお詫びする！ 本当に申し訳無かった」

そう告げて出て来たのは、本物のジョンⅡアンダーソンだった。

57、メッセージ

その日、ヨークシンは震撼した。

正確に言えばヨークシン在住の念能力者が震えあがった。

原因は、とある方向から想像を絶する程の量のオーラが見えてしまったからだ。

“それ”は、人間が出すオーラとはとても思えず、とんでもない怪物が誕生してしまった事を、文字通り身体で実感してしまった。

屋外にいて不幸にも“それ”を見てしまった者は、決死の覚悟でヨークシンを脱出した。直ぐにでもこの場所が地獄になってしまいう事を確信して…。

しかし、そうはいかない者もいた。



な…何なのよ…アレは…！　今まで見た事も聞いた事も無い程の巨大なオーラ…！
 正に雄大な山脈の様な……それ程の圧倒的な力！　これが…これが例の調査対象！
 まず間違い無い！

“これ”は私の手には負えない…。いえ、もしかしなくてもあのジジイすら…。しかし、ほっとくわけにもいかないわね…。まずはジジイに知らせる。そして…本当に気が進まないけど、「調査」はしなきゃね。



P r r r r r r r …

「…ほい。ワシじゃ。…なんじゃ、ビスケか。見つかったか？」

「ジジイ…よくも私に“あんなの”の調査を依頼したわね！」

「待て待て、落ち着け…。で、その様子だと見つけたんじゃない？」

「…見つけたわさ…と言うよりも見せつけられたと言った方が正しいわね。本日午後3時48分。先程ね。ヨークシンの一等地近辺、恐らくアンダーソン家の敷地付近にて、莫大な量のオーラを観測した…。オーラの質から考えると、アレは一個体によるもの。そして“それ”は人間に出せるようなものじゃない…！ 恐れていた事が当たったわね…」

「……そう、か…。『六番目の厄災』…の可能性が高いという事が…」

「そうね。あれだけの力は最早厄災よ。ただ、希望があるとしたら、観測した『オーラの質』がそんなに害があるようには見えない所ね。儂い希望だけど」

「しかも、出た場所がよりによってアンダーソン…か。あそこは昔から協会との因縁が深いからのお…。して、一応聞いてくが、ワシと比べてどうじゃった？」

「……言っちゃ悪いけど、話にならないわね。もう人間の個人が対処出来るレベルじゃないわ。国家レベル…いえ、もしかまだ力を隠していたら世界規模のレベルかもしれない」

「……」

「いい事？ 私は今から決死の覚悟で現地に調査に向かうから、生きて帰ったら報酬た

んまり弾みなさいよ！ 生きてりやまた連絡するわさ！ じゃー！

ガチャツ。ツ、ツ…

「…相変わらず忙しい奴じゃ…：すまんのう…。…ワシも覚悟を決めるか」



「改めまして…はじめまして。Mr. カームIIアンダーソン。私がジョンIIアンダーソン。アンダーソンファミリーの6代目のドンにして、十老頭の1人を務めています。試す様な真似をして申し訳ない」

あれから、3人で屋敷の者達を介抱したり、目を醒めさせたりして、漸く話が出来たのは30分後だった。…私も流石に全力はまずかつたと反省した。

「カームでいいさ……。Mr. ジョン・アンダーソン。あれは当然の事だ。恐らくマイケルの指示でもある……。気にしてないさ。しかし、6代目、と聞いたが、マイケルと私の話はかなり詳細まで残っていたらしいね」

「こちらもジョン、でいいですよ。カームさん。お察しの通り、ご先祖、特に2代目のマイケル・アンダーソンの逸話は伝説に近い。彼は『アンダーソンファミリー』をヨークシンどころか、サヘルタ合衆国全域を支配する程まで発展させました。当時の大統領すら2代目の意向を気にしながら政策を進めたそうです。しかし、彼には生き別れの兄がいた。それが貴方だ。カームさん」

「その通りだが……マイケルは随分と活躍したらしいね」

「だからこそ、『伝説』なのですよ。ここまでファミリーが発展したのはほぼ2代目のおかげと言ってもいい。十老頭になったのもマイケルさんからです」

「その……十老頭とはどういったものかな？」

「この世界の6大陸10地区を治めるマフィアのボス達の事を指します。我々はサヘルタ地区全域ですね」

……臆げながらに思い出して来たぞ……！　そういえば、いた。確か、「誰か」の襲撃を喰らって、アツサリ……そ、そうだ！　十老頭は潰滅する！！

今は大丈夫だが、近い将来だろう。確認してみよう。

「…他の十老頭は健在か？」

「ええ…気に食わない奴等ですがね。何故？」

「いや何…みんな念能力者か？」

「いえ…私だけです。我々は家訓でね」

やはりそうか…これ程の力を持つていればそう簡単にはやられまい。「誰」の襲撃だったか忘れたが、多少は苦勞する筈だ。これも歴史が変わった、と言う事か？　しかしまだ分からんか。

「家訓…ね。マイケルは私に対して何か遺してないか？」

「有りますよ。…これです」

そう言つて、彼はテーブルの下から花の様な金属が付いた大きな箱を取り出した。これは…蓄音機、か？　神字が至る所に書いてある。

「『これ』は2代目から貴方が来た時に聞かせるように、と代々厳命されているもので

す。まあ貴方以外は起動出来ない様になってますけどね。針を乗せて再生ボタンを押しながら《練》をして、ご自分の名前をどうぞ」

言われたとおりにしてみると、蓄音機が再生し始め、しわがれた声で語り出した。

「ジジツ……やあ、兄さん。これを聞いているという事は無事に帰って来れた様だね。クイズは楽しめたかな？ 分かつてると思うけど、アレは罰だ。約束を守れなかった事は反省して欲しい。残念ながら私はその場に立ち会うのは難しそうだけだね。出来れば私が直接やりたかったが無理そうだ……。でも、無事に帰って来れた事は心から祝福するよ。皆心配していたからね。私も能力が発動した時はどうなるか心配だったけど、流石は兄さんだ。兄さんをそんな目に遭わせた国とハンター協会にはキツチリと落とし前は付けて置いたから安心してほしい。帰って来たとしてもいい様にされる事はないだろう。だから、安心してこちらで過ごして欲しい。兄さんが帰って来た時の為に、私から様々な便宜を図る様に伝えておいた。これからの人生を何不自由なく過ごせる様にね。我々はあれからも楽しく過ごしたよ。後継者も順調に育っている。ちよつとやそつとでは崩れる事は無い。私は未だにファミリーのドンに相応しい男になったかどうか分からないが、少なくともファミリーは守った。そしてそれはこれからだ。そ

の中には兄さんも含まれるのさ。兄さん。だから、これからの人生をどうか楽しんでくれ。私はそう、願う……。」

マイケル……。お前は……約束を守ったんだ……。ありがとう……。ファミリーを守ってくれて。ありがとう……。私も守ってくれて……。

彼の声が聞こえだしてから、私は涙が止まらなかつた。それは、マイケルの強い愛情に触れたこと。そして、そんな彼にもう会えないということ……全てがごちゃ混ぜになつて私を襲つたからだ。蓄音機はそこから沈黙を続けている……。ジョンがたまりかねて「止めますか?」と聞いてきたが、私は首を振つた。まだ彼はそこに居たからだ。少しでも彼の雰囲気を感じていたかつた。すると、蓄音機は再び語り出した。

「……兄さん。『あれ』からもう130年だ……。例え帰つたとしても、兄さんは恐らく不老不死に近い状態になつてるんじゃないか? これから先に帰つて来れるという事はそういう事だろう。違つたら問題ない。でももし、そうだったとしたら、兄さんはどうするんだい? また終わらない旅を始めるのかな? ……兄さんの事だ。帰つて来たと言う事は『人間』としての安らぎを求めに来たのだろう。もし、それで苦しむことが有るならば、昔私に聞かせてくれた話を思い出すといい。修行時代に兄さんがその

秘密と共に語ってくれた話を……。そこに解決策がある筈だ。頑張つて思い出して欲しい……。私からはこれで最後だ。幸運を祈るよ、兄さん。さようなら。マイケルⅡアンダーソンより、愛を込めて」

蓄音機は動きを止めた。……マイケルは……一体どこまで想定していたのだろうか……。彼のメッセージは伝わった。私は……まだまだ立ち直れてはいないが、これからの人生を生きていこう。「人間」らしく、慎ましながらも地に足のついた人生を……。

しかし、彼に語った話とは何だろう。私は彼に何を話した？

ジョンは私をそつとしたかったのか、黙つて席を離れてくれた。広い応接室で私は何度も蓄音機を再生した。5回も再生した時だろうか。沈黙の部分が気になった。……何故これ程の沈黙を？

これ程の深謀遠慮のある男だ。無意味に長い沈黙を続ける様な事はしない筈だ。私は、試しにその部分に針を置いて再生してみた。……何も無い。ただの沈黙だ。耳を澄ますと確かに彼の息遣いが聞こえる。だが……聞こえる。何か喋っている！ 余りにも小さすぎて聞き取れないが、確かに何か行っている！ まさか……。

私は、蓄音機にセットされたレコードの様な物を取り出した。通常は表面だけに刻ま

れるが…これには裏面がある！ 彼は多分2つ同時に録音した！ それを繋ぎ合わせたのだ…。私は急ぎ、ひっくり返して再生した。…最初は沈黙だ。だが、同じ様に微妙に何か喋っている…！ そして…

「……………やあ！ 見つけたねえ！ 単純な仕掛けだからすぐバレると思っただけど、いかがだったかな？ さて、これからは少しだけ込み入った話をする。周りに人は居ないかい？ 5秒待つから確認を頼む。駄目だったら消してくれ」

私は即座に隠した《円》を展開する。…居ないな。ジョンは台所で何かやってる。

「……………大丈夫のようだね。結構。さて、兄さんの話だ。兄さんは『この世界』がコミックであった世界から転生して来たと言ったね。あの時は半信半疑で、今も余り信じられないけど。そのコミックだった時代は、今よりずっと未来だ。確か1999年と言っていたよ。覚えやすかったから私も覚えていた。その時代までに帰れるかどうかは分からないけど、兄さんは修行時代にその中で使われた様々な能力を紹介してくれた。巨大な人が具現化され、不可避の速度で巨大な手が百以上飛んでくる能力。相手の能力を盗む能力。オーラを煙に変えて、様々な攻撃方法に変える能力。オーラを電気

に変えて攻撃する能力……今でも覚えているよ。部下を鍛える時に役立ったからね。さて、本題はここからだ。兄さんの「能力」は反則だ。私は生涯あの時点での兄さんに勝てる気がしない。特にありとあらゆる不具合に適応する能力。アレは凄まじいとか言い様がない。だからこそ、兄さんが無事な場合には人間離れを簡単にするだろう。仮に死にたいと思つても、もう一つのこれまた反則的な「能力」が邪魔をするわけだ。だから、兄さん。もし、例の時代まで到達する事が有れば、その「能力」、捨てちゃいなよ。居るんだろう？ 『能力を盗む奴』が。兄さんは今、どんな心境かは分からない。だけど、家族を失つたであろう今、その心境は想像に難くない。だからこそ、目標を持つ事だ。そうすれば前に進める。それに、こちらだけじゃ無くても力キンにも行かないや。もし先に行つてたら申し訳無いけど、どうせこつちから先に来ただろうし。兄さんの言う通りなら師匠とやらも同類だろう。大丈夫。心配することはない……。希望はいいものだ。例えば裏切られたとしてもそれこそが力となる。兄さん。希望を持って歩き出すんだ。私はそう願うよ……。では兄さん。またね」

…思い出した……。何故私は忘れていたのだろう。ここは原作時代の1年前だ。そして：マイケル。本当にありがとう。私はまた歩き出す事が出来そうだ。確かに居た。能力を盗む奴が。そしてソイツは幻影旅団の団長だ。もう記憶が曖昧で、どのタイミン

グで出て来るか分からない。だが、ヨークシンで一大イベントがあつた筈だ。もしかしてなくても十老頭暗殺はコイツらが関わっているだろう。

…そんな事はさせない。他の老頭は知つたこつちや無いが、ジョンとそのファミリーだけは私が守護る。そして、あわよくば私の「呪い」を押しつけよう。厄介な敵が出来るかも知れないが、能力のみを吸われた程度なら「聖光気」で直後に消滅させてやる。

問題はいつ、どのタイミングで来るか…だ。確実なのは待つてる事だが、それだと後手になる。ならば…もう一度ハンター試験を受けよう。あそこには仮団員のヒソカがいる。何、あの変態もちよつと遊んでやる約束をしたら、喜んで団員を売るだろう。

…私はあの物語に憧れていた筈だ。いつからそれを失くしてしまったのだろう。だが、まだ間に合う。もう一度思い出そう。あの時の希望を。

これからの人生の為に。

58、師匠

録音を何度も聞き終わり、ボーつと考えていた私に、部屋をノックする音が聞こえた。返事をする、と、ヴィンセントさんが入ってきた。

「カーム様、お食事の用意が出来ました。食堂へどうぞ」

案内されるままに、私は着いていった。道すがらさつきは済まなかったと謝ると、「気にしないでください。むしろ本物だと確信出来ました」と言われた。…怖がらないでいてくれるのはありがたい。すると、食堂についた。

長テーブルの複数人が座れるやつだ。ジョンがそこに座っていた。カルロさんもいる。

「腹が減っては何も出来ませんからね。宜しければご一緒にどうぞ」

…誰かに食事を誘われるのは本当に久しぶりだ。ありがたく席に着くと、ヴィンセン

トさんが給仕をしてくれた。出て来たのは……アンダーソン風トマトパスタだ。

「これは……！」

「これも2代目の言付けですよ。貴方が帰ってきたら、当代のドンがまず初めにこれを振る舞え、とね」

「と、言う事は……」

「はい。私が作りました。……まさか私の代になるとは思いませんでしたかね。久しぶりに作ったもので味は保証出来ませんが、是非お召し上がりください」

マイケル……本当にお前つて奴は……！ ジョンが先程食堂にいたのはそれか！ そこから皆で食前の祈りをして、頂いた。

……美味い!! 爽やかなトマトとニンニクの香ばしい香りが食欲を増進させる!

ピリ辛の唐辛子も良いアクセントだ。玉ねぎやウインナー、ピーマンなどの和え方もバツチリだ……。昔より美味いぐらいだ。私は夢中になって食べた。

「ドン……また腕を上げましたな」

「まあ、唯一の趣味みたいなものだからな」

というカルロさんとの会話が聞こえた。これが実家の味という奴だろう。マイケルも代々受け継ぐ様に指示してくれたおかげで、私はこれにありつけるというわけか……。マイケル……本当に会いたかったな……。



食後に出た高級ワインを頂きながら、一息つく。こんなにゆっくりできなかったのはいつぶりだろうか……。例えば子孫であつてもいいものだな。ワインをゆっくり飲みながら今後についての話をする。

「カームさん。2代目が言っていた様に、貴方の身分は我々が保証します。取り急ぎ、これがパスポートです。貴方は私の息子の1人、という事になります。ですから、この国にいる限り何も起きず、何不自由なく暮らせるでしょう。貴方の口座はまだ有効ですからね。また、貴方にはこの隣に別宅を用意しています。よろしければ、そちらを家としてご利用ください。ホームコードと携帯電話があります。パソコンと電腦コードを含むネット環境も揃えてあるので、後でヴァインセントに使い方を聞いてみてください」

「……何から何まで済まない。ありがたく受け取るよ。しかし、国民データベースの様な物があつた筈だが、そんなに身分は簡単に取れる物なのか？」

「ええ。勿論。国にお願いして、データをちよこつといじるだけですからね。しかしよくご存知で」

「私の時代からも似た様なのはあつたからな。例外は流星街の連中だけだ。しかし、これもマイケルの落とし前、という奴か？」

「その通り。実にマフィア的な落とし前の付け方ですが、まず2代目は国に対して莫大な賠償金を要求しました。そして、裁判沙汰で混乱している隙に国の末端から主要人物をありとあらゆる手で退場させ、そこに我々が根を張る事で落とし前を付けました。最終的には国は我々には絶対に手を出せない程になりました。別の言い方をすると言いなりですね。また、我々がいなければ国が回らない状態になっています。先程も言いましたが、2代目はある意味大統領よりも間違いなく権力者でした。そして、それは今も続いています」

「……成る程。ハンター協会は？」

「ほぼ同じですね。しかし、こちらは武力衝突もありました。他ならぬ2代目も、抗争の先頭に立ってドンパチやったという逸話が幾つも残っています。まあこちらは痛み分けに近いですが、今現在はある程度中枢に潜りこませる事に成功しています。そして、両者

に『アンダーソンには不干渉』と『カームIIアンダーソンが帰還した場合、如何なる干渉をも禁ずる』という取り決めが為されました。前者はともかく、後者については正式に文書で交わされたので、まず正体がバレても問題ありません。2代目が言っていたのはその事です。まあ未だにハンター協会とはぶつかる事もあるので、偶に相手してやっていますがね」

「そうか……マイケルも本当に頑張ってくれたんだな。私も腑抜けている場合じゃないか……」

「今後はどうしますか？ しばらくゆっくりされますか？」

「ああ。悪いが2、3日程厄介になろう。その後、用事があるからカキンに向かいたい。

…手配出来るか？」

「お安い御用ですね。…ヴィンセント。頼めるか？」

「かしこまりました。では3日後に飛行船を手配しましょう」

「ありがとう。助かるよ」

「どういたしました……。しかし、私も正直半信半疑でしたが、本当に成し遂げたんですね。私も多少は自信があったのですが、さっきのでその自信が粉々になりましたよ。流石2代目が生涯敵わないと言わしめた方だ」

「いや……人間としてはマイケルの方がよっぽど上だよ。今回それを痛感した。私もまだ

まだだ……。それに、あそこで生き抜くにはこれぐらい無いとかなり厳しいからな」

「……お辛いでしようが、当時何が有ったか聞かせて貰えませんか？」

「いいだろう……。あれは、協会からシングルに認定された時から始まった……」



その後、私は掻い摘んでこれまでの経緯を話した。話し終わるとジョンは「やはりもっとケジメが必要でしたね……！」と怒り心頭だったが、続けて気になる事を言っていた。

「アレを……持ち帰った？」

「ええ。230年前の大失敗を受けて、暗黒大陸には不可侵とする条約がV5で成されました。当然ですね。ですが、各国は隠れて何度も渡航した……。サヘルタもです。当時はまだ国に抵抗勢力がいました。その差し金ですね。そして……何度か失敗して、漸く帰還者が出ました……。2名ですが。その積み荷に五大厄災の一つが紛れ込んでいたわけ

です」

「おいおい……！ よりによつて本当に持ち帰つたのか！ 何も起きなかつたか!？」

「起きなかつた筈はないでしょう。特大のバイオハザードが起きました。当時のハンター協会と国、そして我々も含めて決死の作戦で何とか食い止めました」

「馬鹿じゃないのか……!! 一回で懲りたら良かったのに……!」

「愚かなもので、身近で大量の被害が出てから気付く様ですね。だからこそ、2代目は落とし前を付けたというのに……。まあそれからは行つてませんよ。我々も許さないですし。その作戦を主導した議員は即退場させましたしね。それを踏まえて考えると、カームさん。貴方は本当に凄い方だ」

「いや……そんな事は無い。やはり私を救つたのはマイケル含む家族だ。ヤバい時にはいつも彼等の事を思い出す事で何とか乗り切れたよ」

「……伝承通り、とても家族思いな方ですね……私も安心しました」

その時、ヴィンセントさんが何やら外部からイヤホンで連絡を受け、ジョンへ耳打ちした。

「……ダブルか……。面倒だな……。カルロ、行けるか?」

「ええ、お任せください」

そう言つてカルロさんは席を立つた。

「どうした？」

「……いえ、ハンター協会が嗅ぎまわっているようです。先程ので何か感づいたのでしよう」

「……私のせいだな。……すまん」

「お気になさらず。たびたびある事です」

「そうか……玄関のこの相手か。これは……以前会つたビスケツト・クルーガーだな」

「……先程も思いましたが、どうやって察知してるのです？」

「何、簡単だ。瞬時に《円》を展開するだけだ。《隠》で隠してな」

「……やはり規格外ですな。ただ、念の為に隠れになつてください。私が相手します。カームさんはこちらの隠し扉から、隠し部屋へどうぞ」

「そうだな……私も今、ハンター協会と事を構える気は無い。本当にすまんが任せたまよ」

そう言つて、私は一旦屋敷の奥に引つ込んだ。《円》をされてもいい様に一般人を偽装

して、だ。さて、ビスケットトールクルーガー。思い出したぞ。原作主人公達の師匠だ。何故ここに居るのは知らんが、原作前だからそういう事もあるう。もう一度話はしてみたいが、ハンター試験が終わってからだな…。

………



暫くすると、ヴィンセントさんが迎えに来た。…終わったらしい。案内されて応接間に着いた。

「どうだった？」

「私とカルロで突っぱねましたよ。そんなのは知らん、とね。食い下がってきましたが、『アンダーソンには不干渉』を盾に知らぬ存ぜぬで通しました」

「ありがとう…。だが、また来るだろう」

「その時も同じですよ。例え会長が来ようが知らないで通します。あまりしつこいよう

なら我々を舐めてはいけないと言う事を思い出させます」

「……本当に迷惑をかけるな……。申し訳ない……。お詫びと言つては何だが、これをあげよう」

私は、アイテムボックスを開き、黄金の木の实を取り出した。

「……これは？」

「向こうのリターンの一つだ。食べた者の肉体とオーラを1度だけ1.5倍程に引き上げる。君が使つてくれ」

「それが本当ならこれ一つで戦争が起きますな……。では有り難く頂きましょう」

「少し身体に副作用があるかも知れんが、死にはしない筈だ。私も食べたが問題は無かった」

「そう聞くと怖いですが……まあ信じますよ」

そう言つて彼は一気に食べた。すると、「ぐおおおお……」と悶え出した。ヴァインセントさんが駆け寄るが、彼は大丈夫、とジェスチャーし、暫くの間耐えていた。5分程悶えた後、彼のオーラがより増大した。

「ハアツ…ハアツ…す、凄いですな、これは…：…！　ほぼノーリスクでここまで強くなれるとは…！　仮にオークションに出したら国家予算規模の額がつきそうです」

「暗黒大陸のリターンだからな。当然だろう。後1つ出して置く。好きに使うといい」

「こんなのを貰ったらお釣りがきて余りありますよ…」

「私からの感謝と捉えてくれ。それはどの様に使ってもいいからな。後、今後強力な敵の襲撃があろうとも、私が排除する。約束する」

「…分かりました。それは大変心強いですな。…今日はもう遅い。別宅でゆっくりお休みください」

「ありがとう…。私の方針も決まったから、明日以降話そう」



P r r r r r r r r r r …

「ビスケか…：…生きておったか」

「生きて連絡してるんだからもつと喜びなさいな…。一応終わったわさ」

「まあ生きとつて良かったの…。最悪死んだかと思つたからのう」

「そんな生死も分からなくなる様な調査依頼出すんじゃないわよ…。例のオーラの出所はやつぱり『アンダーソン』で間違いない。当主と話した結果、そう確信したわ。知らぬ存ぜぬで突っぱねられたけど。また、かの家は、数時間前に客を迎えている。恐らくソイツで間違いないわね」

「やはり、か…。アンダーソンは昔つからアンタツチャブルに近いからのう。下つ端はともかく、上の方はかなりの念能力者の集団じゃ。しかも国と協会は中々手出しできん…。困つたもんじゃ…」

「…ジジイは何か心当たりがありそうね？」

「……先程調べて分かつた事じゃが…古い話の一つあつた。ワシが生まれる前じゃから伝説に近い。アンダーソンと我等には古い取り決めがあつてな…。アンダーソンの縁者で昔、『暗黒大陸』に向かつた者がおる。ソイツがもし帰還した場合、我々ハンター協会は一切手を出せん。書面でも交わされた決まり事じゃ」

「ジジイが生まれる前つて…何年前よ!？」

「200年近く前じゃな…。今回のがもしそうだとしたら…」

「物凄い発見だわさ!! 宝石のリターンとか持つてるかしら…」

「だから！ 手を出せんとゆうとるじやろがい！！」

「ふくん…破れないの？」

「破れないの！ 大体お主…早速アンダーソンから抗議が来とるぞい。かなり無理矢理押し通られたとな！」

「あつ、大事な用事を思い出したわさ！ 報酬は五割り増しで、いつもの口座によく！」

ガチャツ！ ツー、ツー、…

切りおった…。全く…まあ厄災でなくて一安心、といった所か…。しかし、まだ油断は出来んな。もう一度あの資料を探ってみるか…。もし本物ならば、何とか繋ぎを取れないもんかのう…。



もしかしなくても、以前街で会った「カームⅡアンダーソン」だわ！ 私すら欺く程のオーラ技術！ 確かに、あそこまでの技術があるのに念能力者じゃないなんて不自然すぎだわさ。何故気づかなかつたのかしら？ でも、目的は変わったけど、彼に会う事には変わりない。寧ろ、より優先度は上がったわ！ ジジイは何か言つてたけど、要するに本人とバレてなきやセーフよね！

ふふふ…。楽しみね。カームⅡアンダーソンさん。



3日ほどのんびりさせて貰い、私はリンゴーン空港に旅立った。リムジンの送迎だ。これも中々落ち着かないが。

これからカキンに向かう。師匠のもとへ行くためだ。カキンは最近どうにもキナ臭いらしいが、空港から降りて仕舞えば関係ない。以前でさえ到達時間は1日を切つていたので。見つからずに急ぐ事はわけない。

「空港からは1週間程で到着した。」

以前は何だったのかと言いたいくらいだ。帰りは再び1週間後。さて…急がなければな…と思つたら、私に話かけて来る人物がいた。

「あらあらあら…これは奇遇ですわね！ カームⅡアンダーソンさん！」

……ビスケットⅡクルーガーか。バレたか？ どちらにせよ、先回りされたようだな…。

「これはこれは……。久しぶりですわね、お嬢さん」

「ビスケ、でいいですわよ♡ カームさんはどうしてこちらに？」

「ちよつとした知己に会いに来たのですよ…。ビスケさんはどうしてここに？」

「私、宝石ハンターをやつてまして…その帰りですわ」

「そうですか…。では、またこれで」

「お待ちください！ ここで会つたのも何かの縁。是非ご一緒したいですわ」

「そう言われましても…。その知己は人見知りですね。出来れば私1人で会いたいです」

よ。申し訳ないですが…」

「そうでしたか…では、せめてこれからお食事でもどうですか？」

「ありがたいお誘いですが、先を急ぐので…」

「そうですか…。それは残念です。では次にお会いしたら必ず行きましょうね！」

「そうですね。その時は是非」

そう言つてアツサリと引き下がった。…引き際がいいな。付けて来る気かな？

まあいい。出来るものならやってみるがいい。私は全力でオーラを隠蔽しながら、ダツシユを始めた。



…：…なんて速さ！ しかもオーラが見えない!! これはまさか…《隠》!? 《凝》をし
ても殆ど見えない! これ程とは…。確かに間違い無いわね。分からない筈だわ。

チツ。駄目ね…。これ以上は見つかるし、そもそも追いつけない…。しょうがない。

また空港で張っておくしかないわね。余り派手に動くどジジイに怒られるだろうし、まだバレない様に動かなきゃね…。



半日程で付近に着いた。港付近は流石に発展していたが、奥地は未だに田舎の様で助かった。

確か…ここらへんだったが…。居ない。あの庵も跡形もない。どうしたものか…。
 …仕方ない。《円》を使おう。今の私ならば半径2、30キロはいける筈だ。念の為に《隠》をして、と……全力での《円》は久しぶりだな。

《円》!!

…:…:いた!! これは…洞窟か!? 座禪をしてる…。あの時のままだ!! まだ生き
 てらっしやったとは…! そしてこれは“聖光氣”!! しかし…消えかけてる!! 急

がねば……！

私は全力でその場に向かった。そして……師匠はそこに居た。

「ようやく戻ってきたか……馬鹿弟子め」

と、師匠は私にそう言った。

59、前へ

「師匠!! 生きてらっしゃったのですね!」

「うるさいのう…もうちつと静かにせんか…。見ての通りじゃ。『聖光氣』のおかげじゃな」

「良かった…! 本当に良かった…」

「馬鹿もん…。いい歳こいて泣く奴があるか…。だが、待つておつたぞ。間に合つたよ
うで何よりじゃ」

「…師匠、間に合つた、とはどういう事ですか…? まさか…」

「…『仙』は長命じゃ。…非常にな。ましてや『聖光氣』を身に付けた『仙』はな
…。だが、寿命が無い訳ではない。それだけの事よ」

「そんな…やつと…やつと会えたのに!」

「…よいか? 馬鹿弟子。儂は確かに肉体的には死ぬ。じゃが、それは一面を捉えた
だけの事。儂は世界と真に一つになるのじゃ…。つまり、あまねくこの世に遍在すると

いう事。それが『仙』の最期の務めよ…。じゃから、寂しがる事は無い。儂はこれから何処にでもおる。無論、お主の心の中にも、な」

「師匠、私は…私は…もつと師匠と沢山話をしたかったのに！」

「我が儘言うでない…。大体お主が遅いのがいかんのじゃ。…その様子だと、彼の地でこつてり絞られた様じゃな…。そして…遂に『至った』か」

「…ええ。これも師匠の教えのおかげです…大変苦労はしましたが…」

「『仙』の奥義がそんなに簡単に出来てたまるか…。しかし、儂の教えが役に立ったなら何よりじゃ…。すまんが見せてくれんかの？」

「分かりました…。では…」

ゴゴゴゴゴゴ…

「……………！ これは…まさしく『聖光気』…！ 見事じゃ…。そしてそれを使いこなしておる…」

「…………鍛えられましたからね…。暗黒大陸で」

「そうか……。ああ…これでもう、思い残す事は無いな…」

「待つて…待つてください…！ もう少しだけ…。そ、そうだ！ 私は『若返りの水』

を持つてます！　これを飲んでください！」

「馬鹿弟子よ……儂は充分に生きた。……そして死ぬ。もう思い残す事は無いし、儂の人生は自然に任せたいのじゃ……。それが『仙』の生き様でもある……。だから、ここまでじゃ……。最期にお主に教えておく……別れは辛いが……ずっと……それに引き摺られてはいかん……。先程も言うたが、死とは世界に還る事……。だからそれは……とても自然な事じゃ……。死した者は、皆……自然へと還り、また再び自然に生まれる……。それに引き摺られるという事は、死に引き摺られるという事じゃ……。とても自然とは言えん。だからのう、生きとし生ける者は……前へ、進め……！　それが……『生きる』ということじゃ……」

「何処へ……何処へ進めと言うのですか!!」

「最期まで……世話の焼けるのう……。それはお主が見つける事じゃ……。新しい出会いもあろう……。再び見つけるが良い……。さすれば道もひらけよう……。歩き出すのじゃ……。お主ならきつと出来る……。儂はずつと……見守つておるからな……」

「……分かりません！　だから、師匠、もう少し……!」

「……最期に……お主に会えて……良かったぞ……。さらばじゃ……。そして……また逢おう……」

師匠の『氣』が……拡散してゆく……!」

「師匠!? 師匠!! 起きてくださいよ!! 師匠!!!!」

「……………」

……………



……師匠が再び目を開ける事は無かった。師匠は還つたのだ……。師匠の言う通り、世界と真になつて……。

私は、泣きながら丁寧に師匠を埋葬した。師匠は……待っていてくれたのだ。いつ帰ってくるか分からない私を……。恐らく、いくら長命とは言え、限界があつただろう。それでも私を待っていてくれた……!

最期に私に伝える為に……！

死は、確かに終わりだ。だが、始まりでもある。そして……父さん、母さん、マイケル……そして師匠……彼等は私の中で確かに“生きている”。私は……彼等に顔向けは出来ないが、これ以上彼等を失望させる訳にもいかない。

だから、歩き出さなくて……。

マイケルは道を示してくれた。

師匠は、前へ進む事を教えてくれた。

だから、行かなくちや。

それが、師匠の教えてくれた“生きる”という事なのだから…。



「カームさん！ またお会いしましたね！ ……どうかしましたか？」

「ああ……。ビスケさん。いえ、ちよつとね…」

「……少し向こうで話ませんか？」

「いえ……。いや、そうだな…。ご一緒しましょう」

「やった！…じゃなくて、良かったですわ。ではあちらのレストランにでも入りましよう」

「はは……。お手柔らかに…」

.....

.....

.....

「親しい方を亡くされたのですね……お可哀想に……」

「ええ……まあそうですね。私を導いてくれた師匠だったのですが……」

「それは……シヨックも大きいでしょうね……」

「でも、一目でも会えて良かったですよ。私は幸せ者です。師匠も、待っていてくれましたから」

「凄い方でしたのね……。その師匠は……」

「私も最後の最後まで叱られっぱなしでしたよ……。でも、おかげで私も前に進む事が出来ます。それも師匠のおかげですよ」

「それは良かったですわね……。カームさん、またこうしてお話ししませんか？」

「いいですよ……と、いいたいところですが、私も多忙でね。中々時間が取れない。そして、今ケータイも無い。ただ、約束しましょう。貴女には必ず連絡します。だから、その時はよろしくお願いしますね」

「……分かりましたわ。必ず、ですわよ」

「ええ……必ず」

私は立ち上がり、彼女の分の会計まで済ませます。

「では、ビスケさん……また」

「♡……ハッ！ ええ、また！」

そう告げて、私は彼女のもとを立ち去った。



いい……。これはいいものだわさ……。あたしの中でもベスト10に入る程のシチュエーション……！ その名も「小洒落たレストランでの再会の約束」！ ああ……余韻を楽しみたい……。

しかし、不思議な人ね。師匠って言ってたわ……。本当に200年前の人物ならば、師匠なんてとつくに亡くなってる筈……。しかし、あたしの嘘センサーには反応は無かった……。ケータイが無いってそこには反応したのね……。どういう事かしら……。まさか、彼は違う……？ でも、あんな能力は……。

まあ、どうでもいいわね！ あんなに素敵な人は簡単に逃せないわさ！ 少し陰のありそうな所もグッド！ それに……もしかしたら年上かもしれないなんて、最高よね！

うふふふ……。夢が広がるわ！ 楽しみに待つてるからね！ カームさん♡



1999年1月6日。その日、ドーレ港に1人の男が辿り着いた。その男は、全身黒

づくめのスーツと帽子を着用し、両手にそれぞれ腕輪をしていた。彼の目的は、ハンタ
ー試験の受験である。

そして、今。3人の人物が彼と出会いを果たす。運命の歯車は少しずつ狂いながら
も、構わずに動き出そうとしていた…。

再ハンター試験編

60、一次試験（前編）

船に乗つてドーレ港まで着いた。同じ船にも受験者は乗つていたが、ここまで着いたのは私だけだった。それもそうか。船はワザと潮流の凄い海峡や嵐の中を突つ込んでいったからな。

：昔を思い出す。ミテネに行つた時だ。あの時は酷いボロ船で、しかも巨大タコに襲われかけたな……。今思うと、あのタコ、暗黒大陸の近海から逃げて来たな？ あんな程度だと、あの大魔境じゃものゝけで餌になるしかない。寧ろよく生きて辿り着いたものだ。門の近くから来たのかな？

とにかく、他の受験志望者は全滅したという事だ。これに耐えられない様じゃ、試験は厳しいな。彼等は小船で引き返して行つた。来年頑張つてほしい。

私一人になつてからは、船の操縦を手伝い、船員を手助けするなどしていたら、船長から「合格！」と言われた。そういえば、試験はすでに始まつていたんだつたな。

合格ならありがたい。確か、ナビゲーターが案内してくれるんだつたか。

降りたら船長から、街とは別方向の一本杉を目指せと言われた。そうだった。魔獣が案内してくれるんだったな。船長に礼を言い、道なりに進む。目指すは一本杉だ。行くとうとしたら、話しかけられた。

「ねえ、お兄さんもハンター試験を受けるの?」

黒髪で短髪の活発そうな少年だ。

「あなたも同じ方向を目指しているのならば、我々も一緒に一緒にいいだろうか?」

同じく、金髪の中性的な少年?と一緒に提案してくる。

「おいおい! こんな怪しそうなのと一緒に行くのか!」

黒髪のスーツを着た、背の高い青年が反発する。

ああ……。原作主人公だ……。

「ああ……。私はカーム、と言う。受験生だ。船の船長からあの一本杉を目指せ、と言われてね」

「良かった！　じゃあ一緒に行こう！　俺はゴンって言うんだ！」

「私はクラピカという。しばらくの間よろしく頼む」

「だーっ！　勝手に話進めてんじゃねえ！　俺は反対だからな！」

「何言ってるのさ、レオリオ。どうせ向かう場所是一緒だよ？」

「ゴイツは信用ならねえって言ってるの！」

「だからといって、別方向に行くわけでもなし。こうなった以上是一緒に行った方が効率はいいだろう」

「もし騙されたらどうすんだよ！　後、勝手に名前呼ぶんじゃねえ！」

「大丈夫だよ。この人はそんな人じゃない。それに……凄く強い」

「まあゴンがそう言ってるんだ。私もそれに従おう」

「くくく!!　わーっつたよ!!　一緒に行くよ！　俺はレオリオだ！　よろしくな!!」

「そうか…。では、これから一緒にさせてもらうよ。よろしく」

こうして私達は共に行動する事になった。…そう言えばそうだった。最初はこの3人で行動していたな。すっかり思い出した。私は3人とお互いについて簡単に話しながら、道を進んだ。

麓の廃墟のような街で、婆さんから「ドキドキ2択クイズ」があつた。先に我々を付けていた奴が出て来て答えて、違う道を行かされたが、これの答えは「沈黙」だ。

レオリオがキレかけたが、クラピカが止め、概ね原作に沿って合格した。…私はず「両方助ける」と言いかけたが。

日も暮れ、レオリオがぐずるのを宥めながらも先を急ぐ。もうすぐ一本杉だ。

一本杉の下にある一軒家に着いたら、魔獣に襲撃されていた。まあフリだが。申し訳ないが、《円》で準備している所が見えてしまった。…何か悪いことをしてしまった気分だ。

扉を開けると、準備万端の魔獣が飛び出して来た。クラピカとゴンは女性を抱えて飛び出した魔獣を追いかけた為、私は2人にレオリオと旦那を治療すると伝えた。追いかけてもいいが、ここは彼らの為に任せるべきだろう。全員が認められないといけないし

な。

まずはレオリオの腕を拝見……。中々手際がいい。そんな事を思っていたら怒られた。

「ボーつと見てないでお前も手伝え！」

……もつとも。

ひとしきり治療を終え、妻を案じる（フリをした）旦那を励まし続けるレオリオだったが、私もそろそろ力を示さないとな。

「さて……。いつまでそうしているつもりですか？ 魔獣さん」

「お、おい……。何言ってるんだカーム！ この人は……」

「傷が浅い。躊躇い傷もある。本物だったらそうはならない」

彼がニヤリと笑う。

「……いつから？」

「生憎、最初から。そういう特技だね」

「お、おい！　じゃあゴンとクラピカは大丈夫なのか!？」

「彼等なら心配ない……。もう終わった」

「……つかくッ！　最初からバレてましたか！　いや、これはお恥ずかしい」

「中々の演技でしたよ。普通なら騙されてます」

「慰めにもなりやしませんよ……」

「と、言うわけでこれも試験の一部だ。レオリオ君」

「レオリオでいーよ……参ったぜ、全く」

その後、無事全員合格を貰い、束の間の空中遊泳の後ザバン市に到着した。定食屋に入り、凶狸狐さんがステーキ定食をじっくり弱火で注文し、別室に案内して貰った。そこからエレベーターで定食を食べながら降りていった。

ステーキ定食は美味しかった。



エレベーターで地下100階迄降りた時、そこには400名程の人々が屯していた。番号札を受け取ったが、私は406番らしい。ゴン達はずんぐりむつくりした男に話しかけられているが、私はある人物を探していた。…奴もいる筈だが……いた！同じ受験生の両腕を切つて天井にくつつけている。さて、どうやって絡もうかと考えていたら、そのずんぐりむつくりにジュースを手渡された。トンパと言うらしい。懐かしい。いたな、そんなの。

ゴンが一口飲もうとして下剤入りだと見破つたため、企みは不発に終わったが、私は後で美味しく頂こう。

さて……そろそろ仕掛けるか。ちよつとゴン達と離れて、僅かに殺気に乗せた《円》を伸ばして……おつ、気づいた。うわつ。満面の笑顔。やっぱり変態だな。普通あんなりアクション取らないぞ。直ぐに歩いて近づいて来た。

ゴン達は遠くから心配そうに見ていたが、心配無いとジェスチャーした。

「キミ……いいね?? ボクに何か用かい？」

「ああ……。君に用事があつてね。ヒソカ君。私はカームという。よろしく」

「これはこれは…ボクも有名になったもんだね◆? で、用事って?」
 「取り引きをしたい。君の知ってる情報を教えて欲しい」

「…それで、ボクに何の得があるのかな?」

「試験終了後、私と闘い合う…でどうだ?」

「うーん…君の真の実力によるなあ??」

「では、少し見せてやろう」

私は隠しているオーラを解除し、《纏》を行った。

「!!!? これは! ハハハハハ! 君…: 凄くいい!!
 ねえ! 今すぐ闘ろうよ◆?!?!」

うわっ…: 食い付き過ぎ…。しかも股間が盛り上がってないか…? 流石に引くわ…:
 すぐさま《纏》を解除して

「まあ落ち着け…。私もハンター試験が終わるまでは大人しく受けたい。…他にも用事が有るから…。だが、軽くなら試験中に相手してもいい。私の用事はハンター試験終了後に話そう。それでいいか?」

「うんうん！ それでいいよ？ 愉しみだなあ◆？」

「そうそう、私の仲間があそこにいるから手を出したらこの話は無しね」

「お、アレかい？ うん…勿体無いケド…でもいいよ◆？」

「よし。それじゃ。ああ、仲間が近くにいない時はいつでも仕掛けていいよ。じゃ、お互い頑張ろう」

「ああ…ああ…最高だよ…君は◆？ タルい試験だと思つたら最高の遊び相手が来てくれたなあ◆？ お互い頑張ろうねえ…??」

何か恍惚の表情でトリップしてるヒソカを置いて、私はゴン達のもとに戻った。彼らには心配されたが、用事があつたからとだけ伝えた。

そして…試験開始のベルが鳴った。



ヒソカは退屈していた。大した獲物も居ないこのハンター試験に2度も受験しなければならなくなった事に。

だが、それは仕方がない。前回は自分が遊び過ぎたせいだ。改める気は全く無いが。今回も適当に品定めをして、殺人衝動を満たしながら試験官ごっこでもやろう。今回は頼りになる友人も受験しているから何も問題は無い。そう思つて絡んできた受験生を切り刻んでいた所：ソレに触れた。：何という芳醇で濃密な殺気を孕んだオーラ：！ 瞬時に消えてしまったが、出所は分かった。あの黒ずくめのスーツと帽子の男：！

ヒソカは歓喜した。先程のオーラにあの佇まい。只者じゃない：！ 即座に「彼」のもとへ向かう。ヒソカの期待と股間は既にピンピンに高まりつつある。最早他の有象無象は視界に入っていないかった。

ヒソカは「彼」の前までたどり着く。平静を装いながらも用件を聞くと、ヒソカを持つ情報に興味があるらしい。ヒソカは少し落胆したが、次のセリフを聞いて再び興奮した。「彼」と鬨り合えるらしい。ヒソカが満足出来る様に期待しながらも、実力を見せて、とせがんだら、凄まじい《練》が返つて来た。それ程の《練》は見たことが無い。：あの以前から狙っていた団長よりも：！ ヒソカは絶頂に達しそうになりながら直ぐに鬨おうと強請つたが、断られた。試験まではお預けだそうだ。そんなの持ちそうにな

い、今すぐ襲おう、と思つたら、試験中でも軽く相手してくれるらしい。「彼」の仲間の手を出さない事が条件らしいが、もうそんな事はどうでもいい。多少見込みがありそうだから勿体無いが、目の前に極上の料理があるからだ。おつまみ程度、いくらでもいるし、まだ収獲には早すぎる。

「彼」は別れ際に仲間が居ない時はいつでも仕掛けていいと言つてきた。これ程活きのいい獲物はいつぶりだろうか。それほど自信があるのか……！ 何という完成された美!! 来て良かった……！ そう思えた。

彼の頭の中は「カーム」で埋め尽くされた。どうやって壊してやろう……そう考えながら、ヒソカは試験開始のベルを聞いた。

61、一次試験（後編）

試験開始のベルが鳴る。

小さな出入り口から出てきたのは、髭の執事風な男だった。彼は参加者405名とし、参加するかどうかの確認をして歩き出した。

：良かった。受験は認められたか。ハンター試験は再試験出来ない。今回はそこが最大の難関だと言つてもよかつたからな。その内スピードが上がり、マラソンとなつた。我々も彼に付いて走る事となる。執事風の男の名はサトツさんと言うらしい。：この人も中々出来るな。恐らくプロの上位に入っているぐらいはある。コミックを読んでる時は分からない発見があつて面白い。

しかし：怠いな。こんなペースで走るのは久しぶりだから仕方ないが、確かかなりの長時間走つた筈だ。：ヒソカの気持ちちがほんの少しだけわかつてしまった。だからといって試験官ごっこなんてやらないが。

ゴンは早速新しい人物と話をしている。銀髪のゴンと同じ歳ぐらいの少年だ。：彼

がもう一人の主人公の「キルア」だな。どれ、挨拶しとこう。

「やあ、初めまして。私はカームと言う。ゴン達とご一緒させてもらってる。よろしく」
 「!!? ……あ、ああ、オレはキルア…よろしく…」

「どうしたの？ キルア」

「……何でもねー。ゴン、ちよつとペース上げるぞ」

「あ、待つてよ！ 本当にどうしたのさー！」

彼等2人は離れていった。…おかしいな。一般人レベルに擬装していた筈だが。彼の危機センサーに反応したか？ ……だとしたらまだまだまだ上手く隠せて無いな…。仕方がない。レオリオがちよつとヤバそうだ。様子を見ながら一緒に行こう。



「アイツ……ゴン達はアイツとずつと一緒に居たのか？」

「アイツつて……カームの事？ ドーレ港からずつと一緒だったよ」

「ゴン…お前、アレ見て何とも感じないの？」

「いや…多少変わってるし、凄く強いってのは分かるけど…」

「アレがお前には“人間”に見えるのか!? どう見てもバケモンだぜ！」

「いや…流石に失礼だよ…。普通に見えるし。それに、いい人だよ。間違いない」

「ゴン、お前…。もつと危機感持った方がいいぞ…。アレはヤバい。オレでさえ見た事

ないヤバさだ…。下手すりゃヒソカの何倍もヤバいぞ…」

「そんなに!? …でも、そんな風には見えなかつたなあ…」

「まあ、ヒソカと同じであまり近寄らない方がいいと思うけどな」

「そう言えばあの人、ヒソカと親しげに話してたような…」

「やつぱりヤベー奴じゃねーか! いいか、死にたくなかつたら今後はあんまり近寄る

なよー!」

「う、うん…」



80キロから100キロを超えた時点で漸く登り階段に着いた。レオリオが何回か危なかったが、気合いで持ち直したようだ。もう半裸に近いが気合いで何とか走っている。彼のカバンは私が代わりに持っている。

クラピカは、そんなレオリオを励ます様に自分のハンターについての動機を話していた。仲間との絆の眼と幻影旅団の事だ。レオリオもそれに応えていた。……一度クラピカとは話をしなければならぬ。

そう思っていたら、私にも話を向けられた。

「カームは何故ハンターを？」

「……私は、……人間」として生きたいからだ」

「ハア？ 何言ってるんだオメー！」

「……そうだな。レオリオではないが、私も同感だ。人間として生きるだけならハンター試験に受ける動機が無い」

「なら聞くが……人間」とは何だ？」

「!? ……改めてそう言われると……難しいな」

「私も“それ”を探している……。私の敬愛する弟は、絶望しかかっていた私に“希望を持って”と伝えてくれた。私の尊敬する師匠は言った……“生きる”と言う事は“前に進む事”だと……。だからこそ、私はハンター試験を受けなければならない。私にとって

は、それが、それこそが“人間として生きる”と言う事だからだ」

「希望を持って…前に進む…」

「君の目的や復讐を否定するつもりは毛頭無いよ、クラピカ。そうしないと前に進めない時もあるのは事実だ。……だが、君はもし…その“目的”を終えてしまったら…どうするつもりだ？」

「……………」

「……待っているのは“絶望”だ。私は状況も場面も全く違うが、似たような絶望を味わった。だからこそ、希望は必要なのさ。私が“人間”として生きる為に。…それが動機だ」

「…何だかよく分からんが、大変だったんだな！」

「目的を…終えたら、か…」

「何。これは人それぞれ。私の戯言だ。聞き流してくれ。…ただ、クラピカの“目的”は私の“希望”に合致するかもしれない。まだ話せないが、この試験を終えたら話そう。まずは無事に合格する事だ…。そうでないと始まらないからな」

「!! “奴等”について何か知ってるのか!？」

「それもまた試験が終わってからだ…。これすら突破出来ない様では話にならないし、私自身話す気も無い。…そうだろうか？」

「…そう…だな。その通りだ。今は試験に集中しよう」

「その調子だ…。レオリオも頑張っているからな」

見ると、凄いい勢いで階段を走るレオリオがいた。今はこれでいいだろう。まだまだ試験は長い。

私も頑張らねば。まずはヒソカだな。上手く操縦せねば…。



階段を登り切ったら、見渡す限りの湿原が姿を表した。「ヌメーレ湿原」、通称『詐欺師の峠』だ。早速試験官を騙る奴が出てきたり、サトツさん諸共攻撃するヒソカもいたりしたが、まあ余興だろう。…私の勤ではまず「ここ」で仕掛けて来るな。

…退屈だったから逆に楽しみになっている。いかな。自重せねば…。

しばらく走っていたが、どんどん霧が深くなる。…懐かしいな。あの時も似たような感じだった。レベルは段違いだが。

周辺の何名かは霧で方向を見失い、怪物に襲われようとしている。

……ム力つくな。自分が「何」にム力ついているのか分からないが、非常にム力ついている。「この場所」のせいか。「あの時」を思い出す。…無力で1000人を全滅させてしまった「あの時」を。

「レオリオ！ クラピカ！ 私は少し離れる！ 君達は前へ進め！」

「おっ、おい！ 大丈夫か?」

「私なら心配要らん！ また必ず合流する！」

そう言ってカバンを返して強引に飛び出した。控えめのオーラダツシュで、イチゴを背中に生やした亀を半分にカチ割り、地面に擬態したカエルの腹を裂いて呑み込まれた者を救出し、嘘を言つて人を誘導するカラスを念弾で消滅させた。その他にも危なかった者達を救出した。

…自分でも自己満足とは分かっている。しかし、そうせずにはいれなかった。助けた形になった者には正しい方向を教えておいた。

…しかし、そんな時に「奴」が来た。正確には、レオリオとクラピカの近くにいる集団に、だ。極力バレない様に奴に触れないぐらいで隠した《円》を展開しているから分かる。彼がトランプを投げたのが《円》に触れた！ このままだと受験生に刺さるな。…仕方ない。《円》の一部を硬質化させ、トランプを弾く。そして私も現場へ辿り着く。

「仲間の手を出したら『あの話』は無しだと言った筈だが？」

「…まだ手を出してないからセーフだよ♣？ それに過保護は良くないなア◆？ 成長を妨げちゃうよ♠？ …それにしても、『今の』はどうやったんだい？」

「『手品』、さ。どうやったか当ててみなよ。君の本分だろう？」

「いいねえ…?? じゃ…早速だけど闘ろうか♣？」

「我々も援護する！」

クラピカとレオリオが戦闘態勢に入るが、

「心配いらぬ。ヒソカは『私』に用事があるようだ。君達は先に行け！」

「だが…」

「なあに、これぐらいは出来ないよ『希望』に届かないのさ。直ぐに追いつくから大丈夫だ。君達も『目的』があるのだろうか？ いいから行け！」

「ツ…！ 濟まない！ 恩に着る！ 必ずまた会おう！」

「クソツ…！ 無事でいろよ！ カーム！」

2人は私にその声を掛けてから立ち去った。周りの受験生も便乗して付いて行つた。

「さて……これで2人きりだ。邪魔は入らない」

「ああ…愉しみだよ◆？」

「あ、それだけどうする? 『全部』ここでやる? 私としても割と楽しみにしてたから『それ』は試験後に回したいんだけど…」

「……いきなり腰を折らないで欲しいなあ◆? じゃあ軽く手合わせって事で?」

「殺気ムンムンのオーラしてて良く言うよ…。まあいい。掛かって来い」

「……君が来るんだよ◆?」

彼は私とクラピカ達との会話中にこつそり（と思っている）オーラを飛ばしてくっつけていたものを引き寄せる。私は素直に彼の策に乗って彼の元へ飛ばされた。

ズギヤツ!!

彼のもとに着くや否や、強烈な蹴りをお見舞いされる。私はしつかりとガードを固め、その勢いで軸足に同時に足払いをしたが、ジャンプして躲された。そのまま踏みつけが来たが、こちらも躲し、足を掴んで投げつける…が、ゴムで戻って来てパンチをして来たので、軽くズラし、そのまま手首を掴んで地面に叩きつけた…と思つたらブリッジで耐えてる! やるね! 彼は元に戻るその反動で逆に私を投げて来たが、また引つ張ってきた。いい加減鬱陶しいな。だがまあ仕方ない。カウンターをしようと構えていたら、ヒソカの頭にゴンの釣竿の先端がぶつかつた。

ドコッ!

ヒソカも予想外だったらしい。私はそのままヒソカに突っ込んで共に倒れ伏した。

…うわっ！ コイツ股間が膨らんでる！ 気持ち悪っ！

慌てて彼から距離を取り、乱入者の方を見ると、案の定ゴンだった。

「……やるね ボウヤ♣？ でも、タイミングが悪かったね◆？」

そう言ってトランプを割と強く念を込めて飛ばしたので、私も近くの石に念を込めて飛ばして弾いた。

「…//彼//も私の仲間だよ」

「ふくん…まあいいや。興が削がれちゃった♣？ また後にしよう。…もうそろそろタイムアップみたいだし◆？」

すると、ヒソカの腰から着信音が鳴り出す。

「ほらやっぱり?! ……OKすぐ行く◆？」

ヒソカはケータイを切った後、

「君は本当に楽しいなあ♠？ 全然本気じゃなかったろ？」

「軽く、と言ったろう？ それにお互い様だ」

「?? じゃ、また後で…。また遊ぼうねえ♣？」

「ああ…またな」

そう言ってヒソカは立ち去った。さて…

「ゴン…無茶をする。君まで危なかったぞ。でも助かった。ありがとう」

「ああ…うん」

「…大丈夫か？ とにかく進もう」

「…そうだね」



しばらくお互い無言で走っていた。光子オーラや《円》で探るところで合ってる。

足跡などで丸分かりだ。レオリオ、クラピカも同じ様に先を走っているから心配ないだろう。すると、ゴンが話かけて来た。

「カームはさ……何でヒソカと闘えるの？ 怖くないの？」

……ふむ。彼の殺気の念に当てられたか。

「鍛えたからな」

「それでも！ …オレは怖かった。でも、ワクワクも同時にした……。……つ！ 何て言ったらいいか分かんないけど、とにかく他にも闘える理由が知りたいんだ！」

「そうだな……。私には『目的』がある。『希望』と言つてもいい。その為に必要だからさ。私にとって、怪物や超人と闘うよりも、『それ』がなくなつてしまう事の方がよっぽど怖い」

「それで自分が死んでも？」

「……そうさ。寧ろ、死ぬ時こそ前のめりでいたい。そんな度し難い『人間』なんだよ」
「……そっか。何となくは分かるかもしれない。オレもジンを追う目的が無いと、くじら島でのんびり暮らしてただろうし。でも今の方が絶対楽しい」

「……そういう事さ。さて……クラピカ達が道を外れ始めたな。騙されたか。ゴン。ちよつと肩に肩車で乗つてくれ。飛ばすぞ」

「えっ……？ 分かった……これでいい？」

「しつかり掴まってるよ」

そう言つてかなりのダツシユを始めた。

「~~~~~!!」

…その後、正しい道を外れていた2人及び受験生達を回収して、正しい方角へと向かった。



無事に湿原を超え、二次試験会場に辿り着いた。我々も、何とか無事に間に合つたようだ。いきなり波乱の連続だったが、何とかなつたな。今のところは順調だ。着いた先はビスカ森林公園だった。

そして…二次試験が始まる。

62、二次試験

二次試験は、確か…料理じやなかったか。そう考えていたら建物の扉が開いた。中から出て来たのは大男と刺激的な服装の女だった。メンチとブハラか。実際聞くと凄まじい腹の音だな。そしてやはり料理か。ブタの丸焼き…ね。これなら仲間全員大丈夫だろう。

私も巨大な鼻のデカイブタを瞬殺し、丸焼きにした。

他の面々もやはり大丈夫だった。そして…合格者70名で試験は終了した。ブハラは70頭の丸焼きを全て食べ尽くした…よく入ったものだ。オーラも増えてる。恐らくそういう能力かな？ 私が助けた他の受験生はブタに軒並み返り討ちにあつていた。あの湿原をクリア出来ないようなら仕方ないな。生きてるだけ幸いと思つて来年頑張つて欲しい。…あれ？ でも来年つて…。まあいい。さて…次が本番だ。

「二次試験後半 アタシのメニューは スシよ!!」

…ほくら、おいでなすった。実際かなり難しい課題だな。私も流石にスシを美味しく握れる自信はない。…まあ、暗黒大陸産の魚？は捌き方によつてはかなり美味で、多分合格を貰えるだろうが、出所を聞かれたら面倒だ。よつてここは周りに合わせてテキトーに作るに限る。私はこの先を知ってるからな。

その内、魚という事がバレ、ハゲ忍者のハンゾーのせいで形もバレた。そろそろ作るか…。

作つてみたところ、「惜しい！」との事。やっぱり理不尽だ…。

そして、無事(?)合格者0で試験は幕を閉じた。キレたレスラーが絡みに行つたが、ブハラにぶつ飛ばされた。流石にオーラは纏つてないが、いいパワーだ。

そんな事よりヒソカさん、ちよつと抑えて抑えて！ 殺気とかオーラとか駄々漏れだから！ 友人のギタラクル(仮)は何考えてるか分からない顔してるし。先程からチラ彼から視線を感じるが、若干警戒されてるか？ 君には興味無いからほつといひたい。キルアには手を出さないから…。

すると、巨大な飛行船が姿を表し、かなりのオーラを持つ者が飛び降りて来た。器用

にオーラを分配し、見事に着地する。熟練の技だな。

現ハンター協会会長、アイザックⅡネテロその人である。

流石に雰囲気があるな。…あんな虫けら如きに相打ちさせてしまうのが勿体無い人物ではある。この人はなるべく死なせたく無いな…。

彼は飛び降りた後、メンチと話し、再試験が行われる運びとなった。途中で私の方をチラ見してきたが、知らないフリをした。

再試験は山へ移動してのクモワシの卵取りである。まあ余裕だ。他の面々もいい感じだ。茹で卵は中々美味しかった。暗黒大陸の物程では無いが。寄生虫や細菌を無視すれば、天上の美味と言える物も数多くあったからな。

多分私にしか出来ない事だろう。いや、ドンさんなら上手く調理して食べそうか。そういうえば、彼らは今何をしているだろうか。あの3人(?)組の珍道中も中々面白そうではあるな。そう思うだけで私は絶対に行かないが。

二次試験も無事終了し、合格者は43名となった。全員飛行船に乗り、次の会場まで

移動する。次の会場には翌朝到着だ。本当に順調だなあ。さて、後3つ程か。条件達成まで後僅かだな。気を抜かない様にしよう



試験官は、揃って食事をしながら今期の受験者について話し合っていた。何人残るか
の話題になり、ルーキーがいいという話に移り、44番（ヒソカ）の危険性の話題になっ
た。

そんな最中、会話に口を出す者がいた。

「406番、はどうじゃ？」

「「会長!!!」」

「何、今回の受験者の話をしとるのが聞こえてのお。で、どうじゃ?」

「あの黒づくめのマフィアみたいな奴ですか? 中々ルーキーにしてはいいとは思いますが…。パッと見そんな目立たないというか…」

「そうですね…。筋はいいと思います。恐らく武術の達人でしょう。しかしオーラは他の受験者と大して変わりないように見えました」

「…確かに…メンチが全員落とした時も、彼だけは平然としてましたけど。まるで風のように落ち着いてましたね——。でも、会長が注目するほどです?」

「フオツフオツフオツ。お主らもまだまだ甘いのか…。今回の試験で一番危険な奴はアヤツじゃよ。うまーく隠しておるが、44番なんかよりもよっぽどヤバい奴じゃ。下手したら我々より上かもしれんぞ」

「!!!」

「会長! どういう事ですか!?! あたし達より上つて…」

「文字通りの意味じゃ。ワシらより強い、と言うておる」

「まさか…会長よりも、ですか?」

「うむ…その可能性はある。ワシは少ししか見とらんが、あの身体の動きは別次元じゃ。抑えてこそおるが、同じ人間かどうか怪しいぐらいにな。武術家として見ても底が見え

ん。また、あのオーラもよく見るとかなり不自然じゃ。《纏》すらしておらんから一般人に見えるし、質がクリアすぎて分かりづらいが、それでもかなりの量が隠れておる様に見受けられる」

「!! そういえば、一次試験開始直前に爆発的なオーラが遠目に見えましたな…。44番かと思つてましたが、今思えば彼はあんなクリアなオーラじゃない…」

「そんな奴がいるなんて…。参つたな——。オレは全然気付かなかつた」

「ワシも“406番”は警戒しておる。彼が何を目的にこの試験を受けたか…。鬼が出るか蛇が出るか、じゃな」

「ふーん…。ねえ会長。あたし、気になるから担当は終わったけど近くで見えていい?」

「あ、オレも気になる」

「私もですな。是非顛末をじっくり見てみたい。…本当に“彼”が会長の言う通りなのか…。もしそうだったら私も本当に修行が足りませんな」

「何、気にするな…。ワシも前情報が無ければ気付かん可能性も有つた。ワシも修行が足らんわい…。じゃから皆で観戦するとしよう」

「…前情報、とは?」

「それはまだ言えんがの。確信もない状態じゃし。しかし、この試験でそれが分かると思つておる」

「…今年はいろんな意味で本当に豊作ですな。何が起こるか分からない点も含めて」

「そうじゃのう。ワシも気合いを入れねばならんな」

「会長……」

「そういう訳で、ワシはルーキー共をからかってくるわい。…406番には様子見するがな」

「…程々に。他のルーキーはまだまだひよっこですからからな」

「ワシを誰じゃと思っておる。無茶な事はせんよ」

「よく言うわ！」

「まあまあ、メンチ……」

「フオツフオツフオツ……。じゃあまたの」

そう言つて会長は部屋を出て行つた。残された3人は、この試験が荒れる事が容易に想像出来てしまい、次の日以降の試験の行く末に暗い思いを馳せる事となつた…。



ゴン達は飛行船内の探検へと出かけ、クラピカ、レオリオ達はトンパの嫌がらせにもめげずに身体を休めている。ヒソカとギタラクルは何処かで休んでいるようだが、私も探らず放置している。『今』仕掛けてくる事は無いだろう。では少し瞑想でもして時間を潰そう…。

………

………

………誰か来たな。

これは…ネテロ会長か。何の用だ？ ……まだ早すぎる。

「見事な瞑想じゃの〜。そして、もうワシに気付いたか」

「………これはネテロ会長。私如きに何の用です？」

「何、今年のルーキーが豊作じゃからからかいに來ただけじゃよ」

「それはそれは…ありがたい評価ですね」

「そう謙遜するでない。ここまで残るのも並大抵ではないからの。…しかし、お主には簡単過ぎたか？」

「いやいや…私もやつとの事でクリアしてますよ…。反省点も多いです。なので、ここで瞑想しているわけです」

「そうか…。その割には中々筋金入りに見えるがの。そうやっていると何か掴めるのではないか？」

「いえ…昔からやつてるから慣れてるだけです。まだまだ眼を閉じて心を落ち着けるだけで精一杯です。何か掴めるといいんですけどね」

「…まあよい。ワシもお主には期待しておるぞ。カームIIアンダーソンよ」

「…今〃は406番、ですよ」

「おお、そうか。うっかりしとつた！ スマンスマン。では、また次に進める事を期待しとるぞ、406番」

「ありがとうございます…。そうなる様に努力しますよ」

「ではな…また会おう」

そう言って会長は去って行った。ふむ…探りを入れに来たな。まああんな名前で応

募すれば当たり前か。疑いが強まった……と言う所だな。まあいい。それでいい。私の目的まで後少し。想定通り順調に進んでいる。そのまま進みます様にと祈りながらも、私は瞑想を再開した。



気づいたら結構な時間が過ぎていた。私も頭の中でシミュレーションを繰り返し、今後の予定をたてていた所だ。時刻は朝の9時半。いよいよ到着だ。

予定時刻より遅かったのは、会長が原作通りゴンとキルアと遊んでいたからだろう。さて、ハンター試験も後半戦だ。気合いを入れていこう。

63、三次試験

飛行船から降ろされた場所は、円形の高い広場だった。しかもかなり高所だ。 “ここは「トリツクタワー」だな。懐かしい。最近は良く前世の記憶が戻って来るようになった。まだまだ先の細かい部分や日付等は記憶が薄い所があるが、それは仕方ない。大まかな流れがわかるだけでもかなりのアドバンテージだと思おう。

さて、合格条件は72時間で下に降りて来る事。パツと見える範囲には何も無いが、床に仕掛けが施されている。そこから降りていくわけだ。私ならそんな事しなくても飛び降りる事は可能だが、それをやってしまうと高確率で早く着いた変態に絡まれるだろう。よって、ここは正攻法で行こう。

そう思っていたら、86番の男が壁面のとつかりを伝つて降り始めた。クライマーか。暫くは順調だったが、彼方から怪鳥が飛んできて狙われ始めた。

…懐かしいな。私も経験がある。両手両足が塞がる為、オーラで対応せざるを得なかったし、時には奴等を足場にしながら殺して回るしか無かった。彼には無理だろう。監視も強まつてるし、あまり念は使えないから仕方ない。隠した念弾を掠らせて追い払

い、次元収納からこつそり長いロープを出して彼を引き上げた。次元の扉は服の中で展開している為バレないだろう。

助けた彼はしきりに感謝していたが、これも私の自己満足だ。正攻法で脱出出来る事を祈ろう。

その後、人数が減り始め、半分近くになった頃、漸くキルアやゴン達、クラピカやレオリオ達も気付いてきた。そして…5つの密集した入り口を発見した。私を含む全員が入れる数だ。お互いに健闘を祈りながらも、そこから下へと降りた。

…しかし、全員同じ部屋で合流した。…そうだったな。ここは○×の多数決で進む場所だ。キルアは私がいる事で若干嫌そうだったが、我慢して欲しい。揉める事もあまりないだろうからな。

全員で腕輪をつけると扉が出現した。私は腕輪を左手の元からある腕輪の若干上に装着した。

扉を開ける時から始めて、右左の選択まで聞かれた時、私はかのブリオンの都市の事を思い出した。…あの時は確か右を選択したな。レオリオとゴンは左を選択したようだ。理由を聞かれたが、その時にクラピカが解説してくれた。左を選びやすいからあえて右だそうさ。…そうか！この場面だったな！あの時は君の知識を覚えていて

良かったよ…ありがとう…！ 私は心の中で彼に感謝した。

進んだ先は闘技場の様な場所だった。厳ついハゲ頭に傷のある男が解説してくれた。3勝したら我々の勝ちだ。勝負を受けるかの採決後、最初はあのハゲ頭が1番手と言った。

他の奴等より少し危険だな。私が行くか。

闘技場まで橋が伸びてそこを渡ると、ハゲ頭がデスマッチを要求してきた。望むところだ。「まいった」を言わせる方向で行こう。



「……あくあ。死んだな、アイツ」

「……ま、まあ、あの人はそこまでしなと思うよ…。多分…」

「……やはり“彼”はそんなに強いのか？ ヒソカと渡り合って無事だったから何となくは分かるが…」

「うん…。オレはちよつと見たけど、動きの次元が違ったよ。相手の人もかなり強そう

「だけど、レベルが違う感じがする」

「本当にそうならヤバイ強さだな…。仲間であんなに良かったぜ」



「それでは、勝負!!」

彼は体勢を低くして突っ込んで来た。恐らく元軍人かな。戦闘訓練は受けているようだ。だが、まだまだ甘いな。狙いがバレバレだ。喉を潰してこちらを喋れなくした後、拷問でもするつもりかな？

中途半端にダメージを与えても「まいった」は言わないだろう。なので、オーラで片をつける。

彼がマウント体勢を取りに突っ込んで来た所を、すれ違い様にカウンターを入れる。最小の力で関節部分に力を加えて「外す」。彼がすれ違い終わった時には四肢の主要関節は動かなくなった。

「!!」

「さて……これで君は動けない。……どうする？」

「くそっ!! オレは言わないぞ!!」

「……そう言うと思った。ではこうしよう」

ズズ……

私はオーラにほんの少し殺気を混ぜて彼に伸ばした。

「ひっ!!!」

「さあ………どうする？」

「わ、わかった!! オ、オレの負けだ!!!」

「よし。いいだろう」

私は出したオーラを解除した。



「……なんだ!? 何が起きた!?!」

「彼〃から一瞬凄いい気配を感じたぞ!」

「キルア! あれは一体…つて! 端っここに貼り付いて何やつてるの!?!」



「やはり念能力者…! しかもかなり熟練の!」

「〃アレ〃は強いわね…。確かにあたし達でも難しいかも…」

「でも、オレ達を超えるかっていうと——つて、会長! どうしたんですか!?!」

「……素晴らしい…。久しぶりに血が沸くぞい…! 久しくあれ程の者は現れなかったからのう…。お主らも先程のテープを後で見直すといい…。面白いモンが見えるぞ」

「…と言うと?」

「どうやつとるかには知らんが、奴は余剰分のオーラを大気中に溶かしておる…。もし〃それ〃が全部見えたら…どうなる…?」

「!!?」

「そんな事が出来るんですか!？」

「分からん…。本当にそうかも分からん。…だが、面白い」

「馬鹿な……」

「あのく…。そんな事より、何故みなさん“ここに”に集まってるんです？ やりづらいんですけど…。しかもそれ、私のお菓子……」

三次試験官リツポーの部屋は、会長及びそれまでの試験官の駄弁り場と化していた。

◇

「よっしや！ これで一勝だな!!」

私が彼の関節を全てはめ治して戻ると、レオリオやゴン、クラピカが祝福してくれた。キルアは顔色が悪そうだ。

「……アンタが改めてヤバい奴だと再認識したよ」

「……まあ無理はないが、これもれつきとした『技術』だ。君達にもいずれ分かるだろう」
「ねえねえ、『アレ』、オレ達にも出来るの!？」

「ああ。時間をかける必要があるが不可能じゃない。人間なら誰でも可能性は持っている。機会があれば教えてもいいが……まずは試験に集中しよう」

「あ、そっか……。そうだね……」

「向こうは揉めてるな。まあ一番手があればじゃそうなるか」

「おっ……やつと次が出てきたぞ。誰が行く？」

次の男は、どちらかと言えばヒョロガリだ。頭脳派かな？

「オレが行く！」

そう言つてゴンが飛び出した。……まあ大丈夫かな？ 相手は長短の口ウソクを2本出してきて、その炎を消さない勝負を申し込んできた。……あいつ2本しか出してないけど後ろにもう2本隠してるな。汚い。流石試験官汚い。まあ気付かない方が悪い……か。案の定、ゴンの選んだ長い口ウソクは激しく燃え出したが、彼は自分の口ウソクを床

に置いて相手の炎を吹き消した！ ……こういう奇想天外な、しかし非常に理にかなった発想が彼の素晴らしい所だろう。普通の発想では辿り着けない天性のギフト。それを持っている。…やはり彼は素晴らしい。私には無いものだ。

彼が戻ってきた。これで2勝だ。さて…どうするかな？ すると、向こうから女性のシルエットが見えた。マントや手錠を取ると、やはり女性だった。

…レオリオが行きたそうだ。…スケベめ。そして、向こうは「時間」をチップがわりに賭けを提案してきた。最初のアレのせいで絡め手を多用してきたな。…ここはクラピカが行った方が良くない？ しかしレオリオはヤル気満々だ！ まあ武闘派に当たってボコられるよりマシか…。

そして…スケベ心や心理戦の虚を突かれ、ものの見事に負けて帰ってきた。50時間まるっと負債を抱えて…。あのさあ…。もっと真面目にやろうよ…。

皆の気持ちが一つになった瞬間だろう。流石にレオリオも反省したか、土下座ポーズで固まっていた。…まあしょうがないか。『人間』だものな。

こちらの残りはクラピカとキルア…中々いいな。

次に出て来たのは、大柄の髭の男だ。…何となくアンソニーを思い出す。いや、姿形は全く似てないが、雰囲気似てるのだ。マッド具合的な意味で。多分彼も何処かしら

狂っているのだろう。

レオリオが解説してくれた。反省から立ち直ったらしい。早いな！ ……奴はザバン市犯罪史上最悪の大量殺人犯で、「解体屋バラシヤジョネス」と言うらしい。やつぱりね。

快樂の為に人を殺す…ね。ヒソカもそうだがやはり理解出来そうにない。まだゾルデイツクの方が理解出来る。まあマフィアも似た様なもんだが、流石に快樂的に殺人はしない…と思う。少なくともアンダーソンではそうだ。

とにかく、向こうがそう来るならここは彼に行つて貰おう。

「キルア。出番だ」

「お、おい！ オレの話聞いてたか!？」

「………何でオレ？」

「アマチュアに負けるプロはいない。そうだろう？」

「………チツ。わーったよ。行くよ」

そう言つて彼は闘技場へと向かう。クラピカまで心配していたが、何も問題無いだろう。

試合が始まつて速攻でジョネスは心臓を抜き取られた。…彼も好き勝手していただ

ろうから自業自得だな。それにしても、一分の狂いも無い精密な肉体の動き。流石だ。この歳で極限まで鍛えている。同じ歳のマイケルより肉体的には数段上だ。勿論私の同じ歳よりも、だ。別格の才能がある。ゴンとキルアは才能の底が見えない。暗黒大陸を真の意味で攻略できるのは、こういった人物なんだろうな。だからこそ、未来のキメラアントの襲撃は本当に憎たらしい。多くの才能や人材が失われてしまった。

だが、今は私がいる。情報が入った時点で即潰しに行つてやる。覚悟しろよ。虫ども。：巻き込まれたゴンやキルアもそれまでには鍛えておきたいな。万が一があつては困るからな。

それはともかく、キルアも戻つて来た。称賛の言葉を述べたら慚然とした表情をしていた。「アンタに言われたくない」だと。本音で言つてるんだが嫌味に聞こえてしまつたかな？

無事に3勝を先行出来た我々は、レオリオの負債を払うべく、別室待機となつた。50時間か…。結構な長さだな。ただ、これはチャンスだ。彼等にも少し念についての概要を伝えておこう。

別室に着いた時、軽く《円》をして監視カメラを発見して、念弾で破壊する。彼等は私から「何か」が発せられた事に気付いたようだ。

「カーム、今の“これ”がさっきの？」

「そう…。 “これ”が『念』と言う」

「…親父や爺ちゃん、兄貴からたまに感じてたのは“これ”か」

「なんだか分からねーけど、すげー圧迫感だな…冷や汗が止まんねー…」

「知ってる者と知らない者では天地程の差が出るからな。『念』とは、極論“なんでも出来る”。無論、得意不得意はあるが。君たちもハンターを目指すのであれば、必須事項と言える。ハンターは望む望まないに関わらず“武”を要求される。よって習得は急務だ。習得していない者では、習得している者にほぼ勝ち目は無い」

「ずりーよな。 “そんなの”があるなんて。…何でオレには教えてくれなかったんだろ
うな…」

「…『念』を支えるのは“強い肉体”と“強い意志”だ。これが中途半端では中途半端な能力者にしかなれない…。逆に言えば、君は余程期待されている、と私には映る」

「……………」

「ねえ！ “なんでも出来る”って言ってたけど、例えばどんな事が出来るの!?!」

「そうだな…。例えば会長が空から降りて来て無傷だったろう。あれもそうだ」

「「なるほど…」」

2人は納得いったようだ。会長には遊んで貰っただろうから心当たりもあるのだろう。

「それ以外にも“こんな事”も出来る」

私はメモ用紙を破ったものに《周》をして、壁に投げつけた。紙は壁を貫通し、見えなくなった。

「私も！ 私にも出来るのか!？」

「当然だ。クラピカ。寧ろ君こそ必須だ。君の敵は全員『念能力者』で、しかもその達人だからな」

「！」

「だからこそ、この絶好の機会に概要だけは伝えておこうと思う。本来ならばかなり長期スパンで習得するものだ。だから今すぐに習得は出来ない。しかし目覚め方は教えよう」

「やった！」

「だが、『念』は奥が深い。目覚めただけでは大した事は出来ん。修練が必要だ。だから、ハンター試験を無事合格したら私が教えてやろう。無論、不合格なら無しだ」

「…わかった。これでまた試験に合格する理由が増えたな」

「へーっ。すげえな！ “なんでも出来る”か…。医療にも使えるかな？」

「使い方次第だが…可能だな。実際に私は『念能力』で治療する医者を知っているからな。…嫌な奴だったが」

「最後の情報はいらねえよ…。だが希望が見えてきたな！ オレも頑張るぜ！」

「よし。では、初歩の初歩、〃何の為にこの力を使うか〃を瞑想しながら考えるのだ。自分の意志をはつきりさせろ。それ一点のみに思考を絞れ…まずはそこからだ。簡単そうに思えるが、中々難しい。まずはやってみるといい。私も様子を見ながら共にやろう」

そう言つて、残り時間はそれに費やした。最初が肝心だ。こんなにも才能溢れる彼等を即席で目覚めさせるなど、勿体ないにも程がある。まずは〃意志〃を強くもつこと。そして、それが出来たら身体に循環するオーラを探る事に移ると伝えた。時間は限られていて、オーラを探る所迄は行かないが、ハンター試験後もまだまだ先は長い。充分間に合うだろう。何せ、彼等は〃天才〃なのだから…。



「くっ！ カメラが破壊された！ 残念！」

「しかし…部屋全体を満遍なく網羅する《円》ですか…」

「オレは《円》は苦手だから羨ましいよ…」

「ふむ…。流石に見せてくれんか。残念じゃが仕方ないのう。他の受験者でも見とくか」

「あの…そろそろいいですか…？ ホントにやりにくいんで…」

リッポーの苦難はまだまだ続く。



時間が来た。残りの攻略を行う。全員、集中して取り組めたようだ。顔つきも更に意志が強まった様なものになっている。これならすぐにオーラにも目覚める事が出来るだろう。

さて、残り時間も迫っている。攻略を急ごう。

その後、幾度となく○×の選択を迫られたが、全員で力を合わせて無事に乗り越えた。気持ち一つで意地悪な試験も協力して難なく乗り越えられる。それもまた“人間”の良いところだろう。

残り時間も後4時間程度だ。急がねば。そして…。最後の別れ道の設問に来了。5人で進める困難な道と3人の簡単な道だ。残り時間的には前者は選べない。これはどうしたかな…と思つた時にゴンが解決法を提案した。5人の道を選び壁を破壊する、というやり方だ。やっぱりゴンは天才だ。全員で壁の破壊にかかろうとしたが、お礼に私から念弾で一撃で大穴を開けてあげた。皆啞然とし、念能力の凄まじさに改めて戦慄したようだ。ともあれ、これでクリアだ。若干危なかつたが何とかなつた。

中は滑り台となつていた。無事に全員合格を果たす事が出来た。我々は最後では無く、最後はトンパともう1人の2人組が降りてきて、そこでタイムアップとなつた。これにて三次試験は終了だな。

さあ、あと少しだ。

64、四次試験

試験が終わってから直ぐに外に出された。三次試験官と共に今までの試験官と会長もいた。いつの間に塔に入ったのだろう。どことなく名前も知らない三次試験官は疲れているように見えた。

三次試験官が言うには、次と其次で終わりらしい。よしよし。順調だな。そして、四次試験の説明もあった。「狩る者と狩られる者」だ。それぞれのナンバープレートを奪い合う。自分が3点、ターゲットは3点、他は1点だ。合計6点集めなければならぬ。タワー攻略順にクジを引き、それぞれ獲物を確認する。私の獲物は362番…。拳法少年っぽい奴だな。

ここから見える小島に船に乗って2時間移動するらしい。道中はそれぞれが自分のプレートを隠し始めた。まあ私は大体覚えてるから困りはしない。

むしろ……ここで2回目に来るな。ここが正念場だ。気合いを入れて行こう。

それぞれが順番にスタートする。私は最後の方だ。今回はゴン達には一切干渉しな

い。彼等の成長を妨げたくは無いからな。

私も目的を達成したらそのまま隠れてやり過ごそう。

さて……。森の中に入っては来たが……。いきなり来るとはな。

「なあ、ヒソカさんや。もう少し待てなかつたか？」

「待てるわけないジャン◆？ さあ、とことん闘ろう??」

「…仕方ないなあ。じゃあ、少し相手をしよう」

「この時を待ち焦がれたよ…◆？ じゃ、始めよう◆？」

そう言うと、周囲から様々な石や枝、カードが私に向かって飛んできた。ゴムの反動を使つてな。まあ分かつて「ここ」に来たわけだが。ヒソカもトランプを複数枚飛ばして来る。ま、ここは乗ってやろう。

全て弾いている隙に、ヒソカはジャンプして木々の中に身を隠す。…成る程。私が苦手な絡め手できたか。確かに苦手だが、よく分かつたな。あの時の数瞬の攻防で導き出したとしたら大したものだ。圧倒的な実力に加えて、天才的な戦術勘が彼を支えているものだろう。その間にも彼は気配を消しながら樹上をゴムで高速で飛び回り、こちらの

隙を狙って散発的にカードを飛ばして来る。：仕方ない。もう少し見せてやるか。

《円》！

半径20メートルの範囲で広げる…いた！ 右後方上10メートル！ ヒソカは感心した顔をしながら、凄いスピードで逆に私に突っ込んで来た。：なるほど。待つてたか。《円》状態だと、普通は攻防力移動は出来ないからな。流石の戦闘勘だ。ここぞというところを見逃さない。かなりのオーラを込めた手刀で首を狙って来ている。普通はガードしても貫通する奴だな。：普通はな。ガードして予定通り右手の平の肉と骨の一部ごと貫通され、首に届きそうになる。しかし、私も待つていた。

《内浸透勁》！！

「カハツ…：◆？」

彼は堪らずその場から離脱し痙攣するも、気合で耐えて距離をとった。：やるなあ。普通は悶絶してのたうち回るぞ。

「…………やるね◆？ ここまでダメージをもらうなんて久しぶりだよ◆？」

「右手を犠牲にした甲斐があつたな…。さて、ヒソカ。私はダメージもあるし、監視されている以上、ここから先はあまり見せたくない。一旦ここ迄にしよう。まだまだ試験は

「続くしな……。君のダメージも暫く休めば抜けるだろう。そして、私の分析が出来ただろうからな。次を楽しみにしているよ……。それじゃ」

私はその場から瞬時に離脱した。流石のヒソカも追撃はしなかったようだ。助かった。



「やあ。珍しいねー。獲物を逃すなんて。それに、派手にやられたねー」

「……見たのかい？ まあ見ての通りさ??」 彼は素晴らしいよ！ 今までで最高の相手だ♣?」

「うーん……オレからすると相当な危険人物なんだけどなー。キルに近づいてるし」

「……あれはボクの獲物だ♣? 邪魔するなら容赦はしないよ◆?」

「……ハイハイ。分かってるよ。じゃあ君の周りをウロチヨロしてる奴ならいいかな?」

「あ、ホントだ♣? 彼も契約の一部だし、美味しそうだから駄目だよ?」

「ワガママだなあ……。でも、いいよ。短い付き合いだがヒソカの好みは把握した。それ

に今すぐキルをどうこうするわけじやなさそうだからね」

「分かってくれたなら嬉しいよ♣？　じゃあボクは身体を少し休めてから狩りに出るから、お互い頑張ろう◆？」

「あ、やっぱり結構なダメージだったんだ。まあ健闘を祈るよ」

そう言ってイルミは去って行った。ヒソカはその場で身体を休めながら、どのようにして「彼」を攻略するかを楽しく考え始めた…。



あ、危なかった…。一瞬見つかったけど、直ぐにその場から離れて助かった。「あれも念かな？　だとしたらますますチャンスがないなあ…。今は身体を休めてるけど、全く隙が無い。

仕方ない。彼が獲物を狙うチャンスを伺ってプレートを取れる様に練習しよう。釣り竿で取れる様に頑張って練習しなきゃ。



さて、右手を復元して…と。ワザと手袋は外しておいて良かった。あのまま続行されても面倒だ。双方痛み分けの形にもついていけたからな。とりあえず私の用事は終わったな。後はターゲットから奪うだけだ。しかし私をまだ監視してるな…。かなり出来る人だ。私に存在を掴ませないとは中々の《絶》だ。まあいい。そろそろ開示し始めてもいいだろう。光子オーラ展開！ さて、ターゲットはどこにいるかな？ と、いた！
ラッキー！ では早速、

「やあ！ 悪いけどプレートはいただくよ」

「くっ！ 見つかったか！ 仕方ない、かかってこい！」

「では遠慮なく…」

私は高速で正面から近づき、顎にデコピンを喰らわせる。相手はなす術なく崩れ落ちた。悪いと思うが、運が無かったと諦めて欲しい。何、殺されはしない分またチャン

スはある。来年は無条件で会場に招待されるらしいからな。

“ここ”での用事は終わった。では、私はゆっくり休むとしよう。まずは監視を撤くか。私の《絶》は凄いで。なんせ暗黒大陸でも通用したからな。では……



「……見失いましたな……」

折角くじ引きでメンチに勝ったのに残念です。…ブハラは追跡・監視向きじゃないから悔しがってたんですがね。

しかし、彼の闘いには目を見張るものがありました。何という体術とオーラ技術！

もちろん44番も素晴らしいですが、まだまだ彼には余裕が見える。…本当に底が見えない。恐らく手を犠牲にしたのはワザとですな。その証拠に手が元に戻ってる。どうやったのかは分かりませんが、彼の能力でしょうか？ そうだとしたら驚くべき能力だ。

体術も素晴らしいの一言。何処となく古いカキンの拳法に似ていますな…。最後の

技も謎です。本当に興味深い。確かに我々でも勝てるかどうか怪しいですが…彼がどこまで隠しているかによりますね…。索敵する時のオーラを粒子状にするやり方などは最早理解が出来ないものですし…。

これで一旦彼は追えなくなりました。引き続き搜索しつつ、発見したら様子を見ましょう。



…誰も見てないな。ヨシ。先程丁度いい湖を発見した。この湖の底で期限まで過ごそう。別に土中でも良いのだが、土の中は閉塞感が酷い。メンタルがやられる。よって水の中だ。私は昔から水中は好きだ。発見されるリスクもあるが、深くにいれば問題ないだろう。

服も頑丈だから脱ぐ必要は無し。時間が分かる防水のデジタル時計だけ出して置いて…入水！

おつ、中々深いな。これはありがたい。先程から私を狙って来る巨大魚共を切り刻み、底に到着する。さて、ここでのんびり期限までゆっくりしよう。瞑想すればあつという間だな。ここは景色もいし退屈しない。では……………



あーもう！ 何でくじ引きでサトツさんに負けちゃうかなあ。参ったわ。折角会長とブハラを排除出来たのに、肝心なトコで運がないわね。

大体サトツさんもすぐに見失っちゃってるし…。でも、彼と44番の闘いとか見れたのよね…。羨ましい。

兎に角探さなきゃね。他の受験者にも見つからないようにしなきゃ。結構神経使うわ。必ず見つけ出すわよ！ 美食ハンターの名にかけて！



……見つからない。一体どこに行つたのかな？ 他の奴はキモい針野郎以外は見つかつたのね。プレートの発信機を問い合わせたところによると、この湖を指してるけど……。かなり深いわね……。多分水深によるけど見えないか。息も持たないし……。まさかシーハンターよりも息が続くのかしら。それとも湖底に洞窟でもあるのかしら？ どちらにせよ今の装備じゃお手上げね。残念だけど一旦戻るしかないか……。まあ彼が水中活動も得意だつて分かつただけでも成果かな。



さて……。そろそろ時間か……。名残り惜しいが行こう。出てよく時間を確認すると、本当に時間ギリギリだ。ヤバ……。ゆっくりし過ぎた。もう帰還受付が始まつてるな。ちよつと飛ばして行くか！

よし、到着。間に合ったようだな。残る受験者は10名か。よしよし。ゴン達もいるな。良かった。ヒソカを見つけたらウインクしてきた。：気持ち悪っ！ 一応偽装の為に両手に手袋を付け直した。もう少しだから我慢我慢。

「ゴンは何やら落ち込んでいるな。：何かあったかな？ あまり気落ちして無いと良いが。」

船も飛行船も近づいて来た。後は漸くメインディッシュだ。長かったがやっと終わる。目的達成まであと僅か。頑張らねばな。



「10人中7人が新人ルーキーか。ほっほっほっ。豊作豊作」

「たまにあるんですか？ こんなことって」

「うむ。たいがい前ぶれがあつてな。10年ルーキーぐらい新人の合格者が一人も出ない時期が

続く。そして突然わつと有望な若者が集まりよる。ワシが会長になってこれが4度目かのー」

「へえ——」

「ところで最終試験は一体何をするのでしょう?」

「あ、そうそう。まだぼくも聞いてないね」

「新人の豊作ルキの年かどうかは、まだ最終試験次第だもんね」

「うむ、それだが…一風変わった決闘をしてみらうつもりじゃ」

「?」

「そのための準備として、まず10人それぞれと話がしたいのオ」

「…ということは、彼とも話す、ということですね?」

「うむ。当然じゃな。…寧ろ、奴はこれこそが狙いだつたのかもしれない」

「どういうことですか?」

「ワシと直談判する機会を待っていたかもしれない、ということじゃ。ワシがこうする、ということを読んでおったかもしれない」

「まさか…」

「否、と言えんところが恐ろしいところじゃ…。鬼が出るか蛇が出るか、楽しみじやのう」

65、面談

「え——これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は2階の第1応接室までお越し下さい」

——遂に来たな。最終試験の為の面談。この面談を参考にして、お互いで試合をする事になる筈だ。漸くはつきり思い出したが、やはりそうか。まあ無かつたら直談判するところだったから手間が省けた。

私にとってはこれがもう一つの目的だった。貴重なハンター協会会長とのサシでの話し合いだからな。他にも方法はあつたかもしれないが、1番穩便に、且つ邪魔が入らないのはこのハンター試験だけだ。

ここまでできたら、後は私の交渉力が試される…。父さんやマイケルはこういう所も上手かったのだらうな。特にマイケルなんか国とハンター協会から不干渉を勝ち取るぐらいだから、並大抵の能力じゃない。…今だけは、彼らに並べる様に私も努力するしかないな。気合いを入れていこう。

今、44番のヒソカから呼ばれた。…という事は私は最後だな。向こうも疑っているから最初か最後のどちらかだと思っただけだ。ならばその時まで待つていよう。いついかなる時も動じない様に、心を落ち着かせ、瞑想をしながら…。



「受験番号406番の方、406番の方おこし下さい」

よし、行くか。

第1応接室に入ると、座敷の様な部屋で、向かいには会長が座っていた。…監視はないようだな。本当にサシでの面談らしい。ありがたい。

「よく来たの。まあすわりなされ」

私は言われるがままに座布団へと座る。

「さて……お主には聞きたい事が幾つかあるが、まずは先にこちらを済ませよう。お主以外の9人で注目している者と、闘いたくない者を教えてくれんか？」

成る程。メインは後か。

「…注目しているのは405番、404番、403番、99番、ですね。闘いたく無いのは44番です。彼とはこの試験後に約束があつてね」

「成る程のう……。では、お主はなぜハンターになりたいのかな？」

……おいでなすつたな。

「私の場合は、〃人間として生きる〃ためですね。だからぶつちやけて言えばハンターにならなくてもいいんですよ」

「ほう！　ここまで来たお主がハンターにならなくても良いと申すか！　では何の為にハンター試験を受けたんじゃ？」

「……私の存在は周りには少々刺激が強いみたいだね。私が人間らしく生きたくとも〃

そう“させてくれないらしい。だからハンターと言う身分は必要なですよ…。逆に言うのと、“それ”が保証されさえすれば、極論私はハンターライセンスすら必要ないのです”

「……どういう意味じゃ？」

「会長…貴方は、アンダーソン及び私についてはかなり知っている筈だ。最近までハンター協会に身の回りをウロチョロされてましたからね…とほけないで知ってる事を擦り合わせた方が話が早いですよ。」

「……カームⅡアンダーソン。20歳。サヘルタ合衆国を束ねるマフィアのドンにして十老頭の1人であるジョンⅡアンダーソンの3男。我々が調査した結果はこれじゃ。…しかし、230年前に暗黒大陸に赴きMIAとなった同性同名の男がおる。その男はハンター協会のシングルハンターとして登録されており、二つ名まである大変優秀な怪物ハンターじゃった。その二つ名を『壊れない男』、アンブレイカブル、という」

「ふむ。それで？」

「…アンダーソン家と協会はその男の事で揉め、最終的に『カームⅡアンダーソンが帰還した場合、如何なる干渉をも禁ずる』という正式な条約を結んだ…。そして、昨年、未知の飛行物体が暗黒大陸から現れた。調査してみると、アンダーソン家まで辿り着いた。そして、先程出たジョンⅡアンダーソンの3男の情報が“突然生えた”。…お主の

事じゃ。それからというもの、アンダーソン家はお主の名義で突然慈善事業を始めた。サヘルタの各地の家庭に直接赴き、無償で支援や補助を行っていたのじゃ。昔の借りを返す”とな。…その家系を辿れば230年前の暗黒大陸上陸作戦に参加した者まで辿り着いた。中には墓前に“ドッグタグ”が供えられた家もあった…。ここまですがワシらが把握しておる事じゃ。…ここまですで何か異論があるか？　ワシが聞きたいのは、お主が“本当は”何者か、という点じゃ。“それ”によつて我々も対応がガラツと変わるでな」

「ほう！　流石はハンター協会！『アンダーソン家には不干涉』”という条約もあるのに、そこまで調べるとは中々優秀ですね」

「茶化すでない…。ワシらハンター協会にとつても『暗黒大陸』の話は最重要事項じゃ。調べない訳にはいかん」

「散々な目に遭つたからですね？　知つてますよ会長。不可侵条約がV　5で締結された後も、協会や国は無謀な渡航を繰り返した。その数なんと149回！　そして戻つて来れたのはたったの5回！　そして帰還者は驚きの28名!!　さて…何人が犠牲になつたんでしょうねえ…。まるで“あの時”から学習してない。案内人も嘆くわけだ」

「…やはり…お主…!」

「その通り。私がカムIIアンダーソン。230年前のシングルハンターにして

『アンブレイカブル
壊れない男』の二つ名を持つ者……。これが証拠ですよ」

私は懐からハンターライセンスを取り出して見せた。

「私が望むのは、『これ』の“更新”。流石に今の機能には対応していなくてね。ハンターライセンスは再取得は出来ないようだから是非お願いしたい」

「……何故わざわざこの場を選んだ？」

「私はね……貴方の事は評価しているのですよ。ネテロ会長。貴方が途中から渡航を差し止めた事で無駄な犠牲は減った。貴方の目の黒いうちは大丈夫という安心感がある。もう“あんな所”に行つて無駄に命をすり潰す事は無い……とね。だからこそ、この場を選んだ。……貴方と一対一で話せる場をね……。協会が一枚岩じゃないのは昔からの伝統だ。変なチャチャを入れられるのは嫌いでね。副会長辺りからちよつかいをかけられたら思わず全て“無茶苦茶に”したくなる、かもしれないですしね」

私は部屋からはみ出ない程度で濃密なオーラを滲み出させる。

「……もし我々が“それ”を認定しなかったら、どうするつもりじゃ？」

「わかつてるくせに。ハンター協会はこの提案を断れない。もし断つて、ハンターライセンスを新発行した場合はそれはそれでよし。私も別人として生きましよう。ただし、230年前の事を掘り返して無茶振りするようなら…結果は同じ。また、試験を落として知らんふりした場合も同様だ。その上で余計なチャチャを入れる輩には更に徹底的にやりますよ」

「…それは脅しかな？ 本当に出来る、とでも？」

「いやだなあ。『提案』ですよ。私も“人間”だから、出来るだけ暴れたくはないですしね」

「もし“更新”した場合は我々も国も手は出せん、という事じゃな？」

「その通り。よくお分かりで」

「これまた愉快的『提案』じゃのう！ 結局我々はお主に手を出せんと言う事じゃな！

…しかし我々もそのまま言いなりでやってあげるわけにはいかんでな。ワシの権限でそれを通すには“それなり”の証拠を見せて欲しいもんじゃのう。ライセンスなど極端な話どうとでも出来るからの」

「そう言うと思いましたよ。じゃあこれ」

私は次元収納をワザと大きく開き、そこからあるものを取り出した。

「これは…」

『万病に効く香草』。『向こう』のリターンの一つですよ

「!!! お主…攻略したのか！ 例の『迷宮都市』を!!」

「ええ。しました。…非常に多大な犠牲を払ってね。正直ハンター協会にはその件で私も少なからずムカついているのですよ。危うく私も緑頭の一人になる所でしたからね。ですが、数少ないけれど『それ』は差し上げましょう。それが私に対する不干渉の報酬とでも思ってください」

「『これ』…は…受け取れん。今の人類にはいたずらに混乱を招くだけじゃ。お主、分かって言っておるじゃろう」

「はは、バレましたか。しかし困りましたねえ…。どうしたら納得出来ますか？」

「ワシと闘え。それでよい」

会長から闘気が漏れ始める。うつすらと背後に観音像が見える。私ももう少しオーラを漏らす。

「ほう…。シンプルに来ましたね。で？ 方法と場所は？」

「今すぐこの場で…といたい所だが、無理だろうな。いつでもいいぜ。合わせる」

「口調が変わってますよ。会長。まあいいでしょう。この試験終了後、44番との約束を終えたら、でいいならね」

「ふふふ…それでよい…久方ぶりだなあ。こうまで血沸くのは…！ がっかりさせるんじゃないぞ」

「それが素のキャラですか？ 私も楽しみですよ…。失望はさせないのでご安心ください。とりあえず立会人は極力無しでお願いします。…そうだな。1人までなら許可しましょう。最後に、私はこの後最終試験ですが、組み合わせは適当に入れといてくださいね。あ、44番以外でお願いしますよ。では…」

私は立ち上がり、退出した。ネテロ会長は獰猛な笑みを浮かべている。はあ…やつぱりこうなったか。まあいい。大体ここまでは想定通りだ。



やっぱりな。ほぼ間違い無いとは思っていたが、これで確定じゃ。あやつが真の暗黒大陸の帰還者で間違いない。その強さは…身近で見分ける。相当な強者！ 凄まじい研鑽の跡が動きに見える。ワシよりも確実に…。

オーラはやはり大気に溶かしておったな。どうやっとするのか全く分からんが、偽装も一級品じゃ。果たしてどれ程の強さか…。ワシも思わず闘いを要求しちゃった。この歳で挑戦者になるとは、長生きするもんじやい。恐らく44番もあやつには勝てんじやろう。何故44番にこだわるかはまだ分からんが、何がしかの意図があるに違いない。…とりあえずは試験後、彼奴に日付と時間と場所を交渉せねばな。

あの漏れ出したオーラから見ると、ワシの今の実力が通じるかどうかまるで分からん。こんな事は久方ぶりじゃ。本気で楽しみになってきたのう。カームIIアンダーソン。暗黒大陸の真の帰還者よ。その実力を存分に見せて貰うとするかの。



最終試験はそれから3日後に行われた。内容は「決闘」だ。勝ち抜けというか、負け

上がりシステムという前代未聞のシステムだ。私と言えば対戦相手はハンゾー君だな。意地悪はされなかった様だから助かる。ハンゾー君も中々の才能を持っているようだし、ここは一つ、純粋な体術で相手しよう。懐かしいな。私も最初はジャポンで修行しようとしてたんだっけな。ジャポンの体術、実に楽しみだ。

66、最終試験

「それでは最終試験を開始する!! 第1試合! カームvsハンゾー!」

参ったな……。のっけからヤバイ奴が来ちまった。まだヒソカの方がマシに思えるくらいだぜ……。オレも雲隠流の上忍だ。体術には自信はあった。

だが、目の前に立ってみりや分かる。コイツは……バケモンだ。見た目は普通に見えるが、重心の安定感、バランス、筋肉の密度、そして、隙の無さ……。どれを見ても超一流だ。オレと大して歳は違わない様に見えるが、どんな鍛錬を施したらこうなるかわかんねえ。格が違うとはこの事だな。

奴は構えてすらないのにこれだ。普通なら舐められたと頭に来る所だが、これは当然の格差! 幸いこの試験は殺すのは無しだから良かったものの、殺し合いなら速攻で逃げ出してる所だぜ。

……まあ、格上と闘ういい機会だ。世界は広い。オレも自分の全力を出し切れる相手はそうそういないから胸を借りてみるか。

当然、こちらから仕掛ける。いつちよ付き合ってくれや。

始めに煙玉で煙幕をはる。：奴には効果は薄そうだが、肢曲を併用して近づき、右手の仕込み刃で首を斬る！ 万が一殺しちまったらそれでもよし、だ。多分無理だろうがな。

!!! 止められた!! やはり! どうやって……!!!

「ほ惜しいひい」

馬鹿な!! 歯で止めるだど!? しかも動かん!! 押しても引いてもだ。そして引いた瞬間に合わせて解放された。追撃をと思ったが、嫌な予感がして一旦離れた。

「最初から全力で殺りに来るのは流石だな。だが、余りにも直線的すぎる。フェイントを幾つか入れるといいだろう」

奴が喋っているが、普通は首がそのまま飛んでくぞ。今までの相手はそうだったからな。再び喋っている間に仕掛けるが、全てを片手で弾き落としている。喋りながらだ。… 戦闘力が違いすぎる！

少し離れて、緩急をつけた残像を残して背後に回り、手刀を打ち込むも難なくその場で躲される。奴は「後ろを向いたまま」だ。そのまま幾つか攻撃を行い、全て躲すか弾かれたが、後ろに眼でもついてんのか!? だが舐めるなよ!

攻撃に紛れさせ肩口を「掴んだ」! このまま合気で膝を抜いて転ばす!

グツ!!

な…!! 動かん…!! 何故だ! 仕方がない、蹴りで…手を掴まれた! そのまま奴はこちらに向き直る! 不味い! 手首が持つていかれる!

仕方なく合わせて回転するが、そのまま地面に叩きつけられそうになった為、顔面を仕込み刃で刺そうとするが躲される。だが、手は離してくれたので更に自分で勢いをつけて何とか足から着地する。この距離は不味い…!

無駄だとは思ったが2回目の煙幕を張り、特注の「連発式吹き矢」で離れながら各所に5発はお見舞いする。暫くすると煙が晴れたが…全て指に挟んでやがる…。

「ふむ…。見たところ自然由来の神経毒だな。中々やるじやないか。さて…。ジャポンの体術、堪能した。私も昔習いたかったが状況が許さなくてね…。だからここで体験出来て良かった。だが、まだまだ君も伸びる。更に鍛錬を積むといい。ああ“これ”は返すよ」

— そう言つて奴は矢をオレの足元に投げた。針は地面に埋まつて見えなくなつた。：バケモンめ。だが、ここまで差があると逆に清々しくなる。奴に暗器は通用しない。故に純粹な武で行く。オレも一人の武闘家として、コイツと出来る所まで試合つてみたい。そして…：せめて一発でもお見舞いしてやる！

「ここからは一武人として手合わせを願う！」

「…いい貌になつた。覚悟を決めたか。それこそが獣にはない“人間”の良さだ…。私もそれに応えよう」

奴も初めて構えを取る。先程以上のプレッシャーがくる。静かなのに重厚だ。右足を引いて足を前後に開き、左半身を前にして腰を落とし、両手を上下に構える…。カキ

ン…だな。しかしかなり古い型だ。今の健康法のものとは訳が違う。本物の「武」だ。オレの全力がどこまで通じるか…勝負だ！

——張り詰めた空気が漂う。既にこの空間の空気は鬨気でぐにやりと歪んでさえる。

オレは充分に攻撃プランを考え、先に奴へと飛び出した！ 奴はまだ動かない。トツプスピードで奴に迫り、最速の右拳のストレートをぶつ放す…！ 奴がガードの構えを取った！ 瞬時に切り替え右脇腹に蹴りを入れる！ すると奴はジャンプして躲した！ バカめ！ それは悪手だ！ 着地する前に攻撃を入れる！ そのまま回し蹴り！

ガツ！！

当たった！ しかし何だこの感触は!? まるで手応えが無い！ …しかし、空中で激しく回転している。もう一度！

スツ

!?

蹴り足の上に乘られた!!!

馬鹿な!? 重さを感じないぞ!!

奴は、私の足から降りて言った。

「見事だ。あまりにもいい攻撃だったからつい“ズル”をしてしまったよ。では私からも攻撃に移ろう。いいか、必ず避ける。行くぞ」

奴はその場でパンチを放ってきた。何の変哲もないパンチだ。…だが、“これ”はヤバイ! 即座に脇目もふらず後方へ退避する。奴はそのパンチをそのまま地面に叩きつけた。

ピッシャーン!!!

雷でも落ちたかという程の衝撃が走り、地面が蜘蛛の巣状にヒビが入る。…駄目だ。こりや無理だわ。

「さて……続けるかな？」

「いや……。オレの負けだ。まいった」

「いいのかな？」

「いい。アンタは最初の位置から動いていない。…オレも修行不足だな。だが為になつた。ありがとう」

「礼を言うのはこちらだよ。付き合ってくれてありがとう」

「…アンタ程の奴がいるとは思わなかった。後では非連絡先を教えてください」

「もちろん、いいとも。君も次を頑張ってください」

「ああ……。じゃあな」

——世界は広い。オレもまだまだ未熟。試験が終わっても鍛錬は続けよう。そして、

いつか：奴の顔面にクリーンヒットを入れてやる！ それまで首を洗って待ってろよ！



ああッ!! いい♣? 実にいい!! 素晴らしい?? 一体キミはいくつ引き出しを持ってるんだい? コレはもう：運命だ◆?

彼はこの試合で殆どオーラを使ってない：一瞬足の上に乗った時ぐらいだ◆? してそれも何の念能力かさっぱり分からない：♣?

コレで確定したね：彼はボクと闘った時も全然実力を見せてない♣? 本気の彼がどこまでの力かまるで分からない：こんな事は初めてだ◆?

ああ、キミは：どこまで：どこまでボクを、魅了するんだい??

もう旅団すら、団長すらもどうでもいい キミは：キミは絶対にボクが殺る◆? 楽

しみにしてるよ…?!



なんなんじゃアレは…。ワシでも見た事無い程の練度！ 彼には恐らくは凄まじい修練があった。そしてそれが実戦と経験によつて更に極限まで研ぎ澄まされておる…！

驚くべきはあの動きに一切オーラ技術が含まれないという事じゃ。つまり純粋な体術と肉体性能のみであれだけの事をしおつた！ 使つたのはあの足に乗る時だけじゃ。

そして…あれはもしや、伝説の“軽気功”！ 最後の攻防に使われたのは“消力”！ 信じられん…。いずれも幻と言われる超高等技術じゃ。流石は真の暗黒大陸の帰還者じゃな。

ワシも歳甲斐もなくワクワクしておる…。奴に対してはワシは本当に挑戦者じゃ。もつとサビを落としておきたかったが仕方ない。

全力をぶつける…！ 覚悟しておれよ、カームIIアンダーソン！



それから試験は順調に進んだ。第2試合のヒソカvsクラピカはヒソカが完全に遊んでいた。まるで心ここにあらずで私の方をチラチラ見ていた。：逃げないからそんなに熱い視線をよこすのはやめてくれないかな…。結局、テキトーに闘った挙句、彼は「まいった」して次に進んだ。クラピカは納得いかなかったようだが、まあ契約を律儀に守っているらしい。そういう所は妙に誠実だな。不気味だが。

第3試合はゴンvsハンゾーの試合となった。ハンゾーはゴンを拷問し、「まいった」を言わせようとしたが結局出来なかった。

私は両者の気持ちが無となく分かるので黙って見ていたが、中々辛いものがあるな。だが、それでも引かなかったゴンとハンゾーには拍手を送りたい。これこそが“人間”としての闘いであったからだ。実に美しい闘いだ。終わった後など涙が出そうだった。哀れゴンは負けを宣告したハンゾーにぶつ飛ばされて気絶した。

この結果にはキルアは納得がいていなかったが、まだまだだな。これはそう単純な

闘いじゃないんだ。まあキルアも追々わかっていくだろう。

第4試合、ハンゾーvsポックルさん。なんかポックリ逝きそうな名前だが、彼つてマジでポックリ逝かなかったっけ？ 具体的にはキメラアント辺りで。非常に無慈悲なやられ方が印象に残っている人物だ。確かポンスさんもそうか。当時あまりにも衝撃的でまだ覚えていた。…やっぱりクソ虫共に慈悲は無い。分かり次第マジで跡形も無く殲滅しに行つてやる。

試合はハンゾーが一方的にボコつて終わりだった。ゴンと同じ形になって彼はすぐに「まいった」した…。やはりゴンは素晴らしい資質があると言うことだ。

第5試合はヒソカvsボドロさん。これはまあ…。ヒソカがボコボコにしたとだけ。地力が違いすぎるからなあ…。

第6試合、キルアvsポックルさんはキルアが余裕を見せてワザとまいったした。勝てる時に勝つとかないと良くないぞ、と言ったが「だつてつまないんだもん」と彼は言つた。思春期の子の接し方は私も難しい。

第7試合はレオリオ対ボドロさんだったが、彼はボロボロだったので延期になった。そして、第8試合、キルアvsギタラクル。これが問題だった。わかつてはいたが、イルミの登場だ。しばらく黙って聞いていたが、彼のキルアに対するやり方はやはり気に食わない。キルアだって“人間”だ。

「ちよつと待った。聞き捨てならない。キルアはどう見てもお前の言う闇人形じゃないだろう。純粹に試合は出来ないのか？」

私も思わず口を出した。

「……これは家族の問題だ。部外者は口を出さないで欲しいな。…特にキミには関係して欲しくない」

「家族の問題をこの場に持ち込むな。やるなら試験を終わらせてからやれ」

「…キミは試験官じゃないだろう？ 見てみなよ。周りを。これは許された行為だ。オレも、キルもね」

「私が不愉快だと言っている。キルアの人生はキルアが決める。決してお前に強要され

るもんじゃ無い……。どうしてもというのならこの試合を終わらせてから家族で話し合え。ただし、キルアの意志はお前の意見と違うようだぞ？　そして私はキルアを味方するぞ」

「ふうん……。だつてよ、キル。まずはこの試合を終わらせようか。でもキルはオレに勝てるかい？　……ムリだね。オレが口を酸っぱくして教えたからね。そして、オレが勝つたら家に帰るんだ」

「キルア。今回はいい。わざわざソイツの挑発に付き合う必要は無い。『まいった』を言え。その上でお前は私が守つてやる。お前には次の試合もある。だから気にするな」

「キミは何様だい？　口を挟むな。これはオレとキルの問題だ。キミには関係ないね」

「それをキルアが本当に望んでいるのか？　お前の勝手な想像だろう。それを試合中に押し付けるな、と言つてるんだが？」

「家族間の問題だと言つてるだろう。分からないかな？　それに試合中だ。部外者は黙つてなよ」

奴も不穏なオーラを放ち出すが、私も徐々にオーラを漏らし始める。気に食わない。家族の問題とは言え実に気に食わない。キルアは漸く自由意志を持ち始めたのだ。こんな小さな子供が殺人ばかりやらされて嫌にならない筈がない。私の家族とは大違い

だ。それは「愛」とは呼ばない。「エゴ」だ。

家族は勿論大事だが、こんな奴の所にいたんじや歪んでしまう。一時的に避難も必要だろう。イルミが邪魔すると言うのなら、私が防ごう。あそこまで見せて、まだ私と敵対するなら上等だ。私も引けなくなった。向こうもそうだろう。

一触即発の空気が流れる。既に私も5000オーラぐらいは漏らし始めている。流石に試験官も止めに入れないようだ。もう1ミリでも動けば開始の合図になった時、キルアが叫んだ。

「まいった！ オレの負けだ！ ……だから、もう2人ともやめてくれ…オレは家に戻るよ…」

「キルア！ それでいいのか!？」

「…あー良かった。穏便に済んだね！ でもこれで分かったろう。お前に友達を作る資格はない。その必要もない」

「だからお前が決めるんじゃないと言っているんだ」

「……本当に黙っててくれないかな？ 折角おさまったんだからさ。今回はキミの負けさ。大人しく引き下がったらどうだい？」

「貴様……!」

そうこうしているうちに、キルアが会場を飛び出していった。…私も追いかけたが、「来るな！」と、拒否されて、私はその場に立ちすくむしか無かった。

…彼とうまく信頼関係を築けて無かったのが悔やまれる…。今更、原作の知識が甦ってきた。…このポンコツ頭め！

会場に戻ると試合が始まっていたが、負けたボドロとの試合にキルアは現れず、不戦敗となった。

…必ず取り戻すからな。待っていてくれ。そしてイルミにも反省はさせてやる。…必ずだ。

結局、彼1人が不合格になり、最終試験は終了した。

67、ヒソカとの約束

苦い思いが残った最終試験だったが、新たな目標も出来た。キルアを連れ戻す、という事だ。今はハンターについての講習会だ。イルミはいけしやあしやあと残ってる。

その中でキルアの件でレオリオとクラピカと一緒にゴネたが通らなかつた。残念だ。まあ仕方ない。やはり彼の意志を確認せねばならない。彼にも修行をつけると言った手前もあるし、私自身も彼を追い詰めた責任がある。あれは今思うとやり過ぎた。私が口出しすべきでは無かつたのだ。：だが、我慢が出来なかつた。私は家族というものにこだわりすぎるのかもしれない。もつといい方法があつたかもしれないが後の祭りだ。とにかく、用事が済んだら彼の家に行こう。

と、思っていたら、目を覚まして事情を聞いたゴンがやって来て、イルミの腕を掴んで責め立てた。いいぞ！ もつとやれ！ だが、イルミがなんかしようとしたら即念弾を撃つ準備だけはしておく。

イルミの腕が締め上げられ、骨が砕ける音がし始める。イルミも流石にオーラで圧をかけ、漸くゴンは手を離れた。：撃たなくて済んだか。アレは完全に折れてるな。ざ

まあ。そしてゴンさん、流石です。

講習後、皆はハンターライセンスについて話したり、連絡先を交換したりしていた。私もポツクルさんやボドロさん、ハンゾーさんと連絡先を交換した。：ポツクルさんには後で変な虫の調査はするなとそれとなくメールしておこう。

私はまだハンターライセンスを持っていない。私のハンター試験は終わっていないからだ。今持っているのは仮発行されたものだ。

ここから楽しい2連戦が待っている。楽しみでもあり、不安でもある。だが、やると決めた以上やり通さねばならない。特にヒソカが不安だが、何とかしよう。

ゴン達は、やはりキラアを取り戻す為にゾルディック家に向かうようだ。イルミに聞いていた。私は後から近づいて、用事があつて2、3日遅れるが、必ず行くと伝えて彼等と別れた。

さて…やるか。

「待たせたかな？」

「とつてもね?？」

「場所は決めたかな？」

「ここから北へ40キロの地点に広大な無人地帯がある…走ってボクについてきてよ?」

「いいだろう。立ち会う者はいるかい？」

「そんなヤボな事はしないよお◆? とことんやりたいからね◆?」

「なるほど。じゃあ私の用事もそこで話そう。では行くか」



ヒソカは本当にウキウキ気分で、スキップでもしてるかの様に街中を走っていて、街の住民から避けられていた。私も似たような目で見られたが、同類と思われるのは心外

だ。ちよつとあいつから離れて走ろ。

…離れて走つてもあんまり視線は変わらなかつた。…何てこつた。街は徐々に規模が小さくなり、田舎っぽくなり、遂には人や建物が無くなった。そして、そこから更に10キロ程進むと、荒寥たる岩石地帯が広がっていた。

「さあ、着いたよ♣？ 闘ろう?？」

「待て待て、話が先だ…闘る前に私の用事を聞いてからにしろ」

「しようがないなあ…で、何だい◆?？」

「幻影旅団の団長に会いたい。頼めるか?？」

「…何でキミが知ってるのかなあ? 不思議だねえ♣?？」

「それは秘密。ただ、伝手があつて情報戦は得意な方でね…。団長とはただ『取り引き』をしたいのさ。これが中々つかまらなくてね」

「ふーん…まあいいケド◆? それが約束だもんね♣? でもキミ、この後それが出来るかなあ?？」

「出来るさ。それが私の『希望』なんだからな。私が勝つたらその情報を教えて貰う。そして、幾つか条件を飲んで貰おう」

「それはそれは…大変活きのいいことで…! じゃあそれでいいよ◆? ただしヌルい

事してボクを失望させるなよ♣?」

「その事については謝らねばならないな…。私は君を羨えさせるかもしれん」

「…どういう事だい?」

「私は強すぎるからな」

「……上等♣?」

私は久しぶりに《纏》から抑えた《練》に移行する。これでも割と抑えてはいるが、大
体頭在オーラで100000ぐらいいは出している。

「…やつぱりね♣? ボクの考えは間違つて無かつたわけだ◆? じゃあ行くよ?!」

ヒソカは周囲の岩石にオーラゴムを複数貼り付け、私に飛ばしてきた。なるほど、直
接は触れない様にしてきたか。まずは避ける! 岩石の雨あられを避け、彼に近づいた
ら、彼はゴムを離して地面を蹴り上げた! 凄い威力で地面が削れ、更に岩が飛び交う

が、私も側面に大きく躲して更に接近する。

そこをヒソカは待つていたようで、手からオーラを飛ばし、私にくつつけようとするが、甘い！ 直前で全て躲して懐に潜り込み、*「浸透勁」*を打ち込もうとした時、背後から岩石が迫ってきた。先程飛ばしたオーラか！ 仕方なく躲すと、ヒソカもそれを避けながら、足から*《隠》*で隠したオーラを伸ばしてきて私にくつつけた。

やるね。ヒソカは足を振り上げ、ゴムの反動で私を上空に飛ばして、先程の岩石をこれまた手の反動でこちらに向かわせた。

空中にいる私。凄い勢いで迫り来る岩石。なるほど、普通ならここで詰みだな。だが、まだまだ。私は迫り来る岩石を「全て」粉砕した。

粉砕し終える直前にヒソカは足を振り下ろして私を地面に叩きつけようとしたが、私は衝撃と共に足から着地した。

「うくん、いいね♣？ これでも駄目か◆？」

「私に触れないで倒そう、なんて甘いよヒソカ」

「そうみたいだね♠？ じゃ、やり方を変えるしかないか？？」

彼から禍々しいオーラが噴き出す。…かなりの量だ。やはり彼は人類最高峰を凌駕

しているな。しかもこれはテンションによって上下している。これだけの強さを誇れば対人での闘いに拘りたくなるのもわかる気はする。並び立つ者が殆ど居ないだろうからな。

そして…彼は一撃を狙ってるな。触れたらアウトと理解して、相打ちで一撃必殺するつもりだ。彼の感情がビリビリ来る。

…いいね。彼がどうやって「それ」を狙うか楽しみだ。恐らく狙うは顔面か首筋！ 打撃も効果が薄いと知っているだろうから来るのは刺突か、斬撃だ。

これは怪物共と闘う時には得られない高揚かもしれない。ヒソカの気持ちは何となくわかってしまった。…「人間」とはやはり度し難い。

さあ…来い。

一瞬の静寂の後、ヒソカが凄まじい勢いで地面を蹴って接近する！ ストレートに来たか?! いや、絶対変化する！ そう思って身構えると、オーラを周囲に飛ばし始めた！ 周囲の大小の岩石にくっつけてる。そのまま接近し、5メートルまで近づいた時に能力を発動！ ヒソカに向かって多数の岩石が迫り、そして「くっついた」。無茶をする…！ しかし理になっっている！ 岩の鎧か！ では攻撃して来る箇所を撃ち込む！

と構え、彼のオーラのこもった手刀が近づいたのに合わせて私も手から「浸透勁」を撃ち込もうとして、まさに当たる瞬間に彼が僅かに後ろに引つ張られた。

外された……！ 次の瞬間再び反動で近づき、岩石ごと体当たりしてくる。舐めるな！ と私は彼の身体に脱力パンチをお見舞いし、岩の鎧ごと吹っ飛ばした。岩の鎧は粉々に砕け、周辺に散らばる。ヒソカは後方に吹っ飛びながら告げる。

「触れたね？」

辺りを見ると、私に向かって岩が飛んでくる。先程の鎧か！ 丁寧に《隠》で見えなくしていた。くつついている以上、避けられないと思つて砕いたが、砕く側からオーラが纏わりつき、身動きが取りづらくなる。これが狙いか！ そして、先程の足からくつついたゴムを発動させ、私に再び接近する。今でも酷いダメージのはずなのに、全くその気配を見せず、むしろオーラを増大させてくる。

「チエツクメイト♣？」

彼は今度こそ私に向かって来る……流石だ。やはり彼は天才だ。あの一瞬の攻防でい

くつ罨をはった？ 私は戦闘センスでは絶対に敵わないだろう。

だが…まだ甘い！

《練》!! そして、オーラを「物質化」!!! 擬似尻尾を複数作る！

「!!!」

ヒソカも能力を解除して踏みとどまろうとするが、遅い！

ドスドスドスツ！

驚く事に、彼は「あの状態」から幾つか弾いた！ …流石だ。だが、幾つかは貫つたな。使ったのは超強力な麻痺毒！ チェックメイトだ。

「まいったね…まだ先があつたか❖？」

「……よく流暢に喋れるものだ。『それ』は相当強力な奴なんだけどな。…卑怯とは言

うまいね?」

「まさか…『今回』はボクの負けさ 認めるよ◆? でも、キミはボクを殺せない。違
うかい?」

「違わない…。だから、君の基準で言えば、一旦お預け、と言うところだな。だが、団長
の居場所ぐらいは教えてもらいたいな」

「…8月30日正午、ヨークシン。そこで『ヒマな奴』の招集がかかっている 多分団長
も来るよ◆? ボクも中々捕まえられないからね そこがチャンスさ◆?」

「…なるほどな。『オークション』か。詳しい場所は?」

「それは自分で探しなよ、と言いたい所だけど、ヨークシンのスラム街から抜けた廃虚の
一角さ◆? そこにアジトがある…サービスだよ??」

「…ありがとう。助かった。お礼と言つてはなんだが、『この続き』はいつでもやろう。
私も都合がつく限り出来るだけ応えよう。その代わり、私の縁者に手を出したらその話
は無しだ」

「嬉しいなあ…いつでも付き合つてくれるなんてサイコーだね! ボクももうちよつと
遊べるようにしなきゃなあ…◆?」

「そういうわけで、ヒソカ、『また』な」

「キミって結構お人好しだね??」

「…………その『毒』は常人なら心臓麻痺あたりで死んでるぐらいの奴で、鍛えてても1ヶ月は動けない筈だが、君なら3日ぐらいで復活出来るだろう。ま、頑張れ」

そう告げて私は立ち去った。去り際に

「ツンデレ、かな◆？」

とか聞こえたけど無視した。

68、ネテロ会長との約束

私はヒソカをほつといてホテルへと戻る。戻ってきたら丁度協会の人が後片付けをしてる所だった。ビーンズさんに会い、会長の居場所を聞くと、私を待っていたらしい。彼は昨日行われた最終試験場の中心に、座禅を組んで待っていた。

「…来たか。まあ座るがよい」

私は彼に正対して座った。

「その様子じゃと『約束』は終わったらしいの。…殺したか？」

「いえ…彼は生きてますよ。しばらく動けないでしょうがね」

「そうじゃろうな。お主には出来んじやろうと思つとつたわ」

「……それは挑発ですか？」

「…それ程の力がありながら、お主は誰も殺せん。…例えあのお主と揉めた301番で

もな。目を見りやわかる」

「目でわかるって……根拠とは言えませぬね」

「お主は“何か”に怯えておる。ワシもいろんな人物を見てきたからな。お主の場合はそれが目に微かに現れておる、という事じゃ。ま、確かに根拠は薄いがな。だが、間違っておらんじやろ。何に怯えとるか当ててやろうか？」

「……そういう話をしに来たんじやない。早く済ませましょう」

「そうじやな。ではワシに付いてまいれ」

そう言うと、彼は立ち上がりスタスタと歩き出した。……全く。やり辛いジイサンだ。師匠と似た様な雰囲気を感じるな。だが、本当に一体何が分かると言うのだろうか。私はそんなにわかりやすいだろうか。

会長に付いて行くと、エレベーターに乗って飛行船の発着所に着いた。今度は「これで移動か。」

「今回はワシらの貸し切りじゃ。遠慮せずに乗るとええ」

「そりやまた奮発しましたね。協会の私物化では？」

「お主もパリストーンみたいな事を言うのう…。なに、今回は協会の仕事として予算も下りてるから心配せんでええ」

「なるほどね…：そういえば、立ち会い人はどうしますか？」

「ああ、ワシの他に1人おる。そやつは後から来る」

「そうですか…：では楽しみにしておきましょう」

我々2人は飛行船に乗り込んだ。3時間程の旅らしい。その間、会長は席を外し、何やら電話をしたり、操縦室に行ったりしていた。立ち会い人との調整とか仕事の事だろう。操縦室は場所の調整かな？ ヒマになったので私はひたすら目を閉じて瞑想していた。



飛行船がゆっくりと着陸態勢に入る。私は目を開けた。ネテロ会長も近くに座って精神統一をしていたが、やがて目を開けた。

「着いたようじゃな。では降りようかの」

着いて行くと、どこかの山中の盆地らしい。雄大な自然の風景が広がる。辺り一面うつつすらと雪が降り積もり、幻想的な光景を映し出していた。何処となく昔写真で見たカナダの風景に似ている。遠くに森が見え、小川が近くに流れている。この場所は元は草原だろうか。確かにかなり広いが、一面の雪が足場を悪くしている。決闘には向かないんじゃないだろうか？

「*グッ*」に來るのは久しぶりじゃな。何も変わっておらん」

「…馴染みの場所ですか？」

「ああ。昔修行した場所だな…。ワシも初心を思い返そうと思うてな」

「！なるほど…。かなり気合が入っているようですね。安心しました。…で、立ち会
い人は？」

「もう来ておる」

そんな馬鹿な。近くには誰も居ないぞ？ この場所には精々小動物ぐらいしか居な

い。隠した《円》で確認しても人間は私と会長と、後は操縦……まさか。

「気づいたようじゃな。ほら、出てきたぞ」

飛行船から一人の人物が降りてくる。どこぞの民族衣装の様な長袖の服にマフラーとブーツ。頭まですっぽりターバンで巻いている。所々無精髭が目立つが、その顔付きは知っている。

「よう。オメーが『最強の男』か。オレは『ジンフリークス』。ダブルハンターだ。今回はそのジジイとの決闘を見届けに来た」

マジか!! 何でこの人が『今』来る!? 流石に操縦士は意識から外していた。

「……ゴン君が探してましたよ?」

「あー……知ってる。むしろオレが探させてるからな。だが、こんなチャンスは滅多にねえからワザワザ来てやったぜ」

「……育児放棄では?」

「これがオレの育児方針だ。…まあそりや言い訳か。オレのわがままだしな。だが、アイツもハンター試験受かったみたいじゃねえか。流石オレの息子だ」

「あんたつて人は…！ …でも私が言えた事じゃないか。それにしてもやつぱり似てますね」

「まあ…一応親だしな」

「それも当然ですが…もう一人のフリークスに、ですよ」

「！ 会ったのか…!! 『作者』に!!!」

「ええ。少しだけですがね。自分が楽しい事に全力投球でしたよ。貴方も似たような雰囲気がある」

「『作者』は何処にいた!?!」

「ご自分で探したらどうです? …ハンターでしょ?」

「言いやがる…。上等だぜ! やつぱり『作者』は生きてやがったな。…ジジイ! ありがとよ! …こりや予想以上に当たりだぜ!」

「…:…言っていないかつたんですか?」

「ひよ? ワシは全力で立ち合いするからと見届け人を頼んだだけじゃが? まだお主は『確定』しとらんからのお」

いつの間にか会長は試験の時の服を脱いでピツタリのTシャツとスパッツに着替えていた。…あれは「心Tシャツ」！ 本気の時の衣装か!!

「全く…あんたって人は本当にタチが悪い。まあいいでしょう。そろそろ始めますか」
「いいじやろう…始めるぞい。いきなり潰れるなよ。『真の帰還者』」
「では、遠慮なく…」

今回は私のお披露目だ。よって遠慮はしない。会長も抑えて闘われる事は望まないだろう。全身の細胞に呼びかける……

《練》…！

ズゴゴゴゴゴゴ……

「こ…これは…ジジイ！ ヤベエぞ!!」

「クツクツクツ……腕が鳴りおる…！ 手を出すなよ！ ジン!!」

「さて…やりますか。お先にどうぞ」
「…舐めんじゃねえぞ。若造が!!」

「百式観音」 壱乃掌!!!

ドゴオツ!!!

凄まじい衝撃が不可避の速度で飛んでくる。…通常ならこれでアウトだな。だが…

「……………! コレを片手で止めるか…!」

「…一つ言っておきましょう。貴方はやはり「向こう」に行かなかつたのは英断だった。この程度ならすぐに殺されるからな」

「…アホが、ワシがそれで諦めるとでも思ったか?」

そう言い終わるや否や、百式観音の攻撃が更に2つ、3つと飛んでくる。しかし、全てを肉体とオーラで受け止める。如何に速くとも、私のオーラ圏内に入れば受け止める事は出来る。しかし、受け止めるだけじゃだめだな。こちらからも行くか。

激しい攻撃を全て「受け流し」ながら徐々に接近する。本人が武道家だけあって、意識の隙間を縫うのが上手い。そして、最適の型で攻撃してくる。よって、「人間」のスピードでは限界がある。近づいたと思っても突き放して来る。

はは… “この状態” の私を受け止めきれるとはな。流石人類最強。流石ネテロ会長。私もギアを上げる！



はは…。参ったな。ありやバケモンだ。なんつーオーラ量！そしてあの「百式観音」を受け流せる技量！身体能力も一流を遥かに凌駕している！

… “これ” が、暗黒大陸のレベルか！オレでも厳しい… つか無理だ。なんせ、奴はあの猛攻の中でもまだ余裕が見えるからな…。

おい！ 何だあのオーラの刃は！ 観音の腕が斬られたぞ！ バカみたいな鋭さ！ 変化系か!? いや、今度は念弾！ すげー威力！ そして…ありや何だ…背後にオーラで塊を作ってる…人型だ…腕の様な物が…。

まさか、「百式観音」の模倣か!? コイツ…「どこまで」出来るんだ!?



折角だから様々な事を試してみた。オーラブレードで観音の腕を1本カウンターで斬り落としたが、会長は一旦解除してまた復活させた！ 何という精神力！ 普通は無理だぞ。そして、オーラブレードは避けられる様になった。念弾も試したが同じだった。何せ0.1秒以下の攻撃だ。当てるのは難しい。あの巨人を思い出すな。だが今回は「余裕がある」闘いを楽しめる。最後に一つ、私も試してみよう。

一旦離れて、背後にオーラの塊を具現化する…私のイメージする「最強の男」を…。 ” それ” に百式観音を模倣して多腕にする…出来た。

私の背後に、父さんの姿が浮かぶ。私の中で「最強の男」はこの人だ。単純な強さじゃない。〃人間〃としての強さだ。

さあ…行くぞ。ここからは少し厄介だと思うぞ。

◇

小僧め…。いや、年齢は上かも知れんな。だが、あんなに〃揺れてる〃奴はやつぱり小僧だ。しかしその「強さ」は本物だ。

そして、今。ワシの「百式観音」を模したモノが出来上がった。…何という事か！

ワシのと比べればまだまだ精度が甘く、完全には具現化しきつとらんが、それでも見様見真似だとしたら凄まじい制御力！ 奴のは観音じゃなくて、奴に似た格好をした男じゃがな…。

試しに参之掌を打ち込んでみる。ワシ程の速さは無いが、受け止めよった…！ どうやら受け止めるので限界の様じゃが、それでも大したもんじゃ。なるほど、「型」を見切り始めたな。そうなると質量が厄介じゃ。ゴリ押しも出来ん。まだまだ何発かは撃ち込めるが、ほんの少し揺らぐだけじゃ。それに徐々に対応してきとる。

このワシが遊ばれておる。これではまるで「稽古」じゃな。舐めやがつて…。遙か昔、師範に手合わせしてもらってるかの様な感覚に陥りそうになる。久しく無かったな…。こんな感覚は…。

いつからだ…。

敵の攻撃を待つようになったのは

一体、いつからだ

敗けた相手が頭を下げながら差し出してくる両の手に、間を置かず応えられる様になったのは？

そんなんじやねエだろ!!

オレが求めた武の極みは

敗色濃い難敵にこそ、全霊を以って臨む事!!

感謝するぜ お前と出会えた これまでの全てに!!!

「百式観音」 九十九乃掌!!!



流石だ…。

流石は人類最強。

私の憧れ。

大きな不利を物ともしない、その精神力！ これこそ真の武人！！ 私も「型」は見切り始めたが、それでも防ぐので精一杯だ。近づけもしない。

そして、今。私の防衛を破り凄まじい連撃が飛んでくる！ 流石にコレは私も対応出

来ない。徐々に被弾が増えて来る。そして、私は攻撃を受け続ける父さんに申し訳無くて連撃の後に解除した…済まない。父さん。そしてありがとう。次に使う時は絶対に勝つ時にするよ。約束する。



「やりますね…流星は『人類最強』」

…九十九乃掌も防ぎきるか…。しかもまだ余裕がありやがる。並大抵じゃねえ。やっぱりコイツは今までで『最強』だ。

「…まるでテメエが人類じゃねエかのような言い振りだな」

「…これで最後です。会長。私は貴方を圧倒する。これまで私に付き合ってくれたお礼と感謝を込めて、私の『全力』を見せましょう」

「!! …へっ。まだ『上』があるのか。おもしれエ。見せてみるよ。オレも最終奥義で相手してやらあ」

そう告げると、奴はその有り余るオーラを全て溶かし始めた。…コレだ。コレだけは未だに原理がわからねえ。しかし、《隠》とも違う…。だが、《隠》以上の意味があるのか？

オーラはまだ“そこにある”。…言うなれば自然と一体化して…まさか！

奴からオーラが全て消えてしまったかの様に見えた…しかし、それがそのまま凝縮し始める！

そして…今。奴の周りに凄まじい“金色のオーラ”が収束する！

今までとはレベルが違う！ これは…まさか“聖光気”!!!

理論上不可能と置いていた…。大昔の与太話だと…。

だが、実現出来るのか!!!

何という事だ…。余りに凄まじい圧が襲って来る…！ 周りの雪は既に蒸発し、大気

が揺れている。

まさにコレは「神の領域」!! その証拠に奴は宙に自然に浮いている。

奴はその神の如きオーラを更に圧縮し、身体に密着させる。奴の服が白金色に変化する。

感謝する…。このオイボレにこんな「奇跡」を見せてくれた事を。

そして…口惜しい。「コレ」を体得出来たのがワシ以外の奴だった事が。

…感謝を込めて、ワシも最高の技をぶつけよう。効かなかった時はそれまでじゃ。さあ…最後の攻防だ。ワシも今までで最高の速度を実現する!!

行くぞ!!

「百式観音」 零乃掌!!!

限界を超えた速度で祈り、背後から奴を包み込む！　どんなに大きなオーラがあろうが避けられまい!!　喰らえ！

——時よ、止まれ——

な!?!　居ない!!　馬鹿な!?!　転移か?　それですら逃れられぬ筈なのに!!　何処に

…

——浸透勁——

「ぐはあッッ…!!!」

背後から来た凄まじい衝撃が全身を巡り、そのあまりのダメージに身体が言う事を聞かず、その場で倒れ伏した。

◇

私は、たった今倒れ伏したネテロ会長の側に行く。

「くっ、貴様……」

…私は彼を「癒す」。これぐらいは簡単な「奇跡」だ。

「ネテロ会長…私の勝ちです」

「これは…！ 貴様、情けをかけおつて…！！ …いや…お主だからこそか」

「……どう取ろうが勝手ですが、これで認めてもらえますね？」

「……………いいじゃろう……。久しぶりじゃな……。これだけの完敗は。…お主、ワシに勝ったんじゃからもっと喜ばんかい。……それとも、自分が「怪物」だとも思つてるのか？」

「!! ……そんな事は無い！ 私は「人間」だ！」

「普通はそんなことで必死に否定はせん。それこそがお主が「揺らいでる」証拠じゃ」
「……………」

「……よいか。敗けたワシが言うのもムカつくが、お主はどう足掻こうが「人間」じゃ。「怪物」はそんなに揺らぎはせん…。お主に何が有ったかは今ので大体想像は出来た。だからこそ「人間」に拘るんじやろう…。たしかにお主には「力」がある。恐らく不老不死にでもなつとるじやろ。だがそれがどうした。寧ろ誇れ。それが「人間」の特権じゃ」

「貴方に！ この苦しみの何がわかる!!」

「ワシにはわからんな。んなこと知らん。じゃがいつまでもくだらねえ事でウジウジすんなって事よ」

「くだらねえ事って…そんな簡単な話じゃない！」

「くだらねえわい。…ま、そんなくだらねえ事に悩むのが“人間”よ。ワシも悩み事は尽きんからな。例えお主が暴走したとしても、お主がお主である限りは“人間”じゃ。“人間”の幅は広いからの。お主みたいなのがおつても構わんじやろ。もしそんな事があつてもそんな時はワシらが止めるがな」

「……………」

「おいおい、ジジイ。勝手に巻き込むんじやねえ。オレはそんなのはまだごめんだぜ？」

観戦していたジンが会話に入ってきた。

「ワシなんぞ老い先短いからの。ワシが死んだらお主ら頼むぞ！」

「ぜってーヤだね。自分で責任持つてやれや…。とりあえず終わつたんなら帰るぞ。オ

メーには聞きたい事が山ほどあるからな」

「あ、ジン。それじゃが、コイツはワシが認めた時点で不干涉じゃからな。お主は一切手を出せんで」

「はあ？ 何言つてんだジジイ……って、マジか!？」

「大マジじゃ」

ひよっひよっひよっ、と笑う会長とじゃれあうジンとの話を聞きながら、私は随分と救われた気持ちになった。

…私は“人間”でいていいらしい。

今、私はとても晴れやかな気分だ。

ありがとう、ネテロ会長

少しだけ、前向きになれた

感謝しよう

貴方と出会えた これまでの全てに

69、ライセンス更新

「しっかし、伝承にしか残つたらん『聖光氣』を会得出来た奴がおったとはのー。長生きはするもんじゃわい」

ここは飛行船。帰りの道中だ。ネテロ会長も行きの時とはうってかわってフレンドリーに話しかけてくる。まあこの程度の雑談なら私も付き合うのはやぶさかではない。

「私のいた時代から使用者は希少でしたからね…。ネテロ会長が知らないならもう使い手は私以外ないでしょう。私も知っている限りでは師匠が唯一、でしたからね」

「……一応聞いとくが、その師匠はご存命か?」

「いえ…つい先日お亡くなりになりました。最後まで私を待つてくださった偉大な方でしたか…」

「そうか……惜しい人物を亡くしたの…。会ってみたかったのう」

「会長とは気が合ったと思いますよ。ただ、俗世には降りてこない方でしたからね」

「……！ カキンに伝わる『仙』か！ 實在しとったか！」

「流石会長、これだけの情報で辿り着くとは……。正解ですよ。……本当に、偉大な方でした……」

「……辛い事を思い出させたようじゃの。すまんかった。じゃが、師の教えはお主にしっかり根付いておるようじゃな。お主の動きはカキンのそれが染み付いておる。『向こう』で無事だったのはそれもあろうじゃな」

「それは間違いないですね……。師匠の教えが有ればこそ、でしたよ。そして、私が師匠の技や叡智を知る唯一の人間になってしまった……」

「……伝えよう、とは思わんのか？ その『技』や『叡智』を」

「そう……ですね。私の目的の一つは終わりました。後一つ目的を終えたら私は自由だ。それも有りかもしれませんね」

「そうかそうか。少しは前向きになれたようじゃのう」

「……そんなにわかりやすかったですかね？」

「まあな。追い詰められとるような顔をずっとしとったぞい。今は幾分かマシじゃな。教える、という事は自分を見つめ直す事にも繋がる。お主には丁度ええじゃろ」

「そうですね。私も教える事を約束した子達がいるので、そちらにしばらくは力を注ぎましょう」

「…羨ましいの。其奴らが。あの4人”じゃろ？ 奴等は確かに才能溢れとるから
 のう。わからんでもないがな……。相談じゃが、ワシもそこにちよいちよいお邪魔して
 もええかのう？」

「えっ…いやそれは、会長…」

「何、ちいゝつと手合わせしてくれるだけで十分じゃ！ ハンター協会とは別口じゃか
 らセーフじゃろ！ 老い先短いジジイの最後の頼みとして聞いてはもらえんかのう…」
 「ええ…」

何言い出すかと思えばこのジイサンは…この流れを狙ってやがったな！ さっきの
 いい流れが台無しだよ！ …でもまあこの人には出来るだけ死んでほしくないしなあ
 …。まいったなあ。

「…しようがない「ちよつと待った!!」なあ…つて、ジンさん！ 操縦は!？」

「オートマにして来たぜ！ 着陸までは大丈夫だ！ 後、ジジイ！ テメエ、オレに不干
 渉つつつといて自分だけちやつかりずりいぞ!!」

「ワシはいーの！ それにまだライセンス発行しとらんからセーフじゃー！」

「ふざけんな！ だったらオレだってセーフだろ！ な？ そうだろ!？」

「……組織的に無理強いされるのは協定違反だし絶対ごめんですが、個人的に気に入った人にだつたらまあ……。ただし、対価は貰いますよ?」

「ワシは会長の特権をフル活用してお主にハンター協会以外からも絶対手を出させんからな! それでどうじゃ?」

「あ、汚ねえ! じゃあオレは……あ、金ならあるぜ!」

「此奴、仮にも『アンダーソン』じゃから金はいっぱいあると思うぞ」

「マジか……。お宝は……暗黒大陸帰りだからオレよりいいの持つてそうだなあ……。なんてこつた……。どうすりゃいいんだ……?」

「……ジンさんは、そう言えばゲーム作ってましたね。念能力者御用達の奴。アレを前払いでいいですよ。何本か。後、ジンさんの話も聞きたいなあ」

「それでいいのか!? すぐ都合つけるぜ! 約束は守れよ!」

「ただ……お二人みたいな熟練の能力者にはそれこそ手合わせぐらいはしませんが……それでもいいですね?」

「大丈夫だ! 問題ねえ! どんなもんか分かるだけでも儲けもんだしな!」

「ワシも一向に構わん! いやはや、長生きするもんじゃな」

「しかし、ジンさん……あんたゴン君に会っちゃいますけど、大丈夫ですか?」

「あ……。忘れてた……。それもどうすつか……。探させてんのにこつちから会いに行くのもな……」

「なんかいい方法考えといてくださいね。まあ親子の事は私には言えないから任せますけど」

「そう言えばお主、先程も言つとつたがなんかあつたのかの？」

「いえね……。昔『向こう』に行く前にとある奥地で怪物退治したら、被害に遭つてた部族の人達から御礼にその……。ね。若気の至りでしたよ……。で、今になって調べてみたら……」

「子孫が繁栄しとつた……。と。お主……。中々やりよるのう。お主とはいい酒が呑めそうじゃ」

「オレの事全然言えねーじゃねーか！……まあ少数部族はそうして多様性を増やす面もあるから一概には言えねえけど……。で、どうなった？」

「危うく『神』に祀られそうになりましたよ……。最大の支援を約束して何とか逃げ出しましたけどね！」

「ブハハハハハ!! おもしろくなーオメー！ 気に入ったぜ!! 話を聞かせてくれるだけでもいいわー！」

「あ、それワシも聞きたい」

「もう…ホントにアンタ達は…。ま、いいか。その代わり協定は守ってくださいね。後、この話は最上級極秘指定にしてください」

「おう。任せい。こんなにワクワクするのは何年ぶりじやろな！」

「オレも手を貸すぜ。とりあえず電腦ページからは迎ねえ様にはしといてやるぜ」

「助かりますよ…そつちには疎くてね。ではまず、はじめの出発の時からいきましようか…」

その後、私の能力はほかしつつ、これまでの経緯を掻い摘んで2人に語った。迷宮都市突入や、その後帰れなくなつて沿岸を彷徨つた事、出会つた怪物の話、異世界に行つた事、聖光氣を会得した事、そして…世界樹に到達して帰還できた事…。私はドンさん程話は上手くないが、それでも2人は目をキラキラさせながら聴き入っていた。いい歳してゐるのに少年みたいな反応だな。

ドンさんが言つてた事が何となく分かる様な気がした。怪物との闘いの事では、2人もドン引きしていたが。

「…オメー良く生きてたな。フツー死んでるぞ」

「ホントにな…ワシは気持ち分かるが真似は出来んぞ…。そりやトラウマにもなるわいな」

「同じ事ドンさんに言われましたよ…。私も強くなる必要があつたとは言え、正面突破しすぎたなーって…」

「そういや、〃作者〃は今何してんだ？」

「ああ、多分西側の残りを探索中ですよ。今は愉快な仲間達と一緒にしようがね」
「愉快な仲間達とは…」

「私を運んだ大鷲と、世界樹のドラゴンですよ。両方私より強いですがね」

「くくく!! なんだなんだ! その楽しそうな旅は!!!」

「ほんになあ。ワシももうちよい若けりや着いて行きたいのう…」

「…アンタら話聞いてました? 私はあそこのヤバさを存分に伝えた筈ですが?」

「それで怯むようならハンターしてねえぜ! なあジジイ!」

「然り。ワシや武人としてじゃがの。しかし、1人のハンターとしても興味があるのう」
「全く…。ドンさんの言つた通りですね。本当に度し難い。……まあそれこそが〃人間〃って奴なんでしょうね」

「オレにとつては明確な〃目標〃が見えたからな。感謝するぜ、ジジイ」

「そういえば、何故ジンさんだつたんです? てつきりビスケさん辺りと思つたんです

が」

「何、此奴も止めようが何しようが暗黒大陸にそのうち行くじやろ。此奴は簡単には死ななと思うが、その前に目標ぐらいは見せとこうと思つての。後、ビスケは暴走しそうじやつたからな」

「ははあ…：ビスケさん、怒りそう。…：ま、いつか」

「そうそう、人間、開き直りが大事じやよ」

「アンタが言うな！ 後始末ぐらいはしてくださいね。私も必ず連絡するつて言つてんだから、上手く誤魔化さなきゃなあ」

「簡単じやよ。アイツも“こつち”に引きずり込めばええんじや。ま、任せい」

「不安しか無いんですけど…：お願いしますよ」

「じゃあコレがオレの連絡先だ。とりあえず方法考えてまた連絡するぜ」

「わかりました。私のはコレです。待つてますよ」

その後、ネテロ会長とも連絡先を交換している内に飛行船が到着場所に近くなつたみたいで、ジンさんは慌てて操縦室に帰つていった。飛行船は無事に最終試験場のホテルにまた停泊し、我々は会長に案内されてホテルの講習会を聞いたところに向かった。

途中、会長はビーンズさんに会い、“何か”を受け取つた後、私にそれをよこしてき

た。

「これが、シングルハンターライセンスの『更新』された物じゃ。機能は一般的な物と変わらんが、意匠が若干違つておる。所謂『レアモノ』じゃな。売つたら高そうじゃの
」

「…ありがとうございます。普通ので良かったのですが…まあ有り難く受け取つておきますよ」

「ま、大した違いは無いからの。んで、これからお主はどうするんじや?」

「そうですね…もう遅いですし、どっかで一泊してから次の場所へ向かいます」

「そうか。ならここに泊まるがよい。ここはハンター協会所有のホテルじゃしの。融通が利くわい」

「今日は泊まりか。だつたら呑みに行こうぜ! ジジイ、この辺いい場所あるか?」

「そうじゃな…。近場だと完全個室の料亭があるぞい。密談には最適でワシも良く使つとる。じゃ、3人で予約するぞ」

「おいジジイ…仕事はいいのかよ。仮にも責任者だろ?」

「な〜に、ほとんど終わつとるわい。後はビーンズがやつてくれるわ」

「全く…ビーンズの奴過労死すんじゃねえか?」

「ビーンズさん…哀れな…」

「ワシを何じやと思つとるんじや！ 後はちよつとした事務処理じやし大丈夫じやて。誰かと呑むのは久しぶりじやの〜」

「駄目だこりや。完全に行く気満々だ。まあ楽しいからいつか」

「私も飲み会は久しぶりですね。…楽しみです」



そして、私達は料亭に向かい、夜がふけるまで飲み明かした。

3人で様々な事を語り合った。お互い笑い合つて、愚痴り合つて、夢について語り合った。くだらない話でも盛り上がり、話題は尽きなかった。

久しぶりに楽しく過ごす事が出来た。こういうのつていいな。お互いを尊重し、認め合う。私は少し視野が窮屈になっていたようだ。 “人間”、余裕も大事だ。

また、近いうちにこの2人にも付き合っ
て貰おう。

これからの長い人生、私も楽しま
なければ。

70、帰還後の能力一覧

【^{ヘル・シー・マン}地獄を見る男】

身体が大幅に損壊しても、オーラを使用して復元する能力。彼の細胞は植物粒子と混合し、元々あった特異な細胞と植物粒子のハイブリッドとも言える存在になってしまった。故に、これは最早念能力では無い。体質である。

具体的には光合成によりエネルギーを合成でき、無限に増殖できる上、その細胞一つ一つに意識が宿る為、例えばバラバラにされても一片でも細胞が残っていれば自動で修復・復元し、復活する。また、癌細胞を適応した影響か、寿命が無い。常に最適・最高の細胞の状態を維持する為、オーラも減る事は有ってもすぐに元に戻る。実質不老不死である。彼を消滅させる為には、細胞諸共消し飛ばすか、特大の呪いで消滅させるしかない。

ただし、痛みは据え置きであり、能力が大幅にパワーアップしたただけなので、誓約なども据え置きである。

それは、神の祝福か、それとも呪いか。

〈制約〉

- ・ 傷の程度によつて、使用するオーラが増加する。
- ・ 復元のため、超回復はできない。
- ・ 今後、一切操作系能力で他の生物を操作する事が出来ない。

主人公の不老不死の根幹を成す能力。本人も薄々体質化している事に気づいている。どちらかと言えば呪いの類いであり、必ずしも不老不死がいいものではないといういい例。だが、これがあつたからこそ彼でも暗黒大陸で生き延びる事が出来た。

【完全適合】
パルフェクト・コンバート

・ 特質系能力

自身に悪影響を及ぼす要因、細菌やウイルス、念による状態異常などを取り込み、細胞レベルで身体に強制的に吸収し、適応させる能力。悪影響をプラスに変え、再びその影響を受け付けなくなり、無害化する。さらに任意でその力の一部を引き出すことがで

きる。条件付発動。

〈制約〉

- ・一度はその悪影響を自身で体験しないと発動しない。
- ・悪影響が強ければ強いほどオーラを消費する。
- ・この能力は今後一切解除できない。
- ・一度取り込んだ物は破棄できない。

現在取り込んでるもの

・病気：プリオン細胞と、暗黒大陸の超絶ウイルスによって、ほぼ万病に対応している。〃聖光気〃と合わせると病気には無敵の存在であり、実は広げるとヤバイ厄災クラス。〃聖光気〃も所持しているため、かなりアカン事になっている。

・毒：〃呪い〃クラスの毒を多数所持しており、最早毒に関しては自由自在に操れる毒マスター。こちらも加減しなければ厄災クラスでヤバイ事になる。

他、水系、土系、雷、炎、真空、に加えて幻惑、意識誘導、石化、高熱、氷結、放射線、重力、物質変換、時間、死、などなど：〃聖光気〃のおかげで概念系すら適応しており、えらいことになっている。ただし、生物に効果を及ぼすようなものや概念系は〃聖光気〃状態じゃないと使えない。

主人公がこうなってしまった元凶。人類の進化の究極、全環境適応型の能力である。最早カーズ様。そのため多分宇宙空間でも生存は可能だし、放り出されてもオーラジェットあたりで戻ってこれる。彼が怪物になってしまえば人類にとつて真の絶望になる事は間違いない。やっぱりコイツが人間かつて問われると疑問を感じずにはいられない。

【自己貪食】
オートファジー

・【日々是健康】、【完全適合】の派生技。【完全適合】が発動した時に、栄養不足由来のものであれば、【日々是健康】に切り替わる。具体的には不足した栄養素をオーラで代用し、損傷した細胞を還元する。

〈制約〉

・オーラが枯渇した場合発動しない。

主人公の能力として最近影が薄いが、暗黒大陸では地味に活躍していた。
【完全適合】を補佐する能力で、より隙がなくなっている。

基礎能力

・オーラ量

暗黒大陸の経験と、黄金の果実効果により、およそ8000〜10000万ぐらいの脅威の潜在オーラ量を誇る。肉体性能がブリオンと融合したせいで格段に上がってしまったというのもある。顕在量は約25〜30万。桁が違う為浴びただけでヤバいが、オーラの性質がクリアな為、後遺症まではいかない…と思う。

これを間近で感じて闘争心を失わないネテロ会長は流石である。

・応用技

《円》…：だいたい半径20キロ。ヤバい範囲。また、《円》を自由自在に操作する事も可能。別系統の技でオーラを光子状に拡散して探知することも可能

《流》…：瞬時の移動が可能。

《隠》…：《円》すら隠せる。オーラの質も相まって、一流をも欺ける。

・系統別

強化系…：オーラ量による暴力。

変化系…主力のブレードはかなり鋭く、かつかなり伸ばせる。流石に13キロは行かないが。また、弾力を持たせたり硬質化させる事も可能。

放出系…レーザーからかめはめ波、操気弾まで自在に出来る。主力武器。

操作系…細胞操作。これによって操作系の操作は受け付けない。"聖光気"状態だと更に無敵と化す。

具現化系…様々な物をオーラで形作る事が出来る。最近【百式観音】の模倣までできた。ガワだけだが。それ以外にも様々な手や尻尾などをオーラで自由自在に作る事が出来る。

特質系…【パーフェクト・コンバート完全適合】、そして…オーラを自然と一体化できる。"聖光気"の前段階である。

基礎能力系はほぼ人知を超えている。馬鹿オーラの為せる技であり、多少の習得率はほとんど誤差に等しい。最近スタンド能力みたいなのが生えた。ガワだけだが、それでも脅威的な能力であるのは間違いない。

・ 体術

カキンでの修行により身に付いたカキン拳法。基本的には太極拳や八極拳、少林拳を

ごちゃ混ぜにして、いいとこどりをした様な師匠オリジナル。念戦闘を想定し、攻防バランスに優れ、“力”の理を自他共に把握しながら闘うスタイル。

“消力”：純粋な体術。完全なる脱力によって攻撃を無効化し、自身の攻撃は驚異的な威力を叩き出す。刃牙のアレ。

“軽気功”： “聖光気”の前段階。オーラを自然と一体化する事で、自身の体重を羽の様な軽さにする。

“硬気功”： “聖光気”の前段階。オーラを自然と一体化する事で、自身の体重を岩の様な硬さと重さにする。

“浸透勁”： “内浸透勁”と“外浸透勁”に分けられる。基本的には他者のオーラと同調してそれを反射させまくるのが“内浸透勁”。外部からオーラを侵入させて反射させまくるのが“外浸透勁”である。所謂瞬獄殺の原理。場面によって使い分ける事が出来る。

聖光気

オーラを自然と一体化させ、星に接続してその力を借りるという究極の闘気。星の力を借りる為、特殊な念攻撃や呪いは基本的に通用しない。効くとしたら同使用者、又は

近い存在の攻撃のみとなる。また、使用者の器によるが、元の力を一気に次元の違うものへと跳ね上げる。ただし、器以上の力を借りると「星の意思」にも接続してしまい、「星の使徒」へと化してしまう危険性もある。

念と同じ様に扱う事ができ、鎧として纏ったり、《流》や《硬》の様に使う事が出来る。自然と同化している為、宙を飛び、人間の理を超越した「奇跡」を扱う事が出来る。この状態になると、今まで使えなかった生物に対しての操作や、吸収した概念系能力が扱える。

オーラを自然と一体化させる、という部分が人間の系統で言えば特質系にあたり、これまででの使用者が特質系に偏ったのはその為である。

・基本技能

空を飛ぶ。人を癒す。壊れた物を元に戻す…など。所謂「奇跡」全般を指す。

「気鋼闘衣」…高めた気を身に纏い、至高の防具へと変える。全身を白金色の衣が纏う為、防御力は絶大。ちなみにマフィア衣装が上書きされた様な感じになるため、見た目はマイ〇ルⅡジャクソンをイメージするとわかりやすい。

・特殊技能

“世界支配”：所謂時止め。世界から「ズレる」事で、一時的に世界を概念的に支配する能力。わかりやすく言うところ「時が止まった」世界に数秒程入り込む事が出来る。そして、その止まった時の中を自由に移動出来る。DIOの「ザ・ワールド」に近いが、世界からズレているので、物質には干渉できない。ビデオテープの一時停止を押すようなもの。

“死の概念”：ニーズヘッグから貰ったもの。触れた時点で問答無用で“死”をもたらす事が出来る。攻撃に乗せて使うと凶悪な性能と化す。派生で“消えない炎”や“消滅の雷”などを本家程ではないが扱える。概念系なので、実は上手く使えば除念も出来る。

“存在変質”：「溶解」と「凝固」を操り、物質や生命を変質させる。流石に動物は厳しいが、植物なら割と可能。ゴールドエクスペリエンスみたいな感じにできる。

他にも呪毒や幻惑など多数のヤバイ能力を操る事が出来る。究極の闘気と
パルフェクト・コラボート
 【完全適合】先輩のコラボによって、彼だけにしか出来ない凄まじい能力となった。

主人公の装備

・次元の腕輪

異世界の星が、“救世主”の為に用意したプレゼント。人を転移させる次元の力を利

用して作成されたもので、所謂「アイテムボックス」の性質を持つ。亜空間内は時間が停止しており、生物、無機物、果てはエネルギー問わず収納できる。容量は無限に近く、星程度の容量も収納可能である。

かの星が、「救世主」の情報に基づいて作成したため、「救世主」の意図に合わせて次元収納を展開出来、離れても使用者の元に戻ってくる。更に、例えばバラバラになっても復元する為、限りなく不壊に近い。

使用出来るのは「救世主」のみである。

・装備の腕輪

ニーズヘッグを倒した証に、ニーズヘッグから貰った防具。念じる事で衣服を自由自在に展開出来る。必要ない時は腕輪の中に収納することも可能。

ニーズヘッグは大した機能は付けてないと言っていたが、彼の素材を使用しているため、その防御力は極大。例えば破損しても、一度収納して戻せば復元する。

帽子、シャツ、ネクタイ、スーツ上下、手袋、靴下、靴があり、見た目はマフィアスタイルかつ、全てが真っ黒である。

・その他アイテム

「黄金の木の实」…食した人間の肉体性能とオーラを限界の1.5倍に引き上げる。30個近く持っている。

「若返りの水」…飲んだ者に肉体が一番活性化してる時点まで若返らせる。不老効果も付く。効果は一口で出るが、現在樽ごとある。

「万病に効く香草」…文字通り万能薬。あと2枚しかない。

他にも、暗黒大陸で倒したモンスター素材や、拾った珍しい物など多数。ヤバい効果を持つ物や、強烈なアイテムなどが数多く次元収納の中に眠っている。

ゾルディック編

71、家庭訪問

次の日、私は会長とジンさんにひとまずの別れを告げ、次の目的地に向かう事にした。

「世話になりましたね。楽しかったですよ。会長、ジンさん」

「昨晚は楽しかったな。またやろうぜ」

「お主は…次はゾルディックんどこに行くんじやったな。奴等も災難じやのう」

「いや…私も流石に反省しました。穩便に話してきますよ」

「ま、奴等にとつても良い刺激じやろ。それにお主が指導するなら否とは言うまい。ワシからも連絡入れとくかの」

「何から何までありますがとうございます…。ジンさんはこれからどうします？ 私はとりあえずゾルディックでの用件が終わればヨークシンに戻りますが」

「そうだな…。準備を整える時間があるな。ある程度準備が整ったら連絡するぜ」

「分かりました。連絡待ってますよ。では、お世話になりました！」

「ああ、またの」

「連絡待つてろよ！」

そう言って2人とは別れた。昨晚ラストオーダー過ぎて店が閉まってからも私の部屋でも飲み直し、結局朝方まで飲んでたはずなのに元気なものだ。常人とはバイタリティが違うな。…あの2人と出会えて良かった。私にとっては何者にも代えがたい。いい刺激になったな。

さて：行くか。目的地はパドキア共和国。空港まで走り、そこから飛行船の旅だ。電脳ネットで予約を取り、キャンセル待ちがちようどあったのでそれに便乗する。搭乗時間は3日程度か。自分で行った方が早いけど、目立つ事は避けたいからのんびり行こう。これでも昔の移動よりは早くなっているしな…

飛行船の中で、新しいハンターライセンスを眺める。これ一枚で予約も入国も電脳ページ利用も自由自在だ。便利なものだ。昔からこのライセンスの効力は異常だな。だが、普通の新人ハンターは“これ”を紛失しない様にする事に神経を使いそうだ。その点私はラクでいい。次元収納様々だな。

ちなみにここはファーストクラスの特別席なので、気兼ねなく眺める事が出来る。もちろん私の貯金だ。マイケルからジョンまでがとつといてくれたヤツだが、8割は慰問費及びアンダーソン家の世話代として渡した。それでも億万長者に近いから私も稼いでいた方だと思う。

向こうに着いてからはどうしようか。キルアを預からせて貰うために行くが、ここは一つ穩便に行きたいものだ。上手く交渉出来るといいな。あまり「怪物」的な交渉にならない様にせねばな。向こうがどう思っているか次第だが。

ま、考えても仕方ないな。飛行船ではのんびりと過ごすか…。



パドキア共和国に着いた。昔は一度も来た事はなかったな。何処となくイタリアの様な雰囲気がある。目的地はデントトラ地区にあるククルーマウンテンか。觀光名所にもなっているとは驚きだ。本当に暗殺一家とは思えないが、自信の表れだろうな。

電車などを使いながらデントラ地区を目指す。観光旅行でもしている気分だ。電車の中や街中で道を尋ねながら向かう。話しかけたら警戒されたが、教えてくれた。…今の私はマフィアスタイルだからな。仕方がない。カタギには見えないとは思うしな。

麓の街迄漸く辿り着いた。ここからは日に一本の山景巡りの観光バスまで出ているらしい。現在時刻は昼。あと1時間程でバスが来る。近くの土産屋で時間を潰すか…。

ちょうど1時間経った。観光土産なども買えたから良かった。ゾルデイック饅頭とか毒入ってそうだが、一応味見して大丈夫だったのでアンダーソンへのお土産にしよう。

そうこうしている内にバスの時間が近づいてきた。遅れない様に早めに乗り込むか。



ガイドの解説を聞きながら山をバスで登る。標高3772Mの死火山に屋敷を構えているらしい。前世の記憶的にも確かそうだったな。それにしても広大な敷地だ。アランダソンも中々の富裕層だが、ゾルディックも比肩するぐらいはあるだろう。

家族全員が暗殺者の一家……。私にも想像がつかないが、家族の形はそれぞれという事だろうな。

途中でバスは止まり、ガイドと共に観光客も降ろされる。目の前には巨大な門が見える。ガイドはここからがゾルディックの敷地内だと教えてくれた。これが黄泉の門、別名「試しの門」か。なるほど。観光バスはそのまま観光客を呼び集めて次に行こうとしたが、私はここで降りると告げた。ガイドには憐れな者を見る目で見られて引き止められたが、私は固辞してバスを見送った。

さて：使用人さんはいるかな？

「すみませーん！ どなたかいますかー？」

守衛室にノックする。すると中から人の良さそうなオジさんが出てきた。

「はいはい、何でしょう？ って、もしかして、貴方がゴン君達の言ってた？」

「ええ。カーム、と申します。…彼等は中に？」

「そうですね…。申し遅れました。私はゼブロと申します。彼らは現在、〃試しの門〃を開けられる様に特訓中ですが」

「成る程…。じゃあ私も入っても？ ああ、私は正式に入りますが一応声は掛けようと思ひまして」

「ああ！ 少々お待ちを!! 貴方が来たら連絡する様に言われてまして…」

「そうですね…。ではちよつと待ちますね」

「ありがたい。少しで終わりますので、そちらに掛けてお待ちください」

そう言って守衛室の椅子を進められた。…やっぱり警戒されてるか。こればかりは仕方ないな。ちよつとやりすぎたしな…。

ゼブロさんは電話をかけ、連絡をとっている。

やがて、電話が終わり、私に声を掛けてきた。

「確認が取れました。入っていいとの事です」

「わかりました。わざわざありがとうございます。では」

「こちらこそ、ありがとうございます。声を掛けてくれて助かりました」

私は「試しの門」の前に立つ。確か1の扉が片方2トン、だっけ。で、倍々になつて増えていく、と。全部で7つあるから合計256トンね。まあ余裕だな。では入るか。

ギイオオオオン…

重い音を発しながら扉が7つ全てが開く。まあ「向こう」ではサイズ違いの奴には事欠かないし、これぐらい出来ないと踏み潰されて終いだ。後方で

「…驚きましたな…！ 全てが開くのは久しぶりに見ました。当主級の方々ぐらいしか開かない筈ですがね…」

と、ゼブロさんが言っていた。私は扉を開けながら振り返り、

「世話になりましたね。またお会いしましょう」

とだけ告げて扉をくぐり抜けた。開けて進めば扉が後方で閉まる音がした。さて…。彼らと合流出来れば良いが、多分そうはならんだろうなあ。とりあえず進むか…。

そう思つて、一歩足を踏み出そうとした時、近づいて来る気配を感じる。《円》で探知。1人か。祖父…:だな。

「よう来たな。カームⅡアンダーソン殿。ワシはゼノⅡゾルディックじゃ。お主を迎えにあがつたぞ。着いて来るが良い」

「これはこれは…わざわざお出迎えありがとうございます。私もツレがいるので、こちらから伺つたのに…」

「お前さんみたいな奴をその辺でウロウロさせられる訳無いじゃろ。使用人共が全滅するわい…。ま、そこまで悪いようにはせん。信じるも信じぬもお主次第じゃがな」

「…分かりました。お言葉に従いましょう。付いて行きますのでご案内よろしくお願いします」

「物分かりが良くて助かるわい。では付いてまいれ」

そう告げると、ゼノさんは凄まじいスピードで走り出した。試されてるのかな？
まあ付いていこう。

しばらく走ると豪華な建物に案内された。

「流石じゃな。振り切るつもりで走ったが」

「いえいえ、まあ…多少は鍛えてますから」

「…随分と謙虚な奴じゃな。イルミから聞いたとつたのとはえらい違いじゃ」

「…あの時は感情が昂ってしまったもので…。イルミさんには思う所はありますが、ゾルディックを害そうとするつもりは全く有りませんよ」

「ほう…。まあそれならそれでよい。ではこちらに座るがよい」

ソファアを勧められたので、大人しく座る。現在そこそこ広い応接間の様な場所だ。この屋敷は本邸とは別だな。別邸あたりかな？ 当たり前か。いきなり本邸には案内しないだろう。ゼノさんは向かいに座る。使用人が持ってきたお茶をいただきながら話をする。

「で、単刀直入に聞くが、ウチに何の用じゃ？」

「ストレートに来ますね…。私は先に來てるツレの付き添いみたいなもんです。キルア君も含めてハンター試験で仲良くなりましてね…。キルア君は特にゴン君と仲良かった

たので、ゴン君達は彼を連れ戻しに来ていますが、私の場合は「念」の修行を約束したからですね。彼の意思を聞こうと思つて伺いました」

「ふむ…」

「もちろん、ゾルディックにも彼の教育方針があるようなので、無理に、とは言えません。ただ、彼は自由を求めていたようなので確認を、と思ひましてね」

「そうじゃの…。ネテロのジジイからも連絡があつたわい。俄には信じ難いが…こうして見ると分かるな。凄まじい使い手じゃ。しかし、ワシらもハイそうですか、ではどうぞ、とは言えん。…分かるな？」

「まあ当然ですよ。ではどうしたらそれが確認できますか？」

「ちよつとしたお遊びをしようかの。お主を少し試させて貰おう。よいか？」

まあそう来るよな…。なるべく穩便に行きたかつたが仕方ない。

「もちろん、いいですよ。いつでもどうぞ」

そう言った瞬間、ソファアの背後から抜き手が生えてきた。私は無様にそれに貫かれ

た様に見えるが…それは残像だ。私は既に空中に飛び上がっている。瞬間、オーラの龍が飛んできて私を唾えようとするが、甘い。龍の横つ面をぶん殴って逸らす、龍は怯まずに私に向き直り向かって来る。…こんな豪華な屋敷でいいのかな？ まあそちらが望むならば大丈夫か。天井を蹴り、抜き手の襲撃者へ向かう。途中で銃弾の様な強いオーラや紙吹雪が複数飛んで来たが、全て躲す。そのまま向かうと姿を現した襲撃者が強いオーラの籠った手刀で迎えるが、私はそれも全て躲し、逆に「浸透勁」を撃ち込む様に構える。しかし、その危険性を察知したか、襲撃者は一旦距離を取る。背後には龍が迫っているが、百式を模した父さんを出して握り潰した。

「『御当主』の方まで来ていただけるとは光栄ですね。いや、4人、来てるかな？ ただ、イルミさんが見えませんがどうしました？」

「…ご名答。オレがシルバールゾルディックだ。イルミは仕事でしばらく不在だ」
「全く…。恐ろしい奴じゃ。我々の攻撃をもともせんとは。しかもまるで本気じゃないの」

「ちよつとしたお遊びでしょう？ で、続けますか？」

「いや…いいだろう。ここ迄にしよう」

「ありがたいですね。では、座っても？」

「どうぞ」

私は穴の空いたソファアに座り直す。向こうもシルバさん、ゼノさん。そして機械のバイザーをした奥さんと着物を着た娘？さんが出てきて向かい側に座った。

「まさかの歓迎でしたね。で、お眼鏡にはかかりましたか？」

「うむ。オレ達の攻撃をこうも躲しきるとはな。流石は『アンダーソン』だ」

「……ご存知で？」

「仕事で受ける事もあるからな。だが、昔からあそことは一定の縁がある。なるべく受けたくない仕事の一つだ」

「なるほど。それで、キルア君についてはどうですか？」

「…その話はしばらく待ってもらえるか？ 我々も家族内で話し合う時間が欲しい。本人の意思も確認せねばならんし、まだまだ奴も反省中だ。何せ、母親と兄を刺して出て行ったからな」

「分かりました。そこはご家族の問題ですしね。待ちますよ。どこで待てば良いですか

「？」

「本邸に案内しよう。客として迎える」

「ではありがたく」

そうして、私は彼等に連れ添われて本邸へ向かった。とりあえずはまだ穩便に済んで良かった。話を通じないかと心配したが、これなら問題ないかな？

後は、彼らとの「取り引き」次第か。折角来たからには「もう一つ」約束が出来るといいな。

私は奥さんと娘？さんに睨まれ、居心地の悪い思いをしながらも彼らと一緒に付いていった。

7 2、本邸にて

本邸に着いた。これまた大きな屋敷だ。応接室に案内され、座らされる。…今度こそ大丈夫だろうか？ 着いてすぐ、シルバさんが奥さんと娘？さんに告げる。

「キキヨウ、カルト。ご苦労だった。2人は下がっている」

「あなた…そんな！ キルアの一大事なのに!!」

「だからこそ…だ。黙って下がってろ。カルトもだ」

「…ツ!! ……わかりました」

そうして2人は恨めしげにしながらも退出した。

「……よいので？」

「構わん。落ち着いて話ができんからな」

「そうですか。ですが、私の目的は伝えましたが…」

「幾つかこちらでも聞きたい事がある。雑談だと思つてくれ」

「はあ……ならば良いですが」

「……お前の目から見て、キルアはどう映る?」

「……控え目に言つて天才、ですね。恐ろしい程の才能だ。順調に成長したら『世界最強の一角』も夢ではないでしょうね」

「……つまりお前よりも、か?」

「……それは何とも言えませんね。私は『特殊』なので。念能力者というものは大体そうでしょう……。ですが、少なくとも彼は『超一流』にすぐになれますよ」

「ほう……まるでお主が特別の様な言い方をしよるな。余程の自信があたりかの?」

「まあ、多少はありますが……今はキルア君の才能が特別、という事を言いたいのです。偶々ハンター試験で仲良くなつて、彼に念について教える約束をした以上、私も中途半端な事はしたくなくてですね……。また、ゴン君と楽しそうに振る舞つてる彼を見て、私も気になったものだからこうしてきた訳です。彼次第ですが、私は是非彼を教えてみたい、というのもあります。お節介なのは十分承知ですがね」

「そうだな……。キルアの才能は我々も認めている所だ。だが、正直に言えばお前の『力』を我々はまだ測りかねている」

「……なるほど」

「ワシらにとつてもキルは大事な後継者、というのとは分かっておるようじゃがな…それこそこちらも『中途半端な達人』には教えて欲しくないわけじゃ」

「それもそうですね。当然だと思えます。まあいきなり言われてもそうなりますよね……しかし、アレですか？ 私の『力』が見たいと？」

「よかつたら見せてくれないか？」

「……私も諸事情によりあまり気軽に全力は出せないので。一度騒ぎになった事がありません」

「『ここ』はゾルディックの敷地内だ。周辺に人は居ない。また、誰か監視する者も居ない。万が一騒ぎになるようなら我々が始末をつける」

「……そうまでして見たいですか？」

「正直ワシらは興味がある。7の扉までを平気で開き、我々の攻撃を当たり前の様に捌くお主の実力はな」

「……仕方ない、か。わかりました。じゃあ一番害の無いやり方でいきましよう。とりあえず全力の《練》だけ見せます。なので座ったままで結構です。私も座ったままやります。では、行きますよ」

「ふむ。強制したように申し訳ないが、楽しみじやな」

「オレもだ。ハンター協会会長を破る程の“力”。見せてもらおう」

私はスイッチを切り替えて、今まで弱めの《纏》に偽装していたのを元に戻す。

「ほう…。かなりの《練》じゃな。言うだけはある。じゃが…この程度“か?”」

「いえ…これは《纏》です」

「…は?’」

そこから、細胞を全力駆動させ始める。最近全力で行ける機会がちよくちよくあつて
ありがたい。偶にやらないとストレスがたまるしな。

ゴゴゴゴゴゴ…

!!!
!!!?

オーラが周囲に溢れ出すと同時に2人は瞬時にソファから飛び退き、後ろに下がって距離を取った上で臨戦態勢をとる。

しかし、まだまだ。次第にオーラが屋敷を覆う程になる。

バンツ!!

「あなた!?!」

「何が!」

部屋の扉が開き、先程退出した筈の2人も戻って来る。

「……何じゃ。この物騒な気配は」

知らない爺さんまで来た。

「……一旦やめますか？」

「…ツ！ ああ…。そうしてくれ」

私は一旦オーラを全て消す。全員が安堵したかの様な表情を見せた。

「ネテロのジジイ……よく“これ”と闘おうと思ったの…」

「ああ…。これは厳しいな…。皆すまない。ひとまずは大丈夫だから戻っていい」

「……永い事生きたが、これ程の者は見た事が無いのう…。儂には刺激が強すぎるわ。ま、大丈夫そうなら儂や戻るぞ」

そう言って初めて見る爺さんは戻っていった。こんな人いたっけか…。記憶が曖昧だ。しかし超高齢に見えるが、ここでは1・2番の実力者だな。わからないものだ。

先に来た2人も戸惑っているようだったが、シルバさんに促されて戻っていった。

「さて…如何でしたか？」

「……認めざるをえんの。正直、ネテロのジジイから『完敗した』と連絡を受けた時は何の冗談かと思つたが…実際見たら納得じやわい」

「これ程とはな。はつきり言うとお前は相手にしたくないな」

「まあ、いくら私が主張しても結局は彼次第ですからね…。なので、『取り引き』をしようと思ひまして」

「『取り引き』？」

「ええ。もし私が見させて貰えるならば、彼が成長した後、『これ』を与えます」

そう言つて、私は「黄金の木の実」を取り出した。

「これは特殊なアイテムで、一度だけ食べた者の肉体性能とオーラを限界の1.5倍程に引き上げます。無論、ノーリスクで」

「!!」

「なんと！ …そんな物が有るのか？」

「詳しくは言えませんが、この世界で見つけた貴重なアイテムの一つです。限界まで鍛

えたら「これ」を使ってもいい。ほぼ無敵の存在になれますよ。私も「これ」を使ってもいいぐらいには彼を買ってますしね」

「むう……。シルバ、どうする？」

「…まず、「それ」が本物では無いと疑うのが普通だ。効能も眉唾物だ。簡単に信用はできない」

「「取り引き」でウソをつく程寝ぼけちゃいないつもりですがね……。しかし、おっしゃる事もごもつとも。ただ、これは超貴重な産物ですので検証を、という訳にもいかなくてですね。でしたら、あなた方にも一つだけあげましょう。その代わり私からも一つ条件があります」

「……条件とは？」

「条件と言うよりは依頼ですね。『アンダーソン家の暗殺の依頼は受けない』という事です。また、どうしてもそうも行かない場合もあるでしょうから、受ける場合は自動的に私から依頼者へ暗殺依頼を出します。報酬は「コレ」です。…如何ですか？」

「…なるほどな。そう来たか。「報酬」と言うならば信じざるを得ん。だが、本当にその効果が？」

「そこは信用してください、としか。ただ、私は最初に申し上げたように、あなた方を害する意図は全く無い。また、私が仮に本気で害そうとするならこんな回りくどいやり方

「じゃ無くても簡単にできる。先程もまだ『本気』ではないですからね」

「……こりや参つたのう。硬軟使い分けてくるとはな」

「……よかろう。キルア次第だが許可しよう。ただ、我々からも条件がある……。奴には今、我々からの『行動抑制』が掛かっている。これはひとえにキルを『死なせない』為のものだ。お前は『それ』には触れないで欲しい」

「ああ……あの頭に埋まつてる『針』ですね……しかし、本人が気付いた場合は？」

「その時も触れるな。……本人が解除できたらその限りではないがな」

「……わかりました。では私も『それ』には触れない様にします」

「これは条件というより『お願い』というものだ。ただ、我々の思いも酌んで欲しいものでな」

「私もご家族の思いは優先させて頂きますよ。大事な御子息を預かるわけですからね。ただ、新たに別の『思考誘導』を感知した場合はその限りではありませんがね……その為にはキルア君とはゴン君達と一緒に一目は会わせて貰いましょう。これで『取り引き』成立ですか？」

「ああ。いいだろう……。ついでにカルトもどうだ？」

「カルトって……あの娘？さんですか？ バスガイドによると男として紹介されましたが……」

「ゾルディックの風習でな。後継者候補は例外無く男として扱われる。性別に関係なくな。カルトは女だ。将来有望だぞ？　なんなら嫁入りも検討してもいい」

「……それもまた、キルア君次第、ですかね。私は嫁入り云々はともかく嫌われている様な雰囲気を感じますしね」

「それもそうだな。では『取り引き』成立だ。これからも『良い関係』でいられる事を望もう」

「ありがとうございます。私もそう望みますよ。あ、それと、その果実は1つ丸ごと食べないと効果が出ません。つまり対象は1人のみです。よくお考えになってご使用ください」

「……なるほどな。そうするとしよう。これからお前はどうか？」

「私はツレのゴン君達の所に合流しますよ。少なくともあの門を開けないようでは話にならないので少し鍛えてきます。彼等が門を開けたら一緒にまたこちらに伺いますよ」

「わかった。ではその時迄にはキルにも聞いておこう」

「あ、最後にもう一つ。『ここ』にはもう1人居ますね？　その方からは『懐かしい』気配を感じます。無いとは思いますが、私に対してその『力』は効きません。試すのは結構ですが、その場合はそれなりの覚悟をお持ちの上でお願いしますね」

「……肝に銘じておこう」

「では……」

「私は一礼して立ち上がり、その場を退去する。使用人達に見送られながら本邸を出て、再び玄関まで向かう。…中々いい感じにまとまったか。反省点も多いが、目的は達成したし及第点だろう。さてさて、あとは向こうがどう出るかだな。まずはゴン達だ。先程も言ったが、あの扉すら開けられないようでは話にならないのでビシバシ鍛えよう。」

「私はこれからの展望を楽しみにしているようだ。これもまた人生を楽しむ、という奴だろう。彼らには私の技を余す所なく伝えよう。どんな成長を遂げるか楽しみだ。ああ、『希望』とは、やはりいいものだ。」



「……………」

「……………読まれておったな。…ハツタリだと思うか？」

「いや……恐らくウソはついていないな。アレは本氣の目だ。しかも、本当にできるだろう。つまり我々には奴に対して対抗手段が無い」

「敵対的だったらと思えばゾツとするの。キルアも厄介なモンに目を付けられたもんじゃわい」

「親父の言う通りだが……これはチャンスだな。何故奴があれ程の“力”がありながらあそこまで慎重なのはわからんが、奴を味方に引き込めるなら安いものだ……。聞いていただろう。キキョウ、カルト！」

バン!!

「あなた！ あんなに安請け合いをして……！ キルアだけじゃなくてカルトちゃんまで……！」

「オレの考えは今言った通りだ。我々は奴を味方に引き込む。出来ればゾルディックの系譜に組み込めれば最上だ。だが、奴に念を教わるだけでも価値はある。最上の“留学”だと思え。少なくともキルアは行かせる」

「そんな……もしキルアが戻って来なかつたらどうするの!?!」

「戻って来るさ……。奴はオレの子だからな」

「……………」

「…僕はどうすれば？」

「奴はキルアを所望だ。思考誘導はバレルだろう。イルミも不在だしな。よつてキルア次第、とも言えるが、できるだけ付いていけ。そして、できるなら『籠絡』しろ」

「できるかな…あんな『バケモノ』に」

「無理に、とは言わん。だが、上手くやればお前にもメリツトのある話だ。…まだまだ猶予はある。奴等が近くまで来たらキルアを解放してオレが話をする。その後でお前も話をしろ。どう交渉するかは考えておけ」

「まあ話はまとまったの。あとは…『これ』じゃな」

テーブルに鎮座する、「黄金の木の実」。豪華な応接間のテーブルに負けない…どころか圧倒的な存在感を放っている。

「奴はああ言ったが…何らかの念が込められているとも限らないか。あるとしたら操作系、だな。中身も毒を含め何があるか分からん。触れずに成分分析にまわすか」

「ほつとくとミルキに食われかねんからの。ま、それはそれでよいが、『本物』だった場合にもちと勿体ないの」

「万全の調査の後にオレが試す。奴も『報酬』として設定しているからにはウソはつかんだろうがな。それでも万が一の時は親父、頼んだぞ」

「それが良かろう。任された」

「この出会いが吉と出るか、凶と出るか…楽しみだな」

73、再会

「やあ、4日ぶり！」

「「カーム!!」」

「遅れてきたが、無事に合流出来てよかったよ。ここにいたのか」

「ああ。我々でも正式に扉を潜れる様にゼブロさんの家に厄介になっている…。カームは門は通れたのか？」

「私は鍛えてるからね。問題無いよ。それよりも、君たちが通れないのは問題だな。ハンターなら1の扉ぐらいは開ける様にしないと」

「ケツ！ わーってるよ！ でもアレ片方2トンだぜ!? それとも『念』の力か!？」

「純粹に肉体のパワー不足だ。ハンターがそれじゃすぐ死ぬぞ。というわけでこれから特訓開始だ」

「もう既にやってるが…」

「大丈夫。私 came 来たからにはもつと早くクリア出来るように鍛えよう。ゴンも早く会いたいだろう?」

「うん！ よろしく頼むよ、カーム」

「ゲーッ！ “この状態”で更に訓練すんのか!？」

「ワガママ言わない。早く行けるに越した事はないだろう。ゴンのビザ問題もあるしな」

「うん？ ライセンスは使わなかったのか？」

「あー。そうだね…。オレは自分が納得するまでライセンスは使わないって決めたんだ」

「成る程…。では尚更急がねばな。早速やろう。しかし、ゴン。君の腕は大丈夫か？ それじゃ修行もままならないだろう」

「うん。でも大分治りかけてるから大丈夫だよ!」

「……まあ仕方ないか。ならばしばらくは下半身の強化に充てよう。早速だが、外に出てマラソンだ。無論、重りは付けたままな」

「うげ、苦手なんだよな…」

「私も一緒にやろう。あと、ゼプロさんとかは何処に?」

「ああ、ゼプロさんなら今は門に居るかな?」

「よし。それなら挨拶してから向かおう」

そうして、我々は門に向かう。ちょうど守衛室に彼は居た。

「ゼブロさん。戻りましたよ。先程はありがとうございました」

「おお！ カームさん！ 戻られましたか」

「これからこの4人で行動する事になります。まずは全員で本邸を目指します」

「なるほど：貴方がいれば大丈夫でしょうな。引き続き、使用人小屋をお使いください
ね」

「大変お世話になります。お言葉に甘えてご厄介になります」

それから我々は一旦外に出て、ククルーマウンテンの外周をマラソンし始めた。全員ゼーハー言いながらも着いてきた。この4日間もゼブロさんやもう1人のもと、マジメに訓練に取り組んでいたようだ。まずはどれぐらいで限界を迎えるかチェックだな。

40キロを超え、60キロを超えた辺りで全員ダウンした。まあ150キロのジャケツトを着けたままならばそんなもんだらう。

現在地点はククルーマウンテンの麓付近だ。街とは反対方向ではあるが。

「ゼーツ、ゼーツ、おい！ いきなり無茶苦茶だぞ！ 死ぬかと思つたわ！」
「うん……これはキツイね……。でも鍛えられそう……」

「いや、すまない。皆の大体の体力を把握しておきたくてね。しかし、これなら大丈夫だろう。これから時間短縮の為に少し“特殊な力”を使う。だが、これをやるにはまず、君たちに確認をしなければならない」

「……秘密遵守、という奴か」

「その通り。クラピカ。往々にして念能力者とは、自分の能力は極力明かさない。何故なら、バレた時点で不利になってしまう能力もあるからだ。特に私の場合は諸事情でよ
りバレたくない。よってこれから起こる事の秘密を絶対に守れるか？」

「わかった。誓うよ」

「私もだ」

「オレもいいぜ！」

「よし。ならば始めよう」

私はなるべく圧をかけない様にゆっくり“聖光気”状態に移行する。

「な、何だ！ この凄まじい圧迫感は!?」

「だけど、ヤな感じじゃない…!・むしろ懐かしい感じがするよ!? それに服が白く光ってる!」

「…圧倒的だな…。一般人が念能力者に勝てないという理由がよくわかった」

「“これ”は特殊で念能力とはまた微妙に違うが…似たようなものだ。では行くぞ。ま
ずゴン、こつちに来てくれ」

「う、うん…」

近寄って来たゴンの折れた腕を取り、骨折を癒す。

「!? 治ってる…」

「どうだ? 違和感はないか? 一応偽装の為にまだギプスは取らないで、自然に治った振りをしてから取ってくれ」

「馬鹿な!! そんなに簡単に治るわけねーだろ!」

「言つたろう、レオリオ。“念”とは極論なんでもできると。私は“たまたま”出来る範囲が広いけど。本題はここからだ」

そうして、私は3人にそれぞれ3倍の重力をかける。

「うっ…」

「か、身体が…重い…動かねえ!」

「今、君たちの身体のみにも3倍の重力を掛けた。ジャケットもいいが、全身くまなく鍛える為にはこれが1番だ。60キロが大体180キロになる計算だな。さて…そうなるど、ジャケットは苦しいだろう。預かろうか?」

「……いや! 大丈夫…! このままでやるよ…! キルアを早く迎えに行かなきゃ!」

「よし。その意気ならばいいだろう。君達はこれから歩いてもいいから門までその状態で戻って来ること。夕方までにだ。大体ここから30キロほどだから厳しいだろうが頑張つて戻つてこい。私は一足先に戻つていよう」

そうして私は「聖光気」を解いて門まで戻る事にする。念攻撃ではないので、念に目覚める事は多分ないだろう。もう1人の交代要員の使用人さんに挨拶でもして待つとしようかな。



「行っちゃったね…」

「“これ”はヤベエな。夕方迄に帰れるか…?」

「やるしかあるまい。しかし、本当になんでもアリだな…」

「ああ。本当にヤベエ力だ。修得者も秘匿するワケだ。こんなのが一般に広がったら大混乱間違いなしだぜ」

「だからこそ、秘匿は必須だな。だが、その中でも恐らくカームは最上級の使い手だと考えられる。我々はラツキーだったな」

「みんな、とにかく行こうよ！ もう夕方までそんなに時間がないから急がなきゃ」

「そうだな…まずは歩きながら慣らして、小走りぐらいで行くか…」

「マジでハードだな…。だが、やるしかねえか」

そうして3人は進み出した。1時間後、ジャケットを預けなかつた事を大変後悔することになるが、その下りは割愛する。



—— 試しの門前 ——

「やあ。ギリギリで間に合った様だね」

「ブハーツ、ブハーツ、な、何とか間に合ったぜ…」

「さ、流石に動けないな…」

「めっちゃキツかったよ…」

「いい感じにギリギリだな。お疲れ様。さて、では次に…」

「まだやんのか!？」

「いや、休憩だよ。夕飯にしよう。麓の街で買い出しをしてきた。小屋で頂こう」

「夕飯後は……」

「もちろん、修行だ。今度は筋トレな」

「やっぱり……」

「まあ、間違いない結果は出る。だから頑張ってほしい」

「ハア……。やるしかねえか……」

その後、小屋に一旦戻り、もう1人の門番の使用人、シークアントさんと夕食を囲み、そこから筋トレ祭りが開催された。もちろん重力はそのままなので苦しそうだったが、何とかこなしていた。

くく5日後くく

ギイオオオオン……

「よっしやー！ 開いたぞ!!」

「驚いた…。全員1週間ちよいでやっちまうとは…」

「お世話になりましたね。ゼブロさん、シークアントさん」

「いや、身体が軽い軽い！ 今なら何でも出来そうだぜ！」

「調子に乗らない。まだ1の扉しか開けてないんだ」

「まあな。でも、カナリ強くなった感はあるぜ」

「よし！ これで堂々とキルアを迎えに行けるね！ ゼブロさん、シークアントさん、長い間本当にありがとう！」

「ええ。ここから道なりに沿って山まで行けば辿り着く筈だ。坊ちゃんに会える事を祈っているよ」

「うん！」

「ゼブロさん、私まで世話になってありがとう。助かったよ」

「気にしなくていいですよ。向こうの方によくお伝えください」

「では」



「…いつちまつたねエ。どうなる事やら」

「まあ…なんだ。話はもうついてんだらう？ 雇い主もその使用人も大概な化け物だ

が、〃あいつ〃も相当な化け物だからな」

「どうやらそうみたいだね。まあ我々にはどうすることも出来ない事だ。無事にキルア様が合流出来る事を祈っておくかね」

「違いねえ。ま、化け物同士で話がついてんなら大丈夫だろ。全く世界って奴は広いもんだぜ…」



我々は山道を進む。もちろん、彼らの重力は解除してある。しかし普通なら潰れてい

る所だが、流石は主人公組、という所だ。順応するスピードが早すぎる。

しばらく進めば、鉄条網と石の門が見えて来た。これがゾルディック家の庭の入り口かな？ その前にデカイスーツの婆さんが立っていた。

「ようこそ。お客人。これより先はゾルディック家の邸宅内。よつてこれからはこの私わたくしめがご案内いたしますよう。私わたくしはツボネと申します。御見知りおきを…。先ずは“ここ”をお通りください」

雰囲気たっぷりの威圧感。ツボネさんか…。少なくとも序盤には出てこない人じゃなかったつけ？ それにしても、隠そうともしないもの凄い殺気。なるほど。〃試し〃か。私は兎も角、他の者にも“これ”をもつともしない程度にはいて欲しいという事かな。普通の人間にとっては睨んでくる怪物の横を通るような物だ。そういう事なら私は黙つて見ていよう。念、ではなくただの殺気だからな。

「うっ…。これは…」

「……成る程な…歓迎はされてないらしい。通つたら何が起きるかわからんな」

「さて…寝惚けた事を仰る。私わたくしはご案内するのみ。まさかこれすら通れない輩が坊ちゃんを迎えに来た…という事は無いでしょうからねえ。ただ、通れないようでしたら

是非回れ右をしてお帰り頂く事をオススメしますよ。私わたくしから坊ちゃんに『尻尾を巻いて帰った』とでも伝えておきます」

「私からも言っておく。私はここから何があつても手助けしない。どうするかは君達が決めろ」

「そんなの決まつてる！ オレ達はキルアに会いに来たんだ！ 案内してもらおう為にも通してもらおうよ」

ゴンが切り出し、ズンズン進んでゆく。危ういな……。だが、それが彼のいい所でもある。どんな脅威に対しても意志を貫き通す、断固たる決意。それが念能力者にとっては代え難い資質となる。

他の2人も、ゴンがそう言ったら顔を見合わせて覚悟を決め、ゴンに続く。その目に迷いは無い。いい仲間だ。彼らもきつと強くなる。

門を3人が通り過ぎた瞬間、ツボネさんが3人の死角に瞬時に移動した。しかし、3人は分かかっていても動じない。

「ホッホッホッ…成る程。胆力だけはお有りのよう。よいでしょう。この私わたくしめがご案内しますよ。付いて来てください。…後ろの方も是非どうぞ？」

ふむ……。向こうも、こちらがどれぐらいのものかを知っておきたいという事かな。と
りあえず通れたならよしとしよう。あまり出しやばるとゴン達の成長を妨げてしまう
からな。これからも後ろで控えておくとしよう。



「起きろ!!」

バシ!!

拷問部屋の様な場所で、黒髪の太った男が鞭で吊るされた子供を引つ叩く。身体中に
鞭の跡が残り、悲惨な見た目になっている。

「……………ああ、兄貴、お早う。今何時?」

何と、吊るされた子供は寝ていたようだ。凶太いにも程がある。勿論キルアである。太った男は唾えていた火のついた葉巻をキルアの胸の皮膚に押し付けた。

「いい気になるなよキル」

「あちち、そんなア。オレ、すげー反省してるよ。ゴメン悪かったよ兄貴」

反省しているような顔を全くせず、にそうのたまう。案の定、キルアに兄貴と呼ばれた男は鞭を再度頭部に振り抜く。

「うそつけ!!」

バキヤ!

キルアは打たれた後、ニヤリと笑い、

「やっぱわかる?」

「……………」

太った男のイラつきはMAXの様だが、どうしたらこの生意気なガキが反省するか思案中のようだ。その時、太った男の胸ポケットから「ピルルル」と、着信音が流れて、電話を取る。

「はい！ あ、ママ？ うん？ うん…。時間切れか…。わかったよ…ちえつ。おい。終わりだ。行っていいぞ」

「うん？ 終わり？ はー痛かった」

バキツ　ベキツ　バキツ

キルアは全ての拘束具を自力で外す。

「……………」

「兄貴、そう睨むなって。オレも悪いとは思ってるんだぜ。だから大人しく殴られてやっただよ」

コンコン

「入るぞ」

そう言つて入つて来たのはキルアの祖父。ゼノである。

「ミル。終わったか？ キル…シルバが呼んだからな」

「親父が？ ……わかった」

そう言つて、キルアはスタスタと部屋を出て行く。残された男は鞭を床に放り投げ、ゼノに愚痴る。

「くそくそ!! ゼノじいちゃん、アイツゼッター反省してないよ!」

「んなこたわかつとる」

「大体、じいちゃんはキルアに甘いよ! だからつけあがるんだ!」

「アイツは特別だからな。ミル：お前から見てキルアの力量はどうだ？」

「……そりやすごいよ。才能だけなら長いゾルディックの歴史の中でもピカイチじゃない？ それはママも認めてるしオレもそう思う。ただ、暗殺者としては失格だよ。ムラつけがあつてさ。友達なんか作つてる奴にゾルディック家は継げないよ。要するにあいつは弱虫なんだよ。精神的にさ」

「ふむ。そういうことだな。しかし、だからこそ今回の件は渡りに船、とも言えるな」

「ああ：アレね。未だにビデオを再生して見ても信じらんないよ……。恐ろしい。化け物だ。あの時はここにいたけど肝を冷やしたね。流石のキルも訳も分からずビビってたからね」

「ソイツにキルアは気に入られたからな。シルバも強くなつたし、言う事無しじゃな」

「そう！ アレすごいね！ パパがやたらパワーアップして、ヤバい事になつてるよ！

まあいい事なんだろうけどさ」

「奴との『取り引き』の結果だな。奴の言つた事が証明されたわけだ」

「そんな事があるなんてね：前代未聞じゃない？」

「そうだな……。奴とは今後も良い『取り引き相手』である事を祈ろうかの」



「キルアが奇妙な部屋に入室する。そこは機械と生物が入り混じった様な部屋。父の自室である。ただでさえ入るのは躊躇われる場所だが、今回はよりそれが強い。原因は久しぶりに見た父が更に圧倒的に強くなっていたようだからである。この短期間で何があつたというのだろうか。」

(……前より強くなってる……威圧感が半端ない)

「キル。友達ができたって？」

「う、うん……」

「どんな連中だ？」

「どんなって……一緒にいると楽しいよ」

「そうか……。試験はどうだった？」

「ん……簡単だった」

「……」

「……」

「キル…こつちに来い」

「え？」

「お前の話を聞きたい」

「試験でどんなことをして、誰と出会い何を思ったのか……。どんなことでもいい。教えてくれ」

「…うん」



「——でき、そしたらゴンがなんて言ったと思う？ 足は切られたくないし、まいったとも言いたくないだつて。わがままだろ——？」

「はははは。面白いコだな」

「キル。友達に会いたいか？ 遠慮することはない。正直に言え」

「思えば…お前とは父子で話をした事がなかったな。オレが親に暗殺者として育てられたように、お前にもそれを強要してしまった」

「オレとお前は違う…。お前が出て行くまでそんな簡単なことに気づかなかった」

「お前はオレの子だ。だがお前はお前だ。好きに生きろ。疲れたらいつでも戻ってくればいい。な……………」

「もう一度聞く。仲間に会いたいか？」

「うん!!」

「わかった。お前はもう自由だ。だが、一つだけ誓え」

そう言ってシルバは親指の皮膚を噛みちぎりながら差し出しながら告げる。

「絶対に仲間を裏切るな。いいな」

キルアも同じ様にして答える。

「誓うよ。裏切らない。絶対に！」



「兄さん。行く前にちよつと待って」

「うん？ ……カルトか。どうした？」

「僕も…一緒に連れて行って欲しい」

「は？ ヤダよ。どうせ監視だろ？」

「兄さん。兄さんが家出してずっと考えてたんだ。僕は、本当はお母様やこの家にはもうウンザリだつて。だからいい機会だし僕も家出しようと思う。でも、僕は暗殺しか知らないから外の事はまるで分からないんだ。兄さんだけが頼りなんだよ！ お願ひ、一緒に連れて行って…！」

「ついこの間までおふくろにべつたりだつた奴がよく言うわ！ ……第一、それが本当である証拠も無いし、おふくろも許さねーだろ？ 無理だね」

「お母様には社会勉強と兄さんの様子を見てくるつて言つて、取り引き」までしてきた。家を出ちゃえばこつちのものだよ。今後僕は家とは一切連絡を断つ。兄さんの行

動を報告しない。兄さんの行動を咎めない。兄さんの友達を尊重して危害は絶対に加えない。誓うよ」

そう言つて、親指の皮膚を噛みちぎつて差し出した。

「!! …… “それ” をするからにはもう裏切りは許されねーぞ！ 分かつてるのか？」

「もちろん。この意味は分かつてる。それに、イヤだと言つてももう僕は決めたんだ。拒否られても勝手に付いていくよ。それも僕の自由、でしょう？ これは僕の誠意だよ」

「……………」

「……………」

しばらくの間、沈黙が2人を包む。その後、キルアが観念した。

「……………あくあ。しゃーねーな。面倒くせーけど。でもそこまでやるならまあいい。ただし！ 約束は守れよ！ あと、アイツらが拒否つたらダメだからな！」

そう言つて、渋々先程切つた親指をカルトのそれに合わせた。

「ありがとう！　兄さん。これからよろしくね！」

と、カルトは花の様な笑みを見せた。愛しい兄と行動出来る。それだけでもカルトにとつては望外の喜びである。故に自然と出た表情だった。その笑みを見てキルアも満足ではなく、疑いが少し晴れた。まだ若干疑つてはいるが。

一方、カルトは予想以上に上手くいった事にコツソリほくそ笑む。敬愛する兄は絡め手よりも正攻法で行った方が上手く行く。そう思つてはいたが不安だった。

だが、上手くいった。後は彼等と如何に上手く交流していけるか、である。耐えるのは慣れている。何年掛かろうとも必ず達成してみせる。そう心に誓いながら…。



「こちらでお待ちくださいな」

と、案内されたのは本邸である。執事達も勢揃いだ。『取り引き』を重視している証拠だろう。だからこそ、この歓迎だ。

4人で広い応接間のソファアに座って待つ。しばらく待つとキルアが出てきた…が、もう1人付いてきている。着物姿の女の子だ。カルトちゃん…だっけ？

「おお！ ゴン！ 久しぶり！ あと…ついでにクラピカとリオレオ！ と…ゲツ、カーム！」

「我々はついですか？」

「名前ぐらい覚えとけよ！ レオリオだっつーの！」

「ゲツとは何だ。ゲツとは。全く」

「キルア、その子は？」

「ああ、オレの弟のカルト。コイツも家出したいっつーから一緒に来た。ワリーけど一緒に来たいっつーんだが大丈夫か？」

「オレはいいけど…弟!？」

「ああ。ウチは下の世代は男女例外無く男って数えられるっつー変な風習があるんだ。とりあえずコイツの性別は女の子だ。ほらカルト。挨拶しろ」

「はじめまして。僕はカルトといいます。突然押し掛けてすみません。よければご一緒

させてください」

「オレはゴン！ よろしくね！」

「クラピカだ。よろしく頼む」

「レオリオだぜ。可愛いお嬢さんだな」

「カームという。よろしく頼む」

「ねえねえ、キミいくつ？ キルアの妹でしょ？」

「年齢的にまるつきり子供じゃないか。大丈夫か？」

「うーん…10年後が楽しみだな…」

…などなど、早速質問攻めにあっている。約1名変な事考えてる奴がいるが。しかし私は前に会ったが、そこには触れて来ないようだ。前は日本人形みたいな陰気な印象だったが、今は朗らかに対応している。こちらに合わせるのかな？ 向こうの狙いを考えるとアレだが、上手く対応していくしかないか。大体10歳前後の子を嫁に勧めるとは、やつぱりゾルディックはちよつとどうかと思う。そうこうしているうちにキルアが我慢できなくなったようだ。

「だーっ！ お前ら、質問は後にしろ！ 早く行こうぜ！ ここにいちやうるせーのが

いるし、落ち着かねーからな！ とりあえずここ出るぞ！」
「そうだね。キルアにも会えたし、行こうか」

「キルアちゃん！ うるせーの、とは私のことですか？」

「ゲツ！ ツボネ。聞こえてた？」

「聞こえてたも何も、あれだけ大声で言えば丸聞こえですよ。大体キルアちゃんはいつも言葉遣いに気を付けるようにと昔から言ってますのに！ これからしばらく家から離れるでしょうが、私の助言は覚えておいてくださいね！ いいですこと!!」

「わ、分かった分かった…じゃ、行ってくるよ…。…お前らのせいだぞ」

「いや、今のは明らかにキルアの自爆でしょ…とりあえずいいこ？」

そうして我々は本邸を後にした。行くとき、執事達一同が頭を下げて見送ってくれた。我々も会釈を返して出ようとした時、最後尾の私だけツボネさんに引き留められた。

「カーム様。ゼノ様からのご伝言です。『見送りできずにすまん。だが、ワシらがいない方がキルアにとってもよいじやろう。キルア達をよろしく頼む』とのことす」

「……なるほど。承りました。お任せください、とお伝えください」
「私^{わたくし}ら執事一同からも、お2人をどうかよろしくお願ひします」

「皆さんのお気持ちも承りました。ツボネさん、案内ありがとうございます。では……」

そうして、我々はゾルディック邸を後にした。2人を託されたからには責任をもって当たらないといけないな。そう改めて決意しながら、私はキルア達についていった。

ヨークシン修行編

74、ヨークシンへ

「しつかし、ゴンも本当にガンコだよな〜。折角のハンター証、使つちまえばいいのよ」

あれから山を降りて全員で食事を摂る。いい感じの Pasta 屋があつてそこに入った。山盛りで出てくる Pasta は壯観で、育ち盛りの皆にはとても良い。キルアがゴンに対してライセンスを使わない理由を尋ねていたが、ゴンは最終的にヒソカにプレートを叩き返したい、という。…まだ持ってたのか。よっぽど腹に据えかねていたのだろう。

それを聞いて全員（カルトちゃん除く）が呆れ返るが、まあゴンだし…と納得する。ヒソカの居場所も知らないのにどうするつもりだったのかとか、今の実力でどう叩き返すのかとかをツツコミつつ、今後どうするかという話になった時、それぞれが修行兼、
“念”の習得をしたい、という事で一致した。

ゴン、キルアは言うに及ばず、クラピカは彼の目的についても私の家が手助けできるだろうし、丁度いい。そしてレオリオも勉強と並行してまずは習得に力を入れたいらし

い。カルトちゃんは…とりあえずついていくとのこと。まあハンターになった以上、何をすることも念能力の習得は必須だからな。それが「裏ハンター試験」でもあるし。

「みんな今後はそれでいいのか？ それでいいなら、引き続き私が「念」について教えよう。修行には良い場所を知ってる。まあ私の住んでる地域だが」

「そう言えば、カームはどこに住んでるの？」

「ヨークシン、さ」



飛行船を乗り継いで1週間。ようやくリンゴン空港に到着した。この1週間も無

駄にはできない。基本的な瞑想のやり方を再び伝え、全員でみっちり瞑想を行った。ぶつちやけ、カルトちゃんは既に「念」を習得済みなので迷ったが、どうするかコツソリ尋ねたら一緒にやるといふ。という事は一人《点》をやるという事か。大人しく、余り発言しない子だが自分の意志はしっかり持っているようだ。ただ、いまいち彼女の目的と意図が分からないな…。本音としてはどう思ってるんだろう。そして私もあんなまり女の子の扱いは良く分からないんだよなあ…。この辺も要検討、だな。

とりあえず、飛行船の広場内で車座になって瞑想する近寄りが見たい集団が発生し、周りに新興宗教かと疑われたのはいい(?) 思い出だ。

空港に着く直前、事件が起きた。といっても大した事じゃないが、ゴンとキルアが自身のオーラを見出し、《纏》を発現できたのだ。早い…。早すぎる。この2人は本当に天才なんだな、と今更ながら実感した。テンションアゲアゲになる2人を見てクラピカは焦り、レオリオはぐぬぬ、となっていたが、その2人も発現しかけてるから焦らずにとフオローした。

しかし、アゲアゲの2人だったが、カルトちゃんが既に習得済みなのがバレてキルアとプチ兄妹喧嘩になりかかってしまい、こちらもフオローに奔走した。そこで判明したのは、カルトちゃんは女子の嗜みと共に母親に習ったらしい。それはそうと、とにかく

疲れた…。



空港に着いてからは、予めジョンに連絡していたので、黒塗りのデカイリムジンが迎えに来ていた。運転手はヴィンセントさん。それぞれがビックリしていたが、とりあえず全員リムジンに放り込み、発進した。

「カームの家って…お金持ち？」

「ああ。まあね。とはいえ、私が稼いでる訳じゃないからなあ。ただの居候なんだよ。まあ世話になってる分、お返しはしてるけどね」

「ちなみに…カームの実家、というかファミリーネームは何だ？」

クラピカが聞いてきた。あれ？ 言ってなかったか。

「ああ、すまない。伝えるのを忘れてたよ。私の名はカームⅡアンダーソン、という」

その言葉にゴンとカルトちゃん除く全員が反応した。

「「アンダーソン!!!」」

「何? 有名人?」

「バカ! ゴン、いいか? サヘルタでアンダーソンって言えば、サヘルタ合衆国全体を束ねるマフィアの大元だ! そっち界限ではある意味超有名人だぞ!」

「これはありがたい…。どうやら裏社会のボスと強烈なコネを持つ者がこんなに近くにいたとはな…」

「…親父が昔仕事後に俺たちにボヤいていたよ…。幻影旅団とアンダーソンには手を出さなってさ」

「いやいや、だから私は居候だつて。ただ、私の実家だから今は甘えているけどね。ある程度自由は利くから君達の修行場も存分に提供できる。というわけで、修行するならウチでやった方が効率もいい」

それを聞いて、クラピカは何やら考えこんで、ゴンは周りの都会つぶりとリムジンの

豪華さにはしやぎながら今後の事でキルアとレオリオと雑談を交わす。

「……ボクも行っていいの?」

そんな中ちよつと時間を置いてカルトちゃんが身体を寄せてコッソリ尋ねてきた。今まで簡単な受け答えぐらいしかしてこなかったのに大胆だな。1週間は経つが、私も距離感が中々掴めない。とりあえず質問には答えよう。

「カルトちゃん、気にすることは無い。ただ、まあ実家で見た事に関してはある程度守秘義務な物もあるだろうから、そこはその都度伝えるし、こちらも気をつけるよ。特に君たちは親御さんから預かつてる大事な客人だからね」

納得したのか、身体を離してくれた。

「ボクの事は『カルトちゃん』じゃなくて、カルト、と呼び捨てで呼んでほしい。ボクも仲間の1人だから。その代わりボクもカーム、と呼ばせて」

「あ、ああ。もちろんだとも。これからよろしく。カルト」

「あーっ！ カームぼっかりズルい！ オレもカルトって呼んでいい!?」

「…ッ！ ああ。 いいよ。 ボクもゴンって呼ぶね。 他のみんなもそう呼んでね」

…ほんのごく僅かな一瞬、カルトの顔の一部が曇った。 上手く誤魔化してはいたが、私は近くに居たからこそ察知できた。 ただ、変化は一瞬だけで、後は朗らかな顔で談笑している。

恐らくだが、ゴン達に対してはまた別の複雑な感情がある様だ。 それが何かはまだ分からないが。 原作でもこの子がどういう所で出て来たかいまい思い出せない。 故にまだキャラが掴めない。 かと思えば、

「おい！ あんまりカルトに馴れ馴れしくすんなよ！ ソイツは仮にもアンダーソンだからな！」

「あ、兄さん、嫉妬？ 嬉しいな」

「バ、バカ！ そんなんじゃねーよ！ オレはただ…」

「ただ…何？」

「うるせーな！ この話はもうおしまい！」

と、キルアに対して笑いながら揶揄って遊んでいる。 日本人形みたいな見た目で、性

格もそういう印象だったが、こうして見ると仲のいい兄LOVEな妹にしか見えない。ただ、それが正しいかも分からない。やっぱり私には年頃の女の子の扱いは難しい。今から不安になってきた。…ホントに大丈夫かな？ まあ引き受けた以上仕方がない。何とか上手くやっていくしかないか…。



バレたかな？ 上手く隠せていたらいいけど、隣の人にはバレたかもしれない。やっぱり兄さんと仲のいいコイツらに対してはまだまだいい感情で対応する事が難しい。あーあ。失敗しちゃったな…。でも、まだ挽回できる。これから取り返せばいい。これもゾルディックの為。兄さんの為だ。最上は、兄さんと、隣の人をゾルディックに引張り込む事。少なくとも兄さんはゾルディックの僕のもとに帰ってきて欲しい。その為にはまだまだ我慢が必要だ。そして僕も柔軟にならなくちゃ。コレはチャンスだ。

兄さんと同行できて、しかもそれが家族の承認を得ている。

そして、隣に座るカーム。この人は僕もまだまだ読めない。あれだけの「力」がありながらも、常識的な対応にこだわり過ぎるキライがある。暗殺者としては向かない性格かもしれない。でも、その「力」だけでも取り込めたらゾルディックにとつては福音でしかない。家族との連絡が取れない中、責任は重大だ。何としても引き込める様に努力していかなきや。なんなら伴侶になるかもしれない人だ。これからしつかり見極めていこう…



楽しく(?) 備え付けの飲み物を飲みながら雑談をしている間、ヨークシンの郊外を抜けて、ドンドン都心から離れていく。車で3時間ぐらい走り、ようやく目的地に到着した。周囲は広大な自然が広がる山の麓である。アンダーソンの別荘でもあり、また、昔からアンダーソンが鍛錬に使っていた場所でもある。周囲一帯はアンダーソン所有であり、ウチでは当主以下の部下達も鍛錬に使用していた。開拓もできて一石二鳥、と

の事だ。こういった山での開拓兼修行はマイケルの代からの伝統らしい。アンダーソン家は幾つかこの様な修行場を所有していて、ここはそのうちの一つであり、それを今回借り切っている。

ヴィンセントさんがドアを開けると、デカイ別荘、というか寮に近い建物が目の前に広がる。

「さて……。着いたね。皆にはここで滞在してもらおう事になる。まあ降りてくれ」

「これは……デカイ家だな」

「ウチの所有の修行場みたいなもので、寮みたいな造りになっている。さあ、ヴィンセントさんが案内してくれるから行こう」

我々はヴィンセントさんに案内されるままに別荘に入り、食堂に案内される。全員何故食堂？ と思つたらしいが、これは事前に頼んでおいたのだ。そろそろ昼時だしな。腹も減つてるだろう。ヴィンセントさんは案内が終わると戻って行つたので、お礼を言つておいた。

食堂は大人数が座れるような学食に似た作りになっていて、長いテーブルが複数設置されている。今回の使用者は我々だけなので、気兼ねなく座れる。

我々も適当なテーブルに着く。メニューは今回指定していて、定番のアンダーソン Pastaだ。他にも数多くのメニューがあり、飽きる事は無いだろう。しばらく待つと用意が出来たようで、食堂のおばちゃんが呼んでいる為、全員で取りに行く。アンダーソン Pastaは全員口にあったようで、皆モリモリ食べている。

「そういえば、カームってパスタ好きだよね」

「ああ。正確に言えば私はこのパスタが好きなんだ。ウチの伝統的な味だからな。私も作れるぞ」

「へーっ。家庭的なんだね！」

「料理はいいぞ。最高の趣味になり得る。今度食堂借りてやつてみるか？」

「…オレはパス」

「ボクはやつてみようかな…？」

などと、雑談を交わしながら食事を済ませて、片付け終わったらそれぞれの部屋に案内する。

「ここが皆が入る部屋だ。それぞれ個室になっている。ネット環境も完備でフロ、トイ

レ付きだ。まあ、整理整頓や掃除ぐらいはそれぞれでやってもらうが」

「カーム…大変ありがたいのだが、お代は幾らだ？」

「ああ、金の心配はしなくてもいい。何故なら、ここでバイト出来るからな。ここは修行も出来て金も稼げるいい場所なんだ。滞在費はそこからさつ引くから大丈夫だよ。とは言え、来たばかりだから最初は私が貸ししておく。早く稼げるようになってくれ。ああ、レオリオの為に医学書や入試関連の書籍は集めておいた。ウチは医学を志す者も多いからね。心おきなく勉強できると思う」

「…なるほどな。合理的だが…バイトとは？」

「ま、そのうち分かる。とりあえず、ゆっくりしてくれ。この施設や周辺を探索してもいい。今日は移動初日だからゆっくり休んで、明日から開始だ。夕食は18時。食堂に遅れないようにな。メニューに希望があれば食堂のおばちゃんに伝えてあげてくれ。私はちよつと今後について打ち合わせしてくる」

そう告げてから、私は皆のもとを離れた。さて、ジョンに連絡しておくか。



カームが去ってから、皆は何となくゴンの部屋に集まった。

「なんつーか…至れり尽せりだな」

「ああ。本当にありがたい事だ。だが、ここは自然が多くていい場所だな。修行はキツいだろうが楽しみだ」

「キルア！ 探検行こうよ！」

「いいぜ！ 家の外も見てくつか！」

「ボクも行く！」

「えく。お前も来んのかよ」

「まあまあ、キルア。一緒に行こうよ」

「…行っちゃったな。オレ達はどうする？ …おい、クラピカ！」

「ん？ ああ…すまん。レオリオ。考え事してた」

「全く…さつきからポーつとしがちだぜ。…アレか。幻影旅団とかの事か？」

「うむ。仲間の緋の眼の回収や、旅団を追うためにも、裏社会の繋がりは必要だろう。だからこそ本当は私もマフィア辺りの雇われを屈指していたが、まさかその大元に近付くとは思わなかった。思わぬ幸運だったな。これを逃す手はない。修行を頑張つて力を付けて、この家の中枢に雇われるようにしていこう、と考えている。そういう君はどうなんだ？」

「オレもなあ…。医者への夢は諦められねえ。だが、『念』を知った以上、習得しないつー選択肢もねえ。アイツはかなり熟練っぽいから期待出来るしな。それに、勉強もさせてくれるらしいから言う事は無いな。ありがたいこつた」

「カームがどう考えているかイマイチ分かりづらいが、我々を仲間と思つてやつてくれるならその恩は返せるようにしないとな。彼が言つてたバイトとやらをまずは頑張るしかないか」

「そうだな…。何やらされるか不安しか無いが、やるしかねーな」



『ジョンか？ カームだ。今回ここを貸してくれてありがとう。修行には本当にいい場所だな。費用は前渡した中から使ってくれ』

『いいんですよ。カームさん。費用も本当は要らないんですがね……。なにせ、あそこはもう古いからしばらく使つて無かつたですし。まあ使用人は何人か派遣しましたから好きに使つてください』

『ありがとう……。しかし、先程も概要だけ告げたが、勝手にゾルディックと取り引きしてしまつて申し訳なかつた。とりあえずアンダーソン暗殺の依頼を受けないか、カウンターをする事で合意した。その代わり、彼らの子息2人預かつたけどね』

『他の有象無象ならともかく、ゾルディックには我々も手を焼いてましたからね……。むしろそんな好条件で手出しさせなくなつたならありがたいですよ。大体前にそうするかもしれないって言つてたじゃないですか。その“取り引き”もカームさんにしかできませんよ。まあこれでオークションも安心ですね』

『少なくとも、私がいる限りはアンダーソンには手を出させないよ。約束する。それと、例の部族の援助と交換留学はどうだい？ こちらも任せつきりで申し訳ない』

『援助は今の所順調ですよ。最早ミテネの北側辺りでは彼等は大勢力ですね。いい連携が取れています。そのうちリターンも返つてくる見込みですよ。それに彼等は大変優秀

です。頭の回転もいいし、肉体的性能も言わずもがな、ですな。現時点で商社勤めすら出来る程のポテンシャルを持つ人材の宝庫です。逆に未開地開拓などのノウハウを教えて貰ってWIN-WINですね。ただ：カームさんに会わせるとうるさいのが玉に瑕ですが』

『それは…本当に申し訳ない。私の資金プールはまだ余裕があるはずだから、それでよろしく頼むよ。どうも彼等は私を“神”扱いして崇め出すから対処が難しいんだ』

『任せられました。まあ経緯を考えれば仕方ないですな。諦めてください。こちらも上手くやってきますよ。我々にとっても利益のある話ですからね』

『本当に世話になるな…。ありがとう。とりあえず高速用のトンネルぐらいは開通しておくと』

『いえいえ。どういたしまして。ではメールで予定地は送っておきます。こちらは気にせず楽しくお過ごしください』

『では、近いうちにまた連絡する』
『ええ。待つてますよ』

さて、とりあえずは大丈夫のようだな。本当にジョンには頭が上がらないな。私も気

合を入れて明日から取り組む事にしよう。本当に楽しみだ。

後は…あまり気が進まないが、彼女を呼ぶか。女子は女子で上手くやってくれる事を期待しよう。どうなるか分からんが、最近ハラの判定も厳しいからな。会長がフォローしている事を期待しておこう。

こんな事で悩める事もいい事だろう。ああ…本当に楽しみだなあ。

75、修行開始初日

「おはよう！ みんなよく眠れたかな？」

朝の5時。それぞれの部屋に声をかけて起こす。みんな眠そうだ。昨日夜遅くまで遊びまくってたからなあ。こつちも調子に乗って花火とか出しちやったのがいけなかった。だが後悔はしてない。楽しかったし。

「早速だが、朝食前に軽く運動しよう。各自ストレッチしてくれ。ああそれと、カルト。君は折角の着物がボロボロになるのも忍びないから、良かったらこつちに着替えてくれ」

そうして私は彼女に黒いジャージと運動靴を差し出した。白いラインの入っている普通のジャージだ。子供サイズがあつてよかった。

「あ、ありがとう…」

カルトはおずおずと受け取ると、部屋に一旦戻っていった。その間、野郎共は黙々とストレッツチする。…みんな柔らかいな。レオリオが若干固いが。だが許容範囲だろう。そのうち、恥ずかしそうにカルトが戻ってきた。

うん…。何だろう。服が変わるところも印象が違うのか。見た目的には日本の部活の女子にしか見えない。これはこれでアリだ。

「すごいね！ カルト可愛いよ！」

「あ、ありがとう…」

ナチュラルにゴンさんが褒める。誰よりも早く切り込んだな！ 流石に褒められて悪い気はしないらしい。しかし、ゴンさんは私より女の子の扱いが上手いな？ これからこういうイケメン行動とつたら心の中でゴンさんと呼ぼう。

「兄さん、どう？」

「あ？ いーんじゃね？」

「……………」

それに引き換えキルアの適当な返事！ まあ兄妹だからしょうがないのか。だが、身内でもそこは褒めとけよ。ちよっぴりスネちやつてるじゃんか。

「カルト、着物もいいが、別の服だとまた印象が変わるな。ジャージで申し訳ないが、それはそれでいいじゃないか。また機会があつたら他の服も見てみたいな」

と、フォローを入れといた。笑ってお礼を言ってくれたので良かった。レオリオは「…5年後でも良さそうだな…」とか呟いていたが、その発言はセクハラだからな？

準備が整い、いよいよ修行開始、だ。彼女が来るまではしばらくかかるから、その間は私1人で教える事となる。

まずは“現場”を見に行くか。

「用意はできたね。では初めに軽くマラソンだ。どんな時でもスタミナは重要だ。目的地は“バイト先”。これから稼ぐ場所を見に行くにも丁度いい。では出発しよう。皆

かなりの走力があるから飛ばすぞ。遅れたら置いていくからな」

さて、出発だ。私が先頭になって山道を走り抜ける。スピードは一般人の全力疾走より早めだ。ハンター試験よりは難易度が高いが、それぞれ苦も無く付いてくる。流石だ。キルア、カルトのゾルディック組はともかく、ゴンなんかは得意分野だからかなり余裕があるな。クラピカ、レオリオも3倍重力修行が効いたのか、まだまだいけそうだよ。それならペースを徐々にアップしていこう。どこまで付いて来れるかな？



うーん。中々いい感じで付いてくるな。ただのマラソンじゃなくて山の自然を利用したパルクールみたいな動きをしつつ、更にスピードを上げてるのに、まだまだ余裕があるな。素晴らしい事だ。どこまで上げて大丈夫かな？ 目的地まで約25キロの道のり。往復で3時間以内で行ければ今のところ合格だが、この様子だと近い時間でいけるな。どこまで行けるか見極めつつ、スピードアップしていこう。



「さて、着いたぞ。ここが『バイト先』だ」

周囲は岩山の岩石地帯。ここが高速道路予定地だ。既に何人かが現場入りして周辺の道路を整備し始めている。

「ゼーッ、ゼーッ、おい！　どこが、『軽く』だよ！　ハーフマラソンより走ってるじゃねーか！」

「いや、まあちよつとスピード上げたけど、慣れたら楽だよ。それより、君たちがメインで修行する場所だ。とりあえず監督に挨拶に行くぞ」

「カーム。まさかと思うが、バイトとは…」

「うむ。その通り。工事現場だ。インフラのな。バイトも出来て筋トレも出来る最高の修行場さ。今回は特別に我々が山のトンネル担当になっているから、これを掘り抜いてもらう。まあまだやらないがね。さあ、行くぞ」

「マジか…」

「おはよう。監督」

「おはようございます、カームさん。お久しぶりです」

「監督も朝早くからお疲れ様。今回は無理言つて申し訳ない」

「とんでもない！ トンネル掘りはウチの伝統ですからね。慣れたモンですよ。そして…その子達が？」

「うん。今回の対象者だ。ほら、みんな。こちらが今回のバイトの監督だ」

「」「よろしくお願いします」「」

「ああ。カームさんが連れてきたんだ。期待してるよ。しかし、カームさん。今回のトンネルは長いですけど大丈夫ですか？」

「問題無いよ。複数人いるし、彼らは才能溢れる若者だからね」

「それは期待出来ますな。いつから始めます？」

「大体1週間後ぐらいかな。彼らならそれぐらいで来れるだろう」

「承りました。ホントに優秀ですな。ではそれぐらい迄には周辺の設備はある程度仕上げときますよ。予算はたっぷりありますからね、バイト代は期待しといてください」

「うん。よろしく頼む。ではまた。あと、『コレ』を分かりやすい所に置いてくれ」

私はゴン達に見えない様に、監督にこっそり“あるモノ”を渡す。

「ああ。『アレ』をやるんですね？ フッフ。カームさんも楽しんでますね」

「やっぱりわかる？ いやあ、夕方が楽しみなあ…」

「よし。では帰るぞ」

「？　すぐ始めねーの？」

「ここは念の修行場でもあるからな。君達は基礎能力が不足してるからまだ始めない。まずは念を修めてからバイトは本格的に始める。今回は顔見せだな。とりあえずこれから帰り道だが、私は自重せずに走るから君達はそれぞれで帰ってきたまえ。目標1時間半な。あまり遅いと朝食を食べ損ねるぞ。：ゴン、キルア、カルトあたりは付いて来れるなら付いて来い。行くぞ」

「ヤベ！　それは勘弁だぜ！　って速ええ！　ちよつと待てよ！」

「ゴン、急ぐぞ！ アイツについて行くからな」

「うん。山道なら得意だから急ごう」

「置いてかれるのは癪だからボクも頑張るよ」

「…レオリオ、我々も出来るだけ付いていこう。追いつけないかもしれないが意地は見せよう」

「マジか…。じゃあねえ、頑張るか…」



クソっ！ 速い！ 余裕だと思ってたが大間違いだった！ もう人間の出せるスピードをとつくに超えてるぞ。アイツ、どんだけの身体能力なんだ!?

不味いな。マジでオレですら置いてかれそうだ。…これが超一流の身体能力か。流

石のゴンとカルトもキツそうだ。

「ゴン！ オレ達の力を見せるぞ！ ゼツテ食らいつく！ カルト、行けるか!?!」

「まだまだ行けるよ!」

「うん、頑張る…!」

よし、ちよつと本気出す。見てろよ…!

よっしや、並んだ…! このまま追い越して…ゲツ、笑ってやがる。…何? 「まあまあだな」だと…? ふ、ふざけやがって! 全力で追いこしてやる!

ヤバ、更にスピードが上がった! クソっ…。だ、ダメだ…追いつけない。だが、せめて食らいついてやる…



うん。これは凄い。置いてくつもりだったがまだ付いてくる。やるね。根性も申し分ない。既にスピードは車並みに出してるんだがな。嬉しい誤算だ。

鍛えたらどこまで伸びるだろう。凄まじいポテンシャルだ。より楽しみになってきた。鍛えるぞー。



「いやー凄いなあ。まさかギリギリでも最後まで付いて来れるとは思わなかった。素晴らしい身体能力だ。これは期待できるな」

「ハアツ、ハアツ…バ、バケモノめ…。息切れも無くて汗一つかいてないのか…」
「……………」

キルアは喋れるだけ大したもんだ。他2人は完全にダウンしている。

「君らも鍛えればこれぐらいはできるようになるさ。『念』を完全に覚えたらもつと凄
いぞ。とりあえず、残りの2人を待つ間、息を整えつつストレッチをやるといい。レオ
リオとクラピカも、そうは遅れていないからそこまで待つ時間は無いぞ。大したものだ
な」

その後、クラピカとレオリオも若干オーバーしたただけで戻ってきた。朝食に間に合っ
た様だな。素晴らしい。とりあえず、全員シャワーを一旦浴びて着替えてもらってから
食堂に集合した。時間は午前9時。今日の朝食はトースト、サラダ、目玉焼き、ベーコ
ン、コーンスープだ。サヘルタ版、ご機嫌な朝食だ。

彼らはヘトヘトだったが、空腹には勝てなかつたらしい。トーストとスープを無限お
代わりしていた。サラダも食べ、サラダも。

さて、朝食が済んだらいいよいよ念修行だ。建物から一旦出て、広めの草っ原に輪に

なつて座る。クラピカとレオリオは疲れからか自然体ができていて、非常に良い瞑想になつてゐる。ゴン、キルア、カルトの3人組は《点》を行うように伝えたが、ゴンとキルアは若干不満そうだった。実際に早く扱つてみたいのだろう。しかし、そこで私から念戦闘におけるメンタルの重要性を説き、納得してくれた。緊急時にすらオーラを正しく制御できる精神力は、實際生死を分ける。私が言うんだから間違いない。そうじゃなきゃクラークの時点で死んでたしな。

また、こちらとしても全員揃つて教えた方が効率がいい。と、いうわけで、昼まで全員瞑想タイムだ。しばらくすると、クラピカが昼前後にオーラを見出し、その後《纏》ができた。聞くところによると、就寝前などに時間を取つてやつてたらしい。勤勉だなあ。

レオリオは更にぐぬぬとなつていたが、彼も近日中にできそうな気配がある。私なんざ1年かかったというのに贅沢な奴だ。それを伝えたら驚くと同時に安心して続きを行つていた。現金な奴。

それに、レオリオが苦戦しているのには心当たりがある。彼の才能は他の者と比較してもそうは変わらないほどのものだが、彼らと違う点は彼が医者志望だという事。

私はオーラを見出す時に、皆に私なりのイメージを伝えていたが、細胞一つ一つをイメージする事は難しい。それこそ、膨大な専門知識とイメージ力が必要だ。よつて後に

ある程度は噛み砕いて教えた。具体的には精孔からオーラが発生しているという一般的な奴だ。マイケルにもそうしたからな。だが彼は律儀に最初のをイメージしているのだろう。医者志望故に細胞のイメージもある程度出来るだろうからな。よって、仮に発現した時はより力強い《纏》が出来るだろう…

昼食の時間だ。昼は魚定食と味噌汁だ。この近辺の川でとれた魚を捌いて甘露煮にしてある。我が家は食には敏感で、世界各国は言うに及ばず、ジャポンやカキン辺りからも料理法を集めている。我が家の関係者に美食ハンターもいるほどだ。私はジャポン食がわりと好きで好んで食べていたが、食堂のおばちゃんもその辺の情報を知っていて出してくれたらしい。食べてみるとかなり美味い！ おばちゃんに目線を合わせてサムズアップしたら、向こうもサムズアップで返してくれた。

ゴン、クラピカ、レオリオは箸に苦戦していたが、キルアとカルトは使ったことがあるのか、普通に食べていた。特にカルトの食事マナーは綺麗だ。着物もそうだが、女子の嗜みかな？

とりあえず皆満足したみたいなのでよかった。

昼からはまた楽しいマラソンだ。今回は昼食後だし、コースを変えてフルマラソン

(40キロちよい)だ。目標2時間半で少し緩め。レオリオ辺りは「また走るのか…」と言つてたが、今日はまだ緩い方だぞ？

実際、全員苦もなく付いてきた所を見ると、身体能力はやはり全員かなり高めだ。これでも元の世界では世界レベルに近いんだがな。だが、嬉しい誤算だ。

午後3時。オヤツタイムの後、更に瞑想修行に入る。若い子には辛いかもしれないが、逆に今が一番大事な時だ。それに念修行も近いうち入るから我慢して欲しい。だが、朝のマラソンのおかげか、彼らも今のところ大人しく従ってくれているからよかつた。可能であればレオリオ式の《纏》にしたい所だが、こればかりはな…。私の場合には細胞操作の面もあるから、レオリオですら私の様にはいかないだろうし。まあ鍛えていけばそれぞれ誤差になっていくだろう。だが、妥協はしたくない。レオリオが発現したら、それを見て少し修行内容を変更してもいいかもしれないな。

午後5時。最後のマラソンだ。辺りは暗くなつてきている。少し趣向を変える。道のりは朝の通りだ。実は工事現場に預けたのは4つのフラッグだ。フラッグを所有して戻つた者のみ夕食後のデザート(今日はフルーツパフェ)にありつける。別に無くても問題はないが、ここに娯楽が少ないのと、仲間内で1人だけ食えないという部分が精

神的にくる。負けられない筈だ。しかも、フラッグを持った後も油断できない。

我々が奪いに行くからだ。

我々とはこの寮の3人の使用人だ。全員念能力者だが、もちろん手加減する。オーラ探知は使わない。特殊な念能力は使わない、だ。更に彼らのレベルのギリギリ上の力で奪いに行くとは伝えた。我々の始動は2時間後。それまでに着けばOKだ。

よって彼らの勝利条件は

1、2時間以内にフラッグを持ってゴール

2、2時間超えても我々の襲撃を躲してゴール

である。ちなみに3時間を超えると夕食自体が消滅すると伝えたら俄然ヤル気になったらしい。また、今回は私は監視役だ。《隠》で《円》が出来るからサボりはすぐわかる。ヤル気無しの場合と同じく夕食が消滅するとも伝えた。まあこの面子でサボる事は無いだろうがな。さて：誰かパフェまでいけるかな？ 更にヤル気が出る様にサンプルまで見せた。フルーツをふんだんに使った超豪華パフェだ。店で食べたら1000ジェニーは下らないだろう。私も食べたい。

実はコレは食堂のおばちゃん作で、彼女は本邸のシェフの1人だ。念能力者でこそな

いが、本業はパティシエとの事。気合いが入っている。いい人材を寄越してくれたものだ。

皆が静かに闘志を燃やしはじめた。カルトなんかは一見興味無さそうなフリをしているが、目がマジだ。獲物を狙う目になっている。アレはガチで来るな。フッフ…。そう簡単にありつけないと思うなよ。

5分間の準備運動の後、一斉にスタートした。さあ。君達の本気を見せてもらおう。さて、気付くかな？ 実はこの中でレオリオが1番有利な事に。



「往復で2時間…。ギリギリだな。だが、不可能じゃない！ ゼツテー『アレ』は頂くぜ！」

「負けられないね！ カルトは大丈夫？」

「ゴン…。兄さん…。悪いけど、これは僕にとつては譲れないものだ。だから本気を出すね」

そう言つて、カルトはオーラを足に集めてダッシュを始めた！

「ゲッ！ カルト！ お前…。これまで手を抜いてやがったな！」

「今まで手は抜いてない。ただ、オーラを使わなかっただけ。でも今回の『コレ』は襲撃アリの『何でもアリ』だ。だから僕は遠慮なく使う。パフエの為に…。じゃあね」

そう言うとカルトは凄まじいスピードで去つていった。

「クソっ！ オレ達もアレできねーか!？」

「今やろうとしてるけど…難しい！ ちょっとしか動かない！ 今の状況じゃ無理だ！」

「おのれ…カルト！ だが、カームの奴が対策してないなんてありえねー！ どっかに

罨があるはずだ。だからこそそのあの余裕だ。恐らく2時間じゃどう足掻いても着かない……！ オレ達は襲撃を躲してゴールする方を目指すぞ！」

「レオリオ、大丈夫か？」

「ああ。今の所はな。とりあえずパフエは厳しそうだが、3時間以内には着くように頑張るぜ！」

「それを聞いて安心したよ。私もパフエはどうだっていいが、少しでもアピールできるようにフラッグは持って帰ろうと思う。お互い健闘しよう」

そう言ってクラピカは更にスピードを上げてレオリオを抜かして消えていった。

「……………あいつ、パフエ食べたいんだな……」



一足先に工事現場に着いたカルトは、これみよがしに置いてある4本のフラッグを見つけた。現場は作業が終了したらしく誰もいない。

罨がないか慎重に探りつつ、フラッグを手に取る。

ズシッ

「お、重い……!」

暗くて見えなかったが、フラッグには神字がびっしり書いてあり、どう見ても念が込められている。恐らく100キロ以上はあるだろう。

実はこのフラッグ、オーラ量によつて重さが変化する。また、所有すると強制的に

《纏》が解除されるといふ一品だ。

「くっ…。これじゃ厳しい…。間に合うかな…。仕方ない。肉体の力で全力で行くしかない」

遅れる事15分。ゴン達も到着した。その間、何故かカルトとはすれ違わなかった。

「ぐっ…。結構重い…。それに《纏》ができない…。」

「こういう事か…。よく考えてやがる…。カルトでもギリギリのはずだ。オレ達は襲撃を躲す方向で行くようにしよう。あと、レオリオとクラピカにすれ違わないようにしないとな」

「えっ？ 普通に行かないの？」

「バカ！ アイツらが奪って来た時の為の警戒だ。あと一本しかないし、仮にオレ達がフラッグを奪われたらまた取りに戻らなきゃならねーだろ！ それがなくても揉めたら時間ロスだ。カルトにすれ違わなかったのもそういう理由だ」

「なるほどね。じゃあ上手く隠れながら急ごうか」

「コレか…。ぐっ。なるほど。重い…。そういう事か。誰ともすれ違わなかった理由も分かった。…コレはエゲツないな。だが合理的だ。さて…。とりあえず戻るとしよう。2時間の前に出来るだけゴールに接近しなければ」



もうすぐ2時間が経つ。やはり無理かと思っていたら、残り1分の時点でカルトが根性で到着した。息も絶え絶えだ。まさか正攻法で間に合うとは…。まだ彼女を侮つ

ていたらしい。パフエー号はカルトで堂々の決定だな。

とりあえず「パフエ…」とうわ言を発する倒れた彼女を女性スタッフが運んでいった。そして2時間。いよいよ狩りの時間だ。他のメンツは間に合わなかったから襲撃を躲す方向で来たようだ。楽しみだなあ。使用人はみんな熟練だから万が一の事故もないだろう。ゴン達はどうするかな？



「……キルア、2時間経った。襲撃が始まるよ」

「シッ！ 静かに。ゴン。お前なら気配も断てるだろ？ ヒソカに張り付いてたんだからな。オレ達なら隠れていけば多分見つかんねーぜ」

「体感で後5キロちよつとかな。ここからは狙いを分ける為に別れた方がいいね」

「ああ。2人して3人に囲まれたらアウトだからな。幸運を祈るぜ、ゴン」



2時間か……。不味いな。襲撃開始時間だ。しかし、これだとレオリオが1番有利だな。何せ彼は往復する必要がない。万全の状態で待ち構えれば良いからな……。初めから気づけば良かったが後の祭りか……。恐らくレオリオも気付いたな？　ここからは要するにフラッグ争奪戦のバトルロイヤルだ。制限時間付きで。私なら入り口付近で張るな。残り約10キロ。行けるか……？



ゴンとキルアはほぼ同時に寮の側まで接近していた。残り約1キロ。当然近づけば近づく程リスクは上がる。彼らはそれも分かっているようで、かなり慎重だ。しかし驚

いたな……。教えてもいないのに《絶》がほぼできている。かなり精度が高い。これは襲撃する側も見つけづらいな。だが、残念。フラッグには発信器が付いているのだ。

そろそろ接敵するな……。ん？ フラッグを置いた？ そして離れた……。？ そうか！ 逆襲撃する気だな？ なるほど。こちらが発信器を付けてる事もお見通しか。やるね。だが、そう甘くはないぞ？ お手並み拝見だな。

クラピカの方は若干抑えながらも普通に向かって来ている。ラストで張ってる事を読んだか。まあそこまではいいが、襲撃はどう躲すかな？

そしてレオリオ。彼はどうするだろう。楽しみだな。



10分して、ダッシュでキルアが戻って来た。手にはフラッグを持っている。パフェ2号決定！ すぐ後ろから追っ手が付いてきていたが間に合ったな。逆襲撃が成功し

た。流石暗殺者、という所だな。

その後すぐ、ゴンが到着した。彼も持っていた。彼はフラッグを囿に罫祭りで対応していた。まあ足止めにはかならなかつたが、使用人がトラップに引つ掛かつた瞬間に、フラッグを見えない様に結んだ蔦で持ち去つて逃げ切つた。彼がパフェ3号だな。

さて……。あと一つ。果たしてどちらか食べられるかな？ 襲撃する使用人は残り1人のままにしておいてやろう。是非とも頑張つて欲しい。

残り時間5分。ギリギリで2人が姿を現した。2人ともフラッグを持った使用人を追いかけている。残り500メートル。レオリオがナイフを投げると同時にクラピカが紐で繋がつてる2振りの刀を投げた！ 同時に来たからナイフは躲しても刀は無理だつたらしい。使用人の足に紐が見事に絡まつた。群がる2人。だが、使用人はフラッグを力いっぱいゴール方面に投げた！ 残り100メートル！ 2人は同時に走り、追いかける！ だが、使用人も少し後から紐を解いて走り出す！

フラッグを取ろうとした瞬間、レオリオがクラピカの足を引つ掛ける。普段の彼なら引つ掛からないだろうが、流石に疲れが出たらしい。彼が倒れている間にフラッグを拾い、ダッシュするレオリオ。

「ハツハ〜！ パフェは頂くぜー！」

倒れたクラピカが起き上がる。ゲツ。アイツ、緋の眼になってない？

「レ オ リ オ〜〜!!」

クラピカのオーラ量が爆発的に増える！ なんだありや！ そんなに増えるものなのか!? そして前の2人を凄まじいスピードで追いかける！

後方の使用人すら追い抜いてレオリオに迫る！残り20メートル、凄い、追いつきそうだ！

残り10メートル！ 使用人を抜き去って追いついた！ 残り5メートルで完全に捕らえた！ そのまま揉み合いながら……ゴール!!

最後にフラッグを手にしていたのは……



「うんま〜!! サイコーのデザートだぜ!」

「疲れたから尚更美味しいね」

「私も大人気なかったな。すまなかった。レオリオ」

「とか言いながら美味そうにパクついてんじゃねーぞ! …まあオレもチャンスを活か

しきれなかったからしやーねえけどな。狙って悪かったな。クラピカ」

「気にするな。私が君でもそうする」

「……………(パクパク)」

お楽しみでのデザートタイムを堪能する。結局判定はクラピカだった。レオリオも健闘したが、緋の眼の力が勝負を分けた。あの時、クラピカが逆襲撃を仕掛けた所を更に

レオリオが襲撃して、結局三つ巴になった結果、フラッグを使用者側に奪われて、一時的に共闘していた。だが、フラッグは一つ。何処かで奪い合わなければならぬ。そう考えるとレオリオのタイミングは絶妙だったな。クラピカの底力が上回ったが、パフェはレオリオでもおかしくはなかった。

レオリオも健闘したな。自分の有利を最大限に活かして作戦を立てたのだろう。今回は惜しかったが、次回も頑張ってほしい。

：1人黙々と味わって食べてる子がいるが、全力で堪能中なので声をかけないでおう。やっぱり女子だなあ。

食事が終わり、午後9時。ここからはフリータイムだ。鍛えるもよし、休むもよし、勉強するもよし。今日含め3日間は同じ様な修行をしていくと伝えた。もちろん、協力してくれた使用人にはお礼とともにパフェを食べてもらった。彼らも楽しんでいたようであった。

私も自分の修行に入ろう。最後の目的の為に調整が必要な部分があるのだ。うかうかしては行かない。楽しみながらも全力で取り組んでいくとしよう。

76、四大行と「彼女」の合流

初日から数えて3日。皆もこの修行に慣れてきたらしい。ただ、初日のデザート争奪戦は1週間に一度だけだ。夕方は筋トレタイムとなった。アレは毎回やると面白くないし、特別感が無くなるからな。それを伝えた時のカルトはこの世の終わりみたいな顔になって、私も一瞬揺らいだが、ここは心を鬼にしてダメなもんはダメだと断った。甘やかし、良くない。だが、カルトは甘やかしたくなるんだよなあ……。これが妹属性つてやつか。いかな。「彼女」の到着が待たれる。

3日目の午後の瞑想にて、遂にレオリオが目覚めた。

そして、やはり力強いオーラ……！ 細胞一つ一つを連動させて、より効率的にオーラを生み出している。間違いなく初心者組では1番力強い。レオリオ、渾身のドヤ顔。今度はゴン達がぐぬぬとなる番だった。さて、そうなたら夕方の筋トレは中止して、早速四大行の修行に入ろう。

まずは座学。念とはオーラを操る技術である事を改めて説明した。そして基本の四大行。《纏》、《練》、《絶》、《発》の説明をし、使用人の1人に《発》以外をやってもらった。彼は襲撃の人員の1人で、名はリベロという。28歳。熟練の能力者だがハンターではない。気さくな使用人でノリもいい。普段は寮の管理を他2人とこなしていて、ゴン達とも休憩時間にサッカーで遊んでくれる素敵なナイスガイだ。

彼にお願したのは私じゃ参考にならないからだが、リベロさんは中々いい能力者で、実力もかなりある。いい見本だ。

早速それぞれで《練》の修行に入る。カルトは出来るため、《練》を維持する訓練だ。まあ大体2時間以上保つだろう実力はある。だからちようどいいな。私も見て回って、苦戦している所はアドバイスするなどして、夕方の訓練は終了した。

夜は夜で、レオリオにお願いして、人体の細胞に纏わる講義をしてもらった。彼にとつても勉強になるだろう。約1時間の講義だが、これがレオリオの《纏》の秘訣かともんな真剣に聞いていた。

もちろん、バイト代は出る。今日は例のパフェだ。こつそり自室に持って行ったら喜んでた。しばらくは講義をお願いして続けて貰おう。次回以降は現金になるがな。

何と彼らは一日半で《練》をマスターした。やはり習得スピードが早い。凄まじいな。実際。ここで系統の話をしながら水見式をやつてもらふ。原作通り、ゴンが強化系、キルアが変化系、クラピカが具現化系。そして、レオリオが放出系、カルトが操作系だった。これは知らなかったから驚いた。しかし、こうしてみると特質以外の全ての系統が揃つたな。面白い。ついでにクラピカは緋の眼だと系統が変化し、水の色が変わつて葉っぱが回るという特質系になつたのも確認した。これで全系統が揃つたわけだ。

続けて《絶》の修行に入る。これに関してはゴン、キルア、カルトは言う事は無い。既に出ていたしな。また、クラピカもある程度コツを教えたら出来た。レオリオは苦戦したが、細胞から発生するオーラを留めるコツを理論を交えて教えたら出来た。まだまだ精度は甘い、一週間以内でモノにするだろう。《絶》の訓練がてら、寮内で隠れんぼなどをして遊んだ、もとい訓練したのは楽しかった。ちなみに最後まで見つからなかったのはゴンだった。彼はその日のメインの絶品ハンバーグを増やす権利が与えられた。そうして更に3日が経過した。基本的に午前はマラソンと念修行、レオリオの講義。午後は筋トレと念修行及び瞑想だ。レオリオの講義から更にイメージを深めて、オーラを生み出そうと瞑想も真剣に取り組んでいる。理解が深まると《纏》も徐々に力強く

なっていくのが面白い。

今はどちらかと言うと念を鍛える事に重点を置いた修行であり、皆ウキウキでやっている。今は《凝》の鍛錬に入っている。まだまだぎこちないが、だんだん早くなってきた。大体出来る様になったら、私が《隠》で指の先に作った数字を当てるゲームだ。一番遅い奴は腕立てをやってもらっている。確かこれ、「彼女」がやってた訓練だったな。丸パクリだが怒られないだろう。

《凝》は、戦闘には必須の能力なので、しっかりと鍛えていこう。

そして……。4日目の夜に《兎》以外の四大行習得を確認できたという事で、お祝いのパーティーを開いた。

「ゴン、クラピカ、レオリオ。『裏ハンター試験』、合格おめでとうー！」

「『裏』？」

「そう。『裏』だ。念は大っぴらに試験内容にできないからな。実はコレはハンター十ヶ条という取り決めで2番目にもある、正式なものだ。ハンターたる者、最低限の武の心得は必須で、その最低限とは念能力である、とされている。今、君達は念の最低限を全員クリアした。よって裏試験は合格だ。おめでとう。私は今回皆の試験官役だったから、協会にも報告しておいたぞ」

「なるほど…。でも、念ってコレが全てじゃないでしょ？ 《発》も習って無いし」

「その通りだ、ゴン。今のままではヒソカをブン殴るのも到底無理だし、クラピカも幻影旅団に勝てる訳もない。本来ならば、ここから先は君達で見つけろ、というのが一般的だが、今のままでは確実に死ぬ。よって、引き続き、私が指導を続けるが、良いか？」

「うん！ お願い。どうせなら《発》まで行きたいし、これまでの代金もバイトで返さなきゃね」

「レオリオはどうする？ 一旦勉強に専念するか？」

「いや…オレもトコトンやっておきたい。むしろ念を習得した方が勉強効率がいい気がするからな。ちょっと考えてる事があるんだよ」

「なるほどな…。他の者もそれでいいか？」

「ああ。ゴンがいいならいいぜ」

「ボクもそうするよ」

「私もだ」

「よし。では予定通り、念修行をやると同時にバイトも始めていこう。明日からはよりキツくなる。今日はゆつくり休んで、明日に備えるといい。食後にはスペシャルケーキも出るからお楽しみにな」

カルトの顔が輝く。そういう顔を見るとほっこりするな。

さて：そろそろ「彼女」が到着してもおかしくないはずだが：。まだかな？

しばらく私も修行していると、使用人から連絡があつた。着いたらしい。急いで迎えに行かねば。：怒ってないといいな。

玄関に到着したら、リムジンから懐かしいゴスロリ服の女の子が降りてきた。そう。お分かりだっただろうが、「彼女」とはビスケット＝クルーガーその人だ。ただ、その表情は：

会長！　ちゃんとフォローしたんだろうな！

「遠い所からはるばるようこそ。急に連絡して申し訳ありません。ビスケさん。久しぶりですね」

「ありがとうございます。カームさん。でも、あまりにも連絡が無いからてつきり忘れられたかと思いましたわ。あと、ハンター試験での事、よろしければ後で教えてくださいさるかしら」

oh…。やっぱり若干お怒りだった！ 確かに連絡遅くなったけどさ…。でも会長も悪いよ会長も。仕方ない。こちらでフォローしつつ、全ては会長のせいにしておう。

「わかりました。まあ立ち話もなんですから、上がってください。応接室に案内します」

一応、この館にも書齋件応接室の様なものがある。当主級が修行する際に必要な場合が多いからだ。また、客人の対応もこの部屋で行う。

使用人がコーヒーか紅茶を尋ね、紅茶と答えた。私はコーヒーをお願いする。

「まずは連絡が遅くなって申し訳ない。私も試験に向けて準備などで忙殺されて遅れてしまいました。ようやく試験も終わったので連絡した次第です」

「それはいいんですの。こうしてお会い出来ましたからね。でも…聞きましたよ。貴方の事」

まずはお詫びから入る。しかし、やはり焦点はそこだよね…。

「私もみだりにいいふらす訳にはいかなくてですね…。貴女ならお分かりかと思いが」

「そうですね。分かつてます。全てはあのジジ…もとい、会長のせいですわ。全く…あの方ときたら。だからカームさんに怒っているわけではないですよ。誤解なさらずでも、連絡一本欲しかったのは本当ですが」

「そこは申し訳ないとしたか。ですが、こうしてお会いすることが私の誠意だと受け取っていたきたい。貴女も会長に聞いたのでしょうか？ 私に関する事を」

「ええ。聞きました。やはり貴方は…。ですが、今回はどうして私をここに？」

「貴女に私から依頼があります。依頼内容は、私が今育てている弟子の共同育成、です。期限は、育成の様子を見ながらですが、全員が上位クラスになるまで」

「なるほど…。弟子ですか。貴方が教えるならば本当に幸運なコ達ですね。私は要らないのでは？」

「それが…私も昔一人教えただけで、しかも自己流です。人数も5人もいる。それぞれが大変優秀なだけに慎重にいきたくてですね…。特に、その中に女の子もいるから分からない事が多いのですよ」

「女の子!? …いえ、失礼しました。わかりました。しかし、報酬はいかがなさいますか？」

「逆にお聞きしますが、いかほどで？」

「そうですね…。私はこれでもダブルですし、資金は全く困っていません。私はハンターですから、自分の惹かれる物によって動くかどうか決めます。カームさん。私を動かしたいなら…お分かりでしょうか？」

「なるほどね…そう来ましたか。わかりました。では、こちらををご覧ください」

そう言うて私は予め用意して置いた『あるモノ』を取り出す。

「こ、これは……！」

「向こうで採れたモノです。当然、超希少ですよ？」

私を取り出したのは、紫に妖しく光る結晶だ。元は原石の様な状態だったが、私がキレイにカットした。ダイヤ以上に硬かったから苦労したな…。アンダーソンで分析した結果、害が無いと判断されたものの一つだ。名を…

「輝晶石、と仮に名付けました。『これ』の特異な点は、まずその高貴な色と美しさを巻く様な文様に紫が仄かに光る。それなのに硬度は通常の宝石と一線を画す。同じ紫のアメジストと比べても、その輝きは歴然！ 更に…手に取ってみてください」

もはやビスケは目が釘付けだ。私に言われてハツとして恐る恐る手に取る。

「オーラを流してみてください」

言われた通りにオーラを流すと…妖しくも美しい光が満ち溢れる！ そのあまりの美しさにビスケは呆然としている様だ。よし！ 畳み掛けるぞ！

「コレはオーラに反応して更に美しく光り輝く。世にも珍しい一品です。いかがですか？ お眼鏡に適いましたか？」

「……………」

「ビスケさん？」

「ハッ!? え、ええ。これ程の物は見た事がありませんわ。素晴らしい一品です！ わかりました。引き受けましょう！」

「ありがとうございます。では、〃それ〃は前払いで差し上げます。：ただし、分かっているとありますが、出所は絶対に秘匿してください。：後は、とりあえず、これからの滞在費はこちらで負担します。まずは部屋に案内しますが、明日から共に指導をお願いします。荷物を置いたら育成について打ち合わせをさせてください。時に、夕食はとられましたか？ 簡単なものなら用意がありますから、ぜひ召し上がってください」

「何から何までありがとうございます。では30分後に打ち合わせをお願いしますね」

そう言ってくれたので、私は彼女を部屋に案内した。言えない。〃アレ〃は異世界から戻ってきたあと、結晶地帯に迷い込んだ時にその辺にゴロゴロ転がってたモノなんて言えない。おかげで在庫はまだ山ほどある。バレないだろうしいいけど。光るから夜間に便利だったんだよな。あの時は結晶のデカイトカゲとか出て来て苦労したなあ。一通り倒したあと、何かに使うだろうと思つて周辺を採掘しまくったのはいい思い出だ。お陰で私の宝石リストは108以上あるぞ！ 中にはヤバイのもあるけど。だからこそ輝晶石は逆に「光るだけ」だから問題ないだろう。出所はバラせないがな。でもビスケなら大丈夫だろう。

さて、強力な助っ人をゲット出来た。修行が捗るな。もともと原作でもゴン達の師匠だから期待が出来る。それに、彼女は何か便利な能力を持つた様な…。まあ、おいお

い分かっていくだろう。



やったわね！ 遂に辿り着いたわさ！ ジジイにはムカついたけど結果オーライね。彼の依頼も私にとつては願つてもない事だったわ。渡りに船とはこの事よね。例の弟子も、彼がわざわざ選ぶぐらいだから相当優秀なはず。ジジイに聞いた後で調べてみたら、彼が昔教えたであろう唯一の弟子は、あのマイケルⅡアンダーソン！ 今となつては伝説の念能力者だわ。彼がどの様に育成するかのノウハウを知れるだけでも儲けものね。楽しみだわ。

そして：報酬をふっかけてみたけど、大正解だったわね！ なんて呼ぼうかしら。キーちゃん？ それともスーパーアメジスト略してスパメちゃん？ ああ：これだけで3年は鬩える…。でも、まだまだ持つてそうね…。弟子の女の子つてのが気になるけど、絶対に落としてみせるわさ！

77、バイト兼修行

「これからいよいよバイトを行う。その前に、皆に紹介しておこう。ダブルハンターのビスケットとクルーガーさんだ。彼女はこう見えても熟練の念能力者で、君達への指導には最適な方だ。これからは彼女と私が共同で修行にあたるから、よろしく頼む。ビスケットさん、自己紹介をどうぞ」

「今、カームさんから紹介がありました。ビスケットとクルーガーです。カームさんとは以前から親しくさせていただったので、この度呼んでいただきました。みなさん、どうぞよろしく願いますね」

早朝5時。いつもの様に全員起きてストレッチを始める前に、皆にビスケットの顔合わせをした。皆一緒にビツクリしていたが、見た目は完全にか弱い女の子だからな。レオリオは「また幼女か」と呟いていたが、そんな認識だと後々えらい目に合うぞ。

また、カルトが若干警戒気味だが、ビスケットも対抗して威嚇する様な目線を送っている。

……気持ちには分かるが、何の為に呼んだか分からなくなるので仲良くしてほしい。しばらくはフオローが必要か……?

その後、ビスケにはゴンを中心に質問攻めにあっていたが、上手くいなしていた。キルアに年齢を聞かれた時には若干イラっとしている様に見えたが、秘密という事で押し通していた。……確か彼女の年齢は……。いや、いかな。女性の歳を考えるなど、一番やってはいけない事だ。後でキルアにはお説教だな。その前にゴンに怒られてるけど。ゴンさんはその辺私より紳士だからありがたいな。

今日からバイトを行うが、その前に彼等の念の練度をビスケにも見てもらう事にする。習得してから約1週間。果たしてどの様な評価をするかな？

「……カームさん。このコ達、本当に目覚めてから1週間まで？」

「ええ。皆、素晴らしい才能の塊ですよ。私もあまりの早さに戸惑っています。カルト

は元から《発》まで至っていました。まだ10歳ですからね。相当なものです」

「いえ、確かに才能は凄まじいとは思いますが……よくぞ1週間でここまで出来ましたね」
「この1週間は修行オンリーでしたからね。彼等は条件が揃えば最高のパフォーマンスを返してくれますよ。だからこそ、期待出来る。これからバイトがてら修行を行います
が、打ち合わせ通りに行きますのでよろしくお願いします」

「わかりました。本当に楽しみなコ達ですわね」

「さて、今日はこれからいよいよバイトを始める。朝食は用意して貰って向こうで食べる事になるから心配ない。私が皆の分を持っていくからな。始める前に、ちよつと特殊な『負荷』をかける。ゴン、クラピカ、レオリオは経験済みだな。キルア、カルト。今から私がやる事は守秘義務がある。守れるか？」

経験したゴン達がゲツという表情になる。

「…何するかわからねーけど、ここにいる以外の誰にも言わなきゃいーんだろ？ オレは大丈夫だぜ」

「ボクも、絶対…言わないよ」

「まあ、君達を信用するでしょう。では、始めるぞ」

ズズズズ…

「!!?」

始めた瞬間、2人は同時に私から距離を取る。反応が同じで面白い。しかし、私もこの威圧感が出てしまうのはまだまだだな…。他のメンバーも離れはしなかったが、驚愕の表情だ。

「これは…《念》を覚えたからこそ分かる…。また『別物』だ!!」

「久しぶりに見たが、威圧感が半端ねーな…。どうなってやがるんだ？」

「カーム…。『コレ』は、一体何なんだ？ また念能力とは違う様だが…」

ビスケも口を挟む。

「コレが…『聖光気』！ 古より伝わる伝説の闘気！ コレは凄まじいわね…。あんた達！ こんなモノは滅多に見れないからしつかり見とくんだわさ！」

ビスケも興奮していたからか、口調に地が出てるぞ。まあ別に知ってるからいいんだが。

「ビスケさんが言った通り、コレは念能力の先にある特別なものだ。ただ、習得難度は凄まじく高い。念能力を極めた先のものだからな。君達はまず、念能力を鍛える段階だからとりあえず気にしなくていい。コレがなくとも十分超人になれるからな。では、行くぞ」

ズウン…

「ぐっ…」

「久しぶりだけど、やっぱりキツイ……。でも前よりマシかな？」

「ああ、また始まるのか……」

「なんだこりや!? 身体が急に超重くなったぞ!」

「……………」

「カームさん……これが？」

「ええ。彼等の身体だけ3倍の重力をかけました。キルア、カルト。聞いての通りだ。これから基本的に修行時はこの重力下で行う。最初は3倍から慣らししていく。まずは慣れる事だ。ではバイト先に行くぞ。朝食の時間が遅くなるからな」

そう言つてそのまま走らせる。キルアとカルトは四苦八苦しながらも走り出すが、しばらくすると慣れたのか、フォームが安定してきた。ゴン達などは3倍を経験しているから慣れたものだ。3倍ならこんなもんだろう。純粹に体重が3倍になるだけだからな。それに、だからこそこれまで沢山走らせたわけだ。さて……7時半までに着けばまあ合格点かな？



“聖光氣”!? そんなものがあるなんて……。あんなに簡単に重力を複数に付与できるなんて信じられない。それに、まだまだ様々な事ができそう……。最早アレは人間の理を超えたものだ。まさに無敵の能力、と言っている。多分ウチのアルカさえも凌駕するほどの……。…僕は本当に幸運だ。その概要がわかるだけでも凄まじいリターン!

この人は、絶対に逃せない!

ただ、あのビスケットとかいうオバちゃんも彼を狙ってるみたいだ。僕には分かる。そして、アレは絶対に年齢詐欺だ。だったら僕の方が有利だ。絶対に彼に気に入られる様に頑張らなくちゃ。まずはこの重力修行をクリアして、僕自身も鍛えていこう。誰にも負けないぐらいに……。



これが、「聖光氣」…。アタシは本当にラッキーね！　こんなもの、一生に一度もお目にかかれるモノじゃない。ジジイすら完敗したつても納得だわさ。さつきは思わず素が出ちやつたけど、気をつけなきゃね…。彼は正に「至高の存在」！　彼本人が何よりも価値のある究極の宝石みたいなもの！　本当に出会えた運命に感謝すべきね。これは天から与えられたチャンス。絶対にモノにするわ！

弟子の女の子つても心配してたけど、あんなチンチクリンとは思わなかったわ。一丁前に彼を狙ってるみたいだけど、ここはアタシの大人の魅力で攻めるべきね。ふふふ…。まだまだガキンちよには負けないわよ。覚悟することね…。



走っている時、ビスケさんとカルトから不穏な空気が漂っていた。…何やら悪いことを考えている様だ。まあ考えるだけなら別に構わないので放置しておこう。さて、ペー

スを落として走っているが、皆頑張って付いてきている様だ。

3倍マラソンは結局慣れた。如何に肉体を操作して適応していくかが鍵になる。そして、適応する中で自然と筋力やその他身体能力のアップに繋がる。元の世界では潰れるだろうが、ここは念能力のあるハンター世界だ。鍛えれば鍛えただけ、凄まじい強さになっていく。もちろん上限はあるだろうが、彼等は1000万人に1人クラスの才能を持つ者だ。どこまで伸びるか想像もつかない。本当に…楽しみだ。



驚くべき事に、2時間で到着した。うん…。ちよつと彼等の事をナメてたな。ビスケも驚いている。いくら慣れた道とは言え、3倍の重力下だぞ？ 帰りはもつとペースアップしても良さそうだな。

まずは朝食だ。監督に挨拶に行き、場所を貸してもらおう。現場はこの1週間でかなり設備が整っていた。他の作業員と共に持参したサンドイッチと紅茶をいただく。食後

に軽くストレッチをした後、いよいよ修行兼バイトの始まりだ。

それぞれにスコップと猫車を支給する。脚立も用意した。

「さて。準備が出来たな。バイトとは、トンネル工事だ。君達にはこれからこの山を掘り抜いてもらう。とりあえず、午前中いっぱいやって貰おう。ああ、ちゃんと高さや広さも確保してもらうからな。高さは5メートル。幅は15メートル、長さは約20キロ、つてところかな」

「おいおいおい…。トンネルつて…マジモンのトンネルかよー!」

「そりやそうさ。じゃないとバイトにならないからな。とりあえず人力で掘りまくつてもらう。遅れるとバイト代出ないぞ。方向とか場所は監督が指示してくれるからな。さあ、頑張れ。あと、昼までに10メートルいかなかったら飯抜きね」

「くそう…やるしかねえか…」

「思った以上にキツそうだな…しかも3倍重力はそのままか…」

「みんな、とにかくやってみよう! お昼抜きはキツいよ!」

「ボクもか…」

さあて。我々はどうしようかな。

「あの…カームさん。もしよろしければ、私とあつちで組み手をしませんか?」

「…ほう。いいですね。昼までヒマになりますから願ってもない事です。流々舞でいいですか?」

「ええ。是非。私も教えるとなったらサビ落としなきゃですからね。お手柔らかにお願いします」



「ぐっ…キツイな…3倍の重力つて奴は…」

「ホントに全身の筋肉が鍛えられるね…」

「レオリオ、大丈夫か?」

「…大丈夫なように見えるか? だが、昼飯抜きはごめんだからやるしかねーぜ…」

（あのオバちゃん…想像以上にできる！ 僕ですら動きが見えない…！ 参ったな…。こんな絶望的なぐらい差があるなんて…。仕方ない。僕も1から鍛え直さなきゃ。せめてアレぐらいになれるように…！）

「おい！ カルト！ 土砂運びにいつまでかかってんだ！ ボーつとしてないで手を動かせ…って、早！ いきなりどうした!?!」

「兄さん、ボヤボヤしてる暇無いよ！ 頑張つて掘っちゃおう！ それに…コレはオーラを上手く使う訓練でもあるからね」

「何…?」

「！ 皆、スコップを良く見てみる！」

「あつ…カルトのスコップがオーラに覆われてる！ そうか…！ そうすればスコップの掘る力も強化される！」

「やってみるか…:…:…:できた。よし、これなら効率上がるな」

「お前らアホか！ 何でそんなすぐできんだよ！」

「レオリオは岩運びをお願い！ これからいっぱい出てくるからね！」

「チツ。しゃあねえ、オレも足腰腕にオーラ集めて運ぶか…」

おつ。気づいたな。カルトもいるし当然か。カルトは途中までこつそり覗いてたが、今はガムシヤラに励んでいる。だが、調子に乗つてるとスグにガス欠になるぞー。ま、それもまた訓練だな。しかし、ビスケさんは強いな。私もあまり気を抜けない攻撃が来る。極限まで鍛え抜かれた技か…流派が違つたとまたこうも面白くなるとはな。私も刺激になる。多分まだまだ彼女の力はこんなもんじゃない筈だが、サビ落としだからかな？ まあ、楽しいからいいか！



「ハアツ、ハアツ…やりますわね…。流石ですわ…。殺す気で行つたんですけどね」

一通りの攻防（3時間）を終えてビスケさんが呟く。

「いえいえ、ビスケさんも本気じゃなかったでしょう？ 流石ですわね。素晴らしいポテンシャルです」

「！ 参ったわね…そこまで分かりますか」

「まあそれぐらいは。今度是非見せてほしいものです」

「それは…またの機会に…。それよりも、私のことはビスケ、と呼び捨てにしてくださいまし。口調もラフで結構ですわ。私達は指導仲間、でしょう？」

「確かにそうですね…では、ビスケ。これでいいかい？ そのかわり君も合わせてくれ。なんだか気恥ずかしいからな」

「わかりま…わかったわ。カーム。これからよろしく」

「ふふふ…まだ慣れないから恥ずかしいな。慣れる様にしていかないとな」
「ええ、そうね。ふふふ。一緒に慣れていかなくちやね」

ゴゴゴゴゴゴ…

むっ！ 近づいてくる気配！ これは…

「15メートル掘り終わった。お昼の時間だよ」

流石は暗殺者。気配の消し方が上手い。しかも、オーラをほぼ使い果たして疲労の極

限にあるのにこれか…。やるな。ついでに妙な威圧感もあるが…

「あらあら、お子ちゃまはお腹がペコペコなのかしら。私たちの会話に割り込むなんて随分とせっかちなね」

「昼食の時間を忘れるなんて、もうボケが始まつてる？ やっぱり高齢者か」

「あんですって!？」

2人の間に不穏な空気が流れる。…はあ。参ったな。

「あのね。訓練時にバチバチやるのはいいが、2人ともこんな時に挑発しない。あんなに酷いと2人とも夕食のデザート抜きにするぞ」

「あら、これは親しみを込めた軽い挨拶ですわ。ね？ カルトちゃん!」

「これは仲のいい会話の一つだよ。誤解しないでね、カーム」

この変わり身の速さ！ 全く…絶対にそんな挨拶や会話じゃ無かったら。これだから女子は難しい。…ちよつと不安になってきた。まあ、大丈夫だと信じよう。

「それはそうと、カルト。男連中はどうした？」

「ああ。兄さん達は入り口で疲労困憊で倒れて寝てるよ」

「やっぱりな。それが普通の反応だ。カルトはよく保ったな。念能力経験者の意地を見せたか。」

「とりあえず彼等を迎えに行つて叩き起こし、昼食の時間とする。本当に15メートル行つてるな。流石だ。昼は現場カレーだ。こういう所で食べるカレーつて妙に美味しいな。ゾンビみたいな彼等もカレーには勝てなかったらしい。かなりお代わりしてモリモリ食べてた。彼等を労いつつ、私も美味しく頂いた。」

「昼食後は1時間の休憩だ。具体的にはお昼寝の時間だ。流石にこの時は重力は解除してやろう。そして……いよいよビスケのターン！」

「ビスケの【魔法美容師】マジカルエステのクツキイチヤんだ。その中の特殊能力、まじかるエステの【桃色吐息】ピアンマツサージ！」

「これは睡眠時間30分で8時間分相当の休息効果が得られるという、超絶チート能力だ。ビスケとの打ち合わせで決めた事で、彼女も惜しみなく使ってくれる事になった。」

うん…。やっぱりどう考えても凄まじいチート技だと思う。これで修行が捗るよ！
やったねゴンちゃん！

とりあえずゆつくりと休んで、次の修行を頑張ってくれ。次も厳しいからな。



1時間後。時刻は午後1時。皆完全に回復している事に驚いていたが、すかさず3倍の重力をかける。これからも引き続きバイトを続ける。この訓練は全身の筋力、持久力、精神力、オーラの総量を引き上げる効果とそれを操る技術力が向上する訓練だ。そして更に3倍重力で倍率ドン！だ。これを2週間続けたら基礎能力はバカみたいになる筈だ。これが第一段階。まずは耐えて頂きたい。カルトも基礎力を見直したい機会だろう。慣れてきたら徐々に重力もアップしていくからな。お楽しみに。

我々は午後は監視と組み手だ。ビスケも重力をかけて欲しいと言ったので、彼女には5倍をかけた。私も自分にかけたいんだが、重力適応しちやったから無理なんだよな

…。まあ、肉体はこれ以上は鍛えられないからしょうがない。

ビスケも人間としては極まった強さなんだが、更に強くなる事に貪欲だ。だからこそこの強さなんだろうが。私も自身の修行を頑張らねばな。



彼等のバイトも午後5時で終え、バイト代を監督から受け取る。本日の成果は合計50メートル。中々のスピードだ。それぞれが大体80000ジェニーぐらいのバイト代だ。時給に換算すると約12000ジェニー。破格のバイトだ。ちなみに滞在費は差っ引いてこれだ。まあ全て人力にも関わらず、進み方が異常だからな。危険だし妥当な金額だ。今回は崩落しそうな時は私が物質錬成などで対応するから全く危険は無いが。

さて…皆疲れている所だろうが、これから容赦なくマラソンだ。早く帰らないとメシ抜きだからな。

午後8時。皆ギリギリで食事に間に合った。流石に疲れた様だ。今日の夕食はスキヤキだ。案の定肉の争奪戦が勃発した。結局全員で10キロ分ぐらい食べたな。良く食べて成長してくれ。

食後の軽いデザートを食べた後、皆撃沈していた。ゴンなんかはテーブルで寝始めたので、部屋に放り込んでおいた。まあ最初だからしようがないが、明日からはこの後《点》の瞑想を入れるからな。レオリオに関しては勉強時間の確保はクツキイちゃんで見出ししてもらおう。まあ明日からだな。本当にビスケの能力はチートだ。

さてさて、2週間後が楽しみだな。早く次の段階に行きたいものだが、焦るのも良くないからじっくり見極めてからやっつけていこう。

78、休日

あれから2週間経った。みっちりバイトと修行をこなしてかなり地力が上がったように見える。重力修行に慣れたした為、5倍まで重力を引き上げたが、それでもコンスタントに100メートル以上は進む彼等はやはり凄いなと思う。バイト代は歩合制なので、進めば進む程色が付く。彼等は早々に私に最初の借金を返済し終わり、今は貯金に励んでいる様だ。最早ルーキーとは言えない身体能力だと思う。ただ、思考の瞬発力や戦闘における思考力を身につける修行などはまだ全然やってない。その辺は基礎力がついてからでも遅くない。まずは徹底的に地力を上げて選択肢を増やす段階だと考えている。同様に《発》もだ。彼等には系統的修行を一通り行うまでは開発は禁止している。構想するのはOKだが。ある程度自分の資質を把握してから開発した方が、より強力な能力を作れるからと説明した。私は実際そう思っているし。

後、週一のデザート争奪戦も開催されている。この時ばかりは重力を解放している。たまには通常の重力も慣れなければな。フラッグ争奪戦もフラッグの数が徐々に減り、2つになった所で熾烈なバトルが繰り広げられる様になった。皆もう往復1時間半以

内で行けるから、入り口で張るだけでなく、フラッグ付近でも張る様になった。……これ、全員《発》覚えたら面白い事になるんだろな。狩人の出陣も1時間になり、より熾烈な争いが繰り広げられた。ちなみに常勝はカルト。彼女は時間内にきつちり運んでくる。修行で疲労してはるはずなのに、その底力はどこから出て来るのだろうか……。念能力の先達は格が違うな。後はダンゴだ。ビスケも狩人として参加したがっていたので、いずれ参加してもらおう。より熾烈な争いになる事必至だ。頑張つてほしい。

修行の副産物として、ゴンは独自の力で《硬》を開発して岩盤にパンチをお見舞いしたり、キルアは攻防力移動のコツを早々と掴んで様々な場面で活用したりしていた。更に、レオリオは何と勉強時に頭（正確には脳）に《凝》をして勉強していた。なるほど。考えたな。本人曰く、「拂り方のレベルがちげーぜ！」だそうだ。クラピカは安定してレベルアップを重ねている。彼は時折私やビスケが行う《隠》を見破るのが1番早い。思考の瞬発力が高いタイプだな。カルトは経験者だから言う事は無いが、仲間が念について行き詰まった時にそれとなくヒントを与えてくれた。最初から答えを出さない辺り、こちらの意図を察してくれていてありがたい。こうして、お互いがお互いにいい影響を与え合つて、よりよい力を身に付けつつある。非常に良い事だな。半年後が楽しみだ。

◆

そして、あまり修行ばかりだと息が詰まるので、ヨークシンシティに繰り出して1日フリーの時間を作った。これからは週1でやる様に設定する。帰りはそれぞれで朝までに帰って来ればよい。私もこの日ばかりは家でゆつくりしようかと思っていたらビスケとカルトに捕まった。うん……。まあしょうがないので付き合う事になった。

まずはシヨップिंग。カルトの服を購入する。これは私が提案した。着物以外も見たいからな。ビスケもノリノリで付き合ってくれた。どうせ同行するなら楽しまねば。そういうわけで、ヨークシンのウチの系列のデパートに入る。

そして…30分後、見事に着せ替え人形と化すカルトの姿が！

いや〜。素晴らしい。本人は黒が好みの様だが、特にハイネックの長袖ミニスカートワンピースに黒タイツ姿が何故か私に刺さりまくる。これは「買い」だな。他にもセーラ服風のベストやベレー帽の組み合わせも素晴らしい。そして黒タイツは絶対だ。

これは譲れない。カルトは恥ずかしそうにしていたが、私とビスケがノリノリだったので付き合ってくれた様だ。当然、気に入ったのは全て私が購入した。プレゼントだな。カルトも嬉しそうにしていたので良かった。早速着物から先程の服にチェンジしてくれた。

：私的には思い残すところは無いが、休日はまだまだこれからだ。次はビスケに付き合う。

ビスケはアクセサリーショップに入る。宝石ハンター故に見る目は厳しい。ショップの店員も緊張している。30分じっくり見て、最終的にダイヤのネックレスかルビーのネックレスを私に見せて、どちらがいいか尋ねてきた。：いや、私本当にこういうセンスないんだが。：だが、ビスケは逃してくれなそうなので、ルビーを選ぶ。赤は彼女のイメージカラーだし、確か情熱とか永遠の美とかの意味があったような。：とりあえず、君には赤が似合うと言ったら喜んでいい。良かった。これも私がプレゼントした。まあ、私的に別に痛い出費ではなし。これで喜んでくれるなら儲けものだ。ビスケは感動しながら「今度は指輪を：」とか言ってたが、スルーした。

カルトが私に物欲しそうな目で訴えていたが、今度来た時にまた買ってあげよう、と約束した。ダメだな。どうも甘くなってしまう。ビスケも察知して、「アンタはいっぱ

いプレゼント貰ったでしょ！」とインターセプトしたが、カルトも負けじと「値段的にはそっちのが上だよ」と争いの気配を見せたので、やんわりと嗜めて次の場所に向かった。

昼食は、ウチのリペロのおすすめのレストランに入る。ここは小洒落た店で、イタリア料理の様な雰囲気料理を出してくれる。屋外のテーブルに着き、3人で美味しく頂く。彼はこういうのにやたら詳しい。出掛ける時も、デートコース大全くヨークシン編くなるものを持たせてくれたので非常に助かった。帰ったらチップを弾もう。

楽しく会話しながら食事を終え、これからどうしようかと考えていたら、ビスケが映画を観たいと言ったので、映画館に入る。なんでもビスケのオススメの映画のようだ。私は前世でも映画館で見た事が無く、転生してからも白黒のトーキーだった為にとんと行つた事が無かつたから実は初めてだ。暗黒大陸から帰つて来てもそんな余裕無かつたしな。だから楽しみだ。

内容は恋愛もので、巨大旅客船の沈没をテーマにしたものらしい。…どつかで聞いたことがあるな。まあ観てみよう。

内容は素晴らしかった。3時間にも及んだが、それを感じさせないストーリーの良さがあった。前世でも似た様な映画があったが、また違った良さがあった。時代設定は200年前で割と親近感が持てるのも良かった。ビスケなどは隣で号泣していたし、カルトも初めての映画だったのか、終始圧倒されていた。

終わってから早速コーヒーショップに入り、先程の映画の評論会を行う。ビスケは何よりあの恋愛模様が気に入った様で、しきりに熱弁していた。特に舳先に2人で手を取り合うシーンと、悲恋に終わるシーンが最高だったと語っていた。私としては船の再現度や船が沈没する中での群像劇などが良かったと伝えた。カルトはあんな事態になったらどうやって生き延びるかずっと想像していた様だ。流石暗殺者。目の付け所が違うね。三者三様の意見が出て、非常に盛り上がった。行つて良かったな。これからもちよくちよく観に行きたいなあ。

時間を考えて、早めの夕食をとる。これまたウチの系列のホテル最上階のレストランでの食事だ。ウチの系列は融通が利くから便利なんだよな。買い物も寮に直接送ってもらったし。次元収納に入れてもいいが、あまりホイホイ見せる物でも無いからなあ。

我々は傍から見れば、マフィアファッションの怪しい男にゴスロリ少女とどう見ても小五ロリである。犯罪の匂いがプンプンするだろう。よくこれまで通報されなかったよな。だが、全員逸般人であるため、例え追つかけられても全員瞬時に撒けるぐらいの実力はある。あるが、休日にあまり大事にはしたくない。

よって、出来れば顔の利く所が良い。つまりウチの系列になるわけだ。ここは見晴らしのいい場所で、ピアノのジャズ生演奏を聞きながらクカンユ料理を頂く。非常に良い雰囲気であったり食事が出来た。食後はビスケがアルコールを頼んで飲んでたので私も付き合った。カルトも欲しがったけど、子供は飲んじやダメです。ノンアルコールで我慢して。

1日楽しく過ごして、私もリフレッシュした。帰りはホテルからタクシーで帰ってきた。時刻は午後9時。ちよつと遅くなってしまったな。カルトには申し訳ない事をした。次があればもつと早く帰れる様にしよう。

：楽しめたなら良かったのだが、どうなんだろう。今回はちよつと子供には向かない遊びだったと反省した。もつと年齢に合わせた遊びに誘うように心がけよう。大人びた雰囲気だが10歳だからな。ゴン、キルア、クラピカは先に帰って来ていた。

ゴン、キルア組は、ヨークシンを彷徨つてゲーセンに入ったり、ダーツしたりして休

日を満喫していたらしい。そこまでは良かったが、何を思ったのか、ウチの系列のカジノに入って、賭けを始めて（主にキルアが）素寒貧になったとの事。

おかげでヨークシンからここまで走って帰って来たらしい。ゴンは付き添いで走ってあげた様だ。キルアが珍しくゴンに怒られてた。いや、珍しくもないか。とりあえずキルアにはギャンブルの才能が無いのが良く分かった。ま、いい人生経験になっただろう。

クラピカは一日中ヨークシンで情報収集していたとのこと。真面目だな、本当に。結果、やっぱりウチが最大の支配層だという事を再確認した様だ。裏斡旋所まで覗いたらしいから徹底してるな。ウチは能力者は自分達で育成出来るから、斡旋所を利用するのは下つ端の組織だ。ウチに就職するならば、身元の確かさと絶対の忠誠、そして能力の高さが求められる。通常は下つ端組織からスタートして頭角を現した後に、アンダーソンの目にとまったら就職できる。

ウチはいわばチンピラやゴロツキ達の憧れの就職先だ。クラピカはこの下つ端をキャンセルできるコネを手に入れたわけだが、どうするかな？ 私が今紹介してもいいが、彼は多分力をつけるまでは納得しないだろう。だが、見えない様に手は貸している。緋の眼を確保しておくとか、所持者を調べておくとか。とりあえず私は、彼から話を振られるまで待つておこうと思う。

午前2時ぐらいにレオリオが帰ってきた。どうも綺麗所で豪遊してきたらしい。お前はバブル期のサラリーマンか。行動がオツサンなんだよ。んで、コイツも素寒貧だ。江戸っ子か。宵越しの金は持たないってか。んで、酔い覚ましに走って帰って来たところ。まあ自力で帰ってきたならいいけどね。遊びもほどほどに、シャワーぐらい浴びてから寝ろよ、と伝えて私も部屋に戻った。

明日は午前5時起きだが、レオリオ：朝起きてこれるかな？

79、系統別修行と会長の来訪

いよいよ流々舞に取り掛かる。彼等もかなり念の使用に熟練してきたからだ。《周》はもちろんの事、ゴンが《硬》も発見出来たし、それが全員出来る様になったため、基本は身に付いたと判断した。

この修行はオーラの攻防力移動の訓練であり、《流》と呼ばれる技術だ。これをしっかりと身につけてから系統別修行に移行する。

基本的には全員トンネル掘りだが、30分交代で2人抜けてローテーションする。その際、重力は解除してある。5人だとその内メンバーが変わるが、それがまた良いだろう。同じ相手ばかりだと相手の癖が分かってしまい、なあなあになりやすいからだ。スピードアップには良いが、より実戦的な緊張感をもつてやってもらいたい。

初めは当然ゆっくりだ。それでいい。これは2週間もすれば徐々に慣れていくだろう。流々舞をある程度出来る様になったら私やビスケとの手合わせだ。フェイント等の応酬も取り入れていくからカナリの戦闘経験が積める筈だ。だが、実戦はまた別だからなあ。そこをどうしていくかが今の所課題だ。私も上手い事そこを訓練出来る様に

色々準備しなければ。

我々もその間遊んでるわけではなく、ビスケとの手合わせや、修行内容の打ち合わせ、バイトについての打ち合わせなど、様々な活動を行なっている。

ところで、ビスケは頑なに全力を出したがないが、私は気にしないのになあ。今度彼女にそう言って全力を見せてもらおうと思う。多分人類最強レベルの肉体性能だと思っただけだな。



さて、2週間が経った。流々舞もかなりのスピードで行えるようになり、私やビスケも相手になつてきている。トンネル掘りも順調で、重力も既に7倍まで上がって、更に低酸素化状態にまでなっている。高山トレーニングみたいなものだ。ちなみにコレは周囲を真空状態にしてくる敵から貰ったものだ。【自己^{オート}食^{フィー}】が大活躍した場面だった。

それでもめげずに全員訓練を真面目に続けている。おかげでそろそろ下位ハンターでは既に基礎能力で敵う者はいないだろう。もうゾルディックの門も3から5ぐらい

迄は開けられるんじゃないかな？

休日は街に繰り出したり、湖で水遊びしたり、キャンプしたり、私が山の一角に掘り当てた温泉でのんびりしたりと、様々な遊びを楽しんだ。

湖では当然水着だ。私含む野郎共は、トランクスタイプの水着で特に描写すべき所は無い。ただ、ビスケとカルトは、ビスケがフリルの着いたビキニで、カルトが黒のワンピーススタイプの水着だった事は言っておく。ゴンさんと私でも似合っていると褒めたら喜んでいた。私も調子に乗って岩の洞窟とかスライダーとか作って遊んだし、中々楽しかった。まあ、その内水中訓練もやるから、今のうちに楽しんでおいて欲しい。

温泉は寮近くの山で発見したので、早速私が隙間時間に簡単に工事した。どうせ我々しか使わないし。と思つたら使用人も使い出して、瞬く間に整備された。男女別と、水着で入る混浴が設置され、修行後や仕事後のひとつ風呂によく活用される様になった。

クラピカは相変わらず遊びにはあんまり興味を示さず、独自に調査したり、1人で《点》をしたりしていた。余計なお世話かもしれないが、私から「気持ちちは分かるが、緩急も大事だし、遊びの中で生まれる発想もある。視野を広く持つ事は重要だ」と説いてからは彼なりに2週間に一回は休日を設ける様になった。

レオリオは夜遊びにハマっている様だ。変な病気とか貰つて来ないといいが。まあ

本人が医者志望だし大丈夫かな？



さて、第三段階目だ。系統別修行に取り掛かろう。彼等も午前中に300メートル以上掘れる様になってきているし、午後は修行に充てられる。また、走りも速くなって、その分を修行できる様になった。トンネルもあんまり掘りすぎると後続の作業員の整備が追いつかないからな。その後、《発》の開発をそれぞれ行なってもらう。カルトの場合はある程度出来るから、系統別修行をみっちりやってもらう。

まずは例によって座学。系統別の修行について簡単な概要を伝える。見事に全員系統が違っていたからとりあえず全部伝えとかないとややこしい。で、私とビスケで実演する。基本的には昔やった修行でOKらしい。ただ、中には変なのとか難し過ぎるのがあつたらしく、ビスケも打ち合わせ時に呆れていた。

とりあえず今日は全員レベル1からだ。カルト辺りは5までぐらいは行けそうだが。ゴンはトンネルから出た岩の塊を使って石割り。キルアは数字を変化させるやつ。

クラピカはお猪口を具現化（物質化）して水汲み。レオリオはオーラの弾飛ばし。カルトは物質操作（煙）からスタートだ。初心者組は慣れないだろうから苦戦していたが、カルトは案の定レベル5までできた。

これをそれぞれ日によってローテーションしていく事を続けていく。また、他にも午後には水中訓練や水に浮いた竹に乗る訓練、複数の木の杭の上でバランス感覚を養う修行など、様々な訓練を課した。カキンで私がやったやつだ。この上で移動しながら流々舞が出来れば上出来だ。

また、寝る時にビスケ考案の瞬時に敵を察知する訓練も行なっている。屋外で座りながら頭上にある石が落ちない様にロープで持つて寝る訓練だ。確かに睡眠時が1番狙われやすいから理にかなっている。これはゴンとレオリオが苦戦したが、1ヶ月で慣れた様だ。屋外だけでなく、屋内で寝てる時に襲撃しようとしても察知出来る様になった。順調だな。現在4月15日。これでほぼ基礎訓練は出尽くした。そろそろ《発》に取り掛かっても良いだろう。

そう思っていたら、その日の夜遅くにネテロ会長が訪問してきた。

「や、元気かの？ しっかりやつとる様じゃのう」

「お久しぶりですね、会長。中々来ないからお忙しいかと思つてましたよ」

「そこはすまんかったな。中々ワシも時間が取れんでな、漸くまとまつて来れる様になつたわい」

「どれぐらいですか？」

「3日、じゃの。すまんがその間こちらで世話になるぞい」

「連絡は受けてましたからね。滞在費はいただきますが、ごゆつくりなさつてください。今回はお一人ですか？」

「ああ。アヤツはどう足掻いてもバレそうじゃから別の方法で接触したいそうじゃ。また連絡が来るじやろ」

「なるほど。分かりました。とりあえずどうしますか？」

「まずはお主の訓練を見せて頂きたいのう。弟子の出来もな。ビスケも来とる様じゃし。その後お主と手合わせ願いたい。今日は夜も遅いし明日じやな」

「ではこちらへ。一杯やりながら話しませんか？」

「ウム。ありがたい。馳走になるぞ」

…ビスケにも知らせてはいたが、後で挨拶に行くとの事だった。いいのかなあ。しかし、いいタイミングで来てくれたものだ。弟子の刺激にもなるだろう。明日が楽しみだ…。



トントン

「ん？ カームか？ どうぞ」

「お休み中失礼するわね…ジジイ」

「ゲツ、ビスケ…久しぶりじゃのう」

「ゲツ、じゃないわよき。全く。まだアタシを呼ばなかった事は忘れてないんだからね」

「あん時も謝ったじゃろう？ それにこの状況はお主にとっては結果オーライだと思うが？」

「もうそれはいいわさ。んな事よりも、これからの事よ。アタシの邪魔をするならいく

らジジイでも許さないからね」

「……なんじゃ。お主、本気で狙つとるんか？ お主もいい歳じやろう」

「いい歳じやろう、は余計だわよ！ いくらジジイでも怒るわよ！」

「もう怒つとるじやろがい……分かった分かった、分かったからデカくなるのやめい。ワシ、邪魔せん。誓うわい」

「フン。全く……。それにしてもよく時間取れたわね」

「まあ。うまい事調整できたわい。パリストン辺りをかわすのがちと面倒じゃったがな」

「あんなのをよく副会長にしようと思うわね……。アタシにはムリだわさ。生理的に」

「だからこそ面白いんじゃないか。ま、お主にも後50年すりやあわかる」

「それこそ分かりたくも無いわね。50年後とか想像もつかないからパス」

「……真面目な話じゃが、アヤツと共に行く気ならその辺もなんとかせにやらんぞ？」

「……わかつてるわさ。そのぐらい。そこはこれから考えないとね」

「まさかのノープランか！ お主も本当に欲望に忠実じやのう」

「うるさいわね……。それがハンターつてもんでしょ」

「違う。ま、上手くいくかわからんが応援しとるぞい」

「一応激励として受け取っておくわさ」

.....



「おはよう。皆。今日はネテロ会長がお忍びで来てくれたよ」

朝の5時に会長を皆に紹介する。当然だが皆ビックリしていた。ビスケはしれっとしてるから挨拶は済ませたのかな？ とりあえず毎朝恒例の重力&酸素低下を施す。今度は会長が「そんな事も出来るのか…」と驚いていた。

朝のランニング後、ストレッチを一通り終え、穴掘りに取り掛かる。

彼等の様子を会長は難しそうな顔で見ている。昼飯を食べて休憩後、午後の修行に移る。30分交代のローテーションで流々舞を行う。もちろん私もビスケも入っただ。

ネテロ会長は最初呆れて見ていたが、その内弟子たちの訓練にも参加し、1人ずつ交代で流々舞を付き合ってくれた。当然全員ボコボコになったが、あの会長とやればそりやそうなるわな。だが、彼等にとつて貴重な体験だったろう。

その後、系統別訓練を行つて、いい感じで疲れたらバランス訓練だ。木の杭でやるやつだ。ここで3人ずつ入つて三つ巴の流々舞を行ふ。この訓練が得意なのはゴンとキルアとカルトだ。次点でクラピカ。レオリオはまあ……ようやく落ちなくなつてきたから進歩した方だろう。

次は水面に浮かぶ竹に乗るやつ。これは流石にまだ皆難しいらしい。キルアとカルトがちよつとだけ乗れる様になつてきたぐらいだ。まだまだ落ちるが。

見本の為に私とビスケも隣で別々の竹に乗っているが、バランス感覚の極みみたいなものだし、一朝一夕でできる様なもんじゃ無いからなあ。むしろ出来るビスケは流石だ。会長は面白がつてまた別の竹に乗り、私に流々舞を仕掛けてきたが、私も対応した。それを見て、今度はビスケが呆れていた。

弟子達が水に落ちて濡れたついでに、着替えて水中訓練だ。重力、酸素低下を再びかけつつ、湖を往復する。大体2キロ。地上よりも遥かにハードだが、皆頑張つて泳ぎきつた。うむ。素晴らしいな。満足気に見てると、会長が話しかけてきた。

「のう、カームよ。あやつらは本当に3ヶ月前まで念を知らなかったんじやよな？」

「ええ。本当に素晴らしい才能ですよね」

「……おつそろしい伸び方じやな。新人どころか、普通に全員オーラ量が中堅ハンター手前ぐらいいあるぞ？」 あの娘つ子なぞ、上位ハンターと遜色ないしの」

「彼等の才能に、うまい食事と適度な運動とビスケさんの能力のおかげですよ。ありがたい事に信じられないぐらいい伸びましたね」

「お主の重力と酸素低下もな。そう考えると此奴らは幸運じやな。こんだけ伸びた例は見た事ないからな。時に、《発》をまだやつとらんのはアンダーソン式か？」

「いえ、どちらかといえばこれは私の方針ですね。急激に成長した分、能力は自分の資質をしつかり見極めた上で作ってほしいと思ひまして。メモリの無駄遣いや必要ない誓約とかをつけない為にもね。能力の選択をミスって勿体無い事にならない様にしたい」

「…そういう考え方もある、か。理にはかなつとるが、そう簡単にいかんのが現実じや。それも含め、彼らは幸運じやの…。さて、そろそろよいか？」

「ええ。いいでしょう。やりますか。では勝負方式はどうします？」

「そうじやなあ。お主がワシの身体に打撃を入れたら終了、でお願いしようかの」

「面白そうですね。弟子達にも見せますが構いませんか？」

「無論、こちらがお願いしとる立場じゃしな。あまり吹聴せんでもらえると助かるが」
「承りました。…皆！ 聞いての通りだ。これから私とネテロ会長の手合わせを行う。よつて、ここで見た事は守秘義務が発生する。自信がないと思う者は今すぐ寮に戻れ。……………うん。大丈夫か。君達にとつても念での戦闘を見るいいチャンスだ。脳裏に焼き付けておくといい。皆の《発》のヒントにもなるだろうしな」
「……………ならないと思いますわ。まあいいですけど。……………聞いたでしょう、貴方達！ 今すぐ50メートルは離れなさい！ 巻き込まれるわよ！」

ビスケが弟子達を離れさせる。

「マジか…。どんな能力なんだろうな」

「ワクワクするね！ どっちが強いのかな？」

「そりや会長に決まつてんだろ！ 身体に打撃を入れたら終了つて、触らせねーつて事じゃんか。カームが一方的にボコられて負けるに一票」

「いや…。彼の強さやオーラは人智を超えている…。この勝負、分からんぞ」

「どつちにしろ有り難いのは変わらんぜ。アイツの言つた通り、脳裏に焼き付けようかね」

「……………」

弟子達が自分なりの予想を話す。

「さて、アンタ達…これから勝負が始まったらまばたき禁止ね」

「は？ 無理だろ！」

「まばたきなんざしてたら見逃すわ。しっかり見ときなさい。《凝》も忘れずに」

「…………マジか…」

さて…いくか。最初から「聖光気」、と行きたい所だが、弟子達にも見せたいので普通のオーラから入る。会長相手だと「聖光気」無しでの全力でも行けるからありがたい。まずは《堅》。2回目だから様子見はしない。最初から踏み込んで…最短での時間と距離を稼ぐ！

さて、どう来るかな？



数瞬の沈黙の後、「それ」は始まった。見ている者達からすれば、気づいた時には大地にめり込みかけてガードするカームと、いつの間にか祈りの形をとった会長と、攻撃を繰り出した百式観音の姿があった。音は遅れてやってきた。観戦者は確かにまばたきをしなかったが、見切れる者は居なかった。

両者共にこれは挨拶だ。しかし、カームは驚いていた。

速度が格段に上がっている。

そして、威力もだ。

あれから3か月しか経っていない。なのに、段違いの性能差になった攻撃を繰り出す

百式観音とネテロ会長にカームは驚愕していた。自分で無ければ最初に潰れて終いだろう。何があつたのか。正体を探るべく、彼は動き出す。彼のオーラの範囲は広い。まだまだギリギリ反応出来る。むしろ彼は喜んでいた。これは楽しくなりそうだと。彼は笑いながら、ネテロに向けて走り出した。

一方、ネテロは落胆していた。本気で最初の一撃で潰すつもりだったのだ。いや、潰せないまでも「聖光気」までは引き出したかった。だが、まだまだガードしている。一体コイツはどれだけの強さを持っているのか。限界が見えない。しかも更に「聖光気」も控えている。この3か月、自分なりに試行錯誤した。そして、彼の技術すら取り入れながら、更に技が進化した。

より、速く

より、強く

それでも通用しない事に落胆を隠せない。だが、受け流しや反撃をしない所を見れば、そこまで余裕があるわけではないらしい。その事がネテロを少し元気づける。百式観音は、それまで九十九乃掌以外は単発式であった。祈り、攻撃する、という行為故の限界とも言える。連撃もあるが、一動作の範囲の決められた型だ。だが、ネテロは実現した。

百式の連撃を。

祈りの連続化。ただそれだけの事だが、そこには一から全てを見直して血の滲む様な鍛錬を行った成果が確かにあった。はたからみれば、ネテロの姿は手がブレて本人が百式観音の様に見えるだろう。何度も祈り、何度も繰り返し返す。その行為が周りから見えず、手が分裂して見える為だ。不可避の速攻の連撃。これだけでも普通の使い手ならば何も出来ずに終わる。

そして、ネテロは技自体の速さと共に威力の向上をも実現した。ヒントは相手であった。

「脱力」である。

この3ヶ月、打撃を徹底的に見直した。試験の際に見た「消力」。これを自分なりに再現したのだ。そして百式観音に落とし込む事に成功した。おかげで今までの比じゃない程に威力が上がった。また、そうする事で、更に速度も増した。これには自分も驚いた。まだ力が入り過ぎて速度が犠牲になっていた部分があったらしい。そして、これこそが連撃を実現可能にした。ネテロはまだまだ技が進化する事に歓喜した。

そして今

正に、時間が止まっている様な速度の中での連続攻撃が繰り出される。相手は現在防戦一方だ。受け流しすら拒む速度で攻める！

だが、相手もまた怪物。姿を現す観音に向かって亀の様にガードしながら反撃を試みている。

時折、ネテロ本体に周囲の岩や砂などが形を変えて襲ってくる。物質操作だ。ネテロは驚愕しながらも躲して更に攻撃する。相変わらず引き出しの多い奴……。そう思いながらも連撃を止めない。はたから見れば、キルアの予想通りに一方的にボコボコに近いが、実情はかけ離れている。

どんなに攻めようが、潰せない時点で厳しいのだ。

そして、百式観音の手が止まる。ネテロが止めたわけではない。

カームがガードしながらオーラを針状にして、剣山のような状態で覆い、攻撃する手に刺さる様にした為だ。丁寧に返しまで付けてある為、抜けない。一瞬、ネテロは躊躇したが、その後、百式観音を消した。そして再び出そうとした所でカームを見失う。

何処へ消えたか…と探すが、穴があった。土中に隠れた様だ。

しばらくすると、ネテロの真下から何か飛び出してきた。反応して横から叩くと、特大の念弾だった。真正面からやったら腕が消滅する所だった。直後、大小百を超える念弾が次々飛び出してネテロの周囲を囲む。嫌な予感がしつつも警戒を怠らないネテロ。しかし、次に真下からネテロ目掛けて特大のオーラの奔流が襲う！ 流石のネテロも潰せずに躲すと、周囲の大小の念弾がネテロ目掛けて向かってきた。百式観音で次々叩いて逸らしていくネテロ。だが、穴から悠々と姿を現したカームが同時に念弾を次々と生

み出し、周囲を囲うと、その大量の念弾で襲わせる。落とせないのは躲し、直撃しても受け流す。だが、中には《隠》で隠した念弾や、時には念の刃、そしてそれを切り離れた斬撃が飛んでくる。こればかりは躲さざるを得ない。そうしてネテロの処理能力の限度までできた所で、カーム本体が凄まじい速さでネテロに向かい、右ストレートを顔面に叩きこむ！

ネテロはインパクトの後、錐揉み回転しながら吹っ飛んでゆく。誰から見ても致命傷だ。

これで勝負は終わりだ。普通ならネテロの生死すら疑われる所だ。だが…

…カームは奇妙な感覚を覚えていた。疑惑は途中からあった。そして最後。余りにも手答えが無さすぎる。疑惑は確信へと変わる。直後にネテロが何でも無い様な顔をして現れた。傷一つ無い。やはり。「そっち」はマスターしている。そして、もう一つ…もう「アレ」を掴みかけている、と。

「アホか！ 老い先短い老人を殺す気か！」

「いや、会長…そんなピンピンしといて説得力無いでしょう。しかし、今のは…」

「ふん。ワシぐらいになれば一度見れば大体分かるからの。分かったようじゃが『消力』を取り入れた。死ぬ程苦勞したがな。それでも『聖光気』にすら届かんか…。残念じゃの」

「いや、それにしてもヤバい性能ですよ。それに…会長。まさか貴方、掴み始めてませんか？」

「…分かるか？」

「オーラと動きの端々に特有の流れが見えました。特に念弾の時。アレは『軽気功』…早すぎませんか？」

「まだまだ全然じゃがな。それでも早いと言うなら伊達に長生きしとらんという事じゃ」

「呆れる程、ですな…。これは。この3か月、どれだけの鍛錬を積み…。しかし、『聖光気』はまだまだ先が長いですよ？」

「じゃろうなあ…。ワシもやってみて愕然としたぞ。余りの難しさにな」

.....



「「「「「.....」」」」」

会長とカームの手合わせが終わり、談笑している中、見ていた者全員がまばたきすら出来ずに動けずにいた。誰も喋れない。今見た光景が信じられなかった。時が圧縮された様な中での戦闘。時間になると僅か5分にも満たない。

だが、超濃厚な戦闘であった。誰もが感動とも、畏怖とも言えぬ感情を持って余していた。やがて、1人が喋りだす。

「アレが.....世界最高峰のレベルか」

余りの戦力差に、絶望的な声が出てしまう。そんな弟子達の感情を酌み取ったか、ビスケがフォローを入れる。

「安心なさいな。アレはそんな生易しいモンじゃない。世界最高峰はもつと『こっち』寄りよ。アレは…化け物の領域。だからアンタ達は幸運よ。見ただけでもね。特にカームは特殊な念能力は使っていない。系統別の修練の極み！ アタシ達の誰でもあれ程の事が出来る可能性がある…。悔しいわね…。アタシもそれなりに自信があつたけど…。アレには勝てる気はしないわさ。ジジイにもね。アタシも更に鍛え直す必要があるわね」

「馬鹿な…どうやったたらあそこまで…」

「だから化け物の領域って言ってるのよ。あまり参考にはならないと言ったでしょう？ ただ、やるからには目指しなさいな。アレが究極！ アンタ達の《発》もあれだけの物を打ち破れる様な能力を目指すといいわね」

(((((いや、無理無理！))))))

全員の心が一致した瞬間だった。

80、真夜中の交流

「ホントに何なんだよアレは……。どっちも同じ人間かどうかすら疑わしいぞ」

夜の自由時間の時に、自然とゴンの部屋に集まり、先程のネテロとカームの手合わせについて議論が交わされる。

未だに信じがたい、衝撃の闘いだった。カームの強さは薄々知っていたが、あれ程までとは思わなかった。まさかハンターのトップであるネテロ会長すら破るとは……。そして、その敗れたネテロ会長すらも衝撃の強さであった。

「……自分がもし、あの場に立っていれば……。一瞬も保たなかったな」

クラピカの発言を受けて、全員が深く同意する。そして、瞬時に潰れたカエルの様になってしまう自分を容易に想像出来てしまった。

「しかも、カームはアレも使っていないんだよね」

ゴンが言っているのは「聖光気」の事である。一体どれ程の力なのか。最早人間を超越してるとしか思えない。

「それも踏まえてオレたちも必殺技、つまり《発》を作っていくしかねーな」

「キルアは…何か浮かんだの？」

「んー…まあ臍げながらな。奴等に対抗するには「速さ」が必要だ。カームはともかく会長の『アレ』を躲すぐれーの奴じゃないと話になんねーからな。そういうゴンはなんかあんのか？」

「いや…全然。でも、強化系つて基礎修行を極めていくしかないからね。必殺技つてワクワクするけど、いざ考えると難しいよね…。オレは自分を最大強化して闘うつて事しか浮かばないよ…。でも、《硬》が出来た時に何となく浮かんだのも捨てがたいんだよね」

「クラピカはどうだ？」

「私は…具現化系だからな。ある程度構想している能力はある。今回見たもののおかげ

で大幅な修正をせまられそうだがな。だが、基本方針は変わらないつもりだ。それに：それが完成したら本格的に「聖光気」も習ってみたいしな」

「…アレだけはホントに意味わかんねー…。ホントに出来んのかって感じだよな」

「まずはカームの言う通り、普通の念をしっかりと修めてからの話だろうな。超高等技術過ぎて最早伝説らしいからな」

「オレはパスだぜ…。正直、あんな化け物共に合わせてらんねー。今も昔もオレは医者を目指してるからな。医療の為の能力にするって決めてる。確かにあの癒しの力は魅力だが、ネテロ会長でさえ習得してない所を見れば難易度はお察しだぜ…。そう言えば、カルトの能力ってどんなんだ？」

「……普通は親しき仲でも自分の能力は開示しない。それが生死を分ける事もある。だから言えない。ただ、ボクも能力の改善の余地が見えてきたところ」

「そりゃそうか。悪い事を聞いた。すまなかつたな。んじゃ、能力はそれぞれでつて事だな」

「そうだね。ちよつと自信無いけど、頑張つて考えよう！」

「最悪悩んだらカームかビスケに相談するといい。彼等なら的確なアドバイスをくれるだろうからな…」

……



「…《発》についてのアドバイスはせんのか？」

「概要は伝えましたがギリギリまで様子を見ようかと。変な方向に走りそうならアドバイスをするぐらいで。彼等の人生ですからね」

「ま、そういうこつたな。こればかりはそれぞれの生涯や生き方にも関わってくるから。…ちよつと過保護かと思つたが、それなら安心じゃな」

「また会長は人を試すような事言つて…。ダメですよ。あまりそういう事していると人が離れますわよ」

「ブツ！ ゴホツゴホツ。ビ、ビスケ、そうじゃな。ワシも気をつけるわい」
「……全く。気をつけてくださいまし。ねえ、会長？」

「分かつた、分かつたから。ところでカーム。アヤツからまだ連絡無いかの？」

「いえ…ありません『ピロロン♪』……今来ましたね。何々？ 『大変申し訳ねーが、今すぐおめーさんトコのトンネルまで来てくんねーか？ ジジイ達もいいぜ。ただし、ゴン

達には絶対内緒な』…ですって。全く。相変わらず強引な人だなあ。会長、行きますか？」ビスケはどうする？」

「ふむ。ま、久しぶりに会うから行ってみるかの」

「私もご一緒しますわ」

「よし。では走って急ぎましょう。皆さんなら20分ぐらいで着くでしょう？」

「……………」

「いや、何でそこで黙るんです？」

ヒソヒソ（コイツ…ナチュラルに人間の限界の数段上を要求しとるぞ。お主の男じゃろ？ なんとかせい）

ヒソヒソ（いや、アタシに言わないでよ！ 大体いつもの事だから諦めなさい！ ジジイだっていつもやってるでしょ！）

「あ、やっぱり大丈夫ですね。それじゃ、行きますか！」

「はあ…しようがないですわね…」

「もつと老人をいたわって欲しいもんじゃのう…」

渋々だが、合わせて走ってくれ様だ。余り待たせるのも悪いしな。とりあえず全員

で走る。2人ともなんだかんだで付いて来るのは流石だと思う。若干ビスケの姿が変わっていた様だが、気にしない事にした。



「よう！ すげー早かったな！ まさか30分以内に来るとは思わなかったぜ。カーム、ジジイ…と、オメーがビスケットか。はじめまして、だな。やたら疲れてるが、大丈夫か？」

「ハアツ、ハアツ…さ、さすがにきつかったわさ…」

「全力で走るの持久しぶりじゃのう…。ちよいとこたえたぞい…」

「お久しぶりです、ジンさん。お元気そうで。ここではアレですから事務所で座って話しましょう。今は夜ですから誰もいませんし」

「おう。助かるぜ」

親方から借りていた鍵で事務所を開け、全員が落ち着いた時点でジンさんが話し始める。

「改めて、正直すまんかったな。オメーのトコ来るために潜入とか変装とか色々考えたが、どうやってもアイツにバレる気がしてな。とりあえずこの間の報酬持って来たぜ。3本だ。マルチタップ有りなら最大24人行けるぜ！ これぐらいで大丈夫か？」

「ええ。充分ですよ。ありがとうございます」

「……なぜお前がそれを求めたかオレなりに考えてみたが……。何となく察しはついた。オメーなら大丈夫だろう。ま、頑張れや。あと、アイツらを行かせるなら、ゴンはノーヒントで行かせてやってくれるとありがたいな」

「……………？ ゴン君の事は分かりましたが……。私が求めた理由を察したのですか？」

「ああ。多分だが当ててやろうか？ Sランク報酬『死者への往復葉書』、だろう？」

「な……！ 何ですかそれは……!？」

「ありや？ 外したか？ もしかして知らなかった？ オメーなら情報を得ているモンだと思つてたがな……。こりや失敗したか……。まあいい。そういうモンがある。死者へ手紙を書くと返事が来るやつだ。どうだ？ ヤル気は出たか？」

「……………それが本当なら、凄まじいアイテムだ。本当にその効果が？」

「モチロン有るぜ！ このオレ達が作ったゲームだ。生半可なモンじゃねーぞ！ 他にも希少な宝石、希少な生物、他にも若返り薬とかどんな怪我や病気も一度だけ治してくれるアイテムとかがあるぜ！」

「希少な宝石…ブループラネット！」

「ちよい待てジンお主、そんな面白そうな事はワシにも教えんかい！ 第一、アイテムの効能がヤバイが大丈夫か？」

「よく知ってんな。ビスケット。それで合ってるぜ。ジジイ、安心しな。ゲーム内ではかアイテムは使えねーし、持ち出せねー。超特別な条件を満たさない限りな。しかもゲットする為の難易度は高い。そして、コレは『念能力者限定』のゲームだ。よって一般人の目に触れる事はまずねー。もうゲーム出して10年経つが、そういった情報は殆ど出回ってねーだろ？」

「ふむ。ウワサには聞いたとつたが、また凄いモンを作ったな…。それ、ワシにも出来るか？」

「うーん。まあそう言うだろうと思つてジジイ用にも一本余分に持つてきたが…やる時間あんのか？」

「そこじゃなあ…。ま、時間は作るもんじゃ。何とかするわい。しかし、マジでどうやって作ったんじゃ？」

「……今だから言うが、絶対オフレコな。コレはオレ達が仲間と作ったゲームだ。相互協力型とかフルに使ってな。だが、根幹は違う。コレは元からあったモンだ。」

「……どういう事です?」

「つまり、コレは人類圏にあった試練、だったモノだ。恐らく、暗黒大陸へ向かう者の為の訓練所とも言える。島1個丸々使った、な。試練は鬼の様に厳しいモンだったが、その報酬もぶっ飛んだモンだった。相当力のある古代人があつちから持ち込んだか作つたんだろうな。オレ達は昔遺跡探索を続けた果てにその島に辿り着いた。そして様々な試練をクリアして、古代遺跡を発見した。その中心部にコントロールルームがあつたのさ。んで、どうするか悩んだが、普通に報告するんじやつまらんからな。だからオレ達が作り替えた。ゲームという形でな」

「そりやまた……怒つたらいいのか褒めたらいいのか判断に苦しむのう……」

「ま、誰も文句を言う奴はこの10年で現れなかつたからな。結果オーライだ」

「全く……まあええわい。ワシもちよつと興味が湧いてきた。やってみようかのう」

「おう。ドンドンやれ。そろそろクリア者が欲しいからな。ゴンの刺激にもなんだろう」

「会長……貴方がやってたら皆にバレて怒られますわよ。その辺はどうするんですの?」

「なくに、名前を変える事は出来るんじやろ? ついでに変装でもすりゃあバッチリ

じやー!」

「…またビーンズが嘆きますわね…。いつも仕事丸投げして…」

「失敬な。ワシヤ自分の仕事はこなしとるぞい。で、カームよ。お主は…やるんじやろ？」

私は3人の会話を聞きながらも、頭の中は『死者への往復葉書』でいっぱいだった。昔の記憶にはまるで無かった。しかし、言われてみればそういうアイテムも有った様な気がする。何故忘れていたのだろうか…。だが、それさえ有れば…！ 私も家族と話が出来る…！ たとえ会えはしなくとも、文章で言葉を交わせるだけでもありがたい！ 絶対にやらねばならない。

私の目的が一つ増えた。

「ええ。ありがとうございます。ジンさん。予想以上にヤル気が出てきましたよ。私も近々やります。では…そろそろやりますか？」

「ああ。頼むぜ。最初は普通にやって、その後“聖光気”で頼む。あと、ジジイにやったあの技とかも使つて欲しい」

「…大丈夫ですか？ それに、アレは効きますよ？」

「もちろん、ボコられんだらうけどな。頼むわ。ただ、どうしようもねー時は回復してく

れると助かるぜ。なるべく耐えられる様にするがな」

「分かりました。では、移動しましょうか」

「ああ。よろしく頼むぜ！」

我々全員で場所を移動する。場所は現場から少し離れた広場だ。

「では…行きます」

早速攻撃を仕掛ける。目にも留まらぬ速さでだ。これは会長の攻撃とほぼ同じ速度だ。しかしガードした！ 普通の使い手ならば何も出来ずにぶっ飛ばされて終わりだ。流石だ。ジンさんも世界の5本指に入る達人なだけあって、頭在オーラは半端ない。人類最上位を遥かに凌駕している。現時点で会長並みだ。楽しくなってきた。

そしてジンさんが攻撃を仕掛ける！ 右ストレート！ 速さも申し分ない。頭を振って躲す。…と思つたら、いつの間にか腹部に拳が突き刺さる！ 直前に受け流したが…なんだこれ!? これが彼の能力か!? とりあえず反撃！ ジンさんも受け流してからのクロスカウンター！ 躲してトリプルクロス！ …が、空を舞い、更にそのカウンターでのローキックが入る。足を上げてガードする。…一旦離れよう。

「…やりますね。私に攻撃を入れるとは。それが能力ですか？」
「ちげーな。ただのフェイントだ。オレは『気合』って呼んでるがな。その状態なら多少は効果が有るらしいから良かったぜ。さあ『気合』入れてくぞ」

絶対んなわけない。アレは能力級の何かだ。…そうだよな？　そしてこの人は尻上がりがりだ。テンションが上がれば上がる程オーラが増大してくる。どこまで上がるんだろう。強化系…だな。多分。だが、オーラ技術を見るに他系統も極限まで鍛えてるな。これはいい感じだ。こちらにも気合を入れよう。

そこからガチガチの肉弾戦が始まったが、彼は指で特大の念弾や散弾を作って至近距離で放ってきたり、腕からオーラの剣を作って薙いだりしてきた。だが、私も合わせて相殺したり、ブレードでガードしたりした。時折、先程の『気合』とやらで危うく喰らいそうになったが、何とか受け流した。《隠》を使った攻撃も複数同時に飛んでくるから油断出来ない。

本当に引き出しが多いな…この人は。世界最高峰と言うのも頷ける。一発一発が通常の能力者と比較しても致命的に強い上に、独特の体術と豊富な技。そして、次第にこちらの動きにも対処して更に上回ってくる。おかげで私も更に引き出しを出す事を要

求される。闘いで成長するタイプか……。しかも本人がヒソカ並に戦闘勘が天才的なタイプだ。そしてこの気迫。こりや強い。

だが、そう簡単に私を攻略出来ると思われるのも癪だ。私も大人気なく全ての攻撃を受け流し、攻撃に転ずる。そして徐々に攻撃の回転を上げてゆく。

ジンさんはどこまでも喰らいついてきた。この人は……まだまだ伸びる！　それが恐ろしい。

「ハハハハハッ！　楽しいなあ！　楽しすぎだろオイ！　だが、オメーはまだまだ全然こんなもんじゃねーよな!？」　頼む！　見せてくれよ！　『伝説の技』をよ！」

「素晴らしい……。ジンさん……貴方はやはり選ばれた者だ。貴方なら……」

シウウウウ……

私は「聖光気」状態に移行する。最近漸く掴めてきたが、違和感無いスムーズな移行が出来る様になった。

観戦していた会長も思わず口を挟む。

「お主……これは……」

「自然な状態での『聖光気』ですよ。違和感や威圧感を減らしてみました。そこまで不自然じゃないでしょうか？」

「また訳の分からん事をやっとするのう…。つまり、あの独特のオーラを『隠』の様な技術で隠しとるわけか。何に使うんじゃ？」

「まあ、色々ですよ。こうなる度にビビられるのも面倒ですからね」

「おっそろしい奴…これじゃ殆どの奴が違和感に気付くまい。しかしオーラと同じ様に操れるんじゃな」

「普通のオーラよりは難易度が高いですけどね…ジンさん、用意はいいですか？」

「待ってたぜえ…『この時』をよお…！ 行けぜ！」

ジンさんが、矢も盾もたまらず、と言った風情で襲い掛かって来る。しかし、「この状態」になった以上、いかんせん地力に差がありすぎる。もちろん体術は素晴らしいし、技も豊富だが、オーラ差によって攻撃する手足が傷ついてゆく。私の攻撃もガードはしっかりしているが、それすら強烈に貫通して大ダメージを受けている。1分もしない内にボロボロになってしまった。

「………続けますか？」

「ゲホツゲホツ…ペツ！ 今ようやく面白くなってきたトコだ。やめんじゃねーぞ！
次は例の技を使ってくれ」

「…わかりました。行きますよ」

そう言つて私はジンさんに接近し、胸に手をそつと当てて、*“内浸透勁”*を打ち込む！
ヒソカにやったのよりは強めだ。致命傷の一步手前ぐらいだろう。直後、ジンさんは
穴という穴から血を吐き出して倒れ伏した。

「大丈夫ですか!？」

「ぐっ…グハツ…。こりやあ…効くなあ…ゲホツ！」

「すぐ回復しますね！」

「ありがてえ…。これはちよつと…キツイ…」

「……アレは本当にヤバいのう…。マジで必殺技、というのに相應しい技じゃ。しかも
特殊能力じゃない所が恐ろしい」

「ジジイは喰らったの？」

「ああ。闘った時にな。全身のオーラが強制的に跳ね回って内臓関係がぐちゃぐちゃになる。マジでエグい技じゃ。奴の力加減次第で即死技になるんじゃない。しかし、コレは恐らく相手のオーラに瞬時に同調せんといかん。難易度もエグいぞ」

「……おつそろしい技ね。アタシは出来る気がしないわ」

「じゃが、できんといかんぜ。お主が奴に付いて行こうと思っっている限りはな」

「……そうね。アタシもやってみせなきゃね…」

「それにしても…ジンの奴、楽しそうじゃのう…」

「ええ…ホントにね…」

私はジンさんを癒した後、ジンさんの要望で闘いを再開した。また浸透勁を打ち込んで欲しいと言うジンさんの正気を疑ったが、言われるままに打ち込むと、また倒れ伏し、また癒す。

メンタルが半端ないな。凄まじい激痛と苦痛のオンパレードな筈だが…。

しかし、繰り返す度に違和感がでてきた。効きが悪くなってきた。まさか…もう掴み始めたか？

そして、5回ぐらい繰り返した時、『それ』は起きた。

“内浸透勁”！

………殆ど効いてない！

「ようやく……“覚えた”ぜ。オメーの技をよ……」

驚いた……彼はこの技の性質を掴み、オーラが掻き乱される寸前に自分で自分のオーラを操作してぶつけ合い、被害を最小限にして無効化したのだ！ 何という成長速度！

天才というにはまだ足りない、怪物級の才能だ。

「オレは天才だからな。一度喰らった打撃系は大体マネ出来る。だが、『コレ』は打撃じゃねーし、難易度も桁違いだったから苦労したぜ。だが、恐らくもう使える。ついでに“聖光氣”の秘密も分かった。ヒントは『同調』だ。違うか？」

「驚きましたね……。正解です。私がそれを習得するのにどれぐらいかかったか……。恐ろしい人だ」

「まあ……だが、初見でガチで闘ってたらアウトだな。全くもってありがたいこった。ところで、この技の名前はなんて言うんだ？」

「ああ。言つてませんでしたか。『内浸透勁』と言うんですよ」

「……おい。『内浸透勁』って事は……」

「ご明察。内があるなら当然外もある。……喰らつてみますか?」

「いや……大体察した。やめておこう。そのオーラをブチ込まれたら確実に死ぬ」

「ま、それが賢明ですね。必要な分は見せました。後はご自分でどうぞ」

「おう。ありがとよ! これで最低限は整つた。後は自分で出来る。助かつたぜ」

「どういたしまして……。会長、ビスケ、お二人はどうしますか?」

「では、是非ワシももう一度やってみようかの。今度は『聖光氣』で頼む」

「私は……カーム。会長の後で大事なお話があります」

「……分かつた。ではまず会長から行きましようか」

それから、誰もいない工事現場の近くで激闘が繰り広げられた。会長は何やら手応えを感じたらしく、非常に満足しながら倒れた。……そのまま逝くんじやないかと心配したので、早急に治療した。

ビスケだが、その後の大事な話とは、自分も強くなりたいそうなの。今まで我慢してきたが、2人と私の闘いを見て我慢が出来なかつた様だ。そして……

「今の私は仮初の姿。本当はカームが思っているよりは私の年齢も上だし、真の姿は相当ゴツイのよ。騙していた様で悪かったわ。本当にごめんなさい。……それでもカームは…私を受け入れてくれますか？」

私にとっては今更だが、本人にとっては重大な問題だったのだろう。女性だしな。…彼女の心理もなんとなく分かる。だが、ビスケはビスケだ。だからこそ、伝えねばならない。今でも彼女は不安そうに待っているからだ。

「私には分かっていたよ。ビスケの大体の年齢も、その肉体も。だから心配する事は何も無い。でも、ようやく打ち明けてくれて嬉しかった。ありがとう。私にとってビスケはビスケだ。今ではとても大切な友人だと思っている。今までも、これからも。そう思っているのは私だけかな？」

「……………」

ヤバイ。外したか？　だが、返事を待とう。

「カーム……。ありがとう。とても…救われたわ…」

ゴキゴキゴキ…

そう呟きながら、ビスケは身体を元の姿に戻し始める。来た来た来た…！ これだ！
絶え間ない修練の果て！ 女性の身でありながら、これ程の肉体を得る為に、一体どれ程の犠牲を払って来たのか。オーラも身体が変化するにつれ、ドンドン倍化してゆく…。これまでにどれ程の研鑽があり、どれ程の修羅場をくぐり抜けてきたのか…その姿が、今完成する！

シューウウウウ…

「……………美しい」

私は思わず呟いた。正に修練の極み！ 宝石の様な肉体美がそこにはあった。

「ありがとね…そう言ってくれて嬉しいわ。じゃ、行くわよ」



「ジジイ…アイツ、カーム狙ってんの?」

「そのようじゃな。友人、とか言われとつてご愁傷様かと思つたが、中々いい感じのようじゃのう! こりや面白そうじゃ」

「ふーん…。ま、好きにしなとしか言えねーけどよ…。しかし、ジジイも始めてたか」

「うむ。一武闘家として実在がハッキリした以上、目指さん選択は無いからな。そういうお主も目指し始めとるじゃろ?」

「まあな…。やってみて分かつたぜ。ありや反則だ。絶望的なぐらい力の差がある。そもそもアレが無くてオレ達は遊ばれてる。癪な話だがな。ジジイも分かつてんだろ?」

「ああ。見てみい。ビスケも最上級クラスの強さは有る。特に真の姿を晒した後はな。じゃが、それでも奴には余裕がある…。殺そうと思えばいくらでも殺せるじやろう。ワシら3人がかりでもな。人間か怪物かどうかで揺れるわけじゃ」

「……悔しいな。力がねーつてのはよ。久しぶりだぜ。こんな思いすんのは」

「全くじゃ。だが、楽しみも増えた。どうやらワシはこの歳になっても挑戦者らしいから」

「せいぜい足掻いて奴に一泡ふかせてやろうぜ。オレ達でな」

「分かつとる。このままじゃ終われんわい。……もう少し早く出てきて欲しかったもんじゃないがな」

「なくに。何とでもなるさ。その為のオレのゲームだ……」



一通り手合わせが終わり、一旦事務所に戻る。寮から持ち込んでいたツمامミや酒で宴会が始まった。反省会兼飲み会だ。ビスケも吹っ切れた様な顔をしていて安心した。もう元に戻ってしまったが。残念だ。

話は皆が先程の手合わせの反省会や、ジンさんのゲームについて語り合い、大変盛り上がった。私の暗黒大陸紀行の話も部分的にしながら楽しい時間を過ごして、あつという間に夜中の12時を回る。そろそろお開きかな。

もうジンさんは満足した様で、これからまた別の場所に向かうという。ジンさんも早く気兼ねなく会える様になるとよいが。ゴンが見つけないといけないのがなあ。ジンさんに話したら、ゲームをクリアして、更に条件を揃えたら会える様に設定したらしい。本当かと尋ねた所、ちよつと意地悪していたらしいが、それも無しにするという。それならば更に彼を鍛えておこう。少しでも早く会えるように。

まあ何にせよゲームはやらねばならない。私の為にもだ。まずは目的の一つを済ませてからだな。

楽しい時間も終わりを告げる。だが、まだこれからも続いていく。そう思えるだけでも私にとっては希望となる。願わくばこの希望がずっと続きますように……。

81、発とクラピカの試練

あれから2日間、ネテロ会長は修行に付き合ってくれた。夜になると手合わせという名の激闘が繰り広げられる。中々ハードではある。だが、私にとっては充実した3日間だった。最終日の帰る前に、会長には私から例のキメラアントの事について伝えた。

「何と……そんな奴らが来るとは……正に厄災級じやの。時間と場所は分からんのか？」

「ええ……。本当に申し訳ない事に。ですが近々というのは確実です。私は『それ』が発見され次第、即討伐に向かいます。被害を最小に抑えるつもりですが、0にするのは厳しいかもしれません。その場合はそれなりのお覚悟をお願いします……」

「ふむ……。分かった。事後、事前処理は任せい。ワシも被害が広がりゃん様に対策を練つとく。万が一も考えてワシも更に鍛えておこう。……どういう能力か分からんが、助かるぞい」

「ありがとうございます。私はこの世界が好きだ。滅びてほしくない。だからこそ、今

後も人類に対する厄災級の事態になれば私が潰しに行きます。会長もその様な事案があればすぐ私に連絡をください」

「それは助かるのう。……そうなれば、まさしくお主は『厄災ハンター』じゃな」

「ふふ……。そうかもしれませぬ。ですが非公式でお願いしますよ?」

「分かつとる。ではその時は頼んだぞ、『厄災ハンター』。『壊れない男』アンブレイカブルのカームⅡアンダーソンよ」

会長は名残惜しそうに帰って行った。次に会う時はゲーム内かな? ゴン達には私がジン制作のゲームを持つている事はまだ秘密だ。自分の《発》を形に出来たらその存在を匂わせてみよう。そう言えば、ジンさんはゴンの故郷にヒントを置いてきたとか言ってたな。ある程度修行の目処がたてば、向かってみるのも悪くない。弟子達も自分の《発》開発に余念が無いらしく、厳しい基礎修行をこなしながらも皆一生懸命に取り組んでいる。私も時にはアドバイス等をしたり、修行法を教えたりしながら充実した日々を過ごした。

そして、20日ほど経った頃……

ボゴン!!

「やったー!!!」

「遂に開通したな!」

遂に、トンネルを掘り終えた。…早いな。予想を遥かに上回るスピードだ。実に全長約20キロの大トンネル! 見事だ。それに加えて基礎的な修行やバランス訓練、そしてそれぞれの系統別修行も大分こなせる様になってきている。

最早基礎的な力は中堅ハンターぐらいなら軽く上回るであろう。そして、オーラ量も全員中堅ハンター程度ならある。平均で潜在オーラ約20000程度、といった所か。カルトに至っては、50000オーラぐらいはありそうだ。

そして:それぞれの《発》も完成が見えつつある。まずはゴン。彼は強化系ゆえ非常に悩みながらも、自己強化を極める方向に向かった様だ。レオリオの講義と私の「聖光氣」の変身から思い付いた様だが、全身の細胞から出て満遍無く強化するオーラの一部を更に身体の細胞全てに宿し、活性化させるといふとんでもない能力だ。…これは正直ビックリした。今は顕在オーラは若干下がるといふか、殆ど《纏》と同じ程度になり、オーラを使った技の威力が極端に下がるが、それを差し引いても肉体性能の底上げがヤ

バ。コレならゾルディックの7の門まで開けそうだ。更に、回復速度が尋常じやない。怪我しても凄まじい速度で治る。回復性能だけで言えば昔の「日々は健康」に近いが、それとはまた別物だ。具体的には超回復できる。：つまり、これを使って鍛えれば鍛えるほど強くなる。また、怪我から回復しても同様だ。サイヤ人か。つまり簡易的なゾンビアタックも可能だ。正に強化系の特権をフル活用した様な能力である。名を【進化する変身】と言うらしい。ネーミングはどうかと思うし、強化率もまだまだ高いが、成長したらヤバい事になりそうだ。まだオーラが足りないが、将来的には念による攻撃力も高くなっていくだろう。その名の通り、無限に進化する可能性を秘めている。使った後は凄まじい筋肉痛がおきるらしいが、ピーキー過ぎて使い所が難しいが、成長すれば強い：かもしれない。

彼はもう一つ能力を考えていて、「ジャン拳」というのもあった。ぶつちやけ念を込めた拳による攻撃だが、溜めの間無防備になる代わりに強烈なオーラを引き出せる。グー・チョキ・パーの3種類あるらしいが、コレは原作で見た記憶があるな。2つの能力のどちらかで悩んでいたが、強化系だし、折角だから両方やったらというアドバイスしたら喜んで取り組んでいた。特に【進化する変身】はお気に入りで、消費が激しいにも関わらず頻繁に変身している。最近なんとなく身体が大きくなり始めているが、気のせいだと思いたい。

キルアはこの1ヶ月でオーラを電気に変化させた。これも原作で見たな。極めるとヤバイ性能になる奴だ。充電が必要なのがネックか。私なら解決出来るアイテムを持つているが、そう甘やかすのもどうかと思うので試行錯誤してもらおう。現在彼は、身体の細胞から発する電気信号をどうにか増幅し、バッテリーとして使う事を考えている様だ。ゴンや私の変身を面白がっていた所を見ると……どうなるか見ものだ。

クラピカは、鎖を具現化していた。指に鎖を具現化し、それぞれ特殊能力を備えるという、原作でも見た奴だ。彼は何と将来的には10本全てを使う能力にしたいらしく、メモリは大丈夫かと思ったが、本人としては多分いけそうだとこの事。本人の能力者としてのレベルアップも大きい為だろう。基本的には片腕を斬り飛ばされた時や、使えなくなった時の為にスペアとして両方で使える様にしたらしく、作る能力は5個プラスαだ。現在能力もある程度完成している。大筋では原作と同じだ。整理してみよう。

・親指：【癒す親指の鎖】
ホーリーチェイン

原作通り、強化系の回復役。鎖を当てる事で患部を癒す事が出来る。緋の眼状態なら尋常じゃない回復速度になる。先端は十字架。

・人差し指：【奪う人差し指の鎖】
ステイラルチェイン

コレはオーラを吸収する奴だ。緋の眼状態だと《発》まで吸収出来るこの事。試しに

私も吸つて貰つたが、余りにも私のオーラが多すぎて破裂しそうになつたらしく、断念した。まああまり期待してなかつたし、上手くいったらそれはそれでヤバいのでよかつた。先端は吸うための注射器。

・中指：【縛る中指の鎖】
チエーンジエール

戦闘用の鎖。当初クラピカはコレともう一つに旅団専用の命懸けの誓約を付けようとしていたらしいが、珍しく彼が相談して来た為に、相談に乗つた。私とビスケとの協議の末、普通の拘束用でも十分強いという結果となり、特別な誓約は付けなかつた。ただ、緋の眼限定に限り、両手の中指の両方で相手を縛る事で強制的に相手の《練》までは解除するという性能になつた。：フラッグの効果を参考にした様だ。また、彼の感情によつて鎖の性能が変わるとの事。後で尋ねたら、復讐はもちろんするが、それに縛られて自分の未来を閉ざしてしまうのは本末転倒だと思つたらしい。また、焦つて将来的に使えなくなる念を作るよりも、地力を上げて対処出来る様にしたいの事だつた。：彼にもこの期間で少し将来を見据え始めたのは嬉しい事だ。先端は鉤爪。

・薬指：【導く薬指の鎖】
ダウジングチエーン

集中心力を増すことで、ダウジング効果を發揮する。探し物やウソ発見などに役に立つ。防御にも使える非常に便利な鎖。正直これ一本でもかなり使える。また、緋の眼限定で操作系の複合により、催眠効果をもたらず事も出来るらしい。中指とのコンビが期

待出来る。先端は球。

・小指：ジャックジメントチエーン【侵入する小指の鎖】

放出・操作系担当。まだまだ精度は甘い、中指とのコンボで必殺の一撃になりうる。その強さは修行次第で変わるが、修行を重ねて使いこなせれば凄まじい強さを発揮する。普段は刺突用だが、緋の眼限定時の効果は、相手の体内に刃を刺して侵入させて掟を課し、相手が掟を破れば自動操作で体内の臓器を抉りまくるといふとんでもなくヤバい奴だ。当初は標的の心臓に刃を刺し、掟を宣告した上で遵守させるといふ能力だったが、私から、心臓や脳を破壊した程度では死なない奴もいるといふ話を聞いてこちらに切り替えた様だ。私がいざ実際そうだし。現時点でも緋の眼ならある程度使える性能。先端は短剣。

両手技

・【無限の鎖】インフィニティチェーン

緋の眼前提の超必殺技と言うべき技。両手全ての鎖を解放し、敵の周囲360°を囲み、逃げられなくなした後、そのまま縮めて体内外から鎖まみれにして圧殺する技。相手が転移系で無ければ逃げられない上に、どこまでも追ってくる。発動する時はその場から動けず、手も使えなくなる為に無防備になるが、それを差し引いてもヤバい。現在、殆

ど出来ない為、修行中。完成したら昔の私でもモロに喰らえばちよつとヤバいかも
ない。本当に完成するかは疑問だが。

……何とかというか…強すぎない？ というか緋の眼の性能が強すぎる。正にワンマン
アーミーの極みである。彼としても仲間との修行の日々や、私達の闘いを見て、思うと
ころがあつた様だ。この数ヶ月で私もそれとなく彼とは様々な話をしていたし。

多少は緋の眼前提になつてしまつたが、原作の様な勿体無い能力にならずに済んでい
ると思う。まだまだ未熟だし、性能も完成には程遠いが、修行によつて強度や威力が更
に増すはずなので、緋の眼が無くとも使える能力になる様に出来る限り強くしてあげた
い。緋の眼自体が彼のリスクとも言えるし。恐らく寿命を削る系だと私は見ている。
おかげで今でも緋の眼状態なら、旅団員をタイマン限定でいい勝負が出来るはずだ。

レオリオは当初の予定通り、医療に特化した能力にした様だ。だが彼は放出系だ。
よつて非常に悩みつつ試行錯誤していた。結果、彼が出した答えは、オーラによる治療
だ。そのままだと思われるが、患部の細胞にオーラを浸透させて診察した後、病原菌や
ウイルスを操作して排除、又は無害化する能力、【無病息災】^{ウイルスバスター}と、毒などを排除したり、
対応できる血清に変化させたりする【^{ポイズンイジェクト}医師の毒白】。そして、怪我した者の細胞の再生力

を強化させて治療したり、疲労を癒したりする【細胞干渉^{セルリカバリ}】の3種だ。

これは彼の診察を必要とし、豊富な医療知識が要求されるが、非常に便利な回復能力と言える。前者2つは流石に至近距離で行う必要があるが、最後のは、パツと見て怪我の程度が分かればオーラを飛ばして回復させる事もできる。飛ぶ回復。正に魔法に近い能力である。彼は習得に苦労していたが、最終的には完成形が見えそうな所までいった。どちらかと言えば「外浸透勁」に近いものがあり、彼にはそのコツを教えつつ開発を手伝ったら驚くほどスムーズに出来た。面白い事に、彼が1番「浸透勁」の素養がある様だ。

ガチガチの戦闘タイプではなく、サポート特化だが、例のアンソニーの様に戦闘にも使える可能性がある。どう進化していくか見ものだ。…仲間たちは5人中2人はセルフ回復持ちだが。病気や毒にも対処出来る所が彼のスペシャルポイントだろう。

カルトだが…彼女は最早一流の能力者と言ってもいい。《発》も出来ていたしな。師匠役の私にだけその概要を教えてくれた。彼女の能力は【形代^{シキガミ}】と言う操作系の能力で、基本的に日本舞踊的な扇子と併用する事で和紙を操作する能力という事だが、それを操作して攻撃、探知、占い、紙人形による使役と幅広い効果を持つ。紙と扇子が必須なのがネックだが、余り大きいものでは無いため邪魔にはならないだろう。彼女の的には、こ

の修行で威力やスピードが相当上がったらしい。

また、この能力の最も凄いのは受けたダメージや呪いを紙人形に移す事が出来る点だ。ある程度準備が必要だが、戦闘時に受けた特殊能力や大ダメージを一度だけ身代わりしてくれるらしい。これは新しく開発した能力らしく、ようやく完成したとの事。素晴らしい。戦闘時の生存率を大幅に引き上げる事が出来る。手放しに褒めたら喜びながら近くにすり寄ってきた。まるで猫だな。とりあえず頭をワシワシしておいた。

さて、いよいよトンネルも開通し、バイトも一旦終わりを告げる。そろそろ対人のやり方に移行していかなければ。そのタイミングで、クラピカが私に話があると言ってきた。

「カーム……。お願いがある。私を君の家で雇って欲しい」

「……なるほど。《発》も大体完成が見えて来たからか」

「その通りだ。アンダーソンファミリーは裏社会に強い影響力を持つ。正直に言ってしまうと、私の目的も達成しやすいのだ。その代わり、組織には絶対の忠誠を誓う。私の

能力は組織にかなり貢献出来るはずだ。この通りだ、頼む！」

彼は私に土下座をしようとしたので、慌てて止める。

「ふむ…君の気持ちは理解した。ドンに掛け合ってみるが…ドンがどう判断するかだな。それに、マフィアは綺麗事ばかりじゃ回らない。君にもキツイ仕事があるかもしれないがそれでいいのか？」

「全て覚悟の上だ。私は目的を遂げるまでは如何なる困難も辞さない。それに、私は自分で言うのもアレだが『使える』と思う」

「分かった…。ただし！ 私は君をドンに会わせるだけだ。後の交渉は君がやれ。私は一切口を出さない。それが条件だ。いいか？」

「もちろんだ。恩に着る。よろしく頼む」

「よし…。では早速だが、ドンに会いに行こう。直ぐに発つ。用意をしてくれ」
「ありがたい。直ぐに準備する」

そうして私とクラピカは走ってヨークシンの家に向かう。約3時間。車とほぼ同じスピードで行けるとは成長したものだ。さて、アンダーソンの屋敷に到着した。我々は

ヴァインセントさんに案内され、応接室へ向かう。ジヨンは座つて待つていた。

「待つていたよ。とりあえず掛けたまえ」

我々はジヨンの目の前に座る。

「おかえり、カーム。息災だったかな？ 偶には家に帰つてきたらどうだ？」

「ただいま、父さん。中々弟子の育成が面白くてね。つい熱中しちゃったよ。使用人を派遣してくれてありがとう。とても助かったよ」

「そうか。それは良かった。ま、お前の資金から出てるから何も問題は無いがな。それで？ 彼がそうか？」

「ああ。そうだ。弟子の一人で将来有望だが、どうしてもウチに入りたいつて聞かなくてね。ほら、自分で挨拶を」

私が促し、ジヨンも頷く。

「発言の許可を頂き感謝を。私はクラピカといいます。この度は直接お会いできる機会を与えて頂き、望外の幸運を感じています。私はカーム氏のもとで念能力を学び力を得ました。この恩を返す為に、是非このファミリーで働かせて頂きたい」

しばらく、ジョンは沈黙した後、話し始める。

「ふむ……。0点だ。失望したよ、クラピカとやら。どうやら君は勘違いしているようだな。カームのコネで会ってやったが、普通だったらウチに雇われたいなら例外無く下部組織の下っ端からのスタートだ。信用のほとんど無い、どこかの馬の骨か分からん君を雇う事に我々にどんなメリットがある？ 我々はファミリーだ。それだけに非常に結束が固い。だからこそ、マフィアはウソを嫌う。今の君の発言を聞いてみれば、この私に対して欠片も本音を喋っていない。私を舐めるなよ、小僧」

ジョンがオーラを放ち、威圧をかける。彼は現在世界最高峰の1人だ。しかも職業柄、相当な修羅場を潜っている。生半可な威圧では無い。冷や汗をかきながらも、クラピカは真正面から受け止めた。胆力は中々のものだ。そして…彼も覚悟を決めた様な顔をした。

「……大変失礼な事をしてしまった。ここに謝罪する。……私には…どうしても成し遂げたい事がある。私はクルタ族だ。昔、私の集落が緋の眼を狙った幻影旅団に襲われて

全滅した。…世にも残酷な方法でだ。だから私は復讐したい。そして、奪われた仲間
眼を回収したい。それにはここで働く事が私の目的に一番近づく方法だと感じた故、こ
こで雇われたい。これは私情によるものだが…私は雇われた以上、このファミリーには
絶対の忠誠を誓う。そして…すぐにでも私はこのファミリーに利益を齎す事が出来る」
「ほお……言ってみろ」

「近々、十老頭主宰のオークションが開かれるのは知っている。だが、私の仇…幻影旅団
はそこに襲撃をかけるだろう」

!!?

驚いた…。私は彼に何も言っていない。ジョンにもそう伝えてある。思わずジョンと
顔を見合わせる。試験の時にヒソカもクラピカには言っていない筈だ。

「……それは確かか？」

「ほぼ間違いない。方法は…私の調査と能力とだけ」

「……成る程な。多少は役に立つ様だ。確かにその情報は超極秘ながらあった。確定で
は無いがな。だが、それを修行しながらも自力で得るとは中々の物だ。良からう。君が

ある程度有能なのは分かった。私の権限で試しに君を仮に雇う事にしよう。あくまで仮採用だ。最後に2つ、私が課す試験を超えられたら本格的に採用しよう」

「分かった。何をすれば良い？」

「まずは君の力を見せて貰おう。中庭の修練場へ」

我々が移動すると、リベロさんがいた。彼は今は別の人物と交代して本家に使用人として詰めている。なるほど。彼なら試し相手には丁度良い。クラピカは知ってる人物で驚いていた様だ。

「今回はルール無しの一本勝負だ。決着はお互いでつけろ。勝負の立ち会いは私が務めよう。では、始めろ」

「よお。しばらくぶりだな。ちよつと前までヒヨッコだった癖に随分と育った様だなあ。だが俺つちもドンの前で無様は見せられねえ。悪いが全力で行くぜ。恨むなよ。ヤバそうになったら『まいった』すれば見逃してやるぜ」

「私の方こそ負けられん。恨むなよはこちらのセリフだ。私も殺すまではせん。直前で止めてやろう」

「そこまで言えりや上等だな。…じゃあ始めるか」

お互いに《堅》をする。リベロはやはり中々の術者だ。頭在オーラが30000ぐらいある。潜在だと50000以上か。ほぼダブルスコアだな。緋の眼でトントンぐらいか。

リベロが仕掛ける。念弾を作り出し、放つ。凄まじい速度でクラピカに迫るが、クラピカは薬指の鎖を鞭の様に操り、弾を弾く。アレを弾くとはやるな。既に緋の眼になっている様だ。だが、リベロは次々に念弾を生み出しては向かわせていく。クラピカは防戦一方に見えるが、弾きながら中指の鎖で反撃する。リベロも躲さざるを得ず、攻撃を中断して飛び退いた。

そして今度は念弾を蹴って撃ち出す。これは威力とスピードが段違いだ。恐らくこれが彼の本命だろう。流石のクラピカも避けて対処しようとしたが、弾がカーブして迫る。ギリギリで何とか躲すと、今度は先程弾いていたにもかかわらず空中に残っていた念弾にバウンドし、クラピカに跳ね返る！クラピカは腕の周りに鎖を出してガードするも、押し込まれ、かなりのダメージを貰った様だ。そして…ガードした腕が垂れ下がる。

「ハンドだぜ…。イエローカードだ」

「これは…！」

「テメーの片腕はもう使えねえ。能力もな。もう片腕も次に喰らったら使えなくなる。そしたらレッドカード。PKが始まる。そこまで来たら…最悪死ぬぜ？」

「……ただ片腕が使えなくなっただけだ。まだまだこれからだ」

「その威勢はいつまで保つかな？」

リベロが新たな念弾を生み出す。今度は2個だ。だが、クラピカはその間に反対側の手の中指の鎖で反撃を試みる！しかし、制御が甘く、狙いが外れて地面を叩いてしまう。…いや、アレはわざとか。土埃が舞い、一瞬視界が切れる。だが、リベロは関係ないとはかりに弾を蹴り出そうとして…いつの間にか足に絡まった鎖で地面に引きずり倒される。《隠》だ。そのままクラピカが鎖を辿って急接近してタックルし、馬乗りになる。決まったか？クラピカの肉体的性能とオーラでリベロは抵抗するが中々抜け出せない。最初の2発は蹴る用だったためか浮いたままだ。

周囲に念弾が浮かび上がる。自分ごと攻撃する気か。リベロもいい根性してる。しかし、クラピカは慌てずに薬指から鎖を出して顔の前に垂らして揺らし始める。

少しして、リベロが表情が抜けた顔をして「まいった」と宣言した。なるほど。催眠

術か。

「そこまで！ 勝者、クラピカ！」

ジョンが宣言する。そこで、クラピカは鎖を解除し、リベロを起こす。リベロもハツとして起き上がり、能力を解除した様だ。クラピカが治療をしながら話しかける。

「……何故手を抜いた？」

「いや、全力でかかったさ。少なくとも試合用ではな。ま、見苦しい言い訳になるからこれ以上は聞かないでくれ。どうだった？ 俺たちの「ボールは友達」フアンタジスタはよ」

「…シンプルながらも威力と効果は恐ろしい。貴方のヒントが無ければそのままやられた可能性もある」

「ありやヒントじゃなくて制約だ。片方奪つたら次に繋げるためにイエローカードを宣告せにやならん。ま、多少ヒントは付けたがな。お前さんの鎖も中々いい能力だな。具現化つてのは分かったたが、《隠》まで使えろとは思わなかったし、蹴る直前を狙われたから避けきれなかつたぜ」

「…ありがとう。いい試合だった」

「決着は付いたな。双方、よくやった。真剣勝負は技量にかかわらずいいものだ。…クラピカとやら。ある程度の力は証明したな。この場で2つ目の試験を言い渡す」
「……………」

クラピカが緊張した顔で続きを待つ。

「君は、自分の探し物がどれだけの値段がつくか知っているかね？」

「…………それは、関係ある話か？」

「あるから口を挟まず答えるがいい…。次に余計な口をきいたらこの話は無しだ」

「…すまない。末端価格で最低5億ジェニーとは聞いている」

「その通り。今から3か月以内に5億。それだけ用意して持つてこい。それが2つ目の試験だ」

「!? そんな大金…」

「無理なら良いのだぞ？ 君が言ったのだ。今すぐにも我々に利益をもたらす事が出来る。期限は8月5日だ。この件に関しては、カームも手助けや援助を禁じる。監視にリベロをつけよう。カーム、いいな？」

「OK。分かったよ、父さん」

「では、解散だ。クラピカよ。健闘を祈る。これが出来れば君の採用を認めよう」



帰路、彼は一言も喋らず思案しながら走っていた。ちなみにリベロも併走している。大方先程のジョンの試験について考えているのだろう。私から話しかけてみる。

「クラピカ。先程は初の念での戦闘だったが…どうだった？」

「…ああ、ああ。すまない。考え事をしていた。思った以上に消耗が激しいな。そして、相手の真価を発揮させてはいけない事は学べた。…私もまだまだ課題が多い」

「その通り。それが分かっているならばとやかく言う事はやめよう。…君も考える事は多いだろうからな。ドンからの試験について、とかな」

「…まあ…そうだな。カームの手助けを借りないのは当然だが…3か月以内に5億、か…」

「まあ悩むがいい。私からはこれ以上なんとも言えん。だが、1人で考えるのは限界も

ある。私は言えないが、偶には人に頼る事も重要だ。もしかしたら突破口が開けるかもしれないからな」

「……？ カームに頼らないのは分かるが……人に頼る？」

「……全く。君の悪い所だ。君は自分が思っているより一人じゃない。私はこれ以上は言わないから自分で考えろ」

クラピカは仲間を失った影響か、一人で何とかしようとしすぎる。まさか同じ窯の飯を食った仲間を頭から外しているとはな……。これもいきつかけになるだろう。

……私も昔そうしていれば、あの様な……。いや、よそう。状況は違うが、クラピカが同じ様な道を辿らない様にする。それが私の役目でもある。私も彼に、ああは言ったが偉そうな事は言えないな。だが、今はジョンとファミリーに頼りっぱなしだ。会長や、ジンさん、ビスケにもだ。そして、私はその幸運を忘れない様に、そして少しでも返していかなければならない。

それが私の生きる意味でもあるからな。



『ジョン、ありがとう。無茶を言つてすまない』

『いえいえ。楽しかったですよ。貴方の父役になれるとは、人生面白いものですな。そして…彼は有望ですね。少しばかり私情に囚われ過ぎるクライが有りますが、十分幹部級の能力がある。彼の目的が終われば、ファミリーにとつて素晴らしい優秀な人材になるでしょう。アレで念を習い始めて4カ月とは…。末恐ろしい』

『彼は逸材だよ。念もそうだが、頭も抜群に切れる。胆力もある。私も彼の成長が楽しみだ。それに、彼が襲撃を予言したのには私もビックリしたよ』

『全くですな。少し計画の修正が必要かもしれませんね』

『ああ。折角だから彼も今回のパーティーに加えよう。我がファミリーに仇なす者には容赦はせんが、成長の場としても申し分無いしな』

『ふふ…：奴等の慌てふためく姿が楽しみですなあ。私も出番はあるかな?』

『おいおい。ドンはどつしり構えていてくれよな…。まあもしかしたらあるかもしれなけれど、万全の状況で対応しよう』

『ま、楽しみにしておきますよ。では、また…』

82、いまさら天空闘技場

「あるぜ。大金稼げるトコ」

あれからクラピカはしばらく一人で悩んだ様だ。その姿を見るに、まだまだ彼には一般人の感覚が残っているみたいだな。

彼は悩んだ末…私の助言を思い出し、ゴン達に相談したらしい。すると、解決方法をキルアが持っていた。

「修行も出来て、カネも稼げる。天空闘技場って言うんだけどな。お前なら今から行けばギリギリ何とかかなりそうだけぞ？」

「本当か!? 仮にライセンスを質に入れたとしてもそこまではならなかったが…」

「おいおい、勿体ねー事すんなよ。んな事しなくても大丈夫だろ。多分。万が一足りなかったらオレが貸してやるよ」

「オレもー！」

「クラピカも水臭えな。困ってんならすぐと言ってくれよ。しっかし…就職する為に5億か…とんでもねー世界だな」

「…横紙破りをするからには、それだけ役に立つ事を証明しなければならぬ、という事だろう…。ありがとう。資金調達の目処が立った。直ぐにカームに言って出発する」

「久しぶりに行ってみるか。バイトも終わったし、金稼ぎもここらでしとかねーとな」

「キルアは行ったことあるの？」

「ああ。6歳の頃な。200階まで行ったら戻って来いって放り込まれたぜ」

「キルアの実家もヤベー所だな…。まあカネは幾らあっても困らねーからな。オレも行

こう」

「兄さんが行くなら…ボクも行く」

「みんな…ありがとう」

「なぐに、気にすんなって！ そろそろここ以外も見てみたいしな」

「楽しみだね！」

と言う会話が あった ようで、全員で 出発する 事になった。まあ 正解の 1 つだ。 いかむしろ 想定内だ。上手く いったと 内心ほくそ 笑む。当然だが、私も ビスケットも 着いて行く。 ついでに リベロも。

クラピカが 天空闘技場 直通の 高速船の チケットを 予約すると、リンゴーン 空港に 出発だ。 これまで お世話になつた 寮の 片付けを 全員で 済ませ、 使用人達に お礼を 言い、 出発する。

しかし、 天空闘技場ね……。 記憶が 曖昧だが、 原作では 「奴」が 出て来た 気がする。 確かに あの バトルジャンキーには お似合いの 場所だ。 時期的に 「奴」が いるか どうか 分らんが、 もしいたと したら 面倒だな。 だが、 ゴンの こだわりを 解消出来る かもしれない。 どうなるの か 分らんが、 行って みれば 分かるか。 今回の 船旅は 高速船 という 事も あつて、 15日 程度で 着くらしい。 船旅の中 でも 出来る 修行を 考えなければ ない。



船の中では、《練》を伸ばす修行をしたり、船でもできる系統別の修行や、それぞれの

《発》の開発を行ったりしたが、これまた飛躍的に実力が伸びた。まず、《円》が全員出来る様になった。精々4、5メートルだが、最低でもそれだけ有れば十分だろう。不器用なゴン、キルア、レオリオは苦戦していたが、クラピカは小さい部屋なら覆える様になったし、カルトに至っては20メートル四方まで伸ばせた。

また、それぞれ最低5時間は《練》を持続出来る様になったと言えば、成長度が分かるだろうか。数値にすると、平均で約35000オーラぐらいか。数値的には最早ルーキーでは無いな。特に、実戦を経験したクラピカの伸びが凄まじい。オーラ量で言えば、弟子内で2位につけている。緋の眼になるとトップだ。ちなみに変身出来るゴンがマジで伸びまくって3位。その下にキルアとなる。レオリオは4位だが、彼でも中堅以上はあるので問題ないだろう。この頃本格的に勉強しだしたしな。キルアはゴンに負けたのが悔しいらしく、必死こいて修行に取り組み、僅差、というかほぼ同じぐらいまで伸ばした。いいライバル関係だ。

そして、それぞれ《発》の精度も段違いに上がった。ゴンはオーラに余裕が出てきて、変身時もオーラが操れる様になってきた。また、ジャン拳も、グー以外の斬撃と放出が安定して出る様になった。変身といってもパツと見、姿形は変わらないから実は厄介かもしれない。

キルアは、電気のオーラを自分で発電出来る様になった。何を言ってるか分からない

かもしれないが、実際出来たのだからしょうがない。一番電気信号を発する脳から発電出来る様に、頭にバッテリーを具現化したのだ。金属のサークレットの様な兜で、額に目玉みたいな意匠がある。これは彼が好きなのヒーロー物から取ったらしい。まだ発電の為に時間がかかるが、その内全身にバッテリー兼鎧の様な物を作りたらしい。彼もノリノリで考えているし、そつと見守ろう。

クラピカ、レオリオの兩名も順調だ。これはもしかして…全員幻影旅団とある程度闘えるレベルになるか？ まあ圧倒的に実戦不足だからなんとも言えないがな。

そんなこんながあつて、ようやく天空闘技場に到着した。今更来るとはな。私も原作の大筋は覚えていても、詳細までは忘れてる。確か原作では速攻でここに来て念を覚えたと記憶しているが…今はたっぷり私が修行して、全員念を覚えちゃったからなあ。歴史が変わつちやつたな。いい方に変わつてるといいが。

キルアがシステムについて説明してくれた。一階からスタートして、後は勝つごとに10階単位で上がっていくシステムだ。何となく思い出したな。キルアが200階で止められたのは、そこから念能力が出て来るからだろう。それならそれで都合がいい。ここで一つ。修練の為にある枷を課す。それは……。

「おい！ カーム！ 2.0倍って、どういう事だよ！ 動けねーだろ！ アホか！」

「しかもご丁寧に低酸素…死ぬわ！ こんなん！」

「だが、死んでいないな。それだけ言えれば十分だ。修行が終わったとは誰も言っていないな。どこだろうが修行はやる。それがカーム流だ」

「私もやるのか……」

「当たり前だろう？ クラピカ。君の目的からすればまだまだ甘いぐらいだ。君も強くなる為の時間があまりない事ぐらい分かっているだろう？ というか、これは対戦相手の為でもある」

「？ どういう事？」

「あく。分かった…。ゴン。お前、もう既にアレになればウチの7の扉ぐらい開けられるだろう？ その力をちよつとでも一般人にぶつければ…」

「ぶつければ…？」

「潰れたミンチの出来上がり、だ」

「……………それ、ホント？」

「そうだな。キルアの言った事は間違っていない。それに加えて、一般人にオーラを纏った攻撃をしたらより酷くなる。万が一生き残っても、念に強制的に目覚めてオーラが出

尽くして死ぬ。よって、参加する者は200階までは《纏》すら解いて挑め。そこまで行ったら解放してやろう」

「おいおい、マジか…」

「大マジだ」

「…まあ、カームの言う事は間違いでは無いわね。アタシでもそう指示するわ」
「それでも参加するか？」

「…私はやる。何があろうともやらなければならない」

「まあ修行だしね。オレもやるよ」

「しゃーねーな。やるか」

「クラピカの為にじゃねーぞ！ オレの為に参加する！」

「ボクも…」

「みんな…」

「よし。全員参加だな。では登録に行こうか」

全員が一階の受付に並ぶ。長蛇の列だ。2時間ぐらい並び、全員登録を済ませると、

早速一階の闘技場で全員試合だ。

なんだかんだ言って彼等も、20倍重力下である程度動いているから脅威的な身体能力と言えるな。

さて：私はビスケトリベロと観戦しよう。リベロが「旦那も相変わらずエグいつすね」とか言ってたが、先の事を考えれば今やらないとダメだからな。

一階の試合はアッサリと終わった。レオリオとクラピカ以外は子供に見えるから舐められてたが、それぞれ一撃で相手をのしていた。

：ま、150階までは20倍でもこんなもんだろなあ。パワーや防御力は据え置きだし。それぞれが50階行きを宣告され、移動する。

その日のうちに2回目の試合が組まれる。同じ様な繰り返しだ。結局この日はここで終わった。

その日はホテルに泊まり、次の日からは、ガンガン試合をし、階級を上げていく。やはり大したハンデにもならないか。まあそりゃそうか。大体15倍までは普通にやってたしな。ただ、90階でカルトと対戦した者だけは別だった。

「押忍！」

「……それは挨拶？」

「自分、ズシと言います！ お名前を教えて貰ってもいいですか!？」

「カルト…。時間が惜しい。早く始めよう」

「カルトさんっすね！ よろしくお願ひします!」

ズシが構えを取る。ほお…。《纏》をやつてるな。あの年齢で大したもんだ。それに、隙のない良い構えだ。ビスケも反応した。

「あれは…：心源流の構えね。…もしかしたら師匠は知り合いかもしれない」

「ふむ…。この辺の階の奴よりは強いかな？」

「うーん…。あの年齢だし。基礎もまだまだみたいだから無理じゃないかしら。ほら」

ちようど、ズシが仕掛けて、カルトがガードしたところだ。直後のカルトのフェイントに反応してしまい、敢えなく腹部にデカイのをもらってしまっていた。ま、そりやそうか。ダウンでポイントを取られる。だが、流石に念能力者。起き上がってきた。だが…：起き上がったのを確認したカルトが急接近してボコボコにして吹っ飛ばしまくり、結局TKOとなった。負けた彼は何故か満足気な顔をしていた。

「カルトさん！ すっごい強いっすね！ 自分、感動しました！ 是非連絡先を教えて

くださいー！」

「おい、カルト。なんだコイツ？」

「あ、兄さん。さっきの対戦相手。念能力者っぽくてしぶとかった」

「お兄さんですか！ 自分、ズシって言います！ よろしくお願いします！」

「暑っ苦しいなー。でも、その歳で念能力者って中々やるな」

「すごいねキミ！ オレ達も苦労したのに」

「みなさん『念』を修めてるんですね！ あまり歳も変わらないのにますます凄いです！

でも、知ってるのにどうしてやってないんです？」

「ああ。オレ達はハンデ付けられながらやってんだよ。鬼や悪魔みてーな奴からな」

「…その鬼や悪魔みてーな奴とは、私の事かな？」

「げえっ！ カーム！ とビスケ！」

「ほう。まだまだ余裕があると見える。更に増やすか？」

「アタシまで同じ扱いとは解せないわき。これはお仕置が必要かしらね？」

「い、いや、やっぱりスゲー師匠だよな！ なあ、ゴン！」

「そうだね！ 2人は凄いいよ！」

…まあいいか。これも師匠の特権だ。

「君がズシ君だね？ いいオーラをしてる…。師匠は誰かな？」

「はっ、ハイ！ ウィング師範代の下で修行をしています！ 師範代も凄い方です！」

冷や汗をかきながら答えるズシ。威圧はしてないんだけどなあ。そう思っていたらビスケが反応した。

「へえ。あのひよっこウィングがねえ。確かに弟子を取ったとは言ってたけど」

「あの…あなた方は……」

「ああ。すまない。彼等の師匠をしている、カームIIアンダーソンと」

「昔ウィングの師匠をやったビスケットIIクルーガーよ」

「そ、そんな凄い方々とは…」

ズシが絶句している横で、キルアがヒソヒソと「アイツの師匠の師匠って…ビスケはやっぱリババアじゃねーか」とか言ってビスケにぶっ飛ばされた。女性に年齢は禁句。そろそろ覚えた方がいい。そうこうしていると更に新しい人物が来た。

「驚きましたね…。こんな所でお会いできるとは…。お久しぶりです。ビスケ師範代」
「ウイング…もうアンタは卒業したんだから師範代はやめなさいつつつてんでしょ！
大体アンタも師範代でしょーが！ 全く…寝癖もシャツも、相変わらずだらしないんだから」

「おっと、すみません。しかし、まさかビスケ師範代がまた弟子を育ててるとは思いませんでしたよ。そして…はじめまして。カームさん、でよろしいですか？ ズシの師であるウイングと申します。ここで立ち話もアレなので、場所を移しませんか？」

彼の提案を受けてその場にいた全員でホテルに移動する。もう本日の試合は無いしな。クラピカは戦闘のイロハをリベロと詰めてる様だ。いつの間にか仲良くなった様でなによりだ。レオリオも勉強の為に自室へ戻っている。

一通りの挨拶を済ませ、本題に入る。

「なんと…20倍の重力と低酸素化の中で天空闘技場を…」

「20倍って…どんだけっすか!？」

「方法は秘密ですけどね。普通の状態だと彼等は楽勝になってしまうからの措置です

よ」

「……恐ろしい人達だ。しかも念を習得して4、5カ月とは……末恐ろしい。既に私にも通用しかねないぐらいのポテンシャルを全員から感じるとは……」

「まあ、それだけ彼等の才能があつたという事です。……ビスケの弟子だった貴方に会えたのも何かの縁。短い間かもしれませんが一緒に頑張りましょう」

「ええ……。よろしくお願いしますね。カームさん。そしてビスケ師範代」

「だ〜か〜ら〜師範代はやめなさいってば！ ビスケちゃんと呼びなさい！」

「いや……師範代は師範代なので……。それに……ビスケちゃんって……」

「あによー！」

「ではみなさん！ また試合場でお会いしましょう！」

「ああ。また試合場で」

ビスケがキーキー言ってたが、スルーして帰る。カルトが何故か私の腕を取ってきた為歩きづらかった。



「カルトさん…やっぱりあの人に…。でも歳が離れてるからまだチャンスは…」

「……ズシ。君は今そんな事に現を抜かしている場合かな？」

「ハッ！ 違うっす！ …でも凄いやつだなあって…。歳も近いのに自分とはレベルが全く違ってて…。しかも師範代の師匠なんて雲の上の存在っすよ」

「…そうだね。彼等は…我々とは次元がまるで別だと考えなければならぬ。まさしく怪物級の才能ばかりだ。だが、君にも才能がある。それに、まだ君はスタート地点に立ったばかりだ。焦る必要は無い。地道な努力が才能を打ち破る可能性があるのが念能力だからね。少しでも彼等に追いつける様に、修練を積む事だ」

「ハイ！ 師範代！」

（いいコだ…。才能もある。あの別格な才能を目の当たりにしても僻む事が無いのは嬉しい事だ。だが…彼等は本当に怪物だ。恐らく《発》まで至っている。そこにあのビスケットIIクルーガー師範代がつくか…。それに…カームIIアンダーソン。彼等を主で導いているのは彼女ではなく彼だ。彼こそが真の怪物。一体どれほどの…）

「……師範代？」

「ああ、ゴメンゴメン。では、まずは《練》からいこうか……」



「うくん。あのウイングって奴、強そうだったなあ」

「当たり前よ。アレでも心源流師範代だからね。生半可な事じゃ名乗れないわさ。アンタらでもまだまだ軽くあしらわれる……かもしれないわね」

「まあ現時点で君らよりは間違いなく格上だよ。弟子を見るに、教え方も丁寧だ。かなり優秀な教師であり、念能力者だ」

「ふっふくん。それを育てたアタシはもつと優秀って事よ！ さあ、敬いなさい！」
「ププツ。敬えって……ババアの発言だよな」

また余計な事を言つてキルアがぶつ飛ばされる。今度は天井に突き刺さった。アホだなあ。最早恒例行事と化しているな。

◆

ホテルに滞在する間は割と自由にしてる。筋トレしたり、念修行したり、勉強したり、雑談したりだ。当然重力とかはかかったままだが、早くも慣れ始めたらしい。適応力が上がってきたな。試合では動きこそ鈍いものの、攻撃を予測して避けたり、ガードしたりして対処していた。攻撃も同じだ。念を使わない戦闘も慣れてきた様だな。

階層が上がって100階を超えた時、それぞれが個室をもらえた。後最短で9回も勝てば目的の金にも近づくだらう。だが、そろそろ対処が難しくなってくる。攻撃の速度についていけなくなってくるだろう。そこからどうするか見ものだな。大体150階以降と見ているが…。現在130階。日付は6月3日だ。日程的にはまだまだ余裕がある。ここからが正念場だな。

150階以降、予想通り苦戦し始めた。本来の動きだと楽勝だが、流石に20倍が枷

になる。まず攻撃が当たらない。そして向こうの攻撃は避けられない。当たったとしても大して効かないが、じわりじわりとポイントを取られて負けるパターンが増えてきた。世の中には万全で闘える事などあまり無いからいい経験になるだろう。それでもカウンターや相打ち、攻撃の瞬間を狙うなど、様々な工夫をしながら勝ったり負けたりを繰り返した。当然団子状態なので、同門対決も発生し、熾烈な闘いが起こっていた。

そうして様々な体術を経験するうち、防御の重要さや、相手を観察しながら対応する事、攻防の読みや足捌きなどの理解を深めていった。そして…

「よっしやー！ 一番のりだぜー！」

とうとうクリア者が出た。一抜けがキルア、次いでカルト。やはり暗殺者2人は体術への理解が高い。そして、ゴン。彼は試合以外は変身して過ごしていた為、凄まじい勢いで重力と低酸素に適応していった。身体も気の所為ではなく成長し、身長でキルアを2センチ程度抜かしていた。最終的にはスムーズに動けるようになり、無事にこの3人が同日に突破できた。

その記念にその場で重力と低酸素を解除してやったら、凄まじく喜んでいた。クラピ

カとレオリオは羨ましがっていたが、彼らも明日には突破出来そうだ。特にクラピカは所持金が5億を超える様にバレない程度に調整していた節があるし。

さて、200階への挑戦をするかどうかだが、ここから先は念能力者同士のバトルになると伝えたが、とりあえず覗いて見るそうさ。

付き添いでエレベーターに乗り、200階に到達する。すると：

ズウン：

…やはりいたか。これは「奴」のオーラ！ 前回会った時よりもより禍々しくなっている。私以外の3人は瞬時に戦闘態勢に移行する。

「…ツそこに居るのは誰だ！ 姿を現せッ！」

キルアが呼びかけると、受付嬢が出て来てフロアの説明を始める。だが、当然彼女じゃない。

しばらく待っていると、漸く姿を表した。

「ヒソカ!!」

「どうしてお前がここに!？」

「やあ、久しぶり♣? 別にボクがいても不思議じゃないだろ? ボクは戦闘が好きで、

ここは格闘の中心地だ♠? 君達こそどうしてここに?」

「しらじらしい。君こそ待つてたんだらう?」

「正解♠? 君達がようやくヨークシンから動いたからね?? 飛行船の行き先を先回り

したのさ♣? 見ないコもいるけど…全員君の弟子かい? 『壊れない男』アンブレイカブル」

「……そこまで調べているとはな。で? 対戦を希望か? 悪いが私は登録してなくて

ね」

「それは残念♠? 楽しめると思ったんだけどなあ…君は本当に興味が尽きないよ♠?

ボクもまだまだ調整中だね♣? で、気分転換につけてみたら…この短期間でよく

育つたものだねえ?」

「まあ、かなり鍛えたからな。カンタンにはやられない程度には。なんなら試してみる

か?」

「それはありがたいねえ?? で、誰が相手かな? 全員とやりたいケド、ボクもこの後予

定が入ってて時間があまり無いからねえ♣?」

「オレがやる!」

ゴンが名乗りをあげる。まあ因縁の相手だからな。そうなるだろう。

「ゴン、キミか?」では、ここで1回でも勝ったら相手してあげるよ♣? またね◆?」

ヒソカが立ち去っていく。しかし、奴から感じられる不穏な気配は…一体なんだろう。少なくとも、以前会った時よりも更に大きくレベルアップしている。にもかかわらず、あのバトルジャンキーがあまり闘いに積極的じゃないとは…。ここに至るまで仕合いの連絡もなかったのも不気味だ。 “調整” と言っていたが…今まで何をやっていただろう。

また、私の事も少なからず調べていた様だ。あの二つ名は当時の関係者と会長含むごく僅かしか知らない筈だが…。ヒソカの動向が気になるが、考えてもしょうがない。

「さあ、気を取り直して登録しよう」

結局、ゴン、キルアが登録を済ませた。カルトは極力念での戦闘は見せたくないらしく、今回は見送った。まあそれもアリだ。キルアは今回見送ると登録抹消らしいので登録していた。登録時に廊下ですれ違った3名の選手が登録後もこちらを見ていた。大

方カモだと思っっているのだろう。

ゴンとキルアは2人とも明後日から明々後日の期日で提出した。



翌日、クラピカとレオリオも190階をクリアした。クラピカは200階以降の戦闘に興味は示したが、自分の能力は極力隠しておきたいらしく、見送った。レオリオは参加をしてみるらしく、登録を済ませていた。

そして：試合の組み合わせが発表された。ゴンは次の日の6月18日、対戦相手はギド。キルアの試合が6月19日、対戦相手はリールベルトとなった。

さて：ようやく修行の成果が試されるな。初の全力解放の戦闘。結果は余りにも見えているが、どの様な動きをするか楽しみだ。ゴンに至ってはヒソカ戦も控えている。最悪死ぬ手前なら回復出来るし、本人もセルフ回復持ちだから何とかかなりそうだ。弟子

の成長を期待しておこう。

83、200階バトル

『さあ！ 本日は大注目の一戦です！ ここ数日、凄い勢いと奮闘で190階を突破したゴン選手!! 早くも200階のバトルに参戦!! 対するギド選手はここまで7戦して、5勝2敗とまずまずの成績を残しています!!』

「ゴンさんがんばれー!!」

ズシが叫ぶが、ゴンはリラックスしている。…やはりあのレベルじゃそうなるか。クラピカも既にゴンに大金をかけているようだしな。5億は貯まったはずだが、万が一を考えて更に増やしたいらしい。私も賭けているし、キルアも賭けている。多分ビスケもレオリオもそうだろう。ちゃっかりリベロも賭けてるしな。彼女にプレゼントを買いたいらしい。…ウチも大概自由だよな。

『始め!』

「ボウズ：初戦がオレでよかったな。オレは非力だから」「ふっ!!」「って、な、なんだ：！ そのオーラは!!」

「スキだらけだけど…いいの?」

「くっ!」【戦いのワルツ
闘円舞曲】!」

ギドから独楽が複数弾き出される。だが、複雑に動く独楽をゴンはいとも容易く躲いでいく。まあ、あの程度なら余裕だろう。最初は《円》をしていたが、後から《円》をしなくても躲す様になった。そして：充分躲せると判断したのか、本体に向かっている。しかし、ギドもそうはさせじと自分で回転し始める。

本体が激しく回転し、相手を寄せ付けない。【竜巻独楽】と言うらしい。目が回らないのは凄いな。そのまま【散弾独楽哀歌】ショットガンブルースという独楽の散弾を撃ち出してきたが、あっさり躲す。安易に防御しないのはポイントが高い。ヒットが能力の起点になる事も多いからな。

ゴンは右回転しながら最小の動きで躲し、そのまま回転を続ける。一本足でバレリーナのように回っているが、器用なものだな。バランス訓練が役に立ったか。そのままどん

どん加速してジャンプし…ギドにぶつかる！

ゴツ!!

非常に鈍い音がして、ギドが弾き飛ばされ、そのまま壁まで吹っ飛んで、壁に埋まった。瞬間、審判がKOを宣言する。

なるほど。回転には回転を、か。しかもインパクトの瞬間に拳をぶち込んでいく。こりやひとたまりもないな。死んではいけないが、しばらく復帰は無理だな。

多分ゴンなら急接近して右ストレートでぶっ飛ばしても同じ結果になったとは思いますが、相手の出方を待って、念攻撃がどんなものを体験したかったようだ。あまり参考にはならなかったようだ。

何はともあれ、安定の立ち回り。ヒソカ戦が心配だが、これならある程度は大丈夫だろう。ゴンが退場し、廊下で私と反省点を詰めていると、拍手が聞こえてヒソカがやってきた。

「うーん、文句の付けようもなく合格❖? この短期間で良く鍛えたものだね❖? 試

合日はキミが指定していいよ◆？ 連絡を楽しみに待つてるからね…??」

そう言って去っていった。相変わらず何を考えているかわからないヤツだ。ゴンも気合が入った様だ。オーラに如実に表れている。実際どうなるかは予想が付かないが、せめて無事である事を祈ろう。

レオリオは無事に試合が決まった。キルアの次の日だ。相手はサダソ。ま、問題ないだろう。



その日、私の警戒網に引っ掛かった奴らがいた。ズシにちよっかいをかけるつもりか。また姑息なマネを…。まあいい。行くか。

「やあ。ズシ君。こんな所でどうしたのかな？」

「あ、カームさん！ この方達が師範代が呼んでるって教えてくれたっす！」

「ほう…。ズシ。ウイングさんはさつきホテルにいたよ。君を探していたから行くがいい。私はこの人達にお礼を言っておく」

「あ、そうなんですね！ ありがとうございます！ お二人ともありがとうございます！」

ズシをとりあえず離す。さて…

「これはこれは…。明日試合があるルールベルトさんとサダソさんじゃないか。お二人揃って何をしていたのかな？」

「い、いや…。オレ達は親切で案内してただけだぞ！」

「その割にはズシ君に念攻撃を仕掛ける直前に見えたが？ 姑息なマネはやめて貰いたいものだな。君達の対戦相手である彼等は、私の弟子だ。彼等には気持ち良く闘って欲しくてねえ…。なに、彼等も君達を殺すまではせんだらう。心配しなくても気持ち良く闘ってくればそれでいい。さすれば私も君達に害を加える様な事はせん。ただし、再び姑息なマネをしようとしたり、逃げ出そうとしたりしたら…」

私は《円》の《隠》を解く。

「ごらんの通り、私には直ぐに分かる。結果は言わなくていいだろう？ 頑張つて闘つてくれたまえ。期待しているよ」

それだけ伝えると、私は踵を返して戻っていく。これで多分安心だな。



「ヒューツ、ヒューツ…。な、何だ…!? あの化け物は!?!」

「と、とんでもない奴に目をつけられちまった…! 今すぐにも逃げ出したいが…やるしか無さそうだな…!」

「畜生!! 嵌められたか!! ……仕方ない。正々堂々と勝負するしかないか…!」

「だが…ギドが病院送りになった連中だぜ!?! どうしろってんだよ!!」

「まだ、ノールールで奴を相手にするよりはマシだ……。まだまだオレ達も先が無いわけじゃない。無事に終われる様に全力を尽くそうか……」



次の日、キルアの対戦だ。リールベルトと言ったか。車椅子の青年だ。彼はまず爆発的な移動で後方に下がる。【^{オーラバースト}爆発的推進】と言うらしい。……まあ、悪くは無いが……それだけ？

その後、椅子に装着していた鞭を2つ取り出して、振り回し始める。更に彼は鞭に電撃を流してより近づけない様にする。なるほど。鞭だけじゃ有効打にならないと判断したか。ただ……

「ヒャーツハツハツ！ これが【^{ソング}双頭の蛇による二重奏】と【^{サンダー}双頭の蛇の正体】のコンボだ！ この状態では手出し出来まい！ このまま端に追い詰めて狩ってやる！」

多頭の蛇には嫌な思い出が多い。黄金の木の實を護ってたアイツとか。本当に強かった。他にも蛇系は強い奴や厄介な奴が多かった。おかげで爬虫類、特に蛇系と蟲は未だに大嫌いだ。思い出したらムカムカしてきた。逆に言えば、鞭を振り回しているだけで偉そうに双頭の蛇を名乗るなど言いたい。まあ、これはキルアの闘いだ。彼がどう処すか見ておこう。

キルアはニヤリと笑って：おつ。バレない様に帯電した？　そしてスタスタとリールベルトに向かって歩き出した。もう射程圏内だ。すると：

『おおっとー。キルア選手の姿が消えたーッ!!　実況席からは彼の姿が見えない!!　姿が一瞬鞭の中に見えますが、まさか全部避けてるのかーッ!?　困惑しながら鞭を振り回すリールベルト選手!　しかし当たらないッ!!　何という身体能力かーッ!!』

なるほどね。彼の速さは弟子内で右に出る者はいない。ましてや「あの状態」になったら尚更だ。あれぐらいは当然出来るだろう。細かいステップと最小の動きだけで全ての鞭を余裕をもって躲している。その姿が瞬間瞬間で残像となつて現れるのだ。自分で雷を使ってあそこまで細かい動きを制御出来るなら充分、及第点だな。彼も能力の

試運転、といったところか。

ある程度躲しきつた後、キルアはリールベルトの正面に立ち、肩に手を触れて電撃を瞬時に流す。敢えなくリールベルトは気絶し、審判からK Oを宣告された。

「毒や電撃を使うんなら、自分も使われた時の対策ぐらいは持つてねーとな。つて聞こえてねーか」

『勝者、キルア!!』

うん……。強いね……。これ、普通有能力者つて勝てるの？ 普通がどの辺かは分からないけど、少なくともヒソカクラスじゃないと対処出来なくない？

この速さは会長の百式を想定したものだと言つてたな。もしかしたら：彼なら躲せる様になるかな？ いや、会長のは時間を圧縮した様な中で繰り出される速さだからなあ。ただ、雷速を極めれば分からないな。全く、優秀な弟子達だな。私達も稼がせてもらったしな。

…ゴンはレオリオの試合の次の日、6月21日にヒソカと対戦を連絡してオツケーを貰ったようだ。



6月20日、レオリオの試合の日だ。初の念での対戦という事で若干の緊張が見えるが、オーラを見ればヤル気に満ちている。相手のサダソは左腕が無く、目にもダメージを負っている様に見える。これまでの対戦相手は、ここに来た時に念の「洗礼」を受けてそうなった様だ。哀れと言えば哀れだが、念能力を身に付けたならいくらでも生きていく術はある。ここに拘らなくてもいいのにな…。或いは自分も同じ様に別の奴にしてやりたいという歪んだ感情がそうさせるのか…。

試合が始まった。ズシに攻撃しようとした時チラツと見えたが、左腕から手をかたどったオーラが出ているな。【見えざる手^{ブラックハンド}】と言うらしいが、あんなに見え見えで何とか

ならないものだろうか。見えざる手ならせめて《隠》ぐらいしてほしい。アレじゃ狙いがバレバレだ。レオリオは困惑してるな。逆に何か罫が無いか《凝》で探っている様だ。まあ正しいが、私やビスケ、会長やクラピカの《隠》と比べると可哀想だ。

それを見せ札にサダソはレオリオに体術で迫るが、悉く躲されてゆく。190階の闘士の攻撃を20倍重力下で対処出来るレオリオには余裕だ。

そして：レオリオが手からオーラを放出し、相手に浸透させて診察を開始する。サダソはオーラを分け与えられた様な気分になり、困惑している。

あーあ。喰らっちゃったか……。もうレオリオの独壇場だ。しばらく解析し：十分に相手を把握したら身体に手を当て「細胞干渉」セルリカバリーが発動する！　そもそもこれは細胞に干渉する能力だ。つまり：

『あーつと!!　攻勢を強めていたはずのサダソ選手！　謎の失神KO!!　レオリオ選手、勝利です！　あつ、レオリオ選手がサダソ選手の気付けを行なっています！　：復活した様です!!　素晴らしい試合でした！　2人の闘士に拍手を!!』

えっぐいなあ……。多分だが、脳細胞への血液供給をほんの少し減らしたな？ それこそほんの少しだけ、毛細含む脳への血管を窄めたのだ。それだけで人は失神してしまう。もしかして、弟子内で一番恐ろしい可能性を秘めた能力かもしれない。しかも、まだまだこの能力は進化しそうだし……。やっぱりドクターは怖い。アンソニーのトラウマが蘇りそうだ。

ただ、レオリオのいい所はどこまでもアツく、どこまでも善人だという点だ。

試合後、彼が言っていた。

「試しにやってみたが……オレにはやっぱり性に合わねーぜ。今後は極力能力を使った戦闘は控える。むしろ制約にしてもいい。今後は治す専門としての能力でいくわ。アイツの目も以前よりは見えるようになったらろーしな」

と言っていた。それもいい。それでいい。ヒーラーとして活躍出来るならそれはそれで重宝されるだろうし、制約を付けたならば更に効果上がる筈だからな。彼には最低限の体術があるし、“浸透勁”を使えれば戦闘でもそんなに不便ではない筈だ。今度じっくり教えてやろう。

◆

さて…いよいよ、か。流石のゴンも緊張を隠せないようだ。ヒソカね…。彼が一体何を考えているかが分かれればいいが…。ゴンにも、無理だけはするなど伝えて、彼は頷き、闘技場へと続く廊下に消えて行った。気合は充分。適度な緊張はあるが、変な力みもない。動きも先日の試合で慣らしている。つまり、今の彼はベストの状態だ。

ヒソカよ…。何を考えているかは分からないが、あまり原作私の主人公の弟を舐めない方がいいぞ。

◆

『ようやく姿を現した死神!! ヒソカ選手の登場だア———!! 休みがちの死

神、奇術師ヒソカ！ 以前のカストロ選手との闘いを覚えている観客も多い事でしょう！！ 正に！ 圧倒的な力量とその名に恥じぬ奇術を魅せてくれたヒソカ選手！ 今宵は新たな犠牲者が増えてしまうのか！！ 現在、戦績は9勝3敗7KO！！ 今最もフロアマスターに近い男と言えるでしょう！！ 対するは、今ノリにノッているルーキー！！ ゴン選手！！ ギド選手を圧倒的な力量でKOしました！ さあ、いよいよ始まります!!!』

「……………いい目だ♣？ そしてそのオーラも……………？ キミの師匠は指導者としても超一流のようだね◆？」

「……………」

「ふふ……………さあ、始めよう……………かかっておいで??」

……………奴のこの禍々しいオーラは一体何なんだ？ 既に人間が出せる様な種類じゃないぞ……。潜在オーラも底知れない。人類最高峰を……………超えはじめてないか？ アレと対峙しただけで、弱い能力者は気絶しかねない。一体どうやって……。臆する事無く対面できるゴンも流石だ。近くに座っていたリベロも流石に「旦那……………アレ、ゴン君大丈夫ですか？」と心配していたが、ゴンもそんなヤワな鍛え方はしていない。大丈夫と信じるし

か無い。

ゴンが仕掛ける！ 並大抵のスピードでは無い。だが、相手はヒソカ。ゴンの右ストリートを余裕をもつてガードする。そして、激しい攻防が続く。しかし…やはりヒソカの方が体術は数段上手！ 彼はその場から動かず、ゴンの対応をしている。そのうち、ヒソカの蹴りを喰らって一旦離れるも、審判からクリーンヒットの宣告を貰ってしま

う。
ヒソカは余裕の表情だ。

「くくく…中々やるね？ でもまだまだ♣？ ボクはここから一步も動いてないからねえ…♠？」

「…分かつてる！ くそー。じゃあ、これならどうだ！ さい、しよは、グー!!」

キイイイーン…

凄まじいオーラが収束しだす！ 流石のヒソカも驚いた様だ。大体4000オーラぐらい集まつてるからな…。だが、どう当てる？

「なるほど◆? 必殺技か?? 凄まじいポテンシャル…でもボクに当てられるかな?」

ゴンは構わずその状態で接近する。ヒソカも躲してカウンターの準備をするが…。ゴンが射程の直前で止まり、

「ジャンケン! グー!!!」

ドゴン!!!

彼は地面に向かつてグーを放った!! クレーターが生まれ、ヒソカも流石に回避する。アッパー気味に放った為、周囲には武闘場の破片が飛び散り、ヒソカはその対応に追われるが…その隙を突いて瞬時に《絶》をしたゴンが、破片に隠れて飛び上がり、ヒソカの顔面に相当念を込めたパンチをお見舞いした!

一瞬の静寂の後、審判がクリティカルヒットをヒソカに宣告する!

ゴンはヒソカに歩いて近づき、例の試験のナンバープレートを突き返す。ヒソカもそれを受け取り、また両者は離れた。

「ゴン…?! キミ、とつてもいいね！ もう一人前の獲物としてボクも認めよう◆？
だが、まだまだ実戦不足◆？ それをこれから教えてあげるよ◆？」

ザワツ…

ヒソカのオーラが更に膨れ上がる！ なんだありや…。完全に想定外だ。ますます訳が分からない…。最悪割って入るか…？ だが、ヒソカはまだゴンを殺す気は無いようだ。もう少し様子を見よう。

瞬間、ゴンに急接近したヒソカが肘打ちを喰らわせる！ 瞬時に移動して背後から攻撃！ 速い！ 全力のキルアを上回ってるぞ！ そして、くつつけたオーラを引き戻し、両手で叩きつける！ ギンも対応出来てない！

「クリーンヒット、クリティカルヒット！ プラスポイント！ 4—3!!」

審判が宣告する。妥当だ。寧ろ、早く終わらせられる様にしてくれてる。いい審判だ。ゴンもヒソカの能力を大体分かったようだが、分かかっていても対処が難しいのがこの能力だ。

更に引き寄せられ、なすすべなく叩きつけられる！ が、ゴンもただやられてるわけではない。引き寄せられた瞬間に、密かにジャン拳を溜め、喰らった直後にパーで放出する！ ヒソカは気付いていて、念弾を弾くが、叩きつけられたゴンが反動で彼に向かって蹴りを入れる！ その蹴りを脇腹に貰ったヒソカは後ろに下がり、審判が両者にポイントを入れる。これで5—4だ。

だが：その直後に大小の石の破片が飛んで来る！ ジャン拳の時に弾いた破片だ。予め付けといて、《隠》で隠し、今の叩きつけで移していた。

ゴンはそれでも幾つか砕いたが、複数の破片を喰らってしまった。クリティカルで8—4だ。：アレは私に使った戦法だな。あの時はアレで更に身動きを封じてきたが、まだそこまでする気はない様だ。ちよつとホツとした。

「分かっただかい？ ボクの能力♣？ 【伸縮自在の愛】^{ハンジーガム}って言うんだけどね◆？ 便利だ

ろう?」

「くっ…! オーラがゴムみたいに伸び縮みしてる…! それにくっついて離れない…

!!」

「正解♣? よく出来ました?! さあ、後2ポイントだよ? どうする? 逃げ回るか

い?」

「どうせ引き寄せられるなら…こっちから行く!」

シユオオオオ…

アレを使うか…! 確かに今使う場面だ。頭在オーラが極端に下がり始める。ヒソカも訝しがっているが、明らかに若干のバンプアップが見て取れる。ヒソカから受けた裂傷や打撲も恐ろしい勢いで回復してゆく。

「なるほど…奥の手か◆? じゃあ試してみようか♣? こっちにおいで?!」

ヒソカが引つ張るが、ゴンは強く抵抗する。一瞬均衡が起こり、次の瞬間には勢いよく飛び出す! ヒソカのゴムの反動すら利用し、目にも止まらぬスピードで接近する!

ヒソカはゴンが接近する間、何故か恍惚の表情を浮かべている。そのままゴンのラッシュを無抵抗で顔面に何発も貰う。普通はアレでKOだ。だが、そこはヒソカ。喰らいながらもゴムを引つ張ってカウンターを無理矢理ねじ込み、ゴンを吹っ飛ばすと、ゴムごと地面に叩きつける！ ゴンもすぐ立ち上がるが…

「両者クリティカルヒット！ プラスポイント！ 10—6!!」

『試合終了オ——!! 勝者、ヒソカ選手！ TKOです!! 言葉に出来ない程の素晴らしい闘いでした!! ゴン選手も奮闘しましたが、惜しくも届きませんでした!!』

「ゴン、さっきも言ったケド、キミはとつてもいいね◆？ もつともつと積み上げておいで◆？ そしたら今度はルール無しの世界で闘ろう◆？」

負けた事でその場で立ち尽くすゴンに、ヒソカはそう告げて立ち去る。まだヒソカも全然本気じゃ無かった。以前の彼なら善戦ぐらいはした筈だ。少なくとも、ここまで余

裕は無かったと思う。

しかも不可解なのは、最後のヒソカ…あの超絶ラツシュをモロに喰らっても平気だったのはまだギリギリ納得出来る。オーラ差という奴だ。それでも並大抵の攻撃では無かった。ダメージは少なからずあつたはず。それも今治っている。血で見えづらいが、私には分かる。新しい能力か？ いや…しかし…。

仕方ない。直接会ってみるか。

「ヒソカ」

「やあ?? キミの方から来てくれるとはねえ…? なんだい?」

「君の事が気になってね。いてもたつてもいられなくなつたのさ」

「ふふ…? それはそれは? とつても嬉しいねえ…? 正に相思相愛じゃないか??」

「そうだな。なんなら今、闘るか?」

「ああっ! 何て魅力的な提案!! 思わず興奮して勃つちやうじゃないか…? でもねえ…この先、大規模なショーを準備中なんだ? キミにはそこに是非招待したいか

ら、もうちょっと待つてくれるかなあ？」

「……まさか、オークションじゃあるまいな」

「まさかあ◆？ もっと刺激的なコトさ◆？ 心配しなくても、キミはオークションの時は好きにしていよいよ◆？ ボクもアレにはあんまり興味が無くなっちゃったからね◆？ 君が食べ残したら美味しく頂こうかな？」

「……何を企んでいる？」

「さあ？ 何だろうねえ……◆？ 楽しみにしてなよ◆？ 開演日は近いからね……◆？」

そう告げると、彼はヒールの音を立てて去っていった。彼はウソつきだ。あまり真に受けない方がいいだろうが……。大規模なショー？ しかもオークションじゃない？ 幻影旅団の団長すら眼中にあまり無いような彼に激しい違和感を抱く。アレは……本当にヒソカか？

いずれにせよ、大惨事になる前に彼とは決着を付けなければならぬようだ。私も……その時は覚悟を決めるしかないか。

84、蠢動

——ヒソカは語らない

ヒソカは過去を語らない。過去にあんまり興味がないからだ。

ヒソカは自分以外の誰にも属さない。自分が最強だと理解しているからだ。

だが、そのアイデンティティは危機を迎えた。

あの日。初めて完膚なきまでに敗北した。長いこと狙った獲物を狩り続けていたが、そんな事は今まで一度も無かった。そして、その時の相手が全く本気でない事も正しく

理解した。

獲物だった筈の奴に気を遣われ、優しく手加減されたのだ。

ヒソカは麻痺毒で全身が痺れたまま、初めての屈辱という感情を楽しんでいた。そして、今の自分ではどうシミュレートしても本気の彼には接戦すら持ち込めないとも。

——新しい力が要る

——圧倒的な力が

彼に勝つ為には、自分を進化させるしかない。そのビジョンはうつすらとだが見え始めた。彼の事をもっと知らなければならぬ。彼の力がどこまでの物かを知っておかなければ、勝つ事は不可能だ。ヒソカの頭の中では既に旅団など眼中になかった。最大最高の、究極のオモチャが見つかったからだ。

これは恋だ。

ヒソカは恋をしていた。

3日目の夜。ヒソカの恋慕が呼び寄せたのか、転がっているヒソカに「悪魔」がやって来て語りかける。

力が欲しければくれてやる。その代わり我が僕になれ、と。だがヒソカは笑いながら拒否する。ヒソカは自分以外の誰にも属さないからだ。

次に「悪魔」は手を組もう、と唆す。それにヒソカは条件付きで許可する。ボクは誰の指示も受けない。力もいらぬ。彼は自分が殺す、と。その代わり協力はしてやるから情報を渡せ、と。

——取り引き成立だな。と「悪魔」は嗤う。ヒソカも嗤う。最終的に行きつく先は破滅だろう。そんな事は理解つてる。だが、そんな事はどうでもいい。

彼をよく知り、愛し合^{殺し合}った上で殺す。これ程の極上の快樂があるだろうか。それが実現するならば。むしろ破滅すら愉しめる。

ヒソカは嗤う。これから始まるであろう究極の快樂への旅路に。「悪魔」も嗤う。破壊のラツパが近い内に鳴らされる事に。

——その日、新たな一匹の悪魔が産声をあげた。



「よくやった。あのヒソカを相手によくあそこまで闘えたものだ。流石はゴンだな」

「……でも、遠かった。ヒソカは遊んでたよ」

「並の使い手ならば、アレでも保たない筈だ。その点は修行の成果が出たと考えた方がいいだろう。気にするなどは言えないが、生き延びただけでも充分だ。あと、クラピカ、安心しろ。少なくともあのヒソカよりは旅団は厄介じゃない筈だ。近い実力はあるだ

ろうし、能力も未知数だがな」

「欠片も安心出来ない情報をありがとう。私もまだまだ修行が足りない様だ。通常の戦闘では勝ち目が薄い。上手く能力を差し込んでいくしか無いか」

「肉体性能は旅団の方が近い筈だ。あのヒソカは異常だ。まあ修行不足は同意だけどな。後は念での戦闘に慣れろと言うしか無い。君もリベロとの戦闘や、ここまでの闘いで成長している。あまり自分を下に見る事もないだろう。さて、ゴン。何はともあれ、目標は達成したな。レオリオも勉強があるだろうしな。クラピカも金額の目処はついただろう？ これからだか？ どうする？」

「私は当然、アンダーソンに就職をする。早ければ早いほどいいだろう」

「オレは…目的も終わったし、クラピカを見届けたら一旦くじら島に帰ろうかな。ミトさんにも会いたいし。みんなもおいでよ。紹介したいからさ」



結局、全員でアンダーソンに行つてからくじら島に向かう事になった。これで天空闘

技場とはおさらばだ。見送りにズシとウイングさんが来てくれた。彼等とも短い間しか交流出来なかつたのは残念だったが、また会えるといいな。

船ではまたオーラ技術主体の訓練だ。何しろ時間が無い。少しでも技術を向上させる必要がある。応用技の訓練や《発》の改良、スムーズな《流》など、やる事は多い。加えて基礎オーラの向上だ。どれだけやってもやりすぎではないだろう。弟子達はヨークシンに着く頃には遂に《練》の8時間持続を達成した。つまり潜在オーラが少なくとも約50000は超えたという事だ。本来ならばここで終わりにしてもいい。何せ、もう彼等に敵う奴の方が少ないからだ。だが、私はヒソカが気になっていた。

あのレベルが本気で立ち塞がったらまだひとたまりも無い。キメラアントの上の方もそうだ。だから極限まで行かなくとも、抵抗は出来るぐらいにはしておきたい。

やはり、念での実戦訓練は急務だ。天空闘技場に残つてもいいが、今のところあそこには満足出来るレベルの者が居ない。ヒソカは別として。そのヒソカも、もういないだろう。その点、クラピカとゴンは同等や格上の相手と闘えて幸運だったと言える。…そろそろ私も相手をしなければならぬ。

そうそう。ビスケも以前からこつそり鍛え始めている。今、50倍の重力と低酸素で訓練中だ。まだまだ飽くなき強さを求める彼女は、やはり真の武闘家だと言える。見習わなくては。ただ、私はこれ以上行くと自分の身体が完全に化け物スタイルになりそう

なので悩みどころではある。オーラ技術も完全に頭打ちになつてゐるしな…。よつて、
「聖光氣」の習熟がメイン修行である。まだまだ「聖光氣」も奥が深い。オーラと同等のレベルで扱える様に少しでも訓練しておきたい。



「待たせたな。ここに5億を持ってきた。確認をお願いしたい」

現在、アンダーソンの家の応接間でジョンと対面している。仲間は私の別邸で寛いでいる。日付は7月15日。約束より20日は早い。

「……2ヶ月と少しで揃えて来たか。中々優秀じゃないか。確かに確認出来た。リベロ！ カームの手助けや援助等は一切無かつたな？」

「はい。寧ろ難易度を意味不明なレベルで引き上げてました」

「ははっ。カームらしいな…。ではクラピカ。これをもって、君を正式なアンダーソンの構成員の一員として認めよう！ これより我らは家族だ。裏切りや命令違反等は一切許されない！ その代わり、我々も君を家族の一員として扱おう。いいな？」

「分かった。これからは貴方に忠誠を誓おう。ドンIIアンダーソン」

「さて…。君は試験も含めて早くもアンダーソンに貢献した。だから私も君に報酬を与えなければならぬ。アルバート、アレを」

当代コンシリエーレのアルバートIIルチアーノさんだ。彼が、ある包みを手に持つてくる。

「コレは…」

「開けてみる」

困惑しているクラピカが中を開けてみると…緋の眼が入ったガラスの容器が入っていた。

「まさか…！ これは…」

「言つただろう。我々は家族だ。よつて、君にそれを譲ろう。家族に貢献する者に対しては、私も協力は惜しまない。新しく入つた君に対しても当然それは適用される。：私は君には期待している。だからこそ、私の期待を裏切るなよ？ クラピカ」

「ああ……ああ……ありがとう……ドン＝アンダーソン」

クラピカがジョンの前に跪き、彼の手の甲にキスをする。古いマフィアのしきたりだ。これはドンに忠誠を誓うという意味がある。：プライドの高い彼が自らこれを行つたという事は、よつほど感極まつたらしい。ある意味貴重な場面ではある。しかし、それもそうか。長らく探していたものが一部とはいえ見つかつたのだから。私とりベロは邪魔しないようにそつと退出する。後は彼等で今後の事を詰めるだろうから。

30分程して、アルバートさんが先に出てきた。彼はとりあえず自分の役割は終わったので退出したとの事。彼は如何にもなメガネでオールバックのインテリヤクザで、ジョセフの遠い子孫にあたる。灰色の高いスーツを着こなした40代半ばで、これまた強力な念使いだ。ただ、見た目に反して割とフランクなおつちやんなので、私も以前はよく彼と話していた。だが、決める所は決める男で、ジョンの信頼も高い。

私は彼とりベロとで、食堂でお菓子をつまみながら雑談していた。緩い所もある様に

見えるが、やる時はやるヤツらだから頼もしい。しばらくすると、ジョンとクラピカが食堂に姿を現した。打ち合わせは済んだ様だ。彼等も非常に打ち解けている。ジョンはやはり当代のドンなだけに、人心掌握が非常に上手い。あの気難しい神経質で理屈屋のクラピカの性格を把握し、打ち解けるとは中々できるものではない。

クラピカはしばらくアンダーソンの仕事をしながら、念戦闘の実戦訓練をさせて貰える様だ。良かったな。ここは人材が豊富だ。対戦相手には事欠かないだろう。また、クラピカの頭脳もアンダーソンの役に立つ筈だ。来る2ヶ月後の闘いに向けてしっかりと準備して欲しい。

その後、待機していた仲間達を呼び、食事会が行われた。皆談笑しながら穏やかに食事を共にする。マフィアの中枢での食事会とは思えない様な穏やかな光景だ。ビスケとカルトがジョンにやたらとアピールしていたが、ジョンは微笑まじげにこちらを見ながら揶揄ってくれた。：私は身を固める気はないんだがなあ。

食事が済むと、弟子の成果を見たいというジョンの要望で、中庭の修練場に集まった。こうして口実をつけているが、実際は私の要望だ。アンダーソン側は、リベロとカルトがタッグだ。こういう時はいつも駆り出されるらしく、なんか哀れにも思えたが、その

分危険手当が出るらしいのと、勝ったら更にボーナスというジョンの言葉により、彼らのヤル気は十分だ。

離れて見ていたアルバートさんが「…ま、ウチの負けでしょうが、意地は見せて欲しいものです」とボソツと言っていた。まだ対戦相手が決まってすらいのにだ。彼はカンと予測能力が高いからまず外さない。…彼等には悪いがボーナスは無しだな。だが、問題は結果ではなく過程だ。

対するはキルアとレオリオコンビ。天空闘技場で不完全燃焼だった様なので、私が指名した。オーラの互角に見えるが、経験としては遥かに格上だ。更にタッグマッチという事で、いい経験になるだろう。ルールは殺しは無し。戦闘不能かまいったで終了だ。お互いに20メートル離れてからスタートする。

まずはキルアが帯電して飛び出す。遠い距離を一瞬で詰めるが、カルロが壁になる。その間、リベロが念弾を撃ち出すが、雷の反応で悉く躲す。接敵して、まずはカルロを倒す事に決めた様だ。電気を纏ったキルアの連撃を成す術なく喰らうカルロ。電撃で

痺れて反撃も出来ない。遂に膝をついてしまう。∴カルロもそんなに弱くは無い。寧ろタンクとしては十分機能出来る男だ。今回は相手が悪かった。そんなカルロを抜かしてリベロに迫るキルア。リベロも念弾を打ち出したり、蹴ったりするがやはり当たらない。後方から近づくレオリオは蹴った念弾を一発貫い、リベロにイエローカードを宣告されたが、手のダメージは反対の手で回復していた。レオリオはカルロに迫り着き、痺れて動きの悪い彼を抑え込んで気絶させる。カルロはせめてもの抵抗でレオリオの足腰にオーラで象った肉を作り出して覆い、レオリオの足止め成功した。彼の能力の応用だ。本人は「入れ替わり他人の人生」は戦闘用じゃないと言っていたが、アレは奥の手みたいなものだろう。気絶しても能力が解除されないのは流石の一言だ。

一方のキルアはいよいよリベロに迫り、同じ様に連撃を仕掛ける。リベロも必死に蹴りやガードで抵抗するが、速さ負けして同じように貫つてしまう。このまま勝負が決まるか、と思つた時、リベロが喰らいながらオフサイドを宣告し、キルアの動きが止まる。

「がふっ∴。随分とハデにやってくれたな∴。キルア、オフサイドでPKだ」

彼の『奥の手』が発動する！ これは彼が仲間と共闘する時限定の能力で、仲間や念弾すら抜かれて本体が5発以上のダメージを貰った時に、相手にオフサイドを宣告する

事で強制的にPKが発動する能力だ。当然、両腕と手からの《発》も封じられる。リベロが後方に一気に10メートル近く離れ、そこからボールを5発次々と蹴り出す！ キルアの場合は手以外からの帯電も可能だが、その場から動けない事もあり、流石に避けられずに辛うじて肩等でガードした。しかしかなりのダメージを負ってしまふ。アレは折れたな？ しかし、次の瞬間後方からレオリオのオーラが飛んできて、キルアを治癒する！ 【細胞干渉^{セルリカバリー}】だ。骨折が見る間に回復している。中々の治癒力！ そして、キルアがダメージを負ったら次々と回復させる。レオリオが近づく程に治癒力が増す為、這ってきてほぼ真後ろに控えている。キルアは急所をかううじてガードしながら、その場で回復を繰り返す。その間、兜と手甲を具現化し、充電している様だ。

そして、5発のPKが終わり、キルアは再び接近すると上空に飛び上がり、今度は溜めた電気を一気に落下させる！ 【落雷^{ナルカミ}】と言うらしい。さすがのリベロも大ダメージを喰らった様で、痺れとダメージで動けない所を、落ちて来たキルアの手刀を喰らい、敢えなく気絶した。



「いや、見事なまでに負けちまったな！ 『奥の手』まで使ったのに負けちまうとは参ったぜ」

「お前はまだいいだろ。俺なんか今回全くいいトコ無かったぜ」

レオリオが全員回復させ、反省会が始まる。中々見応えのある闘いだった。カルロは嘆いているが、仕方ない部分もある。相性が悪かった。

「いや…今回、アレを喰らった時は正直ヤバかった…。レオリオがいたから何とかなかった様なもんだ。それに、カルロのおっさんもオレの能力がなきや厳しい相手だったと思うぜ？」

「ものすげえ威力と速さだったな…。それにあの足止めが付くとか…ホントによく勝ったもんだよな。天空闘技場の奴らなら、なす術なく終わっちまうぜ」

「慰めはいらんよ。お前さんらは強かった。俺たちもまだまだ修行が足らんという事だ」

カルロがそう締めくくる。まあその通りだが、弟子もそろそろプロの上位ハンター下位ぐらいの実力はあるからそこまで落ち込む事も無いだろう。弟子達の成果にジョン

も驚いていた。

この日はこの後私の別邸でクラピカの送別会をやり、次の日からクラピカ除く全員で、くじら島へと出発した。



「ミトさーん！」

「ゴン！　そして、お客さんも！」

「ただいま、ミトさん」

「おかえりなさい！　連絡貰ったから良かったものの：電話貰ってすぐとは思わなかったわ。まだ何も用意してないわよ」

「いいよ、テキトーで」

「そんな訳にはいかないでしょ!!　今準備するから待ってなさい！　お友達の皆様さんも、はるばるここまでようこそ。ゆっくりしてってくださいね」

.....

我々はゴンの実家で歓迎を受けた後、ゴンにくじら島を案内される。彼の親友というコンがくれた魚をみんなで焼いて食べ、くじら島唯一の旅館に宿泊する。キルアはゴンと家でそのままお泊まりするようだ。流石に我々全員では迷惑だからな。

次の日、ゴン達と合流したが、ゴンは不思議な箱を持つてきた。…ジンからのハンターになったら渡して欲しいというシロモノだ。これがジンが残した手掛かりだな。彼は念で開ける事は分かった様だが、律儀に合流するまで待つていたらしい。なんでも、私に義理を感じているようだ。そんな事は気にしなくてもいいのに。…ありがたい事だ。

ゴンがみんなの前で箱を持つたまま《練》をすると…箱がバラバラになって分解し、中からカセットテープとメモリーカードと指輪が出てきた。コレが…グリードアイランドの指輪とセーブデータか。箱の素材には神字がびつしり書いてあった。そして、カセットテープ。ジンのメッセージだな。マイケルのと似た様な物だが、機器に時代の変化を感じるな。

カセットテープを聞くときは席を外そうか？ と問いかけたが、ゴンはみんなで聞いてほしいらしい。なんでも、みんなに聞いてもらって意見が欲しいとの事。それならばと全員でゴンの部屋に移動する。

デッキを用意して、ダビングの準備をキルアが提案したが、私が止めた。無駄だからだ。カセットにはうつすと、しかし強い念が込められている。《擬》でも見えない程度だが、私にはわかる。恐らく聞き終わったら何らかの方法でオーラが顕在化し、音声は消滅するだろう。条件付きの発動タイプ。操作系だな。ジンさんも本当に器用だ。つまり、これを聞けるのは一度だけだ。

多分私なら止められるが、ジンさんもそれは望まないだろう。

ゴン達にその事を伝えると、感心していた。念の可能性、というか利便性にだ。だからこそ、ジンは慎重に音声を残した。マイケルもそうだ。声だけで相手を解析する能力もあるからな。なんなら呪いをかける事も可能だろうし。

そんなこんなで準備が整い、ゴンが再生ボタンを押す。

『……………よお、ゴン。やっぱりお前もハンターになっちゃったか』

ジンさんの声が再生される。全員静かにジンさんの話を聞き入る。…何というか…やっぱりあの人はひねくれてるといえるか…。まあそうだからこそ、あの人なんだろう。

『捕まえてみるよ。お前もハンターなんだろう？』

彼の声は一旦止まる。しかし、彼はまだそこにいる。ゴンも気付いている様で、テープを止めようとしたキルアを止めた。

しばらく待つと、彼の声が再び聞こえだす。

『……………あ——。一つ言い忘れたぜ。お前の母親についてだ。知りたければこのまま聞いてくれ。別にいいならここで止める。一分待つ』

ゴンはテープを止めようとした。実際にストップボタンを軽く触れた。当たり前だが誰もゴンを止めはしない。だが…もう二度と聞けないという私の言葉を思い出したのか、葛藤しているようだ。そして、遂にボタンから手を離れた。聞く事にしたようだ。

『…………お前の母親は、オレが言うのもなんだが…何というか…ちよつと変わつてな。お前を産んでしばらくしたらどつか遠い、別の場所に行つちまつた。…死んだわけじゃねーぜ？ アイツはカンタンに死ぬようなタマじゃねえ。ただ、オレもアイツを探している。それほど遠い場所だ。お前がどうするかは任せるが、気になるなら探してみるといい。ま、まずはオレを捕まえてからだな。名前だけは伝えておく。…イヴリス、と言う。それがお前の母親の名だ』

今度こそ、完全に音声は沈黙した。すると、テープ自体が自動で止まり、そのまま巻き戻して上書き録音を始めた。完全に上書きが完了して、テープは今度こそ完全に沈黙した。

「…………オレの母親はやつぱりミトさんだけだよ」

「ゴン…。いいのか？」

「うん。ジンは探すけど…。母親はいいや。今まで育ててくれたミトさん以外を母親とは思えないし」

「そつか…………」

「それよりも、他の二つのも見てみようよ！ 指輪はともかく、コレ、何だろうね？」

「うん？ 知らねーの？ これ、ジョイステのメモリーカードじゃん」

「ジョイステ…？」

「ああ。ゲーム機の事だな。正式にはジョイステーション。割と有名なハードだ。オレも遊んだ事があるぜ。ハードさえありや、どんなゲームが入ってるかわかるんじゃないか？」

「よし！ 早速調べてみようぜ！」

「??？」

ゲームをやった事のないゴンとビスケとカルトが困惑してる中、レオリオとキルアが主導で調べ始める。私は持つてるが、どのように調べるかを見てみよう。まずはゲーム機をネット通販で購入した。届くまでの3日間はのんびりと過ごす。その間、ビスケやカルトと釣りをしたり（ゴンに穴場を教えてもらった）、森でキャンプをしたりした。こんな休日もある。悪いはない。ゴン達ものんびり羽を伸ばしていた。レオリオは旅館にこもって、私が貸した参考書ですつと勉強してた。感心、感心。

3日後、遂にジョイステが届き、メモリーカードの内容を調べる。中身は全てグリーンドアイランドだ。ネットで早速調べるも、普通に検索してもゲームについては出てこな

い。ネットカフェに入り、ハンターライセンスを使って調べてみると、1987年に100本限定で出されたゲームであり、念能力者が協力して作ったゲームである事がわかった。その相場はなんと58億！一財産ではあるが、ハンターサイトでは入手難易度はGだ。どうするか悩んでるな。そろそろ切り出すか。

「あ——。悩んでる所が悪いが、そのゲームなら私が持つてる」

「!?」

「はあ!? カーム！ お前、なんで言わなかったんだよ！」

「ゲームの情報にどうやって辿り着くか知りたくてね。それに、私が持つていても不思議じゃないだろう？」

「ヤな奴だなー！ まっ、持つてるなら丁度良かった。早速やってみよーぜ！」

「それなんだが、このゲームはマジで別の場所に飛ばされる。しかも中々帰還するのは難しい。ゴンはミトさんに一言断っておいた方が良くないか？」

「そっか…確かにそうだね。それに、ホントにそうならオレの部屋でプレイするのは難しいし…」

「オレんちもムリだぞ」

「キルアんとコは当たり前だろうが！ ……オレの家もダメだぜ。つーかそんなのんびりゲームできるような環境じゃねえ」

「ま、ここは私の家が1番無難だな。ただ、ゴンは帰って来て早々だから、もう少しのんびりしてもいいんじゃないか？」

「そうだね…。折角帰ってきたから後1週間ぐらいはのんびりしようかな？ みんな、それでいい？」

ゴンが問いかけ、全員が了承する。偶には修行を忘れてのんびりする事も必要だろう。休みが明けたら再び闘いが待っている。今のうちに英気を養っておくといい。

これまでノンストップで走り続けた。だが、これも未来の悲劇を防ぐ為だ。私の目的も後少しで達成出来る。だからこそ、束の間の休息を……。



「通してくれない？」

——それはできん。貴様の力は『樂園』にはあまりにも強大だ——

「もう『救世主』はいるんだろ？　ならいいじゃないか」

——それをやったらキリがない。実際貴様の様な奴が後を断たん。仮に全て通したとしよう。さすればあの樂園は終焉を迎えるだろう——

「中の奴等はどうなのさ？　アイツらも『救世主』が出たら動き出すぞ。いや、もう動いてるかもしれん。だが、オレなら何とか出来る」

——それこそ、『救世主』の出番だ。貴様はお呼びでは無い。さあ、元の場所に帰るがいい。厳しくも、美しい世界へ——

「チツ。相変わらず融通の利かない奴……。だが、こちとらハイそうですかかって引き下がれねーんだよ。アイツらの為にもな」

——信じて待つ、という事が何故出来ん。特に此度の「救世主」は我等にも匹敵する力を持つ。人類が出て来る力をつけるまで、大人しく待つているがいい——

「待つのは嫌いでね……。そんなオレが、もう10年も待った。十分だろう。押し通るぜ」

——魔族の王子よ……。貴様も彼我の力の差が分からん程愚かでは無い筈だ……。それでもやるか。……。仕方あるまい。思い出させてやろう。我こそが「楽園」の守護者にして「門番」。――「渦を巻く者」。そして「深海に潜む神」。……。貴様の事情を酌んで殺すまではせん。だが、相応の覚悟を持って挑むがいい——

「クソツタレが……。いつまでもテメエの『お遊び』に付き合っていると思っているなら大間違いだぜ。覚悟すんのはテメエだ。くたばれや、老害」

——その日、メビウス湖の南西側の限界境界線付近で、人類の常識を覆す程の力の激突が巻き起こった。その力の奔流は人類には観測出来なかったが、近辺の諸島の土地や生態系に多大なる影響を与えた……。

85、お試しプレイ

我々のくじら島のバカンスもいよいよ終わりを迎える。ここはいい所だ。海や森などの自然も豊富だ。我々も束の間の休息を楽しむ。時には船で釣り大会をやったり、森でキノコなどを集めて鍋パーティーなどして過ごした。レオリオは勉強の合間に毒キノコを集めて自分で食べ、それを治療するという恐ろしい訓練を行なっていたが、砂浜では弟子達がカキ氷をかけてビーチフラッグ争奪戦をやったが、誰もキルアに勝てず、また、それ以外のメンツはゴンに勝てなかった。逆にビーチバレーではカルトの独壇場だった。ボールを操作しちゃうから、魔球みたいに機動が変化しまくるし。私やビスケはパラソルでのんびりだ。ビスケが背中にオイルを塗って欲しいという要望に応えたが、触ってみて分かる。素晴らしい肉體だ。惚れ惚れする。カルトもそれを見てねだってきたので、同じ様に応えたが、まだまだだな。だが成果は出てきてると思う。精進を続けてほしい。

「バイバイ、ミトさん。元気でね。また連絡するから」

「ゴン……。連絡待ってるわ。また帰ってきてね」

「わかったよ。みんなによろしくね！」

いよいよ船出の時だ。とはいえ、またヨークシンに戻るだけだが。充実した休息を経て、彼等も本格的に訓練を再開した。オーラの扱いについてがメインだ。港に着いたらヨークシンまでダッシュ。大体500キロの道のりを走破する。彼らも慣れたものだ。大体2日程で余裕をもって辿り着いた。

「クラピカ!!」

「久しぶりだな。みんな」

アンダーソンの構成員となつたクラピカだが、随分と鍛えられているようだ。顔付きが若干精悍になっている。だが、張り詰めてはち切れそうな程ではない。これまでの修行と我々やアンダーソンとの交流が彼の精神にいい影響を与えているようだ。久しぶり（とは言っても2週間程度だが）の再会に会話を花開かせていると、ジョンがやって

くる。クラピカは一礼するが、ジョンは手を振り、彼の頭を上げさせる。

「カームよ。おかえり。クラピカもよくやってくれてるぞ」

「それは良かった。父さん。今日は『例の』ゲームをやりに来てね。落ち着いて出来る環境がウチしか無かったんだ。しばらく滞在するよ」

「何も遠慮することは無い。ここはお前の家だ。セキュリティも万全だから問題ないだろう。…ただ、日付は気にしておけ」

「もちろん、わかっているよ。それまでには切り上げとく…。じゃあ、みんな行くかうか」

クラピカ達と別れ別邸へと向かう。連絡したからか、もうジョイステとマルチタツプがセツトしてあった。用意がよくてありがたい。

早速始める。まずはゴンからだ。ゲームの説明に従ってソフトを入れたジョイスティックに両手を添えて《練》をすると、見事にその場から消えた。次にキルアが、そしてレオリオ、カルトと続く。ビスケも入り、最後に私が飛ぶ。…この感じ。あの異世界に飛ばされたのと似ているな。あの時とは規模が段違いだが。

しばらく機械的な待機部屋で一人、待たされる。何も無い部屋だが、周りの文様が近未来的で結構楽しい。

30分ぐらい経っただろうか。部屋の一角のドアが開き、次の部屋に通される。これまた近未来的な円形の部屋だ。奥の不思議な形のデスクと椅子？に1人の不思議な形のヘルメットをした女性が座っていた。

グリッド・タイランド
「G・Iへようこそ…。これよりこのゲームへの登録を行います。お名前を教えてください」

「カーム、と言う」

「ありがとうございます。カーム様ですね？では、ゲームの説明の前にこの指輪をお受け取りください」

女性から指輪をもらう。

「では、早速つけてください。どの指でも構いません…。ありがとうございます。では、これよりゲームの説明を始めます」

女性がシステムについて話し始める。彼女曰く、このゲームには指輪をはめていけば

使える魔法が二つあるという。「ブック」と「ゲイン」だ。女性が指輪の手を前に出して「ブック」と唱えてくださいと言う。言われた通りにしたら、本、というかバインダーが飛び出してきた。これが誰でも使える魔法の一つである。

このバインダーは2種類のカードケースになっている。

一つが指定ポケットカード。No. 00からNo. 99迄の100種類だ。これを揃えるのがこのゲーム最大の目的であり、クリア条件だ。

もう一つがフリーポケットカードだ。これは任意のカードを入れる事ができる。全部で45枚入る。

グリードアイランドの特徴として、入手したアイテムは例外なくカード化する。これをアイテムに戻すスペルが「ゲイン」だ。ただし、一度ゲインしたら再びカード化はできない。

また、注意点として、カードにはカード化限度枚数があり、これを超えたアイテムはカード化できない。また、カード化したアイテムは1分以内にバインダーに収めていないとカードは自動的にアイテム化するという事だ。

これで説明は終わった。私ももうこの辺はうろ覚えどころかサツパリ忘れていて、新鮮な気持ちで聞く事ができた。しかし、どれをとつても凄まじい効果の念能力だ。やはり暗黒大陸の遺産、と言ったところだな。説明が終わると階段が現れ、降りたら平原

が現れた。…上への階段は閉じた様だ。

さて、全員いるな。そして…見ているな。一方向に3人、もう一方向に2人か。わざとやってるのか分かんが、未熟だな。

「うーん。気持ち悪いね」

「ああ。大した事ない連中だが、ムカつくな」

「…ボクが『見て』みようか?」

「その必要はないだろう。彼らの為に能力を出す必要は無い。街の方角がわかっただけでもいいだろう」

「街の方角?」

「ああ。見てるって事は拠点があるって事だ。だからその方向に向かえばいい。…:あ
と、みんなに一つ言っておく事がある。今回は私は申し訳ないがお試しプレイとなる」
「? どういう事だ?」

「今、8月2日だろう? コレが9月頭になると、ちよつとウチ周辺、というかヨークシン
ンが大騒動になるイベントが起きる。…:具体的には、ヨークシンで世界最大級のオー
クシヨンが開かれるが、そこに幻影旅団が襲撃をかけたかという情報が入っている」

「「「「「」」」」」」

「幻影旅団って…クラピカの仇じゃ?」

「その通り。しかもかなり信憑性が高い情報だ。ここはリアルタイムで時間が経過する。よって私は8月末には一旦外に出る事になる。…君達には関係ない話だから、プレイを続行しといていい」

「ちよつと待てよ。クラピカの仇が襲撃をかけてくんのに、オレは関係ねーってほど薄情じゃねーぞ? 大体そんな状況でおちおちゲームしてらんねーだろ!」

「そうだよ! 絶対にクラピカが無茶しちゃうから止めなきや!」

「だが…奴等は強い。ヒソカに近いクラスが12人もいるんだ。クラピカには私もアンダーソンもつく。それでもか?」

「当たり前だよ! 就職したってクラピカは仲間だから、少しでも力になりたいんだ!」
「そうか…。他のメンツはどうだ?」

「ゴンが言い出したら聞かねーから…。しゃーない。付き合ってやるぜ」

「ボクはカームと兄さんについていく」

「全く…アンタ達だけじゃ心配だからアタシも行くわ」

「みんな…ありがとう。クラピカも喜ぶだろう。では目標変更だ。今回は『お試しプレ

イ』。この数週間でシステムや情報を収集し、期日までに帰還する！」

おー!!! と威勢のいい返事が返ってくる。みんなノリがいいな。とりあえず今回は私主導で動くとするか。次回は弟子に任せるが。そう考えていると、上空から音がする。ゴンも気付いたようだ。アレが移動スペルかな？ 丁度いい。初心者狩りの類ならアレを試しに使ってみようかな。

黙って見てると、我々の目の前に男が到着した。

「おつと…。ここはスタート近くの平原か。——君達はゲームは初めてかい？ ん？」

男はDJの様な格好をしたタンクトップの男だ。我々を見て初心者と判断したらしい。我々はまだゲームの作法など知らないからな。

「さて、どうだろうね？ 君もプレイヤーだね」

「キシキシ、まあね…。しかし、団体さんでかなりの手練れだな。こりや警戒が必要か

……」

男は出したバインダーで操作をしている。アレで色々出来るのかな？

「…？ 何してるの？」

「さあて、何でしょうねえ〜。うん。カーム君ね。君がリーダーかな。『密着』オ」

アドヒージョン

ピッ

「ン！ カームを……えっ!？」

「ほう……。コレが呪文カードか。『密着』…対象プレイヤー1名の指定ポケットカ-

スベル
アドヒージョン

ドの全データを常に知ることができる、か。なるほどなるほど」

「ば、馬鹿な……！ 何故…!？」

「攻撃の際は常にカウンターや先の先を警戒すること。1番無防備になるからね。自分の攻撃じゃないカードスベルなら尚更だ。しかし初心者狩りとは感心しないなあ。でも君はこのゲームに詳しそうだ。色々教えてくれないかなあ」

「クソッ！ 化け物め…… 『再会』オ……ン……」

リターン

「……………」

「まずは我々を狙った方法と動機からどうぞ。カードはしまつてね」

「はい…。まず、ワタシがこちらに來たのは『衝突』^{コリジョン}という呪文カード^{SPELL}です…。コレは会ったことの無いプレイヤーの場所に移動するSPELLですが、初心者に会う確率が高いため良く使われます…。初心者には呪文カード^{SPELL}がほぼ確実に決まるから、よく狙います…。このゲームで最も重要なものの一つが他プレイヤーの情報だからです…。更に、遭遇した時、みなさんをワタシは初心者と判断しました…。理由は、相手が本^{バインダー}を出しているのに、自分達の本^{バインダー}を出現させなかつたからです……………」

（なあ、ゴン。アレ、見えた…？）

（いや…。全然見えなかつた…。気づいた時にはカームがカードを奪つてたよ…）

(だよなあ…。オレも最近速さには自信でできたケド、ありや無理だ…。改めてどんだけ強いんだよ…。しかも、アレも能力か？ いくつ特殊能力持つてんだよ、アイツ)

(「聖光気」の能力かな？ ……ホントに敵じゃなくてよかったよね…)

(全くだぜ…)

(カームつて、本当に強いね…)

(アンタがコメントするなんて珍しいわね。でも、それには完全に同意ね。やっぱり異次元な強さだわさ。相手もソロプレイヤーだし、ある程度は出来る筈なのにね)

(少なくとも、オレの理解を完全に超えてるな。修行すればする程遠く感じるから…。仮に人間のツラ被った化け物つて言われても即座に納得するぜ)

(彼は結構その辺を気にしてるから、それは本人の前じゃ絶対に言っちゃダメ。ボくらだけはカームを理解してあげないといけない)

(あつたりまえよ。んなこと言われなくても分かってるさ。上手く隠してるつもりだろうが、アイツが何を気にしてるかなんて丸わかりだからな。アイツには世話になりつぱなしだし、オレにできる事つて言えば、せめて楽しく過ごしてもらおうぐらいだけだな)

(ふふ…。いい心がけね。後は、彼の望み通り、アンタ達も精進する事ね…。アンタ達が

充分に育ったなら、カームも喜ぶわさ)

(……そうだね。ボクもまだまだだ。せめて貴女ぐらいには追いつかなきゃ……)

(そう思ってたんなら努力しなさいな。ちびっ子。アタシはまだまだアンタに負ける気はこれっぽっちもないけどね)

(………ババアめ)

「何ですって！ クソチビ!!」

「わっくやめやめ!! 全く……カームが折角情報を引き出してんだからお互い挑発すんなや!」

何やらビスケとカルトが騒いでるが、聞かなくていいのかなあ。とりあえず、聞いたことは粗方聞いたので、いくつか練習用に呪文カードスベル及び幾つかのカードを譲って貰い、彼を先程行こうとしていた所に行くように促した。カード全部を取らなかつたのは、せめてもの慈悲だ。殺す気は無かつた奴にそこまでしたらかわいそうだしな。

逆に言えば、殺す気の奴にはそこまでするが。

さて、とりあえず視線の方向に向かう。しばらくすると、街が見えて来た。入ってみ

て分かった。懸賞都市アントキバ、というらしい。ここでは毎月15日に月例大会が行われており、そこで優勝するとレアアイテムがもらえるらしいが、ゴンにどうするか聞いたところ、いろいろな街を見てみたいらしいから、また来た時に挑戦するとの事。確かに13日後は遠すぎるしな。とりあえず資金調達が先だが、ここでは通貨もカードらしいので気をつけなければ。

資金調達のためのめぼしい懸賞がないか探していた所、我々をずっと見ていた奴が遂に話しかけてきた。無精髭が目立つおっさんだ。

「君達はゲームを始めてすぐだね？ 見たところ、かなり出来るようだが…。新規のプレイヤーだと中々勝手が分からないだろう。我々はチームを組んでやってるが、確実にクリアできる方法を確立した。どうだろう、是非一緒にやってみないか？」

「ふむ…。申し訳ないが、ちよつと我々も予定があつてね。チームプレイは今ではできないんだ」

「そうか…。だが、これも何かの縁。今、他の新規プレイヤーも含めて説明会を開いている。よかつたらそれだけでも聞いてみないか？」

「だそうだが…。ゴン、どうする？」

「うん…。おじさんには悪いけど、オレもこのゲームを楽しみたいからチーム組まず

に自分でやるかな。ヒントもこれ以降は自分で探すよ」

「だそうだ。すまんが、そういうわけで他を当たってくれ」

「そうか…。残念だ。もし気が変わったら連絡をくれ。ゲーム内の魔法で連絡はできるからな。では…」

そう言うと、男は大人しく去っていった。バインダーで確認すると、ニツケスと出ていたから、これが彼の登録名だろう。ゴンに良かったのか？ と聞いたら、「ジンの作ったゲームだから自分の力でじっくりプレイしたいし、チームを組む気はないから期待させたら悪いしね」と言っていた。キルアも「なんかうさん臭かったからなく」とコメントしていた。

これからそれぞれ分かれて資金稼ぎをして、宿泊場所を探そうと思う。誰が1番稼げるかな？



— 某所

「こちらが、お目当ての物件です。貴方にとてもオススメですよ」

「ふ〜ん◆？ 確かにイイ感じのオーラをピンピンに感じるね♣？ で、概要ぐらいは教えてくれるのかな？」

「〴〵〴〵」は元々処刑場だったらしくてですね。住宅企業が無理に更地にして、一軒家を建てたらしいですが、お決まりの家主が事件、事故に巻き込まれて次々と変わる家だったらしくて。遂に一家惨殺事件が発生したのが決定打でしたね。ダンナが幼い子と妻を殺して、自身はそのしばらく後で自宅内でナゾの死を遂げたらしいですよ？

まあ狂っちゃったみたいですねえ。更にダンナは死ぬ前に妻の不倫を妄想で疑っていた、自分の妻子を殺した後、妻の不倫相手と目を付けた別の家庭の妻を惨殺しちゃったらしくて。なんでも、その殺された別の奥さん、妊娠中で、胎児を引き摺り出されてゴミ箱に投棄されたとか。不倫なんて一切無かったらしいですから、殺された方はたまったもんじゃありませんね。ちなみにその旦那も事件直後に〴〵〴〵に乗り込んで

失踪してますよ。今じゃ誰かれ構わず足を踏み入れるだけで死んでしまう、特A級の事故物件ですね。取り壊しも計画段階で不審死の山で、結局放置して封印が精一杯といった所です」

「ふくん◆？ いいじゃない？？ 念能力者でも太刀打ちできないほどかな？」

「協会の除念師が匙を投げる程ですからねえ。貴方ぐらいなモノですよ。好き好んで〃
こころ〃に入りたいがるのは」

「ふふ…それぐらいじゃないと〃彼〃には届かないからね◆？ ま、後はボクがやるから帰っていいよ?！」

「つれないなア。身を粉にして探してきたのに」

「なんなら一緒に来るかい？」

「そうですねえ。見せて欲しい所では有りますが、遠慮しておきますよ。なんせボクもまだまだ忙しい身ではありませんからね。では結果を期待していますよ」

そう告げると、スーツの男は颯爽と去っていった。だが、残されたピエロの様な男は既に目の前の獲物に釘付けになっていて、気にも留めない。そもそも彼はスーツの男に興味がない。精々便利な協力者程度にしか見てないからだ。

彼はまるで、自宅の庭に踏み込む様な気軽さで、神字まみれの封印のテープを乗り越えていった。

「うーん……やっぱりいい空気?? ソクソクするね♣?」

広めの庭から玄関に入り込む。既に至る所から粘つくような視線を複数感じるが、人間の気配は無い。彼が玄関の扉を開こうとすると、勝手に一人で開いた。

「招待してくれるのかい? 気が利くなア◆?」

迷わず扉を潜る。中は広い玄関ホールになっていて、奥に広がりビングが見える。夜中の為に薄暗く、ハッキリとは見渡せないが、この男も尋常ではないため、さほど問題無い。玄関から進むと、後方で扉が閉まる音が聞こえた。

途端、室内は真っ暗になる。しばらくして目が慣れると、いつの間にか壁面は血まみれに変わっており、血痕が至る所に付着している。しかも今しがた付いたかの様に新鮮で滴っている。ゴミ箱と思わしき物体の横にはビニール袋があり、そこからひっきりなしに赤ん坊の泣き声が聞こえていた。彼は興味を示さず、床に目をやると、何かを引き

摺った様な血痕が付着しており、リビングから階段に続いている。

「まだ現れないか♣？ このパーティーの主催者はもつたいぶるねえ…♠？ まあご招待に与ろうか◆？」

彼は気にもせず床の血痕を辿つてドンドン進む。既に視線は物理的な重みを持つてきている。一般人ならここで死ぬだろう。それぐらいの圧だ。

階段を登ると、いくつかの部屋があるが、血痕は一つの部屋に続いていた。部屋はガムテープで厳重に封印されていたが、彼はそこを蹴破つて気軽に入室すると、そこにはデスクがあり、ノートが置かれていた。

「おやおや…案内状かな？ 何々…♣？」

彼は何の躊躇いもなくページをめくり始める。読み始めると、どこからか猫の鳴き声があった。中は支離滅裂な言葉の羅列があつたが、読み進めて行くと女性的な文字で記されている事が分かり、更にコレを記した者はある男性に懸想していた事が読み取れた。恐らくこの日記は発動条件だろう。部屋の天井付近で凄まじい程の禍々しいオーラが

徐々に実体を伴うほどの濃さになって凝縮し始める。普通は読むだけでも無防備な念能力者はアウトだ。いや、最早専門の者でも危ない。だが、彼には関係なかった。

「ふくん……ダンナが『核』になってるかと思つたケド、どうやら違う様だねえ◆？
すると、ここの奥さんが主催者かな♣？ で、上にいる、と?? じゃ、そっちに行くから待つててね?!”

彼は天井裏の階段を探し始める。血痕を辿ればすぐに分かる。簡易的な天井裏への折り畳み階段を見つけて登ると、そこは広く何も無い部屋だった。灯りは当然無いが、天井裏の窓から差し込む月の光でかろうじて中央に何かがあるのが分かる。ただ、見えなくとも最早関係ない程のオーラがその物体を中心に渦巻いていた。

「やあ♣？ キミに会いにきたよ♣？ じゃあ早速やろうか◆?!”

「ア”ア”ア” ア”ア”ア”ア”……」

喉の奥から発生した様な声なき声。聞く者を不快にさせる音を立てながら物体が動き出す。よく見るとそれは大きなビニールのゴミ袋だ。丁度一人分入るぐらいの。そこから白い手が徐々に出てくる。彼はニヤニヤと笑いながら見ている。気づけば傍らに白い男の子が座っていた。その子が口を開くと猫の鳴き声が出た。

「数百人……じゃあきかないね◆？ 素晴らしいよ、キミら親子は?? じゃあ、パーティーを楽しもうか◆？ そしてボクの糧になつてね??」

彼が初めて臨戦態勢に入る。彼からは相手に匹敵する、いや、更に上回る程の禍々しいオーラが噴き出す。だが、相手も既に人ではない。関係無いとばかりに彼に襲いかかる。

ここに、人の想像を絶する闘いが幕を開けた。

86、第3形態

結局私はアスレチックの様なアトラクションを制限時間以内にクリアするという懸賞を行なって報酬のカードをゲットした。売り払ったら80000ジェニーになった。中々時間がシビアで、クリア出来なかつたら参加費を取られるから難易度は高い。私にはあまり関係ないが。

カルトはこの短期間で得意な探し物を2件済ませており、中でも報酬の「呪われた幸運の女神像」が高く売れ、100000ジェニーを稼いでいた。

レオリオは似顔絵大会に参加して、優勝して50000ジェニー。彼は人体やら人間の臓器のデッサンとかも勉強がてらに良くやるからな。カナリの腕前だ。

ゴンとキルアはメシがてらに大食いチャレンジをして、「ガルガイダー」という魚のカードをゲットしていた。ちなみにこのカード、一枚で30000ジェニーである。

ビスケは効き酒イベントで連続で見事に当て、幻の銘酒とやらをゲットしていた。驚異の150000ジェニーである。流星はダブルハンターといった所か。

「ちえゝ。まさかカルトにまで負けるとはなあ……」

「ビリかく。行けると思ってたんだけどな」

「得意なのが見つかつて良かったぜ。カームの奴の方が結果的に良かったけどな」

「ホントそれ。オレ達もそつちにすりや良かったぜ」

「あの景品は先着一名で1日1回だったからな。ラッキーだった。……カルトは探し物になると無敵だな」

「結果的にボクが2位だったから良かった……。ビスケは大丈夫？」

「らくいじよぶくだわさく。これしきの酒でアタシを倒そうなんて甘いのよ」

「ダメだこりや。完全に酔つ払いだ」

「アルコール耐性は人によつて違うからな。試飲なのに調子こいて全部飲みまくるから当然の結果だぜ！　ホラ、水飲んどけ」

レオリオが酔つ払いの世話をする。医者だからこそ、酔つ払いを治療する気はない様で、チクチク説教していたが、ビスケはどこ吹く風だ。

「カーム、お水飲まして」

「あくあく。ババアの酔っ払いの悪絡みなんて見てらんねーな」

と、キルアが発言した瞬間、ビスケが神速の速さでキルアをぶっ飛ばした。…こんだけ酔っ払っついてあの動きができるとは、やっぱりダブルは伊達じゃない。というか、最低限の警戒や戦闘に支障が無い程度で抑えていたな？ 多分悪絡みはワザとだろう。しかし、ビスケも全体的に更にレベルアップしているようだ。キルアも油断していた様でモロに喰らっていた。

とりあえず、全員でこの日は一泊し、次の日には地図や食料、水を全員買ってから魔法都市マサドラへ向かう事にした。情報を買うと、この場所から山を越えて北へ80キロ進み、湖沿いに北西に向かうような。朝飯食べてからの腹ごなしには丁度いい距離だな。

途中の山道で、山賊に出会い、戦闘かと思ったら山賊がスライディング土下座で助けて欲しいと懇願してきた。…何このイベント。どうしたものか分からないからゴンとキルアに任せよう。

山賊達の間では伝染病が流行っているらしく、病に倒れている少年の為に薬代の為の

金を要求し、我々は結局のところ一文無しになった。全員上着まで要求されて（私とビスケとカルトのは要求されなかった。女性陣はわかるが、私のは服とはみなしていない）。どう判断しているのか（…）文字通り身ぐるみ剥がされた形になり、更に情報やアイテムも何も無しだった…まあいい教訓だ。ジンさんらしいイベントだったな。

これから先は怪物が出るらしいから、倒して金にするとゴン達は息巻いている。テンシヨンアゲアゲなので、怪物は弟子達に任せるとしよう。

山を抜けたら岩石地帯に入る。すると、早速複数の気配があるので、ここからはお任せしよう。

まずは1つ目巨人が襲撃をかけてきたが、即座に動きを分析して皆危なげなく倒していた。彼等曰く、会長の観音と比べたら屁の様なものだそう。

…そりゃ、あんなのと比べられる方がかわいそうだが。

次に、超巨大トカゲ。コレも攻撃を幾つか当てて、弱点を発見してアツサリ倒していた。

また、高速移動するマリモも、軌道を読んですぐ捕まえたり、巨大ワームの口に岩石を押し込んで窒息させたり、中身の無い鎧騎士のカラクリを《凝》で見破って操ってい

た生物を発見したりと、大活躍だった。これはアレだな。R P Gで序盤の街でレベル上げすぎてヌルゲーになる奴だ。流石にそこまで酷くは無いが、弟子達にも実際かなり余裕がある。初見の敵にここまで出来れば充分だと思う。特に泡を吐く馬、バブルホースの対処は素晴らしかった。吐く泡の種類を分析し、泡が爆発しない様に《纏》と《絶》で対応し、見事に2回目の遭遇で捕まえた。これがCランク。

こんな感じで彼らは大体の敵を倒す事ができたが…よく出来ているものだ。これは確かに念戦闘のイロハを学ぶ訓練には最適だ。思考の瞬発力が鍛えられる。かつ、そこまで危険は無い。実際の戦闘は一瞬の油断や躊躇いで一気に勝負が決まり、そこで生死も別れるからな。

私もせめてここで訓練してから暗黒大陸に行ったら、多少は違ったかもしれない。ここは確かにあの大陸の敵のチュートリアルと言えるからだ。例えばあのトカゲ。アイツらが暗黒大陸仕様の場合、弱点は無くなるか、あっても腹の下とか口の中とかになる。更にサイズは5倍になるだろう。また、あのマリモも、攻撃を受けたら致命傷レベルの負傷になるだろう。そして巨人。もう思い出したくもない。ここだけレベル差が酷すぎる。暗黒大陸にアレよりマシな巨人がいる事を切に願いたい。じゃないと、ここで楽勝だつて調子に乗って挑んだら即死だからな。

こういつた課題をクリアできる人材を育成して、乗り越えた者が暗黒大陸へ向かう事

ができるというのは理に適っている様に思う。それこそゲーム感覚で鍛えられるところもポイントが高い。私はそれぞれに個別でカードをゲットするように伝え、それぞれが3時間後にはクリアできていた。：先に進むか。

マサドラに着いた。道中でも怪物は出たが、余裕で対処できていた。多分、BからAランクの怪物が出てきても余裕があるだろうな。マサドラでは、怪物カードを売って、結構いい値段になったので、念願の魔法カードを購入する。が、ここで問題が発生した。どうも魔法カードは品薄らしく、全員で5袋しか買えない状態だったため、あまりいいカードは揃わなかったのだ。一袋に3枚入っているから、15枚だな。

【盗視^{ステイル}】×2枚、【透視^{フルラスコピー}】×1枚、【防壁^{ディフェンシブウォール}】×1枚、【再来^{リターン}】×2枚、【道標^{ガイドポスト}】×2枚、【解析^{アナリシス}】×1枚、【宝籤^{ロトリー}】×1枚、【名簿^{リスト}】×2枚、【交信^{コンタクト}】×3枚。

という状態だ。唯一防御カードである【防壁^{ディフェンシブウォール}】が手に入って良かったと言わなければならない。ついでに初心者狩りから奪った【離脱^{リープ}】と【暗幕^{ブラックカーテン}】、【念視^{サイトビジョン}】と【密着^{アドヒージョン}】もあるが。

店で魔法カードの情報を買い、どんなカードがあるかを確認する。全40種でバランスよく魔法が配置されていて、防御スperlも充実している。それだけに、この魔法カード不足は痛い。アントキバでチームを誘っていた奴等辺りが独占しているのだろうが、このままではあまりにも心許ない。恐らくだが、奴等のプレイスタイルは、チームでの人海戦術で魔法カード、特に防御カードを独占して他から奪いまくる戦術かな。確かにそれなら確実にクリアできるかと豪語するのも分からなくはないが：厄介だな。だが、今はどうしようもない。対策を考えなければな。

金が余りまくったので、ついでに脱出方法も聞いておくと、唯一の港があるらしい。そこに行つて所長からチケットを貰えば脱出できるとの事。

途中の森林では怪物が出るそうだが、何も問題ないだろう。

私の目的は一枚だけで、かつ盗まれる事も物理的に無いので、ここで一旦のお別れかな。

「では、皆。ここで一旦お別れだ。私は欲しいカードがあるからここから別行動をとる。魔法カードは君らにあげるが、ガイドポスト【道標】とコンタクト【交信】1枚ずつとサイトレジョン【念視】だけ譲つてくれ。その代わりにリリーフ【離脱】とブラックカード【暗幕】とアドレッシング【密着】はあげよう。ほら、どうぞ。………

よし。現実には28日までに戻ってくれたらいい。では、良いゲームプレイを」

「ちよつと待った！ アタシも一緒に行くわよ！」

「ボクも…そちらに付いていく」

「えっ…。私はこれから好き勝手に動くから無理に私に合わせなくていいんだけど…？」

それに、カルトはこれも修行だからそちらに居た方がいい。キミは私がない状況でも対応していく事を学ぶんだ」

「アタシはいいわよね！ そろそろ師匠離れしなきゃダメだからね！」

ビスケが勝ち誇った様に言うが、私は1人の方がいいんだけどなあ…。まあしようがないか。カルトは悔しそうな顔をして悩んでいたが、結局従う事に決めた様だ。

「……仕方ない。言う通り、こちらで兄さんのお守りをする。…何かあったら【コンタクト交信】で連絡するから。ビスケも分かってるね？」

「オイ！ カルト、お守りつてなんだよ！ オレは下の妹にお守りされる程頼りなくねーぞ!!」

「アンタは普段の行動からそう見えるんでしょ。ちつとは反省しなさい！ ……カルト。淑女協定は守ってやるから安心していいわよ」

「…あんまりできないけど、しょうがない。約束は守ってね」

キルアがギャーギャー言ってるが、ぶつちやけカルトが従ってくれて安心した。カルトはしつかりしてるから、弟子の野郎共を上手くまとめてくれるだろう。

…しかし、淑女協定って何だ？ 気になるが、あまり突っ込んではいけない類だと思うのでスルーした。

「ではみんな、月末に会おう」

そう告げると、マサドラから彼らと別れた。さて、相手はSランク。上手く見つかるというが。

「2人つきりになりましたわね♪ カーム♪」

「そうだね。しかし、よかったのかい？ こっちについてきて」

「私が欲しいモノは全部カームが持つてるわ。カードも魅力的だけど…。でも私は何よ

りも今は……「力」が欲しい」

ビスケがニヤリと笑う。……だから私についてきたか。まあいいだろう。私にとつても対人の訓練にもなる。ビスケも50倍をほぼ克服しているので、カナリの力をつけているはずだが、まだまだ力を磨きたいという食欲さは見習いたいものだ。では行くとするか。



「行っちゃまったな……」

「ようやくアイツらから離れられたな！ 早速スペルカードとか試してみよーぜ！」

「兄さん、あまり数がないから、制限して使わないと」

「わーってるよ！ とりあえず防御カードかける奴決めようぜ」

「そうだな。役割分担はしとこうか。いざという時に動けるようにな」

「じゃあ移動しよう。ここだと周りに聞かれてるからね」

「宿の目星はついている。こっち」

「流石カルト。探し物は早いね。みんなも行く?」

「全くカルトの奴…保護者気取りでウゼーな」

「まあまあ、そう言うな。それを笑って受け止めるのが年長の務めってモンだぜ?」

「ハイハイ、分かったよ。しよーがねーなア…」



「どうも、この姿は強いけど、ゴツいから嫌なのよね」

ここはマサドラから少し離れた森林地帯の一角。丁度いい広場があったため、こちらで少し休憩件、ビスケの鍛錬に付き合っている最中だ。

「うん…。私は別にいいと思うんだけどなあ…。女性にとっては由々しき問題、か」
「そうなの！これは女性にとつては大問題よ！」

「かと言つて、どうアドバイスしたのか…。要は、力はそのままでなるべく見た目をマイルドにしたいって事だよな？」

「それが出来ればこんなに悩みはしないんだけどね…。調整が難しいのよ。見た目をマトモにする為にクツキイちゃん全開で頑張つたらガキンチョの姿になっちゃやし」

「そうか…。どうしたもんかな…」

本当にどうしたもんかね。私がそこまでゴツくないのはブリオンのせい、身体の構造が普通の人とは若干違うからだしなあ。ビスケの要望はつまり、筋肉をどうにかして縮めることで見た目をほどほどにして、そのまま力を発揮出来るようにする…か。すつごい難しい気がするが…。ビスケの子供姿は筋細胞自体をほぐして縮めている感じだよな。いや、それだけではあの変化の説明がつかない。全身の細胞が連動しながら身体全体を小さく、若く“変化”させてるし。内臓とか骨とかどうなってるんだろう。

それすらもビスケの念能力の一部であるならば、実は「魔法美容師^{マジカルエステ}」とは、かなりの可能性を持つ念能力であると言える。体内の細胞を自由自在に変化させる効果がある

と言ひ換える事が出来るのだ。しかも他者にも作用するという。

と、するならば。可能な筈だ。イメージの問題だ。恐らくビスケの中で、筋骨隆々の姿こそが最強となつており、強くなる為にそうなる事を目指していたのだろう。それは間違ひではない。骨格は土台で、筋肉は力だ。強く、太い骨と筋肉こそがパワーを生み出すのだ。だが、その概念を覆す事が自身で出来れば。それこそ、筋繊維の圧縮の様なイメージができさえすれば。不可能ではないはずだ。

「ビスケ……考えてみたんだが……。不可能か可能かで言えば、可能であると言える。ビスケの変身は恐らく念の作用で、無意識のうちに細胞を操作していると思われる。つまり、私の想像が上手くいけば、ビスケの理想の第3形態に変身する事が可能だと思う」「ホント!? どうしたらいい?」

「まずは、小さくなる時にどうやってるか、イメージとしてはどんな感じが教えてくれないか?」

「ああ、それね。まずはクツキイちゃんて全身を揉み解して……。それから骨格矯正マツサージとか脂肪燃焼マツサージとか、オーラローション美肌マツサージとか……とにかくフルコースよ! そうしたら見事に12歳ぐらいの姿まで若返るわ。ただ、筋繊維とか骨格までも揉み解れちゃうからバランスがムズイのよね。パワーとスピード、つい

でにオーラまであの姿相応にダウンしちやうしね」

「なるほど…やはりそうか。多分、見た目に全特化した変身だから、その辺の諸々がある意味弱体化させているんだろう。君も分かってはいる様だけどね。だとしたら…：非常に困難だろうが、今の姿を進化させる方向でいったらどうだろう？ 君のイメージの問題だ。君は恐らくその姿こそが最強だと思っっているね？ だからその姿で固定されるんだ。だが、それを覆せ。より最強で理想の姿を。その筋肉を凝縮して、素晴らしいプロポーシヨンをした姿をイメージするんだ。骨格は通常ながら決して折れない程の強度！ そう、まるでダイヤモンドの様に凝縮されたイメージだ。しかし柔らかさももちろん兼ね備えている…。当然筋肉も同じイメージだ。より凝縮した筋肉！ 全ての筋繊維がそこに集約している…。そして、その姿こそが最強だと。難しいがまずはそこからだろう。そうしたら、【魔法美容師^{マジカルエステ}】の出番になるんじゃないかな？」

「…：…うくん…：確かにそれは難しいわね…。細身でも骨や筋肉が凝縮してる…：か。そこまで来ると最早細胞単位ね。でも、確かにその発想は無かったわ。いや、発想はあつたけど、イメージ上での強さを取っちゃった、というのが本当のトコね。言い訳でしかないけど」

「念は奥が深い。極論不可能は無いと言ってもいい。後は自分の信念とか、イメージ力の問題だと思う」

「そうだね…。やってみる価値はある。ありがとう、カーム。方向性が見えたわ」
「キチンとしたアドバイスが出来なくて申し訳ない。私も手助けはする。参考になるかは分からないが、私の腕を見てくれ」

私は袖を捲り上げ、腕を晒す。

「細身だが、細胞単位で非常に強力な強度を実現している。私の場合は別物も混じっているから見本にはならないが、参考にはなるだろう。少し触ってみるといい」

ビスケが恐る恐る触る。次第に揉んでみたり、つねってみたりして、興奮し始めた。

「これは……凄いい筋肉、いえ、筋繊維……というか全てが凄いい！まるで極限まで凝縮された宝石の様……それでいてとても柔らかい……これは奇跡よ！」

次第にハアハア言いながら触りまくるビスケ。触り方が若干いやらしいのは気のせいだと思いたい。

「あく。とりあえず、参考にはなつたかな？ とにかく、まだまだ進化の余地があると
思っているから頑張つてほしい」

そう言つて腕をしまうと、ビスケは若干残念そうな顔をしながら渋々離れた。…まあ
参考になつたら嬉しいが。それからビスケはイメージ修行すると言つて瞑想を始めた
ので、私も一言断つてから情報収集を開始した。

さて、「死者への往復葉書」だが……ガイドポスト【道標】で調べてみたいが、生憎番号すら分
からない状態だ。とりあえず、有力なプレイヤーと接触して、サイトビジョン【念視】で覗かせて貰おう。
持つてる人はある程度強いだろうからな。地道だが、仕方あるまい。ビスケもここから
しばらく動かない様だし、場所は覚えているから色々な街に行つて探してみるか…。



ブンゼンという都市に到着した。ここにいるといいいなあ。とりあえず《円》！もちろん隠して！………いないか。微妙なプレイヤーしかない。これじゃ期待出来ないな。しかし、《円》をやってみて思ったが、N P Cは本当に念で出来ている。いわゆる念獣だ。しかし、これだけ高度なプログラムが為された念獣は類を見ない。というか、普通はムリだ。改めて、規格外な存在が遺した物なんだなあと感じた。これを元々設置した者はどう言った人物だったんだろうか。私の同類かな？あと、これをリメイクしたジンさんの仲間も気になる所ではあるな。

とりあえず次に行ってみよう。



2日ほどかけて幾つか都市をまわってみたが、該当する様なプレイヤーは居なかった。………そして遂に思い至る。

………マサドラで張ろう。

言い訳するならば、彼らにはあの時点で別行動しとかなないと、際限なくヌルゲーと化すから、あの特別れて正解だった、と思う。もう彼らもマサドラにはいないだろうし、そろそろいいかな？

マサドラならカードが品薄でも、有力プレイヤーなら確認や補給には来るだろうし。……最初から大人しくマサドラで張っておけば良かったというツツコミが聞こえそうだが、それはそれ。

……暗黒大陸脱出に時間かかったのも、私のこういう所が原因なんだろうなあ……。でも弟子の為に結果オーライと考えよう。とりあえずマサドラに行くか。



途中でビスケの様子を見たが、集中して取り組んでいたため、一声かけてからマサドラに向かった。ここで再び《円》。……まあいいよね。分かった。すれ違いになっ

てなければ良いが……。とりあえず何日か張っておこう。

それから5日後、遂に私のセンサーに一定以上の強さの者が引つかかった。ゴン達程ではないが。これなら割といい感じかな？ 相手は4人組。いい感じのおっさんパーティーだ。ただ……。あのヒゲのおっさんはどこかで見た事がある様な……。

まあいいや。とりあえず、20メートル範囲ですれ違えばいいよね。《円》を解いて、擬装して……。よし。自然な感じ。では行くか。



「？」

「どうした？」

「いや……。気のせいかな。何か分からないが、大事な何かを逃した様な気がしてな」

「……珍しいな。ツエズゲラがそう言うとは。だが、我々のカード集めも順調だ。ここ最

近の大規模チームが鬱陶しいぐらいだが、問題無い範囲だしな」
 「うむ…。そうだな。いや、すまなかつた。目的に集中しよう。もうすぐ新規プレイヤーも増える事が確実だからな。ここらで差を開いておかねば」

◇

うくん。プロだなあ。20メートルをキッチンと把握しながら警戒して歩いてた。私には関係ないが。だが、バインダーの情報には載るだろうから誤魔化せるのも今だけだな。まあ別にそれはどうでもいいか。とりあえず、カードをセットして、名前を確かめる…。ツエズゲラ、ボードム、バリー、ドツブル、か。ツエズゲラ…。どつかで聞いた事がある様な…。ツエズゲラ…。ツエズゲラ…。あつ、思い出した！ 確か大富豪に雇われた人じゃなかつたか？ 大富豪の名前は忘れたが、間違いない筈だ。

ということは、カナリのカードを持つている事は間違いないな。それに…上手くいけば大規模チームの対策も何とかなりそうだ。確か同じく大富豪に雇われていたからな。また、奴らの中に「爆弾魔」がいたのも思い出した。その辺も含めて、何とかできると

いいが。とにかく、今は覗いてみよう。なにになに…？

おお…すごい！ 彼だけで50種は持つてるな！ 後は他の仲間と分散しているか。そして、肝心のカードは…あつた！ No. 31！ よし！ これでガイドポスト【道標】が使える！ ついでに他のカードもどんなのがあるか、ナンバーも含めて覚えておこう…。



ガイドポスト【道標】で調べた結果、例のカードはブンセンにある事が分かった。そこにあつたんかい！ まずはビスケを迎えに行こう。瞑想を始めてから約1週間。進捗状況はどうか？

「……………誰？」

「アタシよ！ ビスケット＝クルーガーよ！」

……マジで!? いや、確かに服装や髪型はそうだ。だが、余りにも…何とか凄く変化する。30代〜40代には見えるものの、妙齢の貴婦人といった雰囲気になってる！
まだまだマッチョではあるが、身体は大幅に引き締まって、女性的な感じがかなり出ている。骨格も合わせている様だが、見事なナイスボディだ。そして…ゴツイ姿よりも割と細身なはずなのに、更に力強さを感じる。

「凄いな…。正直、言っではみたものの出来るとは思わなかった」

「ふふ……まだまだ締め付けが足りなかったり、年齢がバレそうな外見になっちゃったりするけど、中々いい感じでしょ？ ただ…」

ボンッ！

あ、元に戻った。

「……ご覧の通り、長くは保たないわ。今のところ30分が限界。戦闘なんかしたら3分で戻りそうだね。慣れるともっと伸びそうなんだけどね。チビの時みたいに」

「いやはや……。これは素晴らしいな。まさかこの短時間で出来るようになるとは」

「普段からの鍛錬も効いてるみたいね。イメージを固めるのがやっぱり苦労したけど。……あと、多分だけど若返りの薬とか飲んだら更に時間が伸びるし、外見も相応になると思うわ」

「……そうか。では頑張らなくてはな。私の方も目処がついた。これから一緒に行動するのでしょうか。今が8月11日だ。24日までには一旦出たい。後2週間といった所だな」

「分かったわ。アタシはこれからこの格好でフードでも被って行動するから、いつもの様に重力かけて頂戴。60倍でいいわ」

「いいのかい？」

「あの姿になる為にはやっぱり普段からの鍛錬は欠かせないと確信した。目標は自然に『あの姿』になる事！ その為に鍛えるわよ」

「了解。ではいくよ」

私は彼女に重力&低酸素をかける。しかし、60倍は相当だぞ？ 流石としか言いようがない。2週間後にはビスケの変身姿も更に変化するだろう。それもまた楽しみだな。

87、バッテラ

それから1週間。ひたすら聞き込みを続け、遂にフラグと思わしきものを発見した。何故これほど迄に時間がかかったかと言うと、該当のNPCがずっと家に籠りつきりだったからだ。周りの話からも繊細な男で、ずっと部屋に籠ったままだという。部屋の外から話しかけても返事は無い。唯一、その男が外出するのが月一で開催される街の文芸サークルの会合だそうだ。

とりあえずその日まで待ち、該当の日にそのサークルに参加してみたが、参加条件は短編でもいいから何らかの作品の持ち込みだった。：仕方がないので、昔の文学の授業の知識を総動員し、何とか書き上げた。内容は所謂パニックホラーだ。別世界の化け物一体がこの世界に紛れ込んだら、と言う内容だ。割と好評だったのでホツとした。リアリティがあつて良かったらしい。リアリティも何も実体験だからそりやそうだ。

ビスケは恋愛もの的大作を書き上げ、絶賛されていたが。

とにかく、サークルに参加し、作品の品評会を行うが、その時例の男が話しかけてきた。何でも作品に感銘を受けたらしい。これはアレだな。一定の評価を得る事でフラグが立つやつだな。

曰く、彼は亡くなった文豪の父親の背中を追って自分も作家を目指していたが、どうにも才能が無い。父が持っていた不思議な葉書で父親からアドバイスを貰っているが、上手く書けない、との事。

そして、何とか上手く作品を書ける方法を教えてほしい。自分が作家として大成できるならば、その不思議な葉書を譲ろう。と言う。

間違い無くこれがフラグだ。不思議な葉書こそが例のアイテムだろう。∴しかし、どうしたものか。恐らく、彼の望みは我々が普通に教えるても無理だろう。と、言う事は、別のアプローチが必要だ。考える事しばし。すると、唐突に答えが閃いた。

これはコンボだ。

答えは指定ポケットカードのアイテムにあった。つまり、No. 42「超一流作家の卵」を渡す事で解決するだろう。∴何というか、良く出来ているな。しかし、我々のカード探しもまた振り出しに戻った。仕方ない。またマサドラで魔法の買い出しだな。フ

ラグは立ったはずなので、早く探さないとな。【道標】ガイドポストが上手く出ると良いが…。



マサドラに一旦戻り、買い出しをする。品薄で1日1袋しか買えないが、連日朝早く並び、購入する。3日目で漸くガイドポスト【道標】が出たので、早速使い、割と早めにゲット出来た。Bランクだから思ったよりも簡単だったな。

カードが出ない間はひたすらビスケとの組手や念修行に付き合った。例の変身もかなり完成が近づいてきている。重力下でも15分は保つ様になってきている。姿形はもう完璧に妙齢の女性となっていて、変身後はスピードやパワーが更に上がっている。人類（女性）のスペックは大幅に超えているだろう。これだけの習得スピードは、やはり彼女のこれまでの絶え間ない鍛錬の賜物だろう。

後は：彼女の言った通り、若返り薬を使うかどうかだな。だが、私は既に持っているからなあ。その辺をどうするかはちよつと保留だ。

さて、本格的にゲットしたい所ではあるが、これまた困った事に期限が近づいてきた。そろそろ現実に帰還せねばならない。ギリギリまでやってから、後は次の本格プレイの時にゲットする方向でいいか。

出る前にやっておかねばならない事があるからな。

『やあ。初めまして。私はカームという。ツエズゲラさんだね?』

『……私に「コンタクト交信」してくるとは、どういったご用向きかな? 交換の相談なら私は受け

付けていないが』

『ああ、交換とかじゃあないよ。そもそも「トレードこちら」の話では無いんだ』

『……どういう事だ?』

『一つ星ハンター、ツエズゲラ。賞金ハンターだそうだね。君は今回の狩りも賞金の為に誰かに雇われている。違うかい?』

『……それがどうした?』

『そんなに警戒しないでくれ。私が君の取引先に取り引きを持ちかけたくてね』

『ふむ……。カームとやら。お前も雇われ希望か?』

『それがちよつと違う。実は私は今複数人でプレイしているんだが、それでも2本、ソフトが余っていてね。使わないから君の雇い主に条件次第では格安で譲ってもいいかなと思つているんだ。君のボスは集めているんだらう？ それにヨークシンのオークシヨンでも狙つているだらう。格安でソフトを手に入れるチャンスだ。一度君から伝えて貰えないかな？』

『……なるほど。しかしそれが本当である証拠は？ 偽物を掴ませて大金をせしめようとするのは“ここ”や“現実”でもよくある手段だ』

『まあそうなるよな。だから私のファミリィネームも教えておこう。私はカームⅡアンダーソンという。ヨークシンでは多少有名だと思う。オークシヨンの胴元だからな。今回のコレは私個人の所有物で、オークシンのアンダーソン宅を訪ねてくれ。……もし、君の雇い主が興味を持ったなら、ヨークシンのアンダーソン宅を訪ねてくれ。先に私の事を確認しておいても構わない。そこで話をしよう。これで多少は信用がついたかな？』

『……良かろう。私から伝えておく。いつ行けばいい？』

『私はこれから一旦出るから、25日に来てくれ。待つているよ』
『分かった。ではな……』

これで一旦OK、と。あとは相手次第だが、釣れるのを待つか。



「まさかそう来るとはな……。何が起こるか分からんもんだ」

「ツエズゲラ、信じるのか？」

「……『ヨークシンのアンダーソン』を騙る奴はまず居ない。マフィアの重鎮十老頭の中でも別格の力を持つ家だ。仮に騙る奴がいれば奴らは黙っていない。これまた別格の念能力者の集団から草の根分けてでも探し出されて分かれさせられるだろうからな……。しかも奴はファミリーネームと言った。尚更だ。大体奴自身も我々に気取られずに接触を済ましている時点で相当な実力者だ」

「まあ、な。確かにそのウワサは良く聞くが……。ハメられたんじゃないか？」

「仮にそうだとしても、先程の奴にメリットがない。嘘だったらすぐにバレるからな。アンダーソン氏はバツテラ氏とも懇意だから、調べなくとも分かるだろう。どの道出る必要があつたから丁度いい」

「なるほどな。ではちよつと予定を早めるといふ事か」

「うむ。そうなるな。今日が23日か…。少し急ぐか」



さて、一旦出よう。ビスケもそれには同意してくれた。港へ向かい、所長を二回ぶつ飛ばしてチケットをもらい、帰還する。帰りに来た時と同じ様な別の案内人がいて、その人からヨークシンに近い港に飛ばしてもらった。

ヨークシンに着き、久々の自分の家に戻る。ジョン達やクラピカとも会い、ゲームでの様子を伝えた。後でジョンに大富豪の話をしたら、彼は知っていて、ビジネス上で懇意にしているらしい。名をバッテラ、という。そういえばそういう名前だったな。彼がツエズゲラさんが来たら教えてもらう様にお願ひし、上手くいけばアンダーソンの利益にもつながるかもしれないので、綿密に打ち合わせをした。

ビスケは出てからは重力等を一旦解放して例の姿で過ごしていた。重力無しの戦闘無しなら恐らく1時間は保つとの事。本人曰く、3時間が目標の様だ。まだ気を張って

ないといけならしいが、しばらく慣れる為にずっと変身を維持する訓練をするつもりらしい。初めて見たクラピカは腰を抜かす程驚いていた。ジョンも顔には出さないが驚いていた様だ。そりやそうか。私もビックリしたしな。

弟子達はまだ帰って来ない。大方ギリギリまでプレイするのだろう。その方がこちらとしても都合がいいからな。

1度電話があつたらしく、ツエズゲラさんから私の所在の確認と、25日の午前中にバツテラ氏と何うという主旨の内容を告げてきたらしい。よし。かかったな。

1日間が空いたので、アンダーソンの別宅内でのんびりと映画を観ながら過ごす。ビスケも一緒にだ。だが、何かビスケも大人の姿なので落ち着かない。1時間で元に戻るが。：ぶつちやけちよつと扱いに困る。私もあまり女性の扱いは慣れてないんだ。前の姿の方が気軽に接する事が出来ていた気がするが、同一人物だからできるだけ態度を変えない様にしないとな。

午後、仕事を終えたクラピカと実戦訓練を行う。彼もかなりの実力者になってきている。よって、私とビスケで徹底的に扱いた。ありとあらゆる状況に対応できる様に、様々なシチュエーションで襲い掛かり、対処する訓練だ。後半から死んだ魚の様な目になっていたが、これも彼の為だ。ケガは自力回復や、酷い時は私が回復し、オーラ枯渴

や疲労はビスケが癒すから正にノンストップ！ 12時間程続けて、明日の仕事に影響が出るという事で終了した。

終わった後のクラピカのホツとした表情が印象的だった。



次の日、午前9時に彼等が訪問して来た。ツエズゲラさんと護衛を複数連れてリムジンでやって来た様で、別宅の前まで誘導してもらった。ツエズゲラさんが誘導し、バツテラ氏が出て来た。もう老人と言って良いが、シャツキリしている。

「初めましてかな。私がバツテラだ。君がカームⅡアンダーソン殿かね？」

「殿はいりませんよ。バツテラさん。私がカームⅡアンダーソンです。御足労いただきありがとうございます。では中へどうぞ」

そう告げて、バツテラ氏を案内する。ちなみにビスケも同席している。私一人でいいと言ったのだが、邪魔しないからとくつついている。最近はゴスロリファッションの他にもドレスなどを好んで着ている。今日はドレスだ。

「ふむ。奥方かな？」

「いえ、違います」「オーツホツホツホツ！ 素晴らしい慧眼ですわね！ でも残念ながら違うんですの。今は一緒に暮らしてますけどね！」

いや、間違つては無いが盛りすぎだろ！ 滞在させてるだけだからな！ 誤解をまねくだろ！ と、目で訴えるが、ビスケは気づかないフリをしている！

「それは失礼な事を。しかし、カーム君もこんなに美しい女性を側に置いておくとはスミに置けませんなあ」

「あらあらあら、見る目のある方だこと！ そう言つて頂けるとは光榮ですわあ！」

オーツホツホツホツ！ と上品に高笑いするビスケは絶好調の様子だ！ …もう仕

方ない。さっさと用件を済ませよう。

「ゴホンツッ！ バッテラさん。本題に入りましょう。ツエズゲラ氏からお聞きですが、再度お話しします。私は現在3本のグリードアイランドのソフトを持っています。内1本は使用していますが、後の2本は使っていない。…こちらです。これからも使用する事は恐らくないでしょう。しかも最大16人プレイ出来るソフトの状態だ。オークションにも7本流れますが、高額になる事が予想される。私は先に貴方にこれを格安で譲ろうかと思いましたが。…定価の半値でどうですか？」

「ツエズゲラ、どうだ？」

ツエズゲラさんがソフトをセットして起動させる。その為にゲーム機は用意しておいた。しばらく調べていたが、調べ終わったのかこう言った。

「……2本とも、ほぼ本物に間違いありませんな。加えて、ソフトのみの状態というのも価値が高い」

「……………条件は何だね？」

「気付きましたか。コレを格安で譲る代わりに、私から貴方にある条件があります。受けるか否かは貴方次第です。話しても？」

「…いいだろう。話してくれたまえ」

「では……。バツテラさん。貴方程の大富豪が、このゲームを金に糸目を付けず血眼で探して、更にハンターを雇ってクリアを目指す…。私はその理由が知りたい。嘘偽りなく正直に教えて貰えば、私もコレを一つ30億で譲りましょう」

「!! それは……」

「答えるもここで帰るも全ては貴方次第。よくお考えください。ただし、お帰りになるのであれば、私はこの2本を売りに出す気は全く無いとだけ言っておきましょう。ああ、勿論、ここで聞いた話は他には絶対に漏らさぬと誓いましょう。なんなら誓約書も書きますよ」

「…相場の3倍で買い取るが？」

「いや、私としては金はそのままでいらないうです。大事なのは先程の条件だ。純粹に興味があるのですよ。よって、いくら積んでもこの条件は変更しません」

「……………少し…時間をくれないか？」

「いいでしょう。我々は少し席を外します。15分後に戻りますので、その時答えをお聞かせください」

そう伝えて、我々は席を立とうとしたが、バッテラ氏が引き留める。

「……待て！ ……やはり、君に話そう。だが、聞くのは君だけだ。他の者は退室してくれ」

「バッテラさん！ それはあまりにも危険です!! お考え直してください!!!」

ツエズゲラさんが止めに入る。まあ当たり前だ。しかしバッテラ氏は構わず続ける。

「金を持つという事は力を持つ事と同義だ。こういう時の為に私は常に誓約書を持参している。ツエズゲラ君。君にも使わなかったが、こういう時には役に立つ」

そう言つて、懐から紙切れを取り出したが……。念が込められているな。なるほど。そう来たか。

「私の秘密を知りたがる者は多い。そしてそれを使って私を引き摺りおろそうとする輩もな。カーム君。申し訳ないが、君の事はアンダーソンの縁者という事を差し引いて

も、やはり信用出来るものではない……。57億という値段は決して安くは無いだ。その十分の一でも人が何人も死ぬ……。今、ここで話しても良いが、聞くのであればこの誓約書にサインを書いて貰えるかね？ 私も相応の覚悟を持っている。これを拒否するのであれば、仕方がない。諦めよう」

ふむ。何々……。色々複雑に書いてあるが、簡単に言えば、バツテラ氏に危害を加えない事と秘密遵守だ。守れなければ死を以って償え（要約）、か。うーん。これを作った奴は結構な実力者だな。しかし、ここまで来たらもう安心だな。

「いいでしょう。では」

サラサラっとサインする。すると、誓約書の文字が飛び出して、私の体内に吸収された。……心臓の血管辺りに纏わりついたな。誓約の内容を破れば、これが血管を破るとかそんな感じだろう。良くできている。

私にはこの手のは効かないから申し訳ないが、喋る気もないからセーフだろう。

「ほう……臆せず、躊躇いなくサインするか。……分かった。ツエズゲラ君。コレを預

かって、そのまま部屋の外で待っていてくれ」

「なるほど…。これなら安全が担保されますな。分かりました。出しておきましょう。皆、行くぞ」

「ビスケもすまないが外で待っていてくれ」

「分かりましたわ」

そうして我々2人を除いて全員がゾロゾロと退出する。

「ようやく聞けますね。ではお話ください」

「うむ……。こうして差し向かいで秘密を話すとなると気恥ずかしいものがあるな。しかし君はあの誓約書にも迷わずサインした。キチンと話すのが誠意と言うものだろう…。まず、これを…」

そう言って、懐からペンダントを取り出した。中には若い女性の姿があった。

「……お孫さんですか？」

「いや……私の恋人だ」

「！ 恋人……ですか」

「ああ……。名をエリナ、と言う。だが、今は意識も無く死の淵を彷徨っている。事故でな」

「それは……。ですが、貴方程の富豪ならば何とかならなかったのですか？」

「勿論、八方に手を尽くした。だが、如何なる手段をもつてしても、どんな名医でも回復は叶わず、現状維持が精一杯だと言われた……。エリナはいい女だった。遺産目当てと思われるのが嫌だったんだらうな。私のどんな高価な贈り物もつき返されたよ。私の拙い手作りの写真立てなどを喜ぶ様……。お互いさえいれば他に何もいらぬ。資産を全て処分し、一緒にならうと誓い合つた矢先だった……」

「……………」

グリードアイランド

「そんな時、G・Iの噂を聞いた。どんな病気やケガも治せる呪文……。若返る薬……。そう、今の私に必要な夢のようなアイテムが、クリアすれば手に入る……と。私は即座にあらゆる手を使い情報を集め、逆に世間には情報がいかないようにした。……君にはバレたようだがね。だが、状況が変わつた。もう時間が無い。今回のオークションでは形振り構わずソフトを購入し、プレイヤーを募る予定だった。そこに、今回の君の話が来たわけだ」

「そうだったんですね……」

「……君が何を思つて理由を知りたがつたのかは分からない。それこそ、命を賭けてまで……。だが、私の理由は以上だ。満足したかね？」

「……バッテラさん。安心しましたよ。では、私が理由を知りたがつた訳を話しましょう……。単刀直入に言います。私なら何とか出来る」

「!? 馬鹿な……! この10年で如何なる手段も無理だったのだから!」

「そうでしようね。だが、私は違う」

「誰だつてそう言うのだ! だが無理だった!!」

「信じるか信じないかは貴方次第……。だが、私の能力や所持するアイテムで間違い無く可能だ。……もしそれが出来たらなら。貴方は私に何をしてくれませんか?」

「……もしそれが叶うなら、私は君にほぼ全ての資産を譲つてもいい。元々処分するつもりだったからな。だが……本気で可能なのか?」

「可能ですよ。言葉で言つても信じて貰えないでしょうがね。では、出来たらなら資産の話に加えて私に『協力』して頂きたい。また、貴方も先程の契約を逆にやつてもらおう事

になる。それこそ、みだりに触れ回っては困る力なのでね」

「本当にできるならいくらでも守秘義務は守ろう。命を賭けてでもな。協力もいくらでもしよう。……同じ様に言つた医者や能力者もいたが、結局匙を投げていたがね」

「ま、こればかりは見ないと信じませんよね。では、早速準備だけしてください。彼女を病院から、貴方の邸宅か、誰もいない個室に移動させる事を。貴方ならすぐにでも可能な筈だ。私はそこに貴方と2人きりで行き、彼女を目覚めさせる。若返りはその後でいいですね？」

「……いいだろう。やってみてもらおうか。私にはデメリットがあまり無いからな」
「では、これからすぐに取り掛かりましょう。まず……」



我々はその後、ソフトを渡したと見せかけて一旦解散した。バッテリー氏は半信半疑

だったが、とりあえずエリナさんを邸宅に移送させた様だ。私はその後、教えてもらった場所へ単身で赴き、バッテラ氏直々に案内される。周りには誰もいないが、医師がかなり離れた場所で待機しているのが分かる。

エリナさんは邸宅の一室で、まるで眠る様にベッドに横たわっていた。ただし、さまざまな機械に繋がれていた。

「紹介しよう。彼女がエリナだ。外見は眠っている様にしか見えんが、今もいつ亡くなってもおかしくは無い状態だ。所謂脳死状態に近い。怪我などは身体の見えない部分だが、内臓関係が絶望的に損傷していて、生命維持装置で何とか長らえている…。ここに運ぶのも本来は厳しいのだ。君が失敗すれば、即病院に返さなければならぬ。だから、やるなら早くしてくれ」

「分かりました。では、まず診せて貰いましょう」

近づいて彼女を診る。：確かにこれは脳死状態に近いな…。それに、損傷もいつ死んでもおかしくない。だが、魂はまだ残っている。彼への想いがそうさせたか。これなら何とかなるか。

「よし。では始めます」

「聖光氣」状態に移行する。そして……人を治癒する「奇跡」を強めにエリナさんへ行う。見る間に損傷が回復してゆく……。そして、ケガの治療が完了した。だが……全てが終わったわけではない。

「終わりました。ケガは100%治しました。脳死状態すら元通りです」

「本当か!? ……では、何故彼女は目覚めない?」

「彼女が瀕死になっていた原因は他にもある、という事です。バツテラさん。これは「呪い」だ。よって、更にこれから除念を行います。そろそろ、出てくる筈ですよ。もしかしたら貴方にも少し感じてしまうかもしれないので、離れてください」

バツテラ氏は訳がわからない顔をしながらも離れてくれた。…そろそろだな。

しばらくして、彼女の中から黒いオーラが噴き出してきた。……複数あるな。これじゃ苦しむ訳だ。寧ろ今までよく生きていたものだな。余程エリナさんは精神力の強

い女性なのだろう。

——憎い…憎い…憎い…！ アタシの金…！ アタシの…！——

うん。何となく事情が分かるな。しかしそれをこういう手段にでるのは間違つてる。複数の怨念じみたオーラがまとまって叫んでいるな。これは割と強い。放置してたらまた同じ事にすぐなるだろう。よって、これらを消滅させよう。

私は手をかざし、“呪い”に向かつて“死”の概念を纏つた炎をぶつける。ニーズヘッグのやつてた技だ。

——ぎゃああああ！ 熱い！ 熱い！ 消える！ 消えてしまう…！——

そう断末魔をあげて彼等(?)消えていった。感触的には全部死者じゃないな。生者の念、つまり生霊だ。念能力かどうかは分からんが。恐らく事故もコイツのせいだろう。

そして、無事に“呪い”は死んだ。……この術者はどうなっただろうか。オーラの大部分が死んだ訳だから、最低でもただじゃ済まないだろう。まあ10年も人を苦しめた

報いだと思つて甘んじて受け入れろ。

「…終わったのか…？」

「ええ。終わりましたよ。もしかして、少し見えましたが？」

「……いや、見えはしなかったが…感じた。何か悍ましいモノが取り憑いていたのか？」

「ええ。いわゆる生霊ですね。それが『呪い』となつてました。複数いましたよ。彼女もよく生きていたものです。事故もこれが原因でしょう。しかし、今全て消滅させました。もう安心ですよ」

「そつ、そうか…」

フラフラとエリナさんに近寄るバツテラ氏。すると、10年目覚めなかつたエリナさんの瞼が開き始める。長い眠りからの目覚めだ。

「んっ……。ここは……。？ バツテラ…？」

「エ、エリナ…！ エリナ…っ!!」

「……長い…長い夢を見ていたわ……。ふふ……相変わらずいい歳して甘えん坊なんだから…」

ここから先は私は見てはいけない。静かに退室するでしょう。愛の形は様々だが、どんな形であれ美しく、優しい。

外で待つ間、バッテラ氏達の事を考える。……羨ましいものだ。私も、将来そう想える相手が出るだろうか。ふと、ビスケやカルトの姿が脳裏に浮かんだ。だが、私は……どう繕っても肉体的には怪物だ。そして、それを弟子達や彼女らに伝える事を恐れている。だが、今のままではいけない。私も伝えなければ。それで拒絶されるのならそれは仕方のない事だ。卒業を以って伝える事にしよう。

卒業は……

グリードアイランド

G・Iを彼らがクリアした時だ。

幻影旅団騒乱編

88、幻影旅団

「これが、『若返りの水』です。出所は明かせませんが、効果は当然ありますよ。劇的にね。この小さな1瓶で充分若返るはずですよ。ですが、コレを飲むのは私の協力を全て終えてからにしていたいただきたい」

「……ありがとう……本当に……。君の言う通りにしよう。…しかし、君は一体何者なんだね？」

「ただの人間ですよ。他よりちよつとだけ力のある、ね」

……結局その後は、バツテラ氏といくつか協議をしてから別れた。バツテラ氏も私に深く感謝していたようで、素直に私に協力すると約束してくれた。バツテラ氏にはもう

クリアを目指す理由も消えた。彼が雇っている者達にはそこら辺の事を伝えて対処していただく必要がある。

これで魔法カード不足も解消されていくだろう。爆弾魔の動きは若干読めないが、これで原作にあった大量虐殺も起きない様になるだろう。奴らが簡単に諦めるとは思えないが、その対策も一応考えてある。後は本格プレイの時に対処しよう。

実はそれが今回の狙いでもあるが、純粹にバツテラ氏を救えた事は良かったと思う。救える者は救う。手の届く限り。この世界は理不尽な事象に溢れている。それは前世も同じだったが、こちらはよりシビアだ。だが、私には「力」がある。ハッピーエンドでもいいじゃないか。だから私は抗う。もう二度と理不尽な事態に翻弄される人々を見ないように。

…そろそろ例の期日が近づいてきているので、そちらにも集中したいから後はバツテラ氏にお任せしよう。私も準備を整えなければ。



4日後、ゴン達が戻ってきた。今は団欒室で寛いでいる。

「いやー厳しかった。つてか最初は無理ゲーに近かったな。いいカード貰ってもすぐに奪われるし！ 大体、何だよ、あの3人組は！ アレ、絶対会長じゃねーか！」

「アレはヤバかったね…。カードとか関係無く勝負挑んできたし。ゲームの趣旨を分かってない感じしたよね…」

「いや、ワザとだろ。アレが会長なら分かった上でやってると思うぞ？」

「タチわりーよな…。結局ボコボコにされただけで笑いながらどっか行つたし。次会つたらゼツテーブン殴る！」

「ま、死んでねーからセーフってトコだな。P Kだったら死んでたしな」

「でも、最後の方で防御カード沢山入荷してきたよね。なんか出会つたプレイヤーが一齐に減つたけど…」

「そう！ 急に防御カード揃つてからは逆にいい感じで集まつたよな！ もうちよつとやりたかつたけどなー」

「でももう時間だから仕方ない。大体兄さんはギリギリまでやるつて聞かなかつたんだ

から」

「悪かったよカルト、だからそう睨むなって。オレも熱中しちまうとつい、な。でも、アイツが付いてるんだぜ？」

「う…それはそうだけど…。でも、クラピカも危なっかしいからオレ達も付いてなきや！」

「しよーがねーなア…。まあたしかにクラピカは危なっかしいからなー」

「とりあえず無事に間に合ったようだから良しとしようぜ。で、どうすんだ？ クラピカ」

お、ドアの外にいる我々に気付いたか。より感覚が研ぎ澄まされてきているな。ゲームも楽しんでやっつてるらしい。バツテラ氏とのやり取りが生きてきたようだ。それに…会長も始めたか。楽しそうで何より。

我々はドアを開けて入る。ジョンと私とクラピカだ。

「……私の為に来てくれた事には礼を言う。今、奴らの動きを想定して作戦会議中だ。基本的には奴らとはここで決着をつける。…だが、これは私の復讐だ。だから君達は無理をしないで、出来れば関わらないでほしい。それが私の望みだ」

部屋の中が瞬時に静寂に包まれる。彼としては譲れない部分でもあるだろう。だが、それも仕方ない。同じ状況だったら私もそうしようとするだろうから。しかし、そうはさせない。彼はそのままでと容易く死に向かうだろう。もちろん彼の事だ。復讐は果たすだろうが、ただでは済まない可能性も高い。そして…同胞を失った彼のトラウマも関係しているのかもしれないな。

ここはもう一度説得が必要だ。私はジョンと目配せして、ジョンにお願いする。しかし、その前にゴンがクラピカに語りかけた。

「ダメだよ、クラピカ。今のクラピカは死んでもいいって思ってるでしょ？ 顔やオーラからそう感じるよ」

「いや…私は死んでもいいとは思っていないぞ」

「ウソだよね。クラピカはウソつく時は目を合わせないから」

「!! 何故…」

「ほら、ウソだった。オレのひっかけにかかるぐらいに余裕がないようじゃ、1人じゃ行かせられない。オレ1人だけでも付いていくから」

「ゴン！ だが…」

「いくから」

「あくあ。こうなったらコイツは聞かぬぞ。だが、オレも同じ意見だぜ。ワザワザ危険な相手に1人で突っ込んでどうすんだよ」

「キルア、私は1人で突っ込むほど自惚れてはいないつもりだ。ちゃんとアンダーソンファミリィとして協力体制を敷きながら迎撃する手筈になっている」

「そこにオレ達が混ざってもいいだろ？ 大体、お前はそう言いながらも実際に遭遇した時に暴走せずにいられるか？ ……我慢できたとしても間違いなく無茶はするだろ。医者のお卵として言わせて貰えば、お前の緋の眼は身体に相当な負担を強いてるぞ。寿命が縮むんじゃないかねーかってぐらいな」

「レオリオ……そこは覚悟の上だ。リスクは当然だろう」

「やつぱり。……オレ、クラピカに何かあった時に何もしなかったんじゃない後悔してもしきれない。だからオレは一緒に行くよ。頼りないかもしれないけど、クラピカの手伝いをしたいんだ！」

「ゴン……」

彼らは私が言いたいことを全て言ってくれた。私が言うよりは余程良いだろう。す

かきず、ジョンが続ける。

「クラピカ。彼らは君を何より案じてるではないか。大体、もし君一人で立ち向かった場合、確実に死ぬ。それはこの何週間かで身をもつて理解した筈だぞ？　前も言っただろう。頼れる者は頼れと。何より君の為に」

「ドン……それでも私は……彼らに死んでほしくないんだ……」

やはりか。仲間を死なせるぐらいなら自分一人でもいい、というのが彼にはあるのだ。

「その為にカームがいる。彼は君の仲間をカンタンには死なせはせんよ。我々も付いているしな。それに彼らも充分強い。信じたまえ。それとも自分で全てに決着をつけたかったのならばトドメは君がやれば良からう。そのための段取りだからな」

「………ありがたい。恩に着る。みんな……よろしく頼む」

「相変わらず水くせーぞクラピカ！　オレ達に任せとけって！」

「そうだよ！　任せて！」

「分かった。君達を信じよう……」

クラピカも随分と軟化した様だ。これもゴン達とアンダーソンのおかげだろう。彼にとつては仲間達や家族としての触れ合いがいい効果をもたらしているように思う。肉体的な意味でも、精神的な意味でも。

そして、私がいるからには万が一も起こさない。彼の望みは叶えてやりたい。：彼から聞いたクルタ族の顛末を聞けば聞く程そう思う。私だったら即破壊神になって見境なくブチ殺してまわる事になりそうだからな。果ては人類の天敵、とまでなってしまうだろう。だからこそ、彼が前に進む為にもここは重要な場面だ。それが生きるという事に繋がるのだから。

「私からも、ゴン君はじめとする皆に感謝を。我がファミリーのクラピカの為にありがとう。そして、我がファミリーの事情にも巻き込んでしまつて申し訳ない。その上で、君らが力を貸してくれるのであれば大変心強い」

「オレ達はここにはお世話になつたからね。どれだけ助けられるか分からないけど、できる限り恩返しするよ」

「助かる。無事に終えたら報酬も用意しよう。期待しててくれ」

「さすが！ マフィアのボス、太っ腹だぜ！ 大船に乗つたつもりで任せてくれ！」
「泥舟になんないといーけどな」

「うるせーぞキルア！　どんなケガ人が出ても治してやつからよ」

「ハハハ！　レオリオ君、実際君の能力は貴重だ。頼りにしておくよ」

「さて…じゃあ話がまとまったところで、君達の調整に入ろう。カーム。よろしく頼む」
「ん。わかった。じゃあ短期コースでみっちりやろう。どんな状況にも対応できるように私からじっくりと、な」

クラピカがゲツという顔になる。だがこれは決定事項だ。幻影旅団の力は未知数だが、まだまだタイマンで勝てる程奴らは甘くないだろう。さあ、これから残り時間あと僅か。できるだけ鍛えておこう。



荒野を4人の奇妙な風体の男女が歩く。侍の様な刀を差した男が話し始める。

「13人が一堂に会するなんてナア。何年振りだったか」

「3年2ヶ月。と言ってもあの時とは2人面子が違うね。4番と8番別の人に替わった」

カタコトで喋る黒髪の男が答える。傷だらけの大男が着物とスパッツを合わせた様な服の女に話しかける。

「マチ：4番の野郎は来るのか？」

「知らないね。あたしに聞くな。『来い』と伝えただけだ」

「お前の役目だろ」

「ワタシ、ヒソカ嫌いね。何故団長アイツのワガママ許すか？」

侍が話に割り込む。

「腕がいいからだろ。アイツの【伸縮自在の愛】<sup>パ
ン
ジ
ー
ガ
ム</sup>はよく出来てる。ありや闘りづれえ
ぜ。正味な話」

「それが何か。団長がヒソカの事怖がてる言うか。許さないよ」
「そーじゃねエけどよ」

「買い被りだ。大した事ねエよ、あんな奴」

「口だけなら何とでも言えるからなア」

瞬間、静寂が起き、次には大男と侍の壮絶な殴り合いが始まった。背後で凄まじい殴り合いが起きているにも関わらず、マチと呼ばれた女とカタコトの男は歩くのを止めない。そして、マチがつぶやく。

「……最近のアイツはちよつとヤバいかもね」

「お前までそんな事言うか」

「伝令を伝えた時にアイツから嫌な感じした。前からそうだけど特に最近はやな感じ。警戒すべきね」

「ワタシがヒソカ殺すよ。それで解決ね」

「団長、一体何する気だろ？ あたしは嫌な予感がすんだけど」

「さつきから弱腰か？ お前も許さないよ」

「警戒しろって言いたいだけだ」

立ち止まった2人の間にも不穏な空気が流れる。しばらくして、2人は歩き始めた。

「……続きは団長の話を聞いてからね」

「ま、あたしも気のせいだと思っからそれでいい」

若干不穏な空気を残したまま、目的地に向かう。大男と侍はまだ殴り合っていた。

——ヨークシン郊外 幻影旅団アジトの廃ビル

「全部だ」

オールバックでファーの付いた黒コート。額には逆十字のタトゥーがある男が宣言する。更に彼は続ける。

「アンダーグラウンドオークション地 下 競 売のお宝を丸ごとかつさらう」

その発言に集まった者達は押し黙る。彼こそが幻影旅団の団長。クロロⅡルシルフルである。2メートルを超す野人の様な大男が問いかける。

「本気かよ、団長…地下の競売は世界中のヤクザ、その中でも特にヤベエ『アンダーソン』が中心に仕切ってる。手エ出したらそいつら全部敵にまわすことになるんだぜ!!! 団長!!」

「怖いのか?」

「嬉しいんだよ…!! 命じてくれ団長… 今すぐ!!」

「オレが許す。殺せ」

「おお!!」

野人が咆哮をあげる。他にも先程の4名に加え、メガネのタートルネックセーターの女、金髪の優男、スフィックスの様な被り物をした男、髪の毛で顔が見えない男、全身包帯男、女性物スーツを着た女、白スーツの男、そして奇術師という、異様な風体の男女が団長に続いて歩き出す。彼らこそが、かの悪名高い幻影旅団の全メンバーである。

——ヨークシンの騒乱が幕を開けようとしていた。

89、襲撃前夜

「アンダーグラウンドオークション

「地 下 競 売のお宝は全て嚴重に金庫に管理されている。よって、狙うのはお宝が会場に運ばれて競売に入る直前だ。フェイタン、フランクリン、シズクは現地強奪班だ。マチ、ノブナガ、ウボオー、シャルは会場を固めろ。お宝を奪って客を殺したら合流して脱出しろ。フィンクス、コルトピ、パク、ボノレノフ、ヒソカ、リップルはオレと待機だ」

「脱出の方法は？」

金髪の優男、シャルナークが問いかける。

「気球を使う。お宝を積み込んだら全員そこに乗れ。当然追いかけてくるだろう。引きつけてから殺れ」

「へっ、楽しくなってきたぜ！ 全員殺つていいんだよね？」

ウヴオーギンという名を持つ男が吠える。

「当然だ。塵も残すな」

「けっこー大胆に行くんだね」

「そうだ。不満か？」

「いや、これ以上ないってぐらい素敵なプランだよ、団長」

そこに、着物の女、マチが水を差す。

「団長……あたしは反対だね。やっぱりこの仕事は嫌な予感がする」

「ほう……勘か？」

「そう、勘だ。でも今までにないぐらい嫌な予感だ」

「いい加減その弱腰やめるね。本気で殺されたいか？」

黒髪の小男、フェイタンの発言を発端として空気が歪み始める。クロロは少し考える様子を見せ、やがて喋りだす。

「待て。マチの勤はよく当たる。仮にマチの勤が本物だと想定した場合、十中八九オレ達の行動がバレて待ち構えられている、といったところか」

「おいおい…作戦は今聞いたばかりだぜ？ そんなんがリークされる訳ねーだろ！」

「普通はそうだ。だが…例えば敵に予知能力の様な能力を持つ者がいたとしたら？」

「うん…。そんな能力があんのか？」

「あくまで仮定だ。しかしゼロではないだろう」

「そりゃヤベエな…。向こうは準備万端で待つてるつてか」

「ケツ！ だったら待ち構えてる連中全部蹴散らせばいいだろが!!」

侍風のノブナガの発言にウヴオーギンが反発する。

「その通りだ…と言いたいところだが、万全を期そう。作戦を少し変更して明日の朝伝える。それでいいか？ マチ」

「…：…わかったよ。団長に従う」

「では、全員明日に備えて休んでおけ。ただしアジトからは出るな。不審な事があったら報告しろ。以上だ」

クロロは団長としてそう締めくくると、静かに読書を始めた。団員はそれぞれの場所で寛ぎだす。古参のメンバーは気づいていた。予知能力などよりも余程現実的である可能性を。すなわち、「裏切り者」の存在だ。

団長が命令変更を決定したのは、マチの勘を重要視しているということ。そしてアジトから出るな、としたのは、「裏切り者」によるリークの可能性を警戒したのと、「裏切り者」を動かさない為に他ならない。

団員はそれぞれ寛ぎながらも警戒していた。怪しいのは古参以外のメンバー。中でも特に新しいナンバーの者。即ち、No. 8のシズク、No. 4のヒソカ、No. 13のリプルである。しかし、シズクは天然で毒舌ではあるが、旅団の掟にこだわるところもあり、裏切り者とは考えにくい。

やはり怪しいのは後の2人である。ヒソカは笑みを浮かべながらカードを切っている。以前にも増して満面の笑みだ。また、1年前に団長の肝煎りで入団した全身白スーツと白帽子の男であるリプルは、かなりの実力者で真面目な男だ。だが、全員彼の本音を読めるほど親しくはない。彼は今のところは穏やかな笑みを浮かべて座っている。

スフィックスの様な被り物をした男、フィックスが2人に声をかける。

「よオ。2人とも久しぶりだな。調子はどうか？」

「ふふ…急にどうしたんだい？ ボクはいつも絶好調だよ♣？」

「ケツ。だろうな。当初の予定ならオレ達は待機だ。だが、どんな任務が来てもいいように準備しとけ」

「分かつてるよ♣？ ねえ、リップル??」

「…ああ。そうだな。フィックス、心配しなくてもいい。どんな状況でも私はすぐに動けるよ」

「フン。そうか。2人ともトチるなよ」

そう言つて2人の元を去るフィックス。だが、今のは警告だ。オーラがそう物語つている。言葉の裏の威圧を受けた2人は依然として態度が変わつた様子は見られない。むしろヒソカなどは満面の笑みを更に歪めている。リップルはそれを見ながら苦笑いしている。

場は何とも言えない様な雰囲気が漂う。全員が押し黙つたまま、ただ時間だけが過ぎてゆく。辺りはすっかり暗くなり、夜の気配が忍び寄る。だが、全員動く気配がない。

重苦しい空気の中、静寂を破ったのはリップルだ。彼は立ち上がって団長に話しかける。

「団長、提案がある。明日はかなりデカイ仕事だ。私は今のところ待機組だが、万が一が無いように団長に能力を貸しておきたい。そうすればより盤石の態勢で明日を臨めるだろう」

クロロが本から顔を上げ、リップルを見つめる。

「いいのか？ お前は能力が使えなくなるぞ？」

「団長は私の能力も知っているだろう。それに、能力が無くても私は問題ないからな」

「フ……そうか。ではその言葉に甘えるでしょう。オレについてこい。シャル、パク、お前らも来い」

「了解」

4人で広場とは別の一室に向かう。その様子をヒソカは笑みを浮かべながらも鋭い目つきで見つめていた…。



「しかし、団長。私の能力は常時発動型だ。それでもいけるのかな？」

リップルが移動中に話しかける。

「そのタイプは今まで無かったが…可能だ。ただし、発動はオレの本を開いた状態のみになるな」

「なるほど…それはちよつと微妙だな」

「そういや、リップルの能力って何さ」

「ああ、簡単に言えば再生能力だ。どんな怪我、致命傷でも瞬く間に復元する」

「はあ？ 何それ!? そんなヤバイ能力ってアリ!?」

「あるからこうしているんだ。だが今の話だと、団長に貸した場合は本を開かないと発動しなくなるからな。だから微妙だ」

「いやいやいや、充分ヤバイでしょ！ 団長無敵になるじゃん！」

「そうね…そんな能力、聞いたことがないわ」

「これからの事を考えると、私が持つてるよりも団長が使った方がいい。私は何とでもなるからな」

「フ…：頼もしいな。だが、助かる。この仕事が終わったら返そう」

「はえーすつごい自信！ リプルって意外と自信家なんだね」

「私も伊達に修羅場を潜ってないからな…：おつ、着いたか」

廃ビルの一室、そこそこの広さの部屋に到着した。以前は会議室か団欒ルームかといったところだが、今は見る影もない。クロロはボロボロのソファアーに座り、同じくボロボロのテーブルの上に念で作った本を出す。表紙には手形がある。シャルナークとパクノダは、団長の両側に控えて立っている。準備が整ったところでクロロが話し出す。

「まずはお前の能力名を教えて貰おう」



「しかしよオ、マチも心配症だなア」

「……………」

「おい！ マチ、聞いてんのか？」

「…ん？ ああ、考え事してた」

「何だア？ まだなんかあんのか？」

「さつきからずっと違和感があるんだ…。何かはわからない。小骨が喉に引っかかっている感じ」

「ああ？ いい加減にしろよテメー！」

フィンクスとノブナガがマチに対してキレ始める。だが、マチはずっと考え込んでいる。

「まあ待て。マチ、なんでもいいからその違和感とやらを話してみろ」

傷だらけの大男、フランクリンが仲裁し、マチに話す様に促す。

「……じゃあみんなに聞きたいんだけど……あたし達は全部で13人、だよな？」

「ハア？ 当たり前ーだろ！ それがどうした？」

「団長も入れて？」

「うん？ 団長入れたら14人じゃねーか……」

「そこがおかしい。それだと片足が余る」

「……そう言えばそうだな……。だが、団長が決めた事だろ？」

「そう言われるとそうなんだけど……あの完璧主義者の団長が、そんな事する？」

「……確かにな。今まで気にもしなかったが、かなり不自然だ。普通なら抜け番で入るからな。そして、そうなった原因は……」

「No. 13のリプル」

マチとフランクリンが同時に結論を出す。

「まさか……奴が『裏切り者』か?! もしそうだとしたらヤベエぞ！ 今2人は付いてる

が、団長は手薄だ！」

メンバーはそれぞれ顔を見合わせ、団長達が向かった部屋に全員で急行した。



「能力名は【地獄ヘル・シー・マンを見る男】だ」

「制約と誓約を含めた特徴は？」

「先程言ったように、強力な再生能力だ。細胞を操作して致命傷からも復帰できる。操作系能力だな。制約として、傷の程度によってオーラの使用量が増える事と、超回復はできないという事、そして、生物への操作系能力が一切使えなくなるというデメリット

がある」

「……いや、それデメリットじゃなくない？」

同じ操作系のシャルナークが思わず突っ込むが、団長は構わず続ける。

「想像以上の能力だ。ずっと欲しくなるな……。では、この本の手形にお前の手を合わせろ」

そう言って右手に持ったまま本を差し出す。リップルはゆっくりと手を伸ばし……。手形に触れる直前に服の色が黒一色に変わる。

「!!」

瞬時に嫌な気配を感じ取った側の2人が動き出そうとするも、背後から針の様な物で刺されて動けなくなる。崩れ落ちる瞬間、《凝》で見るとリプルからオーラで象った尻尾の様な物が2本伸びていた。だが、気づいた時にはもう喋る事も出来ない。様々な後悔が押し寄せる2人だが、団長の盾にすらなれず、そのまま意識が途切れた。

クロロは瞬時に嵌められたと悟った。コイツこそが裏切り者だと。どうやったかは分からないが、偽の記憶まで差し込まれていた事も理解した。だが、リプルは既に手形を合わせている。能力は発動した。中断はできない。そして何より、凄まじいオーラが弾力を持つ束となってクロロ自身を拘束している。いつの間に拘束されたのか全く分からない。分かることと言えば、抵抗出来ないということだけだ。

そして、スキルハンター「盗賊の極意」は、普段はダウンロードに時間はそれほどかからないが、何故か今回は時間がかかっている。コイツの狙いは何だ。盗む時間が終了するまでクロロは質問することにした。

「……何が狙いだ？」

「簡単な事だ。君に私の能力を奪って欲しかった。この呪われた力をね」

「…オレに押し付けようという事か。それ程の力を」

「身の丈に合わなくてね。私は人間らしく生きたいのさ」

問答を繰り返す中、手形から呼び込まれる圧力がクロロを蝕む。尋常な能力ではない。クロロは初めての感覚に思わず嘔吐する。身体が書き換えられる様な感覚と凄まじい圧迫感が襲う。常人なら破裂しているところだ。

「……………貴様、何者だ。狙いはオレの命か」

クロロが朦朧としながらも質問する。既に彼の肉体は限界に近い。後少しで文字通り破裂するだろう。そんな中、質問できるこの男はやはり常人ではない。

「いや、殺さない。完了するまでは。だが…やはり上手くない様だな。これ以上は君が破裂する。私の能力が移った気配も無い。…そして、タイムアップか」

一旦手形を外し、再びリプルは白スーツ姿に戻る。次の瞬間、団員が大挙して部屋に乱入してきた。

「リップル!! 何をしている! 団長はどうした!!」

彼が立ち上がる。既に団長も気絶している。その光景を見て、全員が納得した。やはりコイツが「裏切り者」だったと。その「裏切り者」は平然とした様子で彼らに語りかける。

「残念だった…。本当に…。だが、そこまで落ち込んではいない自分もいるから、これも皆のおかげだな」

ブチツ

ほぼ全員の堪忍袋の尾が切れる音が聞こえる程に全員がキレた。

「「「ブツ殺す!!!」」」

飛び出す直前、フィックス、フェイタン、ノブナガ、ウボオーギンが急に倒れる。そ

こちら彼らは動かなくなった。リップルはいつの間にかすぐ側に立っていた。

「君達はすぐにでも全員始末出来るが、それをやってしまうと少し不都合があつてね。心配しなくても殺しはしないよ。今は。」

4人同時にやられた事で、残りの旅団員は散開しようとした。しかし、気づいた時には次々に倒れてゆく。全員一流の使い手であるにも関わらずだ。

「いい判断だ。だが、私からは逃げられない」

マチが唯一遠くに脱出できた。やはり予感はお当たった！ このままじゃ幻影旅団は壊滅する！ 態勢を立て直して反撃しなければ、どうして、自分だけでも、などの、様々な疑問や考えが走馬灯の様に浮かぶ。考えがまとまらない中、凄まじいオーラの《円》が展開される。次の瞬間にはリップルは目の前に居た。

「あ…」

「どうも君は『勘』がかなり鋭い様だね。念入りに対処しておこう」

そして旅団員は、気付いたら誰も抵抗出来ないまま、全員意識を失った……



「……やっぱりキミはイイ!! 最高だよ?? まだこんな事が出来るなんて……ボクもまだまだだねえ♣?」

奇術師は気絶したフリから目覚め、倒れている団員を掻き分け、クロロに向かう。

「さて……キミが何をしようとしたか、なんとなく分かったよ♣? でも、キミには無理さ

◆？　そもそもキミはヒトじゃないからね??」

奇術師の独白は続く。彼はクロロにたどり着き、ソファアに腰掛ける。そして、クロロを撫でながら語りかける。

「クロロも災難だったねえ… “あんなの” に目をつけられるなんて◆？　キミ程度じゃ彼を受け止める事なんて不可能さ◆？　やっぱりこのボクじゃないと??　ま、生きてるだけでも儲けものだと思えばいいよ◆？　多分忘れてるだろうけどさ??」

奇術師は笑みを浮かべ、クロロにオーラを伸ばす。

「おっ… あったあつた◆？　劣化コピーぐらいは出来たみたいだねえ… 優秀、優秀??　でも、キミじゃ使いこなせないだろうから、ボクがありがたく頂いてくよ◆？　明日から頑張つてね◆？　ボクの考えだと全員死ぬケド??」

禍々しいオーラがクロロから力を引き出す。ひとしきり目当ての能力を奪った奇術師は満足した様に壮絶な笑みを浮かべる。

「シルク・ド・ミニユイ真夜中のサーカス」開演日までもう少し…楽しみにしていてね…
 キミのショーを観客席から見物させてもらうよ、『アンブレイカブル壊れない男』??」

◆ ?

それまでは

90、始動

それから旅団員は、徐々に目覚め始めた。しばらくして、全員が目覚め、そして何事も無かったかの様に寛ぎ始めた。彼らの中では団員が増えていた事や、実質1人に壊滅させられた事、果てには自分達が眠っていた事すら全く記憶から消えていた。

彼らの中では、ただ時間通りに集合し、作戦を聞き、英気を養う為に寛いでいただけであった。

——2名を除いて

(この記憶は何…？ 夢…？ 夢にしては妙な現実感が…。そもそも、私達は何故寝て

いた…？ 何故、誰もそこに指摘しない？)

その内の1名であるパクノダは、困惑していた。彼女は、その能力故に記憶を完全に消され、改変される事を免れていた。それも辛うじて、という程度だが。ある意味奇跡とも言える。だが、それは彼女の状況を良くしたわけではない。寧ろ苦しめた。

(団長が…私達がなす術なくやられるなんて…悪い夢だと思いたい……だけど…)

夢か現か、それすら曖昧な中、それを伝えるべきかどうか悩んだ。誰にやられたか、それすら分からない。自分が白昼夢を見ていたと考えるのが本当は1番楽な対処だ。だが、その内容が余りにも見過ごせない。そして、全員が寝ていたという事実がある。そして、それに気づいているのが自分しかない。

まずは情報収集したい。そのためには自身の能力を発動させるのが1番だが、団員はパクノダの能力をある程度知っている。いきなり記憶を読ませてと言っても不審がられて拒否されるのがオチだ。最悪敵対されかねない。よって、会話から糸口を引き出す。パクノダはそう決めた。例え不審がられても、彼女は自身の能力を信じ、自身の見た光景を伝えなければと決意した。

「マチ…あなた、この仕事についてどう思う?」

「ん? そうね…団長も大胆な作戦を考えたわねってところね。全員集合するなんて久しぶりだからどんな内容かって思ったけど、全員集合させる程の内容ではあったわ」

「……あなたの『勘』に引つかかるところはない?」

「あたしの『勘』も万能じゃないんだから。でも、今回は特に無さそうだね。最終的には上手くいくんじゃない? それがどうしたの?」

「いえ……それならいいのよ。ただ…あたしの勘違いかもしれないけど、ちょっと引つかかるところがあつてね」

「……珍しいわね。アンタがそういう事を言うなんて。で、何が引つかかてるのさ」

「あたし達は今日の正午に集まって、団長の作戦を聞いた…。ここまではいいわね」

「うん、そうだね」

「それからあたし達は何してた?」

「何言つてんの? 今までアジトで好き好きに寛いでたじゃない。違う?」

「……そこがちよつと分かんないのよ。あたしには……」

「?」

急にパクノダの会話が止まる。パクノダはその場でフリーズしたかの様に固まってしまい、動かなくなつた。

「パク…大丈夫？」

「……あ、あ”あ”あ”あ”あ”あ”……！」

「!! パク!!! どうした!？」

その声に旅団員が反応する。団長も読書を中断し、2人を見つめる。しかし、しばらく呻き声をあげた後、不意に止まった。パクノダは妙に清々しい顔でマチや団員の方を向いてこう告げた。

「な〜んちゃって♪ ふふ、どう？ ビックリした？」

旅団全員がホツとした様な顔で安堵し、その後キレ出す。

「アホか！ お前がやるとシヤレになんねーんだよ！」

「冗談も時と場所と人考えるね」

「パクがその手の冗談をやるなんて珍しいな。マジでビックリしたわ」

それぞれがそれぞれの感想を述べ、それぞれの寛ぎスタイルに戻り出す。それに対してパクノダは「ヒマだったからやって見たの。面白かったでしょ？」と言っていた。団長も軽く笑った後、読書を再開した。



ドツキリの当事者であるマチだけは、目の前で明るく笑うパクノダに対してどうしても上手くりアクションが取れなかった。何故なら、話し掛けた時の彼女の表情は決して

冗談で済まされない程の真剣味を帯びていたからだ。長年の付き合いだから分かる。アレは本気だった。では、彼女に何が起きた？ 念攻撃か？ しかし、深く考えようとするばするほど煙がかつた様に考えが逃げていく。曖昧模糊とした頭の中で、パクノダの様子がおかしい事、しかし、それを証明できない事に苛立つ。

堂々巡りする考えの果て、最終的にマチは、自分だけはやはり警戒していようと決意した。

……やはり？

何かがおかしい。「前」もそう思っていた筈だ。では「前」とはいつの事だ？ ……分らない。だが、自分の「勘」は問題ないと告げている。今までこの自分の「勘」に

よって窮地を脱した事がいくつもあつた。だから大丈夫な筈だ。そう言い聞かせて、無理矢理自分を納得させた。

——その「勘」自体が、偽りの物だとも知らずに。



「ん？」

「どうした？」

「いや……念の為に仕掛けておいたものがどうやら発動したようだ。……気づかなければ苦しまずに済んだのにな」

「またエツグい罨とか仕掛けたのか？ 全くタチわりーな」

「憶測で決めつけるのは良くないぞ。まあそんなに間違つてはないがな」

「やっぱりな。こうなると敵が哀れになるぜ」

「だからといって、気を抜けばやられるのはこちらだ。敵は容赦してくれんぞ。君達も今回ばかりは死闘になるだろうから徹底的に『調整』するからな」

「ゲツ、まだやんのかよ……」

「当たり前だ。万が一も起こらない様にするから真剣にやれ」

「はあ……参ったな。全く」



— 9月1日 午前

この日の午後にはお宝が金庫から出され、地下競売場へ運ばれる。闇オークシヨンの主催者である十老頭も既に集結し、ヨークシン最上級のホテルの最上階の会議室にて打ち合わせを行っていた。

「——アンダーソンの。首尾はどうかね？」

十老頭である一人が尋ねる。彼はベゲロセ連合辺りを治めるマフィアのボスだ。彼が司会進行の立場である。

「何も問題ない。強いて言えば、貴様らの面をこれから10日も見なきやならん事が苦痛なぐらいか」

その言葉に他の老頭が反応する。

「ケツケツケツ……言いおるのオ……。相変わらずムカつく奴じゃ」

「調子に乗るなよ小僧。このイベントは我らの威信が懸かっておる。貴様は万が一の失敗も許されんからな」

「ほう……貴様らはいつからアンダーソンに意見ができるほど偉くなったのかね？」

「よさんか、アンダーソン。他の者も落ち着け。……だが、本当に大丈夫かね？」

「くどい。何も問題ないと言ったはずだ」

「しかしのオ……どうやら一騒動ありそうじゃが？」

「……根拠は？」

「貴様の子飼いの組に人氣の占い師がおるじやろう」

「ああ、あの悪趣味女か。気に食わないが占いは一流らしいな」

「……相変わらずお前さん方の潔癖にも困ったもんだな。マフィアの癖に。とにかくソイツの予言に凶兆が出たらしい」

「たかが占いに翻弄されるとは、実に滑稽な事だ。それで？」

「……この競売は荒れるらしいな。我らも他人事ではないぞ。死を暗示した予言が出ておる。問題は其奴の占いは百発百中である事だ……この競売は中止すべきではないのか？」

「それこそ愉快的な戯言だ。貴様らが言ったのだぞ。あるかどうかも分からん威信を懸けているとな。第一、荒らす奴がいたら我らの怖さをじっくりと教育してあげるいい機会ではないのかね？」

「皆が皆貴様らの様な古い考えの武闘派ではない。そういった予兆が出たのであれば、

万全を期すのが頭の務めではないのか？」

「我らには関係の無い事だ。競売は予定通り行う。もし不安があるならば、少なくとも自分の身は自分で守れ。貴様らにも直轄の能力者ぐらい居る筈だぞ」

『陰獣』か……。確かにそうだが」

「ならば良いではないか。我らも不測の事態に対して備えぐらいはしておる。あらかじめ言っておくが、ウチの『陰獣』はウチで使うからな。場合によつては時間と場所を変更する事も考慮に入れよう。話は以上だ」

そうして、当代サヘルタ地区の十老頭の一人であるジョンⅡアンダーソンは席を立つ。残された者達はざわめきの中、競売について話し合う。

「全く……大した自信家じゃのう」

「奴はああ言うが……実際に被害が出てからでは遅いぞ」

「だが、奴にはこれまでの実績も確かにあるから何とも言えんところじゃ」

「冗談じゃない！ 命が懸かっておるのだ。儂は抵抗させて貰うぞ」

「ではどうする？」

「予言では、本日何者かの襲撃がある。そいつらがブツを搔つ攫うらしい。無策であれ

ば甚大な被害が出る。儂のがこれだ」

薄暗い市場の日に招かれざる蟲が訪れ

財宝と竜の頭を9つ腹に収めるだろう

その日は市場を開いてはいけない

死の天使が貴方を見つめているから

「ふむ……この詩の内容通りなら、競売をやらなければ良いのだな？」

「その通りだ」

「では、『梟』に依頼し、ブツを全て移動させる。後は襲撃者はそれぞれの『陰獣』に任せよう」

「客への連絡は？」

「もう当日だ……間に合わん。その場で延期を宣言すれば良からう」

「ふむ……勝手に決めたら奴は激怒しそうじゃな」

「何、我々も同格じゃ。問題無からう。途中で席を立ったアヤツが悪い。後で知らせを遣わせる」

「では、そういう事で」

残りの十老頭は気付いていた。9つの竜の頭とは即ち自分達の事であると。このままであればアンダーソンだけは免れるだろう事も。彼が超熟練の念能力者である事は公然の秘密だ。アンダーソンファミリー以外の『陰獣』にすら「アレは勝てない」と言わしめた人物である。そうなると、死ぬのは確率で言えば自分達でほぼ間違いない。そして、このまま自分達がみすみす死ぬ事が有れば、世界中のマフィアはアンダーソンに支配されるだろう。であるならば、生き残りを賭け、抗う必要がある。

しかし、逆に言えばこれは絶好の機会とも言える。十老頭の中でも絶大な権勢を誇るアンダーソンを蹴落とすチャンスだ。ヨークシンのアンダーソン主催のオークションに泥を塗り、少しでも彼の勢力を削る。その為にも老頭達は手を組み、独自に動き出す。彼ではなく、自分達が襲撃者を捕えられれば、よりベストだ。彼らは自分達の『陰獣』に指示を出す。敵を発見したら直ちに急行して、生死を問わず連れてくるように、と。

一頻り悪巧みをした後、彼らは解散した。自分達は巻き込まれない様に、この日はこれ以降引き籠もるつもりで自室へと向かった。



「——とまあ、そんな感じで勝手に動くでしょうなあ」

「予定通りと言えば予定通りだな。それならばそれに合ったプランにするだけだ」

「ま、そういう事ですな。しかし、いいのですか？」

「何がだ？」

「彼らが死ぬ可能性、ですよ」

「……私の手の届く範囲はアンダーソンと親しい者、そして、救いを求める者や利害が一致した者だ。力を持つ悪どい奴らまで無償で救う義務はない。……いや、言い訳だな。結局は好みの問題だ。……私を酷い奴だと思うか？」

「いえいえ、むしろそれを聞いて安心しましたよ。何でもかんでも救っていたら最早それは人間ではない。今回襲撃してくる旅団にとってすら彼らなりの『正義』があるでしょう。結局は貴方自身がどうしたいか、だ」

「私自身が、か……」

「たまたま貴方は救える範囲が普通より大きいだけです。……あえてハッキリ言います

が、貴方は我々すら救う義務は無いのです」

「いや、しかしそれは……」

「言つたでしょう。『義務』は無い、と。貴方がそうしたいならそうすればいい。我々は助かりますがね。仮に貴方が我々を気に食わなければ、滅ぼしてもいい。貴方にはその力がある。それでいいじゃないですか」

「そんな極端な……」

「それが“人間”ですよ、カームさん。なまじ力があるから勘違いしそうになるかもしれませんが、“救世主”も怪物の一種です。『正義』の名の下に敵対者を葬るだけの違いだ。先程も言いましたが、『正義』はそれぞれにありますからね。キリが無いんです。葬られる側から見たら正しく怪物でしょう。貴方はそうなりたいのですか？」

「いや……そうだな。私は自分の好きな者の為に闘う。そして、好きな者の為に救う。それでいい」

「ふふ……迷いは取れましたか？」

「ああ……。気を使わせて悪かった。ありがとう」

「どういたしまして。では、作戦を開始しましょう。頼りにしてますよ、『鵜』」

「……いや、それじゃないとダメなの？」

「まあ今回限りだからいいじゃないですか。どうせウチには『陰獣』いないですし。毎年

奴らの手前適当に出してるんです。それに、貴方にはピッタリですよ」

「…ジョンも割といい空気吸ってるよな。マイケルの子孫とは思えないんだが」

「それは光栄ですな。人生楽しまなきや損ですよ。さあ行きましょう」

そうして、最高戦力である2名は動き出した。彼らはもう止まらない。迷わない。旅団にとって、かつてないほどの危機が訪れようとしていた。



——9月1日 午後

旅団員の襲撃班、会場を固める班はそれぞれに分かれて準備を整えている。狙うは地下競売場が始まる直前。その競売が行われるビルには既に団員が何名か潜み、機を伺っていた。

——しかし、いくら待てども、一向に金庫が開く様子が無い。

金庫はフェイクかと理解し、別の可能性を当たるも、全くお宝が運び込まれた様子が無い。

団員は、会場にいた競売オークションニアの進行役を拉致し、フェイタンが拷問にかける。オークションニアは十老頭直轄の人物で、アンダーソン配下ではない一般人だった為に抵抗できず、哀れにも凄まじい拷問の中死んでいった。彼は十老頭直轄の『陰獣』が金庫からお宝を運び出した以外は知らないと、最期まで絶叫していた。

オークションの開始時刻が近づいている。

団員はとりあえず、予定通り集まって来ている客を全部殺してから団長に報告しよう
と変装を済ませ、会場内に赴く。

次々と集まる客達。広いホールに満員の客が集結し、オークションを心待ちにしている様子だ。

そして、定刻となった。

ホールのステージ上からフランクリンとフェイタンが歩いて出て来た。壇上に立ち、いざ台詞を吐こうとした瞬間、

忽然と観客が消えた。

!!!

「おい！ どーなってんだ!? いきなり客が消えたぞ！」

スーツ姿のウボオーギンがホールに飛び込んでくる。

「……敵ね」

シャルナーク、シズクも集まったところでフェイタンが戦闘態勢を取りながら告げる。間違いない。これは念能力だ。客の気配は一切ない。突然姿を消してしまった。こんな不可解な事ができるのは念能力以外にはない。

「警戒しろ……相手はかなりできるぞ」

「移動した？ それとも……最初から居なかった？」

「オークシヨニアと会場スタッフは本物だたよ」

「……まだ、どちらとも言えないな。しかし、どちらでも厄介極まりないな」

「楽しみだぜえ……。さぞかし強え敵なんだろうなア！」

「迎え討つとするか」

それから10分程待つが、誰もやって来ない。団員は警戒しながらも、一旦脱出する事にした。どんな能力かもわからない。そして、攻撃された形跡もない。ただ、あれだけいた人数が消え去ったのだ。非常に強力な念能力といえよう。だが、幻覚であれば効果範囲から脱すれば元に戻る可能性も高い。全員が不可解な気分になりながらも、屋上にある気球に乗り込んだ。

周辺を警戒していた『陰獣』は、当該ビルから不審な飛行船を発見した。直ちに仲間に情報を伝え、それを追跡する。なぜか客は隣のビルに移動しており誰一人として欠けていなかった。『陰獣』すらも知らなかったのだ。襲撃者が知るはずもない。よって、お宝もなければ客もないビルを敵は襲撃したことになる。そして今、ビルはオークションとスタッフ以外は無人のはずなのに、そこから出てくる奴がいるとしたら、それは敵に他ならない。

先行して「蚯蚓」、「蛭」、「病犬」、「豪猪」が車で追跡する。残りの5名も後から追いかけている。…本当はもう1名いるが、ソイツは特別であり、加わらない。アンダーソン直轄の陰獣「鶴」は、その時々で人物がコロコロ変わる上、アンダーソン以外の命令は聞かないからだ。

「納得いかねえ。いつつも俺らばかりだぜ。たまには『鶴』も来いつてんだ」

「…アンダーソンだからしかたないね。うん」

「奴らは『陰獣』なんぞいなくても上層部は俺らと同じぐらい強えーからな…大体マフィアのボスがあんなのなんて反則だろ」

「今回も他の老頭の尻ぬぐいというやつだ。仕方ない」

「しかし、まさか客ごと移動しているとは思わなかったぜ。よくバレなかったな」

「それだけ相手が大了ることないってことだね。うん」

「んじゃ、サツサとおわらすか。後の奴らの出番はないかもな」

こうして、嚴重警戒をしている旅団を追いかける「陰獣」達。しかし、彼らは間違っていた。気づかなかったのではない。気づけなかったのだ。他ならぬ最後の陰獣「鶴」のせいで。彼らの親が下手な欲をかかなければ、彼らは死地に向かうことはなかっただろう。だが、現実は無情である。彼らはすぐに気づくだろう。相手がかの有名なA級賞金首「幻影旅団」であることを。そして、気づいた時には手遅れだ。

彼らは「教育」に使われる。正しい狩りの仕方を学ぶ教本として。そして、その教本

である旅団も、「正しい狩り」の実践相手に使われる。

誰もが「アンダーソン」と「鵜」の掌の上で踊っていた。

9 1、沼

「…追ってきているね。アレが団長の言ってた『陰獣』かな？」

「ようやく姿を現したか！ 待ってたぜエ!!」

「警戒しろ。奴らの能力はかなり強力だ。複数で対処するぞ」

「ああ!?! ここまでストレスためて、それはねーぜ!」

「先ほどのように撤退する羽目になるよりはマシだ。我慢しろ」

「チツ! しゃーねえなア…わかったよ。まったく、覚悟しろよ!」

「おーこわ。相手が可哀そうになるね」

「お宝のありかとか知ってそうだね」

「ま、あとはアイツらに直接聞くね」

——ヨークシンの東　ゴルドー砂漠

『陰獣』9名で合流し、幻影旅団と相對する。旅団も氣球から降りて、砂漠の一角の岩石地帯で向かいあつた。

「よオ、お前らオークシヨニアやスタツフ皆殺しにしといてズラかろうとは太え奴らだな。大人しく付いてくるか、ここで死ぬか選ばせてやるぜ」

「お前ら『陰獣』か？」

「そうだと云つたらどうする？　逃げるか？」

「お前ら、客と宝はどこにやった？」

「これから死ぬ奴に言うわけねーだろ。バカが」

「じゃあ喋りたくなるようにしてやるね」

「結構好戦的だな。うん」

「構えろ、来るぞ」

そこから、一方的な蹂躪劇が始まった。「陰獣」も弱くはない。癖はあるが、マフィアの最強戦力である。プロの中堅ハンター以上の実力はある。

ただ、相手が悪すぎた上に、全員が全力でかかってくるからたまったものではない。何名かが足止めしている隙に「梟」が「不思議で便利な大風呂敷」で纏めて閉じ込めようとすると、拘束役が纏めて吹っ飛ばされて肉片になる始末だ。毒を注入しようと飛びかかるも、糸や刀で細切れにされる。戦闘と言うよりは、正に蹂躪と言った方がいい内容だった。

そして、旅団は気づいた。「梟」が運び屋だと。

——数分後、「梟」以外の『陰獣』は全滅した。「梟」も糸で嚴重に拘束され、ズタ袋を被せられている。

「あつけなさすぎね」

「でも、コイツら9人しかいなかったよ？」

「と、いうことはソイツが客を消した奴だな」

「まだわかんないけどね。とりあえずコイツに聞いてみようか」

「……………」

旅団はその場で「梟」への尋問を始める。拷問役のフエイタンがすぐさま彼の爪を剥がし始める。「梟」はすぐに吐くだろう。これから彼を待つのはただ苦痛のみである。そして、終わったとしても解放はされない。その能力すら奪われる事になるのだ…。



「待て！ クラピカ！ 今行ってどうする！」

「奴らがいる。私にはそれだけで充分だ」

「死ぬぞ！ お前も見てただろ!!」

「関係ない」

「おい！ ゴンもやめろ！ それは無謀通り越して自殺行為だぞ!!」

「アイツら…あんなにカンタンに殺して…。拷問までかける必要ないじゃないか!!」

「だーっ!! 今行ったら仲良く死体の仲間入りだが！ 目エ覚ませ！ カーム！ 何とかしてくれ!!」

「ふむ……やっぱりこうなったか。仕方ない」

憤り、今すぐ敵地に乗り込もうとする2人の前に、突然花畑が広がる。もちろん幻覚だ。だが、そのあり得ない光景を見て2人も冷静になれたようだ。

「さて、落ち着いたかな？ ……クラピカ、君は行ってどうするつもりだった？ 君の目標は玉砕する事か？」

「……………」

「君もだ、ゴン。行ってどうするつもりだった？」

「オレは……あの人を助けようと…」

「勇氣と無謀は違う。彼らはその道のプロだ。当然あなる事も考慮の内だ。君にはそれがあつたか？」

「……だからと言つて……！」

「君達の行動は最も愚かしいものだ。一時の感情で暴発すれば、生命がいくつあつても足らん。時にはそれが必要な時もあるが、それは今じゃない。第一、死ねればまだいい方だ。あの様に拷問にかけられて仲間を危機に晒す事も充分考えられる。……しつかり見ておけ。あれが生命を懸けた闘いで負けた者の姿だ」

「……（ごめんなさい）」

「……すまなかつた」

「分かればいい。奴らはまたきつと来る。これで諦めるような奴らではない事は分かつた筈だ。クラピカよ、怒りはその時までとつておけ」

「……承つた。作戦通りに、だな」

「その通り。では戻ろう。奴らが動き出す前に」

そうして、その集団は姿を消した。次に彼らに遭遇した時こそが、死闘の開始だと理解しながら。



「梟」から情報を得た旅団員は、一旦アジトに戻り、首尾を報告する。お宝は見つからなかったが、手掛かりは掴めた。団長は早速「梟」から「不思議で便利な大風呂敷」を奪い、自ら旅団を率いてお宝の強奪に向かう。「アンダーソン」を警戒して、全員態勢だ。最後の「陰獣」も待ち構えているだろう。油断なく、確実に奪りに行く。時刻は夜8時半。まだまだヨークシンの長い1日は終わらない。



「バカな!? オークションを開いた!!?」

「それが…別の会場で開催していると連絡が入っています…」

「ふざけるな! 『商品』はこちらに移した筈だ!! 奴らは『何』を競売にかけている!!」
「それについてはアンダーソン様からメッセージを頂いています…こちらです」

—— 諸君、ごきげんよう。どうやら襲撃があるとの情報がこちらにも入ったので、一旦会場を移してオークションは予定通り開催した。今も開催中だ。事後承諾になって済まないね。だが、君らも同じ事をしたんだから構わんだろう。そちらにある商品は全て『贋作』だ。こんな事もあるうかと用意しておいた。これで諸君を含めた我々の威信は守られたな。昼にも言ったが、心配なら身の回りを固めておけ。自分の身は自分で守る。マフィアじゃなくとも基本だな。私は現在競売の真つ最中だ。本日は連絡は繋がらないと思つてくれ。諸君の健闘を祈る。ジョンⅡアンダーソン——

「~~~~!! あんの小僧め~~~~!!」

老頭の1人がジョンからのメッセージをビリビリに破き捨てる。

「不味いぞ!! 予言では今日開催したら我々全員が死ぬ!! 急いで対策せねば!!」

『陰獣』はどうした!? すぐに呼び戻せ!!」

「それが…全員全く繋がりません!」

「クソっ!! やられたか!! 肝心な時に使えん奴等だ! …そうだ、ゾルディックを呼べ!!!」

「もうやっておる!! じゃが、どんなに急いでも今日中には間に合わんとこの事だ!」

「……『陰獣』が死んだと仮定すると、襲撃者は奴らから情報を得て、『贗作』の方を狙って来るんじゃないか!?!」

「……儂はまだ死ねん。あと3時間で日が変わる。すぐにでもここを出て、予言を成就させない為に、競売を中止させよう!」

「馬鹿が。すぐに出るのは当然だが、アンダーソンが主催していて、しかも別会場で競売を行っているなら最早我々には止められん。どうせスタッフ諸共奴らの幹部連中が仕切ってるだろうからな!」

「武力行使は?」

「それこそ最悪の選択だ。そもそも武力では奴等には勝てん。200年以上も国を武力で支配していた奴らだぞ。第一、それをやったら我々が悪者になる」

「くくく仕方ない。我々で直接会場に向かつて止めるしかない」
「それがベターか…。薄い望みだがな。それに賭けるしかあるまい…」



9人の老頭達の誤算は、競売が行われているという情報を遅れて受け取った事であった。もちろんこれはジョンがワザと遅らせた。彼らが受け取ったのは、オークシヨニアとスタッフが皆殺しにされ、客を安全の為に移動させたという部分のみだ。ジョンは新会場を嚴重に封鎖し、競売中は絶対に情報が漏洩しない様に蟻の子一匹通さない体制を整えた。また、ビル周辺に待機している護衛等も解散させる徹底ぶりだ。流石に十老頭であり、主催者であるジョン自らそう言えば、周りの護衛も従わざるを得ない。

マファイアの世界は綺麗事ばかりでは回らない。気を抜けば蹴落とされたり裏切られたりする事など日常茶飯事だ。ジョンはその中のトップだ。それぐらいの事は平気でやる。むしろ、出来ないようじゃファミリーを守るドンは務まらない。さもなければ蹴落とされるのは自分達だからだ。

これで少なくともアンダーソンの面子は保たれる。ジョンにとつてはハッキリ言つて他の老頭など知つたこつちやない。この後はこれから控える幻影旅団との抗争が待っている為、そちらに集中しようと手早くオークションを進めていた。



老頭達が準備を終えてロビーまで到達した時、奇妙な大男と侍風の男が現れた。護衛達は警戒し、銃を抜き警告を発するも、彼らは構わず進む。遂に至近距離まで到達し、護衛達も先頭の大男に発砲するも、まるで応えた様子がない。瞬時に念能力者だと判断し、護衛の念能力者が前にも出るも、片っ端から紙切れの様に引きちぎられていく。その間、侍風の男は後方にいる何人かの首を気付いた時には切り落としていた。

1分後、ホテルマンや受付、一般客以外をあらがた始末した彼らは無言で撤退する。彼らはホテル前のマフィアの車を強奪し、逃走を開始する。当然ホテル内は大騒ぎになり、すぐさま通報を受けたパトカーや連絡を受けた老頭達の部下のマフィアが2人の車

を追跡する。

「おーおー。追いかけてくんぜ。ご苦労なこった」

背後には大量のパトカーと黒塗りの車が迫っている。

「チツ、はえーな……。だからテメーと組むのは嫌なんだよ。遊びすぎだろ」

「ガツハツハ！ 充分早かっただろが！ 最速記録だぜ！」

「サツサと済ませりゃいーんだよ！ 遊んでねーで！ で、どうすんだ？ 後ろの奴らはよ」

「んなもん、こうすんだよ！ ぬううん！」

大男、もといウボオーギンはいつの間にか隣に座らせていた十老頭のうち一人の死体を、ドアを開けて勢いよくブン投げた。約80キロの物体が高速で1番前のパトカーに衝突し、大破する。後続車も次々と巻き込まれて追跡が止まる。

「っし！ ストライク!!!」

「何でんなモン持つてきたかと思えばその為か。とりあえずは距離は稼げるな」

「運転は任せませ。…しかしよオ。アイツら妙な事言つてなかつたか？」

「…：まあな。別の所でオークションをやつてゐるって奴だろ？ ブツもねーのにどうしてんだ？」

「…あの『陰獣』のヤローが言つてる事はウソじゃねえ。フェイタンとパクが聞いたんだから間違いない。だとしたら…：考えられるのはオレらをハメようとしてゐる奴が他にゐるって事だ。恐らくソイツらが『アンダーソン』だろ。もしかしたら金庫の方も偽物かもしれねえ」

「…オレもその可能性は考えませ。で、団長に連絡は？」

「さつきから掛けてんだが繋がんねーんだよ。電波が悪りーってな」

「おま!? そーゆーコトは早く言えよ!! もしかしたら向こうがピンチかもしれねーじゃねーか!!」

「それはねえ」

「何でだよ!」

「いや、言ひすぎた。ほぼねーだろ。団長の班は集団だ。ちつとやさつとじゃ手を出せねえ筈だ。もしオレが敵で、狙うとしたら…」

「……人数の少ないオレ達か！」

「その通りだ。楽しくなつてきやがったぜ。オレの考えが正しければそろそろ来るぞ」
「チツ。戦闘バカめ。だからテメーと組むのは嫌なんだ」

「いいからちゃんと運転しやがれ……来たぜ！」

そろそろヨークシン郊外に出ようとしたところで、辺りが一面の霧に包まれる。数瞬で車は五里霧中の様な中を走行している状態になってしまった。

「クソツタレ！ これじゃどこ走ってるかわかんねー！」

次の瞬間、車が凄まじいスピードで何かに衝突する。衝突した瞬間、2人は瞬時に脱出する。

「あつぶねー！ ……つて、どこだよここは!!」

相変わらず辺りは深い霧に包まれている。一寸先も見えない状況だ。

「霧で何も見えねーな。しやーねえ、背中合わせろ」

「チツ…やつぱりこうなるか。サツサと『コイツ』をぶつ殺して団長達と合流するぞ」

2人は背中合わせで戦闘態勢をとる。これまでもつとヤバい状況でも、この2人は生き延びてきた。その真価が今、問われようとしていた。



——時は少し遡る。

ホテルのロビーで阿鼻叫喚の騒ぎに包まれる中、その合間を縫って奇妙な風体の集団がホテル内に侵入していく。目指すはホテル内に設置された大金庫。暗証番号含めて「梟」から聞き出している。彼らは比較的あっさりと金庫を開け、目当ての物を奪い、小

さく収納する。

そして彼らは、ホテルの非常階段から悠然と脱出する。陽動の2人は上手くやつてくれたようだ。そのまま、来た時と同じ様にアジトに向かつて移動する。

「あつさりだたね」

『敵』が張つてるかと思つたが、んなこた無かつたな」

「……………」

「団長、どうしたの？」

「いや…………お前らの言う通りだ。あまりにもアツサリしすぎている。『アンダーソン』とはこんなものか？」

「いや、ノブナガ達の方にいたんじゃねーの？ アイツ、最後までゴネてたけどな」

「だとしても、何かが引つかかる…。何か見落としている様な…」

「とりあえずアジトに戻ろうよ。話はそつからだよ」

「……………そうだな。確かめたい事もできた。急ぐぞ。ウボオーとノブナガも先に戻っている筈だ」

「合流できたら祝杯だね！ 楽しみ！」

「……………」

旅団はそれぞれの思惑を胸に、一路アジトを目指す。先に陽動の2人が戻ってくる事を信じて。あの2人はコンビだと無類の強さを発揮する。きつと大丈夫だろう。それは長年旅団を支えてきた特攻の役目を持つ2人だからこそその信頼。だから、どんな状況でも必ず戻ってくる。彼らはそういう存在であつた。

——だが、それは甘い想定。彼らはあまりにも強く、それ故に気付けない。自分達の想像を遥かに超える怪物が潜んでいる事に。そして、彼らはすぐに気づくだろう。自分達が既に底なしの沼に飲み込まれている事に。それに気づいたところでもう手遅れだ。すぐに頭まで飲み込まれるだろう。

皮肉にも、蜘蛛は捕らえられた。彼らは、もがけばもがく程絡まる糸に触れてしまつていた——

92、ノブナガとの死闘

「で、どーすんだ？ また襲ってこねエゼ」

「ケツ！ かつたりい奴らだな。しやあねエ。『アレ』やるぜ」

「げっ、マジかよ。この状況でか!？」

ノブナガが止めようとするのも構わず、ウボオーギンは大きく息を吸い込む。

「っは!!!」

直後、凄まじい大音響が辺りに響きわたる。それはビリビリと周辺を震動させ、まさに音響兵器とも言える攻撃であった。

「バツカ野郎!! やるなら離れてからやれや!!!」

「こーゆーのはいきなりやるから効果あんだろ。つて、聞こえてねーか。だが、見ろ。霧が晴れてきたぜ」

ウボオーギンがギヤーギヤー言うノブナガにジェスチャーで知らせる。辺りは彼の言う通り、霧が晴れてきた。そして現れたのは一面の荒野だ。

「……どこだ? こゝは」

耳が元に戻り出したノブナガが呟く。

「わかんねえ。少なくともヨークシンからは離れたっばいな。ちと行き過ぎたらしい」
「辺りに気配がねえな…。肝心の『敵』はどこだ?」

「さあな…。オレが思うに、アレだけで引く様な奴じや絶対ねえ。案外近くにいるかもしれねえから警戒しとけよ」

「テメーに言われなくてもわかってるよ! 出た瞬間その素っ首叩き落としてやるぜ」

「ほう。ではどうぞ……」

第三者の声[・]が[・]割[・]り[・]込[・]む。2人の至近距離に白スーツの男がいつの間にか立っていた。2人は警戒を怠らなかつた。だが、ソイツは突然煙の様に現れた。

2人は一瞬死を意識した。余りにも自然に死線を越えられたからだ。2人の実力は怪物級と言つていい。だが、それを全く意に介さずに攻撃圏内に立たれていた。相手が声を掛けなければそこで終わっていただろう。

2人は生存をかけて、全力で反撃に移る。神速の抜刀と、超威力のパンチが白スーツの男に迫る。その刹那、2人は相手が帽子の下で笑っているのを確かに見た。

盛大な風圧と風切り音が周囲に響き渡る。…スカされた！　そして、相手は少し離れた場所に悠然と立っている。2人には移動した瞬間が全く見えなかった。元からそこにいたかの様な錯覚すら覚えるが、確かに奴は近くに居た。彼らは警戒レベルを最大まで上げる。

「テメエが最後の『陰獣』の『鶴』か。どうやら他の奴らよりは出来るようだな」

ウボオーギンが話しかける。その問いに未だに戦闘態勢を取らない男は答える。

「その呼び方は便宜上付けられたものでね。あまり好きではないんだ。まあ他の呼び方も教えるつもりはないから別にいいが」

「んなこた聞いてねえ。テメエがオレらをおちよくった野郎だな？　この場でブツ殺してやる！」

側で聞いていたノブナガも吼える。

「ふむ…確かにそうだ。だが、君らが我々を狙わなかったら私もちよつかいをかけな

かったさ。今からでも諦める気はないか？」

「バカ言え！ オレ達は止まらねエ。オレの楽しみはテメエみたいな勘違いヤローをブチ殺す事だ。さっきの奴らよりは楽しめそうだからな…覚悟しろよ」

「引く気はない、か。やはり君達は私の『敵』だ。仕方ない。だが、君達には先に相手がいてね。まずはそちらからやってみようよ」

「ハッ。やっぱり団体で来てやがったか。だが、んな事させると思うか？」

「ウボオー、気をつける。コイツは恐らく操作系だ。操作されねエようにしろよ」
「誰に言ってるんだ。テメーこそ気をつけやがれ！」

そして2人が仕掛けようとする直前、「鶴」は右手をウボオーギンに向けた。そして後方に指を指す。

「君はあつち」

その瞬間、ウボオーギンの「真後ろ」に10倍ほどの重力がかかる。2人とも《凝》をしてはいたが、全く何をされたかも分からずにウボオーギンは後方に吹っ飛ばされる。

「うおおおおお!!!」

「ウボオー!! テメエ…何しやがった!!!」

「さてね…では選手交代だ。出てこい」

消えていた気配が浮かび上がり、3名が姿を現す。ゴン、キルア、レオリオである。

「…ガキじゃねーか。コイツらをぶつ殺せばテメエが相手してくれんのか?」

「無論だ。無理だと思うがね」

「上等だぜ…!! 覚悟しろよ、ガキども」

ノブナガから強烈なオーラが噴出する。3人は冷や汗をかきつつも、臆する事なく向かい合う。

「では、朗報を待っているよ。これで負けるようでは見込みがない。もし負けたらこの騒動から外す。そして大人しく故郷に帰れ」

そう告げると、「鶴」は背中を見せて悠然と去っていった。一方、ノブナガは怒り心頭である。舐められている。この自分が、だ。

自分は仮にも幻影旅団の戦闘班である。先程の「鶴」ならともかく、新しい相手はガキ3人だ。しかも、恐らくコイツらは弟子だと思われるが、その踏み台にされた。これが舐められてると言わずして何と言う。

「ふざけやがって……ペーパーのクソカス共が……！ 1分だ。1分以内にテメエらを膾斬りにして、さっきのヤローに首を投げつけてやる……！」

ノブナガは左手で刀を持ち、右手で即座に抜刀出来る体勢を整える。

「……予想以上にヤバそうだぜ。……気合い入れるぞ!!」

レオリオが声をかけ、全員が「堅」を行う。そのオーラ量を見て、ノブナガも考えを改める。

「……ちと訂正。『そこそこ』は出来るらしいな。だが、無意味だ。これからそれを教えてやる」

言い終わった瞬間、ノブナガは自ら急接近した。キルアにターゲットを決めたらしい。凄まじいスピードで近づき、射程圏内に入ると抜刀を行う。ただそれだけだが、ほんの一瞬にして行われたため、他2人は反応が遅れた。

キルアが避けられたのは、まさしく僥倖であった。彼は予め帯電していた。故に、ノブナガの動きも辛うじて反応出来ていた。そして、自分の首に迫る刀を身体ごと下がる事で何とか躲す。正に首の皮1枚の差で首が落とされる事から免れた。

「キルア!!」

そう言い終わらない内にノブナガは踏み込んでいて、神速の二の太刀がキルアを襲

う。しかし、キルアも【神速^{カシムル}】で遙か後方へと下がる。

二の太刀を振り終わったノブナガは近くの次のターゲットを狙おうとゴンに飛び出そうとするも、凄まじいオーラの集中を感知し、踏み止まる。

「最初は、グー！」

ゴンは既にジャン拳の体勢を取っていた。空気が振動するほどのオーラだ。まともに喰らえばただでは済まない。だからこそ一瞬ノブナガも躊躇したが、考えを改めてゴンへと向かう。拳が届く前に叩き斬ればよいと。

「ジャン、ケン、グー!!!」

ノブナガの射程に入る直前、ゴンはジャン拳を地面に叩きつける。カナリの量の岩石が飛び散るも、ノブナガは読んでいた。似た様な技を使う男としょっちゅうコンビを組まされていたのだ。強化系の考える事は大体分かる。

真横に飛び、撃ち終わった直後のゴンを再び狙う。しかし、射程圏外からメスが2本

飛んできてそれを弾く為に手を取られる。メスは2本とも真つ二つになった。その間、再びオーラがゴンに集中する。

「あいつで…」

未だ相手とはかなりの距離がある。だが同じ事だ。再び接近しようとしたその時

「パー!!!」

巨大な念弾が迫る。流石にそれは予想外だ。ノブナガは全オーラを刀に集中して、念弾を唐竹斬りにしようとする。試みる。

「ぬおおオオオ!!」

斬!!!

土煙が舞い、ノブナガが現れる。流石に余波で若干のダメージは負っているが、健在だ。

「……もう少し訂正だ。黒髪のがキ、テメエは見込みがあるな。マファイアじゃなくてこつちに来いよ。テメエと馬が合いそうな奴がいてな」

「絶対ヤだ。人殺し集団の所に行く気は無い！」

「そういう強情な所もそっくりだぜ。少なくとも後ろのがキより見込みがあるんだがな。見ろよ、アイツは震えてやがるぜ」

「キルアの事を悪く言うな！」

「あんだけブルつてる奴を庇うたあ、熱い友情だなあ。だが、教えてやろうか？ アイツはもうダメだ。テメエが死のうが何しようがあそこから動かねえよ」

「お前に何が分かる……！ キルアはきつと来る!! お前なんかコテンパンにしてやる！」

「ゴン！ 耳を貸すな!!!」

首から多少の出血をしたキルアを、レオリオが治癒しながらゴンに呼びかける。

「後ろのニイちゃんは回復役か。ますます見込みのある奴らだ。殺すのが惜しいぐれエだ。だが、そう来るならオレも容赦しねえ。今、テメエは実質1人だ。タイマンじゃオレには絶対勝てねエぜ。テメエを殺してから後の2人は料理してやる」

「なんで…」

「あん？」

「なんでそんなカンタンに殺せるんだ！」

「それか。決まってるんだろ？ 『殺りてエから』だ」

「ふざけるな！ お前らも仲間がいるんだろ!? 殺された人にも家族や仲間がいたはずだ!!」

「だから何だ？ 殺される弱えー奴らが悪い。オレらでもそうさ。そして、テメエらも弱いから死ぬ」

「お前らは野放しにはできない…! クラピカの為に、ここで止める!!」

ゴンの身体からオーラが迸り、収束していく。

「ふうん。面白エコトやつてんなあ。んで、クラピカつてさつき奴か？　だが、無駄だ。ここで死ぬ。それでクラピカつてのもブツ殺す」

ノブナガの周囲4メートルにピンとオーラが満遍なく張り巡らされる。《円》だ。彼のレベルにしては範囲が狭い。だが、ノブナガにとつては十分な範囲だ。これには理由がある。彼は《円》の範囲内に入った者を例外なく叩き斬る。その為、攻防力の大部分を刀に集中して《周》をしているからだ。

ノブナガ自身が斬れぬ物は無いと信じるに足る程の量を割り振っているからでもある。ただでさえ名刀ではあるが、更に強力なオーラの補助を受け、そこから放たれる斬撃は、通常時とは文字通り桁が違う程の威力と速さを実現している。

当たり前だが、これは超高等技術である。通常、《円》は戦闘には向かない。何故なら、《円》とはオーラを満遍なく薄く拡げるものであるからだ。攻防力移動が重視される念戦闘に於いて、お世辞にも《円》は使えるとは言えない。よって普通は戦闘時は《円》は使わない。だが、ノブナガはオーラの集中を刀に行いながら、余ったオーラで《円》をしている。それだけでも変態的な技術と言えよう。

ノブナガは抜刀術の達人である。どんな不利な体勢からでも一刀のもとに斬り捨てる。故に、彼は敢えて《円》を使う。一撃で決まるからだ。

その性質から、彼はタイマンで無類の強さを發揮するのだ。逆に複数戦ではあまりやらない。抜刀術の性質上、連発は向かないからだ。既にノブナガは相手を見てもいない。オーラで感知したら斬り捨てる。ただそれだけだ。

よつて、彼の《円》は狭い。だがそれで十分と考える。範囲に入ったら斬る。ただそれだけを極めた男の本気の形態である。

一方のゴンは、その危険さに気付いてもいる。近付いたら一刀両断されるのは明白だ。だが、ゴンは引かない。ゴンは近くにあつた石を拾い、ノブナガに投げつける。すると、石は見事に真つ二つになり、ノブナガの左右に落ちる。

ゴンは次々と石を投げるが、ノブナガも神速の抜刀からの刀捌きで次々と斬り落とす。

「無駄だ。確かに連撃は精度が落ちるが、人間を真つ二つにするのは容易だ。そつちがこねエならオレから行くぞ」

そう言つて歩き出し、ゴんに近づく。ゴンは後ろに下がり、大岩が転がっている方に向かうと、そこから身の丈の倍以上の岩を持ち上げた。そして、そのままノブナガに突

進する。

「ほう？ 考えたなガキ。だが、そんなんでオレを攻略しようなんざ甘エんだよ！」

大岩がノブナガに衝突する瞬間、張り付いていたゴンは嫌な予感から咄嗟に飛び退く。次の瞬間には念入りに《周》をしていた筈の大岩は切り裂かれ、そしてゴン自身も胸元から腹部まで薄く斬られていた。飛び退かなければ重症になっていただろう。

血が薄く滴る。しかし、すぐ側に来ていたレオリオが治療を行い、また、ゴン自身の回復力で即座に傷が癒える。近くにはキルアも来ていた。

「キルア!!」

「わりー。ちつとブルつちまった。けどもう大丈夫だぜ」

そう言いながらも彼の手は震えている。だが、無理矢理別の手で抑え込む。彼は、初撃を躲した時に圧倒的な力量差を感じ取り、呪縛が発動した。そしてそれは今でも続いている。こうして会話する間にも逃げろという警告が頭に鳴り響いている。それはカームやビスケにも指摘されていた事である。逃げ癖とも呼べるソレの正体は、歪んだ

愛。頭に埋められた針である。だが、カームは気付いていてもソレを抜く事は無かった。それが条件であるが故に。

そして今、逃げ出したい気持ちでいっぱいノブナガだったが、無理矢理それを押し込み、ここまで来た。

「ほう、戻ってきたか。ま、逃げ腰の雑魚が増えたところで同じだ。仲良く2つに分けてやるぜ」

ノブナガは油断せずに一歩一歩進んで来る。

「キルア、一旦下がって。無理しないで」

「…オレはできる！」

「いいから。オレに考えがある。レオリオも来て」

「確かに無策で突っ込んだら真つ二つだからな、で、何だ。そんなに余裕はねーぞ」

「こうするんだ。ゴニヨゴニヨゴニヨ……」

「……馬鹿野郎！ 死ぬぞ!!」

「アイツをぶつ飛ばすにはこれしかない。協力してくれる？」

「……ゼッター大丈夫なんだろうな!？」

「任せて!」

「作戦会議は終わったか? なら1人ずつ死ね」

ノブナガは相変わらず一歩一歩ジワジワと歩を進める。彼の状態では一気に行くのは難しい。入ってくる情報量が多すぎる為だ。彼はどちらかと言えばカウンタータイプだ。だが、ジリジリと仕掛ける事もできる。そして、もうすぐ射程圏内だ。

その時、レオリオ、キルアの2人は散開し、ゴンも後方に下がる。そして丁度ノブナガを三角形で囲む形となる。それを見てノブナガも歩みを止める。

「……馬鹿が。同時にかかって来ようとも結果は同じ。まとめて斬り捨てる」

これは事実である。ノブナガは同時に来ようが3人諸共に一刀でいける實力はある。そして実力差もある。仮に時間差で来ても連続で仕留める。いかに策を練ろうが無駄だ。その瞬間をイメージし、ノブナガはその場で更に集中する。

絶対に斬る、という圧力がノブナガから発される。だが、それに動じず3人は動き出す。レオリオが上着から最後のメスを2本取り出し、投擲する。しかしノブナガは最小の身体の動きで躲す。だが、次の瞬間にはキルアが頭上高くに飛び上がっていた。

【ナルカミ落雷】!!

瞬間、ノブナガは何を喰らったか分からなかった。分かるのは身体への強い衝撃と、全身の痺れだ。そこを狙って、後の2人が迫る。ゴンは最後になるだろうジャン拳を溜めながら。

だ・が・そ・れ・で・も

ノブナガハハザマという男は只者ではない。全身が痺れ、碌に身体が動かない状況でも何万回と繰り返し返した技は発動した。狙いはつけない。もうそこにいるから。後は繰り返し返した動きだ。標的は前後2人、そして落ちてくる1人。二太刀だ。

【流星】りゅうせい!!

自分の出身の名を冠したこの技は、どんな不利な体勢からも繰り出される。そして今、正面から来るゴンの首を正確に捉えて抜刀された。その軌道と煌めきは正に流星の如し。

次の瞬間、背後から飛んで来たオーラが踏み込んだ背中当たり、僅かに体勢が崩れる。だが、それで止まる様なノブナガではない。変わらずゴンを目掛けて刀は放たれる！

「ジャン、ケン」

その刹那、ゴンは方向を変え、刀に正対し、ジャン拳を発動した。

「グー!!!」

ガツギイイイイン!!!

凄まじい音を発して拳と刀が衝突する。ノブナガは驚愕した。凄まじいオーラと肉
体強度!! ウボオーギンに匹敵しかねない程だ。だが、ノブナガの方が威力は上だ。刀
は徐々に拳にめり込み、ゴンの肉体を引き裂きだす。数瞬もしない内に右手から身体ま
で真つ二つになるだろう。このまま引き裂いて、背後の奴諸共叩き斬る! そう考えた
ノブナガだったが、思わぬ拳と刀の衝突で一手遅れた。先にレオリオが至近距離に到達
していた。

“浸透勁”!

「ガハアツツ!!!」

全身のオーラが跳ね回る! 本家には遠く及ばないが、それでも高威力である。堪ら

ず仰け反るノブナガに刀が右手首までめり込んだゴンから更なる攻撃が発せられる。

「あいで、グー!!!」

左手から放たれたソレは、ノブナガの胴体中心を捉え、彼を刀ごと吹っ飛ばす。胴体が千切れなかったのは、彼のこれまでの研鑽によるものだろう。しかし、流石のノブナガも超威力の3連撃には耐えられず、彼の意識を夢の世界へと旅立たせた。彼は最後まで刀を手放さず、ゴンの右手から抜けた刀を手に倒れた。

最後まで刀と共にあつた男であつた。



「イテテ……」

「バツカ！ やっぱり無茶しすぎなんだよ!! 最悪右手が使えなくなるぞ」

治療をしながらレオリオが告げる。ノブナガは簡単な治療をされて、嚴重に拘束されている。

「ゴン……悪かった。オレがもつと……」

「キルア。それは言いつこなしだよ。キルアは来てくれた。それに、あの攻撃が無かったらオレは死んでたよ」

「だけど……」

「キルア、気にすんな。それが普通の反応だ。でもキルアの技が無かったらゴンと仲良く真つ二つになってただろうから、助かったぜ」

「だが、危うかった」

「カーム！」

「お前！ マジヤバかったんだからな!!」

「ではどうする？ 辞退するか？ それでも構わないぞ。これは君らとは関わりの無い闘いだからな」

「……さつき闘って思った。この人達は自分の都合でカンタンに人を殺しちゃう。クラピカだってアンダーソンだって、無事じゃすまない。それは嫌だ」

「ゴン……」

「そうか……。ありがとう。厳しい闘いはまだまだ続く。頼りにしているよ。だが、キルア」

ビクツとしたキルア。

「君は、あの悪い癖が出たね。危惧していたが、やはり今回もそうだった。このまま続けるのであれば、君はゴンや仲間を見殺しにするぞ。そうならない内に離れたらどうだ？」

「……オレは、嫌だ。ゴンと離れたくない」

「カーム！ キルアは大丈夫だよ!! そうならない様にオレももっと強くなる!」

「そうだけ。仲間がフォローすれば良い話だ。何も離れる必要はねえ」

「そうか。ならばいい。だが、キルア。君はその癖を改めない限り、同じ問題が付き纏う。心しておく方がいい。君がゴン達を大切に思っているなら尚更な」

「……わかつてる」

「よし。この話はここまでだ。君達もいい経験になっただろう。痛い代償は払ったがな。普通は右手は再起不能になるだろうからもっと自分を大事にするとい……見せてみる」

カームはゴンの手を奇跡で治療する。すぐに右手は完璧に治療される。

「さて、これでよし」

「……相変わらず反則だよな。オレの存在意義が問われるぜ」

「あの男の対処は後で考えるところとして、向こうは終わったかな?」

「そうだけ! コツチは3人がかりでこの有様だからな……。向こうは大丈夫なのか!」

「心配いらない。向こうには『彼女』が付いてる。それにあの2人はもう一流の域だ。問題もそこまでないだろう」

「ゲツ。あの妖怪ババアか! そりゃ大丈夫か……?」

「レオリオ、そんな事言っているとキルアみたいにぶっ飛ばされるよ？」

「しかしなあ。お前もビツクリしただろ？　なあキルア」

「……………」

「キルア？」

「ん？　ああ…そうだな……………」

「ダメだ。こりや重症だなあ。ま、こればかりは自分でケリつけるしかねーからなあ」
「その通りだ。キルア、自分でその問題はよく考えておけ。さて、迎えに行こう。彼らの勝利を祈って」

「無事だといいね…」

「無事だと信じて。君たちが無事だった様に」

そう締めくくり、彼らはまだ気絶している男を抱えて歩き出す。もう一方の闘いの行方に思いを馳せながら――

93、2本目の脚

——時は少し遡る。

「うおおおおおー！」

ウボオーギンは未だに飛ばされていた。あの男から受けた謎の攻撃から中々逃れられない。そうして飛ばされる事約2〜3キロ。突然身体を支配していた拘束が解ける。

ズドン!!

彼の身体は地面に着地する。ようやく解放された。この場所が何処かも分からないが、そこに相手はいた。3名だ。中心の金髪の青年と、脇に黒髪の少女1人、後方にもう1人のゴスロリ少女だ。

「ふうう…あんのクソヤロー！ 後で覚えてろよ!! ……で、テメエらがオレの相手か」
「待っていたぞ。この時を」

金髪の青年は上着を脱ぐ。他の2人は黙って見ている。

「ふん。覚悟決めたような顔しやがって。何かオレらに因縁でもあんのか?」

「その質問に答えるには、聞き返さなければならぬ事がある。お前は殺した者達の事を覚えてるか?」

「少しはな。まあ印象に残った相手なら忘れねーぜ。つまるところ復讐か。誰の弔い合戦だ?」

「クルタ族」

「? 知らねエな」

「緋の眼を持つルクソ地方の少数民族だ。5年程前にお前たちに襲われた」

「ヒノメ? お宝の名前か? 悪いが記憶にねエな。5年前ならオレも参加してるはずなんだが」

「……およそ関わりのない人間を殺す時………お前は、一体何を考え、何を感じているん

だ？」

「別に何も」

「クズが。死で償え」

ウボオーギンの顔が歓喜で歪み、爆発的なオーラが漏れ出す。

「たまにこういう奴がいるからやめられねエ。殺しはな。オレの一番の喜びを教えてくださいませんか？ おめえみたいなりベンジ野郎を返り討ちにする事だ!! ふんっ!!」

ウボオーギンは強大なオーラを込めて、地面を抉り出して浴びせかける。

「くらえ！ 破岩弾!!」

無数の岩が砕け散り、周囲に広がるも、3人は散開して躲す。

「ビスケ！ カルト！ 最初は私にやらせてくれ!!」

金髪の男、クラピカがそう告げて、岩を躲しながら【縛る中指の鎖】チエーンジエイルで反撃するも、ウボオーギンは余裕をもって躲す。だが、地面に触れた鎖を見て、その威力に内心舌を巻く。ただの鎖じゃない。相当強い念が込められている。迂闊に喰らうのはまずいと判断してウボオーギンは先手必勝を狙う。躲しながら急接近して、凄まじい威力のパンチがクラピカを襲い、クラピカは岩場まで吹っ飛ばされる。

「ハッハア！ 女にカツコつけてイキるからそうなんだぜ!! 後はお嬢ちゃん、お前らがオレの相手か？」

見ていたビスケとカルトに問いかけるが、両者共にクラピカの方を指差す。そこには、無傷で出てきたクラピカの姿があった。

これには流石のウボオーギンも驚いた。強化系でもない限り、あのパンチは防げないはずだ。相手は強力な鎖を使う能力者。どう考えても操作系か具現化系が妥当だ。

「馬鹿な…無傷だと…!？」

「今のパンチ…まさか全力か？」

ブチツ

「くくく…面白くもねエ冗談だな!! 安心しろ。2割程度だ。じゃあ半分くらいで行くぜ!」

そう告げて猛攻を仕掛けるも、クラピカは体術で翻弄する。彼の素早さや体術は技術的な面を差し置いても最早超一流の域に至っている。「緋の眼」の効果も相まって、いかにウボオーギンでも捉えることができない。ウボオーギンの拳や蹴りを躲しながら縦横無尽に打撃を与えるクラピカ。彼我のオーラ差と肉体性能によりダメージらしいダメージはない。だが、確実にウボオーギンのイラつきは加速していった。

「ちよこまかと動き回りやがって。だがな」

『今の隙にオレを鎖でとらえなかつたことを後悔するぜ』か? くだらん負け惜しみはやめて全力でこい。時間の無駄だ」

「……やってやるぜ 全開だ!!!」

カツ!!!

すさまじいオーラが噴出する。総量は不明だが、おそらく人類最高峰を超える程度はあるだろう。強化系の極みに至る男、その全力全開の顕在オーラは大気を震わせる。

「ふむ……なるほど。すさまじい程のオーラだ。だが、それだけか？」

ウボオーギンはクラピカの挑発に乗らず、そのオーラを拳に集中させて地面を思いっきり殴る。目の前が爆発したかのような錯覚が起きるほどの破壊。クレーターができて、その攻撃は同量の土を巻き上げ、そして微細な土煙が視界を遮る。その瞬間、圧倒的な気配を放っていたウボオーギンの気配が掻き消えた。

クラピカは瞬時に《隠》と悟り、《凝》を行う。すると、うつすらとウボオーギンのオーラが見える。かなりレベルの高い《隠》であり、全力状態の全身のオーラを隠せるウボオーギンはただの脳筋ではない。その戦闘技術は超一流、実戦で鍛えあげられた鍛錬の賜物であるといえる。

だが、クラピカもまた怪物。彼らは知らないが、今よりはるか劣った技術を持ったク

ラピカでもタイマンで打ち勝っている。そして今、クラピカはウボオーギンの動きが手に取るように分かっている。ここまで数瞬の攻防だが、確かにクラピカはウボオーギンの動きを見切っていた。

ヒュオツ

ウボオーギンが煙の中から現れ、本気の【超破壊拳】ビッグバインパクトを繰り出すも、動きを見せずに見切っていたクラピカは躲しながらカウンターのパンチを顔面にお見舞いする。

「グボツ!!」

確実に当たると思い、オーラをかなり集中していたウボオーギンもこれにはたまらず、たたらを踏んでしまう。だが、これで戦意を喪失するような男ではない。更に攻撃を繰り出そうとしたところで身体の動きが極端に鈍くなったことに気付く。そして、ついに身体が動かなくなってしまった。

「!!
まさか……!!」

瞬時に《凝》をすると、うつすらと鎖が自らを縛っていた。

「《隠》をここまで使えるとは思わなかった。だが、この程度の作戦なら強化系はやってくる。どうやら想定していたことが当たったようだ。そして、《隠》を使えるのは私も同じ」

【縛る中指の鎖】!!

すさまじい締め付けがウボオーギンを完全に封じ込める。ウボオーギンは身動きが取れず、ただひたすら同じ姿勢で固まっていた。

「てめエ……具現化系か!! 普段から鎖を出してやがったのも『本物の鎖』に見せかけるため!」

「その通りだ。『実在する鎖』を操作する能力者を装っておけば、敵は見える鎖だけに注意を払うだろう? まさに今それが証明された。お前がつまらん強がりを言いかけた時、鎖はすでにお前の体を覆っていたのだよ」

ギシイ

「捕縛、完了」

両手の中指の鎖でウボオーギンの動きを封じ込めるクラピカであったが、実のところあまり余裕はない。原作とは違い、制約と誓約がないからだ。だが、それでも彼の鎖の効果はすさまじい。特に仇の幻影旅団を相手にしているという部分も大きいだろう。現時点でウボオーギンの動きを封じ込めたということが証明している。

「ぐぎぎぎぎぎ……ガアアア!!」

しかし、この鎖は相手の《練》までを封じる。つまり、相手は本来の力を発揮できないにしろ、念能力は使えるということである。よってウボオーギンも必死で抵抗する。オーラによるガソリンが全開で供給できない中、肉体的性能とわずかなオーラで鎖を引きちぎろうともがく。

鎖が軋み始める。ウボオーギンの肉体のパワーは凄まじい。例え《練》が無くとも鎖を引きちぎろうとしている。だが、そこを大人しく見過ごすクラピカではない。すぐに

オーラを纏った蹴りをウボオーギンにブチ込みまくる。

「ゲハッ！」

流石のウボオーギンにも僅かにダメージが入る。顕在するオーラの差である。だが、それでも獣は繋がれた鎖を引きちぎろうと蹴く。二重の鎖に亀裂が入り始めた時、クラピカはパワー不足を痛感し、鎖に更なる誓約を課そうと、自らに〔侵入する小指の鎖^{ジャックメントチェイン}〕を発現して差し込もうとした。

その時

「やめなさい！ クラピカ!!!」

ウボオーギンに勝るとも劣らない大声量が響きわたる。その声を受けて、一瞬動きが止まる両者。2人してその声の元を見れば、いつの間にか巨大化したビスケの姿があった。

「全く…アンタはコレだから危ういのよね。もつと人を頼る事を覚えなさい。気持ちは分かるけどね」

「ビスケ…」

「ペツ！ 随分遅しいお嬢ちゃんじゃねエか。オレ好みだぜ。待つてな。今このクソツタレな鎖を引きちぎって相手してやるぜ」

「生憎、アンタは好みじゃなくてね。それに、アタシが相手するまでもないわ」
「ああ!?! どういう事、モガア!!」

血反吐を吐き捨てて、ビスケにも嘔み付くウボオーギンだったが、その背後から大きな和紙が迫り、顔にピッタリ貼りついた。若干濡れており、見事に呼吸が塞がる。剥がそうとしても拘束され、上手く剥がせない。更に蹴きまくるウボオーギンだったが、前後からクラピカとカルトの攻撃を受けてよりドツボにハマっていく。その内、ウボオーギンの動きが緩慢になり、遂には沈黙した。

「ありがとう…。やはりこのクラスを抑えるにはパワーがイマイチだったか」

「途中までは良かったよ。詰めが甘かっただけね。でも、あの相手にあれだけ出来れば十分。これなら大抵の相手は抑え込めるでしょ。で、死んだ？」

「いや、気絶した段階で解放した。ギリギリで死んでない。ボクもその辺は見誤らないから」

「だ、そうよ。どうする？ トドメ刺す？」

「……いや……今はいい。コイツらは死すら生温い。私に考えがある。一旦彼らと合流しよう」

「ま、それこそ貴方の自由ね。処置は任せるわ。とりあえず拘束したまま連れてくわよ」

ウボオーギンは嚴重に拘束され、ビスケに担がれ運ばれていった。これにて幻影旅団の囹兼戰鬪班の2人は恐るべき敵の手に落ちた。残る脚は10本。旅団崩壊の序曲は2人の敗北で幕を閉じた。

94、弾丸のメッセージ

「ウボオーとノブナガが帰って来ない…か」

アジトにて、クロロが呟く。約束の時間になっても彼らが帰って来なかったのだ。連絡すら取れない。囿として活動していた2人だった為、危険度の高い任務ではある。しかし、その2人をして両者帰って来ないという事は初めての事だ。

「ノブナガはともかく、ウボオーはああ見えて時間にうるさい奴だからな。連絡もねエって事はなんかあったか？」

「チツ。オレもそっちに行けば良かったぜ。だが、アイツらが梃子摺る、もしくはやられるなんて、相手は相当のタマだぜ？」

フランクリンとフィンクスが意見を言う。それらを聞きながらクロロは考えこみ、や

がて口を開く。

「……何らかの方法で分断されたな。恐らく敵は初めからアイツらがターゲットだったのだろう。そして、相性の悪い相手か複数人相手に襲われた、というところか。しかし解せないのは、オレ達がフリーになっていた事だ。マフィアなら普通はお宝を優先して守るはず。だが、簡単に盗ませた上に、脱出まで容易にできた。まるでお宝など興味がないかのよう。」

「……どういう事だ？ 団長。つまり敵はマフィアじゃねエってのか!？」

「まだ確信は持てないが、その可能性は高い。オレ達に恨みを持つ者が関わっているのだろう。だが、マフィアと無関係というわけでもなさそうだ。また、別の可能性もある。コルトピ。」

「なにー?」

「お宝を一つコピーしてくれ」

「オーケイ」

【キヤラリーフェイク神の左悪魔の右手】！

コルトピがお宝の一つである青雲文壺をコピーする。この能力は、生物以外を24時間の間コピーできるといふ恐るべき能力だ。だが、現れたのは：

「!! おい、何だコレは!! 土くれになっちゃったぞ!!」

「やはりか…。コルトピ、お前の能力は確か念能力はコピー出来なかつたよな?」

「そうだね」

「つまり、コレは偽物だ。どうやったか知らんが、我々はまんまと一杯食わされたりしい」

「な…!? マフィアのボス連中は全員ぶつ殺した筈だろ!! それに奴等の戦闘要員の陰獣だつて知らされてなかつたぞ! オレ達をハメたのは一体誰だ? 裏切り者でもないらつてののか!」

「……まず、確認する必要がある。シャル、今日のニユースは出てるか?」

「今ハンターサイトで調べてる…あつた! 何々…ヨークシンのベーチタクルホテルでマフィアの内部抗争か…。ロビーでマフィアの重鎮十老頭暗殺される…。下手人は強力な念能力者と推察される…。嚴重に保管されていた地下オークション用の品物が同時に消えた事から地下オークションを狙っていた盗賊団の可能性も。死亡が確認され

たのは重鎮10名のうち9名……。1名は別の場所において難を逃れる……」

「その1名の名前は出てるか？」

「地下オークション主催者、ジョンIIアンダーソン、だつてさ」

「それだ。ソイツがオレ達の“敵”だ」

「アンダーソンって……中心人物だった奴だろ!!? コイツ、仲間のマフィアさえ裏切りやがったのか!?!」

「別に珍しい事ではない。マフィアなどではよくある事だ。恐らく邪魔になったのだろう。そして、コイツは独自で我々の襲撃を予想していた。それを利用してある意味合法的に消したという事だろうが、そこが問題だ。何らかの方法で我々の情報が漏れてい

る」

「それこそ、裏切り者か?」

アジトが嫌な空気に包まれる。その雰囲気破ったのもまたクロロだった。

「……いや、オレの考えは別だ。裏切り者の線もなくはないが、前にも言った通りソイツにメリットが無さすぎる。別の情報提供者がいて、ソイツとアンダーソンが連携してオレ達をここまで翻弄した、とオレは考える」

「そんな…能力者とは言えそこまでの事が可能なの?」

「事実、我々の行動が漏れている。余程強力な能力者だ。敵はアンダーソンと組んでいるソイツだろう。そして、本物のお宝は間違いないくアンダーソンが持っている」

「だがよお…ホントにそんな奴いるのか?」

「推察でしかないがな。ここまで完璧に翻弄されると後は内通者を疑わざるを得ない」

「見て! このサイトでアンダーソン関係調べてたら、下部の組のマフィアの娘で100%的中率を持つ占い師がいるって情報があつたよ!!」

「恐らくソイツだ。それに別の協力者が加わってアンダーソンに付いたと見ていいだろう」

「ならアンダーソン一派とソイツら潰してお宝奪つて終了ね」

「そういう事だ。朝までに2人が戻ってこなければ、行動開始だ。旅団クモをここまでコケにした報いは必ず受けて貰おう」

「……………」

(行つてはいけない…! 普段冷静な団長すら何故か安易な考えに向かつてる! ここはもつと慎重に検討して、計画の中止か延期が妥当なはず…。でも、もうこうなつたら

止められない。どうしたら…どうしたら伝えられる…!?)

パクノダは一人苦悩していた。余りにも不自然に誘導されている。まるでこうなるのが既定路線であるかのように。恐らく「リップル」がそう仕向けているのだろう。しかし、それを伝えようとも、身体は自分の意に反してしまう。

このままでは間違いなく旅団は壊滅だ。そして…万が一伝える事が出来たとしても、自分の命は無いだろう。それは自分の身体の調子からいってほぼ間違いない。これは恐らく念能力ではない。操作系などのオーラを全く感じないからだ。つまりコレは、自分を縛る忌々しいコレはウィルスか、病原菌の類だろう。それ以外は考えられない。改めて敵の恐ろしさを実感してしまうが、どの道このままでは行く先は一緒だ。ならば、最悪自分を犠牲にしても助けなければならぬ。そうすれば、少なくとも自分以外の犠牲者がなくなるはずだからだ。まずは、この身体の反応に抵抗する方法を探る。そして、死んでもこの情報を伝える。

——パクノダは、密かにそのような悲壮な決意を固めていた。



「ここで間違いないエのか？」

「ああ。間違いない。そして、例の占い師もここにいる。念の為に滞在場所を襲撃しても居なかったからね。多分、関係者全員がここに集まってると思うよ」

「ここはヨークシンの中心地。株式会社「アンダーソンファミリア」本社ビル周辺に旅団員は集合していた。周辺の通りには、オフィス街にも関わらず、人通りが全く見られない。まるで無大都市かのように。」

「待ち構えているな。あそこからピンピンに敵意を感じやがる」

「へッ。丁度いい。大暴れして皆殺しにしてやるぜ！」

「誰が多く殺せるか競争ね」

「そうだ。それでは各自、侵入して手当たり次第に殺せ。やり方は『ハデに殺れ』」
「『了解』」

そうして、全員がビルに向かって歩き出そうとした時

「ちよつと待つて！ 行つてはダメ!!」

パクノダが全員を引き止める。全員が振り返つて見れば、パクノダは銃を具現化して構えている。彼女は苦しそうな表情をしていて、更に顔中から血を流し始めている。

「おい…どうしたパク？ 具合悪いのか？」

「やつと…やつと逆らえた。でも、もう保たない」

そうして、彼女は銃口を旅団に向ける。その行動に全員が警戒し、反撃の態勢をとる。

「パク……まさか……!」

「弾数は6発……団長、フェイタン、フィンクス、マチ、シャルナーク、フランクリン……ちよろど……結成時のメンバーね……今から、私の記憶を撃ち込む。信じて……受け止めてくれる?」

最早息も絶え絶えのパクノダだが、執念で立っている。裏切り者を警戒していた旅団員はパクノダを信じきれない。それでも、最期のメッセージを伝えようとするパクノダ。体内は既にウイルスの暴走を受け、壊滅的なダメージを受けている。

「くくく!! パク!! ヤメな!!! なんだか分からないけど、その様子じゃアンタも死ぬよ!!! 敵に操られてるんだろ!? 団長! どうすんの!?!」

「……ガフツ!! ……時間がない……。……大丈夫。私は私。行くよ」

その鬼気迫る様子に全員が動けない。誰もがクロ口を振り返り、見る。やがて、クロ

口は呟く。

「……………オレは、信じる。全員、そうしろ」

他ならぬ団長がそう断言した。よって、団員は信じるしかない。その瞬間、【記憶弾】メモリーボムがバクノダの手から発射される。次々と撃ち込まれる弾丸だが、殺傷能力は無い。そして…彼女の記憶が撃ち込まれた者達に共有される。

一方、弾丸を放ったバクノダは、遂に力尽き、倒れる。その血まみれの顔には、微笑みを浮かべていた。強大な敵に一泡吹かせた満足感か、或いは仲間に危機を土壇場で知らせる事が出来た達成感か。それは最早本人にしか分からない。

3本目の蜘蛛の脚は、ここで折れた。

95、突入前

パクノダの衝撃的な死の後、弾丸を撃ち込まれたメンバーは即座に理解した。

「誰」にここまで自分達がコケにされたか。そして、現在の危うさを。団長は理解すると同時に即座に命令を出す。

「全員、ここから離れろ!!!」

その剣幕に、古参のメンバーは納得しながら、弾丸を受けてないメンバーは訳が分からない表情をしながらも、団長に従うように動こうとした。しかし、次の瞬間、ビル周辺が霧に包まれ、ビル以外が見えなくなつた。

「くそッ!! 遅かった…!!」 パクが命懸けで教えてくれたのに!」
「マチ、どういう事? 一体何が起きてるの?」

困惑しながらもシズクがマチに問いかける。

「アタシ達は、最初からハメられていた! ウボオーもノブナガも、お宝も、全て! アタシ達全員が全部最初からソイツの策略にハマってたんだ!! 丁寧に記憶まで消されて! パクだけは能力のおかげで気付けたのに、ソイツのせいで今まで伝えられなかった!!!」

「そんな…。私達全員相手にそんな事が出来るの…?」

「許せねエ…!! 『リップル』!! ブチ殺してやる…!!」

「だが、本性を現した奴の力は強大だ。今の今まで我々を欺いてきたんだからな。そして、この状況だ。どう対抗する? 団長」

フランクリンが問いかける。クロロは沈黙しながらも、ビルを見つめていた。

「……どうやら向こうからお出ましのようだ」

見ると、玄関の自動ドアが開き、1人の男が歩いて出て来る。白スーツに白いボルサリーノ帽子。リップルだ。

「やあ。皆さん、お揃いで。久しぶりだね。リップル改め、『陰獣』の『鶴』だ」

その瞬間、フランクリンが「俺ダの両手ブルは機関銃ンガ」を発射し、フェイタン、フィンクスが両サイドから飛び掛かり、攻撃を加えようとするも、フランクリンの念弾は謎の障壁によって阻まれ、2人同時の攻撃はそれぞれ片手で掴まれた後、そのまま両者は来た場所へ投げ返される。旅団員3名の全力攻撃をもともしないリップルに、全員が戦慄を覚える。

「おっと……。ま、気持ちちは分かるが、落ち着け。後で存分に相手してやる。今すぐここで

やってもいいが、君達に恨みを持つ者もいてね。ちよつと相手してもらおうかと思つて
いる。弟子の育成にも丁度良くてね。悪いけど、君達のような悪党には拒否権は無い。
質問があつたら受け付けるよ?」

「デメエ……! ノブナガとウボオーはどうした!!」

投げ返されて、体勢を整えたフィンクスが問いかける。

「ああ。彼らね。彼らもここにいるよ? 私を倒せたら返してあげよう」

リップルはあつさりど、彼らはここにいて返すと認めた。言い方からして生きてい
るかは不明だが。

「生きてんのか!?!」

「さてね。それは自分で確かめたらどうだい?」

かなりそつけなく返される。これ以上は聞けなそうだ。

「…………お宝は?」

今度は団長が尋ねる。

「それがねえ、残念ながらもう売り捌いたよ。昨日の時点だね。ま、ハンターサイトも権力とコネで情報を遅らせる事も可能だからね。売り手は全部アンダーソン子飼いの奴らだから情報操作も容易にできる。ただ、君達もそれじゃ萎えるだろうから私から君達に提案がある」

「…拒否権はないのだろうか？ 聞くだけ無駄だな」

「まあそう言わず。私はこれからこのビルに入る。最上階で待つてるよ。道中には君達を倒そうとする刺客がわんさか待ち構えている。それらを打ち破つて、更に私を倒す事が出来たなら、褒美をあげよう。信じるか信じないかはどうでもいいが、実は私は外の世界から来ていてね。地下オークションなんざゴミに見えるようなお宝を山の様に所持している。一例を挙げようか」

そう言うと、リップルは腕を掲げる。するとそこから空間に穴ができ、次々と品物を取り出す。

「これが、輝晶石、オーラを流すと光輝く。こちらは飛行石、文字通り所持者は空を飛べる様になる。素材でいうと、これなんかはすごいぞ。加工すればありとあらゆる温度に適應できる毛皮だ。こちらは念能力をノーリスクで新たに発現させる植物、強烈な呪いをかける目玉、若返りの水……まだまだ沢山あるが、私の所まで辿り着いたら陳列しといてやろう。先程のパクノダは見事だった。君達は予想以上に強いからチャンスもあるだろう」

「ほう。つまり、我々が貴様の元に辿り着いて貴様を殺せば、そのお宝も手に入る、そう言いたいのか？」

「その通り。ヤル気は出たかな？」

ゴツ!!!

団長や団員から凄まじいオーラが噴き出す。彼らもここまでバカにされた事は初めてだ。その怒りは頂点をとつくに通り過ぎていた。

「いいだろう。乗つてやる。今！　ここぞ！！」

全員が示し合わせたかのようにリプルに向かい出す。既に団長は「盗賊の極意」を開いており、その中の「不思議で便利な大風呂敷」でリプルを物品ごと捉えようとしている。マチやヒソカも会話の段階で《隠》で糸やオーラを伸ばして仕込みを完了させている。そして：0・1秒にも満たない接敵する瞬間、リプルは影も形もなく消え去った。

辺りに声が響く。

——君達の相手は後だと言つたらう？　ちゃんと上で待つてるから昇つておいで。後、分かっていると思うが、そこからは外には出られない。君達はいずれにせよそのビルに入る事になる。精々頑張つて私の所に来るといい——



「クソツタレ!! 何もかも! アイツの掌の上だつてか!」

パクノダを道の脇に寄せて簡単に吊つた後、旅団員は怒りに震え、また、現状のどうしようもなさを口にする。

「あんなムカつく奴初めてね。ちよとじゃ済まないぐらい念入りに殺すよ」

「だが…奴のあの力は一体何なんだ? それに妙な事を言つてたな。外の世界から来た、だと?」

「……なるほどな。道理でそれだけの力があつたのか。恐らく先程の宝は本当に奴の言つた効果があるだろう」

団長が口を挟む。

「? どういう事?」

「我々が世界地図だと思い込んでいた物は、実はこの星のほんの一部だ。外界の海は海ではなく、巨大な湖だ。昔盗んだ『新世界紀行』という本にその外の世界の記述があった。刊行当時は与太話かと思われていたが、実際の調査で真実だと判明した」

「なんだそりゃ!?! 世紀の発見じゃねエか! でも何でそれが広まってないんだ?」

「厄災だ」

「厄災?」

「各国はこぞつて調査に乗り出したが、帰還者はごく僅か。それほど過酷な環境だと推察される。そして、帰ってくる度に凄まじい厄災が齎された、という。その威力は人類を簡単に滅ぼせるレベルだと言えば想像つくか?」

「いや、全く」

「だろうな。だが、奴はそこから来たと言った。本当ならば最低でもそこで生き抜くレベルはあるということだ。そして、こうまでオレ達が弄ばれた力量を見るならば、その信憑性は否応無しに増す。つまりオレ達は、最悪人類を滅ぼしかねない厄災と同等の奴と敵対している事になる」

「だけども……だからといってこのままじゃ終われねエ！　パクノダやウボオーギン、ノブナガの仇は取ってやんねーとな……!!」

「その通りだ。どの道逃げられないようだからな。全員で登って、全員で叩く。そうすれば解除される可能性も高い。だが、一から十まで奴の思惑に乗る必要もない。シズク、この霧は吸い込めるか？」

「ん。やってみる。デメちゃん！　この霧を吸い込んで！」

シズクは掃除機型の念獣を具現化し、霧を吸い込もうとするが、一向に吸い込めない。

「ん〜ムリ。この霧は念能力だね。私が吸い込めないなんてそれしか考えられない」

「なるほど…フィックス、フェイタン。ビルから離れてどこまで行けるかやってみてくれ」

「了解」

2人は霧の向こうへ消えていった…が、しばらくしたら2人して来た道から戻ってきた。

「ん？ 何でお前らがここに…って、このビルは、戻って来たのか!？」

「ふむ…。ヒソカ、ビルの壁は登れるか？」

「お、ボクかい？ やってみるよ♣？」

ビルは2階から上は霧に包まれている。ヒソカがオーラを飛ばし、壁にくつつけようとしたが、霧の壁に弾かれた。更にジャンプして登ろうと試みるが、しばらく登ったかと思えば降りてきた。

「ん…これは無理だね。登っても登っても窓が無いよ♣？ キリが無いし、壁も頑丈だ

し、霧も凄い◆？ 上からの侵入はちよつとムリじゃないかな??」

「なるほどな…恐らくこの霧は奴の能力。そして…恐るべき事に、奴は我々に認識を誤らせる能力がある」

「は？ どういう事？」

「完全な催眠、思考誘導状態、と言えば分かるか？ そもそも我々に見えてるだけで、霧など無いのかもしれない。奴が我々の中に自然に溶けこんでいた事を考えても、それぐらいやつてもおかしくはない。そして、それに気付いて無理矢理逆らつてもパクノダの様に死に至る」

「なんだよそれ…無茶苦茶じゃんか…どうやって對抗するのさ」

「手は無いはないが、これはかなり条件が厳しい。だが、原因の1つは今解決できる。シズク、パクの身体から病原菌かウイルスだけ吸い込めるか？」

「わかった。やつてみる。デメちゃん、パクの身体からアイツのウイルスを吸い込め！」
「ギョギョー！」

ブオオオオ!!

黒い霧状の靄が死んだパクノダの身体から出て、デメちゃんに吸い込まれる。

「よし。では全員、同じ様に吸い込ませる。全員、手の甲に傷を作れ」

言われた通りに全員が切り傷を作る。すぐにシズクがデメちゃんに吸い、全員からウイルスが取り出された。

「まずは物理的に抵抗して死ぬ事はなくなった。これは必死に抵抗していたパクノダのおかげだ。奴の誘導に物理的な干渉は無い。ウイルスを媒介していた事からそう考えられる。我々がパクノダの様にならなかったのは、これがパクノダの記憶だったからだ。そして、肝心の催眠、または思考誘導対策だが…」

「どうするんだ？」

「無い」

「は？」

「対策が無いと言った」

「いや、ちよつと待って！ 団長、そりゃ無いよ!!」

「ハッキリ言うが、この範囲で催眠をノータイムでかけられるなど、念能力の常識を超えている。普通は面倒な条件が幾つかあるはずだが、それも該当するものがいくら考えて

もさっぱり分からない。完全にお手上げだ。よつて、対策は無い」

「じゃあどうすんだよ!!」

「慌てるな。実は一つだけある。それは…」

「それは…?」

「誰も信じない事」

「えっ…」

「出逢ったもの、全てを敵と見做せ。仮にウボオーギンやノブナガが出てきてもだ。突入後はオレの言葉すら信じなくてもいい。お前達はそれぞれが敵も仲間も信じずに、ただひたすら己を信じて敵を殺せ。突入後は旅団内での会話は禁ずる。話しかけてくる奴は仲間に見えたとしても敵だ。殺せ。恐らくかなり高い確率で分断されるだろうから、その後遭遇した喋らない仲間は無視するか逃げろ。幸い、奴は慢心している。わざわざオレ達の前に姿を現したり、弟子に相手させようとしたりする事からもな。そこにつけ込む。それぞれが自分の役目を果たし、奴の元に辿り着く。即ち、見敵必殺だ。今言つた事を決して忘れるな」

「……なるほどな。まあ実際問題それしかねエか。後にも引けねエしな」

「そういう事だ。1人でも多く上を目指す。まずはそれからだ」

「へっ。結局最初と変わらねエ訳だ！　いいぜ。必ず奴の元に辿り着いてブチ殺してやるぜ!!」

「うくん??　なんだかワクワクするねえ◆?」

「その戦闘バカ。アンタも敵に引つ掛けられないようにね」

「よし、用意はいいか。では、行くぞ」

ザッ!!!

全員が意を決してビルの内部に向かって歩き出す。クロロは最後尾に付く。突入する直前、クロロは一瞬立ち止まり、1人呟く。

「……ウボオーさん、ノブナガさん、パクノダさん。安らかに……オレ達がこれから奏でる奴らの死に際の悲鳴こそが、貴方達に送る葬送曲だ」

96、突入

玄関から次々と中に入る旅団員。いつ襲われてもいいように、全員警戒態勢だ。瞬時に戦闘に移行できる状態を保っている。中は洒落た半円形の受付があり、その先は吹き抜けのロビーとなっている。

「……………」

誰もがいつもの様な軽口を叩かない。突入前の団長の言葉を守っているからだ。近くにはエレベーターが見えるが、それに乗るのは棺桶に入る事と同義だろう。眼前に見える大きな階段を一步ずつ昇ってゆく。昇りきった先には長い廊下と、その両脇にオフィスが続き、一般的なオフィスの様相を呈している。彼らは意を決して進もうとするが、一步踏み出した瞬間、再び例の濃霧が襲う。そして、今度は先程とは比較にならない程の濃さだ。それでも彼らは沈黙を保つ。団長の予想通りだからだ。やがて、隣

の人物すら見えなくなり、どこをどう歩いたか分からなくなる。

それでも、前へ進む。こうなる事は分かっていた。だが、それでも。パクノダやウボオーギン、ノブナガの仇は取らなければならない。1人でも先へ。1人でも上へ――



「ふん。ここまでピンチになるとはな」

無限に続くかと思われる回廊を1人歩くフランクリン。現在の状況に思わず愚痴が出てしまう。だが、やらねばならない。例え向かう先が絶望だとしても。蜘蛛はもう捕われてしまったのだから。

「ここ」は明らかに不自然だ。長い直線の道があるかと思えば、急に曲がりくねった道

になる。唐突に階段が現れる事もある。大方リプルが関与しているのだろう。そうでもなくてもアンダーソンの念能力者だろう。扉が道の途中のそこかしらに設置されているが、彼は目もくれない。とりあえず階段を探して一階ずつ昇っていくフランクリンだったが、歩いた道の果て、大きなホールを見つけた。会議室と思われるソレは、頑丈そうな扉が付いている。恐らくここに例の刺客とやらがいるのだろう。フランクリンは躊躇いもなく、【俺ダブルの両手マシは機関銃ガン】をぶっぱなす。

ドガガガガガガ!!!

大きな音を立てて扉が数秒で無残な姿に変わる。フランクリンが慎重に中を覗くと、中はかなり広く、高さもかなりある。部屋の大部分に会議に使う様な頑丈そうな大きなテーブルがあるが、フランクリンの注目を引いたのはそこではない。

そこに待っていたのはウボォーギンだった。縛られた状態で椅子に座っている。

「フランクリン！ 丁度良かった!! コイツを解いてくれ!!!」

フランクリンは無言で近づく。

「助かったぜ…すまねエ。ヘタこいちまった」

「ああ。気にするな」

次の瞬間、フランクリンは指の銃口を向けて【俺ダの両手ブルは機関銃マシン】を連射した。

ガガガガガガ!!!

ウボオーギンだったものは発射の瞬間飛び退き、鋼鉄製のテーブルに身を隠す。拘束などされていなかった。だが、至近距離から受けた為に何発かを被弾している。死にはしないが重症な筈だ。

「テメエ！ いきなり撃つ奴があるか！」

テーブルの向こうで相手が叫ぶ。

「ハッ！ 笑わせやがる。仮に本物でも撃つてたぜ。ウボオーなら笑って許してくれらあ。で、くたばれや偽者」

フランクリンが隠れている場所すら破壊して、始末しようとした時、彼の耳に風切り音が微かに聞こえ、そちらに片手で弾丸を向けるとカナリの威力の念弾が複数飛んできていた。

「まあ複数で張ってるわな。まとめて死ね」

念弾で相殺する。数は大した事はない。自分の方が数も、威力も上だ。発射元的能力者は念弾を浮かべて次々と発射させるが、フランクリンはものともせず乱射して次々と撃ち落としていく。敵は負けじと多数の念弾を撃ち出すが、いかんせん弾数の差があ

りすぎた。点に対して面で制圧している様なものだ。あつと言う間に術者に大量の弾丸が迫る。敵は躲しながら、時には相殺してかろうじて凌いでる状態だが、それもまもなく詰むだろう。だが、次の瞬間に背後に気配を感じ、そちらにも銃口を向けると、先程のウボオーモドキが近くまで接近していた。かなりのケガを負わせた筈だが、と考えたが、構わず片手で乱射する。しかし相手はそれを掻い潜り、別のテーブルへと避難する。

「ガラスの割にすばしっこい野郎だ。だが無駄だ」

【俺ダブの両手ルは機関砲ノン】!!

一瞬銃撃が止まる。フランクリンは指先を窄め、そこから超巨大な念弾が生成して発射する。

「!!!?」

ドゴオオオン!!!

凄まじく巨大な念弾が周囲を襲い、辺り一面のテーブル等が粉微塵に破壊される。念弾を撃っていた人物も、念弾ごと掻き消されて煙に包まれる。

「ウボオーモドキも位置的に避けられない場所だったせいかモロに喰らってしまった。いた。」

「へっ。口程にもねエ」

「『アンダーソン』を…ナメんな！」

「!!」

いつの間にか近づいていた中年の男、カルロは背後から貼り付く。彼は予め肉の鎧を分離して、自分は《隠》をして接近していた。消されたのは肉人形の方だ。だが、彼もダメージは相当なものだ。肉の鎧で瞬時に《堅》をしていてもその凄まじい威力は彼の身体を貫通していた。現在、腹部と右腕、右脚を抉られている。彼が動けるのは、自身の能力で肉を作り出し、補助している為だ。だがそれも気休めだ。今、気力で動いている。

「リベロ!! テメエ、あの程度でくたばってんじゃねえぞ!! サツサとしやがれ!!!」

咄嗟にフランクリンは背中に向けて念弾を発射しようとするが、腕が上がらない。いつの間にか腕が大量の肉で覆われていた。足も同様に絡め取られていて、咄嗟に身動きが取れない。

「どうだ? オレの【入れ替わる他人の人生】は? リベロオ!! 生きてんなら早くしろ!!」

次の瞬間、一際強力な念弾が飛んできて、一直線に向かってきた。進退極まる中、フランクリンは腕の肉を引き剥がし、念弾を発射しようとする。

「ウオオオオオ!!」

ブチブチブチイ!!!

ようやく片腕の肉を引つべがした時、直前まで念弾が迫っていた。

ダダダダダ!!

複数の弾丸が襲うが、リベロの念弾はフランクリンの念弾を弾き飛ばし、フランクリンの右腕に当たる。

「ぐっ……!」

ベキベキベキッ!

嫌な音が響く。複雑に骨折したのは間違いない。だが、この能力の恐ろしさは威力ではない。

「ゴホッ、ゴホッ…ペっ！ …イエローカードだぜ、デカいの」

リベロが瓦礫の脇から姿を現す。その姿は控えめに言っても満身創痍だ。特に右手が焦げ付き、炭化している。

「それでもう一丁!!」

念弾を生成し、オーバーヘッドで蹴り飛ばす。凄まじい威力の弾が再び迫る。先程から片手の弾丸が出なくなっている事には気づいている。よってもう片方で迎撃する。

ブチブチブチブチ!!

「無駄だ！ テメエの念弾なら弾く特別性だツ！ キャノン溜める時間もねえぞ！」

「フン。ならばオレが受けなきゃいい」

腕を背後に回したフランクリンは、もう気絶しているカルロを肉ごと引っぺがして前に掲げる！

「バカ共め。仲間のタマで死ぬるんだ。本望だろう？」

念弾がカルロに迫る。だが、いつの間にか起きていたカルロが、小さな声で呟く。

「バカはテメエだ…『アンダーソン』をナメんな」

瞬間、凄いスピードで迫る念弾は直前でカーブし、カルロを避けてフランクリンの左腕に当たる！

ベキベキベキイツ!!!

同じ様に左腕も粉碎される。すかさず

「レッドカード！ PKだツ!!」

カルロは床に落とされ、フランクリンはその場で動けなくなる。両腕から能力を発揮するフランクリンのタイプは、こうなったら致命的だ。

リベロはすぐさま5発の念弾を浮かばせる。

「カルロのおっさん、ありがとよ。生きてりやビール奢ってやる」

そこからは一方的な攻防だった。フランクリンも《凝》や《硬》で対抗したが、巧みなボール捌きによって致命傷クラスの傷を負った。

「ラストだ。コイツで倒れろ」

リベロは不安だった。コイツはPKを耐えかねない。両腕を骨折し、4発の致命的な攻撃を受けたにも関わらず、立っている。正直、自分も限界だ。万が一立っていたら、相打ちに持ち込もう。そう決意し、最後の念弾を蹴り飛ばす。念弾は複雑な軌道を描かず、真つ直ぐフランクリンに向かう。

ドスツ!!!

鈍い音を立てて、フランクリンの心臓部に突き刺さった念弾は、フランクリンの動きを止めた。そして…

ズン…

後ろ向けに倒れた。腕を身体の上に載せる不自然な体勢で。

「!!」

「こうでもしねえと腕が上がらなくてな。最後だ、くたばれや」

巨大な念弾が両手に集まりだす。すぐさまリペロは念弾を打ち出そうとするが、間に合わないし、最早離脱できるような威力では無さそうだ。彼は覚悟を決め、念弾を固めて発射し、受け流しながら生き残る活路を見い出そうとしていた。そして

発射された念弾は明後日の方向に飛んでいった。

「ドツペルゲ入れ替わる他人のガイ人生だ。カルロがフランクリンに触れ、それを手繰って腕を引き寄せたのだ。おかげで念弾はカルロを掠り、壁を粉碎して空中へと消えていった。

「チツ……。もう何も出ねエ。殺せ」

近くに念弾を浮かべて寄って来たリベロにそう告げる。だが、リベロも弾を浮かべたまま動かない。その時、新たに一人の男の声がした。

「うん。まあ及第点。だが、被弾多すぎ」

「師匠！」

出てきたのは、当代コンシリエーレのアルバート・ルチャアーノだ。彼はリベロの師でもある。

「新手か。まあどうでもいい。殺せ」

「うくん。全員重症だな。あと、お前さんは殺さんよ。そういう約束だから。というわけでは今はお休み」

ガツツ！と頭を蹴って脳を揺らし、フランクリンを気絶させると、2人に語りかける。

「お前ら、あの最初の引つ掛けはなんだ？ バレバレじゃん。危うくいきなり死ぬトコだったぞ？ んで、カルロ、オマーは肉で顔とか覆えばもつとラクだったんじゃないかねえの？ リベロもだ。念弾を《隠》で隠せるようにしろって何回言や分かるんだ？」

「いや、師匠…分かりましたから、マジでカルロとか死にそうなんで、説教は後にしてもらっていいいつすか…？」

「全く…まあいい経験になったろ。とりあえず応急処置すつから連れてくぞ。野郎ども、頼む」

すると、何処からかワラワラと黒服軍団が現れて、3人を連れて行く。アルバートは粉々に破壊されて壁に大穴が空いた部屋の様子を見て、呟く。

「……アイツらもまあこんなのに良く勝てたモンだな。ボーナスあげてやんねえとな」

そうして彼は、頭をポリポリ掻きながら部屋を退出していった。

97、別人

長い廊下をただひたすらに歩く。彼にとつて、ここは樂園だ。愛しの彼が作った迷宮^{ダンジョン}は、全てが念能力者の範疇を超えている。彼としては完全に物見遊山の気分であった。

「はあ…癒されるなあ??　そこかしこからピンピンに感じる死闘の気配!　やっぱり彼に譲つたのは失敗だったかな?」

ピエロの装いをしたヒソカである。彼はスキップでもしそうなぐらいの軽やかな足取りで進む。彼の歩いた後にポタポタと雫が垂れている。

「誰も彼も、ムダな足掻きだねえ◆?　そもそも勝てるワケないじゃん♣?　ま、彼らの断末魔もそれはそれでグツドかな?　直接見たいから、もつとチョツカイ出しちゃおつかなく♠?」

「これ以上のチョツカイは遠慮してくれるかな?」

廊下の陰から白スーツの男が、現れた。カームだ。彼は少し険しい顔をしてヒソカを見ている。

「お? キミか◆? 嬉しいなあ?? でも一番上で待つてるんじやなかったっけ?」

「喜べ。特例だ。ま、君ら相手にそんな約束など守る義務があるか?」

「ふふつ、だんだんキミも俗世に染まってきたねえ◆? ま、逢いに来てくれたのは素直に嬉しいよ?? このまま退屈な道を延々と歩かされるかとウンザリしてたからね◆?」

「ふむ…君がその右手にずっと持つてるのは、確か旅団の一人じやなかったか?」

「ん? ああ、コレね◆? 驚いた顔が面白すぎてずっと持つてちやつたよ◆? 見てこの顔! 長い髪が邪魔だけど、それがまた面白いねエ!!」

「前々から思っていたが、君とは感性が全く合わないな。コルトピ君も哀れな。やはり本格的にチョツカイを出される前に潰すのが正解のようだ。大体君は別人だから、私も気兼ねなくルール破りできるしな」

「……………??」

「どうやったかは分からんが、アジトの時から違和感があった。オーラの質、身体の動き、筋肉のつき方、体温…全てが以前の君と微妙に異なる。別人と言われた方が納得できるぐらいにな。極め付けは…呼吸をたまに忘れてるぞ」

指摘されたヒソカは顔を歪めながらニヤける。

「あちゃー、まいったね◆? 自分のじゃないからたまーに忘れちゃうんだよ◆? 良く気づいたね?」

「そして本体はこの近辺に既に居ないな。少なくとも半径20キロ圏内には」

「言つたろ? ショーの準備中だって◆? ボクはこう見えても忙しいんだよね◆?」

「一体何を企んでるか分からんが、お前は危険だ。この騒動が終われば本格的に潰しに行くから楽しみにしとけ」

「わお! キミがそれ言っちゃう? キミも大概危険人物だと思うよ? ま、ボクも準備中にキミに見つかるほどマヌケじゃないからね◆? その時が来たら正式に招待状出すから楽しみにしてなつて◆? で、ここにいるボクはどうする? ワザワザ来たつて事は雑談しに来たんじゃないだろ?」

「ご明察。泳がせようと思ったが、そろそろ邪魔だ。本体じゃないのは残念だが素直に潰されろ」

ブワツ!!

「う〜ん。いい殺気◆? 殺す事については吹っ切れたみたいだね?? じゃあ、多少は抵抗してみようかな?」

「その必要は無いぞ。既に終わった」

ザンツ!!!

ヒソカの背後からいつの間にかオーラの刃が現れ、首を刈り取る。奇しくも彼に殺されたコルトピと同じ状態となってしまうた。

「お? …いや〜やっぱ反則だねー? 碌に抵抗出来ずに死んじやったよ?? でもね」

「この状態でも闘える、か? それぐらいはやってくるだろうな。なので、そちらも潰し

ておいた」

これまたいつの間にか胴体から手足がなくなっていた。

「プツ、アハハハハ!! やつぱり強い! 信じられないぐらいに!! キミは最高だね?!

それでこそ、ボクもやり甲斐があるよ♣?」

「一般人が見たら気絶するような構図だな。私も人に言えたことじゃないが。気色悪いからそろそろサヨナラだ」

カームは指をヒソカ(?)の頭部に向けて、細い念のビームを発射する。ビームは正確に額を撃ち抜き、凶々しいオーラが集まっていた部分を打ち砕いた。頭だけ動いていた彼もようやく沈黙した。

カームは頭部に張り付いていた布を剥がし、中身を確認する。長髪でタレ目のイケメンな優男だ。

哀れにもヒソカに半殺しにされて利用された者らしい。この顔はどこかで見た事があるが、どこだったかな…と考えながら遺体を収容する。ヒソカの秘密を探る為と、被害者の彼を丁寧に葬る為だ。もう一人のコルトピも忘れない。

いよいよヒソカは危険だと再認識した。ヒソカ搜索の優先度をカームの中で1段階引き上げつつ、警戒を怠らないようにせねばならない。そう考えながら彼は上の階へ戻っていった。



「あれ？　ここかな？　お嬢ちゃん迷子？」

「いんや、合ってるわよ」

「貴方が私の相手なの？」

「まあそうなるわね」

「じゃ、遠慮なく」

「えらく思い切りのいい娘ね。そーゆーのキライじゃないわ」

広い廊下で遭遇したのは、旅団のシズクとビスケである。ビスケは子供状態だ。

シズクはデメちゃんを具現化させると、無言で打ち掛かってきた。ビスケは躲して反撃に移るが、デメちゃんにガードされる。体術はお互い互角のようだ。しばらく打ち合っている間に、お互いに裂傷を幾つか作つた後、シズクが話しかける。

「ん〜。女の子で子供なのに結構やるなあ。でも私の勝ちかな」

「ふうん。分かつた様な口をきくじゃない。小娘。大方その掃除機で物質を吸い込む能力と見たわ。でもそれだと無敵になっちゃうから何らかの制限は有るわね。違う？」

「まあそうだね。分かつた所で防げないから。デメちゃん！ アイツの身体から血を吸い込め！」

「ギョギョー！」

結構な勢いでビスケの身体から血が抜かれ始める。

「なるほどね。まあそうだろうと思つたわ」

ギチギチギチイ！

ビスケの身体が変化し始める。身体が巨大化し、更にそこから絞られて行く。同時に血の流出も止まる。そのうち、妙齢の女性が現れた。

「サービスよ。最終形態まで一気に見せるわね。コレになると不思議とある程度の怪我也も治っちゃうのよね」

「！ 変身した？ そういう能力ですか。でも、結構な血は抜いたはず。もう一度抜けば私の勝ち」

「残念ながらね、この状態になったらアンタはノーチャンスよ」
「やってみないと分からない。ダメちゃん、行くよ」

そうやってシズクが構えた瞬間

ズドオツ!!

ビスケの拳がシズクの腹部にめり込んでいた。余りの衝撃に呻き声も上げられずに気絶してしまふシズク。

「あつぶな。危うく貫通させちゃうトコだったわ。一流の使い手で良かったわね。全くコレになると更に加減が難しくなるわ。ま、顔にしなかつただけ有情よね。さ、戻つて輸血してもらお」

ビスケはシズクを担ぐと、廊下の奥へと消えていった。

残る脚は6本。

98、孤軍奮闘

シャルナークは悩んでいた。無限に続くかと思われるようなオフィスの回廊。まるで現代風にアレンジされた迷宮だ。^{ダンジョン}しかも時折デスクや椅子が意志を持った獣の様に變形して襲ってくる。一体一体は大した事なく、シャルナークは普通に迎撃して対処していった。しかし中々終わりが見えず、何度かやり過ぎす場面もあった。

「はあ、まいったなー。こりや本格的にヤバいね。なんとか敵のハナをあかせないかなー」

廊下の壁側に張りつきながら独りごちる。少しでもオーラと体力を温存しながら前に進んでいく。

「これじゃ進んでるかどうかわかんないしなー。とにかく待ち構えてる刺客とやらを返り討ちにするしかないか」



しばらく進むと、開けたオフィスが再び現れた。またか、と思ったが、それまでとは違う部分があった。

待ち構えている人物がいたのだ。

「ようやく中ボス、と。じゃ、早速やろうか」

シャルナークは問答無用で駆け出し、ツンツン頭の子供に針を刺そうと飛び出す。待っていた人物は2名。そのうちの弱そうな方から狙う。多対一の鉄則である。

「!!」

いきなり来るのは向こうもある程度は想定していたようだが、それでも反応が遅れる。目立たない様にパンチの隙間に隠したシャルナークのアンテナをギリギリで受け流し、続けての攻撃に対して大きく距離を取る事でやり過ぎす。もう一人はそれを見てオーラを片手から放出して攻撃を仕掛けるが、難なく躲す。特殊な念能力を持っている様子もない。

この攻防で既に3つの事が判明した。試しに3つを相手に言つて動揺を誘つてみる。

「ふうん。そこそこはやるんだね。でも完全に実戦不足つてトコかな。オレ達の実戦の経験値がわりつてやつか」

「……………」

「んで、オレの能力を知つてる、と。アイツに聞いたとかかな。過保護だなあ」

「……………」

「そして、もう一人。君はサポート系だね。少なくとも攻撃系の能力は持つてない」

「!!」

「どう? 当たりだろ? ま、そこで驚いてる辺りが初心者だね。ラッキーだったなあ。」

君等を半殺しにして盾にしたら有利になるかな。ま、過保護っぷりから見ると、殺して首だけとかにしたらアイツも血相変えてオレの所に来るかな？」

「……クラピカの為にも、お前を倒す！」

「んー？ そのクラピカつて奴は知らないけど、オレ達の被害者かな？ だとしたらご愁傷様だね。ま、世の中そういう事もあるって思っただけで諦めて。そんな事より君達の心配したら？」

「…行くよ、レオリオ」

相手からオーラが噴き出す。中々の量だ。自分達には及ばないものの、近いものはある。シャルナークは密かに警戒レベルを上げる。

「そうだな、ゴン。予定通り行くぞ」

2人は前後に別れてポジションを取る。やはりもう1人はサポート系だった。何のサポートかは分からないが、こちらとしては1人操れたらそれでかなり有利になる。そして黒髪の少年は強化系だとアタリをつける。その証拠に、オーラの一部が肉体に吸い込まれ、身体全体が若干盛り上がる。オーラを使って筋力強化はよくあるタイプだ。子

供が使っているのは珍しいが。だが、問題は無い。むしろ相性がいい。

前方の少年（ゴンと言うらしい）から、掛け声と共に凄まじいオーラの集中が起きる。発生源は拳の様だ。ウボオーのとは違い、タメが必要である事から、フィックスに近い技だと判断する。アレを見せ技にしなから迫ってくると厄介だが…

と、思っていたら後衛から投擲物が飛んでくる。アレはメスか？ しかも結構なオーラで《周》をしている。仕方なく躲すが、その隙に少年が迫る。パンチの体勢に入った所でそのガラ空きの腹部に蹴りを入れる。ウボオーギンとの模擬戦（という名の喧嘩）が生きた。そのぐらいで怯む様なヤワな修羅場を経験しているわけではない。

「グハッ！」

オーラの集中が仇になったようだ。だが、通常の相手と比較しても手ごたえがおかしい。ゴムタイヤを蹴った様な感覚を覚える。しかし体勢は崩れた。すかさず踏み込んでアンテナを差し込もうとした瞬間、彼は信じられない事にその状態から無理矢理身体を捻って

「ジャン、ケン、パー!!」

掛け声と共に念弾を繰り出す!

瞬間的に攻撃を引つ込めて《凝》でガードするも、凄まじい衝撃が襲う。威力は体感でフランクリンの通常の念弾より上で、キャノンよりは下だ。

オーラをガードに回して、服がボロボロになりながらもようやく攻撃を防ぐも、敵は待ってくれない。再び接近してきて同時にタメを始める。

「あいつで…」

…これだから強化系の相手は嫌なんだ。多少の不利や負傷をもともせずにはぐり押ししてくる。と、刹那の瞬間そう思いながらも瞬時に足払いして躲す。

「グー!!」

同時に発射された空振った拳を見て内心冷や汗をかく。明らかに威力が桁違いだ。先程のが同じ威力だったら耐えられないだろう。流星強化系、そして、今度こそアンテナを刺そうとした時、その手を掴まれる。

「オレを忘れんなよ！ 行け！ ゴン、3発目だ！ そして喰らえ！」

もう一人は気配を消して接近していた。だが甘い。忘れちゃいけない。アンテナはもう一本ある。

トスツ

小さなアンテナが手首に刺さる。もう一人のレオリオ君は驚愕の表情でこちらを見るが、もう手遅れだ。

【携帯する他人の運命】!!

瞬時に片手で携帯を取り出して操作し、タメの完了したゴン君の前に盾として差し出す。

「くっ!」

それを見た彼は3発目をキャンセルして飛び退くが、それは悪手だ。

「ゴン! オレを気にするな! 構わず諸共やれ!!」

効果アリ。現にゴン君はどうするか迷っているのが見てとれる。その為にケータイでワザと喋らせてる。この場合は気にせず本体を叩きに来るか、人間の^{マシ}方のアンテナを抜くか破壊するのが最善だが、仲間を操られるシヨックは中々瞬時に切り替えが難しい。そういう所が初心者たる所以だが、盛大に利用させてもらおう。

「さーて、ゴン君? 形勢逆転だね! この『人間』^{マシ}、中々強そうだからラッキーだったよ。じゃ、早速使わせてもらおうね!」

そうやって、同時にレオリオ君を操作する。この「人間」^{マジン}は強い。かなりの練度が見てとれる。実戦が足りなかったタイプか。勿体ない奴。だが、こうなった以上、最大まで使い潰させてもらう。恨むなら師匠を恨め。そう考えつつ、彼を限界以上のオーラや肉体を酷使しながらもう一人のゴン君に猛攻を仕掛ける。

：いいね！　かなり質のいい「人間」^{マジン}だ。強化系とも互角以上に打ち合ってる！　ゴン君も辛そうな顔する所がグッド。さて、遊んでないで参加しよう。オート操作に切り替えながら瞬間的に背後に周り、手が回らないゴン君にアンテナを刺し込んだ。二対一はそこまで経験が無かったようだ。本当にラッキーだった。さて：：どうしてくれようか。

弟子と言ってたからコイツらを嚇けるのも悪くない。だが、完全に殺してしまつて精神ダメージを与えるのもアリだ。悩ましい。

「ん〜どうするかなー」

だが、奴と闘う際には最低でも一つは外したい。奴の幻惑が操作系タイプであれば、

自分が唯一対抗できる可能性がある。

「んじや、とりあえずレオリオ君に死んでもらうか」

その瞬間、周りの風景が切り替わる。気がつくくと、広い部屋の中央に自分達はいた。奥の壁には先程並べられたお宝が山の様に陳列されている。そして……その奥の中央の上等な椅子に奴は座っていた。よし！ 最上階に辿り着いたようだ。思った通り過保護な奴だった。奴は座ったまま話しかけてくる。

「おめでとう！ 君が第一号だ。そして……やっぱり2人じゃ無理だったか」
『鶴』、君の弟子は大した事無かったよ」

煽ってみる。だが、効果は薄いようだ。そして、仕掛けようにも隙が見当たらない。

「うん。まだ初心者だしね。この後反省会だな」

「君の弟子はもう生かすも殺すもオレ次第さ。説教は無理じゃないかな？」

「あ、それね。もう外した。返すよ」

「！」

いつの間にか近くにあった2人が離れて、アンテナが2本、自分の足下に返されていた。そして2人は何が起こったか分からずキョロキョロしている。…まいった。何をされたか全く分からない。どんな念能力だ？ やはり幻惑か？ 既にかけられてるならアウトだが…それに、こちらが三対一になってしまった。

「余裕だね。でも、その慢心が仇になるよ？」

「偶には弟子に力を見せないといけないからな。ま、私を倒せば君らの勝ちだ。私が最大戦力だからね。存分に掛かってきなよ。ゴン、レオリオ、離れとけ」

よし！ 奴はタイマンで自分とやる気らしい。師範の闘いを見させる気だな。ラツキーだ。勝機がほんの少し見えてきた。奴の慢心に感謝だ。

「カーム！ お願い！ もう一度、もう一度だけやらせて！」

「オレからも頼む！ あのままじゃ終われねえ！」

2人が必死に再戦をアピールする。いやいや、マジでやめろよ。もう君らは本来なら死んでるから。

「ダメだ。本来なら君達はあそこで死んでる。約束したはずだ。黙って下がれ」

本名はカームと言うらしい。ゴン達の必死の懇願も無下に蹴られる。そして、カームから凄まじいオーラが放たれる。こちらでもビビるぐらいだ。何だあのオーラ？ …ヤバいな。自動モードでも勝てるか？ 2人は悔しそうな顔で引き下がっていった。

だが、丁度いい。あの2人を再び相手するのは手間だ。だから、これが最大のチャンスだ。奴を殺せばこの状況はかなり改善されるだろう。自分の命を引き換えにしても、団長達を生かす！ これが最善手だ。シャルナークは会話中にさりげなく拾ったアンテナを手の中に収め、更なる会話を試みる。

「第一号って事は他に上がって来たメンバーはいないんだね？」

「そうなる。ただ…もうすぐもう1人来るな。待つか？」

それを聞いて、ますます勝機が見えてきたと一瞬思う。しかし、引つ掛けかもしれないな

い。油断はしない。先に仕掛けるか。万が一来たメンバーが参加してくれるんなら尚
良し。

「生憎、敵の言葉は信じない事にしててね。先にやらせてもらおうよ」

アンテナを自分自身に刺す。自動操作、ON

ゴゴゴゴゴ

凄まじいオーラがシャルナークから溢れてくる。これは奥の手。だが、これができた
という事は、操作系ルールから考えると自分はまだ操られていないという事。後は、自
動操作に託す。そして、スクナクトモ、モウヒトリガクルマデモチコタエテヤル…タノ
ンダゾ…

99、反省点

フエイタンはイライラしていた。余りにも長い通路、無限にあるかのような階段、そして襲ってくる謎の椅子や机。最初はイライラに任せて叩き壊していたが、その内思い直して動きを確認する実験台として使っていた。自分もかなり鈍っている。だからあんなにアツサリ跳ね返されたのだ。最盛期までカンを取り戻さねば。それが奴に勝てる唯一の方法だ。そして、自分の能力で跡形も無く消滅させる。

そう考えてひたすら進みながら動きの確認をする。自慢のスピードも大分勘が戻ってきた。戦闘の勘も同じく、だ。

どれぐらい登っただろうか。長い階段の果てに、大きな両開きの扉が現れた。恐らくここがゴールだろう。手間かけさせやがって。そういつた怒りに任せて勢いよく扉を開くと、既に誰かが闘っていた。

アレは…シャルナークか。オーラが膨大だ。切り札の自動モードを使っているようだ。だが、それでも、奴は凄まじい攻撃を軽くいなしている。あまつさえこちらに顔を向けて話しかけてきた。

「やあ。君が第二号だ。待ってたよ。さあ、どうぞ？」

その物言いにフェイタンの我慢は限界を迎える。

「お前……殺す」

言うと同時に一直線に飛び出す。接敵の直前に残像を残し、背後から回り込む。丁度奴を挟んで二対一の状態だ。服に仕込んだ仕込み刀を背後から突き刺そうとした瞬間、右上から嫌な気配を感じて刀で振り払う。

ガキツ!!

いつの間にか迫っていた念で象られた尻尾の様なものを撃ち落とす。《隠》だ。しかし、これがダメなら次だ、と再び残像を幾つも作り、アタックする。しかし例の尻尾に弾かれる。あのシャルナークの相手を正面からしながら、だ。コイツは後ろに目でも付いているのだろうか。フェイタンはよりギアを上げる。強い。ターゲットにここまで抵抗されたのは久しぶりだ。最近は弱い相手としか闘わなかったから正に圧倒的格上と対峙しているこの状況は新鮮だ。だが、あまり悠長にはしていられない。シャルナークが限界に近いからだ。もうかなり消耗しているのが見てとれる。このままいけば近い内にガス欠になるだろう。そうなる前に決着をつける。

一旦下がったフェイタンは、シャルナークの背後に周り、死角から突撃する。シャルナークは自動操作状態だが、意図を察したようで最後の猛攻を仕掛ける。そして、遂に彼の腕を掴んで自らの身体に引き寄せる。

ズブツ

シャルナークの腹部をフェイタンの仕込み刀が貫く。しかも《硬》だ。決まったと思つた。しかし、刀は止まっている。よく見れば相手の背後から現れた巨大な人型が手

を挟んでいた。その人型は複数の手を持ち、空いた手で自分達を薙ぎ払う。シャルナーは既になすすべなく吹っ飛び、《硬》が仇となったフェイタンも多大なダメージを受けて吹っ飛んだ。

「なるほど。仲間すら犠牲にしても勝利を目指したか。だが残念だったな。それじゃあ私には通用しない」

フェイタンは激怒した。身体は既にボロボロだ。骨折8箇所以上、内臓も痛めているだろう。……だが、条件は整った。

「駆贈…厦遅乃了…下激！（クソが…調子に乗りやがって）」

いつの間にか、フェイタンの身体は拘束具の様な、防護服の様な物を身に纏っていた。もちろんオーラで出来ている。

「ふむ、奥の手かな？　これは…範囲攻撃か？」

「轟×乃×！　（痛みを返すぜ）」

——灼熱に変えて!!——

フエイタンの手から変化したオーラの塊が飛び出す。

「おつと…これは不味いな」

相手に若干の焦りが見える。だが、関係ない。

【ベインバツカー許されざる者】

上空に待機したオーラが輝き出す。

【ライジングサン太陽に灼かれて】

カッ!!

オーラから強烈な熱が発生する。オーラを熱に変化させたものだが、その熱量は桁違いだ。辺り一面が灼熱地獄へと変わる。生物なら間違いなく即死する程度には熱量がある。本来であれば、発動する前に叩くか、発動した段階で逃げなければならぬ。もつとも、その段階で逃げられるわけもないが。

フェイタンは勝利を確信した。これまでの鬱憤と怒りとダメージが相まって、過去最大級の熱量が出力されたからだ。生物である以上、ましてや人間である以上、どんなにバカげた力を持っていようが瞬時に蒸発するだろう。コンクリートすら蒸発しそうな程だ。フェイタンがそう確信するのも当然だと言えよう。

「疵也吠吧吧吧!! 燃鶉菟☒炉!! (ヒヤハハハ! 燃え尽きやがれ!!)」

—— 1 秒

—— 2 秒

—— 3 秒

灼熱の時間が経過してゆく。だが相手は変わらずそこにいる。

——4秒

——5秒

——6秒

ここにきてフェイタンはその異常さに焦りをみせる。相手に効果がないのだ。流石のフェイタンも動揺する。

「……莫蘇无!! 爲故气个嬾!!? (バカな!! 何故効かない!!?)」

「何と言つてるか分からんが、疑問に思うだろうから答えよう。その程度の熱では私は殺せない」

平然とした物言いに絶句するフェイタン。普通なら喋る事すら不可能だ。だが、ならば更に出力を上げよう。自分の生命すら削る。瞬時に判断して自らに更なる誓約を課す。即ち、生命力を削つて威力を上げる。後には引けない。引く気も無い。旅団員としてのシンプルな行動原理が、彼を更なる高みに押し上げる。

結果

【超新星爆発】
スーパーノヴァ

——カッ!!!

瞬間的に、辺り一面が白で塗りかえられる。そして、凄まじい威力の熱量が展開される。その熱は既に太陽の表面温度を超えた。最早一個人が出せる威力ではない。戦略兵器クラスだ。自身もオーラの防護服も意味を為さず、手足が燃え始めている。ここに来てフェイタンは人の限界を超えた。

だ・が、そ・れ・で・も

目の前の男は立っていた。フェイタンの手足は炭化し、生命と引き換えの熱も下がりがつがある。フェイタンは更に力を引き出そうと、生命力の総てを引き換えにしようとした、その時

「君は……凄いい使い手だ。戦闘者としては超一流だろう。覚悟もある。だが、相手が悪かった」

ドストッ！

オーラの尻尾の先の針がフェイタンの燃え尽きつつある防護服を貫通して心臓に突き刺さる。最早フェイタンにはなす術も無い。

「畜响……（ちくしょう）……」

オーラが消え、身体が麻痺する。視界がボヤける。霞がかってゆく意識の中、フェイタンは自身の周りや近くにいた者達を覆うオーラを見た。つまり、この男は。あれ程の攻撃を受けながら周りに被害が出ない様に立ち回っていたのだ。余りにも余りすぎる

力の差に笑いが込み上げる。全てがこのバケモノの掌の中で踊らされていたのだ。こんなに可笑しいのはいつぶりか。自分達はまるでピエロだ。ヒソカを笑えない。

思えば好きに生きてきた。その終点がこれだ。この世は所詮そういうものだ。単に自分の番が来ただけのこと。心残りがあるとすれば、団長含む何名か脱出して蜘蛛が存続すればよいが。今の自分にはそれも栓の無いことだ。一部炭化し、更に麻痺する顔に歪んだ笑みを浮かべ、フエイタンはその意識を閉じた。



「死んだ………の？」

ゴンが問いかける。

「いや、まだだ。殺してはクラピカに悪いからな。もう寸前ではあるが。両者生命維持程度には回復させてやろう」

敵2人を申し訳程度に癒し、雁字搦めに拘束していると、ゴンが俯きながら話しかけてきた。

「オレ達は……弱かった」

「……」

「この人と闘ってたら間違いなく死んでた」

「そうだな」

「……オレは、強くなれるかな？」

「……私は、正直に言えば君たちが弱いとは全く思っていない」

「でも！ 負けちゃった……」

「そうだな。私が敢えてそうなるようにしたからな」

「おい！ そりやどうい事だ!？」

レオリオも会話に入ってくる。

「言葉通りだ。君達が負けるような組み合わせにした。結果、予想通りになっただけだ」
「な……!!　じゃあ負けたのは必然だったってのか?!

「そうだ。だが、実は君達が勝てる目もあった。前の闘いを活かせばな。しかし、君達は慢心した。命が懸かった真剣勝負で全力に徹しきれず、隙だらけだった。結果、敗北に繋がった」

「オレ達は全力でやったよ!!」

「そうか?　では、何故不意打ちなどをせずに律儀に待っていた?」

「!　それは……」

「んな卑怯な事、できつかよ!」

「相手は遥か格上、そして命が懸かった闘いだぞ?　ありとあらゆる手段を用いるべきだ。死ねば卑怯もクソも無い。実際待ち構えていたにも関わらず、相手に仕掛けられて先手を取られたからな。更に、相手の会話にも乗って自身達の名前すら晒している。何が起こるか分からない念戦闘で、情報のアドバンテージを失う事は致命的だ。それらの情報で強烈な攻撃を受ける事は充分考えられる。ジンが何故、あれ程嚴重に情報を管理

していたか、考えてみるといい」

「うっ……」

「君達は今現在でも十分強い。戦闘力や精神力という意味でだ。だが、致命的な弱点がある。それは、経験不足による状況や想定の甘さだ。厳しい事を言うが、先の戦闘では私が何とかすると、心の底で思っていなかったか？ 本当に全力で出来る全てをやったか？ 私がいない状況だったら2人は操り人形の末にポロポロになって死んだだろう。その想定の子、相手との戦闘における心構えの違い、それらが相まって二対一という有利な状況でも負けた。そう言った意味では、弱い、と言える」

「……………」

「だからこそ、私は知って欲しかった。致命的な事が起きる前に。後々後悔しても遅いんだ。私がかつてそうだったように。闘わない、という事も生き残る為には重要な事だ。だが、どうしても闘わなければならぬ場合、負ける事は許されない。今回の事を教訓によく考えてくれ。もう、2度と負けない為に」

「……………わかったぜ。オレはもう負けねえ」

レオリオが先に返事をする。負けた分素直になれたようだ。続いて、ゴンも同じように返事する。

「……………わかったよ。悔しいけど、肝に銘じとく。でもカーム、もしよかったらカームの話も聞かせてね」

「いいだろう。だが、それは今じゃない。時期が来たら必ず話すさ。まずはこの騒動を終わらせないとね」

「そうだ！ クラピカやキルアやカルトは!? 無事なの!？」

「落ち着け。あの3人を信じろ」

「でもキルアが!!」

「それも含めて、だ。私がいるからには酷い事にはならん。それに、君達は自分の心配をした方がいいぞ?」

「どういう事……………ハッ!」

気付いたか。背後から迫る圧力に。

「2人とも? お話中悪いけど、ちよつとアタシのトコまで来てくれなくいい?」

顔中に怒りマークをこさえて、尚且つ満面の笑みを湛えるビスケがそこにいた。やつぱりビスケは流石だな。瞬殺だったか。哀れ、ゴンとレオリオは首根っこを掴まれてズ

ルズルと引き摺られていった。

可哀想に：多分2時間コースかな？　ま、充分反省するといいき。今ならいくらでもやり直しがきくんだから。彼らに貴重な体験をさせられた。それだけでも今回の件はお釣りがくる。その点では旅団に感謝だな。後はキルアとカルトとクラピカか。特にキルア。これで例のアレがどうにかなるきっかけになるといいが。

信じて待つとしよう。こうしてるとなんか悪のラスボスにでもなった気分だ。あながち間違つてないのがなあ。ともかく、上手く事が運ぶようにもうひと頑張りするか。

100、覚醒

ここは、ジャングルだ。

今は失われた故郷を思い出す。見た目は豪華なコンクリート仕立ての迷路で、ジャングルとは程遠い場所だが、重要なのは見た目ではない。

少しでも油断を見せれば襲ってくる猛獣、害獣、魔獣、あるいはそれに類する様な気が息づき、弱肉強食がそこかしこで繰り広げられる。そういった意味でのジャングルだ。しかも奥地。まるで強力な魔獣の巣に迷い込んでしまった時のようだ。久しく忘れていた。このような感覚は。五感が刺激される。神経が張り詰める。そして……気分が高揚する。戦士として、最高の闘いが待っている。そんな予感がする。

恐らく、この先に待ち受けるのはどう足掻いても絶望だろう。入る前に「ヤツ」を見た時そう思った。アレは人間ではない。人の皮を被ったバケモノだ。そのバケモノに

目をつけられた時点で我々は終わったのだ。虫が鳥に勝てない様に。鳥が獣に勝てない様に。そして、我々蜘蛛は、奴の巣に投げ込まれた。奴の子達に与えるエサとして。

だが、それでいい。故郷は開発によって失われた。脈々と続いてきた誇り高き戦士の系譜も、生き残っている者はもう僅かだ。元から闘いや狩りで命を落とす者も少なからずいた。時代は流れ、舞闘士の滅びは決定的となった。ならば、最期まで戦士らしくあらう。幻影旅団に入ったのも良質な狩りに困らないからだ。いかなるバケモノであろうが立ち向かい、狩る。それこそがギユドンドンド族最高の戦士、舞闘士であるポノレノフⅡンドongoの矜持なのだから。



暗い廊下を歩く。獣型の椅子や机が襲ってくる。時には破壊し、時にはやり過ごして凌ぐ。この程度は見戯だ。能力を出すまでもない。草原に住まう野生動物が戯れてき

た、その程度のこと。問題はすぐ近くにある。強者の気配を感じる。野生の獣並みに気配を隠しているが、ジャングルの戦士であったボノレノフには理解する。自分を狙う微かな気配を。

ここにきて、彼は往年の感覚を取り戻していた。即ち、野生に近い超感覚というべきものだ。《円》を使わなくとも、地形が把握できる。相手を察知できる。ジャングルを離れ、旅団で過ごし、知らない内にかなり鈍っていたらしい。だが、取り戻せた。この先にいるのは強力な敵。戦士として、舞闘士として恥じない闘いをしよう。

開けたホールルの入り口でボノレノフは立ち止まり、静かに闘志を高め始めた。



クソっ！ 何故立ち止まる？ 完璧だった筈だ。気配は消している。当然殺意もだ。仕事でいくらでも成功してきた隠形だ。今は《絶》すらもある。だが、現実問題として相手は間違いなくこちらに気付いている。不意打ちが成功する相手じゃない。逆に返り討ちにされる。これがA級賞金首の実力か。

やるしかない。カームに頼み込んで、タイマンを希望した。全ては自分の弱さを克服するため。「逃げ癖」と呼ばれる悪癖に向き合って、アイツらと共にあるため。

だからこそ、逃げる訳にはいかない。

だが……頭の中では既に自身の声がうるさい程に響く。

『格上だ』

『逃げた方がいい』

『勝てるわけない』

『ここで逃げてでも死ぬわけじゃない』

『カームに任せておけばいい』

『手遅れになるぞ』

『逃げろ』

『早く』

——五月蠅いつ!! オレは! 自由になる! もう殺し屋じゃない、オレは……ハンターだ!!!——

心の中の忠告に自分で活を入れながら、キルアはエアダクトから出て、ボノレノフの前に降り立った。

「お前か。オレの相手は。子供だな。オレの前に立ったのであればお前は敵だ。遠慮なくやらせてもらう」

シユルシユルシユル……

ボノレノフの全身を覆っていた包帯がまるで生き物の様に解け出す。中から現れたのは、全身に大小の穴を持った身体だ。

ゆらり

ゆつくりとボノレノフが動き出す。管弦楽器の重奏の様な音色がゆつくりと流れ始める。

「！」

キルアは本能的にこのままではマズいと察知し、瞬時に帯電を始める。同時に頭部、腕部、胸当てまでの発電鎧を具現化する。相手は構わず踊りを続けている。隙だらけに見える。

あの音楽を続けさせるのはマズい。狙うは速攻。

——
カラムル
——
神速

【電光石火】!!

バチイツ!!

——首を狙った斬撃は僅か紙一重で触れず、ボノレノフの反対側に着地する。外された！ スピードに関しては超一流と比較しても上回る筈だ。何故避けられた。相手は未だに舞を続けている。演奏はドンドン加速する。もう一度だ。今度は肢曲からの：
電光石火！

バカな!! 何故当たらない…! !

「雷使いか。確かに速く、強力だが、お前の呼吸が見える。狙いがわかりやすい。直線の動きしかない。それではオレは止められない。次はオレの番だ」

——バトル・カンタービレ
戦闘演武曲——

【序曲】！

全身をオーラの鎧が覆い、具現化した槍で突撃してくるボノレノフ。キルアは何とかが躲しながら、だが、反撃は出来ず、突き出される槍を捌き、後方へと跳ぶ。

「ほう……動きは流石だ。だが貴様、何故闘わない？ 命を狙う癖に貴様には覚悟が見えん」

「……！」

バレている。

この数瞬の攻防からもうバレた。自分の戦闘のスタイル、そして逃げ腰を。だが、それでも、キルアは逃げない。今までの自分なら、ここで失敗したと判断して即座に逃げ出すだろう。頭の中には自分自身の警告がうるさく響く。しかし、同時に逃げたくない

という想いも渦巻き、もうグチャグチャだ。

『自分では敵わない。桁違いの戦闘経験だ』

『それでもやるんだ!』

『動きが見切られてる。勝ち目がない』

『だから何だ! やってみないと分からないだろ!』

『それはリスクだ。クレバーになれ』

——五月蠅い! 五月蠅い!!

『オレは殻を破るんだ!』

『命が懸かる場面でそれは必要か?』

『強く、強くなるんだ』

『修行で十分だろ? 今じゃない』

『今じゃなきやダメだ!』

『ならば時間を稼げ。まともにやり合うな』

『それじゃ今と変わらない!』

『このまま続けたら死ぬ。せめて質問して時間を伸ばせ』

『……だけど……』

『布石を打て、隙を見出せ』

『……』

——やめろ！ 聞くな!!

心の奥底で声が響く。合理的なのは分かっている。だが、それは逃げの思考。それでも、拒否する為の一步が前に進めない。ついに、忠告に従ってしまう。

「どうして……分かったの？」



彼は戦士ではない。その事実がボノレノフを失望させる。なるほど実力はある。特に雷の能力は脅威だ。だが、肝心の使い手の動きが精彩さに欠ける。躊躇いの予備動作によつて攻撃がくる地点を察知できる。相討ちを恐れるあまり攻撃自体も浅い。よつて、いくら目に止まらぬ程速かろうが見切れる。

恐らく、この少年の本来のスタイルは、野生の獣の狩りと同じだ。息を潜め、リスクを排除し、一方的に息の根を止める。同格以下の相手には無類の強さを発揮するだろう。だが、勝敗の行方が分からない程の拮抗した闘いや格上相手は苦手と見た。と、言うよりこれまで避けてきたのだろう。今、何故その得意スタイルを放棄して、苦手な戦闘に挑もうとしているのか。この闘いを試金石にするつもりか。

今、彼は自身の怯懦を振り切ろうと腕いている真つ最中だ。その証拠に、明らかな時間稼ぎの質問をしている。いずれにせよ、向かってくるなら倒すのみ。その為に心を折っておくのもいい。まだ少年だ。あまり手は掛けたく無いが、敵として出て来た以上は容赦はしない。

「命を奪う自体に躊躇いは無いようだ。だが、その代わり命を賭けた闘いをした事が無いな？ リスクを嫌い、確実に獲りに来る。野生の獣と同じだ。いや、獣ですら存在を

懸けた闘いをする事がある。お前は獣以下だ。故に、これから始まるのは狩りだ。雷を操る者よ、覚悟するがいい」

「違う！ オレは……ハンターだ!!」

「ならば証明してみせろ。ハンターだろうが何だろうが、闘う者としての気概を。このまま獣として朽ち果てるか、戦士として死ぬか、選ぶがいい」



ボノレノフが再び演奏を開始する。キルアはどうしていいか分からず、その場に立ち尽くす。キルアは逃げない。逃げられない。こんな事は初めてだ。この様な状況に陥って初めて……自分が闘ってすらいなかった事に気付く。舞が終わる。

——バトルレ・カンタービレ——
戦闘演武曲——

【剣の舞】
ソードダンス

いつの間にか再び部族鎧を纏っているが、先程と違い、背面から新たな腕が複数生え、阿修羅の様相を呈している。そして、それぞれの手には曲剣が握られていた。計10本。初めにその半分を腕ごと後ろに逸らす。

ギチギチギチギチ：

存分に引き絞られた腕から、曲剣が放たれる。回転しながらキルアに向かう剣を何とか躲すも、今度は本体が凄まじい速度で接近してくる。5本の曲剣が複雑な軌道を以てキルアに迫る。躲す事に精一杯で、反撃など出来そうもない。更に、飛んでいったかと思われた剣が曲線を描いて戻ってくる。10本の剣による包囲戦法。360度逃げ場は無い。次第に被弾が増えてくる。それも掠り傷から浅い傷へとドンドン変わる。このままではジリ貧だ。何とか、何とか活路を見出さなければ。

焦りは視野の狭窄を呼ぶ。必死に躲しながら、一点のみの隙間を発見した。迷わずそこを目掛けて足からオーラを放ち脱出する。即ち、上空だ。天井近くまで飛び上がり、即座に電撃を溜め、相手に向かって落とす！

【落雷^{ナルカミ}】

ズドン！

——技を放った時に決まっただと思つた。前回もこの技で活路を見出したから。相手によつてその様に誘導されていたとも知らず。

雷を放った瞬間、相手と自分の間でインパクトが起きた。ボノレノフが技が来る直前に剣を3本投げていたのだ。狙い通り中間地点で剣に落雷の直撃が起こり、キルアはそのまま落下する。

「その様な攻撃も持つだろうと想定していた。故に、貴様の負けだ」

落下するキルア。万全の体制で構えるボノレノフ。キルアは必死に再び発電しようとするが、間に合わない。数秒の攻防だが、キルアにはこの瞬間がスローに見えていた。後僅かで膺の様に切り刻まれるだろう。せめて、せめて生き残らなければ……！

左右から剣が迫る。躲せない。腕でガード。手甲及び腕部の鎧が碎け散り、深いダメージを負う。下から迫る2本の斬撃は脚を狙ったもの。躲せない。だが、致命傷は避ける為に動かす！ しかし、それでも両脚の腱を含む半分以上を斬られる。時間差で来る突き3本。頭部は頭を逸らすも発電鎧が碎け散る。だが、即死は免れた。首と心臓への突きは無理矢理身体を捻って逸らすのが、鎧が碎け、鎖骨部分と胸部に浅くない傷を付けた。キルアは最後の突きの反動を利用して後方に飛ばされる。全身の切り傷。凡そ致命傷に近い。

だが、生き残った。しかし、脚の傷が深刻だ。腱まで斬られて立てない。逃ゲロ。失血も酷い。仮に動いても数分だろう。逃ゲロ。逃げる事もままならない状態だ。キルアの脳内で深刻な警鐘が繰り返し返される。逃ゲロ。幸か不幸か、繰り返し返された忠告によって逃げる算段は何か見つかった。逃ゲロ。キルア自身、これ以上戦闘は不可能として、その忠告に従いたい気持ちの方がより強くなる。逃ゲロ。ほら、次の攻撃が来る。次は避けるのが難しい攻撃が来る。逃ゲロ。

逃ゲロ。

逃ゲロ

逃ゲロ

——だが、これでいいのか？ 獣以下と罵られ、また暗殺者として生きていく？ 冗談じゃない！ オレは……オレはアイツらと共に生きると決めたんだ!! アイツらは……ゴンは……オレの……

逃ゲロ!!

友達だ!!



一方、ボノレノフは鎧を解き、相手を観察する。仕留め損なつた。相手の驚異的な動きによつて。この状態の獣はタチが悪い。瀕死に見えて、逃げる算段を立てているようでもあり、何か狙っているようでもある。仕方ない。確実に、息の根を止める。

「最後だ。貴様はやはり、獣のまま死ね」

——バトル・カンタービレ
戦闘演武曲——

【木星】
ジュピター

ゴゴゴゴゴ……!

天井を突き破り、巨大な惑星が姿を現す。ボノレノフの切り札とも言える技の一つ。今の動けないキルアに避ける術は無く。

——その瞬間、時が凍りついた様な感覚を覚えた。

そして、ボノレノフは、インパクトの寸前に頭に手をやる相手の姿を見た。

ズドオン!!!

凄まじい衝撃と共に、煙が辺りに舞い散る。ボノレノフは警戒を解かない。確実に死体を見るまでは。気配は消えている。だが……どうしても警戒が解けない。

予感がする。奴は生きている。

そう考えていた時、背後から声がした。

「あゝスッキリした。はは…してやられたな」
「!!」

背後を振り向けば、血塗れな上に頭部からも怪我を負った相手が悠然と立っていた。

「イルミの野郎……こんな針差し込んでやがった。オレの脳アタマ中にさ」

涙を流しながら頭を指差し、呟く相手。何を言っているか分からないが、瀕死の癱に先程よりオーラが増大している。……厄介だな。覚醒させてしまったか。だが、それでいい。それもいい。

「ようやく戦士の顔になったか。前言は撤回しよう。オレの心を震わせてみる」

予感がする。お互いこれで最後。次かその次で決着きまる。奴は待っている。初めての

戦闘を楽しむか。それとも決めに来る瞬間を狙うか。それも良からう。だが、その壁は超えさせぬ。変わらずここで朽ち果てて死ね。

ボノレノフは最後の演奏を終える。木星では倒せない。ならばこれだ。

メタモルフオーゼン

—— 変 容 ——

【動物の謝肉祭】

カルナバルオブビースト

ボノレノフの姿が変容する。その姿は、パツと見れば半馬人の様でもあるが、翼が生え、胴体には肉食獣の顔が付いている。本体(?)部分には鎧を着込み、槍を持つが、先程の阿修羅の様な腕も存在している。当然剣も持つている。人と獣の融合。その姿は、ギユドンドンド族の神話に伝わる獣の神の様相を呈していた。

「へえ、なるほど。じゃ、来なよ」

相手が構える。鎧は無い。しかし、脚と腕に甲を付けている。オーラも静かだ。だが、達人の様な雰囲気を出している。お互い、一筋縄ではいかない事は分かりきつていた。勝負は数瞬でつく。奴は長くは動かない筈だ。先程も距離の問題で来なかつたのだろう。今立っている事も信じがたい程の深手を追わせているからだ。しかし、今の奴は完全に先程とは別物だ。迂闊な攻撃をしたら跳ね返されるだろう。だからといってここで引く手は無い。寧ろ心が高揚する。戦士としての自分が、強大な敵を倒せと鼓舞している。

「行くぞ」

剣を複数飛ばし、駿馬の脚力を以て迫る。序曲プロローグとはスピードが段違いだ。槍の一閃。最小限の動きで躲される。そしてほぼ同時に反撃を喰らう。精密な動きだ。一瞬痺れによつて反撃が遅れる。だが、飛ばした剣が返つて来て、更に、他の腕の斬撃や胴体の噛み付き、槍の突きなど様々な攻撃が展開される。背の翼も活用して、先程よりも更に逃げ場の無い攻撃が行われる。しかし、その一撃一撃にカウンターを喰らう。電撃付きで。少なくともダメージを貰い、堪らず距離を取る。

「貴様……人間か？　そこまでの精密な動き、人間には不可能に近いぞ」

「自動で動いてるだけさ。疾風迅雷つて名付けた。でもダメだな。決定力に欠ける。やっぱ自力で動かないとね」

「ふん。貴様には時間が無い。オレが逃げ回れば、それだけで貴様は死ぬ。そう長くも動けんだろう」

「そうだね。これが最後の攻撃だ。これで死ななかつたらアンタの勝ちだ。逃げてもいいんだぜ？」

「ふ……愚問だな。戦士として、貴様を必ず屠る。最後に名を聞いておこう。オレが屠る貴様の名を」

「キルア、だ。アンタは？」

「ボノレノフだ。行くぞ」

再び構える両者。今度は迂闊には飛び込まない。ボノレノフは肉を斬らせるつもりでいた。その代わりに骨を断つと。電撃は脅威だが、同時に当てれば問題無い。オーラの鎧による防御力では先程の攻撃を考えると僅かに上回っているという計算もある。

よって、初手決着だ。一撃で決める。相手も同じだろう。互いに動かさず先を取り合う。キルアは集中を続けながらも、電力を高めている。だが、キルアには時間がない。圧倒的に不利な状況。更に今も続く大量出血がドンドン勝機を遠ざける。読み合いによる消耗も激しい。

ブーーン……

電力は過去最高の威力まで高まっている。しかし、キルアの身体には限界が訪れようとしていた。電気力で無理やり脚を立たせ、鈍くなる身体に電気活を入れる。それだけでもかなりの神経を使う。更に強敵との初めての読み合い。

遂にキルアは出血により、一瞬立ち眩みが起きる。

そこを逃すボノレノフでは無い。

最高の瞬発力を以って槍を前面に出して突撃する

殺^とった!!

スローモーションで景色が流れる中、ボノレノフは確かに見た。自身の動きに反応して、超高速で向かって来る敵の姿を。だが、一手自分が速い。槍を心臓に合わせて突撃する。相手は直線の動きだ。今だ。槍を突き出す！

◇

極限の凄まじいスピードの中、突き出される槍に対して、キルアは確かに反応していた。左手の甲で槍を下から軽く弾き、その勢いのまま地面を蹴って右手を前に、相手に全身で突撃する。

【紫電一閃】

側から見れば、一瞬の交差であった。両者、互いの位置が入れ替わる。ボノレノフの能力が解ける。見れば、胸部に大穴が空いていた。僅かに痺れの残る身体で呟く。

「見事……」

ドサツ

ボノレノフは一言告げると、その場に崩れ落ちた。強い敵との極限の闘いに満足したかの様に、その顔は晴れ晴れとしていた。

キルアもそれを見届けて同時に倒れ伏す。既に意識は無かった。しかし、それを受け止める者がいた。その者はキルアを抱えて呟く。

「よくぞ、よくぞ克服した。お前の勝ちだ。今はゆっくり休め」

101、紙と糸

アタシ達は何処で間違っただろう。

まんまここに突入してしまった時か。

パクノダの異変に気付かなかった時か。

……それとも、最初の時点で団長を止められなかった時か。

こぼれたミルクは元に戻らない。だからこそ今は、この絶望的な状況を何とかしなければならぬ。……たとえ自分が死ぬとしても、蜘蛛だけは。

いや、違う。

団長だけは、生き延びて欲しい。

それがアタシ達の生きた証だから。



長い廊下を経て、回廊に至る。これで何度目だろうか。だが、行くしかない。そもそも、何が待ち構えるか分からないこんな場所に突入した事自体が間違いだった。ありえない選択。それこそが敵の力量を如実に物語る。上には上がいる。わかっていたつも

りだったが、まだ驕りがあつたようだ。

いつまでも自分を彷徨わせるこの場所に不快感が募る。幾度も舌打ちをしてしまう。蜘蛛は敵の糸に絡め取られてしまった。こんな滑稽な事があるだろうか。恐らく「敵」はこの先で準備万端に整えて、確実に狩りにくるつもりだろう。或いは我々を見てほくそ笑んでいるかもしれない。

……上等だ。

そんなクソみたいなのツラごと切り刻んでやる。幻影旅団を舐めるなよ。絶対に思い通りにはさせてやらない。パクの仇は、あたしがとる。



長らく警戒しながら歩いた先に扉があり、開くと中庭が見えた。広い公園風の中庭だ。木々が幾つか生えている。このビルの構造について考えても意味がない。どうせ念能力だ。自分に実害が有るかは分からないため警戒するしかない。ただ、恐らく害はないだろう。勘だが。

そして、ここでアタシの相手が待っている。気配は消しているが、きつとそうだ。

「出てきな。待つてたんだろ？」

もしいるとしたら完璧な《絶》だ。だが、ここに潜んでいるとマチは確信していた。勘は現在絶好調で、尚且つ研ぎ澄まされている。

やがて、数メートル先の木の陰から黒い和服姿の女の子供が現れた。

「……ボクを察知出来るとはね。流石旅団。それともボクの《絶》がヘタクソだったかな？」

「出てきたね。ガキか。《絶》は出来てたよ。アタシには通じなかつただけ」

「ふうん。やつぱり一筋縄ではいかない……か。まあいいよ。それならそれでやりがいがある」

目の前のガキはオーラを練り始める。ガキの癖にいいオーラしてる。質、量共にほぼ一流と言つていいだろう。幻影旅団ファントム・フリークスの前に自信満々で一人出てきただけはあるという事か。

……舐めやがって。

「今のアタシは機嫌が悪い。楽に死ぬると思わない事だね」
「侮つてもらつては困るよ。自分の心配をしたら？」

一丁前に生意気な口をきく。だが言わせておけばよい。すぐに分からせてやる。爆発的な《練》をし、闘志を滾らせる。今までの鬱憤を晴らすかのように。準備完了。

「覚悟は出来た？　じゃ、死にな」

瞬間的にその場から消え去る。直線的に相手に向かうわけではなく、斜め前にある木に向かい、それを蹴って更に加速する。

更に3本程の周囲にある木を経由する。相手の周りを飛び回り、背後から強襲する。しかし、それをポーッと見ている程相手もバカではない。懐からいつの間にか扇子を取り出して開き、紙吹雪を舞わせる。紙吹雪は周囲を飛び回り、蛇の様にうねり始める。なるほど、操作か具現化だ。背後からガキに迫るが、紙吹雪がまとまってこちらに向かつて来た為、一旦踏み留まり、別の木に飛び移ってそれを掻い潜りながら手刀で首を狙う。

ガギン!!

金属音が響きわたる。火花が散る。例の扇子でガードされた。鉄扇か。次の攻撃を繰り出そうとするが、紙吹雪がこちらに向かって来た為、一旦すれ違う様にしながら離れる。

側から見れば、大して効果の無い攻撃。だが、それでいい。仕込みは終わった。敵の大体の情報も掴めた。ヤツは変わらさず舞うように紙吹雪を操作しながらこちらに向かわせる。あのタイプはガードしたらマズい。勘ではなく、経験上だ。だが、ワンパター

ン過ぎる。次はこちらの番だ。

再び接近する。今度は直線で向かう。当然迎撃するかのように紙吹雪が向かってくるが、右に飛ぶ。

！ スピードが上がった！

空中を狙っていたか。そして、頭の部分が複数に分かれる。なるほど、芸達者だ。

だが残念。それは悪手だ。



……強い！ 扇子越しにガードしたはずなのに、まだ手が痺れている。そして迅い。兄さん程じゃないけど、「蛇行の舞」では捉えきれない。だが、まだまだ幾つかやり方はある。1度目の接近では近接を許したけど、2度目は無い。

相手は今度は直線で突っ込んでくる。当然正面から迎撃に向かわせる。

左に跳んだ。好機!!

【蛇行の舞・大蛇】!!

頭の部分を幾本にも分、相手を包囲するかの様に包み込む！ 空中では逃げ場は無い。喰らえ。

!!!

何も無い空中で方向転換して包囲をすり抜けた!!

「な……!!」

思わず声が漏れる。だが、驚いているヒマは無い。完全にスカしてガラ空きになった自分に相手はそのまま再び接近してきて、猛攻を繰り出してきたからだ。

パンチや蹴り avoidance、鉄扇でガードしながら必死に防衛する。やはり体術は超一流。反撃の余地が無い。ただ、所々で攻撃に違和感がある。離れて回り込んだり、大幅な動

作をとったりと無駄な動きがいくつか見える。おかげで多少は体勢を立て直す事が出来た。反撃。相手はガード、ガード、カウンター、そこだ！

僅かな隙に鉄扇を差し込むが、空中で止まった。

相手は拳を握り、両腕を開いている。視界にキラリと光るモノが映る。これは……

「糸……」

「ご名答。冥土の土産に教えてあげたよ。優しいだろ？　そしてアンタはもう終わり」

気付けば、自分の周りに様々な糸が纏わりついている。そう言うと、相手は腕をその場で素早く振り、キツく結ぶ動作をする。

マズい!!

巻き付いた糸が首を締め付けるかのように締まっていく！　首はヤバい！　そこだ

けには扇を差し込む事が出来たが、他は間に合わなかった。強烈に全身を糸で締め付けられる。そのままどこから伸びたか、吊るされて縛られたまま浮かされる。

「二丁上がり。さて、ここからは拷問の時間だ。素直に吐けば生命ぐらいは見逃してやるよ?」

くっ……。糸遣いか。シンプルだけどいい能力。良く見ると確かにそこら中に糸が張り巡らされていた。成る程、最初の攻防で既に仕込んでいたみたいだ。そしてソレを足場に先程脱出した。そしてこちらは絶体絶命。せめて糸が緩まないかどうか試してみる。

「無駄よ。アタシがここにいて、雁字搦めにしてる。強化系でも千切れない精度になってるから」

紙吹雪を操作する。しかし、そうしようとした瞬間に腹部に強烈なパンチをもらう。

「ガッ……!」

「余計なことはすんな。アンタに出来るのは情報を吐くだけ。さて、まずこのパーティーの主権者について吐け」

痛みが続く中、敵が言う。だけど、そこは思い通りにはさせない。

「言うと思う……?」

ニヤリと笑いながら伝えると、無言でパンチを再びもらう。

「アタシは気が短いんだ。さっさと言いな」

「……………」

更に追加で10発以上もらおう。オーラの攻防力移動じゃ防ぎきれない。だけど……。これでもボクはゾルディックだ。拷問は効かない。

「やりなよ。ボクは死んでも言わない」

「……チツ。面倒な。フェイタンほど得意じゃないんだけどね」

更にしばらく様々な拷問を受ける。顔面は腫れ上がり、骨折、打撲、内出血、腫れ、果ては内臓まで痛めている。控え目に言つて重症だ。

「早く吐け。死ぬよ」

「……………ペッ」

はしたないが、笑いながら血反吐を相手の顔目がけて吐きかける。避けられたか。残念。

「……しゃーないね。あんまり気は進まないけど、殺して首だけ持つてくか。多分アンタはアイツの弟子だろ？ 殺したら案外出て来るかもね」

「……………」

「じゃ、さよなら」

ギチギチギチ……

更に締め付けが強まる。徐々に糸は肉を裂いていく。そして…

バツン!!

細切れの肉片が転がる。

◇

「バカめ。素直に吐けば死なずに済んだものを。あー気分悪っ」

そう言いながらも、マチは警戒を解かない。自らの勘がまだ終わっていないと叫ぶからだ。気付けば、死体だと思っていたモノは紙で出来た人形だった。

同時に、そこら中に散らばっていた紙吹雪が一斉に浮かび上がり始める。

「!! 死者の念…!? いや、まだ生きてる? 何処だ!？」

紙吹雪は自分の周囲に漂い、遂には周り全てを包围する。マチは周囲30メートルに《円》を展開する。あまり得意ではないが仕方がない。ヤツはいない。

【千本桜】

紙吹雪は一斉にマチへ殺到する。いくら《円》でも限界がある。一切れ一切れが肉を裂く。威力は高くないが、数が膨大だ。糸を編んで防御しても別の箇所から出血を強いられる。そして、その猛攻は終わりが見えない。紙吹雪に翻弄され、マチは次第に追い詰められていった。

だがそれでも。彼女は幻影旅団だ。これ以上のダメージは危険と判断し、《円》を解除、全身に糸を巻き付ける。そして、糸は全身を覆い、ダメージが通らなくなる。すると、紙吹雪は形を変えて再び蛇の姿へ戻る。集中型へ変えてきた。やはりヤツは生きている。何処だ？

紙吹雪の蛇が追尾する。正確に自分を追ってくる。自動追尾か？ それとも何処かで見ているのか？ 考えるヒマもなくひたすら躲す。4度目の追尾を躲した時、不意に自分の足が止まる。見れば、地面から手が伸び、足首を掴んでいた。瞬間、躲しきれずに蛇の直撃をもらってしまった。

「きゃっ………」

重要臓器は躲したが、右腕に少なくない損傷が起きる。具体的には千切れかけてる。だが、ヤツの居場所が分かった。地面に潜っていたか。見つからない筈だ。ヤツは離れた地面から出てきた。よく見ればヤツも全身に損傷が見てとれる。アタシがつけた傷だ。つまり致命傷を身代わりにする能力でも持っていたか。

右腕を念糸で縫合し、応急処置する。動かないが、今はこれで充分だ。

「生きてたとはね。やるじゃない。でも、身代わりなんて強力な能力はそう簡単には使えないでしょ？ だから次で終いよ」

「それはこっちの台詞。貴女も相当消耗してる。少なくとも右手は動かないでしょ？ さつきみたいたいはいかないよ。それに、貴女のお陰でボクの能力も先が見えた。次で決める」

紙吹雪がヤツの全身を覆い始める。コッチのマネしたか。そんな付け焼き刃でどうかなると思われているなら心外だ。

無言で相手に迫る。狙うは心臓。アタシの方がスピードも威力も上だ。ヤツも同時

に動き始める。だが、ダメージのせいか遅い。貫つた。

交錯する寸前の刹那、ヤツを覆った紙が剥がれ、アタシに向かって来る。なるほど、そう来たか。だが止めない。肉を切らせて骨を断つ！

咄嗟に眼を閉じるが、幾つかが瞼を貫通して刺さり、視界が閉ざされる。しかし構わない。もう狙う場所は分かっている。死ね。

ドシユツ!!

互いの左手が交差する。

奴の腕がアタシの腹を貫通している。アタシの左腕は……ヤツの左肩を貫通してる。僅かに逸れた。原因は明白。正確に狙った心臓への軌道をインパクトの直前に紙吹雪が僅かに逸らした。ヤツが狙ったのだろう。アタシもヤツも手を能力で覆ってはいた

為に貫通力はほぼ同じ。それだけに能力の使い方の方が差が出た。見事だ。

そして

残念だ。

パク……すまない。

仇は取れなかったよ。



ほぼ同時に崩れ落ちる。相手はまだ僅かに生きている。心臓を狙ったけど上手いかなかった。やっぱり父さんや兄さんみたいにはいかないか。だからこそ、小賢しい小技で何とかした。ボクもまだまだだった。だが、何とかなつた。

でも、もう動けない。意識が朦朧とする。その時、聞き慣れた足音が近づいてきた。ああ。やっぱり来てくれていたか。

「全く……無茶をする。今回ばかりは肝を冷やしたぞ。君の悪い癖だ。だが、よくぞ無事だった。後は任せて、今はゆっくり休むがいい」

そうしてボクを軽々と抱き上げ、頭を優しく撫でる。そうだ。この温もりがずっと欲しかった。ドロドロとした殺しや渦巻く愛憎の中で、ボクは本当はこれを求めていたかもしれない。

だから、もう少し、もう少しだけ……

この温もりを……

……

102、マフィアの矜持

「……まったくよオ。ムカつく奴等だ。ぜってー許さねエ」

そう、ひとりごちる。フィックスは調度品を手当たり次第豪快に破壊しながら歩いていた。ブチ切れているように見えて、その実この迷路の解除条件などを探っている。徹底して合理主義的な部分がある。もちろん、ムカついている事は間違いないが。

そして、手当たり次第に壁に穴を開けながら、襲ってくる家具もブチ壊している。短気な性格でもある。

だが、幻影旅団の中ではかなり上位の能力者だ。強化系をウボオーギンとは別方向で極めている。パワー全振りではなく、スピード、パワー、回復と、バランスの取れた念能力に加えて、肉体的性能も随一だ。

これまで多くの敵を屠ってきた為、それなりに自信はあった。それだけに、今回の敵

に手も足も出ず、いい様に振り回されてしまった事は屈辱でもあった。このモヤモヤを晴らすには、原因となった奴をブチ殺さねばならない。もし個別撃破を敵が狙っているとしても好都合だ。全て返り討ちにしてやる、と気合を入れて進む。



やがて、大きな扉が現れ、中庭カフェの様な場所に辿り着いた。幾つか並んだ丸テーブルに腰掛けて茶を飲む、恰幅のいいスーツの男が1人。そして、その人物に給仕する背の高い執事風の男が1人。

「おや、いらつしやいませ。招かれざるお客様。コーヒーでもいかがですか？」

執事風の男がこちらに声をかける。そのワザとらしい間抜けた声に、苛つきは更に加速する。だが一方で、2人が只者ではない事も分かつてはいた。どうやら自分は大当たりだったらしい。

「よオ、邪魔するぜ。早速だが、くたばれ」

近くのテーブルを相手に向かって蹴り上げる。凄まじいスピードで向かっていくが、座っている男は微動だにしない。

バキヤツ!!

テーブルは執事が蹴りで叩き割ったらしい。破片が至る所に飛び散る。その刹那の隙を突いて、正面から接近、テーブルが破壊されるに合わせてサイドから回り込み、執事を通り越して座っている男を狙う。

が、テーブルを砕くと同時に執事が回転しながらの足払いを仕掛けてきたため、ジャンプして躲す。チツ、そう簡単にはいかねエか、と呟き、一旦距離を置く。すると、座っていた男がカップを置き、こちらに眼を向ける。

「待ちかねたよ。フィックス君…だったかな？ はじめまして」

「知ってたか。リップルから聞いたか？ だがオレもテメエの事は知ってるぜ？ マフィアのボス、十老頭のジョンⅡアンダーソンさんよ」

「流石に下調べぐらいはしてきたか。まあだからこそそのA級賞金首というわけだ」

「……やっぱテメエらはムカつくな。暗にバカにしてんだろ」

「おや？ 一言も言っていないのにどうやら正確に伝わったようだね。ま、君達を侮るつもりは無いよ。ただ、我々が君達よりも遥かに格上なだけだ。怖いなら君だけ帰ってもいいんだぞ？」

ビキビキビキ…

フィックスがこめかみに青筋を立てる。

「マフィアだか何だか知らねエが、偉そうにしてんじやねーぞ。テメエらトリプルのクソ野郎をブチ殺して、お宝を頂いたら堂々と帰ってやるよ」

「ふふ…夢を語るのはいい事だが、いい歳してるんだから現実も見なければな。君にそんな事が出来るとは思えないがね」

「バカが……分からせてやるよ。幻影旅団オレシズの恐ろしさをな。で？ 2人で来んだろ？
いいぜ、来いや」

フィックスが人差し指で手招きする。既に強烈なオーラが漏れ始めており、臨戦体勢をとっている。ジョンは静かに立ち上がる。

「ああ、これからやるのは私だけだ。アルバートが心配症でどうしてもって言うからね。というわけで、アルバート、下がっている」

「しかしジョン……相手は結構な実力者ですよ？」

「お前から見て、勝てない様に見えるかね？」

「……ハア。分かりましたよ。全く、強情な方だ」

その会話だけでも苛つきが加速するが、グツと堪える。態々タイムマンで来てくれるなら申し分ない。敵の言う事だから話半分聞いておいた方が良かったため、警戒は欠かせないが、多少はマシだろう。

アルバートと呼ばれた人物が少し距離を置く。戦闘範囲外と呼べる程の距離からこちらを見つめている。意識を多少そちらに向けつつ、ジョンを見る。

かなりの戦闘強者だという事が、立ち居振る舞いからも伺える。こんな状況にも関わらず、気分が高揚してくる。

ゴツ!!

ジョンの《練》だ。かつて見た事もない程の凄まじいポテンシャル！ 旅団の誰よりも潜在オーラが多いだろう。思わず武者震いが起きる。

「へっ。でけエ口叩くだけの事はあるってか。ま、関係ねエ。ブツ殺す！」

「フィンクス君、いい事を教えてやろう。我々マフィアの間では『ブツ殺す』と言うのは負け犬のチンピラのセリフだ。何故なら、我々は『ブツ殺す』と心で思ったなら、その行動は既に終了しているからだ。『ブツ殺した』なら使つていいがね」

「フン。ならテメエを殺してから『ブツ殺した』って言つてやるよ」

「是非そうしたまえ。出来るなら、な」

ほぼ同時に飛び出し、拳をぶつけ合う。凄まじい砂埃が舞い、周囲のテーブルが衝撃波によって吹き飛ぶ。お互いがお互いの実力を文字通り肌で感じ取り、刹那、両者ニヤリと笑い合う。

そのまま、超高速の攻防が始まる。



一流を超えた者同士の攻防とは、舞を踊っている様に見える事がある。しかも、互いの真剣さ具合が加味され、ある種の神々しきを感じる事すらある。

その様な実力者がぶつかると滅多にない為、"それ"を見る事は非常に稀だ。

「ふむ…何とも羨ましい光景ですなあ。無理言つて付いてきた甲斐がありました。弟子どもにも見せたかった所ですが…ままならないものですね」

当然だが、監視カメラや盗聴機などは設置していない。組織のボスの能力など、どれ程力ネを積んでも欲しいという勢力が山程いるだろう。だからこそ、アルバートはジョンのワガママを断りたかった。だが、そうと決めたらテコでも動かないのがジョンのいい所でもあり、悪い所でもある。

よって、監視役兼、不測の事態の為のサポート役として自分がムリヤリ付いて来たの

だ。自分が見たかったという欲望も否定しないし、何なら自分が相手したかったぐらいだが。ドンの命令は絶対な為、泣く泣く我慢した。

つまり、本当は監視役など必要無い。あのカーム氏がいる限り、不測の事態など起こりようもないだろうから。

アレは正に怪物だ。自分ですら底が見えず、身震いするほどに。暗黒大陸とはそれ程の魔境なのだろう。

ご先祖の親友だったらしいが、どうしても怖さが拭いきれない。よくない事だ。わかつてはいるが、自分の能力故に、どうしても視えてしまうのだ。

——アンダーソンの破滅が。

今回は助かった。幻影旅団の襲撃など、いくら我々が強大な組織であっても多大な損害を受けていたのは間違いない。だが、これから先、彼に頼りすぎるのは良くない。依存は停滞を呼び、停滞は腐敗を呼ぶ。その先に待つのは……

ジョンは頼りすぎるなんてつもりはないだろう。だが、血縁の情がある。向こうもそ

うだろう。

より、ズブズブになる。間違いない。

だからこそ――

いや、思考が脱線すぎた。今は、目の前の闘いに集中しよう。未来など、行動次第でいくらでも変わる。結局は、今、この瞬間で出来る事に最善を尽くすのみ。むしろ今から始めなければならぬ。我々の存亡に関わるからだ。

まずは、この騒動の後、どうするかだ。この闘いもじきに決着は付く。そこまでの結果はほぼ確実に視えている。故に

勝つのは

◇

激しい攻防を経て、2人は一旦距離を取る。2人とも被弾はほぼ無い。

「やるじゃねエか。ジジイの癖によ」

「まだまだ若造には負けんよ。で、準備運動は終わったかね？」

……チツ。強い。舐めてかかれる相手じゃねエな。確かに今のは能力無しのお試しだが、準備運動と言うほど手は抜いていない。敵は恐らく強化系。しかし、体術、肉体的性能、オーラ共に互角かそれ以上と見た。更に奴固有の能力もある。

全く、ヤになるぜ。マフィアのボスつてのは普通こんなじゃねエだろ。だが、久しぶりの格上相手。そして余裕ぶっこいてる奴に「こんな筈では」って言わせるのもオツなもんだ。

始めるとするか。全力の闘いつてヤツをよ。

「…ああ。大分あつたまつたな。んじや、そろそろやるか」

「遠慮せずにくるといい」

では、遠慮なく行かせてもらう。

「ふっ！」

再び駆け出す。向かう途中で右腕を2回廻す。

リッパー・サイクロトロン
「廻　天」。

インパクト！　チツ、ダメージを受け流したか。上手いな。だが、衝撃で体勢が崩れてるぜ。そこだ！　反対側の頭部へハイキック。クリーンヒット！

いや、辛うじてガードしてやがる。だが休ませねえ。のけぞつた隙に3回廻す。相手も反撃を試みるが、そのパンチ、貰った。

バキッ！

肘関節目掛けた攻撃は見事にヒット。折れたな。ざまあみやがれ。そのまま押し

切ってやるぜ。

おっと、折れた腕で反撃してきやがった。アホかコイツ。しかもさつきよりも動きがいい。しゃーねえ。仕切り直しだ。

「ほう。条件付き能力か。単純だが、それだけにいい能力だな。恐るべき事に他の部位もオーラが疎かになっていない。素晴らしい制御力だ」

平気なツラして喋ってきやがる。その間、無理やり折れた骨を戻しやがった。痩せ我慢か？ それに動きが良くなったのは不可解だ。それが能力か。だとしたらチマチマやるのは悪手だな。一気に決めてやる。

コイツだと20回つてとこか？ あんまりやり過ぎると枯渇するからな。加減が難しい。

一廻し毎に強大なオーラが顕現してゆく。最早掠るだけでも危険な程のオーラが顕在していた。

「ふむ。流星にヤバいオーラ量だな」

「逃げるんなら今の内だぜ？　尤も逃しやしねえけどよ」

「フィンクス君、いい事を教えてやろう。マファイアたるもの、一度決めた事は死んでもやり通す。それがマファイアの矜持でもあるのだ」

「なるほどな。んじゃ、その矜持とやらに殉じて死にな」

ヒュオツ

滑る様に踏み出し、加速する。実用性が非常に高いのがこの技の特徴だ。何故なら、爆弾を持った人物が突っ込んでくる事を想像するといいい。爆発しなくても身体が竦むだろう。軽くフェイントを入れるだけで、本命が面白いように決まる。仮に決まらなくても、この「廻リップバー・サイクロトロン天」のオーラは消えはしない。当たったり受け流されたりしない限りは継続して、爆弾回避は続く。戦闘中に腕を廻すリスクに見合った性能だと言えよう。

交戦距離まで後5メートル、まだジヨンは動かない。3メートル、まだ動かない。2メートル、腕をガードに回した！ バカめ。ガードは無意味だ。何処にぶち込んでも同じだが。1メートル、さあ、覚悟はいいか？

0メートル。そのままストレートに行くと思せかけて、ハイキックを入れるフェイント！ 釣られてガードが頭付近に上がったため、溜めがない方の腕を伸ばしてガードの腕を掴む。そのまま引き寄せ……ガラ空きの腹部に能力をブチ込む！！ オーラが集中しているが無駄だ！ くたばれ！！

ドゴオツ
!!!!

………バカな。なぜ人の形を保っている。

シュパパンツ!!

プシュー…

気付けば、視界が赤に染まる。視えなかつた。攻撃されたかも分からなかつた。いつの間にか首や手首、大腿部などの主要な血管が全て大幅に傷付き、血が勢いよく飛び散る。

クソつたれ。

奴は少し離れて語りかける。

「私の能力だ。ダメージを受ければ受けるほど強くなる。不退転の『覚悟』こそが、マフィアをマフィアたらしめるのだ。だが、君も強かった。良き闘いだった」

急速に脱力し、意識が薄れて行く中、フィックスはそれだけでは無いと直感的に感じ取っていた。奴の能力は2つある。一つは奴の言った通りだろう。だが、奴はダメージをどこかに移している。そうでなければ、説明が付かない。

ならば何処だ？ 近距離にいたから分かるが、オーラの移動は見えてない。もしかしたら、先延ばしにしているのか？ だとしたら、やるこた1つ。

更にダメージを与える。

腕を廻す。廻しているか自分でもよくわからねエ。だが、集まっている。

そう。

…その調子だ。

…いいぞ。

…さあ

…覚悟、しろ……

……

.....



ドサツ。

「彼」が倒れる。よくもまああの状態で反撃しようと考えたものだ。その闘争心は眼を見張るものがある。

しかも、彼は私の能力を正確に見抜いていた。だからこそ、手加減は出来なかった。攻撃の正体は指。最小の動きで最大の結果を齎す為に、ジョンは出血という手段を選んだ。いや、選ばざるを得なかった。それ程までに、あの「廻リップバー・サイクロトロン」天天は強烈だった。余りにも強烈過ぎて、3ヶ月を要してしまった。これでしばらくは借金漬けの生活になりそうだ。

観戦していたアルバートが近づいて来て語りかける。

「やはり、彼らは侮れませんでしたな。ジョン」

「ああ。全く、恐ろしい敵だった。これで残り12人居るかと思うとゾツとするな。相性がいい相手でコレだからな。カームが居なかつたら総力戦でもカナリ厳しい事になつてそうだな」

「だからやめときやいいって言ったんですよ。これだから頑固者は困ります」

「スマンな。偶にはやつとかなないと鈍るからな」

「……分かつてくれたらいいんですよ。ドン。とりあえずカームさんに治療してもらつてくださいね」

「いや……これは名誉の負傷だ。完治まで残しておく。それに、彼に頼りつばなしも良くないからな」

「私としてはサツサと治療してくださいって切に願いますがね。まあ戒めとして残しとくのはドンの自由ですから。業務はちゃんとこなしてくださいね」

「手厳しいな、アルバート。ま、私もワガママばかり言つた自覚はあるから甘んじて受け入れよう。さて、もうすぐこの騒動も終わるな。後始末はしっかりやるとするか」

「そうしてくださいね。では」

アルバートが無線で連絡し、人を呼ぶ。

「丁重に運べ。彼は超一流の戦士だった」

そうして、黒服達に「彼」は運ばれていった。

その姿を2人は十字を切りながら静かに見送った。

103、勝利条件

クロロルシルフルは、歩きながら様々な思考を巡らせていた。彼は一旦思索に入るとトコトンのめり込む性質がある。内容は主に、敵について。そして自分達について。

この状況下で、クロロは敵に勝つ道筋を探っていた。余りにも絶望的な状況。クロロはそれを正確に理解していた。だからこそ、彼は思索を続ける。先ずは何故、そうなったのかを。全ての始まりと原因を。



そう。余りにも鮮やかに、簡単に我々は潰滅の危機に陥った。そして、その中心となった人物は世界の外から来ていた。

ここまで危機的な状況はかつて無かった。現時点で、旅団全員が生殺与奪を握られているに等しい。これまで慎重に、綿密に事を運んで来た。失敗はほぼ無かった。

だが、それもここで破綻しようとしている。分断された団員は、全て各個撃破されているだろう。自分も普段ならこんな選択肢は取らない。最初から自分が自分らしくない選択をし続けた結果のコレだ。

そして、その全ての原因は「奴」だ。

奴がいたからこそ、狂いだしたのだ。旅団全員すらいよいよ手玉に取る能力。いや、最早能力等という生易しいものではない。その力は凄まじいモノだ。あそこ迄の力は最早人智を超えている。それは

「神」の力だ。

あの白いオーラ。アレは別格だ。我々の念能力とは次元が違う。奴はどのような手段でその力を手に入れたのだろうか。

古の稀覯本に記載があつた。外の世界から人類を導いた存在。文献によつては天使や救世主と呼ばれる者達。我々の知つている歴史上の人物で言えば、キリストがソレに当たる。

その力は神にも匹敵し、天を裂き、海を割り、悪魔を退け、災いを遠ざけ、様々な奇跡を起こす。

文献に拠れば、その力は、特別な人間の持つモノとして、こう呼ばれる。

“聖光気”と。

眉唾な話だと笑つていた。実在したとしても、大方、強力な念能力者だとタカを括つていた。だが、確かに実在したのだ。“救世主”は。決して大袈裟な記述では無かつた。その事実にも多少胸が躍る。キリストも、ユダも、伝説通りの姿で実在していたのだ。

から。

それは世界の特異点となる存在。真に特別な存在である。では、それが何故ここにいるのか。

マフィアと救世主。余りに噛み合わない。で、あれば、奴はアンダーソンの縁者である可能性が高い。もしくは、それに匹敵するほどの近しい縁を持っている。そう考えた方が辻褄が合う。

普通、盗賊団とマフィアの抗争に何の縁も無い者が突っ込んでくるとは考えづらい。本当に救世主や天使であれば、全く関わらないか、仮に手を出すならば両者共に壊滅させるのがその役目であろう。

にも関わらず、あたかも自分がアンダーソンであるかの様に振る舞う。よってこの線は間違つてはいないだろう。

奴はアンダーソンだ。

つまり、元は普通の人間だ。で、あるならば、あの「力」を身に付ける事は不可能ではない。

あの特別な力。アレが欲しい。あの時、確かに奴はオレに能力の一部をくれようとし

ていた。奴自身が何故それを手放したかったのか。やろうと思えば世界すら支配できる力だ。そこに奴の為^{ひじとなり}人のヒントがある。

何故、手放すか。

それは、奴には必要ないからだ。

そこから推察するに、奴は自らの怪物性を忌避している。

感性までは怪物化していない。恐らく奴自身が人間として生きていたいという事の表れではないだろうか。

前回盗めなかったのは自分の器が小さすぎたからだ。まだその資格は自分には無かった。それだけの事。

ならば、その資格を身に付ければ良い。その為には、行かねばならない。

外の世界へ。

まずは、この状況を解決しなければならぬ。よりにもよって、最悪の標的を選んでしまった。だが、物事には良い面と悪い面が必ずある。

これはチャンスだ。蜘蛛を存続させ、更なる飛躍を齎す可能性がある。

だからこそ、生き延びなければならない。奴は「救世主」だ。そして人間性を求めている。そこが狙い目だ。薄氷を踏むかのような淡い希望だが、そこに勝機がある。今回の我々の勝利条件は、生き残る事。出来れば複数人で。その確率が那由多の彼方にあるうとも達成しなければならぬ。

例え、どれ程の犠牲を払ってでも。

「救世主」は、その在り方によって大抵悲劇や苦難の道を辿る。それは歴史が証明している。

同じ「救世主」キリストは、人間の裏切りによって処刑された。

お前は、どうかな？

今代の「救世主」よ



大きく、荘厳な扉を開く。そこは聖堂だった。そこに、1人の人物が待っていた。

「来たか。待っていた。この時を」

「お前が、オレの相手か。……復讐、か？」

「……クルタ族」

「なるほど。ルクソ地方の少数民族。感情が昂ると眼が緋色に変化し、死後もその色は定着する。その美しさから世界7大美色に数えられる。生き残りか。それは勿体無い事をしたな」

「貴様が……貴様が命じて、罪の無い同胞が苦悶の中死んでいった。よって、同胞への鎮魂歌は貴様の断末魔とさせてもらおう。幻影旅団団長、クロロールシルフル！」

「……………ふふ」

「何がおかしい!!」

「いや何、こちらの話だ。全く過去というものは往々にして未来へと牙を剥く。それで線が繋がった。あの男だけなら動機が少し弱かった所だったからな。お前はあの男の弟子か。だとしたら、とんだ運命の交錯だ。良かったな。後少しで悲願達成だ……気分はどうだ? 復讐者」

「挑発か? 今の私はその様な戯言に耳を貸す程優しくない。貴様の仲間は全て始末した。精々惨めに足掻いてみせろ」

「さて、困ったな。お前は仲間を始末したと言ったな? これでオレにもお前に復讐する権利が生まれた。ただでは死なさん。今度こそお前の全てを奪ってやろう。絶望の中、跪き、赦しを乞う姿を見せてくれ」

ズズツ

クロロから凶悪なオーラが漏れ出てくる。同時に彼の右手には一冊の本が発現する。
スキルハンター
 【盗賊の極意】だ。

ジャラツ

相対するクラピカも右手から鎖を垂らす。

それを見たクロロは、瞬時に操作、又は具現化系かを想定し、更に具現化系だとアタリをつける。操作系ならば、もつと何本か用意してもいい筈だ。一方、具現化系であれば、《隠》で不意をつきやすい。《凝》。やはり。左中指から出た鎖が大回りしながら接近している。

なるほど、厄介だ。流石は奴の弟子だな。わざわざ付き合う必要は無い。このタイプには近接が有効だ。【不思議で便利な大風呂敷】を取り出し、瞬時に接近する。敵も見破った事に気付いた。だが無駄だ。

ドギヤツ！

右脚で蹴りを当てる。相手はガードしながら器用に鎖を動かしてこちらに向かわせる。しかし、「不思議で便利な大風呂敷」で捕縛しようとした時、相手は攻撃を中断、後方に一步引く。カウンター型と見破ったか。中々いい動きだ。

そしてあの鎖。アレには強烈な念を感じる。受けると不味い。緋の眼を持つクルタ族は、緋の眼になれば強さが段違いで上がった。念能力を持たない一般人でもだ。それが、訓練された念能力者ならどうなるか。ましてやあの男の弟子だ。特級の強さになっていてもおかしくはない。だが、分析がもう少しでできそうだ。もう一当てしてみよう。

【不思議で便利な大風呂敷】を消して、別の能力に切り替える。幸いここは閉め切った密室だ。アレが使えるな。

インドアフィッシュ
【密室遊魚】

念で作られた魚が複数浮遊する。その姿は古代魚のようだが、性質は凶暴。ピラニア

並みの貪欲さで襲いかかる。

解き放たれた魚達が相手に向かう。だが、複数の波状攻撃も、ものともせず鎖で薙ぎ払う。その僅かな攻撃の後隙に突撃して波状攻撃をかけるが、ガード、又は躲される。鎖を片方手元に戻して捕縛する動きを取る。

一旦離れ、そこから考察するに、奴は身体能力は超一級品と云って差し支え無い。オーラ量もだ。体術とオーラ操作に若干の未熟さが窺えるが、それは余りある前者によつて問題なく機能している。

そして、その能力の鎖。

アレは、具現化した鎖で確定だ。両手それぞれに装着されたソレはタダの鎖ではあるまい。攻撃は殺傷力がメインではなく、基本的に捕縛を主体としている。これは、この復讐者の性格を如実に物語っている。殺傷力に特化せず、捕縛するという戦略は、確実に標的を捉えて、尋問、始末するという、複数のグループを相手にするには非常に理に適ったモノである。

即ち、この相手は、慎重且つ理性的、そして意志が強いという事が伺える。

では、どうするか？

コイツを殺そうとしても、その直前で奴が出てくるだろう。その逆でも結局同じ。よつて、こちらがウツカリ死なないかぎり、結果は変わらない。何という理不尽なゲームだろうか。

そこで問題になってくるのが、この復讐者がどの程度怨んでいるか、だ。最終目標であろう自分と団員を捕らえた後、奴は我々を殺すだろうか。

否。

いや、最終的にはそうかもしれない。だが、直ぐに殺すかと言えば、自分ならそうはしない。そこまで情熱を復讐に傾けて生きてきて、いざ、完璧に捕まえたとしたら。アツサリと殺して終わるのは勿体無さすぎる。延々と拷問にかけ続けるか、厳しい呪いを課してくるか。少なくとも、ご褒美の時間が欲しい筈だ。

我々は悔い改めない。メンバーは誰も。反省し、赦しを乞いながら死ぬなど絶対にしない。

そんな相手ならば、より苦痛を味わせたくなくなるというのが人間というものだろう。理知的で冷静でいる奴なら尚更だ。

加えて、拷問には全員耐性があり、簡単には折れない。折れるぐらいなら自死するだろう。奴ならどうする？ オレならどうしたい？

そして、「救世主」はどう出てくるか。

方針が固まった。

奴は煽り耐性は低いと見た。ここは、上手く理想の形に誘導してやれば良い。ハッキリ言つて、一か八かどころの騒ぎではない。上手く行く確率など、それこそ那由多の彼方かもしれない。

性格の分析には自信があるが、だからといって先程考えた様な都合の良い展開が来るかなど、全く分からない。

だからこそ、良い。

死ぬならばそれまで。オレは、オレの運命に従う。それが叶うのであれば、いずれ
救世主”にすらも抗ってみせよう。では始めようか。

敗北の為の大勝負を。



激しい攻防が続く。少なくとも、本人達にとっては、だが。お互いが当たればそれだけで終わる能力を有している以上、激しいぶつかり合いは少ない。少ないが、それは表面上の事。無数の選択肢を取捨選択し、先の手を読み、それらを上回る手を用意する。

さながら、動きながら詰軍棋を行なっている様なものだ。そして2人共にその能力が飛び抜けて高い。現在は様々な念能力を有するクロロが優位に進めている様にも見え

るが、クラピカも柔軟に対応し、決して遅れをとらない。一進一退の、息が詰まる様な駆け引きの応酬がしばらく続いた。

しかし、その均衡も長くは続かない。

クラピカは現在、中指の鎖だけで闘っていた。敵にそれだけだと誤認させる為に。そして、敢えて両鎖を敵に向かわせ、自身をフリーにさせる。当然、クロロはクラピカに肉薄する。まだ能力はスタンバイ状態にしたままだ。接近し、急所を穿つ為に手刀にオーラを集める。まだ鎖は戻って来ない。

接触する寸前、クロロは相手の右手がこちらを向いている事を視認した。

瞬間、凄まじい速さで飛んでくる人差し指から注射器の様な先端の鎖が、目にも止まらぬ速さで射出された。

しかし、それを読んでいたクロロは紙一重で躲す。余りにも速い速度で放たれたソレは彼方に飛び去った。そして、彼は同時に動き出す。彼の左手は懐に入れられており、カウンターで同じく凄まじい速度でナイフを投げ放った。が、それも読んでいたクラピ

カは薬指の鎖を発現しており、投擲されたナイフを弾く。

ドスツ

しかし、超至近距離で起きた攻防による死角。そこを突いて、クラピカの左手の小指の鎖を《隠》の状態で背後から回していた。瞬時に全身の臓器に念の鎖が侵入し、巻き付く。そして、クロロは自分の想像が当たった事に内心ほくそ笑む。表情は驚愕の表情を浮かべたまま。

敵が最後に用意したコレは、やはり速殺系ではない。

最後の能力を発動する。

同時に、クラピカが離れて叫ぶ。

「私への攻撃と、念能力の使用を禁じ

サクツ

言い切るか、言い切らないかの瀬戸際で弾かれたナイフが相手の足元に転移してその肉をほんの少し傷付ける。

ドサツ

無事、相手は倒れる。そう。これは「盗賊の極意」にストックした能力の一つ。名を【異空間への扉】。対象の一つを任意で別の座標へと転移させる能力。そして、このナイフは特製のベンスナイフ。0.1mgでクジラを昏倒させる毒が仕込まれている。

「切り札は最後まで見せるな。見せるとしたら更に奥の手を持って、だ。もう聞こえてい

ないだろうがな」

「全く同感だ」

!!

いつの間にか、今倒した男が背後に立っている。反射的に【不思議で便利な大風呂敷^{フア}】で捕縛しようとするも、避けられる。先程倒した奴は、その場に倒れたままだ。

「無駄だ」

「いくら足掻こうが」

「勝負とは始まる前に決着はついているものだ」

「つまり、お前は詰んでいたのだ」

「初めから」

複数の奴が現れ、周囲を取り囲みながら話しかけてくる。皆一様に瞳が紅く輝く。

ああ、なるほど。そういう事か。

霧が、出ている。

104、偽りの希望を求めて

「無事に事が済んだ様だな」

「ああ。助かった。カーム。ありがとう」

「どういたしまして。これぐらいなら何てことはないさ。寧ろ、手を貸して欲しいと言ってくれて嬉しかった」

「意地をはるのをやめただけだ。死んだ仲間達の為にも、私は生きていかなければならないのだから」

「そうだ。それでいい。そういう気持ちになつてくれたなら良かった。で、彼らはどうする？ 殺すか？」

「……それだが、奴等とも会つて話した上で、私なりに考えてみた。やはり奴等は許せない。今すぐにでも殺してやりたい、というのが正直な所だ。だが、殺したらそれまでだ。奴等は反省などしない。悔いる気など、まるでないだろう。それならば、生きて地獄を

見せる方がいい。だから奴等の最も大切なものを奪う事にした」

「ふむ。それは？」

「アイデンティティ、だ」

「なるほどね。盗賊の盗賊たる所以を全て奪う、というわけか。いいんじゃないか？」

「もう既にその掟は奴等に課して来た。……最後にカーム、手を借りたい」

「いいぞ。掟の補強だな？」

「その通り。私だけでは解除される可能性が0ではない。念を外す能力者がいてもおかしくないからな」

「そうだな。一般的に除念師、と言われる存在は確かにいる。承った」

「ありがとう。これで奴等は奴等である限り、地獄を見るだろう。感謝する」

「後は私に任せて少し休め。緋の眼の反動がきてるだろう？」

「ああ。頼む。私は少し休ませてもらおう。今日はゆっくり眠れそうだ」



「気分はどうだ？ 盗賊団」

奴等が入れられている小部屋へ入る。途端に生き残った者達からの視線が襲い掛かる。見るだけで殺せるならばそうしたいと言わんばかりだ。

代表して、ボロ・ボロのクロロが答える。

「それはどういう意味だ？ 最悪だ、とでも言つて欲しいのか？」

「まあ、そうだな。君達はただひたすら運が悪かった。私は自分のテリトリーを侵された場合は容赦しないからな。彼の助太刀という面もあったがね」

「やはりお前はアンダーソンか。アンダーソン家三男、カームⅡアンダーソン、だな？」

「正解。戸籍上はな。まあ、君達はこれまで欲望のままに生きてきたんだ。それなりの罰が今下つたという事だ。私からも君達にプレゼントがある」

「フツ……。神気取りか？ “救世主”」

「そんな大層なものではないがね。だが、君達にはまだ希望があるだろう。除念という希望がな。それを奪おうか」

カームの手から全員に向けて金色の鎖が発射される。クラピカのモノを模したものだ。ソレは全員の身体に侵入し、クラピカの能力と融合する。

彼らに融合させて掟の内容が分かった。まずは、クラピカの命令は絶対、と念能力の使用禁止という事に加えて、

- 1、奪うなかれ
- 2、犯すなかれ
- 3、殺すなかれ
- 4、嘘をつくなかれ
- 5、酒を呑むなかれ
- 6、資産を持つなかれ
- 7、観賞・観劇をするなかれ
- 8、装飾をつけるなかれ
- 9、ベッドで眠るなかれ
- 10、昼以降、食べるなかれ

……何とか、修行僧の様な掟である。特に後半は嫌がらせに等しい。クラピカは宗教の戒律を参考にしようと喋っていたが。だが、彼らにとっては正にアイデンティティを奪われたと同然だろう。そして、出来なければ死ぬ。

「君達はこれからしばらくここに留まってもらおう。その後、然るべき機関に引き渡すからそのつもりで」

そして私は退室する。彼らの粘着く様な視線を一身に受けて。恨まれたものだ。だが、君達はそれに値する悪行を重ねて来た。これは当然の報いだ。精々、不自由を謳歌するといひ。



「クソツたれ!!!」

「ウボオー、うるさい。怪我に響く」

「これが黙ってられっか!! どうしろっつんだよ!!」
「マチの言う通りね。黙てる」

マチは腹部の応急処置で生存に問題ない程度には回復はされているが、まだまだ全治には数ヶ月かかる状況だ。フェイタンに至っては、全身火傷、両手足欠損という何で生きていくか分からない状況だ。それ以外にも、フランクリンやノブナガ、シズク、シャルナーク、そして団長など、負傷している団員は多い。

「だがよお、団員の半数近くは居なくなっただか死んじまった! そして、このクソツタレな枷だ! 冗談じゃねエ!! マジでお先真つ暗じゃねエか!!!」

「イテテ:それについては同意だね。八方塞がりだ。生きてるだけまだマシかもしれないけど、お先真つ暗な事には変わんないよ。どーすんのさ、団長」

「そうだけ。仇討ちをしねエとおさままんねえ。パクと、ボノ、コル、フィックスの無念を晴らしてやんねーとよ」

「ノブナガ、今オレが質問してんだけど。大体、ぶっちゃけそれどころじゃないじゃん。ハッキリ言って完敗だよ。生きてるのが不思議なくらいだ。ま、この掟じゃ死んだ方がマシな部分はあるけどね。で、このプランの発案者である団長に聞いてるんだ。死ぬの

はごめんだけど、ずっとこのままも勘弁だよ？　どうなの？　団長」

キツめの口調で嫌味を込めてシャルナークがクロロに問い掛ける。他のメンバーも口を挟みはしないが、同じ様な心境だろう。

部屋全体に重い空気が漂う。

しばらくの沈黙の後、クロロが静かに口を開く。

「まずはお前たちに謝ろう。すまなかった。オレの想定が不足していた」

クロロが謝罪する。そんな事は初めてだ。全員、驚きで二の句が継げない。

「謝らないで！　そんなんじや、私達も死んだメンバーも浮かばれないよ！」

黙っていたシズクが叫ぶ。クロロを頭として、手足として動いてきた。団長の命令は絶対。それは勿論死ぬ事も含めてだ。それだけに、謝罪など必要ない。むしろ、忠実に働いてきた者に対する侮辱である。

「最後まで聞け。これはオレの反省でもある。お前達の頭としてな。だが、同時に朗報でもある。この状況はここに突入した後で想定した顛末の中では最良のものだ」

「『はあ!』」

「イヤイヤイヤ、これ以上無いって状況じゃん! マジで言ってる?」

「冷静に考えろ。我々にとつて最悪な状況とは何だ?」

「……なるほど。我々の全滅、か」

ダメージで寝ているフランクリンが答える。

「その通り。加えて、生存者も居て、拷問も無い。普通ならば全員罫り殺しだな。ましてやマファイアの巣穴だ。最終的には殺されるにしても、ありとあらゆる残虐行為を働かなくても文句は言えないな。オレ達がクルタ族にやった様に」

「まあ……そりゃそうだけど……。でも、それが奴らの狙いだとしたら? 中途半端に希望を持つとうとして、どう足掻いても無理、みたいな」

「そうだな。確かに方向性の違うタチの悪さがある。結局は殆ど変わらない。だが、足搔ける。その違いだ」

「なるほどね……でも、あんなのに対抗策あんの？」

実際に直接闘ったシャルナークとフェイタンはその恐ろしさが分かる。正確には、シャルナークは記憶が無いため、直接闘つたのはフェイタンのみであるが、自動モードと勘を取り戻したフェイタン2人がかりで歯牙にも掛けられなかったのだ。間接的には団長も闘っているが。

ともかく、尋常な相手ではない。あのクルタ族ですら厄介な奴だが、まだ常識的だ。それぐらい「アイツは」イカれている。

「それを考える為にはまず、奴のあの力が何なのか、知っておく必要がある。オレの憶測も混じるが、まず間違つてないだろう。どこから話そうか——」



「はえ〜……。伝説の闘気かー……」

「にわかには信じがたいのは理解出来る。オレも奴に会うまでは夢物語の一つだと思っていた。だが、アレだけの力を見せられたら信じざるを得まい」

「なんだそりや……。ますます對抗策ねーじゃねーか!」

「そうだ。だから、我々は奴に目を付けられた時点で對抗策など無かつたのだ。その部分も先程の謝罪に繋がる。だからこそ、生き残つただけでも僥倖なのだ。だが、今回の件を最初から最後までもう一度振り返つて考えると……」

「考えると……?」

「いや、ここから先はまだ言えない。こここの会話も恐らく聞かれているだろう。だからここまでは。まずは目先の事だ。我々は恐らく犯罪者の収容所に送られる。このハンデを背負つてだ。だが、一つだけ言える事は、オレは諦める気はサラサラないと言う事だ。さて、ここからはお前達に問う。オレは今回、最初から失敗した。それでも、お前達はこの期に及んで、オレを信じるか?」

その台詞に、団員は全員目配せし、その後、全員が団長に頷く。

「では、始めよう。これは宣戦布告だ。我々は、如何なる苦難があれど、あの『救世主』に反逆する。さながらキリストを結果的に裏切ったユダの様に」



「ま、そうだろうとは思った」

「ねえ、カーム。可能なの？」

「可能か不可能かと言えば、限りなく不可能に近い。彼らにはあのクラピカの掟と、私の補強がある。普通に考えればムリだ。通常は呪いをかけられたら、それを外す能力者がいる。除念師という。雪男より遭遇が困難らしいがな。だが、更に私の能力の場合、そんじょそこらの除念師に解除は不可能だ。可能性があったら、私と同等の能力を持つ者に頼るかしかない」

「それは……かなり厳しいね」

「かなりどころじゃない。それこそ、小数点以下10桁以上の低確率だな」

「でも、あの人達はやるって決めてるよ？」

「それが唯一の希望だからだ。やらざるを得ない。それがなければ彼等はアイデンティティを失い、そのうち自我が崩壊するだろう。最早その方が楽かもしれないけどな」

「うへえ。えげつねエな」

「それこそがクラピカの課した罰だからな。行くも地獄、引くも地獄。彼等にはふさわしいだろう。偽りの希望を求めて、亡者の様に彷徨う。だが、掟の所為で犯罪行為や贅沢などは出来ん。まあ、実は唯一隠された、成功率が他よりも高い正解があるっちゃあるけどな」

「!? どんな!?」

「それは——」

悔い改め、反省し、精神的に修行を重ね——

悟りを拓くこと

G・I編

105、契約変更

クラピカはあれから1日寝てゆったりと過ごしていた。体調は早く回復したらしいが、安心したのだろう。しかし、緋の眼の負担はかなりキツイもの様だ。今後はあまり多用しない様に伝えた。その辺は彼も分かっている筈だから、釈迦に説法みたいな形になってしまったが。ともかく、追加で1日ゆっくりしたら彼は起き上がり、仕事に戻っていった。クラピカって割と仕事人間な雰囲気を感じる。

キルアとカルトは瀕死の重傷だった為、私が治した。身体面では回復していたが、私から最低でも3日程安静にするように厳命した。身体は治っても、心を回復させる時間が必要だ。また、今回の経験を反芻する時間も必要だろう。

よって、今私はビスケと共にゴンとレオリオをひたすら鍛えている。

彼等も割と反省していた様で、文句一つ言わずに従った。キルアに煽られたのも原因かもしれない。なので、実戦に於ける念戦闘のイロハを叩き込む。

私自身もぶつちやけそんなに才能は無く、どちらかと言うと能力のゴリ押しでやって来た方だ。ただ、流石にキャリアも長いから、これまで私が敵対した中で、やられてヤバかった事を紹介しつつ、対処方を考えろという形式だ。

話はそれるが、暗黒大陸は特級のヤバい奴らの宝庫だった。その内容があまりにもヤバすぎて、2人とも絶句してた。そりやそうか。私ですら今思い返せばやべーのぼっかり相手してたもの。とりあえず首が落ちるのは日常茶飯事だし、いきなり極悪能力にハマるのはご挨拶みたいなものだった。

ともかく、今回は暗黒大陸ってのはぼかしつつ、能力の紹介のみに努めた。全てを開示するのは全員揃ってからだ。

また、忘れそうになっていたが、G・Iの10日間の期限が切れそうになっていた為、慌てて入り直し、そして速攻で出てきたり、ビルの復旧を手伝ったりして過ごした。

ちなみに、弟子達への報酬は、今後アンダーソン系列の店や娯楽施設などはほぼフリーパスかつ、買い物など、費用がかかるサービスも半額以下の特権が与えられた。アンダーソンはハンター協会ともバチバチやってるため、プロハンターでもフリーパス

じゃない場合が多い。加えて、アンダーソングループはかなりの範囲で経済界を席卷している為、様々な恩恵があるだろう。彼等は純粹に喜んでいた。まあ、あれだけの死闘だったからそれぐらいのご褒美はあってもいいだろう。



3日後、ハンター協会から人が来た。幻影旅団の護送というわけだ。中心人物は、クライムハンターのミザイストムⅡナナという人物である。彼はハンター協会の最高幹部であり、会長がその実力を認めた12人の内の1人だ。

十二支んとかいうふざけた名称らしいが、いかにも会長らしいネーミングである。彼はその中の丑担当。コスプレかってぐらいに牛っぽい格好をしていて、コーヒーを提供されたら、自分でミルクを入れるほど徹底している。

ちよつと大丈夫かなと一瞬思ったが、身のこなしとオーラから察するに、これまた人類最上位ぐらいの強さはある。頭も良さそうだ。ハンター協会も割とガチな人員を選んで来たらしい。

そりやそうか。なんせA級賞金首だからな。会長の意向もあるかもしれない。

対応は全てクラピカが行なった。私は隠れて別室から様子を見ていた。だが、ミザイストムは気付いていただろう。全ての手続きを終え、クラピカにシングルハンターの打診をしていた。その裏には私も昇進させて、引つ張り出そうという思惑があるかもしれない。だが、クラピカは自分一人の力ではないと固辞した。クラピカとしても、仲間の眼を集めるといふ目的がある以上、ハンターとしての出世には殆ど興味がないだろう。寧ろ下手に協会に縛られたくはない筈だ。ミザイストムもそれが分かったのか、それ以上は勧めなかった。

協会の護送車に乗せられて、旅団は旅立った。まずは協会本部に行くらしい。これからの彼らの境遇を思えば、悲惨の一言に尽きるが、それこそ自業自得だ。是非とも第二の人生を頑張つて欲しい。



さて、これからの事だ。これまで中断していたG・Iの攻略に本腰を入れたい。現在は9月6日である。ゴン達は今日が期限だ。彼らは嬉々として旅立っていった。私はクリアが目的ではないが、死者への往復葉書は欲しいため、彼らに協力しつつ頑張りた
い。

私とビスケだが、2日に入り直した為、まだまだ余裕はある(期限ギリギリだったが)。だが、とりあえずやる事は終わったので、ジョンに挨拶してから向かうとしよう。



「やあ、ジョン。調子はどうだい?」

「ああ、カームさん。この通りですよ。ちよつと名誉の負傷がありました。が全て問題ないですな。此度の騒動、本当に助かりました」

「全く……君は組織のドンなんだから、本気で自重して欲しいものなんだけどね。治そうか?」

「何回目ですか？ そのセリフ。大丈夫ですって。私も偶にははっちゃけたい時もあるんですよ。大体私は負傷してる時の方が強いんですから」

「うーん。人に言えた事じゃないけど、アレな能力だなあ。まあジョンが良ければいいんだが」

「そうそう。あと、ビルの復旧とカル口達の回復もありがとうございました。我々もちつとは役に立たないと立つ瀬がありませんなあ」

「気にしなくてもいいんだけどな。私もかなり厄介になつてているからおあいこつて事で。これからはらくゲーム世界に行くから、一言言つとこうと思つてね」

「承りました。楽しんで来てください。こちらの後処理はやつときますよ」

「何から何まですまないね。頼んだよ」

「お任せください。というか、今回の騒動でアンダーソンの権勢がより強くなりそうですてね。全く休む暇もありやしな感じですよ」

「それは…おめでどう？ ま、何かあつたら言つてくれ。何でも手伝うからな」

「おっと、これはすみません。ちよつとグチが出ました。お気になさらず。ファミリィが強くなる事は良い事ですからな」

「そうだな。じゃあ後はよろしく頼む」

そうしてジョンの部屋を退出した。さて、では行くか。No. 31「死者への往復葉書」を目指して、いざ出発だ！



「さあーて、バリバリカード集めんぞ!!」

「テンション高つ。まあ気持ちは分かるけどよ」

「クラピカの事も無事に終わったし、じつくり挑戦出来るね！」

「早く集めて、カームと合流しよう」

「えー。折角のゲームだから隅々まで堪能しよーぜー。オレはイベント関係全部コンプしないと気が済まないタイプなんだよな」

「ハア……それじゃ、さっさと調べてね。僕はあるまり興味ないから」

「何だよそのあからさまなため息はよ！ これだから女子は！ ロマンが分かってねー

んだよな」

「まあまあ。とりあえずマサドラに行つて魔法カード補充しようぜ。アントキバの懸賞もそろそろだから、それも含めて動こうか」

「賛成！ 修行がてら走つて行こうね」

「ゴンも最近修行にのめり込んでんなー。ま、付き合うぜ。今回の件でオレもまだまだって分かつたからな」

「よーし、キルアには負けないよ！」

「おいおい、オレは更に力が付いたぜ？ 負ける訳ねーだろ？」



「よっしやー！ オレの勝ちー!!」

「キルアズルい！ ラストスパートで雷使うの反則!!」

「何言ってるんだ！ オメーだつてコツソリ能力使ってただろ！！ あんなにぶつちぎつてバレバレなんだよ!!」

ギャーギャー

「あくあ。兄さんもゴンも、子供っぽい。やっぱり大人の方が落ち着いてていいな」

「ふーん。ちなみにオレは？」

「レオリオは図体だけ」

「マジかよ。こりゃ手厳しいわ。とりあえず着いたな。カードショップ行くか。おい、そこのお子様ども！ さっさと行くぜ!!」

4人はワイワイしながらカードショップへと向かった。そして、店に入ってカードを
買う段になって気付く。

「ねえ、大量入荷って……」

「ハイ！ 言葉の通り、最近魔法カードが沢山入荷しまして、現在在庫がかなりございませす。是非とも購入をご検討ください」

「……前よりも増えてるね。どう思う？」

「どう思うも何も、ラッキーじゃん。他に買われる前にサッサと買っちゃおうぜ」

「うーん……前から思ってたんだけど、何か引つかかるなあ」

「プレイヤーの減少が加速している。ゴンの感覚は間違ってる」

「それぞれ。不思議だったんだよね。何でだろ？」

「どうだっていいじゃん。早くしよーぜ」

「コレはかなり注意すべき事態かもしれない。考えられるのは、何らかの条件が重なり、他のプレイヤーがクリアを諦めて、カードを処分してゲーム外に一斉に出たか、又は――」

「おい、カルト、無視すんなよ！」

「又は？」

「聞けよ！」

「襲撃者によつて一斉に死んだか」

ギヤーギヤー外野で騒いでいたキルアも、ピタツと黙る。途端に重苦しい空気が立ち込める。しばらくしてキルアが口を開く。

「あーあ。折角黙つてたのによ。ワザワザ口にすんじやねーよ、全く」

「あ、兄さん気付いてたの？ てつきり分かつてないかと」

「当たり前だろうが！ お前オレを何だと思つてんだ!? ま、その2択のどっちかだ。オレ達が知らない間に何かが起こつた。それが何かは分かんねーけどな。情報が足りない。だからこそ黙つてたんだ。今考えても意味ねーからな」

「そつか……ゴメン。いたずらに不安にさせちゃつた」

「いや、その可能性は考えるべきだったよ。ありがとね」

「まあ考えを共有するのは悪いこつちやねーけどな。レオリオも勿論気付いてたよな？」

「お、おう。当然よー！」

その台詞を聞いた全員が心の中で思った。コイツ、絶対気付いて無かつたと。

「ま、そーゆー事だから気にせずカード買おうぜ。ただし買った後は警戒MAXな」
「買った後に奪う相手への警戒だね？」
「正解。さて、何が出るかなー？」



「バッテラめ…ふざけやがって!! 今でも気分悪いぜ…!!」
「全くだ。何が契約変更だ! もう少しだったつてのによ…!!」
「腹いせにアイツらを爆殺してやったが、もう20人も居なかつたからな。諦めた者にも1人5億じゃそうなるわな。ワザワザ現実に送り届けるサービスまで付けやがって。だが、プラスに考える事も出来る。クリア契約自体はそのままだ。カスみたいな奴らがハケて、やり易くなったとも言えるぞ?」

「だがよおゲン。ツエズゲラ組がクリアを放棄したって言っても、まだまだ腕利きは残ってるからな？ オレ達がいくら魔法スペル大量に持つてて、指定カード67種持つてても油断はできねえぜ？」

「そうだ。だが、オレ達が独占してるSSカードもあるし、ソイツらもドングリの背比べだ。チャンスはまだある。今は少しでも有利に運べる様にしないと。サブ、バラ、これからは自力で独占カードを増やすぞ」

「チツ。やつぱさそうするしかねーか。めんどくせえ」

歩きながらボヤク3人組がいた。彼等は『爆弾魔』だ。彼等もまた、バツテラに雇われたグループである。一時期、中心のゲンスルーという男は別の集団で活動をしていて、仮初めの仲間達と5年程プレイをしていた。そこでは所謂集団による物量作戦を敢行しており、少しずつながらも魔法カードを独占。そして指定カードを奪うなり集めるなどして、地道に、だが確実なカード集めをしていた。そして、コツコツとクリアまでの道を辿っていった結果、魔法カードのほぼ独占、そして指定カード67種という結果となっていた。

尤も、ゲンスルー自身はその集団で一緒にクリアする気は全く無かった。当然だが、

チームだと分け前も減る。既に50人近い数の構成員がいて、そこから分け前となると必然的にかなり目減りする。そしてそこで揉めるのも必定。だからこそ、確実に集まった所を一網打尽にして奪う。結成当初から密かに決めて置いていた事だった。その為の地道な仕込みも済ませていた。

本当に後少しだった。ようやく魔法カードが独占に近い状態になり、後は人海作戦でカードを奪っていくだけだったのだ。出来れば90種辺りは確保しておきたかった。先行するツエズゲラ組の為に。

だが、予想外の事態が起きた。

バッテラからの急な契約内容の変更が通達されたのだ。それは、最も信頼されているシングルハンターのツエズゲラから【交信】コンタクトを通じて伝えられた。

内容を要約すれば、クリアに関する契約は変わらない。だが、諦めた者達のせいで飽和状態になっている現状を改善するべく、G・Iに初めてログインして、一度も現実に

帰還しておらず、3年以上経過している者。かつ、現時点で指定カード枚数20枚以下の者達は達成不可能として、現実世界に帰還し、契約終了とさせてもらおうというものだった。また、クリアを諦めた者も自己申告で同じ様にしてもらおうという事だった。

そうした者達は、ツエズゲラ組が現実世界の帰還をサポートするというサービスが付いていた。

ここまでならまだ良かった。だが、この後が問題だった。帰還した者は、当初の契約の違約金として、1人最低5億は支払うという、驚きの条件を加えてきたのだ。ランクA以上のカードを所持していれば、そこからランクに応じて違約金は増えるという。

これに、雇われ達は殺到した。当然、自分達の集団のメンバーも、下っ端はサツサと抜けて行った。苦勞せずとも5億が手に入るのだ。そして、その金額は、クリアした場合より多い。

中にはレアカードを持ち逃げしようとするクズもいて、実際にやられたケースもあった。そのようなクズは、帰還する手前でサブとバラが大方始末してくれていたが。

危機感が高まり、初期メンバーが全員を招集し、カードを整理しようとした時には、メンバーが半分以下になっていた。

「ゲンスルーはこれを明確な失敗と捉えた。よって、その場で自分が爆弾魔だとバラし、爆弾の能力、【命の音】^{カウントダウン}の説明を全員に行い、発動させた（この能力は、カラクリを口頭で説明する事で発動する）。

そして……メンバーを脅し、主要なカードを全て手に入れてから、一斉解除した。取り除くのではなく、爆発させたのだ。一気に20人以上がそれによって死んだ。だが、ゲンスルー達の気分は晴れない。それどころか、怒り心頭の状態である。

恐らく、これはオレ達を狙い撃ちにしたものだ、と。

「ツエズゲラか、バツテラか。どちらの発案かは分からないが、ここに来てそれをやったという事は、ゲームバランスの調整か、はたまた新規での参入を増やす為か。真意は分からない。」

自分達のやり方は実際ルールの隙間を突いてハメてる様なものだ。そして、ほっとけば新規は何もできないまま、状況が煮詰まってしまふ。そこを崩してきた、という事だろう。だが、解せないのは、ツエズゲラがクリアを放棄したと宣言した事だ。奴の立場

ならそれこそクズどもが持ち込むレアカードを独占できる立場にある。

何故、そうしたか。

恐らくバッテリーの意図が関わっているのだろう。10年もの間、クリア者無しの状況に辟易して、状況を改善したかったか。だが、それこそツエズゲラをクリアさせても良かった筈だ。結局何がしたかったのか。分からない。情報が足りない。

だからこそ許せない。自分達の5年間のクソみたいな我慢が、そんな訳の分からん理由で一気に台無しになってしまった。だからこそ、ここからは自分達でやる。

多少強引な手を使っても、必ずクリアまで漕ぎ着けてやる。

そういった決意を胸に、爆弾魔は動き出す。

その成果はすぐに表れるだろう。彼等は大量殺人鬼のPKなのだから――

106、テコ入れ

『やあ、ツエズゲラ君、この度はすまない事をしたね。でも、飲んでくれてありがとう』
『……全く、君には煮え湯を飲まされたよ。まさかバツテラ氏の真の目的を達成してしまうとはな。まあ、我々も違約金をたっぷり貰えたからそれに付いては文句は言わな
がな。貰った分の仕事はしよう』

『ありがたい。引き続き、プレイヤーの送迎含む仕事、頼んだよ。また何かあつたら連絡する』

『承った。ところで、Mr. アンダーソン』

『カームでいいさ。なんだい？』

『いや……君なら大丈夫だろうが、少し前にプレイヤーが20人近く大量死することがあつた。以前から噂があつた『爆弾魔』か動き出したらしい。気をつけたまえ』

『ほう……。分かつた。脳裏に留めておくよ。情報ありがとう』

『それだけだ。ではまた』

ツエズゲラ氏が通話を終了した。彼等にはワリをくわせてしまったな。だが、納得してくれて良かった。そう、これはプレイ環境の改善。特にハメ組に対処する為の方針だ。あまりにも魔法カードが少なすぎた。よって、盤外からテコ入れをさせてもらった。

バツテラ氏との打ち合わせの一つだ。彼はもうクリアは必要ない。その為、雇った人間の後始末をお願いしたのだ。

クリアの契約はそのままに、しかし、諦めた者達を帰還させる。資金をバラ撒きながら。バツテラ氏には負担が大きいが、それでもオークションで使う予定だった金額よりは大分下がる。これによって、ハメ組合む多くのプレイヤーが帰還を選択した。現時点で雇われの8割近くが帰還している。

また、クリアに近かったツエズゲラ氏にも、バツテラ氏から契約変更をお願いしている。彼にはクリア報酬に近い違約金を支払う代わりに、情報の通達及び、プレイヤーの送迎をお願いした。最初は渋っていたが、そこはプロ。違約金に納得して協力してくれる事となった。

仕込みは済んだ。

後は、『爆弾魔』だ。やはり、というか奴等は残る事を選択した。そして、残念ながら虐殺は起きてしまった。恐らく死んだのは残っていたハメ組だろう。彼らも通達が来た時点で帰還を選択すれば助かった筈だが、上手く行かなかったようだ。私も旅団にかかりきりだったから、全ては救えなかった。それでも被害は半分以下にはなったから原作よりはまだマシかもしれない。

奴等は凶悪だ。クリア報酬を無しにしたら彼等はバツテラ氏に危害を加えかねない為、そのままにしたのだ。また、ツエズゲラ氏も同様だ。彼がゲームを引退していなければ、真っ先に狙われるのは彼だろう。まあ、真っ先にクリアしてしまいそうだったからという理由も無いわけではないが。

ともかく、『爆弾魔』は、原作と同じくその凶悪性を発揮させている。彼らにテコ入れをしなかったのは、弟子達にそれを含めた対処をしてもらいたい為だ。最終的には奴等とぶつかるだろう。その時、簡単には死なないだけの訓練は課してきた。

これが、私からの最終試験だ。



「ツエズゲラ、良かったのか？」

「何がだ？」

「G・Iをクリアしたかったんじゃないか？」

「……まあその感情は否定出来んな。私もこのゲームによつぽどのめり込んでいた様だ。だがな、その感情論抜きにすれば、このバツテラ氏の提案は渡りに船だったからな」
「まあな……。クリア報酬とほぼ変わらない違約金だからな。普通は減額する所だ」

「そう。だからこそ私に文句は無い。この提案はバツテラ氏というよりはアンダーソンだろう。金の使い方をよく分かっている。我々が文句を言わないで引く額をI発目で持ってきたからな。それに、クズ集めもだ。奴等には勿体無いが、出せるのであれば間違ひなく釣られるだろう額だ。ま、とりあえず我々は言われたミッションをこなすだけだな」

「ツエズゲラがいいならいいんだが……」

「それに、しばらくはクリア者は出ないだろう」

「? どういう事だ?」

「No. 1『一坪の密林』は完全に失われた。先程確認が出来た」

「ああ、アレか。全く何がフラグか分からなかった奴だな? 確かにアレは手に入れたのは偶然だったからな。他のプレイヤーなら尚更正規ルートじゃ無理だろうな」

「そう。それにNo. 2『一坪の海岸線』も似た様な物だ。これらをゲット出来る者が出て来れば或いは…といった所だろう。だが、そうなってくると例の『爆弾魔』もいる。一筋縄ではいかん筈だ。逆にラッキーだったかもな」

「うーむ……そう考えるとそうだな」

「ま、折角だからクリアしたかったのは事実だがね。プロとしては楽に賞金がとれるならその方がいい。とりあえず『コンタクト交信』を大量に確保しないと。また補充に行くか」

「了解。確かに楽な仕事だ。ただ、オレ達を疑って中々頑固な奴もいるからそこが大変だけだな——」

ゴン達のカード集めは大変はかどっていた。

「よっしやー！ No. 53 『キングホワイトオクワガタ』ゲットー!!」

「現在で25枚。だいぶ指定カードも集まってきたな」

「そろそろAランク以上も積極的に狙っていききたい所だよね」

「しっかし、『真実の剣』があんな風に役立つとはなー。アレで取れる指定カードがあったとはビックリだぜ。あんなの普通わかんねえって」

「『リスキーダイス』もそうだよ。結構コンボ多いみたいだし、よく出来てる」

「あーあ、後ちよつと粘れば億万長者だったのによ！ 邪魔すんなっての。今だに頭のコブいてーんだからな！」

「兄さんはギャンブルにハマって破滅するタイプだって分かったから、妥当な判断。むしろ止めてもらった事に感謝してほしい」

「ふざけんな！ あんなかてー扇子で殴りやがって！ アレ絶対ミルキの特注品だろー！」

「まあまあ。オレもキルアはギャンブルは向いてないと思うよ。あのままだとそろそろ大凶当たりそうだったし」

「後何回かは大丈夫だったって！ 絶対行けたし！」

「それは沼にハマる奴の常套句じゃねーか。ま、大人しく従つとけ。……んな事よりも、もっかい恋愛都市アイアイに行かね？」

「レオリオ……不潔」

「いや！ オレはただ純粹にカード探しをだな！」

「ハイハイ、分かった分かった。とりあえずいつペンマサドラに戻ろーね」

再びゲームを始めて1か月。かなりの速度でカード集めをして、4分の1近くのカードが集まっていた。

これは驚異的な伸び方であると同時に、プレイヤーの減った現在では目立つ存在でもあった。それ故に、【コンタクト交信】で連絡を取って、トレードを持ちかけるグループもいた。

彼らは最大限に警戒しながらもトレードを進め、更に枚数を増やした。

その数、実に36枚。

かなりのハイペースだと言える。現在の環境下では、割と目立つ存在であった。よつて、徐々に周囲からも目を付けられる存在へとなっていた。



「コレが……『死者への往復葉書』か……」

「よかったですわね。カーム。貴方の目的が早くも実現して」

「ああ……これが有れば死に別れた者とコンタクトが取れる……」

「……まあ詳しくは聞かないわ。早速使うのかしら？」

「いや、楽しみは最後にとっておこう。万が一持つて帰れるならばクラピカにも使わせてあげたいしな」

「なるほど。じゃ、次は私ね！ No. 65『魔女の若返り薬』！そしてNo. 81『ブループラネット』！あと、No. 4『美肌温泉』とか、No. 6『酒生みの泉』もいい

わね〜」

「……結構欲しい物があるなあ」

「そりやそうよ！ 魅力溢れるアイテムがわんさか眠ってるのよ！ ハンター冥利に尽きるわね。ジンもいいゲーム作ったモンだわ。兎に角！ 今言ったのは欲しいから協力して！」

「分かった、分かったよ。それじゃあ引き続き攻略といこう。あと、会長がG・Iやってるって言うってたから探してもいい気はするな。なんかレアアイテム集めてそうだし」

「あのジジイ、仕事は大丈夫なのかしらね？ まあいいわ。ひとまず街を巡りながら情報収集といきましょうか」

「じゃあそういう事で」

我々はカード収集しつつ、会長探しを行う。会長も今どこで何をしているだろうか。恐らくきつと、楽しみながらカード収集をしている事だろう。

人が減った今、遭遇率は悪くないかもしれない。我々も折角のジンのゲームを楽しまなければな。



G・Iに来てから2か月が経った。

この間、様々な事があつた。まずは会長だ。彼は我々が魔法カードの補給の為にマサドラに寄つた時に、普通に遭遇した。

変な被り物を被っている。なんだかロボットの様な意匠だが、変装のつもりだろうか？

あと、彼はシャツの大男と、メガネのスーツの男を連れていた。2人とも最上位近くの実力があつた。

「久しぶりですね。会長」

「ん？ 会長とは誰の事じゃ？ ワシやアシモフじゃ」

「ああ……しばらく前に流行つたロボットの名称ですか。で、仕事はいいんですか？ 会

長

「だから会長じゃないってゆーとるじゃろうに……。まあワシほどになると仕事などはとつくに終えておるからの。余裕じゃ」

「またそんな事言つて……。下の者に丸投げした案件もかなりあつたじゃないですか」

そう苦言を呈したのはメガネスーツだ。若いのによく鍛えているな。と言つても脂の乗つた30代とみたが。会長も語るに落ちてる。隠す気ないだろ？

「貴方は……」

「これは失礼。私はノヴと申します。右の彼はモラウと申します。2人してこのジイさんのお目付け役、と言つた所です」

ああ、そういうえば、キメラアントで会長に駆り出された人材か。いわゆる会長派でし
がらみなく自由に動ける人達だろう。会長派なら守秘義務は守るかな？　そういうえば
後半ノヴさんは悲惨な事になつてた様な。主に頭が…。

「コレはご丁寧にありがとう。私はカームといいます。彼女はビスケツトです」

「はじめまして」

「何かと話題な貴方に会えて良かったですよ」

「オレも興味が尽きないからなあ。お会いできて光栄だぜ」

「おや？ お2人とも私の事はご存知で？」

「ああ。会長から聞いたぜ？ 超待望のルーキーって聞いたが、会ってみて確かに間違っちゃいないな。手合わせ願いたいぐらいだぜ。何故かお前さんには会長がいない時は接触禁止ってなってるからな。このジイさんの縁者か何かか？」

ヒソヒソ

「会長、結構漏れてます？」

「コイツらにはワシから当たり障りない説明しといた。守秘義務もな。対外的には極秘ミッションじゃ。よって他の奴等は殆どは知らん筈じゃが、知った場合でもワシから敵命しとる。ま、お主には行かせんから安心せい。とりあえず、ワシの縁者故そうしたつて事にしとく。話合わせい」

「なるほど、了解」

「お2人で悪巧みですか？ まあ、会長から貴方には個人的には接触出来ないと言われるので安心してください。で、そろそろどこかに入りませんか？ 会長」

「だから！ 会長じゃないってゆーとるじゃろがい！」

「ジジイ隠す気ないでしょ？ もーいいから行きましょ」

そうして、ギャーギャー騒いでいる会長を宥めて近くの店に入る。割とゆったりめのソファアがある喫茶店に入った。

聞く所によると、彼らは月3、4回、3日程ログインしてプレイするスタイルらしい。仕事の調整を頑張ったとのこと。2人のお目付け役は、毎回呼ばれるらしい。可哀想に、と思つたら、会長から正式に依頼したとの事。まあそれならいいのかな？

ただ、そのスタイルだとカードは集まりづらいだろう、と思つていたら、指定カードを2割は集めていた。しかもA以上が多い。

流石はハンター協会のトップだ。そして、1番驚いたのが、No. 65『魔女の若返り薬』をゲットしていた事だ。

そして、実際に飲んでみたらしい。30粒ほど。

道理でオーラがまた少し力強くなっていたわけだ。見た目は全然変わらないが。會長何歳なんだ？ ビスケが根掘り葉掘り聞きたがっていたが、のらりくらりとかわしていた。今後どうするかを聞いたが、とりあえずはいきなり若返るわけにもいかない為、少しずつ服用しながら他のカード探しを楽しんでいるらしい。あと、気になる事を言っていた。

「そーいや、このアイテム取った時にワシんとこに狙って来た奴がおったぞ？」

「へえー。何処の命知らずかしらね」

「メガネでヒョロ長い奴じゃったが、友好的にトレードするフリしてなんか仕掛けようとしてたからの。ワシにはバレバレじゃったから、諦めたらしい。結構使えそうな奴じゃったからちと惜しい事したのう」

「いや、會長他プレイヤー見たら襲い掛かる気満々な気配出してるからだろ？ そりゃ諦めるわ」

……それ『爆弾魔』じゃないか？ 奴等も會長には流石に手を出さなかったか。チツ。

勘の鋭い奴等だ。まあいい。ここで潰れて貰ったら弟子達の試験にはならないからな。

「極悪人だからこそ、弟子達の糧になって相応しい末路を辿ってもらおう事にしよう。」

その後、我々の現状と、弟子達の様子を伝えた。我々も実はこの頃には4割ぐらいはカードが集まっている為、順調といえば順調だ。後2ヶ月もすれば、もっと集まるだろう。今後我々の、というか、ビスケのお目当てカードを探しつつ、攻略をしていこう。また、会長はこれからも同じスパンで来るらしい。何かあったら連絡しよう。

他には、他プレイヤーとのトレードや、魔法カードの襲撃などあった。しかし、我々にとつては大した事も無かった為、割愛する。

『爆弾魔』も来るかと思っていたが来なかった。

ともかく、弟子達の様子を見つつ、彼らのクリアまでを見届けよう。手紙も、私の事情を話すのも、全てはそこからだな。

107、穏やかなG・I生活

「大分集まってきたな。指定カード85種、独占したカードも幾つかある」

「悪くない数字だ。仕込みも順調に進んでるしな」

「だが、あのジジイは予想外だった。流石に肝が冷えたぞ。ゲン」

「ああ。ホント何しに来やがったんだあのクソジジイ。あのレベルだと【命の音】カウントダウンも付けられなかったからな。だが、『魔女の若返り薬』をその後ゲインして独占する気配も無かったから助かった。大方寿命でも伸ばしに来たんだろう」

「後は脅威になる奴等はそんなに多くは無いな。ゴンとかいうガキ4人組と、女連れのカーム組が50種以上集めているが、我々には及ばないだろ」

「遠目から見たがいい女だったな。ちよつとトウが立つてるけどよ」

「奴等もかなりの実力者だ。覗いてる事にも気づいていたからな。あまりクリアにはこたわってなさそうだが、警戒はすべきだろう。後は有象無象だ」

「まず、狙うとしたらチビガキ集団の方だな。アイツらやたら警戒してて、これまたカウントダウン」

「命の音」付けられなかったからな。だが、所詮ガキだ。弱っちいからピリピリしてるだけだろ。アイツらがレアカード取ったら狙いに行くぞ」

「まあ、どつちにしろもう少し煮詰まってるからだな。確実にクリア出来る状態が整ってから仕掛けよう」

「その通り。バトルは最終手段。焦ってもいい事は無い。あわよくば、奴等がN o. 1とN o. 2をゲット出来たら最高だがな」

「ま、気長に待とうぜ。最後に笑うのはオレ達だ」



あれから更に1ヶ月は経った。指定カード55種。我々の成果だ。そろそろカードも取得がまるで情報がないものなどになった。また、最近レアカードゲットしても限度枚数MAXな事が増えた。なので、とりあえず現物のまま使ったり、拠点に置きっぱ

なしにしたりしてる。

いよいよ、状況が加速してきたという事だろう。ただ、我々はあまりクリアを目指していない為、のんびりゲームを楽しんでいる。偶に弟子達に連絡をとってみれば、指定カード数が7割を突破したとの事。今はAからSランクのカード集めに四苦八苦しているらしい。ただ、そろそろ彼等も思い出さねばならない。

ハンター試験が近い事を

それとなく会話の流れで今日の日付を伝えたら、思い出したらしい。今日は12月20日。もうそろそろ帰還して受付をした方がよい。そこでは、キルア以外にもカルトが受験しようという事になった。それは良い事だと私から話したが、キルアは嫌がついてた。兄妹なんだから仲良くやればいいのに。しかし、カルトもハンターになる気になってくれて良かった。暗殺だけじゃない世界を知ってもいいだろう。試験？ハンター試験で彼らに勝てる奴いるの？

早速彼等を出発したようだ。早ければ1カ月ぐらいで帰ってくるだろう。その間、ゴンは修行して過ごし、レオリオはNo.90『記憶の兜』を被って勉強するらしい。忘れてなかったか。感心、感心。

さて、我々だが、比較的のんびりと過ごしていた。最近は何りカード集めも積極的には行っていない。どちらかと言うと、ビスケと私の修行に重点を置いている。その為、誰も来ない様な岩石地帯に拠点を作り、そこで物資を運び込み、生活していた。

拠点とは言え、簡易的なテントではなく、私の存在変質の能力をフル発揮して、快適な一軒家を創造した。豪華三階建ての豪華な西洋風の家だ。当然ながら下水道や水道も完備した。暗黒大陸では野宿オンリーの気の休まらない生活ばかりだった為、こちらでは出来るだけ快適に過ごしたいのだ。住む所には妥協したくない。家具もキッチンリ創造し、シャワートイレ付きだ。私には必要無いが、ビスケも住むからには必要だろう。水に関してはNo.3『湧き水の壺』を設置し、全体に行き渡るようにした。

また、No.4『美肌温泉』を屋上に設置して、屋上露天風呂を楽しめるようにし、No.6『酒生みの泉』も庭に設置した。

やり出したらトコトンやりたくなる。

庭に当たる場所が岩石ばかりなのが気に食わないため、そこに植物を錬成し、風光明媚な庭園を作成した。

お陰で、何という事でしょう。何も無い岩石地帯は見事な庭園に囲まれた、瀟洒な邸宅へと変身した。ビスケなどは感動して、

「ここが私達の愛の巣ね！」

などという発言をして興奮していた。最近では彼女も例の形態でいる事がより長くなった為、逆にどう接していいか分からない。分からないからとりあえずスルーしただ。

広い家だと管理が中々面倒だ。だが、この拠点はその問題を解決している。そう、N O. 99 『メイドパンダ』だ。ビスケが「ペットが欲しい」とか言うから動物シリーズを探してゲットしたのだ。これが存外役に立った。

個体によって得意分野が違うらしいが、今の所はなんでもこなしてくれる。非常に有能なパンダだ。

他にもN O. 98 『シルバードッグ』やN O. 22 『トラエモン』、N O. 35 『カメレオンキャット』など、カード集めのついでにゲットした動物を放し飼いにしている。これらはレア度が高くて、限度枚数MAXなためカード化出来ない面々だったという事情もあるが（トラエモンは大丈夫だったが、ついでにゲインした）、おかげさまでビスケはご満悦だ。庭付きの家でペットに囲まれながらの優雅な生活が気に入っているらし

い。最近はずっとも良く懐いている。

私としては、こんな生活も悪くはないと思うようになってきた。そうになると、後は私の問題だ。私にはまだ躊躇いがある。それを解決しなければ前には進めない。やはり、このゲームのクリアが鍵になるか……。



私達の朝は早い。夜が明ける前に私は起き上がり、庭の一角の修練場で型の確認を行う。特に私は寝なくてもいいのだが、睡眠は取る様になっている。だが、長々と横になると時間を持て余す為、こうして夜明け前に活動している。しばらくすると、ビスケも起き出して準備を整えてから鍛錬に参加する。彼女も型の確認だ。流石に寝ている時はゴツイ姿になっているらしいが、起きた時には第3形態になっている。

2人して夜明けまでそうして過ごしていると、そのうちメイドパンダが我々を呼びに

来る。そろそろ朝食の時間だ。

ビスケは朝の露天風呂を満喫し、私もその後入る。ビスケは「一緒に入ってもいいのに……」と言っていたが、ケジメは大事だ。

ゆつたりと露天風呂を満喫しながら、今日のメニューや食事について思いを馳せる。風呂から上がったら朝食だ。バターたっぷりのパンにカリカリベーコンエッグ、トマトの入ったサラダと日替わりスープ。これがいつものメニューだ。日によって微妙に変わるが大体同じ。ペット達にもドッグフードやキャットフードを与える。シルバードッグには私が錬成した金を少し混ぜている。これで1キロの銀糞を排出するから、汚れなくて済む。おかげさまで、銀はかなりの貯蓄が出来た。延べ棒に変えて空き部屋に突っ込んでいる。部屋が満杯になったら次元収納にでも放り込もう。

朝食後は、本格的な修行だ。ビスケには重力&低酸素を。そろそろ80倍を克服しつつある。……マジで人間やめてきてない？ あの時黒大陸の巨人の攻撃にも若干耐えられるレベルになってきてるぞ？ 流石に長時間は耐えられないが、しばらく休憩したらまたかけ直している。根性が違う。

朝の修行は基礎的なものだ。走ったり、筋トレしたり、だ。そしてビスケは念修行の基礎、私は聖光気で同じような基礎修行だ。午前中は大体コレに費やしている。基礎力

が全ての力の土台となるのだ。

メイドパンダが正午を告げる。昼休憩の時間だ。

私は軽くシャワーを浴び、ビスケは露天風呂へ。よっぽど気に入っているらしい。最近是一日3回入るのがデフォだ。昼食は日によって変わるが、大体サンドイッチとかの軽いモノだ。あまり食べすぎるとリバーズするからな。ビスケが。あと、脂肪がどうのこうの言ってたが、脂肪じゃなくて全部筋肉か骨に変わってると思う。

昼休憩の後はペット達と腹ごなしの運動がてら戯れて、再び修行に入る。午後の時間はカード探しか修行かを交互に行う感じだ。今回は修行の方を紹介しよう。

朝とは一変して、今度は実戦的な訓練だ。流々舞を軽く始めて、徐々にスピードを上げていく。私もビスケも慣れていく為、ビスケなどはほぼ全力に近い速さで行っている。当たり前だが、重力などは掛ければなしだ。

大体2時間もすれば、ビスケは息も絶え絶えになり、力尽きる。そしてクツキイちゃんの出番だ。

30分後、復活したビスケとガチ戦闘に近い手合わせをする。重力は抜きで。そろそ

ろ彼女のオーラがヤバイ。20万近い潜在オーラがある。これは大体私が見てきた人類最高峰の平均の2倍だ。次いで前闘った会長、ジョンと続く。

……もしこれが若返ったらどうなるだろうか？ ビスケもそれを感じているらしく、楽しみにしている。現物の『魔女の若返り薬』は持っているが、すぐ飲むかと思つていたら、私と同じく楽しみは最後にとつておくらしい。

念の系統技を応用して襲い掛かったり、様々な能力を繰り出し、対処する訓練をしたりと、さながら実戦的な修行だ。ビスケもやはり実力は高く、非常に対応が早い。いわば戦闘勘というものが研ぎ澄まされている。私にとつてもこれは様々な引き出しを増やす事に繋がる為、結構いい訓練になる。

そうして、夕暮れまで全力でガチバトルに近い事をやっていると、夕食の時間がやってくる。ホントにメイドパンダ様様である。現実にもいてほしいぐらいだ。

今日の夕食はハンバーグ。味も良い。ペット含むみんなでワイワイと食べる。ペット連中は喋れないが。穏やかな夕食の後は酒生みの泉から採れた美酒が出てきて2人で乾杯をする。ここでは次の日の予定や今後の事を話し合う。ビスケが「新婚生活みただわね」と茶化すが、私だつてそんな気がしている。どうしてこうなつた。

だが、ビスケもそれ以上突っ込んでくる事はない。ありがたいが、申し訳ない。本当

は白黒付けなくてはいけないだろうが、そのためにも私の中で整理が必要だ。

まあ、それはともかく、そんな風な日々を過ごしている。



夜も更けて、ビスケは一頻りペットをモフつた後、露天風呂に入り、月見酒を楽しんでいる。私はどうと、いつもの様に瞑想の時間だ。ここ最近できていなかったから、落ち着いて瞑想できる今がある。だが、イマイチ集中に欠ける。原因は、これらの事。いや、正直に言おう。ビスケの事だ。その気持ちには気づいてはいる。私も最近は……好ましくは想っている。

それはカルトに対してもそうだが、彼女はまだ子供で、娘とか、妹みたいな感情が近い。

だが……私は人間離れしている。いずれ別れが来る。

……正直に言うと、それが怖い。

私はもう、何一つ失いたく無いのだ。これ以上親密になつてしまうと、失つた時に自分が耐えられなくなる。

そして、万が一、自分の妄想でなければの話だが、私と共に歩んでくれるとして。向こうとしてもどうなのだろうか？ 自分だけ老いたり、もしくは永遠に付き合うハメになつたり。

だからこそ、踏み出せない。踏み出してはいけない、とさえ思つてしまう。

それもあつて、私は迷っている。どうするべきか。本当は、何もしないのが一番だ。それは分かっている。しかし、心が揺り動かされる。

私は……一体どうしたいのだろうか？



「アホか。さっさとくっ付け」

「いや、聞いてました？ 私の話」

「聞いてからの結論なんじゃが？」

夜の露天風呂での会話である。何故こうなったかと言うと、会長が我々の所にお忍びで遊びに来たからだ。ノヴさんとモラウさんには別の街で待機してもらっているらしい。

「だから！ 普通の人と私とは何もかも違うんですよ？」

「お主も分からんやっちやのく。前も言ったが、それがどうした？ 欲しくなったんじゃろ？ したら素直に貰わんかい。先の事はその後考えい。ついでにあのゾルデイツクも貰ってやったらどうじゃ？」

そう言って、徳利の酒をグイッと呷る。

「いや、そんな極端な」

「欲しい物は貰う。人間として普通の事じゃ。ましてやワシら、ハンターじゃぞ？」

「……………」

「怖がつとるんじやよ。お主がな。誰しも前に進む事は大小あれど怖いものじゃ。だが、前に進む事こそが、人間として生きる事ではないか？」

「……………前に、進む、か。私の師匠にも言われましたよ」

「偉大な方と考えが同じならそりや光栄じゃわい。しかし、時代や場所が変われど、普遍的な事だとも言えるじやろ」

「……………」

「まあ、人間か怪物かで迷っていた時よりは遥かにマシな悩みじやな。むしろ誰でも悩みそうな事になってきとる。喜べ。お主、人間じゃぞ」

「茶化さないでくださいよ……………でもまあ確かにそう言われるとそうかもかもしれませんね。しかし、やっぱり私は臆病なんですよ。会長。私は前に進むためにも最後の一押しがどうしても必要だ」

「……………それがお主が持つてるアイテム、と言うわけか」

「そうですね。そこでようやく私の時が動き出せそうな気がするんです。どういう選択をするにせよ」

「お主も大概めんどくさいの。んなもんファイリングで充分だと思っくんじゃがな。しかし、そんなお主が心動かされるとはな、まああのビスケなら分かんんでもないがの。チチでけーしな」

「いや、そー!!?」

「大事じゃろ! いかんせんあのゾルディックじゃ太刀打ち出来ん所じゃ。それが勝敗を分けたか? じゃが、アヤツも後10年もすれば立派なモノになるかもしれんからな。最近は重婚も珍しくないぞ?」

「聞かれたらぶん殴られますね」

「野郎の話なんざこんなもんじゃろ。女には聞かせられんよ」

「確かに。ありがとうございます。聞いていただいて。もう少しシンプルに考えられそうです」

「ま、ワシとしてもおもしろー話が聞けたからよかつたわい。あのビスケがの。感慨深いもんじゃ」

「弟子………なんでしたっけ? どんな感じでしたか?」

「そーじゃな………ありや50年近く前の話じゃが——」



「随分長かったわね。ゆつくりでできた？」

「おう。野郎同士で積もる話が出来たわい。ま、偶にはいいもんじやな」

「ふくん。良かったわね。で？ どうだったの？」

「そりや秘密じゃ。野郎の話なんざ女には聞かせられんからの。ただ、ワシから言えるのはアイツ、揺れ始めとるぞ。もう一押しじやな」

「……ふふ。それはよかった。頑張った甲斐があったわね」

「お主も相当変わったのう。見た目からして」

「あたしは変わらないわよ。欲しい物には全力で。それがハンターってモンでしょ？」

「違う。あの薬はまだ飲まんのか？」

「アレは最後の一押し用ね。最適なタイミングで飲む事にしたの」

「そうか。ま、ワシからも応援しとるぞ。ゾルディックも狙つとるようじやがな」

「あの小娘も油断できないからな。でもガキンチョで助かったわ。今んとこあたしが

リードしてゐるからね」

「ワシとしては両方でも面白いんじゃないかな」

「……ま、どうなろうと最終的にはカームはあたしの物よ。ジジイ、ナイスフォローだわ。ありがとね」

「可愛い弟子の為じゃ。それに、アヤツもようやく吹っ切れそうだよ良かったわい」

「そうね。彼の為にも、ジジイがいて良かったわ」

「アヤツの為だけじゃないんだがの。まあええわい。明日も午前中よろしく頼むぞ。お主には負けられんからね」

「ふふ、そろそろ師匠超えを成し遂げてみせるわさ。楽しみにしときなさいよ」

「ようやく産毛が抜けた程度の奴が吠えよるな。ワシも楽しみじや」

「じゃ、また明日ね。おやすみ」

「おう。また明日」

そうして、穩やかな夜はふけてゆく――

108、フラグ

今、我々は広く、黒に染まった密林を仲良く彷徨っている。我々とは、私とビスケに加えて、ゴン達の事だ。

現在、方向も分からず闇雲に歩いている。何処がゴールかも分からない。弟子達は途方に暮れている。

それは会長が遊びに来てから3日後に起きた事だった――



その日、私とビスケはルーティンに組み込まれた午後のカード探しに出かけていた。

最近ビスケはペットに愛着を持っていてる様で、出かける際には全て連れ歩く様になった。移動が大変だが、我々もさして切迫してない為問題ない。

目的はカード収集、ではあるが、その中でも全く取得条件が不明なN.O. 1『一坪の密林』だ。そして、このカードはまだ誰も取得していない。少し弟子達のサポートをこつそりしてやろうという魂胆だ。

さて、件のカードは【道標】と【解析】ガイドポストを使ってみて、場所と概要は分かったが、それきりだ。というわけで、少しでも情報が得られる様にその場所へと赴いた。その名も、エルディアナ大密林。その麓村である「エルディアナ村」である。

多少距離があつた為、ペット達を担ぎながら私とビスケで走り、現地に着いた。すると、意外な人物達と出くわした。

そう、弟子達である。

「あつ！ カームとビスケ！」

「ゲツ！ こんなトコで会うとは……」

「やあ、ホントに偶然だな。キルアとカルトまで揃って。まだ試験中かと思っていたが」

「コイツら帰って来たのはついさっきだけ。キルアが帰ってくるなり攻略しようっつーからよ」

「バカ言え！ ゲンスルー組つてのがもう90種近く集めてんだ。ボサツとしてるヒマ無いからな！」

「とか言つて。ホントは後でビックリさせたかつたくせに」

「うるせーぞカルト！ そんなんじゃねーからな！」

「……全く。連絡ぐらいしたらいいものを。で？ どうだった？」

「ああ、ヨユーだぜ、あんなの。なあカルト」

「むしろ帰ってくるのに時間かかった。それよりそのババア……ちよつと話がある」

「ふうん。何かしら、小娘」

ビスケは以前の様にキレちらかさず、余裕を持った表情で答える。カルトはそれを見て青筋を立てながらビスケを誘導した。そして2人は我々から離れてお話し合いを始めた。大体の内容は想像つくが、こういうのはツツコむと余計にややこしくなるからスルーだ。……なんか今にもバトルが始まりそうな不穏なオーラが出てるが無視する。しかし、カルトもあれから更にレベルアップしてるな。オーラでわかる。だが、ビスケも相当強くなってるからな。

「おい、アレイーのか？」

「ああ、ほつとこう。我々に出来ることはない」

「レオリオ、女の子はそういう事もあるからここはカームの言う通りだよ。……でもカーム。そろそろ2人とも向き合ってあげないといけないよ？」

「……ゴンの言う通りだな。まさか弟子に教えられるとは。私も“コレ”が終わったら白黒つけようと思う。心配させてすまなかつたな」

「ううん。余計なお世話だったね。じゃあ気を取り直して、ゲームの話しようか」

流石ゴンさんだ。全てお見通しか。私もそろそろ年貢の納め時、か。だが、不思議と以前の様な悩みはない。不安ではあるが、私は前に進み出そうとしている。これも、師匠や会長、そしてこれまでの彼らとの触れ合いが私を支えてくれているからか。だからこそ、私は進まなければならぬ。

前へ



「終わったわよ。無事話がついたわ」

「カルトもいいのか？」

「うん。大丈夫。ただ、後で相談がある」

「……分かった」

「よし、それじゃ今話してた事を言うね。とりあえず、今回は情報集めしようって事で、オレ達とカーム達で手分けして探してみる事になったよ。前から一通り探ってはいけど、見落としがないか、しらみつぶしにやってみよう」

「なるほどね。まあ激レアカードみたいだし、いいんじゃない？」

「1番怪しいのがこの長老だけど、何もヒントがねーんだよな。多分、別のトコでフラグ踏まなきゃいけないと思う。で、どっかにフラグがあるはずなんだけどな」

「じゃあとりあえず、それぞれで手分けして情報収集しながら、後で集まって確認する感じだな」

「了解。ところで、さっきから思ってたんだが、その動物どもは何なんだ？」

「ああ、これは——」

「ウチのペットちゃん達よ！ 紹介するわね。まず、メイドパンダのメイちゃん、シルバードッグのシルちゃん、トラエモンのトラちゃんにカメレオンキャットのメレちゃん！」

「いや、そうじゃなくてな？ 何で連れて来てんの？」

「可愛いウチのペット達を置いてきぼりにできるわけないじゃない！」

「これには事情があつてな。ウチの拠点でカード化出来ない彼等を放し飼いにしたら、結構懐いてビスケが愛着が湧いたらしい。最近はあまり熱心にカード集めやつてないから連れて歩いてるといふ訳だ」

「マジかよ、めんどくせえなあ」

「まあそう言うな。邪魔にはならん様にするさ」



『一坪の密林』について何か知らないか？』

「……それは禁忌だ。ヨソ者には教えられん……が、お前さん達ならヒダ長老から教えてもらえるだろう」

……おかしい。以前は何も反応がないか、知らないの一点張りだった。他の村人に聞いてもそうだ。これは何らかの要因でフラグが進んだ可能性がある。

急ぎ、他の村人にも確認して、ゴン達と合流しよう。



とりあえず、情報を集めた結果、長老に話をしると殆どの村人が言ってきた。これはまさかとは思うがアレか？ そう考えた所で彼らと合流した。情報交換タイムだ。

「全然収穫ナシ。前と一緒」

やはりな。彼らになくて、我々にあるもの。それは――

「カーム達は何かあった？」

「それがな……長老に話をしろと皆が口を揃えて言ってきた」

「!!? マジで!!? ナイスだぜ! 何らかのフラグが揃ってたか! 早速長老の元にい

こーぜ!!」

「そうだな。まずは長老に話を聞こう」

「僕達になくて、カーム達にあるもの……まさか」

カルトは気づいたようだな。恐らく考えは一緒だろう。まあ推察でしかない。長老と話せば分かるだろう。そうこうしてる内に長老の元についた。元々狭い村だからな。彼は質素な木製の家の前の木の切り株に座っていた。

「やあ、ヒダ長老、お尋ねしたいんだが、『一坪の密林』について何か知ってる事はないかな?」

「……………」

長老が黙り込む仕草をする。これはまさか……！

「反応がちげーぞ！ いつもなら知らんの一点張りだが、これは……！」

「長老？ 何か知ってるのか？」

「……お前さん達にならないじゃろう。その場所は我々にとつては『聖域』じゃ。この大森林の何処かにそれは確かにある。じゃが、今そこは闇に侵されておる」

「!!? フラグが進んだぞ!!」

キルアが興奮して捲し立てるが、ゴンがそれを制する。

「黙ってて！ ちゃんと聞こう！ それで、長老。何があつたの？」

「……そうじゃな。どこから話そうか……。遙かな昔から『聖域』は森の神がおわす場所であり、この大森林はその神が治めておつた。ワシら人間はその恩恵を分けていただきながら暮らしておつた。じゃが、ある時から闇の精霊がこの森を支配し始め、この森は閉ざされてしまった。神はお隠れになり、動物達は暴走し、『聖域』は今や闇の領域と

なっておる。森の恩恵は失われてしもうた。遠からずワシらも滅びを迎えるじやろう。だからといってあそこは稀少な動物達の樂園じや。無闇矢鱈と踏み込んで荒らす訳にもいかん。しかも厄介な事に、資格がない者には普段の森の様にしか映らん。だがそれは幻なのじや。しかし、お主達ならあるいは……」

「まさか……こんなにアツサリ……」

「動物……そうか！ フラグはこの動物達だ!! コイツらをゲインして懐かせた上で連れてくる事、それがフラグか！」

「分かるわけねーだろそんなの！ アホか!!」

「待って、まだ話は続けよう！ それで、どうしたらいい？」

「まずは森の闇を暴くのじや。その動物達も力になろう。そして、その原因である闇の精霊を倒してくれ。さすれば森の神も復活し、平和が戻るじやろう」

「うん！ 任せて。必ず闇の精霊を倒すからね」



「なんちゅー分かりづらいフラグ！ そりゃ誰もゲットできねーわ」

「ただの動物じゃなくて、指定カードの動物だったから良かったのかもな。多分、絶滅寸前の〜ってのがポイントなんだろう」

「うーん、ソイツらSランクとかだろ？ それをワザワザゲインするなんてのは厳しいぞ」

「まあ結果オーライだよ。アタシのペットちゃん達が役に立って良かったわね！」

「認めたかねーがファインプレーだったな。さて、じゃあ早速攻略すつか！ とりあえず動物連れて森に入ろうぜ。どっちかつーとジャングルだけだな」

そうして、我々はエルディアナ大密林へと足を踏み入れた。ここはまさにジャングルだ。一見平和なジャングルに見える。しかし、動物達が全く見当たらない。

「うーむ。長老は『闇を暴け』って言ってたけど、どうやったらその闇とやらは姿を現すんだ？」

「また何かのフラグがあんのか？ もう勘弁してほしいよな」

「動物達が役に立っただろうって言ってたけど、どうなんだろう。ビスケ、聞いてみてくれる

「？」

「どう？ みんな、どうにかできそう？」

ビスケがペット達に問いかける。それぞれが考えこむ中、トラエモンが何やらお腹の袋をゴソゴソしている。そして、お腹からアイテムを取り出した。

「あーっ!! それアタシが飾つといた『闇のヒスイ』じゃない! トラちゃんまったくすねたわね!!」

ビスケが騒ぐが、闇のヒスイは暗い光を撒き散らし、辺りを暗く染める。現れたのは、闇に染まった密林。木々も、空も、植物すらも黒く塗りつぶされている。正に闇の世界、といった風情だ。

「うわっ、マジか……ちよつとグロいな」

「これは酷いね……一刻も早く元に戻さないとね」

「とりあえず探るか。その『聖域』とやらをよ」

そうして我々は、動き出す。シルバードッグの毛が輝き、明かりの代わりになってくれている為、先頭を歩いてもらう。だが、どっちに向かえば良いのか。仕方がないので、まっすぐ奥地に向かって歩き出す。

周りは暗く、そしておどろおどろしい。しかし、それがカードに繋がるため、頑張らねばならない。弟子達はそれぞれ暗澹たる気持ちだったようだが、意を決して歩き出した。

私はいえ、以前からこういうのはしよっちゅうあつて慣れていた為、あまりシヨックは無い。むしろ弟子達がどのような動きをして行くか、お手並拝見といこう。

109、闇の森

我々は歩く。この闇に包まれた森を。当然だが、辺りは暗い。唯一の灯りはシルバー
ドッグの輝く毛並みときた。そして、どっちに進めば良いか全く分からない。正に八方
塞がりな状態である。恐らく正解ルートがあるのだろう。それを自力で見つけなけれ
ばならない。

ここで、まずは弟子に伝えておこう。

「皆、聞いてくれ。恐らく現在、このゲームで一番難易度が高いであろうクエストが始
まっている。よって、私達はここからは殆ど手を出さない。君達の力でクリアしてもら
いたい」

「ゲツ、マジか！ この状況でもそれやる!？」

「この状況だからだ。君達にとつては何よりも得難い経験となるだろう。ここから先は君達が方針を決めろ。なーに、失敗してもいい。だが、終わるまでは回復なども一切しないから、覚悟を決めて取り組む事だ」

「えっ。マジ…?」

「大マジだ。私を当てにしないで難局を突破する力を身に付ける為だ。私がいつまでも助けられる訳ではないからな」

「まあ、確かにそうだね。頑張るよ」

「うむ。そうしてくれ。さて、これからの方針を決めるんだ。状況は待ってくれない事が多い。私はこれ以降口を出さないから頑張るんだ」

「分かった……じゃあ、早速だけど、この場に留まるわけにもいかないから出発しよう。シル君が先頭で、オレが続くよ。動物達を囲んで左右をカルトとキリアお願い。後ろはレオリオにお願いしようかな」

「OK。中々いいと思うぜ。それで行くか」

「オレも特に文句は無いな。妥当な判断だろう」

「僕も異議なし。ただ、カーム達はどうする?」

「あつ、そうだね……」

「ああ、我々は適当についていくから気にするな。決まったなら行くぞ」
「分かった。じゃあ出発しよう」

そうして我々は動き出した。先程のゴンの判断だが、野生の勘が鋭い強化系のゴンが先頭で、中距離攻撃手段を持つ2人がサポート。万が一の対処と後方支援にレオリオと、中々理に適っていると思う。瞬時にそれが出せたなら成長した証だ。

だが、ここも一筋縄ではいかなそうだ。どうなるか、楽しみだ。



我々はひたすら歩いている。道という道は無く、真つ黒なジャングルを警戒しながら歩くというのは中々神経を削る。彼らは交代で《円》をしながら歩いていたが、慣れな
い為に消耗も激しそうだ。

思い出すな。あの行軍の時を。アレに比べればただ暗いだけなこの場所は、私にとつたら散歩みたいなものだ。

ただ、ウンザリするぐらいに何も無い。もう体感で半日は歩いているだろう。逆にそれが弟子達の負担にもなっているようだ。

「なあ……コレ、いつまで続くんだ？ そろそろ何かあつてもいいんじゃないか？」

「うーん……これじゃラチがあかないね。どっちが正解かも分かんない。何か見落とししてる事があるのかな？」

ふふ、迷ってるな。しかし、もういい時間だ。

「話し中すまないね。君達、そろそろペットのエサの時間だ。ちよつと立ち止まってくれるかな？」

「もうそんな時間か。しゃーねーな。オレ達もとりあえず休憩すつか」



ペットに餌を与え、我々も軽く食べて休憩する。当然ながら警戒は怠っていない。ここまで何もなかった。ただ不気味なだけだ。だが……そろそろ来そうなのだ。私が主催者だったならそうする。勘だが。半日以上放置して、警戒疲れを起こした所で……というやつだ。又は本当に別のフラグがあるのだろうか。動物達に聞いても首を振るばかりだ。と、いう事は……。

！

私のコツソリ張っていた警戒網に反応が引つかかる。……来たか。ビスケも気付いたようだ。だが、私とビスケはバレないように目配せをし、大きな反応はしない。ギリギリまで様子を見る。いつ気付くかな？

程なくして、まずゴンが、ついでキルアとカルトが反応する。

「!! みんな! 何か来るよ! 警戒して!!」

「ようやくお出ましか。待ってたぜ」

「複数から狙われてる。とりあえず円陣を組んだ方がいい」

その言葉から、直ぐに万全の迎撃体制が整う。非常に優秀だ。もう卒業間近だな。さて、何が来るか。

暗い森の影から、のそりと姿を現したのはこれまた闇に包まれた6本足の獣型の奴だ。何と言ったらよいかわからないが、黒いウジ虫に全身をたかられた様な感じだ。元はトラの様な生き物かもしれないが、その面影は全く無い。ウネウネと蠢く闇が非常に気色悪いし、顔に当たる部分から覗く2つの光点が嫌悪感を増幅させる。

「なんだありや……気色悪っ」

「それでもやるしか無いよ。……来るっ!」

ソイツは、身体にたかる闇の一部を伸ばして攻撃してきた。カルトが紙吹雪を舞わ

せ、迎撃する。その隙に、ゴンがオーラを込めたパンチをソイツにお見舞いした。

ブワツ!!

闇が一瞬散る。同時に中身が一瞬見えた。毛皮だ。やはり動物だ。ソイツはたたらを踏んでしばし停止したが、再び闇が集まって動き出した。

「ゲツ。マジかよ。ゴンのパンチでアレか!？」

「おい！ ゴン大丈夫か!？」

レオリオが問いかける。何故ならゴンのパンチした腕が火傷の様な状態になっていたからだ。

「うん！ 大した事ないよ。でも、コイツら直接攻撃しちゃダメだ!？」

「見りゃ分かるわ！ 一旦カルトとキルアに任せて下がれ!？」

再び獣が攻撃して来るが、紙吹雪で押し止める。だが、その間にも周りには複数の獣

達が姿を現す。

状況が切迫してきたな。だが手は出さない。そして、気付くだろうか？ 彼らの攻撃はある意図を持つている事に。

「おい、どーすんだ!? オレの電撃もあんまり効果ねーぞー!」

「僕の能力にも限界がある。これ以上は押し切られる」

私は彼らを尻目に自分に来そうな攻撃を躲す。だが、余りその必要はない。何故ならこれは、我々を狙ったものではないからだ。

弟子達は必死に抵抗している。ゴンはジャン拳パーを使って撃退しようとしたが、それでも、一時攻撃が途絶えるだけでまた復活してくる。ジリ貧とは正にこの事だ。懐かしいな。こんな状況は日時茶飯事だった。暗黒大陸初期はそれで押し込まれて、ギリギリで復活してまた押し込まれて、と泥試合みたいに繰り返し返して、ようやく攻略法を見つける感じだった。後半は慣れてすぐに分かる様になったが。さて、この襲撃だが、どう対処する？

そうこうしてるうちに、カルトの紙吹雪をすり抜けて、触手(?)が中央に向かう。そして、ターゲットに当たると前にゴンのジャン拳チー、つまり刃に変化させたオーラがソレをぶった斬る。

「コイツらの狙いは動物達だ!! このままじゃ飲み込まれちゃうから、闘いながら移動して、コイツらを撒くよ!」

……気付いたか。そう。これは護衛ミッシェン! 如何に動物達を守りながら目的地へと辿り着けるかの勝負! そして、良く奴らの動きを見れば……

「ビスケ! シルにお願いして、動物達を守ってもらって! レオリオは他の子達を担いで走れる!」

「オツケーだ。任せろ」

「了解。シルちゃん、聞いたわね! あんな気色悪いのにやられない様にみんなを守ってくれる?」

「ワン!!」

正解。奴らは何故かシルだけ狙わない。そこに攻略のヒントがある。レオリオはメイを背に、トラを肩車して、メレを手に抱いた。

「準備出来たぞ！ いつでもいいぜ!!」

「ナイスだぜ。よし、みんな行け！ オレとカルトが殿しんがりになる！」

そして、全員一斉に走り出す。当然奴等も追いかけて来るが、こちらの方が早い。しばらく走ると、完全に撒いたのが確認された。



それからというものの、散発的に先程の「闇の獣」に襲われた。こちらとしては足止めぐらいしか現状でできない為、円陣を固めて逃げるしか手が無い。先程のゴンのケガだが、自身の能力で回復していたが、それでも次から次へとケガが増えていく為にレオリ

オも治療する様になった。そして、1番の問題は、今だに正しい方向が分からない事だ。

彼らの消耗が激しい。そろそろ打開策を打ち出さないとリソースが枯渇するだろう。ヒントはシルバードッグだ。そこに打開策がありそうだ。

「ちよつと厳しいな。このままじゃ最終的にはやられちまうぜ?」

「うん…。どうしたらいいんだろ? とりあえずシルだけは狙わないトコにヒントがあるみたいだけど……」

「そーだな。とりあえず本人(?)に聞いてみつか……。て、あれ? どこ行つた?」

「今、その木陰に走つていった。多分お花摘み」

「なんだ。ウンコか」

「兄さん、下品」

「分かりやすく言つてるだけだろ!」

「おい、カーム何してんだ?」

「ああ、シルバードッグの糞は銀なんだ。回収しようと思つてね」

「銀ねー。ウンコだと思つとちよつとエンガチヨだな」

「ま、例え糞だとしても中身は銀だからな。ほつとくのも勿体無いだらう」

「!! カーム! ちょっと待つて! ねえ。ソレ、使えないかな?」

「は? 何を? まさかウンコとか言うなよ?」

「そうだよ。アイツら、シルだけは避けてた。寧ろ近づいたら離れてくじやない。だつたら、その銀のウンコもその効果があるかも……!」

「ゲーツ! マジかよ!! オレは嫌だぞ! お前が持てよ!」

「まあ、現状どうしようもねーからやる価値はあるな……オレは遠慮しとくが」
「とりあえず、次の襲撃で試してみるよ」

ゴン は出来立てホヤホヤの銀を手を取った。1キ口はあるから多少持ちにくい様だが、両手に握りしめている。さて……私もそれは効果はあるだろうと感じている。現状を打破するためには、あらゆる事を試さなくてはならない。後は、どれぐらい効果があるか、だ。それも、次の襲撃で分かるだろう。



しばらくして、再び襲撃があつた。ゴンは銀を持ったまま、敵に殴りかかる。すると

ドゴオツ!!

打撃音が違う! そしてウネウネと蠢く闇が消滅している! これが正解か! 中から、トラに似た6本足の動物が姿を現した。しかし、周りの敵は彼も攻撃対象にした様で、次々と触手や触腕を伸ばす。

しかし、そこはゴン。次々と攻撃を銀で打ち払い、その動物を中央に誘導した。

「ナイスだ! やつぱりそれが正解だったか! じゃあゴン、そのまま頼むぜ!」

「OK、任せて」

そこからゴンは、水を得た魚の様に縦横無尽に動き、闇の獣を元に戻していった。カルトやキルアも紙吹雪や電撃での確にサポートしている。レオリオはペット達や元に戻った動物の誘導係だ。そして、しばらくすると完全に全ての動物を元に戻す事が出来た。

「やったな！　ゴンの推察が完全に当たったみてーだな！」

「ちよつとはマシになった。……でも、その分大所帯になってしまった」

キルアが喜ぶが、そこにカルトが水を差す。確かにそうだ。この先、敵を元に戻せば戻すほど大所帯になる。護衛もしづらい。よく考えられてるな。

「うーん……確かにそうだな。今だに向かう方向すらわかんねーからな。ジリ貧なのはかわんねえ。どうにかなんねえかな」

「この子達に聞いてみようよ！　ねえ、どっちに行けばいいか分かる？」

ゴンが先程助けた動物に話しかけるが、ゴンには先程殴られたばかりなので少し怖がっているようだ。人懐っこそうな動物だが、慣れるまではまだ時間が必要か。

しかし、そこでカメレオンキャットのメレが急に変身しだした。その姿は、彼らと同じ、6本足のトラのミニサイズである。そして、彼らに近づき、ガウガウと話(?)をしている。これは……。

しばらくそうした時間があつた後、メレは元に戻り、前足の一つをある方向に指した。

「マジか……もしかして正解ルートか!？」

「やったぜ！　ようやく進めるな!!」

「……………」

動物との交流が得意なゴンは若干不満気だったが、向かうべき場所が分かっただけでも朗報だ。まあゲームだから、と彼を宥め、早速向かうとしよう。

しかし、中々良く出来ている。連れて来たペット達も大活躍だ。まだメイドパンダのメイだけが何も役割がないが、きっとこの先にそういう場があるのだろう。何が待ち構えているか、楽しみだ。

110、スプリガン

「ねえ、キルアもコレ持ってよ」

「ぜってーヤだ！ それ、どう見ても形はウンコじゃなか!!」

「じゃあカルト、頼むよ」

「僕も遠慮しとこうかな。紙吹雪でとりあえず何とかなってるし」

「……レオリオ！」

「いや、オレはアレだ。動物どもの世話とか、治療とかあるからな！」

「……もうっ！ みんなクリアする気無いの!?! 流星に怒るよ!?!」

ゴンはブンブンしている。しかし、確かに見た形は完全にウンコだからなあ……。気持ちは分からなくもない。私なら使うが、現代社会の生活が長い彼らは抵抗が強いだろう。ジンも、このシナリオウキウキで書いたんだろうなあ。彼の笑い声が聞こえてくる

気がするし。

それはそれでシャクだな。ちよつと手助けしてやるか。

「ゴン、ちよつとソレを貸してくれないか？」

「あ、うん……」

そうして借り受けた銀のウンコの形をほんのちよつと変える。すると、あつという間に、一キロの銀のウンコは銀のガントレットへと早変わりした。

「！　ありがとう!!　カーム！」

「いいよ。ただ見た目を変えただけだしな。何よりビジュアルがちよつとアレだったから私も変えたかったし」

「よーし、これでバシバシ助けて行くよ！」

ゴンが気合を入れている。さつきとほぼ状況は変わっていないが、本人はウキウキでやる気が出るからいいだろう。他のメンバーはこれ幸いとふいつと目を逸らし、離れていった。……そんなに嫌かなあ。普通に銀なだけだな。



それから、一行はガンガン進み、闇の獣を蹴散らしていった。蹴散らすというか元に戻す、だが。その分数も増え、今や50匹以上の大群となつてしまつた。ある程度はカード化するが、入り切らずに仕方なくゲインし、この数になつてしまつている。

ここに来て流石にゴン1人では回らず、動物達を奪還されるような事態が多々あるようになったため、他のメンバーも嫌々ながらシルが新たに出したウンコを持つ様になつた。彼らもすぐさま私に形を変えてもらう様をお願いしてきたため、仕方なく変えてあげたが。

その努力の結果、とりあえずは、何とかなつている。ただ、心なしか、襲撃が強まつてきているし、周囲もただの闇ではなく、グジュグジュに腐つた様なビジュアルになりつつある。ホラーの世界だ。しかし、逆に考えれば、中心地に近づいている証でもある。

あと少しだ。

だが、普通に考えればこのまま終わる筈がない。闇の精霊をぶつ飛ばさなきゃならぬ。メタ的に言えば、多分強烈なボスとか用意してるんだろうなあ。こつちもある意味ゲームプレイを見ている様なものだから、観客の立場で楽しめる。現在、全てのリソースの4割は消費したってトコか。ボス戦までは多少は残しておきなよ？



「ハアツ……ハアツ……。結構しんどいね……」

「ふうっ……。確かにな……」

「……早く見つけねーとやべーぞ？」

「ハア……ハア……そろそろな筈。動物達も指す方向がバラバラになってきた……。つまりはこの辺が中心部だと思う」

「ん〜…それじゃ、どこがゴールなんだろ。見れば分かるのかなあ?」

回復力の高いゴンがもう息を整えている。アレだけ動き回っているのに元気だな。しばらく息継ぎなしの奮闘だったからな。おかげで今は動物園の様なバリエーションの豊富さで、100匹以上の動物達がいる。だからこそ早めに見つけなければならぬ。ボス戦のステージを。そして、先程からヒントは出ている。

「シツ……何が聞こえない?」

「は? 何が? 動物達の鳴き声しか聞こえねーぞ?」

「それもそうだけど……それに混じって、赤ちゃんの泣き声が聞こえる…」

「うわつ。マジかよ。全然聞こえないんだが……」

「それがマジなら超ホラーだな。だけどゴンの耳はいいからな。具体的にはどっから聞こえるんだ?」

「ちよつと待つて……こつち」

そうして、ゴンは我々を導く。気づいたか。何となく見えて来たな。このクエストの

概要が。

「ん？ 確かに聞こえてきた！ すげーぞ！ これがゴールか!？」

「こんな場所じゃ確かにホラーだな。で、声の発生源は何処だ？」

「いや、おかしいな。確かにこの辺なんだけど、全然見つからないんだよね。1番聞こえるのはここなんだけど……」

「またギミックか？ いい加減にして欲しいんだけどな……」

「カードリストを見て、それっぽいのを試してみるしかない。でも、余り猶予は無い……
また来た」

「やべっ！ 急がないとマズいぜ！ とりあえずカルト、レオリオ頼む！」

「しゃーねーな、早くしろよ！」

「任された。急いで」

そうして、ゴンとキルアはカードを調べ始める。ゲーム的には幻といった表現か。だとしたら……。

「まだか!? 早くしてくれ！」

「後一分以内に何とかして欲しい！」

レオリオとカルトが奮闘している。もう既に2、3匹は取り込まれた。そうになると雪崩れ式に崩れ始める。崩れるのも時間の問題だ。

「あつ！ そうだ!! コレ試してみようよ！」

「うん。そうだな。コレが一番怪しい！ さあ早く試すぞ！」

ゴンとはあるカードを取り出し、ゲインする。そして……

バリイン!!!

何かが割れた音がした。そう。使ったのはN.O. 83『真実の剣』！ 剣が砕け散らない。即ちそれは偽りを斬ったという証！

闇が、溢れ出す――

凄まじい闇の奔流が辺りを襲う！ 動物達は苦しみだし、次第に少しずつ闇に染まってゆく。それは襲撃してきた闇の獣達もだ。手当たり次第に攻撃を始めている。だが……道は開けた！

「レオリオ！ カルト！ そのまま動物達を頼むよ！ キルア！ カードの子達を連れて中心まで行くよ!!」

「任された！」

「行けっ！ オレ達も後から追いつくからよ！」

「よし！ 頼んだぜ！ 遅れんなよ!!」

「カーム！ アタシは残って彼らを見とくわ！ 先にその子達と一緒に行って!!」
「分かった！ 最後まで見届けるよ」

ビスケが残ってくれるなら、万が一でも安心だ。私は彼らに付いて行こう。



そこは、闇のジャングルだった場所。今は正に闇の世界と化している。植物らしき物から顔や手足のパーツが複数生え、叫びを上げた様な表情をしながら蠢いている。また、地面は土ではなく、蠢く蟲の群れだ。また、中心から溢れる闇によつてより捻れ曲がり、様相をより凶々しい物に変えていく。これはビジュアルとしては中々の物だ。

そして、その溢れる闇の中心には、不自然に空いたスペースがある。そこにソレはい

闇の精霊だ。

赤子の姿で宙に浮かび、泣いている。彼(?)が泣くたびに闇の波動が溢れ、周囲が汚染されて行く様に見受けられる。

「アレだ！ ゴン!!」

「うん！ 行くよ!!」

彼らが動物達を担いで近くに寄ろうとした、その時――

「!!!」

ドガアツ!!!

黒い巨大な手が2人の進路をパンチで塞ぐ。それは徐々に形を成して行き、最終的には黒い巨大な鬼が姿を現した。

「コイツがラスボスか…2人で相手してもラチあかねーな。ゴン、コイツはオレが相手するから、お前は動物達と隙を見てあつちに向かえ」

「……いいの？」

「オレはスピードで時間を稼ぎやすいからな。役割分担だ。その代わり、早くやれよ？」

「分かった。まずはコイツを突破しないとね」

そうして、キルアはゴンに動物を渡して2人とも散開する。仮に黒鬼と呼ぶが、ソイツはゴンの方に向き直り、凄まじいスピードで迫る。流石のゴンもその速さは予想外だったようで、一瞬固まるが、迎撃態勢をとった。だが――

ドガツ!!

「お前の相手はオレだ! ゴン、何してる! 早く行け!!」

キルアが乱入する。だが、黒鬼は、ペットを担いだゴンにヘイトを向けようとする。きっとそうプログラムされているのだろう。ゴンは「サンキュー、キルア!」と言うと同時に走り出す。追いかけてやうとする黒鬼だが、キルアが妨害する。

しかし、この黒鬼、本当に強い。

キルアのスピードにもついていく速さと、その見た目から繰り出される強烈無比なパ

ワー！ 流石にスピードはキルアが上回っているが、それでもかなりの速さだ。キルアも所々【電光石火】を使って対処するが、流石に長時間使える技ではない。そして……

「ぐっ……！」

鬼のパンチがキルアを捉える。キルアはガードするが、腕にミシミシと響く音が鳴る。コイツ……巧い。スピードとパワーだけじゃない。動きを読んで打撃を当ててくる。流石SSランクのラスボス。多分コイツはレイドボスだ。本来ならば複数人で当たらなければならぬ程だろうレベル設定！ それに対してこちらは今回ソロで当たらなければならぬ。その為キルアは苦戦を強いられている。何より、コイツにはこちらの攻撃が通らない。いや、正確には通るは通るが、すぐに復元してしまう。つまり耐久戦だ。どこまで耐久しなければならぬか。それはゴン次第と言える。

「ゴン！ まだか!？」

キルアが攻撃を躲しながら叫ぶ。一方のゴンは、闇化するペット達をガントレットで戻しながら、闇の赤子まで到達していた。

そして、すぐそばまで来て、いぎぶつ飛ばそうとした時、メイドパンダのメイがそれを制する。なるほど…そういう事か。メイドパンダの説明にもあった。何よりも人間の子供の世話をするのが得意、と。それがここで生きるか。ゴンもそれに気付いたようだ。メイは闇化で苦しみながらも、赤子に近づき抱き抱える。そして、宥め始めた。

これが耐久のゴールだ！ つまり、闇の精霊が泣き止めばこちらの勝利！ だが、こちらは一筋縄ではいかない。闇化がドンドン進むからだ。他のペット達が闇の獣と化すのを治しながら、メイの子守りを中断しない様にしなければならぬ。今、彼らは一分一秒が何倍にも引き伸ばされている様に感じているだろう。キルアも消耗があり、次第に攻撃を受ける回数が増えてきている。

このままでは保たない。そう感じていた時、黒鬼が動きを止めた。何故今止まる？まさか…。

そう思っていたら、奴はブルブル震えだし、二体に分裂した。

「マジかよ…」

キルアも流石に呆然としている。一体でも厄介だったのだ。それが二体になった。どう考えても絶望的だ。流石に危険か。

「キルア！ これ以上は危険だ！ 手を貸すか!?」

すると、こんな状況にも関わらず、キルアは宣言する。

「いい！ 手を出すな!! ゴンは必ずやってくれる！ それに、アイツらも必ず来る!!」

……仲間を信じる、か。それもいいだろう。

「……分かった。だが私が危険だと判断したら介入する！ いいな！」

それを聞いて、キルアは微かに笑う。そして、黒鬼達は動き出す。そこから一方的な蹂躪が始まった。奴らはコンビネーションを駆使しながらキルアを追い詰める。キルアはポコポコになりながらも、ゴンにヘイトが行かない様に立ち回る。なんとか致命傷は避けてもいるようだ。だが――

「チツ……!」

ドガツ!!

「ガッ……!!」

キルアも疲労により、些細なミスをする。そこを逃す敵ではない。即座に反応した黒鬼の1体が、キルアの足を捕まえて地面に叩きつける。

更にそこからもう1体が追撃の構えをとる。……限界か。行こう……いや、間に合ったか!

遠方から銀の紙吹雪と銀のメスが飛んできた。

黒鬼達は一旦回避して離れる。

「ゴホッ! おせーぞ!!」

「ごめん、兄さん! 少し手間取った」

「ヤバそうな奴らだな! 今から行くぜ」

後方からカルトとレオリオがやってきた。ギリギリだったが何とか間に合ったか!

そして、動物達も引き連れている。

その殆どが無事だ。何とか乗り越えたか。だが、闇の侵食が激しい。レオリオとカルトで元に戻しながらカルトが紙吹雪でキルアをサポートする。レオリオも要所要所でメスを飛ばしてサポートしている。

しばらく戦況が一進一退となる。カルトやレオリオの支援も中々の確だ。キルアと敵の動きを読んで、敵の動きのみを妨害している。

しかし、敵は再びその動きを停止する。おいおい、まさか……

「ちよつと待てよ！ まだ増えるのか!？」

「ゲッ、分裂した!？」

そう。黒鬼達は更に四体に分裂した。そしてキルアに襲いかかる！ これはもう無理か……！ と思い、飛び出す準備をしていた。しかし

そこで闇の波動が止まった。

赤子の泣き声も。

黒鬼達は、影のままその形を崩してカードに変化した。

「遅くなってごめん！ やったよ!!」

「やったな！ 完全勝利だ！」

「おい、無理すんな。ボロボロだぞ！ 治療するから大人しくしてろ！」

そうして、全ての状況が終わりを告げる。メイは、闇の精霊を優しく抱き、闇の精霊は安らかに眠っている。レオリオはキルアの治療に入り、カルトとゴンは闇に侵食された動物を元に戻している。

しばらくすると、闇から元に戻った様々な動物達が集まってきて、一斉に声をあげ始めた。

それは、種類が違えど、息の揃った大合唱となり、周囲に響きわたる。まるで、我々を祝福しているかのようだ。

そして――

闇が晴れる

111、一坪の密林

まず現れたのは光だった。上空から暗闇を引き裂き、一筋の光が差す。光は次第に太さや数を増やし、辺りを照らし出す。

すると、先程までの地獄の様な景觀が、次第に煙をあげて溶け始め、中から健全な植物や土が現れ出した。良かった。このままじゃ流石に気色悪いからな。闇の精霊は少しむずがる様な仕草をしながら、姿を消していった。

すっかり闇が消え去った後の景觀は、密林にも関わらず、一つ一つの生命が輝き、神聖な雰囲気が漂う静謐なものであった。

素晴らしいシチュエーションだ。思わず弟子達も座り込み、呆然と景色を眺めていく。ずっとここに居たい。そう思わせる様な場所だ。

この場所が、完全な姿を取り戻した後、それまで合唱していた動物達が一点を見つめ、一斉にこうべを垂れ始める。……来たか。

何も無い空間が光り出す。次第にそれは人の形を取って顕現する。中から現れたのは――

白いドレスを羽織った美しい女性だった。

……驚いた。NPCではない。と、言う事は恐らく彼女はゲームマスター！そして……強い！なるほど、ゲームマスターなだけはある、という事か。ビスケなどは仕掛けたそうにウズウズしているが、まあ落ち着け。しかし、彼女は強いは強いが、それだけでは無いな。私には理解する。彼女が隠しているモノが。そしてそれは……。

そう考えていると、彼女は、動物達を中心に降り立って我々の方に歩いて近づいてきた。そうして、いかにもな口調で喋りはじめた。

「皆さん、初めまして。我が名はディアナ。この森の神、そして精霊達の母です。この度は見事、闇の精霊を宥め、森の平和を取り戻してくださいました。闇の精霊は赤子ゆえ、力の使い方が良く分かっておらず、私が目を離した隙に暴走してしまいました。しかし、今、無事に彼は眠りにつきました。本当にありがとうございます」

そう告げると、彼女は深々と頭を下げる。

「へへッ！ いーって事よ!! オレにとつちやこれぐらい朝飯前だぜ！」

レオリオが赤くなりながら答える。早いな！ もう惚れたか？

「何言ってるんだよ！ レオリオだけの力じゃねーだろ!!」

「節操のない……」

キルアが至極尤もなツツコミを入れ、カルトがため息をつきながら毒を吐く。君達割といいコンビだね？

「まあまあ、みんなの力が無かったらクリア出来なかったから。無事にみんな元に戻ったしね」

「ゴンくお前はいい奴だな〜!」

「うわっ! ちょっとレオリオ引っ付かないでよ!」

何かコントが始まったが、その台詞を聞いてディアナが反応する。

「……………! 貴方はゴン君と言うのですか?」

「うん、そうだけど……………」

「おお……………これはまさしく運命! 貴方にはジンからの伝言を預かっています。無事に達成したらしたら伝えるように、と」

「!! ホント!? どんな!?!」

「その前に、私からのお礼として、ここにいる皆さまには、この『山神の庭』へいつでもお越しいただけるようにしましょう。こちらへ……………」

そう言って彼女は歩き出す。これは、入口付近か。

「普段は幻によって閉ざしています。ですが、この一坪の密林こそが、この森への入口。さあ、あなた方への幻を解きます」

すると、その一画だけが切り取られたかの様に歪む。そして……

「No. 1 『一坪の密林』ゲッター!!!」

「やったな!! まだ誰もこのカード持ってないぜ!」

「待つて。まだ何かありそう」

興奮するゴン達を抑え、カルトが皆に注意を促す。ふむ。確かにリザルトはまだ終わっていないようだ。

「……………皆さまに問います。あなたがたは本当に数多くの動物達を救ってくださいました。それも、一度も諦めず。感謝いたします。そのお礼として、更に私が知る限りのこの島の情報を、一つだけお伝えしましょう。さて、何を聞きたいですか?」

「それは……ジンについても？」

「ええ。勿論」

「ゴン、オレ達はいいぜ？ 折角の情報だ。今聞いちまえよ」

「そうだぜ。その為に来たようなもんだからな」

「僕もそれでいい」

「……………」

ゴンは迷っているようだ。しかし、しばし考えた後、彼は顔をあげて答えた。

「……うん。やっぱいいや。みんなでクリアしたんだから、みんなが得になる情報を

貰おうよ」

「いいのか？ それで」

「うん。オレは伝言だけで充分だよ。後は自分で探すよ」

「そっか……ありがとな、ゴン。となると、何を聞く？」

「ならば、アレを聞いた方がいい」

「そうか……アレだな！」

「じゃあ、代表してキルアが聞いてよ。今回一番頑張ったしね」

何やら話がまとまったらしい。ゴンはジンの事を聞くかと思つたが、意外だったな。さて、何を聞くのやら。

「ゴホン！ あーじゃあ聞かぜ？ 『一坪の海岸線』のフラグを教えてください」



「それがある街は現在海賊の首領とその14人の仲間達によつて占拠されています。彼らは傍若無人に振る舞い、その街の住人を虐げています。住人はすっかり怯えきつており、1人2人でその場所へ向かつて何人も教えてくれません。返り討ちになると、より住人達が虐げられる為です。ですが、彼らと同じか、それ以上の人数で向かえば、或いは住人も海賊達を退治してくれるだろうと心を開き、彼らのアジトを教えてください」

す」

「なるほど……人数が鍵だったか！」

「これまた分かるわけねーな……。だが、分かって良かったぜ！ これでN.O. 2のカードもゲットできるな」

「でも、そんな人数どうやって揃える？」

彼らは、次の目標について議論をはじめ。そんな中、ディアナはゴンを手招きした。伝言を伝える為か。

「では、ゴン君こちらへ……」

そうしてゴンが誘導される。カナリ離れた場所へと行き、2人で話している。だが、申し訳ないことに私には聞こえてしまう。

「まず、ゴン君。ジンについてですが……ここにはいません。どこにいるかも分かりません」

「そっか……分かってはいたけど……」

「その代わり、ジンから貴方に伝言です。『よくやった。どうだった？ このイベントはよ。後少しだけ、頑張ってみな』……だそうです」

「……それだけ？」

「それだけです。……ただ、私から貴方に、伝えておきましょう。貴方の母親とジンは、確かにここで出会いました」

「!! 知ってるの!?! じゃあ、その……母親は?」

「私はあの方とは古い馴染みです。ですが、彼女もここにはいません。遠い場所に行ってしまった。ただ、間違いなく生きて、貴方達の事を案じているでしょう」

「うん、そっか……分かったよ。ありがとう、ディアナ」

「どういたしまして。では、これからの貴方達の活躍を期待していますよ」

……ジンとゴンの母親はこのG・Iで出会った? そんな話があの漫画であったか? いや、このイベントの描写は確か無かった。だからか。しかし、あの女……私にワザと聞かせてないか? そう思っていたら、彼女から話しかけてきた。

「もし、そこのお方。貴方にも別件で話があります。こちらにいらしてください」

「私か？ 何の用だ？」

「そう警戒なさらず。すぐに済みます。こちらへ」

そう言つてディアナはスタスタと歩き出した。ビスケやカルトが警戒しているが、大丈夫だと目配せしてついていった。

完全にゴン達が見えなくなる所まで歩いたら、大樹の一つに突然ドアが浮かび上がつて開き、中へ招待される。

中は木の内部の為、当然木目調の壁や家具で構成されていたが、それよりも何よりも、「非常に」散らかっていた。

今し方まで寝てた様なベッドの布団に床一面に広がる雑誌類、お菓子類、果てはテレビやゲームまで置いてある……何でこんなのがあんの？

「うわっ、きつたな！」

床の踏み場も無いような状況で思わず声が出た。だって、今ゴキブリいたぞ？ ラー

メンの汁こぼれてるし。

一方、言われたディアナは先程とは一変して、ダウンナーな雰囲気を全身から発散させていた。そして一言。

「は〜つつかれたわー。だる〜。あのキャラ肩凝るのよね〜」

なあ、女神キャラどこ行つた？

「おい、キャラ崩壊してるぞ」

「いいのよ。今更でしょ？ アンタにはアタシの正体バレてる筈よ、『救世主』」

「『救世主』じゃないがまあ…な。隠すならもつと上手くやればいいものを。ツノと尻尾が若干見え隠れしてたしな」

「フツ〜はバレないの！ アンタぐらいなモンよ」

そう言うと、彼女は擬態を解除した。うーむ。こんな人種は見た事ないな…。亜人種、という奴か？

「それはいいが、何の用だ？ わざわざゴンの話まで聞かせて」

「それはアタシが聞きたかつたのよ！ “救世主” が今更ココに何しに来たのサ？」

「ああ、ちよつと欲しいアイテムがあつてね。弟子の育成ついでに来てみたというわけだ」

「ふーん。アンタらも人並みな欲求があんの？ で、アタシたちに何かするつて訳じゃないのね？」

「いや、何をするも何も無いが。何か “救世主” 関係であつたか？」

「いけしゃあしゃあとよく言うわ！ アンタ達 “救世主” のせいでこんなトコにずっと閉じ込められたつーのに!! まあ、何も無いならいいわ。じゃ」

ディアナは私を部屋から追い出そうとするが、ちよつと待てや。

「いやいやいや、もつと説明しろ！ まるで何の事か分からんのだが？」

「ふん。言つた通りよ。アタシはあの子の母親とコチラに来てブイブイいわせてたんだけど、当時の “救世主” にとつ捕まっちゃつて封印食らつた事があつてね」

「……今、その雰囲気は感じないが？」

「まあ、ジンが発見してくれて、封印も解いてくれたからね。感謝はしてるわ。一応ね。イヴリス様はジンとはケンカばっかしてたけど、いつの間にかくつついちゃって。子供まで出来るとは思わなかったわ。あのコも大きくなったわね」

近所のオバちゃんか、お前は。

「ほう。そうか。で？ そのイヴリス様は？」

「あつちに帰っちゃった。まああの方は高貴な生まれだからね。仕方ないね」

「あつちって……まさか」

「アンタらが『暗黒大陸』って言ってるトコよ」

「！　そうか……。で、お前は？」

「アタシはまあ……行っても弱いから役に立たないし。従者契約解除されて、好きに生きろって言われたから、ここでのんびらーっと過ごす事にしたってワケ。ま、この生活も気に入っちゃいるからね。あそこと比べりゃ天国よ。今回みたいにならんと仕事すればOKだから楽だわー」

「ふーん、なるほどね。だから隠してたのか。しかし、最初によくコツチに来れたな。門番は？」

「ああ、ソレね。向こうでちよつと政變的なのがあつてね。追われちゃつて仕方なく。アタシは弱いから別に何ともなかつたけど、イヴリス様はかなり傷ついてね。偽装の為にすつごい弱体化しちゃつたし。だからアイツも通してくれたわ。で、最初の話に繋がるワケよ」

「……あの門番大丈夫か？ まあいいか。とりあえず私は何をする気も無いから心配するな。引き続き、ゲームマスター頑張ってくれ。しばらく誰も来ないと思うが」

「来なくても別にいいわよ。実際この10年誰も来なかつたし。つい最近「宝籤」ロトリーで当てる奴が出て笑っちゃつたわ」

「ま、貴重な話が聞けて良かった。達者でな」

「ほーい。アンタもね。あ、でもそんなアンタに一つだけ忠告しとくわ」

「ん？ 何だ？」

「アンタがこつちにいるつて事は、この樂園に危機が迫っている証。歴代の「救世主」もそうだった。逆に言えば、アンタがここにいるからそうなるかもしれないケドね。アンタに大切な人がいるなら精々気を付ける事ね」

「それは……」

「ま、アタシの生活を脅かさないう様にしてくれば文句無いわ。頑張る事ね」

◆

ディアナと別れ、ビスケヤカルトに詰め寄られたが、「聖光氣」について質問されていたと答えた。別に間違っではないからな。ただ：気にはなる。ディアナの最後の忠告の件だ。

楽園の危機？ どういう事だ？ キメラアントじゃないのか？ 私がここにいますからそうなる？ ……分からない。だが、もしそうだったとして、本当に厄災級の事態が発生したら。私はどうすべきだろうか。

…いや、少なくとも、私がいる限りは全て潰してやる。それは世界の為ではない。私の為だ。誰が来ようと、何が起きようと。

「カーム、あの女に何言われたか分かんないけど、真に受けない方がいいわよ。アイツは

嘘つきだからね」

「アイツ……胡散臭かった。僕、アイツ嫌い」

「ほう。どうしてそう思った？」

「ん？ 長年嘘つきやってりや分かるわよ。アイツは何か隠してるってぐらいはね」

「僕は勘かな。でも、ウチは癖ある人が多いから間違つてないと思う」

「それに、貴方もね。カーム。何があつたか知らないけど、嘘をつくならもう少し努力が必要ね」

参つたな……お見通し、か。女性の勘は侮れんな。まあいい。

「ご名答。まあ今は言えない。だが、すぐに話すよ。他ならぬ君達にはね」

「ふふ。それならいいわ。さて、サツサとクリアしましたよ？ ガキンチヨ、ちよつと急ぎなさいよ」

「ババアは黙つてて。カーム、僕からの話はクリア後に聞いてくれるかな？」

ほう…カルトはもうクリアする気か。その意気や良し。

「分かった。そうだな。では、クリアの後、しっかり話そう。お互いにな」

112、ソウフラビへ

「おい！ ゲン、あのガキども、『一坪の密林』ゲットしやがったぞ！」

「マジか。だとしたら現在ゲイン待ちも含めて82種、か。結構迫ってきたな。どうする？ ゲン、そろそろ襲うか？」

「……オレ達はN0. 17『大天使の息吹』とN0. 81『ブループラネット』を独占している。N0. 73『闇のヒスイ』もだ。しかもそれらを【堅牢^{ブリク}】で守っている。奴等がクリアを目指すならオレ達との接触は必須だ。……寧ろ奴等にこのままレアカード集めさせた方が良さそうだな。どうやらSSランクを優先しているようだから、このままN0. 2『一坪の海岸線』を取ってくれるならば、それにこした事は無い。つまり、もう少しだけ『見』だ」

「……そうだな。あのジジイで痛い目みたしな。それ以外の雑魚は大体潰せたんだがな。慎重にいこう」

「その通り。ここまで来たんだ。後は最後の詰めだ。そろそろ考えとくか。選ぶカードと報酬の使い道……！」



「ねえ、カーム。『一坪の海岸線』を【道標】ガイドポストで調べただけど、ソウフラビってトコにあるらしいんだよね。ただ、問題があつて、もう極端にプレイヤーが少ないんだよ。何かいい方法ないかな？」

今、我々は拠点にいる。とりあえず激闘だった為、ちよつとは休養しようという事もあり、私が案内した。弟子達はその快適さに仰天していた。

カルトはビスケを睨んでいたが、ビスケは素知らぬ顔で顔を逸らして口笛を吹いていた。

さて、それは置いて。今、ゴンから相談を受けている『一坪の海岸線』だが、ネッ

クになるのは数だ。15人集めなければならぬというのはただでさえ相当ハードルが高い。しかも現在、例のバッテリー関係で減っている状況だ。

「君達もトレードした相手ぐらいいたのだろう？ その辺はどうだ？」

「それが……ここ最近その人達もいなくなっちゃって……」

……なるほど。少ないが攻略していたプレイヤーもいた筈。これは……恐らく『爆弾魔』か。状況が煮詰まってきた、強硬手段も使い出したかな？ そう推察をつけていると

「プレイヤーキラー、だな」

「ああ。間違いない」

「ちよつと前まで噂になっていた『爆弾魔』だと思う」

ほう。そつちから出るとは。他から聞いたかな？

「しかし、全てがいなくなったわけじゃないだろう。ゲンスルー組、とかな」

「それこそありえねー。多分アイツらがPKだぜ？　ここ最近特にカードの集まり方が異常だしな。いつやられるか分かったもんじゃない奴とは組めねーな」

「二回会った時もヤな感じしたんだよね。隙あらば能力をくつつつけてきそうな気配があつたよ」

「それこそ、『爆弾魔』だと思う。決め付ける事は出来ないけど」

危機管理も出来ている…と。これなら不意打ちで死ぬ事もないだろう。さて、諦めた人員を数合わせとして集める手も塞がれてるか。これは私のせいでもあるな。少し手助けしよう。

「あまり戦力は期待しないでもらいたいが、前回と同じ様に私とビスケが入ろう。ついでに何人かアテはある。それで揃えてみよう」



「なあ……会長だよな？」

「アシモフじゃ」

「いや、会長でしょ？」

「だから会長じゃないってゆうとるじゃろーに！」

「カーム……いきなり連れてこられた訳だが、私にも仕事があるのだが？」

「旦那、そうだぜ！ 仕事もそうだけど、いくらボーナスあるからって、この前みたいな危険なのは勘弁だぜ！」

「オイオイ、アイツらチビなのに中々なモンだな。師匠はやっぱアイツか？ それともビスケット師範代か？ こりやウチの弟子の連中とヘタすりやどっこいかもな」

「モラウさん、分析は正確に。場合によっては上回りますよ」

「カーム氏……この集まりには一体どういう意図があるのかね？ 協会のトップらしき方もいる様な気がするのだが」

この集まりに参加した髭面の男、ツエズゲラが質問してくる。まあ気になるよね。メ

ンツおかしいもん。私の伝手ですぐ動ける人ってこんなもんだよね。しかし全員レベルヤバイな。せめて私は自重するようにしよう。

「まあ気になりますよね。でも概要は来る前に話した通りです。改めて言いますと、ちよつとあるイベントに人数が必要でね。余り人員が居なかつたもので、方々から少しご協力をお願いしてるのですよ。貴方もご協力いただいで助かりました。ああ、クラピカとリベロ、君らの仕事は実はもう父に了解は取り付けてあるから心配しなくていいぞ」

今現在、拠点には様々な場所から引つ張つてきた人材が集結していた。まず、私とビスケ、ゴン達、会長組、仕事で中だつたクラピカとリベロ、そしてツエズゲラ組。彼らは成功報酬として1人1億を約束している。会長？ 強い奴がいるつて言つたら2つ返事でOKしてくれたよ。クラピカとリベロの報酬はジョンへの迷惑料だ。ボーナスで還元してくれるらしい。

当然、支払いは弟子達だが。レオリオとキルアの値引き交渉が面白かつた。

これで15人だ。

「さて、皆さん。お集まりいただきありがとうございます。概要は聞いていると思うが、知らない人もいるから説明しよう。実はこのゴンのチームがもうクリア間近なのだが、一つ問題があつてね。そこで皆さんにお願いしたい事があるんだ。さあ、ゴン。後は君が説明するんだ」

「……で?! ……分かった。え〜つと、まず、オレ達の為に集まってくれてありがとう。N.O.2『一坪の海岸線』つてカードをゲットしたいんだけど、そのイベント発生のフラグが15人以上で該当の街に「同行」^{アカンパニー}する事って分かったんだ。だから、これだけの人が集まってもらったんだ。どんなイベントかは分からないけど、かなり高難度なミツシヨンだと思う。だけど、みんなクリアの為に力を貸して欲しい! ……デス」

しん……と空気が静まり返る。ふむ。聞いてみるか。

「何か質問がある人は?」

そう問うと、複数の腕が上がる。

「はい、クラピカ」

「ゴン、確認だが…我々はそのイベントとやらを終わらせたなら任務終了か？」

「うん。そう」

「拘束期間は？」

「前のイベントを考えると2〜3日以内ぐらいかな？ そんなに長くはかからないかも」

「内容は？」

「全く分かんない。ただ、かなり難しいかも……」

「……まあいい。これも修行か」

「クラピカ。彼らがクリアしたら君にも報酬以外で恩恵がある可能性がある。修行でもあるし、やる価値はあると私から言っておこう」

「わかった。質問は以上だ」

「次は、えつと…ツエズゲラ、さん？」

「ツエズゲラでいい。我々は報酬があるからそこは納得している。少し別な話になるが、君達は…：No. 1のカードをどうやって手に入れた？ ああ、我々はもうクリアは放棄しているからこれは興味本位だが」

「え〜つと、それはかくかくしかじかで〜」

「!! なるほど……! そういう事か……。よく見つけたな?」

「ビスケが偶然発見してくれたんだ。流石にオレ達だけじゃ無理だったよ」

「それにしても、だ。このゲームを楽しまねば出来ん事だろうし、それを成す實力もあつたという事だな。質問は以上だ」

「ありがとう。じゃあ……ネテロ会長」

「アシモフじゃ! で? 強い奴はいそうか?」

「それは……間違いなく」

「ほっほっ! 腕が鳴るわい。楽しみじやのう」

「またジイさんの悪い癖が始まったぜ。なあノヴ」

「何、いつもの事です。それに、これが恐らく最後でしょう。仕事の時間ですよ」

「こら! 老人の楽しみに水を差すでない。全く……質問は以上じゃ」

「他は無いな。では、そろそろ出発しよう。ゴン」

「うん。じゃあみんなこっちに来て……」
【同行^{アカンバン}】オン! ソウフラビへ!」

ドビュツ!!!

そして、この過剰戦力とも言える楽しいパーティーは、一斉にソウフラビへと飛び立った。



キイイイン…ドン！ シユウウウウ…

…着いたか。便利なものだな。今回は人数も人数なので、ペット達はお留守番だ。ビスケなどは連れて行きたかった様だが、泣く泣く置いてきた。

さて、15人で来たぞ。まずは情報提供者を探す所だな。手分けして調べるか。

まあ、前回と同じですぐにでも見つかるところ。



そこは、町外れのボロい酒場だった。あれから情報提供者を探し、有力な人物を見つけて案内されたのがここだ。ガラの悪い輩がたむろして駄弁っている。皆一様に黒いパーティー帽子の様なものを被り、同じ格好をしている。

中に入ったら態度のデカそうな太った男がこちらに声をかける。

「なんだ？ てめえら。今日はオレ達の貸し切りだぜ」

「今日もだろ？ へへへへ」

「おい、カームよい。コイツら全く楽しめそうにないぞ？ 本当に大丈夫か？」

「まあ序盤ですから。課題をクリアしていけば出てきますって」

「オイ!! 何言つてんだ! てめエらふぎけんじゃねーぞ!!」

あまりな会長の言いぶりに、太った男がキレ出す。まあ会長の言いたいことも分からんでもないけどね。

「ホラ、怒った。しばらく黙つてて貰えます?」

「しゃーないのう。じゃ、はよ進めてくれ」

「と、言うわけで、君達はさっさとここから出て行くか、ボスの元に案内してくれないか?」

「てめエら……舐めてんのか!? まあいい。今すぐペシヤンコにしてやりてエが、全ての決定権は船長^{ボス}にある。腕^{ボス}ずくでやってみろよ」

そう言うと、太った男は酒瓶を周りに振り撒き、火をつける。ああ、何となく思い出した。相撲か。

「オレをこの『土俵』から外に出せたら、オレ達の船長ボスに会わせてやる。一度に何人掛かってきてもいいぜ。炎の俵を越えたら試合開始だ」

さて、どうするかな。ここなら私でもいいか。

「私が「僕がやるよ」やろう…って、カルトか。やるの？」
「うん。ちよつと腕慣らしに丁度いい。任せて」

そう言うと、スタスタと土俵側迄歩いて行った。

「ギャハハハハ!! お嬢ちゃんがやんのか?! ボポボ、舐められてんぞ!」

周りは爆笑しているが、ボポボと言われた男は青筋を立てている。

「オイコラ、チビガキ。いくらガキでも容赦しねエぞ? ママのおっぱいでもしやぶつてたらどうだ?」

「ご心配なく。貴方程度なら僕だけで充分すぎる」

「てめエ……ブツ殺す」

ボポボはオーラを強める。だが、彼女の言う通りだ。アレなら一人で充分だな。カルトは、自宅の庭に入る様な気軽さで、炎の俵を乗り越え、目の前に立つ。

ボポボはその巨体を生かし、カルトに向かって張り手を繰り出した。

ドンツ!!

次の瞬間には、ボポボは顔面から地面に突っ込んでいた。そして……。

「ぎゃああああ!!」

落ちた場所は炎の俵。ボポボの顔面が焼かれる。逃れたいがカルトがボポボの小指

を極めており、1ミリも動けない状態になっている。

何が起きたかというと、ボポボが張り手してきた時に、カルトは最小の動きでそれを躲し、その小指を掴んで力を利用してしながら回転させて地面に叩きつけた、というわけだ。中々咄嗟にできる事じゃ無い。

コレは合気だな。最初から持ってた技能かな？ いずれにせよ、素晴らしい。結果、彼は顔面を焼かれ続けている。

「ボポボ!!」

「入んな!!」

海賊共が助けようと踏み出しかけるが、キルアが止める。オーラとその雰囲気で彼らは踏み出せない。

「まだ勝負はついてない。コイツは俵から出てない。よって、出るまでは負けじゃない、だろ？ カルト、その辺にしとけ」

「はーん」

「そうしてカルトは小指を離す。ボポボは必死に転がり、顔の火を消してもらった。君達兄妹いいコンビだね？　そしてカルト……うん。まあムカついたんだろうね。仕方ないね。ただ、獲物を齧る悪い癖は改めた方がいいかもな。」

「そうこうしていると、ボポボの火が消えて、走りながらこちらに向かって来た。あーあキレちゃった。カルトも鉄扇を出して迎撃体制を整えてる。目が細まっているが、ほどほどにしとけよ？」

「このガキがあああ!!」

ドゴツ!!!

「横からボポボは仲間のリーダー格っぽい海賊に蹴り飛ばされ、カウンターに激突する。今日の彼は踏んだり蹴ったりだな。」

「てめエが約束した事だろうが。キレてんじやねーよ」

「……ああ、悪かったよ」

流石にリーダーっぽい奴の言う事は聞くらしい。我々は彼に案内され、別の場所へと向かう。そうそう、そうだった。相撲で思い出したけど、これってスポーツ対決だったよね。

道中、ポポボはカルトに絡んでいたが、軽くあしらわれていた。どうでもいいけど、アイツ、カルトとかビスケを見る目付きがいやらしい。確か、死刑囚だったか？ さもあらなんだな。彼女らには逆立ちしても勝てないだろうが、度が過ぎる時はお仕置きしよう。

そして、灯台みたいな場所に連れてこられた。灯台を改造した要塞らしい。密航船をチエックしてるとの事。どうでもいいが。

中に入り、しばらく進むと、体育館の様な場所に案内された。そして、中で筋トレをしていた、スポーツジムのトレーナーの様な格好をしている短髪の筋肉質な男の元へ辿りついた。

「誰だ？ そいつら」

「客だ。オレ達を追い出したいそうだけ」

「ホウ。じゃあ早速本題に入るが、勝負しよう。互いに15人ずつ出して戦う。1人1勝、先に8勝した方の勝ちだ。勝負のやり方はオレ達が決める。それでお前達が勝てばこの島を出ていこう。どうだ？」

「うん。いいよ。それでいこう」

ゴンが了解の意を伝える。他に特に質問はないようだ。しかし……うーむ。素晴らしい。見た感じ、明らかに一流。いや、超一流に手を伸ばしつつある程の力量だ。会長もウズウズしてる。落ち着け。

ただ、この話だと、彼に行き着く迄に幾つか雑魚バトルがあるな。確実に取れるだろうから、人選が大事だ。さて、誰がどう当たるかね。

113、挑戦者

「よかろう。勝負パトの勝負形式テはスポーツ！ ここにいるメンバーがそれぞれ得意なスポーツでお前達に勝負を挑む」

彼はそう告げた。

「よし！ オレと闘うぞ、メスガキ！ 相撲で勝負だ！！ こっち来い!!!」

「ヤダ」

「ああ!?!」

「貴方は準備運動で充分。他当たって」

「……………」

ポポポは侮辱と捉えてブルブル怒りに震えている。そこに他の男が来て、肩に手を置

く。

「まあまあ。少し頭冷やせ。オレが一番手だ。オレの勝負形式はボクシング。さあ、誰がやるんだ？」

グローブを付けた男がリングに上がって言う。ここは誰が行ってもいいが、弟子たちは行かない様に目配せする。彼らは後半大事な対決があるからな。出来るだけ参加させたい。逆に、他のメンバーにも、レイザーが来るまでは雑魚戦だから、先にやって欲しいと小声で伝えた。恐らくどうせ全員やる事になるから、安全にやりたいなら雑魚戦がいい、と。さて、誰も行かないなら私が行こうかな。

「ふむ……ボクシングね。偶には運動しましょうか」

そう言っ出て来たのはノヴさんだ。なるほど。もしかしてリングのアレを見破ったかな？

彼はグローブを付けて、リングに上がる。しかし、スーツとメガネのままやるのか。スマートというか何というか。人の事言えないが。

試合は一方的に進む。というか、ノヴさん、強すぎ。ワザと距離を詰めたかと思えば、アウトボクシングして、敵を翻弄している。まあ、レベル差がね……。で、全てのパンチにカウンターを入れてる。敵の攻撃は掠りもしない。

そして……離れた瞬間を狙って、敵が拳を瞬間移動させる。これが敵の秘策！ 神字で補助される事によって可能になる、必殺の顎を狙ったショートアッパーだ。

うん。避けた。で、敵が驚いてる所に距離を詰めて、同じパンチを一閃。これで1勝と。

「神字を書く技能は賞賛すべき所ですが、肝心の術者がイマイチですね。また、読める人間にとっては何が来るかバレバレです。ま、いい運動になりましたよ」

……こりやひでえ。でも、まあいいか。次いこう。

「……じゃあ次はオレがやるか。オレのテーマはリフティングだ」

サッカーボールを持った男が告げる。リフティング、ね。

「ハイハイ！ オレオレ！！ サッカーなら任してくれよ！」

うん。そうだよ。得意分野だね。妨害アリらしいけど彼にとつてはいつもやつてる事だよ。彼も敵のレベルを見破つてウキウキしてる。良かったね。ボーナス確定だよ。

「レディ…ゴ…!!!」

バゴン!!!

いきなり凄腕勢いでボールを相手に向かつて蹴るリベロ。まあ確かに味方に当てちゃダメって言うてたけど、相手に蹴つちやダメって言われてないからね。向こうもその気だったようだけど、威力が段違いで相手のボール弾き飛ばしたし。んで、跳ね返つたボールを頭で受けて、そのままリフティングしてる。熟練度が違うな。これで2勝。

その後、ツエズゲラ組の人たちの奮闘やモラウさんが圧勝し、遂に6勝までいった。モラウさんとか、あの基本性能で能力もヤバいぐらい汎用性あるから強すぎだよな。ノ

ヴさんの方もヤバいけど。流石会長の付き人やるだけあるわ。

さて……後2勝だが。中々レイザーが出てこない。その間、我々をつぶさに観察している。なるほど。ギリギリまで見ている感じかな。彼も手下達に「死ぬ気でやれ」って言ってるし。

そして、結局私がやる前にここまで来ちゃった。まあいいか。後1勝でレイザーだな。

と思ったら、ボポボがキレた。

「納得いかねエ。こんなクソゲームに付き合うのは辞めだ。オレは降りるぞ。やってられっかー!」

「おい。ボポボ」

いや、君、次だよ? 確かに今までの人達ボコボコにされたけどさあ。そこはよろうよ。次は絶対私がやろうと思ってたのに。

「そいつは契約違反だな。ムシヨに逆戻りだぜ、ボポボ」

「知った事かよ。オレに乗る奴はいねーか!? あんな奴みんなでかかれば何とかなるだ

ろ。後は船でも何でも使つてこの島を脱出すりゃいいんだ!!」

彼はレーザーを指差しながら周りに問いかける。いいのか？ 明確な反逆行為だぞ？ それは。あ、念弾。その強さは……。

グシャツ!!

ドオオン

レーザーから念弾を受けた彼の頭が弾け、そのまま倒れる。まああの威力食らったら普通死ぬよね。私は死なないけど。

しかし：躊躇なくいったな。あまりにもアツサリ彼はお亡くなりになった。だが、私の中ではそこまで衝撃は無い。彼、極悪人だったし。オーラが物語っていたからな。大体さっきの反逆も契約違反も、本来なら絶対にやってはいけない事だ。雇用側からすれば示しがつかなくなるからな。

私は理不尽な死は許容出来ないが、理不尽ではない死は受け入れられる事が分かっ

た。まあ自業自得という奴だろう。私のトラウマも順調に治ってきている証かもしれない。みんなに感謝だな。

レイザーが他の手下に威圧する。ルールを破つたら厳罰だそうだ。それを聞いてゴンが怒り出すが、レイザーから死んだポポポは死刑囚である事が告げられた。罪状を聞けば納得の所業だ。ゴンはそれを聞いて、彼がゲームマスターだと気付き、ジンを知ってるかと問いたです。

すると、レイザーから強烈なオーラが噴き出した。

「お前が来たら手加減するな…と言われてるぜ。お前の親父にな」

うーん。これは驚いた。凄まじい顕在オーラ!! 数値にすると5〜6千は出ている。しかもまだ本気じゃない。最上級の能力者じゃないか。恐らく潜在オーラは15万以上は確定だろう。ビツクリだ。

……これが全力の攻撃をしてきたらどうなるだろう。凄く見てみたい。

そうだ、今のうちに言つところ。

「そう言えば、死んだ彼の勝敗はどうなる?」

「ああ、君達の勝ちでいい。誰が不戦勝でも構わないさ」

「ふむ。じゃあツエズゲラさんで」

「……いいのか?」

いや、言い訳をさせて欲しい。そもそも会長がやる気満々な時点で難易度調整をミスってるのだ。超^{スーパー}ビスケもいるし。もうこの際いいんじゃないかな?

いや、自重はする。するが、ちよつとだけ。そう、ほんのちよつとだけ体験してみたくなつたのだ。あのレイザーを。

弟子達の本当の試練はノーヒントの『爆^ボ弾^マ魔』でいいだろう。それに彼らは『一坪の

密林』もクリアしてるし。今回も直接対決は任せよう。それでいいじゃないか。

彼から次のテーマの提案がなされる。8対8のドッジボールだ。ルール説明を受ける。このゲームはクツション制を採用しているとの事。リフティングと同じく、より攻撃に適したルールとなっている。

楽しみだ。

実に楽しみだ。



「なんじや、結局お主もやるんかい。さては我慢できなくなりおったな？」

「アシモフさん。確かにそれは否定しませんが、あくまで弟子の成長を近くで見たいという親心であつてね？ 私は流石に自重しますよ？ ただ、ちよこーつとだけやつてみたいなあつていう、ね？」

「いや、それは苦しい言い訳だわさ」

「いやいや、彼らほぼ自力で前のイベントクリアしたしね？ ちよつとくらいいいよね？ 大体ビスケも似たようなもんじやないのか？」

「アタシだつて自重するわよ！ ただ、近くで見えないと心配だからね！」

「ハイハイ分かった分かった。じゃが、お主らのオーラはそう言つとらんぞ？ ま、いい傾向じやな。楽しめる時は楽しんでけ。それが人生の秘訣よ」

「……まあおつしやる通りですね。最近楽しみが増えました」

「ええ事じやのう。しかし、ドッジボールか。球遊びは得意な方じやが、盛り上がるかのう」

「相手の得意なルールっぽいですからその辺は大丈夫だと思えますよ？ それに彼らの修行でもあるのですから、ちよつとは自重してくださいね」

「えー。つまらんのう……」

「私達の弟子の成長を見るのも楽しい筈ですから。不満でしたら私が後で相手しますよ」

「ふむ……まあそれはそれでええか。約束は守れよ」



……ここに来た15人は、恐ろしい事にほぼ全員が凄く使い手の集まりだ。何をどうやったか分からないが、あの子供達ですらそうだ。

だが、あのジイさんと、しゃべっている男、そしてそばにいる女は別格だ。レベルが周りの者と一回り二回り、いや、恐らく桁が違う。オレとタイマンで勝てる程のレベルと見た。確かに彼らにとっては正しく遊戯だろうな。化け物と言われても違和感が無い。さつきから冷や汗が止まらない。バレないように振る舞ってはいるが。

このオレがまさか挑戦者側に立つとは、世の中分らないものだ。

そして、ゴン。遂に来たか。長い事待った。ジンは必ず来ると言った。そして、ジン

の言った通りに来た。

凄まじい仲間を連れて。

ジンに捕まって、この島でゲームマスターになるまで、様々な事があつた。だが、本的にはジンの言う事を守り、律儀にここで鍛えながら罪を償っている。もう10年経つ。ゲームマスターの任も服役労働だと思えばポジティブとは言わないまでもこなしでいける。

そして、遂にその時が来たというわけだ。

オレは死刑囚だ。他の奴等と同じく。そしてオレもポポボと同じくらい人を殺めて
いる。その精算はいつかやらねばならない。それが今だ。

ハンターに雇われた死刑囚の生殺与奪はハンターに握られている。だが、オレはジン

に任された。オレはジンに確かに認めて貰えたのだ。

これほど喜ばしい事があるうか。クソみたいなオレの人生は、あの言葉で少し報われた。ジンは覚えていないかもしれないがな。

だが、それでもいい。

誰かの役に立てる。オレはその為に生きてきたときえ思える。

そして、死ぬかもしれない。しかしそれもまたオレの役目だ。

ジンの息子が来た。オレは全力を尽くそう。ジン、喜べ。お前の息子もまた怪物だ。オーラを見れば分かる。既に子供が発する様なオーラではない。そして更に化け物の様な仲間を多数連れて来た。いいハンターは仲間にも恵まれる。お前と同じだな。

さあ、始めよう。ありったけをぶつける。

それが今まで生かされてきた、オレの生きる意味だからな。

114、カキン流奥義

最初は7インーアウトから始まるため、ビスケと高速ジャンケンをして、私が内野に残った。ビスケはズルいわさ！ とプリプリ怒っていたが、我慢して欲しい。後でスィーツでもご馳走すると言ったら落ち着いたが、カルトに睨まれた。わかったよ。2つね。

さて、試合はジャンプボールから始まる。こちら側はキルアが行く。向こうは何とレイザーだ。早くも取りに来たか？ だが、キルアも簡単に競り負けるほど弱くはないぞ。

そう思っていたが、いざジャンプボールをした瞬間、2人同時に飛び上がり、スパイクの姿勢でボールを挟む。だが、総合的なパワーによって、キルアは吹っ飛ばされ、床に叩きつけられる。次の瞬間、キルアに向かって凄まじいスピードのボールが飛んでく

る。

「キルア!!!」

「!?」

ドンツ!

シュウウウウウ……

キルアはギリギリの所でボールを回避した。「電光石火」か。やるな。だが、向こうも流石に序盤からこれとは恐れいった。しかもアレは彼の念獣が投げたもの。まだまだ威力はこんなもんじゃないだろう。

「ちよっ! いきなりずりぞー!!」

「ふむ。避けたか。残念だ。当てるつもりだったんだがな」

涼しい顔でレイザーが答える。なるほどな。我々の参加を見てなりふり構わずに来たか。いいね。それでこそやりがいがある。

「おい……なんちゅー威力だよ。これ、本体が投げたらヤバいんじゃないか？」

「そうだな、レオリオ。間違いなくヤバい。だが、君達はそれで死ぬようなヤワな鍛え方はしていない。私をガツカリさせるなよ？」

「……しようがねえな。やるしかないか」

《堅》

ズズ…

弟子達はレイザーの球に備えて戦闘体勢をとる。非常になめらかだ。美しくすらある。そして、その顕在量は約3000はある。これは銃弾を浴びても防げるレベルでもあり、上位ハンターと遜色がない。

レイザーがボールに念を集める。これもまた、凄まじいオーラの集中がなされる。それが当たれば弟子達もただではすまない程のものだ。だが、防げる。後はどう対処するかだ。

レイザーが振りかぶる。遠い。だが、恐らくその距離は大して問題にならない。

ゴオツ！

凄まじい球速！ 狙いは……ゴンか！

「!!」

《凝》!!

ドガン!!

まるで大砲の様な音を立ててゴンが弾き飛ばされた。驚くべき事に、彼は捕ろうとした。だが、流石に威力がオーバーし、弾かれた、という顛末だ。その集中力、精神力は見事だ。足にもオーラを割いたおかげで、ダメージは多少あるが、惜しかった。1秒はキープしたからな。ボールは弾かれて天井に激しくバウンド。そのままの勢いで天井に少しめり込み、落ちてこなくなった。

「ピピーツー！ ゴン選手、アウト！！ ボールの落下予想地点は……ゴンチームの内野からリスタート！」

「ほお。コレを耐えるか。だが、キャッチまでは無理なようだな」

「おい、ゴン大丈夫か!？」

「……うん。ヘーキ」

「なわけねーだろ！」

ゴンの額からダラダラと出血していたが、すぐに血も止まった。

「念の為にオレも見とくぜ」

「大丈夫。指も動く。次は捕る」

「……まあいいけどよ。無理はすんなよ?」

「ふむ。では、バックの権利は君が使うといい。残り3人になったら、かな」

「うん! ありがとうね」

さて、こちらのボールになったか。では、攻撃ターンだな。さつきから会長がやりたそうにウズウズしてる。……しょうがないなあ。

「はい。どうぞ」

「分かってくれたか。無視されるかと思っただぞ。じゃあお主、ボール支えてくれんか?」
「ハイハイ。分かりましたよ」

会長の前にオーラで作った台を設置する。ボールが丁度乗るように、ゴルフのティーカップの形に加工して。

「……相変わらず器用なやつだな。まあええ。行くぞい」

会長がオーラを練り始める。おいおい。この人ガチだな。……レイザー、捕れるか？



ジイさんから凄まじい量のオーラを感じる。これ程とはな。また、あのオーラを自由自在に操る男もやはり常識外だ。

さて、どうする？

ジイさんがゆるりと構える。そして、ゆっくりとボールに向かって正拳突きをしていく。なんだ？ 試しか？

……いや、あのオーラは「試し」などではない！ 来る！！

ドゴオン!!!

まるで大砲の様な音を発して、球が発射された。これは！

ドギヤツ!!

レシーブが無事に成功する。しかし、恐ろしい威力！ このジジイ、許さん。

「マジか。なんちゅーレベルだ、アイツ！」

「ほーう。こりやいいのう！ 素晴らしい使い手じゃ！」

「喋ってる暇ない、次来る！」

ボールに向かってジャンプする。ご名答。喰らえ。

ゴオツ!!

「ひよっ。ワシ?」

その通り。必殺のスパイクだ。さあ、ジジイ。お前はどうか対処する?

ジジイが動かない。当たるぞ? いいのか?

インパクトの刹那、ジジイが妙な動きをした。具体的には祈りの所作だ。0.1以下の秒数で何故それが出来たのかは分からない。だが、確かにやっていた。夢ではない。不思議な感覚だ。まるで、時が圧縮されたかの様な……

【百式観音 参乃掌】!!

パン!!

気付いたら、ジジイの背後から巨大な二つの手が伸びて、合掌の形を取っていた。そして……

パラパラ……

「ありや、壊してしもうた。力加減ミスったのう……」

バカな……あのボールを破壊するとは、どれほどの威力!! チツ。厄介な。どうしてくれようか。

「あくもうええわ。後は若いモンに譲るぞ」

「!?」

対処の仕方を考えていたら、ジイさんは自ら外野に向かっていた。

「なっ……!」

「いいんですか？ アウトにはなつてませんか？」

「いや、アウトみたいなものじゃ。ワシもまだまだよな。お主ならどう捕る？」

「うーん、自分に厳しいですね。さっきのパンチは消力が完璧に出来てましたけどね。じゃあ後で私のやり方は見せますよ」

……クソジジイめ。遊びやがって。だが、ラッキーでもある。内野には後厄介なのが1人だけ。これなら勝ちの目も出て来た。まずは1人ずつ、確実に潰してやる。

ボールが外野の女に渡る。

「あんまり投げるのは得意じゃないんだけど！」

ギユオツ！

「ギシエー！」

何が得意じゃないだ。かなりの威力の球を投げる。リバウンドしたボールを長身のレオリオという男が拾い、再びもう一匹の悪魔を仕留める。これも中々な威力！慣れたるな。さては放出系だな？ まあいい。さて、こちら側の準備は整った。再び、レオリオが投げる。オレ以外を先に仕留める気だな？ そうはしません。

2、6、7番、合体!!

バシイ！

「なっ！ 審判、アレ、アリかよ!!」

「アリです」

「じゃあ分裂もアリなのか？」

「規定の人数を超えなければアリです」

向こうで審判に何人が抗議している。しかし、それはアリだ。そちらでもやっていい事だしな。出来るかはともかく。……いや、あの帽子の奴。アイツはやりかねないな。だが、そんな事はどうでもいい。漸く準備が整った所だ。

さて、始めるか。覚悟しろ。確実に、1人ずつ、だ。



ギユオツ!!

「なっ！ パス!？」

「なんちゅー高速パス!!」

外野の全ての面にいる悪魔が、パス回しを高速で行う。縦横無尽に駆け回るボールの軌道。だが、念獣が投げるボールはオレのよりも威力は相当落ちる。このレベルの奴等では普通に止められかねない。大体は無理なんだが、コイツらは異常だ。

よって、このパス回しにオレも参加する。そうすることで、先程の弱点が一部解消される。

ほら、そこ。

「レオリオ!」

「くっ!!」

ドギヤツ!!

背面からのオレのボールだ。だが、奴も正面に向き直り、レシーブをしようとしている

た。残念ながらボールはこちら側に跳ね返ってきたがな。

しかし、分析して真似をしようと思う事がやはり異常だ。

「ピピーツ！ レオリオ選手、アウト!!」

「クソっ！ やっぱ無理だったか！」

「練習無しでやろうとするなんて無茶がすぎるぞ？ レオリオ。その辺は前から変わらないな。折れてるんじゃないか？」

「ケツ。クラピカ、オメーに言われなくてもわかってらあ。確かにちよつと無理だったぜ。だが、骨の一本ぐれーならすぐ治せる」

……奴はヒーラーだったのか。除念師程では無いが、稀少な能力者！ 先に潰せて良かった。本当はリタイヤさせたかったが。

さて、続きだ！

思いつき振りかぶり、投げる。今度は変化球だ！

端のキルアが避ける事を選択する。だが、そのまま直角にシュート！

「……ッ！」

「くっ!!」

一直線になってた複数人のうち、和服を着た女の子はジャンプして躲したが、衣服の一部に掠った。そして、最後の金髪も上体を逸らして躲すが、そのボールの先には悪魔が控えている。

高速の切り返して金髪の男？ にボールが迫る。

「クラピカ!!」

「……ッ!!」

【チエーン
ジェイル縛る中指の鎖】!!

ジャラツ!! ギチギチギチ…

ほう。鎖を操る能力! アレでボールを縛ったか。だが、手のダメージは隠せない。今後捕球もままならんだろう……ん? オーラが増大したぞ?

【癒す親指の鎖】
ホーリリーチエーン

なっ……! コイツも回復持ちか! ……中々やるじゃないか。しかし1人は頂いたぞ。

「ピピーツ! カルト選手! アウトです!!」

「……衣服も体の一部って事……不覚」

「バック!!!」

ゴンがバックを宣言する。残り3人になったからか。これで奴らはバックを使えない。数字的にはこちら的大幅な有利だ。

だが、全く安心出来ない。あの帽子の奴。アイツを何とかしなければならぬから。さて、ボールは向こう持ち。どう来るか。



「なあ……ツエズゲラ、何だあの戦い」

「……………オレがいなくて良かった。あの戦いでは足を引つ張りそうだ。悔しいがな。修行不足を実感したよ。少なくとも、オレ達だけじゃこのイベントは無理だったな」

「ああ。しかし、高レベルの戦いを見せてくれるチャンスでもあるな」

「その通り。我々の仕事は終わった。後はしっかり見させてもらおう。そしてまた一から鍛え直さねばな。ククク…基礎修行など何年ぶりだろうな」



「なあ、ジイさんはアレで満足なのか？」

「一通りやったからいいんじゃないですか？ 我々もラクできますよ。……しかし、

『彼』……何者でしょうね」

「ああ。ビスケ師範代もヤバいが、『アイツ』はまた別次元だ。敵味方合わせてな。今んとコ動きが無いが、もうすぐ分かるだろ」

「そうですね。とりあえずしっかりと見させてもらいましょうか」



「クラピカ、貸して」

「……秘策があるのか？」

「うん。キルア、そこでボールを持って支えてくれる？」

「……なるほどな。会長がやったやつか」

「絶対に吹っ飛ばしてやる」

そう言つて、ゴンはオーラを練り始める。

ゴゴゴゴ……キイイイン！

凄まじいオーラが拳に集中する！

「最初は、グー！」

ビリビリビリ!!

「ジャンケン、グー!!!」

ドゴオン!!

およそボールの射出音とは思えない凄まじい音がして、これまた凄まじい勢いでボールが吹っ飛んでいった。

ドゴオツ!

そして、巨体の悪魔が吹っ飛ばされる。この威力は会長のものほどではないが、いい威力だ。見事。これで残り悪魔は一体。しかし、巨体悪魔はキャッチせずに、ワザと当たり、ボールを内野側まで転がす。ぶつかつた衝撃で威力を殺したか。そのバウンドした球をレイザーが拾う。

「くそっ! あんなんじやダメだ!」

ゴンが悔しがっている。まだまだ行けるか。楽しみだ。さて、それなら彼からボール

を取らねばな。

「……………」

外野と内野の念獣を1匹ずつ残して解除した。オーラが増大する。なるほど。ほぼ本気か。そして、ボールにオーラを集める。凄まじいポテンシャル！ 先程のゴンを上回るオーラ量！ 最早大砲クラスの威力になるだろう。

そして、そのボールを上空に投げた。狙いは……………私か！

バゴオン!!

凄まじい暴力が私に迫る。

……………見せてやろう。カキン拳法の奥義を。



コレを使う事になるとはな。久々にいい感じだぜ。奴もこの威力ではただでは済むまい！ さあ、どうだ!!

……インパクト音がしない!!　そして、何だアレは!?　回転している!?

ギユルギユルギユルギユル……

奴は目にも止まらぬ程の速さでその場で回転していた。その姿が速すぎて竜巻の様になつてゐる。姿もブレてはつきり見えない。しかし、それも徐々に穏やかになる。そして……人差し指の先でボールを激しく回転させる奴の姿が現れた。

「!？」

ジジイと女が驚いている。いや、オレも当然驚いている。なんなんだ。あの動きは何をした！

「岩のように硬く、草のように柔らかく、羽のように軽く、山のように重い。水のように流れ、枝のように受ける。其れ即ち、自然と合一すること也。極める事で、如何なる打撃も意味を為さない」

恐らく、だが、ボールを側面から受け流しつつ掴み、そのまま勢いに逆らわず回転したのだろう。そして、少しずつ威力を減じ、ボール自体の回転へと置き換えた！ オレ

も何を言ってるか分からない程の超高等技術だ。

……脱帽、だな。だが、勝負は終わるまで分からん。最後まで出し尽くす！

◇

「!! バカな…！ 何だあの動きは!!」

「まさか、在野にこれ程の者がいるとは…。会長も人が悪い」

「ああ、一回手合わせ願いてえなあ…！」

「会長が大事に仕舞い込んでる理由が少し見えましたね。明らかに人類で5指に入る程の実力！」

「いいモン見れたぜ。オレも鍛え直さねエとな」

「ええ。それにしてもどんな素性なんでしょうね。彼は」

◇

「ゴン、私はここまでだ。後は君らがやれ」

ボールを渡しながら奴が言う。

「!!」

「なっ！ もう少しなのに何を言ってるんだ君は!!」

外野の外から髭面の野次が飛ぶが、それも当然だ。舐めてるのか？

「私の目的は弟子の育成。これまででも過保護過ぎた。後は彼等でも充分に勝てる。そうだろう？ ゴン。これはお前の闘いだ。キルアもクラピカもムカついてる筈だ。ならば、奴に勝て。私抜きでも完璧に」

「……………」

ゴオツ！

しばらく考え込んで、彼らは返事では無く、オーラで彼らはその意を示した。

だが……舐めやがって。その程度でオレに完璧に勝つ？ ふざけるのも大概にしろよ。いいだろう。ここから先は死合だ。覚悟するがいい。先ずは奴からのボールを捕る。

先程のならレシープでいける。来るがいい。

《《練》》

ゴゴゴゴ……!!

なっ！ 先程のがMAXでは無かったのか。この歳で……怪物か……!! だが、いける。レシープ後のスパイクで一人ずつ潰す!!

「ジャンケン、グー!!!」

ゴオツ!!

「あまりオレを舐めるなよ…小僧共!!」

バゴンツ!

よし! 成功!! 続けて喰らえ!!

ジャンプし、スパイクを撃つ寸前にボールに鎖が絡み付き、向こうに引き寄せられた。「完璧に勝つ、とはカームも無茶な注文だ。いつもの事だが。しかし、ボールはキッチンと捕る事だ」

チツ！ 鎖使い!!! 失念していた。オレのミスだ。

「……………バツク」

……………使わされたか。もう後が無い。鎖使い（クラピカと言わらしい）から外野の女の子にボールが渡る。

ギユオン！

「ギシエー！」

……………これでオレー人。いいだろう。ガキども。ボールはコチラだ。その傲慢さを体で支払うがいい。

◇

「審判、タイムだ！」

「おい、ゴン！　なんか手はあるんだろうな？　完璧に勝つ前に、アイツからあのヤバい球を捕らなきゃいけないんだぜ？」

「うん、それなんだけどね……クラピカも来て……ゴニョゴニョ」

「……またとんでもない発想だな。よく思いついたものだ」

「へへ、すごいでしょ！」

「いや、オレ自信ねーなあ」

「だが、やる価値はある。面白い。私も力を尽くそう」

……話はついたようだ。ではいくか。

シユオオオオオ……

こちらのターンだ。

奴等は何を企んでいるか。

だが、何をしようと無駄だ。

ケリをつける。

だから。

ありつたけを。

115、一坪の海岸線

シユオオオオオオ……

あまりにも莫大なオーラが収束し、レーザーに集まってゆく。これは……！

「レーザー！ ソレはダメだ!!」

「いいさ。オレはこの為に生きてきた。このゲームをやるのはこれで最後だ」
「それでいいのか!?!」

レイザーの表情には一点の曇りもない。彼はニヤリと笑う。

「そうか……ゴン、キルア、クラピカ！　これがレイザーの『覚悟』!!　心して対処するんだ!!」

gon達は驚きながらもその脅威的なオーラに対して立ち向かおうとしていた。レイザーがボールを上空に投げる。これが100%中の100%!　いや、恐らく何らかの制約、下手すれば誓約を付けた事により、150%から200%以上になっている!!　凄まじい力の奔流を感じる。仮に地面に当たれば大規模なクレーターが出来る程に。

そして、彼らを見れば――

ゴンが構え、キルアが後ろ向きになり、クラピカがその後ろに立っている。

あれはまさしく、合体!!

だが、出来るか?　いや、やるしかない。私が言った事だ。彼らもそれを誓っている。

「逃げ」はしない。だから彼らを信じるしかない。
見せて貰おう。君達の「覚悟」を。

バゴオン!!!

この日1番の射出音！ 大砲以上だ!!

ギユオツ ドンツ!!

インパクト!! だが、その瞬間にゴンが受け止め、そのボールをクラピカが鎖で覆う
！そしてキルアがそれを間に入って踏ん張る!!!

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ!!!

スポーツカーがドリフトした時のタイヤのような音が響き渡る。ゴンが受け、その後ろでキルアが支え、クラピカの鎖が手とボール諸共覆う！ 後はやるだけだ。さあ、見せてみる！ 君達の「覚悟」を!!

鎖の中で手の骨が折れる音も混じりだす。鎖にヒビが入り出す。それでも、弟子達はやめようとしな^い。ここが正念場と理解しているからだ。

だが——このままでは保たない！ 後少ししたら完全に崩壊するだろう。

「ギヤギヤギヤ………!!」

ゴンが耐えている。間違いなく折れている。鎖の間から血が噴き出す。ゴンだけではない。クラピカもキルアも必死に耐えている。

「頑張れッ!! 耐えるんだーッ!!」

ツエズゲラ組から声援を受ける。彼らも奮闘するゴン達に思う所があつたのだろう。

しかし、それでも、レイザーの球の威力が上回る！ 全員が死力を振り絞っているが、それも後僅かで無慈悲に崩壊する……!!

その時

ズアッ!

「つれねーなア、仲間だろ！ オレも混ぜろよ!!!」

これは……レオリオの飛ぶ回復!! つまり【細胞干渉^{セルリカバリ}】だ！ いてもたってもいられなかつたのだらう。外野から飛ばしてきた。

そして、それを受けて全員の顔色が若干良くなった。特にゴンの負担が格段に減った。レオリオは幾度も幾度も回復を飛ばし続ける。しかし、それでも依然押されている。後僅かでラインを割ってしまう。そうになると耐えても負けだ。

すると今度は

ザアアアツ

「ここまでやって負けなんて認めない。だから僕もやる！」

紙吹雪が大量にゴンの手の周りの鎖を覆う！これは……全員力でレイザーの球を受け止めている!!! この勝負、果たしてどうなるか——！



ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ……

徐々にボールの音が弱まる。やがて

シユウウウウ……

完全に停止したボールを持ったゴンと、残りのメンバーがそこにいた。

「ウオオオオ!! 止めたアーーーーー!!!」

「やったッ!! スゲーぜお前ら!!」

髭面の男の仲間やサッカーが得意な男が歓喜の声をあげる。だが、それも当然だろう。彼らは成し遂げた。オレの全力を更に超えた攻撃を見事に、完璧に受け止めたのだ。まさかアレを止められるとは思わなかった。

まず、最初から最後までオレのボールを捕まえ続けたゴン。その精神力、集中力に加えて、最後まで諦めない、たとえ手が破壊されても止まらない執念! その「覚悟」、見事だ。

また、それを鎖で覆っていたクラピカ。強力な拘束力と正確な操作は感服する。囲いに少しでも綻びがあれば、そこからボールは抜けていっただろう。ヒビが入ろうとも壊れずに耐え抜く強度は流石の一言。

また、外野からの回復。まさか飛ばせるとは思わなかった。アレがギリギリ負けに至る戦況を覆したと言っている。鎖の補助の紙吹雪も、かなりの強度だった。一つ一つを強化しながら操作する能力の精度は如何なる場面でも通用するだろう。

そして、その中核を為したのがあの少年、キルアだ。クツシヨンと踏ん張りの役目を果たす為にオーラの振り分けを背中と足に集中させていたが、足が弱ければ吹っ飛ばす事になり、背中が弱ければクツシヨンの役目を果たせずダメージを受ける。恐らく誤差1%以下の精度を要求された筈だ。その高い壁をキルアはクリアした。経験不足を補つて余りある、天才的なセンスによつて！

……脱帽だな。彼らにすら防がれるか。自信なくすぜ。だが、これは勝負だ。まだ終わつてない。何回かやってみてもいいが、面倒だな。機は奴らの攻撃の直後…!! 1人ずつ、確実に仕留めてやる。



「すまねエ。今のオレだとコレが精一杯だ。2人とも」

「いや、ありがとう。レオリオ。拳は動く。それに自力でも後はいける！」

「オレは持つだけだからな。問題ないぜ」

「バカ言え！ あんな馬鹿オーラを素手に近い状態で受けやがって！ 本来ならドク

ターストップだ!! 後一回だ。後一回なら何とか出来る。ゴン、それで決めるんだ」

「うん。分かっている。必ず、次で決めるよ」

「……ならばオレから言う事はねー。気張っていけよ！」

クラピカとカルトがパスを受け渡しする間、キルアとゴンがレオリオに治療を受けている。2人とも手が酷い状態だ。ゴンはまだ自力で回復も出来る為まだマシだが、キルアは深刻だ。レオリオの言う通り、次で限界だろう。

問題は、次で決められるかどうか、だ。

「ああ、ゴン。最後に」

「ん？ 何？」

「オレからのおまじないだ。ありったけのオレの想い、持ってけ」

「これは……ありがとう！ レオリオ！ 必ず勝つよ!!」
「その意気だ。頑張れよ」

◇

彼らが準備を終えて、こちらに向き直る。なるほど、いい気迫だ。だが、その壁はカ
ンタンには越えさせませんぞ。

「待たせたね」

「待つき。いくらでもな。見せてみる、お前の力を」

「うん。じゃあ、行くよ」

《練》

ゴゴゴゴゴ……

!!!

なん……という……。まだこれほど残っていたか！ いや、寧ろさつきより大幅に増えている!!

この力はゴンだけのモノじゃない。あのレオリオという奴、アイツの技によつて分け与えられたモノだ。そんな事も出来るとは、本当に優秀なヒーラーだ。

その分も含めて、敵側ではこの日一番の顕在オーラを感じる。そして、この威力ならば捕れるが、捕つても押されてアウトになつてしまう。かといって、レシーブしたら鎖が待ちまえているだろう。では、どうするか。

そう。一つだけある。奴らのハナを明かす方法が。今からそれを実践する。

キイイイイン……!

凄まじいポテンシャル!! これは、今まで受けた中で最上級の顕在オーラ!!!

さあ、来い!!!

「最初は……」

「グー!!!」

ビリビリビリ

大気の振動を感じる程のエネルギーの集中!! やはり捕る事はできん。

グツ

レシーブの構えを取る。

「バカめ! 鎖の餌食だぜ!!」

野次が飛ぶ。

「そうかな?」

それは、レシーブの方向によるだろ!!!

「ジャン、ケン」

「グー!!!」

ドゴオン!!!

よし！　ここだ!!!

ガッ！

な!?! 動かん!!! まさか!!

ジャラッ

「私の鎖は具現化したもの。つまり、《隠》が使える」

【縛る中指の鎖】^{チエーンジェイ}!!

「一瞬でいい。その一瞬が全てを決める」



ドガァン
!!!

大砲の着弾音の様な音がして、
レーザーが弾き飛ばされる!!

ドゴツ
!!!

体育館の壁に衝突し、めり込むレーザー。ボールは体育館の天井に弾け飛び、深い穴を開けて空の彼方へ消えていった。

クラピカが鎖で縛ったのは一瞬。正にインパクトの直前！ その一瞬が勝負を分けた。レーザーがボールに集中し、オーラが手と足に集まっている、いわば意識の間隙。その隙を突いて《隠》で鎖を向かわせ、瞬間的に縛ったのだ。

見事！ 天晴れだ。

さて、レーザーは――

ガラツ

壁のガレキをどかしながら、彼が出てきた。全身キズだらけのボロボロだ。だが、どれ程も軽症だ。流石は最上級能力者。やはり無事だったか。

「……で審判がコールする。」

「ピピーッ！ レイザー選手、アウトです！ よってこの試合、ゴンチームの勝利です
!!!」

「ウオオオオオ!! 勝ったア!! アイツらだけで勝ったぞ!!!」
「やってくれたな!!! 流石だぜ!! お前ら!!!」

ツエズゲラ組とリベロが喜びを爆発させる。気持ちは分かる。本当に良くやった。

「……完敗、だな」

レイザーが呟く。そのオーラも最初と同じぐらいに戻っている。ゴンは、全てを搾り
尽くして、その場に倒れ、レオリオから気付けをされていた。

勝利に湧くなか、レイザーが我々に語りかける。

「負けたよ。約束通り、オレ達は街を出ていく。その前に、ジンについて質問に答えよう」

「!!」

「ジンについて…!?!」

応急処置を受け、目覚めたゴンがハツとする。レイザーはゴンを離れた場所に招き、ジンについて話し出す。

「結論から言うと、ジンはここにはいない。どこにいるかも分からない」

「そっか…:…ディアナさんにも言われた」

「アレもそう言ったか。ただ…昔話で良ければ少し話そうか?」

「! うん、ぜひ!!」

そうして彼は、自らの由来を語り出す。なるほど。彼はジンに救われたか。だからこそ、彼は腐らずにその強さまで練り上げた、と。

「ジンはお前の力を信じ、オレにお前を任せてくれたように、オレもお前の力を信じた。

だからさつきはこれ以上ないぐらい全力で撃ったぜ？」

「うん。みんながいなかったら全然かなわなかったもん」

「ああ。いいチームワークだったな」

彼は背を向け、離れながら最後に告げる。

「ゴン、ジンに会えよ！」

「うん!!」



「レイザー。アレは大丈夫か？」

「……ああ、心配いらぬ。ただの制約だ。これ以後二度とドッジボールはしない、というな。誓約も確かに付けたが」

「そう、か……」

「気にするな。何とでもなる。次やるならバレーにでもするさ。オレは満足だ」

「ありがとう、レイザー。君は強かった」

「よせ。だが、お前はともかく、お前の弟子も強かった。これでジンも満足だろう」

「そうだな。私からも伝えておくよ」

「フツ。そうだな……じゃあ頼んだぜ」

彼は最後にそう言って手下達と去っていった。最後まで彼は強者だった。



「灯台もと暗し。入り口はあいつらのすぐ近く……この灯台にあったってわけ」

情報をくれた女性NPCに案内され、我々は灯台に登る。

「()がそうよ」

案内された場所は、海岸線が見える大きな窓だった。

「確かに海岸線は見えるけど……ここからどうやって『海神の棲み家』に？」

彼女は窓から身を乗り出し、隠されたスイッチを押す。すると、灯台から光の線が射出され、ある場所を指し示す。

「この光が示す海面の真下……そこに海底洞窟はあるわ。でも、本当は財宝なんてないのよ。ダマすようなマネしてごめんさい」

「そうなのか？」

「神聖な洞窟だから、ごく少数の漁師しか場所を教えてもらえない。そこから一人歩きした勝手な噂だもの。財宝伝説なんて。もちろんそう言ってもレイザー達は信じな

かった。場所を教えてたら……そうは思うけど、それでもあいつらは別の場所を教えたと考えるかもしれないわね」

「つてことは誰も言わなかったの？ レイザー達に『海神の棲み家』の場所」

「もちろんよ。神聖な場所だもの。海に生かされている者が、海を汚すような真似はできない。みんなそう言つて殺されていったわ」

「……………」

ゴンなどは彼女に感情移入しているようだが、これはゲームのシナリオだからな。ただ、非常に良く出来ているから気持ち分かる。これ程のゲームは前世には無かったかな。当たり前だが、当時流行つていたVRなどよりも高度だ。なんせ現実を舞台にしている。ジンもいいモノを作ったものだ。

「ようやく又ここから海を見ることができのね。昇る朝日…漁から戻ってくる舟…七色に変わる水面…私にとってはこの景色が何よりの宝…」

ボンッ！

窓辺に手をかけ、語っていた彼女がカードに変化する。

「おお！」

「一坪の海岸線、ゲットー!!!」

……遂にここまで来たか。次が最後の試練だ。いよいよ大詰めだな。

クリアまで、後少しだ。

116、鬼づつこ

「いや〜お主！ 中々楽しかったぞい。いい見せもんじやった」

「そうでしょう？ アシモフさんもご協力ありがとうございました。で、約束はいつになさいますか？」

「あーそれがな…やりたいのは山々じゃが、ワシもそろそろタイムアップじゃ。次の機会にとつておこうかの」

「そうですか。またいつでも言ってく下さいね」

「……それと、コレはお主にしか言わんからちよつとこつち来い」

ん？ 何だ？ 内緒話かな。大人しく離れた場所についていく。

「実はな…まだ影も尻尾も捕まええとらんが、不穏な動きをしている輩がおる。今、本腰を

入れて調査しとる段階じゃ。しばらく、というかもうここには来ん……場合によつてはお主に連絡することもあるじやろうがな」

「不穏な、動き？」

「左様。世界各国がどうもキナ臭い。組織から個人に至るまでな。ワシら協会も色々探つとるが、尻尾をつかません。じゃが、いずれ何かしらがおきるじやろう。お主の予言も含めてな」

「……そうですか……まあ、覚悟はしていましたよ。何かあつたら私に連絡ください。確実に、潰しますから」

「頼もしいのう。なるべくワシらで解決したいが、万が一の時は頼んだぞ」

そう言つて、会長はお目付け役を引き連れて去つていった。しかし、一体何が起こつているというのだろうか。考えられるのはまずヒソカだが……これが終わつたらこちらにも本腰を入れて探してみよう。

さて、これからの事だな。

「おめでとう。みんな。クラピカもリベロもありがとう。ツエズゲラさん達も。報酬は彼らが払うからよろしく頼む」

「旦那、こちらこそ貴重なモンを見せてもらいましたよ。オレっちも、もうちよい鍛えときますよ」

「そうだな。我々も自分を見つめるいい経験になった」

「私もだ。いい修行になった。あんな能力者がいるとはな。まだまだ私も伸びる余地がありそうだ」

それぞれが感じる所があつたのだろう。口々に感想を述べ、ゴン達と報酬の打ち合わせをして去つていった。まあ、不満を持つ人が出なくて良かった。ツエズゲラ組もそこはプロ、という事か。

クラピカ組も、ゴン達に引き留められたが、仕事があるとこれまたすぐに去つていった。リベロはもう少し遊びたかつた様だが、クラピカに引き摺られていった。

「…みんな行っちゃったね」

「ああ。あつさりとしたもんだぜ」

「でも、楽しかつたね！」

「…オメーだけだよ。その感想は。マジでヤバかつたんだからな」

「僕はあんまり活躍出来なかつた…」

「気にすんな、カルト。大体あんでできりや充分だろ。それに、すぐにでも活躍する機会がくるからな」

「それだが、このカードと前のを手に入れた時点でもう君達はクリアに王手をかけている。だが、最後の詰めが待っている。これが君達にとつての最後の難関だろう。決して油断せずに当たるようにしてくれ」

「カーム。それつてもしかして——」

『爆弾魔』、か」

「さて、それは分からないが。だが、いずれにせよ、クリアを目指すならトップ組との直接対決は避けられん。しつかり案を練つて事にあたる事だ」

そう言えば連絡来ないな。直接会話してない私達はともかく、ゴン達にぐらいはあつても良さげだが。遠くでこちらを見ているのにな。気づいていると悟らせないように注意するのも一苦労だ。

敵からすれば、今この瞬間こそが最大の好機であると思は思うのだが。バトルを経て消耗した今この瞬間こそが。私を警戒しているのかな？ 以前会長に遭遇したのが影響しているかもしれないな。

奴等は我々こそがオリジナルを持つていると思つているだろう。それは奴等からす

れば当然の思考！【贗作^{フェイク}】がある以上、リスクを犯して弟子を狙うメリットは薄い。しかも今は私達が一緒にいる。思った以上に慎重な奴等だ。

ならば我々は離れた方がいいな。そうすれば奴等はまずゴンたちを狙うだろう。よし。方針は定まった。

「では、とりあえず移動しようか。ちよつと用事があるからマサドラまでいいかな？」

「OK。魔法カード買うのか？」

「その通り」



「！ ゲン、奴等動いたぞ！ アレは…マサドラの方角だ」

「ほつといていいのか!! 今がチャンスだったろ!!」

「……あのカームとか言う奴、気付いている気がする。こちらに」

「は!! この距離だぜ? 何かそんなそぶりでもあったか?」

「いや、無い。オレの勘だ。考えすぎかもしれないが、奴は危険かもしれない」

「勘かよ! 別に大丈夫だろ? オーラも大したこと無さそうだぜ?」

「ならば、奴は何故消耗してないんだ? ガキどもはそれなりにポロポロだが、奴はその様子はまるでないぞ。S Sランクのイベントでバトル有りならそれなりに消耗して
る筈。それが無いという事はかなりの実力者の可能性がある」

「それは……」

「焦るな。急いで事は仕損ずる。確実にやるならまずガキからだ。奴等は元々別行動だ。今回は共同で行動していたが、しばらくしたら別れる時が来るだろう。それまで監視を怠らないようにしましょう。チャンスは必ずくる……ガキのが【贗作】^{フェイク}や【複製】^{クローン}ならば、ガキの後で狙えばいい。とりあえず、オレ達もマサドラに向かうぞ」



「とりあえず、君達とはこれで別れる。まずは、怪我を癒す事だ。時間は待つてくれないからな。早めに準備を整えとけ。ではな」

「……行っちゃったね。つて、どうしたの、キルア?」

「……いや……そうだな。気のせいかもしれないが、カームの言い方はあまりにも不自然だった。まるでこれから何が起きるか分かつてるみたいにな」

「……つけ加えれば、彼は『爆弾魔』の警告をした。つまり——」

「奴等がすぐにも来るって事か!? 今はマズいぞ! ゴンは限界までオーラ使ってるし、キルアはまだ完治まで程遠い! とてもバトルできるコンディションじゃねー!」

「シッ! もしかしたらすぐ近くにいるかもしれない。だからマサドラに来たのか……」

【念視】サイトレジョン オン! ゲンスルー」

「バツ! お前、何やってんだよ!!」

「これから闘わなくちゃいけない相手の情報を知らないのは致命的だよ。どうせ敵対せざるを得ないなら、先に仕掛けた方がいい……うん。オレ達のが移動系スペルは多いね。さっき買ったのと併せてカームが持つてる分全くくれたから。でも、僅かな時間稼ぎしかできないね」

「……ッ！ 確かにそうか。とりあえず今はコンディショニング的に来たら逃げるしかねーな。レオリオもかなりオーラ使ってるだろ？ だとしたらまともに闘えるのはカルトだけで、相手は3人だからな。おまけに未知の能力者で格上ときた。出来れば万全で挑みたい。1日2日あれば違うんだけどな」

「……それなんだけど……」

ボンツ！！

『他プレイヤーがあなたに【コンタクト交信】を使用しました』

「!!」

『……久しぶりだな。誰だか分かるか？』

「ゲンスルー!!!」

『ククク…嬉しいね。覚えていてくれたか。さて、無事にカードをゲット出来たようだな。おめでどう、と言っておこうか』

「…何の用だ。交換なら受け付けないぞ」

『まあまあ、そう警戒するなよ。いい話がある。オレ達と共同でクリアしないか？ 丁度お前達とオレ達のカードを合わせれば99種だ。報酬は山分け。勿論クリア特典もだ』

「…その提案でお前達やオレ達に何のメリットが？」

『嫌だなあ。疑ってるのか？ なーに、心配いらぬ。オレ達はただクリアしたいだけなんだ。お前達には一切手を出さない、と誓おう！』

「そんな口約束だけじゃ到底信じられない。話すだけ時間の無駄だ」

『そうか……じゃ、死ぬか？』

「！ やっぱり……」

『お前らのせいで条件変更だな。生命の安全は保障する。そのかわり【二坪の密林】と【一坪の海岸線】をよこせ』

「……ふざけるなっ！」

『ククク…声がおかしいぞ。対決でダメージを受けたか？ ま……ガチンコバトルでオレ達とどれぐらい闘えるか試してみるのも面白いかもな。取引に応じるなら10分後に1人でマサドラの入り口まで来い。いるんだろ？ マサドラにな。来なければこちらからいくぜ。ではな』

「……切れたか。10分か。完全にこちらをなめ腐ってやがる」

「連中はぎりぎりまでシヨップで張る気だろうな。わずかな差もこれで埋まる。こうなったら手遅れだ。どうにか時間は稼げないものか……」

「……」

「ゴン、難しい顔して黙ってどうした？ キレてんのか？」

「ん？ いや……そうじゃなくて、アレが使えないかなあつて思つて」

「珍しいな、ゴンがあいつらにキレてないつて。しかし、アレつて……何だ？」

「……オレ、そんなにキレやすいように見えるかな？ アレつていうのはこの前のアレだよ。もしかしたら、一方的なセーフティーゾーンになる可能性が……ないかな？」

「……ッ!! そうか! その手があつたか! でも、それはもしかしたらの話だろ? ミスつたら悲惨だぜ?」

「結構高い確率でOKだと思うけど、何も試していない状態じゃギャンブルだよね……だから、ある程度攪乱する必要があるかなつて」

「そうだな。どうせなら攻めの姿勢でいった方が余裕が出るかもな。オレはやる価値あると思うぜ?」

「じゃあ早速やろう。まず、これと——」

「……なあ、アイツら何の話してんの？」

「えっ、まさか……分らない？」

「いや！ そうじゃなくてな？ 指示語が多すぎてちよつと分かりづらいかなくって……」

「ハア……しようがない大人。見た目はかくて中身は子供」

「ため息やめろや！ 大体オメーみたいなチビに言われたかねーわ！」

「内容を分からなくてもいい。説明する時間が惜しい。とにかく、作戦は兄さんが考えるところで、貴方も貴重な戦力だからちよつとは自分で考えて？ 僕はどちらにせよやることあるからそれに集中する。なんとしても兄さんは守護らなくちや。ついでに貴方たちも」

「オレたちやついでか！ まあいい。そうだな。オレに出来るのはひたすらメンバーをベストコンディションで送り出すことだ。オレはオレのやることをするか」

「その通り。ようやく気付いた。でも今は貴方はやることないけどね。もう残りオーラないし」

「……水差すなよな。全く……」



「約束通り1人で来たか。ゴン。感心、感心。じゃあ早速こつちに来てカード出せ」
「その前に聞きたい。ゲンスルー。お前達が『爆弾魔』なの？」

「それを聞いてどうする？ オレ達が答えると思うのか？ 思えばなるなよ、ガキ」
「いや…それで納得いった。やっぱりお前達とは闘わなきゃならない」

ズズ…

「ほう。やる気か。いいぜ？」

あくまで強気のゴンに対して、ゲンスルーは怒りをオーラの形で表現する。彼の身体から吹き出す量は、中堅ハンターを遙かに凌駕し、一流の域に至っている。その様子をまじまじと観察するゴン。彼のオーラは現在弱々しい。むしろ、維持するので精一杯だ。本来であれば、彼のオーラもゲンスルーと比肩する程度はある。しかし、レイザーとの闘いにより、非常に弱まっている。よって、ゲンスルーは与し易し、と踏んだ。

「いや。今のオレじゃお前達には絶対に勝てない。だから——」

「だから、何だ？」

「こうする」

ザザザ

「!?!」

「【徴収^{レツイ}】 オン!!」

「なっ……しまっ……!!」

「^{リターン}【再来】 オン!! ソウフラビ!!!」

バシユツ!!

「くそつたれが!!! 《絶》で隠れてやがった!!! ぶっ殺してやる!!! 後を追うぞー!」
「待て! まずカードの確認が先だ!!!」

「: No.85『身代わり鎧』とNo.53『キングホワイトオオクワガタ』、どっちもダブリだ」
「やられた:!! 奴等に足りないNo.85『浮遊石』とNo.65『魔女の若返り薬』だ!!」

「チツ: オレもか! No.42『超一流作家の卵』とNo.29『強制予約券』:!!」

「クソツ! 指定ポケットのカードばかり:!! 奴等リスキーダイス使ったな!?

【^{プリズン}堅牢】で守っている独占カードは大丈夫だったが、奴等に足りないカードを4種類も
持つて行かれた:!!」

「今すぐ【^{アキャンパニー}同行】で追っかけてぶっ殺そう! 早く!!」

「そんなに死にたいか……:!! いいだろう。望み通りブチ殺してやる!! こっちの方が
移動スペルは多いんだ。逃げられると思うなよ!!! 【^{アキャンパニー}同行】オン!! ゴン!!!」



「うまくいっただな！ アイツらの呆然とした顔は傑作だったな!!」

「あの様子じゃすぐに来そうだね。打ち合わせ通りやろう…来た!!」

キイイイイン…バシユツ

「アカンバン【同行】オン!! マサドラ!!!」

バシユツ!

「……こちらの勝ちが決まった鬼ごっこだ。いつまでやるかな?」

バシユツ！

バシユツ！

バシユツ！

.....

「オレはもう無い！ カルト!!」

「了解！」

バシユツ！

バシユツ！

.....

「……来ないな。諦めたか？」

「いや、緩急をつけて動揺させるつもりだろうな。またはちよつと冷静になったか。どっちにしろ諦めてないだろ。ホントに嫌な奴等だぜ」

「よし！ チャンスだよ！！ 例のアレ、試そう！！ キルア、お願い」

「そうだな！ 行くか！！ 【同行^{アカンパニ}】 オン！ エルディアナへ！！」

◇

「……そろそろ行くか。奴等は……まだいるな。【リリース離脱】使われたら厄介だったが、その場合は10日間シソの木で張つてりやいもんな」

「枚数的にそろそろ打ち止めだ。大詰めだな。よし、行くか。【アカンパニー同行】オン！ ゴン!!」

ドヒューーン……

バシユツ

「……いない!!? なぜだ!?!」

「ここは……エルディアナ大森林!!! なぜこんな所に……!!!」

「【リリース離脱】でもねエー! どこ行きやがった!!」

「……クソツ!! そういうことか……!!」

「な……どういうことだ? ゲンスルー」

「恐らくだが、これはカードの効果!! 未知のカードだ。そしてここは……」
 「…『一坪の密林』か!! バカな! そんな貴重カードを使うなんて……!!」
 「恐らく【複製】だろう。少なくともオレ達じゃどうしようもない!」
 「…クソガキどもがく!! 絶っ対に許さんからな!!!! 覚えとけよ!!!」



「ひゆく危なかつたな。だが、上手くいつて何よりだぜ……!」
 「やつぱりオメーはスゲーよな。あの短期間で思い付くか、フツ」
 「へへ。なんとなく思い出したからね。でも、無事に成功してよかった。最悪【離脱】
 だったからね」
 「ホントにな。結局それだと戻れなければカード消えちゃうし、戻ったとしてもスター
 ト地点で待ち伏せされるからな……。ま、とりあえず休もうぜ。もうクタクタだ」
 「アイツらまだこの辺ウロウロしてるね。会話からするとこのカラクリに気付いたみた

「い」

「カルトのソレ、便利だよな。ま、アイツらカラクリに気付いてもどうしようもねーからな。奴等にこのイベント突破は無理だろ。むしろフラグを立てられねーだろうし」

「そしたら、アイツらどうするかな…カームのトコ、行くかな？」

「そうだったらそうだったでアイツらは終わりだ。カームなら何らかの手段でこっちにヘイト戻してきそうだけどな。カームの心配ならするだけ無駄だぜ？」

「まあそうなんだけどね。とりあえず休んで回復しよう。キルアはしばらく怪我の治療に専念だね。出来れば対策も練っておきたいよね」

「そうだな。どっちみち対決しなきゃならないからな。でも、近くで見た奴等の実力の程度なら総合的に考えてこっちが同等かやや上…能力の想定をして、奴等がオレ達を格下に見てる内に確実に勝てる方法を考えるか」



「ふふ……どうやら上手くやってるようだな」

「あのさ……カーム、それ、何？」

「うん？ 《円》だが？」

「《円》だが？ じゃないわさ！ なんちゅー範圍の《円》よ！ しかもそれを《隠》で隠すとか意味わからんわ!!! …はあく。ちよつと強くなつたと思つたけど、自信なくすわー」

「イヤ、まあ……訓練すれば出来るようになるさ」

「出来るか!! 全く……いつになったら追いつけるのかしらね」

「大丈夫さ。私も元は普通の人間だったんだからな。それより、奴等が腹いせにこつちに来そうだな。お迎えの準備でもしておくか」

「アイツらも災難なことね……ま、自業自得、か」

「そういうことだな」

117、悪の定義

「おや、皆さん。久方ぶりですね。早速カードを使ってくれたのですね？ 喜ばしい事です。森の危機を救ってくれた皆さんならいくらでも滞在してくださいね」

（なあ…アレって寝癖だよな？）

（間違いなくそうだね…。今まで寝てたのかな？）

（涼しい顔して偉そうな事言ってるけど、相当間抜けな絵面。お里が知れる）

（これだからチビッコは…そんなギャップがいいんだろが！ 分かってねーな！）

（お休み中だったのかな…とりあえず伝えてみるよ）

（マジか！ 確かに気になるから伝えるのは賛成だがよ…いけるか？）

（うん。大丈夫。任せて）

「あの……お休み中にごめんなさい。オレ達敵に追われちゃって……」
「いいえ、休んでないませんか？ これでも女神ですからね」

（おい！ 分かってねーぞ！ もうちよいストレートに言わねーとダメなんじゃねーか
!?)

（うーん、これは天然タイプの子ボラさんかな？ じゃあ別の言い方試してみるよ）

（……何でそんなに冷静に分析できるんだよ……。お前、オレと同年だよな？）

（くじら島では旅行で来て暇してる人とかとデートしたりエスコートしたりしてたからね。何となく分かるんだ）

（マジか……）

「急に押しかけてごめんなさい。でも、女神様は今日も綺麗だね！ 髪もサラサラです
ごいゃー！ でも、髪の毛がちよつとだけ乱れてるね。何かあったの？」

「あ、あら？ ……オホホホホ。ごめんなさいね。ちよつと急いじゃって……。でも、教えて
くれてありがとう。その歳で気遣いできるなんて中々できる事じゃないわ。将来が楽
しみね」

「ううん、こちらこそ不躰な事言つてごめんなさい。でも、女神様が身近になつてくれた感じがして嬉しいよ!」

「あらあら……! 本当に素敵な紳士だこと……。貴方とは仲良くできそうね」

(……コイツ……大人だ!)

(アイツ、マジでパーフェクトコミュニケーションだな……。夜の店で鍛えたオレでも無理だぜ)

(オレも無理だな……やっぱゴンはすげーや)

(ふん……何が凄いんだか……。僕にはサツパリ分らないね)

(……お前、そんなんだからあのババアに負けそうになるんじゃないか? もうちょい勉強したらどうだ?)

(な……それとこれとは関係ない! そんな事言う兄さんなんて嫌い!!)

プリプリ怒つてその場から離れるカルトを見ながら、やれやれのポーズを取るキルアであった。

「おいおい、いーのか?」

「ん？ ああ、好きにさせようかな。アイツも大分感情が表に出てきてむしろいい傾向だと思うし。オレもそうだけど、やっぱウチは特殊だからさ」

「なるほどな、納得。ようやく難しいお年頃が来たってか」

「そーゆーこと。だからほつとく。…それにしても、アイツら打ち解けすぎじゃね？」

彼らがゴン達を見れば、非常に打ち解け、和気藹々としやべりまくる女神様の姿がそこにあった。

「なあ…あの女神、キャラ変わってね？」

「お、おう…なんつーか、近所のおばちゃんみたいになってるんだが…」

そんな失礼な感想を言い合っている野郎2人にゴンが振り返り告げる。

「ねえ、みんな！ ディアナさんが特別に家に招待してくれるって！ みんなで泊まれるスペースもあるみたいだよ！ よかったね!!」

「……アイツ、ホントすげーな……。これからゴンさんって呼ぼうかな……」
「そうだな……オレも見習わねーとな……」



「おや、いらっしやい。何の用かな？」

「とぼけるな。わかってるだろ？ お前が『一坪の密林』と『一坪の海岸線』を持っていくのは〔名簿^{リスト}〕で確認済みだ。更に言えば〔念^{サイトレシジョン}視〕でも確認済みだ。お前がオリジナル持ち。そうだろう？ よって、生命の安全は保障してやる。その代わりにその2つのカードをよこせ」

「おやおや……初対面でいきなりずいぶんだな。君たちがかの悪名高い『爆弾魔^{ボムマ}』かな？
で？」

「ククク……女の前で粹がるのはやめる事だ……。無惨に殺^{バラ}されたく無いだろ？ おとな

しくカードをよこせばそんなに辛い目にはあわせずに済むぞ?」

「ふうん。だつてよ、ビスケ」

「きやう怖い〜! カームさん、何とかして〜。このままじゃ私、アイツらに酷いことされちゃう〜!!」

「……あのさあ。……まあ、いいか。じゃあ辛い目とやらにあわずに済むには、カードを渡せば良いんだな?」

「理解が早くて助かる。バカじゃないようだな。物分かりが良い奴は長生きするぞ。じゃあお前一人でカードを出してゆつくりこつちに来い」

「だが断る」

「!? ……は？　なんて言った？　もういつペン言ってみろ」

「私は君達のような自分が強いと思ってる奴に『NO』と断ってやる事が趣味でね」
「貴様…死にたいらしいな。いいだろう。構えろ。無意味な行為だがな」

ズズズ…

ゲンスルー組の3人からオーラがあふれ出す。《堅》だ。もう既に戦闘態勢に入っている。やる気満々だな。

さっきのセリフだが、いつペン言ってみたかったことだ。どの漫画か忘れたが、やたら印象に残っているセリフだったからな。煽り効果としては抜群の性能を誇っているようだ。

さて…どう料理しようかな。…よし、決めた。随分と自分勝手に人殺しやってる奴等だから少し懲らしめてやろう。具体的にはやられる側の立場って奴を教えてやろうかな。

ついでにビスケにも見せてやろう。本来の私を。

「うーん。中々いい《練》だ。ビスケ、ちよつと離れといて。…とところで、私は『悪』とは何かって考えた時に、自分の欲望のために弱者を利用する奴って書いてある本が昔あつてね。それには概ね同意しているのさ」

「…だから何だ？」

「それに照らすと、君達はまさに『悪』だな」

「それがどうした？ 早く構えろよ。それとも無抵抗で死ぬか？」

「だがね、そんな『悪』も、『悪』じゃなくなる時がある」

「……いい加減にしろよ。時間稼ぎか？ やらないならこつちから行くぞ」

ゲンスルーがしびれを切らしてこちらに歩き出す。油断ない、いい動きだ。さて…始めようか。一方的な暴力を。

ゲンスルーが迫る。後数歩、という所迄接近して、手にオーラを集めている。他2人も油断なく近づき、私を取り囲むようなフォーメーションだ。だが彼等が自分で言った様に、無意味だ。

「それはソイツが『弱者』だった時だ」

《練》

ズアツ
!!!!!!

「カツ…カハツ!!」

あまりの衝撃に3人ともフリーズしたようだ。よく気絶しなかったな。ほぼフルパワールの《練》なのに。さーて、そうしたらここからがお仕置きの時間だな。

“聖光気”

からの……“恐怖”の概念!

怨……!

「「あつ、あつ、あつ……」」

ジョロロロ……

うん。仲良く失禁したね。あつ、大きい方も……。あと、顔面がえらいことになってるな。髪の毛抜けてきてないか？でもまあ、同情はしないがな。

「『力』を持つ者は、その『力』の扱いには十分注意しなければならぬ。なぜなら、身勝手に『力』を振り回せばより大きな『力』に潰されるからだ。これは私自身にも言える事だがね……つてもう聞こえてないか」

フツ

全ての圧を一旦引つ込める。そこには3人そろって死屍累々で無惨な姿を晒した『爆弾魔』組がいた。こうなると哀れだな。自業自得だが。

さて…ビスケに声を掛けてみようか。

「ビスケ。どうだ？　これが私だ」

「……ふん。だから何よ。あたしがビビるとでも？」

「無理をするな。足が震えているぞ」

「…ッ！　勘違いしないでね…これは武者震いよ…！　どこまで行っても貴方はあたしと同じ人間！　ただ、ひたすらに強いだけ…！　あたしはそんな貴方をいつか超えてみせるッ…!!」

涙目になって震えるビスケを思わず抱きしめる。一瞬ビクツとしたビスケだが、徐々にこわばりを無くしていった。

「ありがとう…。君の気持ちは十分受け取った。それだけで私は救われる」

彼女の身体を離す。「あつ…」とつぶやく声を無視して『爆弾魔』組に向き直る。

「これから私は後処理をする。これは私にしか出来ない事だ。だから、先に拠点に戻っていきなさい」

「でも…」

「いいんだ。君のおかげで私はまた一つ、前に進める。ありがとう。私は大丈夫さ」

「そう…。じゃあ待つてるからね」

「ああ。今日はゆっくりしよう。のんびり温泉にでも浸かるか」

「ええ。ペットたちと待つてるわ。早く帰ってきてね！」

……私はいい人達と出会えた。ずっとずっと、このつながりを大事にしていこう。だからこそ、ソレを破壊するような『悪』はこれからも許さない。

例え、私が『悪』と呼ばれようとも。

絶対に。



「「うわっ！ 汚ったな!!」」

「何よー。わざわざ泊めてあげるんだから、文句言わないの！ 全く。ゴン君を見習いなさいよ」

「ディアナさん、オレ、ちよつと片付けていい？」

「嬉しいわ！　ありがとう！！　お礼に何でも教えてあげるわよ！」

「オイこらG・M！　ゲームマスター　そんなんでいいのかわ？」

「いいの！　ここでは私が法律なんだからね！！」

「マジかよ…最初の女神キャラどこに行つたんだ？」

「まあ、冗談だけど、片付け手伝つてくれたらお礼ぐらいするわよ。最近サボり気味だったから助かるわ」

「最近……？」

「最近！　ホラホラ、さっさと身体動かす！」

「当人が寝つ転がつてるじゃねーか！　オレ達だけでやんのかよ！」

「まあまあ、早く片付けして休もうよ」

「……納得いかねエけど、しゃーないな。やるか…」



粗方の掃除を終え、全員が寛いでいる。この家？　は、巨大な木をくり抜いて作った

様な外観の割には非常にゆとりがある。また、不思議なことに水道や電気関係も完備している。また、木の内部なだけあつて縦に長く、天井もゆとりがあり、息苦しく無い。聞けば、ここは5階建てらしい。1つのフロアは丸々温泉フロアだそうだが、それでも部屋は余っている。ディアナの気分によつて寝る場所を変えるらしい。最近専らソファアで寝てたらしいが。

「はあく快適ねー。やっぱキレイになると気持ちいいわね〜」

ゴンが冷蔵庫から出したメロンソーダをソファアで寝つ転がりながらストローで飲みながらのディアナの一言。絵面だけ見れば、リゾート地に滞在中の美女の凶に見えなくも無い。

「ダメだよ、ディアナ。虫が出るほど片付けてなかったら不衛生で健康に悪いよ」

「はいはい、分かりました〜。：ねエ、ゴン君ココに住まない？」

「いや、それはできないかな。ごめんね」

同棲の誘いを一瞬で蹴るゴン。それを見て、レオリオが「なんちゅー羨ましい奴!」と

か言っていたが、キルアに「汚部屋女だぞ、本当に羨ましいか？」と言われて少し冷静になっていた。カルトは不機嫌そうな顔でテーブルの端っこに座ってチビチビ同じメロンソーダを飲んでいる。

「さて、ありがとうね。私からもお礼しなきゃね。大した事はできないけど、まずはこの家でゆっくりしていつてくさいね」

メロンソーダを音を立てて飲み終えたディアアナがキリツとした顔で告げる。もうそのキャラは遅いのではと全員が心の中で突っ込む。

「…ありがとう。ディアナ。じゃあお世話になるよ」

「遠慮せずにゆっくりしていつてね。ああ、それと、これは答えなくてもいいけど、君達が逃げるなんて結構な奴ね。珍しい。よっぽど強い奴なの？」

「ああ、それなんだけど——」

ゴンがこれまでの経緯を語り出す。一通り聞いて納得した様にディアナは頷く。

「ふうん。君達、レイザーと闘った直後だったのね。納得。彼、人間にしてはかなり強いからね。あつ、でも君達にはアイツが一緒にいたじゃない。何とでもなったんじゃないの?」

「ああ、カームの事? それはね…」

「カームなら『これも君達の試練だ』つつつてどつか行っちゃったぜ。今回のこのゲームはオレ達の力でできるだけクリアしてほしいらしくてな」

「あー…なるほどね。合点いったわ。だからあの時何もしなかったのね。つまり君達はアイツの弟子って事?」

「うん。そうなるね。コレが最終試験だった」

「ふうん……。ちよつと面白そうね…そうだ! いい事思いついちゃった♪ とりあえず、今日明日はダメージの回復に努めてね。明後日から私が少しだけ君達の面倒見るわ!」

「いや、それは嬉しいけど…いいの?」

「いいのいいの♪ 片付けのお礼よ。さあ、休んだ休んだ!」

ディアナに追い立てられ、あれよあれよと部屋に連行される一向。ディアナが何を企んでいるか分からないまま半分強制的に休む事になった。

次の日になると、昨日の怠惰的な雰囲気から想像できないほど家庭的な雰囲気を発したディアナが、彼らの世話を献身的に行い始めた。具体的には、朝早くからエプロンを付けて料理や家事をする姿が見られた。

女神の格好のままエプロンを付けている為にシユールな光景にも思えるが、実際には彼女の手際があまりにも良く、殆ど違和感を持たせない。聞けば、「昔とつた杵柄だからね」と答えた。

その様子を見て、レオリオなどは鼻の下を再び伸ばし始め、カルトの眉間の皺がより深くなった。ともあれ、ゴン達は回復したら何が起きるのかと戦々恐々しながらも、治療や回復に努めていった。

そして…滞在3日後、ディアナが朝食後にエプロンを脱いで、全員を外へ誘った。

「さうて、殆ど回復したみたいね！ 若いから回復も早いわね。じゃ、やろつか」

「えっ…何を？」

「私が君達を直々に鍛えてあげるわよ！ 君達だけの特別サービスね！ いいから掛かってらっしゃい？」

「いや、いいのか?」

「何遠慮してんのサ。…あー。この格好じゃアレかな? んじゃ、ちよつと姿変えるねー」

そう告げると同時に、ディアナの姿が変化していく。頭から角が生え、背中から羽が伸び、尻尾が生えて手足の爪が鋭くなってゆく。腕や脚などにはうつつすらと鱗が見え隠れし、首周りは毛皮で覆われている。

それと同時に、莫大なオーラの奔流がディアナの周囲に巻き起こる!

「な…! 何だこりゃ!! バケモンじゃねーか!!」

「あーっ! 女の子にバケモンなんてヒドイー! そんなだからレオリオ君はモテないんだよっ!」

「いや、格好とかじゃなくてな…その、オーラが…」

レオリオがタジタジになって答えるが、他のメンバーも同じ気持ちだ。あまりにも莫大な量のオーラが彼女を中心に渦巻いている。

「いやいやいや…。あんた達、仮にもアイツの弟子でしょ？　あたしなんてアレに比べりやまだまだよ」

「ソレはそうだけど…」

「まあ、次元が違いすぎて理解が及ばなかったかな？　それとも全力は見せてなかった？　どっちにしろ、今度見せてもらうといいわね。絶望するから」

「…それで？　フツに闘えばいいの？」

「あ、そうそう。それなんだけど、私が貴方たちから聞いた情報と、『爆弾魔』って情報から想像した能力を再現してみるね。んで、色々試してみるからそれに対応してみよう！　とりあえず、3人組でしょ？　私もそうするね」

ズズズ…

見る間にディアナはオーラを切り離し、自らのコピーのような念獣を作り出す。いわゆるダブルに近いシロモノだ。3人だからトリプルだろうか。

「爆弾でしょ…とりあえず思いついたパターンを色々試してみるから、全員で掛かってらっしゃい」

そこから、ディアナによる一方的な蹂躪が始まった。



ボムツ!!

「ハイ残念、死亡ー」

実に3時間、彼らは闘い続けていた。現在爆風によってキルアが吹っ飛ばされたところだ。

「お、おのれ……！ クソ女！ 大体絶対無理じゃねーか！ どこに爆弾あるかわかんねーよ!!」

「ハアア。これだから未経験者は……！ あのね？ 私の故郷じゃこんなフツツにあるからね？ むしろ日常茶飯事よ。一発の威力を相当弱くしてんだから文句言わないの。ガチバトルじゃ一発で致命傷だからね。とりあえずパターン3の設置型透明爆弾、これ一通りやれば一回休憩しましょうか」

現在、透明に設置された地雷タイプの爆弾能力者を想定したバトルを行っている。しかし、まず爆弾が見えない。そして触れたら爆発すると言う悪質きわまりない能力に、どう対処したら良いか分からないと言ったところだ。

完全に見えないわけではなく、かろうじて《凝》で見破れる程度である。しかし、ディアナの体術も特級であり、しかもそれが3人がかりで襲ってくる。数では有利だが、《凝》に神経を費やすことは非常に難しい。体術に対処していれば、爆弾が容赦なく爆発し、割とキツイダメージを受ける。おかげでゴン達は徐々に、ダメージ箇所にとつきにオーラを集中出来るようになってきていた。

ちなみにパターン1は、単純に拳で殴られたら爆発するタイプ。パターン2は握られ

たら爆発するタイプだった。いずれもボコボコにされ、対処できないまま次のパターンに移っていた。

「終了了ー！ あゝいい汗かいたわね！ たまには運動するのも悪くないわー」

開始から5時間後、ようやくディアナが訓練の終了を宣言する。メンバーはぐったりと倒れこんでいる。言葉を発する気力も無い、といったところだ。そして、そんな彼らに向き直り、ディアナが総評を述べる。

「うーん。結論！ アンタ達、ダメダメね。逃げ回って正解よ。闘ってたら万全でも普通に通にぶつ殺されてたわね。まず、ゴン君。君は一発の威力は大きいけど、それ以外がからつきしダメね。地面殴つての攪乱はよくあるパターンだし、その後が単純すぎ。《隠》とか使わないと話にならないわ。オーラ移動もまだまだだしね。ただ、肉体性能が他のコとは別次元でいいからそこを活かすといいわね。次に、キルア君。君は速いのはいいし、雷も良い感じだわ。でもね、まだまだ動きが単調で見切りやすい。決定打もあまり

ないし。それに君は特に爆弾に対する相性が悪いわね。置き爆弾とかされたらアウトじゃないの。もうちよつと複雑な動きを覚えるべきね。あ、カウンター攻撃だけはよかつたわ。カルトちゃん。アンタの紙吹雪、威力弱すぎ。搦め手としてはいいんだけど、これもやつぱり決定打に欠けるわね。せめて爆風に吹つ飛ばされない程度の攻撃力、または防御力を付ける方法を探ったほうがいいわ。最後にレオリオ君。君はヒーラーとして中途半端！ ヒーラーならヒーラーで、全力でヒーラーしなさい。能力的には悪くないんだから。熱くなるのはいいけど、一番全体見なきやいけないポジションじゃない。君が崩れると一気に崩れるわよ。心した方がいいわ」

一気に全員分の所見を告げたディアナであったが、これは「ディアナの感想」である。彼女は弱いとは言え、暗黒大陸深部の住民だった者だ。人間界で換算すれば潜在オーラは100万を余裕で超える。顕在オーラで言えば3、4万はいくだろう。しかし、彼らはそれを知らないため、著しく落ち込んでいる。

レイザーに続き、格の違いを見せつけられたためだ。特にディアナには手も足も出なかった。彼女があからさまな舐めプをしているにもかかわらず、だ。

だが、ディアナは容赦しない。そんな軟弱な感情など向こうでは唾棄されるべき物だ

からだ。

「さくて、ちよつとオーラ整えたらまたやるよ。とりあえずパターン1から3までを繰り返しね。ふふ…アイツにちよつとでも貸しを作っておかなきゃね」

「ま、マジか…これ、生きて帰れるのか…？」

「でもやるしかないよ…。ディアナさん、イキイキしてるし…がんばろ…？」

「もうなんでも来いつてんだ…とりあえず、なんとか今日中にはクリアしようぜ」

「あのクソ女…！！ 絶対にハナを明かしてやる…！！」

そして、その日の訓練は夜遅くまで続いた。

118、想い

「ハイ、そこ」

ボムツ！

「ぐツ!!」

「ゴン！ 回復だ!!」

「サンキューレオリオ！」

「死ね、クソ女！」

「ふふくん。何回も言ってるけど、それじゃ本体が疎かになるわよ。ほら」

ボガンーン！

「ぐうっ……！」

「カルト!! 下がれ！ オレが行く」

「おお、速い速い。でも残念。取り囲まれました」

ドドドドドーン!!

「ガアアアツ!!」

「キルア!!」

「ダメだ！ 回復が追いつかぬエ！」

………

「終了了了！ 前衛、中衛全滅つと。何回目かしらねー。じゃ、回復したら次のパターンね。それとも、もつかいやつとく？」

あれからかれこれ10日間、彼らはディアナと相対し続けた。

爆弾能力者のありとあらゆるパターンが試され、その度に彼らは吹っ飛ばされ続けた。パターンの一例を挙げれば、接触により無生物を爆弾に変えるタイプ、念獣爆弾（地上・空中）タイプ、カウントダウンで爆発する時差タイプ、投擲による爆発のボンバーマンタイプなど、ありとあらゆるバリエーションが試された。

また、爆発自体も最初は衝撃のみだったが、徐々にダメージがアップしてきている。現在、オーラでガードしなければかなりの重症になる威力となっている。これは彼らの知らない事だが、具体的にはゲンスルーの「一握りの火薬」^{トリプルフラワー}レベルに近い威力である。

それが、手を変え品を変え襲ってくる。《隠》によって爆弾が見えない事もザラだ。また、単純に1パターンだけでなく、それぞれのパターンを組み合わせてくるようになった為、更に厄介度が増している。

この日も結局全員が夜までポコポコにされて、ようやく解放された。

そして、次の日。

相変わらずディアナにボコられ、一通りのバトルを行った後でディアナが所感を述べる。

「う〜ん…動きは大分マシにはなつてきたわねー。でもまだまだだね。そんなんじや精々相討ちがいいトコよ。せめて私から5分以上は保つ様にしないとね〜」

「バ、バケモンめ…。本当にカームはあんなバケモンをあしらえるのか？ フツ〜にヤバいレベルだぞ?」

「コラそこ！ バケモンとか言わない！ まあ、気持ちには分かんでもないけどね。近くにいたら意外と分らないモンよ。それに、アイツの場合は特別だからね」

「特別…?」

「そう、特別。特別なオーラの持ち主よ。弟子なら心当たりあるでしょ？ そういう人物は例外なく優しい。それは偏に衆生を救う為、と言われているわ。ま、その代わりに衆生の害になる奴に対しては鬼か悪魔かって感じになるけどね」

「……なんかまるで神話の登場人物ってイメージだな」

「まるで、じゃなくてそれで合ってるわよ。太古から人々を導いてきた存在、それが『救世主』であり、『聖光気』の持ち主よ。ある意味歴史を動かす人物なのは間違いない。歴代がそうだったからね」

「…カームは…普通の人間。そんな大層な人物じゃない」

「カルトちゃん、それは本人がそう思っけていても周りが認めない。そういうものよ。いずれ祭り上げられるでしょうね。良くも悪くも」

「だって…ッ！ 彼はそんなこと望んでないッ!!」

「言ったでしょ。望む、望まないに関わらず、きつとそうなる。それが彼の使命」

「アンタに何が分かるッ!!」

「おや？ おやおや…？ カルトちゃん、まさか貴女…うふふ。いいわね、若いつてもね、それは叶わぬ願い。貴女と彼では存在の次元が違う。お互い不幸になるだけよ。諦めなさいな」

「決めつけるな!! そんなの分からないじゃない!!」

「残念ながら、『救世主』は最終的には破滅する。それは歴史が証明してるコトでもあるわ。そうなる前に離れときなさい。これは私からの忠告よ」

「……!! ならば、僕があの人を守護る!!」

「……私にもあしらわれるような雑魚がよく吠えたものねエ。それを言うんだったら最低限の“力”ぐらいは証明してみなさいよ。今のアンタじゃ彼の足枷。足を引つ張つて貴女のせいで破滅するってところかしらね。それとも破滅が待つても彼とゴツコ遊びができるだけでも幸せなのかしら？　チビのお嬢ちゃん？」

カームについてカルトに語るディアナのオーラは次第に強さを増し、やがて暴虐的なまでに膨れあがる。彼女自身は本音で語っている。多少は“救世主”に思うところもあるが、今語った事は事実だからだ。

そしてカルトに対しては心配半分、挑発半分と言ったところである。この10日間で、カルトの鬱屈した感情をディアナは見抜いていた。その揺れる感情も。その原因が彼であることに気付き、揺さぶりを掛けている。それは、人が大きく成長する為の前段階。それを上手く引き出すためだ。ディアナはカルトの「覚悟」を問うている。その想いの強さを。

そして、それはついに成果をあげる。

「…………ツ!! アンタなんて大ッ嫌い!!! そんなことを言う奴は絶対ッ対に許さない!!!」

ゴゴゴゴゴゴ…

ズザアアアア!!

普段より一層強いオーラを纏った紙吹雪が舞い、カルトに貼り付いていく。それは次第に形を成し、甲冑の姿へと変化する。

【ブラチナスキン塵地螺鈿飾鎧】!!

その鎧は一つ一つの紙にオーラが込められ、陽の光に反射してキラキラと輝いてい

る。中には以前カームに作って貰った薄い銀で出来た紙も混じり、輝きを増している。また、絶えず全ての紙吹雪が移動する事で、まさに塵地螺鈿の如き様相を呈している。

そしてソレは白金色の全身甲冑であった。



それまでのカルトでは、紙を全身に貼り付ける程度にしかならなかった。そして、彼女自身が伸び悩んでいた。しかし、ここ一ヶ月近く、彼女の中で鬱屈していた激しい想いが遂に爆発した。念とはつまるところ想いの力でもある。精神修養を重要視されるのはそのためだ。その想いによって、念の威力は激しく揺れ動く。そして、その想いを爆発させた者は、一段階上の域に至る。つまり、能力の進化だ。家族の呪縛、使命、焦燥、そして彼女に新たに芽生えてきた憧憬と言う感情。ここ最近に至っては、冷静に振

る舞っているようにも見えて、もはや自分でももてあますほどのマグマのごとき感情の波が渦巻いていた。

それは「初恋」と呼ばれるものであった。

自分を自由にしてくれる存在、どんな自分も受け止めてくれる存在を彼女は心から欲していたことに気付いたので。そんな彼に認めて貰うことが何よりの喜びとなっていた。それはこれまでにはなかった感情である。

最初は家の仕事の一貫だった。そもそも男として扱われ、暗殺の仕事をごなす日々。肉体が成長するにつれ、女性としての作法を母親から仕込まれ、やがては政略結婚の道具とされる。カルトとしては、会ってもいない、好きでもない人物の伴侶になる事はゾルディックの女として生まれたならば当然の事であり、そこに疑問を覚えたことはなかった。

だからこそ、彼女は執着していた。次期当主とみなされており、家族内で1番期待をかけられている1つ上の兄、キルアに。それはゾルディックだからこそその歪な構造であり、キルアを大事に守るための措置であった。そこには1番上の兄、イルミや母親の影響も強く作用していた。

だが、実際に外に出て自分の愛する兄と行動するにつれ、彼女の中で少しずつ変化が起きていった。それは、「自由への渴望」である。キルアがゴンをはじめとする仲間達に影響され、自由に行動する所を間近で見、羨ましい、と思うようになっていった。

更に、家からの伴侶としてあてがわれた人物は、究極の力の持ち主だった。そう。全てを救えるような。カルトは期待した。彼にこんな自分を救ってもらえることを。そして、ドロドロと渦巻く愛憎の連鎖を忘れ、暖かく抱きしめてくれる彼に徐々に惹かれ始めていた。カルトの年齢ではそれが何か分からない。誰もそんなことは教えてくれなかったからだ。元々感情を表に出すような子供ではなかったのもある。

だが、彼女は気付いてしまった。そして、その想いは加速してゆく。彼の役に立ちたい。彼に認めて貰いたい。彼に甘えたい。彼に受け止めて貰いたい。彼に自由にさせて貰いたい：様々な想いを彼に抱いてしまっていた。

その想いが一層加速したのは、ビスケット・クルーガーの存在である。いつの間にか師匠仲間の一人として現れて、その力は強力無比。見た目は始め子供の姿で、年齢は50代ということで警戒はしていたが、そこまで脅威には思わなかった。彼を狙っていることは初めから分かっていたが、せいぜい自分の使命の邪魔になる程度だと感じてい

た。

しかし、自分自身が想いが加速するにつれ、ビスケの存在が大きくなるのしかかってくることとなる。現在カルトは彼とは弟子としての関係性しかない。しかしビスケットは同じ師匠だ。その時点で大きく差をつけられている。そして、その力の差も絶大だ。更に悪い事に、ここ最近では彼と2人だけで行動するようになり、美女の姿を取るようになっていた。それに対して、自分はどうか。未だに子供な姿であり、幻影旅団にはタイマンで勝ったものの、後から聞いたらビスケは圧勝していた。そしてその力の差は離れるばかり。一刻も早くこのゲームをクリアして、彼とともに行動しなければ、またあのドロドロに戻ってしまう。自分は救われないまま終わってしまう。

そういった危機感が、ここしばらくは非常に高まり、あとわずかで感情の波が溢れてしまうところまで来ていた。

それをディアナは押したのだ。カルトを挑発することによって。

そして、見事に溢れた感情は“力”へと昇華した。それが、この能力の由来である。

彼に救って貰いたい。しかし、同時に彼に認められ、彼を守護りたい。そういった想

いが、彼の象徴である白金色をモチーフとした甲冑を示す。その性能は――



「ふうん。なるほどね。ちつとはマシになったじゃない。でもね、そんなんで乗り越えられるような甘い壁じゃないのよ。今からそれを教えてあげるわ。アンタ達！ 手出し無用ね」

ディアナがゴン達に命令する。もつとも、一部始終を見ていた彼らもここは手出し無用と感じていた。

「……」

カルトが普段から愛用していた鉄扇を持ち上げる。すると、そこに甲冑の紙吹雪の一部、特に銀細工が剥がれ、纏わり付く。そして――一振りの薙刀が出現した。

「ふふふ……いいわねエ。それこそが若さの特権！ ……では、来るがいい。我こそは、魔の従者」、*「王の守人」*、そして *「ゲームマスター」*、貴女の覚悟の強さ、見せて貰おう！」

その瞬間、カルトの周囲全てが爆発する。その威力は一つ一つが「一握りの火薬」《リトルフラワー》を越える威力である。

「カルトツ!!!」

思わずキルアが叫ぶ。その凄まじい威力は致命傷になりかねない。しかし――

シューウウウウ…

爆風の煙の中から現れたのは、変わらず白金の鎧を纏い、薙刀を構え、突撃の姿勢を見せるカルトの姿だった。それは、こと防御力に関しては、桁外れな性能を示唆してい

る。元々が紙吹雪であり、オーラの具現ではないために出来る事でもあり、元々の素材の効果でもある。紙とは言え、現存する物質である事には違いが無いからだ。また、幾重にも層を為していて、それがクッションとなり、また絶えず動き回る事で衝撃をより緩和している。

ドツ！

カルトは一足でディアナの元までたどり着く。その動きは今までとは段違いである。筋肉を紙吹雪の鎧で補強している為だ。その速さはキルアにも迫る。

しかし、その攻撃をのんびり見ているディアナではない。カルトの薙刀の動きに合わせてカウンターで反撃を行う。元々のオーラの性能が桁が違うため、パンチの一発でも致命傷だ。これまでは本気で手加減していた。彼女からしたら卵が割れないようにそつと撫でる様な力加減だ。しかし、今回に限っては手加減をかなり緩めている。そう、卵が割れてもいいぐらいに。

ドパアンツ！

「「!!」」

パンチが顔面を貫通する！ 思わず腰を浮かせるゴン達だったが、カルトの頭はそこには無かった。鎧の中に本体は潜り込み、散った紙吹雪はそのままディアナの顔面に纏わりつく。

「おっと、コレは中々厄介ね…」

ディアナが思わずボヤク。顔全体を覆われ、視界を始めとする知覚がかなり封じられた。絶えず流動する鎧だけあって、そんな芸当も可能である。

続けてカルトがその薙刀をディアナに対して突き刺さす！ と同時に、激しい爆発音が辺りに響く。

その爆風によって、カルトは吹っ飛ばされる。一方のディアナは平然としている。顔面の紙も剥がれている。つまりオーラ差である。その有り余るオーラは多少の爆発などものともしない。剥がれた紙はカルトへと戻り、再び衝撃による凹みを修復する。しかし……

「……ねエ。ディアナの様子、変じゃない？」

そう。ディアナはそのままフリーズしていた。そのオーラも頭部や腹部を中心に激しく揺れ動いている。やがて…

「ガハッ！ ペッ!!」

ビチャッ

ディアナが「何か」を吐き捨てる。ソレは血反吐と共に吐き出された針状の物だったが、やがて振動し、液体を振り払いながら元の姿へと戻ってゆく。

「ソレ」は紙吹雪だった物だ。

やがてカルトの元へと帰っていき、薙刀の一部となった。

「…上方修正ね。こんな事までやってくる奴は久しく居なかったわ。認めましょう。貴女は強い」

「……………」

「でも、相手が悪かったわね。私がこれから貴女に絶望を見せる。一撃で決める。防ぎなさい。耐え切ったら貴女の勝ちよ」

ゴゴゴゴ……

大気が振動する。そして、その莫大なオーラがディアナの右手に集まり出す!! その威力は、レーザーのボールを遥かに超える威力!

ディアナはその右手をカルトに向ける。

「これは、今までの貴女なら死に至る程の威力。耐えて見せなさい!」

シュウウウ…ドウツ!!

極大のビームの如きオーラが発射される！

「!!!」

カルトは鎧を解き、前面に大きな盾を形成する！ 本体も防御体勢に入った。しかし
：

ドンツッ!! ガガガガガッ!!!

着弾。そしてカルトは盾諸共オーラの奔流に呑み込まれる。側から見たら完全にカルトは直撃しているように見える。だが、その激しい衝突音だけがカルトの無事を伝え
ている。

カルトは盾を円錐状に形成していた。そしてそれはオーラの大部分を後方に受け流
していた。

しかし、それでも強大な力の奔流は彼女の盾を少しずつ削りとってゆく。

「カルト！ 頑張れ！！ 堪えるんだーッ！！」

キルアが叫ぶ。だが、抵抗する音は徐々に弱まり、やがて完全に飲み込まれた、かのように思われた。

しばらくその状態が続き、やがてオーラの奔流は収まる。

シユウウウウ…

風が煙を吹き飛ばす。中から現れたのは…：ボロボロの状態で、それでも防御体勢を取るカルトの姿だった。既に服はその意味を為しておらず、皮膚は重度の火傷の様な状態である。しかし、そんな状態でも彼女は立っていた。

ギリギリだった。しかし、そのギリギリを保った要因は、彼女の前面に展開された銀の紙片だった。

「……………すばらしい」

そのディアナの声に反応し、銀の紙片が集まって渦を巻く。そして、凝縮したかと思えば、ドリルの様な形を作り、そのままディアナに向けて発射された。

「僕が……………まもる……」

最早カルトには他の事は見えていない。ただひたすらに敵を排除する。それだけを目標に、執念で立っていた。

ギヤリギヤリギヤリ！

凄まじい衝突音を立ててディアナの防御に差し出した手を抉る。しかし残酷なまでのオーラ差によってダメージを殆ど与えない。

やがて、カルトがゆっくりと倒れる。限界だったのだろう。そのダメージも、オーラも。やがて攻撃の為の銀吹雪も力無くその場に落ちていった。

「よくぞ耐え抜いた…見事なり」

次の瞬間、背後でオーラを凝縮する音が響く。

「!!」

思わず振り向いた先には、ほぼ全裸のカルトがそこにいた。そして、その次の瞬間には、最小の動きで目を狙い、2本の指にオーラを集めて攻撃を仕掛ける姿があった。

刹那の瞬間、ディアナは本当にうれしそうに笑った。

ズンツ

誰もがカルトの攻撃を食らうと思っていた。しかし、結果はディアナの攻撃が「先に」当たっていた。

腹部に強烈なパンチをもらったカルトは、今度こそ力なく倒れこむ。先ほどまでカルトが耐え抜いていた場所には紙吹雪が舞っていた。

そう。カルトは「形代」シキガミを使用していた。銀吹雪に依り代を混ぜ、突撃させた上で背後に周り込ませたのだ。そして、莫大なダメージを耐え抜く。それこそ致命傷の一手手前まで。そして無理やり攻撃を敢行し、ほぼ死に至る寸前で依り代に肩代わりさせると

いうカラクリであった。

だが、それでもディアナは規格外である。超反応のカウンターで、カルトを一撃のもとに沈める。きちんと手加減した上で。そうしてディアナに寄り掛かるようにして倒れたカルトを抱き上げ、ディアナは告げる。

「“力”の証明、見せてもらった。私も前言撤回しよう。お前ならば、あるいは“救世主”の運命を変えられるかもしれぬ。だが、ゆめゆめ忘れる勿れ。それは修羅の道。進歩を止めた時、破滅が訪れる……ふつつ。寝顔はカワイイものね。少し休みなさい。貴女は自分の想いを貫き通したのだから」

119、羽化



「[[[.....]]]

「さて、あなた達。見たわね？ この子は1段階上に至った。念とは想いの力！ その
想いこそが、人を一段階上の領域へと導くのよ!!」

興奮してまくし立てるディアナの腕の中には、力尽きてぐったりしているカルトが
いる。どこから取り出したか分からない布をかぶせられてまるで寝ているかのようだ。

「もうこの子はあなた達とは別次元の領域に至ったかもしれない。この年齢でそれは驚
異的な事よ。さて、あなた達はどうする？」

ディアナがゴン達に曖昧な質問を投げる。しかし、それは無茶な注文だ。カルトは自分の可能性を探り、試行錯誤をしながら伸び悩んでいた。つまり土台はあったのだ。その土台は一朝一夕で出来るものではない。ひたすら地道な積み重ねの上に存在するのだ。その上での激しい想いが彼女を高めさせるに至った。

で、あるからして、彼らに答える術はまだない。それ以前に、カルトとディアナの死闘がリフレインしている最中だからというのもある。

「まあ、今すぐには答えが出なくてもいいわ。今起きた出来事をしっかりと覚えておいてね」

そうディアナが締めくくる。しかし、レオリオがそれを遮る。

「…話を終える前に、カルトの容態は大丈夫か？」

「あつ…そうね……。うん…。やっべ、ちよつとまずいかも」

レオリオが声を掛けたのは、カルトの顔色がどんどん悪くなつていったからだ。医者としては見過ごせない。やけどなどは身代わりで移せたかもしれないが、最後の攻撃で

内臓系がやられていたかもしれない。

「おいつ!! マジかよ!! 早く渡してくれ! すぐ治療するからよ!!」
「あく大丈夫。今回は頑張ったこのコへのご褒美に、特別に私が治してあげるわ。
ちよつと待つててね」

そう告げたディアナは、オーラを練り上げ、カルトにその練り上げたオーラを吹きかける。すると、みるみるうちにカルトの顔色が元の状態に戻っていった。

「!!?」

「おいおいおい! なんことまでできんのかよ! つーかそれって…」

「ご明察。【大天使の息吹】よ。ま、カードよりは効果は落ちるけど、アレのオリジナルは私。ちなみに、カードの方はシステムが補助してるからもつとすつごいわ」

「…どんだけやればそれだけの能力になるんだよ……」

「ああ、貴方はヒーラーだからね。気になるのは分かるわ。でもね、貴方のも人間基準だと相当なモノになってきてるんだけどね」

「それはありがとよ。だがよ……オメーとかカーム見てると自信なくすぜ……」

「比べる基準がおかしいからね？　ま、高みを目指すのは悪いことじゃないわ。そうね……これから貴方にはより地獄のような回復の経験を課しましょうか。回復に関しては熟練あるのみ！　そうすることで、貴方もより高みに至れるかもね。後は貴方の想い次第」

「オレの……想いか……」

「ヒーラーになるからには、それ相應の想いがあるんでしょ？　ならば、それを高めなさい。この子ほどとは言わないけど、初心忘るるべからずよ。想いを高める方法は任せるわ。それが出来れば貴方も合格ね」

「……いいだろ。オレはやってみせる。もう誰も死なせねエ」

「その意気よ」

「なあ……『地獄のような回復の経験』って、まさか……」

「あつ、それ聞いちゃう？　聞いちゃう？」

「ウゼえ……でもなるほど、レオリオ含む『オレ達』か」

「正解〜！　とりあえず明日から瀕死一步手前まで追い詰めるからよろしく！　大丈夫！　彼が覚醒したら後遺症も残らないから！　いざというときは私もやるから心配しないだね」

「何が心配しないで、だよ！ 不安しかねーだろ!! …でも、まあカルトがあそこまでやれたんだ。オレ達も負けてらんねーな。なあ、ゴン」

「……うん。オレは…強くなるよ」

「…オメーも思うところがあつたんだな。ま、頑張ろうぜ！」

「…最後にディアナ、聞いていい？」

「何かしら？」

「前に教えてくれた、オレの母親と古い馴染みだつていつてたよね？」

「ええ、そうね」

「さっきの自己紹介？ で、魔の従者、とか王の守人、とかいつてたね。アレって…どういう意味？」

「ああ、アレね。私の故郷では真剣な決闘するときには二つ名を並べるのが暗黙の習わしなのよ。その二つは私の古い二つ名ね」

「もしかして…だけど…イヤなら答えなくていいけど。もしかして、オレの母親って…魔、とか王とかつく人？」

「……それには答えられない。それで察して？」

「なるほど。わかつた。じゃあこれからオレが勝手な推測を話すね？ 答えられないな

ら、答えなくていいから。もしかして、オレの母親って…ディアナより強い？」

その問いに対して、ダイアナはニツコリと笑うのみだった。



それからの日々は、凄惨を極めるモノだった。ディアナの攻撃は苛烈さを一層増した。使うモノは爆発系と打撃のみだが、一歩間違えば即死の威力での爆発を起こすようになっていた。打撃も、だ。そして、回数を重ねれば重ねるほど当然ながら重大な負傷をしてしまう事も増えた。具体的には皮膚が広範囲でⅢ度以上のやけど状態になるなど可愛い方で、筋肉組織まで吹っ飛ばされる。また、手足の先端が吹き飛ぶ、顔面の半分以上が焼け付く、など、トラウマになる程の負傷である。誰かがそうなってしまうても、ディアナも攻撃を一時止めてくれることなどない。今のところディアナの攻撃を押しとどめてくれるカルトが何とか食らいつき、爆風の影響もそれほど受けないので何とかなっているようなものだ。レオリオは必死に回復しているが、すぐに回復できる程度の怪我ではない。そのうちカルトが強烈な一撃を食らって倒れ、その後すぐに回復できないダメージを次々と喰らって倒れてしまい、全滅となる。

以前は全体が反撃不能で全滅判定だったが、今回は文字通り、全滅、である。行動不能と言う意味での全滅だ。その二つは似ているようでまるで違う。徹底的に、それこそ全体を瀕死まで追い込むまでやめないとということだ。反撃不能で全滅だったときは重大な欠損まではなかった。せいぜいオーラが尽きる、回復に手間取る、気絶する、など

という程度だ。しかし、現在はそんな生易しいものではなくなってしまうた。

誰かが死ぬ前にディアナが全体に息吹をかけて、再び拷問のような闘いが始まる。いや、もはやそれは闘いなどではなく、拷問そのもの、となっていた。

また、ディアナの力加減は絶妙で、即死、とまではいかない程度の瀕死に留めるのが上手かった。後一步間違えば死ぬという手前で止める為には相当な見極めと実力差が必要になる。それは彼らも嫌という程理解していた。

それでも、彼らは折れなかった。

圧倒的な実力を前にしても、再び立ち上がる。何回折られても、次こそはと死力を尽くす。試せることは全て試し、何とか食らいつけるよう、圧倒的な暴力に抗う。

カルトは自分の力を更に高めるべく、死地へと突っ込んでいく。それは偏に“彼”についていく為。キルアはそんな妹に負けたくないという一心で。レオリオはヒーラーの技術を更に高める為。そして、ゴンはまだ見ぬ父親と母親に恥じないように。

彼らは自分では気付かなかつたが、歴戦の能力者以上の実戦経験を短時間で経験していた。

自らの出来る事、それを最大限に、効果的に發揮させるための方法を超苛烈な実戦に

よって経験していった。夜になってからも、ゴン、キルア、カルトはオーラの最大値を伸ばすべく《練》の長時間維持の訓練を欠かさず行い、レオリオは医学知識をくまなく頭の中に叩き込むべく勉強し、時には自分の身体も使いながらより効果的な回復、再生を試していった。

そして、カルトの覚醒から更に10日間が経った。

ゴンは、彼の最大の長所である肉体の強度を活かし、超人的な身体能力を更に底上げすることに成功した。これは彼の能力、「進化する変身」^{ストロングゴン}がようやくよく効果を十全に発揮し始めたということだ。この能力は細胞にオーラを行き渡らせ、活性化する能力である。今までは強化率も筋肉もそれほど大きくなかった為にあまり効果が無かったように思われていたが、それは違う。着実に、確実に、修行や激しい実戦を通して彼の中でこの能力は育ってきていた。この能力は進化することが最大の特徴だ。鍛えれば鍛えるほど強くなる。そして、ダメージを受ければ受けるほどに超回復によって強化されていくのだ。彼はこの20日間、常にこの能力を発動させていた。

そこにきて、この地獄のような戦闘である。やられればやられるほどに彼の細胞は強化を促し、より力強くなっていった。念を支える大きな一つである肉体の性能。それが大きくなれば当然オーラも増える。具体的に言えば、もう潜在オーラ量はゲンスルーを超え、7〜8万程度の量に達している。これは、この4人の中ではカルトに次ぐ2番目の大きさとなっている。オーラが増えれば増える程、〔進化ストロング変身ゴ〕の強化率は増えていくというインフレスパイラル。まさに彼は今、伸び盛りであった。

彼の弱点として顕在オーラ量が少ないと言う部分があるが、それでも最早上位ハンターレベルと堂々と言えるぐらいの数値になっているし、もう一つの発、〔ジャン拳〕も含めて考えると、その弱点すらも埋める程の威力となっている。大体ビッグバンインパクトと同じ程度と言えばそのヤバさが伝わるだろうか。その代償として、夜中になると全身に激しい筋肉痛が発生し、眠れないほどになっていた。しかし、彼はその持ち前の精神力でその苦痛を耐え抜いた。

キルアは伸び悩んでいた。彼は以前針を抜いた影響からか、非常に大きくオーラ量も伸ばしていた。具体的には以前の1.5倍ほどだ。つまり、彼の潜在オーラは既に7万5千ほどある。しかし、彼の悩みとして、発電量の少なさがあつた。いくら目にも止まらぬ速さが実現しても、発による攻撃力が少ない。《流》もそのスピードについていけな

い、というのもある。よって、彼はディアナに頼み込んで、自分にだけ雷の攻撃を追加してくれる様にお願ひした。ディアナは喜んでその提案を受け入れた。

ただ、流石に彼女も雷変化は苦手らしい。しかし、それは威力が弱いという意味ではない。威力が強過ぎた。一撃で消し炭になる程の超火力がキルアを襲う。コレは彼が雷の親和性があつたから耐えられる様なものであり、他のメンバーが喰らつたら即死である（カルトを除く。カルトは絶縁性の高い紙を纏っている為、そこまでのダメージは受けない）。もちろん、キルアもただで済む訳がなく、重症を負つてレオリオに治療を受けまくっていた。

そんな雷を浴び続け、喰らい続ける事により、彼は遂に全身に鎧を発現させる事ができた。鎧といつてもカルトの日本式甲冑とは違い、戦隊ヒーローモノのアーマーという見た目である。そのアーマーの効果で、電気を発電する力が格段に上昇した。また、このアーマーには充電効果もあつた。つまり、電力を吸収する力である。

これによつて、そもその防御力も格段に向上し、かつディアナの雷を大幅に威力を減じる事が出来るようになった。無論、爆発ダメージもかなり防げる様になった。攻撃力というよりは、防御力の大幅な向上をキルアは実現した。

カルトはあれからひたすらに自らの新技の発展性を模索していた。彼女の力はもう

4人の中では1番強い。それはその能力の特性にある。例の鎧と武器が攻防一体の役割を果たし、ほぼ万能と言える汎用性を誇るためだ。彼女には爆発によるダメージはほぼ無くなった。ただ衝撃は伝わるので万能ではないが。ディアナの手加減も彼女に対してはかなり緩めている。

それでもディアナを攻略できないジレンマから、カルトは更なる進化を目指す。即ち、一つ一つの紙吹雪の制御力、込める威力の向上である。こればかりはすぐに結果が出るわけでは無い。よって、基礎能力の向上を目指し、地道な訓練を夜に行なっていた。

最後にレオリオだが、彼は正に地獄のような回復体験をこの10日間で強いられた。殆ど死ぬ手前の仲間達を必死に回復する。その症状は様々で、凄惨を極めるものであった。そんな死屍累々の仲間達を少しでも早く、より早く治療を施さねばならない。それは自分も含めてだ。心が折れそうになった事は一度や二度では無い。それでも、立ち上がる。誰も死なせない為に。彼は寝る間も惜しんで能力を高める事に腐心した。

その成果あつてか、医学知識を深め、人体に精通することによって、徐々に彼の回復力は再生医療の域まで達する様になった。これは一般の能力者からすれば驚異的であり、凄まじい進歩である。彼は自らのオーラを他者と同調し、分け与えながら治療を促す。それはディアナの回復を参考にしながら圧倒的な危機感の元で育ったものであり、

単純な損傷で有れば時間をかければほぼ後遺症なく回復できる域まで達していた。

そして…

ボカアン!!

「ぐうっ!」

「レオリオ、いけるか!」

「40…いや、30秒稼げ!」

「了解、押し留める!」

「喰らえ! 【韋駄天】!!」

「【千本桜・咬】!!」

「甘い!」

ドツガアン!!

「くうっ!!」

「…ッ! まだまだあッ!!」

彼らが不屈の闘志で立ち上がる。しかし、そこでディアナの動きが止まる。

「…………ふうん。これも耐え抜く、か。ここまで」

「!? まだ終わってない!」

「いえ、今回はここまででいいわ。いえ、訓練は全て終了よ」

ディアナが終了を宣言する。彼らにとっては唐突な事であるが、本人は既にオーラを引っ込めていた。

「何故…! まだ貴方の半分のみ力すら引き出せて無い!!」

「当初の目的を思い出しなさい。貴方達は何の為にここまで頑張ったのか」

「それは当然！ ディアナに勝つため!!」

「ブツブツ。ハズレー。全く…私も力入れ過ぎたわね。そもそも貴方達は何でここに逃げて来たのよ」

「あつ…！ そうだった…」

「やべ…全然忘れてた」

「そーゆー事。んで、そのレベル迄全員無事に到達したわ。よつて終了」

「え〜…一泡吹かせたかったな…」

「…あのねエ。ハッキリ言っとくケド、もう貴方達は既にここじゃあ相当な強さになつてるわ。そうね…念能力者の上位3%つてトコかしら？」

「いや、全く実感無いんだが。主にお前のせいだ」

「私はその枠から抜きなさい。存在そのもののレベルが違うんだから。誇つていいわよ？ 第一、弱点だったオーラの攻防力移動もかなり改善が見えるし、戦闘における思考の瞬発力も桁違いに上がってるわ。やっぱ命がかかると人つて成長が早いわね〜」

「よく言うわ。フツーならトラウマレベルの事しやがって」

「まあまあ。とりあえずよつぽど油断しなければ瞬殺されなくらいの力は身についたつて事よ。私が言うんだから間違いないわ。さ、今日はここまで。そして身体を休めて明日には行きなさい。送別会はしてあげるわ」

そう一方的に告げられ、解散される。イマイチ納得いかずモヤモヤしていた一行だったが、食事をしたら4人とも疲れ果ててすぐに眠ってしまった。この1ヶ月近く、体力、精神力を極限まですり減らして闘ってきたのだ。それも当然と言える。彼らは束の間
の休息を楽しむ。

いよいよ彼らは、自由に飛び立つ為の準備ができたという事だ。

後は飛び立つのみ。

ディアナはそんな彼らに毛布を掛けながら呟く。

「ジンもイヴリスも良かったわね。貴方達の息子は順調に成長しているわ。願わくば、貴方達に彼が出逢えますように」



「なあ…ガキどもはいつ出てくるんだ？」

「さてな。あれだけオレ達をコケにしやがったんだ。出てきたらタダじゃ済ませないがな」

「今は足りない頭で作戦でも練ってるんだろ。1ヶ月で何が変わるか分からんがな」

「いくら長期間引きこまれるとはいえ限度がある。奴等は必ず出てくる筈だ。補給も必要だしな…。オレ達はそれを待ち構えればいい。どこのシヨップに行くかは分からんが、奴等に移動系スペルはほぼ無い。【複製】^{クローン}もだ。これを埋める為に、行くとしたらマサドラが可能性としては一番高いだろう。逆に言えばそこさえ警戒していれば奴等はジリ貧だ。この長引いた鬼ごっこ、決着をつけるぞ。恐らくもうすぐだからな」

ゲンスルー達は、あれから何事もなかったかの様に振る舞っていた。勿論それはカームの「後処理」のおかげである。彼らは気付いていない。既に自分達が再起不能レベルまで徹底的に分からされた事を。彼らは理解できない。この世には触れてはいけないモノがあつたという事を。

そして、触れてしまったらもう元には戻れない。彼等は生殺与奪を握られてしまっ

た。或いは今の忘れている状態の方が幸せなのかもしれない。これまでの事を見直して、非道な事に手を染めなければ。彼等の取るべき最適解は、逃げる事。そうすれば、彼も興味を失うだろう。しかし、そうなる確率は低い。よって、彼等の行く先は破滅しかない。

さながら、雛鳥に与えられる餌の様に彼等は使われる。それを知らない事こそが、彼等にとつての唯一の幸せだと言えるだろう。

「それにしてもよ…オレ達いつ髪の毛切ったっけ？」

「そりゃ、ゲンが切ろうって言ったからだろ？ 覚えてねエのか？」

「あ、ああ…そうだったかな…」

「そんな事はどうでもいい。確実に奴等から奪える様に準備しとこうぜ」

「そう…だな」

「今はやるべき事に集中するぞ。覚悟しておけよ…ガキども」

120、試練の終わり

「お世話になったね、ディアナ。ありがとう！」

ディアナの家で簡単な送別会を済ませ、彼らは全員で「山神の庭」の入り口へ向かう。その道中に彼らは別れの挨拶がてらの会話を続けていた。

「いえいえ、*“救世主”*の彼にもよろしくね」

「うーん……カームはやっぱそうは見えねエんだけどなー」

「そう思うのは当然ね。側からみりやただ特別な氣の持ち主ってだけだものね。でも、不思議とそうなっちゃうのよね。これまで見た中や聞いた中では例外は無かったみたいだし」

「……………」

「でもね。何事にも特例はあるわ。仮に『聖光氣』の持ち主であつても、必ずしも『救世主』になるわけじゃないみたい」

「!? それは、どういう…?」

「カルトちゃん、よく覚えておいて。『聖光氣』の持ち主は数多くの人々と交わる事によつてその内『救世主』となる。その逆も然りだけどね。では、その持ち主が、ほぼ一切衆生との関わりを断つたら…?」

「!! なるほど…それは厳しい条件…。でも…希望は見えた。礼を言つとく」

「ふふ…色んな意味で厳しい道よ。でも頑張りなさいな。応援してるわ。他の子達も達者でね」

「ああ、地獄みてーな体験ありがとよ。いつかお礼参りに来てやるからな」

「全く同意だぜ。覚えとけよ」

「ええ。その時は熱烈歓迎してあげるから、その日を楽しみに待つとくわね…最後に、ゴーン君!」

「えっ、何?」

「貴方もよくここまで頑張つたわ。両親を知る身として嬉しいわ。……貴方には特別な血が流れてる。だからこそ、自分を大事にしてね?」

「…？ まあ、何となくだけど分かったよ。ありがとうね」

彼らは歩きながら最後の別れの会話を続ける。そして、ディアナはゴンに上の言葉を告げ、ゴンの返答に満足したらしい。

その言葉に頷いた後、ディアナは彼らから離れ、元来た道を戻りながら言う。

「もうここが入り口。出る時は出たいと念じるだけ。さようなら。…みんな、クリアしなさいよ！」

◆
全員が大きく頷いたのを確認し、ディアナは去っていった。

「あいつも最後の最後までよくわかんなかったな。ナニモンだよホント」

「ゴンに言ったことの意味も分かんねーしな。ま、考えるだけ無駄か。それよか、『爆弾魔』の対策考えねーと」

「そう…だね。まずはそれだね。とりあえずここを出たらすぐさま襲ってきそうだけど」

「それはさすがにねーだろ…ほぼ一ヶ月だろ？　さすがに別の場所で張ってると思うぜ？」

「例えば？」

「そうだな…オレならシヨップで張るな」

「そうか！　カードとか食料とかの補充って考えるって事か」

「その通り。ついでに多分マサドラ」

「…あー魔法カードの補充ね」

「正解。んで、そうなった場合にどうするかだな。とりあえず万全を期したい。ここで作戦練ろうぜ。おい！　カルト！　オメーも参加しろや！」

「ん…めんどい…でも仕方ないか」

「…オメーはいつからそんな風になっちまったんだ？　ほんと、ディアナ並みに変化の激しい奴だな」

「あんな奴と一緒にしないで！ 全く…分かったよ。僕もちゃんと参加するから」
「分かればいいんだよ分かれば。じゃ、早速やるか。まずは——」

彼らは最後の打ち合わせを始める。決して油断することのないよう、万全の体制で『爆弾魔』と相対するために。彼らはディアナとの闘いの中で、念戦闘に絶対はないことを身をもつて体験しており、それと同時に連携の大事さや準備の必要性をイヤと言うほど理解していた。あまりにも圧倒的な相手に対して、折れずに立ち向かう。そんな経験は滅多に出来ることでは無い。いや、ほぼ無いと言つていいだろう。彼らは非常に貴重な経験をこの一ヶ月で体験していた。

今、彼らは具体的な『爆弾魔』対策を練つているところだ。しかし、既に彼らは一人一人がゲンスルーより強い。油断して当たつてどっこいどっこいと言つた所だろう。よつて、彼らが対策を練ることで、『爆弾魔』達に勝ちの目はほぼなくなりつつある。そこに『爆弾魔』達は気付かない。

丁寧に会長の記憶まで消された彼らには、まさか子供の能力者が上位3%の能力者であるということ想像できなかった。しかし、それも当然のことと言える。今まで戦闘能力で彼らに勝てるものはほぼいなかった。ましてや子供の念能力者だ。そんなことは想像も出来ないことだろう。

つまり――

結果はもう、見えていた。



ザッ――

「よオ。久しぶりだなあ、ガキども」

「ゲンスルー!! ……髪の毛どうしたの?」

「あ? 切ったんだよ。そんなことはどうでもいい。隙を突いてマサドラに来たみたいだが、残念だったな。【同行】^{アカンパニー} 2枚も使って撒いたつもりだったか? お前らの浅知恵などはお見通しだ。さあ、オレ達にカードをよこせ。それとも死ぬほど痛い目に遭いたいか?」

「くっ……ダメだ…勝てない。みんな、逃げるぞ! 【同行】^{アカンパニー} オン! エルディアナ!」

4人が揃って再びエルディアナに飛ぶ。明らかに逃げ込む態勢だ。

「バカめ。同じような間違いはせんぞ。【同行】^{アカンパニー} オン! ゴン!」

早くも彼らはゴン達に追いつく。彼らの【同行】^{アカンパニー}の数はこれでラストだ。残りは秘蔵の貴重なカード、『一坪の密林』しかない。それも【複製】^{クロージン}が足らずに後2枚だ。

そして、【同行】^{アカンパニー}で目の前に到着したゲンスルー達。システム上目の前に到着する魔法スペルは、逃げる事を許さない。ゴンはちょうど『一坪の密林』カードを手にしたと

ころだった。しかし、ゲンスルーがその手めがけて石を投げ、その石が手に当たってゴンはカードを手放してしまう。

「惜しかったなあ。ガキども。お前らの考えなどお見通しだと言ったろ？」

歩いてきてカードを拾いながらゲンスルーがつぶやく。カードは【複製】^{クローン}だったために、ゲンスルーの『聖騎士の首飾り』の効果によって、『真珠蝗』へと変身した。

「これで、お前らはこの方法は使えまい。さあ、死にたくなければカードをよこすんだな」

「渡すくらいなら…やってやる!!」

「おい、ゴン!! …くそっ! カルト、お前は逃げる!!」

「でも…でも…!!」

「いいから行け!!」

「…ッ! ごめん!!!」

「逃がさねーぞオ」

彼らは一斉に散らばる。サブは銀髪、バラは和服の女の子を追う。そして、ゲンスルーは、年長と思われる男とリーダーと思われる黒髪と対峙する。

「お前らはオレだ」

瞬間、ゲンスルーはゴンに速攻をかける。「リトルフラワー握りの火薬」での強襲だ。ゲンスルーの手がゴンに接近し、顔面を掴みにかかったとき、ゴンの口から「…パターン2」というつぶやきが聞こえた。



「……解せねエな。何故【アカンパニ同行】を偽装してまでオレを引き離「プツ！ アハハハハハツ

!!」

「何がおかしい!」

「あく笑った…! ちょっと勘弁してくれよ。マジで演技が失敗するトコだったじゃねーか! その落武者カットマジヤバいつて!! しかも3人揃って…プププププ…アーツハツハツハ!!」

キルアは相手の見た目のあまりのインパクトに再び腹を抱えて笑い始めた。最初の邂逅で笑わなかったのは彼の中では奇跡だ。しかし、そんな中ゴンがシリアスな場面で髪の毛について聞いてしまつて、更に状況は悪化した。おかげで彼は密かに太腿を強くつねり続けるハメになった。彼らに見せたキルアの悲壮な顔は、実は笑いを堪え続けて顔面が崩壊しそうになる寸前だったモノである。

「てめエ…殺す!」

「おっと…笑つてる場合じゃねーな。さて、やるか」

サブが動き出す気配を見せた時、キルアの服の上から念のアーマーで更に覆われる。サブはそれを見て、少し警戒すべきかと動きを止めた。

「珍しいタイプだな……ま、関係ねエがな」

結論からすれば、彼はこのアーマーを子供の趣味と断じた。多少防御力が上がった程度だと判断を下してしまった。しかし、それも当然と言える。子供の念能力者は少なく、更に熟練は少ない。……と言うかほぼいない。せいぜいいたとしても自分たちより劣る程度であると判断を下しても仕方が無いことである。

「オラー！」

サブの蹴りがキルアに放たれる。風切り音がする程の威力の蹴りだったが、キルアは難なくスカして後方に下がる。

「チツ…ガキのくせにすばしっこい奴だ。まあいい。いつまで保つかな？」

同じような攻撃が2、3度繰り返される。しかし、彼の攻撃は全てスカされてしまう。ここに来て彼は違和感を覚え始めた。

「てめエ…避けてるばつかりじゃねエか！ 腰抜けが！ ビビったか!」

あえて挑発する。しかし、当然ながらキルアは乗らない。そして、キルアがここで彼に問う。

「あのさあ…オツサン、爆弾使わないの？ それとも、アンタには使えないの？」

ビキビキビキ…

サブのこめかみに青筋が走る。あまりにも馬鹿にした物言いと、彼の力の事を言及されたためだ。そう。サブとバラは「一握りの火薬」は使えない。ゲンスルーを中心とした『爆弾魔』組で、ゲンスルーが中心として戦闘用の爆弾を使用する。その補助がサブとバラである。3人一組の能力であり、ゲンスルーが強力な「一握りの火薬」と「命の音」を使用する代わりに、彼らは爆弾能力を使うことは出来ないのだ。

つまり、彼らは本来一蓮托生である。そこを図らずも分断された形となってしまう。彼らの油断によって。

「ふっふっふ……てめエなんざ爆弾を使わなくても始末できるんだぜ？」

強がりに近い挑発を返すも、キルアは飽きたような様子で彼に告げる。

「なくんだ。期待して損した。ハズレだな。オレがゲンスルーがよかつたなー……。ま、いつか。じゃ、オッサン。終わらせるよ」

ザワツ…

終わらせる、というキルアのセリフと同時に、彼から凄まじい見えない圧がサブを襲った。別にオーラというわけではない。しかし、捕食者に睨まれた被捕食者のような気分にはサブは陥った。ここに来て漸く自分たちの失敗を悟り始める。

だが、あまりにも遅すぎた。

サブが「ブック」を唱えようとした瞬間、キルアの電気付き肘打ちがみぞおちに突き刺さった。距離はあったはずだ。しかし、それをモノともしないキルアの圧倒的なスピードと威力、そして電力によって、サブは逃げる意思すら持てずに、あえなく夢の世界へと旅だった。

「よしっと。これでOK。さて、他の奴等は……この様子じゃ心配するだけ無駄か」



「…仲間を大勢集めて、待ち伏せさせてたわけでもない……か。わからねエな。お嬢

ちゃん、こんな所に単独でオレをおびき寄せてどうするつもりだったんだ？」

「……面倒臭いから喋らせないで。僕は貴方に構ってる暇はないんだ。ハゲのおじさん」

「優しく聞いてやりやつけあがりやがって……！ 手加減しねーから恨むなよ」

「それはこつちのセリフ。そうだね……大体6秒」

「何の数字だ？」

「貴方を倒すまでに必要な秒数」

シユオオオオオオ……

「!？」

カルトの周囲にいつの間にか紙吹雪が舞い、鎧を形成する。しかし、その形状は少しディアナの時とは変化している。具体的には、両腕部の鎧のパーツが片方の拳に集中し、そこだけノースリーブのような状態になっている。そして、不自然な程に巨大なグローブの形をした右拳。

「なっ……!」

「それじゃ、いくよ」

強力な踏み出しで一氣に加速し、バラの顔に大きな紙吹雪の拳が迫る。その動きにバラは反応できなかつた。迫る脅威に対して、バラはようやくやく反応し、何とか攻撃をガードしようとしたものの、大砲の着弾音の様な音をたてて、ガードごと顔面を吹っ飛ばされた。

一つ一つのオーラが紙に宿っているため視認しづらいが、これは《凝》で攻撃したモノと同じだ。そして、カルトのオーラ量はバラの優に2〜3倍程度はあり、その特殊な顕在オーラ量はバラの防御を容易く貫く。

そして、彼はあえなく吹っ飛ばされ、地面を削りながら接地する。その飛距離から、かなりの威力がバラを襲ったことがわかる。カルトはそれを確認し、警戒を緩めずに慎重に彼に近づく。

「ぐはっ、べほっ……へ、へめエ…はぜ、ほれほどのひからが……」

「…なんて言ってるのか分からないな。でも、殺さないって難しいね。何とか出来たみたいで良かった。ってもう聞こえてないか。…死んでないよね? …うん。良かった」

バラにはカルトの声は聞こえていなかった。顔面が腫れ上がり、と言うかほぼ潰されたような状態だったため、逆によく意識を保てたモノである。

カルトの能力は格下相手だと殺してしまうような危険な代物であるため、カルトも自分なりに工夫したようだ。

バラは超級レベルの暗殺者から無事に生還することが出来た。五体無事、というわけではないが。そして、彼もまた、夢の世界へと旅立っていった。



トン、パシツ！

ゲンスルーの手を弾き、ゴンが後方へと飛び退く。その様子を見て、ゲンスルーは疑いを強める。

「…お前、オレの能力を知ってるな？ 誰から聞いた？ いないはずだがな…オレの能力を聞いて生きている奴は…」

ゴゴゴゴゴゴ…

「……ゴン!! やっぱオレは降りる!! すまねエが生命が大事だぜ! あばよ!

【リリッ離脱】オン!!!」

バシユツ!

「レオリオ!!!」

「クツクツクツ…：儂い友情だなア。どうだ？ 絶望したか？ 確かアイツはレアカード持ってたな？ だから逃げたか。ま、持っけていてもどうでもいいがな。さて…：覚悟はいいか？」

「…ブツク！」

「？」

いきなりゲンスルーの会話の途中でゴンがバインダーを出す。その奇怪な行為にゲンスルーは意味が分からず立ち止まる。

「いいか？ オレは問答無用でカードを奪うってやり方はキライだ。だからここで約束しろ。先に『まいった』って言った方が持つてるカードを全部相手に渡す…！」

「勘違いしてないか？ お前らは条件どうのこうのと言える立場じゃない」

「言つたら、これが最後の譲歩だ。約束がなければただの強奪！ そんな奴には死んでもカードは渡さない!! 約束無しじゃ、たとえ殺されてももうバインダーは出さない!!」

「…：お前も狂ってるな。オレと違うところがだが。いいだろう。約束しよう。ブツク！ オレの持ちカード131枚、指定カードは全部で96種」

「オレのカードは108枚、指定カードは89種」

「…『一坪の密林』と『一坪の海岸線』、『奇運アレキサンドライト』は持つてるな？」
「ああ」

「充分だ」

ゆらり…

ゲンスルーが構える。その姿からは歴戦の凄みを感じられた。しかし、ゴンの方を見ると

ギチギチギチ…

ゴンの肉体の軋む音がゲンスルーにも伝わり、彼の肉体は一段と引き締まる。そして、肉体からあふれ出るオーラが彼の身体を覆う。

「!? なるほど…言うだけはあるようだな。だが、無駄だ」

ピン……！

ゲンスルーが《堅》を行う。それは熟練のソレであり、まんべんなく張り詰められている。彼は正直、ゴンの事を侮っていた。しかし、今見た感じでは決して油断できない程の力はあるようだ。と当たりを付けた。頭在オーラ量は自分にわずかに届かない程度。しかし、肉体的性能はやや上かもしれない。唯一子供だから実戦は少ないだろうが、万が一があるだろう。ゲンスルーは、初めは能力を使わずに鬻り、心を折る予定だったが、その姿を見てから予定変更を行う。即ち……

ボムッ！

ゲンスルーは自ら飛び込み、複雑なフェイントを入れつつ攪乱した上でゴンの片腕を掴み、爆破する。彼はこの時、ほぼ勝利を確信した。

しかし次の瞬間、彼は腹部に強烈な打撃を喰らい、たたらを踏む。

「ガツ……！」

そう。ゴンはワザと喰らったのだ。ゲンスルーの「リトルフラワー握りの火薬」を。彼の顕在オーラは確かに見た目は少ないが、実は彼の肉体内部に大部分が内蔵されている。よって、ゲンスルーの爆破程度であれば、少し《凝》をするだけでほぼ防ぐ事が出来る。彼は本来なら片手を多少犠牲にする覚悟で臨んでいた。しかし、彼の想定は上過ぎた。

予想以上にダメージが無かったが、予定通り手薄になった腹部にゴンの最大の武器である強化された肉体による蹴りを喰らわせた。その結果、ゲンスルーとしては予想外の、強烈なカウンターを身に刻んでしまった。

そして、相手が怯んだ隙をゴンは見逃さない。

凄まじい怒涛の打撃をゲンスルーに与え始めた。ゲンスルーはそのあまりにも想定外なダメージと、続け様に繰り出される速く、重い攻撃に混乱の極みに陥っていた。馬鹿な、確かに爆破した筈だ、と。それでも辛うじてガードしながら見れば、爆破した筈

の腕は健在だった。

そして、ガードの上からでも蓄積していくダメージに危機感を覚え、相討ち覚悟で顔を掴み、爆破する。

だが

シュウウウウ：

顔・面・は・健・在・だ・っ・た。

あまりの驚きと相討ちダメージにより、ゲンスルーの動きは完全に停止した。次の瞬間

キイイイーン！

「最初は、グー!!」

凄まじいオーラの集中が目の前で発生する！　こんなモノを喰らえば死ぬ!!　ゲンスルーの中で走馬燈の様にこれまでの経緯が流れる。そして、彼は最初の約束を思い出した。

「ジャン、ケン」

「ま、まいった!!　まいった!!　オレの負け」

「パー!!!」

ドオオオオツ!!

ゲンスルーの叫びは一步届かなかった。顔面爆破により、ゴンの耳が聞こえづらく

なっていた事も彼に災いした。

哀れにも極大の念弾を喰らい、森の木々をへし折りながら吹き飛び、やがて大樹の根本に叩きつけられて、彼は辛うじて夢の世界へと旅立った。



バシユツ！

「よ、ただいま……って、もう終わったのか!?!」

「うん。なんか……予定より早く終わっちゃった。それよりレオリオ！ 行くの早すぎだよ！ すっごい焦ったんだからね!!」

「わりーわりー。いや、あのままいたらマジで吹き出しそうだったからな。悪かったよ。とりあえず、あるだけ買ってきたぜ。コツチはコツチで大変だったんだからな！ 予定じゃもつと保たせる筈だったろ!?!」

「うっ…それはごめん。でも、勝つ分には問題ないでしょ！」

本来であれば、一度逃げたと思わせたレオリオが再びゴンに合流し、万全の態勢で仕留めにかかる予定だったが、既に gon はゲンスルーを拘束している最中だった。

肩透かしを食いながらも、レオリオは gon を治療しようとした…が、それも既に完全に回復していた。

「全く…オメーはこれだから…結局オレは何もいいトコ無かったな。ま、無事で良かったぜ。…アレに比べりゃ可愛いモンか」

レオリオは「リリブ離脱」を使用して一旦外に出た。全てはゲンスルーを油断させる為に。しかし、すぐにゲームへと戻ってきて、『トランスフォーム聖騎士の首飾り』をゲイン。【リターン擬態】で指定カードに変身させた【再来】を元に戻して使い、マサドラでカードをありつたけ買つてから【マグネティックフォース磁 力】を使って gon の元へ再び戻ってきたのだ。その間約5分！

外に出たらフリーポケットのカードが消えてしまう為、そのような過程を経る必要があった。

焦るレオリオはエレナの案内もおぎなりに飛ばし、気を揉みながら戻って来た時には

全てが終わっていた。

多少は落胆したが、すぐさま無事を喜び、仲間たちへ【コンタクト交信】を使用する。

他のメンバーも既に状況が終わっていた様だ。彼らは安心しながら買ってきた魔法カードで合流した。

そして――

彼らの最終試練は、終わりを迎えた。

121、祝宴

「やあ。無事に終わったようだな」

「カーム! とビスケ!!」

「うん。…大した外傷は見られない。素晴らしい。しかし、やたらと時間がかかっ…
ん? なんだ? やたらレベルアップしてないか?」

「! 何で分かるの? 《練》してないのに」

「分かるさ。それなりにしっかり見てきた弟子だからね。…うん。体幹のブレが減った。隙が無くなった。オーラの流れも力強い…この短期間にどれほどの鍛錬を積んだやら。それで時間が掛かったのか」

「そこまでわかるたあ流石だな。まあ、死ぬほど努力したんだよ。全員な」

「そうか…頑張ったんだな。さて、『爆弾魔』には「大天使の息吹」を使ったか。どうりで髪が生えてると思った……ついでに私の影響も消したか。そこまで回復するとは、

中々万能だな」

「やつぱりカードがコイツらに何かやったんだな？ 大変だったんだからな！ 回復してやってからずつとこんな状態だぞ!? オメーが来てからより酷くなってるし」

キルアの言う通り、カードが現れた瞬間、ゲンスルー達は激しい恐慌状態に陥っていた。いや、回復されて、“後始末”の影響から脱してから彼らのパニックは始まったのだ。

そして、その元凶が現れた。パニックになるなど言う方が酷だ。見れば、股間付近から情けない音を立てて「水漏れ」しているし、折角元に戻った髪の毛も再び少しずつ抜け始めている。

「まあ、あんな至近距離であんな事やられちゃ…ねえ?」

後ろから着いてきて、カルトと睨み合いをしていたビスケも、その部分には同意をしている。

「で? カードは取ったか?」

「うん。今からそれを一つのバインダーにまとめようって所だったよ」
「なるほどね…じゃあいいか」

カームが指先から極小の念弾を形成し、彼らの顎を目掛けて飛ばす。正確に放たれたソレは彼らの顎先をかすめ、彼らを一瞬で夢の世界へと再び旅立たせた。

「これでよしと。…君達がどのようにしてそれほどレベルアップしたか聞きたいところではあるが、先ずはカードが揃ったらどうなるか見てみたいものだな」

「…相変わらず訳わかんねー程の技術だな。ここまで来ると笑えて来るぜ」

「君達が努力したように、私も努力したのさ。死ぬほど、ね。さあ、早速揃えてみてくれ」
「うん！　じゃあいくよ——」



『プレイヤーの方々にお知らせです。たった今、あるプレイヤーが99種の指定カードを揃えました。それを記念してまして、今から10分後にG^{グリードアイランド} I内にいるプレイヤー全員参加のクイズ大会を開始いたします。問題は全部で100問！指定ポケットカードに関する問題が出題されます。正解率の最も高かったプレイヤーに賞品として、No.000カード『支配者の祝福』が贈呈されます。皆さまバインダーを開いたまままでお待ちください』

突然のアナウンスが響く。なるほど、指定カードに関するクイズ大会ね。これは奪ったりした奴などには答えられない。全くよくできている。そして、100問クイズか…マイケルのクイズを思い出す。ただの感傷か。

ゴン達はやる気満々である。私としてはもうここまで来れば安心だ。彼らも随分と成長したものだ。これならば多少の理不尽など跳ね返せるだろう。後は見守り、彼らがクリアするのを待つだけだ。

数人程こちらに飛んできたプレイヤーがいた。まだ残っているプレイヤーがいたか。しかし有象無象だ。彼らはゴン達にクイズの勝者になった場合は買い取ってほしいと交渉していた。まあ、多分クイズでも負ける事はないだろうがな。周りは協力して解く

ムードになっているが、ゴン達は純粹に個人で参加するようだ。最後までこのゲームを楽しみきっている。いい事だ。

「よし！ 負けた方が罰ゲームな!!」

「よし、のった!!!」

「へっ、オレの記憶力に敵うと思うなよ！」

「……仕方ない。僕もやるか」

約1名やる気の無い奴がいたが、キルアとビスケに何かコソコソと煽られて俄然やる気を出し始めた。……一体何を言われたのやら。

さて……私もただ待つのは退屈だから挑戦してみよう。

『それでは、これよりクイズの出題を始めます!! 第1問! No.1 『一坪の密林』に関して重大なヒントをくれる長老の名前は——』



『終了————!! それではこれより、最高得点者を発表いたします!! 最高点は100満点中93点!! プレイヤー名——』

なんかドキドキするな…しかし93点か…やはり最高得点者は——

『ゴン選手です!!』

「やったア————!!!」

「100種類コンプ!!!」

…やはりな。素晴らしい。さすがゴンだ。やってくれる。全員が喜びを爆発させていると、手紙を啜えたフクロウが飛んできてゴンにソレを投げてよこす。中身はNo.000『支配者からの招待』である。どうやら同封されたバツジと招待状で、それをもっていく事で支配者のいる城へ入場できるらしい。招待者は1人らしいので、キルアはゴンに城で待っているから行ってこいよと促す。

城下町のリーメイロには行ったことがあるらしいので、ゲンスルー組から貰った^{アカンバニー}【同行】を使ってみんなで行くことにする。

しかし、私は何点だったんだろう……凄く気になる。7割は取ったと思うんだがな…。そうこう考えているうちにゴンの^{アカンバニー}【同行】が発動し、引つ張られる感覚を覚えながら^{リーメイロ}城下町へと飛んでいった。



「なあ、アイツらだろ？ ああ『爆弾魔』返り討ちにしたの」

「そのようだ。まだガキの癖に大したもんだ…というか、アイツらいつ起きるんだ？ そろそろ臭ってるぜ？」

「そう思うならお前が起こせよ。オレはやだぜ」

「ほっとこうぜ…自分で何とかするだろ…。とりあえず戻ろうぜ。もしかしなくてもクリアイイベントがあるだろうからな」



城下町リーメイロに到着した。中央には大きな城がある。バインダーをそろえた者だけが入場できるということで、ゴンが代表して城へと入城する。その間、城の前で我々は待つことにする。『爆弾魔』対策のために行った特訓について聞きながら時間を潰すことにしよう。

ディアナの強さと、その苛烈な特訓に仰天しながらも彼等の急激なレベルアップの仕方に納得した。まさに貴重な経験をさせて貰ったようだ。

しかし、伝聞だけでもディアナの強さは凄まじいな。ゴン達は既に超一流ハンターの域に達していると言っている。だが、ソレを歯牙にもかけず手加減しながらつきあえるあたり、超一流の能力者を圧倒的に上回っている。技術や経験など、全てにおいてだ。もはやキメラアンのトップ層あたりに匹敵するのではないか？

本人は弱いと言っていたが、腐つても暗黒大陸産であるという事だろう。ビスケはディアナと手合わせしなかったと悔やむが、カルトに「カームとずつと特訓してたでしょ」と言われてぐぬぬとなっていた。ま、私がいるからと慰めておいたら、カルトが「僕にもお願いね」と、言ってきた。まあ、私が訓練するのはやぶさかではないが、もう充分強いぞ？ と返したら、キルアに「オメーのためにカルトは死ぬほど頑張ったんだ。付き合ってやれ」と言われた。キルアがそんなことを言うのは珍しい。カルトは顔を真っ赤にして、キルアをポカポカ叩いている。：私の為にか。ありがたい事だ。ならば、私も誠意をもって向き合わなければならないな。子供だから、という言い訳は通用

しない。しっかりと向き合って、確かめよう。そうとなれば、準備をしておく必要があるな。早急に。

そうこうしているうちにゴンが戻ってきた。ドゥーンやリストと会って様々な説明を受けたらしい。すぐにクリアを記念しての祝勝会が始まるとのこと。いわゆるエーディングだな。楽しい時間の始まりだ。

……そして、私はそろそろ自分の問題に決着を付けよう。



大きな花火が夜空を照らす。城の前は地面が埋め尽くされるほどのNPCやプレイヤーが集まっていた。その中を、豪華な車に乗った4人が進む。城下町をおよそ一週しながら城の前にたどり着く。最後には、城がプレイヤーに開放され、豪華な食事や様々なショーなどで主にゴン達は歓待を受けていた。中にはドゥーンと思われる人物が舞踏場で踊っていたり、リストと思われる人物がゴン達に料理を運んだりしていた。

そんな中、私は隠れて行っていた作業を終え、中心から離れて城のバルコニーで一人、夜風に当たりながらワインを飲んでいた。

「あら、楽しんでいないのかしら？」

「……ああ、ビスケか。キミはどうなんだい？」

「私は楽しんできたわ。料理も、ショーも。ちよつと夜風に当たりたかったのよ」

振り返って見れば、ビスケはバラ色のドレスを着ていた。ホルターネックのマーメイドドレスで、ロンググロープまで着用したその姿は、妖艶な大人の雰囲気を出してい

る。首元には、以前私がプレゼントしたルビーのネックレスが輝いていた。…いつの間
に用意したんだろう？　そして、肝心な事だが、彼女は若返っていた。凡そ二十代前半
ぐらい迄。即ち、そこに現れたのは絶世の美女である。

「……とても美しい。似合っているよ。ビスケ」

「あら、ありがとう。嬉しいわ。ここ、お邪魔するわね」

そうして、彼女が私の隣に座る。しばらく無言の状態が続く。お互いに喋らず城の外
の花火や、城下町でのお祭り騒ぎを上から眺めながら、黙ってワインを傾ける。こんな
時間も悪くない。

「……いい夜ね」

「ああ。素晴らしい夜だ」

「あのコ達もいつの間にか大きくなっちゃって…。一年足らずなのに大した物ね」

「そうだなあ。並の才能じゃない事は確かだ。もう彼等も巣立ちか…。寂しくなるな」

「……ねエ、カーム…」

ビスケが何かを言おうとした、その時、後ろからもう一人の気配がした。これは、カルトか。

「僕もいいかな？」

振り返れば、カルトは普段の着物ではなく、紫のドレスを着ていた。彼女のドレスはビスケと同じくマーメイドドレスだ。同色のリボンチョーカーにペンダント、ロンググローブを身につけている。ビスケと違うところは少し大人な演出をしているが、本人が年齢に似合わず大人びているため、これまた絶妙に似合っている。彼女は若さもあつてかビスケに負けず劣らず美しい。きつと、成長したらより美しくなるだろう。

「とつても似合っているよ。素敵だ。カルト」

「…ありがとう。僕もお邪魔して良いかな？」

「もちろんだとも。でも、キミは主賓だろう？ いいのかな？」

「いいの。僕はここがいい」

そう告げると、彼女はビスケの反対の私の隣に座ってきた。彼女も座つてからは何も

語らない。さて、困ったな。2人とも求めることは同じ、か。無言の圧力を感じる。いや、いつまでも私が保留にしていたのがいけないか。これは良い機会だ。

「……2人とも、いいかな？」

「……」

2人とも緊張したような面持ちでこちらを向く。そう緊張されると私も話しづらいが……ここで話さないのは無しだ。気合いを入れよう。

「まず、君たちに感謝をしたい。君たちと交流を深めることで、私は漸く前を向けるようになったと思う」

「……」

「ゴン達の修行も終わりを迎える。これで本来ならば私達の関係は一旦終わりとなる」

「……!!」

「まあまあ、そう慌てないで。私はずっとずっと悩んできた。自分のことすら分からないう状態で。君たちからすれば、そんなことって思うような事で私はずっと立ち止まって

いたんだ。……少し長い話になるが、聞いてくれるか？」

コクンと2人は頷いて、無言の了承を示す。私は周囲に《円》を張り、近くに人がいないことを確認してから語り出す。全ての始まりから。

「まず、最初に話そう。私は、本当は250年以上前の人間だ——」



「そんな……そんなことって!!」

「……そっか……あの時、私が話しかけた時には……」

「いや、ビスケは悪くないよ。カルト、ありがとう。この話はゴン達にもするつもりだが、君たちに先に話させてもらった。それは、2人に誠意を示すためだ」

「誠意…?」

カルトが首をかしげる。緊張する。だが、決めたんだ。前に進むと。

「私は、君たちが好きだ」

「!!」

「人として、好ましく思っている。…これからもずっと一緒にいたいと思うほどには」

「うえあwrrうえおrh! い、いえ、ごめんなさい。こちらこそよ! カーム!!」

「僕は!?! 僕もだよね!?!」

「もちろんさ。出来ればゴン達にも、だが。彼らには夢があるだろう。だからこそ強制は出来ない」

「あつ…そういう意味ね…」

「勘違いしては困る。女性としても、と言う意味もあるからな」

カルトとビスケが落ち込みかけたが、その言葉を聞いて復活した。

「だからこそ、私は知って欲しかった。私のことを。私の身体は一般的な人間から外れている。バケモノと言われても反論が出来ない。そもそも私は体質的に不老不死となっている。ビスケに問う。そんな私でも、キミは、この私についてきてくれるか？」

「勿論よ!! 私はね、貴方がどんな素性であろうとついていくと決めたの! 第一そんなことはどうでも良いぐらいに貴方に惚れたの。これはもう覆らないし、覆せないわ!!」

だから、貴方が拒否しようともどこまでもついて行く。これは決定事項よ!!!」

「…ありがとう。だが、私に付いていくとなると、もしかしたら世間からバケモノ扱いされる可能性もなきにしもあらずだ。他にも様々な苦難があろう。それでもいいのか？」

「愚問ね。それがどうした。私は貴方のそばにいたい。それが全てよ」

ビスケは迷いなくそう言った。力強いその答えには確かな「覚悟」が感じられた。

「…私は幸せ者だな。では、カルトに問う。特にキミは若い。若すぎると言っている。これから様々な出会いもあるだろう。私なんかよりもっといい人も見付けられるかもしれない。先程ビスケに言ったような苦難はキミにも当てはまる。それでも、私と共にいたいのか？」

「…僕は…ずっとゾルディックに縛られてきた。全てはゾルディックの為。そうやって生きてきた。これまでの僕は人形だったに等しい。何もかも、兄や父、母の言う通りに従って生きる事に疑問を覚えなかった。でも！ 貴方に教えてもらった。自由の素晴らしさを。生きる喜びや温もりを。最初は家の意向だった。でもここに來て僕は…初めて僕の意志で選びたい。貴方がいい。貴方しかない。だから僕は、貴方のそばにずっとずっといたい。貴方の役に立ちたい。それが僕の意志だ」

カルトは言葉を選びながらも、しかし、真に迫る様な氣迫で言葉を紡いでいった。それは彼女の魂からの言葉であると感じられた。そうか…それ程の想いがあったか…ならば応えよう。その想いに。

「カルト、よく聞いてくれ。まずはキミに謝らなければならぬ。私はキミを好ましく思っている。はつきりと好きだと言える。だが、キミの年齢がどうしても引つかかる。キミはまだまだ成長途中だ。だからこそ、いろいろな可能性を探って欲しい。そう言う想いが私にはある」

「そう…分かつては、いたけど…」

カルトはポロポロと涙をこぼし始める。これを言うのは非常に辛い。だが言わなければならぬことだ。そして…

「だが、それでも。キミが成長してからも、私とずっと共に過ごしたい、私と一緒にいたいと思いつける、と言うのであれば。これを受け取ってくれ」

私は次元収納から小箱を一つ取り出した。そうするとカルトは迷い無くその小箱を受け取った。

「…これは？」

「開けてみてくれ」

カルトが小箱のフタを開ける。中にはエメラルド色の不思議な渦を巻く宝石が、指輪の形に加工されて入っていた。

「!? これは…一体？」

「それは、約束の証。もしキミが成長したら合うように作ってある」

「つまり…」

「そう。婚約指輪だ」

「!!？」

「そ、それはどういう…」

「言葉通りの意味だ。私も覚悟を決めた。キミが成長するまで待つ」

「ちよ、ちよつとまって！ アタシは!？」

「そう慌てないでくれ。勿論、キミにもある」

そう言つて、もう一つの小箱を取り出す。中には炎のようなルビー色の宝石が埋め込まれた指輪が入っていた。

「これは、私が用意したモノ…ビスケ、私と近い未来結婚して欲しい。どうか受け取ってくれ」

ビスケは、その宝石達の美しさに呆然としている。ここでカルトが動いた。

「カーム、僕にコレ、付けてくれないかな？」

「もちろんだとも」

私はカルトの左薬指に指輪を通す。少しブカブカだ。

「…ハッ！ 私もお願い!!」

ビスケが再起動した。同じようにビスケにも指輪を通す。こっちはシツクリはまるようになっている。

「ありがとう。受け取ってもらえて良かった」

2人とも感極まった表情で喜んでいるところを見ると、私もホツとすることができた。

「私は…2人とも大事だ。どちらかなど選べない。だから覚悟を決めた。もし君達の心が変わらなければ、2人とも私が貰う」

放心状態に近かった2人が、ようやく動き出す。

「そ、それは…何とか凄いわね」

「決して褒められたことじゃないのは分かっている。だが私は2人とも欲しくなった。……もし、そんな私に幻滅したのであれば、その指輪はいつでも返してくれていい」

「イヤだよ！ 僕は絶対返さないからね!!」

「アタシもよ!!」

「ふふ…ありがとう。……ビスケ、キミには待たせることになると思う。それでもいいかい？」

「ふん！ 何年独り身やつてると思ってたんの！ 待つわよ！！ それぐらいはね。小娘！ サツサと諦めなさいね！！」

「べーだ。絶対に諦めないからね。そつちこそ早く引退したら？」

「なにおう！」

「ははははは。ケンカか。いいだろう。そう来るなら私も参加しようかな？」

「ゲツ：そこでフツー乗ってくる？ …分かったわよ。アタシが悪かったわ。カルト」

「分かれれば良いよ。僕も謝るよ、ビスケ。カームは仲良く楽しむ。そこに優劣はつけない。淑女協定第二条三項だね」

「…ソレってどのぐらい項目があるんだ…？ まあいい。あと、さっきのについてだけど、変に我慢するよりも良いだろうからガンガンケンカはしような。私に対しても、彼女に対してもだ。私もその時はもれなく参加するから」

「…カームも開き直つたら随分はつちやけるわね…。ま、ウジウジしてるよりは全然いいけど」

「いや、私は元々こんな性格さ。優柔不断で状況に流されやすい。だが、一度決めたことは貫き通す。今回の件も度しがたいのは分かっている。でも、私は引かない。2度と後悔しないために。こんな素敵な人達を逃すわけにはいかないからな。そうと決まったら無理矢理にでも私の元について貰うぞ」

「いや、なんか改めて言われると照れるね……。話は変わるけど、あのときディアナに何を言われたの?」

「ああ、あれか。私がいる限り、この世界に何らかの、世界を揺るがすトラブルも起こるだろう、という予言さ。だが、私はソレを全て潰してやる。そして平和な世の中を實現して君らと幸せに過ごしてみせるさ」

「そう……。僕は、ディアナから『救世主』について聞いたよ。『救世主』は必ず悲劇の道を歩むつて。……だからこそ、僕はカームの力になれるように頑張るよ。ここに誓う」

カルトは親指の腹を噛みちぎつて私に向ける。……これは懐かしい。血の掬じやないか。まだその風習は残っていたか。では誓おう。私も同じようにする。すぐに治ってしまうが、血は少し出た。

「ありがとう。私も君達だけは、どんなことがあっても愛し、そして必ず守り通すと誓おう」

それを見て、ビスケも

「ふくん。『血の掟』ね……。私も入れてよ。私は貴方達を愛し、力になることを誓うわ」

指の腹を噛みちぎり、我々に差し出す。最後のセリフを聞いて、カルトは言葉を付け足した。

「…追加ね。僕も2人を愛する。誓う」

「……………いいのか？」

最後に確認する。ビスケもカルトもお互いを愛すると誓った。それでいいのか？と。意見が合わないこともあろう。それでも、2人は迷いなく肯定の意を示した。

「…いいだろう。ここに、血の盟約は交わされた！以降、これを破ることは許されない！！ それこそが『血の掟』と知れ！ …最後に、我々の婚約を祝して乾杯というか。グラスを持ってくれ……では、乾杯」

「うっ……改めて言われると恥ずかしいわね……でも、カンパーイ!!」

「ありがとう……カーム。僕は幸せだよ。乾杯」

そうして彼らの夜は更けていった。大いなる幸せと希望と夢を抱きながら。ここまでは「彼」の再生の物語、そして、ここから彼の真価が問われる物語が始まる。

“救世主”でもある「彼」がここからどのような物語を紡ぎ出すか。そして、「彼」は自らの運命を覆せるか。それは誰にも分からない。

運命の歯車は、遂にその身を碎き、誰もが予想し得ない形となって動き始めた。

束の間の平穩編

122、門出

「で、2人ともそのニヤケ面ってか。つかビスケ、若返ってねーか? 『魔法の若返り薬』使っただろ!」

「うふふふ…分かる? 遂に私は完全体になったわ! もうここで思い残す事はないわね!」

「それにしてもオーラがヤバいな…勝てるビジョンが見えねーぐらいだぜ」

「いつか追い越す…」

「ま、カルトも良かったな。オレは祝福するぜ?」

「ビスケ、カルト、おめでどう!!」

「ありがとう、ゴン、兄さん。とりあえず僕はカームについてくよ。兄さん達はこれから

「どうする?」

「…それなただけだよ。まずは、クリア報酬の3つのカードについて決めねーと。どうする?」

「うーん…4人いるからな…。どうやって分けるかだよね」

「あ、僕はいらない。兄さん達で好きにして」

「…いいのか? じゃあ1人1枚か。ゴン、レオリオ、どうするよ」

「…改めて言われると難しいな。…少女シリーズのどれか、かな…」

「レオリオ…流石にそれは…」

「じよ、ジヨーダンだよ! なはははは…」

「あーそれなただけど、君達にどうしてもというお願いがあつてね。その1枚を貰えないか?」

「うん? 何か欲しいカードあるの?」

「ああ。どうしても欲しい。タダとは言わない。負けず劣らずなモノを私から提供する、でどうだ?」

「いや、別に構わねーけど…何が欲しいんだ?」

「『死者への往復葉書』だ。私が使いたいのもあるし、クラピカにもあげたい」

「あくなるほどね…そりゃ確かにアイツには必要か。いいんじゃないの? …ただ、も

し良かったらその理由を聞きてーところだな」

「勿論、話そう。というか、最初から話すつもりだった。カルトとビスケには先に話したが、君達も聞いて欲しい——」

私は彼らに向かつて話を始めた。この話をするとという事は、私の中で踏ん切りがついたという事。私はもう、過去には囚われない。それもこれも、目の前で真剣に聞いてくれている彼らのおかげだ。私は幸せ者だ。



「そんな事が……」

「…ひつでえ話だな！ そりゃ絶望するわ…」

「だからその強さって事か…」

話を終え、3人かそれぞれの感想を言い合う。彼らは暗黒大陸の存在を知らなかった

が、ディアナの存在がそれをかなり裏づけていた様だ。よって、暗黒大陸Ⅱヤバイ所という図式が出来上がったらしい。気軽に行ける所ではないから心配はいらないが。

「——そういうわけで、私は死に別れた家族にどうしても連絡を取りたい。だからこそ『死者への往復葉書』というわけだ」

「なるほどな……いいぜ。その代わり、オレにも何枚かくれよ。それでいい」

「レオリオ……ありがとう。もちろんさ。それに君達には代わりにコレをわたそう」

次元収納から黄金のリングを取り出す。

「コレは……」

「向こうのリターンの一つさ。食べた者の肉体やオーラを1度だけ限界の1.5倍程に引き上げる。副作用は無論無い」

「なっ……！ そりやヤベー代物だな……」

「君達への卒業祝いも兼ねている。仮に売ったら国家予算ぐらいはつくだろうが、極力君達で使つて欲しいな。それと、出所は秘密にしてくれ」

「まあそりやそうだ。こんなの出回った日にや戦争が起きるぜ」

「ありがとう、カーム」

「あと、これだ」

私はゴン、キルア、レオリオに銀の装備を再び手渡す。密林のイベントの後で、彼らが返してきた物だ。

「えっ？ これって…」

「ああ。あの時に使った物だ。綺麗にした上で、特別な念を込めた。君達への餞別だ。普通に武器として使えるが、もし万が一、どうしてもなく絶望的な状況になった時、これに祈れ。そうすれば何とかなるだろう」

「それは便利だな。でも、そうそうピンチな事態なんて起きねエだろ」

「それならそれでいい。それはただのお守りとして持つておけ。無論、普通の武器としても使えるしな」

「ま、分かった。ありがたくいただいてくぜ」

「後2枠は好きに決めてくれ…：ゴンの様子を見るとある程度は見当がついたみたいだけどな」

「えっ、マジ？ どれにすんだ？」

「うん。実は…コレにしようと思って」

「ハア？ 何で——」

「いや……なるほどな。……うん、面白い！ いつから考えてた？」

「ん——コレを見た瞬間からかな」

「じゃあそれだけじゃダメだな。コレも必要だろ」

「うん、コレもいるよね」

「大丈夫かな、コレで」

「うん。つーかこれしかない」

「??? 訳分かんねー！ オレも混ぜろ!!」



「選んだのはNo. 1『一坪の密林』、No. 31『死者への往復葉書』、No. 84『聖騎士の首飾り』、以上の3枚で本当によろしいですか？」

「うん」

エレナが手元の機械を操作する。

「…では指輪をお返しします。お疲れさまでした」

「ありがとうございます。えーつと、エレナさん？」

「うふふ、覚えてくれたの？　ありがとうございます。さようなら」

◇

ゴンが戻って来た。仲間^アに急かされ、早速ゴンがバインダーの呪文を唱える。すると、見事にバインダーが出てきた。そして、3つのカードから『死者への往復葉書』をゲインしてくれた。…ありがたい。これで、ようやくマイケル達へ報告が出来る。

ゴンは更に2つのカードを取り出し、『一坪の密林』をゲインした『聖騎士の首飾り』で変身させる。すると…【同行】^アに無事変化した。これは予め【擬態】^{トランスフォーム}で変身させたものだ。とある人物の元に辿り着く為の秘策。それがこのやり方だった。

それはゴンのバインダーで出会った履歴に残っていた人物に端を発する。初めて口グインした彼に最初に出会った人物は我々の誰かであるはずだ。しかし、その前に彼のバインダーによれば「ニツグ」という人物に出逢っていた。

「ニツグ」のスペルをアナグラムで組み替えれば、「ジン」となる……。

全くその発想力といったら私には及びもつかない。仕掛けを作るジンも、それを解き明かすゴンも。彼らこそが一流のハンターと呼ばれるべき人材なのだろう。

さて、これからだが、ゴン達はこのまま同アカンパニー行でジンに会いに行くそうさ。ジンも変な意地悪はしないという事らしいので無事に会えるだろう。レオリオも誘われていたが、いい加減試験勉強に集中したいらしい。彼とはここでお別れだ。彼は私から往復葉書を20枚ほど貰ってから自分の道へと進んでいった。寂しくなるな。しかし、彼ほど治療に特化した人材はいない。勉強も頑張っていた。きつと受かるだろう。

ゴン達は、別れも早々に旅立っていった。ジンに会ったらキルアを紹介するらしい。ジンはどういうリアクションをとるだろうか。彼の事だ。きつと照れ隠しでもするだろう。

別れは寂しいものだ。しかし、希望もある。私の側には、結婚を誓った2人がいる。先ずはゾルディックへの挨拶だろうか。

やる事は沢山ある。直近で起こるだろうキメラアントへの対処、そして、何を企んで
いるか分からないヒソカの搜索だ。

だが何よりもまず最初にやる事は、手紙を書く事だ。マイケルや家族へ、私の事につ
いての手紙を。

書く内容はもう決まっている。

無事に帰ってこれた事。そして、約束を破ってしまった詫びを。

別れもあつたが、ゴン達をはじめとする素晴らしい仲間に出会えた事。

こんな私について来てくれるビスケ、カルトの事。

そして――

私は今、幸せだという事を――

「さあ、いこうか、2人とも」

「うん！」

「ええ！」



ヒューーン…バシユツ！

彼ら2人は湖のほとりに降り立った。目の前には、マントを羽織りターバンを巻いた人物が釣りをしている。

「ジン……？」

その言葉に、その人物は目だけを向ける。ターバンを深々と巻いている為、顔は分からない。

「……………ゴン、か？」

次の瞬間、その人物がマントを翻して振り返る。

「よオ、思ったより早かったじゃねエか」

ターバンを外して立ち上がった姿は、無精髭に黒髪の短髪、中肉中背の旅人風の衣装を付け、風来坊の様な風情だ。しかし、その顔立ちは、紛れもなくゴンに似ていた。

「ジン!! ……やつと…やつと見つけた」

「……まあ、何だ。積もる話もあんだらうけどよ。とりあえず後ろの奴は誰か紹介してくんねエかな?」

「ああ! そうだったね! ジン、紹介するよ。オレの最高の友達、キルアだよ!!」
「ゴン…よせよ、恥ずいだろ」

キルアは照れて俯くが、それを見せられたジンは内心全身が痒くなるような恥ずかしさに悶えていた。やっぱり「マグネティックフォース磁 力」にしときやよかつたか、と。

しかし、自分で設定してしまった物は仕方がない。自業自得である。

「……あゝお前らの関係は良く分かった！ とりあえずキルア、だっけか。オメーも一緒に来い。これまでどんな冒険してきたかオレに教えてくれや」

「いや、でもオレは……」

「遠慮すんなつて。おい、ゴン。アイツ連れて来い」

「うん！ 分かった。キルア、こつちこつち！」

「お、おいゴン！ 分かった、分かったから引つ張んなつて!!」



「——なるほどな。頑張ったな、ゴン。すでにオメーは一流のハンターだ。オレが言うのも何だが、さすがオレの息子だぜ」

「ありがとう。でも…オレだけの力じゃないよ。ここにいるキルアやカーム、そして、いろんな仲間がいて出来たことだと思う」

「ん。それを聞いて安心したぜ。良いハンターつつうのは仲間にも恵まれる。1人じゃ出来ねー事も仲間がいれば乗り越えられる…オレの仲間達も見たる?」

「うん。レイザーさんやドウーンさん、リストさん。そして…ディアナさん」

「ディアナにも会ったか。そりや良かった。それで…聞いたか? 例の話は」

「うん…オレの母親の話…だよな?」

「そうだ。まあオメーの産みの母親に関してだがな…オメーも向こうの話も聞いたかも知れねーが、アイツはそこに突然行っちゃった。産まれたてのオメーを置いてでもやらなきゃならねーことがあるつつつてな。…ふつちやけると、オレもそこを目指して。オメーの母親を探すっていうだけが動機じゃねーが」

「ちよつとごめん、ジン、さん?」

「ジンでいいぜ? どうした?」

「カームが言ってたけど…そこは人外魔境で地獄みたいなトコだつて言ってたけどさ…ホントにそこを目指してんの?」

「ああ。そうだけ」

「…無謀じゃない?」

「まあな。だからオレもいまだに行けてねーわけだ。あそこに行くには『許可』、『手段』、『資格』、『契約』の4つが必要だ。オレはまだどれも持ってない。だからこそ、今オレは

地道にソレを得る手段を探ってるわけだ」

「そういえば、ジンは今何してんの？」

「ソレを説明するには、この湖と向き合う必要がある」

「？ この何の変哲も無い湖が？」

「よく見てみる。向こうに何か見えねーか？」

ジンが指さす小さな湖の中央に、2人は何か塊のような物を見付ける。ソレは人の塊だった。いわゆる水死体の集まりだ。およそ100人以上の大規模な塊である。

「!! あ、アレって…人の死体!？」

「いや、違うな。間違ってもこの湖の中に入るんじゃないぜ？ どうあがいたって奴等の仲間入りしちまうからな」

「は？ マジ？」

「マジだ。アレの中に見知った死体でもあろうもんなら更にアウトだ。奴等に目を付けられて呼ばれるからな」

2人は急いでそこから目を背ける。

「ヤバっ！ なんちゅーもんを見せやがんだこのオヤジ!!」

「ま、アイツらの顔なんて知らねーって思いつつ見りやなんてこたねー。一般人にはヤバイシロモノだが、俺等には通用しないから安心しな。水に入りさえしなけりやな…ただ、コイツはハズレだ。こりやただの死者の念だ。除念師案件だな。ま、そんな感じでヤバげな依頼をこなしつつ、暗黒大陸の手がかりを探ってるってわけよ」

「は…オメーの親父、イカれてんな」

「…ジン、悪いけど反論できないや」

「ま、そう思うのは当然だな。理解して貰う必要もねーし。ただ、何もさっき言った事だけが全てじゃないぜ？ 今回のコレだって、ほつときや何百、何千、下手すりや何万規模の人が死ぬっつーヤバい奴だ。しかも放置すればするほど手が付けられなくなっちまう」

「で？ どうするの？ コレ」

「んーそうだな。普通は協会に報告して除念師を派遣してもらってから正式に成仏させてやるのが一般的だが…」

「それじゃダメなの？」

「そんなん待ってたら被害が拡大するだろ？ それに、これ程拡大した怨念は一流の除

念師でも到底ムリだ。だから、ここでオレが始末を付ける」

「は？ できんの？」

「ま、見てなつて。もう準備は終えたからな。そろそろいけるはずだ……了解、今から行く。お前等もついてこい」

ジンは誰かからの連絡を受け取ると、おもむろに立ち上がってゴン達を案内する。しばらく歩いた後、工事現場のような場所に到着した。そこは例の湖より標高が下の場所であり、そこに大きなトンネルが作られていた。そこにいた現場監督のようなオッサンにジンは話しかける。

「よ！ ありがとうよ。無事終わったみてーだな」

「へっ。これぐらい軽いモンよ。とりあえず後一押しでいけるぜ」

「よし。カネは口座に振り込んだいたぜ。早速やるから離れてな」

「ありがとよ。オメーの健闘を祈るぜ。……ヤローども！ 撤収だ!!」

そう相手が周りの作業員に告げると、機材を含む人員が慌てて撤収を始めた。そして、ものの10分で完全に撤収を終えた。監督らしき人も、ジンに一言告げて去って

行った。

「よし。さあ、仕事の時間だ。行くぞ、オメーら」

そう言つて、ジンはズンズンとトンネルの内部へと進む。この男に恐怖心などは無いらしい。暗い急勾配の道のりをひたすら歩き、そして、およそさっきの湖の近くの位置まで到達した。

「うーん。アイツらしい仕事してやがんな。ホントにギリギリのトコじゃねーか。こりや多めにチップ振り込んでくか」

「あの一。ジン？ もしかして…」

「そう。そのもしかしてだ。お前等、足に自信はあるか？」

「まさか…」

「ま、そのオーラなら大丈夫か。じゃ、行くぞ。ちよつと離れてろよ」

そう告げると、ジンは指先に超特大のオーラを込め出す。その大きさ、威力は概算でもレイザーの最後のボールの威力を軽く上回る程だ。

「いいか！ オレが撃つたら一目散に来た道戻れ！！ んで、出口で散開して水から離れるんだ！ 決して水に触れたり見たりすんなよ！！ 行くぞ!!!」

キイイイイン……ドツ!!!

凄まじい威力の念弾がジンから発射される！ その念弾はトンネルの土の部分の壁を突き抜け、大穴を開ける。そして、次の瞬間には凄まじい量の水がその場からあふれ出す!!

「走れ!!!」

ジンの号令も待たず、キルアとゴンは走り出す。勿論全力のオーラを駆使してだ。キルアに至ってはスーツを着用し、電力の力をフル活用して走っている。ゴンも負けじと筋力全開、フルパワーの力で走る。それでも背後から凄まじい勢いで水が迫ってくる!!

「どわあああああああ!!!」

「ハーツハツハツハツ!!! つぎまあみやがれ!! こんな対処されるとは到底思うまい!!!」

先に行く2人に追いつくぐらいの速さで、余裕の表情で笑いながらジンが駆けている。もうすぐ出口だ。

「よーし! お前等、散れつ!!!」

言われなくても、2人は左右に飛び退き、ジンもそれに続く。その直後、凄まじい大爆音を立てて大量の水が放出される。

「お前等ーツ!! 水は見るんじゃねーぞーツ!! ついでに《堅》やつとけーツ!!!」

ジンが叫ぶが、2人は当然見るはずもない。というか、速攻で離れ、出口から遙か遠

くまで避難している。その状態で目を閉じながら激しい水音を聞く。小さな湖とは言え、大量の水があつた場所だ。そうそう簡単に抜ける量でもない。

そのまま、3人は3時間近くその水音を聞き続けた。ゴンとキルアはジンの言うとおりにその3時間目を閉じ、《堅》の状態を待機した。もう既に8時間は《堅》を持続できる2人にとって余裕ではあるが、ジンの話から聞くこの現象に対して全く安心できない状況でいることは、かなりキツイものがあつた。

しかし、何事にも終わりはある。徐々に水音は小さくなりはじめ、そして、完全に音がしなくなった。

「お前等—もういいぞ—」

ジンが間の抜けた声で2人に声を掛ける。しかし、2人はいまだに目を閉じ、警戒を怠らない。むしろその声を聞いて更に警戒を強める。そして、近寄ってきた存在に対して、銀の武器を装着し、攻撃を加えた。

「はあ……嫌になるぐれー優秀だな。ま、それぐらい当然か」

当たり前のように2人の攻撃を止めるジンがそこにいた。そのオーラに触れ、漸く2人は目を開ける。

「合格だ。こんな現象の時には、どんな時でも安心しちやいけねエ。特に、事が終わったと思うような時は。声や姿形すら騙る奴もいるからな」

「ふー……生きた心地がしなかった……本物で良かったよ」

「マジでエライ目にあつたぜ……出会っていきなりコレってどういう事だよ……」

「ははっ。まあそう言うな。さて、結果をご覧しろ、だ。さっきの場所へ向かうぞ」

そう言うと、スタスタと元の道に戻りだした。2人は慌てて付いていく。

そこには、見事に水の抜けた元湖があつた。

「いやー計算通り！ うまくいったな!!」

「これで大丈夫なの？」

「ん？ まあ、ほぼ大丈夫だ。見てみ？ さつき死体があつた場所。もうほとんど見えねーが、よく目を《凝》らしてな」

2人は言うとおりに見てみる。すると、先ほどの場所の地面に10体近くの白骨死体があり、その上付近にどす黒い、微かなオーラが見えた。

「ねエ…あれって——」

「大方水遊びしてたこの辺の学生だろ。んで、たまたま、水難事故に遭つてそのままお陀仏になりやがつたつてトコか。他にも遺体はあつたはずだが、ほとんどは流れちまつたみたいだな。問題は、ただ死んだだけじゃなくて、強い無念から他の奴も呼び始めたつて事だ。多分始めは同じ学生から。そしてそのうち無差別に。んで、無差別型の死者の念に成り果てたつて事よ」

「……まだ残つてるみてーだけど？」

「ん。完全には無理だつたな。だがあの程度なら協会の除念師でも余裕だ。死者の念は水に宿ることが多い。今回はこの湖自体に怨念が広がつたからヤベー事になつたつて訳だ。んで、オレはその水を全部抜いたつてわけよ。題して、『湖の水を全部抜く作

戦』だー!」

「…そのまんまじゃねーか」

「へっ。何とでも言え。とりあえず上手くいったから万事ヨシ!」

「…湖の水の処理って大丈夫?」

「ああ。自治体に許可取ったからな。というか、むしろ向こうから言ってきた事だ。この辺一帯は被害状況から立ち入り禁止区域に指定される程だったからな。水は計算してそのまんま川から海へ合流するようにしてある。問題ねーな。海ほどの規模に拡散されちまったたら奴等も何も出来まい。大体、湖つてのが停滞した水だからこういう事態になっちまったってのもあるからな。さて、協会に連絡だ。後は除念師派遣して貰ってアレを祓えば、ここは無害になる」

「はー…すっごいね…」

「お前等もなかなかのスピードと《堅》だったぜ? とりあえず宿に帰るが、その後オレと手合わせしてみねーか?」

「!! いいの!?! ぜび!!」

「オレも勿論参加していいんだよな!?!」

「食いつきいい…ま、クライじゃねーぜ。そういうの。じゃあどれだけ強くなったか確かめてやるか。行くぞ」

そうして、ジンは彼らとその場を離れる。ジンはその後、協会との手続きを終え、彼らと手合わせをした。その時彼らのあまりの強さにちよつとテンションが上がりすぎて、思わずボコボコにしてしまうのはまた別の話――



「あくあ♣? 先越されちゃった♠? もうシヨボいのしか残ってないよ?!」
「うゝん…失敗でしたね。流石はジンさん、といったところでしょうか。…でももう貴方にはそろそろ必要無いのでは?」

「いやいや♠? こんな程度じゃ当然の様に跳ね返されて終わりさ?? もつと
もつと集めなきや…♣?」

そう残念がるピエロの格好をした男は、凄まじいドス黒いオーラを周囲一帯に発散していた。最早ソレは人類の基準を完全に超え、ヒトの形を保っているのが奇跡的な程になっている。一般人は近づいただけでアウトなレベルだ。

隣にいる男は平然と話しかけているが、この男が異常なだけだ。

「ま、勿体ないから一応貰っちゃお??」

次はいいの紹介してね♣?」

「最近色々と活性化してますからね。また紹介しますよ。ただ、そろそろ例の件にもご協力願いたい所ですが、いかがですか?」

「あーもうそんな時期? しょうがないなく♣? でもま、ボクにもメリットあるからやるよ♠? また連絡してね?? じゃ、またねー♣?」

そう言つて、彼はスタスタと黒い怨念の元へ歩いて行った。そんな彼を見て、凶悪な笑みを浮かべながらスーツの男はひとりごちる。

「ええ。よろしく願いますね。協力者さん」

123、始動

『敬愛する兄さんへ

やあ。お帰り！ 兄さん。無事に帰れたようで私もとても安心したよ。会えなかったのは残念だけど、こうして手紙をくれて私はとても嬉しい。

まさか兄さんが本当に200年以上帰つて来ないとは思ひもしなかった。私に語つてくれた例の能力者とも出会えたなんてね。人生何があるか分からないものだね。能力の件は残念だったけど、それでも兄さんは前を向いて歩く決意をしてくれて本当に良かったと思うよ。私も6代目の事が知れてよかった。アンダーソンは無事に続いているようだし、これからも続いていけそうだからね。

そして、婚約おめでとう！ 2人の女性から愛されるとは中々やるね。父さんや母さんからの手紙にもあったと思うけど、素直に祝福するよ。とつてもめでたい事だ。我々

もこつちで一緒に喜んでゐる。兄さんなら2人ぐらいいたつて問題なさそうだ。寧ろ別れる時まで女つ気が無かつたのが不思議なぐらいだったからね。(ただ、私は兄さんがミテネの部族相手にやらかしたのを後から知つたから、さもありませんけどね。初めて接触した時は大変だったんだから！)

ま、強い者に女性は惹かれる。自然の摂理だ。それに、兄さんなら彼女らを大事にするだろ？ 彼女達は幸せだな。私も兄さん達の幸せを祈つてゐる。

結婚したら色々大変だろう。でも、それがまたいいスパイスにもなる。だから、どんなに辛くても、決して手放しちやだめだよ？ これは経験者からの言葉だ。頑張つてほしい。幸せであれ。それが私の願いだ。

さて、まだまだ書き足りないが、これ以上書くのも野暮というもの。最後に兄さんに忠告しておく。

これから貴方の世界で、様々な危機が襲うだろう。残念ながらね。私も知らなかつたけれど、「そういうもの」らしい。兄さんはこれから選択を迫られる。何が、とは言えない。でもね、必ず道はある。兄さんにとつて最良の道が。

だから安易に絶望してはいけないうよ。それは破滅へと繋がるだろう。どうしても難しい時は視野を変えて見ればいい。兄さんの側には愛する者がいるだろう？

私からこれ以上は言えない。でも一つだけ言える事は、希望を捨てないで欲しいと言う事だ。

兄さんには申し訳ないけど、私からの返事はこの手紙をもつて最後とする。以降は返信しない。いつまでも死者に囚われるのも良くないからね。その代わり、この手紙には特別な「想い」を込めた。大事に持つておいて欲しい。

兄さん、希望はいいものだ。

希望はそれ自体が力をくれる。

兄さんが幸せである事をいつまでも祈っているよ。大丈夫。またきつと会える。その日まで、しばらくさよならだ。…いや、こんな時はこう言うんだったね。

またね！ 兄さん。

愛を込めて。マイケルⅡアンダーソン』



……マイケルからの返事が来た。父さん、母さんからもだ。内容は私の帰還を喜んでくれた事、婚約を喜んでくれた事、アレからの自分達の様子など、多岐に渡るが、概ね祝福してくれていた。

ただ、気になるのはマイケルの手紙だ。彼はもう返信しないと書いてある。そんな事ができるのだろうか。その代わりにマイケルの手紙には懐かしい彼のオーラをほんのりと感じる。……マイケルだからな。きっと私のためを思つての事だろう。少し寂しいが、この手紙は大事にとっておこう。残る葉書は100枚程残してクラピカにあげた。彼こそ必要だろうからな。名目は卒業祝いだ。私はマイケルからの返事はなくても、父さんと母さんはまだ通じる為、偶に書いて送るようにしよう。あまり囚われてし

まうのも良くないから、偶に、だ。

そして、肝心な事だが、マイケルもこの世界の危機について言及していた。やはり、何が起きる事は必定だ。彼が言うなら間違いない。できる限り備えなければならぬようだ。私もこの平穩を守る為に頑張らねばな。見ていてくれ、父さん、母さん、そしてマイケル。私はこれからも幸せに暮らしてみせる。



ビスケはしばらくペットロスの様な状態だった。あれからもう一度グリードアイランドにログインして別荘の整理をしていたが、ゴン達のクリア後から僅か1日目に、大規模アップデートの通知がなされた。何でも、ようやくクリア者が出たという事を受けて従来のシステムを見直しつつ、新しいグリードアイランドにする為だそうだ。

ゲーム内にいる者は順番に管理者権限での退去を勧告され、数日掛けて全員退去と相

成った。今回はジンは絡んで無いのかな？

とにかくそういう訳で、拠点とペット達に泣く泣く別れを告げ、グリッドアイランドの野に放つてから出て来た。それ以後、ゲーム機の前で《練》をしてもログイン出来なくなつた。運営はアップデート終了を1年後とした。つまり2001年の2月21日だ。

ビスケには悪い事をした。クリア報酬に死者への往復葉書を要求したが、それは私がどうしても現実で使いたかつたからだ。ゲーム内ではキメラアントや他の厄災を察知しづらい為と、ログイン、ログアウトに時間が掛かる為である。

その分我慢してもらつた事が裏目に出た。ペット達や、ブループラネットなどはゲーム内で楽しめばよいと彼女は言っていたから、そこに甘えてしまつたのが良くなかつた。まあペット達は限度枚数MAXでカード化していなかったし、カードにして再びログインした時に彼らが我々を覚えているかどうかは分からない為、難しい所だ。だからこの別荘預かり扱いだったのだが…。

とりあえずビスケを慰め、また宝石はもつといいモノをプレゼントすることを約束し、ペットも新しい動物と一緒に探そうと提案した事でようやく立ち直つた。何を飼うかはおいおい考える事にしよう。

カルトは、そんなビスケとは対照的に上機嫌だった。とにかく私の世話を焼きたがり、四六時中私についてくる。今までの離れていた期間を埋める為、だそうだ。流石にそう言われると断る訳にもいかず、しばらくアヒルの親子の様な状態になっていた。

また、彼女は修行にも貪欲でビスケと模擬戦したり、重力負荷での基礎修行などを積極的に行っていた。彼女は既に一流ハンターの域だが、ビスケはその3倍近くのオーラを持つており、少しでもその差を縮めようと必死に取り組んでいた。それにしても彼女の《発》はかなり強力だ。攻防一体型の能力であり、その上小回りが利く。汎用性に非常に優れた能力だ。あの短期間で完成させたという事だが、大したものだ。やはりこの子も才能が桁違いだ。大事に育てていけば、ビスケと並び、最上級能力者にすらなれるだろう。私の大事な人だ。簡単にはやられない様に私も力を尽くそう。今彼女は20倍に挑戦中だ。恐ろしいペースだ。私もどこまで伸びるか楽しみだ。



あれから一カ月経つ。未だ何も連絡は無い。ここまでで様々なイベントはあったが、

世界の危機に関わるものは無かった。私も様々なツテ（主にアンダーソンだが）を使って調べてはいるが、中々掴めない。そもそもキメラアントは何処に出現した？ 全く記憶が霞がかって出てこない。とりあえず手当たり次第に情報を集めている状態だ。だが、影も形もない。本当にくるのだろうか？ …いや、樂觀的な考えは危険だ。あると信じて当たった方がいい。早く見つけなければな。

イベントについては簡単にまとめれば、大きなものではゾルディックに挨拶に行つた事だ。今度は当主と祖父、奥方に加えて、イルミもいた。私は彼、苦手なんだよな…。試験の時の因縁もあるし。ただ、今回は彼は大人しく座つていた。

彼らにキルアの卒業の件と、カルトとの婚約の件を伝えたら、非常に喜ばれた。シルバから「もつと時期を早めてもいいんだぞ？」と言われたが、丁重に断つた。カルトからはジト目で見られたが、流石にダメなものにはダメだろう。

横にいるビスケと同時に婚約という事で何か言われるかと思つたが、そんな事はなかつた。ただ、イルミの眉がピクリと動いただけだ。だが、結局彼は最後まで黙つていた。何を考えているか分からないが、あまり考えても無駄なのでスルーした。彼は会談が終わると直ぐに依頼の為に旅立つた。何でも、友人からの依頼らしい。これの為に待つていたのだろうか。

シルバからしばらく滞在してはという提案をされたが、なるべく早く戻りたかつたの

で丁重にお断りし、早々に帰路についた。カルトも早く実家から出たかったようだし。ひとまず報告は概ね穏やかに済んだ。騒ぎにならずにホツとしたというのが正直なところだ。これで名実共に婚約が済んだ事にカルトは喜んでいた。

もう一つは、ジン、ゴン、キルアを救出した事だ。ゾルディックからの帰路、彼らに渡した銀の武器の反応が消失した。アレは私の聖光気を付与している。消失するなどはありません。慌てて最後に反応があつた場所に意識を集中したが見つからない。どうにかして、彼らの反応のあつた場所を探る為に思索していた所、彼らの武器を通して「祈り」が微かに届いた。

しかし、その場所はコチラにはない。つまり、地球上には無かつたのだ。彼らは一体何処に紛れ込んだのか。兎に角行ってみるしかない。

私は「聖光気」状態へと移行し、微かな反応を手繰る。すると、ようやく見つけた。彼らはどうやら異空間に囚われていたようだ。なぜそんな事に……と思いつつ、私は「奇跡」を使い、彼らの元へと跳んだ。基点さえ分かればそのぐらいはできる。ただ、使った事が無かつたので割とぶつつけ本番だったが、上手くいったようだ。

さて、彼らだが、現実の空間がぐちゃぐちゃに混ざり合つた様な異空間にいた。とりあえず彼らを引っ掴み、崩壊しかかっている異空間からの脱出を図つた。再び転移し、

彼らが気付いた頃にはサヘルタ行きの飛行船の中だ。

「いやーヤバかったな！ 危うく異空間に飲み込まれるトコだったぜ！！ なあ、お前等！！ そして…よっ！ 久しぶりだな、カーム」

…非常に明るい様子で捲し立てるこの男は、絶対絶命のピンチだったって事を分かっているのだろうか？

「いや、ジンさん？ アンタ息子とその友達まで巻き込んで何やってんです？ アレ、私
が居なかつたらヤバかつたのでは？」

「まあそう言うな。オレも普段はそんなあぶねー橋は渡らねーんだがな？ 少なくとも
勝算はあつた。あの武器見た時にオメー由来のだからって確信したしな。で？ ここどこ
だ？」

仕方なく今の現状を説明する。ゾルディックへと婚約の挨拶へ行つて、その帰りだ
と。キルアはカルトに実家の人々の様子を聞いて、全員勢揃いしていた事にビックリし
ていた。なんでも、誰かしらは依頼で居ない事の方が多いらしい。キルアは実家の様子

が気になるようで、カルトに色々と質問をしていた。

一方、ジンはというと、ビスケが気になるようで最初に姿を見た時はビックリしていた。彼女にその修行法を根掘り葉掘り聞き、到着したら手合わせしようと思り上がったので、私はゴンに事の経緯を尋ねた。

なんでも、サヘルタ西部で謎の未確認生物災害が発生し、ジンはそれを探っていたらしい。彼らはジンの付き添いで同行していたとの事。

それを調査していると、とある田舎の牧場へと辿り着いた。いや、正確には牧場のあつる近辺の一軒の廃屋らしい。なんでもそこは昔、カルト教団の悪魔召喚の儀式じみた怪しげな事をしているとの通報が相次いだ曰く付きの家だった。そして、ある日から近辺の農家の家族からの消息が途絶え、次いで謎の生物の襲撃を受けて周辺の動物、人間問わず特殊な方法で他の組織を傷つけず、心臓を抜き取られて殺されていたとの事。地方警察も出動して探っていたが、足跡やその手口から新たな魔獣ではと結論付けた。そして災害の中心を例の廃屋から出てくる未確認生物だと突き止め、そこに突入した所、全員が消失してしまつたらしい。更に、その後も謎の生物が次々と現れ、警察官を殺害していった。警察も退却し、特殊部隊も投入されたが、行方不明者や死者は増えるばかり。

コレはまずい事態だと浮き足だっていた所に彼らが辿り着いたとの事。

そして、話を聞くや否やジンは迷わずそこに突入していったらしい。アホか。

「言つたる？ 勝算はあつたつてな！」

ジンが横槍を入れるが無視する。それで謎の襲撃者だが、基本的には彼らの姿はほぼ見えなかつたようだ。特に光の元では。暗闇で辛うじて見える程度らしい。だが、念能力者なら別で《凝》でうつすらとその姿が見えたとの事。その姿は、二足歩行の180センチ前後。鳥の様な頭に鋭い爪を生やした手足、であつた。見えた所で攻撃は通らなかつたらしいが。ジン曰く、オーラ生命体ではないか、と推察を立てていた。念獣かとも思われたがどうも様子が違う。普通はそんな事（オーラが独立して生命体になる様な事態）はあり得ないが、その廃屋内では異空間化しており、常識の通用しない空間になっていたのではとの事。

さて、3人で探り探りしていたが、そこはただの廃屋ではなく、様々な場所に通じていたらしい。高校のロッカールーム、アパートの一室、ショッピングモールなどなど…。

襲撃は相変わらず続き、何とか躲しながら探索を続けていたが、そこで突入部隊の手記をクローゼットから見つけたらしい。手記の彼曰く、決死の覚悟で突入したものは軒並み巢に連れていかれたようだ。そして、何とか状況を探るうちに、彼の仲間が対策を発見した。それは祈りを込めた銀の弾丸で攻撃する事。彼らは最後の1人になるまで抵抗していた。

しかし、最後に生き残った彼は巢を見てしまったらしい。抜き取られた心臓はそこでリサイクルされ、彼らの仲間がまた増える……それを見て、彼は心が折れてしまった。その手記を見せて貰ったが、彼はこう綴っていた。

オレの代わりにやり遂げてくれ。巢を破壊してくれ、と。そして、自分はこれから居間へと向かう。決して奴等の仲間にはならない、と。

彼は最後に

幸運を、死にゆく者より敬礼を。

と記して、後の者に全てを託していた。

：なんて事だ。念能力者じゃなくとも相当に優秀な人物だ。恐らくコレは放置すると大災害に発展しかねない奴だ。それを部隊単位とは言え、非能力者が原因まで突き止め、対処法も確立していた。彼らは恐らく英雄と呼ばれるべき人物だろう。

ゴンとキルアもそこでスイッチが入ったようだ。銀の武器と聞いて私のあげた武器を取り出し、片っ端から駆除を始めて、巣を目指した（ジンは2人から武器を片方ずつ借りたらしい）。

そして、巣を見つけた。

それは心臓の集合体。不気味に動くソレは、鳴動を繰り返しながら敵を産み出していた。ジンとゴンは莫大なオーラを込めたパンチ、キルアは銀の爪を刺してからの高電圧を同時に加えて、それを粉々に破壊した。

すると、やはりそれが「核」だったらしい。空間が歪み始めた。さて、そうになると困

るのは彼らだ。脱出方法が無い。2人で焦っている時、ジンが銀の武器を指して、「ソレをくれた奴の言つた事を思い出せ」と告げ、思い出した2人は必死で祈り始めた。

それが私に辛うじて届いたようだ。

「……全く、無茶をする。際どい所でしたよ？ 実際」

「ま、オメーの言う通りだな。だが、結果オーライだ。なーに、オレはカンタンには死なねエからな」

「いや、でもホント寿命が縮んだぜ…無事でよかった…」

「ホントにね……これ以外にも色々あつたし…」

ゴンとキルアが遠い目をしてる。色々あつたようだが、聞くのが怖い。ただ、どうもここ最近探っていた災害級の事態は、ヤバくなる前に彼らが割と潰していたようだ。私の耳に届く前に。ありがたい事だが、あまり無茶はしないで欲しい、という事をそれとなく伝えたが、ジンは「オメーの為にやってる事じゃねーよ」とそっけなく言われた。と

りあえず、彼らと図らずも合流し、一緒にアンダーソンまで行く流れとなった。

「言うの遅れたが、婚約おめでとよ。まさか2人たあ、オメーもやるじゃねーか。ま、祝福するぜ」

ジンはニヤニヤしながらそう言った。続けて、

「しばらくはオメーんトコで厄介になるぜ！ ようやくオメーと手合わせできるなあ。あっちの話も聞かせてくれや」

と、上機嫌だった。……まあ、ようやく彼とも堂々と会えるしね。少しは付き合っておくか。



——時間は少し遡る。

南西、バルサ諸島、NGL付近のとある海岸にて、2人の男が話し合っていた。

「さて…コレでよし、と」

「聞きたいんだけどサ◆？ …『これ』つてワザワザ隠蔽までしなきゃならない程にヤバい奴？」

「アナタ程じゃないと思いますけどね。今はこの有様ですけど、資料の通りなら『これ』が繁殖したら相当楽しい事ができますよ？」

「ふくん◆？ あんまり興味を惹かれないなア…◆？」

「まあ、前座としては充分ですよ。『これ』の脅威は繁殖スピードにありますからね。…

貴方も味見ぐらいは出来ると思いますよ？ 隠蔽もバッチリですし、しばらくは見つからないでしょう。気付いた時には手遅れ、ってトコが理想ですね。……さて、残る仕事はあと一つ！ 楽しみですねエ……どんな素敵な事になるか……！」

「うーん、ボクとしてはそっちも欲しいんだけどなー◆？ ま、我慢するよ。『お手伝い』はこれから『約束』があるからその後でね？」

「…相変わらず融通が利かないなア。それはそれでいいんですけどね！ ボクとしてはちゃんと手伝つて貰えば何も言う事ないですからね」

「そこはちゃんとやるよオ……◆？ 他ならぬ『彼』の為だからねエ……？」

「ふふつ……『彼』も随分と愛されていますねエ……。じゃあ連絡しますからその時はよろしくお願いしますね？」

「了々解◆？ ボクの用事もすぐ終わらせるからねー◆？」

怪しい2人が会話を終え、その場から掻き消える。後に残されたのは……

巨大な蟲だった。

そう。それはヒトをも捕食出来る程の……。

124、黒幕

ソレは恐れていた。自らを取り巻く環境に。どうしてこうなってしまったのか。今現在、彼女を支配するのは強い危機感、そして恐怖であった。

——事の始まりは、凡そ7ヶ月前。限界境界線付近の小島付近で莫大なエネルギーの衝突が発生した。その凄まじい力の奔流は、周辺の諸島を吹っ飛ばし、そこに棲む生態系を悉く破壊した。

そして、その中の一つの小島を支配していたキメラアントの女王は、島の崩壊と共に海へと投げ出された。彼女は前世代の王が産み出した次世代の新しい女王だ。

少し前に偶々、そう、それこそ万分の一の確率とも言えるが、その小島に漂流してきた人間がいた。彼らは純粹に漁船の乗組員で、無茶な出航により、嵐に巻き込まれて遭難してしまつた。何週間も漂流して、生命からがらたどり着いた小島。そこは限界境界線付近の諸島だつた。

そして、幸運にも（人間側からしたら不幸にも）若い女性クルーが生き残つていた。

そこに棲んでいた前世代のキメラアントの王は、護衛蟻に人間達を早速捕獲させて喰らつた。そして、絶望や恐怖に怯える人間の女性によりよつて子を産ませた。限界境界線付近のキメラアントは、暗黒大陸産ほどではないが通常種よりも強く、大きい。既に人間の子供サイズであつた前王は容易くそれを成した。

それによつて、人間の遺伝子を持つ、次世代の女王が誕生した。

彼女は母親を知らない。女王が産まれてすぐに、母は王に喰われたからだ。そして、そんな王を成長した彼女は喰らつた。体高が人間サイズとなり、人間の思考力を取り入れてより賢く、狡猾に、そして貪欲になつた彼女にとつて、前王やその護衛蟻は餌にしか見えなかつたのだ。彼女が本格的に活動を開始すれば、周辺一帯はキメラアントの天下になる……筈だつた。

そこに例の天変地異が起きた。

彼女は海へ投げ出され、漂流するハメになった。兵隊蟻を産む事もできず、ひたすら生存を賭けて漂流する日々。時には巨大な魚に喰われそうになったり、潮の流れに巻き込まれて溺れそうになったりした。彼女は蟲である。基本的には浮きやすい。それを最大限利用し、無限とも思える漂流期間を何とか生き延びた。その間、約七ヶ月！そして、海にいる魚を喰らい、何とか生命維持に費やし、絶望とも思える漂流を生き延びてきた。これはひとえにキメラアントの驚異的な生命力のなせる業であつた。

そして：ついに彼女は到達した。メビウス湖の南西バルサ諸島に。身体は既にボロボロ。海の敵対生物によつて千切られかけた左手に当たる節は、完全にそこで千切れた。しかし彼女は生きていた。ボロボロの身体を引きずり、何とか海岸の洞窟にたどり着いた。そこで身体を休めることしばし。生き延びる。それだけを胸にここまで生き

延びてきた。

漸く動けるほどに回復した彼女は餌を求めて活動を開始した。少しでも体力を回復させ、王を生む準備に入る為に。全ては最強の王を産む為に。しかし、そんな彼女に更なる試練が襲い来る。

明らかに自分より強い生物が自分を探しに来たのだ。見た目は自分よりもひ弱で矮小な生物に見えた。しかし、ソレの存在感は絶対的な捕食者のものであった。その力に中てられて、彼女はあえなく夢の世界へと旅だった。自らの死を覚悟しながら……。

——目が覚める。まだ自分は生きている。何という僥倖か。先ほどの敵は、自分を取るに足りない生物であると気まぐれを起こしたか。幸運であった。幸運であった。この幸運を逃してはならぬ。自分は最強の王を産む。あんな奴等に負けないほどの、最強の王を。

今は雌伏の時だ。隠れながら、逃げながら、力を蓄え、必ずや世界を手中に収めるほどの王を産む。それは、自分の遺伝子に刻まれた使命である。恐怖と危機感に震えながらも、彼女は自らにそう誓った。



ヨークシンに到着した我々は、早速ジンの手合わせに付き合わされた。以前使用した修行場に向かう。ゴン、キルアはともかく、ジンもビスケもカルトも私もあまり知られなく無い事ばかりだから、こういうのは極力見えない場所でするに限る。ジョンに再び場所を借りて宿泊施設を自分達で管理しながら手合わせの準備を行う。

クラピカも誘ったが、彼は緋の眼集めをほぼ終え、最後の所持者の目処がついたからそちらに向かうということで断られた。何でも往復葉書がかなり役に立ったらしい。そして、これからその緋の眼最後の所持者、カキンの王子の元へ向かうとの事。そんな権力者相手に大丈夫か？ と尋ねたが、相手は第4王子であるからまだ何とかかなりそうらしい。交渉でケリをつけるつもりか。まあクラピカなら何とかするだろう。

どうやら王位継承の儀式が始まっているようなので、これがギリギリのチャンスらしい。万が一王位を継承したら交渉どころか会うのも難しくなるし、失脚して失踪されても困るからな。その場合、コレクシヨンも散逸してしまうだろうし。ウチからはアルバートも別件でカキンについていくそうだ。多少は心強いだろう。念の為にクラピカにはコツソリとリングと私が加工した銀のネックレスを渡しておいた。あくまで念の為だ。万が一がない事を祈ろう。

さて、ようやく準備が整い、周囲に人影一つ無い場所へと移動した。旧道路跡地で廃棄された場所だ。ここなら誰も来ない。まずはビスケとやるらしい。

初めに行われたジンとビスケの手合わせは圧巻だった。2人とも既に人類最高峰を更に凌駕している。具体的に言えば、頭在オーラは7000を超える。そこから推察される潜在オーラは約40万！ ……これ、下手すりや蟻のトップクラスといい勝負する

のでは？

ジンもビスケにはやや劣る程度とみたが、彼の恐ろしい所は戦闘中に尻上がりに調子を上げていく所だ。2人は純粹な殴り合いしかしていないが、劣勢であつたのがやつてる最中に対応し始め、互角に打ち合える程になつていた。

恐ろしい事に、やつてく間、彼のオーラ総量も増えていった。いや、どこにそんなに隠してた？ やはり規格外の才能の持ち主という事だろう。

だが、そう簡単に抜かせる程ビスケも甘くない。互角以上には決して行かせなかつた。彼らは結局3時間もやり合つて、精魂尽き果てて両者ノックダウンした。1日目の手合わせはそこで終了。

動ける程に回復した彼らは酒をどこからか用意して盛大に飲み会を始めた。……自由すぎない？ まあいいか。結局全員で飲めや騒げの大盛り上がりとなつた。後半は私の暗黒大陸紀行だ。部屋を暗くして、蝋燭を立てて……いや、これ怪談話じゃないからね？ 似た様なもんだけど。ジンは「そつち方面じゃねエか……」とつぶやいていたのが印象的だつた。

2日目は私とジンだ。久々に身体を動かすな。ジンは私とひたすら闘つた。今回は

“聖光氣”無しだ。圧倒的な差をものともせず突っ込んでくる彼は、やはり人類トツプクラスであると言えよう。彼は既に内浸透勁を使いこなし、更には外浸透勁を使いこなしていた。危うく喰らう所だったが、そこはやらせなかった。

やはりジンは闘いの中成長するタイプである。ゴンもそうだが、ジンはそれに輪をかけて凄い。闘い続けると、自らの技がどんどん吸収されていく気がする。いや、気がするどころではない。実際に吸収されている。体術についてはそう差が無い。特に彼は当て感が凄い。例の『気合』も相まって、普通ならボコられておしまいだな。

5時間にも及ぶ対戦中、ビスケとカルトが激突していた。ビスケはやややりづらそうだったが、オーラ差でカルトを追い詰めていた。カルトも負けじと変幻自在な紙吹雪の武装で対抗していた。

しかし、カルトのは本当に戦闘特化な能力ではある。近距離、中距離、遠距離をカバーでき、一瞬の隙に全てを持って行く程の爆発力もある。同レベルでの純粋な強化系でも打ち負けない強靱さがある……と言うことは、同格、格下相手ならばよつほどの凶悪な能力に嵌まらない限りは負けないだろう。そもそも凶悪な能力は条件が厳しい。戦闘中にその条件をそろえることは至難であるため、やはり隙が無い。今回はビスケにオーラと肉体的能力及び体術差で押し切られたが、まだまだ成長が望める彼女はこれから人類トツプを狙える器であると言える。

また、暇してたゴンとキルアも手合わせしていた。最初は流々舞だったが、次第に能力有りのガチバトルへと発展した。ゴンは一発が大きい。特にジャン拳の一撃などは9千を優に超えるオーラが集中している。彼の絶え間ない研鑽が見て取れるようだ。というか、「男子3日会わざれば刮目してみよ」の言葉通り、ゴンはますます激しく成長している。体格も最初会ったときは別物だ。もう12歳とは思えないほどだ。言われなければ15歳程度には見える。その体格から繰り出されるスピードとパワーは最早幻影旅団のウボオーギンに近いレベルだろう。つまり、彼はやろうと思えば一般人を紙くずのように千切ることが可能であり、下手すればバズーカの一撃も耐えきると言うことだ。話に聞くディアナとの戦闘により恐らくソレも可能であろう。これでまだまだ成長途中というのだから恐ろしい。強化系最強の道を着実に歩んでいる。

だが、キルアも負けてはいない。キルアの真価はなんと言つてもそのスピードにある。彼は多数の暗殺術を極め、肉体的性能もゴンほどではないが常人を遙かに超える。そして、雷に近いスピードで動ける彼は、相手に触れさせずに一方的に攻撃できる。よつて、この勝負、一発を狙うゴンと、捉えさせないスピードで削るキルアという図になる。これまでにも勝負はしてきたらしいが、現在キルアの勝ち越しとのこと。キルアのオーラは電気へと変質するため、喰らえば一瞬隙を晒すことになり、一発当てたキルアが畳みかけて勝ちを拾っていたらしい。しかし、ゴンもただ無為にやられるような人物

ではない。負けの中から敗因を分析し、成長を続けている。

今回はどうだったかというところ、ゴンが必殺技を溜め始めた瞬間にキルアの電撃による突撃を行った。以前にフェイントに引っかけたため、フェイントもろとも潰す作戦だ。しかし、ゴンは溜めながらもわざと喰らった。そして、本来であれば一撃を当てたキルアの必勝パターンだったが、ソレまでとは違い、筋肉が電気で縮小するのを利用してキルアの腕を片手で掴んだ。そして、もう片方の手であらかじめ溜めていたジャン拳をぶちかました。喰らいながら攻撃するとはあきれた精神力だ。掴まれて動けないキルアに避ける選択肢はなく、攻撃をアーマーと《硬》で何とか防ぐもダメージは甚大。アーマーは破壊されたが、何とか残った電力をゴンに流し続けたが、ゴンも溜め無しの殴打をキルアに浴びせ、結局両者ノックダウンとなった。

3日目は私対全員という素敵なメニューだった。さすがに私もちよつと本気を出さざるを得ず、結果だけ言えば全員ボコる形になったが、結構な技を引き出された。さすがは超一流の集まりである。これほどの豪華なメンバーはいまい。それが集団で来るとなると、たいいはいは何も出来ずに終わるのではないだろうか。

しかし、私も250年前には既に人類最強だった男だ。そう簡単に攻略はさせない。

キルアのカウンター付き電撃を更に電撃カウンターで撃退し、ゴンのジャン拳のブレードをオーラブレードで切り落とし、ビスケの体術をいなし、カルトの紙吹雪を全てオーラ操作で打ち落とし、ジンさんの極大連続念弾を少量の念弾ではじき飛ばした。

念入りに闘い続け、気付けば5時間は闘っていた。後半に至っては、跳ね返せば跳ね返す程にアップデートされていく彼らと闘うのが楽しくなっていた。闘うのがこんなに楽しいと思えるのは本当に久しぶりかもしれない。どこまでもやりたい。そう思えた。

しかし、楽しい時間もあつという間に過ぎる。最初にジュニア組が力尽き、粘っていたビスケ、ジンもオーラ切れで力尽きた。もう終わりか、と言う表情を私はしていたのかも知れない。それに燃え上がったジンとゴンが再び立ち上がった。その後、それに釣られて全員がまだまだやれるという意志を燃やして立ち上がった。：嬉しいことだ。口角が上がる。まだ楽しませてくれるらしい。ではそれに応えねば。

“奇跡”で全員を回復させた。今の彼らには必要ないかもしれないが、私が楽しみたいのだ。やつてる事がまさに大魔王みたいだな。そして、再び戦闘が始まった。

結局その日はその繰り返しで50時間以上ぶつ通して闘っていた。冷静に考えると頭がおかしい。なぜそんな事になったのか。やはりジンとゴンの気合が全員に伝播し

たのが一番の原因ではないだろうか。やはり親子だけあつてその辺は似ている気がする。主人公力、というものだろう。その熱は全員の力を跳ね上げ、逆境に反逆する。最後の方は全員が更に一段階レベルアップを遂げていたように思う。

とにかくその日は皆精根尽き果て、宿泊所にて泥のように眠ってしまった。恐らく起きたら大量の栄養を所望するだろうと予測した私は、全員が寝ている間に急いで大量の料理を準備することにした。

案の定爆睡して起き出した彼らは、凄まじい勢いで料理を食べ始めた。うん。予想通り：というか予想以上だ。ビスケもカルトも上品でありながらもりもり喰つてる。どんだけ腹減つてたんだ。そして、ジンさん。アンタ遠慮無く一番喰つてるよね？ とうか息子と食事で張り合わないでもらえます？ 負けたら罰ゲームつて子供かよ！ 当初予想した量を大幅にオーバーしそうだったので、慌てて次の仕込みに入る私。ビスケとカルトが手伝おうと声を掛けてきたが、むしろ食べて欲しいと席に戻した。

よし。私も本気出す。“奇跡”をふんだんに使いながら大量の食事を量産する。私の本気だ。味も超一流だ。何せ、“奇跡”で有名店の料理を再現しているからな！

結局予想の3倍は食べ、彼らは漸く落ち着いた。親子対決はジンの勝利で終わった。

「いや、参ったわ。マジで楽しすぎだろオイ！　どんだけ引き出しあんだよ」

罰ゲームである逆立ち指立て伏せをしている息子とその友達を横目にジンが話しかけてくる。

「伊達に暗黒大陸で生き延びちゃいけませんからね。逆にこれぐらい出来ないとマジでヤバイ環境でしたし。というか、貴方ならそれこそディアナさん辺りも参考になったのでは？」

「あーアイツね。アイツは滅多にヤル気出さねーしつまんねーんだよ。だからゴン達から話聞いた時は逆に驚いたぜ？　まさかアイツがガチで修行に付き合うなんてな」

「え？　じゃあオレ達ってラツキーだった？」

逆立ちの格好で高速で上下しながらゴンが言う。その状態で話されると不気味なんだが。

「ああ。アイツがそんなヤル気出すなんざオレが見る限り無かつたからな。ま、アイツはそんな力を出す必要も無いし、自堕落な奴だから別に期待しちやいなかったがな。ただ、その代わりアイツのツレは過激だったぜ。オレはいつもボコられて死にかけてたからな」

「それって……」

ゴンが逆立ち腕立てをやめてコチラに向き直る。ジンは若干しまったという顔をしながら答える。

「……ああ。オメーの母親、イヴリスだ。アイツはオレが出会った当初はかなり尖ってたからな。オレもアイツもお互いケンカ吹っかけてはボコられるの繰り返しだった。アイツからしたらオレは羽虫みたいなモンだっただろうからな。オレが死なずに済んだのはアイツらに人間を殺さないっつー誓約が掛かってたからだな」

「……よくそんなんでくつつきましたね」

「まあな……色々あったんだよ。とにかくオレが強くなったのは奴のおかげでもある。ただ、ゴンには前も言ったがアイツ、急に暗黒大陸に帰りやがってな。オレもゴンが一

人前になつたら向こうに行こうと思つてはいたんだ。向こうで会つたら一回ブン殴ろうと思つてな。ま、それとは関係なく、暗黒大陸はこつちとはレベルが違うお宝や魔境、秘境の宝庫だ。ハンターならばワクワクすんだろ！」

相変わらず訳が分からない価値観だ。流石フリークスの名に恥じない。しかも、私からの話を聞いても意見が変わらない所を見ると、筋金入りのハンター気質である。ゴンの母親の件に関しては濁したが、こんな大勢の前で語るのは恥ずかしかったのだろう。ビスケがそこで会話を割り込む。

「そーいやジン！ アンタ、グリードアイランド閉まつちやつたじゃないのよ！ どーしてくれんのさー！」

「ん？ ああアレな。一回クリアされたのを延々やるのもつまらんだろ？ だからクリア者出たらアプデする様に伝えといたのさ。新装開店グリードアイランドver. 2.0 ってるな！ 大体10年経つたからもういいだろ。なんだ？ なんか残してきたのがあつたか？ ま、諦めな。アプデ終わつたらまたやるといいさ。変わるのはいベント関係で、お宝は大して変化してねーからな。お前さんにはヌルゲーだろうよ」

「むー…しょうがないわね。じゃあカーム！ 1年後にまたやるわよ！ 今度はアタシ

の望むお宝をゲットするからね!!」

「…もちろん僕も行くからね?」

「分かった分かった…。ジンさん、それはともかく、今後の予定はどうなってるんです?」

「ケケケ、早速尻に敷かれてやんの。…分かったからオーラ出すのやめろや。またヤリたくなつちまうだろ? 今後の予定な、とりあえず今の方針を続けていくが…最近ちよつとキナ臭え」

「貴方もそれを言いますか…: 具体的には?」

「ジジイが言ってたか? それと比べりや恐らく視点は違うが、最近世界の危機に繋がってる。証拠も激増してやがる。今回のだってそうだ。オレの勘だが、これらは繋がっている。証拠も根拠も何もねーがな。だが、間違いないとオレは思ってる。つまり、黒幕がいやがるって事だ。近い内に何かが起きるぞ。それも世界規模でな」

「……それは」

「オレはそれらの共通点を今探っている所だ。恐らくだが、コレは暗黒大陸関連だからな」

なるほど。話を聞くと無茶ばかりしていたようだが、ジンは彼なりに世界の危機につ

いて探っていたか。…彼ならばあるいは何か分かるかもしれない。意を決して聞いてみよう。

「……ジンさん。一つ相談したい事があるのですが」

「ん？ 何だ、言ってみ」

「実は——」

私はキメラアントの件を彼に話した。未来予測してる部分は“奇跡”でごまかしながら。これは会長以外に伝えるのは初だ。誰も驚いていた。ビスケやカルトは「もつと早く相談して欲しかった」と言わんばかりのジト目で見てきた。後でフォロー入れねば。ともかく、それを聞いたジンさんは少し考え込んで、口を開いた。

「まずな、こういう時は視点を変えて考えろ。オメーからは全然見えねエモンでも、それをやるだけで結構見えてくる」

「どの視点です？」

「そりやもちろん、敵視点だ。例えばキメラアント視点。そんだけの奴等なら危険生物B級の災害だ。つまり国家規模。直ちにV5をはじめとする国家やハンター協会が動

くレベルだ。だがそれがねエ。つまり、仮に奴等がいるとしても①活動できてないか、②隠れてるか、だ」

「ふむ…ですが」

「よく考えろ。オメーが来るって確信してんなら確実に来るだろ。しかもそろそろな筈なんだろ？　じゃあ何故出てこねエかだ。さっきの2つはちと根拠が弱い。だが…ここで視点を更に変えるぞ？　黒幕が別にいて関わってるって仮説を加えると、アラ不思議。途端に①か②に説得力が出てくる。ここでその黒幕の思考を辿ってみよう。もしかしなくてもオレの追ってる奴と同一人物だろうな。どうやらソイツは世界規模の災害をワザと起こそうとしてやがる様に見える。で、その黒幕って奴はどうやらオメーの存在を知ってる」

「!? …それはどういう」

「ここからは推察に推察を重ねるしかねーがな、まず、オメーが予測しているキメラアントが見つかからない件は、今の予想をあてはめるとすつきりするんだ。どう考えても派手な災害にしかならねー奴だが、それが秘匿されてるってことは、黒幕がオメーを警戒して情報を制限してんだ。それで①か②だ。①だったらまだマシだ。しかし、②は考えづらい。蟻のくせにそんなに自分から情報を秘匿できるような奴ならホントにお手上げだ。ま、それはねーだろうけどな。それで考えられんのが、③だ」

「③?」

「誰にもバレない場所で既に災害が起きてるパターン。例えば…そうだな、情報を制限している独裁国家、または未開の地域、そして国家じゃない場所。その辺にキメラアントを放出する。すると、情報は世界にはギリギリまで上がってこない。あまり考えたくねーが、③の場合はやべーぞ。既に始まって、気付いたら手遅れになるぐらいまで広がってるかもしれん」

「……」

「だが、ここにキメラアントは絶対に処分するつー心強い奴がいる。恐らくオメーが動けば即解決だろう。逆に言えば、敵はだからギリギリまで隠してるんだろ。問題は何のためにそうするかってことだな。愉快犯か、それともオメー単体を狙っているか。いずれにせよ、世界規模での大騒動を起こすだろうな。傍迷惑極まりねーがな」

「……ありがとうございます。その視点は欠けてました。そして今、私の中で全てが繋がりました」

「それで? オメーの予想は?」

「…③ですね。既に始まっている。そしてソレは恐らく…:NGLだ」

「ほう…:NGLな。たしかにそこじや始まっててもしばらくはわかんねーな。オメーも調べてマークしてはいたか」

「ねエ…：NGLって?」

ゴンが尋ねると、ジンが答える。

「ネオグリーンライフという環境保護団体が建国した国家だ。自治体扱いだが、国家としての体を成している。元は機械文明に頼らない自給自足の生活を送るという信念を持つ者同士が集まって出来たらしい。そこは機械を表向きは使っていないからな。中で何が行われているかは向こうから発信しない限り全くと言って良いほど無い。隠れ蓑には最適だな」

そう。思い出した。NGLだ。ここが起点になっていた。だから情報が上がってこないのだ。しかし、カイトは辿り着いたし、ハンターも数人は気付いて調査に入ったはずだ。それがなぜ無いのか…恐らく、ジンの言うとおりに秘匿されている。彼は黒幕、と言う表現をした。ヒソカか…? いや、彼はそんなタイプじゃないだろう。やるなら自分から起こすはずだ。と言うことは、他にいる。暗躍する人物が。

私も後手後手になってしまった。しかし、少なくとも速攻で潰せばまだ被害はマシだ。すぐにでも発つか。

「ジンさん…ありがとう。私はそこにこれから向かう。手遅れになる前に」
「ん。オメーが行くなら安心だな。じゃあオレはオレで別のトコ探すか」

p r p r p r p r ……

「ん？　なんだ？　電話か？」

「あ、私か…滅多に鳴らないから気付かなかった…はいもしもし？」

『よ、カーム。久しぶりじゃのう。あ、婚約おめでとよ』

「ああ、ありがとうございます。それで、どうしました？」

『あーそれなんじゃが…ちと深刻な事態がおこつてのう…』

「まさかキメラアントですか？　私もある程度目処が付いたのですぐに向かおうと思つてたんですよ」

『お、そつちは見つかったか。なら良かった…いや、良くないか。ソレとは別件だな。事態はもつと深刻じゃ』

「キメラアントより…深刻…？」

『ああ。嚴重に封印されておつたはずの五大厄災が、いつの間にか消えおつた』

カタストロフィ編

125、大規模テロ

「……は？」

『聞きたくもないとは思うがの。事実じゃ。気付いたら国際環境許可庁から忽然と姿が消えておつたらしい』

「……それで、どこに？」

『全く分からん。今クライムハンターに調査させとるトコじゃ。じゃが、直ぐにでも出てくるじゃろな。大被害という形でな』

「……色々言いたい事はありますが…分かりました。私も悠長にしてる場合じゃなかった。で、ハンター協会はどうか動きますか？」

『いずれにせよ早急に対処するしかないのう。そこで、緊急で対策会議を開く為に十二支んを招集しておる。もしよかつたらお主も来てくれ。会議に参加する必要は無いが、

ワシと打ち合わせぐらいはしておきたい。ヨークシンなら半日で来れるじゃろ？ あと、側にはジンがおるな？ 息潜めてても分かるからな。其奴もメンバーじゃから来いって言つといてくれ』

そう告げられてから一方的に電話は切られた。しかし……五大厄災か……まずいな。全て同時に放出されたらそれこそ世界の危機だぞ。しかも危険度的に私が行かねば無為に犠牲者を増やしてしまう。黒幕か……どんな奴がそれを企んでいるんだろうか。

「おい、カーム。ちょっと聞こえたけどよ、五大厄災つて何だ？」

キルアが尋ねてくる。そうか、改めて説明が必要だなと思っていたら、ジンが先に解説を始めた。

「暗黒大陸から齎された、人類を滅ぼし得る厄災だ。全部で5つある。元々新大陸紀行つっ一本に載ってたんだがな？ 凄まじいリターンのあるお宝の場所にセットで存在してた奴等だ。ブリオンはカームから聞いたろ？ あと4つのヤベー奴と思つとけ。詳しく言えば謎の古代遺跡を守る正体不明の球体、植物兵器ブリオン。欲望の共依存、

ガス生命体アイ、快樂と命の等価交換、人飼いの獣パプ、殺意を伝染させる魔物、双尾の蛇ヘルベル、希望を騙る底なしの絶望、不死の病ゾバエ病、以上だ」

「……聞いただけでヤベー奴等つてのが何となく分かるな。つてか、カームの奴だけでもヤバいじゃないか。キメラアントもいるしよ。どうすんだよ！」

「だから今さつきジジイが言った様に緊急対策会議だ。流石にオレも今回はすつぽかすわけにやいかねーか。ジジイに居場所バレてたしな」

「アタシも聞いちやいたけど、本気でヤバいわね……。アタシ達だけで何とかかなりそうなのがキメラアントつてのが終わってるわ」

「ああそうだ。だから集まった所でダラダラ会議はできねー。すぐに動く必要がある。ジジイの中ではもう方針は決まってるだろうからな」

「方針って……？」

ゴンの質問に、ジンは真面目な顔で答える。

「ハンター協会全力での封じ込めだ」



「我々は全力で封じ込めを行う。以上じゃ」

「[[[は?]]]」

「いや、簡潔すぎです↓会長。もっとちゃんと説明が必要ですよ↓全員」

「そうは言ってももう…これ以上言いようが無いんじゃないか」

皆の疑問を代表して戌の姿を模しているチードルが会長に迫る。確かにその結論は簡潔すぎた。しかし、それがネテロでもある。そこに補足を入れる者がいた。

「皆さん、会長はこう言ってるんです。『我々に対抗する術がない以上、被害を最小限にして厄災発生の地域を封鎖せよ』とね。そういう事でしよう? 会長」

「加えて言えば、『出来るだけ被害が拡散しないように犯人を早急に発見、拘束する事』つ

てトコか。ジジイはいつも言葉が足りねーんだよ。ただお前等もちゃんと頭使えや。首の上に付いてんのは飾りか？」

「…ま、そういうことかな」

スーツ姿の副会長、パリストーンⅡヒルが最初にネテロの意図を説明し、ジンが補足する。両者共に違う方向で他のメンバーに喧嘩を売っている為、会議場は俄に殺気立つ。

「…会長の意図は分かりました↓全員。ただ、それは対症療法みたいなもので根本的な解決にならないのでは↓厄災」

「そうですねエ、会長。チードルさんのおっしやる通りです。ほつとくには余りにも危険！ 正に人類の危機ですよ！ その辺はどうお考えで？」

「……………」

テンション高く、チードルに賛同するパリストーン。そんな彼を他のメンバーは鬱陶しそうに見ているが、ジンだけはパリストーンを観察している。

「まあ、待て。それについてじゃが、コレは最早国家規模の事件じゃ。国は国際的な大規模テロと判断しとる。よって、V5を中心に各国首脳が動いておる。我々は国と連動し

つつ動かねばならん。一般人は即避難、ハンター協会はサポートとして拡散を防ぎつつ避難誘導。コレが限界じゃな。ハンター協会でもこの封じ込めだけですらカテゴリーは文句無しのA級じゃ。だが、お主の言う通り、これでは被害が少なくなるだけで何にも解決しとらん。我々としては出来れば被害が起きる前に首謀者をハントしたいがな。国はその緊急性を把握しておるから、最悪戦術核が被害地域に打ち込まれる可能性すらある」

「戦術核！ そんなにヤバい状況ですか…」

「むしろそれで抑え込めるなら万々歳、というぐらいじゃ。そう思っつけ。んで、十二支んじゃが、半数は犯人捜索、半数は待機して被害が発生したら急行して指揮を取る、としよう。割り振りは任せる。ただ、パリストーンとジンはここにおれ。ワシはとりあえず全体指揮にまわる」

「待ってください！ まだ肝心な事が聞けてません。厄災の対処に戦術核が使用される可能性はわかりました。それでも無理だった場合はどうするのですか？」

ニヤニヤ顔を抑えながらパリストーンが聞く。いかにも胡散臭いが、彼はいつもこのようなのだ。特に会長に絡む時などは。

「……その時は協会の力を結集して命懸けで封じる。ワシとお主らが中心になってじゃ。幸い、ワシのツテで何とかなるかもしれん。よってそれは最後の手段じゃ」

「ほう！ 厄災すら何とか出来る方がいると！ それは初耳ですねエー！」

パリストンとネテロの会話に一同が騒ぎ出す。

「はっ？ ソイツ？ はその厄災とやらに対処する事が出来るのか？」

「馬鹿言え。人間個人じゃどうしようも出来ねーから厄災なんだろう？ そんな奴がいるわけねーじゃん。なんかの新兵器だろ？」

「今の発言はどういう事ですか↓会長？」

「ほら、皆さんも気になったようですよ？ 会長、何か秘策かお有りなら我々には開示して頂きたい！ それとも、我々はそんなに信用なりませんか!？」

パリストンはいかにもな表情で、十二支んのメンバーの気持ちを代弁しているかの様な言い方で会長に迫る。十二支んもそこは聞きたい部分なので反対はしない。いつの間にか会長を糾弾する空気が出来てしまった。彼はその様にその場の空気を支配する事に長けている。気づけば周りが彼のいいなりになる事が多く、そうでなくても引つ掻

きまわされてしまう。強さ云々ではなくとも、かなり厄介な人物であると言えるだろう。だが、ネテロ会長もそれに屈する程弱くはない。

「お主も大概めんどくさいやつちゃのく。ワシのツテじゃ。それ以上でもそれ以下でもないわい。それじゃいかんのか？」

ここでツテを強調しながら堂々と拒否するのが会長たる所以である。有無を言わせない迫力がある。しかし、そこで屈しないのもパリストンである。

「しかし会長、人類存亡の危機ですよ？ この後に及んで秘匿するのもどうかと思いますよ！ ねエ、皆さん！」

メンバーに振られ、ほぼ全員が同意する。中々ない事だ。それ程気になるとも言える。しかし、そこに異を唱える人物がいた。

「オレをその『皆さん』に加えるんじゃねーよパリストン。ジジイがそう言っただ。それでいいじゃねーか。オレはぶつちやけどどうでもいいから早く対処したいぜ？ 大体

ジジイの怪しげなツテとやらに頼る気持ちがある時点で、テメーら終わってんだよ。これはオレらが対処しなきゃならぬ一案件で、その為の会議だ。違うか？」

「「「「……………」」」」

「あとな、オレも世界各地周ってて思ったが、ヤベー案件が増えすぎだ。厄災じゃなくてもな。オレが幾つかは潰したが、このテロの予兆は確実にあった。黒幕は一人じゃねえし、今この瞬間にも厄災が放出されたり、別のやベー奴が出てくるかもしれねえ。もしかしたらハンター協会中枢に黒幕がいるかも知れねえ。だから早く結論出せや。あんまり長引くならオレは勝手に動くぜ？」

ズズズ…

ジンからじわじわとオーラが滲み出す。彼は言外にもサツサとしろという雰囲気醸し出す。パリストンが対抗して口を開こうとする前にネテロが話し出した。

「まあ待て。どうしても知りたいなら、ワシが教えてやろう。じゃが、条件がある。これは超極秘事項じゃ。よって、知りたい者には契約書が必要となる。みだりに言いふらさない事、個人や集団で接触しない事、などじゃ」

「……守れなかった場合は？ ↓契約」

「無論、協会追放、ライセンス永久剥奪。そして時が来るまで拘束させてもらう。これは会長権限での命令じゃ」

「……マジ？」

「おおマジじゃ。……これは言いたくないが、ジンの言った事にも関係がある。この中に黒幕がおるといふ可能性がな。故にワシですらみだりに言う事は出来ん。それでもここまで伝えたのはお主らへの誠意じゃ。ワシは後出しは好かんからな。さあ、どうする？ そこまでして聞くか？」

ネテロが迫り、会議室が静まり返る。パリストンはと言えばニコニコしている。そして、彼が発言しようとして口を開きかけた所でジンが勢いよく立ち上がる。

「おし、話はそれだけだな！ じゃあオレは興味ねーからやる事やるぜ。じゃあな」

と、一足先に部屋を出ていった。その空気に触発され、次々と席を立つ者が出る。

「オレは会長を信頼している。何であれ指示には従うさ」

「面倒な契約なんざ結ばないに限るぜ。オレもいや」

「我は会長の信頼に応えるのみ……！」

「アタシもパス……早く対応策考えなきゃね」

……

そうして、会議室にはパリストンと会長だけが残された。

「……お主は聞くのか？」

「嫌だなア、会長。分かっているくせに。私は副会長ですよ？ 会長の意図に従いますつて！」

「ふん……相変わらず性格悪いの。とりあえずお主はワシと残つとけ。待機組と搜索組の対応策と全体への指示を詰めねばならんからな」

「ええ、分かっていますよ。会長。では」

颯爽と部屋を出て行くパリストーン。その背中を見つめながら、ネテロは溜め息をつく。彼には確信があつた。今の会議の中で、その種を蒔きながら全員をじっくり観察していたのだ。証拠は無い。だが、分かつてしまった。長い時を生きてきた会長故に。

「残念じゃ……お主がこうも裏切るとはな。ワシもヤキがまわつたのう……なあ、パリストーンよ」

会長の呟きは、誰もいない会議室に静かに響き、そして消えていった。



「よお。待てや、パリストーン」

「おや？ ジンさん、どうしました？」

会議室からパリストンが笑顔で歩いていると、それを止める人物がいた。ジンド。彼は腕組みしながら廊下の壁に背を預けている。

「お前に聞きたい事がある」

「ふむ。何でしょう？」

「お前は会長のツテをどこで知った？」

「……質問の意図が分かりませんね。私が知っているとも？」

「ああ、間違いなくな。あの時、ジジイは自分のツテとしか言っていなかった。だがお前は個人と断定した。その時点で知るのは確定だ」

「ふふ……ただの想像ですよ。何かおかしかったですか？」

「いや、聞きてーのはお前が何故ワザとソレをやったかだ。ジジイのバレバレの罠にワザと引つかかるには理由があんだろ？」

「それを聞いてどうします？　そもそもそれを言うなら貴方も知っていると告白している様なものでは？」

「ああ。オレは知ってるぜ。だからこそ聞いてんだ。……何を企んでやがる？」

「嫌だなあ。私も皆さんと同じですよ。人類の危機への対処、更に強いて言えばハン

ター協会への愛故の行動、ですかね」

「ケツ。お前の愛とやらは方向性が間違つてんだよ。第一、お前は直近でミテネ連邦に足を運んでいたな？ どうだ？ 準備は整ったか？」

「それこそ何を言つてるか分かりませんね。純粹にハントですよ。それが我々の仕事でしよう？」

「ふん、舐めんなよ。人類は一方的にやられる程弱かねーぞ。後、お前の後ろにいる奴にも言つとけ。アイツを甘く見るんじゃないやねーってな」

「さて…話が噛み合いませんね。これ以上は水掛け論でしょう。お互い証拠も無しに話すのは時間の無駄ですよ？ 貴方もそう言つて会議を終わらせたでしょう？」

「証拠ね。ま、直ぐにでも出るだろ。それが出るまでは自由にはさせねエ。覚悟しとけよ。話はそれだけだ。じゃあな」

そう言つてジンはパリストンとすれ違い、廊下の奥へと消えていった。残されたパリストンは一人呟く。

「やはり侮れませんね…貴方は。でももう遅い。五大厄災すら単体で滅ぼし得る個人の存在…これが人類の危機と言わず何と云うのです？」



「ほぼ確定じゃな。状況証拠が揃いすぎておる」

ここは会長室。その場にゴン、キルア、カルト、ビスケ、そして私がいる。とりあえず全員ジンと共についてきた。

「会長……やはり？」

「ああ。間違いないじゃろ。黒幕の1人は副会長パリストン。恥ずべき事じゃがな。しかしアヤツは尻尾を中々出さん。更に奴のシンパが大勢おる状況ではカンタンには拘束出来ん。今は精々監視するのが限度じゃな」

「……暗殺は？」

「ゾルディックらしい発想じゃの。お嬢ちゃん。だが、無駄じゃ。恐らく準備はもう終わつとるじゃろ。だからアヤツもここに堂々と顔を出せる訳じゃ。それに黒幕は一人じゃない。我々には起きる事象をそれぞれ対処していくしか出来ん。…悔しい事にな」
「それじゃあ、どうしようも無いって事!？」

「平たく言えばな。じゃが、ここにイレギュラーがおる。まさしく人類の切り札がな。なるべく我々で何とかしたいところじゃが、もうなりふり構つてはおれん。これから世界各地で地獄絵図が発生するじゃろう。それを防ぐ為にはワシらは伏してお主の力を借りねばならん…。すまんが、カーム。どうかワシら人類を救つてくれ」

ネテロはその場で頭を下げる。しかし、彼が頭を下げる必要はない。

「頭を上げてください、会長。私はこの世界が好きだ。滅びてほしくない。それに、もしかしたらコレは私のせいかもしれないんです。だから頭を下げるのは私の方だ。私はやります。少なくとも、私の好きなこの世界を守る為に。でも、私だけじゃダメだ。みなさんの協力がいる。他の黒幕を炙り出してください。そして、被害を最小限に出来る様に食い止めてください。厄災は私が叩きます。それまで踏ん張ってください。それが私から協会にお願いしたい事です」

「無論じゃ。そこは任せい。それにもうワシも布石を打っておる。残りの黒幕を炙り出す布石をな」

会長は私にそう断言した。心強い。さて、ではまず先にキメラアントを潰しに行くか。そう決意を固めていたら、会長室の扉が開く。

「よお、ジジイ！ 遂に出たぜ!! ベゲロセ連合国の都市プールリバーで原因不明の大規模な生物災害発生だ！ その被害状況から恐らくブリオンだ」

「早速来たか…。現地ハンターに連絡じゃ。直ちに周辺地域を封鎖せよと！ ワシもV5への連絡と全体への通達を行う！」

「それがな…それだけじゃねえんだ。オチマ連邦の都市ババロフで大規模な殺人事件が多発してやがる。もう被害は千超えて万に届きそうだ。コレは多分ヘルベルだ。事態は一刻を争う。すぐ来てくれ」

「分かった。急ぐ…カーム、頼めるか？」

「分かりました。お任せください」

「ちよつと待てよ！ キメラアントはどうすんだ!?!」

「私が行く…と言いたい所だが…」

「アタシが行くわ。ジジイ、いいわね？ カルト、アンタも来なさい」
「……しかし……」

「心配しないで。無理はしない。少なくとも戦力の削りに努めるわ」

「僕も大丈夫。少しは役に立ちたい」

「ゴン、キルア。お前達も行け。今のお前等なら充分役に立つ」

「……直ぐに片付けてから向かう。決して王直属護衛軍以上には接触するな。約束してくれ」

「……分かった（わ）（ぜ）」

「モラウとノヴもそこに付ける……濟まんが踏ん張ってくれ」

「カイトも向かわせる……ちったあ足しになんだろ」

「ありがとうございます。では向かいます。ご武運を」

「ああ。お主もな」

そうして、それぞれがやるべき事をなす為に動き出す。しかし、既に賽は投げられてしまった。こうなった以上は、如何に被害を最小限に抑えるかの勝負となる。人類への試練の第一歩は、そうして幕を開けた。

126、ヘルベル

ソレは、着実に被害を増やしていった。ここ、NGLで。最初は幼い兄妹を喰らった。そして、ソレはその味を気に入ってしまった。別名グルミアントと呼ばれるソレは、気に入った食料が見つかるとその種が絶滅するまで喰らい尽くす習性がある。

そして、ネズミ算式に兵隊蟻を増やし、更に大量の人間を捕獲し、食らう。ソレ、つまりキメラアントの女王は自らの限界以上に捕食し、急速に体制を整えていった。何か時折紛れ込む極上の獲物の効果もあり、そのスピードは驚異的であり、既に巨大な巣を形成して、王直属護衛軍の誕生まであと僅か、という所まで来ていた。

全ては、最強の王を産む為に。

.....

「あゝあ♣？ 蟻のエサやりなんてつままないなー？ 早く成長してくれるといいのに…◆？」

「んゝゝ！ むゝゝ！」

「コラ、暴れないの?? キミは貴重なエサなんだから♣？ さて、そろそろ上位種が出てくるかな？ キミはソイツに見つかるやばい事になるから必死で隠れてねゝ♣？ ボクもそろそろ開会式の準備したいし…頑張つてね??」

完全に気配を消して巨大な蟻塚の内部に潜入しているピエロ。ヒソカだ。そこは食料庫。普段は調理担当のキメラアントがいるが、現在沈黙している。死んではない。ただ、眠っているだけだ。

ヒソカの足元には猿履を噛まされて転がされた人物がいる。彼はプロハンターだ。つまり念能力が使える。その彼にヒソカは毒を打ち込み、おとなしくさせた。ポックルという名を持つ人物はそこで意識を失った。その彼をヒソカはあえて食料庫ではなく、

廃棄された骨の中に隠す。オーラを持つ者しか見付ける事が出来ないように。

「さくって◆？ これでヨシ♣？ 後は結果をお楽しみに◆？ じゃあね〜?！」

そうして、ピエロはその場から掻き消える。しばらくして、調理担当のキメラアントが目覚める。彼は何事もなかったかの様に再び人間の肉団子を作り始めた。



「さて…普通に行ったら間に合わんな」

この世界では飛行船が空からのメインの交通手段だ。これほど発展している文明に

において、飛行船はナンセンスとも言える。しかし、そうせざるを得ない理由がある。暗黒大陸の存在だ。暗黒大陸はV5の協定で渡航を厳しく制限されている。そして、その協定により飛行機の類いの高速で長距離移動が出来る手段の開発は禁じられている。万が一でも暗黒大陸に不法に侵入することがないように。そのため、世界中で空の交通手段は飛行船が主流になった。

そして、今。この一刻をも争う様な状況下でその手段を用いるようでは遅すぎる。単体でさえ人類を滅ぼすポテンシャルを持つ厄災だ。しかもそれが2体も出現している。遅れば遅れる程被害が甚大になる。それはやがて人類の終焉を意味するだろう。

ならば、私だけが取れる手段を使う。それは超高速で空を飛ぶ事。

誰もいないビルの屋上まで隠れて移動し、「聖光気」に移行する。そしてその気も目立たないように隠蔽する。本当に練習しておいて良かった。そのまま浮き、高度1000メートル付近まで到達する。ここならば最早飛行船の影も形もないだろう。しかも現在は夜だ。人目にもほぼ付くまい。地図と方位磁石機能のついたケータイを片手

に、早速移動を開始する。できる限り早く。限界を超えるほどに。そのスピードは音速を超え、超音速域に突入する。後方にはソニックブームが発生するが、高度が高度なので影響もそれほどあるまい。さあ、時間との勝負だ。まずはオチマ連邦。どちらに行くかわずかに逡巡したが、ブリオンよりも脅威度が高いと判断した。どうか、間に合いますように。そして、現地ハンターができる限り避難を完了していますように、と祈りながら。



そこは、端的に言えば地獄と化していた。突然隣人が殺意を持って殺しに掛かってくる。隣人だけではない。親しき友人も家族も恋人も。親子や兄弟ですらも。等しく激しい殺意に駆られ、近くにいた物を殺そうとする。そして、彼らは一様に強靱な身体能力と、不可思議な力を用いて確実に仕留めに掛かる。まるで脳のストッパーが外れたか

のように。

「やめ……やめて——ッ!!!」

「シネ!!!」

「テメエ、ブツコロス!!!」

「ぎやあああつああああ」

「一体どうした!? なぜ! なぜ子供を殺した!!! 許せない!! おマエをコロシテヤル

!!!」

「フヒヒヒヒ……コロシテやった……ザまあミロ……マダタリナイ……マダタリナイイイイあ

qwse drftgy」

そこら中に断末魔の叫びが響き、それ以上に狂った様な叫びが響く。戦争でもそこまではやらないというような殺し合いが一地域で多発する。武器が有れば武器で、無ければ己の手や爪などを使って。ありとあらゆる手段で殺していく。そして殺人が殺人を呼び、止めに入った警察官すらも殺人鬼の仲間入りを果たす。人間だけではない。動物も、虫ですらも影響を受け、積極的に殺し合いを始める始末だ。最早これは超特大の

バイオハザード
生物災害である。

連絡を受けたオチマ連邦の大統領は、直ちに付近一帯に緊急事態宣言を出し、近隣都市への避難とババロフの全面封鎖を決定し、通告した。それと同時にハンター協会会長のアイザック・ネテロから緊急指令が発令され、現地ハンターは直ちに避難誘導の手助けと、都市内で起きている事象を食い止めるように指示が出された。具体的な対処法も最高幹部の十二支んのメンバーから続報で出された。

しかし、現地にいたプロハンターは困惑した。恐ろしいほどの殺意の感染力！ 最初は念能力ではと疑っていた彼らも、その脅威を目の前にして考えを改めざるを得なかった。試みに汚染地域へと調査に潜入したとあるハンターは、オーラでガードしていたにもかかわらず、あつという間に彼らの仲間入りを果たした。厄介なのが、彼らは別に思考力を失ったわけではない。ただ、恐ろしいほどの殺意に支配されているだけだ。つまり、従前の能力も使用できるということである。しかも、そのオーラに触れたら感染してしまう。これは一般人でも同じで、感染者は強制的にオーラを引きずり出されて、近くにいる生物に手当たり次第にその触手を伸ばす事で感染をより広げてしまう。つまり、念能力者の場合は更に不味い事になる。

この事象により、彼を止めるためにハンター仲間の3人が犠牲になった。問題は、彼が操作系であり、操作系ルールを利用していれば殺意の伝播も起きないと思つていたことだ。結果的に、より被害は拡大した。

よつて、生き延びたハンター達に出来ることは、周辺の感染していない人々の避難と、襲つてくる感染者を撃退すること。つまり行動不能にするしかなかった。しかも、オーラには触れない様に遠距離からだ。ここで難しいのは、対象を安易に殺してしまえばそこから殺意が伝染してしまう所にある。

現に軍が出動して感染者を殺し始めたら、軍の人間が同士討ちを始め、そこからまた被害が広がってしまった。

対処法が消極策しかなく、どんどん犠牲者は増えていく。もう万単位が犠牲になつていられる。そして、この脅威は動く。殺意が殺意を呼び、ハンター達もバリケードなどを構築しての遅滞戦闘しか出来ない。どう考えてもジリ貧である。発生源に辿り着くどころか、食い止めることすら怪しいのだ。最初の事件発生から約20時間が経過している。その短期間で、広大な都市ババロフ全域が殺意で汚染されてしまつていた。このままでは、封鎖するどころかオチマ連邦全土に被害が広まつてしまう。軍もハンターも頭を抱え、絶望する。大統領はこの被害を受け、戦術核の使用の検討に入つた。なるべくなら使いたくない。今は何とかハンター達や軍が健闘しているが、それももう保た

ない。そうならば使わざるを得ない。そうしなければ国が滅びる…非常に苦しい決断を迫られていた。

その時

上空から一筋の光が、ババロフの中心地に降り立った。



遅かった…！ 既に1都市が壊滅状態だ…。そして、これは…これは酷い。あまりにも…！ 動く者の姿がほぼ無く、惨殺された死体がかかしこに散らばっている。その死体は老若男女問わずだ。付近一帯は血で河が出来る程になっている。正に地獄が

現世に出現したかの様だ。

そして、この付近一帯に残る濃厚な殺意を伴ったオーラ……！ コレは確かに厄災と呼ぶに相応しい。

とにかく元凶を討伐しない限り、この汚染は止まらないだろう。

で、あるならば先ずはこの元凶を滅ぼす。その後、感染者への治療だ。従来の奇跡でも治療は可能だとは思うが、念の為に吸収してこの力を解析したらより効率的だろう。さて、何処だ？ 広範囲に広がったオーラの元はどこにいる。まあいい。ならばこうしよう。《円》！……いた。双尾の蛇！……デカいな。奴も気付いたか。こちらに向かってくる。こちらに来る間にもその力と大きさは増している。恐らく犠牲者のオーラを吸収しているを見た。昔闘ったヴリトラと同程度の大きさだ。

しかし、暴虐もここまでだ。お前は殺しすぎた。その報い、受けて貰おう。

ビルの壁を這って、ソイツが姿を現す。全長30メートル。向こうではよくあるサイズか。

——コロセ コロセ！ コロセ!!! ——

「いきなりご挨拶だな。だが、お前はここで滅びてもらうぞ」



ソレは歓喜していた。

これまで永い年月を眠り続けた。びっしりと書かれた神字のケースに嚴重に封印され、行動や自らの権能すらも封じられたソレが選んだのは、活動を停止してひたすらに休眠する事だった。

ソレは、元は暗黒大陸の生物だ。その特性から単性生殖であるソレは、暗黒大陸の生息域で密かに過ごしていた。しかし、他生物には容赦なくその力を振り撒く。おかげでソレが棲む場所には植物以外の他の生物はほぼ存在しない。ソレの種族特性とも言える念能力は、他生物に殺意を植え付けて殺し合わせるといふものである為だ。ただ、その力は念能力と言うには強すぎた。殺意は際限なくオーラを伝って感染し、更に殺した

者に伝染する。その連鎖は尽きる事が無い。これは最早念能力ではなく、権能と言うに相応しい力である。

その力の秘密として、ソレの繁殖方法が挙げられる。上で述べた様に単性生殖のソレは、卵を産む時に他生物から吸収したオーラを全て使い切る。そして生まれた新しいソレは、自らの親と殺し合いを始める。もちろん、オーラを使い果たした親に勝てる術は無い。子の方にその特性が引き継がれている為だ。膨大な殺意と怨念と共に。

ある時、自らの生息域に大量の弱い生物が訪れた。ソレは嬉々としてその権能を振りかざし、全滅に追いやった。普段は休眠状態であるソレは、一度生息域を通りかかる生物を感知した場合、直ぐに権能を放出する。見事に出現した阿鼻叫喚の地獄を満喫し、思う存分に栄養を吸収したソレは、代替わりを終えて再び休眠に入る。それから、スパンを空けてボーナスタイムとも呼べる様な事が3回程続いた。

しかし、3回目でイレギュラーが発生する。殺意を振り撒き、弱い生物達をほぼ全滅させ、代替わりしようと目論み、卵を産んだ。しかし、その卵が孵る前に消えてしまった。そう。使われたのだ。人類の戒めの為に。仕方なく、親は休眠に入った。次こそは卵を孵してみせる、と。

一方、卵の子は卵から孵つて気付いた時には神字の書かれていたケースに閉じ込められていた。折角孵つたのにこれでは活動が出来ない。仕方なくソレは休眠状態に入った。ごく稀に封印が弱まる事があり、その時すぐに目覚めて殺意を振り撒いたが、僅かにしか殺意を振り撒けず、それから再び封印が解かれることは無かった。ここからソレも永い眠りについた。

ソレの名はヘルベル。五大厄災の1体である。

.....

どれぐらい眠つただろう。その眠りは、突然破られた。

気付けば自分はケースから出ていた。封印が解かれたのだ。そして……いた！ 数え

るのも大変な程の獲物達が。ヘルベルは歓喜した。先ずは側にいる獲物からだ。よく自分を永い年月閉じ込めてくれた。許さない。ケースを持つ者は、自分を見ても反応を返さない。よく見たら、針の様な物が刺さっている。だが関係ない。この力はそんな能力すらも貫通する。殺せ、殺せ、殺せ！ 今までの鬱憤を晴らすかの様に強烈な殺意の権能を振り撒き、近くにいた生物は軒並み汚染された。

そこから地獄は始まった。

——そして今、ヘルベルは悠々と硬い平らな地面を進む。人間の腕程の大きさだった体躯は、次第に全長30メートル程の大きさに達した。それは過去最大の大きさである。芳醇な獲物を心ゆくまで喰らい、周囲の獲物は粗方片付けた。しかも場所を移動すればまだまだ沢山いそうだ。ここは楽園だ。邪魔者はいない。ならばそろそろ代替わりしようかと目論み始める。

だがそこに、上空から光が差した。次いで、何者かがそこへ降り立った。

……何だ？ アレは。

ヘルベルは瞬時に「敵」であると判断する。しかし、問題ない。今まで自分の権能が通じなかつた事は無かつた。自分のオーラにその身体が触れさえすれば、その力を伝播出来る。例外は無い。ヘルベルは過去最高に力を増している。その力を防ぐ事は出来まい。しかし、その次の瞬間、凄まじいオーラが視界全域に放たれる。それは自分すら巻き込む程の大きさだ。これは……下手したら自分以上!! 直ぐにそのオーラは消えたが、ヘルベルは逃げるべきか一瞬迷つた。だが、彼は闘う事を選んだ。他者に殺意を振り撒く特性を持ち、その影響もあつて自分自身も非常に好戦的であるが故に。

それは油断とも、傲慢とも言える。だが、事実ヘルベルはそれほどの力を持っている。よつて、それはプライドとも言えた。

力の発生源へと向かう。そして、「敵」に遭遇した。

ヘルベルは少し拍子抜けした。今まで見てきた弱き生物と姿形が変わらなかつたからだ。他の獲物と違う部分は、非常に堅そうな黒い革を身につけていた事だけだ。これならば問題無い。幾ら強かろうが、堅い鎧を身に付けようが、本気の殺意の権能をぶつ

ければ、他の獲物同様に殺意に溺れるであろう。そして、より多くの獲物を狩ってくるだろう。

ヘルベルはその生物に向かつて本気の権能をぶつけた。自らの勝利を確信しながら。

……効果が薄い。それも仕方あるまい。これ程強い「敵」は居なかつたから。それでも多少は効果がある。これならば可能だ。その内殺意しか頭に残らなくなるだろう。

しかし、それから一向に効く気配が無い。寧ろ元に戻り始めている！ 何故だ!? 継続的に権能を送り続けているにも関わらずだ。その時、ヘルベルの頭に「敵」からのメッセージが届く。それはイメージを介して伝えられたモノであり、人間の言語を解さないヘルベルにも理解出来た。

——お前の権能は頂いた。汚染された人々の治療に必要なだったからな。もうお前は用済みだ——

ゾワッ!!!

「敵」の存在感が膨れ上がる。同時に黒色だった革はいつの間にか白く光輝くモノへと変化した。

不味い、不味い、不味い!!!　こんな…こんな生物を超越した存在だったとは!!!

ヘルベルは「恐怖」を感じていた。そんな事は産まれて初めて…いや、永い間代替わりしてきた中で初めての感情であった。

古の時代にはあつたかも知れない。だが、悠久の時を経て、ヘルベルはそんな感情は忘れてしまっていた。

故に、ヘルベルは動けない。正に蛇に睨まれた蛙の如く。

「敵」がその手から炎を発現させる。アレは、アレは駄目な奴だ。逃れられぬ死だ！恐怖に縛られて動けない身体を何とか奮い立たせ、ヘルベルは逃れようとした。しかし、全てが遅かった。

——さようなら——

瞬間、ヘルベルの視界は「死の概念」を宿した炎に包まれる。

——ああ……これが、「死」か

1つの都市を壊滅状態に追い込んだヘルベルは、ここで完全に滅びた。



付近で絶望的な遅滞戦闘を繰り返していたハンター達や軍は、上空から白金色の「何か」が降りてくるのを目撃した。しかし、目の前の戦闘に忙しく、それどころでは無い彼らにとつては、不可思議な現象としか映らなかつた。

だが、その後に行われた《円》にハンター達は驚愕した。それはこの都市ババロフ全

土を覆う程の規模であつた為だ。何という規模！これが厄災か！と、更に絶望感を掻き立てる。しかし、そのオーラはこれまで観測してきたオーラとは種類が違つた。具體的にどうとは言えないが、非常にクリアなオーラであつた為だ。

まさか、助けが来たか？それに気付いたハンター達に俄かに活気が戻る。直ぐに引つ込んでしまつたが、もしアレが厄災とは別物であつたら、もしかしてこの絶望も終わるのではないだろうか、と。

しかし、この厄災の恐ろしい所はオーラの多寡ではない。もし、アレすら取り込まれてしまつたら、あの力が向くのは今度は自分達だ。そうなつたらもうお終いだ。人々を救うという使命感で闘ってきた彼らも流石に命は惜しい。

固唾を呑んでその力の行く末を戦闘を続けながら見守つていた彼らは、続けて凄まじい白金のオーラを遠くから観測した。距離が遠く、あまりハッキリとは見えないが、ソレが常識を超える物である事だけは理解できた。

「神よ……」

思わず呟いたハンターがいた。それも無理なからぬ事だ。あまりにも神々しいソレは、最早オーラなどと言う概念を通り越していた。それは正に、神の力と言えた。

無論、全てのハンターがソレを目撃したわけではない。寧ろ極一部であつた。しかし、次の瞬間にその白金のオーラがババロフ全土を覆つた。

そして、殺意に汚染されていた人々や動物が正気に返り始めた。それはつまり、厄災の滅びと脅威の終焉を意味していた。白金色のオーラはその場に留まり続けた。それに触れたある者は、涙を流して跪き、神の名を呼ぶ。信心深くない者でも思わず跪きそうになつた為無理もない。

念を持たぬ者にも感じられる祝福は、傷ついた者達を癒しはじめ、やがて完全に怪我や病氣までを完治させた。欠損した部位すらも完全にだ。

それは“奇跡”と呼ばれる物であつた。

「あつ……」

“癒し”を完了させた神の気配が遠のく。まだまだソレを感じていたい。神の手に抱かれていたい。彼らは走り出す。その中心へと。しかし、辿り着く前にその神の遣いは上空高くへと舞い上がっていた。誰かが叫ぶ。

「神よ！ 神よ！ 我らを見捨てたか!!」

それは余りにも傲慢な叫び。叫んだ後、彼は自らを恥じた。しかし、叫ばずにはいられなかった。そんな彼らに、頭の中で少し困った様な声で返事が届く。

——私は神ではない。そして私にはまだ救うべき人々がいる。生き残った人達よ。まだまだこの地での困難は残っている。貴方達の力が必要だ。どうか、傷ついた隣人を救って欲しい。それが私の望みだ——

それだけ告げると、ソレは再び上空への上昇を開始し、やがて見えなくなった。皆、その場へと跪き、祈りを捧げた。どうかあの神の遣いが舞い戻って来ますように、と。それまでは彼の言った事を必ず守っていこう。それが我等の使命であると確信しながら。

——彼らがあまりの衝撃に中央への報告を忘れ、大統領が危うく戦術核を打ち込みそ

うになったのは、また別の話である。

127、プリオン

「着いたわね。んじや、検問通るわよ」

「確か…天然素材以外の人工物の持ち込みは禁止なんだよな？ スゲー面倒臭いけど」
「その為に会長は私をつけたのですよ。こちらへどうぞ」

ノヴが【四次元ハイドランドマシドシュークョン】を発動する。すると、地面に穴が開いた。そこにそれぞれが物品を放り込んでゆく。銀の武器、パイプ、指輪などだ。

「ああ、アタシの指輪ちゃん…！ ちょっとだけお別れね…必ず迎えに行くからね！」
「………すぐに取り戻すから……」

「分かったからサツサと入れろよな。今生の別れじゃねーんだからよ」
「キルア、2人にとっては大事な物なんだから大目に見てあげようよ」

「ははっ！ ボウズは女心が分かってんじやねーか。将来有望だなア」

「ジンさんに依頼されたから来たが、何なんだこのメンバー……」

カイトがそのメンバーの濃さに思わずボヤク。彼はたまたま調査を終えてヨークシン近郊にいた。その為、無事に直ぐ彼らと合流する事が出来た。そして討伐隊と会ってみてその中にゴンを見つけたが、その成長ぶりに驚愕すると共に、これから一緒に闘う事になる人員の凄まじい存在感に驚きを隠せなかった。それも無理のない事だ。大人3人は何となく分かる。全員恐ろしい程の実力者だ。特にビスケット＝クルーガー。見た目は若く美しい女性だが、その発する威圧感、圧倒的な格上のものだ。

しかし、残る3人は子供である。だが、その実力は……大人3人に負けず劣らずの力を持つている様に見受けられる。銀髪の男の子、キルアも、着物姿のカルトも、下手したら自分という勝負をするのではないだろうか。

更にジンの息子であるゴンなどは、昔会ったきりの久しぶりの再会だったが、もうどう見ても12歳には見えない。子供の成長は早いなー、とカイトは思考を放棄するしかなかった。



「は一面倒くさー！」

「まあ仕方あるまい。ここも余りいい噂は聞かないからな。とりあえずさっさと向かうか」

「で、どこに向かうんだ？ 闇雲に向かつても分からないぜ？ 監視もいるしな」

「そうね……とりあえず片っ端から人の住む村をまわってくしかないわさ。買った地図見ながらね。カームの話から考えればあまり猶予はない。急ぐわよ」

「キメラアントか……もしその話が本当ならば特大の生物災害だな……」

討伐隊のメンバーは、全員足にオーラを集めてダッシュを始めた。監視役件案内役を振り切るスピードで。全員が全員特級の能力者故、そのスピードは下手な車を超える。あつと言う間に彼らは地平線の彼方に消えていった。

——監視役に付いてきた職員は呆然としながらもその姿を見送るしかなかった。



参つたな。仕方なかつたとは言え、あんな崇められ方をすると。私は全ては救えなかつたというのに。とりあえず神じやないと否定はしておいたが、あんまり分かつてなさそうだった。あまり注目されるのは良くない。だが、あの時は仕方なかつた。……できれば次は、なるべく早く解決せねばならない。

しかし、ヘルベルでの被害状況ならブリオンも覚悟しておいた方がいいな。急がねば。あの迷宮都市の悪夢が再び繰り返されている事だろう。しかも今度の被害者は無辜の一般人だ。次こそは必ず救わねば。

……一体誰が真の黒幕なのか。しかし理由がどうあれ黒幕は全員絶対に許さない。必ず滅ぼしてやる。パリストンは間違いないとしても、ヒソカも関わっているだろう。奴に關しては私の不始末だ。責任は取らねばなるまい。後は誰が関わっているのだろう。まあいい。会長がその辺はキツチリとやってくれるだろう。もし見つけられなく

ても、それならそれでいい。この始末をつけて戻ったら必ずパリストンに聞いてやる。その身体に直接だ。なるべくならやりたくなかったが、ここまでやるなら話は別だ。覚悟しておくがいい。



「ヘルベル、完全に沈黙!! 詳細は分からないけど、少なくとも被害が止まった……」

十二支んの1人、西担当のクルックが叫ぶ。それを聞いた解析班・急行班のメンバーは、驚愕しながらモニターに集まった。急行班は解析班との打ち合わせを終え、今まきに出立しようとした所であった。

「バカ言え! 今さっきまで被害が大拡大してる最中だっただろ!! どうなってんだ!」

寅担当、カンザイも思わず叫ぶ。それほど衝撃的なニュースだった。

「続報も続々と来てる…イマイチ具体的に分かんないけど、まとめると、どうやら上空から謎の生命体が現れて、ヘルベルを滅ぼしたようね」

「なんか〜現地のハンターが軒並み『神の遣い』が降臨した〜ツて言ってるんだよね〜」

「しかも、その後感染者、負傷者が『全て』完治したって…疑わざるを得ないわ↓信憑性」

「もしかして…コレが会長の『ツテ』?」

「……だとしたら、相当な『力』…! 会長が超極秘扱いするのも頷ける…!」

「まあ、オレ達も準備完了して死ぬ覚悟で行く直前だったからな。助かったぜ。んで、その謎の生命体って奴はブリオンの方に行ったのか?」

「その後の消息は分からないけど、どうやらそうみたいね。我々がやるべき事は、ソレが着くまで現地ハンターに被害を抑えてもらう為の指示出してトコかしら」

「後は、捜査班の奴らの犯人探し次第だな。……亥と子ジンバリストンは?」

「バカはあつちこつちフラフラしてる。今は捜査班かな? 副会長サマは会長と一緒に

国との渉外や交渉中よ」

辛辣なセリフを吐く巳担当のゲル。言外に会長に特別扱いされている2人への嫉妬も混じっている。

「早くテロリストを見つけないとね。これでもまだ2体しか出てないんだから」

「本当に頭が痛くなるわ。一体どこのバカがやらかしたのやら……」

「捜査班に期待するしかないね。我々はとにかく資料をあさって対処法をすぐにも伝えとかないと」

解析・急行班は再び仕事を開始する。願わくば、謎の会長のツテが被害を食い止めてくれることを祈りながら…。



「で？ 出たか？」

「馬鹿野郎！ そんな簡単に出るわけねーだろ！ 大体何しに来やがった」

ジンが捜査班に向かって尋ねるが、彼らも一向に進まない捜査に苛立っていた。

「どこの監視カメラにも映ってない……入庁記録を見ても何も無い。あそこは嚴重なチェック体制を敷いているから蟻一匹通さない仕組みになっている。それは念能力者も例外じゃない。よって、国際環境許可庁に潜入して厄災を持ち出し、しかも証拠も残さないなんて普通は不可能だ」

午担当のサッチョウウが答える。その顔は暗い。他のミザイストムやボトバイなどと同じ表情だ。彼らは一丸となって犯人捜索及び、今後の動きの予想を行っていた。しかし、お悩みハンター、クライムハンター、テロリストハンター、ブラックリストハンターの力を持ってしても、犯人の決定的な姿が中々見えてこない。

「もどかしいな……だが、今後のテロリストの動きは何となく読めたぞ」

「ほう。ホトバイ辰、言ってみろよ」

「なんでテメーはいちいち偉そうなんだよ。ジン」

「……まあいい。敵はいきなり厄災を都市に放り込んだ。テロにありがちなメッセージもなくだ。その目的は世界各地に混乱を巻き起こす事だと考える。今回はオチマとベゲロセだ。次に起こるのは高確率でミンボかアイジエン大陸のどこか、とみた」

「その心は？」

「我々が急行できない国だ。まず、知つての通り、厄災が盗まれた国際環境許可庁はヨルビアン大陸にある。これは厄災が漏れた時に、我々ハンターが即座に対応出来るように協会本部のある大陸に建てられたからだ。普通のテロリストであれば、わざわざ盗んだブツに海を渡らせるなどというリスクは犯さない。しかも中身は厄災だからな……だが、この犯人はやりおつた。しかも首都ではなく、狙つたのは衛星都市だ。ここに何かしらの意図がある。……我々の結論としては、我々が集まったタイミングを見計らつて、コレを遠い地域で放出したということだ。であれば、次に起こるのは同じように我々が対応し辛い国であろう……更に言えば、ジンの言つたとおり、協会内部に裏切り者がおると言う説が濃厚になつておる」

「おーおーさすが専門家。そこまで分かつてんならもうその先も読めてんだろ？」

「……そうだな。考えたくはないが」

「あ？ ボトバイ、そつから先もあんのか？」

「いまいち分かっていないサイユウと、言いよどむボトバイにミザイストムが助太刀する。」

「ああ。犯罪心理学から考えなくても分かることだ。ボトバイの言つたとおりの理由で、恐らく敵は我々の考えを読んでいる。これは内通者のせいだしよう。それで、次に敵の取る手は何だと思おう？」

「ん〜…何だ？」

「次の手、というか、敵の真の狙い、だな。サル、ちつたあ考えろや」

「うるせーよ!! ……チツ。わかんねえ。ボトバイ、どういう事だ？」

「……敵の真の狙いは我々ハンター協会本部だ。恐らく、だが。世界の混乱を純粹に狙うなら首都を狙つた方が効果的だ。だがそうじゃないという事は、別の狙いがある。奇しくも普段バラバラな我々が全員集まって指示系統が集中しておる。敵からすればこの状況を作る為にやっておる様に感じられる。動機は分らん。しかし、状況を考える

と、そうとしか思えん。よつて、厄災の1つは高確率でここに放たれる」

「…は？ マジで…？」

「マジだ。今、解析班に確認したが、ヘルベルが活動を止めた。恐らくジジイのツテが機能している。それがジジイの持つツテ：厄災すら止め得る最高の戦力だろうな。で、それが今、オレ達から引き離されて大陸の向こうにいる。コレがどういう事かかっていう話だな」

「「!」」

「それは本当か!?!」

「ああ。間違いねエ。今仕入れた情報だからな」

「そ、それはそれでビツクリだが…したらオレ等もヤバーんじゃねーか?! ていうか、内通者がいんだろ? ソイツはどうすんだ?」

「逆に考えろ。ソレすらどうでもいいか、何とか出来そうな奴が犯人だと。そうすれば何となく見えてこねーか?」

「……まさか…お前…そんなバカな!」

「ま、裏付けも何もねー状況証拠だけだがな。だからこそサツサと証拠付きで解明したい訳だ…サツチョウ、その入庁記録はオリジナルか?」

「ああ、そうだが」

「ならば、いけるかもしれん。ソイツを今すぐ除念師に見せてやれ」

「!? …まさか」

「オレの勤が正しければ、それで出て来るぞ。今回の黒幕の決定的な証拠がな」



——都市及び本体の場所、不明。都市の侵入者の所在、不明。周囲の素体数、1。緊急時プロトコル作動——

きつかけは、ヘルベルが滅びた時から20時間前に遡る。そこはベゲロゼ連合国、プールリバー。50万人規模の中規模都市である。その中央区に位置する場所のマンションホールから、1人の奇妙な男が現れた。それだけならば工事中の作業員かふざけた大

学生か、はたまたホームレスかといった所だ。しかしその男はパンツ一枚であった。それだけならばやはりふざけた大学生だったで済むが、彼が奇妙なのは、その頭部が緑色の球体で覆われていたことであつた。

始めは誰も見ないふりをして通り過ぎていった。しかし、誰かが通報したらしい。警察官が駆けつけ、その彼に職務質問をしようとした、その時

ソイツの腹部がぱつくりと割れ、そこから触手が伸びて取り囲んだ警察官を襲つた。身体の各部位を触手に貫かれた警察官は、たちまち身体に異変が起き始めた。全身が痺れたかと思つたら、その内頭部が変化し始め、最初の男と同じ様な緑色の球体に変化してしまつたのだ。

あまりにも非現実的なその光景に、道ゆく人々は何かの撮影か、ショーかと勘違いし、逃げる事もせずにその光景を携帯で撮影する者もいた。しかし、警察官が全員変化してしまつた後、彼らはその動けない人々に襲いかかつた。

パンデミックの始まりである。



「未確認生物が市民を襲ってる！ 今すぐ応援を!!」

「な、なんだアレは…バケモノだ!!」

「ギヤアアアアア!!」

必死に対抗しようとする警察官達だったが、銃などはまるで効果が無かった。撃った端から修復していき、その反撃により次々と侵食されていった。また、ソイツの出現場所も良くなかった。よりによって、ソイツは人口が集中するアーケード街に現れた。よって、最初の侵食から僅かな時間で大量の人が犠牲になり、そしてそれはそのままソイツの戦力となった。

警察の必死の抵抗も虚しく、なす術なく侵食され続ける人々。やがて、その化け物はグループを作り出し、別々の地域に別れて活動を始めた。

その目的は一つ。都市に侵入したであろう生物の搜索及び抹殺、である。その為、ソ

イツは近くに存在する同種の生物を手当たり次第に攻撃し、侵食する。そうすれば、いずれターゲットに辿り着くだろう。ソイツは独自のネットワークを活用してプールリバー全域に広がりつつあった。

ソイツの名はプリオン。五大厄災の1つの植物兵器である。



「クソツ!! 不味いぞ! 想像以上に敵が強い!! 避難が間に合わねエ」

「奴等に触れるなよ! 触れたら侵食されて仲間入りだぞ!!」

「ガアアアア…!!」

「…:遅かったか! 回避しろ!! 元能力者の個体は更に厄介になるぞ!!」

ベゲロセ在住のハンター達は、会長の指令と十二支んの対応策を確認後、現場で必死の封じ込めを行っていた。しかし、それは溢れ出すプールの水を手で食い止めようとす

る行為に等しい。数十のグループで活動する奴等は、等しく強力な身体能力を持ち、更に身体を変形させながら奇想天外な攻撃をしてくる。一度身体に入られれば恐ろしい速さで侵食を受け、奴等の仲間になってしまう。軍も出動し、感染個体の排除にかかるが、その時には既に拮抗するか、数で押し負けてしまっていた。しかし、ただ軍やハンターもやられ続けた訳ではない。偶然ロケットランチャーがプリオンの頭部に命中し、一時的にその個体は活動を停止したのだ。それを発見してからは少し状況は改善した。しかし、既にプリオンは大量に増殖しており、焼け石に水の状態であった。

ベゲロセの首相はこの事態を受けて、緊急閣僚会議を開催。超法規的措施により戦術核の使用を決定した。そして、国家の象徴とも言える女王陛下に決断を委ねた。



「……何とかありませんか？」

「陛下……残念ですが、最早そういう段階を超えてしまいました。一刻も早く使わねば、更に被害が拡大し、近隣の都市、いや、ベゲロセ連合全体にまで厄災が広がってしまい

ます。ご決断を」

女王は深いため息を吐き、深く椅子に座り直した。そしてしばし瞑目し、やがてその状態のまま話しはじめた。

「……まさか、愛すべき臣民に対して核兵器を使用しなければならぬ時が来ようとは思いませんでした。私は後の世で自国民を無差別に殺戮した愚かな女王と罵られるでしょうね」

「それは……しかし、それは間違いなく陛下の責ではありません！ 憎むべきは厄災をテロに使用した犯人です!!」

「同じ事です。それを防げなかった我々の責任でもあります……そもそも人類を滅ぼしかねない程の厄災を持ち帰ってしまった事、それこそが間違いだったのです」

「……しかし」

「貴方の気持ちは分かります。ですが、やらなければなりません。責任は取らねばならない。多くの人から恨まれようと、後の世で無能、暗愚と謗られようと、臣民の安全を守る立場としてやらねばならない。それが我々の務めでもあるのです……戦術核の使用を許可します」

女王陛下の言葉を受け、首相は自らを恥じた。国家の象徴たる人物に、その様なあまりにも重い十字架を背負わせようとしてしまった事に。だが、女王は決断した。後の世に暗愚と誇られようとも。この覚悟こそが一国の長たる者の責務。首相は自らも泥を被つて退陣し、女王のみに責任を負わせない事を決意した。

「陛下のお気持ち、承りました。ありがとうございます。我々も覚悟を決めました」

「なるべく……早く使いなさい。手遅れになる前に」

「仰せのままに……ユア・マジエステイ」



アレは……！ まさか戦術核を搭載したミサイルか!? 不味いッ!! 遅かった…!!
だが、まだ炸裂してない!! 早く追いついて対処せねば!!

くっ！ 速い…!! 間に合うか!? いや、間に合わせなければ!!!

……よし、並んだ!! 部品がパージし始めた! 爆心地が近いのか!!! マズい、もう爆発する! ……仕方ない、出来るかどうか分からないが、ここで防ぐ! もう時間が無い。やってみるしかない!!

“聖光気”のオーラをミサイルに纏わせ……硬質化!!! そして私自身も小型化した核弾頭に密着する! どれほどの威力か読めないが、細胞一片になっても抵抗してやる!! さあ、来い!!!

カッ
!!!!



「目標、プールリバー中心地に接近中！ 後1分で着弾です!!」

「……濟まない。市民達よ……我らを許してくれ……」

「……!! 少々お待ちを……何だこれは……! 北東から謎の高速飛行物体確認！ ミサイ
ルに接近しています!!」

「な……どういう事だ!? 他国のミサイルか!？」

「分かりません……ただ、大きさは人間サイズ、ミサイルではないようです！ あつ、方向
を変えて並んだ……!!」

「何が……一体何が起こっているのだ……!!」

「着弾まで後10秒、9、8、7……飛行物体が重なった！ 4、3、2、1、0!!!」

「……………どうなった？ 目視では一瞬明るくなつたが……」

「……爆発はしました。不発ではない。間違いありません。しかし、未だ目標は健在。
何が何やら分かりません……」

「急ぎ、退避していた軍に確認を取らせろ！ 場合によっては追加を撃たねばならん！」
「サー、イエス、サー!!」



プリオンを押しとどめる為に核兵器が使用されると聞いて、それでも残ったハンターや兵士達は、飛んで来るミサイルを目視して安堵した。ようやく、ようやく報われる。と。退避命令は出ていたが、一人でも多くを救う為に残った。又、自分達が退避すれば、それに付いて来る個体を誰が押し留めると言うのか。そういった様々な想いから、死を覚悟しながらも残って絶望的な抵抗を続けていた。

そして、ようやくそれが報われる時が来たのだ。神の怒りに等しいとも言える威力は、必ずやこの化け物共を跡形なく吹っ飛ばしてくれるだろう。：我々と共に。しかし、祖国を守るので有れば上出来だ……そう、思っていた。

そこに金色の光が後方からついて来て、ミサイルを覆った。何だ、アレは。

そう思った瞬間、目も眩む様な閃光が起きた。全員滅びの光だと確信し、なるべくなら苦しまずに逝ける様に祈った。

……………何故、何も無い？

滅びの熱も、風も何も無い。少なくとも今自分達は死んではない。プリオン共を見ると、奴等も、頭を一樣に傾け、そちらの方向を見上げて停止していた。やがて、奴等はそちらに向かい始めた。そのミサイルの爆心地だった筈の場所へ。

軍もハンターも、死を覚悟して生き延びた反動からか、皆その場にへたり込み、しばらく動けないでいた。



……かなりのダメージがあつた。ここまでダメージを受けるのは久しぶりだ。流石は人類の最強兵器だ。だが、抑え込んだぞ。放射線も全て飲み込んで取り込んだ。後は

プリオンだ。私も奴等とは『同類』だ。何となく感じる。奴等が付近にいる事は。昔は出来なかった。しかし今ならできる筈だ。奴等のプログラムを書き換える事が。早速やってみよう。

——全ての「我々」に告ぐ。直ちに現在の指令を破棄せよ。そして、我が元に集まれ

………来た！ 良かった。無事にプログラムの上書きに成功した様だ。しかし……チツ、なんて数……!! だが、これなら何とかなるかもしれない。「奇跡」をフル活用すれば……。上手く行くかは分からないが、やるしかない。行くぞ!! 「聖光気」!!! 全ての人々を覆え!

頼む……成功してくれ！ 全ての人々に癒しを!!!

……出来た……だが……身体は元に戻ったが、魂が戻らない……。ヘルベルの時もダメだったが、今回も魂は既に旅立ってしまった。あの渦の中に。一度旅立った魂は私

でも戻せない。私の時もそうだったからこそ理解できる。彼らは既に行ってしまった……。

クソツ!! 何て事だ! これだけの人々が犠牲になるなんて……!! 今、彼らは安らかに眠っている。せめて、人間らしい姿に戻せただけでも良かったか……。

私の眼前には、巨大な緑の球体が浮かんでいる。コレがブリオンの元の姿だ。今、プログラムは書き換えてある。だが、コレをそのまま放置は出来ない。私は片手を上げ、その球体に“消滅の雷”を浴びせ、この世から消し去った。こんなものはこの世界には必要ない。

……さあ、行こう。次は、キメラアントだ。

……ん? 何だ? 祈り!? これは……クラピカ! 一体どうした! ……不味い!
生命反応が極僅かだ!! 先にこちらに向かわねば……!!



ハンター達は見た。広範囲に広がる神々しいオーラを。プリオンに侵食された全ての個体が集まり、それらがそのオーラを浴びて、緑色の頭部から緑が抜けて、元の姿に戻ってゆく…。今、彼らは奇跡を目撃していた。元に戻った彼らはその場に倒れ、安らかに眠っていた。その様子から見ると、もう既に生きてはいない様だが、元の姿に戻っただけでも「奇跡」だ。

そして彼らは中心地に浮かぶ緑色の巨大な球体を見た。アレがプリオン……！ では、今その目の前にいるのは何者だ……？

すると、彼はその球体に右手をかざす。次の瞬間、その手から白い雷が迸り、球体はその姿を消滅させた。

何が起きているか彼らには分からない。しかし、厄災が滅びたと言う事だけは理解できた。

そして……中央にいる人物に話しかけようとした所、彼は忽然と姿を消した。まるで白昼夢の様な光景に呆然としながらも、この事態をどの様に報告するか頭を悩ませるハメになった。

128、衆愚の王

『次!! 送って!!!』

ケータイから勢いよく声が響く。この声はビスケットロクルーガーだ。交代してから6時間、既に鬨い通しな筈だが、一向に疲れた様な気配を感じさせない。

了解の意を告げてケータイを切ったモラウは、早速網に引つかかった一隊をノヴと共に送り込む。

「もつと梃子摺るかと思ったが……思った以上にメンバーが豪華なモンだから楽できていいな」

「ええ。あの子達も期待以上ですよ。全く弟子にも見習わせたいものです」

「ゴンって奴は殲滅する事にや抵抗が強かったが……あの村々の惨状と奴等の性質から多少は割り切った様だな」

「まあ、誰でも最初はそんなものですよ。その証拠に後半の動きは別物になってましたからね。他の2人の子も文句無しです。全く末恐ろしい」

「ま、とりあえず雑魚や隊長クラスはかなり削ったな。カイトって奴の実力も文句ねエ。

問題は……」

「……ええ。問題はアレですね」

2人が高台から巨大な蟻塚を見つめる。その頂上付近からは莫大なオーラが漏れているのが見えた。禍々しく触手のように絶えず蠢き、少しでも接近すればあつという間に捕捉されるだろう。

恐ろしい事に、それは【円】である。この距離から観測できるといふ事は尋常ではない範囲であり、そこから想定されるオーラ量は想像を絶するだろうという事が容易に想像できた。

「……アレが王直属、って奴……だよな？」

「まあそうでしょうねえ。むしろアレが一般の兵士蟻だとは思いたくありませんね」

「参つたな。アレを掻い潜つて女王蟻まで辿り着かなきゃならんとは。会長も人が悪いぜ」

「しかも、護衛“軍”ですからね。アレ一匹とは限らないつてところが尋常じゃ無く難易度が上がってますね」

「しかも、奴等がいるつて事はもうすぐ“王”の誕生も近いつて事だろ？ ハッキリ言つて厳しくねエか？」

「珍しいですね。弱音ですか？」

「たまにや愚痴りたくなるつて事だ。気にすんな。今回ばかりは会長の方がよりヤベエ案件だからな。全くどうなつてんだよ。この世界は」

2人は雑談しながら観察を終え、急ぎ次の獲物を嵌める作業へと移る。余りぼやぼやしていると威勢の良いリーダーからドヤされるからだ。

彼女曰く、今回のミッションは「削り」と「探り」である。王が産まれるまでは敵の戦力を削れるだけ削り、被害の拡大を防ぐ。そうして相手側を削れるだけ削つて時間稼ぎをする事こそが今回の目標である。

それは全員が共有しており、スムーズな意思疎通によつて現在かなりの敵戦力を削ることに成功していた。

そして、敵の戦力を探り、可能であれば上位の蟻が産まれる前に女王蟻まで辿り着き、始末する。それがこれまでの理想のプランだった。

しかし、ここで想定外が起きる。

既に王直属護衛軍という上位蟻は誕生していたのである。専門家の見解から、もつと先だという想定を大幅に前倒ししている。その圧倒的な力量を察知した彼女は、理想のプランを捨てざるを得なくなった。

そこで、彼我の戦力を計算して、戦力の削りに注力するプランに変更した。

一見消極的なプランではある。しかし、諦めたわけでは無い。むしろ、着実に蟻退治へのプランを進めていた。

「さて、そろそろ休憩しましょうか！」

「……よくそんなに動けるね。ビスケは」

「だらしないわねエ。そんなんじゃないよ。これらも修行！」

体ゴンはまだまだためらいすぎ。未だに相手を戦闘不能か致命傷で留めちやつてるし。何かあるか分からないのが念戦闘なんだから、きちんとトドメを刺さないと駄目よ。まあ最初よりはだいぶマシになってきたけど、いい加減相手と対話しながら闘うのをやめなさい。それは決定的な隙に繋がるわ」

「……………うん……………」

「まあ、コイツにはいきなりはちよつと厳しいんじゃないか？ 知性のある生物を殺すのはどうしてもためらいがあるもんだからな。フツ―は」

「アンタはアンタで相手を舐めすぎね。効率優先して受けなくてもいいダメージ貰ってる時点でアウト。もうちよつと慎重になりなさい。『彼』みたいだね」

「『そうだけ！ 殺すときはできるだけ素早く、静かにな！ ケケケケケ……………もういい、消えろ』」

ボンツ、と銃型の念能力が消える。カイトの『クレイジースロット気狂いピエロ』である。ランダムに現れる武器、そして一度出したらちゃんと使うまでは消せない、ピエロが勝手にしゃべり出す、等々、本人は融通が利かない能力とことあるごとに鬱陶しがっているが、その威力と強さは折り紙付きである。

場合によっては隊長格を一撃の下に葬り去る恐ろしい威力を秘めているため、その戦闘力は全員から一目置かれている。

「うっ……やぶ蛇だったか」

「それで？　いつまでこの雑魚退治を続けるの？　そろそろ王が産まれてもおかしくな
いんじゃない？」

カルトが鎧を解除しながらビスケに尋ねる。カルトはカルトで尋常じゃ無い数の蟻を殲滅している。新しい能力の実験台にと、兵隊蟻たちは次々と葬られていき、そのた
びにカルトの鎧もバージョンアップを重ねていった。

「そうね。そろそろ次の段階に入りましょうか。上の人達も呼んで。会議するわよ」



「威力偵察するわ」

「……は？」

四次元マンションの一角に車座になって座り、簡易的な会議を行う一同だったが、開口一番のビスケの言葉に全員が聞き返した。

「聞こえなかったかしら。威力偵察よ」

「いや、ビスケ……たしかカームから護衛軍以上の奴には手を出さなって言われてなかったか？」

「そうね」

「いや、だから威力偵察って……アレと闘うのか？」

「早い話がそういう事ね」

「いや、どういう事だよ！」

「ま、今までとあまり変わらないわ。基本は『削り』。敵戦力を少しでも削る。ただ、敵

も馬鹿じゃ無い。今まで通りのやり方だと限界がある。その証拠にもう雑魚はあまり出てこなくなつたじゃない？」

ビスケはモラウとノヴに視線を送る。その視線に仕方なしにモラウが答える。

「ま、その通りだな。最近はこちらとも蟻塚から出てこなくなつた。跳ねつ返りの部隊がちらほらとつて感じたが、それも途絶えつつある。奴等も確実に俺等の存在を警戒してるな」

「でしょ？ 本来ならそこで兵糧攻めにしてつてトコなんだけど、おそらく食糧はかなりの備蓄があるから無意味ね。それどころか、時間を掛ければ掛けるほど、王の誕生のリミットが迫ってくる。ならばどうする？」

「こつちから攻める……か」

カイトが呟く。心なしかカイトは口元に笑みを浮かべていた。

「その通り。少しでも直属護衛軍のリソースを削ぐ。具体的には、挑発してせめて一体でも処理する」

「いや、ちよつと待てよ!! そりや、できれば良いけど、勝算はあるのか!」
「さて……そこで全員に聞くわ。みんな例のオーラは遠目から見たわね? それを見た上で聞くけど、このプランについてどう思う?」

そこでビスケ以外の全員が沈黙する。が、意外とその沈黙はすぐに破られた。

「ハハハハ!! オレたちや『討伐隊』だからな! 勝算なんて考える時点で野暮つてもんだー!」

「モラウさんの言うとおりですね。それが任務であり、最善手ならばやるのが筋でしょう」

「おいおいおい……そんなの自殺行為に等しいぜ……だいたい、ビスケはあれがどれぐらいのオーラか見当ついてんだろ?」

「2倍ぐらいね。無論アタシの全力の」

「!! マジか……やっぱ化けもんじゃねーか! おい、オッサンども! それで勝てるのかよ?!」
ビスケで2〜3倍ならアンタ達だと10倍ぐれーじゃないのか!」

「勝てる勝てないとかじゃねえんだよなあ。だいたいお前は念戦闘について根本的にズレてるぞ。勝敗なんて揺蕩つて当たり前! それでも100%勝つ気で闘る!! それ

が念使いの気概つてもんさ」

「それとこれとは話が別だろ！」

「いや、彼の言う事ももつともだ。臆しては進めない。今はそんな状況だろう」

「カイト！」

横からカイトもモラウとノヴに賛同する。慎重派のように見える彼だが、その意外な発言にゴンとキルアは驚きを隠せない。カイトは続けてゴンに問いかける。

「ゴン……お前はどうかなんだ？　ここ数日悩んでいただろう。そんなお前は、この作戦についてどう考える？」

「……オレは、できればオレはこんな事態はもう終わらせたい。それで済むのなら」

「ゴン……」

ゴンはどこことなく思い詰めたような顔で答えた。彼はそれまでの被害に遭った村々や、秘密工場跡地での戦闘、そして、削り探りの中での戦闘を経て思うところがあつたのだらう。善とは何か。悪とは何か。人間とは、蟻とは。相容れるのか、相容れないのか。様々な悩みを抱え、答えが出ないまま現在に至っている。傍目から見ると一見普通

に見えるが、キルアからすれば少し危うい状態とも言えた。

「カルト、アンタは？」

「僕は……そうだね。賛成かな」

「その心は？」

「少しは役に立つところを見せたい」

「ブレないコね。アンタも。ま、いいわ。これで賛成5 過半数ね。決定」

「あくマジか……しゃーねえなあ。で、具体的なプランはあるんだろうな？」

「勿論。じゃ、その話をこれからしましょうかね。全員少し寄って」

しづしづながらもゴンの様子を見て了承したキルアをメンバーに加え、ビスケは具体的なプランを全員に説明し始めた。



転移した先は、豪華な邸宅の一室。最早宮殿と言って良いほどの場所である。まるで広い中華風の謁見室の様な場所に、場違いなオブリジェがそこかしこに散見される。ガラスケースに保管された紅の目玉の数々、人間の上半身、頭部、臓器など、正気を疑うような品物の数々が所狭しと並べられている。更に、目立つところに置かれた豪華な玉座は、形が変わった複数の人骨で飾られており、悪趣味を極めたような一室と化していた。中央から水滴がしたたる音が響く。若干粘つくような音を立てるソレは、水では無かつた。

そこに彼はいた。カームが渡した特製のネックレスを付けて。しかし、その姿は……目を覆うほど悲惨な状態だった。

「あ……………」

鎖に繋がれ、天井から吊されたソレは、紛れもなくクラピカその者だった。しかし、彼は目を割り抜かれ、舌を抜かれ、全身の皮を剥がされていた。一見誰だか分からない状態だ。どう見ても瀕死だ。だが、死んではいけない。そこだけは良かった。

全身が沸騰するような怒りが湧く。誰だ？ 彼にこんなことをしたのは。

即座に彼を縛る鎖を切り離し、受け止める。鎖は先端を彼の手に穴を開けて通してあり、非常に苛烈な拷問を受けたと察することができた。ここまでされて何故私と呼ばなかったのか。それはひとえに彼のプライドの高さ故であるのだろう。しかし、通常であればこのような状態になる前に察することができたはずだ。何故だ。何故私の権能が機能しなかった。

怒りに思考が染まりながらも原因を考えつつ、急ぎ、彼を治療していく。

同時にある人物の事が頭に浮かぶ。考えたくは無いが、そういうことなのだろう。よくも……よくも手を出してくれたな。

ここまで損傷した人体の復元は多少時間が掛かる。とはいえ、それも微々たる物だ。やがて、完全な姿でクラピカは復元された。

「クラピカ！ クラピカ!! 私の声が聞こえるか!？」
「……………」

体の復元は完了した。しかし、シヨックからか、未だ反応が薄い。当然だ。仇と目された人物に何もできず、ここまでの凄まじい拷問を受けたのだから。常人ならば精神が崩壊してもおかしくは無い。彼に毛布を掛け、その場にそつと寝かせる。彼には休養が必要だ。だが……………ここまでやってくれたクソ野郎には必ず制裁しなければならない。死すら生温い地獄を見せてやる。

「いるのだろうか？ 出てこい。それとも炙り出してやろうか?」

「くつくつく……………怖いなア。 ”救世主” 殿は」

絶を使っていたようだが、私には通用しない。椅子の後ろに隠れていたようだが、その男はのっそりとそこから出てきて椅子にふてぶてしく座った。

「貴様がコレをやったのか？」

「前途ある若者が極限状態で産み出す総合芸術つてやつさ……コイツは特に最高だったぜ？　なんせ、オレが集め損ねた最後のピースを持ってやがったからな」

「貴様のくだらん戯れ言を聞く気は無い。私の大切な者に手を出した。それだけで万死に値する。覚悟は良いか？」

「オレはツエリードニヒルホイコーロ。このカキン王国の『国王』だ。他のクソ王子どもを駆逐して生き残ったカキンの正当後継者。そんなオレに万死に値するなど……下界のゴミの分際で不敬だぞ。どうやら大層な『力』を持っているようだが、オレの前じゃ無意味だ。それを今から教育してやろう」

そう言つて男は目をつぶる。なんだコイツ？　一言一言が不愉快だ。コイツの価値観が何一つ理解できない。こんな奴が『王』とは、カキンも本当に腐っているな。

もういい。

死ね。

!!?

避けた!? 馬鹿な!! どういうことだ!! 常人には意識することも不可能なはず……それ程の速度で念弾を撃つたはずだ。しかし、現実として奴には当たっていない。しかも奴は目をつぶったままだ。

……どうということだ?

「ヒュー。すげえすげえ! 下界のゴミにも特殊な個体がいるもんだなア。で? 次はどうすんだ?」

何が起きている? まあいい。ならば直接叩く!

!!!!

インパクトの瞬間、奴は消えた。馬鹿な……。時は止まっていない。ならば、この現象は何だ？ 今の私は「聖光気」状態だ。呪いの類は一切受け付けない。ならば、コイツは一体何をしている？ まるで：幻と闘っているかのようだ。どこに行った？

「今のもヤバかったな。ま、通じねエけどなア」

ヘラヘラした声がして振り返ると、奴は丁度寝かせているクラピカの背後にいた。チツ。能力の正体が掴めない。奴はクラピカに近づき、彼に触れようとする。その瞬間、私の中で何かが切れる音がした。

“時よ、止まれ！”

……初めからこうすれば良かった。私の悪い癖だ。今度こそ仕留めよう。//そして時は動き出す”

ブンツ!!

空振った!!　そしてまた消えた。今度はクラピカと共に……この野郎!

頭に血が上がるが何とか抑える。コイツの能力の原理はなんだ?　まるで幻、しかし確実に実体がある。にもかかわらず、攻撃を予測したかのように躲し、消える……ん?　予測?

予測、そうか。そうだ。予測だ。私の行動はかなり高い精度で予測されている。いや、私の攻撃の速度を考えると、ほぼ100%予測されている。どんな行動を取るか。そういったリアクションをとるかまで含めて!

と、なると、奴の能力は、未来視!　いや、それだけではないな。もしかすると、奴

は未来視した結果を弄ることができ、この世界自体を改変している可能性すらある。馬鹿げた能力だ。しかし、今の私にこれほど抵抗できるとなると、これぐらいしか考えられない。一体何をすればそんな能力が身につくんだ……？ いや、今は良い。とりあえずクラピカを取り戻し、奴を始末することだけに集中しよう。私の予想が正しければ、奴は再び現れる。

「気は済んだか？ 下界のゴミ」

やはり現れた。さて、何を要求してくる？

「さて、貴様には選択肢を与えてやろう。貴様が大事にしているコレな。オレ様もお気に入りに入りなわけよ。しかも、遊びすぎて壊れる寸前だったのをお前が治療してくれたようだからなア。で、だ。寛大なオレ様はコイツと引き替えにお前がある場所に招待したい。光栄に思えよ？ 下界のゴミにとつちや破格の対応だからな？」

「……クラピカは人質と言う事か？」

「よく分かっているじゃねエか。ゴミの分際で。おっと。その前にそのクソ忌々しいオ-

ラは消せよ？ オレの大部分の能力が効かない原因はソレだろ？」

なるほど。そこまで理解しているか。……ここでクラピカを取り返すのは現時点では難しい。恐らく奴は私の行動全てを読むことができている。私が突発的な行動をすることも含めてだ。と、言うことは大人しく奴の誘いに乗るほか無い。恐らく私を拘束する罠だろう。奴の力を考えると、もしかすると異次元に飛ばすものかもしれない。それに乗ると言うことは普通は死と同義。あまりにも危険な行為である。

だが、奴は勘違いしている。私はただの「聖光気」使いではないということ。背後にいる人物も、そこまでは知らないはずだ。

私が【アンブレイカブル壊れない男】だということ。

「……いいだろう。で？ どうするんだ？」

そう言うと、奴はニチャリと汚らしい笑みを浮かべ、無言で手をかざし、扉を具現化

させた。

「ここに入れ。言っておくが、抵抗は無駄だ。それは先ほどの遣り取りで分かっただろ？ 怪しいそぶりをした時点で交渉は決裂な」

「……わかった。クラピカはこちらに渡してくれるんだろうな？」

「お前が変な行動を取らなければな」

そう言うと、奴は先にクラピカの手を取り、扉を開けてその中に放り込んだ。ただの一枚扉であり、向こう側の風景が見えているにも関わらず、クラピカの姿は消え去った。恐らく異空間に繋がっているのだろう。

「おっと。無駄な事は考えるなよ？ 俺を害すればこの扉は消えるからな」

……チツ。トコトンムカつくロン毛ヒゲだ。仕方がない。扉の前に立つ。扉を開ける。恐らくここで奴の言うように何かアクシジョンを起こせば、奴も予測して動くだろう。ここまででは大人しく従う。

私は「聖光氣」を解除し、扉を潜り、そして後ろ手で扉を閉めた。



「……ふっはあ〜！ マジで緊張したぜ！！ アレ殺すとか無理無理無理！ てか冷や汗がヤベえ。おい！ これでいいんだろ!!!」

暗がりから1人の男が出て、彼の前に跪く。

「ええ。ご協力ありがとうございます。これで各国のマフィアの利権は50%が貴方に譲渡なされました」

「はあ〜？ あんだけ苦勞しといてそれだけかア!? お前、あの化けモン見ただろ!?

アレと対峙するのにオレがどれだけ苦労したと思つてんだテメエは。殺すぞ?」

ズズ：と、彼の怒りに合わせて濃厚な漆黒のオーラが部屋中を埋め尽くす。そのあまりの圧力は、常人であれば死にかねない程のものであった。相對した男は内心冷や汗をかきながら、それでもその事をおくびにも出さずに答える。

「勘違いしないでいただきたい。いずれは80〜90%以上が貴方の物になりますよ。こちらが最初から出せる限界の分がそれなのです。これから貴国とは『業務提携』しますからね。我々の身分さえ保障していただければ全世界を手中に収めることも可能ですから」

「フン……まあいいだろう。使えるゴミは少しは残しておかないと面倒だからな。いずれお前のトコのボスもオレに挨拶させに來い。使えるゴミが見極めてやるからよ」

「ありがとうございます。日程を調整しておきますね。……しかし、さすがですね。こちらも上手いくいとは」

「当然の結果だ。何よりオレは『無敵』だからな」

「それには同意します。しかし、最近念を習得した人物とは思えない力量ですね。天才、と言うべきか、失礼ながら怪物と言うべきか」

「ゴミどもとは生まれつきレベルが違うんだよ。それにもうオレはレベル1万突破したしな。なあ、モレナ」

ツエリードニヒが玉座の隠しボタンを押すと、玉座の脇からガラスケースが地面からせり出す。中には裸で拘束された女性が浮かんでいた。頭部は複数の管で繋がれ、手足は拘束されている。目は割り抜かれて存在しないが、片方の目の上から二本の傷跡が確認できた。

「彼女は？」

「オレの親戚でな。ケツ持ちしてたマフィアの親玉なんだが裏切りやがった。よって処刑しようとしたが、能力が有用だったから拷問した上で使わせてもらった。まあ、コイツも使えるゴミって事だ」

「……参考までに、レベル1万、というのは？」

「1人殺せばレベルが上がり力が増す。シンプルだろ？」

「……なるほど、最近のカキンでの大量の粛正はそれだったのですね」

「使えないゴミどもを処理してレベルが上がる。一石二鳥だ。リサイクルってとこだな。エゴだろ？」

「いやはや……なんとも想像を絶する力ですな。貴方が倒した彼を除けばまさに人類最強でしょう。カキンも安泰だ。では、私はこれで失礼します。国に戻って後始末をしなければならぬので」

「おーおー。好きにしろ。オレはこれから趣味の時間だ。次に会うときは朗報を期待してるぜ。期待を裏切るなよ？」

「お任せください。では」

そう言つて、男は立ち去る。その姿を胡乱げに見つめるツエリードニヒだったが、取るに足らない存在など気に入らなければ秒で始末できると考え、思考を趣味の時間に移した。やがて、彼の中で男と会つた事など一切脳裏の中から消えていった。

「ま、一週間、と言つたところでしようかね。次に会うことはもう無いでしょう。さようなら。カキンの国王」

129、等価交換

さて……ここはどこだ？ 先程の様子からすると、ここは次元の違う世界のようだ。

そして、奴の能力内でもある。一見すると同じような部屋ではあるが、根本的に違う。その証拠に、久しぶりに「完全適合」（パーフ・エクトコンパート）が仕事をしている。恐らくさつき消えたり出たりしたのはここに逃げ込んでいたと言うことか。この私を収納できるとは、やはり奴はただ者じゃないな。このまま「聖光気」に戻って飛び出してもいいが、それだとまたさつきの繰り返しだ。というか、時空が異なるからか、元の世界の座標が掴めない。クラピカは恐らくこの空間で拷問をうけたのだろう。だからこそ私も察知出来なかった。ならば、奴の能力をこのまま適合してから出るとしよう。

適合するに従って理解できてきたが、ここは仮の平行世界のようなもの。奴自身は直近の未来を未来視できる。発動条件は、あの目を瞑る仕草だろう。そして、未来視で出た行動を改変し、それを弄る。分岐して放棄された世界が恐らくここだ。似て非なる世

界。範囲は奴の周囲300メートル程。

……とんでもないな。まあ、いい。まずはクラピカを治療しよう。先程から目が虚ろだ。精神が壊れかかっているとみた。ならば、旅団にやった方法を応用する。

ウィルスにて、トラウマの記憶を封印する。解消すればウィルスは自然排出されるように……と。出来た。

目の焦点が合ってきた。お目覚めだ。

「……………はっ！ カーム!! 何故ここに……………」

「目が覚めたか。危ない所だったぞ」

「な……………何が起きた？ ここは？」

「そうだな。説明する。その前に服を着ろ。私の予備だがね」

私は普段着用の着替えを幾つかストックしている。暗黒大陸ではマップになつてしまふ事も多かつた為、念の為にだ。今は黒龍の鎧があるから大丈夫だが、何があるか分からない。もうフルチンはゴメンだからな。収納の肥やしになっていたが陽の目を見て良かった。マフィアスーツだが。

いそいそと着替えたクラピカだが、流石に頭が働くようで、大体の状況を察していた。

「どうやら助けられた様だな……ありがとう」

「どういたしまして。間に合つてよかつたよ」

「一番の仇に出会えたんだが……無念だ」

「だろうな。クルタ族襲撃も奴がかなりの部分関わっているのだろう。恐らく、だが。そして、奴の相手をするには荷が重かつただろう」

「……」

「気にする事はない。クラピカは最初から嵌められていた。そして、それを主導したのはアルバートだ」

「！ 奴に会つたのか!？」

「いや、会つてない。だが、間違いないだろう。違うか?」

「ああ……。カキンに着くや否やあれよあれよと国王の前に引き出された。抵抗したが無理だつた……。そこからはあまり覚えていないが、恐らく碌でもない目にあつたんだろう。記憶が混濁しているのはカームがやつてくれたのか?」

「まあ、その通りだな。実を言うと精神崩壊一步手前だつたからな。悪いがその原因は封じた。望めば徐々に解除できるようにしてある。…助けに来るのが遅れてしまつて

「すまない」

「気にしないでくれ。奴の力は規格外だった。それに、これは罠だ。ここは異空間だろう？」

そこまで察しているか。流石だ。クラピカに領き返しながら私も感じていた。これは私を封印する罠だと。恐らく間違っていない。だから早いうちに出るに越した事はない。

さて、そろそろ【パーフェクトコンバート完全適合】が完了する。……よし、出るか。

「さて、出るか。リターンマッチといこう」

「……すまない。私が下手を打ったばかりに……」

「気にするな。クラピカのせいじゃない。奴はいずれにせよ生かしておけん。人間の枠を大幅に超えて、怪物と化している。あの性質と大国の権力と合わさって、ある意味人類にとつては厄災の様なものだ」

「……聞くまでもないかもしれないが、勝算は？」

最後にクラピカが質問する。奴の力を体感した故だろう。私は奴と同じように扉を

生成し、ドアノブに手を掛け、振り返る。

「私は『怪物ハンター』だ。200年以上も前から。これから奴を『ハント』する」



とある街角の一角。ここはクカンユの下町、と言えば聞こえは良いが、ほぼスラムである。街道には汚いゴミが散乱し、花の都と称される首都と同じ国とは思えない。流星街よりは少しマシ、と言ったところだろう。

そんなスラムの一角。狭いアパートメントの一室にレオリオはいた。

彼も資金に余裕があるはずであり、こんな場所にいなくとも良いはずである。しかし、彼はここが気に入っていた。ここが彼の出发点であり、ハンター、そして医者を目指すきっかけとなった場所でもあるからだ。狭いアパートの部屋には所狭しと医療書が

並べられ、ひたすら勉強に取り組んでいる。もうすぐ医学試験だ。ここが正念場である
と、気合いを入れて取り組んでいた。

トントン、とノックの音が響く。

「レオリオ、いるかい？」

その言葉にレオリオは思考を中断し、勉強机から顔を上げた。

「あく今取り込み中だぜ。どうした？」

「精が出るねエ。そんなアンタに差し入れだよ」

「おつ！ ありがてエ。いつも悪いな。ちよつと待つてくれ」

レオリオがノートを閉じ、机から立ち上がり、玄関の扉を開けると、人好きのするお
ばちゃんが鍋を持ってそこにいた。このアパートの大家だ。彼女は若くして夫を亡く
しており、一人でこの安アパートを切り盛りしている。レオリオもこの大家には随分と
世話になった。せめてものお礼にと、帰ってきてから多めのカネを振り込んでおいた。

この安アパートならば100年は住めるほどの金額だ。

当初は彼女も驚いて断ったが、レオリオが押し切った。それだけ感謝していたのだ。カネが無い時でも、こうやって何かと世話を焼いてくれた大家に、レオリオは未だに頭が上がらない。

鍋を受け取りながらレオリオは頭を下げる。

「いつもすまねエな」

「そりやこつちの台詞さね。アンタはこの出世頭さ。感謝してもしきれないよ。ま、あまり根を詰めすぎないように気をつけな」

「ありがとよ。もう大詰めだから助かる。おばちゃんもあまり無理すんなよ」

「ハッ。あたしや20年後でも元気さね。心配するだけ無駄さ……ただ、最近物騒でね。この街の住人も何人も行方不明になってるらしいから気をつけな」

「ふくん。まあ、オレは見ての通りしばらく缶詰だからあんまり関係ねエな。一応覚えとくぜ」

その日、彼は差し入れをありがたく頂き、再び勉強へと戻った。いよいよ試験勉強も大詰めだ。ここが頑張りどころである。そうして思考の海に沈んだ彼は、気づいていな

かった。

自身の住む場所の水面下で恐ろしい事態が進行していた事を。



「……つくあゝッ!! ここまでにつつかー!」

大きく伸びをして、参考書を閉じる。差し入れをいただいてから3日間ぶつ続けで中してきたレオリオも、流石にこれぐらいにしようと思ち上がる。随分と部屋も散らかっており、一通り片付けを行う。

あまりにもものめり込みすぎて時間感覚がすっかりおかしくなったが、そろそろ夕方だ。風呂でも入るか、公衆浴場に出かける準備をする。

そういえば、集中していて気付かなかつたが周りが静かだ。この時間ならもつと多く

の人々の声がしてもおかしくはない。激安アパートの薄い壁は騒音を容赦なく浸透させる。よって、外からの騒音も激しい。レオリオにとつては心地よいBGMのようなものだ。しかし今、それが無い。今はむしろ一番騒々しい時間帯なのにもかかわらずだ。その事実には妙な胸騒ぎを覚える。

何だ？ 何か起こったか？

ふと、全世界でニュースになっている出来事が頭に浮かぶ。なんでも、世界規模で大規模なテロが起きているという話だ。ハンターサイトでも、もし所属する国で事が起ければ最優先で対応に当たるようにという3〜4日前にネテロからの声明が出ている。これまでとは異例の会見だった。どうやら相当ヤバい事が起きていると思つたが、とりあえず事が起きたら対処しようと考えていた。

胸騒ぎがする。

ドアを開けて、周りを確認するも、そこには誰もいなかった。

「お〜い！ 誰かいねエのか〜!?」

周辺に呼びかける。普段であれば、即反応されるはずだ。むしろ「うるせー！ 静かにしろ馬鹿!!」と、総出で罵られる。ここはそういう地域だ。

しかしそれが無い。何なら人の気配すらない。

「なんなんだ一体……」

この世界から一人取り残された様な錯覚すら覚える。喧しい子供達の歓声や嬌声、路上で酒を呑み管を巻いて怒鳴り散らす名物ジジイ。トウの立った女のしつこい客引きや大学生と思われる学生グループの騒ぎ声。それこそがこのゴミ溜め一歩手前の街の風物詩であつたはずだ。

みんな何処へ行つた？

探す。徹底的に。片つ端から建物のドアを開け、人を探す。

いない。誰も。

あの気のいい大家すらも。

「クソっ！　なんだってんだよマジで！」

まるで今し方、人々だけが掻き消えたかの様な不自然さ。それはレオリオに古い怪談を想起させる。マリー・セレスタ号。忽然と豪華客船の住人が消え去った事件。まるでいきなり消滅したかの様な消え方で、動機も何も無い。その証拠にテーブルには朝食と思われる湯気の立ったスープが残されていたという。

彼らは一体何処に消えたのか。それは今の状況と似ている。

まずこの不可解な現象の原因として考えられるのは、何らかのテロ行為が起きて避難勧告が出され、一斉に避難したという事。

だが、これは考えにくい。それならば事前に連絡があり、一騒動が起きた筈だ。この街の治安なら場合によっては暴動だ。よってこれは却下。

次に、何らかのテロの可能性。しかし、こんなに静かに人々がいなくなるのは異常だ。やはり何らかの騒動が起きるだろう。これも却下に近い保留。

で、あれば。何らかの災害が発生したか。地震、火事等ではない災害。そう。毒やウイルスの漏洩によるパンデミック。だが、それでも忽然と人々がなくなる理由にはならない。

頭がこんがらがってきた。何なんだこれは。そして、最大の問題点。電子機器がまるで機能しないと言うこと。事態が深刻であると言う予感を覚えてからすぐにニュースサイトを調べたり、ゴン達にケータイで連絡を取ったりしようとした。しかし、ケータイが何故か機能しなかった。画面がバグって表示され、番号すら押せない状態だ。他の公衆電話なども同じで、街中の電子機器が何故かまるで機能していない。

おかげで、どんな事態が起きているか情報収集が全くできない。

これもテロの影響だろうか？　これが仮にテロだとすれば、凄まじい規模のテロであるし、災害ならば国家レベルの大災害だろう。こんな大災害が起きている傍ら、のんきにもアパートに閉じこもり、まんまと自分だけ取り残されてしまった。

……いや、なぜ自分だけ取り残された？

彼らとの違いがあるとすれば念能力だ。そう、念能力という線もある。むしろ、こんな不可解な現象は念能力という線が濃厚だろう。消えた彼らと自分の違いとは、念能力の有無だ。

オーラによつて謎攻撃を防ぐ事が出来たか。しかし、この国にも少なからず念能力者はいるはずだ。自分を除いて丸ごといなくなる理由が分からない。

ともかく、このままじゃ何が起きたかちつとも分からない。最大限の警戒をしつつ、彼は街へと繰り出した。



「誰かいねエのか〜!! いたら返事しろ〜ツ!!」

かれこれ3時間、街を彷徨う。しかし、収穫は全く無い。何処もかしこもゴーストタウン状態だ。ともあれ、頼みにしていた連絡手段も封じられており、いよいよ孤独感が

強まってきた。

「誰か……誰かいねエのか……」

流石のレオリオも心細くなってきた。どうしてこうなってしまったのか。3日前には普段の人々の溢れる街並みだったはずなのに。これではまるでゾンビ映画の主人公だ。むしろゾンビでもいた方がまだ気が紛れる。

……いや、やっぱゾンビは嫌だな。などと、とりとめも無いことを考えながらも街を彷徨う。とりあえずは人のいそうな都心に向かっているが、まだまだ旅路は長そうだ。

先ほどから展開しているオーラもそろそろキツくなってきた。ここいらで休憩しなければ。

誰もいない街並み。無人の店。無人のホテル。店員もいなければ観客もいない。スーパリーの無人のレジにとりあえずカネを払って食料を貰い、ビジネスホテルに入り、無人の空き部屋を借りる。当然のようにフロントには誰もいない。ビジネスホテルの

割に豪華な一室に入り、今晚の食事を済ませ、シャワーを浴びる。水や単純な電気などがまだ機能しているのは幸いだった。

警戒は解けないが、一息ついて多少はホッとすることができた。

全く訳の分からないことだらけだ。どうしてこうなった。

酒でも呑みたい気分だが、何があるか分からないため自重する。少し一眠りしよう。張り詰めていたオーラを一旦解き、レオリオは眠りに就いた。



.....

夢を見た。

「死んだ筈のダチが生きている夢。自身は医者として地元や世界各国でバリバリに働いており、ダチと共に数々の人々を救う夢だ。仕事が終わればスタツフと夜の街に繰り出し、派手に金を落とす。綺麗なねーちゃんに囲まれて2人して大笑いしながら遊んでいる。まるで現実の様なりアリテイ。いや、現実そのものだった。だが、ダチがいる時点で夢なのは確定していた。夢の中でレオリオは大いに仕事に精を出し、大いに笑った。」

夢であるが故に、覚めた時の喪失感は酷い。まるで虚無の中に放り出されたかのように。二度寝して続きを見ようと思うぐらいには精神的なダメージは大きかったが、現在の状況を思い出して洗々と顔を洗った。

状況は変わらない。フロントにカネを置き、ホテルを出る。街の中心がそろそろ近い。レオリオはまるで何かに導かれるかの如く、無人の都市を歩く。行くあては無い。だが、その足取りは迷いがなかった。

◆

街を歩いて行く中で気づく。電気量販店のディスプレイや、電光掲示板などだ。文字は相変わらずバグっている。まるで意味不明な文字列の羅列。しかし、レオリオにはそれがある場所を指し示していると理解できた。理屈ではない。ただ、分かったのだ。

◆

それは塔。この国で塔と言えば、クカンユで有名な観光名所でもある電波塔がある。恐らくそれだろう。そして、そこに行きさえすれば願いが叶う。漠然とだが、そういう予感がした。

◆

2日目を別のホテルで過ごす。再び夢を見た。いや、それは夢と呼ぶには生々しすぎ

た。最早もう一つの現実であつた。

レオリオのこれまでの人生はその夢の中で再び繰り返され、追体験する。

人間誰しも失敗や後悔する事はある。それが人生というものだ。だが、繰り返された人生では間違わない。全てが上手くいく。圧倒的なりアリテイを伴つて。そうして、友は死なず、それでもそれをキツカケに医学を目指し、ハンター試験に友と合格して医学試験もクリアする。そこで目が覚めた。

今日はここまでのようだ。

前より覚めた時の喪失感は酷くなつた。やはり、必ず塔に行かねばならない。彼にとつてそれは確信となつた。恐らく、他の人々もそうだったのだろう。そして、塔へ行き、自分の夢を叶えた。レオリオは彼らが羨ましくなつた。

そう、段々と分かつてきた。だからみんなそこへ向かつたのだ。5日前から。誰も居なかつたのはそのせいだ。そこに行きさえすれば、自分の夢が叶うのだから。そう。何でも叶えてくれるのだ。：@) 4 ; ▪ : | ▪ &が。

なんだ、勉強して損したぜ。と、レオリオは脳内で悪態を吐く。態々オーラで頭を強化しながら必死に勉強してきた。だが、そんな事をする必要すら無かつたのだ。何故な

ら、行くだけで叶えてくれるから。

そのおかげで1人出遅れてしまった。勿体ない。

果たして、オレの分が残っているだろうか？ 残っているとありがたいのだが。こちらにはダチがない。行く理由などそれだけで充分だ。

レオリオは、夢遊病患者の様な足取りでそこへと向かう。すると道端に皺皺に干からびたミイラの如き物体が散見される様になってきた。そして、皆一様に幸せそうな表情を浮かべている。

彼らは「生きている」。それを見ても、レオリオは何も感じなかった。寧ろ羨ましいとさえ思えた。

楽しい夢を見ているのだろう。夢は人それぞれだ。大金持ちになって豪遊したり、異世界に行つて無双したりする者も居れば、ハーレムを築いてウハウハで過ごす者もいるだろう。

それらが全てほぼ現実として叶うのだ。スラムの連中などは飛び付いたに違いない。現に、レオリオですら早くそうしたくて仕方がないのだ。抗うなど無理だ。

ミイラが増えてきた。いや、増えてきたどころではない。もう至る所にミイラは溢れ

かえていた。数え切れない程のミイラは、元は街の住民だった者達だ。塔も近い。あそこにいる。段々理解が深まってきた。叶えられるのは一人につき一体。

今、この街の住人の大部分が願いを叶え、次の街に移ろうとしている。彼らは人類の夢を叶えてくれる。その代わりにそのヒトの全てを要求する。そう、全てだ。だが、それがどうしたというのだ。現実には全てを捧げても叶わない事も多いのだ。

塔にたどり着いた。塔は元は赤色のタワーだったはずだ。だが、今はその外観にはミイラが張り付き、生々しい皺のある褐色でびっしりと覆われていた。

最早別の建物だ。趣味の悪い現代アートといった所だ。恐らく中も同じだろう。

ミイラで埋め尽くされた館内を進む。ちらほらとミイラの影に蠢く黒いネズミの様な生物が見える。その赤く輝く幾万もの眼が一樣にレオリオを監視している。ソレはレオリオを導いていた。塔の頂上にお前の望むモノがあると。

もうすぐだ。オレの夢を叶えてくれる存在と出会える。

ああ、楽しみだ。

オレは、これから全てを捧げる。

130、ツエリードニヒ

その男は飽いていた。

世界そのものに。

彼の産まれは王の系譜。第四王子である。

最高級の教育環境、そして、望めば大抵の事は叶う地位。だが、彼はもっと欲しがった。権力の頂点、即ち国王の座を。

彼には才能があつた。ありとあらゆる事に関する才能が。幼児の頃からその天才性は芽を出し、1歳になる頃には言語を自由自在に操ることができ、5歳になる頃には学問と呼べるものは全てマスターしていた。その早熟さは、天才というにはあまりにも異質すぎ、ある意味怪物とも言えた。それを支えたのは彼の勤勉さ…ではなく、彼の尋常ならざる好奇心によるものであつた。

幼い頃から粘着的なその好奇心は留まるところを知らず、勉強、スポーツをはじめとした数々の分野…：数え上げればキリがないが、その全てに興味を持ち、取り組んだ。それだけならまだ、ただの天才と言えるが、彼の異常性はその驚異的な集中力にもあつた。

一般的に、一流と呼ばれる者になるためには10000時間の法則というものがあつる。その分野を極めるために費やす時間のことだ。

だが、彼は、常人が苦勞して手に入れる技能を、少し集中して学んだだけで軽々と追いついた。その気になれば、どの分野でも超一流と呼ばれる者にもすぐなれただろう。当然、同世代の者に敵う者はいなかつた。そして、やがて、彼は飽きはじめてた。努力しなくともどの分野でも余裕で勝つ事ができたためだ。初めは流石だと褒められ、モチベーションもあつたが、何でも出来てしまう彼は何事もつまらなくなつていった。本来ならば競う相手がいいて、お互いに高め合う事でより才能を伸ばす事もできただろう。し

かし、彼はあまりにも出来すぎた。そのあまりの才能の違いに、ライバルなど存在しようもなく、簡単に勝つてしまう。その周りの不甲斐なさに、次第に彼は周りの者達が愚物に見え始めた。愚物どもは彼にとって無駄の極みとも思える努力を繰り返し、それでいて絶対に彼に勝つ事はできなかった。そして、負けたら負けたで、自分の才能のなさを尻目に恨みを募らせ、足を引つ張つてくる。そうやって追い越された者達の嫉妬も鬱陶しかつたし、何より、世界は思ったよりも愚物で溢れており、足を引つ張る奴等によって構成されていることに早々と気付いてしまった。

そんな彼を例外はあれどたいの周囲の者達は恐れた。

恐れた者が取る行動は二つ。

徹底的に避けるか、徹底的に排除するかだ。

彼の王子という立場から、彼を恐れた周りの者は前者を選択した。彼はますます孤独になつていった。そして孤高でもあつた。

そんな彼ですら手を焼くのが、異母兄妹の存在であつた。特に上の2人は自分とはまるで異質の存在。年齢の差はいかに彼が天才であろうとも通用しなかつたし、彼らはむ

しろ彼を独自の理論でとことん振り回し、いじめ倒した。おかげで彼は傲慢な女が大嫌いであるし、脳筋の兄を蛇蝎のごとく嫌った。他の兄妹については、才能については言うまでもなく下であり、更にはそれでも皆が皆自分の世界観を持っており、その価値観が彼とあまりにも違いすぎて、彼をしても興味すら湧かない無視すべき存在であった。唯一、ハルケンブルグだけは評価できる愚物とは思っていたが。

そも、この歪んだ兄妹の關係は、彼らが最初から王位継承権をもつライバルとして育てられており、憎しみ合う間柄であつたが故。いずれは衝突する存在であるためである。馴れ合いなどできるはずもない。だからこそ、彼は愛情など知らない。存在しない物を求めようとも思わない。

齡一桁でそのことを理解してしまつた彼は、世の中の全てが下らないように映つてしまつた。そして、悟る。

自分は特別であり、それ以外はゴミであると。

よつて、頂点を望んだ。彼にとつて、自分以下の才能しか無い目障りなゴミ共に上に立たれるのは論外である。特に上の兄妹。彼らが自分に勝つてゐるのは年齢のみであり、低俗な愚物にマウントを取られるのは我慢がならなかつた。

無論、彼は国王のことは一定以上評価していた。大国を治める王。それを過分なく勤め上げ、更には繁栄までもたらしている。トップとしては充分な成果と言える。問題は次の代だ。

自分は第4王子だ。そして、その順序は変えることができない。順当に行けば同腹で忌々しい脳筋の長兄が後継者であり、その下には自分の女不信の最たる原因である傲慢な姉もいる。そして、その更に下に何を考えているか分からない小男がいる。よって、いかなる不測の自体があつても自分までお鉢が回ってくることなど無きに等しい。暗躍して上の王子を暗殺して回つても良いが、それがバレたときのリスクが大きすぎる。その現実には彼は忸怩たる想いがあつた。

だが、ある時、側近からカキン王国にまつわる噂を聞いた。王位継承戦なる噂を。王子達が血で血を洗う争いを行い、勝ち残つた者が頂点に立つことができると。最初聞いたときは何を馬鹿なと思つたものだ。しかし、すぐに考えを改める。現国王に兄妹はいない。王位継承権を外された二線者はいるが、アレはハナから継承権がない者たちだ。王の直系の兄妹の不在。それに思い至り、噂は現実のことでは無いかと考えるようになった。

そうなれば、チャンスはある。彼はすぐに王国の隠された王家の歴史を調べ始め、それから、力を付けることに専念した。この場合の力とは、コネである。何をするにも自

分の意のままに動く存在が必要だ。

兄妹の例にならつて軍学校に進んだ彼は、そういった意図から地盤固めに専念した。天才である彼はここでもその力を十分に発揮し、彼に忠誠を誓うコネクションを築くことができた。その頃には、どのように行われるかほとんど分からないが、その継承戦が事実であると言うことをほぼ突き止めるに至っていた。

後はそのセレモニーとやらを待つのみ。だが、それがいつになるか分からない。少なくとももつと兄妹が増えた頃に行うはずだ。だから待たねばならぬ。争いになる程の駒が揃うまで。



争いが開始されるまでの間、周りを愚物と断じ、全てに飽いていた愛情を知らない彼は、歪んだ趣味に手を染めるようになった。

即ち、人体収集である。

愚物は愚物でも、自らと同じ造形を持つ物。そこに彼は興味を惹かれた。生きている間は愚物でも、死んでからは自らと同じ似姿だ。そして、その中でも特に自分には無い奇形という神のイレギュラーは、鑑賞するに値する物であった。

そんな彼がとりわけ気に入ったのが、緋の眼だ。世界七代美色と呼ばれたその色は彼にとつて宝石など遠く及ばないほど魅力的に映った。彼はカネに糸目を付けず手に入れようと画策したが、そもそもその絶対数が少ない。途方も無い値が付けられた緋の眼は彼をもつてしても収集は困難であった。

欲しいと思えばどうしても手に入れたくなるのがコレクターという存在である。よつて、彼はクルタ族を探しだし、殺して直接収集しようと目論んだ。

依頼したのは流星街の住人。彼らなら足が付かない。彼は軍時代に築いたコネを最大限に活用し、流星街の住人にコンタクトを取ることに成功していた。巨額の依頼料を受けた彼らは、まずクルタ族を捜索するための能力者である斥候を送り込み、その隠し村を見事に突き止めた。綿密に計画された襲撃計画。彼はその中心にいた。ここでも

彼の天才性が遺憾なく發揮され、軍事的な襲撃計画は、細部に至るまで煮詰められた。そして、幾度も打ち合わせを重ね、100%成功する確信が持てた時に、計画は実行された。

決行の日。クルタ族の大人達が仕事に出払っている隙を見計らって流星街の能力者が大挙して襲いかかる。

当然彼も同行した。彼にとって、これほどのイベントを見逃すという手は無い。ありとあらゆるスケジュールの穴を縫って同行した彼は、容赦なく拷問、虐殺されるクルタ族の女子供達を前に強烈な絶頂を覚えていた。筆舌に尽くしがたい残虐行為の数々は、彼の退屈だった心の琴線に強く強く響いた。その萌芽であつた彼の歪んだ性癖は、この時初めて禍々しく花開いた。

襲撃は短時間で恙なく行われ、終わりが見えてくる。初めて少し寂しい気持ちを感じていた彼は、戯れに一人、跡形も無く破壊し尽くされた村々を練り歩く。

そんな中、彼が驚愕する出来事が起きた。圧倒的な戦力差に絶望せず、一人、満身創痍の中、流星街の能力者を掻い潜り、首謀者であり、依頼主でもある彼を突き止めて、そ

の一步手前まで迫つた少年がいた。

少年は一矢報いる直前であえなく捕まってしまったが、憤怒の表情を浮かべ、至近距離から見たその瞳は紅に染まつており、彼はその色とその激情にいたく感動した。巨悪に復讐を誓う少年は、流星街の住人によつてそのままあつけなく斬首された。

そのまま少年の眼は機械的に割り抜かれる所だったが、彼がそれを拒否した。その首を捨ててしまうのは勿体ない、と。彼の人生観を塗り変えてしまうほどの芸術的な感情の発露。それは生涯忘れられそうに無いほどのものであつたから。

他の眼とは違い、その少年は首ごと流星街のエンバールミング技能を持った者に加工させて持ち帰つた。収穫は非常に多い。ほくほくしながら彼はプライベート飛行船でカキンへの帰路に就いた。

その少年の名をパイロといった。

余談ではあるが、大人達が慌てて戻ってくる頃には彼らは暴虐の痕跡を残して全て撤収しており、それを見た大人達は後悔と絶対の復讐を誓う。そこに、別口から依頼を

受けた幻影旅団が到着した。そして、復讐を誓うクルタ族の大人と幻影旅団の闘いが勃発し、旅団は彼らを殲滅したが、それはまた別の話である。



それから5年の月日が経った。彼はそのころには現在の残酷な性質を隠しつつ、人体収集、そして拷問及び殺人の快楽にのめり込んでいった。彼はその地位から捕まえることは無い。幾らかの犠牲者が彼によって生まれていった。

だが、まだ彼には理性もあり、抑制も利いていた。表向きは品行方正な王子を演じることができていた（長兄ベンジャミンにはバレていたが、そこはそれぞれお互い様の部分であり、お互いがお互いを嫌悪していた）。彼にとって幸いだったことは、幼なじみである私設兵が、彼の味方であったことだ。それは恐怖や金銭的なつながりでは無い。友としてのつながりである。故に、彼らに出世欲は無かった。階級が上がれば上がるほど、彼の命令に逆らえなくなるからだ。孤独と孤高を極めたような彼にとって、彼らは愛称で呼び合う貴重な友人であった。それが故に、決定的な一線を踏み外して破滅する

事は無かった。つまり、彼の極僅かな人間性を保つ楔として機能していたとも言えた。

そして、待ちに待った王位継承戦。国内の関係者全員を巨大で閉鎖的な宮殿内に集め、大々的なセレモニーを開き、そこから二ヶ月を期限として行われたそれは、搦手を主眼とした謀殺合戦であった。そこには厳格なルールが存在し、直接殺す事や、武力全開でのゴリ押しは出来ない。

その中で、雇った護衛であった者から念能力の基礎を学び、超規格外の才能を再び遺憾なく発揮した彼は、同じく規格外の能力を持った兄妹達を赤子に至るまで殺し尽くした。

ライバルである長兄をはじめ、恐ろしい能力を持つ者ばかりではあったが、その全てを抑え、彼は結果として勝利した。

その過程で全く犠牲がなかった訳では無い。

継承戦の混乱の最中、彼がケツモチをしていたマフィアが暴走した。原因は破滅主義者であるボスのモレナールード。彼女はこれを機に一切合切を破壊しようともくろ

み、他のマフィアを手当たり次第に殺し始めた。彼は継承戦の邪魔になる存在であると彼女を見放し、彼女を抹殺しようとしたが、逆に彼の友人であった私設兵達が捕らえられた。

最終的に無惨に殺された友人達だったが、その結果、彼の中の最後の人間性は消え去った。

能力の覚醒である。

只人には及ばない次元の能力を得た彼は、機械的に裏切り者共を始末し、更に力を増した。皮肉にも、破滅を願ったモレナの願望は自身の破滅で幕を閉じた。いや、彼女はまだ生物学上は生きていた。その能力の有用性故に、彼に力を搾り尽くされる存在として。

そうして、圧倒的なアドバンテージを得た彼に敵う存在はいなくなつた。敵や味方を利用し、時には自分さえも囷にして他の兄妹を次々と謀殺していく彼は、敵対者に容赦はしなかつた。その天才的な段取りの良さとなりふり構わない手法に他の王子は次々

と敗れていった。その時点で、彼は王足る者の資格としては十分に満たされていた。

元国王は、彼が最後に生き残り、勝利したことを見届け、満足しながらシステムの礎へと還つていった。



勝利した彼がまず行ったことは、大規模な粛正である。他の王子に与した勢力、ハンター全てを彼は根切りにした。その家族に至つても同様である。それは自身の母であろうと同様であつた。

彼は常々口にしていた「使えるゴミと使えないゴミに分ける」を着実に実現していった。

そして、殺す度に彼の力は膨れ上がった。普通なら耐えられる物ではない。しかし、国王という特別。そして彼の間離れした精神がそれを許容した。

そして、古今東西で敵う存在がいなくなる程の強大な力を身につけた。無論、自身に

忠誠を誓う事を前提とした「使えるゴミ」は残っていた。国とは一人で回せるものではない。彼らを使いこなす事で兄妹を始末していった彼は、当然そういう事も理解していた。彼は側近達に力を分け与え、その力により大国の支配体制を強めた。

そうして、僅かな期間で盤石の体制を築いた彼に、最早敵う者は居なくなつた。

国民は、大々的に戴冠式を終えた彼を歓迎した。大衆にとつては誰が国王となろうとも、自身に被害が無ければ関係ない。政府批判をした人間が収容所に強制的に送られて、二度と戻つて来なくとも。彼らにとつては目の前の生活が大事なのだ。

彼はそんな国民を内心愚民共と見下し、大いに笑つた。だが、そんな愛すべき愚民共を導くのが国王たる自分の責務であり、逆らうゴミ以外には誠実に向き合つて統治していた。それが、連綿と受け継がれてきた伝統と国王の系譜足る自らの使命であるが故に。そんな新しい国王の国民からの人気は非常に高かつた。



ある時、全世界のマフィアの大部分を牛耳る組織の参謀から、極秘の連絡を受け取った。

曰く、自分を脅かす存在が居る。

それを倒す、又は封印する事が出来れば、全世界を支配する事すら視野に入れる事が出来る、と。

初めは一蹴した。

そもそも、今の彼を斃す事など限りなく不可能だ。仮に本当だったとしてもリスクにリターンが釣り合わない。

だが、連絡を寄越した男は彼に現在の世界状況が如何に危ういものかを説く。世界は単体で世界を滅ぼし得る厄災で溢れ、更にそれを肅正する「救世主」が跋扈している、と。

順当に行けば世界は「救世主」の元に団結し、厄災はおろか、旧体制まで駆逐されるだろうと。

彼は鼻で笑う。貴様は預言者か。預言者気取りの詐欺師めと彼は断じた。だが、男は

食い下がる。

男は能力を開示する。自身が念能力者であり、広域の予知能力者である事を。試しに彼はカキンで起こりそうな事を尋ねた。すると男は幾つかの預言を残してその日の連絡は終わった。彼も似たような能力を持つ。限定的な範囲で彼の予知に敵う者はいない。それが故に興味が湧いた。また、その「救世主」の情報も別ルートから得ていたので興味が湧いた。

数日後、細部は異なるが、大枠で男の預言は当たる。天気などのその男が関われない事象に関しても悉く。もしかすると、使えるゴミかもしれない。暗黒大陸の事も他ならぬ前王に聞いてはいた。

本来ならば、暗黒大陸へ向けて国王一族が出航し、その巨大な船の中で継承戦が行われるはずだったと。そこへ、例の「救世主」が出現した。そのため、予定を大幅に変更せざるを得ず、やむなく陸の上で継承戦と相成った。ここまでは男の話と合致する。よって、少しは話を聞いてやろうと会談する事に決めた。

男からは世界を取り巻く状況について改めて説明を受けた。世界は思ったより脆く、厄災を始めとする厄介な事象で溢れていた。とりわけ、「救世主」。ふざけた称号を持

つ者の情報に彼は衝撃を受ける。

200年前に、暗黒大陸に調査と称して旅立った男。そして取り残され、不老不死に近い能力を得て再び帰ってきたと言う事実。

その「救世主」が念能力者と戦闘しているシーンも映像で見せて貰った。

相手は超一流と呼ばれるほどの使い手であり、そんな人間2人を相手に、まるで赤子の手をひねるように下していた。恐ろしいというフレーズが陳腐になるほどの怪物である。

取引相手の男は言う。現時点で彼を倒せる可能性があるのは貴方だけ。もし放置した場合、高確率でカキン王国の脅威となる。そうしたら、真っ先に始末されるのは貴方である、と。

だが、もし、「救世主」を抑えることができた場合、彼はのびのびと覇権国家の経営を行う事ができる。加えて、報酬として、その男の組織が持つマフィア利権をほぼ全て献上されるといふ。厄災でズタズタにされた各国やハンター協会に復興という名の恩を売りつけ、裏から手を回して気付いたときには首が回らなくすることも可能だ。さすれば広大な土地を持ち、世界の半数以上の人口を抱えるカキンは覇権国家となり、世界の支配者ともなり得る。駄目押しで裏の方も抑えれば、もう世界に王手を掛けるに等し

い。

彼はしばし熟考し、その提案を吟味する。側近は何も口出しをしてこないが、内心は目の前の男を殺すべきだと主張している。本来ならそうだろう。明らかに詐欺にも等しい話であり、俄には信じがたい戯れ言の数々である。

だが、彼は継承戦で得た守護霊獣の力によつて、男が本心で提案していることを理解していた。どんな人物であろうと彼の前で虚飾を行えば、その者はたちどころに異形の生物へと化してしまうからだ。それが無いと言うことはこの男は偽りを述べていない。であるからにはこの話は本当のことだ。

彼は面白がった。『救世主』とやらを見てみたい。そして、もしも仮にそんな人類の希望とも呼べる者を殺してしまつたら……おお、己こそが真の神の子と言えるのではないだろうか？

彼は意外なことに昔から敬虔な神の信徒である。何故なら、表向きの顔には神の信徒であることは非常に有用な隠れ蓑であつたし、何よりも、自分を超える者は神しかいないと断じていたからである。

そんな彼が神の使徒である『救世主』に興味を持つことは必然であつた。

そして、彼はその男の提案に乗った。無論、裏切れば死より辛い異形へと変える契約を条件に。

段取りはその男が整えた。“救世主”が可愛がつている弟子を連れてくると。それに危害を加えれば、“救世主”はたちまち飛んでくるだろう。こちらはただ、準備万端で待ち構えれば良い。彼も愚民どもの世話で退屈だった為、その準備は退屈さを忘れさせてくれるイベントとして楽しんでいた。



その日が来た。男に連れられてきたのは、聡明そうな金髪の中性的な青年であった。名をクラピカという。見た目もその表情も彼好みの人物だ。しかし、彼はその外見に既視感を覚える。その感覚はなんだろうと考えながら当たり障り無い会話を交わすが、そこで判明したのがクラピカの知性であった。

2と3の会話の応酬でもう目の前の人物が敵であると警戒を強めたのである。何でも無い会話だったはずなのに。ますます彼の趣味に合う人物である。

そして彼は思い至る。表向きの謁見室ではなく、試しにコレクシヨンの部屋に招待してみようと。敢えて側近や護衛は付けず、謁見室の奥へとクラピカを案内した。

“ソレ”を見た途端、クラピカのオーラが爆発的に増えた。振り返れば、冷静さを装つてはいるものの、内心激情に駆られている事は間違いない。オーラは瞬時に引つ込めたが、隠しようもないものだ。

彼は内心歓喜した。まだ生き残りがいたかと。あれからもう緋の眼は打ち止めであると思われていた。だが、ここに。極上の獲物が残っていたとは！

彼を連れてきた男を心の中で称賛しつつ、会話で煽る。どのようにこのコレクシヨンを手に入れたか。どうやって彼らに緋の眼を発現させて殺したか。

それを語る間のクラピカの表情は極上だった。絶頂しそうな程に。だが、まだまだだ。

話がパイロの生首の部分に至り、クラピカの我慢の限界が訪れる。鎖を発現し、彼に襲いかかった。必ず殺すという憤怒の表情と共に。

しかし、彼はそれをアツサリと処理し、逆に彼を捕らえる。隠してはいたが、力の差は歴然なのだ。クラピカも一流というのにふさわしい念使いであったが、そんな次元の能力では無い。

彼は異空間を設置し、彼と共に一時的に現実世界から消えた。これからお楽しみタイムだ。部下に伝言を告げ、恙なく作戦は進行していると、例の男に伝えた。



夢のような時間を終えて、彼は大満足のまま時空間の異なる部屋から出て来る。この部屋は外界と切り離され、時間の流れを自由自在に変えられる。0.01倍から1000倍まで。元は彼の能力の一部であり、こんな風に切り離す事は出来なかつた。そもそも彼の能力は、先の時間を10秒予知して、そこを遡りその10秒を追体験して結果を変えらるというものだった。これだけでも恐ろしい能力だが、この能力の本質は、世界を分岐させる所にある。

彼が予知した先の未来を限定的に切り取り、その世界で起きる出来事を彼は映像として視る事ができる。予知で起きる世界を切り離し、自分軸の世界線を新たに創造し、予知で起きる未来を改変すること。それが彼の能力である。【刹那の10秒】と呼んでいた技の根幹は、醜悪な念獣が基点となつている。これは彼が無意識のうちに産み出したものだ。

名を【衆愚の王】と呼ぶ。

使いこなすごとに彼の能力は進化し、今や予知段階で不可避の攻撃は修正出来るし、理想の結果を必ず導く事が出来るようになった。更に能力の副産物として自由自在に

平行世界を行き来できるという、嬉しいオマケも付いてきた。

元の能力と併せて使用することで彼は無敵となる仕組みである。

そして、彼は後に合流した預言者の男と合流し、準備を整えて準備万端で迎え撃つ体制を整えた。可能であればここで始末できるようにと。クラピカについては殺さなかつた。そこだけが不満だったが、万が一の事態に備えて人質として活用するように男に言われていたため、渋々従つた。

あとは作戦通り行うのみである。“救世主”とはどの程度の者なのか。彼は実際楽しみにしていた。



男はクラピカを元の世界に戻せば“救世主”はすぐに駆けつけるだろうと言つていた。そこで、クラピカは最後の準備段階で元の世界に戻した。

その直後、強大な気配が出現するのを感じた。

……速すぎる。

急ぎ玉座の裏に隠れたが、何も無い空間から、莫大な圧を伴ってソイツは現れた。ソレをひと目見たときに感じた。

化け物だと。

継承戦を経て、他人を殺すことでレベルアップした自分に最早敵う者はいないと思っていた。それ程までに彼の力は強大だった。

しかし、そんな次元の話では無い。格が違う。瞬時に自分が敵う相手ではないと悟ってしまった。

その纏うオーラは、最早オーラとは言えず、神聖で不可侵な物に見えた。

彼は少し不安になった。これではまるで、聖書に登場する無慈悲な天使そのものでは

ないか。天使は終末のラツパが吹き鳴らされたとき、人類を滅亡へと導く存在だ。そこに情は無い。

クラピカを殺さないで良かったとは思ったが、それを無視して自分を抹殺しに来たらどうしようもない。

彼の中で逃げるという選択肢が現実味を帯び始めた。だが、「救世主」は自分をアツサリと発見した。迷う暇など無い。選んだのは自分だ。やらねばならぬ。預言者の男が告げた「救世主」の弱点。

人間性にこだわる癖。現に、彼はクラピカを瞬時に元通りにしてしまった。念能力では無い。もはや「奇跡」である。だが、それこそがソイツの弱点でもあることに胸をなで下ろす。人質は有効だった。そこを徹底的に利用せねばならぬ。

クラピカを見た「救世主」の圧が強まり、息苦しささえ覚えていた彼は、ともかく挑発する言葉を述べ、立場上はこちらが優位である事を強調する。無論、能力の出し惜しみはしない。

予知した直後、最初に超巨大な念弾で粉々に碎け散る自分が視えた。どんなに防御しても関係ないとばかりにその念弾は自分を貫いた。修正。そして、次に凄まじい速さの

パンチ。これも駄目だ。『視て』いなければどうあがいても即死のものだ。修正。そこを超えて、次の瞬間にはソイツが速さと言う概念を置き去りにしたかのような移動の仕方をして攻撃してきた。これも修正。

……無理だ。コイツを殺すなど不可能だ。

もうこの短時間で3回も死んだ。いや、死ぬはずだったが、辛うじて回避した。自分の能力によって。こちらの攻撃も、そのオーラによって通りそうにない。そして、切り替える。コイツを追放する様に動く、と。

冷や汗が全身に噴き出す。それを悟られないように慎重に事を運ぶ。これほどの緊張感は近年無かった。継承戦の時に長兄と相對したときもこれほどでは無かった。

だが、達成した。

1000倍の時間が進む平行世界の部屋に扉を切り離して閉じ込めることができたのだ。いかに奴といえどこれを突破できるものではない。仮に万が一突破出来たとしても年単位で時間がかかるはずだ。殺すことは不可能だったが、ついに『救世主』を封印

することができた。

ザマアみろ。もし出て来ても、オレは更に進化してやる。奴を殺せるレベルまで。何せ、糧となる生贄はたっぷりといえるのだからな。

これで、名実共に自分が最強であり、神の代理人としての格はどちらが上かをハッキリする事ができた。もう、何も怖くない。

世界をこの手に掌握したら、悲願である暗黒大陸とやらに進出しても良い。駒など腐る程にいる。支配した属国を斥候として向かわせる事もできるだろう。

ああ、神よ。感謝します。我にこれ程の試練を与え、無事に乗り越えられた事に。

さあ、始めよう。カキン王国の、栄光に満ちた輝ける未来を。

131、集大成

政務をこなし、日課である趣味の時間を終えたツエリードニヒだったが、その表情は優れなかった。何故なら、極上の快楽を知ってしまったからだ。クラピカを拷問しているとき、彼は興奮の絶頂にあった。最高級の知性と、決して折れない強い意志。たとえ彼が男であっても、ツエリードニヒにとってはまさに宝石のような人材であった。それを蹂躪し、破壊していくことのなんと甘美だったことか。美しいモノほど壊したくなる。その行為は彼にとって芸術であり、嘘偽り無い真実の物語でもあった。

そして、仕方なかったとは言え、それが無くなってしまった今、彼は一種の虚無感に陥っていた。愚民どもにはいくら探してもそんな人材はいない。よしんばいたとしても、それは国家にとって使えるモノであり、やたらと消費するわけにはいかないモノだった。

いかにツエリードニヒが狂っているとは言え、彼の中での優先度は国家の趣味であり、それは初代王から連綿と続く呪いのようなものである。よって、そこを覆すわけにはいかない。

以上の事情から、自らの敵対者であるクラピカは彼にとって非常に貴重な獲物であり、奇跡の産物であった。今でも、彼が女であればどんなに良かったかと夢想する。今の様なバカみたいなおーラであれば可能であるかも知れない。そういう能力を作り出せば。だが、全てが遅かった。時空を操る彼も、過去を元に戻す事は出来ない。

後悔先に立たずとはこの事だ。

「あくホントにつまんね。コレじゃブタを解体してると変わらんだろ。おい、もつとマシなのはいいのか？ 流星にウチの議会の制度を知らねえってどういうことよ？ ヒトとしての最低ライン割ってる奴等ばっかじゃん。もう男でも良いからいいのか？」

彼は側近にそう愚痴る。側近も困り顔で「これ以上はちよつと……」とお茶を濁すしかなかった。それもそうだ。基本的には若い女。しかも知性が高く、そして危機感のな

い、消えても誰も心配しないような女がそうそういるわけがない。そして、事が露呈したときのリスクもデカイ。万が一露呈したとしても揉み消せるだろうが、流石に帝国社会主義を標榜しているカキンでも、これほどの暴挙がバレれば大事になりかねない。

それは本人も理解している事ではあるし、理解しながら愚痴っているのだ。部下にとってはタチが悪い男である。

仕方ない。そろそろ本業にも精を出すかと腰を上げた時、目の前の空間から突如、見覚えのある扉が出現した。

「バカな……なぜコレがここに？」

嫌な予感がある。アレは自分の能力ではあるが、完全な独立空間だ。最早異世界と言ってもいい。扉が出現したという事は、まさか……まさか奴は自力で出口を探り当てたというのか？ だが、扉が出現した意味は？ まるで分からない。こんな事は初めてだ。

あり得ない。

“救世主”とはそんな理不尽な存在なのか？

歴史に存在する“救世主”は、人に

殺されたり、追放されたりと破滅の道を必ず辿っている。多少の奇跡は記録されているが、それらは眉唾物であり、大体が念能力で片付けられるものだ。つまり、愚民と“救世主”との間にそれ程の力の差は存在しない。

だからこそ、この目の前で起きている現象はおかしい。これ程の力を持つ自分の、謂わば究極とも言える能力をたかが1週間程度で攻略するなど……。しかも、あの空間は1000倍の時間が流れている。つまり、奴は実質2時間以内にそれを為しているという事だ。

確かに強さはとんでもなかった。だからこそ1000にしたのだ。自分が比肩するぐらいに成長するまで！出来れば1年、せめて半年は欲しかった。だが、その目論見は崩れ去った。その脅威を見誤った。

……だが、やらねばならぬ。やらねば、滅ぼされる！

扉が徐々に開かれる。先ほどから警戒していた親衛隊である配下達が攻撃を仕掛けようとしている。……恐らく無駄だろう。

完全に扉が開き、人影が見えた時、数えきれない程の念弾がその付近に集中する。配下達は腐つても自分の配下だ。それなりの力を与えている。通常であれば現代兵器のバズーカ砲の集中砲火を優に超える威力があるはずだ。一瞬で周囲が煙で覆われる。対象沈黙、と砲撃を隊長が止める。しかし、その対象はハナから沈黙している。辺りが見え辛い。余計な事をしやがって。アイツは肅正だな。だが、それは奴がやってくれるだろう。そして煙に紛れた今がチャンスだ。

その隙に脱出を図る。

即座に玉座の後ろにある隠し扉から脱出を図ろうと行動する。だが、扉が開かない！
バ、バカな……これは……!!

「何処に行こうというのかな？」

煙が晴れ、いつの間にか配下達は全員倒れている。死んではいけないようだが、凄まじい苦悶の表情を浮かべて痙攣している。

な、何をしたらそうなる？ 奴等は仮にもオレの配下だ。生半な能力者ではない。そ

れぞれが人類最強クラスだぞ！」

「クソが……一体何をしやがった！」

「さてね……。お前が知る必要があるか？　これから死ぬというのに」

「貴様……オレ様を閉じ込めやがったな！　今すぐここから解放しろ!!」

「それは出来ない相談だ。お前はやり過ぎた。よつてこれからお前を滅ぼす」

「……ふーっ……。『滅ぼす』ときたか。『救世主』ともあろう者が随分と偏った見方をするものだ。オレは古代から連綿と続く由緒正しい王だぞ？　それを害するなど、『救世主』のツラに泥を塗る行為ではないのか？　オレが死ねばカキン帝国2億人が路頭に迷って地獄と化すぞ？」

「勘違いしてもらっては困る。私は別に『救世主』等と名乗った覚えは一度もない。ただ、お前が気に入らないし、私とクラピカに害を与えた人物だから始末する。それだけだ。第一、別に王がいようがいまいが国民は強かに生きるだろう。むしろ、お前がいなくなつた方が彼らにとっていいんじゃないか？」

奴の後ろからクラピカが顔を覗かせる。オレを射殺さんばかりの視線で睨みつけているという事は、精神まで回復してやがるな。チツ。コイツには不可能は無いのか？

不味いな。とりつくしまもない。下手な倫理観に訴えたり、情に訴えても同じだろう。オレにできる事と言えば、奴の隣にいるクラピカを何とか確保して逃げ切ることだけだ。奴の弱点である人間性、それに賭けるしかない。

ズズズ……

背後に自分の相棒である念獣が現れる。禍々しいデザインで古の墮天使を模した蠅の王の様なシルエツトを持つコイツが〔衆愚の王〕の正体。その名に恥じぬ、強烈な力を持つ。さあ、始めよう。オレは決して「救世主」なぞには屈しない。オレこそが古代から続く王家の正当後継者。

チエリードニヒルホイコーロだ。

「クラピカ、気持ちは分かるが君は下がっている。アレはこの世界のヒトの手には負えない。……しかし、何というか、酷いデザインだな。念能力とはその人物の本質を露わにする。やはりお前は「怪物」だったか。ならば、私も本腰を入れよう。怪物の王よ、私は〔壊れない男〕、〔怪物ハンター〕、そしてお前を滅ぼす者だ。覚悟するがいい」

「笑わせる。お前はヒトではないかのような言い草だな。ゴミの分際で。そもそも神の下では皆平等だ。唯一人、神に選ばれたオレだけが特別！ その証拠に、見せてやろう。オレの能力は『世界』を支配する能力だとな」

互いに舌戦を繰り広げながら、オレは奴の能力を整理していた。奴にあの白いオーラは今無い。脱出に使い切ったか、はたまたブラフか。いや、ブラフは無いな。やる意味がない。それでも莫大なオーラ量だが。このオレを閉じ込めるとは、どんな能力だ？

あの感触は、考えたくも無いがオレが極小の並行世界を創造する時の効果に似ている。まさか奴も同じ事が出来るのか？ だが、奴は以前オレに太刀打ち出来なかった。そこから考えるとまた別の能力だと考えるのが自然だ。だが、万が一がある。奴の能力が人の能力を吸収、または模倣できるものだとしたら？ この闘いは厳しいものとなる。しかし、こればかりはやってみないと分からない。

舌戦の後、準備をとづくに終えていたオレは能力を発動する。発動キ―は目を閉じる。これだけだ。以前は《絶》状態でなければ無理だったが、〃力〃が増えた今、可能になったことだ。能力発動の意志を受け取った念獣の全身から黒いオーラが迸り、オレの周囲を覆う。これが、以前よりパワーアップした全力の能力行使だ。

“救世主”は、ただこちらをその場でじっと見つめている。さて、どう出る？
ここから【刹那の10秒】が始まる……！

直後、自分の頭が弾け飛ぶイメージ！

なんだ!? いきなりコレか!! 何をされた!? とにかくその結果を見て回避する行動を取る行動に修正。修正中に奴は動けていない。よし！ それならば方法はある!!

コンマ一秒もしないうちに全身がバラバラにされる自分が視える。コレもその場を回避する行動に修正。

すると、今度は直後に全身がグズグズに腐っていくビジョンが見えた。

これは不味い。1秒もしないうちに3回も瀕死に至る攻撃を喰らう。しかも最後のは直接攻撃じゃない。何を喰らったかすら分からない。たまらず大幅な回避行動に修正する。オレの能力は世界を修正する能力！ 予知できた未来に対して、オレが世界ごと複製し、書き換えることでその結果は偽りと化す！ より具体的に言えば、オレの能

力は起こりうる結果の途中である過程を切り取る。そして、その過程はオレが平行世界へずらす。

奴にとつてみれば確実に殺つたはずの結果を、オレが世界の過程を修正し、そして偽りへと書き換えるのだ。だから奴はオレを認識できない。この能力に隙があるはずもない。

眼を開ける。ここから追体験の10秒が始まる。

ここまでは奴は何ともない。予知通りに動かずに念弾を飛ばしたり、訳の分からん攻撃を飛ばして来た。しかし、全てを回避する。杞憂だったか。ならば早く殺してやろう。

動いていない奴の方に数多の即死攻撃を回避しながら行く。クラピカを確保するために。コイツがオレの生命線だ。会いたいとは思っていたが、こんなに早く、再び会えるとは思わなかった。こんなに嬉しくない再会は初めてだ。思考がズレそうになるところを封じ込め、クラピカを貰い受けようと近づいたその時

「やら、せると、思う、か？」

バツ、とその場を飛び退く。バカな……!! 幻聴、か？ 奴は動いていない。

だが……奴は徐々にこちらに顔を向けて目が合う。

「そんなバカな……!! 何故、何故貴様が認識できる!!!」

「さて、ね……。私に、不、可能は無い、からじゃ、ないか？」

「ふざけるなツ!!! クソゴミがツ!!!」

思わずパンチをぶち込む。すると、拍子抜けしたかの様に奴の顔面に拳は吸い込まれ

ていった。グチツという生々しい音をたてて奴は吹き飛ぶ。

「な……!？」

「くっ……。まだ、存分に動けん、な……」

やったオレの方が驚いた。何が……いや、奴がオレの攻撃をまともに食らった。コレまではそんな事ができるとは思えないほどの圧倒的なオーラだったが故に、まさか効くとは思わなかった。…だが、そうか！

今の奴はこの瞬間、この時空間は認識はできていても、ここを自由自在に支配できているオレの方が上回っている！ 奴はここを認識できるほどの力量は持っていたが故に、あの空間からこちらへと繋がる道を発見できたのだ。流石「救世主」！ だが、甘かったな。今この能力内では、このオレの方が上だ！ そして、奴は例の気色の悪いオーラを出していない。大方脱出の時に使い果たしたのだろう。無理は無い。それがオレにとっての幸運を招いた。

チャンスだ！

それからオレは、奴をひたすらに打ち据える。今見ると、オーラ量はオレが劣るもの

の、絶望的な程の差はない。よって、一方的に動けない奴は、こちらからの攻撃のどれ
もがクリーンヒットだ。レベルを上げておいて良かった。この10秒でケリをつける
!!

6

5

クソツ!! しぶとい!!! まだ致命傷を与えられない!!! 早く死ね!!!

4

目玉を抉る! 奴の指や手足が千切れ飛ぶ! 早く、奴が徐々に動けるようになって
きている!!

3

2

不味い。これだけやってもコイツが死なない！ どうなってやがる。仕方ない。クラピカを浚って反撃……いない!!?

「やらせは、せんと、言った、だろう……」

クソツ！ あんな所に……いつの間に!! 時間切れた。とりあえず離れる!!!

1

0

「ゲハツ!!!」

「な、カームツ!!! 何が起きたツ!!!」

クラピカが戸惑っている。奴からすれば、いきなり「救世主」がボロボロで自分が違

うところにいたんだからな。だが、漸く奴の攻略の糸口が掴めた。間髪を入れずに再び発動する！

【刹那の10秒】!!

この能力の良いところは連続できるところだ。そして、予知が始まってオレは少なくとも100回は死んだ。死んだビジョンが見えた。恐ろしい。あの状態でなんて奴だ。だが、結果を修正し、次の追体験の10秒で奴の元に辿り着き、攻撃を加えていく。奴はあの瞬時の時間にかんりの回復を済ませていた。というか、回復出来るのか。化け物め。だが、全回復までは出来ていない。

ならば、コレを続けることで勝機が見えてきた。コイツを殺せば真にオレに敵う者はいなくなるだろう。

死ね！ 速やかに!! オレのために!!! オレの礎となれ!!!!



「カーム……悪いが解説してくれないか？　一体何があつて奴はあなつてている？」

クラピカの指し示す方向を見れば、全身を緑色の奇妙な植物や気持ち悪い蟲複数に集られ、「なぜだ〜」「なぜ死なねエ〜」と独り言をブツブツと呟くチエリードニヒがいた。

「そうだな。君には詳しく教えるよ。アレは暗黒大陸で採取した寄生植物の一つだ。あ

の蟲とも共生関係にある。簡単に言うと、あの蟲が植物の種を埋め込み、体内で発芽する。植物は幻覚作用のあるガスを吸わせ、対象を夢の世界へと旅立たせる。その夢も平和な物ではなく、ひたすら闘い続ける夢だ。そして、その闘いで生まれる対象の夢エネルギーを吸う。獏という怪物に似てるな。そして、蟲はその植物から生まれる果実や樹液を採取する、とそういうわけだ」

「……なんとなく分かったが。そんな蟲や植物をここで出したらまずいんじゃないのか？」

「それも気にしなくていい。ここは限定的な『並行世界』だ。現実世界には影響はないよ」

「?」 どういうことだ?」

「私が並行世界を創造した。奴の能力を頂いたが故にできたことだけだね。実際恐ろしい能力だった。まさかこの人間世界で世界自体を書き換えるほどのパワーのある能力に出くわすとはね」

「……なるほど。奴は行動を予測している。そこまでは私も読めた。しかし、世界自体を書き換える、とは?」

「言葉の通りさ。奴は10秒程度の未来を予知する。ここまではいいな?」 で、問題は、それがただの未来予知では無いと言うことだ。未来はバタフライエフェクトの名の通

り、行動を起こせば無数に分岐する。奴は、それを意図的に分岐させることができるんだ。予知の段階でな。そして、自分はその分岐した世界を行き来して、自由自在に結果を変えられる。最終的に、どうあがいても結果は奴の思い通りに収束する」

クラピカの表情が驚愕に彩られる。だが、彼はその直後に納得した表情で頷いた。

「……勝てないはずだ。それに、奴は異常なほどのオーラを持つていた。それこそ会長やビスケも歯牙にもかけないほどの。あの凶悪なオーラに充てられて、私も心が折れかけた。いや、実際に折れたのだろうな。まだ思い出せないが」

「ゆっくりでいい。今すぐ思い出そうとしてもストッパーがかかるといことは、今はその時ではないという事だから。あれはもはや怪物だ。『聖光気』無しの私にも迫る勢いだったからな。奴のオーラ量であれば、それ程の力を創ることができるといふ訳だ。能力の副産物として並行世界を切り離してプライベート用に使っていたみたいだしな。普通は無理だ。私もやってみて思ったが、反則級の能力だ。そこから考えると念能力の素養も怪物級だな」

「私が直接奴に復讐を果たせなくて無念だったが、良かった。参考にどのような経緯を辿って奴がああなったか教えて欲しいんだが」

クラピカが尋ねてきた。彼にとっては私が仇を奪ってしまった形だ。教えるのもやぶさかではない。しかし、少し複雑なんだよな。

「もちろんさ。ちよつとややこしいけど我慢して欲しい。まず、最初の邂逅の時。あの時点で、私が並行世界を創造していた。気付かれないようにね。だから、こつそり逃げようとしたアイツは逃げられなかった。当然だ。並行世界の範囲を狭く設定したからな。奴の能力の副産物で、時空を自由に設定できる並行世界だ。で、奴が自らの能力を発動させる。そこからはお互いの能力が干渉して、分岐の可能性の削り合いだ。奴は気付いていなかったが。私の攻撃のことごとくを潰して奴が避けるか攻撃を仕掛ける。奴はこの能力を使いこなしていたから一日の長があるし、私は当然劣勢になる。それで、奴が私の元に辿り着くも、奴にとつて誤算だったのは、私は奴の能力を認識していたということだ。ただ、認識できただけで、行動自体は不能である事を看破した奴は、必死に能力内で攻撃を加えていった。だが、なかなか私は斃れなかった、というところだろう。」

「だろぅ?」

「奴の視点からすればそうなる、ということだ。本当は最初から決着はついていた。私が幻覚作用を全開にしたウィルスを浸透させて、奴の能力発動の直前にあの植物の種と蟲を埋め込んだからな」

クラピカが呆れた様な表情を作る。

「……つくづくカームが味方で良かったと心から感じるな。そして奴は、幻想の刹那の時間を永遠に繰り返す、と」

「そういう事だ……。これで奴は死ぬまで自らの幻想と闘い続けて、誰もいない並行世界で朽ちて死ぬ。クラピカの仇を私が横取りしてしまった形になるが申し訳ない」

「いや、それはいい。大事なのは結果であり、奴にも相応しい罰が下った。仲間達の眼も回収できるし、何より私の親友が見つかったのは幸いだった」

「……そうか。すまないな。では、奴を置いてここから出るとしよう。速やかに回収してこの国から脱出を図らねば。恐らく結構な時間が経過しているだろうからな」



そうして彼らは元の基点世界に戻ってゆく。背後には呻きながら緑と一体化したツエリドニヒが残された。彼はカームの述べた通りに永遠に刹那を繰り返すだろう。本人も気づかぬまま。死ぬまで。そして、カーム達が完全に去った後、彼の前に黒いオーラが噴出する。黒いオーラはその形を徐々に変え、やがては人面の壺の形を形成する。本来はヒトであつたソレは、悠久の時を経て元の姿を忘れてしまった。

壺(?)は、こうなつてしまった場合の契約をどうするか迷つていた。折角儀式が完了し、生贄も大量に得られた。しかし、このままでは王家は断絶だ。広範囲にいた彼の親戚筋は彼が粗方肅正してしまった。

ならば、どうするか。

……彼を元に戻すしかない。本来ならば、対象者の願いを叶える事がこの壺の本質であつた。しかし、悠久の時は、壺を怠惰に変えていた。何もせずとも存在を維持できる。それを覚えてしまえば、そこから抜け出すのは難しい。

初代王からの願いでもあるという事を言い訳に、壺自身が契約の存続を願つた。

対価などは後々貰えばよい、と。

この国には数えきれない程の生贄がいるのだから。気づいていなかったが、壺は自身のアイデンティティすら失い、ただひたすら王家の為のシステムと化していた。システムを維持する為なら、自身の存在すらも歪める程に。

黒いオーラがツエリードニヒを覆う。彼ならあの「救世主」を回避して国家を形成する事が可能な筈だ。何故なら、彼こそが連綿と蠱毒を続けて勝ち残った集大成であるのだから。

132、始まり

王位継承戦を抱えるシステム。それは古の時代、初代国王から連綿と受け継がれてきたシステムである。そして、その正体は、暗黒大陸の厄災から生まれたものだ。

群雄割拠の時代、常に外敵に晒されてきたカキン王国だったが、ある時、側近が悪魔に取り憑かれたという人間を拾ってきた。興味本位で謁見した彼は、その力を見たがつた。軽い気持ちで試してみたが、その力は暴走した。

命からがら助かった国王は、恐ろしい破壊力と規格外の力を目の当たりにして、その者に封印を施した。その者を害するなど、何が起るかわからない行為をしようとする思わなかった。敵国に放流する事も考えたが、そんな事をして自爆覚悟で巻き込まれたらたまった物じゃない。

そこから様々な文献を当たり、暗黒大陸の存在を知った彼は、その正体にも見当が付いた。そして、自身の判断が正しかった事を悟る。このまま、ソレを封印し続ける事が

正解なのだ。



月日が経ち、王も老境に差し掛かる頃。依然として外敵の脅威は消えず。然りとてどうする事も出来ない。

更に、増えすぎた自身の子達は、この状況を知ってか知らずか、王位を狙って牽制を繰り返す。果てには暗殺未遂騒ぎまで起こる始末である。

もし自分が死んだら確実に継承権争いが起きるだろう。そうなったら終わりだ。国として隙を見せた時点で周りの国は確実に動く。

弱った国など、周辺国からしたらただのご馳走に過ぎない。男は皆殺し、女は報酬、そして国王一族は族滅だろう。

老いを自覚した王は悩みに悩む。未だに気を抜けば挑発を繰り返され、度重なる遠征で国内統治も儘ならぬ。後継者の教育も同様に。それが今のどうにもならない現状を作り出してしまっている。

それでも、これまで耐え忍んできた。だが、一手間違えば即潰されるプレッシャーに、

遂に王は追い詰められる。

王は考える。このジリ貧で滅びに向かう国を何とかする為にはどうしたら良いかと。まずはスムーズな王権の移行が必須である。このままでは内戦必至だ。よって、これを何とかしなければならぬ。

国王に就いた者は強く在らねばならぬ。頼りない王であればたちどころに周辺国へと吸収されるだろう。個の強さではない。国王としての強さだ。

そして、遂に結論に至る。

子らを選別すれば良いのだ。強制的に。

さすれば、生き残った者は必然的に強い王となる。単純な保有武力ではなく、頭の出来や深謀遠慮が出来る者のみが生き残る。今のこの国にはそういう強い指導者が必要なのだ。

この思いつきを形にする為に、王は内容を練った。そして出来上がったその概要は以

下の通り。

- 1、継承権のある14名の王子は王位継承戦を行う。
- 2、王子らは、それぞれ特殊な力を授けられる。
- 3、王子らは直接手を出すことは禁止。
- 4、王子1人につき、護衛は15名までつけられる。
- 5、継承戦は、王子が最後の1人になるまで終わらない。

方針は固まった。だが、まだ弱い。こういった常識外の方法を取る為には、確実な保証が必要だ。いざ選別してみて、共倒れして王族が全滅した、などは普通にあり得るし、それでは困るのだ。

確実に勝ち残った1人が祝福を与えられる。そういう保証が。

ならばと、王は禁忌に手を出す。

以前封印した悪魔憑き。その超常の力を利用する事を。

それから、王は検証をした。何をしたらどれほどの被害が出るのか、などだ。

少なくない犠牲を出しつつ、その法則が見えてきた。ソレは、どんな願い事も叶えてくれる。その代わりに、別の人物に代償を要求される。そしてその要求は願いの大きさにも寄るが、大きい願いだと明らかに個人の生命を強いることとなる。例えば脳髓を要求される、などである。当然要求された人物は断るだろう。そして、支払いを請求された人物がその要求を4度応えきれなければ、その願いによつては悪魔でもそこまでやらないという程の桁違いの犠牲が発生する。ただ死ぬだけではない。少なくとも支払いに失敗した人物と、その者の最愛の人物が突如、死ぬ。そして願いの大きさによつてその者と関係が深い者も巻き込まれる。つまり、犠牲者は加速度的に増える。その死に方も強烈だ。

突然人体が圧縮され、細く捻じられたように殺されるのだ。何の脈絡もなく。

だが、願いは確実に達成される。それは検証を経て間違いなく保証された。よつて、王は踏み切る。この企みに悪魔憑きを利用する事を。

それ程までに王は追い詰められていた。犠牲が無くば国を救えない。それ程の覚悟

とも言える。そして後は、この提案を悪魔が乗ってくれるかどうかだ。だが、彼には勝算があった。

悪魔は犠牲を強いる。正確には代償だ。願いが大きくなればなるほどその要求はハードルが上がる。

だが、逆に言えば代償の要求は個人で完結する。ならば、何も問題は無い。もはや王は自らの生命すらを犠牲にすることを厭わなかった。

悪魔憑きを呼び出し、王は質問する。

まずは、蟲毒システムを恒久的に王家に組み込むことが可能かどうか。そして、悪魔憑き自体がシステムに編入することが可能であるかを。

悪魔は少し考え、条件を付けて是と答えた。

可能であるならば、と、更に条件の交渉に入る。問題の代償であるが、最初から王はすべて支払う気でいた。つまり、自らの生命を。そして、儀式の犠牲になった王子達を。時間差になるが、確実な代償である。また、それだけではない。一つの儀式を終え、全てが完了した後、自国民をその数に応じて一定数を生け贄として捧げるのだ。これは悪魔の要求である。

そして、勝ち残った王子は、国家を繁栄させられる為の祝福を得る。

王は以上の質問と願いを王妃にやらせた。代償は願った人物とは別の人物が支払わなければならないからだ。

王は全てを了承し、合意へと至った。

早速悪魔憑きは代償を支払うための棺を創造した。負けた王子のための棺である。そして、自らは壺へと姿を転じた。

これが通称『悪魔の壺』である。参加者はこの壺に手を入れ、それぞれ独自の念獣を授かる。そして、その能力をもって謀殺しあう。負けた王子は次々と犠牲者の棺へと入れられ、代償に捧げられる。

王子達は集められ、以上の説明を受けて選別が始まった。

この国で初めての「壺中卵の儀」が発動した瞬間である。

熾烈な殺し合いが繰り広げられ、最後に生き残ったのは、知略、謀略、統率力が抜きんでて優秀だった第8王子である。まだ10代前半の彼は、虎視眈々と玉座を狙っていたが、兄妹全てを斃し、見事に勝利を勝ち取った。王はその王子の能力と、選別を終えて著しく成長した彼の姿に満足した。これでこの国は救われる、と。

最後に、王が棺の中央へと入り、犠牲になることで儀式は完了する。そうすると、王が事前に指定した生け贄は代償へと捧げられた。

この時、小国だったこともあり、犠牲者は五千人を割る程度だったと記録されている。切り取った地方の反抗的だった集落と、収監されていた犯罪者が突如捻り殺された。

これは、後に王家から天罰である、と発表された。

その後、強い王の下で団結した小国は、次々と周辺国家を飲み込んでいき、その一代

で全ての近隣国を手中に収めることに成功した。覇権国家の誕生である。そして、王は皇帝を名乗り、代を重ねるごとにその勢力は強まり、広大な土地を持つアイジエン大陸を統一することができた。

以後、たびたび情勢が不安定になったり、国家の危機を迎えた場合に王がこの儀式を発動させるようになった。そのたびに生け贄の犠牲者が増えていったが、儀式が終われば国は更に発展していった。更に言えば、人民の犠牲者は不必要な人員の粛正という意味でも役に立っていた。そうして、国家としての新陳代謝を繰り返して強国たる国力を維持してきたのだ。

時代が進み、ホイコーロ王朝（王家の名前を冠する帝国時代）は連綿と続いていったが、産業革命や情報拡散の速度の革新的な向上に伴って、前時代的な国家経営では統率が難しくなってきた。

これを機に、当時の皇帝は、自ら歴史上最も静かな革命と言われた『真林館事件』を引き起こし、カキン帝国と名を変え、帝国社会主義から議会民主主義へとシフトしていった。

しかし、これは何のことは無い。『壺中卵の儀』を久しぶりに発動させただけのことだ

ある。

不完全な儀式ではあったが、少なくとも犠牲者は少数で済み、スムーズに政権は次代へと移行する。依然として王族の権勢は絶対的なものであった。

新しい次代の国家の王、それが、ナスビーⅡホイコーロである。

彼は、カキン帝国を導く為の様々な道を模索した。新国家へとスタートしたカキン帝国は、他国との様々な密約を誤魔化し、協調路線を捨てて覇権国家への道を歩き出す。カキン帝国は、国家としてそれ程の実力が付いていた。

密約の中には、暗黒大陸不可侵という項目もあった。しかし、仮に超巨大と推測される暗黒大陸に上陸し、拠点を築く事が可能であれば、そこはカキン帝国の物である。国としてこれ程のフロンティアは無い。他国程人権感覚が浸透しておらず、倫理観というものに縛られないカキンは、他の国には出来ない程の大海戦術を取ることもできる。

また、リターンを確保する事ができれば、国家としてもより盤石なものとなる。

世界は、カキンに傳く。

それは、偏に国の為、国民の為である。

ナスビーⅡホイコーロは、その為の段取りを組み立て、超巨大な探索船、B・W号の建設に着手した。そして、成果をより確実にする為に。

だが、最終段階に入る直前にその計画は頓挫した。

外部協力者によって、“救世主”が降臨した可能性があるという情報が入ったからである。

古来より、カキン帝国は“救世主”の存在を恐れた。王族がというよりは、そのシステムの根幹となった悪魔憑きがだ。

存在するだけで凄まじい被害を齎す悪魔憑きは、“救世主”にとつては滅ぼす以外の選択肢は無い。謂わば天敵とも言える。

悪魔憑きは逃げていたのだ。当代の“救世主”、つまり人と交わる“聖光気”の持ち主から。その性質故に。そして、流れ着いて悪魔憑きは国家と共依存の関係となった。

よつて、統一を果たしたホイコーロ王朝は、密かに「聖光氣」の持ち主を探し、そして排除しようとして動いていた。長い歴史の中で暗躍し「救世主」を破滅に追い込んだ事も2度ほどある。目をつけられないように、刺激しないように。

そして、「救世主」を生み出す可能性が一番あるのは、アイジエン大陸に古来から住まう修行者、「仙」である。よつて彼らはそれとなく迫害を続け、「仙」を国から追放する事に専念した。

その結果、「仙」は減少の一途を辿り、遂には伝承でしか存在しない空想上のものへと成り果てた。いるにはいるかもしれない。だが、決して人界には出て来なくなった。それで安心していたというのに。

当初の計画では、国民20万人を乗せた船で暗黒大陸の手前の島まで航行し、そこまでに王位継承戦を行うつもりだった。当然、一般の人員は全てが贖だ。だが、今回の「救世主」は許さないだろう。例の外部協力者からの情報によつて、その全貌が明らかになる度にそれは確実とも言えるようになってしまった。

仕方なく計画の修正をする。継承戦は王宮で行い、次代へと繋ぐ。暗黒大陸への渡航

は「救世主」を対処してからでよい。発生する生贄も、しばらく隠蔽しておけばそのうち厄災で有耶無耶になるだろう。後は、「救世主」だ。歴史上にあるように、様々な権謀術策を以て当たらねばならない。その為の下準備に取り掛かる。下準備を終えたら継承戦だ。なるべく後顧の憂いが無いようにしておかねば。そして、次世代の王には忠告しておかねばならない。

「救世主」には細心の注意をもって対処せよ、と。

その成果如何によって、一族と帝国は永遠に栄える事ができるのだ、と。



「……………」

「どうした？」

「……まだ終わっていない」

「……………！ どういうことだ？ 奴は完全に終わっていたらどうか!？」

「心配がする。いや……これは何だろう？ 私自身にもよく分からないが……私の『何

か』が訴えるんだ。ここで終わらせてはいけない、と」

「それは……………」

「これは、恐らく『救世主』としての感覚、なのだろうか」

「……………あれ以上に何かがあると言うんだ？」

「分からん。だが、確実にある。私はこれを見逃すことはできない。クラピカ、すまないがもう少し付き合ってくれ。今からその原因を探る」

「……………分かった。だが、急いでくれ。ここは敵地だ。奴は腐つてもこの国王だ。すぐにも衛兵などがなだれ込んでくるだろう」

「うむ。まあ、今現在でも私の力でかなり押しとどめているけどね。ちよつと集中するから、見張っててくれ」

カームはそれから目を閉じて集中し始めた。確かに、ここで取り逃したらマズい。奴の能力的にも、存在的にも。

「やはりいない。どこに行つた？」

カームが珍しく焦っている。いや、初めてかもしれないな。割と長い時間一緒に過ごしたが、そんな姿は見たことが無い。結局、私は彼の事はあまりよく分かっていない。マフィアのボスの係累であり、人知を超える力を持つ者であり、巷では「救世主」と呼ばれる彼の事が。

こうしてみると、彼もまた人間なのだなど、とりとめも無いことが頭に浮かぶ。本来はそんな事を考えている場合ではないのだが、私では悔しいことにもう何もすることがない。仇を力不足故に自らの手で討てなくて、しかもその敵に嬲られるという失態を犯してしまった自分には、想像も付かない領分なのだ。

あまりにも巨大な力と力のぶつかり合い。それはこの世界では禁忌のものなのだろう。

だが、それが許容できないという狭量なことは言いたくない。蹂躪されてしまうのが嫌ならば、より強い力を身につければよいのだ。この目の前の男は実際にそうした。元

はただの人間だったにもかかわらずだ。ヒトの可能性とは無限だ。そう期待させてくれる。それは、この男が憧れる程に強く、そしてどこまでも人間だからなのだろう。

この闘いはカームの勝利で幕を閉じる。しかし、ソレをしてしまえば、彼は恐らく人間社会から排斥されるだろう。そのあまりにも強すぎる力によつて。そういう予感がするのだ。いや、もうそれは私の中では確実に起こりうる事だ。カキンは大国だ。その王に手を掛けたのなら、それは国家を敵に回す行為だからだ。そして、カームがいかにも隠蔽しようが、遅かれ早かれこのことは露呈する。敵がカキンだけじゃない事は、今の世界情勢を見れば確定しているし、何よりアンダーソンにすら裏切り者がいる始末だからだ。敵はこうなることも想定しているはずだ。そもそも、これがカームに対して行われた罠である可能性が高い。私が敵サイドで、この男を相手にするとしたならば、必ずそうする。つまり、単純な力量で勝てない相手に対して、社会的に追い詰める方策をとるということをだ。

……私は責任を取らなければならない。彼をそのように追い込んでしまったのは私の責任でもあるのだから。私はこのところ考えていた。私の生きる目標が達成された時に、どうするかを。そうなったら私は何のために生きようか。仲間を弔い、静かに生きるか？ それとも、新しい何かを見付けるか？ その時は答えが出なかった。しか

し、その答えが出るまでは、社会的に追い詰められる彼のフォローぐらいはできるだろう。私は生命を救われた。そして、私の悲願も叶えてくれるこの男に対して、何もしいほど腐っているつもりはない。もしそんな事したらパイロにも怒られてしまうだろう。だから、私はついていく。この男に、どこまでも。



「見つけた。では、クラピカ。すぐに終わらせる。少し席を外す」

物凄く見つかりにくいところに息を潜めていやがった。その強大すぎるオーラを消してまで。しかし残念だったな。念の為に植物と共に私のオーラも奴の身体に刺しておいたことが幸いした。早くしないと気付かれる。急ぐか。これはまた平行世界か？

少し曖昧でよく分からない。しかし、今度こそ確実に滅ぼしてやる。そう思い、飛ばうとした時にクラピカが待ったを掛けた。

「待て。微力ではあるが私も行きたい。奴の最期を確実にこの目で見たいんだ。我が儘かも知れないが、頼む」

そうか。それもそうだ。彼にそう言わせてしまった私も大概だった。彼に取ってはこれは悲願なのだ。配慮に欠けていたな。

「……そうだな。私が悪かった。では、一緒に行こう。決着を付けに」

彼の手を取り、私は奴の潜む平行世界へと飛び出した。



飛んでみると、そこは平行世界とは思えないような異空間だった。まず、平行世界とは以前いた世界とはなんら遜色が無いはずだ。しかし、ここは明らかにおかしい。全体的に暗く、そして廃墟のような様相を呈している。なんなんだここは。しかし、いたな。以前邂逅したときと同じように、玉座の影に隠れていた。

……なんだこれは？

「ヒューツ。ヒューツ……。グ、グゾが……。もうビツゲやがっだガ……」

あの植物と半ば融合したかのような状態で、奴はいた。おかしい。あの幻覚は初期の頃とは言え、私でも克服するのに1週間以上掛かったやつだ。しかも私の力で強化されている。その系統の能力がない者には脱出不可能な程に強力なのは間違いないはず……。

「何故正気を取り戻している。お前の能力か？」

「イウワゲねーだろうが……。バガが」

「カーム。君の能力は強力だ。奴自身が地力で解除したとは考えにくい。だとすれば、強力な能力者が解除したか、もしくは何らかのシステムが働いている」

「システム？」

「ここに来る前にカキンについて調べた。王族は王位継承権を巡って争う。簡単に言えば殺し合いで王を決める。そんなシステムを採用しながら族滅しないなどは普通有り得ない。強力な念能力でのシステムが働いている可能性が高い」

「……だとすれば……」

「ああ。カームの力を破る程の強力なシステムだ」

「……………チツ。やはりゴロジどぐべきだつだガ。まあいい。いでヨ」

奴の目の前に漆黒のオーラが立ち上り、形を為す。それは人面の壺であった。そしてその壺が目を開いてこちらを見ている。

「でメエのデバンだ…『壺中卵』よ、オレにぢガラをよごせ！」

奴はそう言いながら壺の中に手を入れた。その瞬間、壺から大量の怨念に近い力の塊が溢れ出す！

ザザザザザザ……

蟲の大群を思わせる音を発して奴の身体に力が纏わりつく。ただでさえ大きかった奴の力は、最早想像を絶するレベルまで到達していた。黒い霧は奴の身体に浸透し、やがて全てが吸収される。現れたのは……。

「……ふう。よお、クソつたれのゴミ共。殺してやるぞ」

私の影響が完全に消されている。完全な形で奴が復活を遂げていた。それだけでは
ない。そのオーラも私に迫る。強烈すぎるオーラはクラピカにとっては毒にしかなら
ない。クラピカには聖光気でガードを張る。

恐らく奴は願ったのだろう。私を倒せるレベルまで強くなるように。

だが、その程度で私を倒そうなどと笑止。カタをつけよう。最終ラウンドだ。



なんだコレは。人智を超えるレベルではあったが、ここまで酷いと最早笑えてくる。こんな……こんなオーラは直視しただけで危ない。古の神々は、目にしただけで発狂したり、塩の柱になったりという伝承があるが、その理由が心から理解できた。大きすぎる力はちっぽけな人間にとつて毒にしかならないのだ。私が無事なのはカームが私に防御壁を張ってくれるおかげだからだ。何か力になれるかと思つたが、大間違いだつた。

恐らく、カキンの王家の秘密はあの壺なのだ。ソレは古の時代から王家を支えてきたものだ。そして、力を永い年月を重ねて積み重ねてきた。その集大成があつた男！そして、緊急事態に陥つてなりふり構わずにその力を全て費やしている。それは、ヒトの力を超越し、神に至る。

だが、カームもまた怪物。これまで彼の真の意味での全力は見てこなかった。いや、彼が見せなかった。我々に配慮して。『聖光気』ですら、その力を極力抑えたものだった。会長と闘っていたときでさえ。旅団と闘ったときでさえ。

その、神に等しいほどの巨大な力の塊は、やがて凝縮して眩く発光する衣服と化した。それは、『救世主』が身につけると言われる『気鋼闘衣』だ。もう、常識的な念戦闘で

はない。これから始まるのは神話の闘い。

私は見届けるしか方法がないのだ。

………両者動かない。何故だ？

「カーム……何故動かない？」

「いや、もう始まっている」

「は？」

チエリードニヒの方を見ると、脂汗を流して表情を歪めている。いったい何が起きて
いるか……

「奴も私も特殊な能力を発動させては打ち消しているところだ。まあ、私は自動で打ち消されるけどね。……やはり生半可な能力では無理か。ならば、これだな」

まったく理解できないが、彼らは既に攻防を行っていたらしい。おそらく私には理解

すらできないのだろう。カームが決めると宣言したのち、右手をかざすと、そこには光り輝く火が生まれた。それはただの火ではない。始まりの火とはこのようなものなのだろうと思わせるような火だった。

「お前は、これに耐えられない。なぜならば、これはお前などより上位の生命体、神に等しい存在の力だからだ」

次の瞬間には、奴がその火で全身を焼かれていた。絶叫しながら燃やされるがままとなっている。そして、カームはただそれをじつと見ていた。それは普段の表情ではなく、どこか機械的で冷たいものだった。

しばらく燃えていた奴は、完全に燃え尽き、黒い炭の塊と化す。あつという間だった。しかし、カームの表情は険しい。よく見ると、その炭の塊は微かに蠢いていた。さらによく見ると、オーラもまだまだ健在だ。まだ息があるというのか!?! あのような状態になつてまで！

「お……………おおお……………」

「これでもまだ、死なないとはな……。だが、流石に堪えたようだ。引導を渡そう」

今度はカームから白い雷が迸る。そして、その塊にぶつかっただかと思つくと、綺麗にその場から消滅した。その黒いオーラもろとも。また別の世界に消えただけじゃないのか？

「安心していい。奴は完全に消滅した」

その言葉にほつとする。しかし、次の言葉でその気持ちが引き締まる。

「だが、まだだ」

奴が消滅したはずの場所からひび割れた人面壺が出現した。それはもう見るからにボロボロで、今にも壊れそうだ。

「これは……」

「そう。これが諸悪の根源。この王族を支えてきた悪魔。その正体はおそらく暗黒大陸の厄災だろう」

「!!」

「欲望の共依存……言い得て妙だな。こいつは国家と共依存を永い年月行ってきたのだろう。それももう終わりだ」

再びカームがその壺に雷をぶつけると、壺は苦悶の呻き声を挙げながら消えていった。その姿を人型に変えながら。

「終わった……か」

「ああ。さて、帰ろう」

カームが「聖光気」を弱めながら眩くと、廃墟と思わしき場所から元の部屋に戻ってきた。しかし、周囲一帯に警戒音が鳴っている。

「さて、我々も随分長居してしまった。そろそろいいこうか。気になる反応があちこちで出ている」

彼はそう言うと、私の手を取った。これからその気になる場所へと向かうのだろう。

だが、飛ぶ直前、私は彼が呟いた一言が気になった。

「五大厄災アイ……こいつは別個体。ならば封じられた奴も存在する……か。厄介だな」

133、奮闘

もうすぐで、オレの夢は叶う。それが、幸福へと繋がる。そう。彼らの手を借りさえすれば。

そう思っていた。そう、思っていたんだ。

彼らが、オレを幸福に導くために、その尻尾を俺の頭へと突き刺そうと構える。先ほどのオレは、それを恐らく幸せそうな間抜けヅラで見ていたんだろう。他の奴らを見ても分かる通り、彼らは脳に電極のような尻尾を埋め込む。それでオレ達は幸せな夢

を見るのだ。

彼ら、いや、奴等だ。こいつらは悪質極まりない生物だ。無差別に電波をまき散らし、人々を誘惑する。それは抗いがたい幸福の夢。そして人々はおびき寄せられ、永劫の時を奴らの榮養として過ごすこととなる。その生命と引き換えに。

オレもその一人だった。まんまと怪電波に引き寄せられ、その挙句、奴等の本拠地まで来ちまった。奴等はその電波を流すための電気を必要とするのだろう。そして、できるだけ多くの人々に電波をまき散らすために、この電波塔を本拠地に選んでいたんだ。基本的には一人一匹。だが、奴らはネズミ算式に増える。いや、ネズミどころじゃないぐらいに増える。街一つ分の人口以上ぐらいは余裕で存在するだろう。それで繁殖する。無限ループだ。情けないことに、オレもその電波にやられた一人だ。言い訳するなら、よつぼどの精神力の強さがなければ抗うことなどできないんだ。アレにはそれほど魅力がある。生命を引き換えにしてもいいってほどの。これは念能力者とかカンケーねエ。誰しもがやられるほどの強さだ。恐ろしい事に。

では、なぜオレがこんなに冷静に解説しているかつて？

オレもさつきは実際にやられる直前だったよ。あと少しで脳に電極をぶつ刺されて、

チューチューエネルギーを吸われる寸前だった。オレなんかは特に美味だっただろう。一般人よりオーラ強いしな。で、そんなオレを待っていたのは一際大きい個体だ。群れの中でも強いやつかな。多分。

で、まんまと人生捧げるつもりで来たオレを、待ち構えていた奴は尻尾の電極を構える。オレは先ほども言ったが相当な間抜けツラをしていたんだろう。そのまま行けば、普通にぶっ刺さってゲームオーバーだ。だが、結果が違った。その電極が振り下ろされ、オレの頭に刺さる直前、オレは何をしたと思う？

ガードしたんだ。無意識に。

オーラを瞬時に頭に《凝》で集め、メスでそれを切り払った。奴はどうやら動揺しているような様子だったが、やってるオレ自身もびつくりした。なぜだ、とな。

そして、その直後、瞬時に悟った。嵌められた、と。

オーラを頭を集めることで、ピンク色に染まった頭が徐々にクリアになる。

すべては幻想。すべては妄想。まやかしだったんだ。

オレだけが残されたのは、運良く勉強するためにオーラで頭をガードしていたからだっただけだ。無意識に奴等の怪電波を弾いてた。普通はそんなことしないから、どう足掻いてもアウトなわけだ。実際に普通に戻した瞬間からオレは囚われちゃった。

そして、あの決定的な瞬間に無意識のうちにガードしたのは、オレが恐ろしく過酷な戦闘経験を積み重ねていたからに他ならない。どんな攻撃にも、無意識でも《凝》してガードする癖が染みついちゃったからだ。こればかりは癩だがディアナに感謝しなきゃなんねーな。

そして今、奴等の巢の中心地にいた俺は、四方八方から電極で狙われる羽目になった。まだまだ混乱した頭であの攻撃をかわし続けられたのは奇跡というほかない。今は、電波塔の上へ上へと逃げていく。だが、先ほど言った通り、恐ろしい数の奴等が存在している。この電波塔を埋め尽くし、地上にあふれるほどだ。もと来た道は完全に塞がれた。

オレには分かる。あの電極が刺さった瞬間アウトだということが。奴らは排気口や排水溝、エアダクト、果ては便所の中にまで潜んでやがる。そして、徐々に徐々にオレを追い詰めている。なんて狡猾な野郎だ。単なるネズミの姿しやがって。そして、ガードしてるとはいえ、例の甘い幻想は常にオレを苛む。

もう、自分の足に何べんメスを刺したか分からねえ。気を抜くと持つてかれる。流石敵の本拠地だぜ。とにかく逃げなきや話にならねえのに、オレは逃げ場をどんどん失っていく。

そんなオレのモチベーションは、ただ、至る所に埋め尽くされたミイラどもの仲間入りをしたくねえ。それだけだ。

夢に逃げるのは結構だ。夢の世界は楽しくて最高なんだろうな。しかし、オレはこんな理不尽な世界で頑張りたいんだ。この世界は理不尽で、理不尽極まりない世界だからこそ美しい。

夢に逃げるってことは、ズリセンこいてんのと何が違うってんだ！ オレの夢はそんなのと同じじゃねえし、オレが今までやってきた努力への侮辱だ。許せねえ。

……だからと言って、この状況を改善する兆しもねえ。ようやく辿り着いた、奴らのいない塔のテツペン近くにある管理者詰め所のトコにバリケード張ってこもってるが、明らかに奴等にここに誘導されたな。奴らが扉の外側に大量に詰め掛けるのなんて、《円》を使わなくても分かる。じきにここへ殺到するだろう。参った。詰めみだ。

さて……このメスにも随分世話になった。奴等の攻撃を切り払ったしな。オレはあんな糞ネズミの栄養になりながらミイラになるのはごめんだ。そうなったら潔くくたばった方がいい。これをくれたカームには悪いがな……。ん？ カーム……。？ なんかオレ、大事なことを忘れてるような……。

っ!! 不味い。奴等が入ってくる！ バリケードも壊れる寸前だ。クソッ。何か手が思いついたような気がするが時間がねえ。奴等もここで決める気だろう。多少は躲せても、四方八方から襲い掛かれたら無理だ。ゲームオーバーが近い。

思い出せ！ 何が!! どんな手段がある!?

さつきはこのメスを見て何か浮かんだんだ。このメスは銀製の、カーム特製の武器で、G・Iで特別に犬のウ○コから作ってくれたやつだ。元がウン○なのは衛生的にいただけねえが、切れ味、耐久性ともに抜群で重宝している。さつきの攻防も、これがあつたからこそ切り抜けられたぐらいだ。アイツは何でもできる。今頃この世界規模のテロに対処してるんだろう。アイツならなんとかできるはずだ。

今ここは大規模生物災害の真っ最中だ。アイツが動かないなんてありえねえ。なら

ば来るはずだ。もし何らかの要因で気づいてない場合でも、気づくきっかけさえあれば……

……思い出した！ カームだ!! うまくいけばアイツをここに呼べるはずだ！

いいか、糞ネズミ共！ オレは絶対にあきらめねえからな!!



その瞬間、メキメキと音を立てていた扉がついに破られた。大量の黒い塊が侵入してくる。それぞれが一様に赤い眼をレオリオに向け、その尻尾を向けている。彼らが見たものは、一本のメスを両手で目の前に持ち、必死に祈りをささげている一人の人間の姿だった。そして、その人間は、メスを下げながら戦闘態勢になった。それは幸福を受け

入れる顔でも、絶望に染まった顔でもなかった。

「へっ！ 絶体絶命だなあ！ アイツも流石にすぐには来れないか！！ だが、せつかく希望が見えたんだ。とことんやってやろうじゃねエか！！ オレがくたばるのが先か、アイツが来るのが先か、試してみようぜ！！ 付き合ってくれや、糞ネズミ！！」



必死に耐えていた。快楽に負けそうになる自分に。だが、もう保たない。数の暴力にはやはり勝てなかった。だが、ささやかながらも抵抗はした。その結果がこれだ。今、体中を電極で刺され、快楽を脳に向かつて流し込まれている。頭は死守したし、しているが、もうこれ以上は無理だ。あまりの強烈さに身体は飛び跳ね、下半身からは際限な

く液体を巻き散らす。

……死ぬ。

もう、いつそ身を任せてしまったらどれほど楽だろうか。だが、それはできねえ。それだけはできないんだ。それは、オレのちっぽけなヒトとしてのプライドだ。こんなネズミごときにいいようにされるなんざ、馬鹿げてる。そうだろ？ だから、最後までやりきるんだ。……たとえアイツが来なくとも。

その時、オレはオレの中で何かガチリと嵌るような、そんな感覚を味わった。それは、自分自身の究極の欲望に抵抗している自分へのご褒美にも思えた。この極限状態ですら、オレは成長している。その事実にかすんだ頭の中で嬉しくなる。

「おら……！ 来い、よ……糞ネズミ……まだ、まだオレは……元気だ、ぜ……」

……

……

…

ある瞬間、ネズミどもがピタツとその動きを止めた。それは俺にも感じていた。そして、同時に「何か」が来たことを。

……やはり、来てくれたか。オレは賭けに勝つたようだ。ギャンブルには疎いが、こういう賭けは昔から強いんだ、オレは。もう、目も見えない。だが、感じる。カームと…クラピカか？ なぜここに？

まあ、いい。来てくれたんだ。オレはそれで報われる。オレの身体から電極が抜ける感触がした。意外と深く撃ち込まれていやがった。くそつ、あと、少しだつてのに…意識が…もう、保てない……………。



「……………うっ……………」

まばゆい光が瞼を閉じていたはずの虹彩に刺さる。それにより、オレは目を覚ます。……なんだ、この感情は。爽快感と…喪失感？　まるで大事なものを落としてしまったかのような……それでいてすがすがしい気分のような……。

そして、気づく。オレを二人の人間がのぞき込んでいたことに。

「カーム……と、クラピカか」

「目が覚めたな。気分はどうだ？」

そう言うのは、カームⅡアンダーソン、オレの師匠兼“救世主”というトンデモ人物。よかつたぜ。コイツが来てくれたんならもう安心だ。中々来てくれねえから、またオレへの試練かと思っちゃまった。許せ。

「危なかったようだな。しかし、お前はこの状況下で最後まで抵抗していたのか……」

クラピカが割り込む。なんでおめーがそこにいるんだよ。眼探しは終わったのか？

「すさまじい奮闘ぶりだったようだな。周囲一帯の人々はすべて全滅だ。にもかかわらず君は生き残っていた。誇っていい。アレは少なくとも厄災には変わりないのだから。間に合って本当に良かった」

カームがそう告げる。当たり前だぜ。オレは、レオリオIIパラダイナイト。医者として理不尽な世の中を変えてやるんだからな。言葉を発するのもおつくうだ。だが、勝ち残ったぞ。

ただ、今回ばかりは死ぬほどきつかった。いや、死ぬよりきつかったかもしれねえ。まだ身体が動かねえ。だが、だからこそ、こいつらには悪いが、一言言わせてもらう。渾身の恨みつらみを込めて。

「おせーんだよ！ 来るのが！」

134、人飼いの獣

それは、厄災の中では比較的穏当な見た目をしていた。他のが酷過ぎるといふ説もあるが、それは置いておく。ともかく、見た目はただの尾が変わった形をしている人間の子供サイズの黒いネズミだ。

戦闘力という点のみに絞れば念能力者には敵わない。一般人よりやや強い、といった所だろう。

だが、この生物が危険生物を超えて厄災と呼ばれるのにはそれなりの理由がある。それは、その生物的な特性にあった。

まず、彼らは集団で生息している。

そして、ある条件が揃えば彼らは爆発的に繁殖する。その繁殖力はキメラアントの比ではない程と言え、どれぐらいか想像がつくだろうか。

危険生物評価リストで言えば、文句なしのA（活動が始まると凄まじい早さで爆発的に繁殖する）である。

そして、その活動が始まる条件というのが

① 餌となる生命体を確保している。

② 電気のある場所にいる。

この2つである。①は、生物としては当然だろう。しかし、②は、この生物の独特の生態によるものである。元は暗黒大陸の沿岸北東部に位置する山脈を根城として、数万単位で生息していたこの生物は、普段はひっそりと暮らしていた。何故そんな険しい場所なのかといえ、ここには水一滴で凄まじい電力を発する【無尽石】というお宝の鉱脈が存在するからである。

彼らは、ここでその電気力を借りて狩りを行う。具体的には、その電力を使用して、他の生命体の本能に訴えかける欲望を刺激するような電波を山脈一帯に発する。そうして獲物をおびき寄せる事ができるのだ。この電波はかなり強力で、ある一定以上の水

準の生物などは抗う事が難しい。また、例のゴキブリの様に種族単位の念能力となっている為、生物全体が強力な暗黒大陸でもそれなりに引つかかってしまう。

また、この生物は非常に死にくい。どんな過酷な環境でも適応して生きていくことができるし、飢えや病氣、怪我にも非常に強い。生命体としての生存能力が非常にほどこに強いのだ。極限状態に陥っても休眠することやり過ぎすことさえできる。だからこそ、獲物がほぼいない状態でも生き延びることができるし、ひとたび活動が活発になれば恐ろしいほどに繁殖することができるのだ。

とはいえ、元の生息地は場所が場所であり、しかもその能力が効かない天敵等も存在する為、彼らは適度に間引きされており、その生態系は保たれていた。

彼らは、獲物を確保すると、その脳に尾の部分に該当する針を刺し、直接快樂を提供する。この時点で、掛かった獲物はもう逃れられない。そうなった時点で彼らと獲物は一方的な共生関係になるのだ。

獲物は哀れにも快樂を際限なく提供され、そこで発生する脳内の電波や麻薬物質等を彼らは摂取する。足りない栄養は獲物がギリギリ死なない程度に提供する。本当にギリギリな為、獲物の生物的な機能はほぼ停止する。要は、脳が健康ならば良いのだ。その為、獲物は身体が縮み、ミイラのごとき姿へと変貌してしまう。獲物にとってみれば、

ただひたすら快樂を享受している為、気にならないのかもしれないが。そうして、獲物の寿命分、彼らは栄養を吸い取る事ができる。当然、獲物にとってはそれは生物としての終焉を意味する。

獲物を確保した個体は、他の個体との繁殖を精力的に繰り返し、爆発的に繁殖する事ができる。だが滅多に獲物は来ず、天敵も多いこの場所ではそれぐらいしないと絶滅してしまう。それは彼らにとっては生存の為の必然であり、ただ純粹な生殖活動なのだ。

厄災としては珍しく人間的な悪意の無い生命体とも言えるだろう。

だが、彼らが『人飼い』と呼ばれ、厄災に数えられる理由はまた別にある。まず、彼らにとって、〃ヒト〃とは極上の獲物である。寿命が長く、脳が大きいために欲望も広く、深い。

何よりも、ヒトは彼らの誘惑に簡単に引つかかってしまう程弱い。よつほどの強個体で無ければ、彼らの電波には抗えない。そして、それは人類の1%にも満たない。

つまり、ヒトは、彼らには勝てないのだ。その欲望の深さと弱さ故に。

近年、無尽石を確保する為に暗黒大量に來た調査隊も、その99.9%が彼らの餌食となつた事からそれが窺えるであろう。

この脅威を回避する方法は、単純だが脳に届く電波をシャットアウトすること。しかし、頭部だけでなく全身を隈なく覆わねば意味が無い。電波は身体を通して届くからだ。

その点、念能力者はまだ少しは抵抗できる。しかし、電波自体が強すぎる為、結局は同じである。レオリオの場合、本人が気付いていた様に勉強の為に頭部に集中して《擬》を行つていたからこそ、影響をシャットアウト出来ていた。それこそが、この恐ろしい罠を回避する唯一の術である。

又は、欲望を克服する事が出来る精神力を持つ事も、回避する条件ではある。しかし、それが出来るヒトがどれだけいるというのか。故に、この生物を確保する事は非常に危険極まりない。少しでも条件が揃つてその電波が漏れてしまえば、彼らは如何様にもヒトを操る事が可能だからである。

彼らが門番によつてこの世界に齎された時、人類は多大な犠牲を払いながら、番を別棟に隔離した上で冷凍睡眠保存する事で漸く封印していた。彼らはヒトにとつては正しく天敵足り得るのである。

仮に。万が一この生物が人間社会に出現してしまった場合どうなるか。これまで彼らの被害に遭った者の亡骸が見つかった例が幾つかある。しかし、それは全て単体の作業である。それが繁殖できる条件を満たして居なかつた事が幸いした。

だが、ひとたび番がそのまま人間社会に放出されるとなると話は変わってくる。現代は電気が至る場所に溢れている。そして、都市部には獲物に溢れている。

彼らは、早速都市部の電力が集まる所に潜み、電波を垂れ流す。獲物はいれ食い状態だ。下手すれば秒で捕まる。これに対処しようとするならば、初動でどちらかを始末するしかなかつた。だが、彼らに近づくだけで大抵の人は抵抗できない為、それすら難しい。

そして条件が整い、活動を開始した彼らは爆発的に繁殖する。文字通りネズミ算式に。いや、それ以上の早さで。

何故なら、彼らの犠牲者は1匹につき1人。群れの中で1匹でも獲物を捕まえた個体がいいたら繁殖スピードが上がる彼らだが、都市部は入れ食い状態であり全ての個体が入る捕まえる事ができ、更に余りすらある。よって彼らは天文学的に増殖する。1週間で都市人口すら超え、国家の人口に届く程に。こうなってしまうえば人類に対抗手段は無き

に等しい。例え核兵器でその一帯を攻撃出来たとしても、何匹かは取り逃がすだろう。一時確かに活動は弱まるが、再び繁殖を再開してしまい元の木阿弥だ。

つまり正しく人類滅亡の引き金となる生物災害であり、人類はその殆どが彼らに飼われる事になるだろう。

彼らは「生命と快樂の等価交換」、その名を「人飼いの獣パプ」という。



「あゝほんとに死ぬかと思つたぜ」

殺風景で締め切られた部屋の一室。ここは先ほどまでいた部屋である。その中でいそいそと着替えつつレオリオがぼやく。事実瀕死の状態だったから無理もない。ついさつきまで容姿はシワシワの老人のような姿になり、その短髪と髭も真っ白に成り果て

ていた。奴等を排除したのち慌てて治療を施し、“奇跡”も施して漸く元に戻った。これは被害者達の治療に苦勞しそうだ。

「しかし、関係あるかわからんが、レオリオ。以前と比べてオーラが…何というか、薄くなっていないか？」

「お？ ……そーいえばそうだな。フツーに出してるはずんだけどよ。なんでだ？」
「……自分ですら気づかなかったのか？」

そう。そうなのだ。レオリオはクラピカが指摘した通り、オーラが薄くなっているように見える。これには私も見たときに驚愕したものだ。だがしかし、私はその原因を知っている。冷静になってレオリオの話聞き、私なりに推測をして納得がいった。というか、それ以外考えられない。

「薄くなっているんじゃない。見えなくなっているだけだ」

「見えなくなってる？ どういうことだ」

「恐らくだが、レオリオはこの厄災との攻防の中で、生命を賭けた濃厚な闘いを行った。ここまではいいが、それは戦闘とはかけ離れたもの、いわば、自分との闘いでもあった。

強烈な欲望や快楽に自らの理性で抗う。常人なら到底無理なことを、レオリオは死の直前まで行っていた。それは、一種の修行に似る」

「……!? まて、カーム。それはまさか!」

「そう。『解脱』の第一歩。オーラが自然に溶けている状態だ」

「な……! オレはそんな大層なことはしてないぞ……?」

「結果的にそうなった、ということだ。それほどに強烈な誘惑だったのだろうが、自らの力で乗り切ると決めた夢を芯に据え、すさまじい精神力と克己心で乗り切ったからな。もうレオリオは一段階上の領域に足を踏み入れたかもしれん。恐らく、『浸透勁』も以前とは比べ物にならないほど使えるようになってはいるはずだし、そもその医療の能力も格段に向上しているだろう。……もともと、『浸透勁』に一番素養があつたのはレオリオだ。こうなる可能性としては充分あり得る」

「……こんな煩惱にまみれたような男が」

「シヨック受けてんじやねーよ! 別にいいだろが!! ……だが、オレはそんな人間じゃねえつてのも分からなくはねーけどな」

「卑下することはない。それこそが人間だからな。そもそも悟りを開く者とは人一倍煩惱にまみれているものだそうだ。師匠の受け売りだけどね。だからこそ、そこからの解脱を願う。長い年月をかけて、様々な欲望、誘惑を振り切つてな。だが、今回はそれを

濃縮したような体験を強制的に受けてしまった。通常の修行では絶対に体験できない、生命を賭けた拷問に等しいほどの。常人ならば耐えきれんほどのな。だが、レオリオはそれを乗り切ったことで一段階ステージが上がったということだ」

私の解説を聞きながら、レオリオは自分のオーラを確認している。ある程度動かしてみても納得いかなかったようだ。

「…………ん。結構いい感じだな！ よく分かんねえけど、これでより正確な治療が出来るうだぜ。…………とところで、厄災はどうなったんだ？ この部屋近辺にはいないみたいだが」

レオリオが至極当然な質問をしてくる。むしろもっと早く聞かれると思ったんだがな。そこで、私はこれまでの経緯を彼に説明した――



「おいつ！ カーム!! コイツらは!？」

必死に確保したレオリオを介抱しながらクラピカが叫ぶ。彼は即座の頭への《凝》を言わなくても行っていた。本当に優秀な弟子だ。私と言えば、四方八方から襲ってくるネズミを消し飛ばしながら答える。

「恐らく、だが、コイツが第3のテロ。つまり厄災だ」

「このネズミの大群がか!？」

「言うまでもないが、《凝》は切らさないようにな。あつという間に取り込まれるぞ……と。コイツらも馬鹿じゃないようだ。敵わないと見て撤退を始めた。……よし、聖光気」で結界を張った。もう安心していいぞ」

「……ふーっ。次から次へと厄介だな……ん？ カーム！ レオリオがマズい!! 何とか出来るか!？」

「分かつてる。早急に対処しよう。……しかし、レオリオも良くここまで耐え切ったものだ。普通は無理だぞ」

.....

レオリオの容態がひと段落したのを見計らって漸く安心したのか、クラピカが尋ねてくる。

「……カーム。何回も質問を済まないが、結局どういう状況なんだ？」

確かにクラピカには説明していなかったな。今世界規模で起きている事を。その始まりから掻い摘んで彼に説明した。

「……そして、さっきのが世界中にばら撒かれた厄災の一つ。特徴から考えると、恐らくパブだろう」

「何というか……とんでもない事になっていたんだな……。私がやられている間に、コレはどんな厄災なんだ？」

「そうだな。コイツの異名は『命と快楽の等価交換』『人飼いの獣』だ。先程の攻撃で

気づいたと思うが、コイツらは人間を電波を発して誘惑し、脳からエネルギーを頂く事で繁殖する、といった所だろう」

「……それぐらいなら正直厄災、という程は無いと思うが……」

「考えても見る。クラピカは咄嗟に違和感を覚えて“凝”で防いだが、そんな事を出来る者がどれだけいる？」

「……！」

「しかも、だ。結界の外には数えきれない程の奴等で埋め尽くされてる。恐らくこの街全体がそうだろう。厄災発生からそんなに日数が経ってないのにこれだ。ネズミ算式というのが可愛いぐらいの繁殖力！ このペースなら1ヶ月で国レベル。半年を待たずに全世界へと拡散するだろうな。しかも正体は子供サイズのネズミ。どこにでも潜り込めるだろうから根絶は困難を極めるだろう」

「……恐ろしいな。正しく世界の危機というわけか」

「そして、一度誘惑されてしまえば振り切るのも困難だ。今のレオリオの様に抵抗できる人間はほばいまい。というか、抵抗出来たのは奇跡だ。捕まれば最後。ミイラの様になり、切り離れたとしても社会復帰は絶望的。仮に身体が元に戻ったとしても、一度知った快楽からは抜け出せない。自殺者が多発するだろうな」

「聞けば聞く程絶望的だな……どうするんだ？」

「それなんだが……ん？　もうすぐレオリオが目覚めるな。話はその後でしょう」



「——というわけさ。で、これから私はこの脅威に対処しようと思う」

説明を終えた時、レオリオは神妙な顔をして考えこんでいた。そして顔を上げた。

「なあ。そういうえば、国やハンター協会は何故動いていないんだ？　オレが知ってる限り、5日前ぐらいから何にも動きが無かったように見えたぞ？」

……そう言えばそうだ。何故だ？　これだけの大災害ならば動かない方がおかしい。というか、この状況ならブリオンの時の様にとくに大量破壊兵器が使用されてもおかしくない。情報統制されてる？　いや、このネットワーク時代に有り得ないだろう。電波を支配されてるからか？　それにしてもハンター協会が動いていないのが気に掛かる。

早速会長やジン達に電話するも繋がらない。チツ。やはりこの一帯の電波は制圧されてる、か。

最悪の想像が頭をよぎる。

これすら陽動であるという、恐ろしい事実。

「カーム……恐らく敵は我々に対処させる事で時間稼ぎをしていると思われる。急がねば状況はどんどん悪化していくだろう」

クラピカも同じ結論に至ったか。そうだろうな。だが、これで敵の目的が明確になった。

奴等の狙いは私だ。

正確には、私をどうにか排除する為に動いている、という所か。だが、癪ではあるが

この現状を放置もできない。私に出来る事は、出来るだけ速やかに、この厄災を滅ぼす事だ。

「それが分かった上で敵の思惑に乗るしかないところが非常に厄介だ。いわば、全人類を人質に取られているような状況だからな。だが、やるしかない」

「方法は？」

「この厄災の最大の特徴は、防ぎ難い巨大な電波を発するところだ。種族全体でな。一族が増えれば増えるほどにその電波は強力になる。普通は手遅れだな」

「駄目じゃねーか！」

「最後まで聞け。奴らが電波ネットワークを使用して獲物を確保するというのなら、奴ら自身もこのネットワークを使っている可能性が高い。というか、絶対使っているだろう。そこを利用する」

「と、言うのと？」

「私が偽の電波をできる限り広範囲で流す。こいつらに届くようにな。早速始める」

暗黒大陸で鍛えられた私にとって、この程度ならば可能だ。『聖光気』をフルパワーで使用する事で可能になる。……前から思ったが、明確に人々を救うというシチュエー

シヨンのときに、この「聖光氣」はより強力になる。不可能はないほどの奇跡を起こせるのもそのためだ。これも「救世主」としての力、ということなのだろう。

……準備が整った。では、行くぞ！



ソレは、街一つを完全に支配し、そしてかつてないほどに繁殖していた。もはや街には動くものはおらず、無人の家屋には至る所に彼らの姿があった。そして、ソレにつなされた犠牲者も。ソレは刻一刻と繁殖を繰り返し、やがては新しい住処へと足を運ぶ。ここは天国だ。天敵もない。電力も豊富で、遮るものは何もない。微かに飛び交う電波などは超強力な電波によって打ち消され、人類のネットワークはズタズタであり、人々は抵抗もできず捕まってゆく。もはや、ソレが地上に溢れてしまうことは火を見る

より明らかとなった。

何体かは獲物を捕り逃したが、それは誤差である。矮小な生命体の特殊個体がいかに足掻こうが、所詮数の暴力には勝てないのだ。全世界を埋め尽くし、産んで増やして地に満ちる。それが生命体としての義務であり、どの生物にも共通する存在理由なのだ。つまり生存競争だ。負けたものは駆逐される。いや、この生物にとつては負けたものは等しく餌だ。自分たちが地に満ちる為に、人を家畜のように飼いなす。

それは皮肉にも人間が家畜を飼うのと理由は似る。人間は、自分たちがやっている事と同じようにソレに飼われ、生命を利用される。むしろ、快楽を与えている時点で人間よりも優しいと言えるかもしれない。

彼らは人間のように情緒が豊かではない。だが、そんなものは必要ない。それは、多様性を排除して種族特性を重視した彼らの戦略である。その成果が、もうすぐ成就する。人類との生存競争に勝利するという形で。今は街一つ分でしかないが、じきに大陸全体を支配するだろう。

そして、全てが終われば、彼らは自ら間引きを行う。レミングスのように。そして、この恐ろしいネズミに支配された世界へと変貌するのだ。

だが、ソレは分かっていなかった。多様性を排除するということは、突発的な事態への対応能力に欠けてしまうということに。ソレの種族特性として、環境適応能力が非常に高く、生物としては高いレベルで完成している為、分かっていなかった。人間の中に、バグのように天敵に等しい能力を持つものが存在することを。

“仲間”からの電波が流れる。獲物を確保した個体、まだ確保していない個体、いずれの個体もある場所へと集まるように、と。それは種族全体を通して発せられた物であり、彼らは抗う事が出来ない。それが流れるという事は種族が飽和状態になり、存続の危機に陥ったという事だからだ。

彼らは疑問を覚える。まだ充分に地に満ちていないのに何故だと。しかし、彼らは獣故に抵抗したり深く考える事が出来ない。何体かは反抗したが、抗えない程強力な電波の指令である為に結局は従う他なかった。

そして、始まりの電波塔まで集められる。これから彼らに待っているのは“間引き”だ。疑問も覚えず、抵抗もせずただ黙々と集結する。その数は億を軽く超える。

そして彼らはその赤い目で見た。眩い光を。これから行われるのは種族の繁栄の為

の儀式だ。彼らに表情があるならば、きっと満面の笑みを浮かべていただろう。

そう。全ては、種族の繁栄の為に――



凄まじい速さで膨大な数のネズミが集まってくる。街はネズミで埋め尽くされ、さながら黒い絨毯の様だ。カームはその中心にいる。

そして、その中心からネズミ共は溶けていく。初めから存在しなかったかのような様に。カームが言っていた。強力な壊毒を使うと。それは物理法則を超え、念能力すら超えた呪い。瞬く間に毒は広がり、ネズミが消えていく。彼らに繋がれたミイラを残して。

カームはそれらを「聖光気」で保護しながらネズミだけを消していった。だが数が数だ。ネズミも被害者も莫大な数である。

流石のカームも苦勞している様に見えた。

かなりの時間が経って、あれだけいたネズミは完全に姿を消した。カームはそれでも油断せずに電波を広範囲に飛ばしていたようだ。そして追加でちよこちよここと現れる何匹かのハグレを集めて消した所で漸く安心したらしい。

次のフェーズに移り始める。即ち、人々の救済だ。彼らはこの状態でも生きている。だが快樂の供給が絶たれた今、彼らに猶予はない。

何万人ではきかない恐ろしい数の犠牲者。彼らはどう見ても再起不能だ。どんな医療を行ったとしても。最早死んでいるに等しい。いや、死なせてあげた方がまだましな方だろう。だがそれは普通ならばだ。

カームは彼らに「聖光氣」を覆い、奇跡を与えた。次第に身体が元に戻り始める人々。だがその表情を見る限り、まだ足りない。彼らはすさまじい快樂を知ってしまった。麻薬よりもはるかに質の悪い、命すら惜しくないほどの快樂を。彼らはもう戻れないだろう。待っているのは絶望からの死だ。

そこでカームは何かを散布し始めた。それは霧状のオーラに乗ってすべての人々に行き渡り、やがて人々から苦悶の表情が抜け落ちた。そして人々の眼が正気に戻り始める。

その様子を遠くから2人は見ていた。何とも言えない表情で、ただ、見ていた。

「……なあ、クラピカ」

「言うな。言いたいことは分かっている」

「……だが、」

「お前の思っている通りだ。だから言葉にするな」

「……いや、それでも言わせてもらおうぜ。あの『力』は異常だ。あんな……あんな『力』はこの世界に存在しちやいけねえ。本人も、この世界にとつても。それに、あれほどの奇跡をノーリスクでやってるってことはどこかに歪みが生まれてるはずだ。それが今回の騒動の原因じゃねえか……ってオレは思う」

「……そうだとしたら、お前は どうするんだ？」

「……アイツは暗黒大陸から命からがら逃げ帰ってきた。ずっと帰りたいのに帰れず、それでも必死で足掻いて足掻いて漸く帰ってきたんだ。だが、その原動力となった家族には会えず、時代も200年以上経っていた……。本当はそんなアイツに、オレが

今思っていることを言いたくはない。言いたくはないが……だが、それでも言わなきゃならねえ。事が全て終わってオレが生き延びてたらな」

「私は行くぞ」

「!？」

「お前がカームに何を言うか当ててやろうか? 『暗黒大陸に去れ』だろうか? 自分が嫌われてもいいという覚悟でな」

「……」

「私は彼に生命を助けられた。そして、仲間の全ての仇を討つことができた。もう私には何も無い。何も無いんだ。恐らくカームはこれからお前の思っている通りの事になるだろう。全てが終われば、この世界に彼の居場所はなくなってしまうだろう。ならば、あの『救世主』のそばにいたい。少しでも無聊の慰めになるように。それが私が彼にできる恩返しというものだ。それはあの婚約者2人も同じだろうがな。旅の道連れは多い方がいい」

「そうか……覚悟はできてるんだな?」

「そうだ。で、お前は嫌われ役になる、と?」

「ああ。そしてオレは残る。都合が良いかもしれないねえがこの世界を立て直さなきゃならねえし、今回の被害は甚大だろうからな。微力ながらも少しでも人々を救ってやる。そ

れがオレの使命だと思つてる」

「お前の意志は理解した。だがそれも全てが終わつてからだ。それまでは絶対に口にす
るな」

「分かつてるつて。それぐらいな。冗談抜きで世界の危機だ。救えるのはアイツしかい
ねえ。そんなアイツを少しでも揺らさないようにオレたちは微力ながらもサポート
に徹することが、今出来ることだ」

フツと笑いながらクラピカが言葉を返す。

「だから言つただろう。言葉にするな、とな。さて、もう終わりそうだ。迎えに行こう。
われらが『救世主』を」

彼らは『奇跡』が行われている中、それぞれの意志を固めていた。『救世主』の通る
道。衆生を救う装置の結末。その悲劇をできるだけ軽減できるように、その決意を胸に
秘めながら。

135、蟻の王

「これで、大規模な電波障害も解消されたな。早速電話してみるか」

「なあ、〃彼ら〃はいいのか？」

「私は恩を売るつもりはないし、むしろ知られたくない。それに、今の現状だと関わっている時間をもつたいたない。障害が取り除かれればそれでいいだろう……む、不在、か」

「会長か？ 他のメンバーはどうだ？」

「今かけている……つと、駄目か。いよいよ本部の方も怪しくなってきたな……」

「最悪敵の手に落ちたか、または戦闘中ということも考えられる。カームの着信を取らないなど、それぐらいの事態が発生していると捉えてもいいだろうな」

まあ、そうなるだろうな。ハンター協会にも襲撃があつたとみていいだろう。私がアイジエン大陸に出かけ、時間を食っている間に電撃的に、だ。恐らく各国の首脳の方も

襲撃があったかもしれない。それがこの対応なしの現状につながっている可能性がある。まあカキンについては私のせいだが。

さて、どうしたものか……ん？ 折り返し!?

《もしもし？ ジンさん!?!》

《はあ、はあ……ようやく繋がったか！ よく聞け！ 時間がねえ!! とりあえずこつちの心配はすんな！ まだ大丈夫だ！ お前はまずキメラアントを何とかしろ!! 必ずだ！ 先にアイツらを救え!! わかったか!!》

《ちよ、ちよつと！ どういうことですか!? みなさん無事ですか!?!》

《わりーが説明してる時間がねえんだ！ いいか!? すぐ行け！ 絶対に取りこぼすなよ?!》

《……分かりました。ではそうしましょう。あなたなら心配ないでしょうが、ご武運を。対処を終えたらすぐにそちらに向かいます》

《ああ、待つてるぜ……！ おい、ジジイ!! 早くしろ！ もたねえぞ!!》

《分かつとるわい!! カーム！ 心配すんじゃねえ。ワシらも後1週間はくたばらねえからな！ それまでにケリつけてさっさとここに来い!!》

遠くから聞こえる破壊音。激しい戦闘音が響き渡る。1週間は盛りすぎだろジジイ！ という声を最後に爆発音がして通話が切れた。どう考えても修羅場のようだ。クソツ！ 今すぐにでも行きたいが、直通のアイテムを渡していない。一番の近道は、NGLにいるはずのビスケたちのところに飛んで、そこから急行する事か。

思った以上に余裕がなかった。だが、何とかするしかない。もう私は取りこぼしはごめんだ。

「聞いていたと思うが、猶予が殆ど無さそうだ。私はこれからNGLに飛ぶ。行けるか？」

2人はほぼ同時に頷く。少しでも戦力がいた方がいいし、私のそばにいてももらった方が助かる。早速2人と手をつなぎ、ビスケに渡した特注の指輪を探る……あった。これだ。

蟲ども。今の私は余裕がない。だから貴様らは文字通り最速で潰れてもらおうぞ!!



ブウンツ…

「!! な、これは?！」

転移した直後に違和感が生じる。ここは異空間。だが、その内部はかなりボロボロだ。誰かの念能力だろうが、普通はこうはならない。術者によつぽどの精神的な圧がかかっているとみていい。

そして、そこにはボロボロではあるが、1人を除く討伐隊の面々が揃っていた。

皆が皆、一様に沈痛な表情を浮かべている。

「ビスケ……ゴンは……ゴンはどうした……？」



——少し時は遡る——

「ハアツ……ハアツ……！ くっ……強い……！」

【ハイドアンドシイック四次元マンション】の一番広い部屋に彼らはいた。討伐隊の面々と、そして王直属護

衛軍の1人、ネフェルピトーが。

彼らはそれぞれがそれぞれに驚愕していた。討伐隊は敵のあまりの強さと進化の速さに。ネフェルピトーは、この人間たちの強さに。

「だけど……やれる！ 勝てない相手じゃない!!」

黒髪の少年、ゴンが吼える。オーラがまた増大した。そして彼が吼えることで落ち込みかけていた士気が盛り返す。この少年はこの集団で3番目に強い。パワーは下手すればこのメンバー最強の可能性がある。それほどの筋密度である。その一撃は、まとも食らえばネフェルピトーでも多少のダメージを受けるほどに。

「ああ……ディアナに比べたら……屁でもねーぜ!!」

金髪の少年、キルアも呼応する。彼は速い！ テレブシコーラ【黒子無想】を使用した自分に比肩する

ほどに！

「かつかつか!! おめーらも漸く理解したか！ それでこそ、念使いつてもんよ!」

パイプを持った大柄のコイツは、実力としてはほかの面々より一段と劣る。だが、厄介さはこの中でも1と2位を争う大柄な人間。このオーラから作られる煙はいかようにも変化し、まわりついたり囲まれたりする。厄介極まりない。コイツのせいで実力的にははるかに劣る面々に決定打を与えられず、苦戦させられている。念とは、これほどまでに奥が深いものと感心させられる。

「……私は以前言ったことを撤回したいですね。これはちよつと想像以上です。ですが、ここまで来たら何とかするしかないでしょう」

この眼鏡もパイプのデカブツと同じ程度の実力派だ。特にボクを閉じ込めたこの異空間！ 一気に孤立無援の状態にさせられた。恐らく兵隊蟻も同様の手口で始末されていたんだろう。どうやったらこんな能力が人間から生まれるのか。それに、あの両手から生み出される異空間への扉、あれは不味い。如何なる防御も通用しないほどの危険さがある。恐らくボクもまともに食らえばヤバイ。それほどだ。食らわないけど。

「……強い。でも、何とかかなりそう……！」

この小さいメスは、オーラと何かよくわからないものをたくさん集めて鎧にしている。そのため動きに制限がかかっているけど、防御力という点では非常に高い。人間のくせにボクら並みの硬さを誇る。そもそもこいつがこの中でナンバー2だ。訳が分からない。チビ人間のくせに。あの紙(?)が厄介極まりないし、いちいち対処に気を遣う。

「これほどとはな……ジンさん、恨むぜ……!」

この長髪も結構な使い手。単体だったら楽しく戦えるんだろうと思わずにはいられない。多彩な武器を順番に使うから相手にするのは楽しい。でも、今の状態だとすごくうっとおしい。

「さあ! 油断するんじゃないわさ!! 削って削って削りまくる!!! 耐久レースの始まりよ!」

コイツが人間共のリーダー。最早人間か? ってほどの強さ。てか、ボクらに迫る

オーラ量つてヤバくない？ さすがに強さはまだボクが上だ。でも、それをカバーする力量が半端ない。さっきもコイツにいいの貰っちゃった。ボクもお返ししたけど。そう、本当に、単純に強い。

マズい……ほんの軽い気持ちで遊ぶつもりだったのに、まんまと敵の罠に嵌っちゃった。それでも食い破る自信があったんだけどな。こんなトップクラスの人間が集まってるとは思わなかった。

さっきから割とガチで闘ってるのに、突破口が見えない。そろそろ本気中の本気でやらなきゃ、本当に削られる！

◆
【黒子無想】^{テレブシコーラ}！ 限界を超えて舞え!!

「最、初は、グー!!」

キイイイイン……

「ジャン、ケン、グー!!!」

「ガハツ!! 糞、糞、離せエエエエエエ!!!」

ドゴオツ!!!

「グボア!」

「そっち行った!!」

「よっしゃ!! 行くわよ」

パシッ! ドゴオツ!!!

「ガアアツ!!」

「今だっ! やれえツ!!!」

「「「おおおおおツ!!!」」」

.....

.....

.....

「ヒューツ、ヒューツ……」

激闘の末、マンションの広い部屋の中央にボロボロで瀕死のキメラアントが一体い

た。それはもう死に掛けていた。

だが、怪物を相手にした彼らもまた満身創痍だった。むしろ、死者がいないことこそが奇跡とも言えた。

「後少し、漸く……まできたわよ……トドメを」

そう言うビスケもボロボロだった。他の面々も似たようなものだ。オーラはほぼ枯渇し、身体中に大小の傷がある。カイトなどは左腕を千切られている。

一時はネフェルピトリーの執念の反撃でパーティー全滅の危機に陥ったが、弟子たちがカームから貰ったリングを食べ、回復&戦闘力を更に向上させるといふ裏技を使って立て直した。

そして今、戦闘は佳境に入る。残るはトドメをさす事。

ノヴが両手を合わせ、外の空間への扉を開く。【窓を開く者】だ。当てるのは難しいが、この技を喰らえば如何に固いキメラアントだろうが問答無用で喰らった箇所を切り離せる。

そして、今なら当てられる。

「フオローを」

「任せろ」

モラウの【監獄ロツク】スモークージュエルがネフェルピトーを覆う。なすがままに拘束されるネフェルピトー。先程までは捕まえる事が出来なかった。だが弱った今、それが可能となった。

ノヴが煙で完全に覆われて見えなくなった上から【窓を開く者】スックリームを頭部と思わしき部位に重ねる。

「閉じろ！」

「……やったか!？」

「待て。煙をどかすぞ」

モラウの煙が晴れてゆく。メンバーは勝利を確信していた。だが、油断するような彼らではない。そんな人物は真っ先に殺されていただろう。

徐々に頭になるその姿は、頭部が切断されている姿…のはずだった。

そこには、2人分のシルエットがあつた。

「！！？」

ぐったりしているネフェルピトを脇に抱え、悠然と部屋の中央に立つ人影。それは

「ヒソカ!!」

「やあ?? 久しぶり♣?」

「バカな…! 貴様、何処から入って来た!!」

ノヴが混乱している。当然だ。本来ならばノヴが許可しなければここには入る事が出来ないからだ。

ノヴだけではない。他のメンバーも混乱の極みだった。何故、今。何故ここに。

「ヒソカ！ ソイツを渡せ!!」

いち早くゴンがヒソカに啖呵をきる。

「ん〜◆？ それは出来ない相談だなあ◆？ ま、折角育てたボクの気分的に◆？」

「……貴方もこのテロの一員って事かしら？」

「それはヒ・ミ・ツ?？」

いつもの小馬鹿にするような、それでいて不気味な調子で彼は告げる。それは何故か有無を言わせぬ絶対という圧を持った言霊として彼らに響く。

「……ツふざけるな!! ならば無理矢理にでも渡してもらおう！」

「! ゴン! 止めなさいッ!!」

ビスケがヒソカに凶兆を感じ取り、ゴンを制止するも、ゴンは筋肉を収縮させてヒソカへ特攻する。

だが、その勢いが不自然に弱まっていく。ゴンも気づいて焦りながらも、その姿勢が何故か崩せない。自分だけ動きがスローになってしまっている。

「うくん…合格! 昔のボクだったら喜んで相手にしてたなあ?? でも、ダメ♠?」
ヒソカが空いている手を向ける。すると、ゴンはそのまま空中で停止してしまった。

「経験も積んだ◆? 心技体も完成しつつある♣? 何より将来性もある♠? で
もね、まだまだ修羅場が足りないなあ??」

ゆっくり歩きながらゴンに近づくヒソカ。周りの者は彼の発する不吉を煮詰めた様なオーラから、迂闊に手を出せずにいた。

「くっ…離せ…!」

「こういう時に無策で突っ込んだじゃダメだよ?? 勉強になったね♣? じゃ、お休み♣」

そこで、彼はその本性を解放した。今闘ったキメラアントなど歯牙にも掛けぬ程の莫大なオーラ。しかも、様々な怨念の如き黒いオーラである為に、その圧は能力者でも死にかねない。そのオーラはどんな人間にも似ず、例えるならドギツイ原色をぐちゃぐちゃに混ぜて、所々にキツイ色が覗く黒という感じだ。

至近距離で受けようものなら死ぬか廃人確定になるほどの強烈な波動がゴンを襲い、それに触れた周囲の者は凄まじい恐怖を覚える。カームを知っているビスケはかろうじて立っていられる程度。ディアナを知っているキルアとカルトでさえ恐怖に支配されてその場からの離脱を行うことすらできなかった。他の討伐隊は、そのあまりの強烈さにその場で嘔吐をし、倒れ伏して震えることしかできなかった。

だが、ゴンは違った。

「これ……ぐらい……！　いいから……ソイツを……渡せ……！」

「!!　キミ、何で無事なの？　どういうことかな？　……ふんふん、キミは……なるほど、これはビックリ◆？　じゃあ、キミに決めようかな♣？　あの娘たちはマーキング強いからバレちゃうし♣？　キミはボクも好みだからね??　どれ、その武器貸してごらん?」

「な、何を……！」

ヒソカは、何か納得した様子でゴンのガントレットを抜き取ると、その場に放り投げる。そして、何をしたかは分からないが、ゴンはその場で瞬時に眠りについた。それを小脇に抱えると

「さて、お邪魔したね◆？　バイバイ◆？　あ、そうそう◆？　『彼』に伝えといてよ、**【王】**はとづくに産まれたよってさ??　ボクに会いたかったら、アレを倒しておいでってね??　　じゃあ今度こそバイバイ♣？」

そう告げて、ヒソカは、どこから取り出したかわからないような大き目の布で自分を覆い、その布が落ちた時には忽然と姿を消していた。



「ヒソカめ……！ それで、ゴンはそのまま連れ去られたと」

「ええ。面目ない……」

「いや、仕方ない。奴はこの事態に深く関わっている事がこれではつきりした。しかし、ゴンを連れ去るとはな……一体何を考えているんだ」

「ゴン……」

キルアが落ち込んでる。無理もない。だが、ビスケやカルトじゃなくてホツとしている自分に嫌気がさす。しかし、今の彼らが手も足も出ないとは、一体どういう事だろう。

最初会った時でさえ人類最強クラスの強さではあった。だが、もうそんなレベルではない。奴ならばほんのちよつとの気まぐれで全員始末する事も可能だった筈だ。だが、それをしなかった事には何か意味がある。レオリオと私で傷の回復をしつつ考える。彼らの精神的なダメージは大きい。ノヴさんなどは黒髪が白く変化している。これほどの力を一体どうやって身につけたのか。

一刻も早く奴を見つけないければ。だが、手掛かりが無い。

「……奴の思惑が読みづらい。ゴンを殺さずに連れて行った事も不可解だ。カームを狙っている事は確かだが。それで、どうする?」

クラピカが尋ねる。

「……癪だが、思惑に乗るしかない。奴の言った通りにキメラアントの王が産まれて仕舞えばこれも甚大な被害が発生する。食い止めなければならぬ。キルア、ゴンは必ず救う。それまでこらえてくれ」

「……………」

「兄さん……………」

そうなれば、急ぐしかないな。速やかに蟲を潰し、ヒソカを搜索する。それが今出来る事ならば、早くやらねば。



「アレ？　ここは……………ボクって…何してたっけ？」

「ネフェルピトー殿、ようやくお戻りでしたか！　…如何なされました？」

「ああ…うん。あのさ、ボクってどっかに行くって言ってた？」

「さて……………？　何か『確かめてくる』とおっしゃられてから外には出られましたが…。いえ、そんなことより、お急ぎください！　王が、王がお産まれになりました!!」

「な……！　すぐ行く！！」

なんて事だ！　大失態だ。霞がかつた頭を振り払いながら後悔の念に包まれる。これ程の巨大な圧力、紛れもなく我等が待ち望んでいた王の誕生だ。何故気付かなかつた。

その広間に王は居た。2人の護衛軍は頭を下げている。王に詰問されていたようで、身体のうちここに傷をこさえていた。そんな2人に申し訳なさを覚えながらも、離れた場所に跪く。

「遅いぞ、ピトーー！！」

「早く王の御前へ……！」

2人からの怒りを感じ取る。だが、辛うじて弁明の場は与えてくれるようだ。

「ほう……貴様が護衛軍の最後の一人か。近う寄れ」

「はっ!!」

内心盛大に冷や汗を流しながら王の前で跪き、首を垂れる。自分でも良く分からないままにネフェルピトーは言われるがままに従う。

どう考えても自分が悪い。最早殺されても仕方ないと覚悟しながら。その頃になって漸く記憶が戻り出した。そうだ！自分は闘っていた。最初は腕試しのつもりだったが思った以上に敵が手強く、決死の覚悟で撃退したのだ。

「さて……貴様の言い分を聞こうか。答えるがよい」

凄まじいプレッシャーを放ちながら王が告げる。それはピトーをもつてさえも物理的な圧力で動けなくなる程の。少しでも気に入らなければ自分は即処分されるだろう。

だがここにきて、ピトーはそれでもいいと思っていた。

自分の様な役立たずは、この先王の障害となり得る。だから、ありのままを伝えると

心に決めた。例え処断されようとも。

「どうした？　早く言え」

王のプレッシャーが更に増す。これ以上沈黙を続けければ死は確実だろう。死ぬ事は良い。だがこれだけは伝えなければならぬ。

「王よ、申し訳ありません。私の名はネフェルピトー。直属護衛軍が一人。私は敵と闘っております」

「!!」

「……」

王のオーラが変化する。興味を持ったようだ。他二人は驚いている。それも当然だろう。何も告げずに出てしまったから。

王が続きを促している。

「敵は我等の餌である人間、その精鋭です。初めは余裕で撃退出来るはずでしたが、思った以上に敵が強く、かろうじて撃退という結果に終わりました」

「な……！！」

「ほう？ 人間とはあの餌の事か？」

「仰る通りです。そして私は戦闘の余波から一時的に記憶すら曖昧になっていました。もしかしたら私の記憶をいじられている可能性があります」

「ふむ……？ 貴様はその辺の凡百には見えぬが。どれ、確かめてみよう」

ズギヤツ!!!

言うが否や、王の尾が全力をもってピトーの顔面を殴りつける。ピトーは3メートル程後方に吹っ飛ばされた。だが、その顔は血を流しているが健在だった。

「……殺す気で殴ったのだから。やはりそこそこは強いか。プフ」

「はっ！」

「貴様は此奴を調べろ。敵とやらに何かされていないかな。ユピー」

「はっ！」

「此奴の言う事が正しければ敵は中々の者らしい。腹が減っては戦も出来ぬ。余は取り調べの後、此奴を喰う。準備せよ」

「仰せのままに…」

蝶の羽が生えた異形であるシャウアップフが力なくうなだれたネフェルピトーを拘束する。ピトーは抵抗するそぶりすら見せない。当然だ。王の命令は絶対であるがゆえに。

むしろピトーの表情は晴れやかだった。こんな役立たずの自分ですら王の役に立てると。一目見て分かった。この王は世界を支配するに足る王だ。その一助になれるのであればこれほど喜ばしいことはない。そして、ただ処刑されるならともかく、これから王の一部となれるのだ。

ピトーは王の寛大な処分に感激していた。その目からは涙すら流れていた。それはこれ以上役に立てない悲しさでもあり、それ以上に王の糧となれることへの感謝の涙であった。

別室へ連れていくシャウアップフも、この役立たずについて恨みつらみはあるが、それ以上にこの同僚を羨ましいと感じていた。だからこそ、徹底的に取り調べなければならぬ。王が口にするものに僅かでも瑕疵があつてはならぬ。

シャウアップフは、自分の能力を徹底的にこの元同僚に使用する事にためらいはなかつ

た。

「くくく……余の覇道を世に示すにはちようど良い。人間の精鋭とやら。貴様らを喰らい尽くして我が糧にする栄誉を与えてやろう」

136、人間の力

王が産まれると、基本的には一般の蟻は機能を失う。彼らの存在意義は女王から王が産まれるまでの警護、及び餌の調達である。そしてキメラアントが次代に移る時、彼らは解放される。それぞれがそれぞれを生き、繁殖することを許されるのだ。

それは、生物としての多様性を重視した結果であり、万が一王が身罷つてもキメラアントという種族が絶滅しない為の措置である。

そのため、普通であれば解放される筈であつたが、それは特別な場合を除く。

外敵の脅威である。

強烈な外敵が存在する場合、キメラアントは団結する。王の意思決定を受けた護衛軍

から防備の強化を言い渡され、蟻たちは有無を言わさず防衛体制に入った。例えどんな敵が来ようとも、文字通り蟻の入る隙間すら無いように。

時折り、運良く呼ばれる蟻がいて、王が住まう広間に呼び出され、2度と帰つてこない事があつたが、誰も逆らおうという者は居なかつた。

王とはそれ程の存在感を発しており、絶対に敵う相手では無いと骨身に沁みて理解していたからだ。

彼らがいかに人間の要素を多く取り入れていたとしても、反逆を考える事すら出来ない。蟲の王にはそれ程の支配力があつた。

力こそは絶対なのだ。

最強故に王。シンプルにして絶対の生物の法則である。それが、種族特性としてより強固に補強されている。故に、強い。彼らが集団で進撃を開始した場合、小国などは軽く落ちるだろう。そもその肉体の性能が人間とは段違いに強く、更に人間の狡猾さ、獯猛さも持つ彼らは、最早地上の最大脅威となり得る。仮に撃退出来たとしても多大な犠牲者が出る事は間違いない。

彼ら蟲にとっては、人間などただのエサに過ぎないのだから。

「なあ、本当にいるのか？」

「分らないな。だが、ピトー殿は王に喰われた所を見るとありえない話ではない」

蟻塚の中層付近にいるライオン型と鳥型のキメラアントが、防備をチエックしながら話し合っている。ライオン型のキメラアント、ハギヤは敵についてはその存在を認知してはいた。部下がこれまで軒並みにやられていたからだ。

だが、あのネフェルピトーを撃退するほどに強力な人間が居るといのがどうしても懐疑的であった。

「そんなヤバい敵ならとつくに攻めて来てんじやねエのか？ オレにはどうも胡散臭い
としか思えんぞ」

「……何か事情があるか、それともカウンターに特化したタイプか。いずれにせよ、防備を固める事は間違いではあるまい。それに、我々には王がいる」

「ああ……アレに地上で勝てる奴がいるのかってぐらいヤバイよな。ピトー殿を喰って

からよりヤバくなってるからな」

「口を慎め。あの方こそが正統な我々の王だ。確かに我々とは次元が違う恐ろしさかもしれないが、並び立つ者がいないからこそそうなるのは当然の事だろう」

「フン。とつとと」敵を撃退して巢分けしてもらいたいモンだな。ストレス半端ねえぜ。お前んとこも何匹か喰われただろ？」

「師団長級を喰わないだけまだ理性的だろう。それに、我々もそろそろ動くだろうしな」「ふくん。なぜ分かる？」

「ピトー殿を撃退出来る戦力が恐らく最高戦力だ。王もあの気性ならただ待つなどしないだろう。防備を固めたら打って出る可能性が高い。そこに敵は仕掛けて来るはずだ」

「なるほど。お前も結構考えてんだな」

「お前が考え無しなだけだ。あんまり適当にやっていると、喰われるぞ」

「そりや怖えエ。さ、見回りの続きすつか」

「オレも空から見回る。ではまたな」

2匹はそこで離れる。コルトは巢の周りを見回り、ハギヤは中を見回って下級兵の監督だ。

それが、2匹の生死を分けた。



カツ!!

凄まじいオーラが展開された。恐るべき規模で。そのあまりの巨大さに、蟻達は動く事を許されなかった。

「な……!!」

「そ、そんな……!? そんな馬鹿な……!!」

兵士蟻はそれだけで恐慌状態に陥る。

「王よ!! これは……!」

「何という……これほどの『力』が存在するのか……」

上位の3匹も似たようなものだった。まさか、これ程の戦力だったとは、と。

展開されたオーラに害は無い。むしろ非常にクリアなオーラであった。敵意も何も無い。ただ観察するかのようないメージ。それは《円》。ただし、規模の桁が違った。最大の《円》を展開できたピトーですら2キロ四方が限界だった。王、メルエムすらその1・5倍〜2倍ぐらいだ。しかし、これは優にその10倍は大きい。

そのオーラはすぐに引つ込む。だが、先程の《円》が衝撃的すぎて、まともに思考が働かない。

コルトは見た。その引っ込んだ《円》の方向から莫大なエネルギーが収束している事を。コルトは震えていた。今までは王こそが地上最強だと思っていた。産みの母の扱いや自分含む仲間達への扱いなど不満な点もあるが、それでもその「力」は認めざるを得ない。

だが、これは……これは何だ？

神とやらが存在するならば、正にこれだろう。それ程の圧倒的な「力」!!
初めから勝てる筈が無かったのだ。我々には。

そのエネルギーはドンドン凝縮してゆく。それが意味する事は、誰の目から見ても明らかだった。

漸くコルトの頭に「全滅」というワードが浮かぶ。マズい。

「全員、逃げろ———!!!」

コルトはその前世も含む生涯で出した事もないような、在らん限りの大声で叫ぶ。だが、全ては遅すぎた。

直後に、巢の面積全てを覆うほどの超特大のオーラの奔流が超速で飛んで来た。コルトは必死に回避に専念したが、翼の一部と右脚を持っていかれた。

僅かに触れただけでこれだ。見回りで一緒に飛んでいた部下達は悲鳴をあげるヒマもなく飲み込まれ、消滅した。

後方を気にかける余裕すらない。

フラフラと片方の翼で何とかバランスをとり、地面に衝突して死亡する事は避けられ
たが、ダメージは甚大だ。

だが、その時になって漸く巢の方を見ることが出来た。

女王……そして王は…

ついでに。NGLの荒野が広がる。だが、あるべき物が無い。そこには、自然以外の何も無くな
つていた。



その《円》を感じた時、シャウアプフは絶望した。あまりにもレベルが違いすぎる。王が成長したとしてもしかするとこの領域まで届くかもしれない。

だが、今は無理だ。

同僚のモントウトウユピーと顔を合わせる。その顔は焦燥に満ちていた。最善は何か。刹那の判断を下す。我々が盾になり、何とか王を逃す！ 奇しくも同じ結論に至ったらしい。

瞬時の了解にて、ユピーは巢の一部を全力で破壊する。奇跡的に現在地が天井に近い事が幸いした。上空に青空が見える。

「王よ。失礼します！」

プフが王の手を取り、一気に屋上まで飛び上がる。王はなすがまま沈黙し、されるがままになっていた。ユピーも続けて屋上まで駆け上がる。

その時、3匹は見た。遙か彼方から恐ろしい勢いで飛んでくるオーラの奔流を。それは、巢全体を覆って余りある巨大な破壊の奔流。それが直撃するとどうなるかは火を見るより明らかだった。

瞬時にプフは飛び上がる。その範囲外まで。しかし、ユピーはまだ飛べない。

「ユピー!! 掴まれ!!!」

王が叫び、その声に反応してユピーもジャンプする。王の伸ばした尾に辛うじて捕まる事が出来た。しかし、僅かに足りなかった。

ジュツ!

ユピーの下半身が巻き込まれて消し飛ぶ。彼は自分の有様を呆然と見ている事しか出来なかった。

奔流は僅か2秒程しか続かなかった。だが、その2秒で充分だった。巢のあった場所は跡形すらなく消し飛び、その衝撃によつて遙か地平線まで抉られていた。

シャウアップが続けて飛ぶ気配を見せた。それは圧倒的な危機感によるものだ。少しでもこの敵から離れなければならない。我らが王をお守りする為に！

だが、それを止めた者がいた。それは他ならぬ王自身だった。

「……………もうよい」

その言葉を聞いてシャウアップは耳を疑った。王は何を言っているのかと。

「！ 何を仰るのです！ 今はここから少しでも離れなければ!!」

「無駄だ」

「ダメです!! もう時間が無い! 次がいつ来るか分かりませぬ!!」
「無駄だと言っている! 2度言わすな!!」

王が怒気を発する。これ以上は捕まえた手を振り解きかねない。仕方なく動きを止める。

「王よ……何故です…」

「我々は奴に既に捕捉されている。恐らく、これが『人間の王』だろう。余は王として、逃げながら殺されるなど耐えられぬ」

「王……」

「それと、これからは余の事は王ではなく、メルエムと呼べ。それが母から賜りし我が名である」

「おお……! ではメルエム様、このまま逃げましょう」

「ならん。敵に背を向けるなど余には許容できぬ。これは命令だ」

「……………」

「余を降ろせ。人間の王を待つ。奴も王なれば、こうする事で必ず姿を見せるだろう」

王は半ば諦めている。王はその矜持を守らざるを得ない。何故なら王は種の全てを託された生まれながらの王者だからだ。ここで背を向けるなどはその矜持が絶対に許さないだろう。いかに敵が強大であろうとも。シャウアップフはそう感じていた。だが、この場で逆らった所で状況は好転しない。彼も予感はしていた。そのまま逃げた所で確実に殺されるだろうという予感が。唯一の生き残りの道は、その敵との交渉のみ。彼が導き出した答えは奇しくも王と同じであった。その理由は全くの逆方向であったが。

「……………畏まりました……………メルエム様」

何とかそこで生き残るための交渉をせねばならない。例え自分達が不興を買って死のうとも。プフもユピーも同じ覚悟を密かに固めていた。



「あれから逃れたか。まあ殆どの蟻は潰した。後は王だ。先に行つてくる。濟まないが、2、3匹ち漏らしがいる。そいつらを駆除してくれ。拡散しないうちに」

「「……………」」

「言いたい事は分かるが、後でだ。よろしく頼む。……キルア」

「……………何？」

「一匹速い奴がいる。チーター型のキメラアントだ。今必死に9時の方向に逃げている。私が行つてもいいが、王を優先したい。アレを素早く始末出来るのはお前だけだ。頼まれてくれるか？」

「……………」

キルアはそのそりと起き上がると同時にアーマーを展開する。その表情は昏く、暗殺者に相応しいものだった。

「後から迎えに行く」

去り際に伝える声を聞いたか聞いていないか。彼は瞬時に消え去り、ソレが逃げたと
思わしき方向へと向かった。

「……大丈夫かしら？」

「彼にもマーカーを打ち込んである。それが敵へと導くだろうし、私も捕捉できる。問題ない」

「そう……」

「では、また後程」

カームから脚の筋肉を引き絞る音がする。それは例えるならダイヤモンドを更に圧縮するようなものであり、見てる側からも想像もつかない様な暴力的な威力を予感させるものであった。

ドウツ！

周囲の地面がまるでクレーターの様に凹み、彼の姿は消え去った。後に残された面々、ビスケ、カルト、レオリオ、クラピカに加えて、ノヴ、モラウ、カイトはしばらく沈黙する事しか出来なかつた。それが解除されてまともな思考が帰ってきた頃、一人
が呟く。

「……なんなんだアレは。あのヒソカとかいう奴もそうだが……人間……なのか？」

「そうよ。カイトだっけ？ あの人は紛れもなく人間よ」

「ここまで圧倒的だと笑いが込み上げてくるぜ。オレらは正しく彼が来るまでの足止めだった……つてコトか」

「……まだ本気じゃない」

「「は？」」

「ば……馬鹿な……お嬢ちゃん、更にその先があるつてのわか!?」

「カルトの言った通りだ。まだまだ彼はあんなものじゃない」

「そうだな。本気の本気になればあの規模じゃ済まないだろうな」

「そんな……そんな力は最早……」

「ヒソカもそうだけど、今、この世界で起きているテロ、それは彼を追い詰める為の物よ。恐らくね。だつて彼に勝てる者は最早存在しないもの。『あの』ヒソカですら……」

「仮に彼がその気になれば世界は容易く滅びるでしょうね」

「何故そんな人物が今まで隠れていたんだ……」

「彼もまた人間だ。人間である以上、繋がりを目指す。だからこそ彼は全力で自重していたんだろう。ひとたびこの力が漏れたなら、もうこの世界で穏当には生きていけない

からな」

「「……………」」

「だからこそ、今回のテロは痛い。全てが終わった後、彼の居場所はますます少なくなるでしょうね。それが敵の狙いでしようけど。私は少なくとも彼の味方でありたいわ」

「僕もね」

「オレ達だつてそうさ。なあクラピカ」

「ああ。彼はどこまでいっても善良な人間だからな。そんな人物が排斥されるなど、あつてはならない事だ」

「……………しかし、そうはいかない。そうでしょう?」

「ノヴと同じ意見だ。そうはいかねエだろうな。それを考えると今から頭が痛エゼ」

「恐らく世界中が大混乱に陥る。そして、彼の獲得権争奪戦の始まりだ。又は積極的な暗殺狙いが続くな。彼を確保して戦力に出来れば、世界を支配するのと同義だからな」

「……………全くその通り。でも、今は考えても仕方ない。私もカルトもその可能性は理解しているからこそ、そうなった場合の覚悟は決めてるの。だから、今は目の前に集中し」

「そうだな。私もレオリオも覚悟は出来ている。だから安心してほしい。我々ももう行く。結末を見届けに」

そして漸く彼らは走り出す。結末の決まった闘いを見届けに。カイトは何気なくふと空を見上げた。

空はこれから起きる事を暗示するかのような、不吉を孕んだ曇り空だった。



キルアは凄まじいスピードで駆けていた。それは、今まで出だしたことの無い最高速のスピードであり、自身に渦巻くどうしようも無い怒りがそうさせていた。恐怖は克服したはずだった。兄の呪いとも言える針を抜いて、念能力者としての実力も高め、怯懦による見極めの早さも克服した。

しかし、あのをいたらくは何だ。親友の危機の際に恐怖に怯え、何もできなかったではないか。なにが親友だ。結局自分が可愛いだけじゃないか。

自分が自分を許せない。結局ゴンを見殺しにしてしまった。理性では絶対に敵わないと理解はしていた。だが、そういう問題では無いのだ。それをしてしまったら、オレはゴンの親友を名乗る資格が無い。そう自分を責め続けるキルアは、ある決意を固めていた。

結果がどうあれ、ゴンから離れよう。自分はゴンの友として相応しくない、と。

そうでなければ自分が許せない。イルミから言われた事がリフレインする。自分は所詮カームの庇護の元で友達ごっこをしていただけだった。それが証明されてしまった。今だって、カームがいつの間にか自分のオーラに混ぜ込ませていたオーラが導いている。確実に、敵の元へ。

いかにそれが規格外な事なのかは充分すぎるぐらい分かっている。いや、恐らくは自分に頼まずとも彼なら遠隔で始末出来たのだ。王に対処しながらでも。彼は今の自分の感情を読み取り、少しでもガス抜きをさせる為にこの「依頼」をしてきたという事が理解出来てしまった。それが堪らなく悔しい。彼がいるからこそこれまで無事に過ごせてきたのだ。少し離れただけでこのザマならば、もう駄目だろう。

その苛つきが彼を駆り立てる。カームが指定した敵は確かに速い。恐らくスピードならば自分と同等ぐらいに。このままでは追いつかない。だが、それで諦めるならば最早自分に価値は無い。念とは想いの力でもある。必ず始末するといふ彼の決意に呼応して、彼の肉体とオーラは雷の力を最大限以上に発揮しつつあり、雷速と変わらないほどのスピードが出せるようになっていった。それに伴い、敵との距離が縮まる。少なくとも、この「依頼」ぐらいは完了しなければならぬ。少なくとも、それだけは。

彼らと別れた後の事を考える。しかし、上手く考えがまとまらない。こういう時はやるべき事に集中するべきだ。少なくとも、ゴンを救うまでは。

もうすぐ接敵する。



何なんだ!! 一体何なんだアレは!!! 運良く外でサボっていて本当に良かった。そうでなければ他の奴等と一緒に消滅するところだった……!! ラッキーだった。ラッキーだった。

チーター型のキメラアント、ゾートウは自らの幸運を噛みしめながら森を疾走^{はし}る。あの様子なら王すらただでは済まないだろう。あんな餌に過ぎなかった人間が、あれほどの力を持っているなど誰が想定できようか。最近では肉団子としてしか認識していなかった人間が。

自分一匹ぐらいは見逃して欲しい。そのために少しでも目立たないようにオーラを抑えながら疾走する。最初はあの敵が迫ってくれば、命乞いをしてでも生き延びるつもりだった。だが、後から考えるとそれは恐らく叶わぬだろうということが分かった。他ならぬ自分たちは、人間の命乞いなど一顧だにしなかったからだ。ならば命乞いはバッドエンド直行だ。取るべき手段は二つ。徹底的に逃げ切るか、徹底的に抗戦するか。抗戦は最後の手段だ。どう考えても死亡フラグだ。ならば、逃げ切る。スピードには自信があるから。

!!!
オレはスピードキングだ!! 誰もオレを止められない!!!
このまま逃げ切つてやる

「ここは行き止まりだぜ」

急停止を強要される。

あろう事か自分の前に人間が現れて進路を塞ぐ。その事実にはチートウは驚愕する。

何故……何故追いつかれた!? スピードには自信があつたのに……そんな人間がいる

のか!?

頼みにしていたスピード。少なくともそれだけは負ける筈が無かったのに！ コイツは「あの」攻撃とは別個体。それはそのオーラで分かる。アレならばまだ納得は出来た。だが、自分達と変わらぬ程のオーラの間人が、人間如きが……！

「な……納得いかねエ!! なんでお前がオレの前にいる!!? 人間の分際で!!」

ズートウは吠える。彼のプライドは既に粉々になりつつあった。こんな人間の少年にしか見えない奴に、スピードを上回られるなどは悪夢としか言いようがない。その言葉に、やはり人間の少年の声で答えが来る。

「さあな。知ったこつちやねー。強いて言うならオレ、今機嫌悪いんだよね。だからじゃない?」

「はあ!?! あつ! 分かったぞ! お前、念能力なんかでワープして待ち伏せしただろ!! キタねー奴!!」

「うるせーなあ……試してみりゃいーじゃん」

いかにもダルそうに、不機嫌そうに吐き捨てられる。その挑発にいと簡単に乗ってしまうチートウ。

「あゝあゝっ!? 舐めやがって……お前、死んだぞ」

怒りに任せてオーラを展開する。念の技術的には未熟だが、その生物としてのポテンシャルによつて熟練と変わらぬ程の滑らかさ。恐らくは戦闘に於いてもそうだろう。だが、目の前の敵は一切動じている様子は無い。

「じゃ、早いところ終わらせようか。雑魚に時間とつてる暇ねーし」

その余りにもこちらを見下した発言に、チートウはブチツと言う音を自分の中で聞いた。

「死ねエツ!」

殺った! 爪を顔面に突き立てる、その0コンマ3秒まで相手は動いていない。やは

り単純な瞬発力やスピードならばこんな奴に負けるはずがない、さつきも変なワープとかで追いついたただけだ。このまま反応する間もなく殺してやる。だが確実に当たると確信した直前、不意に視界が揺れ、景色が歪む。

な、何だ？

何が起こった!? 無理矢理相手を見据える。まだ健在だ。クソが、よく分からないけどもう一度!

バチツ

「疾風迅雷」

今度は腹部にダメージ! 何だ? 一体オレは何を喰らってる!? 再び反撃をしようとしてピクリと動いた瞬間にまた衝撃が走る。

カウンターの。コイツからカウンターを貰ってる。その速度が速すぎる。見ると、奴の身体から電気が迸っている。間違いない、先程の謎の衝撃はこれだ!

だが、気づいたとてどうしようもない。短時間で数十発のカウンターを貰いまくり、あつという間にチートウはポロポロになってしまった。

凄まじい速さのカウンターだけに、そのダメージは軽く当てられたものでも半端ない威力と化している。

「な、何なんだよお前はッ!!」

「やっぱり堅いな。蟲だけに。もう少し強めにやるか」

キルアのオーラと電圧が上がる。

この瞬間、チートウは完全に抗戦する意欲を失ってしまった。

——このオレが完全に反応負けしてる！ 不味い、決めに来る！ だ、ダメだ……勝てない……逃げなきゃ！ 逃げなきゃ殺される！ と。

元から逃げ切る事が目標だった。元から逃げ切れればよいのだ。例え、今勝てなくても、生命を賭してでも逃げ切れれば勝ちだ！——

その思いが、彼に逃走を選択させた。

「う、うわああああ!!」

全力で別方向へと走り出す。今度こそ、追いつかれない程に速く！　すぐ後ろに奴が来ている気がする。ダメだ、もつとだ！　もつと速く、より速く！！　限界を超えたスピードで!!!

その想いが反映されて、更なるスピードが出始める。その速度はもう新幹線を超えて、チートウにも未知の領域へと突入する。

だが、彼はこれまで鍛えた事がない。元からその素養は既に人間と比べると隔絶しており、鍛える必要がなかったからだ。そんな彼が急に限界以上の出力を出そうとすればどうなるか。

ピシピシ、と外骨格のキチン質がそのスピードに耐えられずにひび割れ始める。

だが、止まる事など出来ない。何故なら、背後から感じるからだ。バチバチという音と共に、奴が、あの悪魔が付いてくる気配が。

それと同時にスピードを更に上げる。もう身体中にヒビが入り、ポロポロと外骨格が剥がれてゆくが、一向に距離が離れないどころか縮まっっていく。

思わず叫ぶ。

「なんでだよ!! なんでオレがスピードで負けるんだろツ!!!」

遂にキルアが隣に並ぶ。

「わかんねーかなあ…」

「お前がノロマだからさ」

「く、クソツタレーー!!!」

キルアがオーラを込めた手刀を一閃すると、ゼートウの頭は身体から離れ、やがて身体は木々に激突して粉々になった。キルアは徐々にスピードを落としてその頭を抱えたまま停止する。

「? ?」

視点の移動が激しく、何が起きたか分かってないチートウ。だが、ようやく自分が頭だけになってしまった事を理解した。

「や、やめ」

バチユツ！

凄まじい握力で碎かれた頭。結局彼は逃げ切る事すら出来なかった。彼とキルアの明暗を分けたのは、弛まぬ努力。どんな人間よりも才能と素養に勝り、それに胡座を掻いていたチートウは、地獄の様な研鑽を積み重ねてきたキルアには勝てなかった。力量も、スピードすらも。

「あく腹立つ。でもまあちよつとはスツキリしたかな。あつちはそろそろ終わるだろうし、戻るか」

137、人と蟻

「メルエム様……」

「案ずるな。奴は必ず来る」

メルエムには確信があるようだった。その根拠は、自分ならそうするという不確実なものであったが、それでもほぼ間違いないと言い切っていた。

護衛軍の2匹は冷や冷やしながら待つ。また例の攻撃が来たら、今度は追尾するタイプだったら……即座に動ける様に準備だけはしておこうと。その時――

ヒュオツ

風切音と共に腕が舞う。

刹那の出来事であった。視認も出来ぬ程の遠方から瞬時に物体が飛行してきて、それと共にシャウアプフの右腕が切断された。

「な……い！」

反応すら出来なかつた！ 自分達の背後にそれを成した者がいつの間にか立っていた。全身を黒い服のような鎧で覆い、悠然と後ろ向きで。

コンマー秒、全員がフリーズする。しかし、自分達の間合いの中に居るこの敵をこのまま放置は出来ない。瞬時に切り替え、プフは残った左腕で、ユピーは下半身をボコボコと再生させて反撃に移る。

コンマ2秒。黒い鎧が白い鎧に瞬間切り替わる。敵は後ろを向いたままだ。そのま

ま攻撃を当てる直前に2匹の腕が全て切り取られ、宙を舞う。そのまま地面にダイブする2匹。敵が振り向く。刹那の時間の筈なのに、何故かゆっくり見える。完全に振り向いた敵は、両手を上げてパンツと柏手を打つ。すると、起き上がって反撃しようとした2匹はゴキゴキという嫌な音をたてて、見えない力で押し潰された。

ここまでがコンマ3秒の出来事である。

シャウアップとモントウトウユピーは絶望していた。交渉などと考えたのはまるで甘かった！ 近距離で敵の強さに実際に触れて分かった。この強さは我々とは隔絶している。しすぎている。

これほどの力の差であれば、最早敵にとって自分達は虫けらに等しい。チョロチョロと飛び回る極小のハエが鬱陶しいから潰しに来た。敵にとってはそれぐらいの感覚だろう。ならば交渉などは不可能だ。

身体が押し潰されていく音を聞きながら、彼らは万感の思いを込めて声を上げる。

「王……!!」



分かつてはいた。力の差がある事は。しかし、ここまで差があるとは……。護衛軍とて弱くはない。いや、むしろこの世で最強の部類に入るだろう。自分の知る限りでは、だが。彼らはその強さとして自分とそこまで変わるものではない。だが、それをまるで赤子の手を捻るように、いや、まるで、虫けらを潰すかのようにいとも容易く無力化してしまった。

間違いない。これが「人間の王」！

仮に人間の有象無象が大量に攻めて来たとしても、厄介だが対処は出来ただろう。しかし、だからこそこいつが来たのだ。圧倒的な力を持つ「個」が。自ら！

「プフ、ユピーー!!」

声を掛けるも、喋る事すら厳しそうな様子だ。一体何の能力なのか。いとも容易くこのような強力な能力を行使するとは一体どんなカラクリか。様々な疑念がわき起こり、僅かにメルエムが逡巡した、その瞬間。

敵は悠然と歩み、自らの死線を越えて真横を通り過ぎていった。その事実には雷を打たれたような衝撃を受ける。

すれ違う際に敵はいくらでも自分を殺せた筈だ。その実力であれば。しかし、なぜかそのまま通り過ぎて、その後はこちらを観察している。

——敵は、遥かに怪物

産まれてこのかた価値観を激変させてしまう事が相次いだ。それも、この短時間で。何故見逃されたか分からない。だが、今は……

「無事か？」

敵は沈黙している。その隙に後方の部下へと寄る。死の直前まで追い詰められてい

た彼らだったが、辛うじてその生命力で生きていた。だが、それでもダメージは甚大だ。到底立ち上がれそうにない。

「カハツ！ ハアツ、ハアツ……！」

「な、何とか……奴は恐らく重力を操ると想定されます……！」

「そうか……其方らは今しばし耐えろ」

「……いけません!! 王よ!!! やはりダメです! ここはお逃げください!! 我らが生命を賭して食い止めます故!」

苦しみながらもシャウアプフが絶叫する。そして、2匹共に体組織を崩壊させながら立ちあがろうとしている。だがそれに対し、メルエムは諭すように告げる。

「駄目だ。先程も言ったであろう。ここで背を向けるなど、死より屈辱だと。余は抗う。最期まで……済まぬが付き合ってくれ」

護衛軍へと語るその口調は、穏やかで優しさに満ちていた。

「王……ッ!!」

「2度言わずな。我が名はメルエム。世界を統べる王なり」

その言葉に2匹は再び崩れ落ちる。もう限界に近いからだ。メルエムは怒っていた。激怒ではない。だが、静かな怒りを湛えて敵へと振り返る。世界を統べる為に産まれてきた。だが、漸く誕生出来たかと思えば、いきなり種の滅びの事態へと叩き込まれた。第一自分こそは蟻の王として生を受け、生命の頂点に立つ事を許されたはずだった。我こそは種全体の惜しみない奉仕の賜たまものである。長い進化の歴史の突端が全て自分に集約されるよう機能したキメラアントの生態に、どう見ても多様な個の有り様を許した人間にしか見えない者が遙かに上回る力を持つなど、あつてはならない。

理不尽、そう、理不尽である。いくらこの世が力こそ全てであろうとも、そんな理不尽を許す訳にはいかない。そんな理不尽に背を向けるなど到底出来ない。なれば、最後まで抗う。例えその行き着く先が自らの死であったとしても。それが王として産まれた自らの矜持ゆえに。

「貴様……名は？」

「……………」

「答えぬか。木石でもあるまい、人間の王よ」

「……名を知りたくば、先ずは自分から名乗るがいい。さもなれば貴様らはただの虫け

らに過ぎん」

敵が何か反応した。何に反応したかは分からない。だが、言葉は通じた。

「なるほど。確かに礼は失していたな。我が名はメルエム。全てを照らす光。そして、世界を統べる王なり」

「……名を貰ったか。私はカームⅡアンダーソン。【壊れない男】^{アンブレレイカブル}にして、【怪物ハンター】。そして、お前を滅ぼす者だ」

「……？　貴様は人間の王ではないのか？」

「然り。お前が思っている以上に人間とは複雑な社会を持つのだ。蟲には理解できんかもしれないがな」

その言葉を聞いて突如、メルエムは全てが馬鹿馬鹿しく思えてきた。なんだ？　これほどの力を持つ者が王ではない？　生物としてこれほどの滑稽さがあるうか。自分たちはキメラアントの特性として様々な生物の特徴を取り入れている。そして、どの生物にも共通して強き者こそが絶対者であるという法則は変わらない。

一番取り入れている人間だけは違うのか？　ならばどんな基準で王を選出している

のだ？ いや、そもそも王などいないのか？

目の前の敵、カームはその気になれば世界を支配できるだろう。それこそ、全ての生物の頂点に立つ者として。この者に勝てる生物など存在するまい。いわば絶対者だ。だからこそそれを成していないこの男が不思議でならなかった。そこに笑いがこみ上げる。なんと滑稽な。なんと奇妙な。この世界は。

「クツクツクツ……ハハハハハハハ!!」

「何がおかしい？」

思わず笑いが漏れる。若干苛ついている口調で目の前の絶対者は反応する。凄まじい威圧をもつて。だが止まらない。

「これが笑わずにいられるか！ 余は産まれながらの王だ。だが、この世界には王は存在しないらしい！ ならば、余は何のために産まれてきた!!」

「……………」

「貴様もだ！ 王として同胞を救うため、または仇を討ちに来たならまだ理解できる。だが王で無いのならば、貴様は何故ここへ来た!!」

笑いは怒気へと変化する。その理不尽に対して。知らず知らずのうちにそのオーラは強烈に発散されており、それは最早一匹の個体としては破格の力を宿していた。だが、対する相手もまた規格外。

「決まってるだろう。気にくわないからだ」

「ほう？　貴様ほどの力の持ち主が有象無象を気にするか」

「元から私は蟲が大嫌いだ。そして、そんな蟲どもに人々が好き勝手に蹂躪されるような光景は見たくないからな」

「ふむ……傲慢だな。結局その根本は余と同じか。だが、明確に余と違う点があるとするれば、貴様は逃げたのだ。王になるといふ責務からな」

「王になるといふことが全てではない。少なくとも人間の世ではな」

「力には責任が伴うはずだ。違うか？　少なくとも余はそうだ。それは遍く生物の根本だろう。人間とはそれほど歪んだ生物なのか？　いや、そう変わるものでもあるまい。それは人間を大量に喰って産まれた部下どもからも分かる。生物の根本は同じなのだ。それを貴様は怠った。第一、その力を同胞の為に役立てておれば、余も産まれなかったであろうな。それを貴様が怠ったからこそ、こうして余が存在しているのだ」

「……………」

「ハハハハハ！滑稽極まりない！！所詮貴様は余と同じ。そして生物としては余よりも明確に下だ。その意志のありようがな！」

「蟲が……調子に乗るなよ」

絶対者からの威圧が更に強まる。最早災害級のオーラだ。恐らく殺そうと思えば一瞬だろう。だが、この絶対者は戸惑っている？何か分らないが、即座に潰そうとしないあたりになんか伺える。メルエムは全身に冷や汗が出そうになる程の威圧を受けながらも、それでも屈しないと自らを奮い立たせる。

——例え蹂躪されようとも、自分は王を貫く。最期の瞬間まで。

「怒るか！人間よ。哀れな人間よ。王になる事を放棄した無責任な人間よ！」

「……そこまで言うのであれば、お前が王になった時のビジョンは考えているのだろうか？」

「無論だ。力による統制。そこに力なき権力が弱者を蹂躪するなどという理不尽は介在させない」

「笑止。貴様の部下は遊びで弱者を殺しまくっていたぞ」

「だから滅びた」

「私が滅ぼしたのだ。それこそ大嫌いな所業だからな。それにお前のビジョンには具体性が無い。お前等にとつて人間とは食料だ。結局は人間がお前等に蹂躪され、家畜のようにならされて食料にされるといふ前提だろう？」

「そこは否定せん。だが人間の中にも貴様のような存在が多数存在することが分かった。ならば悪いようにはせん。特区を作り、そこで不自由なく暮らせるように配慮しよう」

「そこが我々人間とは噛み合はん箇所だということだ。だれが食料の家畜扱いを受け入れると思っている」

「ならば貴様が王になつて否定して見せろ。余は部下から聞いたぞ。人間のことも人間も同じだ。食料扱いされていけないだけで家畜のように飼われ、蹂躪される弱者がいるはずだ。我等と何が違うというのだ。やっていることは同じだろう。そこを是正できぬ貴様には余の事を否定する資格は無い！」

「資格ときたか……ならばお前の言うとおり、力で否定してみよう。蟻の王。それがお前の望む事なのだろう？」

「是非も無し。……王として産まれていきなり自らが挑戦者とは血が沸くな。だが余は

曲げぬ。屈せぬ。いくぞ、人間！」

ドウツ！

鋭く重い踏み込みによつて刹那の瞬間に接近し、パンチを打ちこむ。メルエムのパンチはそれこそ現代兵器の重兵器に匹敵する。いや、それ以上だ。だが、敵はその目にもとまらぬスピードと重さを兼ね備えた一撃を容易く絡め取り、その勢いのまま地面に叩きつけられる。落下点にクレーターが出来る程の衝撃。

「ガツ……！　　まだまだ!!」

即座に立ち上がり、2撃目、3撃目を脚と尾で同時に放つ。しかしあつさりと同程の様に対処された。原理は分かる。だが、それをこのスピードでやるか！　だが人間に出来ぬ事は無い。見極めよう。この絶対者が遊んでいるうちに。



痛い所を突かれた。今こうして相手を鬪る形になっているのは私の迷いの表れだ。自分でもよく分からない。

何故即座に消し飛ばさなかったのか。何故こうして言葉を交わし、あまつさえ敵に塩を送りまくっているのかを。

その思考形態が人間と似ているからか？ いや、違う。言葉を交わして感じたのはやはり、蟲と人とは相容れないという事実のみ。では、何故。

そうこうしている間にも、メルエムは自分の技を吸い込み、恐ろしい速さで習得しつつある。やはり危険。やはり生かしてはおけない。まだこの程度では相手にもならない。自分の引き出しは無限に近い。特殊な能力も一切使っていない。

それでも、この力はこの世界では危険に過ぎる。まだまだこいつは産まれたてだ。あの暗黒大陸の奴よりも未熟。だが、すぐにあの領域まで迫るだろう。

だからこそ、ここですぐに消滅させれば良いのに、全くその気が乗らない。

自分がかからない。ヘルペルも、ブリオンも、パプも、果てはカキンの人間の王さえも躊躇なく消してきたのに。

気が乗らないのだ。

その原因を探る。何度目かの衝突を経て、メルエムが初めて自分に触れる。触れただけだ。すぐに投げ飛ばす。だが、復帰も早くなっている。ダメージは蓄積している筈なのに。メルエムは笑っている。純粹にこの戦闘を楽しんでいる。負けると分かりきったこの戦闘を。

前闘った王もそうだった。自らの誇りに殉じ、一切屈する事が無かった。だからこそやりづらかった。メルエムも、王たる誇りをもって私に挑んでいる。その高潔さ、潔さを嫌いにはなれない。そもそもが、メルエム自体も本来なら悲劇によつて幕を閉じた……そうか！ それだ!!

私がこの王を嫌いになれない理由、それは前世の記憶にあつたのだ。確かに会長と死闘を繰り広げ、圧倒的な力によつて追い詰め、会長はそこで死んだ。しかし会長は初めから相打ちを狙い、そしてメルエムは人間の悪意の産物によつて滅びた。

それまでの過程で、彼は自分の名も知らぬまま人間の娘と軍儀で高め合い、人間と蟻との間で葛藤していた。そして彼はその娘との最期を選んだ……。

私は無意識に、勝手に共感していたのだ。

この産まれたての王の、本来あつたはずの運命に。だからこそ、嫌いになれなかった。だから、言葉を交わした。そして、言葉を交わせばもう殺せなくなってしまった。

“救世主”の私は殺せと主張する。だが、私自身は否と拒む。

メルエムは笑っている。それほど楽しいか。今そんなメルエムの相手をしている私には確固たる芯が無い。無いままに、ただ適当にあしらっているだけだ。全霊を以つて諦めずに挑んで来る王に対して、不誠実にも程がある。明らかにダサイ。こんな舐めたマネをされたなら自分なら激怒するだろう。だがメルエムは私に立ち向かう。絶対に勝てないと分かっているにも関わらず。

決めなければ。私がどうすべきか。

「なあ、メルエム」

「何だ、カームⅡアンダーソン」

「すまなかつたな」

「……ふん、漸くその気になったか。早く見せてみよ」

「ああ。行くぞ」



目の前の絶対者の雰囲気が変わる。それに伴いオーラも変化する。クリアなオーラではあるが、より鋭く、重いオーラに。凄まじく研磨されているのが理解できるオーラでもある。どれほどの修練と修羅場を潜ればこうなるのか分からない。どれほどの苦痛と激戦を経てこうなったのか分からない。それほどの洗練された業わざとオーラである。メルエムは、闘いの中でそれを鮮明に理解した。だからこそ、この敵を憎めない。多様性を許した人間の個でありながら、究極を超えた力を手にした者。そこに敬意を表する価値があるからこそ。だからもつと堪能したかった。

いよいよ、か。楽しい所だったのだが。

こんなに遊んでもらった事は無かった。何故ならば自分は絶対者の筈だったからだ。自分が全力を出す時は蹂躪する時のみの筈だった。だが今、全力をもって掛かってもまるで通じない事に、不思議な安心感を覚える。それは、自分が人間の因子を多く持つからだろうか。自分達の種族には有り得ない、父という存在に遊んで貰ったような…そんな安心感だ。だから笑ってしまった。普通なら舐めるなど激怒すべき筈なのに。もつと続けたいと思ってしまった。逆に言えばそれ程の差があるという事なのに。

だがそんな時間も長くは続かない。

絶対者は何らかの決心をしたらしい。それは当然自分の処遇についてだろう。何を戸惑っていたのか分からない。だが奴は決めたのだ。漸く。

恐ろしい程のオーラ量！ 改めて、やはり大人と子供以上の差を感じてしまう。

それこそ、蟻と人か。

奴が歩んで近づいてくる。初めての行為だ。そう、奴は動いてはいなかった。自分と

話したその場から。

構える。どんな攻撃が来るのか、まるで分からない。全身にこれまでのダメージの重みを今更感じるが、不思議にも穏やかな気分だ。この人間との闘いによって、自分は変わってしまった。悪意や敵意、負の感情のない純粋な闘争を経験したからだろうか。

後3メートル、2メートル、1メートル…近すぎる！ もう間合いなどつくに入っている。反射的に最短で突きを放つ。これは奴の型を模倣したもの。合理的で威力も高く、何より速い。通じぬだろうが、せめて距離を――

幻の様に奴の姿はブレ、代わりに奴の掌が胸にそつと添えられる。嫌な予感がする。物凄く嫌な予感が――

“浸透勁”

「ゲハアツ!!」

衝撃が内側から跳ね回る！ な、何を貰った!? 身体が内側から崩壊する程の衝撃！

こ、これはオーラが跳ね回っている！ 奴のオーラが自らのオーラに同調され、それによつてオーラの調和が乱され、球のように暴れ回っている!! しかし、それが分かれば対処も出来る！ 自らのオーラを何とか操作して抑え込む。漸く緩やかになつてきた。だが被害は甚大だ。何なのだ、この技は!!

「もうこの技の骨子を掴んだか。流石だ。そして、これが私からの最後の攻撃だ」

気付けば、奴は右手に莫大なオーラを集中させていた。何だコレは。山一つ消し飛びそうな程の威力を感じさせている！ おのれ、絶対者め。奴は最後と言った。ならばこれは余の試練。

耐え切つてみせよう。

絶対！！

ドウツ！

凄まじいエネルギーの奔流!! 最早対個人に使う技ではあるまい。腕を前面に重ねて防御態勢をとる。オーラをガードに全て回す。壁だとすぐに破壊されて飲み込まれる。前方を流線型に、少しでも受け流す! だがあまりにも強大なエネルギーは、大河の流れをイメージさせる。押し流されたら負けだ。必死に耐える。だが、ジリジリと削られ、押されてゆく。越えねばならぬ。この理不尽を。

「おおおおお!!!」



必死に抗う王を、見ている事しかできない不甲斐なさに血の涙を流す。ギリギリと食いしばり過ぎて、口の中で傷つけた血が、内臓の損傷の血と混じり口の中から溢れ出す。この重力攻撃に漸く耐えられる様になってきたが、未だに立ち上がる事すら出来な

い。

恐ろしい力だ。見た瞬間世界を続べると確信した王ですら赤子扱いだ。

幸いだった事が一つあるとすれば、奴が王を瞬殺しなかつた事だ。何の奇跡かは分からないが、奴は逡巡している。王も知つて知らずかの確にそこを突き、煽っていた。もしかすると、出来るかもしれない。無限に存在する内の一つの針の穴に糸を通す様な細かい可能性、生き残りの道が。

だが、そんな想いも虚しく、奴は決めに掛かる。謎の攻撃によって王が苦しんでいる。その直後、奴から超莫大なオーラが収束し、発射される。あんななものを受けたら王は……！

不意に身体が軽くなった事に気付く。重力から解放されたらしい。ユピーとプフは顔を見合わせ、即座に王の影の元に向かう。奔流は通り過ぎて奥の山を削り取つていた。影はぐらりとその場に崩れる。

「王!!」

絶望的な気分になり、涙を流しながらも崩壊寸前の身体をおして急いで駆け寄り、崩れ落ちる身体を支える。

王の身体は、腕が無く、全身が炭化してプスプスと焦げ付いた匂いを発していた。どう見ても死体に近く、その容体は絶望的だった。

「王ツ!!!」

絶叫する2匹。これはもう……

「! 辛うじて息がある!! だが、コレじゃもうもたねえよ!! ピトーの能力は王自身がお持ちだ! このままじゃ……!!」

「……………ツ!!」

「どうする!! コレじゃもうすぐ王が……!!!」

「私が……私が救う!」

「……どうやって!？」

「私を召し上がっていただく。それだけの事…!!」

シャウアップは細胞を分裂させ、王に吸い込ませる。

「おおおおお」

メルエムが反応を示す。そして身体が回復しているのが見て取れた。

「おお！　メルエム様、私ももう長くはありませぬ。この生命、全てをお使いください
!!」

「わ、私も御賞味ください！」

シュオオオオ……



王が目覚める。護衛軍^{やっ}はやはり自らを喰わせる事にした様だ。王はそれに感想を述べ、もつとと要求する。護衛軍2匹は至上の喜びに包まれながら自らを捧げてゆく……其の生命尽きるまで。

その為に奴等を瀕死まで削った。こうするだろうとの予感があつたから。やはり私は無意識のうちに決めていたのだ。こうなる事を。それは私のエゴだ。それを私が望み、その通りに動かさせた。

「……………プフ、ユピー」

煙が晴れ、五体満足な王が姿を現す。明らかに力が大幅に増している。最早個人では勝てる人間は居ないだろう。私を除いて。

いや、あのカキンの王は出来るか。もうこの世にはいないが。

「余は……喰ったのだな。あの2人を」

「その通りだ。メルエム」

「貴様は何故見ていた？　こうなる前に殺せただろう」

「さて……お前には私が約束を破る愚か者に映るか？」

「そうではない。余には貴様が何を考えているのかが理解出来ぬ。貴様の行動は矛盾だらけだ。殺すと決めたのではなかったのか？　殺すなら最後まで殺せばよい」

「私はお前を殺したくなくなった。先程の攻撃はケジメだ。大量の人々を犠牲にした事へのな。だが、これからは違う。私に付けてこい」

「!?　……どういう事だ？」

「私はお前を殺したくなくなった。理由は聞くな。だが、お前をそのまま放置もしたくない。ならば私がお前を管理する」

「貴様……!!」

「そう憤るな。暴力こそは全て、なのだろう？　ならば敗者は従え」

「余に貴様の下に付けと申すかッ!!」

「違うな。折衷案だ。ここは私の気に入っている世界だ。ここでお前の勢力を伸ばす事は罷りならんし、私が許さん。だが、世界とはここだけではない」

「何……？」

「ここは人間の楽園。だが、その世界の外にちつぽけな人間が存在すら許されない世界がある。私はお前をそこに連れて行ってやろう。お前はそこで存分に王を目指すがい」

「なんと……なるほど。確かに余にとっては善いのかも…余は蛙だったと言うわけだ」

「お前の場合、一度行ったらここには戻れん。それに、そこならお前が何をしようが私は文句は言わない。ただし」

「何だ？」

「まず、広い。広大すぎて全土を把握するなど不可能に近い。それに、私を遙かに超える怪物や恐ろしい生命体、巨大で強大な敵が山のように存在する地獄でもある」

「……敗れた余にとってはその程度は許容しよう。むしろ都合だ。そやつ等を喰えば余はより強くなるからな。それに、世界を知らぬ余にとっては、それぐらいが丁度良い。貴様の提案に乗ってやろう」

「交渉成立、だな。では、お前はそれまではただのメルエムだ。そして、誓え。楽園では大人しくすると」

「よかろう。で？　いつ行くのだ？」

「今、この楽園を狙った怪物どもが多数この世界を脅かしている。人類が滅びる程の危機がな。私はそれを全て滅ぼす。それが完了したら、だな」

「ほう。余のような存在がまだいると申すか」

「世界は広い。そして人間は弱い。個では無く群、または集団でも驚異的な強さをもつもの対しても人間は無力だ。それは他ならぬお前達が証明している。だから私は滅ぼさねばならん」

「……余は運が良かった、ということか。または脅威にもならんと判断されたか」

「脅威だ。間違いなく。だが、それを私の我が儘で押し通す。それぐらいは許されて良いだろう」

「……納得はいかんが受け入れよう。それで、余が生かされた理由については語らなか？」

「先ほど言っただろう。秘密だ」

「いつか語れ。気になって仕方がない」

「……まあ、いいだろう。お前を送り届けるときに、な」

言えるわけが無い。蟻の王のくせに人間よりも人間臭く、種との葛藤に苦しみながら

その矜持と愛に殉じた奴を氣に入ってしまったなどと。このまま誤魔化せるなら誤魔化そう。そうこうしていると、鳥型のキメラアントを抱えた一行がこちらに向かつて来るのが見えた。なる程。アレも助けるか。たしか彼も前世の記憶では生き残っていた。氣に入られたのだろう。結局は氣に入るか氣に入らないかの違いなのかもしれない。

キルアもこちらに向かっている。どうやら上手く仕留めたようだ。私は人間のうちの一人だ。多様性を抱える人間の中に私のような者がいてもいいだろう。王を目指すなど、そんな面倒な事はしたくない。私は私。多少力が強いだけだ。それでいいじゃないか。皆、私とメルエムが揃って待つていることに驚いているようだ。言い訳を考えねばな。まあ、ちよつとは我が儘を言うぐらいは良いだろう。誰にも迷惑はかけないし。

それが、私にとってのキメラアントに対する終え方なのだから。

138、会見

「で、どんな状況？」

キルアとも無事合流し、討伐隊とも無事に合流出来た。彼らは驚いていた。他ならぬ討伐対象が堂々と私と共にいるからだ。

それにはキルアも驚きを隠せなかつたようだ。代表してカルトが端的に私に尋ねる。

「契約を交わした。この世界では暴れない約束と、彼らにとつての楽園に連れて行くという事で合意した」

端的に答える。

「……………」

沈黙する一同。その意味を考えているようだ。だが、いくら考えても正しい答えは出ないと思う。何故ならこれは単に私の我儘だからだ。

沈黙を破り、カイトが尋ねてくる。

「その楽園とは……」

「そう。暗黒大陸だ。全て終わった後、私は彼をそこに連れて行く事に決めた」

「そう……決めたのね。ならばアタシ達は異論ないわ」

ビスケがアツサリと賛同する。

「な…!? そんな簡単に!」

「いいのよ。第一、彼が決めた事をどう覆すの?」

「うっ……」

「彼は結局この騒動の最大の功労者。よって彼にその権利は十分ある。当然、その王サマについては責任を持つわよね? カーム」

「勿論」

「ね? ならば何も言う事は無いわ」

「二つ訂正しろ。余はもう王ではない。ただのメルエムだ。今はまだ、な。よって余を呼ぶ時はそのように呼べ」

メルエムが会話に参加する。その一言に緊張感が高まる。確かに彼は威圧感という存在感が段違いだ。さすがは種の進化の最先端を極めた存在である。続けて彼が言う。

「そこのお前。そういうわけだ。余は貴様とは何ら関係ない存在である。貴様は自由に生きるが良い」

ビクツツと息を潜めていたコルトが反応する。しかし、諦めたのか溜め息をつき、返答を返す。

「……分かりました。『メルエム』さ…殿」

「私が言うのも何だが、彼も生かしたのは誰が？」

「オレだ。もう人は喰わねえって誓いを立てて貰った上で、生かした。コイツは前世の

記憶持ちだったからな」

モラウⅡマツカーナシーが答える。彼が言うなら心配はいらないだろう。

「で、ゴンはどうする？ ヒソカは？」

キルアが待ちきれないように問いかける。そう、それが今一番の問題なのだ。ヒソカがどこに行ったのか。ゴンは無事なのか。

「……手掛かりはないな。これから見つけねばならん」

「……クソツッ！ あの野郎、王を倒したら分かるって言ってたのに!!」

「兄さん……」

「アイツは嘘つきよ。それも意味の無い嘘をつくタイプ。あまり真に受けない方がいいわ」

ビスケとカルトがキルアをなだめている。しかし、これだけの力があっても何も手がかりすら分らない今の現状がもどかしい。キルアは更にそうだろう。

「候補はハンター協会。今現在【敵】に攻め込まれている。そこを叩けば自ずと現れる可能性が高い」

「そうね。妥当だわ」

「ならば急ぐぞ。向こうもあまり猶予は無さそうだから……悪いが、カイトさん、ノヴさん、モラウさんには残ってもらおう。NGLの後始末を頼みたい」

「……アンタ程の人物に敬称をつけられるとむず痒くならアな。呼び捨てでいいぜ。正直オレ達は足手纏いだろうから願ったり叶ったりだな。なあ、ノヴ」

「全く同意ですね。……会長をよろしく頼みます。カイトさんもよろしくお願いしますね」

「承った。ジンさんがやられるなんて毛ほども想像出来ないが、万が一の時は宜しく頼む」

「ありがとう……では、行くか。みんな」



「よオ！ ご機嫌はいかがかな？」

「……クソ食らえ」

「元気なこった。そつちはどうだ？ 親父」

「……………」

「ケツ。相変わらずムカつくジジイだ……しかし良く生き残ったモンだ。確実に殺すつもりだったんだがな。あれから更に腕を上げてるとは予想外だったぜ。おかげで出したくもねえ被害を出しちまった」

「ふざけんじゃねえ。テメエらが来なけりや被害0じゃねえか」

「ふん。そうはいかんよ。俺達が来ることは規定事項。これも人類のためだ」

「なくにが人類の為だ！ 本当に人類の為なら厄災なんぞを放出するなんてアホなことしねえんだよ!!」

「お前には大局が見えておらん。多少の犠牲は許容範囲。むしろ、それ以上の脅威があるこの現実を見過ぐすわけにはいかんのだ」

「アイツのどこが脅威だつてんだ！ 言ってみろ!!」

「全てだ。厄災を単独で滅ぼす力などこの世界には害にしかならん。核兵器さえ効かんだぞ? 馬鹿げた力はそのうち争いを呼ぶ。最早厄災以上だろ。そうなる前にこのオレが何とかしてやるのさ」

「余計なお世話っていうんだ。そういうのがよ。大体テメエらも厄災使つてる時点でアウトだろ」

「だから必要な犠牲だと言っている。我々がその気になれば他の厄災も封じ込めることができるしな」

「……魂すら売ったか……」

「お? 喋ったかジジイ。だいたいこの原因はお前のせいでもあるんだからな。奴を発見次第俺達と同じように動けばこうはならなかっただろうになア」

「囀るでない。哀れな人形よ」

「お? 今死ぬか?」

不穏な空気が発生する。2人は現在完全に縛られており、念能力すら封じられている。彼らは、ほんの少しでも念攻撃を受けたら大ダメージを喰らう。それを知っていて目の前の男は威圧する。2人は既にポロポロに痛めつけられており、少しの衝撃でも本当に死にかねない。

「まあまあ。そこまでにしませんか？」

背後から爽やかな笑みを浮かべたスーツの男が顔を出す。彼はもう一人に声を掛けて落ち着かせた。

「出やがったな……！」

「ふむ……元気ですねえ。あれだけ痛めつけたのに。しかし、貴方には苦勞させられませんでしたよ。まさかあの短時間で証拠をそろえてくるとはね」

「テメエらが杜撰過ぎるだけだ。オレが不覚だったのは例の厄災の特性を見誤ったトコだな。やっぱりろくなもんじゃねえ」

「ふふ……貴方はボクに似てるから大体の事は看破されるんですよ。そこが貴方の嫌いなところですよ。そしてボクは嫌いな人間を徹底的に愛することに無上の喜びを感じることを最近発見しました」

「気色わりい。奇遇だな。オレもお前が大嫌いだ」

「さて、先ほど丁度仲間から連絡がありました。貴方の息子さん、確保されたそうですよ」

「……それがどうした。アイツはオレの息子だ。お前らの好きにはならんし、人質と言
うならお門違いだぞ？」

「今の貴方達にそんな価値があるとは思えませんねえ。あくまで『救世主』を釣る餌で
すよ。何勘違いしてるんだか……」

「……ホントにムカつく奴だなお前は。お前はオレのブツ殺すリストNo.1に今単独トツ
プで輝いてるからな。首洗って待つとけ」

「はいはい。楽しみですねえ。さて、会長。どうですか？ ここまでの流れは」
「……………」

「だんまりか。悲しいなあ。ボクなりにハンター協会を何とかしようと思った末の行動
なのに」

「……………」
「うくん。つまらない。もつとこう…無いんですかねえ」

「木偶に語る言葉は無い」

「おっと。拒絶ですか。まあそれも良いでしょう。これから始まりますからね。壮大な
『救世主』の終わりが」

「……そして、お前達はまんまとこの世に蔓延る、と」

「人聞きの悪い。新しい世界の幕開け、と言ってほしいですね」

「つまり『旧』人類は存在しなくなる。そうだろうか？」

「違いますよ。これは『進化』です。人類は今のままでは弱いままだ。劇的な進化が必要です。暗黒大陸に還るために」

「結局はそれか」

「おうよ。コイツの言うとおりでせ。人類は元はあそこにいたんだ。そろそろ還るべきだ。誰かさんが止めやがったせいで停滞したのを忘れたとは言わせねえからな」

大柄の男が話に無理矢理割り込む。ネテロは何かを堪えるかのように言葉を絞り出す。

「馬鹿め……本当に、馬鹿者め」

「いくらでも言うが良い。所詮お前は敗者だ。歴史は勝者が作るモンだぜ。その様を特等席で見られるんだ。感謝しろよ？」

「……」

「さあ、そろそろ行きましょう。『公式会見』を済ませないと。準備は整ってますよ」

「そうだな。行くか。ふふふ……新しい世の中の幕開けだ！」

2人は足並みを揃えてその牢獄から退出する。それを黙って見ているしかできない。その部屋には小型のモニターが設置されている。これから起こることをご丁寧に見せてくれるための配慮のようだ。

十二支んは軒並みやられた。僅かにいる裏切り者を除いて。敵は思った以上に強大だった。並の人間の知力や武力では到底叶わぬほどに。2人ともこの騒動の真相を理解した。敵がどういう思考で動いているのか。そして、どういうことを目的としているか。そのためにどんな手段を用いているか。しかし、それをカームに伝える手段が無くなってしまった。

2人が辛うじて生きているのは、敵の遊び心だ。彼らの個人的な復讐の為に彼らは生かされている。それは余裕から来るものであり、敵は既に準備を終えてしまっているからに他ならない。

“救世主”を追い詰め、倒す準備を。

人類を脅かす脅威に対する抑止力。特にそういった者や現象に対しては無敵の存在

である「救世主」。それに対抗するために彼らが出した答え。それは――



「おーおー、こりやすげエな。飛行船の何倍速いんだ？」

「概算で良ければだが、衝撃波が発生しているのを鑑みると時速1,224 km以上は確実に出てるな。風景の流れから考えると更にその3倍は出ると見ていい」

「音速の3倍以上かよ！ やべエ速度だな！」

「これだけの速度が出ていて快適に過ごせるのは奇跡と言つていい。普通は風圧と摩擦熱で消し炭だからな」

「まさに貴重な体験だな……その速度なら後15分つてトコか」

「計算が早くなつたな。きちんと勉強していたようだ」

「ケツ。褒め言葉として受け取っておくぜ」

レオリオとクラピカが会話している中、前方を睨みつけながら黙り込む元王ことメルエム。彼の心境はいかばかりか。また、キルアも黙って何かを考えこんでいる。それを心配そうに見ているカルトの姿があつた。

そもそもどうやって移動しているかといえ、カームが聖光気状態で空を飛び、その後方に同じく聖光気で形作つた簡易的なソリに似た客席に全員が搭乗している。当然馬役はカームだ。

現代世界最速の戦闘機に乗り込んでいる様なものだが、不思議パワーで中は安全であり、外の風景も伺える。正に貴重な体験と言えよう。

「まー改めてとんでもないわね。最早不可能は無いんじゃないかしら」

ビスケが呆れた様に呟く。その呟きにピクリとメルエムが反応する。

「……やはり解せぬ。これ程の力があれば世界は恣ほしいまだろう。何故此奴はそれをせんのだ？ 女、貴様なら分かるのか？」

「ビスケよ、王サマ。そうね……生命体の幸せなんて、それぞれだからじゃないかしら。

ちなみにアタシが同じ立場でも同じ選択をすと思うわ」

「それが余には理解出来ぬ。生命体の頂点に立つ者としての責があるう」

「力」の定義の解釈によるわね。アタシの解釈では、「力」とは持つ者の我儘を押し通すモノ。つまりはその力を持つ者に使い方は委ねられるという事だわ」

「ふむ……」

「で、カームの場合はハッキリ言つて世界を意のままに、なんて望んではない。どうでもいいんじゃないかしら。ただ自分とその身の回りが幸せであればそれでいいのよ。第一世界を自分の好きなように変えるなんて面倒だし」

「フン。所詮は世界に差配するに足る器ではないという事ではないか」

「ま、そうかもね。でも、それが人間たる所以。多様性の結果という事なんじゃないかしら？」

「そうか……」

それきりメルエムは沈黙した。恐らくビスケの解釈を咀嚼しているのだろう。彼はカームに敗れてから自らの存在について、そして人間について考えているようだ。それはいい傾向なのかもしれない。少なくともカームが健在なうちは。

ビスケは内心溜め息を吐く。特大の爆弾を抱えているようなもので、なまじコミニ

ケーションが取れる分ヒヤヒヤする。だが、カームが決めた事だ。それは仕方ない。彼以外にはメルエムを御しきれないが、逆に彼がいればこそこの蟲の王は大人しくしているだろう。いざという時はもしかすると戦力に計算できるかもしれない。戦闘になれば、だが。

ビスケも待つ間流れる景色を眺めながら考察を始める。敵について。彼女はこの闘いがいよいよ大詰めだと予感している。カームの話から残る厄災はあと2つ。黒幕共の狙いとヒソカ。これらは恐らく連動している。そして、彼らの目的がここに來てハッキリと見え始めた。今までの全ての騒動は陽動だ。彼らの本命はハンター協会を抑える事。その為にジョーカー的な存在であるカームを慎重に切り離れた。

だが……いくら敵が巧妙に動こうと、カームの敵ではない。仮にカームを真剣に怒らせて怪物にしようとも、彼らにメリットはない筈だ。結局自分達が駆逐されて終わりだからだ。では、どのような手段で彼に対抗しようというのか。

……やはり情報が足りない。だが、敵は敵で勝算があるのだろう。カームを封じ、自らを優位に立たせる勝算が。ならば、慎重に動かなければならない。少なくとも彼の足を引く張る行動は取らない様にすべきだろう。ゴンの行方も気に掛かる。結局出たとこ勝負になる他無いのだ。

——もうすぐ到着する。



「さて——着いたはいいが……」

クラピカが呟く。今、協会があるスワルダニシティの高層ビルの上に降り立った一行であつたが、直ぐに違和感に気付く。

街に誰もいない

しかし、全滅しているわけでもない。人々は建物の中に引つ込んでいるだけだ。それがおかしい。こんな昼間に誰一人外に出ずに引き籠もつて居るなど、普通ではない。

「ふむ……人々は黙つて屋内にいるようだ。テレビを見ているようだ。だが、それに

しても異常だ。既に何らかの影響を受けているとみていいだろう」

そう。不自然にも程があるが、街中の人間は家の中にこもっている状況だ。街の中央、一際大きく聳え立つビル。それが目的地だ。

そんなビルの中央に巨大なモニターがある。これまで何がしかの企業コマーシャルを流していたが、それが唐突に終わり、画面が切り替わる。映し出されたのは、なんらかの会見放送のようだ。カメラが十二支んの一人である女性をクローズアップする。

『……これより、ハンター協会による緊急放送を行います。この会見はハンター協会公式会見として全世界に中継されます。まず初めに、会見にあたってこれまでの経緯について、ハンター協会から謝罪を行います。この度は、ハンター協会の不手際で大変ご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした』

初手から頭を下げて謝罪に入る犬耳の女性。全員思わずモニターを注視する。10秒ほど頭を下げて、その間フラッシュが焚かれるが、ようやく頭をあげて話を続ける。

「ちよつと……嫌な予感がするんだけど……」

ビスケが呟くが、それはメルエム除く全員が感じていた。このタイミングでの公式会見で、なぜネテロ会長ではなく彼女なのか。

『事の経緯については度々緊急速報で流していましたが、改めて。この度の無差別テロに、前会長及び最高幹部が関わっていた事は、ハンター協会にとつても不徳の致す限りです。重ねてお詫び申し上げます。両名は既に拘束され、司法の判断を待つ段階となっております』

「「な…!?」」

「ふむ……」

衝撃的な話は続く。

『テログループが起こした厄災騒動は鎮圧に向かっています。既に殆どの厄災は沈黙、

消滅いたしました。協会からは事態を主導した前会長、アイザックⅡネテロ及び、トリプルハンターのジンⅡフリークスを容疑者として捕らえ、司法当局に引き渡す予定です。そして、ハンター協会も中枢から混乱を巻き起こした責任をとるべく、V5連合の主導のもとで組織を再編し、重要参考人であるアンダーソングループ会長、及びその三男であるカームⅡアンダーソンの身柄を捜索、確保するとともに、事態の收拾に努める所存です』

「……………どういふ事？」

「一歩遅かった。既に協会は敵の手に落ちたか。だが……………」

「先手を打たれたのは痛いわね。でもこの短時間でどうやって……………」

「会長とジンさんは拘束されてんだよな？ 死んじやいねエならまだ何とかかなりそうだが……………」

「……………とりあえず続きを聞こう」

『——よって、V5は今回のテロ鎮圧に貢献し、内部からの崩壊を防いだ副会長であるパリストンⅡヒル氏を会長に指名。協会はこれを受け入れました』

「ウソでしょ!? そこまで浸透してるの!? ていうか、どんな手を使ったらそうなるのよー!」

「なるほど。そう来たか」

会見は続く。

『それでは、質問がなければ次に移ります。新会長に就任しました、パリストンⅡヒル氏及び、V5最高顧問であるビヨンドⅡネテロ氏による就任会見を行います』

そうして、カメラに映った人物が2名。胡散臭い笑みを浮かべたスーツの男、そして……古のカキンの武将のような衣装を纏った壮年の男。その顔は、ネテロ会長を想起させた。

「ネテロ……!?! 会長の縁者か?」

「いえ……確かに居たわね。ソイツはジジイの息子よ。随分前に縁は切ったって言って

たけど……」

「そんな奴がなぜ今頃……」

ビスケ達の会話を聞きながら、カームは確信した。コイツこそが全ての元凶である。水面下でコソコソと動き、ヒソカと組んでチマチマと嫌がらせをし、あまつさえテロを引き起こして大規模な被害をもたらした。その首魁がこの男であると。根拠は無い。だが、映像を見た瞬間、そのオーラと、そして奥に秘められた邪悪な気配を感じ取っていた。それは「救世主」にとつての敵であると。

「コイツか」

「えっ？ カーム、何か言った？」

カルトが眩きに反応したが、その問いかけをスルーしながら厳しい目で画面を睨む。姿を現したという事は、全ての準備が整ったという事。ならば一筋縄ではいくまい。しかし、どんな罠や仕掛けがあろうとも必ず粉碎し、必ず滅してやる。そう決意しながら、彼らの発言に耳を傾ける。

『——この度、特別措置により大任を賜りました、パリストーンです。先程チードルからもありましたが、一連のテロの件は大変痛ましい被害を齎し、それがあろう事かハンター協会の中核から指示が出されていたという事実。世界中の皆様には伏してお詫びを申し上げます』

パリストーンもいかにも悲痛な顔で謝罪する。だが、こちらからすれば茶番もいい所だ。

『さて、今回の件で我々ハンター協会はV5からの監査を受け入れ、前会長が秘匿していた情報及び、所謂協会の闇を暴くとともに、ハンター十ヶ条の見直しを行います。そして、そこから得た情報を広く全世界に公開する事をここに宣言いたします！ハンター協会は、これよりクリーンな組織を目指していく所存です！』

捲し立てるパリストーン。ハンター協会の闇とは何か。ハンター協会が秘匿していた情報とは。そしてここで言及されたハンター十ヶ条。そこから導き出されるモノ。それは——

『ここからはV 5最高顧問、及びハンター協会再編対策局長であるビヨンド氏に説明いただきます』

『おう。オレがビヨンドだ！ 名前から分かる通り、前会長とは血縁だ。大昔に縁は切ったがな……。それだけに今回の件は慚愧の念に堪えぬ。言い訳にもならねエがまさかあのジジイがあれ程の事をしでかすとは思ってもしなかった。だからこそこのパリストーンから連絡があつて、すぐオレ自ら指揮を取った。間違いであればいいとな。しかし結果はこの通りだ。残念極まりない。言わせてもらおうが、今回の件はジジイもそうだが、協会の怠慢と傲慢により引き起こされたといつても過言ではない。よつて、超法規的措施をもつて我々が協会に介入させてもらった。パリストーンによる内部告発が無ければ延々と被害は拡大しただろう。難しい立場でありながら正義を貫いた彼には感謝しかない。ともあれ、多くの犠牲を出しながらも何とか取り戻す事ができたのだ。結果は大事だ。批判の声も多々あろう。パリストーンに疑問を覚える者もいるかもしれないし、オレを疑う奴もいるだろう事は重々承知だ。しかし、それを受け止めながらも我々は結果で示していく！ パリストーンを中心に、これから協会に囚われない新しい枠組みを！
そして、全世界に希望を!! それがオレ達の基本的な指標だ!!!』

鳴り響くシャッター音、そんな中でも堂々と、威厳たつぷりに宣言するビヨンドの声

はハリがあり、自身に満ち溢れている。それは会長と同じようなカリスマ性をもち、聞くものを魅了する。

『——オレが思うに、ハンター協会がここまで腐った理由は様々な事を秘匿し過ぎた事だ。そりや大規模な組織であるからには隠したくなるような事があつても致し方ねエ。だが、協会が隠してきたそれは、人類の進歩を結果的に妨げる事となつた！ それは罪だ。大罪だ。だからオレ達が責任をもつて詳らかにする！ その内容は大きく分けて
2つ』

「おいおい何言い出すんだコイツ」

「まさか……」

嫌な予感が止まらない。それを言つてしまえば、世界は変わつてしまう。そんな爆弾を2つも落とすのか。今ここで！

『まず1つ！ この厄災騒動の出所であり、莫大なる祝福が待つ【暗黒大陸】！！ 2つ！
人間なら誰しもが操る事のできる“力”である【念能力】だ！！』

139、挑発

『人類はこれまで進化を繰り返してきた。しかし、それは現状で頭打ちになっている。狭い土地で肌の色や信条が違うだけで争い、憎しみ合う。強き者が弱き者を虐げる。果ては大同土で牽制し合い、時にはすり潰すまでやり合う。不毛だ。不毛でしかない。それは偏にこの世界が狭すぎるからだ』

会見は続く。

『だが、真実の世界は広く、果てしない。我々が外洋と思っていた場所はただの湖だ。その果てには人類未踏の想像もつかないような広大で肥沃な土地が広がっているのだ！
そしてそこには不老長寿の穀物や、未知の莫大なエネルギー源、万病の治療薬など――

――』

ビヨンドの背後にフリップが用意され、暗黒大陸の広さを裏付ける資料が提示される。その発表に記者達のどよめきの声が聞こえる。

『これを知る者は国家の上層部のみだ。そして、その情報を差し止めていたのがハンター協会、もつと言えば前会長だ。何故これほどの情報が秘匿されていたか！ハンター協会のみならず、V5もソレを把握していた。にもかかわらず、秘匿されていた決定的な要因……即ちそれは、我々人類が弱すぎたからだ！それを解決する為の糸口こそがハンター協会が隠していた【念能力】に他ならないッ!!』

「「「……………」」」

ビルの屋上で協会の会見を見守る一同は、真剣な表情で巨大モニターを見つめる。この会見がどのような影響を世界中に与えるかを。そしてそれが何をもたらすかを考えながら。

「ふむ。なるほど。それが「暗黒大陸」か。面白そうな場所だ。それにしても人間のレアモノとやらは念能力者と呼称するか。そして貴様等一部の人間はそれを秘匿していた。と。相変わらず人間の考えることは理解に苦しむ」

「なあ、王さまよう。コイツが何を目指しているか分かるか？」

メルエムのこぼす言葉を聞き、レオリオはメルエムに水を向ける。この蟲の王は価値観は違えど優秀な頭腦の持ち主だ。何かしらのヒントがあるかもしれないと考えて。

「？ 貴様は分からないのか？ ……いや、むしろ貴様達には分からないか」

メルエムの近くでハテナマークを浮かべるレオリオを差し置いて、クラピカは思い出す。元はこの蟲が何だったかを。

「……なるほど。奴はこの世界の“王”を目指しているのか」

「ほう、理解できたか。此奴はこの世界の王たらんとしている。少数派である念能力者の集団を押さえて支配した。次はそれを広く公表してこの世界で僕どもを育成するつ

もりだろうな。余も同じ立場ならそうする。つまり「兵隊作り」だ。これはその布石だろう。ついでに言えば此奴も【暗黒大陸】を目指している。いや、因果が逆だな。【暗黒大陸】に行く為に「王」を目指している。その為の手足となる兵隊作りだ。中々基本に忠実ではないか」

「……」

「は？　つまりコイツは全人類を相手に【暗黒大陸】に行かせるつもりって事か!？」

レオリオが思わず突っ込むが、メルエムはスルーする。

「余からすればこれが正しき生物の姿だ。産まれ、増え、地に満ちる。地に満ちれば新しき地へと進出する。そのためにできることは徹底する。何もおかしな事はあるまい」

「………だが」

「こんな回りくどい事をしているのは人間の奇妙な社会性への配慮。此奴は今の所上手いことやっているように見えるぞ？　まあそれだけでは足らんがな」

「………何がだ？」

「最後まで聴こうではないか。余も此奴の話に興味が湧いた。この先何を言うかも大体予想が付いた。答え合わせといこう」

それを最後に腕を組みモニターを注視し始めるメルエム。これ以上は話しかけても無視しそうだ。一同も合わせて続きを聴く。その衝撃的な発表を受けて動揺していた記者達も動き出す。

『す、すみません、お話の途中ですが、その…【念能力】とは…?』

記者がたまらずといった風に質問する。

『そうだな……ちよつとお前のペットボトル貸せ』

そう言つて記者から飲み物を受け取り、蓋をあけて手をかざしながらビヨンドが《練》を行う。すると、飲み口から凄まじい勢いで中身が溢れ出した。

『こ……これは…!? しかし、これだけでは……』

『手品、と言いたいんだろ? んじゃ、ほれ』

『うわっ! とと……』

ペットボトルをひっくり返し、記者に投げつける。

『調べてみな。ただのペットボトルだぜ。しかもお前が持っていた物だ』

『……いや、確かに何も仕掛けは見つかりませんが…』

『疑い深い奴だな。まあいい。じゃあそれ、ちゃんと持つとけよ?』

『は? はあ……』

ビヨンドがオーラを伸ばし、オーラでペットボトルを包み込むと、一気にそれを握り潰す。

カシヨツという音とともにあつけなく潰れて圧縮されるペットボトル。念能力者じゃない者からすれば、ペットボトルがいきなり潰れ、宙に浮いている風景に見えるだろう。ビヨンドは更に他の記者の飲み物も切ったり潰したりして破損させた。

『ま、これは子供だましたな。だがこの程度は訓練さえすれば全員できる。この場にいる奴でも誰でもだ。そして「念能力」の可能性は無限だ。極論何でもできる。程度は資質にもよるがな。さて、質問は多々あるうが、後で詳しいことは受け付けるから先に結論から言うぞ? このような力を隠してきたハンター協会はこの世界で特別な地位を

築き上げてきた。だから強かった。国際社会においても一定の発言権を得るほどにな……しかし、人間の欲望には限りが無い。もつと強く、もつと欲しい。そして「外」には【暗黒大陸】だ。協会は欲しがった。その祝福を独り占めしたかった。そこに決定的な転機が訪れた。【暗黒大陸】からの帰還者が現れたのだ。そして、【暗黒大陸】への切符が一気に現実になった。だからこそ奴は狂った。情報を秘匿し、徹底的に封鎖した。調査中だが、このテロは壮大なマッチポンプだ。厄災によつて国際社会が弱つたところで自動的にテロに対応出来た協会は発言力が増す。そして、独占的な【暗黒大陸】への調査ができるというわけだ』

『あ、あの！ 色々と聞きたいことが多すぎるのですが、まずその【暗黒大陸】からの帰還者とは？』

『そうだな。実はオレも昔【暗黒大陸】に極秘調査で渡航したことがある。結果は散々で辛うじて生きて帰ってきた程度だ。それは真の帰還者とは到底言えん。前会長もそうだ。いわゆる何の成果も得られませんでしたってやつさ。そして現在に渡り【暗黒大陸】の渡航は禁忌となった。その存在も含めてな。前会長が権力を使ってそうした。まあ、凄まじいリスクに対してリターンが皆無なら国も協会もそうせざるをえん。当時

としてはそれが当然の措置だと今なら納得もいく。しかし、それは覆った。昔々の200年以上前に「暗黒大陸」に渡航した奴がいたのだ。当然消息不明で奴の生存は絶望的だと思われていた。しかし、奴は生きて帰ってきた。多くの「リターン」を手にしてな。奴こそが「真の帰還者」だ』

『そ、そんな……!! 誰ですか!?! その人物は!』

『それが「重要参考人」であるカームⅡアンダーソンだ』

『バカな……そんな荒唐無稽な……』

『それがそうでもねエ。現在詳しく調査中だが、2年近く前にヨルビアン大陸上空に未確認飛行物体が現れた記事を覚えているか?』

『2年前? ああ……ありましたね。三文記事のゴシップ扱いでしたけど……』

『それは協会がそうなるようにもみ消したからだ。実際それは「暗黒大陸」の帰還者だった。そして協会はその飛行物体を幸運にも帰還者だと特定し、接触した。それが約一年前。そこから帰還者と協会上層による談合が始まったとみている』

『はあ……到底理解しかねる内容ですが……』

『だが事実だ』

『……それが本当なら世界がひっくり返りますよ』

『事実ひっくり返ったじゃねエか。これはそういうことだ。だが、残念なことにそれを

前会長が独り占めしようと画策した。この事態はそうして引き起こされたのさ。食い止められたのは奇跡としかいいようがない』

『それは……そもそも、どうやって阻止できたのですか?』

『それが最初の話に繋がる。我々もご存じの通り【念能力者】だ。さつきも言ったがこのパリストン新会長と我々の連携が本当に上手く重なった。文字通り奇跡的にな。犠牲は多く払ってしまったが、おかげでここに堂々と立っていられる訳だ。今回の英雄は誰かと聞かれれば間違いなくパリストンと答えるだろう』

『ははっ! ビヨンドさん、大げさだなあ』

『いやいや、真面目にそうだろ。記者共、お前等が生きてるのもコイツのおかげだからな。ちゃんと記事にしとけよ!』

会場内から笑いが漏れ、和やかなムードになる。それを苦虫を噛み潰したような表情で見つめるカーム一行。いや、メルエムだけは愉快そうだ。その後、緩みかけた会話はビヨンドが厳しい表情を見せたことで引き締まる。

『だが、油断はならん。嚴重に管理していた筈の厄災がこうも簡単に盗み出され、かつそれを一方的に下したと思われるカームⅡアンダーソンは最早厄災以上の脅威だと言えよう。超特大のマッチポンプだな。そして恐らく昨日のV5首脳陣の暗殺は奴の仕業だ。確たる証拠はないが、嚴重なセキュリティを突破して首脳陣を暗殺できるなど普通は不可能だからだ。奴の狙いはズバリ、社会の混乱！そしてその混乱に乗じてハンター協会が世界を牛耳る算段だったわけだ。だが、ここにきて奴の思惑は潰えた。こうなつた以上、超危険人物として奴の確保が望まれる』

『そうですね。ハンター協会としても先ほど彼をA級を飛び越えてS級賞金首として手配しました。一刻も早く彼の確保が望まれます』

『そうだ。だが、我々も手をこまねいているだけではない。確実に奴を仕留める為の体制を整えつつある。だから…そうだな』

記者に向けた視線を外し、ビヨンドがカメラに正面に睨みを利かす。

『見ているだろう！カームⅡアンダーソン!! 貴様の望みは叶わん。貴様は失意の上で我等からの裁きを受けるのだ! 貴様には何一つ残りはしない! 覆せるのならば覆してみろ。このオレと勝負といこうじゃないか。オレはいつでもいいぜ? 貴様の

好きなタイミングでかかって来るがいい！ オレからは以上だ」

そう言つて席から立ち上がり、会見場を後にする。記者達はあまりの急展開に慌てながらもビヨンドを呼び止めるが、一顧だにせずに去つていった。当然、同じ場所にいたパリストンにも質問がいくが、パリストンは質問を受け流しつつ、煙に巻いたような答えを次々と繰り出して記者達を抑えていく。やがて時間となる頃には記者団は完全にパリストンの話術に転がされ、会見は無事に終了した。ビルのモニターがCMに切り替わる。

屋上にいたカーム一行は再び沈黙に包まれる。

皆が考える事は当然、この茶番についてだ。ものの見事に状況は逆転した。全ての罪はネテロ会長（とついでにジン）へ。そして自分はお尋ね者へ。それだけではない。ここに来て、奴等は特大のカードを切つてきた。もう人類は後戻り出来ない。これはそんな爆弾だ。そんな中、クラピカとレオリオが口火を切る。

「……これはメッセージだな。記者会見という体の」

「野郎、タバコ中のタバコに触れやがって……！」

その発言を聞きながら、メルエムが楽しそうに言う。

「うむ。中々面白い出し物だったぞ。カームよ。貴様は王にはならぬと抜かしていたが、このままでは彼奴がその座に就きそうだな？」

若干ニヤケながら告げてくるが、メルエムの中では私よりは奴の方が理解しやすいのかもしれない。

薄々分かってはいた。

もう私の居場所など、とつくになくなっていた事に。

さて……行くも地獄、引くも地獄。無論、人類にとって。しかし行くしかあるまい。

賽は振られたのだ。ならば私は少しでもマシな未来を掴み取る。

奴等は私を滅ぼす気であるのだろう。出ていけば、ありとあらゆる手段で私を封じに掛かるのが目に見えている。

——だが、舐めてもらっては困る。

私はカームIIアンダーソン。 “救世主” にして、 “神殺し” 。ありとあらゆる策略や謀略も全て打ち砕こう。私を滅ぼせるなら滅ぼしてみろ。

私はしぶといぞ。何せ、あの暗黒大陸でも生き延びたのだからな。そんな地獄に人類を行かせてなるものか。そんなふざけた企みは全て破壊してやる。

恐らくこれがここでの最後の闘いとなるだろう。

“救世主”としても。

カームⅡアンダーソン個人としても。

だから、なるべく軽い口調で皆に声を掛ける。まるで散歩にでも誘うかの様に。

「よし。じゃあ行こうか。全ての決着を付けに」

140、意志をもつ病

「お、おい。待てよ、明らかに罨くせーだろ！ ノコノコと出て行つて大丈夫か!？」

「……レオリオの言う通りだ。流石に分が悪すぎないか？」

「いえ、カームの言う通りね。今しか無いわ」

クラピカ、レオリオから心配の声があがるが、ビスケがそう断言する。

「その根拠は？」

「シンプルに時間の問題よ。時間を掛ければ掛けるほど不利になる。これは言うまでも無いわね。まだ社会は混乱している。会見を許したのは痛かつたわ。でもこれ以上手を拱いていたら全世界が敵に回る。今でさえギリギリの状態だわね。だからこそ、今しか無いの。まだジジイとジンが生きてるならなおさら」

ビスケが冷静に現状を伝えてくる。こういう時には本当に頼りになるな。まさにそ

の通りだ。本当は協会が襲撃される前が一番良かったのだが、こうなった以上贅沢は言えない。

残るはゾバエ、アイだ。奴はどちらか。特性的にアイ…か？ いずれにせよ両者共に放置できない。……後処理の事を考えると本気で頭が痛い、その為にも会長は救わねば。

「ビスケの言う通りだな。猶予はあまり無い。今なら会長も救える……何故会長をワザと生かしているのか分らんが、死んで無いなら希望もあるだろう。すぐに出るためにもこれから打ち合わせを始めよう」

懸念事項は沢山ある。ジンや会長は本当に生きているのか。ゴンの行方は、ヒソカの動向は、敵の思惑は。だが、猶予は無い。だから最低限の決め事はしておく。最悪の場合にどうするか。あまり考えたくも無いが、絶対に必要な事だ。あらゆる想定を短時間で重ねていく。

ここで終わらせる為に。

——そんな中、キルアの瞳が暗く、昏く、そして静かに冷たく沈んでいくのを、横にいるカルトだけは気付いていた——



ここは会長室。かのハンター達の最高峰、最高権威者の部屋である。その割には質実剛健であり、有り体に言えば質素な造りであるこの部屋の中央には、高価で広めのデスクとそこそこ豪華な椅子が据えられている。

これまではその椅子にはネテロ会長が座っていた。しかし現在、そこにはネテロを若返らせた様な武将風の衣装を身に纏う男が、さも当然かの如く座っている。

本来であれば有り得ない事だ。そこには百歩譲ってもパリストンが座るべきである。

しかし、そんな理屈を言い出す者はもういない。いなくなってしまった。

「ボクはその椅子自体にはあまり興味が無いもので」

唯一文句を言っても許される人物がこの有り様である。事実、彼らにとつてはハンター協会会長の椅子などはそれ程執着するべきものでは無いのだ。その遠大な計画から比べれば。

では、何故ここに護衛も付けずに踏ん返り返っているのかと言えば、暇つぶしに他ならない。もう、やる事など何一つ無いのだ。どう足掻こうが100%勝つ。無論、勝ち方にも色々あるが、勝つ事自体は確定している。後は、どれだけ自らの我を通した勝利になるか。200%の勝ちか、150%の勝ちか、はたまた最低基準の100%か。だからこそこの会見での挑発であり、現在の余裕である。

「ふふっ。勝負の8割は準備で決まる……その理屈で言えば最低基準は80%では？」
「バーカ。前提から間違ってるぜ。これは念戦闘じゃなくて戦略の話だ。従つてこちらの上限は100%じゃねえ。上限が100%しかねえと思ひ込んでる戦下手のアホ理論はオレには当てはまらねえよ」

「いやあ、歴史上の偉人に聞かせてあげたいですねエ。どんな名将でも敗北は付き物ですよ?」

「だが、そいつらは肝心な時には負けねエ。否、負けねエから偉人なのさ。ま、オレはいつでも不敗だがな」

「そういう事にしておきましょう……ボクも特等席で見させてもらいますよ。さて、そろそろ釣れますかね?」

「ああ。来たようだけぞ? ご丁寧にお仲間も連れてな。奴等の面を拝むのが楽しみだ」
「ボクも楽しみですよ……彼らの絶望に歪む顔が、ね」

そうして、「暇潰し」の相手は部屋を出て行った。これから彼の仕事が始まるようだ。その姿を見送った男はしかし、椅子から動きもせず静かに目を閉じる。まるで何かを噛み締めるかの様な表情で。

それは、一世一代の大勝負に期待しているのか。はたまた彼に僅かに残った感傷か――



「さて、とりあえず初手で会長達を救出する」

我々は協会ビルの前に立つ。人通りは全く無い。そしてビルも不思議な程に鎮まりかえっている。

「ビル突入か……まるであの時の再現だな」

「ああ、旅団の時か。今度は逆の立場だが」

「弱気になったってしゃーないわさ。あらゆる罠を踏み倒す。そしてカームにはそれが出来る。アタシ達はカームが落とされえない様に努力する。ただそれだけよ。例えば何があつたとしてもね」

「時間が惜しい。行くぞ」

ビル内に侵入する。やはり静かだ。まるで誰もいないかのように。いや、ほぼ誰もい

ない。そして、気付いた。そういうことか、と。どうやら簡単にはいかせてくれないらしい。それもそうか。

そのまま全員で地下へ向かう。スムーズに行くなら都合が良い。

やがて、地下への長い階段を下り、その部屋の前まで辿り着いた。

「恐ろしい程順調だな。敵は何を狙ってる？ 分断させようって感じも無かったしな。明らかにオレ達を捕捉してる筈なんだがな」

「間違いなく2人はここに居るんだな？ カーム……カーム？」

「……ああ、間違いはない、な」

「どうした？ 歯切れが悪いが」

「いや、生きてはいる。だが、少し刺激が強いかもしれん」

「おいおい、ビビらせんじゃねーよ！ ここまで来たらどつちにしろ行くしかねーだろ」
「……そうだな。では入るぞ」

扉を蹴破る。いかに強固な扉であろうとも今の自分には無意味である。扉を開けた先に彼らは居た。

「ジジイ！ 助けに来たわ…よ…？」

ボロボロの格好をしていた。それはまだ分かる。だが、その眼は虚ろで、限界まで見開き、尚且つ何も映していないかのようだ。低い唸り声をあげ、理性を失ったかの様な…極め付けは…ジュルジュルと自らの腕を齧り、出て来る体液を啜っている。最早、これではヒトでは無い。ゾンビか何かだ。《円》を飛ばした時から見えていたが、嫌なものだ。

全員が全員フリーズしていた。だが、いち早く復帰したのはレオリオだった。

「……ハッ!? お、おい、みんな！ ボーっとしてんじゃねエ!! この距離からでも分かる重篤な感染症だ!! これが厄災なら空気感染も有り得るんだぞ!! 低く見積もってもレベル4以上だ！ すぐに息を止めてこの場から離れるんだ!!!」

レオリオが我々を彼らから引き離そうとする。まあ、間違っていない。普通ならここで二次感染だ。

「ゾバエ、だな」

「「「?!」」」

「マ、マジか……こりやヤベえぞ！ 俺等も感染してしまう!!」

「慌てるな。今のところ私が『聖光気』で皆を包んでいる。感染はさせない」

その言葉で一同はホツとしたようだ。クラピカがおそろおそろ聞いてきた。

「……で、どうなんだ？ カーム。これを聞いていいかどうか分からんが……治せるのか？」

「ハツキリ言つて医者目から見たら絶望的に見えるぜ……オレの能力じゃ少なくとも無理だ」

カームは無言のまま患者である2人の側まで寄る。2人はカームから離れようとするが、やがて金色のオーラに触れられてビクツと身体を震わせる。

しばしの沈黙。

「……なるほど……なかなかしぶといな……」

聖光気で“奇跡”を行う。どんな卑劣な罠であろうが全てをひっくり返す事が出来る、反則的な力だ。しかし、実際問題、奇跡の治療がパプよりも難しい。その原因はこの病の特性にあるのだろう。やはりただの感染症では無い。

やがて、10分程時間を置いて漸く2人の目に光が戻り始める。成功だ。

「……………うあ。ぐっ……………カーム……………か」

「へっ……………思ったより早かったな……………」

2人が正気に戻る。ただでさえボロボロになっていた上に内臓が徹底的に破壊されていた。そして恐らく未知の感染症。本来ならば助からない所だったが、それこそ奇跡である。

「ジジイ！ ジンも2人揃ってこっ酷くやられたようね。で？ 時間が無いから色々

聞かせてほしいんだけど」

「……………」

「おい！　なんで無言なんだよ！　ゴンは!?　手掛かりは無いのか!?」

キルアが切羽詰まった様子で追及している。普段からスカしている彼から比べれば随分と余裕を無くしていて、危うさすら感じる。しかし、2人は躊躇った様に語らない。キルアがジンに掴み掛かり、揺らす。

「テメエの息子だろ!!　答えろよ!!!」

ジンに掴みかかったキルアを引き剥がしながら再度訊ねる。もうキルアも危険な状態だ。早く解決しなければ。

「よせ、キルア!　……会長、ジンさん。答えてください。一体何があったのか」

「…………詰みじゃ」

その弱弱い発言に全員が絶句する。全く会長らしく無い。操作系で操られているか疑う程に。あまりの覇気のなさのせいでコッソリと若返ったはずなのに、以前より歳をとったかのようにさえ見える。

それはジンも同じだ。彼は苦々しい表情と雰囲気ではあるが。

「……………どういう事ですか？　詰みとは？」

「……………ジジイ、端的すぎるぜ。まあ、それだけ敵が厄介だったんだよ。マジで今回は厳しかった。なんてったって全人類が人質になったんだからな」

「……………まさか」

「そう。最初から話すぜ？　このテロの首謀者はそのジジイの息子であるビヨンドとパリストンだ。奴等は単純に強い。強いが、それだけなら大した事は無い。無かった。だが奴等、厄災『ゾバエ』の力も完璧に制御してやがった。それがオレ達の誤算だった。そしてオレたち以外は……………ほぼ全員死んだ。ここには一部を除いて奴等以外に生きる者はいない」

やはり、な。

「……………それで？」

「その厄災、ゾバエだが……オレの予想より遙かに悪質な奴だな。電撃的な奇襲も相まってなす術なくやられた」

「ちよつと待てよ！ 奴等、この協会内でバイオテロカマしやがったのか!？」

「それだけならばどれだけ良かったか……」

——なるほど。嫌な予感的中、か。あの建物の外の人々が外に出ていなかった理由は……。

この2人がこうまで意気消沈している所を見れば、こちらの最悪の想定を更に斜め上に行つたらしい。

しかし、これは参つた。どうりで自信満々なわけだ。もし、この想像が当たっているならば、今までとは比にならない、人類史上最大の危機だな……。

「まず初めに言っておく。ゾバエとは……意志を持つウイルスだ」

141、反撃の狼煙

「ま、待てよ……確認するが、意志つてどういう事だ？　まさか……まさか人間レベルで思考する、とかじゃねえよな？　せめて、多少頭いい、とかだよな？」

ウイルスは確かに意思をもつ。一般的な生物学の定義で言えば、(1) 自己複製する、(2) 細胞で構成されている、(3) 代謝を行う、以上の3つが生物の定義だ。ウイルスは(2)と(3)が無い為に非生物とされている。だが、彼らは遍く世界に存在し、自己増殖の為に戦略を立てる。

それは我々人間と比べるべくも無く、定義が人間とは異なるが、確かに彼らには意思があるのだ。

「生きる」

という意思が。しかし、しかし、だ。その群体としてのウイルスが、人間並に戦略を立てる事が可能なレベルで意志をもつとしたら？

例えば度々我々を脅かすインフルエンザ。これらがもしそうだったとしよう。そうなった場合、まず全世界が彼らに席卷されるだろう。巧妙に抗体やワクチンなどの人間側のセキュリティをすり抜け、生かさず殺さず、瞬く間に増殖するし、そうなったらもう我々に止める術は無い。感染方法も、接触感染、飛沫感染、更には空気感染など自由自在だ。何故なら彼らウイルスは凄まじいスピードで進化出来るのだから。更に言えば、勝手に被感染者である生物の身体を作り替え、自らに最適の環境を作り出すだろう。もしそうだとすれば、その先は考えたくも無いが、感染者は、奴等のいいように操られる可能性すらある。そうだとすれば、我々人類はただ彼らの奴隷、いや、正に家畜と化すだろう。彼らの気分一つで容易に滅ぼされる存在として。

「……資料によるゾバエの脅威はその感染力と、症状の恐ろしさ。それもレベル4を超えるほどの。オレ達はそう把握していたし、事実そうだった。だから環境許可庁で嚴重にサンプルと共に保管されてたんだ。厄災の中でも封じ込めが可能なレベルであると

な。だが、甘かった。アレは……牙を隠していた。若しくは変異していた」

「有り得んのじゃ。アレはビヨンドが持ち帰ってきおった厄災じゃ。当然徹底的に調査された。一度大規模なバイオハザードが起きかけたが、無事に封じ込めた。その時点では人類を危機的状況まで追い込むウイルスとして、天然痘より遥かに厄介、という位置付けじゃったはずじゃ。永遠の生命が得られるという絶妙に人間の欲望を刺激し、そしてそれに釣られた愚か者達を絶望に突き落とす為の存在として」

そう。ゾバエの脅威はそこだった筈だ。人間の欲望を刺激し、パンドラの箱を開かせ、絶望の底に突き落とす。そういう意味では、確かにヤバイウイルスではある。厄災の名に相応しい。しかし、更に意志をもっているとなると話の次元は異なる。

それは正に、最大最強の厄災と言うに相応しい。

「ま……不味いぞ……！　それが本当なら最早安全な場所なんて無い!!　ワクチン……も無駄になる可能性が高い！　クソツ!!　打つ手がねエ」

そばで聞いていた私も暗澹たる気持ちになった。そう来るか、と。この後の話の展開

も私は分かっている。確かに私を相手にするならば非常に有効な手段だろう。しかし……そこまでやるか……。

「もう手遅れじゃ」

「は？」

「手遅れじゃ、と言うておる。最早ゾバエは……この世界中に広がってしまおうた」
「バカな……！ 全然そんな気配は無かったぞ!？」

レオリオが吠える。それぞれがその恐ろしさに気づき始めていたが、信じたくはない気持ちも分かる。だが……ウィルスの脅威を誰よりも知っている私からすれば、理解できるとしてしまった。

「……潜伏期間」

「「!!」」

ボソッとジンが呟き、全員がそちらを見る。そうなのだ。感染してから発症するまでの期間を潜伏期間と呼ぶ。意志をもつウィルスだとしたら、潜伏期間を調整する事など

容易い。だとするならば……一体いつからだったのか。

まさに奴等は人類全てを人質にしてみました。いつでも傀儡に出来るという爆弾を埋め込まれた。

その時、部屋に据え付けられたテレビの電源が入る。これは会長室だ。そしてその中央に不遜な態度で座るビヨンドがいた。

「よオ！ 〃救世主〃 サマとその御一行。初めまして。オレがビヨンドだ」

出たな……全く、ふざけた事をしてくれやがって……！

「事情はこのジジイから聞いたろ？ んじやあ早速初めましてでわりいんだが、この勝負、オレの勝ちだ。素直に降参してくれりや悪いようにはしねエゼ？」

「いきなりご挨拶だな。私が諦めるとでも？」

「別にいいんだぜ？ 抵抗しても。オレ達や既にこの世界中を掌握した。気分一つで全人類を今すぐゾンビに変える事だつて可能だ。今までそうしなかつたのはお前を待つてたからなんだぜ？」

「……何が望みだ？」

「何も。いや、お前さんには重要な役割があるな。オレ達人類を暗黒大陸に導くっていう重要な役割がな。だからここで潰したくねえ。お前が望むならお前と親しい人物は見逃してやる。それでどうだ？」

「話にならない。第一ゾバエに侵された人類は貴様達の奴隷だろう」

「それがそうでもねえんだなあ。ウィルスには無限の可能性がある。お前なら分かるだろ？ ゾバエはその気になりや人類と共生する事だつて可能さ。むしろ今より遥かに長寿になり、病気知らずで、念能力すら自由自在に発現する事だつて可能だ。だとするならば、これは最早“進化”と言えるだろう。人類は新たなステージを迎えたつて捉えてくれ」

「……そこには自由意志は存在しない。ただ、ゾバエという存在に操られるだけの傀儡の出来上がり、と」

「人聞きの悪い事言うなよ。そりや多少手伝ってもらう事もあるうがな。その人間の意志とやらも普段と変わらんぐらいには残しといてやるぜ？ というか、その方が面白エからなあ」

本当に腹の立つ奴だ。何が「残しといてやるぜ」だ。そんな気はサラサラ無いくせに。だが、これでコイツの目的が完全に理解出来た。奴はやはり行くつもりだ。全人類を

伴って暗黒大陸に。今までは不可能だった。国や何やらのしがらみが邪魔をするからだ。しかし、今ここにそれが解消された。人類は奴等の生贄と化し、特攻する。どれだけ犠牲を払おうとも関係ない。

だが、ここで問題が一つ。

その望みを叶えたいならば、奴等は私を倒さねばならない。

「……貴様が現在の『人間の王』か」

これまで黙って事態を見ていたメルエムが話しかける。

「……よオ、蟻の王サマ。オメエがいるのは予想外だったぜ。てつきり滅ぼされてるかと思っただがな」

「ふん。余は既に王ではない。ビヨンドと言ったか、貴様は上手くやったようだな。名実共に貴様が王だと言う事に異論は無いだろう。称賛に値する」

「ケツ。蟲に褒められたって嬉しかねエなあ」

「素直に褒められておけ。此奴等は自由意志がどうのこうのと吼えているが、余からすれば笑止。王足るモノの意のままに、手足として動くことのできる側近の存在は不可欠！ ソレをどれぐらい揃えるかが王の器とも言えるのだからな。貴様は揃えることができた。それだけのことだ」

「ありがとよ。ま、そういうこつたな。んで、オメエはどうするんだ？ 裸の王さまよう。一応聞いとくがオレ達と組むか？」

「ふ……分かつているだろう？ 王とは並び立たぬモノ。支配するモノ。貴様と余は相容れぬ。この世に存在するだけでいずれかが滅びねばならぬ。人間の言葉で言えば不倶戴天の敵、という事になるか」

メルエムから挑戦的なオーラが溢れ出す。その様子は楽しそうですらある。楽しんでるようで何よりだ。まあ私も同意見だから良かった。

「ふうん、そうかい。ま、いいけどよ。んじや精々泥船で頑張りな。死んだらオレ達が有効活用してやつからよ……さて、雰囲気から察するにお前ら全体の意見もそれでいいな？ んじや、始めるぜ」

そうして、メルエムとの言葉を終え、ビヨンドは開始の宣言をする。プツンと映像が切れ、ニュース映像に切り替わる。アナウンサーが慌てながら原稿を読み上げている。

『緊急速報です！ 現在、大規模な暴動が発生しています!! 場所は……い、至る所で、世界中で起きています！ 先程投稿された映像です!』

何処かの都市のアーケード街の様子が映し出されている。逃げ惑う人々と、それを追いかけて喰らっている。明らかに正気を失った人間の群れ。老人から赤子までが寄つてたかつて貪られ、数多の絶叫が響き渡る。阿鼻叫喚の光景が繰り広げられていた。スタジオに切り替わる。

『この様な事態が全世界の都市を中心に同様に起こっています！ 原因は今の所不明！ 各地で連絡がとれなくなっています！ え？ 未知の感染症の疑いあり!! 首謀者は、カームIIアンダーソン!? ……、現在唯一情報を継続的に流しているハンター協会からも非常事態宣言が出されました！ とにかくッ！ 全国民の皆様はくれぐれも外出を控え、固く施設してください!! 今すぐ！ 事態が収まるまで息を潜めてやり過ぎてください！ 我々もこの放送後に逃げます！ どうかヤケを起こさず、命を守る行動をとってください！ ……ジョー、どうした？ まさか』

画面外から人間とは思えない様な咆哮が響き渡る。

『ガアアアア i r e e e c アオ f お i s h f i e m q l f e h c k !!』

『い、嫌、やめ、やめてえええ!! あギイイイイ!!!!』

誰かが襲われた。そして、必死で放送し、今起こっている事態を止めようと声を掛け続けていたアナウンサー自身も目が充血し、顔色が明らかに悪くなっている。

『誰か! ジョーを止めろ!! ぐっ……ぐうううウウう d u e t アア!!』

『』

ガシャン! と派手な音を立ててカメラが上下反転する。続いてプシュツ、プシュツ、グチャツと生々しい音を立てて画面に血がべとりと貼り付き、視界が更に悪くなっていく……そこで映像は途絶えた。

……糞つたれめ。タチの悪いゾンビ映画の導入のようだ。人類の終焉という言葉が頭を過ぎる。最早、猶予はほぼ無い。画面が切り替わり、再びビヨンドが出てくる。

『楽しんでいただけたかな？　ちよいとフライングしたが、今、全世界で同時に起きてることだぜ？　『救世主』サマよう。オメエなら何とかできるか？』

……ここまでやられて不愉快にならない者などいるのだろうか。いや、いない。なので八つ当たりすることにした。

「そうだな。お前等は私を完全に怒らせた。必ず探し出して潰してやる。楽しみにしておけ」

『おお、怖。んじゃ、精々頑張れよ……プギョッ！』

ビヨンドがその場で圧壊され、内蔵をひねり出して潰された。まあ、この協会内のスタジオから生中継してたらこうなる。突然のグロ画像を未成年ズに見せてしまったが、衝動的にやってしまった。反省はしていない。慣れてるだろうし。

「お、おい、アイツ、破裂したぞ！　死んだのか!？」

「私がやった。私の《円》圏内にいるならば、どんな防御だろうが無意味だ。だが――」

「アレが本物じゃねえ……だろ？」

「え、マジ？」

正解。ジンも流石に分かっていたか。そう簡単にはやらせてくれないと言うことはわかりきっている。本当に面倒な奴等だ。どうせ誰かの念能力か、ヒソカの入替わり能力的なアレだろう。

「その通り。そんな簡単にやれるほどアホじゃないって事。さて、場所を移そう。どうやら潜んでいた団体さんがお越しになったようだからな」

待機していた気配がこの部屋に殺到するのを感知した。ゾバエ患者……とは少し様子が異なるが、似たようなものだ。だが、雑魚を寄越した所で意味がない事は分かっているはずだが。

「マズイぞ！ 敵が迫ってる！」

「落ち着け、私に対処する」

バタバタと侵入者が倒れる。殺してはいない。念の為。だが、しばらくは起きないだろう。

「——ここは狭いな。場所を変えよう」

ドゴオツ!!

念弾で天井に大穴を開け、全員で移動する。そうして出たのは一階のエントランスだ。程よい広さで丁度良い。しかし、本当に全人類を人質にとりやがったか。ハツタリだといいが：アレだけ自信満々ならば恐らく事実だと思っただ方がいだろう。そうやって私の心を折る気か……舐めやがって。まだウイルスが残存している可能性が、エントランス全体に「聖光気」の結界を張る。これでとりあえずは大丈夫か。

「……すまんの」

「いいって事ですよ。少なくとも結界内だと再感染は無いはずですよ」

「……あまりこんな事は言いたく無かったが、カームよ、頼みがある」
「聞きましょう」

「お主は……全人類を救えるか？」

……会長にしたら苦渋の決断だろう。よりによって自分の息子の不始末だ。しかし、

これは最早人類が対処できる範疇を超えている。

「それしかありませんからね。だからやってみますよ」

「すまぬ……結局お主に負担を掛けてしまうた」

「いえ……敵の規模が想定以上でしたから。それに、いい加減私もムカついています。消し炭になるまでぶん殴ってやりたいぐらいにはね」

「そうじゃな。ワシらも同意見じゃ。しかし——」

「おいおい、何の話だ？」

「シツ。黙って聞いておけ」

ジンさんは分かっているな。私がどうするかを。

「……出来るのか？」

僅かな不安を見破られたのだろう。会長が私を真剣な目で私を見てくる。実は少し自信が無い。恐らく半々だ。あの時とはわけが違う。だが、やらねばならない。

「やりますよ。私をあまり舐めない方が良いということを奴等に教えてあげないといけませんからね」

「なあ……カームは何する気なんだ？」

「……恐らく、全人類に潜伏しているウイルスを奇跡で治癒し、更に再感染させない様にする……という事だろう。可能かどうかはともかくな」

「ハア!? んな事出来るわきゃねーだろ！ 一体この世界に人類がどれだけ居ると思っ
てんだ!？」

「カーム、それはいくらなんでもムチャだわよ!」

「やる前に諦めたくは無い。だからやる。ただ、私は暫く動けなくなる。今から『聖光
氣』を君達に付与する。ゾバエを侵入させない奴だ。最低限しか出来ないが、感染は防
げる。ゾバエには意志がある。だが、群体で統一した意志を持つ事は普通はありえな
い。何処かに必ず統率者がいる。それが潜伏しているピヨンドまたはパリストーンだろ
う。それを叩き潰せば、こちらの勝ちだ」



ここまで折られた事は久しく無かった。ここまで裏切られた事は無かった。敵は、奴は全人類を裏切った。大罪だ。創世記にも遡るほどの大罪だ。これほどの規模の裏切りは人類史上初かも知れん。そして、それを為した者はよりによって自らの肉親であった。そして、ワシはソレを止めることができなんだ。無能、と言われても何ら反論できん。そしてゾバエ、これは本当に恐ろしい病じゃ。飢え、渇き、苦しみ……それらを何十倍にも凝縮したかの様な苦痛が際限なく襲ってくる。理性が辛うじて残るのがよりタチが悪い。この状態で永遠に死ねないとは……絶望の病とはよく言ったものじゃ。

この勝負は奴等の勝ちじゃ。徹底的に、容赦なく。その為の全人類人質だ。奴等からすれば、こちらの作戦が成功しようがしまいがどちらでもよい。

救世主を封じ込めて弱らせる

これが奴等の狙いだからだ。カームが弱ってきた所にトドメをさす。恐らく潜伏しているヒソカ辺りが筆頭とみた。それまで奴等は隠れているだけでよい。これで奴等の支配は万全となる。嫌になるほど遠大で綿密な計画。『救世主』は人類の守護者。その性質として人々を見捨てられない。古の昔から、彼らは総じてそういう性質をもつ。だが、その代わりに人類に仇なす存在に対しては無敵に近い存在でもある。

だからこそ、奴等は万全を期した。

ほぼ無敵の存在であるカームは、奴等からしたら天敵に等しい。呪いは効かない。毒も効かない。人類最強の兵器も、どんな念能力すらも無効にしてしまう恐ろしい存在。それを封じ込めるために奴等は人類全てを犠牲にする。

だが、カームも馬鹿ではない。奴等の考えぐらい看破しておるじやろう。何もかも分かっているながらもカームは人類を救う。歯痒い事に我々ができることは少ない。それが彼の弱点であり、我々の弱点でもある。ここまでの動きは全て奴等にとっては予想通りじやろう。

そして、奴等の思い通りのシナリオを辿り、人類は奴等の奴隷となる……そんな絶望

的な状況。

そんな中で、我々の勝利条件は何か？

そもそも、ここから勝利などあり得るのか？

ある。

それは、カームを落とされないこと。この人類の“救世主”を守り切ることこそが唯一の勝利条件だ。会長である自分とジンは敗北した。だが、彼が健在である限りはまだ希望はある。最早全世界が敵とも言える。だが、彼の言うとおりやるしかない。

ワシは何を腑抜けておったのじゃろうな。腑抜けてる場合ではないのに。カームがやると言ったらやるじゃろう。このミツシヨン、誰かを犠牲にせねば達成できぬかもしれぬ。だが、やる。ワシはハンター協会会長じゃ。最後の奉仕をせねばな。

「ジジイ。やるこた分かつてるよな？」

生意気にジンがほぎきよる。昔から此奴の強メンタルは驚嘆に値するの。ワシと同じ目にあつておきながらこれじゃからな。だが精神的に植物とまで言われたワシを舐めるなよ。

「……ワシやそこまで老碌しとらんぞ？」

「そこで強がり可言えるなら上等だぜ……で、どうする？」

どうする？ じゃねーわ。こんな時まで試すでない。じゃがまあ、ワシも自分のケツぐらいは自分で拭けて事か。

「まず、カームよ。大体で構わん。どれぐらいかかる？」

「申し訳ないですが、全くの未知数ですね……少なくとも3日以上はかかると見てくだ
やう」

「……奴等は探せるか？」

「……どうでしょうね。異空間とかに逃げられたら正直厳しいと言わざるを得ません。
というか無理です」

「参ったのう……八方塞がりか」

「——ですが必ず姿を現しますよ。そこは断言しましょう」

やっぱり気付いておったか。

「……そうじゃな。そこには同意見じゃ。ならばそこを叩くしかあるまい」

少なくとも今は本当に何もできん、か。せめて露払いは、と思つたが……。

「しゃあねえ。正攻法だな」

「うむ。根比べじゃな」

「ちよ、ちよつと待てよ！　だから何の話なんだって!!」

レオリオか。カームの弟子の1人の。話が終わったら説明してやるか。

「ワシらがものの役に立つかは分からんが、基本的にはお主が邪魔されんように守る。それでよいか？」

「すみませんね。では、そちらは任せましたよ」

「ふん。待つだけとはつまらん。だが、逆に言えば待てば奴等は来るといふなら待つてやるか」

偉そうに口を挟む異形の存在。そう言えばコイツ、ナチュラルに居るがキメラアントじゃね？　しかもオーラがヤバイ。もしかして王とか言う奴？　ってかビヨンドも言つとつたな。カームが連れてきたんじやろうが、また特大の爆弾持つてきおつて……まあ、今の状況じゃありがたいっちゃありがたいがな。

「……作戦に異論はないわね。人類を救うために動けないカームを守らなきゃならない

……敵の能力は不明、且つ、戦力は未知数。少なくともヒソカは来る、と。こりや誰か死ぬかもしれんわね」

元弟子がこつちを見よる。コイツ、言いづらい事言いおつて。いや、そもそもワシが死ぬ筆頭みたいな視線はやめんか。まったく。カームがビスケに向かつて絶対に死なせないと言言しておる。愛されとるのお。ゴツくなかつたら、いつも思っておつたが、ここに来て更に進化しよつていい女になつたもんじゃ。ま、生死は時の運じゃ。なんとも言えんが、口約束ぐらいはしておくかの。カームの精神状態も作戦の成果に左右されるからな。

「いや、誰も死なさんぞ？　ワシを誰じゃと思つとる」

「息子に負けた奴」

「パリストンに裏切られた奴」

ぐつ……おのれ！　ジンもビスケも痛いところを！　ていうかジン！　お主も人の事言えんじやろ！　しかし、しゃーないか。ワシもふがないことこの上ないが、せめて足は引つ張らん様にせねばな。

「カーム。情けないが、この世界の全てをお主に託す。すまんが頑張ってくれ」

そんな、ワシの情け無い願いを、カームは笑いながら任せてくださいと返してきた。此奴も初めて会った時より強くなった。無論、精神的な意味でじゃ。初めは少し危うかったからの……これまでの仲間との絆、愛、か。ならばワシらはそれを無くさぬ様にせねばならんな。

それこそが、ワシらが出来る唯一の支援かもしれんからのう。

142、三賢猿

全員に「聖光気」を付与する。私が集中している間に分断されて人質にされたら目も当てられない。だから少しだけ強めのオーラだ。……これでとりあえずは大丈夫。念のため、全員にマーカーを打ちこんである。何かあったら即座に中断して駆けつけられるように。

更に、秘蔵のアイテムを全て放出する。少しでも足しになるように。まだ黄金リングを食べていない仲間にはリングを。会長には若返りの水を。もう秘匿がどうか気にしないでいいから楽だ。これで少しでも勝率を上げられるならば惜しくはない。

メルエムは……そうだな。

「メルエム」

「何だ？」

「君にはこれを」

取り出したるは、暗黒大陸の魔獣（？）の死体。それを何体か。あんまり特殊能力とかは無いけど、やたら強かった奴を適当に見繕う。

「……………これは？」

「君の食料だ。向こうで私が仕留めた。これから少し時間が掛かるからな。食事ぐらいは用意するさ」

「なるほど？ ……で、その代わり余は人間を喰うな、と？」

流石、話が早くて助かる。

「そうだな。私も流石に同族を目の前で喰われるのは勘弁だ。その代わりコイツ等なら問題ない」

「ふむ……………まあいいだろう。その辺の下手な奴より美味そうだからな」

納得してくれて何より。これでメルエムの強化もできるならそれでよし。さて、準備

はできた。最低限だが、仕方ない。

——始めるか。一世一代の大博打を。

豪華なエントランスの中心に陣取り、座禅を組む。まさか自分が人類の命運を握るとは夢にも思わなかつたな。しかし、実際にやってみるとプレッシャーが半端ない。救いなのは、異世界で似たような経験がある事だ。その感覚を信じてやるしかない。

それにしても、原作ではこんなシナリオは無かつた筈だ……多分。もう原作など記憶の彼方に微かに残る程度だ。だが、私が読んでない先でこんな理不尽な事があつたら、どうあがいても詰むな……いや、それをやってしまうのが大先生だった。しかし、それでも今よりはマシだろう。原作ではカメラアクト単体で出現し、ネテロ会長はそこで殉じた。こんな同時多発テロなど起きていなかつたからな。

だとすれば、やはり私のせいだろう。

私が帰ってきてしまったから、それが何かのトリガーになって大勢の無辜の民が犠牲になつた。ヒソカもだ。私が軽はずみにちよつかいを掛けなければ……いや、やめよ

う。そうだとしても、そうであるならば尚更、私が始末をつけなければならぬ。

精神を研ぎ澄ます。ここから先は前人未到の域。星の意思との綱引きが始まる。後半になるにつれそうなる。だからこそ、私自身の意志を強く持つ。貫き通すのだ。この世界は美しい。滅びてほしくないから

集中する。地脈……星の一部にアクセスし、人類の所在を明らかにする。先ずは《円》の届く範囲から……そして治療&守護の付与。くっ……負担が、大きいな。コレを何十億か……保つてくれよ、『聖光気』！



カームから莫大な量の『力』が溢れ出す。そして、それは協会の広いエントランスを埋め尽くさんばかりに広がり、そして各地に散ってゆく。よく見れば、地下にもソレは

広がっている。

その光景は、側から見れば信じられない程の“力”の奔流であり、神の創世と言われ
ても納得できるものであった。カームは文字通り、全ての力をもつてこのミツシヨンに
挑んでいる。周りはただ、静かに見ているしか無かった。

そんな中、ジンはキルアの側にいた。

「……始まったか。正直、半端ねえな」

「……………」

「シケた面してんな。ゴンのダチ」

「……………何？」

「いいか。落ち込んでるようだから言うが、よく聞け。ゴンは大丈夫だ」

無反応に近い反応をしていたキルアが初めて顔を上げる。

「……………根拠は？」

「アイツはちよつとやさつとでくたばる様な奴じゃない。これまでもそうだっただろ
？」

「でも…ヒソカは……！」

「落ち着け。大丈夫だ。アイツはオレの子だからな」

自信満々に言い放つジン。そのあまりの根拠ない言い切りにキルアは呆然とする。そんな中、ジンは畳み掛ける。

「アイツは特別なんだ。だからオレはアイツに試練を与えた。そんなアイツを信じてやってくれや。話は以上だ。お互い頑張ろうぜ」

そう言つてジンはキルアの頭をクシャクシャと撫でて他のメンバーの元へと向かう。キルアはまだ呆然としていたが、ジンの離れぎわに何かを言い掛けた。

だが、それは言葉にならずに彼はそれを飲み込んだ。



「!! 始まつたぜ……! すげえな……!」

「これほどの規模になると、もはや人間の枠を超越してるわ。空想上にしか存在しない神……に近いわね。以前カームが言ってたけど、人類の危機になると星が力を貸してくれるらしいわよ!」

今現在、自分たちに行うことができることは「待ち」だ。いずれ襲いかかってくるだろう敵に、誰も死なないまま迎え撃つ。ただそれだけだ。というか、絶対に私達は死んではならない。それが勝利条件の一つである。カームを絶望に落としてしまえば、勝てるものも勝てなくなる。これはそう言う勝負。

とはいえ、待つ時間はかなり長い。最低で3日という時間をカームは申告した。これでも全人類に行う事を考えれば破格のスピードだと思う。ともかく、最低でも3日。下手すれば一週間以上という長丁場だ。あまり緊張しすぎることは禁物だ。むしろ適度に身体を休め、敵の襲撃に即座に万全の状態で当たれることが望ましい。その点、ジンはその辺の判断が適確で、最速だ。彼はキルアと二言三言話してリングを食べるとすぐに離れた場所で寝転んで寝始めた。ハッキリ言ってやる気あんのかと言いたくなるよ

うな態度ではあるが、それが一番正解である。

あ、クラピカとレオリオが絡みに行った。あんまりな態度に腹を立てたつてトコかしら。アイツらもまだまだね。でも、ジンに短い言葉であしらわれて納得したみたい。ジンもそういうところは流石よね。

さて、じゃあ私は自分のできるコトしましょうか。

「あー。じゃ、私は食糧確保してくるわ。ジン、案内してくれない?」

「お、おい。ここから離れたらマズいんじゃないか?」

「大丈夫よ。奴等は今は絶対に勝てない。だからむしろ手を出してくれた方がありがたいくらいね。それに、実際食料確保は必須よ?。カームも持ってなかったから頼まれてたしね。今しか出来ない事ではあるわ」

「む…まあそりやそうだがよ……」

「あのよ? オレは今身体を休めるつー重要な仕事だな——」

「あら、じゃあ他に誰がいるの?」

「ジジイがいるじゃねえか」

そうのたまうジンに、ある方向を指さす。そこにはメルエムと談義を行う元会長（やたら若々しい元ジジイ）の姿があつた。哀れ、彼は捕まってしまったようだ。内容は聞こえないが、恐らく人類の在り方についての議論でもしているのだろう。あの元ジジイは無駄に長生きしてるから、その手練手管であの爆弾の相手をして貰った方がいい。それを見てなんとも言えない表情になつたジン。ジジイが助けて欲しそうにこちらをチラチラと見てくるが、二人して目をそらす。

「じゃ、お願いね」

「……しゃーねえ。行くか」



手早く食料備蓄庫に赴き、当座の食料を回収する。メルエムは：まあとりあえず同じモノを食べて我慢しろと言おう。

道中では、当然のように何も起きなかった。まあ、予想していた通りね。さて、そろそろ話しかけてくるかしらね。

「さて、なんか話があったんじゃねえの？」

「よく分かったわね。流石だわさ」

「アホか。あんなにあからさまだと気付くわ」

「ん〜。じゃあ単刀直入に聞くけど。貴方、ゴンはどうするの？」

「……聞かれると思ったぜ。じゃあオレもシンプルに答えるか。どうもしない」

予想外の答え。流石に怒りが湧いてくる。

「……あまり巫山戯たこと言っているとぶん殴るわよ？」

「真面目に言ってる。その上での答えだ」

「どういうこと？」

「いいか？ アイツはオレの息子だ。そんなもって、アイツは特別なんだ」

「……特別？」

「そうだ。アイツは数奇な運命を辿る、そうした星の下に産まれてきた。だからな、ちよつとやそつとじゃ死なねーんだよ。まあ、オレもそうだが、アイツはよりその傾向が強い」

「フリークスの血……って事？」

「それプラス、もう一つの要因な。おつと、何かは聞くなよ」

「この期に及んでも言えないことかしら？ それに、ヒソカはちよつとやそつとじゃないわよ？」

「それでも、だ。とある事情で明かせねえ。特に今はな」

「ふくん……だからキルアにもあんな中途半端な慰めだったって訳ね。納得はできないけど理解はしたわ」

「そーいうこつた。てか、聞いてたのか」

「そりやね。今一番危ういのがあの子だからね……。で、もう一つなんだけど」

「まだあんのか。そろそろ戻らねエと不審がられるぜ？」

「まあまあ、あと一つよ。で、誰が他に裏切ったの？」



そろそろ、一階のエントランスに向かおうというその時に、《円》で敵影を察知。うん。雑魚10にリーダー、か。今来るとは流石に思わなかったわ。大方嫌がらせつて所かしらね。後は戦力分析かしら。万が一があつても即座にカムが来る。それを向こうも分かっているはずだからね。多分下でも同じ様に来てるかも。だったらご愁傷様としかいいようがない。アタシでも流石に今のネテロとメルエムは相手にしたくないからね。ヒソカクラスじゃないと無理だわね。じゃ、やるか。

「ちよつと悪いけどアタシ、お花摘みに行つてくるわ。ジン、アタシの分も持つて行つてくれる?」

「……あのなあ。ここは流れる的にオレだろ? 大体お前さんが仮になんかあつたらその時点で終了だぜ? 分かつてんのか?」

「あら、氣遣つてくれるの。さすがゴンの親ね」

「茶化すな。真面目な話だぜ。で、オレもアイツはぶつ飛ばしたい所なんだが?」

「悪いけど、アタシもそれなり以上にムカつてるのよ。ま、アンタもそうかもしれないけど、ここはアタシに譲つて♡」

「……はあく。わーつたよ。保険はあるから大丈夫だろうが、無茶するんじゃないぞ?」
「悪いわね。恩に着るわ」

「ま、借り一つな。オレも我慢してやるからよ、じゃあオレは雑魚のほうな」
「ありがと。じゃーね」

そうして、ジンから離れる。そう、こんなチャンスは今しかないのだ。八つ当たりできるチャンスは。アタシも何かしら役には立ちたいしね。さて、一人になるのを待つて

たみたいね。ホント何しに来たのかしら。

「ようやくお出ましね。サルっぽい奴」

「おいおい……サルっぽいとはご挨拶だなお嬢さん。オレはサイユウっていう名がある。てか知ってんだろビスケットIIクルーガー」

「あら、人類の裏切り者に名が必要かしら？ おサルさん」

「ケツ。ほざけ。俺たちが『王道』なんだよ。しかし、仲間と離れるとはアホな奴だな。そんだけ自信があんのか？ パリストンの奴、めんどくせー仕事を任せやがって」

ズズ……

戦闘態勢に移行するおサルさん。世界最高峰の十二支んの一人だけあって、そのオラはなかなかのものね。でもそれだと勝てないわよ？

キーン……

張り詰めた弦のような音を発しながらオーラを展開する。リングゴ効果も相まって最近益々オーラが増えたわ。さあ、始めましょうか。カームの集中を妨げさせることは許さない。何より、アタシ達を怒らせた罪は重いわよ。

「前言撤回。やべー仕事だったわ。ま、オレとタイマンで当たるといふ自信のほど、見せてもらおうか」

冷や汗をかきながら言うサル。これを見ても引かないとはさすがね。こいつのミツシヨンはどうせ探りと攪乱でしょ。敵地のど真ん中でそれをやる度胸は褒めてやるわ。じゃあ始めましょうか。

グツと右足に力を入れ、踏み込む。床が砕けるほどの脚力をもって相手に迫る。10メートル以上あった距離があつという間に縮まる。そのまま顔面に向けてパンチを放りこもうとした、その時――

視界の端に何かが形成されていて、その物体から顔面にパンチを食らう。

ブツッ

視界が闇に閉ざされた。続いて右わき腹、腹部に衝撃。耳も聞こえなくなった。でも構わない。このまま振り切る！

ブオン！ チッ

豪快な音を立ててパンチがスカされた。いや、少しかすった。だが、外れたようね……そしてこれが敵の能力！ 発動条件は攻撃のヒット……かしらね。正確には《隠》で隠してみたいけど、念獣の攻撃、かしら。カウンターで攻撃を受けるとはアタシもまだまだね。今気づいたけど言葉も出ないわ。あらら。そうこうしているうちにオーラに感知アリ。ガード。チッ。見えない聞こえないはかなり厄介ね。瞬間的な対応がまだまだできてない。さすが戦闘担当ね。

……大体わかった。オーラからの攻撃を見るに、念獣は三匹！ プラスおサルさんは武器持つてるわね。棒……かしら。それがわかりや何てことないわね。ただ、こちらから攻勢をかけるのはちよつと難しいかしら？ 手当たり次第に行ってみる？ ま、

ちよつと様子見しましょうか。



クソツ！　なんだコイツ！　俺の必殺の【三賢猿^{スリーワイスマンギ}】の攻撃を受けたはずなんだが、微塵もオーラが揺らいでねえ……さすがはネテロ元会長の元弟子つてところか。いきなりやべえやつと当たつちまつた。だがまあ、会長とかあの蟲の王とかとやらされるよりはマシか……？　チツ。あわよくばと思つたが、殺すなんて無理だな。一番のバケモノが動けねえからワンチャンかと思つたが、ノーチャンスだわ。しゃーねえ。バケモノの仲間も人類のトップ層つてコトか。

大体初手の攻撃、ありやなんだ。人外の速度だろ。危うく食らうとこだったぜ。てか、さつき掠つた攻撃がヤベエダメージだ。まともに貰えばやられるな……横からの【ミザル】のカウンターもものもしないで振りぬきやがつて……。見た目はアレの癖にゴリラだな。強化系と見た。だが、強化系の癖に規格外過ぎる。アレ、普通の人間なら食らつて昏倒するか、そうでなくてもパニくる奴だぞ？

まあいい。敵は百戦錬磨。慎重に、丁寧に、フルボッコだ。

「行くぜ?」

三匹を嚇ける。時間差でありとあらゆる部位を攻撃する……有効打もあるが、直前でガードするか躲しやがる……超至近距離で反応してんのか? 恐ろしい練度。超高速の《流》だ。本当に人間か? だが、オレの如意棒がそこに加わるぞ。これならどうだ……?」

◇

チツ。面倒ね。それに、棒の威力が思ったより高いわね。なんか伸び縮みしてるらし

くて捕まえづらい。攻撃力も高い。ダメージが積み重なっていく。非常に厄介な能力。仕方ないわね。痛くてやけどアレ、やるしかないか。



……この女、恐ろしいほどの戦闘力だ。ふつうは何もできずにポコポコな筈だが、しつかり対処してやがる。慣れてきたのかカウンターまで狙ってきやがる。だが、細々としたダメージは積み重なってるぜ。まだまだオレのギアは上がる。何もできずにそのままサンドバックになってくれや。

ほら、行け、キカザル、イワザルのダブル攻撃からのミザルとオレの時間差だ。このままなぶり殺しだ！

——な！ 防御を解いた!! 何故!?! 不味い、攻撃を中止し——



攻撃を取って防衛せずに受ける。当然ダメージは甚大だ。だが、それでもこの結果なら価値がある。受けた瞬間にオーラを刃に変化させ、念獣を貫く。それができたからだ。ラツキーなことに2方向から来てくれたから2匹仕留められた。そのまま刃を振りぬくと、耳が聞こえるようになる。目がまだ見えないということは、言葉も喋れるということ。残念ながら本体ではなかったけど、本体なら躲しかねないから結果オーライ。これは以前、カームと会長の模擬戦で見せてもらったやつね。アタシは変形だからマネしやすかったわ。

「あーあー。うん。言葉も出るわね。さて、よくも好き勝手やってくれたわね。覚悟はいいかしら?」

「チツ……バケモンめ」

「アンタ、アタシはまだ普通なほうだよ? さあ、借りを返すとするわね」

「……まだ目が見えてねーだろ。粹がんじやねーよ」

「あら、まだ分かってないのかしら。耳が聞こえるだけで十分なのよ」

キツ

「そっつ」

ドンツ！

圧倒的加速でミザルに迫り、拳で粉碎する。音は重要な情報だ。空気の流れ、息遣い、足音、すべてを伝えてくれる。そこにオーラが加われば見えてるのとあんまり変わらな
いわ。一気に視界が晴れる。さて、ここから楽しいフルボッコタイムね

「……………」

「念獣が砕け散ったわね。これは楽しみだわ。さあ、覚悟しなさい」

「……クソが……!　しゃあねえ、ここまでだな」

「逃げる気?　アタシが逃がすだけでも?　てか逃げるなら何しに来たのよ」

「ほざいてろ。お前らはどうせ終わりだ。精々あがいてみな」

そう言うと、サイユウは後方の窓から瞬時に飛び下りて姿を消す。奴が飛び降りる瞬間を狙って拳を振り抜いたが、一步届かなかった。チツ。腐っても最高峰ってことね。深追いはできないから仕方ない。

まあ、八つ当たりは気が済んだわ。ぶつ殺せなかったのはちよつと残念だけど、ジジイにはあんまり相手させたくないしね。とりあえず大人しく戻りましょうか。ジンも雑魚散らしは終わったらしいからね。そっちの方が良かったかしら。

——尚、この後、取り逃がしたことでジンに相当煽られた。



帰つてみれば、そこかしこに戦鬪の跡があつた。やはり襲撃はあつたか。重火器持ってきたみたいだけど、一般人に近い奴等をいくら送ろうが無駄ね。ネテロは懽然として座つてる。メルエムは……うん。食事中ね。人間じゃなくてあの謎魔獣喰つてるわ。意外と律儀よね、彼。

弟子達もそこそこ活躍したみたい。聞いてみれば、襲つてきたのはどこぞの部隊とか。ここに入れるのは非感染者のみ。襲撃者は非感染者と言うことになる。

……まあ、相手はいつでも感染者を増やせる奴等だから自由自在なんでしょうね。正しく捨て駒。哀れね。後で埋葬ぐらいはしてあげるわ。

で、キルア。返り血でビシヨビシヨ。相当やらかしたみたい。暴走に近いんじゃないかしら。こりや調整が必要、と……しやーない。アタシがやるか。

「全く……アンタはホントに振り切れる奴ね」

「……………」

「確かに戦闘力は上がってる。臆しもしない。だけど、危うい。それは自分でも分かっているわね？」

「……ああ」

「ここからは最悪の展開すら容易にあり得る修羅場。もしそうなった場合、アンタは耐えられるの？」

「……………」

「我々の至上命題はカームを守りきり、人類を救う事。土壇場で使い物にならないどころか、敵に取り込まれる恐れがある奴を仲間に入れる事は出来ない」

キルアの表情が変わる。ビスケの言葉に驚き……怒りを感じさせるものに。ビスケはそれを見て、心の中で溜め息をつく。

「何て顔してんのよ。アタシの言葉にそんな反応してる時点で語るに落ちてるわ。アタシは本当に今のアンタじゃやりかねないと思ってるからね」

「……ッ！ オレは！ 絶対にそんな事はしないッ!!」

その言葉に、ビスケは表情を落とす。

「……ゴンが、既に死んでいたとしても？」

「!!？」

囁くようなその声は、確かにキルアの耳に届く。

「そんな事は……！ そんな事があるもんか!! ゴンは必ず生きている!!!」

「今言ったのは可能性の話。必ずしもそうとは限らない。実際ジジイとジンは生きてたしね。でも——ないわけでもない。その時、貴方は戦えるの？」

「……………ッ」

キルアの顔が苦痛に歪む。薄々は考えていた事だ。むしろ、そんな予想ばかりが頭をよぎってしまう。本当にそうなら、自分はもうどうしたらいいのか。

「アンタの気持ちもわからないではない。でも、予断は許されない。ありとあらゆる残酷な想定をしておきなさい。恐ろしい選択を迫られるかもしれない。アタシはアンタ

がどんな選択をするか分からないし、答えはきつと一つじゃない。でも、目的だけは絶対にブレちゃいけない。さあ、答えて。アンタはこの戦い、何を目的とするの？」

それはキルアにとっては厳しい問い掛け。何を目的とするかは当然ゴンの救出だ。だが、ゴンを攫ったヒソカの実力は隔絶していた。出来ればもう二度と会いたくないし……そんな事を考える自分を責めた。そして……ゴンが既に死んでしまっているとしたら……。

「オレ……は、ゴンを救う。必ず救う」

「……あまり言いたくないけどまた聞くわね。ゴンを……助けられなかったらどうする？」

暫くキルアは顔を伏せ、沈黙した。見なくても分かる。苦悶に満ちた顔をしているのだろう。カルトはハラハラしながら事の推移を見守る。だが、ある瞬間をもってオーラが静まる。それは深海の様な暗いが、深いオーラ。

(……覚悟は定まったか)

ビスケはほんの少しだけ安堵する。内容はともかく、安定はした。それは方向性としては好ましくはない。ないが、贅沢も言えない。キルアが顔を上げる。その表情は、感情を一切排除したかのような。あまりにも人間的ではない、機械の様な顔。近くで見ているカルトがそれを見て、暗殺者の顔であると断定した程に。

「その時は……それをした奴を必ず殺す。どんな手を使つてでも、必ず」

143、救済

「……静かだな」

ビスケの治療を行いながらレオリオが呟く。あれからしばらく経った。静かなものだ。ここが修羅場と言うことを忘れてしまいそうになる。

カームは中央に陣取り、座禅の姿勢で目を閉じている。深く集中しているようで、話しかけても答えてくれそうになさそうだ。それを信頼の証と、ポジティブに受け取っている。こちらとしても、何人たりともカームの元へ届かせるつもりは無い。

「待っているのよ。敵、味方共にね。この時間だけは奇妙な停戦時間と言えるわね。今、我々に来る事は待つ事。出来るだけ万全な体勢を整えてからね」

「そうだな……しかし、さつきは肝を冷やしたぜ？ あれだけオレ等に注意したくせに、

自分から分断されに行くとかありえねーだろ！」

「私も同意だ。軽率すぎるのでは？」

ゲツ。クラピカも参戦してきた。ド正論だから反論が難しいわね……。

「悪かったわ。ちよつと憂さ晴らししたくてね。許して♡」

そう言いながらカームの顔を伺うと、集中して真剣な表情がほんの微かに崩れ、苦笑いしていた。よし、セーフ！

「可愛く言ったって無駄だからな！ 全く、治療止めるぞ？」

「もう！ いいじゃない！ 息抜きは必要よ。それに、こつちも敵来たでしょ？」

「トップ層のお前等がいなかったからマジで焦ったんだからな！ 反省しろよ！」

「いや、ジジイいたし。そもそもメルエムいたでしょ？ ヒソカ以外に誰が勝てるの？」

確かに、となる2人。チヨロいわね。

「——いや、そうだけだよ、それとこれとは話が別だろ？」

「んじや教えてみなさいよ。詳しくね」

詳しく聞けば、アタシ達が出て行つたすぐ後に部隊が突入。煙幕閃光弾グレネードからのマシンガンブツパで襲つて来たらしい。交代交代で《円》を張つてたジジイがそれを事前に察知。

【百式観音】で全て迎撃。それでも諦めない彼らにそれぞれが攻撃を仕掛けようとした直前に、キルアが飛び出して皆殺しにした……との事。

尚、メルエムは戦闘の様子を例の肉を囓りながら楽しそうに見守つていた模様。

「なるほど。想像した通りで何よりだわさ」

「オイオイ、ヒソカが来たらヤバかっただろ！」

「だからさつき言つたでしょ？ 来ないって」

「本当にそうかは分からねエだろ？」

「いや、間違いない。大体、今勝てるならもつと前に襲いに来てる」

「……断言しやがったなあ……ま、結果オーライだからいいか。あんまりヒヤヒヤさせ

んじゃねーぜ？」

「了解。反省してまーす」

「絶対反省してねーやつだ……」

ま、とりあえずは向こうの方針も分かったわね。この数日間で、奴等はやつぱり本格的には手を出してこない。精々が嫌がらせ程度ね。まあ、人類の通常戦力程度なら、この戦力でどうにかなるわけないけど。全員銃弾ぐらいいは軽く跳ね返すレベルだし。

とりあえずは、しばらく大人しくしとこうかしらね。



あれから2日経つ。僕の兄さんは相変わらず表情が暗い。気持ちは分かるつもりだ。僕もカームがそう言う状況になつたらこうもなるだろう。久しぶりにゾルディックの顔になつている。だからといって、僕ができることは少ない。兄さんには兄さんの道がある。だからこそ僕は僕でやる事をやるしかない。精神を落ち着け、オーラを練り上げる。自分の目的を見据えて集中すること。つまり《点》だ。

兄さんもあの一件から同じような結論に達したようで、今じゃ僕と同じように並んで座禅している。カームをちらりと見る。相変わらず僕の婚約者は凄い。

しかし、流石にキツイようだ。時折苦しそうな表情を見せることもあるようになった。この戦いが無事に終われば、彼と共にこの世界から逃げよう。

人は、様々なしがらみを抱えて生きている。彼はそれが特別大きいだけ。この世界が彼の存在のせいで争いが絶えなくなるとして、彼がこの樂園から追放されるなら。例えばその先が地獄であるとしても、僕はそれに付き合う。僕は、彼の婚約者だから。

昔、そういう話があつた。母が観ていたドラマを僕もコツソリ覗いた事がある。不倫した男女が、その愛を捨てられず、2人で逃げて共に死ぬ話だ。死後の世界に樂園を求めて。

当時は分からなかった。ただ、大人の好きなドロドロ話かと思つていた。だけど、今は分かる。2人はしがらみから解放されたかつたのだ。例え行く先が地獄でも。

『失樂園』。古い話ではある。それこそ聖書に載るような話だ。

人は大昔に罪を犯し、樂園を追放された。恐らくこの話は逆なんだろう。事実としては、人類が暗黒大陸から逃げた過去があり、それを聖書用書き換えたのだ。人類の戒めとして。再びそこに戻らない為に。

今なら、分かる。2人で何もかも捨てて逃げる気持ちだ。この世界はしがらみが多すぎる。しきたりや常識、掟、決まりごと……そんな見えないモノがのしかかり、人は動けなくなる。感情を消して、決められた道を歩くしかなくなる。あたかも人形のように。でも……僕は、人間だ。人形のように決められた道を辿り、人を殺し、子を産み、そして狂つた母の様にはなりたくない。

これがしがらみから生まれた関係でも、彼に対する感情は僕だけのものだ。誰にも強制されない、僕だけのものだ。僕の愛しい人。決して離れたくない、離さない。

そんな愛しい人と、この世界から逃げるつて最高じゃないか。地獄でもいい。そこで

死ぬならばそれでもいい。彼がいるなら、他に何もいらなから。むしろ、死んだならば彼の中で僕は永遠に生き続ける。それはそれで素敵だ。だから死んでも絶対離さない。

ああ、やつぱり僕は母に似ている。イルミにも。アレだけ内心嫌っていたのに、結局僕はあの人達と同類だった。歪んだ愛。そうなのかもしれない。

だからこそ、僕たちは兄さんに執着するのだ。自分にはないモノを持つているから。僕もそうだった。でも、そんな気持ちはお父様にはバレバレだったのだろう。だからこそ、彼をあてがった。うまくいけば僕の執着がそちらに向かう事を期待して。

結果としてその通りになった。流星はお父様だ。でも、それでいい。きつかけが何であれ、僕は解放された。人形の道から。

その為の邪魔は全て排除する。

むしろ、この状況を作った敵には感謝しているが、それはそれ、だ。立ちふさがる障害は叩き潰し、必ずや添い遂げる。オバサンもいるだろうが、それはもういい。だってカームを選んだから。そして、地獄の果てまで付き合ってみせる。それが僕の幸せだか

ら……。



結局、あれから3日経つが、襲撃は無い。恐らく、相手も無駄だと判断したのだろう。爆弾でも落とすかと思われたが、今の我々ならそうなたとしても恐らく生き残るだろうし、核兵器など使っても今度はカームが防ぐだろう。というか、彼らの手持ちの人類のストックがそれ程無いということだろう。全人類がそれどころでは無いだろうしな。よって、結局はタイミングの問題なのだ。

ネテロ会長は、相変わらずメルエムと談義をするか、模擬戦闘を行っている。ジンもそこにたまに加わっている。それ以外は寝てるか食事しているかだ。彼が一番リラックスしていると言っている。ビスケも彼に次いでリラックスしているように見える。

2人は正しくこの後の展開を読んでいる。だからこそそのリラックスだ。会長もそうだろうが、アレはメルエムの相手は自分でしかできないと引き受けている感じだな。姿形が若々しくなり、バイタリテイが有り余っているのかも知れないが。

カルトとキルアは不穏な空気を漂わせながらも瞑想をしている。恐らく集中しているのだろう。自分たちの倒すべき敵を、確実に殺すために。それは、私から見ればある意味仕事人の姿に映る。無論、暗殺者としてのだ。頼もしいととるか、不安ととるか難しいところだ。

レオリオは：わたわたしている。特に意味も無く瞑想し出したり、本を読んでもたり、かと思えば筋トレし始めたり：ある意味一番人間らしい。それがレオリオという男の魅力なのだろう。

そして、カーム。彼自身が申告した3日という刻限を現時点で過ぎた。当然だが苦戦しているのだろう。その表情は険しい。

全人類に、“聖光気”を付与……どれほどの負荷か私には理解できない。むしろ今でさえ不可能だと思っている。だが、彼はやるだろう。それが“救世主”なのだから。

そして確実に分かることは、もしそれを成し遂げた場合、彼に残る“力”はごく僅かな物になると言うことだ。

当然だろう。

全人類に“力”を付与するなど、想像を絶する。それ程の力が彼から抜け落ちてしまった場合、確実に弱体化する。敵は待つだけでいい。そうすれば、確実に殺せるレベルまで彼が降りてくれるから。

なんという悪辣な作戦だろうか。これほど人類を馬鹿にした敵はいないだろう。だからこそ許せない。私にできることは少ないだろうが、少なくとも彼は殺させはしない。人類を救うために死力を尽くす彼を、絶対に守護する。そして：全てが終わったら彼に尽くそう。傷つき、弱り果てるであろう彼を、少しでも癒やし、慰めになるように。そのためならば、どこへでも行こう。それが暗黒大陸でも。私には、もうそれしか無いのだから。

私が女性ならよかった。ビスケやカルトのように寄り添えるのだから。しかし、私は男だ。ならば、男なりの寄り添い方もあるだろう。そのためには、このミツシオンを確実に成功させなければ。相手がどう来るかをシミュレートし、どんな状況にも対応出来るようにしておかねばならない。いつ来てもいいように。それが、今、私にできることだ。



近隣から初め、全世界各地に広がる龍脈を辿り、人々を探す。探し出して、片っ端から治療し、“聖光氣”を付与していく。これほどキツイのは久しぶりだ。外界の状況にほぼ構っていらなくなる。だが、案外うまくやっているようで安心した。メルエムは会長が相手してくれているからか。自分にできることは、この作業を早く終わらせることだ。いくら経験があるとはいえ、流石に厳しいものがある。

だが、泣き言は言わない。できなければ人類の終焉だから。そんな事は私が許さない。そして、ヒソカとも決着を付ける。必ずだ。

——1日経った。1割ほどの人類を救えた。やはり、奴等の言っていたことはハツタリじやなかった。奴等は、全人類にゾバエを感染させている。急がなければ。まだまだパンデミックは各地で起きている。

だが、少なくともアンダーソンファミリーは助けられた。ジョンは見つからなかったが、ファミリーの縁者はほぼ全て救えたと思う。ジョンは：恐らくは奴等が攫ったのだろう。そこまでするか：いや、アンダーソンを壊滅させないだけまだマシなのか：私には分からない。だが、私の怒りを誘うという奴等の目的からすると、これ以上無い仕打ちだ。そんなに私を追い詰めたらしい。ならば、私は奴等を存在ごと消滅させてやる。生きた証すら残らないように、魂すらもだ。

そして、裏切ったアルバートだが：いた。ファミリーから離れ、山奥の別荘にたった1人で。彼は怪物の姿に成り果て、更に虫の息だった。恐らくこれは、カキンの王の呪いだろう。それでも私は助けようと思ったが：やめた。この呪いを解き、助けることは可能かもしれない。しかし、恐ろしい程のリソースを割くだろう。だから、無理だ。今の現状では。そして、私は無理してまで敵対者を助けるほど優しくは無い。

哀れではある。仮にもジョセフの子孫だ。私に思うところが無いといえは嘘になる。だが、彼は人類に敵対してしまった。私は彼を救えなかった。それが全てだ。そして、

彼は恐らく私に気付いた。彼は微かな声で最期に呟いた。

——申し訳、ありません——

と。彼は、分かっていたのだ。世界がこうなることを。私のせいで。だからこそ、何とかしたかったのだ。たとえそれが、人類に敵対する事になったとしても。だから私は、彼を憎めなかった。むしろ、申し訳ない気持ちになった。私の存在自体が災いを呼んでしまったのだから。

できることなら、彼の死後が安らかであるように、と祈る。

——2日が過ぎる。3割ほど救えた。私を慕ってくれた部族も救えた。かなり犠牲になってしまったが、全滅は免れてくれた。良かった。しかし、二次被害で多くの人類が失われた。……こんなことが許されて良いのか？ 少なくとも私は許さん。私の力は確かに弱体化しているだろう。そして、これが進むにつれ、より弱体化していくのは間違いない。しかし、それでも奴等は滅ぼす。絶対に。

——3日が過ぎた。申告した期限の日だが、現在5割……と言ったところだ。この頃か

らかなりの負荷が私を襲うようになった。一抹の不安がよぎる。本当にできるだろうか、という不安が。しかし、私はそれを振り払う。必ずできる。そして、必ず始末を付けるのだ。それが、私がこの世界を無茶苦茶にしてしまった唯一の償いなのだから。

——4日目。7割まで達成。この頃になると、かなり苦しさが増す。脳細胞が破裂しそうだ。いや、実際に微妙に破裂しながら修復を繰り返している。恐らく私の顔の穴という穴から出血しているだろう。それ程厳しい。しかし、ここまでできたからにはやり遂げる。ビスケやカルト、クラピカやレオリオが心配しているようだ。カルトやビスケが交代で私の血をぬぐってくれた。ありがたい。まだまだ頑張れるよ。

——5日経った。9割。もう、意識が曖昧になつてきている。だが、もう少しなのだ。もう少しで終わる。だが、やはり奴等は見つからない。予想通り、異空間などに隠れているのだろう。

あと少し、ではあるのだが、作業は遅々として進まなくなつた。恐らく、私の限界が近いのだろう。もう、私の“聖光気”はごく僅かになつている。だからだ。……方法はあつた。星から“聖光気”を借りるのだ。限界になつたら、もうそれしか無い。なるべく

やりたくないが……仕方ない。



3日目を過ぎた辺りから、カームは全身から血が噴き出すようになった。それ程の負荷が彼には掛かっていると言うことだ。そして、襲撃もこの頃から再び始まった。ほとんどは人間の部隊だが、稀にハンターも混じるようになった。とは言え、多少のレベルの能力者なら物の数では無いが。しかし、現代兵器は厄介だ。建物内が爆薬で破壊されたり、閃光弾や催涙弾などは対処が難しい。まだBC兵器などは使われないかもしれないが、それも時間の問題だろう。

場所を移せども、カームの位置はある意味バレバレだ。ならば、まだここで対処した方がよいとネテロ達は判断した。そして、交代で建物の外に出て、襲撃者に対処する。全員が全員特級の能力者だ。ただの部隊や協専ハンターなどは、単騎でも余裕で蹴散

らせる。特にネテロが先陣を切つて対処に当たる。襲撃が増えた原因は、皮肉にもカームの治療と付与が進んでいるという証だ。その証拠に、彼らは一様に薄く「聖光気」を纏っている。彼らは分からないのだ。誰が彼らを真に守護してくれているのかを。ネテロやクラピカが叫んでも、彼らには届かない。むしろ、人類の敵対者はこちらだという確信を強める始末であつた。今やこのメンバーは重犯罪者の集団だ。いくら主張をしても、逆効果だろう。そんな状態を「彼」に見せるわけにはいかない。だからこそ、彼らは外に出て襲撃者を蹴散らすのだ。

そして、5日目。遂にBC兵器が投入された。しかし、カームの守護者がそんなモノを建物内に入れる愚を犯すはずも無い。兵器は建物外で炸裂し、包囲していた人間達に大ダメージを与えた。余波も来たが、彼らは特別な「聖光気」を纏っている。その程度では彼らには届かない。それを彼らは知っていた。だが、こんな街の中心地で使用に踏み切るとは、よつほど危険視されているのだろう。ちよくちよく姿を現し、人間を引き裂くメルエムの存在も、その感情に一役買っているとはいへ。

幸いなのは、「それ」を使ったことによつて、しばらく襲撃ができなくなつてしまつたことか。影響が消えるまで、ほんの僅かな休息を得ることができた。

そして……6日目に入ったとき、遂に奴等が姿を現した。

144、開幕

——全人類に対し、緊急放送が掛かる。例の衝撃的な放送の後、これまで姿を現すことが無かった、ビヨンドとパリストンだ。彼らは電波をジャックしてまだ混乱が収まらない全世界に向けて発信していた。

「——世界の諸君、待たせたな。対処が遅れてしまって、本当に済まなかった。我々も奴の力を侮っていたようだ。だが、諸君等も気付いただろう！ あれだけ苦しかった病が収まったことに！ 念能力を持つモノなら気付いたかも知れない。諸君等を覆う黄金の光が！ それこそが我々の成果！ 人類の最上級とも言える力を結集して、カームⅡアンダーソンがばらまいた病原菌を治癒した！！ そして、同時に我々は奴を追い詰めることに成功した！ 奴は今、ハンター協会の本部に立てこもっている。それも重犯罪者であるアイザックⅡネテロとジンⅡフリークスと共にだ！ 奴らはなんと、凶悪極まり

ないカメラアントまでを調伏し、我々を攻撃している！ 本当に人類にとことん仇なす者達だ！ こんなことが許されるだろうか！——だが、奴達はまだまだ強い。近代兵器では太刀打ちできん。既に何度か送ったが、悉く壊滅した。だからこそ、我等がゆく。人類の、最後の希望として！ 我等は負けない。人類最高峰の戦力は揃えたつもりだ。だが！ それでも奴が抵抗し、我々が敗れるようなことがあれば、我等もろとも核兵器を撃ち込め！ 人類の大敵を、必ずここで滅ぼさなければならん！ 我等はこれより、死地に入る！ 既にスワルダニシティには避難勧告を出した。なるべくなら被害は出したくない。だから、オレ達は必ず勝ちに行く。諸君、我々を見届けてくれ。世界の行く末はお前達に託す。さあ、人類の未来を取り戻しにゆくぞ！」

それは、短いメッセージ。しかし、混乱のさなかにあつた世界にとっては、希望と呼べるメッセージだった。それまで凄まじい苦しみを味わっていた者達が、いつの間にか治癒されたのだから。それは、まさしく希望だった。そして、彼らは知る。これが念能力だということ。彼らにとって、それは衝撃だった。そんなことまでできるのか、と。無論、念能力者は懐疑的だった。そんなことができるもんか、と。しかし、ではどうやって恐ろしい厄災は治癒したのか。誰が、何のために。

だが、彼らは少数派である。一般世論からすれば、目に見える物こそが真実だ。彼ら

にとつての眞実は、カーム・アンダーソンが起こしたテロを、ビヨンド達が救った、ということである。

世論は悪を絶対に許さない。今、明確な悪が、正義の味方によつて暴かれ、そして弱っている。だが、それでも敵は怪物である。ヒーローが必要だ。そして、そのヒーローが決死の覚悟で敵地へ突入しようとしている。

全世界の一般市民から彼らへメッセージが届けられた。絶対に勝つてくれ、人類の希望を取り戻してくれ、と。各国から凄まじいまでの応援が寄せられる。自宅のテレビの前で、外の大規模なモニターの前で。

彼らは気付いていなかった。誰が、自分たちを苦しめていたか。そして、それを誰が本当に救ってくれたのか。彼らは気付かない。自分たちはそうして破滅の道を着実に進めていることに。

舞台は整った。

——最後の決戦が始まる。



「ふっざけんじゃねえ!!!
いくら何でも許せねえ!!!」

「わめくな、レオリオ」

「だが、許せるか！　こんな事を!!　オレはこんだけムカついたのは産まれて初めてだ!!!」

「こんなことは想定できたことだ。むしろ、敵がようやく動き出した。そんなときに冷静になれなければ真つ先に死ぬぞ」

「くくくッ!!! クソツたれ!!! 吐き気を催す邪悪だぜ! コイツ等は!! そんな奴等が英雄気取りで一般人の支持を集めるなんて、絶対に許せることじゃねエだろ!!!」

「……頭を冷やしてこい。奴等はじきに来る。期限はそれまでだ」
「クラピカ、お前……!」

あまりにも激昂したレオリオがクラピカにつかみかかろうとした。しかし、その寸前で彼は見た。彼の両手が固く握りしめられ、血がにじんでいることに。それは、彼だけでは無い。メルエム以外の他の面々も似たようなものだ。彼らの怒りは頂点に達している。だが、それをささずに冷静に振る舞っているのだ。その怒りを、その原因に叩き込むために。それは、彼らの発散するオーラから読み取れた。その面々のあまりの激情に、レオリオも冷静になれた。

「……すまなかった。少し頭を冷やす」

「それでいい。あまり時間は無いからな」

「わかつてる……そんなに時間はかからねえ」

レオリオが席を外し、奥にいるカームの元へ向かう。カームは、見るからにボロボロだ。その表情は苦痛に歪み、絶えず身体はどこかしらが破裂し、修復を繰り返している。レオリオから見ても明らかに無茶だ。常人ならば100回は死んでる。それでも彼はやめない。そんな彼に、カルトとビスケの2人が、甲斐甲斐しく世話をし、飛び散った血を丁寧に拭き取っている。

レオリオは分からなくなった。

そんな邪悪に簡単に先導される馬鹿な人類。厄災に手を出し、全滅寸前に陥る人類、そんな馬鹿共を救う必要があるのか……と。だが、それは実際に救おうとしているカームへの侮辱だ。レオリオは、なんとも言えない、やるせない気分には陥っていた。

「ふふ……無様だな。元王よ」

そんな中、いつの間にかメルエムがそばに来ており、カームに語りかける。返事は、無い。それでも構わず彼は語る。

「結局、貴様は人間の王だったのだろう。だが、貴様には非情な決断ができなかった。自分以外は全て餌と断ずるほどの傲慢さがなかった。故に、敗れる」

その発言にレオリオも我慢ができず言い返す。

「おい！ まだ負けるって決まったわけじゃねーだろ!!」

「馬鹿め。ここまで来たら敗北も同然だ。王位を篡奪され、臣民に裏切られた王の末路は、ただ新しい強者に喰われるのみ」

「……で？ お前はどうするんだ？」

「余が此奴に従ったのは、此奴が約束したからだ。余を新しい世界へ導くと。それが今破棄されようとしている。このままでは余はもう此奴と契約を続ける余地が無い」

「…言っておくが、お前も全世界の敵だぞ？」

「だからなんだ？ ならば余は有象無象共に証明してやろうではないか。余こそが生物の頂点である事を」

「敵に付く気は無い、と？」

「愚問だ。以前言ったが、余と奴は絶対にわかり合えぬ。不倶戴天の敵だ。どちらかが

滅びるまで闘うしか無いのだ。向こうから来てくれるのであれば手間が省けるな。」

「……そうかい。オレは、それでもカームを信じるぞ。どんな敵だろうがぶっ倒して決着を付けてくれることを。そのためにオレは命をかけてコイツを手助けする」

「そうするのは貴様の自由だ。余は余で自由に動く……だが、案外貴様の言うことも正しいかもしれない」

そう告げると、メルエムはカームに向き直り、いきなり莫大なオーラで全力のパンチを繰り出した。その行動に、流石のビスケもカルトも反応が遅れる。しかし、それでもカームを守るために身を挺して防ごうとした

その時

いつの間にか、メルエムのパンチは受け止められていた。身を挺していた2人がそのままの状態。彼らは、2人をすり抜け、いつの間にか立っていて、拳を受け止めていた。

「やあ。待たせたね」

「ふん、遅いぞ。余は退屈が嫌いだ：やはり、まだまだ勝てんか」

パンチを受け止めた人物は、明るい口調でメルエムに告げる。

「そう悲観することも無い。『向こう』に行けば君も直ぐに強くなれるさ：今は私より弱いがね」

「その減らず口も変わらん。良からう。そこの男の言うとおり、余も貴様を信じてやろう」

「当たり前だ。私は負けんよ。絶対にね」

「「「「カーム!!!」」」」

「やあ、みんな。お待たせ」

それから彼は質問攻めにあつた。主に身体の負担について。しかし、彼は大丈夫だと譲らなかつた。

「なあ、オメーが終わったって事は、いよいよか」

「ええ。来ますよ。彼らが」

「……もうほとんど残ってねーだろ。本当にいけるのか？」

「大丈夫ですって。それよりもジンさん、いや、みんな聞いて欲しい。まずは襲撃を対処してくれてありがとう。無事終わったよ。そして、これからが最終決戦となる。私は正直に言えば以前より弱ってる。もしかするとヒソカの相手だけで精一杯かもしれない。だからこそ、みんなはもしかしなくとも強大な相手と闘うことになるだろう。だから、お願いしたい。死なないでくれ。死ななければ私が何とかするから」

それは、懇願。全てを救い、これから一番強大な敵と戦う彼の、確かな願い。

「余が全て倒しても構わんだろう？」

目の前の蟲の王が一番手でそう自信満々に言い切る。その様子を見て見て、カームも少し笑う。

「そうだな。是非そうして欲しい。そうすれば私も全力で闘える」

「カーム…ワシらはお主に巨大な借りがある。とても返し切れん借りじや。それぐらいは任せておけ。少なくともワシが絶対に死なさんでな」

「会長、その見た目で爺さん言葉は似合わないですよ」

「おつと…これは失礼したの。どうも長いことこの喋りだから抜けきらん。ま、安心せいつてことじやよ」

「ねえ、カーム。アタシは貴方の婚約者よ？ 行き遅れつて言われまくつたアタシだけ

ど、ようやくここまでこぎ着けたんだから！ 絶対に逃さないわよ。だから…貴方も死なないでね」

「それはそれは。婚約者様には逆らえないな。私も死なないさ。なんせ暗黒大陸で生き延びたんだからな」

そこに、小柄な子供が割り込む。

「僕はね。カーム、貴方と生死を共にするつて決めたの。もし貴方が死んだなら、僕も死ぬね。そして魂まで縛つてついていくから覚悟してね」

「おつと…それは重いなあ。でも分かったよ。約束しよう。ビスケにも言ったが、私は

死なないからね。君も絶対に死なないでくれ
「うん…約束」

カームはカルトと指切りを交わす。同時にビスケとも。それは誓い。必ず生きて、闘いを終えるという。

そして、その場にいる全員が警戒を深める。気配は無い。だが、もうすぐ奴等が来るという確信がそうさせた。

全員が背後の壁に気配を感じた。振り返ると、そこには壁一面の巨大な顔がいつの間にか自然に存在し、笑い狂っていた。

悍ましさを隠そうともしない、その登場の仕方に、彼らは言葉を失う。しかし、いち

早くジンが再起動し、無言で指先から巨大な念弾を放つと、その「顔」にめり込み、沈んでゆく。顔は笑ったままだ。なまじ造形が整っているだけに、生理的嫌悪を掻き立てる。やがて、念弾は吸い込まれ、「顔」は元に戻る。

それを見たカームが、めんどくさそうにごく僅かな「光」の弾を投げつけると、「顔」は恍惚の表情を浮かべながら崩れ落ちていった。

「……待っていたんだろう？ 早く出てきたらどうだ？」

カームは虚空に問いかける。

ぐにやり

ホールの中央で空間が歪み、黒い渦が生まれる。まだ出てきてもいない。ただゲートが出現しただけだ。それでも、その圧倒的な暗黒の気配がその場を支配する。

「……」

カームも険しい表情になる。それ程の禍々しい気配が漏れていた。

やがて、その渦の縁から手が這い出てくる。形は人間の手だ。しかし、それはその気配から、何か別の、冒瀆的な、おぞましい蟲のようなナニカにも見えた。

それが二つ、縁から這い出して、渦を引き裂く。続けて、本体が闇の中から産まれ出した。それは、絶望の始まりを告げるような不吉さを孕み、弱き者が見たら間違いない死ぬだろうという禍々しさに満ちあふれていた。

死神のような、ピエロのような赤黒の衣装に手足に包帯を巻き付けた装いではあるものの、その姿形は以前と変わらない。変わらないのだが、その漏れ出すオーラのせいでまるで別人のように、いや、別のナニカのように映る。そのナニカがカームに向き直り、声を発する。

「やあ……久しぶり?!

“余興”は楽しめたかな?」

「……ヒソカ」

「待ちに待ったよ……この時を◆　ボクはねえ……ず……つと、待っていたんだ◆」

彼の声はまるでこの世の全ての不吉な音を凝縮したかのような、異質な響きであった。思わず耳をふさぎたくなるような。そんな声。そして、彼は誘う。

「さあ、行こうか◆　ボク達が殺し合^{愛し合える}える場所に??　ようやく招待できるよ◆?」

『真夜中のサーカス』に?!

ヒソカが発言した瞬間、ビルのエントランスの様子が激変する。周囲の風景が溶け出し、更に組み換えられていく。

「「「!?」」」

一行は流石にその瞬間動揺した。そして、いつの間にか、ネテロ、ジン、メルエム、ビスケ、レオリオの姿はなくなっている。どうやら分断されたようだ。

「彼らが消えた……！ 大丈夫なのか!？」

「……どうやら分断されたらしい。だが、無事ではあるから心配するな。彼らを信じよう。今、奴は場所を移している。今の私と同等に近い力だ。拒否できなかった」

その言葉にクラピカは驚愕する。いくら弱体化しているとは言え、カームの強さは人類を飛び越えている。そんな彼と匹敵するほどの力を持っているのか？ と。

「少し苦労しそうだ。だが、考えようによつては好都合だ。あの場所でやれば周辺が更地になりそうだからな」

ヒソカは楽しそうに笑っている。あつという間に周囲は様変わりし、薄暗い荒野が広がる場所に全員がいた。

目の前には、巨大なドームがあつた。それまで黙つて見ていたヒソカが再び語りかける。

「ようこそ♣？
『真夜中のサーカス』へ♠？」

「……随分と凝つた演出だな。待ち切れずにすぐ始めるかと思つたぞ」

「ふふ……だからこそ、だよ？
これから最高のショーが始まるんだ♠？

演出は凝らなきやね♣？
それに、ボクは奇術師だからさ♠？」

「ヒソカ！ ゴンは何処だ!!!」

それまで黙っていたキルアが叫ぶ。

「おやおや……キミもいたか♠？
見えなかつたよ♣？」

「貴様……!!」

「うそうそ♣？
心配しなくてもちやあんと中にいるよ？
キミも招待客

だから、遠慮せずにおいで♠？」

「中にゴンはいるんだな？」

「そうだねえ♠？
ついでにカーム、キミの父親役もいるね♠？」

「……分かった。で、貴様に勝てば解放すると?」

「そうだねえ……? うん、それでいいよ??」

「……どういう事だ?」

ヒソカはニヤニヤしながらそれに答えず、建物に向かう。ある一定の場所まで行くと、忽然とその姿を消した。

「……行こうか」

「カーム、しかし……」

「行くしかあるまい。私だけ分断されなかったのは何か意図があるのだろう。君達はこれからヒソカ以外の敵と戦う事になる可能性が高い。恐らくだが……旅団やイルミがいと見た」

「「!?!」」

「な……旅団?」

「ああ。奴等も居なかった。だから……死なないでくれ。なるべく早く終わらせるから

な」

カームが真剣な口調でこれからの事を話す。それに意を唱える者は居ない。

「分かった…必ず約束は守ろう」

「いいよ。例え兄様…イルミが相手でも必ず倒すね。カームも死なないで」

「……………」

そして、4人は死地に向かう。必ず巨悪を倒し、生きて帰ると心に誓いながら。



「おい!! アイツら消えちまったぞ!!」

「転移か……カームだけかと予想していたんだがな」

「むう…アタシはこつちなのは納得いかないわね…」

「全く退屈しないものだ。世界は広いという事が余も実感出来たぞ」

「さて…残されたからにはワシらの敵はアヤツらじやな。気合いを入れるかのう」

「ああ、気合い入れているトコ悪いがオレからお前らに提案がある。もうすぐ奴等が来るだろう？ んで、奴等と戦闘になる。その時、オレはそこには参加しねえ。少し抜けるぜ」

「……………は？」

レオリオが、発言したジンを信じられない様な目で見る。当然だ。この男はこの大一番でまさかの不参加を表明したのだ。

「な、何言ってるんだ…冗談だろ？」

「悪いがマジだ。少し『やる事』があつてな」

「テメエ…この状況が分かって言ってるのか!!」

レオリオがジンの胸ぐらを掴む。それでもジンはその態度をやめない。

「分かっているから言ってるんだ。いいか？ オレにはオレにしか出来ねー事がある。それはお前さんだつてそうだぞ？」

「い、いや…確かに回復使えるのはオレだけだよ…」

その真剣な表情にレオリオが若干気圧される。

「そうじゃねえ。限りなく低い可能性の果てに、お前にしか出来ねえ事があるって言うてんだ」

「〜〜！ 話をズラすな！ テメエは何しに行くつてんだよ！」

「今は言えない。言う気もない。ついでにお前さんが出来る事もな。考えろよ。プロなんだろ？」

「…………ツ!! わ〜ったよ!! テメエがいなくても保たせてやらあ!!! ただし、逃げんじゃねーぞ!!」

「ああ。勿論だ。ジジイ達もいいな？」

「…………いいの？」

「ま〜ええじゃろ。ワシらで十分じゃしな」

間の伸びた声とは裏腹に、ネテロの容姿は活力に満ち溢れている。これから強大な敵と世間を気にせず闘える。武人であるネテロの興味は既に周りにない。

「あつ、こりや何も考えて無いわね。ま、いいんじゃない？　好きに動いた方がアンタも結果出せるタイプでしょ？　メルエムもヤル気満々だしね」

「余は構わんぞ。そもそも余が全て平らげるつもりであつたからな」

全員が同意して、ジンの提案は了承された。最高戦力の一人であるジンの離脱は、正直言つて痛い所ではない。だが、他の面々は気にもしない。それはある意味信頼でもあつた。ジンがこう言っているのだから何か勝算があるのだろう、と。これがもし裏切りであれば、それならそれでよし。大事な事は、自分が死なない事。

そのために、死力を尽くす、と。

「いいか、ジジイ。30分粘れ。それで何とかなる」

「ええからはよ行け！」

「んだよ…折角時間まで指定してやつたつーのによ。ま、頑張れや。オレも最善尽くすぜ」

そうしてジンは建物内部へと引つ込んでいった。レオリオは、この6日間寝てるか食事してるかケータイいじってるかしかしてないダメ親父が、ここに来て何があるんだと

疑問に思いながらも、その思考を自分に回す。

自分出来る事……分からない。とりあえず死なない事、そして誰も死なさない事に徹しよう。そう決めた。

——そして、玄関ホールから複数の人物達が姿を現す。

「よお、〃救世主〃 御一行殿！ 息災の様だな!!」

「ビヨンド……!」

「おりよ? テメエ、親父か? オレより若返ってねエか……? ま、いいぜ、オレはテメエを殺しに来てやったぜ」

ビヨンドの背後には、複数の人影が揃う。十二支んだ。レオリオがその事実には驚く。

「おい、アイツら死んだんじゃ無かったか?」

「ああ、間違いなく。ありや念能力じゃ。そうじやろ! パリストーン!!」

「おや、気付きましたか。その通りですよ。いやあ、この人数は流石に苦勞しましたよ」

「アイツらも浮かばれねえな。そう思わんか？ サルよお」

「……へっ。いよいよテメエも年貢の納め時だな。元会長よ。大人しく死んどけや」

十二支んは生前そのままの姿でそこに居た。だが、その内実は殆どが死人であった。その中で2人、生者がいる。

パリストンとサイユウだ。

「それより、ジンさんがいませんが何処に？ 彼を加えて真の十二支んなのに……まさか、逃げられましたか？」

パリストンが心底楽しそうな表情で煽る。この男は煽る事にかけては一流だ。しかし、ネテロは歯牙にも掛けない。

「ふん。どうとも思つとけ……それよりパリストン。それが貴様の選んだ道か」

「ふふ……やだなあ。元会長、知ってる癖に。ボクが何を喜びとして、何を求めていたか」「オレは貴様を退屈させたか？」

「いいえ、とんでもない！ とても素敵な日々でしたよ。貴方と共に在るのはね。でも

ね、ボクはもつと素敵なオモチャを見つけたんですよ」

「『救世主』……か」

「貴方も夢中になってましたからね。ボクはとつても寂しかったんですよ？」

「やはり、貴様を指名したのは失敗だったな……ならば、オレが始末を付けんとな」

ネテロのオーラが研ぎ澄まされる。それは、人類最強が、更に全盛期を迎えた姿。十全に隆起する肉体と、狂気の果てに得た技、凄まじく研ぎ澄まされたオーラが彼から発生する。

彼は、人間のまま概算で100万オーラを達成していた。

「おっと、怒らせちゃった♪ じゃあボクはこれで。これでも忙しいのでね」

パリストーンが踵を返す。その目の前にネテロがいた。彼はそのまま莫大なオーラを《隠》で隠し、パリストンの顔面をぶち抜いた。

吹っ飛ばされた彼の背後にまたしてもネテロが立つ。

今度は100を超える連撃が彼を襲う。パリストンの全身が、1秒も満たぬ間に二目と見られぬ姿へと変わる。

「いい加減鬱陶しいぞ貴様。まあ、デクに言っても無駄か」

「……………」、名……答……」

全身を痙攣させながらパリストンが息絶える。顔から布が剥がれ、誰とも分からぬ人物が姿を現した。

「また替え玉かよー」

心底ウンザリした表情でレオリオがボヤク。だが、文句ばかり言っていられる状況ではない。ネテロは今の攻防で十二支んに囲まれている。それぞれが文句なしに超一流。そして、死人であるならば起こり得る弱体化の気配もない。

「アレだけの能力……遠隔ではないわね。どうせ近くにいるわ。それより、始まるわよ。アタシもやるから援護よろしく」

「ビヨンドの方は大丈夫なのか？」

ビスケがクイツと親指を向けた先に、ビヨンドと対峙するメルエムがいた。

「アイツがやる気満々だから任せましょ。しばらくは保つでしょ」

ビスケは、対峙する両者と距離を取りながら告げた。それはメルエムが不利であるかの様な口調だった。その原因は、ネテロに匹敵するオーラを纏って現れたビヨンドだ。

「やはり王を目指すだけはあるようだな。中々の『力』だ」

「偉そうに蟲に言われたかねエなあ。それでも人類の最上位だぜ？」

「だが、奴には敵わんから逃げた、と。貴様は王としての誇りが足らんな」

ビヨンドは苦笑いを浮かべる。

「ま、そうとも言うな。蟲の王よ。だが、知ってるか？ その辺も勝利によつて如何様にも出来るとな」

濁流の様なオーラがビヨンドから満ちる。そして、彼の背後に阿修羅像を模した人型が具現化する。通常の阿修羅と違い、その手は背中を覆い尽くす程生えている。そして、その手にはそれぞれ武器を持っていた。

遠巻きに見ていたレオリオもビスケも、その表情は険しい。これは、ネテロすら遙かに凌駕し、パワーアップしたはずのメルエムすらも超えうるオーラだ。流星に少数できただけはある。生半可な覚悟では倒せないと腹を括る。

メルエムは、不敵な態度を崩さない。

「ふ…歴史は勝者が作る、か。やはり人間も我々と変わらん。ならば来るがいい。弱腰の者に勝てるとは思えんがな」

「ならば、お言葉に甘えようか。精々気張ってみせろよ、蟲ケラ」

145、アンブレイカブルハンター

——ここは、まるで宇宙だ。見上げれば煌めく星空がうるさい程に燦然と煌めく。そして、地上にはサーカスのピストダンシルク(舞台)が広がる。ここには誰もいない。張り巡らされたロープや、ブランコ、トランポリンなどが置かれている。観客やショーマンがいないサーカスは、どことなく物悲しさを覚える。

「——ここがボクの原点◆？」

背後から声。そのままの姿勢で返答する。

「……そうか」

「ふふ……ボクはねエ、ここで念を覚えたんだ◆？」

「……お前にも師がいたのか？」

「うん♣？」

でも、殺しちやった??

名前も覚えてないかな♣？」

「……だろうな」

そこで振り向き、相對する。お互い黙ったままだ。何とも言えない沈黙が流れる。

「誰もいない、誰にも邪魔されない。お前にとって、最高の環境だ。なあ、ヒソカ」

「違うね♣？」

演者はボクラ、観客は全人類♣？ こんな派手なショーは無いよ

♣？　そして何より、キミと心逝くまで殺し合^{愛し合}える??」

「観客ね。未来が掛かっていると意味では確かに。さあ、始めようか。私も今度と
いう今度は全力だ。全ての決着をつけよう」

「……ッあゝあゝく〜いいッ??」

最高だよ!!??

キミのその決意に満ち

た瞳!! 揺るがないオーラ!!! 今すぐキミを——」

「殺^愛したい」

チュドツ!!!

ヒソカのその攻撃は音を置き去りにし、時間すらも圧縮する。結果、ただの蹴りが必殺になる。重い攻撃だ。

——だが、それじゃダメだね。

巻き取って落とす。しかし、既に奴は技から抜け出していたので仕方なく後方に投げ飛ばす。

「アハ??」

「楽しいねエ??」

先程の攻撃はただの戯れだろう。威力がおかしいが、そんな単純な攻撃をする相手ではない。…ん？ ヒソカの顔が…崩れてないか？

「ヒソカ…お前、本当に何をした？」

「ヒ・ミ・ツ?? 当ててご覧♠？」

ぐじゅり

生肉が蠕動する様な音を立てて、ますます顔を喜色満面に歪めるヒソカ。歪め過ぎて人体から逸脱した笑みだ。最早顔全体が笑う口に支配されてる。

「…人を捨てたか」

「人？ 人って何♣？」

ボクはヒソカ♠？

「キミを愛^殺する為に生まれてきた??」

次の攻撃！ 凄まじい連撃が襲ってくるっ！ クソっ…天才め！ 自信満々なだけ

はある。やはり現段階でも厳しい闘いだ……しかも、この攻撃一つ一つがヤバい怨念や邪念、呪いが込められてる。今、「聖光気」の維持で精一杯の私にも通りそうなほどに……！

だが、させん！ 私は「救世主」として、カームⅡアンダーソンとして貴様を滅ぼす……！
自らを鼓舞する為に、名乗りを上げる。

「私はカームⅡアンダーソン！
「アンブレイカブル
壊れない男」にして「救世主」！！ 来るがいい、ヒソカ!!!」

それを聞いたヒソカの動きがピタリと止まる。そして――

「……いいねエソレ??」

「アンブレイカブルハンター
壊れない男を狩る者」

じゃあボクも♠? 「アンチクリスト
反救世主」

◆?

ボクはヒソカⅡモロウ♣?

さあ、死ぬまでや

ろう」



「——ここは……」

「まさか……ウチ!?」
ゾルディック

キルアとカルトは2人してカームと逸れた。しかし、1人ずつバラけなくて良かった。ともカルトは思っていた。

しばらく暗闇を歩き、辿り付いたのは……ゾルディック家の敷地内だった。空は満天の星空。

「やあ……2人とも、お帰り」

そんな中、イルミが森の奥の闇から現れる。側には針が刺さった黒い人影があり、彼のその右手には、何か奇妙な物体を引きずっている。

そして、星空に照らされてその姿が露わになる。

イルミは変わってしまった。何が、というわけではない。しかし、カルトは兄妹だったから分かる。もう、アレは前のアレとは違う、と。

最後に彼が持っていたモノが目に入る。

それは

ゴンの死体だった。

キルアは、それを見た瞬間キレた。あくまで心は冷たく、殺意は隠し、しかし必ず殺してやるという思いはマグマの様に。

——それは、理想の暗殺者の姿であった。

瞬間、兄が飛び出す事を察したカルトは必死で止める。

「兄さん！ ダメ!!」

だが、その忠告は届かない。既に雷と同等の速度で彼は飛び出していた。必死にカルトも能力を発動し、追いかける。アレは、ダメだ。何かマズい。だから止めなくては――

「ん、合格」

トスツ

あまりにも呆気なく、彼はイルミの針に刺された。それにカルトは思わず動揺する。

（何故……！ 兄さんの攻撃は完璧だった！ イルミのカウンターすら思考に入れての強襲だったはず……！ なのに、何故先にイルミの攻撃が刺さってる!?!）

「あーカルト、お疲れ。オレはとりあえずやる事終わったから戻るね。あ、ここじゃない

よ。ここはヒソカの幻だし」

「……どうする気？」

「? キルを連れて帰るんだけど? ああ、カルトも任務終わったし、一緒に帰る?」

「どうして……?」

「ん? 何が?」

「どうしてこんな酷いマネを……?」

「ん……何についてかサツパリ分らない。とりあえず、オレはゾルディックの為に動いてるよ。キルも無事に帰って来たしね。でも、アイを使ってみて思ったけど、すつごくコスパ悪いんだ。で、ウチにもう一匹居るからソレで実験しようと思ってるね。アイツはキルに懐いてたし、条件緩和の方法があるはず。キルにはそれをこれから聞くんだ。で、カルト、恋愛ごっこは終わったでしょ? キミも帰るよ」

その男は、表情を動かさずに平然と宣った。余りにも自分勝手な理由。人類を裏切り、人々を大量に苦しめても関係ない。彼は言外にそう告げていた。そして、更に許せないのは……カルトがどれだけの思いでここまでやってきたのか、その感情を、その思いを、イルミは全て否定した。平然と踏み躪った!

——認めよう。イルミは何か、得体の知れないモノになってしまった。大方、隣にいる針人間の力だろう。そこにアイを憑かせてる。多分、イルミは願ったんだ。『強さ』を。どれほどの犠牲者が出たか想像もつかないが、その力は、常識を遥かに超え、怪物の域まで達した。

——だから何だ

僕は、許さない…兄さんを、カームを…自分の都合でまた僕から奪うのか…！ アレだけ家に尽くしてきたのに…それがこの仕打ちか!!!

僕は…僕の為に、生きる。もう誰も奪わせない。だから——

イルミ…コイツだけは…絶対に、殺す！

「……嫌だ」

突然の彼女の変化に、イルミも流石に眉を顰める。

「カルト？ 何を言ってる？ まさかオレに逆らうとかなないよね？」

イルミが手をかざす。それは彼のお仕置きポーズ。だが、もう彼女は親兄弟に唯々
諸々と従う人形ではない。

「お前は、許さない……僕から大事なものばかり奪うお前は、僕が…殺す」
「ふうん…そう。じゃあお仕置きだね。少し痛くしよう」

——それから、一方的な虐待が始まった。

——それと時を同じくして、イルミに撒き餌として用意された無残な死体であったは
ずの、ゴンの、その指が

ピクリと動いた



「——其は、イエスが^{〃クリスト}救世主[〃]であることを否定する者。父と子を否定する者。それが^{〃アンチ・クリスト}反救世主[〃]である——ヨハネ」

暗い道を抜けた先に辿り着いたのは、満天に広がる星空と、ゴミ溜めだった。辺り一面にゴミだらけで足の踏み場も無い。産業廃棄物、家庭ごみ、錆びた鉄塔、道路標識、果ては人間……ありとあらゆるモノを捨てても許される、そこは流星街と呼ばれていた。

そのゴミの中で、破れてはいるが一際上等なソファで読書する男がいた。

「クロロ……貴様……何故！」

クロロと呼ばれた男は本を閉じる。

「その問いに答えるならば、今言ったのが理由だ。まさか我々が〔ユダの信奉者〕ジューダス・プリーストになる
とは思いつしなかつたが」

「アンチ・クリスト“反救世主”……“救世主”を騙る者、“救世主”を迫害する者、“救世主”を……殺す
者」

「ほお……よく知っているな。博識だ」

「ヒソカが……そうだと？」

「そうだと云つたら？」

「どうもしない。カームは必ず奴を倒す」

「ふむ。平行線だな。だが……」

——我々は、お前だけは絶対に許さん。

クロロが立ち上がると同時に、ゴミ溜めの影から団員が次々と姿を現した。

「リベンジだぜ……！ 待っていたぞ、この時をよ!!」

「散々コケにしてくれやがったなア……テメエ、楽に死ねると思うなよ」

「マンマとやられちまった屈辱、返させて貰うぞ」

「パク達の仇、殺らせてもらう」

「鎖野郎……先ずは爪剥ぐね」

「ん〜流石にムカついてるからさ……私も同じ意見かなあ」

それは、端的に言えばこう呼ばれるモノだった。

——絶望、と。



——超常の力を持つ者達の闘いは、レベル差が有ればあつという間に決まる。レベルが高い方の特殊能力が刺さるからだ。逆に言えば、あまりに弱い者の特殊能力はほぼ刺さらない。例えば、一般の操作系能力者がメルエムに操作のアンテナ等を刺したとする。しかし、効果は微々たるものになるか、全く効かないのだ。操作系は刺さると最強とよく言われるが、それはあくまで人間同士のレベルである。

では、その差がない場合はどうなるのか。

——既に舞台は崩壊し、戦闘の余波で瓦礫と化している。燦然と輝く星々の下で、彼らは闘っていた。

ヒソカが殴る。カームも殴り返す。ヒソカが同時に3発の蹴りを入れると、カームも負けじと5発時間を止めて殴り返す。

もうその攻防は千を超えて万へと届こうとしていた。無論、これは常人には見えない

し、見ると塩の柱に変化するだろう。そういう闘いだ。

何故、2人はそれぞれの能力を使わないのか。

否。既に使っている。幾千、幾万の攻防の中、彼らは既に大量の念能力を相手にぶつけている。そして、それをお互いが打ち消し合っているのだ。彼らのレベルになると、特殊な念への防御力も身につく。有り余るオーラ量がそうさせるからだ。『聖光気』はそれをオートで行うからこそ最強たり得る。しかし今、彼の『聖光気』は枯渇寸前であり、維持にも力を割かれている。そして、ヒソカ。彼のオーラもまた特殊である。そのせいで、カームは自らのオーラでそれを行わなければならないのだ。

シユウウウ……

超高速でぶつかり合っていた影が離れる。同時にお互い貫っていたダメージが修復される。それはおよそ人間の姿とはかけ離れたモノだ。

「……強大で邪悪なオーラ。しかも数えきれない。ヒソカ……お前、喰ったな？」

「おお?？」

大正く解く◆?

花丸をあげよう◆?」

「そんな汚いモノをぶつけて来るとは恐れ入る。お前がどうやったかなんて方法は知らん。だが……お前こそギリギリなんじゃないのか?」

「ふふ……まだキミはボクを舐めてるようだね◆?」

ボクが「コイツら」なんか

乗っ取られる訳ないジャン?」

「さて……それはどうかかな?」

「……うんうん、分かった◆?」

キミは疑い深いね◆?

ならば分からせ

る為にもそろそろ本気で殺しに行くね?」

ゾワツ

ヒソカから怨念を100倍濃縮したかの様なオーラが溢れ出る。それは、「悪意」と呼ばれるモノ。そんな人々の「悪意」を集めて、自らのオーラに組み込む。そんな事は

普通は不可能だ。何故なら、そんな事をすれば簡単に肉体も精神も崩壊させてしまいうからだ。

だが、有り得ない程の異常な精神と肉体を持つヒソカは、この苦行とも言える所業をやり切った。そして、彼は遂に暗黒とも言えるオーラを身につけた。

それは「聖光気」とは何もかも性質が真逆の闘気。その性質故に「聖光気」よりも希少である。何故なら、使い手はすぐに破滅するから。

ソレは、一部の地域で「暗黒闘気」と呼ばれている。

パアン！

余りにも呆気なく、両者の頭が消し飛ぶ。瞬時に再生、そして再び身体の一部を消し飛ばし合う。先程よりも激しい技と力の応酬。しかし、同じように見えて、その実全く違う。

ヒソカはその都度死んでいる。

彼がストックした魂が何万、何十万にもなっており、そこから新しい魂で補填する。そして、彼はその度に強い死者の念を発動し、更に強化されていく。

——つまり、死ねば死ぬ程強くなる。

カームはそのカラクリに気付いていた。だが、どうする事も出来ない。攻防の中で徐々に押される事が増え始めた。いや、もう既に一方的に押されている。そして、やはりヒソカは戦闘の天才だ。このままだと、確実に奴の特殊能力が刺さる所までいつてしまふ。

ヒソカは、明日を捨てたのだ。その天賦の才能を、この瞬間の為に。その覚悟こそが今の現状だ。

「ホラホラ、どうしたの？ 反撃出来ないねエ?? このままキミも食べちやおうかなあ？」

ヒソカの粘性を含んだオーラに覆われる。これは、【^パ変幻自在の愛^ム】。そして、自らのオーラが喰われる感覚。これが、コイツの強さの元凶。いよいよここで出して来たか。

コイツはこの能力を進化させた。ガムは食べるモノ。そういう概念を追加したのだ。それで人間を、人間の悪意を我が物にしてきた。死者の怨念すらも。

——何という精神力だろうか。彼もまた怪物ではある。それは、私になるかもしれない。かたつた未来。しかし、彼はここにきてもまだ人間だった。その曇りなき強烈な意志によつて、崩壊しそうになる筈の自我を保っているのだ。敵ながら、驚愕に値する。私には無理な事だ。

しかし、本当にここまで追い詰められたのは久しぶりだ。あの暗黒大陸とどっこいどっこいかもしれない。ニーズヘッグか……いや、ブリオンか……それとも、ヒソカに近い相手で言えば、異世界の神か。

いずれにせよ、ヒソカはこの闘いに全てを賭けた。

自らの魂すら。

——ならば、私も賭けねばなるまい。

なるべく使いたく無かった「奥の手」。だが、ここに来てそれを切らざるを得なくなった。それほど迄にヒソカは強敵だったから。

星よ……あまねく生命を守護する星よ。私に、その力をもう少しだけ、分けてくれ。

146、幕間

【ニート】なんか大変な事になったな…【大勝利？】

1 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 37 : 00
死ぬかと思つたゾ

2 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 37 : 34
それ。しかも死ねなかつたっていうね

3 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 38 : 13
いや、マジで世界の危機やったんやなあって（現在進行形）

4 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 38 : 45

自宅警備員大勝利って思ってたらヤバい病に罹ったでござる

5 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 39 : 24 I

>> 4 いや、ホントに地獄体験だったわ…

6 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 39 : 36

なんなんアレ!? マジでヤバかったぞ!

7 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 39 : 58

>> 6 暗黒大陸?の厄災?らしい

8 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 40 : 14

はえろ。オレニュース見てねーからネット繋がんねーとか思ってたら偉い目に

あつたわ。あまりにもキツすぎて死にたくなっただけど、死ぬに死ねないってのが更にヤ

バイ

9 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 40 : 51

マジビヨンド神フラインプレー。新会長パリストンにも足向けて寝れんわ。

10 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 41 : 25

カームって奴のせいだろ？絶対許さん

11 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 41 : 52

ホント有り難かったわ…あの光が届いた時ガチで泣いたね。

12 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 42 : 30

アレは神だわ。最早信仰の対象だわ

13 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 42 : 45

>>10じゃあお前が突撃しろよな

14 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 42 : 59

しかし、念？能力？ってスゲーな！

15：名無しのニート 2000 / 2 / 28 12：43：29

アレ、控えめに言って革命じゃね？

16：名無しのニート 2000 / 2 / 28 12：43：53

>>13そこはビヨンド神に任せよう！

17：名無しのニート 2000 / 2 / 28 12：44：12

→清々しいクズ(藁)

18：名無しのニート 2000 / 2 / 28 12：44：26

しかし、念能力ってなんでも出来るのか：閃いた！

19：名無しのニート 2000 / 2 / 28 12：44：48

→通報した

20 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 45 : 18
 警察機能してないんだよなあ

21 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 45 : 32
 ゆーてあの光貰って無体な事する奴おらんやろ : おらんよな？

22 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 46 : 11
 アレ外れてまたあの地獄体験再びしたら今度こそヤバイ

23 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 46 : 47
 だよなあ : 意外と治安爆上がりになんじゃね？

24 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 47 : 06
 そもそも元の元凶を早く潰してほしい。怖くて夜しか眠れん

25 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 47 : 23
 → バツチり寝てんじゃねーか！

26 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 47 : 53

話戻すが、念能力ってアレから続報出た？

27 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 48 : 26

クソワロタ

28 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 48 : 49

>>26 出てない。何もかも未知数。だからこそ衝撃的だった

29 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 49 : 27

ん〜ホントに何でもできるん？

30 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 50 : 03

::あゝ？今ビヨンド神疑ったか？

31 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 50 : 27

いや、ホラ。あの光ってヤバイじゃん。あんなだけの事が出来るってホントに人間がやってんの？って言う純粹な疑問

3 2 : 名無しの一ート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 1 : 0 0
語彙力低下してんぞ。まあここだけの話気持ちは分かる

3 3 : 名無しの一ート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 1 : 3 3
>>30 早速狂信者沸いてて笑うわ

3 4 : 名無しの一ート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 1 : 5 8
>>31 じゃあ誰がやってんだよ

3 5 : 名無しの一ート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 2 : 3 3
消去法でビヨンド神やね

3 6 : 名無しの一ート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 3 : 0 1
まあ、そうなるな

37 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 53 : 26
 とりま、ビヨンド神を崇めながら掲示板に感謝の投稿

38 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 54 : 01
 だとしたらやべー力だな。念能力

39 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 54 : 31
 そりゃ隠すわ。オレだって隠す

40 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 55 : 02
 でももう手遅れなんだ！

41 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 55 : 37
 さ、情報収集すつか！ネットでな！

42 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 55 : 53

まあ動いているネットワークここしか無いんですけどね！

4 3 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 6 : 2 2

アマプロ完全に止まっちゃったから…てか、他のも軒並みアウトだし、マジでここが情報の最先端なんだよな…

4 4 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 6 : 3 3

あの混乱の中動いてるここは神。てか、ここだけだぞ

4 5 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 6 : 5 5

→それな。マジで感謝だわ。おかげでクロスレ乱立の祭り状態だけど

4 6 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 7 : 2 7

それにしちや混乱少ないよな

4 7 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 2 : 5 7 : 4 1

サーバーが鬼。普通落ちる

48 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 58 : 15

管理人GJ!

49 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 58 : 52

今新参も古参も無いからなあ。強いて言えばアマプロ民か？

50 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 59 : 05

とりあえず念の話は考察板逝け

51 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 59 : 18

立ったばつかで碌な情報無いんだよな…

52 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 12 : 59 : 53

まあ、こんなんすぐには出てこんやろ。長い事秘匿されてきたらしいからなあ

53 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 13 : 00 : 17

>>51おい！考察板に現役ハンター降臨してるぞ!!

54：名無しのニート 20000/2/28 13：00：28
マジかよこうしちゃいられねえ！

55：名無しのニート 20000/2/28 13：00：57
絶対画面の中の嫁を現実にするんだ！

56：名無しのニート 20000/2/28 13：01：10
今北三行

57：名無しのニート 20000/2/28 13：01：30
光届いたか

58：名無しのニート 20000/2/28 13：01：59
>>56ビヨンド神

念

ハンター降臨祭り

59 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 13 : 02 : 17
 ……端折りすぎじゃね？

60 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 13 : 02 : 53
 しゃーねーなあ。詳しく言うぞ？念能力考察板でハンターが降臨中。今すぐ逝け

61 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 13 : 03 : 03
 OK把握

62 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 13 : 03 : 14
 じゃあここはビヨンド神崇めながら保守するか

63 : 名無しのニート 2000 / 2 / 28 13 : 03 : 54
 保守

6 4 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 8 1 3 : 0 4 : 0 8

まあ、お前らニートにそんな力が身に付いたらそれこそこの世の終わりですわ

9 4 5 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 1 1 : 0 0

……

9 4 6 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 1 1 : 4 4

……

9 4 7 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 1 2 : 1 5

……

9 4 8 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 1 2 : 5 6

おかえり

949：名無しのニート 2000/2/29 21：13：33
 どうだった？

950：名無しのニート 2000/2/29 21：14：10
 いや、うん。そんな甘く無いよねって

951：名無しのニート 2000/2/29 21：14：53
 はーつつかえ！（クソデカ溜息）

952：名無しのニート 2000/2/29 21：15：39
 死屍累々で笑うわ

953：名無しのニート 2000/2/29 21：16：16
 まずな？ オレ達パンピーだと精神を落ち着かせる修行に10年。オーラを感じ取る修行に10年。そこから基礎を身に付けるまでに10年だと。

954：名無しのニート 2000/2/29 21：16：52

……は？

9 5 5 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 1 7 : 4 3
 んで、固有の能力使い熟せるようになるまで10年↑

9 5 6 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 1 8 : 3 7
 天ぷら屋の修行かよ(藁)

9 5 7 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 1 9 : 1 6
 いや、マジメにそれよかキツイ

9 5 8 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 2 0 : 1 5
 ハンターってヤバいんやなあ…

9 5 9 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 2 / 2 9 2 1 : 2 1 : 2 3
 ま、世の中そんな甘くない

960 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 22 : 31
 ……ところでビヨンド神って何してんの？あれから続報無いけど。

961 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 23 : 34
 アレだろ。まだ光の届いてないところに光届けてんだろ

962 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 24 : 21
 正直、あの髭面のオッサンが光放って人類救ってるの想像すると…

963 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 25 : 08
 すると何だよ？(ガチギレ)

964 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 25 : 55
 やめとけ。とりあえず生存報告続々来てるからマジで人類救ってるっぽいし

965 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 27 : 01
 あの騒動で何人死んだかね…

966 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 28 : 04
 これ以上はマジで世界壊れるわ。首脳陣も軒並みやられんだろ？

967 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 28 : 44
 世界経済 : 株価 : うつ、頭が :

968 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 29 : 29
 もうアレだな。早く終結してくれるのを祈るしかないな

969 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 30 : 39
 ホントそれ

970 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 31 : 24
 だけど、本当にビヨンド氏がやってるならマジで救世主だわ

971 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 32 : 07

キリスト以来だな

972 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 32 : 40
 それぐらいの偉業。ていうかそれ以上

973 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 33 : 35
 宗教できそう

974 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 34 : 08
 まあ彼の目標は暗黒大陸に進出する事だから、どちらかと言えばモーゼ？

975 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 34 : 40
 そっちだな。てか、それも情報知りたいんだが

976 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 35 : 45
 ただなあ…この病気、暗黒大陸産だろ？大丈夫か？

977 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 36 : 52
 それこそビヨンド神が何とかしてくれるだろ！

978 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 37 : 27
 や、他にも地域によつてやべー奴が放出されたらしーじゃん。そんなんばつかだった
 らやバくない？

979 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 38 : 18
 ああ、あのクカンユの奴とか？ 集団で夢見てた奴

980 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 39 : 18
 ベゲロゼもあつたぞ。噂だけど

981 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 40 : 28
 オチマもな……アレは思い出したく無い

982 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 41 : 23

生き残り民！

983：名無しのニート 2000/2/29 21：42：09

アレはヤバかった。親がガチで殺しに来た。てか、街中みんなバーサーカー。ゾンビ映画よりひでえ。んで、オレも必死で閉じこもってたけどそっからの記憶が無くなって気付いたら丁度今みたいな光が差して助かったんよ

984：名無しのニート 2000/2/29 21：42：53

マジか

985：名無しのニート 2000/2/29 21：43：43

んで、気付いた時に目とか腕とか無くなってたけど生えてきたし

986：名無しのニート 2000/2/29 21：44：35

は？

987：名無しのニート 2000/2/29 21：45：35

マジ

988 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 46 : 27
 ウツソだろお前

989 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 47 : 17
 だからマジなんだって!! 正にアレは神の所業だと思つたね。ただ…

989 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 48 : 00
 何だよ

990 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 52 : 00
 アレはビヨンドじゃなかった

991 : 名無しのニート 2000 / 2 / 29 21 : 52 : 53
 ?じゃあ誰よ。まさかカームIIアンダーソンとか言うなよ?

992：名無しのニート 2000/2/29 21：54：00

次スレ

【ニート】大変な事になったな：part2 【困惑】

https://niggkattoya/dkr0200000

993：名無しのニート 2000/2/29 21：54：44

thks

994：名無しのニート 2000/2/29 21：55：21

スレ消費が早あい！

995：名無しのニート 2000/2/29 21：56：17

>>991うん。多分カームAnderson。で、俺はアレが悪い奴に見えなかったし思えない。今回の奴も同じ感じがしたし、これもカームAndersonじゃないかって

996：名無しのニート 2000/2/29 21：56：58

……いや、流石にそれは無理ぞ？ ビヨンド氏がマッチポンプって言ってたろ？

997：名無しのニート 2000/2/29 21：58：04
 ないない、ハイ解散

998：名無しのニート 2000/2/29 21：58：35

説明しづらいけど、悪い感じみたいなのが一切無かつたんだよ！アレは嘘じゃ無かつた。多分ぼまいらは信じねーだろうけど、俺はアイツを信じるぞ！

999：名無しのニート 2000/2/29 21：59：44

やべー奴やん。洗脳かな？念能力の存在が出てきて一気にあり得る話になっちゃまったからな

1000：NIGG@管理人 2000/2/29 23：50：00

このスレッドは1000を超えたぜ！

新しいスレッドを立てな！



——とあるハンターのメールログ

「よお、イツクシヨンペ。生きてつか？」

「…危うく死ぬ所だったけどな。で、なんの用だ？」

「よし！ 生きてんな。オメーに頼みがある」

「…いつもテメーは強引なんだよ。言っとくがリアルの話ならお断りだぞ」

「オレがお前さんにリアルの依頼するわけねーだろ？」

「で？ 依頼はなんだ？ 言ってみろよ」

「全世界規模のネットワーク掲示板の作成。モチ翻訳機能付きな。それを今日中。あ、
管理人名義NIGGな」

「…あのなあ。テメーこそリアルが見えてねーのか？ サーバーパンクするだろうし

普通に無理」

「へー電脳ハンターともあろう奴が普通に無理、と」

「煽ったって無駄だぞ。無理なもんは無理。諦めろ」

「実はオレ、今世界最強のサーバーの近くにいるんだよな」

「は？ まさかお前…：そういう極悪犯罪者として本部で捕まってたな…：という事は」

「正解。ハンター協会のハンター専用ネットワークサーバーだ。都合の良い事に現在誰も使ってねえ」

「ふーん…：やっぱリテメーは極悪人だな。ま、オレにはどうでもいいがな。それでやってやるよ。だからサツサとネットゲ復旧できるようにしろよ。したら報酬は聖なる金色の旗な。つか、いつまでも勝ち逃げしてんじゃねーぞ！ 復旧したらテメーも来いよ！」

「分かった分かった。安いモンだぜ。しかし、お前もリアルは気にしてんだな。アレか？ ビヨンド信じてるクチか？」

「ナイナイ。アイツらマジで頭イカれてんだろ。大方厄災込みでボコられて見苦しく取っ捕まったんだろ？ ダツサ」

「へっ。言ってる。あと、それだけじゃねえからな」

「あー？ まだあんのかよ」

「世界最大の動画配信サービス。億の同時視聴でもビクともしねえ奴。コメントもつけられると尚良し。3日後な」

「……チツ。まあヒマだからやってやる。その代わり報酬は弾めよ?」

147、幕間2

【ニート】なんか大変な事になったな…part103 【やっぱり大勝利】

1：名無しのニート 2000／3／2 12：45：00

新スレ！

2：名無しのニート 2000／3／2 12：45：26
もう100超えるとかやべえ速度だな

3：名無しのニート 2000／3／2 12：45：51
そりやそうよ。だって今だにここしかねーんだもん

4：名無しのニート 2000/3/2 12：46：18
 半年ROMってたらえらい事になりそう

5：名無しのニート 2000/3/2 12：46：41
 とりあえずまとめテンプレな

- ・ビヨンド氏いまだ出て来ず。光届けてる？
 - ・念能力は実在してる。しかし、習得激ムズ
 - ・世界今だに混乱中。人々は引き籠もり生活突入
 - ・生存報告から推察すると人類の20分の1は脂肪
 - ・まだ例の病に苦しんでいる奴も残ってるが、順次回復中
 - ・国または世界からの続報無し。やる気あんのか？
 - ・インフラ系かなりストップ。てかそれどころじゃない
- こんなもんか

6：名無しのニート 2000/3/2 12：47：26
 助かる

7 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 48 : 05
 しかし、する事無いつつーのは苦痛だよな

8 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 48 : 46

自治体とボランティアが食糧は配給してくれてるからまだ何とかなってる

9 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 49 : 20

ま、ありがたいんだけどアイツら目が怖いんよ

10 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 49 : 44

禿同

11 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 50 : 30

ビヨンド教が着々と完成しつつあるね！

12 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 51 : 11

てか、ふつーこういう配給は暴動の元なんだがみんな綺麗に整列しててワロタ

13 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
 12 : 5
 1 : 3
 2
 民度がいきなり上がってんのマジ笑う

14 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
 12 : 5
 2 : 0
 6
 というわけで、ヒマ

15 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
 12 : 5
 2 : 4
 9
 コイツ…ぶっちゃけやがった

16 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
 12 : 5
 3 : 3
 8
 >>14ここ以外だと叩かれるじゃん？

17 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
 12 : 5
 4 : 1
 1
 違い

18 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
 12 : 5
 4 : 4
 3

まー確かになんもする事ねーからな
 ここのもためサイトすらねーし

19 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 55 : 23
 念の修行でもしてろ

20 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 55 : 51
 あれ眠くなるんだよね : ならない? なる奴拳手!

ノ 21 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 56 : 37

ノ 22 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 57 : 11

ノ 23 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 57 : 56

24 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 58 : 37

だからお前らはニートなんだよ

25 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 59 : 22

>>24ここに書き込んでるお前もニートだろ

26 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 12 : 59 : 51

確かに

27 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 13 : 00 : 23

(笑)

28 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 13 : 01 : 03

ネットゲも止まってるからマジで発狂しそう

29 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 13 : 01 : 36

なあ、もう1人の神NIGGが動画配信サービス始めてるぞ！

30：名無しのニート 2000/3/2 13：02：11
 ……マジ？

31：名無しのニート 2000/3/2 13：02：40
 マジ！これリンクな!!

http/m.niggtube.com

32：名無しのニート 2000/3/2 13：03：25
 うおおおおおおお!!!

33：名無しのニート 2000/3/2 13：04：02
 キタ——(。▽。)——!!

34：名無しのニート 2000/3/2 13：04：32
 >>31すげえなコレ：しかも映像の数々がヤバイ

35：名無しのニート 2000／3／2 13：05：00

え？これって相当お宝映像なんじゃ…

36：名無しのニート 2000／3／2 13：05：41

超希少な動植物の生態動画や、誰も入った事ない古代遺跡探索、他にもこの世の秘境、
魔境の映像てんこ盛り…!!

37：名無しのニート 2000／3／2 13：06：07

お、おい！これ、有料だよな？後から請求されないよな!?

38：名無しのニート 2000／3／2 13：06：39

おちけつ。トップに書いてある。通信費以外は無料だ。

39：名無しのニート 2000／3／2 13：07：01

祭りじゃ！

4 0 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 2 1 3 : 0 7 : 4 4
 祭りの時間じゃ!!

6 3 2 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 2 1 8 : 1 8 : 0 0
 はー掘つても掘つてもなくならねえ。しかも無限に近いぐらい増え続けとる (歓喜)

6 3 3 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 2 1 8 : 1 8 : 2 5
 ハイパーコンテンツ爆誕やな

6 3 4 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 2 1 8 : 1 8 : 5 1

まさかこの状況でこんなん出てくるとか：マジでありがとう

635：名無しのニート 2000/3/2 18：19：47

コメント機能最高だわ。一つの動画で無限に盛り上げれる

636：名無しのニート 2000/3/2 18：20：20

全部人気動画だけど、その中でもトップクラス動画ヤバいな。もう億再生からの何千万同接って

637：名無しのニート 2000/3/2 18：21：02

これに耐えるサーバーも神

638：名無しのニート 2000/3/2 18：21：23

つか、気付いてる奴は気付いてるけどよ。コレ、オレらでも配信できるんだよな

639：名無しのニート 2000/3/2 18：21：52

え？ マジ？

640 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 22 : 48

マジ。早速素人がニュースみたいに配信してる。再生数はお察しだが。

641 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 23 : 28

神コンテンツかよ : 歴史変わるぞ

642 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 23 : 59

今NIGG関連以外で伸びてんのは生存報告かな。あと、ピヨンド教

643 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 24 : 19

管理人が強すぎる。文字通り桁違い

644 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 24 : 40

つか、これマジでなんで誰もやらなかつたんだってぐらい神コンテンツやん

645 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 25 : 37

そりやお前、テレビとかラジオとか、既得權益がだな

646：名無しのニート 2000/3/2 18：26：31
全部無くなったんだ！

647：名無しのニート 2000/3/2 18：27：10
むしろそれ関係の仕事の奴等がコレに目をつけ始めてるからな

648：名無しのニート 2000/3/2 18：27：44
おいおい、この状況でもカネの亡者かよ。流星に管理人もキレていい

649：名無しのニート 2000/3/2 18：28：11
安心しろ。にチャンネル（作註：NIGGチャンネルの略称）に管理人降臨してそれらは一切跳ね除けるって言ってる。後から来て美味しい汁チューチューは許さないんだ。その辺は規約契約法的根拠完璧に整えてるっぽい。ただし、企業は将来部分的には受け入れるかもって

650 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 28 : 53
 ……なんで?

651 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 29 : 27
 広告代。スポンサーだな。流石に無償じゃずつとやっつけられんらしい

652 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 30 : 00
 マジかよ…萎えるわ

653 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 30 : 29
 ところが違うんだな

654 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 30 : 52
 何が?

655 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 31 : 42
 お前ら忘れてない? これ、オレらも配信できるんだぜ?

656 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 32 : 38

…オレ頭悪いから分かん。説明 plz

657 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 33 : 01

つまりだな。NIGGほどの人気動画を作って配信する

658 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 33 : 51

まずその時点で無理なんだが

659 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 34 : 37

話の腰折るなよ…続けるぞ。それってすげえ人数見るじゃん？で、そこにCM流すと
どうなる？

660 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 35 : 28

ウザい

661 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 36 : 06

いやまあそんなだけだよ。企業視点で考えると莫大なCM効果じゃん？その凄まじい広告代になるだろうそれをNIGGは配信者に8割還元するって名言してる。

662 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 36 : 29

……マジ？

663 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 36 : 50

マジ。つまり、人気配信者になれば億万長者も夢じゃなくなる

664 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 37 : 37

おお……！

665 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 38 : 36

もしかしてオレ達にもチャンスが!?

666 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 39 : 22

いつもの流れだとねーよバーカなんだが…あるんだなそれが

667 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
18 : 39 : 57
…

668 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
18 : 40 : 29
…

669 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
18 : 40 : 50
…!!

670 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
18 : 41 : 46
…!!!

671 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2
18 : 42 : 09
キ

672 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 42 : 43
 キタ ——— (。▽。) ——— !!

673 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 43 : 18
 キタ ——— (。▽。) ——— !!!

674 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 43 : 38
 今オレは涙している。これからオレは変わるんだ。変わるんだと…！
 これからオレは毎日感謝の正拳突き一万回始める!!

675 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 44 : 05
 社会の粗大ゴミと罵られ、蔑まれてたオレらにもチャンスが巡って来るなんて…(泣)

676 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 18 : 44 : 51
 盛り上がつてるところ悪いが将来的な話だからな？まずはCM作る企業が復活せんと話にならんし

677：名無しのニート 2000/3/2 18：45：34

その為にも早くこのテロを終結させないとな！

678：名無しのニート 2000/3/2 18：46：02

オレらにできる事はないか!?

679：名無しのニート 2000/3/2 18：46：54

急にイキイキしだしたなお前からw

680：名無しのニート 2000/3/2 18：47：38

まーそーもなるわ。それにしてもNIGGすげえわ。既得権益ぶつ壊れたタイミン
グで完璧なコンテンツ2つも作るって。収益化関係なくても最高に面白いし感謝し
かない

681：名無しのニート 2000/3/2 18：48：12

だな。今やネットワークさえあればケータイで見れるし、これからが楽しみだ

876 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 28 : 00
 とりま、ビヨンド神が帰って来ないと話にならないんだよな

877 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 28 : 27
 それ。早く犯人捕まって欲しい

878 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 28 : 42
 今やビヨンド神を待ち望む人々が夜中に集まってお祈りしてるからな

879 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 29 : 13
 だがオレ達は参加しない！何故なら誇り高きニートだから！

880 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 29 : 41
 >>879 埃高いの間違いでは？

881 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 30 : 21
 オレ達にはニグツベ（作註：NIGGTUBEの略称）見てにチャン徘徊するって言う
 尊い仕事があるからな！

882 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 30 : 33
 残念ながら概ね同意せざるを得ない

883 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 31 : 04
 しかし、ホントNIGGって何者なん？あんな超ハイクオリティ動画の数々マジでど
 うやって撮ったんやろ

884 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 31 : 42
 それな。もしかしたらハンターかもな

885 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 3 1 : 5 3
 もしかしなくてもハンターだろ。一般人じゃ有り得ん

886 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 3 2 : 3 3

>>883 この掲示板至る所にちよくちよく現役ハンター降臨してるけどさ、ソイツ曰く並のハンターじゃねえって

887 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 3 2 : 4 6
 まずハンターからして並じゃねーんだわ。話聞く限り

888 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 3 2 : 5 6
 その中でもトップクラスの上澄みじゃないとあそこまでの映像は無理らしい

889 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 3 3 : 3 4
 …想像もつかないんだが、具体的には？

890 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 3 3 : 4 5

ソイツ曰く、トリプルハンタークラス、だと

891 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 34 : 22
トリプル!?

892 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 34 : 55
知っているのか!? 雷電

893 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 35 : 21
マジで上澄みじゃねーか!! 協会本部詰めクラスやぞ!!!

894 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 35 : 52
はーやっぱ只者じゃねえって思ったわ

895 : 名無しのニート 2000 / 3 / 2 20 : 36 : 28
→ 偉そうに納得するおまいは何なんだよw

【緊急告知】ビヨンド氏、遂に現れ、最終決戦に向けてのメッセージを発信する

1 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 06 : 00

キタ———(。▽。)———!!!

2 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 06 : 30

ビヨンド!ビヨンド!ビヨンド!

3 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 06 : 54

神をつけろよデコ助野郎!

4 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 07 : 19
 遂に…遂に来たか…!

5 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 07 : 29
 しかし、ビヨンド神聖人すぎん?

6 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 08 : 09
 当然だろ? 神だから

7 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 08 : 35
 でも、この感じだと敵もヤバイ

8 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 08 : 56
 そりやそうだろ…全人類にあんな病気ばら撒く奴だぞ?

9 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 09 : 24
 一部懐疑派がいるのがな…

10 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 09 : 35
 触れるなよ、そつとしといてやれ

11 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 09 : 45
 しかし、無理だったら核落とせて相当覚悟決まってるよな

12 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 09 : 56
 漢の中の漢だわ：いや、神だった

13 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 10 : 16
 頼む：人類を救ってくれ!!

14 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 10 : 55
 お願いしますお願いします!!!

15 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 11 : 13

マジで頼む…もうアンタしかいない！

16：生還した名無しさん 2000/3/3 20：11：39
 ビヨンド神に寄付とかできねーのか

17：生還した名無しさん 2000/3/3 20：11：53
 それは無理だが応援メッセージとか出来るかもな

18：生還した名無しさん 2000/3/3 20：12：06
 多すぎてパンクしそう

19：生還した名無しさん 2000/3/3 20：12：41
 オレはやるぞ！人類の未来が掛かってるんだ！

20：生還した名無しさん 2000/3/3 20：13：00
 オレも!!やる奴拳手！

ノ 2 1 : 生還した名無しさん
 2 0 0 0 / 3 / 3
 2 0 : 1 3 : 3 5

ノ 2 2 : 生還した名無しさん
 2 0 0 0 / 3 / 3
 ノ!もち!
 2 0 : 1 4 : 1 4

ノ 2 3 : 生還した名無しさん
 2 0 0 0 / 3 / 3
 2 0 : 1 4 : 4 9

ノ 2 4 : 生還した名無しさん
 2 0 0 0 / 3 / 3
 2 0 : 1 5 : 1 2

ノ 2 5 : 生還した名無しさん
 2 0 0 0 / 3 / 3
 2 0 : 1 5 : 3 0

ノ 2 6 : 生還した名無しさん
 2 0 0 0 / 3 / 3
 2 0 : 1 5 : 5 8

27 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 16 : 12

ノ

28 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 16 : 28

ノ

29 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 17 : 00

ノ

30 : 生還した名無しさん 2000 / 3 / 3 20 : 17 : 15

挙手で1スレ行きそうな勢いだな。何はともあれ、冗談じゃなく人類の未来が掛かっているから、ホントに頑張っ欲しい

【緊急告知】神管理人NIGGから重大発表！

1 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 00 : 00
 スレタイ

ニグツベでトリプルハンターだと噂の管理人がヤバい動画を生配信するらしい

2 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 00 : 16
 盾乙

3 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 00 : 44
 え？ 何だつて？

4 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 00 : 55
 生…配信？

5 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 01 : 21
 →お前の反応はいやらしいなw

ところで何の配信だろ

6 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 01 : 38

NIGGはこちらの期待を更に斜めに上45。で常に走り抜けるからなあ

7 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 02 : 15

何にせよ楽しみ

8 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 02 : 53

ビヨンド突入っつー大ニュースも入ってるし、それ関連？

9 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 03 : 05

……あ、まさか

10 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 03 : 20

何だよ

1 1 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 3 2 1 : 0 4 : 0 0
 ハンター協会本部突入生配信 : とかじゃないよね？

1 2 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 3 2 1 : 0 4 : 1 7
 ……

1 3 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 3 2 1 : 0 4 : 4 9
 ……

1 4 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 3 2 1 : 0 5 : 0 4
 ……マジ？

1 5 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 3 2 1 : 0 5 : 4 2
 いや、あり得そう

1 6 : 名無しのニート 2 0 0 0 / 3 / 3 2 1 : 0 6 : 1 5
 マジならヤバイ

17：名無しのニート 20000/3/3 21：06：35

緊張してきた。続報まだか!?

18：名無しのニート 20000/3/3 21：06：57

キタ！これ！

<http://m.niggtube.com/>5737

19：名無しのニート 20000/3/3 21：07：32

何々：プロハンターなのでいち早く本部潜入……敵はエントランスに占拠中。監視カメラの映像を回収に成功。先行してその映像を配信……

マジで？

20：名無しのニート 20000/3/3 21：07：57

やっぱり予想の斜め上45。だった！（驚愕）

21：名無しのニート 20000/3/3 21：08：25

ちよつ、待つて!!米覽で見えんのだが!

22 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 08 : 37
 非表示しろ!...これ...何...? :

23 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 08 : 57
 光...です... :

24 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 09 : 23
 ビヨンドちやうやん!!どういう事!?

25 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 09 : 45
 これ、カームIIアンダーソンじゃねーの!!?

26 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 10 : 02
 写真見る限りそう。マフィアみてーな白スーツやし

27 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 10 : 33
 実際マフィアなんだよな : でもこれって :

28 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 10 : 48
 あの光って :

29 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 11 : 21
 待てよ ! それじゃ話が半分変わってくるぞ ! ?

30 : オチマの生き残り民 2000 / 3 / 3 21 : 11 : 46
 → だから言っただろが ! カーム || アンダーソンが病気も怪我也も治してくれてんだよ
 !!

31 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 12 : 00
 クソコテと思ってた奴の言った事が事実だったとは :

32 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 12 : 39

まさか…まさかとは思うが、病気撒き散らしてたのって…

33 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 12 : 58
 やめろよ!! ビヨンドはオレ達を救ってくれただろ!!!

34 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 13 : 25
 でも…よく考えればその証拠って…なくない?

35 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 13 : 42
 ……待って、今すげー混乱してる。自分の中の価値観が崩壊しかかっている感じ

36 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 13 : 58
 考えたく無いのは分かる。分かるけど、こうして映像で見せられると…

37 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 14 : 13
 おい、なんか顔中から血を吹き出してない?

38 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 14 : 35
遠目からでも尋常じやない量なんだが

39 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 15 : 11
あ、でも超美人と超美少女ロリが甲斐甲斐しくその血拭いてる
正直嫉妬

40 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 15 : 24
いや、それにしてもヤバすぎだろ。死ぬぞ？

41 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 15 : 40
やめろやめろやめろ!! こんなのはトリックだ!! 偽映像か加工だろ!?! それとも念能力
だろ!! フェイクだよ絶対!

42 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 15 : 51
あ、そ、そうか。その可能性もあつたか!

43 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 16 : 28
 確かにそれ言われちゃそうだな…でもこれで分からなくなっちゃった。もしこれが
 仮に本物だったら…

44 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 17 : 07
 でもNIGGだぞ？推定トリプルハンターで神コンテンツ無料で配信してくれた奴
 だぞ？

45 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 17 : 18
 それこそオレらを騙すためじゃないか!?

46 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 17 : 55
 ……これ以上は分からん。でも、この論争すぐに決着つくだろ

47 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 18 : 16
 何で？

48 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 18 : 55

これって先行配信だろ？つまり生配信はこれからだ。そこで全てが分かる

49 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 19 : 22

… : そうだな。全てはそれから、か。

50 : 名無しのニート 2000 / 3 / 3 21 : 19 : 44

もしかすると、バカらしい考えって分かっているんだけど、NIGGってこの為に動画配信サービス始めたのかもな

148、魔王

「ぐ……うう……」

「おやおや、まだ意識があるか。随分と鍛えられたようだね。能力も無事進化している。

〃彼〃は随分と入れ込んだみたいだ。役目を果たして偉いよ」

ボロボロになったカルトがイルミの前に横たわる。彼女の紙吹雪は力を失い散らばっている。

「じゃあ、後はオレの為に働いてね。とりあえず家に帰るからさ」

そうして、瀕死状態のカルトに禍々しい色味を帯びた針を刺そうとした、その時。

ドクン

明らかに聞こえるはずのない心音。イルミは思わず周囲を探る。敵か、と。しかし、誰もいない。居るのは目の前のカルトとキルア、そしてアイを憑けた針人間とストック達のみ。

イルミはこの時、死体の存在を完全に除外していた。幻影旅団に囲まれ、圧倒的に不利な状態でも最後まで抗い、そして死んだ少年の事を。

ドクン…ドクン…

再び聞こえた音。今度こそ出所を探り当てると集中していたイルミは、ようやく気付いた。その音がゴンから発生している事を。

「なに…？ 完全に死んでたよね？」

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン…

鼓動が早くなっていく。完全に蘇生し始めている。イルミはこの時、再びミスを犯した。これが不思議な事ではあるが、死後の念によるただの蘇生であるとタカを括つてしまった。様子を見てしまったのだ。見極め、対処する。それは念戦闘に於いては非常に正しい。

しかし、この場合には間違いであつた。

彼は今この瞬間に即座に攻撃するべきだつた。又は針を刺しておくべきだつた。イルミは「力」を手に入れた事で、本人すら気付かない様な「緩み」が出来てしまつていた。

——それが、彼、ひいてはこの戦いの命運を分けた。

ムクリ、とゴンの上半身が起き上がる。身体中がボロボロだ。欠損もある。しかし、彼はそれを確認しながら見ていると、身体のキズが修復され始めた。そして、あつという間に欠損すら回復した。

これにはイルミも驚いた。何が起きているのか分からないが、マズい事態になつてい
る予感がし始めていた。そして気付いた時に消滅させておけば、と後悔する。しかしそ
れは詮無き事。ならばここで始末する。コイツはキルの為にも生かしては置けないか
ら。

一步踏み出そうとした瞬間、ゴンの眼光がイルミを捉えた。

以前と変わらぬ容姿。強いて言えば、彼にあつた甘さや弱さといった気配が消えてい
る。

イルミはその背後に強大な捕食者を幻視した。

ゾクツ

——この時、イルミは自分の感覚を信じきれなかった。この起き上がった少年が、自
分より圧倒的に強いなど。普段から兄妹達には口酸っぱく教え込んでいた。そうし
た場合はすぐにも逃げろ、と。だが、彼自身が躊躇ってしまった。そして、そんな事
はあり得ないとタカを括ってしまった。

ゴンが起き上がる。その動作だけでも絵になる様な、完璧な肉体の動き。

「キルア……カルト」

ここにきて、彼は初めて口を開く。

「ウチの家族に何か用かな？」

イルミは探りを入れる。この違和感が何であるか、そして先程から感じている感情がなんなのかを。

「イルミ……お前が、やったんだな？」

それは主語のない問い。しかしイルミはそれを正確に把握した。

「そうだけど？ だから何？」

「キルアを、カルトを虐めたな」

「失礼だなあ、これは教育だけど。前もそうだったけど、ウチの方針に口を出さないでもらえるかい？」

「どうでもいい。そんな事は知らない。お前はここで倒してキルアとカルトを返してもらう」

ゴンが一言一言喋るごとに、そのオーラは膨れ上がっていく。既にその質も、量も人間のソレではない。そしてイルミは感じていた。最早戦闘は不可避であると。そして、自分は逃げる機会を逸してしまったと。

「……「アイツ」みたいに甘くは無さそうだね。じゃあやってみなよ」

強がり気味にイルミが言う。ゴンは、それを半ば無視しながらイルミに宣戦布告する。

「全部見ていた。夢の中で。お前がやった事、お前達がやっている事。オレは許さない。今は少なくともお前を……倒す！」



その攻防は、念戦闘における常識を遥かに上回る闘いであった。ビヨンドの念能力【千手阿修羅】は、無数の手と武器を操り、メルエムに迫る。360。から迫る武器の数々。その威力は一般の能力者が一撃でも食らえばミンチになる。一つ一つが必殺級の威力である。

協会本部のエントランスはかなり広く、かつ頑丈である。しかし、それが紙屑の様に破壊されていく。

メルエムは、刃を逸らし、鈍器を撃墜し、時には敢えてその身に受けながら接近していく。

彼は成長していた。産まれて間もないが、幸か不幸か自分よりも圧倒的な強者に出会った。オーラや肉体が自分に及ばないネテロも、その技の冴えは驚愕すべきものだった。

世界は広く、そして深い。この人間の楽園にすら、自分を上回る強者が存在している。これが楽園の外であれば言わずもなだろう。何しろ、彼の目から見て神にも等しい力を持つ者さえも上回る連中がゴロゴロしているらしいのだから。

刃を切り裂いて、刹那を躲して、辿り着く。この男は、ネテロに比べればまだまだだ。

あの息もつかせぬ連続攻撃。瞬く間に繰り出される攻撃は反応すら許されない。この男もネテロを冠しているらしいが、その技には狂気が足りない。だから、こうして辿り着ける。

閃光の様なメルエムの突き。それはカームを模したモノ。速度は無いのに避けられない。ビヨンドはそこに気付き、それを阿修羅の盾でガードする。

ピシッ

盾にヒビが入る。だが、その一瞬の硬直をチャンスとし、ビヨンドは再び波状攻撃を仕掛ける。先程の焼き直しである。だが、メルエムはこの攻防の先を既に見据えている。尋常ではない彼の頭脳は、この闘いの決着が詰め軍儀の様に、正確に詰みの部分まで読んでいた。無論、相手の詰みを。

メルエムはネテロと遊び、対話することによって精神的にも成長していた。人とは何か。社会とは何か。そして、王とは何か。

そして理解する。人間と自分達はやはり相容れぬと。そもその生態が人間とはまるで違う自分達は、共存など不可能だ。覇権を争えばどちらかが滅びるまでやり合う

か、一方的な奴隷として飼うかしかない。だからこそ、^{カーム}奴は我々を拒絶したのだ。奴は否定したが、アレも歴とした王である。認めたくはないが、臣民を導き、異物は排除する。それも王の仕事であるから。何よりもその強さがそれを裏付ける。自分達は生存競争に敗れ、慈悲で生かされた。王としての資質の強さすら否定された。だからこそ、学ばねばならない。王の資質を。今ここに、玉座を巡る闘いが始まっている。それを奇貨とし、新しい世に王として君臨する為に。

目の前の男。これも王の器ではある。しかし、この男は薄い。

強さも、野望もある。外法だったが臣民を支配し、導く手腕も大したものだ。だが、薄いのだ。動機が。情熱が。信念が。

それは感覚的なもの。しかし、自分や自分を倒したあの男と比べると、何か釈然としないモヤがかかる。そして今、この男と拳を交わしてその感覚が正解だったと確信する。

この男は、偽りで出来ていると。

「くく……はははははは!!」

三度目の接触でメルエムは堪らず哄笑する。既に彼はビヨンドに致命的な一撃を加

える程の攻撃を繰り返している。今回は躲された。しかし、次や、その次はもう当たるだろう。そうなれば、オーラに多少差があれど種族差で肉体的に圧倒的に有利なメルエムの攻撃は、大ダメージを与える事すら可能だ。既に彼はシャウアップの鱗粉を模したオーラの粒子を拡散し、見なくても攻撃を躲せる域に至っている。

「……何がおかしい?」

「虚ろの王よ。貴様はもう既に詰んでいる。どんな自信があつてここに直接乗り込んだかは知らんが、貴様では余にすらも勝てん。それがおかしくてな」

「まだ見せて無いかもしれねエだろ?」

「ならば早く見せる事だ。貴様は後5手以内には詰むぞ。余も全てを見せておらぬ状態でこれだ。それとも、貴様は遊びに来たのか?」

「そうだけ……といたい所だが、ここまでか。親父の方も終わっちゃったようだからな」

見ると、ネテロの方も十二支ん全てを打ち破り、こちらを見据えていた。死体側は固有能力が使えないとは言え、それをこの短時間で撃破するネテロの技量はまさに人類最強と言えるだろう。今、死体は再び動き出さない様に拘束し、ついでに裏切り者のサイユウも縛られて拘束されていた。

「あーあー。マジかよ。ここまでボコられるとは予想外だったな」

「そんな貴様に問おう。何をしにここに来た？」

「ん？ そりやお前らをブチ殺しに来たに決まってんじゃねーか。人類の大敵どもよ」

追い詰められているのはビヨンド側のはずだ。しかし、この男は不遜な態度を崩そうともしない。そこだけ見れば王らしいのだが。

「だが、貴様には無理だ。それは理解できている筈だが？」

「ふん。愚民共にはアピールが必要なのさ。今は特にな。『救世主』さえないなりやもつとラクだったのによ」

「で、逃げ帰るか？　ますます王としての器が小さくなるな」

「いんや。貴様らはここで死ぬ。これは決定事項だ」

「勝算があるとでも？　貴様は嘘ばかりだ。告げる言葉は嘘、臣民に語る言葉も嘘、その野望や信念すらも嘘で固めている。何が貴様の真実だ？」

「オレは嘘は言つてねーぜ？」

「そこが嘘だ。貴様には熱量が感じられん。断固たる決意、確固たる信念。いずれも王

に必要な資質！それが無い。正に虚ろだ。貴様は一体何なのだ」
「……………」

不気味な沈黙が降りる。そこへ、ネテロ達が近づく。

「メルエムよ。此奴はワシの息子だった。しかし、此奴が暗黒大陸に渡航し、帰って来た……だが、帰って来た時には息子ではなくなつた」

「ほう……では、此奴は何だ？」

「ワシも気付いたのは不覚にもこの騒動からじゃ。巧妙に隠しておつた。しかしお主はこの短時間で気付いた。流石よの」

「はぐらかすな。貴様の悪い癖だぞ。で、此奴の正体は？」

「此奴の正体、それは——」

「——ゾバエ、だろ？」

背後から新たな人影。

「ジン！」

「ようやく間に合ったぜ。いや、タイミングバツチりだったな。流石オレ」

「いや、待てよ！ 何してやがったとか色々聞きてーが、その前にゾバエってウイルスだろ？」

レオリオがたまらず疑問を呈する。当然の疑問だが、ジンはそれに答える。

「そうさ。カームが言ってたろ？ 統率者が居るつてな。それがコイツで、ビヨンドはただの依代つてだけだ」

「全然意味がわかんねえ…：どういう事だよ」

「な〜くに、単純な事だ。コイツは取り憑かれてたんだ。50年前の渡航でゾバエにな。で、一緒にまんまと帰って来た。ゾバエの特性上いくらでも潜り込めるからな。んで、

ビヨンドと共生してたんだ。いや、乗っ取りかな」

「……………」

ビヨンドはニヤニヤしながらも沈黙を貫いている。

「で、機を見てゾバエを広げまくった。バレない様にな。機が熟したら後は発動させるだけ。随分と遠大な計画じゃねーか。なあ？　そうだろ？」

「くく……………ふっ……………いや、失礼。やっと気付いたか。楽園のサルは随分と呑気なこと」

ガラリとビヨンドの口調が変わる。それに伴い、ゴキゴキとビヨンドの身体が変化してゆく。肌は青白く、頭髮は白に、そして何より若々しくなつてゆく。背中からはコウモリに似た翼が三対、そして長く細い尾が一つ。

変化に伴い、彼のオーラも激変していく。強く、禍々しく、一般人でも視認できるほど濃厚に。あまりに濃厚すぎて、その身体が自然と浮かび上がる。恐らく一般人にも視認できるだろう。

それは、人間の伝承にある吸血鬼そのものの姿と言えた。

そのオーラ、というよりも最早妖気とも言えるソレは、全員に絶望感を与えるのに十分であった。

「……ようやく出やがったな……最後の厄災。いや、魔王と言うべきか」

「御名答。初めまして。ボクの名はゾバエ。【魔界の王】にして【吸血鬼の真祖】。ふふ……楽園のサルにしては中々いい素体だったから割と快適に過ごせたよ」

言葉遣いこそ子供っぽいのが、その威圧感には正に魔王に相応しく。溢れ出るカリスマは神の如く。その存在は、明らかにこの世界に存在しているものではなかった。

「……門番ザル過ぎんだろ。こんな奴通すとはよ」

「アレは老害さ。何も期待しない方がいい」

「やはり、な。やはり先程までの姿は偽りであったか」

「おやおや、蟲ケラくん。キミも中々楽しめたよ。私の演技はいかがだったかな？ 他
のサルどもは簡単に騙されて張り合いが無かったものでね」

「ビヨンドは…いつまで生きていた？」

ネテロが問う。彼も縁を切ったとはいえ父親だった。

「つい最近まで。楽しかったよ。徐々に徐々に犯されて不安に苛まされていく様は傑作
だったね。ああ、彼の理想は本物だった。それを利用してもらったよ。バレちゃった
けどね」

「……ビヨンド」

「だが、テメエはここまで姿を隠した。理由を当ててやろうか？ テメエでもカームや
門番に見つかったらアウトだからだ」

「ふ……本当にそう思ってるかい？」

ゾワッ

恐ろしい程の波動がゾバエから発生する。どれだけの力量か上限すら掴めない。そ

れ程の庄。

だが、それでもジンは怯まない。

「そうだぜ。テメエはだからこれまで隠れてきた。見つかったら門番に回収されるからだ。出てきたのは『救世主』が現れたから。違うか？」

「ほう……まあそこまでは正解」

「そして『救世主』を他に任せて潰し、自分はまんまと人類を暗黒大陸に導く。奴隷にする為にな」

「な………！」

「そんな………」

「一つ訂正があるね。奴隷だけじゃなく、玩具。他にも交配とか拷問の実験材料、ストレス解消、ゲームの景品。用途は多岐に渡るねえ。そもそもこれはボクにとつてはお遊びさ。人類を門番の目を掻い潜つてボクの元に連れてくるゲームだ。永く生きてると退屈でね」

「そんな事の為に……！」

「キミ達が弱すぎるのがいけない。弱い癖に手厚く保護なんかされちゃつてさ。だからそれを全力でおちよくなるのが楽しいんじゃないか。縛りがあると尚よし。特にこの2

年は最高に幸せだったね」

「……パリストンと気が合うわけだ」

「ああ、彼？ 彼もサルにしちや中々趣味が合う奴だったよ。優秀だったし、ボクに快く協力してくれたしね。さて、真実に気付いたキミ達は既に絶対絶命。運良く助かっても最早キミ達に味方はいない。肝心の「救世主」は「反救世主」と良くて相討ち。「救世主」が死ねば、サルどもの保護も外れてやりたい放題。ああ、絶望だねえ。こういう時、なんていうんだっけ？ ……そうそう。詰チエックメイトみだ」

——正に絶望。このメンバーですら勝てるような相手じゃない。そして、仮にカームがヒソカに勝ってもコイツには負けるかもしれない。それ程の相手だ。

この勝負は負けていたのだ。初めから。周到に準備され、見事に詰まされた。何故なら全人類は知ったから。念の存在を。暗黒大陸の存在を。いずれ、ノコノコと出て行くだろう。そして奴隷となるのだ。目の前の様な存在に。

「——バカが。人類を舐めんなよ」

ジンは、ポケットからケータイを取り出す。それは、一般に普及しているものよりも

大柄で、どちらかと言えば小型のパソコンに近い。それはジンの特注品。他のケータイより遥かに高性能で、高機能。これ一つで大容量の映像データや記録を保存でき、通信速度も並じやない。ジン自ら手掛けたソレは、最早オーパーツに近い品だ。

ジンはその画面をゾバエに向ける。

そこに映っていたのは自分達の姿。しかも複数の角度から撮られている。

「うん？ コレはボくら？ それがどうした」

「良く見な。見えるだろ？」

ジンがボタンを操作してコメント表示をONにする。途端に画面を埋め尽くすほどの文字列が流れ始める。

当然だが、ゾバエは人間とはその性能面で隔絶している。視力も比べるべくもなく良い。だからこそ、左から右へと高速で流れてゆく文字列が見える。

・ピヨンド……ウソだよな…？

・オレ達を暗黒大陸に連れてくのは奴隷にする為…？

・バカ言うな！フェイクだろ！！

・いや待て、そもそもビヨンドじゃないぞコイツ

・自分からゾバエって…やっぱりオレ達は騙されてたんだ！！

・待てよ…じゃあオレ達ってこの悪魔の応援してたって事？

・クソ！わかんねえ！！オレは確かめに行くぞ！

・待て！絶対ヤバいからやめろ！！

・この配信は生LIVEで間違いない。念能力のフェイクでもない。オレも今ものすごいショック受ける（@現役ハンター）

・本職降臨！やっぱマジか…！！

・カームⅡアンダーソンが…本当の“救世主”…？

・でも、今なんで居ないんだ？今激ヤバのピンチだろ？

・話聞いてたか!?今“反救世主”とやらと闘ってるんだろ!?

・みんな!!オレが保証してやる。コレはマジで生中継だ！（@モラウⅡマツカーナー）

・げ、現役ハンターの有名人じゃん！やっぱりコレって…

・私も保証します。これはリアルです（@サトツ）

・ハンター達が続々名晒してコメントしてる…アカウントも本物ください。つまり…

続々とリアルタイムで書き込まれるコメントは追うのに精一杯だ。しかし、ゾバエはその内容を正確に捉えていた。

「コレは……」

「ようやく気付いたか。そうさ……今現在のこの状況を生LIVE配信中だ。テメエがペラペラくつちやべった事も全て筒抜けだったって事だ。残念だったな。ああ、パリストンにや期待すんなよ？ アイツの考えはオレも分かる。引つ掻き回される前に全て潰してやったぜ」

「……………」

「見てるか、お前ら。お前らが信じてたモンの正体がこれだ！ コイツこそが全ての元凶!! 今だに信じられねー奴もいるだろう、だが、今このLIVE映像だけは本物だつて生命を掛けて誓ってやろう！」

ジンは、エントランス最奥のモニターを映し出す。ジンがケータイに映していた内容が全て大画面で映し出されていた。

「さあ、どうする？ プランが狂ったなア。暗黒大陸の魔王サンよ！」

「……クク……ハハハハハハ!!」

盛大に笑い出すゾバエ。その様子から、心底笑っているようにしか見えない。

「……笑うポイントじゃねえんだが？」

「キミ達はいつも面白いねえ！ そんな事で勝ち誇っているなんて！ 全人類にバレた？ で？ それがどうしたんだい？ もう、キミ達は『終わってる』んだよ。逆に教えてあげるけど、よく見てごらん？ キミ達を大事に守ってる光を！」

ジジツ、ジジツ……

見れば、確かにその光が弱まってきている。

「これは……カームがヤバいのか!？」

「そのクソ忌々しい枷ももう終わる。そしたらどうなると思う？ ボクはね、どこにもいないんだよ？ ふふ……ボクは逆に皆の顔が見たいモノだ。絶望を浮かべる顔をね」

そうなのだ。ゾバエの言うとおり、これが落ちると言うことは、即ち敗北を意味する。どんなに頑張っても、どんなに策を弄しても、それが駄目なら駄目なのだ。

「……そうさ。勝算なんてハナからねえのさ。でもな、クソ野郎。それでも人類を舐めんなって言うてんだ」

「見苦しいよ？　じゃあ待つてあげるかどういいう根拠があるのか言つてごらんよ」
「いいのか？　じゃ、言うぞ。おい！　見てるお前等！！　今聞いたとおりだ！！　カームの光が消えると詰みだ！　コイツの言うとおり、そこからは地獄一直線だ！　お前等それでもいいのか!？」

- ・ え……いやだ……
- ・ マジで……どうにかならないの!？」
- ・ そんな……そんなことって……
- ・ クソツ、マジで光薄くなつてきてる！　ヤバいぞ（@モラウ||マツカーナーシー）
- ・ おいジン、どうすんだよマジで！（@ドゥーン）

「だが、一つだけある！　那由多の彼方にある可能性だが、それに賭けるしかねえ!! それ
は——」

「それは？」

「——祈れ」

「……は？」

「祈るんだ。必死で。カームの無事を祈れ。それがお前等にできることだ」

「……は。結局運頼みか。やっぱり下等生物だね。じゃ、そろそろいいかな？」

「オレの運はとどまるところをしらねえからな。案外何とかなるかもしれないぜ？　それ
に、テメエの面を一発ぐらいはぶん殴つときたかったからな」

「ほお、威勢の良い下等生物がいたもんだね。楽しみだよ。その瞬間を迎えて絶望する
姿が見たいから、ゆっくりじっくり翳つてあげるよ」

「ジジイ、ビスケ、メルエム……ここからが本番だ！　いいか、絶対に死ぬんじゃねえぞ！
「わかつとるわい。言つたじやろ。誰も死なさんとな」

「ちよーつと自信無いけど……カームも頑張つてるからね。やるわよ」

「話は終わったか。闘いの時間だ」

「OK。最後に、レオリオ」

「何だよ……超展開過ぎてオレにはついてけねーんだが」

「オレはお前にできることがあるって言ったな」

「ああ、あつたな。わりーがさつぱり分からん」

「いいか。ハツキリ言つて万分の一より低い確率だが、逆転のチャンスがある。それがお前さんだ。それができたらあのクソ野郎のハナを明かせる。だからな——」

お前が、聖光氣を掴め。

149、復讐は儂き人間の為に

「ぐうっ……っのー！」

凄まじい威力の蹴りを当てられ、血反吐をまき散らしながら斜め上空に吹っ飛ぶ。しかし、イルミもただではやられない。空中で姿勢を戻し、自らの針を飛ばす。

「最、初は、グー」

飛んでくる針の雨。それら一つ一つに凝縮された念が込められている。しかし、それを平然とそのまま歩いて近づくゴン。当然、針は刺さらない。彼の凝縮された人間とは次元の異なる肉体は、イルミの針ごときが刺さる事はない。全て弾かれ、無情にも地面に散らばっていく。

「ジャン」

「ケン」

一歩一歩歩く毎に、その拳に暴虐的なまでのオーラが濃縮してゆく。不協和音を奏でるソレはどれほどの破壊を秘めているのか想像も付かない程に。

イルミはここに来て自分の失敗を悟る。そして分かってしまった。それが自分の“死”である事を。ならば。今、この状況で出来る事は――

ドゴオン!!!

凡そ人体が発している音ではない。着弾に備えてガードしたが、それで防げる威力でもない。超強化された筈のイルミの肉体は、着弾点から四散する。

「w j f h z k w b x j w k q h @ 6 t d s j ……」

「……あい」

忽然と消えるイルミ。イルミだけではない。キルアも、カルトも消えていた。彼に付き従ったアイ達さえも。

しかし、ゴンは焦っていなかった。何故ならどこに行ったか分かるから。彼は一度カームの転移を経験した。確信はないが、アレなら出来る。早速集中し、跳ぼうとした直前に、彼の超感覚は察知する。

——クラピカが、マズい。

どちらを選ぶべきか。彼の脳裏によぎるハンター試験の最初の試練。2択の問題。

だが、今は沈黙できない。ならば——

◇

「オレ達から逃げられると、本気で思っていたのか？」

クラピカは、必死で逃走を選択した。必ず死なない為に。しかし、ここは蜘蛛のホームグラウンド。いつまでも逃げられはしない。そしてここは異空間だ。いくらクラピカが最上の実力者であれど、それに匹敵する力の者が複数人。勝てるはずもなく、逃げる事すら不可能だ。

そして今。彼は電柱に念入りに括り付けられ、旅団に囲まれていた。能力も発動しないように両手首から先が斬り落とされている。

「手間かけやがったなあ。こっからはフェイの出番だぜ。徹底的にやりな」

そんな、絶望的な状況で

クラピカは笑っていた。

「——何がおかしい」

「いや。お前達も哀れだと思つてな。所詮は使い走り。カッコよく理由をつけてるが、結局はこうして小悪党の様なマネしかできない」

クラピカは笑う。それは旅団員の怒りを逆撫でする。今すぐに首を落とそうと構えるノブナガを転移させ、団長が答える。

「ふ…お前の言う通りだ。だが、オレ達は奴等とは理念が違うからな。オレ達は巨悪でも、指導者でも、反救世主でもない。オレ達は——」

そこで言葉を切る。他の団員がその続きを引き継ぐ。

「「盗賊だ」」

「…なるほどな。では、お前達は今何を盗んでいる？ 早速その高尚な理念から離れてるぞ」

「離れてはいないさ。フランクリン」

「あいよ」

フランクリンが抱えて持ってきたのは、クラピカと同様に柱に括り付けられたジョン
|| アンダーソンであった。

「!! ジョン!!」

「ついでにこれだ」

トサツ

それは、切り取られた子供の足。そして、その靴はゴンの物だった。

「……き、貴様ら……!!」

「オレ達が盗むのは……お前達の『希望』」

「きちんと盗んでんだろ？ これも盗賊の仕事だぜ？」

「絶望しやがったか!? 生きてるって思ってたか!? ハハハハ!! きつちり殺して
やったぜ!!! 全員で念入りにな! ガキの方もジジイの方も中々楽しめたぜ!!! どっ
ちも最後まで弱音吐かなかったからよ!」

「……………」

うなだれるクラピカ。その表情は蜘蛛には見えない。

「お、遂に心折れたかな？ 良い感じだね。このままキミも殺して『救世主』への復讐は完成つと」

「……………くくつ。あはははははは！」

突如笑い出すクラピカ。その様子にさすがの蜘蛛も眉をひそめる。

「……？ ちょっと効き過ぎた？」

「おいおい……そんな軟弱じゃつまんねエだろ」

「はははは!! ……あく可笑しい。お前等は、私達から『希望』を盗むんだろう？ 早くやったらどうだ？」

「あ……？」

「少なくとも私は一ミリたりとも『希望』を失つていない。カームは勝つ。お前等は負ける。ただそれだけの話だ。どこに希望を失う理由がある？ 例え私が死んでも、それは希望を失うことにはならん」

「テメエ……今の状況分かつてんのか？」

「分かつてるさ。この上なく。それでも言つてるんだ。お前等に待つのは、ただひたすら破滅のみ。カームは今じやその程度では希望を失わない。例え私が死したとしてもな。あと僅かな活動期間だな。ホラ、やったらどうだ？ 拷問は得意なんだろう？」

「もういいね。殺すよ」

「さて、フエイタン。コイツはできるだけ無惨に。『救世主』が絶望を覚えるようにな」
「了解」

今だに笑いやまないクラピカを黙らせるために、拷問役のフエイタンが迫る。最後の一撃は団長が行う予定だ。それまでの削りを行うために、服から複数の拷問具を取り出し、クラピカに迫る。

「さ、覚悟し」

フェイタンの動きと台詞がそこで止まる。違和感を覚えた団員が声を掛ける。

「おい。フェイ、どうした？」

ドサツ。

フェイタンの身体は人形の糸が切れたように地面へと倒れる。よく見ればその首には赤い線が入ってた。その線は倒れて数秒後に首回りを一周すると、ゴロリと胴体から離れる。

「「「!!!?」」」

瞬間、散開する旅団員。直後、縛り付けていたマチの糸が切断され、ジョンとクラピカは地面に向かう。その2人を同時に抱きとめた人物がいた。

その人物は、旅団員が念入りに殺したはずの人物だった。

「ゴン…生きていたか」

「馬鹿な!! テメエは死んでただろ!」

ウヴオーギンがビッグバンインパクトを、ノブナガが流星を、それぞれ彼に繰り出す。しかし、その2人の攻撃はあまりにもあっけなく掴まれる。

「ぐ、ぐぎぎぎぎ…は、離しやがれ!」

ウヴオーギンは拳を、ノブナガは刀をそれぞれ掴まれ、それが一切動かない。それどころか、あまりに強い力で掴まれて、身体全体すら言うことを聞かない。他の団員も何が起こっているのかを分かりかねている。彼らはカームにやられたトラウマに近い体験と、フエイタンの即殺、そして今起こっている現象により、迂闊に動けないでいた。

「……」

ギリギリギリ

その凄まじい握力を更に込めたため、直接握られているウヴオーギンから苦悶の聲が上がる。それに構わず、ゴンはそのまま腕を振りかぶって2人を投げ飛ばした。

そして、ゴンは彼らに告げる。

「幻影旅団。お前達も、許されない。お前達はオレが倒す……と言いたいところだけど」

「……だけど何だ？ やっぱり敵いませんってか？」

「オレじゃなくても相応しい人がいる。クラピカ」

「は？ ソイツはオレ達から逃げ回ってボコられたんだぜ？ 何ができるってんだ？」

ゴンは無視してクラピカに向き直り、囁く。

「クラピカ。今なら分かる。キミはオレと少し似ている。でも、今は眠っているだけ。だから、今から起こすね」

そう言うと、ゴンはクラピカの額と胸を軽く小突く。その指からゴンのオーラが浸透し、クラピカの脳に広がって、脳や身体のとある機能を解除する。

「……これでもう大丈夫。クラピカ。オレはまだまだやらなくちゃいけない事がある。だから、できるね？」

一体何をされたのか。自らの身体全体が熱く、それでいて軽く、より強く変化していく感覚に驚きながらも、クラピカは答える。

「ああ……ありがとう、ゴン。後は自分でやるよ」

「ん。じゃあ後で迎えに来るよ。待っててね」

そう言い残し、彼は薄くなり、そして完全に消えた。

「な、何なんだ……今のは……！」

「……嫌な予感がする!! アイツを早く殺さなきゃ!!!」

その掛け声に応じて、旅団員は高速でクラピカに接近した。しかし、その直前にどこからともなく現れた鎖が無数に現れて、彼を包み込む。途切れること無く現れる鎖は、彼を覆い尽くし、やがて球体へと変化した。

クロロは無言で【盗賊の極意】スキルハンターを取り出し、転移能力で中身を引きずり出そうとするも、その能力が通じなかった。

「バカな……全て鎖だということのか？」

他のメンバーが直接攻撃したり、シズクの掃除機で吸ったりするも、何一つ通用しない。ただジャラジャラという鎖の音がするのみであった。

しばらくすると、鎖は地面から浮き始めた。同時に巻きついている鎖がそれぞれ複雑に回転を始め、やがて解け始める。

それが完全に解けた時、中から現れたのは――

先程までの姿とそこまで変わりはない。しかし、決定的に異なっている。真紅よりも深い緋色の眼。アルビノの様に白い肌。そして、明らかに女性的なプロポーション。もののついでのように、手首の傷まで完治している。

「……お前は、女性だったのか？」

「私はどちらでもないしどちらでもある。ようやく理解できた。自分にあつた違和感はこれだった。そして、これならば彼に付いていける」

その声は先程と変わらず、中性的で、しかし蠱惑的だ。そして、会話中に徐々に溢れ出るオーラは、先程とは次元が異なる。静かで、深く、昏いオーラ。まるで深海の様な重みを持つソレは、明らかに人間という枠を超えていた。

「お前は…何者だ？」

「お前達に言う義理は無いな。——これから死にゆく者達よ」

彼がそれを言うや否や、旅団の周囲から鎖が大量に飛び出して団員を縛り付ける。彼らは逃げる隙も、暇も無かった。その鎖は増殖し、やがては幻影旅団をまとめて包み込む。

そして、それは、徐々に範囲を狭めてゆく。

中から何か聞こえる。だが、今のクラピカには聞く余地は無い。

「さらばだ。高尚な理念とやらに殉じるがいい」

【無限の鎖】
インフィニティ・チェーン

グシヤツ

.....

中であつたオーラの反応が全て、消えた。

「これで、私も思い残す事は何もない。だからカーム……勝つてくれ」

150、アイ

——ゾルディック敷地内

ゾルディックに戻ってアイによつて辛うじて傷を癒やしたイルミではあつたが、彼のストックも枯渇し始めていた。だが、ここには執事達がいる。おねだりを支払う代わりなどいくらでもいる。問題は、今の現状で奴に勝てないことだ。自分は願つたはずだ。世界最強の力を。それでも歯牙にも掛けられないほど圧倒的だつた。どうしたらあれほどの力が手に入るのか、皆目見当も付かない。アイに再びストックを通じて頼むも、アイは首を振るばかり。それは、アイの願望機としての限界とも言える。

「……もうええじゃろ、イルミ」

彼の祖父が姿を現す。そして、論すようにイルミに言う。しかし、イルミは聞く耳を持たない。

「ジイちゃん……駄目だ。これはオレ達が飛躍するための大事な事なんだ」

「我等暗殺者は本来日陰に潜む者。禁忌の力を使おうとすれば、必ず痛いしつぺ返しが来る。お前がここに戻ってきたのも、そうなつてしまったからじゃないのか？」

「……それでもだよ。コレは条件さえ揃えば何でも叶えられる。オレ達是最強のカードを手に入れた。最早ゾルディックに敵はない。あの気にくわない『救世主』などにへりくだる必要もなくなる。キルもカルトも、オレが奴から取り返してきた。これでオレ達は無敵だ」

「……その大事な兄弟にそのような威力の針を埋め込んでまで、必要なのか？」

「そうさ……これは必要な犠牲。それに、アルカならもつと同等以上の強い力を發揮できるかもしれない。そのためには何だつてやるさ。それでもおつりが来る」

「お前は『力』に使われておる。身に余る『力』は必ず滅びをもたらす……。じゃが、ワシらにお前を止めることもできん。好きにするとええ」

ゼノは溜め息をつき、傷ついたカルトを抱えてその場から去って行く。

「言われなくても分かっている。でも、もう遅いよ。それに、やるならとことんやらなきやね」

イルミは、もはや偏執的な執念で動いていた。全てはゾルディックの為に。人類を破壊させる程の友人と協力関係を結び、アイの法則を理解した。そして、ついに無駄な犠牲を多数払うこと無く願いを叶えることが可能になった。特別な針人間に願いを命じさせ、そのおねだりを別の針人間が引き受ける。これによつて、リスクをほぼ払うこと無く命令者の願いを叶えることができた。ある意味裏技とも言えるそのやり方は、而してまだリスクを抱えている。だが、ここにはそのリスクすらも必要なくなるほどの可能性を持った者がいる。それがキルアであり、アルカ^{ナニカ}だ。

イルミはストッカー人消費してアイにアルカをこの場に呼び寄せさせた。



「??」

きよろきよろと辺りを見回すアルカ。しかし、近くに最愛の兄を見付けた彼女は、そのまま彼に飛びつく。だが、大好きな彼から反応が無い。不思議に感じて声を掛ける。彼は満面の笑みで彼女に願う。

「ナニカ。オレを、ゴンより強くしろ」

彼女は戸惑う。そして、自分の中にいるナニカに問う。最愛の兄の願いとはいえ、そんな事ができるのか、と。しかし、ナニカは気付く。近くに同族がいることに。それならば何とかなるかもしれない。

他ならぬ兄の頼みだ。叶えてあげないといけない。ナニカはもう一人のアイにアクセスする。随分とやさぐれている。何があつたのだろうか。だが、彼と協力してならいけるかもしれない。しかし、その願いは自らの力をはるかに超えたもの。そんな力を使

えば、恐らく自分は存在できなくなる。でも、それでもいい。だって、大好きな兄が心の底の底から願っているから。兄の糧になれるのならば、これほど嬉しいことは無い。願わくば、自分の事をずっと覚えていてくれますように。

そして、時間を掛けながらも、ナニカは中からアルカに要請し、自らが意識の表層に出てくる。ナニカが目覚める。願いを叶える準備は整った。

それに合わせて、もう1人のアイも、その声を重ねる。

「……………あい」「……………アイ」



「成功だ…！ やはり、キルは流石だね！ アルカとナニカの共依存を上手くコント

ロールして懐柔し、願いをノーリスクで叶えている！ ポイントは命令！ ヒソカに言ったとおりだ。針人間だと上手いかなかったのは信頼関係が浅いからか。興味深いね。でもこれで共鳴の実験もできた。次はオレに頼むか」

影から見ていたイルミはその目論見が成功したことに喜ぶ。しかし、その直後にアルカが目覚まし、焦り出す。ナニカがいなくなつてしまつたと。キルアを介してアルカに再び要請するも、アルカが逆にキルアに怒り出す。なんてことをしてくれたのか、と。ここに来て、彼は再び事態がマズいことになつたと気付く。まさか、キャパオーバーで消滅してしまつたのか。勿体ないことをした。しかし、願いは叶えられたことは喜ぶべき事だろう。恐ろしい程のエネルギーがキルアに充滿している。これなら奴にも勝てる。それに、まだまだこちらにはもう1人のアイがいる。

そうこうしていると、アルカが兄の様子がおかしいことに気付く。彼が操られていたことに気付いたようだ。衝撃に気をとられて、操作が曖昧になつてしまつていた。アルカは、深い悲しみの表情を湛えて兄を撫でる。再び反応を返さなくなつてしまつた兄に。

——もうコレは必要ない。

ゾルディック家最強の兄弟が誕生した。特に、今のキルは文句なしの当主候補だ。こ

れで、ゴンが襲ってきててもキルが始末できる。そうすれば針を抜いてやろう。自分が殺してしまつたと知つたのなら、もうキルは光には傾かない。再び闇の世界に身を浸すだろう。イルミは、こちらを殺さんばかりの目で見てくるアルカを気絶させ、アルカを送り届けるようにアイに願わせる。

しかし、反応は無い。

再びアイに要請するも、アイを憑けていた素体は困惑するばかりであり、何も起きない。そう言えば、おねだりも何も無い。もう一人のアイすらも、いなくなつてしまつた。

「お前は……本当に酷いことしかないんだな。自分の大事な家族ですらも」

背後から首を掴まれる。馬鹿な！　もう来たというのか!?　コレは…転移、か？

「アイは還つたよ。自分の故郷に」

ギリギリギリと締まる首。次第にその力が強くなる。そして…

ブツッ！

と鈍い音を立ててイルミの首は千切れ飛んだ。キルアを操る暇も無かった。しかし、だ。このままでは終われない。イルミは最後に願う。キルアの針に意識を移すように。それは死者の念。キルアの額に刺さる針の先端の珠が、鈍く、怪しく光る。

「ツはあく成功。よしよし。うまくいったね。なれないけど、これはこれでいいや。じゃあお前はここで死のうか」

「……どこまでも醜い奴め……その汚い針を抜いて、必ずキルアを返してもらおうからな」



——闇だ。一面の闇がオレを覆う。オレは、結局ゴンを助けられなかった。イルミにまんまとやられてしまった。いや、ヒソカ達も、それを言うならこのテロの首謀者達にも、だ。カームも勝てないだろう。もうそれはどうでもいい。オレは……負けた。

どうしてこうなった？ いや、分かっている。オレが弱すぎたんだ。弱いから負ける。当たり前のことだ。もうどうでもいい。恐らくコレはイルミの針。オレはいいように操られているんだろう。アイツの言いなりになって。最早意識すら必要ないということか。思えば、ハンター試験で会った時ですら、オレはアイツの言いなりだった。それでも、と力をつけてみたはいいものの、それ以上の力によってゴンは殺され、今や身体だけ良いように利用されている。許せない。でも、どうすることもできない。それがオレの罰。弱すぎたオレの罰なんだ。

ああ、もう何もかもどうでも良い……オレは、結局家出しなければよかったんだ。こんな思いをするぐらいなら、我慢して仕事をこなしていた方がまだマシだった。だからもう……どうでもいい。

「……あい」

!? びつくりした！ この声は…ナニカ、か？

「あい」

そうか……オレは、まんまと操られてお前を引つ張り出したのか。最低だな。オレつて。

「あいー！」

イルミのせいって？ そうだけどき、アイツに良いようにやられたオレが弱いのが悪いんだ。

「……あい」

慰めてくれるのか？ ありがとな。お前はやさしいな。でも、もういいんだ。それよ
り、どうしたんだ？ こんなところで。

「……あい」

……ゴンが？ 生きてる!? ウソだろ!!? ……え、それでイルミをボコったから奴は

家に逃げてきたって？ プフツ、ざまあ!! 流石ゴンだ!! オレの……親友、だった男

……

「あい!!」

え？ それでオレを操って、好き勝手してるって？ アイツ……本当にクソ野郎だな。で？ 今どうなってんの？ 何？ イルミ死んだ!! やったぜ！ アイツホントざまあ!!! ……ん？ なら、なんでオレはここにいるんだ？

「……あい……」

オレにアイツが乗り移って、ゴンと闘つて×××る!! ……ふざけんなよ、あのクソ野郎……！ 死んでも縛ろうとするとかマジで×××だな!! クソツ、前みたいに針抜けば解決しろ！ 早速出ないと!!! ……ここ、どう×××って出るんだ？

「あい」

そうか！ だからお前が迎えに来てくれたのか。ありがとな。本当にお前はオレの大事な兄弟だ。イルミのクソ野郎なんかとは全然違うな。もしコレが終わったら、お前をいろんな所に連れてってやるよ。一緒に行こうな。

「……あい♥」

よし、そうならいつまでもこんな所にいらねー！ ナニカ。オレを連れてって
くれ！

「あい」

——あ、ちよつとストップ！ ……とところで、さ。

「あい？」

お前は、なんでここに？

「……………」

アルカはどうした？ いつも一緒にいただろ？

「……………」

まさか…お前……

「……あい……」

アルカと別れた？ 最後のお別れ!? “力”を使いすぎた!? ふざけんな! だつたらオレはこのまま自力で出てやる! だから、お前はさっさとアルカに戻れ!!

「……………」

できない!? なんで!! ……もう決めた事!? 待てよ……なあ、ダメだつて……! お前がいなくなつたらオレは……馬鹿! 迷惑なんか思うもんか!! お前を迷惑に思う奴等がいるんなら、オレはお前を誰もいないところに連れてつてやるから! アルカとお前とオレと、3人で幸せに暮らすんだ!! ……え? コレはオレが望んだから……? そんな事……オレは……

「……………あい」

……………そうか……オレが願つたんだな。本当に、オレは馬鹿野郎だ……救いようが

ないな……ん？ 自分を責めないでつて？ ……わかった。わかったよ。お前は本当に優しいな。なら、こんな馬鹿野郎なにいちやんでも頑張らないとな。それにしても、意外と頑固なんだな、お前つて。思えばお前とこうして話すのは初めてかもしれないな。オレはアルカと話してばかりだったから。寂しい思いさせちまって悪かったな。

……ナニカ。図々しいんだけど、オレからお前に最後のお願がある。オレはこれから自力でここから出る。そしてイルミの針も抜く。だから、最後までオレのそばにいてくれ。頼むよ。したら、おねだりは何でも聞いてやるから。な？ ……ありがとな。オレ、もう少し頑張ってみるよ。だから、見ていてくれ。

オレは……自分を、取り戻す。

「……あい！」



その闘いは、ククルー山脈の形を物理的に削り、穴を開け、地形を変えた。イルミが憑いたキルアは、そのゴンすら上回る暴虐的な力を縦横無尽に振るい、ゴンを責め立てていく。まだ特殊な念能力は発動できていない。しかし、キルアに格闘を叩き込んだのはイルミである。ならば当然、身体の使い方も同じ。元は変化系であるキルアも、その格闘性能で強化系のゴンを遙かに上回る。一方のゴンは防戦一方だ。これほどの「力」に目覚めても、外法によって更に上を行くイルミ。そして、暗殺術の極みとも言える技をふんだんに使用してゴンを追い詰めていく。流石のゴンも、ダメージが目立ち始めた。彼はその都度自己修復できる。しかし、今現在、イルミにはダメージを与えられない。

「ん〜。やっと馴染んできた。やつぱり兄弟だから相性が良いのかな？ オレが一番キルアを分かっているしね。たしかキルは雷の変化だったかな？ こんな感じかな？」

そう言うと、身体から凄まじい電撃をスパークさせ始めた。いよいよ固有の念能力を

発動し始めた。より、勝利が遠ざかってゆく。しかし、ゴンは折れない。一番の親友であるキルアを、こんな奴が何を理解しているのかと一層腹を立てる。コイツはキルアの事を何一つ分かつちやいない。ただ、自分の欲望のために都合良く利用しているだけだ。それを、理解しているなんて言葉で飾るなど、絶対に許せない。

「キルアだったらそんなもんじゃ無い。もし本人ならオレはとづくにやられてる。お前はキルアの事なんて何も分かっていないんだ。死人はサッサと魂の還る場所に行け」

「イヤだね。オレとキルの相性は抜群さ。何故なら兄弟だから。このままオレとキルと2人で一つになって、最強の暗殺者として君臨するさ。それが最高のプランだ。で、本人じゃ無くてもお前、そろそろオレには勝てないよ」

「だからといってオレが諦めると思うか？ オレは、「キルアの親友」にして、「魔王の子」、ゴンⅡフリークス。必ずお前を冥土に送ってやる」

「ふくん…やってみなよ。でも、無理だと思うよ?」

雷を纏ったまま、雷速を超えたスピードでゴンの周りを飛び交い、攻撃を重ねていく。これはキルアの技、「韋駄天」！しかし、威力が桁違いだ。ガードの上から叩き込まれる連撃に対応しきれなくなっていく。遂に技まで吸収し始めた。急がなければ、キルア

が完全に飲み込まれる！ 内心ゴンは焦っていた。しかし、その焦りが彼にミスを生む。

「あつー！」

無数の連撃に隠されたガード崩し。ガードが下から弾かれ、直後にがら空きになった顔面に蹴りを喰らい、上空に弾き飛ばされる。

ブウーーン……！！

オーラと電流を混ぜた凄まじいエネルギーがイルミに集中する。それは、必殺の一撃。それを喰らえばいかにゴンとてただではすまない。

「さようなら。キミは2番目に目障りだったよ」

ズアツ！！

その衝撃が接近し、直撃する刹那、彼の脳裏にキルアとのそれまでの思いがよぎった。しかし、それを押しつけるようにして、別の思考が届く。

——あんな……に……困るな……

「な、何？」

——あんな奴に手こずってもらっては困るな。力の使い方を教えてやるよ——

直後、イルミキルアの雷がゴンに直撃した。凄まじい衝撃音と衝撃波が周囲一帯に広がる。核兵器の爆風に近い威力だ。ゾルディックの執事達やゾルディック家の面々も早々に避難していたが、それでも吹き飛ばされるほどの威力。

「さて……やったかな？」

油断なくイルミが爆心地に近づく。彼も先ほどの威力は致命的なダメージを与えたと確信していた。しかし、油断はしない。土煙が舞う中、一步一步慎重に歩みを進める。

一陣の風が吹く。土煙の中心地に人影が立っていた。

「ちっ。まだ足りなかったか。じゃあもう一発かな」

そうして再び同じ物をチャージし始める。だが、現れた人物は、先ほどとはまた様子が違っていた。

その頭髮は伸び、腰まで届くほどに垂れている。身体はまた少し成長し、細身の青年の姿に変わっていた。服は先ほどの電撃で破れ、上半身は裸だ。しかし、その体中に不思議な文様がいくつも刻まれている。

「……なんだ？ それは。お前はゴンか？」

ゴンは答えない。

返答は無いが、その溢れるほどの戦意は、先ほどとはまた別物であった。イルミアは再び危機感を覚え、チャージの完了した電撃を発射する。

しかし、相手は平然と立っていて、着弾の寸前に見えない程の速度で腕を振るい、その超威力の攻撃をかき消した。

「!!? な、何?!」

直後、イルミアにも視認できないほどの速さで接近したゴンが、イルミアを激しく殴り飛ばす。「電光石火」も間に合っていないほどのスピード。イルミアは後方に吹っ飛ばされ、その際に、額の針の先端に罅が入る。

「うっ!!」

途端に、彼は動きが鈍り始める。しかし、そこを遠慮するような相手ではない。素早く先回りしたゴンは、イルミアを両手で地面に叩きつけ、更にそこから蹴り上げる。

「ぐっ……はっ……なんだ、この威力は……！」

イルミが逃げようとするも、必ず先回りされ、超威力の避けられない攻撃を叩き込まれる。もはや、彼の力は闘神とも言えた。そして、更に悪いことに、身体の自由が効かなくなってきた。

「キル…… お前、まだこのオレに逆らうか……!!」

そう、イルミの怨念が込められた針。それは決して壊れたり逆らったりできる物ではない。だが、そこに罅が入った。それはゴンの攻撃だけでなく、キルアの抵抗のおかげでもあった。そして、イルミが責め立てられているこの瞬間にキルアが中から激しく抵抗している。身体の主導権を返せ、と。

だが、間の悪い事に、ゴンは既に意識を奪われている。とある超越種に。ソレにとつて目の前にいるのは敵だ。そして、その者は敵には容赦などしない。

激しい攻撃によって、そして、キルアの中からの抵抗によってイルミは既にポロポロ

だ。額から怨念の如きオーラが漏れてきている。いかに強烈なイルミの念でも、その核となった呪物を破壊されかけて、更に中から外から激しく抵抗されたらたまらない。もう身体自体はズタボロ。動けず、首をゴンに掴まれている。

「い…イヤだ…オレは、オレはゾルディックのために…!!」

ゴンは、その普段の様子からは想像もできないような悪辣な笑みを浮かべ、空中に放り投げる。

ブオンツ!!!

超巨大なオーラが片手に集中する。空中に投げられたイルミ^{キルミア}。自らの危機を覚えて回避に移ろうとした彼の身体が完全に止まる。そして――

――彼は自ら針を引き抜いた。

直後、その念弾を発射するゴン。しかし、発射する直前に彼の意識が戻る。彼は理解

した。自分が何をしたか。そして、相手がどのような状態になっているのかを。

「キルア!! よけろオオオoooooooooooo!!!」

キルアは、その刹那の瞬間、抜いた針と共にゴンを見る。そして、彼を目で確認し

——確かに笑った。



「キルア! キルア!! お願い、死なないで!!!」

ゴンが、先程の様子がなんだったかというほどに取り乱し、涙を流しながらキルアに縋り付く。横たわるキルアはもう、どう見ても手遅れだ。

彼は、最後の力を振り絞り、手に持つイルミの針を粉々に握りつぶす。そして、ゴンを
を見る。

「ゴン……姿、変わっちゃまったけど、お前が生きていてくれて、本当に良かった」
「でも！ このままじゃキルアが死んじゃうよ!!」

「いいんだ……身体も、最後に取り戻せたし、な。元は、オレが弱かった、せいだ」

「ダメだつて!! オレを置いてかないで!!!」

「ああ……お前は、こんな、オレでも、友達だと思って、くれるのか」

「当たり前でしょ!! むしろオレのせいでキルアがこんなになっちゃったんだから!!!」

馬鹿はオレだよ!」

「良かった……ゴン……お前は、光だ」

「……? キルア?」

「お前と、出会えて、本当に良かった。お前はオレの、最高の」

——親友だ。

キルアが沈黙する。その呼吸も、鼓動も動きを止めた。

「キ、キルア……嘘だよね……折角ここまで来たのに……冗談はやめて、早く起きてよ。ねえ、キルア……」

ゴンが夢遊病者の様な虚ろな目でキルアを揺さぶる。急速に冷たくなっていく身体が、キルアの状態を表していたが、ゴンはそれを見えないふりをしている。本当は分かっていたのだ。もう、キルアが行ってしまう事を。だけど、それは認めたくない。認めたら現実になってしまう。だから、奇跡でもいい。何でもいい。キルアを、どうかキルアを助けて欲しい——

◇

ナニカ。ありがとな。最後まで付き合ってくれて。

「……………」
ゴンが生きてた。イルミも死んだ。オレはそれで充分さ。

「……………」
悲しむこたないんだぜ？ お前とこれから同じトコ行くんだ。寂しくなんてないさ。むしろありがとな。

「……………」
さあ…時間だ。ちよつぱり残念だけど、オレはここまで。道連れがいるとオレも心強
いからな。

「……………」
どうした？ 早く行こうぜ？ 何？ やり残した事がある？ お前…あんまり時間
ないぞ？ 大丈夫か？ てか、お前もギリギリだろ？

「……………」
わーかった！ わかったよ。つたくお前は頑固だな。その辺アルカと変わんねーな。
まあそりやそうか。同じだったんだもんな。あ！ わかったぞ。アルカに別れの挨拶

か。そりや大事だな。じゃあ待ってるから急げよ。

「あい」



泣き腫らして放心状態のゴンと、冷たくなり始めたキルアの側に、ボロボロの服を纏った女の子が近付く。

「……お兄ちゃん……」

その言葉にゴンは僅かに反応する。だが、彼は再びキルアに目を向ける。最後の最後まで見届けるように。

女の子は2人に近づき、キルアに手を触れる。

「……ナニカ。あなた……うん。分かった。もうお別れなんだね。……あなたの想い、きつと、きつと大切にする。絶対に忘れない。これが最後の願い。必ず叶える」

「キミは……」

「願って。貴方の願いを」

そう言うと、女の子の顔が変化する。目が空洞の様になり、人間とは異なる顔立ち。だが、その顔は、キルアに対する愛情に満ちている様に見えた。だからこそ、ゴンは願う。

「キルアを……キルアをオレの所に連れ戻して」

「あい」

凄まじい「力」の奔流が起きた。キルアを中心に光が溢れ、ほぼ死んでいたキルアのダメージを癒していく。癒す事が得意な十二カ。もう殆ど力が残ってなくて、存在が希薄になっていても、大好きな兄の為に力を振り絞り、最後の願いを叶えた。

徐々に光が薄まり、同時に女の子が普通に戻ってゆく。もう、あの姿に戻る事は無い。そこに、寂しさを覚える。でも、これで良かったのだ。少なくとも、自分は忘れる事は無い。大切な、大切な家族の事を。

目を閉じたキルアから一筋の涙が溢れる。そして――

「……十二カのマ鹿野郎」

「キルア!!!」

「……ゴン。戻って来たぜ。ありがとな」

「ううん、オレじゃないよ。それはここにいる――」

「いい。知ってる。アルカ、ありがとな」

「お兄ちゃん……ナニカは……」

「ああ……逝っちまった。オレを置いて……オレを助けなきやまだ生きていられたのに」

「それは違うよ！」

「アルカ……」

「あのコは優しいの！ 必死でお兄ちゃんの為に頑張ってくれたの！ だから、だからあのコの頑張り、認めてあげて……」

アルカは涙を流しながら兄に抗議する。キルアはそれに涙しながら答える。

「悪かった……でも、オレはナニカにも……生きてて欲しかった」

「……………」

「だからこそ……忘れない。オレがナニカに生かされた事を。アイツが必死で頑張ってくれた事を。絶対に！」

「うん……うん。そうだね。それならきつとあのコも喜ぶよ」

ゴンは無言で2人のやり取りを見つめていた。事情は理解できていた。その上で、彼らに口を挟むべきではないと、静かに見ていた。やがて、ゾルディック家の人々が集

まってきた。その中にはカルトもいた。

まだ闘いは終わっていない。それでも、一つの区切りを迎えた。残すは後一つ。カームは、必ず勝つ。だから、自分達が出来た事は次で最後だ。ここまで来たら、必ず勝たねばならない。

アイが願った。

生きる事を。

だから、この世界から理不尽な死を拒絶する。

それこそが、兄を想い、自らを犠牲にした心優しい厄災に捧げる鎮魂歌であるのだから。

151、奇跡を起こす男

「ぐっ……」

「うう……」

「おのれ……何という理不尽な奴」

「全くだ……まるで底が見えん……詰みの型が余の方にしか見えんとはな」

死屍累々。開始から5分の状態である。そもそもが無理なのだ。頭在オーラだけでも10倍以上の奴と闘うなど。相手は笑いながら悠然と構えている。それは、自然と王者としての風格を保っていた。

「うーん……つままないア。アレだね、自分で言つといてなんだけど、じっくり丁寧に捌るってのは結構ストレスだね。縛りプレイっていうのかな？ こっちはちよーつと撫

でるぐらいなのに、もう死にかけちゃってさ」

そう。ゾバエは完全に遊んでいる。まるで人類に見せつけるように、絶望を味わわせるように。

・おい：マズいぞ。何が何だかわかんねーけどアイツヤバくない？

・手も足も出ないじゃん：どうすんのこれ：

・現役ハンター！ いるんだろ！ 助太刀に行つてやれよ！！

・馬鹿言うな！！ あそこにいるのはオレの10倍ぐらい強いやつらだぞ！ 行つた所で足手まといも良いとこだ！（@現役ハンター）

・じゃあ爆弾とか……

・馬鹿言え！ さっきの見たたか!? アレは霧になつてたぞ!? そんな奴に核とか通じるかどうかもわかんねーだろ！

・悪いが、多分人間の兵器系は無理だ。オーラ量が桁違いすぎる。純粹に核でも耐えられかねんし、能力如何では完全に無力化されちまう（@モラウ＝マツカーナーシ）

・そんな……

・ジンが言つてたでしよ！ 唯一の方法は祈ることだつて!! “救世主”が戻つてくれば何とかなるはずよ!!（@メンチ）

・もうやめようよ……こんなの無理だつて…

・お前はあきらめんのか!! オレは絶対やだぞ!!!

・じゃあお前が何とかしろよ…

「ふふふ…キミが用意したコレ……中々いいね。人類の絶望が手に取るように伝わってくるよ。さして、生かさず殺さず。RPGゲームの序盤の街で、装備全部外して初級呪文でいたぶるみたいいな気分だ。それはそれで愉しいけど、そろそろもうちよつと刺激的な事も見せてあげようかな？」

ゾバエは右手を地面に広げ、そこから凝縮されたオーラの滴を数滴垂らす。その滴は地面に付くとたちまち具現化し、双頭の大型の犬に変わる。

「【ティンダロスの猟犬】。今のキミ達じゃ一方的に捌られる存在だね。さあ、人数分用意したよ。絶望をボクに見せてくれ」

一斉に飛び出す猟犬たち。メルエムとネテロはそれぞれ辛うじて攻撃を躲せた。ジンはカウンターで一方の頭を殴りつけるも、もう一方の頭にその腕を噛み千切られた。

「ぐあああああつ!!」

それでも、即座に回復が飛んできてジンの腕を復元する。それを受けて、ジンは距離をとった。それ程までに高まったレオリオの技術は最早超一流と言う言葉では表せない。医療の神に近い能力だ。それでも、それでも回復が追いつかない。

「ハアツ…ハアツ……」

凄まじいプレッシャー。極度の緊張状態。こんな状態で「聖光気」など掴めない。全滅を回避するのですら困難だ。今、自分が回復を止めてしまえばたちまちこのメンバーは全滅するだろう。いや、そうでなくともゾバエが遊んでいるのにこの状態だ。ちよつとその気になれば、たちまち全滅するだろう。なんとこの無理ゲーか。辛うじて応戦できているメルエムや、二匹同時に相手をしているネテロも状況は厳しい。この犬は特殊な念能力はない。ただ純粹に強いだけだ。それがより絶望を深める。そんな使役獣如きに捌られるということは、本体に敵うことなど不可能だからだ。

そして、遂にその時が訪れる。

「ガハツ…」

ビスケがその首を食いちぎられた。大量に嘔き出す血。致命傷だ。その瞬間、彼女の背後から観音像が現れて、ビスケを優しく包み込む。

「今じゃ!! 回復を!!」

それは、百式観音零の手の予備動作。時間を置き去りにした速度で対象を拘束し、必殺の攻撃を叩き込む。その前段階を利用して、彼はその対象の魂を閉じ込める様に祈った。それは、この状況を正確に読んでいたネテロの悪あがき。絶対に誰も死なせはしないという決意。すぐさまレオリオから回復が飛んできて、ビスケは無事に復活した。しかし、そんなことをすればネテロの百式は一つしか無い。つまり、ネテロは身一つで、祈りの姿勢のままになる。

そこに、2匹の猟犬がその身を引き裂く。

辛うじて致命傷を避けるも、身体中の肉が削がれ、全身が血塗れになる。

「ジジイ！」

ジンが咄嗟にフオローに入るも、焼石に水だ。ビスケが回復したのを見計らって、ネテロに百式が戻るも、今度はジンが致命傷を負う。その度にネテロは百式を彼らに貸し出し、命が溢れない様に防ぐ。ネテロ自身は、その隙を突かれてよりポロポロになっていく。

「レオリオ！ ジジイに回復を!!」

「ジンが先じゃ!! ワシは気にするな!!!」

「アンタも死ぬつつってんの!!!」

「誰も…誰も死なせん!! このワシがおるからにはな!!! じゃから早く!!!」

レオリオは泣いていた。あまりの理不尽なこの闘いに。回復をしてもしても追いつかない。致命傷、しかも即死級の負傷のオンパレード。1人回復すれば、2人が致命傷を負う。いかにレオリオでも、同時には回復できない。どうしたらいいのか。みんな必死だ。メルエムですら、互角の闘いしかできていない。それぞれが最上位。なのに、こんなにも届かない。

もつと、オレに“力”があれば…

ジンはオレだけが掴める可能性があると言っていた。ならば、サツサと掴みたい。こんな時ほど必要じゃないのか！ オレは……オレに、本当にできるのか？

また仲間が負傷する。もう、イヤだ。砂漠に水を引っかけてるようなものだ。これ以上仲間が傷つくのを見ていられない。もう……これ以上……見たくない……

「うーん、良い感じに絶望してきたね。それにしても誰か一人は殺すつもりだったけど、中々しぶといね。回復役が割と優秀なんだね。もう折れちゃったみたいだけど。セオリーならここをまず潰すんだろうけど、残した方が面白いかな？」

「レオリオ!! 諦めるんじゃないやねえ!! お前が諦めたら終わるんだぞ!!!」

血まみれのジンが叫ぶ。

「レオリオ! アンタをそんなに軟弱に鍛えたつもりはないよ!!! どんな状況でも100%勝つって気概を見せなさい!!」

既に満身創痍で、手首から先が千切れたビスケも同意する。身体の至る所から血を噴き出しても、それでも抵抗を止めない。

「ワシがお主等の命は必ず守る! じゃから、頼む、ワシらに力を貸してくれ!!」

ネテロが一番負傷が酷い。それでも、彼はその敵の意識を上回る打撃で、撃退し、生き残り続けている。

「……逃げてもよいぞ？　貴様にその荷は重すぎるだろう」

メルエムが闘いながら呟くように言う。彼は諦めてはいない。元々自分一人で完結しているような存在だ。他者の存在など不要だろう。だが、それでも多少の情はあつたようだ。現在多数の敵を一気に引き受けて孤軍奮闘している。一番悔しい思いをしては、*「それ、*『*勇気*』*と呼ばれる物であつた。*

レオリオは、そんな絶望の中でも光る彼らが眩しすぎた。そして、自分はそこまで人間ができていない。恐怖、臆病、諦観、絶望。それらの感情に支配され、身動きが取れなくなつた。それもまた、人間であろう。彼は、遂に闘いを見ることができなくなつた。絶望に心が折れた。そして――

いつの間にか、頭を抱えていた。

どれだけの時間そうしていただろう。辺りが静かになる。

もしかして、助かったか。なにか奇跡でも起きたか。もしかすると、カムが来てくれたか：そう思い、恐る恐る顔を上げる。すると

目の前で、無数の猟犬たちがレオリオを取り囲んで、じつと見ていた。

大画面には、それぞれのメンバーの無惨な姿が映る。そして、彼らの敗北を嘆く人々のコメント。

彼らはもう――

そこに、ゾバエの勝ち誇った顔が映る。

「うん！　いー感じに絶望してるね!!　その顔が見たかった！　他の奴等は覚悟決まっていたから無理だったけど、お前は最高だよ!!　さくて、気が済んだ。君らの頼みの綱の光さえも、もう消える寸前だ。最後にお前を無惨に殺してから、ボクの勝利を飾ろう」

やはり…ダメだった。現実は無情だ。いつもそうだ。オレは、いつも肝心な所でダメなんだ。そして、死ぬ。恐らくコイツは楽に死なせてくれないだろう。それもしょうが無い。遅かれ早かれ、人類はコイツのせいで滅びるのだ。少しそれが早くなっただけのこと。むしろ、早く殺して欲しい。それだけが救済なのだから。

「お？ 諦めちゃったか。じゃ、さよならだ。サルにしちゃ頑張った方だよ。誇つていい。キミらは相手が悪かったね」

ゾバエが周りの犬どもを嚇ける。視認できないスピードの筈なのに、なぜかスロームーションで見える。ああ、これが走馬燈か。こんなのがオレの終わりなんて最低だな。オレは…負け――

ジャラツ

いつの間にか現れた鎖が、犬たちを縛り付ける。鎖は増殖し、レオリオに襲いかかっていた個体は全て捕らえられた。そのまま鎖によって締め付けられ、弾け飛ぶ。

その周囲にいた個体は、突如発生した雷によって、消滅した。

突然の事態に、流石のゾバエも一瞬硬直する。その顔面を、凄まじい威力のオーラが込められたパンチが襲う。霧化する暇も無くゾバエは入り口の外まで吹っ飛ばされ、見えなくなった。

その人物達は、かつて自分と同じくハンター試験を受け、合格した友。

「レオリオ!! 無事か?」

「遅かったか…だが、レオリオだけでも生き残ってたか」

「ひでーコトしやがる…絶対許さねえ!」

「僕は…足手まといだね。せめて亡くなった人を回収するよ」

姿形、雰囲気が変わってしまっても、オーラが恐ろしく増えていたとしても、彼らはヨークシンで修行を共にし、苦楽を共にした友だ。

「ゴン、キルア、クラピカ、カルト…オレは…オレは守れなかつた」

「……気にしないで。レオリオ。相手が悪すぎた」

「だけだよ! ……すまない……すまない……!! オレは…ビビって見捨てちまつた」

「……あのな? レオリオ。クセーこと言うから一回しか言わねーぞ。オレだってそう

だった。弱さを悔やんで引きこもっちゃった。でもな、それでもできることがある。小さな勇気が状況を変えられることだってある。オレ達はそれを乗り越えてきた。お前もきつとできる。自分を信じろ」

「だけど……会長も、ビスケも、ゴンの親父も、メルエムすら……死んじゃった」

「……レオリオ、心配しないで。彼らは生きている」

髪が長く、青年の姿に変わったゴンが断言する。その言葉に一同すらも驚愕する。

「!! 何……? そんな馬鹿な、彼らはもう……」

カルトが回収してきた死体は無惨なものだ。ほぼ原形を留めていない。だが、彼らの表情は苦悶ではなく、立ち向かう顔だ。必ず希望があると信じて闘う者の表情のまま、散っていた。

「オレには分かる。これは、ネテロ会長の死者の念。それが、魂を辛うじて現世に留めている。でも、ギリギリの状態だ……だから、レオリオ。キミしかない」

「な、何を……」

「彼らを癒やし、復活させられるのは、この中でレオリオだけだ。この状態なら、それこそ『奇跡』じゃないと無理かもしれない。だから……頼むよ」

友の言葉が、彼の恐怖や諦観に凝り固まった心に罅を入れる。彼らは乗り越えたのだ。数多の理不尽を。尽きる事のない不条理を。

「レオリオ。私も信じている。お前が、誰よりも優しく、誰よりも勇気を持った男だということを」

明らかに女性の様な姿になったが、クラピカがそう断言する。それだけで、レオリオは妙な気分になると共に、心に灯がともる。

「だからさ、あのクソ野郎はオレ等が押さえとく。オメーはどうにかして彼らを癒やしてくれ」

3人の中で唯一姿が変わらないが、この中で一番の圧倒的な力を内包している暗殺者がそう告げる。そうか……オレの自慢のダチはこんなに頑張ったんだ……オレだけこんなに引きこもって、いじけているのは、ダサすぎる。

……やってみるか。でなければ、こんな素晴らしいダチにオレは一生顔向けできなくなる。もう、そんなのはイヤだ。絶対に。

「……ありがとよ。すまなかった。オレは腑抜けてたみてーだ。オレは、オレのできることを、全力でやる……今度こそ、間違わねエ!!」

その表情と決意を見て、ゴンは笑った。もう安心だと。そこに、奴が帰ってきた。

「貴様ら〜!! どっから沸いてきた!! って、よく見れば『反救世主』が攫った奴等じゃないか! アイツも本当に使えない奴だな!! やっぱり多少は特別でも下等生物は下等生物か!」

入り口から浮きながら戻ってきたゾバエに、3人は一斉に顔を向ける。その表情もオーラも気合い十分だ。ゾバエの凄まじいオーラを見ても臆しもしない。むしろ、必ず倒してみせると決意を新たにする。

「ん? なんだ? そのオーラは。王の系譜……しかもこの気配は……貴様、イヴリス

の縁者か？」

「……答える義務はない。お前こそが全ての元凶、全ての悲劇の始まり！ オレが、お前を倒してやる」

「大きく出たな……ちよつと力を取り戻した程度でボクを倒そうなんて甘いんだよ、ヒヨッコども。尻の殻が割れてから出直しといで」

「数々の暴虐のツケ、ここで支払ってもらおう」

「お前から冥王フルトウの気配がするな……縁者、ではないな。気色悪い奴」

「クラピカもテメーには言われたくねーだろうよ。悪魔野郎」

「お前だけはよく分からんな……でも3人とも多少はできるらしい。良いだろう。退屈だった所だから少しは遊べそうだね」

「そんな余裕を持てるのも……今だけだ！」

ドン!!

再び戦闘が始まる。しかし、流星にこの空間は彼らには狭すぎた。そして、彼らはレオリオの邪魔をしたくない。そういう思惑を彼らは阿吽の呼吸で打ち合わせ、そして、

ゾバエを建物の外へ誘導していった。ゾバエもそれは分かっていたが、しかし、自分にも足も出なかつたサル程度に何ができるかと、その思惑に乗つてやることにした。何故なら、これはもう消化試合。もうすぐで“救世主”の光も絶える。さすれば自動的に自分の勝利だからだ。それにしても、この3人は中々やる。多少本気を出さねば不覚をとりかねない。あまりに本気を出すのも門番に見つかるとから良くないし、痛し痒しだ。だが、この縛りプレイが好きなのは魔王は、この状況すらも楽しんでた。いかなる方法でこの状況を逆転するつもりなのか。その、藻掻き苦しむ様も娯楽の一つだ。徹底的に楽しんでやろう、と。



「レオリオ……ゴンはああ言つてたけど、僕にも彼らは死んでるように見える……いや、確実に死んでる。……からどうにかできるの？」

「……ジンは言った。お前ならできると。アイツはダメ親父だったが、凄い奴だ。だから

らさ、そんな凄い奴が信じてくれたオレを、もう一度信じてみるんだ。ゴンも言つてたしな。すげえ親子が信じてくれたんだ。だからきつとできる。勿論、お前のアニキと、クラピカもな」

「……分かった。僕も信じてみるよ。レオリオが、成し遂げることを」

一番楽なあぐらをかき、その場に座る。雑な姿勢だが、彼の瞑想スタイルはいつもこれだ。カームは言つた。オレが一番「聖光氣」に近いと。そうだ。カームこそが凄い奴だ。あんな馬鹿みたいな奴等が跋扈する暗黒大陸で、1人で200年も生き抜いたんだから。そんなカームが言うことだ。間違いない。彼は言つた。オーラを自然と同調させる、と。オレのオーラは……ほぼ無色透明だ。そして、若干だがそのオーラが大気に溶け出している。それを、一度全て溶かす……出来た。あまりにもあつけない。恐らく、あの臨死体験が影響しているんだろう。そこだけのはあのクソネズミに感謝だな。そこだけ、な。

だが、それでは足りない。想いが、信念が、精神面の修練が圧倒的に足りないのだ。カームから貰つた銀のメスを取り出す。彼の「聖光氣」が纏わり付くそれは、暖かい光だ。薄くなつてきているが、自分を保護する光もそうだ。オレは、このメスで何をするつもりだったか。

それは、人々を救うこと。

病に苦しむ者、怪我に苦しむ者、理不尽に苦しむ者。それらの苦しむ人々を救うために、オレは医者を目指した。それが、オレの原点。いくら折られても、決して折れない。自分の譲れない部分。そして、何よりオレを信じて託して逝った人達。彼らを救うのはゴンか？ キルアか？ クラピカか？ それとも……カームか？

——違うだろ!! オレが!! オレが救わなきゃならねーんだ!!!

もう決して間違わない。理不尽に屈しない。様々な誘惑もあるだろう。だが、オレは、その部分だけは絶対に譲らない。だから、世界よ……オレに力を貸せ!

「……その様子じゃ、オレの誘惑なんて必要なかったかな？」

気付けば、真つ白な空間にレオリオはいた。ここが精神世界だと、レオリオは直感で気付く。そして——亡くした筈のダチ。これもカームが言っていたことだ。精神世界では様々な誘惑が襲いかかる、と。だが——

「お前……そうか。オレを見送りに来てくれたんだな」

「そーいうこと。お前は立派だよ。オレなんかとは大違いだ」

「んなことねーぜ？ オレはずっとダサイことばっかしてきたからな」

「ふふ……分かつてるくせに。そんな自分も好きなんだろ？」

「逆に言うが、そんなに自分を嫌ってたらやってらんねーぜ？」

「そういうところがお前の良いところなんだろうな。だから、人類の守護者たり得る資格があるのかもしれない」

「へっ、大げさだぜ。オレはきれいなねーちゃん抱いて、大酒喰らって昼まで寝過ごすの

が好きな小市民だからな」

「二度もやったことないくせに」

「ど、ど、ど童貞ちやうわ!!」

「はいはい……でもな、お前ぐらい人間らしい奴の方がぴったりなのかもな」

「……さーな。オレには分からん。でも、目の前の理不尽ぐらいは何とかしてやりてエ」

「それさ。お前の名字。オレは好きだぜ？　パラディナイト。『聖なる騎士』ぴったり

じゃねーか」

「おま、それハズいからやめろって昔言つたよな！」

「さ、長話もよくねーな。結局コレも誘惑、に入るか？」

「ん。効果覲面だったぜ」

「へっ、言つてろ。じゃ、そろそろオレは行くぜ」

「ああ。これ言つて良いのか分からんが、達者でな。あと……すまなかつた」

「——お前に伝えとかなきゃって思つてたんだ。いいか？　気にすんな。それでも気に

するつてんなら、オレみてーなのをこの先助けてくれや。じゃあな」

そうして、古い友人は後ろを向き、去って行く。その姿にレオリオは最後に声を掛ける。

「——ありがとよ。○○○○。オレはもう、迷わねえ」

意識が覚醒する。外は天変地異かと思うような轟音、爆音、破裂音のオンパレードだ。戦争状態よりも酷いことになっているのは想像に難くない。そんな中、レオリオは普段の様子と変わらない。

「レオリオ？ やっぱり上手くないかな？」

カルトが心配そうに声を掛けてくる。やっぱりオレはそんなもんだ。だけどな。

最低限はできたぜ。

シユオオオオオオオオ………！！

溶け出していたオーラと共に、周囲の大気が振動する。そして、レオリオを中心に凝縮する。そうだ。それこそが世界の力。『聖光気』。そして、発動してみてもカームの凄さを思い知る。その力は、自分などとは比較にならない。

だけど……これだけはやってみせる。

レオリオは、その右手を無惨にやられていた者達に触れる。自分の得意なことは、癒やすこと。そして、今は『聖光気』がある。今なら分かる。ネテロ会長も、ジンも、ビスケすらも知っていたのだ。こうなることを。だからこそ、自らの魂をこの場に、この肉体に縛り付けた。それがどれほどの苦痛をもたらすか、想像することすら恐ろしい。それでも、レオリオを信じてここまでやってのけた。万分の一、いや、億分の一に賭けたのだ。

その信頼を嬉しいと思う反面、申し訳なくなる。だが、間に合った。

オレは、今から『奇跡』を起こす。

152、ゾバエ

激しい戦闘により、ハンター協会本部以外の周囲のビルは悉く半壊、もしくは全壊している。分かりやすく言えば、ゴジラと怪獣達が出てきて暴れているようなものだ。3つの影と、1つの影。それらが超高速で接触しあい、周囲を灰燼へと変えてゆく。事前に避難勧告が出ていて幸いであった。これが出ていなければ、何万人が犠牲になったか分かった物ではない。

しかし、その戦闘はゴン達が有利に進めているかという点、残念ながら違う。クラピカの鎖で掴もうとしても、霧になってゾバエはすり抜ける。キルアの電撃も同様に。そして、ゾバエは自前の翼で宙を飛ぶ。それだけでも厄介極まりない。

その上、様々な魔法を使う。炎を模したもの、氷の刃、赤い雷。キルアやクラピカがそれをそれぞれの能力で防ぎながら、ゴンが接近して近接攻撃を仕掛ける。だが、魔法

はそれだけではない。

自らの血液を使った魔法。血の霧、そして血液を凝固させた刀でゴンを切り払おうとする。ゴンも危うく真つ二つにされるところだったが、とっさのジャン拳チーで切り払い、距離をとる。

「おい、ゴン！ オメーオレにやつたみてーな力を出せねーのか!？」

「さつきから試してる！ 氣にくわないけど呼びかけてる!! でもなんの反応もないんだ!!!」

「参ったな……この3人でなら何とかかなると思ったが……」

「ふふふ……甘いねエ。このボクを誰だと思ってるんだい？ 本来なら君らみたいなヒョッコじゃ話にならないんだよ。でもまあ、中々サルにしちややるけどね。じゃあこういうのはどうだい？」

ゾバエが左手を上空に掲げ、そこから強烈なオーラが放出される。それは天を覆い尽くし、赤黒い空へと変える。そして――

「な…何だ!? オーラが、エネルギーが吸われてないか!？」

「これは、ボクの能力の1つ。その名も【生命の収穫】ハーヴェスト・オブ・ライフ! ボクみたいな魔王はそれぞれ複数の能力を持つ。コレもその一つさ。で、キミらはコレに抵抗できない。その時点でボクの前に立つ資格なんかないのさ」

「くっ……ふざけやがって……! テメエなんか吸われる前にぶっ飛ばす!!」

キルアが新生【紫電一閃】で攻撃を仕掛けるも、そのインパクト直前にコウモリになってそれぞれに散らばる。それを各所から飛び出した鎖が捕らえようとすも、今度は霧になってそれを躲す。その霧が散り、どこに行ったかそれぞれが一瞬見失う。

しかし、ゴンの背後で瞬時に霧から復帰したゾバエが、血の剣でゴンの肩を貫く。

「ちえっ。首狙ったのにな。でもまあこれでキミは終わりだ」

凄まじい勢いで、血液と生命エネルギーが吸われていく。それが吸血鬼の真骨頂。ゾバエの場合は更にそこからゾバエウィルスを注入して眷属に変える。だが、流石に魔王クラスの者には通用しない。肉体の性能がもつ標準機能としてゾバエを排除するから

だ。だが、それでも十分。恐ろしい勢いで血液その他を吸われている。しかしゴンは動じない。

「……終わりなのは、お前だ」

凝縮されたオーラを吸われながら叩き込む。その攻撃は当たる。そう。攻撃中は変身できないから。

「ぐえっ」

慌てて剣を引き抜こうとするも、ゴンはその手を剣ごと掴んで、連続で高速で殴り蹴り続ける。そこにチャンスと悟った2人がゴングと攻撃を仕掛ける。

「がつ、ぐつ、き、貴様ら！」

仕方なくゾバエは吸血を解除して後方に下がる。わりと結構なダメージを貰ってしまった。しかし、相手もそれ以上のダメージがあるはず……と思っていたら、自己修復している。ゾバエは流石に呆れる。

「変なトコだけ習得してるんだなあ。でもまあ、これで大体見えた。やつぱりお前等はボクには勝てないよ」

ゾバエも当然のようにダメージを修復している。これでは千日手。いや、先ほどの権能が解除されていないからむしろジリ貧だ。

どうしたものか。ゴンは悩む。キルアの時に出了アレがあれば圧倒できるかもしれない。それ程の力だった。しかし、それがどのようにして出せるかが分からない。というか多分アレは自分ではない。

アレは――

だがそれも詮無きこと。無いなら無いで知恵を振り絞らねば、と思っていたところで、ゾバエの様子が変わる。気付けば、ドレインの能力も消えている。空の様子も星が瞬いている。完全にゾバエの能力は消え去った。そこで彼は気付く。

「……………？ この気配……………まさか！」

そうやって協会方向に飛び去ろうとするゾバエだったが、それを阻止するように立ち
はだかるゴン達。

「行かせると思う?」

「……ちつ。遊びすぎたな。まさかサルがこの短時間でやるとは思わなかったからな。
仕方ない。ボクはキミ達の相手をしてやる」

「……お前、何か隠してるな」

「ふん? キミ達如きに隠し事なんて必要ないんだけど?」

煽るように言うゾバエ。そこでゴンは即決する。

「キルア! オレとクラピカでコイツを押しさえる! 協会に今すぐ行って!!」

キルアも返事をせず雷を纏いながら即決し、向かう。それは信頼関係の表れ。あの
様子なら直ぐに着くだろう。

「……バレたか。でも、1人減っちゃったねえ。大丈夫なの？」

「十分だ」

「同じく」

——そして、再び激突が始まる。



——“光”が溢れる。

無惨な残骸となっていた4人にその光が降り注ぐ。それは最大の“奇跡”である死者の復活。レオリオは神聖な光を纏い、彼らに慈悲の恵みを与える。

それは、聖書の一節にもある様な光景。その光景を、全世界が刮目する。

そして——光が収まった時。完全な形で復活を遂げた4人の姿が現れた。彼らは、知っていた。信じていた。人間の、底力を。勇気を。そして、必ずや復活出来る事を。だからこそ、驚きもせず、彼らを復活させた新しい聖者の誕生を祝福した——

「ふうく成功成功！ よくやったぜ！ レオリオ」

「マジでよく成功したわね…流石に無理かと思つたわ。死体のままいるなんてあんなにキツイのね…怨念の気持ちが少ないだけ分かつたわさ」

「ワシが言つたじゃろ？ 誰も死なせんとな」

「……お前等と一緒にいると本当に退屈しないな。いくら余でもここまでは読めなかつたぞ」

無事復活した4人。その成功に歓声が上がる。無論、ネット上で。彼らは「奇跡」を見た。そして、遠方からだが、素人が配信している闘いの様子も目撃している。彼らの中で、「希望」が生まれ始めていた。

「悪かったな、みんな。オレがもうちよつと早ければな」

「聖光気」を纏ったレオリオが、普段と変わらない様子で謝罪する。しかし、4人はそれも作戦の内だと笑って許してくれた。それで救われたレオリオが気合いを入れる。

「さて、アイツをぶん殴りに行くか」

「アホ。お前が行ってどーすんだ」

「は？ え、ちがうのか？」

突然のジンの突っ込みにレオリオは困惑する。「力」を得たからには、奴を討伐しに行くものとはばかり思っていたからだ。

「オレは戻ってくるのがゴンだけだと予想してた。だが、キルアもクラピカも強くなつて戻ってきたのは幸いだった。でもな、まだ足りねえんだ」

「え…？ マジ？」

「今のアンタのよわよわ “聖光気” じゃあんまり今と変わらないうって言ってるのよ。遠くから聞こえる音聞きや分かるでしょ？ アイツらも相当だけど、それでもまだ苦戦してるわ」

「いや、確かにそりゃそーかもしれないねーけどよ……」

「で、じゃ。彼奴を滅ぼすにはどうするか。それは、カームに還ってきてもらおう事。出来るだけ完全な状態で。これが確実なプランじゃ」

「……それって」

「そうだ。じゃ、やる事わかんदार。お前はカームの光をバトンタッチしろ」

「……………マジ？」

その時、背後から濃厚な気配が発生した。その出元は、端っこに縛り付けていたサイユウからだ。彼は、その瞬間気絶から復帰し、同時に焦り出す。

「お、おい、待てよ!! オレはお前らに従っただろ!!! やめろよ、契約違反だろ!!! ク

ソツ、まさかオレはこのためにこの作戦に入れられたつてのか?! 止めろ!! 止めてくれ!!! やめ te o i s f w e w h e o ……」

後半から意味の無い言葉が羅列される。それと同時に身体がゴキゴキと変化し始める。その様子は、先ほどのビヨンドと同じ。

——つまり、それは、ゾバエである。

「うっそだろ……まさかテメエ、感染してりや直ぐにでも全人類に成り代わられるのか?」「くっ、不覚…生かしておかずに殺しとけばよかったわ」

「先ほどと同じ個体、か。いよいよ絶望的だな。ま、余がやる事は変わらない。こんな奴に今度こそ負けるわけにはいかんからな」

「お主の言う通り、絶望的じゃな。さりとてやることは変わらない。レオリオを守りながら、今度こそ死なんようにする。それだけじゃ」

「僕も…やる。今度こそ、足手まといにはなりたくないから」

カルトは、気付けばオーラを大量に集め、なにかを成そうとしていた。それは貴重な

成長の機会を捨て、大人の肉体を手に入れるための儀式。彼女は10歳の肉体では太刀打ちできないと、8年間の青春を捨てた。それは彼女の中で多大な犠牲。カームに愛でられるはずだった、ビスケにはない貴重な時間。それを全て捧げ、彼女は急速に成長する。ショートカットは8年分伸びてオーラと共に揺らめく。着物の袖が破れ、ノースリーブになる。裾は伸びた足によってミニスカート同然となる。

そして…そのオーラは、ネテロさえも上回り、メルエムと同等まで膨れあがる。

「へっ、ここにきて嬉しい援軍だぜ」

ジンにはある懸念があった。だからこそその苦々しい表情。だが、その懸念も今はどうしようも無い。ここに来て、このカルトのパワーアップである。少しでも戦力があつた方が良い。

その直後、雷を伴いキルアが駆けつける。その姿は雷神かと思うほどに頼もしい。

「待たせたな！ やっぱりこういう事だったか。オレー人じゃ苦しい闘いだからちつとは協力してくれよな」

「来てくれたか！ 助かるぜ！ さあ、今度はなるべくダメージ貰うなよ！ レオリオ、

オメーだけが頼りだ！ 頑張れ!! そして見る奴!!! 今度こそ、最終決戦だ！ カームの奴が戻ってこれるように必死で祈ってくれ!!!」



地脈にアクセス。カームの光を辿る。それは、かつてカームが辿った道。オレはそれをなぞるだけだ。だから短時間でそのポイントまで行く事は容易い。しかし、問題はそこからだ。人類に付与された「聖光気」。それも全人類分は果てしなく、気が遠くなるほどの量。よくぞここまでカームはやり遂げたものだ、感心を通り越して呆れてしまふ。しかも、彼は治療の奇跡も同時に行っている。それは枯渇するはずだ。いくら「聖光気」が世界の莫大な力であっても、それほどの力を使えばほぼリソースが無くなるだろう。

オレがやる事は、言うだけならば簡単だ。カームの成した人類の保護を、今度は自分が引き継ぐ。そしてカームの「聖光気」を開放する。それだけなのだから。だが、言う

は易し、行うのは難し。

あまりの無理ゲーに再び心折れそうになるが、オレも「聖光氣」取得者である。どんな困難でも成し遂げるといふ決意を心に宿した。ましてや、先人が築いた道のりを、次世代の自分ができないなどと諦めることは決して無い。オレは、気合いを入れて早速その作業に取りかかる。

——まずは自分の遠方から。なぜなら、ゾバエにバレるとマズいからだ。気休めかも知れないが、それでもやらないよりはいいだろう。

それは、引き継ぎの儀式。「聖光氣」同士は干渉し合わない。同じ物であるからこそ、引き継ぎもスムーズに行える。世界は、その危機に対してかなりの融通を利かせてくれているようだ。コレを通じてカームに通信しようと試みたが、できなかった。彼は、隔離された異空間で限界まで自らを酷使しているのだろう。恐らく、その魂を削つてまで……。急がなければマズい状態だ。だから、躊躇せず、了承も受けずに引き継ぐ。少しでも彼の負担が減らせるように、と。

無事に一人目の引き継ぎに成功。……これは…恐ろしい程の負担。果たしてコレを何億人…できるだろうかと再び不安がよぎるも、しかし、それでもやり遂げると決意する。何故なら、カームはやり遂げたから。そして今現在も、コレを抱えたまま闘つてい

るのだから。

——順調に「聖光氣」の移行は進んでいる。スピード自体はかなり早いはずだ。探すという手間が無く、治療も必要ないからだ。しかし、その負担は大きい。だからこそ、やらなければならぬ。光は現在3割まで引き継がれた。もう既にオレの身体は限界に近い。一体カームはどれほどの負担を抱えて闘いに向かったのか。あの涼しい顔で大丈夫だと断言して……オレにはそれができる自信が無い。だが、彼が向かったときの表情を思い出す。決して折れず、曲げないという精神力！ 必ず勝つという決意！

オレはそこに勇気をもらう。少しでも彼のために、力を尽くす。例えこの身が壊れようとも。

オレは医者だ。自分の状態は把握している。壊れたら治療すれば良いのだ。そして、再び壊れないように、より強固な肉体へと作り替える。それぐらいの「奇跡」は許されるだろ。まだまだ道のりは遠い。だが、着実に進んでいる。だから……必ず勝つて戻ってきてくれ、カーム。

——6割。もう、限界が近い……。カームは一体どれほどの……だが、残してしまえ

ばゾバエがそこに入り込む。そうなたたら地獄だ。だからこそ、やり遂げなければ……。

——8割……死ぬ……はは……折角 “聖光氣” を取得できたつてのに……オレはコレで死ぬかもしれねえ。でも、さっきの絶望のままゾバエにやられてくたばるよか遙かにマシだ。もう既に自分の “聖光氣” は枯渇寸前。絶体絶命。

だからこそ……最後の手段がある。おそらく、カームもこの闘いで “コレ” を使っているのだろう。そして、闘っている。だが、アイツはアイツのまま勝つはずだ。例えば手が『この星』であっても。ならばオレが負ける道理はねえ。

コレはオレの中での賭け。オレの信念が勝つか、それとも『星の意志』が勝つかの綱引き。だが、オレは負けねえ。さあ、やるか。オレの一世一代の大勝負！ 相手はこの星！ 相手にとって不足はねえ！ 行くぜ！

——世界よ……このオレに、もう少しだけ、力を貸せ!!

153、真夜中のサーカス

満天の星空に眩く煌めく光。それはまるで恒星のごとく――

それは、カームが自分の限界以上に星の力を借りた姿。白く煌めく気鋼闘衣は凄まじいまでの熱量を放ち、スーツに張り付いていただけの姿の上から更に羽衣のように彼を包む。その背中には、6対の翼を模した羽衣が流れる。それは、人間世界では正しく天使として描かれた姿であり、巨悪を必ず滅ぼすという決意を秘めた“救世主”の最終形態である。

「――美しい……♡」

ヒソカは、彼のその覚悟をこそ愛した。もう戻って来られなくてもいい。そういう彼の決意が秘められたその姿は、自分を必ず滅ぼすという意志の表れ。つまり、今だけは、彼は自分だけを見ている。この世の全てを放りだして自分だけを。それが、ヒソカにとつては望外の喜びであつた。

ただ——唯一残念なのは、こうなつてしまつたら彼はもう彼ではなくなつてしまふこと。

星の意志が彼を支配し、彼はただの神罰執行者と成り果てる。その存在を、魂を消費しながら。彼と最後まで闘いたかつた。しかしそれは叶わぬ願い。でも、それこそがヒソカの罰なのだろう。人類の究極の裏切り者。その末路は悲劇でしか無い。でもそれでもいい。そうだからこそ、嬉しいのだ。消化試合にするつもりは無い。次の相手は、この星だ。これまで狩つてきた中でも最大最強。文句なしのビッグネーム。そんな相手をすらも蹂躪し、喰らう。最高だ。

始めよう。『救世主』殺しを——

「私…ガ、キミを…失望させちゃう、と以前いつたな」

「!! カーム!!」 キミ…まさか意識があるのかい!!」

「あたりまえダ…私を誰だと思っテいる? 私はカームIIアンダーソン…
アンブレイカブル
 【壊れない男】
 …ダぞで?」

「ああ…ああ…キミはなんて素敵なんだ…♥ やっぱりキミがいい。キミしかない♥」

「そうダろう…なにせ、私ハ強すぎるからナ」

「そうだね…知ってた…よかったよ♥ キミがいてくれてボクは本当に幸せだった…
 ♦ お礼にこれからボクのとつておきを見せてあげるよ♥ …受け止めてくれるかい?」

「勿、論サ…さあ、見せてクレ…キミの全てヲ」

ヒソカの身体が膨れあがり、ヒソカから禍々しい気配が産まれる。それも大量に。それは人の怨念、魂、死者の念。それらが混ざり合ったモノ。それぞれが楽器を用意し、気

が狂いそうになるフルートの音色や奇妙な形の弦楽器をかき鳴らす。楽器を持たぬ異形は様々に形を変化させながら奇妙な踊りを踊る。それはまるで祭りの風景。いや、サーカスの前奏曲^{プレリュード}。満天の星空の中、ヒソカを中心に異形の者達が奏でる歌と踊り。それは無限にも等しいほど広がり、周りを埋め尽くしてゆく。

「これが、キミに捧げる真夜中のサーカス^{シルク・ド・ミーヌ}。一つ一つに素敵な思いが込められている。是非楽しんでいって欲しい♥　これが、ボクの最後の演目だから◆」

周りの異形はヒソカに変化し、カームに襲いかかる。全てが先ほどのヒソカと同等。しかし、カームも先ほどと同じでは無い。襲い来るヒソカを次々と消滅させてゆく。

しかし、途切れることは無い。それ程の大量のヒソカが次々と産み出されてゆくのだから。そして、先ほどと同じように、倒せば倒すほど一人一人が強くなってゆく。そして、彼は「力」を使えば使うほど、その存在が希薄になってゆく。

—— 3 割炎で消し飛ばした。あっけなく。

—— 5 割雷で消滅させる。苦戦しながら。

—— 7 割拳で打ち砕く。時間を掛けながら。

——9割。浸透勁で辛うじて潰してゆく。

——残り、2人。

2人のうちの1人の口の中に手をつ込み、そのまま振り回してもう1人を吹き飛ばす。同時に「聖光氣」の「外浸透勁」を注ぎ込む。

残った最後の1人。これが真正正銘、最後のヒソカ。カームの「聖光氣」はその光をほぼ失い、それでも燦然と煌めく。まるで彼の魂の最後の光のように。

「さあ、^{フィナーレ}終幕だ ◆ 最高のショーにしよう ♥」

激しい打撃音、絡み合う光と闇。その激突は大気を揺らし、空間に罅を入れ、大地を粉碎する。あまりにも激しいその戦闘は、最早神域の闘い。刹那の攻防を時間の概念を

超えた速度で行う。それは物理法則をも超越し、時空を歪める。周囲の空間から虫や鳥、そして人間のようなモノが産まれ、そして消えてゆく。2人のエネルギーの性質が混ざり合い、そのような現象が起こっていた。

2人は、これまでの全てをぶつけ合う。訓練してきた技、たゆまぬ努力の結晶、膨大な戦闘経験から産み出される最適解。それはお互いのこれまでの道筋すらも明らかにしてゆく。そして、より相手を理解する。相手が抱いていた感情。愛情、恋慕、嫉妬、憎悪、欲望、恐怖、勇気、感謝、嫌悪、満足、不安、殺意、期待、それら以外の様々な浮かび上がる感情が、全て手に取るように理解できる。それは、これまで闘い抜いてきた2人にとっても初めての事だった。これほど相手の事を考え、これほど理解に努めたのは初めての事だ。2人は闘いを通してお互いを想い、分かり合う理解する。それは、他の何事にも変えられぬ。極上の体験。

これまでの全ての修練や苦行はまさにこの時の為にあつた。これまで生きてきた意味はここにあつたとお互いが闘いを通して主張する。相手を倒すために、相手を理解する。それは矛盾しているようで、矛盾しない。それはある意味性交よりも濃厚で、強烈な接触。

「ああ……ああ……ボクは……キミに会えてよかった……」

「……私も……君の気持チが……少しだけ、分かつたよ」

そして、2人の動きが次第に遅くなっていく。目に映らぬ程の、時間を置き去りにした速さから、雷速、音速、そして、人間の速度へ。最後は、流々舞へ。いつまでも続きたい。永遠に続けたいと思っても、何事にも終わりが来る。

そして――

「ヒソカ……お前は、凄イ奴だ。すコシだけ、君が好きになれソウだよ」

カームが最後の力を振り絞り、ヒソカの中に潜り込む。

〃浸透勁〃

ヒソカから光が溢れ、ヒソカの身体が崩れ始める。ヒソカは不思議と満足していた。彼がそのような感情を抱くことなど初めてだ。それは、カームとの闘いによってもたらされた〃奇跡〃。技を、力を、全ての思いをぶつけ合い、愛し合えたわかり合えた。それこそが、ヒ

ソカが本当に欲しかったものだったから。ヒソカはこの結末に納得した。充分だと、そう思えた。それは、相手も同じだろうと言うことも彼は知っていたから。

だから――

もう――

満足したよ――ありがとう♥



幕が、閉じる。それは、私という名の物語の幕。私は、この世界で確かに生きた。そして——閉じる。

限界以上に借りた星の力は、私の魂を削りながら正しく行使された。私の最後を飾る敵は、それは強大だった。人間として、最強で最高の敵。

彼は私以上に魂を削り、私に挑んだ。それが自身の破滅と知りながら。そして彼は、最後まで自分を失わなかった。

人間の可能性。人間の証明。彼は私に教えてくれたのだ。どんなに苦しかろうと、必ずやり遂げるといふ意志こそが人間を人間たらしめるのだと。

——だからこそ、私は諦めない。

こんな、消滅寸前で、この世から消え去る半歩手前であっても、必ずや、仲間達の元へ。

今の私には手段が無い。手段も、方法も、ここから逆転の手を放つ秘策も……何も無い。だけど、見苦しく抵抗する。あの時の様な絶望などもうしない。

意識が薄れてゆく。私の存在が拡散してゆく。だから、私は願う。まだ終わらせない、と。

グランドファイナーレは飾った。幕は閉じる。でもまだカーテンコールがある。

例え、私の身と魂が殆ど『星の意志』になつたとしても、必ず私は帰つてみせる。
それが、“彼ら”と交わした約束なのだから。

私は、ボロボロになつた次元収納から、「ある物」を取り出す。これが、最後の希望。

私が、この世で一番信頼する人物が託した、私の“希望”なのだから――



「兄さん、起きてよ」

——ハッ！ な、何だ！ 誰だ！ ここは……

「珍しいね。寝過ごすなんて。朝のランニングサボるのなんて初めてじゃない？」

なんだ、マイケル……か。私を起こしに来たか。来年ジュニアハイになるからか、ここ最近特にしつかりしてきたな。……だけど、何だろう。この胸から溢れる思いは。

「わぶっ！ ど、どうしたのさ、兄さん!? な、何、泣いてる？」

マイケルが困惑している。そりやそうだ。私にだって分からない。でも、何故かこうしたかったんだ。ずっと。

「……なんか怖い夢でも見たのかな？ 僕は見なかった事にするから、早めに降りて来てね。もう、朝食の時間だよ」

そう言って私を優しく振り解き、マイケルは階下に降りた。下では、父さんも母さんもいるのだろう。待たせちゃ悪いな。行くか。でも……さっきの気持ちは、一体何だったんだろう？

「おはよう、カーム。ホラ、早く席に着きなさい」

「……珍しいな。お前が寝坊するとは」

母さんが朝食を配膳しながら私に言う。シーザーサラダとベーコンエッグにたっぷりバターパン、コーンポタージュにミルクだ。今日は中々豪華だな。それに私の好物ばかりだ。よく分かってるな。いや、私の為だけじゃなくて全員の好みが一致してるからだが。流石母さん。

私の父さんが新聞を読みながら私の事を確認している。父さんはいつもそうだ。家庭に関心が無いように見えて、実は誰よりも家族を見てる。ヴィトー＝アンダーソン。ヨークシンマフィアのドン。

「ああ。なんか変な夢見ちゃってね。すっかり寝過ぎたよ。ごめん」

そうやって席に着く。マイケルがこちらを見るが、気にしない。食前の祈りを全員で済ませ、朝食にありつく。やはり、家庭の味は最高だ。私はこの家がなんだかんだで一番落ち着く。モリモリと食べ、ハイスクールに出かける準備をする。

そろそろ私も卒業、か。まあ、来年はとりあえず父の会社に入って経営の勉強だな。しかしまあ、あの病弱だった私がよくここまで来たもんだ。それだけでも奇跡だな。毎日のランニングが功を奏したか。今日はサボったけど。

朝食を終え、私はハイスクールへと向かう。スクールには舎弟達が校門で待ち受ける。あのさあ：毎回毎回ムサイのよ。男子校なのに群がらないでほしい。ちよつと前まではジョセフがカバン持ちするって待ち構えてたからな。アレよりはマシか。アイツ、マジで舎弟の妹のリンダちゃんと一緒にだけしれつと付き合いやがって。絶許。

おつと、思考がそれた。とりあえず、舎弟達を引き連れて教室へ。コイツらの面倒を見るのも私の務め。そこに手を抜くつもりはない。無論、勉強もだが。

放課後、私は舎弟とダベリながらトラブルがないか確認する。よし。今日は問題無しだな。帰ろ。

「兄さん、ちよつと教えてほしいんだけど」

帰るや否や、マイケルに捕まる。お手伝いのマーサさんにコートを預けながら、早速マイケルの勉強に付き添う。マイケルは聡明だ。私なんかよりもマフィアの後継者が合つてると思うんだよなあ。ストイックだし。私？ 私はどこかというときトーなんだよね。だから合わない気がするんだけど。ジョセフにそれ言ったらめっちゃ怒られたから渋々だけど目指す事にした。でも、奴が言うようなカリスマなんて私には無いから。元病弱ヒョロヒョロ君だよ？ そんな事より、早く私に彼女の的な人紹介して欲しい。アイツ、今度今度で中々紹介してくれないからな。いい加減にしないと私も熟女とかロリに走るぞ。いいのか？

——うん？

なんかそれもいい気がしてきた。ちよつと考えとこう。

マイケルの勉強を見終わり、自分の課題へ。この程度の問題なら楽勝で終わる。日々の積み重ね、大事。早く終わらすぎて先の先まで予習してるからなあ。終わってから夕食までランニングする。癖になつてるんだよね。鍛えるの。

夕食の時間がやってきた。今日は私の好きなアンダーソンパスタ。最高だね。もうずっとこれでいいわ。モリモリ食べておかわりまでする。この年齢は腹が減るのよ。え？ 何。なんか母さんがニヤニヤしてる。父さんはそっぽ向いてる。まさか、これ作ったの父さん?! それはビックリだわ。父さんはそっぽを向きながら、お前も作れる様になつとけ、と言う。それはいい考えだ。私も習ってみよう。マファイアたるもの、自分のメシぐらい作れなきゃならんのだ。ドンなら尚更ファミリーを食わせていかなきゃならないからね。

全部食べて、片付けを手伝う。今はマイケルも手伝う。働かざる者食うべからずの精神。私もマイケルも理解してるから、しっかりとやる。当たり前的事だからな。まったりしていると、父さんが唐突に家族に話を振ってきた。

「明日は休日だな。私も明日は何も予定がないから、偶にはサーカスでも見に行くか」
「まあ！ 珍しい。いいの？ 貴方」

「部下にも偶には休めと言われてな。チケットまで貰ったからな」
「ホント?! やったー!!」

マイケルが喜びを爆発させる。そういうトコはまだまだ子供なんだなあと感じながらも、実は私も楽しみになっていた。サーカスなんて見た事ないし。詳細を聞いてみよう。

「どこの一座が来るの？」

「グラムガスランドから、モリトニオ一座、だと」

「すごー！ グラムガスランドで有名な一座じゃない！！ 座長の空水泳がヤバいんだって

！！ それに最近入った新人も中々やるみたいだし」

「マイケル、お前詳しいなあ。私は全然知らなかったよ。でも、そんなにすごいなら私も楽しみだ」

「決まりだな。明日はそれだ。朝から出かけるぞ」

「まあ！ じゃあ久しぶりにおめかししなきゃね！」

母さんも張り切ってる。さて、楽しみが増えたな。明日は久しぶりの家族でお出かけるだ。しっかりと目に焼き付けねば。

当日朝、我々は全員バッチリおめかしして車に乗る。ウチはリッチだから乗合馬車じゃないのだ。豪華なテントに入り、開演を心待ちにする。

——始まった。

いや、これは凄いな。人間技とは思えない。特に若い新人のピエロ。彼の技法はずば抜けてる。ジャグリングが並じゃない。私も演目が終わったらスタンディングオベーションをしていた。その時、その新人ピエロと目が合った。

「……?!」

ウインクしてくれた。割と嬉しい。その後の座長の空水泳も圧巻だった。アレ、どうやってんの…?」

演目が終わり、カーテンコール。素晴らしい一日だった。家族と見る事が出来て本当に良かった。

私も、久しぶりに満たされた気がする。これからもずっとこのような日が続けばいい。本当に、そう、思えた。

だからこそ感謝しなければ。隣の座席を見る。マイケルがまだキラキラした眼でステージを見ている。やっぱり可愛い奴だな、お前は。

「なあ、マイケル」

「ん？ なんだい？ 兄さん」

「……ありがとう」

「え？ 何さ、僕は何も……」

「久しぶりにさ、家族に、みんなに合わせてくれて、本当にありがとう」

「……………気付いてたんだね」

「ああ」

辺りは、いつの間にか暗くなり、天井が抜けて夜空が輝く。私とマイケルはその座席に2人して腰掛けている。2人とも容姿はそのままだ。

「もうちよつと楽しんでいけばよかつたんじやない？」

「そうしたいのは山々なんだけどな。私は行かなきやならない所があるんだ」

「そつか……分かつたよ。やつぱり、兄さんは変わらないね」

「そうさ。私は私。アホな所も含めて変わりはしないのさ」

「見つけたんだね。大切なモノを」

「ああ、見つけた。私の、希望”を」

「ふふ……良かったよ。本当に兄さんは世話が焼けるんだから」

「悪かつたよ。本当にな」

「でもね、やつぱり兄さんは凄いや。見てごらん？」

群。　　そう言つてマイケルが空を指差す。満天の星空。そこに流れる、凄まじい量の流星

「それは、”祈り”。兄さんを求め、無事を祈る願い。それが世界中に溢れている」

——それは幻想的な光景だつた。壮大な天空ショー。そのショーを2人きりで見ると

なんて贅沢なんだろう。

いつまでも見たいと思ったが、その流星達は私に向かつて降り注ぎ始めた。そしてそれは、私に徐々に曖昧だった記憶と、念能力を取り戻させていく。それはいつまでも続き、やがて消えていく。しかし、目に見えないだけで確かにその祈りは届き続けている。

「——兄さんがやってきた事、成し遂げた事。それらが身を結び、こうして形になって現れたんだよ。誇っていい」

「私だけじゃないさ。お前を含む家族、そして、素晴らしい仲間達がいたからこそ、さ」
私は18歳の姿から、いつもの容姿と服装に戻っていた。マイケルも、しわしわの老人へと姿を変えていた。

「そうだね……だからこそ、私の書いた事を守ってくれた」

「どんな状況になろうとも、希望を失うな、か。その通りだったよ、マイケル」

「ふふ……私の最後のお節介。気に入ってくれたようだね」

「ああ。ありがとうな。お節介とは全く思わんよ。お前があの手紙で願ってくれたんだ

ろう？ 私をほんの少しこの世界に留めるように、と。難しかったんじゃないか？」

「自分の能力の応用だからさほど難しく無かったさ。私もそんなに大した事はしてない。ほとんどは兄さんと、兄さんの仲間達の頑張りさ」

「それでも、さ。お前には結局助けられてばかりだった。なさけない兄でごめんな」

「いいさ。私がやりたかったんだ。だからこそ、兄さんとこうして会えて嬉しいよ」

「そうだな。私もだ」

そうして、2人は無言で席に座ったままでいた。心地良い沈黙が流れる。心の内には、ただただ感謝があつた。これまで出会えた全ての人々。家族、友人、舎弟、師匠、弟子、そして恋人。

私は幸せ者だ。私が帰つても居場所なんてない。そう思っていたけれど、それは間違っていた。私は勝手に悲劇の主人公気取りをしていただけだった。今思えば恥ずかしい。でも、それは違った。何故なら、私は、私の居場所を自分で見つけたから。例えそれが暗黒大陸であっても、私は満足だ。

——行こう。私を待つてる人々がいる。だから行かなくちゃ。

「マイケル」

「ああ、踏ん切りがついたかい？」

「ありがとう。そして、またね」

その言葉に、マイケルは苦笑いを浮かべる。

「あのね、兄さん。貴方は結構死なない人なんだよ？　いくらまた暗黒大陸に渡るつも

りでも、しばらくくないんじゃないかなあ」

「知らないな。私は教えたはずだぞ？　こういう時に言うセリフを」

「……ああ……そうだったね。そうだったよ。分かった。じゃあ兄さん、またね」

我々は固い握手を交わし、それから全身を抱擁する。しばらくそうすると、身体を離し、私はステージに降り立つ。

「兄さん、楽しかった。私以外にも何人か見送りに来てるから、挨拶して行ってね」

マイケルはそう言うと、座席の後方へと立ち去って行った。ありがとう、マイケル。最後まで世話をかけたな。しばらくお別れだ。でも、こうして会えて本当に良かった。

顔を前に向ける。皆の祈りが届き、私は完全に自分を取り戻した。欠けて無くなりか

けていた魂も、それで埋まった。ならば、私は私の出来る事をやる。

ステージから入り口に向かう。道は分かっている。後は行くだけだ。真夜中のサーカスの演目は全て終了した。夢のようなサーカスから、再び現実に戻らなければ。

入り口へ向かう通路に、見覚えのある人物がいた。

「カームさん」

「……ジョン！ ……やはり、ここで会うつて事は……」

「ああ！ 気にしないでほしい。私は私でこれまで人生を十分楽しみましたから。マフィアの最期には良くある事です。最後の最後まで大暴れできたから満足ですよ。それでもファミリーは安泰ですし、いい人生でした」

「……ッ！ すまない……私のせいで」

「いや、参ったな！ ホントに気にしないでつて言おうと思つたんですがね……じゃあこうしましょう。カームさん、そう思うなら、必ず勝ってください！」

「勿論だ。私は負けるつもりはない。初めから」

「ふふ……流石ですね。その、カリスマ、その覇気！ 貴方が仮にアンダーソンを経営してたらどうなつたでしょうねえ。それはそれで見たかつたんですが、まあ貴方の人生だ。私も応援してますよ。さ、お行きなさい」

「ジョン……改めて、すまなかつた。私は必ず勝つ！ 見ていてくれ」

「分かりました。信じてますよ？ じゃあ、私は2代目とその様子を観戦してますから。楽しみなんですよね！ 伝説の2代目と会って観戦できるなんて最高ですな！」

「ジョンもやっぱりいい空気吸ってるな。ありがとう。君も是非楽しんでくれ……では、行ってくる」

「ええ、いつてらつしやい。貴方の道に幸多からん事を」

ジョンと握手をして、別れる。亡くした人々は多く、世界から悲しみが尽きる事はない。だが、私はそれでも最善の未来を掴み取る為に戦う。それが、生きる、という事なのだから。

「その通りじゃ、馬鹿弟子」

「師匠！ 来てくれたんですね!!」

「言った筈じゃ。儂はあまねく世界へと偏在するとな。じゃから見えておつたぞ……頑張ったな」

「師匠……ありがとうございます。貴方のおかげで今の私がいる」

「謙遜するでない。今のお主の事は、お主自身が掴み取ったものじゃ。お主はやり遂げ

た。そして、今も最善を尽くし、前へ進もうとしておる。それでよいのじゃ」

「まだ、私には残してきた者、救いを求める者達がいいます。だから、これから向かいます。彼らを救いに。そして、私の未来を掴み取るために」

「ん。これで人の為だけに頑張るなどとはざきおつたらお仕置きじやつたが…心配いらんようじやな」

「怖！ …でもまあ安心してください。私は私、やりたい様にやりますから」

「それでええ。お主の人生じや。お主の好きにするが良かろう。それが前を向くという事じゃからな。さて、お主、気付いておるか？」

……？ なんだろう、突然。

「お主の『聖光気』……戻ってきとるぞい」

「ほ、本当だ！ どうして!?! いや、それはマズい」

「焦るでない。お主の弟子が目覚めた。それでお主の負担を背負いはじめとる」

「な!?! そんな馬鹿な！」

「な。儂も流石に驚いたぞ。仙の秘法なのにおう」

マジでか…いや、確かにレオリオとかは一番近かったけど…私でさえ何年も何年もかかったのに、この短期間で、しかも土壇場でやってのけるか…凄い通り越して呆れるわ。で、流石に苦しんだるようじゃ。お主みたいな容量だけはバカ多い奴とは違うからな。急がんとこのう」

「なんか一言多くないですか!?! いや、そんな場合じゃないな。急ぎます。師匠」
「うむ。じゃあな、馬鹿弟子。お主の活躍、期待しとるぞ」

師匠は、そのまま私の横を通り、後方に消えていく。最後に伝えなきや。

「師匠！ 本当にありがとうございます!!」

「達者でな。儂はお主をいつでも見守ってるでな」

後ろ向きで手を振りながら去っていく師匠。変わらないな。私の師匠は。私の生涯の師であり、私を導いてくれた人。そして、今でもこうして教えをくれる方。私の師匠はやっぱり偉大だ。さて、彼の言う事なら間違いない時間がない。急がねば。

さて、入り口まで来た。…扉が閉まつてるな。仕方ない。無理矢理こじ開けて出る

か――

ギイオオン

向こうから扉が開く。そして一人の人影が映る。逆光で顔が見えない。だが、私には分かった。

「まさか君が最後だとは思わなかったよ」

それは、先程のジャグリングをしていた新人ピエロだった。金髪で、吊り目の生意気そうな少年。それは、過去のヒソカだ。

「やあ、さつきぶり♣？」

「モリトニオ一座だったんだな。素晴らしかったよ」

「うん……◆ まあ、そうだねえ……♣」

「珍しく歯切れが悪いな。覚えてないとか言ってたけどきつちり覚えてたんじゃないのか？ 随分と馴染んでたじゃないか」

「座長は殺人鬼だけどね♥ ボクに念を教えて、殺し合いた仲さ◆?」

「Oh……なるほど。君の由来が何となく見えたよ。それで忘れるのは無理ないか?」

「ボクは過去を振り返らない主義なんだ◆ ただまあ、キミに合わせてみただけ♥」

「そうか。そりや悪かったな。まあ、分からなくてもないが」

「ふふ……何もかもを君と分かり合っちやっただからねえ♥ 素敵な体験だったなあ◆」

「うん。まあ…不本意ながらね。で、君は最後に何を伝えに来たんだ?」

「いや? ただ逢いに来たただだよ?♥」

「……はあく…君はそう言う奴だった」

「ああ、最後に聞いときたかったんだ◆」

「なんだい?」

「——どうだった? ボクの『真夜中のサーカス』は◆?」

「……ああ。とても満足したよ。最高のショーだった……君は…いろんな意味で私の最強のライバルだった」

「それだけ聞ければ満足だよ◆ もう、ボクのショーはこれでお死舞い◆ カーテン

コールすらも終わりを迎える◆ ——これでサヨナラ、さ♥」

「……そうか。私は——」

「キミは行きなよ◆ ボクはもう十分満足した◆ 思い残す事がないぐらいにね◆ 恐

らくボクの行き先は地獄だろうねエ……でもね、もしかしたらまた会えるかもよ?」

「そうだな……いや、もうしばらくはいいや。でも、まあ、ほんの少しだけだけど、悪くはなかったぞ、ヒソカ」

「——♥ じゃ、またね♥」

いつの間にかいつものヒソカに戻っていた彼は、中に向かってカツカツとヒールの音を立てて歩き出す。最後までヒソカはヒソカだった。それが、私にはちよつと嬉しい。そして、少し寂しい。彼には様々な苦勞をさせられた。色々な人々を彼のせいで失った。こんな不倶戴天の敵に思う感情じゃないかもしれない。でも、私は不思議とそう感じたのだ。

「またな……さらばだ、ヒソカ」

サーカスのテントを出る。いつの間にか私はチケットを持っていた。『^{シルク・ド・ミュイ}真夜中のサーカス』のチケット。入場のスタンプが押してある。いろいろあつたが、楽しいシヨードだった。私は生涯忘れないだろう。

その紙の上に重ねていた念を剥がす。単純な仕掛け。でも中々見破れない。それは

【ドツキリテクスチャ薄つぺらな嘘】。最後の最後までヒソカ彼らしい。彼はやはり天性のショーマンだ。

本当の自身は「死者への往復葉書」。私が大事に持っていた、マイケルからの一枚。これのおかげで私はまた、救われた。私は本当に、幸せ者だ。

最後にテントに向かつて一礼する。これまでの全てに、感謝を込めて。そして、前を向く。

——さあ、行こう。私の物語は、再びここから始まる。だから…待っていてくれ。

私は、全ての決着をこれから付ける。

154、終幕

その闘いは、一方的だった。しかし、奇妙なことに、ゾバエは彼らに決定打を与えられないでいた。それは、いくつかの要因があるが、最大の要因はキルア……ではなく、ネテロであった。彼の「百式観音」、それは時間という概念を超越した打撃。打撃という弱点はあるけど、その速度は他者の意識を上回る。かつて、「救世主」との模擬戦でも、恐ろしい程の実力差があるはずの「救世主」が、この打撃を完全に躲すことはできなかつた。それこそ、時を止めない限り。つまり、単純な速度ではない、それらを超越した人間の極みの結晶ともいえるこの攻撃は、例え魔王といえどもダメージは受けなが無視することができない物である。先ほど不覚をとったのは、他者を庇うために、百式を自分から外してしまったこと。そして、複数相手という多勢に無勢。それは百式の弱点を悉く突いたものだったからだ。

そして今。ゾバエが先ほどのように念獣の能力を出しても、キルアが即座に雷で消し

飛ばしてしまう。だからこそ直接ゾバエ自身が攻撃を加えようとしても、その攻撃の直前にネテロが上回る速度でそれを妨害する。仕方なく霧化で流すと、そのほかのメンバーが攻撃を仕掛けてくる。ゾバエにとってはストレスのたまる闘いだ。

また、次に苛つく要因はジンである。彼の攻撃は何故か受けてしまう。それは彼にとってたいしたことのない、無視すべきものだが、苛つくものは苛つくのだ。例えば、自身のHPが100万を超えていて、そのダメージが1であろうとも。

この2人は、人類という能力の枠を超え始めている。それは、概念。または権能と呼ばれる領域にまで達しようとしていた。

だからといって無論、キルアを無視できるわけがない。彼はこのメンバーでは一番自分のオーラ量に近く、油断すれば割とダメージを受けてしまう。雷の速度というのも厄介だ。見切れないわけでは無いが、その暗殺術と相まって非常に避けにくい。だからこそ、それを警戒せざるを得ないのだ。

同時に、カルト、メルエムも羽虫に近いが、厄介な羽虫である。それぞれ蛾の鱗粉のようにオーラや紙吹雪を展開し、隙あらば潜り込もうとする。特にカルトはキルアと同等に暗殺術の達人でもあり、その意を読みにくい。そして、割と大きな炎などの範囲攻撃もその防御で防いでしまう。彼女の誓約により、潜在オーラはメルエム程度だが、顕在オーラが激増しており、その威力はキルアに次ぐ。だからこそ、イライラが募る。

ちよこまかとフォローに入る武の達人、ビスケも厄介だ。

だが、それでも絶対的な力の差は変わらない。いくら何とか防いでも、撃退すら不可能な状況。辛うじて全滅を防げる。ただ、それだけだ。

「くっ……やつぱり、手も足も出ない、か」

「はあく。まいったな。アレだね、RPGでいうと、弱いけど素早さが高い奴のせいでダメージ与えられない感じ？ 当たれば必殺だけど躲される的な。で、経験値とかないからマジで無駄。苦行でしかないよね」

「くそっ！ ここまで……ここまで捧げても届かないの!？」

「貴様らのサル知恵でこのボクを出し抜ける訳ないだろ？ てか、ソイツ目覚めたんだな。あんだだけビビってた癖に」

「人間を舐めんじやねえって事だバーカ」

「ていうか、今更だけど君達死んでたよね？ 魂はみつともなく残ってたけど、時間の問題だった筈なんだけどもなあ。やつぱり“救世主”は厄介だね。もういいや。チャチャつと殺そ」

「次こそはやらせんで。それに、ワシ等が死したとしても必ずやカームは来てくれるか

らな」

「もうほぼ死んでるって。むしろ消滅かな？ あの光見たでしょ？ 消えかけてんじやん。アレ、星から力借りて魂削って、それでも足りなくて更に削ったって事なんだよね。でなきゃ、人類を守る光が消えるなんてあり得ないし。もう彼は完全に消滅寸前さ。見りや分かる」

「……それでも！ カームならやってくれ!! だから——」

「ソイツが引き継ぐって？ 無駄だよ。それに、ソイツも限界っぽいじゃん。大方無理矢理星から力借りてるんじゃない？」

レオリオを見れば、確かに全身から血を吹き出し、身体はズタボロだ。一目で死に掛けたと分かる、壮絶な姿だ。しかも、彼は明らかに禁忌の方法を実行している。それは、彼の背後に生える金のオーラの翼が証明している。

「~~~~!! だけど!!!」

「ま、そういうこと。ボクが見た限りじゃ“救世主”は“反救世主”には絶対に勝てない。ソイツが光を引き継いだ所で、殺してしまえば終わり。うくん、いい感じ。だけどね、いい加減鬱陶しいからそろそろ死のうか」

ゾバエが右手を挙げる。

キルアはその仕草を察知し、マズいと判断し、全員に警告しながら突撃する。しかし、躲かれる。そして、ソレが発動する。

ハルウエスト・オブ・ライフ
【生命の収穫】！

周囲全体を赤黒い霧が覆う。それは、絶望の技。超範囲、全体への回避不可な吸収能力。

「ぐっ！ な、なんだコレは！」

「恐ろしい勢いでオーラが吸われてる!! 不味い！ このままじゃ1分も保たない!!!」

キルアの雷が、カルトの紙が、メルエムのオーラキャノンが、ネテロの百式が、ジンの念弾が、ビスケのオーラブレードがそれぞれゾバエを襲うも、当然のように防がれる。

この一連の攻防でエントランスのほぼ大部分が崩壊した。ビルがまだ建っているのが奇跡的なくらいである。ゾバエはジンが用意した配信映像を割と気に入っていて、なるべく壊さないように立ち回っていたのも影響しているが。

そして、オーラの低い順から枯渇し始める。まずはビスケ。そして、ジン、ネテロと続く。

「さて、そろそろ終わりだね。さよなら」

ゾバエが霧化し、枯渇したネテロの背後に立つ。同時に、血の剣を突き立てようとした、その時――

ゾバエの右腕が消滅した。

!!!?

瞬時に彼は身を引き、腕を復元する。今のは何なのか。何の攻撃で、何を喰らったのかを分析する。現在のメンバーにコレができる者は存在しない。

まさか……

一番、あり得ない結論がよぎる。しかし、それはあり得ない。あり得ない…筈なのに……

何故、こんなにも巨大なプレッシャーを感じるのか

直後、室内に巨大な光の柱が立つ。その光はありとあらゆる物を浄化するかのような

神聖さに満ちていた。

「ば、馬鹿な?!? 貴様!! 何故貴様がここに来る!!!」

ゾバエが叫ぶ。しかし、彼の発動した「生命の収穫」ハレツエスト・オブ・ライブは、その光によつて影も形もなく祓われた。闇を祓う光。それは、紛れもなく神聖な存在が降臨した証。

それは、魔王と対峙するメンバーだけでなく、世界中のだれもが祈り、渴望し、待ち焦がれていた存在。そう――

“救世主”

「「「「「カーム!!!」」」」」

「待たせたな、みんな。心配させて悪かったね」

彼の現在の姿は、普段の抑えた白スーツではない。その上から羽衣を纏い、その背には白く輝く翼を模した6対の翼が顕現する。それは、例え念能力を習得していない者でも視認できるほどの強烈な光。その姿は、まさに天使と呼ばれるものであった。彼は、極限の闘いを経て、自らの器を広げた。それは、魂を削るほどの闘いで削れた魂が、世界中の人々の祈りによって補填されたため。真摯な祈りとは、そのオーラをごく少量ではあるがその対象に捧げる行為である。1人1人はたいしたことはない。しかし、それが何十、何百、何億になった時、そのオーラは極大なものとなる。

「貴様……ふざけるなよ……! ……ここまで来て……!!」

ゾバエが怒り心頭で黒いオーラを噴出させる。推定顕在オーラ100万。つまり、潜在オーラは4000万を超えるだろう。自重をすることすら忘れた魔王の怒りの全力行使。それは画面越しにも伝わるほどの邪悪な圧力であり、直接受けたら念能力者でも

死ぬほどのレベル。だが――

カームの普段の状態の潜在オーラ量は約1500万。顕在オーラは50〜70万前後。しかし、そこに「聖光気」の補正が入るとどうなるか。これまでの補正は、枯渇しかけていた為、2〜3倍が精々だった。しかし、「聖光気」が普通にあるなら最大で50倍。

そして、今。器が広がった状態であれば、その補正は100倍近くまで跳ね上がっている。

つまり――

ゾバエが自ら突進する。それは今まで見せたことの無い程の恐ろしいスピード。そして彼はカームには向かわない。すでに息絶え絶えの人間達を人質にすべく、神速で移動する。気付いたキルアとネテロが反応するも間に合わない。狙いは近くにいたカルト。捕まるかと思われた、その刹那

——時よ、止まれ——

全ての時間と空間が静止する。いかなる速さを用いても、時間という概念自体を止められたらそれは無意味と化す。カームはゆったりと歩き、カルトの前に立ちふさがる。

——そして、時は動き出す——

「は？ え？」

そのまま腕を掴み上げられるゾバエ。慌てて霧化して逃げようとするも、カームの手から逃れられない。彼は手を掴みながらゾバエの能力を無効化していた。

「く、クソ!! 離s」

ジュツ!!!

カームの手から溢れ出す“聖光気”の圧。それを、浸透勁の要領で流し込む。それだ

けで、ここまで苦戦に苦戦を強いられた魔王の肉体があまりにもあっけなく消滅する。

「カーム……ありがとう。僕は……」

「カルト。君なんだね。本当によく頑張った。そして、素敵なレディになったね」

カルトがたまらずカームに抱きつく。彼女は信じていた。しかし不安もあった。もう逢えないんじゃないかと。自分のやってきた事が全て無駄だったんじゃないかと。それでも、彼は帰ってきてくれた。自分の元へ。

それだけで自分が犠牲にしたモノが救われた気がした。それだけで、自分のやってきたことが報われた気がした。涙が溢れる。それは、悲しみではない、喜びの涙。

「カーム……僕はもう、絶対に離さない」

「ちよつと！ 待ちなさいよ!! それアタシが先でしょ!! ……もう。しょうがないわねえ」

カルトの頭を撫でて労うカーム。ビスケもプリプリ怒ってはいるが、彼女は流石にカルトがこの戦いで支払った物がなんなのかを正確に理解していた。なので、少しだけ譲る事にした。少しの時間、カームも彼女の頭を撫でて労うと、彼はレオリオに向き直る。

「レオリオ、ありがとう。君は本当に凄い男だ。私なんかよりもよっぽどね……まだゾバエはいるから、その負担を少しだけ引き受けるよ」

彼は、最早反応すら返せなくなっていたレオリオに向かって「聖光氣」を分け与える。彼の限界ラインである人類の8割。絞り尽くし、星に借りてまで支払っていた残りの2割。そこを再びカームが引き継いだ。

同時にレオリオの身体の傷が完璧に修復され、彼の背にあつた翼は消えた。星との意識の綱引きを行なっていたレオリオが目を覚ます。彼は果たして――

「……………ワレハ、ホシノイシ」

「アホか。ふざけてる場合じゃねえだろ」

「全くだぜ。時と場所を考えろよな」

「ハイハイ分かった分かった」

「はよう話を進めたいんじゃないが」

即座に総ツツコミが入る。流石のカームも苦笑いを浮かべる。

「お、おい！ オレはマジで頑張ったんだからな！！ さすがにオレも傷つくぞ！」

若干涙目になって抗議するレオリオ。そこに苦笑しながらカームがフォローを入れる。

「レオリオ、私は分かってるよ」

「おお！ カーム！ お前だけだぜ？ このヤバさ分かってくれんのは！」

「ああ。並の精神力じゃ不可能な事だ……よくやってくれた。ありがとう」

「へっ、ありがとうよ。死ぬほど頑張った甲斐があつたぜ。それにしても……マジで何とかなるとはな」

「ああ。私もそう思ったよ。これは、ここにいる皆が起こした『奇跡』だ」

「そうだな。全員が死力を尽くした結果だな」

「あ！ カーム！！ 今は雑談してる場合じゃねーぞ！ アイツがまだいるんだ！ 今ゴンとクラピカが必死こいて抑えてるんだ！！」

キルアが焦りながら伝えてきた情報により、再び緊張感が走る。しかし、カームは落

ち着いていた。

「ああ。知ってる。でも大丈夫。今から私が『駆除』してくる」

そう言い残すと、カームはその場から掻き消える。巨大な気配が消えたことで、その場に静寂が広がる。まさに白昼夢を見ていたような感覚、しかし、それは現実だった。彼らは成し遂げた。じわじわと喜びがそれぞれの胸に広がる。あと少し。あと少しで、この騒動は終わりを迎える。その時を、世界中の皆が心待ちにしていた――



「……? なんだ? 何故突然笑い出した?」

「何か企んでる…のか？」

突然狂ったように笑い出すゾバエ。彼に取っては遊びながらの戦闘。しかし、その途中でいきなり攻撃を中断し、その場で爆笑した後、その顔つきが変わる。今までのヘラヘラした態度の表情から、怒りを隠さない凶相へ。

「……クソザルどもめが……!! このボクに対して…よくも…よくもやつてくれたなッ!!!」

大気が震えるほどの大喝とともに、ゾバエから暴虐的なオーラが溢れ出す。天地をも覆い尽くすほどの濃厚な瘴気。その顕現によって、大地が振動する。今まではその力の大部分を封じながら闘っていた。それが、彼の怒りによって開放される。姿形すらも人間の形態から更に変化し、禍々しい、各所に角を生やした巨大なガーゴイルに似た姿へと変わる。

サイユウを素体にしたゾバエは、全く馴染まない下等生物の、しかも促成の個体であつたためにその力のほとんどを開放できていなかった。しかし、このビヨンドのゾバエはそうではない。下等生物という縛りはあつても、50年という永い年月をかけて馴

染ませた個体である。現在、そのオーラは留まることを知らず、既に顕在オーラは500万を超えて、まだ上がる。潜在オーラは最早計測不能。それ程の極限の力が展開されていた。

それは、正に魔王というに相応しい、究極の力。

これほどの「力」を出してしまえば、確実に門番に見つかる。そして連れ戻される。それが分かっていたからこそ全力の戦闘を控えていたが、ゾバエは下等生物に自分の計画を最後の最後に覆されて、完全に冷静さを失っていた。

「う……あ……」

「ま、マズいな……これほどとは……」

流石のゴン達も戦慄する。まだまだ彼らの力はゾバエには遠く、足下にも及ばない。それが分かってしまった。だからといって引くことはできない。しかも、今度のゾバエは遊ぶ気配が見えない。絶望的な気分陥ってしまいそうになる気持ちを奮い立たせ、ゴンが叫ぶ。

「……それが、どうした!! 絶対にお前を本部には行かせないツ!!」

「そうだな。いかに強大な相手だろうが、我々は引かん。最後まで抗ってみせる!」

ゴンとクラピカが悲壮な決意を胸に秘めながら立ち向かおうとしたとき、別種の濃厚な気配がその場に広がる。

——それは、光。

魔王の特大の気配に負けないどころか、それを軽く上回るほどの巨大で神聖な気配。その中心に、見覚えのある人物が現れた。

「カーム!!!」

「……来やがったな… “救世主”! どこまでもコケにしやがって…!」

「ゴン…とクラピカ? よくやった。君達のおかげで全てが間に合った!」

「カーム…間に合ったんだね!」

「流石だ…信じていたぞ。貴方が勝つ、と」

「ああ。任せてくれ。ここからは……『害虫駆除』だ」

その台詞に、ただでさえ切れかけていた魔王の理性が完全にブチ切れる。

「ほぎけ！ 下等生物ー！ー！！！！」

その単純な、それでいて速すぎて不可避な血の剣による一撃は、正しくカームの心臓を貫く。

「もう人類などどうでもいい！ だが、貴様は、貴様だけは殺してやる！！！」

激しく吸血するゾバエ。生命のエネルギーを全力で吸い尽くし、殺害を目論む。その時、彼はいつもの癖でゾバエ因子を同時に埋め込んでいた。ゴンやクラピカには効果が無かった攻撃。当然「救世主」には効果がないだろうとダメもとでやっていた。それは完全に偶然の産物。無駄な攻撃。魔王であるゾバエは普段はこのような事はしない。しかし、彼の怒りがそれを行わせてしまった。「聖光気」で防がれると知っていたにも

関わらず。

すると、意外にもソレが通った。ズンズンとウィルスは浸透し、「救世主」の身体を駆け巡る。彼の顔に血管が浮き出し、どんどん顔色が悪くなる。よく見れば「聖光気」も消えている。ゾバエはそこに一瞬希望を見た。結局は見掛け倒しで、コイツは滅びかかっている、だからこそ通じたのだ、と。そして、それならばこのまま完全に眷属にしてしまおう。これほどの眷属は滅多に手に入るものではない。それだけでも収穫だった、と。

そこで、顔色の悪い「救世主」が、その顔を上げてゾバエを見る。その顔は、諦めた者の絶望の表情ではなく。

「ゾバエ……1つ、言っておこう。私はカームIIアンダーソン。【救世主】にして
アンブレイカブル
 【壊れない男】……私が何故そう呼ばれるか……知ってるか？」

無抵抗で侵食されながらも、冷静な口調でゾバエに語る「救世主」。その様子に激しく嫌な予感がゾバエを襲う。瞬時に彼は自らの失敗を悟った。しかし、気付いたときには既に遅すぎた。

【パ」フェクト」コンパート完全適合】

「き、貴様……まさか……!!」

ぐんぐん顔色が元に戻る「救世主」。そう、彼は適合した。ゾバエウイルスに。これまでゾバエは慎重に彼を避けてきた。「救世主」に見つかからないように。しかし、それは「聖光気」にゾバエウイルスの効果が無いためであり、悟らせないため。だから無駄な事をしない魔王は気付かなかったのだ。この相手が自らの天敵であることを。そして、とある理由から、彼の情報がゾバエに一部伝わっていなかったこともゾバエにとつての不幸であった。

「ふう……魔王クラスのウイルスって中々キツいな。でも、美味しく頂いたよ。ありがとう」

「お、お前は……オマエはあああああ!!!」

// 浸透勁 //

「ぐぎやあああああああ!!!」

「切り札は見せるな、見せるなら更に奥の手を持て。私のモットーでね」

「おのれ……おのれ……まだ……ボクにはストックが……これで終わると思う……おい……何故拒否する……！ 何故拒否できる……！ サル如きが……！ ふざけるな……!!」

「不様だな。お前の敗因はただ一つ。人類を舐め過ぎた事だ。勉強になったな、暗黒大陸の魔王サマ」

ゾバエは、まだ何かを試しているようだったが、やがて諦めたようだ。消滅しかかっ
ていて、もうその顔面しか残っていない。最期に消えそうな声で「救世主」に向かつて
語りかける。

「……………今回は、ボクの負けだ。だが、「救世主」……貴様ももうここには残れまい。貴
様は世界を救ったにも関わらず、この楽園から追放されるのだ……貴様がこちらに来る
ことを、楽しみに待っているぞ……」

そう言って、ゾバエは完全に消滅した。



「お帰り！ カーム!! 上手くいったみたいね！」

「ああ。向こうのは無事『駆除』できたよ」

「じゃあさ、「ちよつと待て」……ってなんだよジン」

ゴンの事を差し置いて、ジンが会話に割り込む。

「カーム。オメーも気付いてるだろ？ まだ終わっちゃいねえって事を」

本当にこの人の感覚と、論理的な思考力には驚愕する。恐らく彼は、誰にも教えて貰っていないにも関わらず、状況証拠だけでそれを導き出した。というか、恐らく彼はこの顛末までの絵を正確に描いていた。だからこそその超一流ハンターなのだ。

「よく分かりましたね。その通りですよ。では、行きましようか。最後の後始末に」
 「?? 終わったんじゃねーの？」

「いや、終わってない。まだあと一人残っている。それが、奴の言ってたストックだ」
 「げ、アイツまだいんのかよ!! ホントゴキブリみてーな奴だな!!」

「^がキルアが難色を示す。それもそうだろう。私以外には苦戦必至の相手だからだ。だ

「恐らく、心配いらないよ。もうゾバエは出てこない」

「……は？ どういうこと？」

「それをこれから確かめに行こう。ジンさん。場所は分かりますね？」

「ああ。奴はこの上にいる。な？ ジジイ」

「……そうじゃ、な」

妙に歯切れの悪いネテロに怪訝な顔を向けるゴン達年少組。だが、大人達は理解した。最後に残ったのが誰で、そしてどこにいるのかを。

全員で階段を上る。エレベーターなどつくのとうに壊れている。だからこそ、一歩昇るしかない。かなり上の方まで来たときに、大勢の人々の気配が現れる。

「お疲れさん！ やく何とかかったな!!」

「さすがですね。僕はダメかと思いましたがよ」

「本当に強くなったな、ゴン。そして、ジン。久しぶりだな」

「ねー！ ホントマジで!! あんな奥地の魔王の近くで作業なんて生きた心地がしなかったわよ!!! ジン!! 報酬として1年間仕事免除ね!!」

「ドゥーン！ リスト！ レイザー！ デイアナ!!」

ゴンが驚きの声を上げる。そう、彼らはジンが呼び寄せた助っ人。戦闘には参加しな

かったが、ある意味彼らも闘っていた。ここはサーバールーム。ハンター協会の秘蔵のサーバールームやこの建物の電気系統が物理的に破壊されないように、ジンはG・I組をこっそりとここに招集して配備していたのだ。彼らはその力を結集し、全力でここを守っていた。

肝心の奥のメインサーバーにはエレナとイータもいる。彼女らは情報担当だ。今も2人して高速で何やら打ち込んでいる。彼女らはジンは立ち上げた動画サイトや情報掲示板の管理に精を出している。もう1人外部協力者がいるらしいが、彼は滅多に顔を出さないらしい。ここにはいない。ちなみにコレは階段の道中でジんがこっそり教えてくれた事である。この人は本当に敵に回すと恐ろしい人だ。まさか相手も、たった六日であの状況からここまで体制を整えられるとは思えない。

尚、ぎやーぎやー喚いていたディアナだったが、私の顔を見るなり大人しくなった。

「へ、へへ…『救世主』サン、お疲れです…肩でも揉みましようか？」
「なんとという三下ムーブ…流石に引くわ」

「うるさい！ アタシは『救世主』もトラウマなの！ てか、アレを簡単に倒せるってホントヤバいんだからね!!」

「百年の恋も冷めそうだな……」

なんだかんだで久しぶりの再会に喜び、会話に花が咲く。しかし、まだ歓談するには早い。ほどほどで切り上げて、その場所へと向かう。



「おい、こっつて……」

皆がネテロを見る。ネテロの表情は苦々しい。それもそうだろう。何故ならここは会長室なのだから。

「じゃ、行くぞ」

扉を開けてジンが躊躇なく中へ入る。それに我々も続く。中に居たのは――

「やあ……みな、さん……お疲れ様、です」

ボロ・ボロの身体のパリストンであった。会長の椅子に座り、苦しそうに息を吐きながら、しかし笑顔いっぱいには彼は我々を迎えた。

「パリストン、チエックメイト 詰みだぜ」

「でしよう、ねえ……」

それは、ゾバエ病の症状。私も適合したから分かる。耐えがたい程の苦痛と渴きに苛まれていたはずだ。というか、この状態で正気を保ち、まともに受け答え出来るのは本当に異常なのだ。何という精神力か。

「ゾバエをよく拒否出来たな」

「うふふ……ボク、は……そういう能力……なんですよ。凄い、でしょ」

どういふ能力か詳細は分からないが、それだけではないだろうなどと、何となく感じる。しかし、本当に異常な精神力だ。我々とは方向性がまるで違うが。

「お前……アレ相手にも遊んでたのか」

「そうですよ？ いやあ……愉しかった、ですねエ」

「呆れた奴だな。こうなると分かっていただろ」

「ん……半々……つて、所……ですね。綺麗に策が……全て決まれば……こちらの勝利……勝つてたら、ボクも……こうならない自信は……ありました、よ」

「だが負けた。お前もオレ達を舐め過ぎたな」

「ええ…本当に…あそこ、から、逆転…される、とは。流石ジンさん」

「フン。テメエの考えは大体分かるんだよ。だから全部潰してやったろ？」

「ボクが、戻った…時には…手遅れ、でした、からね。つくづく…貴方は嫌いな人間、だ」
「今だから言うがな。最初の襲撃…サイユウによるサーバールームの破壊工作。アレまではオレも気付いて無かった。アレのおかげでオレもここまでの絵が描けた。感謝するぜ」

「ふふ…微塵も、思っ、て、ない癖に…完敗、ですよ。ジンさんだけじゃない…全ての、遊び相手に。…奇跡の連発、でしたからねエ」

「のう、パリストン。お主は結局何がしたかったんじゃ？」

「……………何もかも、全部無茶苦茶に、したかった…ただ、それだけ…ですよ？」

ネテロ会長は、その言葉である程度納得したようだ。ジンさんも同じく。パリストンは結局、ただただ遊んでいたのだ。彼にとって勝敗などどうでも良かった。世界が混乱し、そこで我々含む人類がもがき苦しむ様を特等席で見る。ただそれだけ。会長やジンさんを殺さなかったのは、それを自慢したかったから…そんなトコだろうか。

いや、結局彼の思考なんて私には理解が出来ない。しかし、彼もその悪としてのプライドは譲らなかつたようだ。例え相手が魔王だろうとも。

「そうか…カーム、頼む」

「ええ。パリストン、私は『救世主』とか言われてるが、中身はごく普通の『人間』でな。悪いがお前を『治療』して救済しようとか慈悲を与えようなどは全く思わん。覚悟はいいな」

「…『救世主』にそう、言ってもらえるのは…光栄、ですネエ…メンタルが弱い…そこに漬け込んだ…つもりだったんですが」

「そうだな。まんまとやられる所だったよ。でも、希望を捨てない人の絆が絶望を覆した…私はそう思っているよ」

浄化の炎を手に灯す。『聖光気』と『死』の概念のミックス。塵も残さず、魂すらもこの世から消し去る為に。

「はは…：…まいったなア。これじゃ…死者の念すら発動できなそうですネ」

「二度と再びこの世に戻ってくるんじゃないやねーぞ。テメエはやり過ぎたからな」

「…：…最後に、予言しましょう。世界は…変わってしまつた…だから…必ずや、ボクらや、ボクら以上の悪が現れる…その時、貴方達は、ここにはいない…ふふ…：…今度こそ無理かも…ですネエ」

「そうだったらそうだったで、いる人々が何とかするだろう。人類はわりとしぶといかな。では、さらばだ」

パリストーンに炎をぶつける。パリストーンは何も抵抗せずにそれを受け入れた。その身だけでなく、魂すらも焼き尽くす炎に灼かれる痛みは壮絶なものはずだ。しかし、彼は声一つ上げる事なく、その胡散臭い笑みを絶やす事なく、燃やされていった。

数十秒後、彼の痕跡は完全にこの世から消滅した。

最後まで悪を貫いた男がこの世から消滅した。なんとも言えない、そんな気分になる。しかし、私は彼を許すわけにはいかなかった。『救世主』的には間違いなんだろうな。だが、そんな事は知らない。私は私の思うままに、これからも動く。



——これで、全てが終わった。私が帰ってきた事で引き起こされた騒動に一つの決着がついた。なくしたものはとても多い。しかし、得たものも確実にあった。だから今、こうして前向きな気持ちでいれる。私は、ようやく私の物語を始められる。

幕が降りる。一つの舞台の幕が。そして、新しい舞台が幕を開ける。全てはここからだ。さあ、前を向いて始めよう。

私の物語を——

155、カーテンコール

「あー全世界の皆。知つてると思うが、レオリオだ。この度ハンター協会の会長に就任した。まあ、なんだ。世界じやいろんな事がありすぎてまだまだ混乱中だ。だからオレがやる事としては、混乱した世界の復興が第一だ。まだまだ世界中で苦しんでる奴等がいる。オレはハンター協会会長として、ハンター達を派遣し、全力で元の生活に戻れるようにする。そのために、協力してくれると嬉しいぜ。もしそれが成つた日にや、同時並行で「ハンター念能力者養成学園」を作つていく所存だ。流石に大量に生まれるだろう野良念能力者を放置はできねえ。だからせめてオレ等と一緒に働ける様にするぜ。んで、オレ等と協力して世界をよくしてこうな。とりあえずオレからはそんなもんだ。詳細については、後程ネットを通じて文章で発信するぜ。これから、オレと新しいハンター協会をよろしくな！——ああ、最後にオレに関して言わせて貰うぜ。あのな？ オレは

確かに特別な能力を持つてる。だがな、オレはお前等にその「光」を分けちまつて、もう一般人とほとんど変わんねえんだ。だからくれぐれも、誰々を生き返らせてくれとか、奇跡を起こしてくれとか言うんじやねーぞ！ そりやあの時の特別だからな！ 第一死者蘇生なんてあの時以外じやどうあがいても無理だ。——それに、ゾバエの脅威は完全に消えたわけじやねえ。あんまり無体なこと言つてると、ソイツの光が外れてしまふかもしれねえ。だから、なるべくそうならないように頼むぜ。以上だ」

就任演説なのか、脅迫なのか分からないような内容の演説を終えて、レオリオは生配信の壇上から下がる。無事に中継が終わり、そこに声を掛ける人物が2人。

「おう、お疲れさん。まあよかつたんじやねえか？」

「モラウさんは適当ですね…ま、私も良いんじや無いかと思えますよ？ ちよつと脅しすぎな気はしますけどね」

彼らに声を掛けられ、レオリオは誰も見えないところでドカツとソファアーに寝転が

る。

「あれぐれー言つとかないとうるせーつたらありやしねエんだよ。マジで。どんだけ説明しても聞きやしねエ奴等がまだまだわんさかいるしな」

「まあ、そうでしょうねえ。有名税つて所ですかね」

「そういうこつた。ま、しばらくすれば沈静化するだろうからここは我慢だな、新会長」

会長に就任したレオリオ。その彼をサポートするのが、この2人、モラウとノヴである。彼らはあれから即呼び出され、いきなり彼の補佐役をやれと押しつけられた。無茶ぶりもここまですれば暴挙である。しかし、トップ層が軒並みなくなった協会では、彼らは貴重な人材だ。遊んでる訳にもいかないため、こうしてしぶしぶその仕事をこなしている。ちなみにカイトも捕まって、彼らに見えないところで記者への対応を行っている。

レオリオがそうなることはおよそ必然であった。レオリオはこの世界をよくするために残ると決めた。しかし、全国生中継で奇跡を起こした彼が、ただの一般人のままだと確実に良くないことに巻き込まれる。だからこそこのこの人事である。

誰も手が出せないような地位に無理矢理押し上げ、彼を守る。レオリオは必然的に患者を諦めざるを得なかったが、その代わり世界を支配する程の地位を手に入れた。それはそれで、立場は違えど人々をより多く救えるという彼の夢にも少しは引つかかる。だからこそ、彼も納得してやってみようという気になった。ここ最近ではむしろ、開き直って好き勝手にしてやろうという気にまであつていた。

その一つが、ハンター養成学園の設立である。レオリオとしては、能天気な学園についていいよなあとか、女子の制服とか考えるの楽しい、としか考えていなかったが、当然ながら裏の思惑がある。

念能力拡散の流れを防げないなら、せめて大々的に、徹底的に管理する。それが基本方針である。それ以外の能力者は認可制を設け、徹底的に監視していく体制を作る。そのため、布石がこの学園構想である。

その動きは、今後全世界へと広がっていくだろう。そこで学んだ者は社会のエリートとしてハンター協会管理下の元働き、そして、全世界で要職へと就くだろう。それはやがて、ハンター協会の遠大な支配体制の樹立に繋がるのだ。無論、この絵を描いた者はレオリオでは無い。しかし、その者はもうこの世界にはいないので、結果、レオリオの功績として後々語り継がれることになるだろう。

——世界は、変わった。

暗黒大陸の存在、念能力者の存在、門番の存在、そして……厄災の恐怖。それらは世界中に衝撃を与えた。既存の価値観が吹き飛ぶほどに。ハンター協会は、適度に情報を提供し、時には情勢すら望ましい方向に誘導した。

世界の政府関係者は慌ててハンター協会を抑えに掛かったが、そもそも武力で勝てる相手ではないということ、生中継でイヤと言うほどに分かったため、迂闊に手を出すことができなかった。そもそも中心人物のレオリオを害してしまったら、自らを守る「光」が消えてしまうかもしれない。それは彼らにとって恐怖以外の何物でも無かったので、どうすることもできなかった。

また、ハンター協会は、突如立ち上がった情報掲示板や動画配信サービスの管理まで請け負っている。この恐ろしく自由なネットワーク情報環境によって、いかなる政治上の秘匿も意味を成さなくなったし、自由な意見交換が活発に行われる場として、既存のメディアを衰退させる勢いであった。そして、その莫大な情報を一手に握る協会に、権力が集中するのは必然であろう。

これからの世界は、ハンター協会が主導していく。そして、そのトップは次世代の“救世主”レオリオIIパラダイナイト。求心力からしても、各国の主導者層とはモノが違う。

つまり——実質、彼は、この世界の「王」となったのである。



——時は少し遡る。

闘いが全て終わり、彼らは荒廃した協会とスワルダニシテイをどうするかを話し合った。その結果、カームが自らの能力、つまり「奇跡」で完全に復興させた。存在変質の力、それは異世界の神の能力であり、恐ろしく自由度が高い。あつという間に以前より豊かな街が出来上がった。流石は「神」の能力である。また、その際、街の至る所に植物を生やし、緑溢れるスワルダニシテイが爆誕した。勿論、不埒な奴が不埒なことを考えないように、少しだけ穏やかになるおまじない付きである。

その時、カーム達以外に誰も存在しない、しかし恐ろしく綺麗になった街の上空に超巨大な気配が発生した。瞬時に警戒する全員を押しとどめ、カームがその存在に語りかける。

「随分と遅かったですね。もう全部終わりましたよ。門番さん？」

——そう言うな。我は信じておったからこそ、ここまで手を出さなかつたのだ——

それは、街の上空一面に広がる龍の顔。そう、彼こそが門番。限界境界線を守護する龍神である。

「割とやばかったんですが？」

——だが、何とかなかったではないか。むしろそれぐらいの試練は乗り越えて貰わねば話にならない——

「なあ、カーム。コイツ腹立つんだけど」

「落ち着け、キルア…で？ 遠方にいた貴方が、わざわざここまで来て何の用です？」

——貴様も分かっているだろう？ 貴様達の「力」。この「楽園」には刺激が強すぎる。よって、貴様等はここから出て行ってもらいたい——

「おいおい、随分勝手な門番だな」

——貴様の妻も貴様を心から待っていたぞ。貴様も自分の息子と共に行ったらどうだ？——

「うゝ……マジか……」

「あのジンが一発で沈黙したぞ！ ヤベえなアイツ」

——さて、改めて言うが、魔王の子、冥王の系譜、そして禁忌により力を得た雷神、少なくともこの3名は退去してもらおう。最後に、「救世主」。貴様もだ——

「は〜ホント融通きかぬ〜な〜。世界を救ったつてのによ〜。オレ等が別に何するわけでもね〜のにな〜」

——これは慈悲だ。貴様等は確かに世界を救った。よって、我が直接転移させずに貴様等に聞きにきたのだ。……大体貴様等もそう言いながら、本当は分かっていたのらう？ 貴様等の頭の中では既に結論が出ているではないか——

「勝手に覗かないで欲しいんですがね……まあ、分かっていますよ。でもね、こちらにも色々準備がある。少しぐらいは待つて欲しいものですがね」

——貴様以外は向こうへの移動手段を持つているのか？——
「ええ。ありますよ。その気になれば今すぐにもね」

龍神は少し沈黙した後、再び語りかける。

——よかろう。ならば、貴様等の時間で1週間やる。その後、この世界から退去するが良い。しなければ我が直接送つてやる。1週間後のこの時間だ。努々忘れるなかれ

そうして、龍神はその姿を消した。まるで白昼夢かと思えるような光景だったが、確かに現実で起きた事だった。

そして、彼らは再び話し合う。今後、この世界をどうするか。そして、誰が暗黒大陸へと渡航するか。

当然ながら、カームとゴン、キルア、クラピカは確定だ。彼らは直接指定されているからだ。その他、ビスケ、カルトは絶対に行く譲らなかつた。そしてメルエム。彼は後半非常に大人しかったが、契約の履行を理由に行くと宣言した。彼の中で龍神に指定されなかつたことや、闘いの中であまり活躍できなかった（メルエム基準）ことが引つかなかつているようで、闘志を燃やしていた。当然彼らに断る理由は無い。元から彼は参加確定メンバーの1人だ。

レオリオは、反対にこの世界に残ると宣言した。彼は、この世界でできることを行い、人々を助けていくと皆に力強く言い放つた。その様子からは、まだまだ未熟ではあるが世界を守っていく守護者としての片鱗が伺えた。だから、メンバーの誰も反対はしなかつた。

最後に、ジンとネテロ。彼らは別に行く必要は無い。むしろこの世界に残り、復興や協会の運営を手伝う方がよいのでは、という意見がメンバーから数多く出ていたが、彼らはそれに強く抵抗した。曰く、

・オレ達は罨とは言え、国際指名手配までされて処刑まで確定した犯罪者（容疑者）である。

・そんな奴等がハンター協会に残っても疑われるだけ。

・そもそもハンター協会は新しくならねばならない。いつまでも旧体制の象徴がいてはいけない。

・ネテロはビヨンドの父だから余計にマズい。

・ジンはむしろ行けと言われた。

・つーか、そんな楽しそうな所に今更行けないとかマジで無い。

以上の強い主張により、しぶしぶだが彼らの参加が決定した。というか、絶対最後の理由が一番だろうし、それ以上に面倒臭い仕事など丸投げしたいという事が透けて見え、他の理由は後付けであると皆が理解していた。しかし、いくら言ってもこの2人の意見は変えられないだろう事も分かってしまったので、仕方なく了承した。

よつて、一同は1人残り、彼らの分まで仕事を丸投げされるであろう哀れな犠牲者生け贖のこれから降りかかるであろう苦難に対して、無言で哀悼の意を示した。尚、本人は使命感に燃えてやる気に満ちあふれ、まるでその事に気付いていなかったが。

それから、今後のことを（主にジンとネテロが）話し合い、これからの体制づくりに奔走した。いつの間にかハンター協会の協会長に決定されていたレオリオは激しく抗議したが、ネテロとジンの巧妙な「話し合い」によって、最後にはやる気を燃え上からせていた。他の面々は、あまりにもチョロいレオリオに大丈夫かという不安がよぎったが、それもまたネテロが様々なサポート体制を構築したとアピールしたため、まあいっかという雰囲気になり落ち着いた。

その間、それぞれがそれぞれで出来る事を行った。例えばカームはゾバエウィルスやメビウス湖内から完全に消し去った。これはカームがゾバエに完全に適合した結果であり、今の彼にとつては容易い事だった。ただ、それについては人類には完全に秘匿された。人類が安易に暗黒大陸を指ささない様であり、レオリオの経営が少しでも上手く行くようにというサポートでもある。これによって、レオリオは人類への加護をおまじないレベルまで落とす事ができ、無事に彼が人類への加護を全て引き継ぐ事ができた。

カルトとビスケはカームに彼と同じ体質になるように願った。それは、彼とこれからはずつと、絶対に別れない為であり、彼女達の覚悟である。流石のカームもこれには躊躇したが、絶対に譲らないという彼女達の想いを受け、彼は神の権能を再び使い、彼女達を自分と同じ体質へと変えた。ついでに、彼が新しい適合を行うと、そのフィード

バックが彼女達にも行くように変えた。なんだかんだ言つて、カームも本当に大事に想つていたし、彼女達を死なせない為にも彼は全力を尽くした。

ゴンやクラピカ、キルアは自分の力がどれほどのモノかをカーム作成の異空間でメルエム相手に確かめたり、ジンに母親イグリスの事について根掘り葉掘り聞き出し、向こうに渡つてから会いズリにいく計画を立てたりして過ごしていた。ゴンの中で、いらなきときに出てきて、肝心なときに来なかつた奴の事を一発は殴つておかないと気が済まないらしい。それが例え自分の母親だとしても。カーム的には、多分2回目は龍神が止めたんだろうなあと推察していたが。

ジンは、母親の強さについてだけは黙秘を貫いていたが、恐らくその様子から一発どころか座つた状態でもあしらわれるんじゃないかという予想をカームは立てていた。

——そんなこんなで、約束の一週間はあつという間に訪れた。

「さて、これから出発しますが。皆さんもう戻っては来られないですからね？ そのつもりで宜しくお願いしますよ。準備は本当に大丈夫ですか？」

「あのよお、もうそれ何回も聞いたぜ。大丈夫だよ、なあ皆？」

「そうだね。相変わらず心配性よ、カーム」

「僕は特に何もいらぬからこれでいい。もう父にも連絡できたし」

「私も右に同じく」

「オレとお前が出てつたら、あそこの後継者第一候補がブタクンかあ…ま、しゃーねーわな」

「オレもミトさんに会えて良かった。別れの挨拶もできたしね」

「いよいよだな。余は待ちかねたぞ。ただ、契約がきちんと履行できたことは褒めてやろう」

「相変わらずエラソーだなお前。そんな口はオレに勝つてからにしろよな」

「フン：今はまだ余は産まれたばかり。数多の困難と敗北を乗り越え、その果てに王として立つのだ。よって、全てが余の糧と言うことだ。貴様もそんな減らず口はそのうちきけなくしてやろう」

「お？ なら今からやるか？」

「やめんか、お主等。これから出かけるというに、全く騒々しい奴等じゃ」

「まあ、いいじゃないジジイ。これぐらいがアタシ達らしいわよ」

まるで遠足に行くかのようなノリで暗黒大陸に向かうつもりの一団である。彼らは現在ハンター協会会長室にいた。彼らはこの一週間、勝手知ったる我が家のように私物化して住み着いていた。そして、それぞれがそれぞれの準備を終え、今、ここに集結していた。約束の刻限まであと2時間。全ての準備を終え、彼らはこれから旅立つ。

「そう言えば、カームは挨拶とかできたの？」

「ああ。私は世話になったアンダーソンには伝えてきたよ。あそこもジョン以外は無事だったから何とかスムーズに次世代に移行できそうだ。私の資金も全て譲渡できたし、問題ないだろう。それに、ジョンにも精神世界で会ってお別れしたし、思い残すことはないな」

「アンダーソングループがスポンサーになってくれるのはオレとしても心強いぜ。まだまだカネはいくらあっても足りねーからな」

「まあ、あそこが協力体制を敷いてくれるなら問題なからうな。ワシはそれで大分苦勞したからの」

「おいジジイ！ テメエ、オレに面倒くせえ事全部押しつけやがって！ しれつと関係

ないフリしてんじやねーぞー！」

「おっと、やぶ蛇じやったか。すまんすまん。この古い先短い老人の言う事じや。気にするでない」

「何が老人だアホ！ そんな澆刺としてたら説得力ねーんだよ!!」

「まあまあ…このジイさんも長年頑張ったんだから許してやれよ」

「そうですよ。このなんちやつて老人も運営はいい加減でしたし。良い機会ですよ」

「……グスン。かつての部下が虐めてきよる…ワシヤ悲しいわい」

「自業自得だろジジイ。さ、そろそろ行こうぜ。オレは待ちきれねーよ！」

「相変わらず誰よりも好奇心旺盛ですね、ジンさんは。もし帰って来られたら面白い話の一つでも聞かせてくださいね」

「おう！ カイト、一つとかじや無くていくらでも話してやらあ。それまで死ぬんじやねーぞー」

和気藹々と会話が弾む。それは、これから待ち受ける場所への期待と、これからの冒険を心待ちにしている人々の気持ちの表れ。彼らは、これから行く場所が地獄すら生温い魔境である事を知っている。しかし、それ以上にその場所を冒険することを楽しみにしていた。

ひとしきり別れを告げた一行。そして、その時が来る。カームが次元収納からあるアイテムを取り出す。ジンがソレを興味深そうに、分析したように眺めているが、カームはジンを躲しながらソレを持って会長室の扉へと向かう。

——ソレは鍵。

古い銀の鍵のような見た目ではあるが、その成分は銀では無い。この世では存在し得ない金属で生成された、特別な鍵。

その鍵は、異界への道をつなぐ秘宝。どんな扉からでもその鍵を使えば、一瞬にして暗黒大陸のとある場所へ飛ぶことができる。カームが鍵を鍵穴に差し込む。その鍵は一瞬でその形を変え、鍵穴へぴたりとはまり込む。鍵を回すと、その鍵は扉と融合し、会長室の扉が光り出す。見た目は変わらない。しかし、その扉は今、暗黒大陸へと繋がった。カームがその扉を開くと、その先は協会の廊下では無く、暗闇に包まれていた。どんな黒色よりも黒い、闇。

「さあ、行こう」

カームが短く告げる。それが合図。まず、カームから扉の奥へと入り、そして消える。それを機に、次々とメンバーがその扉の奥へと消えていく。そして、彼らが全て消えた後、会長室の扉はひとりでに閉まる。慌ててレオリオが再び扉を開くも、その先は普段見慣れていた協会の廊下であった。

「……いつちまつたなあ」

「ええ。随分と楽しそうでしたね」

「あのジイさん、大丈夫か？」

「心配いりませんよ。向こうでもどうせ張り切つて楽しむでしょう。それより、残された我々の方が大変ですからね」

「はあ…ジンさんも相変わらず無茶ぶりが過ぎる。あの人の弟子としては勘弁して貰いたいところだ」

「そう言うなよカイト。ソレ言うならオレが一番面倒くせえんだからな。ま、アイツらの心配はいらねえって事だ。気持ち切り替えて、今後の事打ち合わせすつか」

そう告げて、新会長であるレオリオは彼らと今後の打ち合わせを始める。彼は本気で心配などしていない。何故なら、彼らは自分など及びもつかない様な強者だからであ

り、ハンターだからだ。それにどうせすぐ会える。その確信があるからこそ、レオリオは彼らを快く送り出した。

——向こうでも楽しんでこいよ。オレはこつちで待つてやるからな。

珍獣・怪獣、財宝・秘宝、魔境・秘境。未知という魔力。その言葉に魅せられた奴等がいる。人は、彼らをハンターと呼ぶ。

そして、そのハンターすらも容易に行くことができない、前人未踏の大魔境がある。そして、そこに挑む大馬鹿野郎達がいる。

彼らは正しくハンターである。

今、彼らは“未知”へと挑む――

外伝

外伝 1、泉のほとりにて

人間同士の念能力者の戦闘は、お互いの能力を警戒しつつ、読み合いながらそれぞれの能力が刺さらない様に立ち回る。また、自分の能力をいかに刺すかに力を入れる。それが念戦闘の醍醐味であり、楽しさでもある。

しかし、一定のレベルを超えた者は、それぞれの能力などが効かなくなってくる。例えば操作系は人間相手には刺されれば無敵だが、オーラが一定以上を超えてくると、その巨大で濃厚なオーラが能力を緩和する。一概には言えないが、低レベルの能力などはまるで効果がないという事態が発生する。

無論、喰らった者が無抵抗ならば刺さるが、意識をすれば防げるのだ。所謂「特殊能力」とも言える固有の念能力は、その値にもよるが、強者同士の戦闘においてはスパイス程度のものとなる。よって、より単純なオーラ量、肉体の強度、純粋な技の冴えなど

が人間同士の戦闘よりも重視される。

ゾバエの固有能力である「ハ・ウ・エ・ス・ト・オ・ブ・ラ・イ・フ生命の収穫」などは人間には不可避の絶望的な能力ではあるが、これが彼と同等の強者相手だと効果が微々たるものになるか、または完全にレジストされる。最後の闘いの時にゴン達が彼の前に立つ資格がないと言われたのは、そういう事だ。

これは、この暗黒大陸を旅する上で必須のスキルであり、いちいち敵の能力にハマってたら生命がいくつあっても足りない。よって、必ず習得しなければならない人権スキルの一つと言える。それは体質でカバーする者もいれば、特殊なオーラで完全レジストする場合もあるので一概には言えないが、そういう事である。

「——無論、何事にも例外はある。いや、むしろ例外だらけだが、基本的にはそうだ。だからこそ、それだけは全員習得しなければならん。そうでなければここから出て探索など自殺行為だからな。みっちり叩きこんでやるからそのつもりでいてほしい。というか、まだまだ他にも最低限の人権スキルが山のようにあるから、君達はしばらくは修行の日々だな」

静かな湖畔のほとりで、豪華なテーブルに腰掛けながら優雅にコーヒーを片手に講義

を行うマファイアスタイルの男。それを聞きながら渋い顔をする一同。

「ねエ、カーム…ちよつと探索するぐらいは…ダメ？」

「別にいいが…出たら速攻でヤバい能力持ちの怪物に取り囲まれて抵抗出来ないまま喰われるのがオチだな。私の記憶が確かなら、この辺だと石化レーザーを乱発する蠍とか、卵を体内に転写してきて寄生してくる蟲とか、周囲を真空状態にして来るガーゴイルみたいな奴がかなりの頻度で居たはずだ」

「ゲ…何だその凶悪能力…」

「で、それで済めばまだいい方で、1番ヤバいのは巨人な。コレに遭遇したらマジで確定で死ぬと思っただ方がいい」

「……そんなにヤバいの？」

「ああ、ヤバい。まずそれぞれが私レベル以上に強い。何よりも権能持ちだ」

「その権能つてのは、オレ達のと違うのか？」

「そうですね。念能力の先。概念とも呼べる特殊能力ですよ、ジンさん。先程の話から矛盾しますが、オーラで打ち消す事すら不可能な程の特殊能力。まさに「神」の能力とも言える能力なんです。超越種同士では、基本的にこれを警戒しながら闘う事になります。世界樹のドラゴンとかいくつも権能を持ってました。それらはまさに必殺。人間

が喰らったらひとたまりも無いですね。まあ、彼ら同士ではそれでも倒せないから超越種なんですけどね。ゾバエで言えば眷属化ウィルスかな？ 私には効かないけど」

「頭痛くなるわね……しばらくはここで修行するしかないか」

「そうよ。貴方達もしばらくはゆっくりしていきなさい。ここは唯一のセーフティゾーンなんだからね」

「アレトウーサ、カームに近づかないで！」

「ハイハイ」

そう、ここは神の泉。泉の精霊アレトウーサが守護する聖域である。以前カームが訪れた時よりも面積は広がっており、泉の背後には豪華な洋館が立ち並ぶ。

彼らが訪れた時、彼女は大層喜んだ。そして、事情を聞いてならばここでしばらく修行してはどうかと提案してきたのだ。人数的に手狭だったので、彼女自ら空間を拡張し、その後、カームがついでに洋館などを創造した。それによって、この空間は暗黒大陸にも関わらずまるで豪華な避暑地の別荘のような雰囲気の様変わりしていた。最初は遠慮していたカームだったが、ここを創造した神も気が遠くなるほど永い年月放置しているから好きにしていいたいと言われ、実際に好き勝手に手を加えたのである。

「しかし、星の意志に完璧に飲まれないでここまで来れるとは驚いたわ。貴方もここ数年の中で一番のイイ男ね」

シナを作りながら彼女がカームに告げる。しかし、カームは苦々しい表情へと変わる。

「君ね…前来た時、ここの時間設定おかしかつたでしょ。お陰で私もしなくてもいい絶望をしたんだが？」

「あら？ そうだったかしら？ まあ、ここって滅多に訪問客いないから時間変えとかないと退屈なのよー。今は普通に戻してるからいいでしょ？」

「……………」

恨みがましい目でアレトウーサを見つめるカーム。彼も、いつの間にか気安い口調になつていふことに、自身ですら気付いていない。その様子を見ながら警戒を強めるビスケとカルト、そしてクラピカ。アレトウーサはそれに気付いており、ワザとそういう態度をとって揶揄っている。

「なあ、それよりさー。そろそろメシにしようぜ。オレ腹減ったよ」

「ああ、もうそんな時間か。じゃあ作るよ。今日はサソリのしゃぶしゃぶとガーゴイルのモモ肉の炒め煮だな」

「……それ、どつかで聞いた食材だな……」

「味は保証しよう。というか絶品だぞ。この辺の植物から採れた調味料も信じられないほど美味いからな」

「ふむ……馳走になるぞ」

「なあ、王サマはいつまでオレ達といんだよ。王目指して旅立つんじゃ無かったのか？」
「貴様等には前にも言ったと思うが。余はまだまだ『王』として未熟。故に学ばねばならん。幸い此奴のそばには学ぶべき事が山ほど眠っている。むやみやたらと彷徨って無駄な時間を過ごすよりもよほど身になるだろう」

「とかいって、食いもん釣られてんじゃねーだらろーな」

「まあまあ、キルア。メルエムも一緒にいてくれるのは心強いし、いいことじゃん」

「ゴンは寛大過ぎるんだよ。基本的にコイツはオレ達とは相容れない奴なんだからな」

「それを言うなら貴様等もそうだろう。魔王とかいう訳の分からん存在など、余よりもよほど人間とは相容れんのではないか？」

「んだと！ やんのかコラ」

「キルア、そこまでにしておけ」

「クラピカ！ コイツがケンカ売ってきたんだぞ！」

「どっちもどっちだろう。私から言わせれば似たようなモノだ。メルエムがまだ共に居たいというなら、居ても良いじゃないか。私は一向に構わんぞ」

「そうだよ。折角向こうから一緒に来たんだから、修行の時ぐらいは一緒にいてもいいと思うよ」

「チツ。わーったよ！ とりあえずメシ食うか」

全員が食卓を囲み、豪華な食事を堪能する。カームが次元収納の中から取り出した獲物が中心のメニューであるが、その内容は正にこの世のモノとは思えないほどの絶品である。暗黒大陸の奥地の生物などは、その生命力はメビウス湖内の家畜などとは比較にならない。当然寄生虫や病原菌の類いはカームが調理中に除いているため、安心して食すことができる。その食事効果は、人間基準では僅かに寿命が伸びたり、肉体強度が上がったりする程の効果が見込める。また、狩り以外にも採取も行っており、カームが毒味した後ではあるが、その野菜や穀物も沿岸のモノと同じぐらいの激レアアイテムである。具体的には「ニトロ米」等とほぼ同じ効果がある。

そんなモノを毎回食べ、水を飲む。水は当然、湖の水である。それはただの水では無く、若返りの効果がある水だ。ハッキリ言つてコレをやつてるだけでレベルアップするのも当然なメニューである。

「いや、やつぱオメーと来て良かったぜ！ 修行しなきゃならねえのはアレだが、コレばつかりは感謝してるぜ」

「ウム。ワシはこの歳で美食に目覚めるとは思わなんだぞ」

「えもいえぬ極上の美味……天より授かりし程の食材！ これぞ余が求めていたモノよ！」

そんなシロモノをネテロやジンなどもモリモリ食べ、彼らも人間の枠を急速に超え始めていた。当然メルエムも食えば食うほどレベルアップするため、特にこの3人は劇的に成長していた。

食事の後は、修行タイム。先ほどカームが述べていたオーラ技術の応用。人権スキルの獲得である。敵の特殊能力の妨害、またはレジスト。それが最低限レベルになるまで修行を行う。幸い、オーラ量は人間比較では全員極限に近いほどある。そのためメモリ

などは心配せずともよい。むしろ大多数のメンバーが有り余っている。カームは昔、メモリ不足になる事や、人間性を失うのでは、などと危惧していた為、これを忌避していた（彼は自分の体質で解決できることもあった）が、今はこれらがむしろ基本スキルであるし、それができるのがスタートラインと正確に理解していたので、彼らにこの修行を推奨した。

方法は簡単。カームが様々な適応した念能力をぶつけまくり、それに対処していくというスパルタ方式だ。当然ながら人間組は苦戦した。ビスケとカルト、メルエム、魔王達はわりと簡単にクリアしていた。彼らは元から体質としてもレジストできる能力がある為であるし、また、才能が極端に高いためでもある。

そんなこんなで、主にこの修行を苦しんだのはジン、ネテロである。特に苦労していたのがネテロだ。しかし、彼も流石にプライドがあつたらしく、気合いで徐々にできるようになっていた。

また、それ以外にも基本的な人権スキルの修行を行う。つまり、復元能力の獲得や、ある程度の環境でも生命活動を維持できる能力の発現である。コレについてはそれこそ人権スキルである。多少の損傷で致命傷を負っていたら、それこそあつという間にやられるからであり、それを克服しなければ話にならない。暗黒大陸を自由に巡りたいなら

ば必須技能である。なので、カームは彼らに「自己貪食」^{オートファジー}の取得を推奨した。基本から復元能力を持っている者はコレに近い能力の取得に努め、復元能力を持たない者は復元能力の獲得に努めた。

これについては、あくまで推奨するだけであり、能力としての発現はそれぞれの自由裁量に任せた。よって、個性豊かな能力をそれぞれ考え、修行を行っていた。

例えば、ゴン。彼は元から回復能力持ちである。また、彼の肉体は魔王準拠なので、後は環境適応だけである。彼は現在も「進化する変身」^{ストロングゴン}を使用しており、ソレを更に進化させて適応能力を身につけるように、過酷な環境下でも適応できるように修行を始めた。例え火の中の水の中だろうが生命活動が維持できるようにと、自らをいじめ抜いていた。既存の能力に更に「自己貪食」^{オートファジー}と復元能力を追加したイメージである。

クラピカはまた特殊で、彼女（そう認識しろと言われた）の根源は鎖である。彼女自身鎖へと変じる事で、ありとあらゆる不具合を弾く能力となった。彼女に至っては頭を吹っ飛ばされてもそこから鎖が生えて復元できると言うトンデモ性能である。この修行では彼女が一番完成していると言える。

キルアも同じ結論に至ったようで、彼は苦勞の末、自身の身の全てを雷に転じること、ありとあらゆる不具合を弾く事に成功した。彼はゾバエとの戦闘経験から、物理無

効の厄介さが身にしてみていた。彼曰く、この形態は「雷神モード」と呼ぶらしい。攻防一体の恐ろしい能力だ。この雷が権能レベルまで威力が上がれば、彼は本当に雷神の域へと至れるだろう。

メルエムは、また独特である。彼は元から護衛軍の能力を持っている。つまり、シャウアプフの能力やネフェルピトの能力、そしてモントウトウユピーの能力。それを進化させれば良い。つまり、分裂し、復元し、治療する。これを短時間で行えるような修行だ。産まれて間もない状態で、恐ろしい強敵ばかりの戦闘経験を強いられた彼は、自らの存在について強烈な危機感を持たざるを得なかった。もつと力を。最低限抵抗できる力を。一つの種としての突端に類する彼であったが、それでもまだまだ世界は広がった。より強く、より極みを目指して、彼は邁進する。産まれながらの王として生まれてきた彼ではあるが、まだまだ「王」としてのスタートラインにすら立てていない。だから、その最低限を埋めるべく、貪欲に自らを鍛え上げる。幸い、近くに参考になる者達がたくさん居る。いずれは彼らをすら追い抜き、追い越し、この楽園の「王」を目指す。

そうして、彼は自由自在にその身を分裂させ、そして、復元させる能力を身につけた。癪なことではあるが、彼もまたゾバエの能力をその身でイヤと言うほど体感したため、先達の王に倣い、ソレを自由自在にできるように訓練したのである。それは、彼の資質

からすれば容易い、とまでは言わないが、不可能な事ではない。人間とはまた別種の肉体と才能の極みを持つ彼だからこそできることである。

カルトとビスケは、カームと同じ体質にしてもらっている。これは、彼の基本的な肉体的能と同種である。つまり、ありとあらゆる不具合に適應した肉体プラス、ブリオンの因子が混じったものである。さすがにカームの「完全適合」は再現不可能だったが、「地獄を見る男」は標準機能として備わっている。つまり、復元能力については問題ない。あとは、環境適應だが、そもそも基本スペックがかなりの不具合に適應できているので、後は未知の能力に対応するだけである。だからこそ、彼女達はその体質だけに頼らない、オーラ技術でのレジスト訓練に力を入れていた。そして、それは一定の成果を上げていた。

ジンは、なんだかんだ言って天才である。彼は強化系だ。しかし、その他の系統も満遍なく鍛えている。それこそ極限まで。彼の念能力は少し特殊で、「自身の意を押し通す能力」である。つまり、例えば彼が「右ストレートでぶつ飛ばす」と強い意志をもつて思つて行動したなら、それが結果としてほぼ実現する。それは様々な条件や要因はあれど、危機的状況や絶対に負けられない状況の時などに強く発揮される。それが、彼の能力、「勝負師の魂」である。能力がふわっとしすぎていて、念能力的にどうなんだと思

わなくても無いが、それが彼の強さの秘訣でもある。圧倒的な実力差があれども、彼の攻撃をちよくちよく避けられないのはそういうことだ。彼の戦闘技術も相まって、念能力者同士の戦闘ではかなり強力な能力であろう。また、それは戦闘以外でも稀に発揮することもできるらしく、結果として言えば大変強力な能力だ。まだまだ人間レベルではあるが、この能力が更に発展していけば、あるいは『権能』とも言えるほどの能力に進化するだろうという期待が持てるものである。

さて、そのジンは彼の天才性を遺憾なく発揮し、カームの説明のさわりを聞いただけで、超越者同士の戦闘の概要が明確に想像できたらしい。そして、そのために自身に必要な事、足りないことがハッキリと見えたらしく、しばらくソレを実現するために必要な事を冥想しながら考察していた。そして、やがて立ち上がり、その場で訓練を始めた。その行動に迷いは無く、カームから見ても最短で、無駄が無い訓練内容であり、彼は放つておいてもそのうち最低限は直ぐにクリアできるだろうという期待がもてた。

最後にネテロ。彼はまごう事なき人類最強である。しかし、最強であるが、能力に偏りがありすぎた。彼は武術家でもあるため、そこに傾倒しすぎるキライがあつた。だからこそ、その型を1から崩し、再び積み上げることに苦労していた。彼は、自分がかなり時間が掛かることをカームに申告した。また1から鍛え直す。そのために、かなり

時間が掛かってしまうだろうという事も正直に告げた。

その要望を受け、カームは彼の為に神の泉内に別の平行世界の部屋を創造し、そこにネテロを放り込んだ。大量の食料を持たせて。その空間とは、カーム達の居る場所とは時間の進み方がまるで違うように設定してある。具体的には100倍ほど。ついでに重力10倍かつ酸素濃度も高高度山脈並みに薄くしてある。つまり、分かりやすく言えば精神と時の部屋である。そこで3年も修行すれば問題ないだろうということで、彼は哀れにも問答無用で放り込まれた。その際、彼は道連れ、もとい対戦相手が必要と主張し、ジンを百式で捕まえ、無理矢理引っ張り込んでそのまま異空間へと消えた。10日もあれば約1000日。つまり3年である。カーム達は10日ちよい過ぎぐらいに迎えに行くことを約束して、後は放置した。当然、何日かに一回はカームが大量の食料を投下していたが、彼らはその貴重な食料をどうにか食いつなぎ、修行に励む訳である。無論、水に関しては若返りの水があるため問題ない、というかそれだけでも生存が可能である。なので、後は彼らの気力次第である。カームは日数が立つごとに重力を徐々に追加していき、最終的には100倍まで引き上げた。それによって必ずや彼らがレベルアップすると信じて。

一方、問答無用で放り込まれたネテロは、最初は呆然としていたが、やがてのろのろ

と自分の修行に取り組み始めた。流石に修行が最低限もできてなくて、もう3年追加とか言われたらたまったものではない。文字通り死ぬ気で大昔に取り組んだ修行を思い出しながら狂気に近い訓練を始めようとした。

しかし、同時に引つ張り込まれたジンはそれ以上にたまったものではない。激怒してネテロに対して激しいケンカをふっかけたが、結局千日手へと移行し、引き分けに終わった。彼らは思った。必ずこの中でコイツよりも強くなって、この中に居る間に絶対に完膚なきまでにぶちのめしてやろうと。結果として、2人に入った方が彼らの為には良かったと言える。

——10日後。

「テメーカーム!! このクソジジイと3年も閉じ込めやがって!!! ぶっ飛ばすぞ!!」
「……………」

ゲートを開いた瞬間襲ってくる光輝く「百式観音」及びジンの聖なる極大念弾。ソレをそれぞれ時を止めて片手で受け止め、弾き返す。その感触から、彼らが凄まじいレベルアップを果たしたことをその身で感じ取った。その速度は速度と言う概念を超越し、意識の間隙に割り込む。武術では「先」や「先の先」という概念がある。相手の行動の予兆を制し、その前に自らの攻撃を割り込ませる技術である。2人とも、ありとあらゆる速度を超えて攻撃を相手に先にぶち込むという概念的な攻撃方法を獲得していた。しかもその威力は尋常では無く高い。例えるなら、メルエム相手にも致命的なダメージを与えるほどである。しかも速度的に分裂する前に攻撃をぶち込める。恐ろしい修煉度である。そして、ジンもネテロも単発で終わるほど柔な精神力では無い。刹那の間は何十、何百、何千もの凄まじい攻撃がカームを襲う。それは最早人類の目では追いきれぬほどの速度である。しかし、カームも凡百の相手ではない。全てを悉く受け止め、時には流し、時には跳ね返した。その間、カームも様々な権能に近い念能力をぶち込んだが、それでも止まらなかつた。そして、一定時間、恐ろしい程の連続攻撃を続けた後、漸く両者の攻撃が止まる。

「ハアツ、ハアツ……チツ、やっぱりバケもんだな。テメーはよ」

「おのれ……まだ届かんか……」

「いや、驚きましたね。まさか2人とも3年程度で『聖光気』を掴むとは……最早それだけで十分以上ですよ。それ抜きにしてもレジスト能力も身についていますし。後は復元も問題なさそうですね」

「……………テメーをビックリさせようと思ったが、まだまだ道はなげーな。このクソジジイとの鍛錬でボコボコになるのを繰り返してりや、回復能力なんざ嫌でも身につくわ。てか何だあの重力は！ 嫌がらせも良いとこだろ!!」

「ふん。お主には通じんかったが、『聖光気』を身につけたオレは、もう以前のオレとは違うぞ。最早オレの【阿修羅観音】は以前の【百式観音】とは次元が違うからな。どんな奴が相手だろうが一方的にボコボコにしてやる。複数相手でも問題ないぞ」

そう、ネテロは【百式観音】の数を増やしていた。同時に3体の光り輝く観音が顕現している。コレによって、以前の複数相手が苦手という弱点が克服されていた。恐ろしい制御力である。また、彼もゾバエにやられたことや、ジン相手にボコボコにされたことから、肉体の復元という課題も克服していた。最低限ではあるが、多少の損傷ならば問題なく回復できる。『聖光気』持ちならば標準機能として備わってもいるし、そこに

甘んじず、彼らは自らのオーラでもできるように修練を行っていた。

ジンも恐ろしい程に自らの能力を進化させていた。その自らの意を通す能力は、最早概念に近い程まで昇華されていた。つまり、「当たれ」と思えば、どんな状況でも確実に当たる。例えネテロの観音にボコボコにされていようが、彼が念弾を放てば、それが確実にネテロを捉える。途中で妨害しようにも、なぜかそれがすり抜けて確実に当たるのだから恐ろしい。いよいよ人間の能力の枠を超えてきていると言える。

「お二人とも本当に頑張りましたね。他のメンバーも大丈夫そうですし、では、そろそろ旅立つとしますか。流石にお疲れでしょうから1日ぐらいはゆっくりしてくださいね」

「はー！ ホントにクソ長かった！ もうオレは二度とごめんだからな!!!」

「そりゃオレの台詞だ！ ……流石に疲れたからオレはちよつと休ませて貰うぜ。だがまあ…収穫はあった。ありがとよ」

「ええ、ゆっくりお休みください。ここからが本番ですからね」

「オレも休ませてもらうぜ……とところでよ、聞いて良いのかどうか分かんが…アレ、何してんだ？」

泉の向こう側で、血で血を洗うようなバトルが繰り広げられている。具体的に言えば、カルトとビスケとクラピカがガチバトルを行っているのだ。

「あくそれはですね……」

「なんでもカームと一緒に寝る権利だよ。一緒に寝るだけでなんであんなにガチつてるのかしらねーけど」

キルアがカームの代わりに説明するが、本人も理由は分かっていないらしい。ジンはマジかと言う顔をしながら後ろに居たゴンの顔を見るが、ゴンが首を振り唇に人差し指を当てる。それを見て、なんとも言えない気持ちになったジンは、一言、「そうか……ま、頑張れやカーム」と告げて、自分の部屋に引っ込んだ。

「おいおい、なんでカームが頑張るんだよ。ただ寝るだけだろ？」

「キルア……まあ、キルアにもそのうち分かるよ」

「オメーは分かるのかよ！ 教えろよ」

しつこく絡み始めたキルアを上手くいなしながら、ゴンはメルエムとの戦闘の調整に

入った。キルアも誘って。キルアもそこまで興味があるわけではないので、そのまま戦闘に集中し始め、その話はうやむやになった。

——ちなみに、今回の勝利者はクラピカであった。

翌朝。艶々になったクラピカと、若干げっそりしたカームが部屋から現れ、朝食となった。毎回相手が変わるが、それは日々のガチバトルの勝利者のご褒美である。少し前まではカルトとビスケの2人のガチバトルだったが、いつの間にかクラピカが2人を説得して参戦していた。そのため、三つ巴になり、より戦闘は激化した。しかし、カームも訓練になつて以上、止めるのもどうかと思つたし、モチベーションが上がるなら、とそれを甘んじて受け入れていた。尚、アレトウーサも参戦しようとしたが、それは流石に3人が協力して全力で阻止した。

全員で久しぶりの朝食を食べる。本日のメニューはジン達の修行完了を記念して豪

華飯だ。熱を操る豹型の怪物のステーキと、瑠璃色の甲羅を持つ、非常に硬い亀形の魔物の中身をじっくりコトコト煮たスープ。権能もちの毒蛇の卵（毒抜き済）のゆで卵。近寄ると絶対零度の冷気を広範囲に発するキャベツ型植物のコールスローサラダ、そして、その近くに生育していた黒く輝く米の米粉パンである。いずれも恐ろしい程の美味であり、その天上を感じさせる味に一同は言葉を失う。そして、あつという間に食卓から食べ物が消えた。

「…オレもう、この大陸好きだわ」

「…余も同意しよう。やはり余はここに來るべくして來たようだ」

「しかし、ワシ達じゃ材料が手に入らんど。流星に寄生虫対策とか毒味とかは面倒じゃしの」

キルアとメルエムが感想を言い、ジジイ言葉に戻ったネテロがそれに突っ込む。

「まあ、オレは何となくカームのやり方見て覚えたから、できるかもな。大体食えそうなのは分かるしよ」

「え？ ジンって料理できるの？」

「おう！ オレは興味あることはソツコー覚えるタチでな。料理もその一環だぜ。つか、ハンターなら覚えとけって話だが」

「う〃……まあ、そうだね。前メンチにも言われた」

ゴンとジンが親子の会話をする。

「コレは精がつきそうだな！ カーム」

「ちつ…明日はアタシがもらうからね」

「次は僕。それは絶対」

いい笑顔をしたクラピカとビスケとカルトがそれぞれ笑顔で牽制しあう。本日の争いも熾烈な事になりそうだ。ちなみにカルトは肉体年齢はあれから変わらず18歳のままである。だから何というわけではないが。

ひとしきり朝食を終え、彼らはいよいよ旅立つ準備を始める。まずはどこに向かうか、である。闇雲に探索するよりも、何か目標があった方がいい。よって今後の方針を

全員で話し合うのだ。

そこで出たのは、

- ・ゴンの母親探し。
- ・ドンⅡフリークスの搜索。
- ・ゾバエ完全討伐。

以上の3つである。全員で熱い議論を交わした結果、ゴンの母親の搜索を第一優先と
言うことで話がまとまった。彼女については情報がなきすぎて誰も居場所を知らない。
いきなり頓挫する計画。これはドンⅡフリークス搜索についても同じ事が言えるが、か
くなる上は手当たり次第に放浪すると言う案が出始めたとき、それまで黙っていたジン
がおもむろに意見を述べ始めた。

「南だ。目当ては南、それもできれば南西の方が良い」

「む……何故、そうだと?」

「アイツは仮にも魔王だ。だが、奴も奴でメビウス湖内に入ろうとしたと思われる痕跡
を掴んだ。つい最近な」

「…ワシや全然知らなかったぞ?」

「たりめーだ。ごくごく小さな新聞記事だったからな。南西の海域が一時期大荒れしてやべー嵐が発生したとな。ただそれだけだ。だが、これは色々繋がる事件でな。メルエムの事にも関わるが、コイツの母親は南西の彼方の方角から流れ着いたんだろ？ 大型のキメラアントは楽園には居なかった。ならば何処から来たか……暗黒大陸南西の地、またはその間に存在する諸島のどつかだろう。恐らくそれが誰かさんと門番の戦闘の余波で崩壊して、流れ着いたってトコだろ」

「それは……それが、イヴリスって事？」

「ああ。オレはそう思うぜ。根拠も薄いけど、闇雲に探すよかいだろ。南にはゾバエもいるだろうしな」

「……まあ、ここから出たら何らかの接触があるかもしれないな。とりあえず、南だとしよう。そこで問題がある。ここは北なんだ」

「[[[………]]」

カームが割と深刻な事を言う。そう。ここはブリオン生息地の奥の奥。世界樹の手前。つまり北だ。ジンが言っているのは南。真反対である。その距離は絶望的な程度遠く、長い。

「なくにウンザリした顔してんだよ！　むしろ回り道こそ楽しいんじゃないか！　南に行くまでに大冒険がオレ達を待ってるだろ。それを楽しみながら行きやいいんだよ」

「あ、南なら私が送ろうか？」

ジンが珍しく割といい事を言った直後に、話を聞いていたアレトウーサが被せてきた。

「……オメーなあ……で？　できんのか？」

「ええ。『神の泉』は様々な場所に存在してて、それぞれを私の姉妹が管理してるのよ。丁度貴方達の言うメビウス湖挟んで、南西奥地にもあるわ。確かあそこはステュクスだったかしらね」

「マジ？　そりゃいいな。だが、向こうは大丈夫か？」

「うーん……聞いてみる」

そう言って泉に向かうと、彼女はその水面に呼びかけると、やがて水面が揺れて美しい女性の姿を映し出した。

『…んもくくなくによー。アタシは寝てたんですけど〜』

「久しぶりね、ステュクス。アレトウーサよ」

『……ほくん、珍しいわね〜…貴女が連絡くれるなんて何千年ぶりかしら〜』

「私から貴女にお願いがあつてね。ヒトの英雄達が私のトコに滞在中なんだけど、彼らの目的地はそつちが近いから送りたいの。いいかしら?」

『……………今、なんて?』

「そつちに何人か送りたいの」

『いや、それは分かったけどその前! もしかして…ヒトの英雄とか言った!』

「ええ、そうよ。3人が神気使いで、1人は星の意志すら制御してる英雄ね。魔王の系譜とか亜人種とかもいるけど、英雄クラスの純粋なヒトも何名かいるわ」

『きゃ』

「きゃ〜」

『ギターー♪——○(≡▽≡)○——♪——!!!』 さあ、送って! 今すぐ!! ハリーハリーハリー!!!』

「落ち着け。ドン引きされるわよ…ま、そういうわけでよろしく。全部で9人ね」

「あ! ちよつと待つて! 片付けるから!! 空間の拡張もしなきゃ…あー! 全然英雄迎える状態じゃない!! 急いでやんなきゃ…じゃ、アレトウーサ、1時間ぐらいし

たら送ってね！」

そう言つて泉の向こうの女性は消えていった。消える間にアレトウーサが「時間設定変えときなさいよ」と忠告していたので大丈夫とは思うが、それ以前に一同に果てしなく不安が募る。大丈夫なんだろうか。

「ま、私達は基本ヒマしてるから嬉しいんじゃない？ 向こうでも少し滞在してあげてね」

と、彼女は締めくくった。1時間後、再び泉の前に全員が立つ。

「じゃあ、またしばしのお別れね。貴方は自分の願いを叶えた。そしてこれから再び立つ。数奇な運命を持つ人よ。貴方の旅は、貴方にとって得難いものになるでしょう。それは世界にとつても同じ。だから、貴方はこれからを楽しみなさい。疲れたら戻ってきていいからね」

「ああ。ありがとう、アレトウーサ。もうマーカーも打ち込んだからいつでも来れる。また厄介になるかもしれないが、ひとまずお別れだ。……世話になったな」

「ええ……また逢えるのを楽しみにしてるわ。じゃあ、お行きなさい」

それぞれが彼女に礼を言い、泉に向かって歩き出す一同。彼らは泉の上を歩き、霧に包まれ、やがて消えていく。無事に旅立ったようだ。

「ふふ……ヒトの英雄達。これが貴方達の始まり。貴方達はこれからどんな神話を紡ぐかしらね……また逢った時はその英雄譚をたっぷり聞かせてね」

外伝2、新たな世界

「——かつて起きた『魔王侵攻』カタストロフイは、私達に大きな傷を与えました。世界が崩壊する、その直前まで人類は追い詰められました。そして、かつての“救世主”と、英雄達により人類は辛うじて救われました。それはギリギリの戦いであつたと、若年の私達ですら知っています。あの戦いに勝てたのは、人類が絶望に屈せず希望を持ち続けたからに他なりません。しかし、私達を救つた“救世主”はもういない。だからこそ、私達は自分の足で立つて歩かなければなりません。一步一步ですが、その歩を進め、よりよい世界を築く。それこそが我々の使命です。この学園に希望をもって入学した皆さん。貴方はエリート中のエリートでしょう。ですが、それに驕らず、正しい心をもって困難に立ち向かう事のできる人材だと私は確信しています。貴方達はこの学園で念能力を身に付け、更なる力を手に入れる。大きな力には責任が伴う。それはかつての“救世主”や、現理事長が身をもって示しました。貴方達の未来は明るい。その力を世界の為に

遺憾なく發揮して欲しいと願っています。入学、おめでとう。私達はあなた方を歓迎します。——生徒会代表、アルカールゾルディック」

深々と頭を下げ、その後颯爽と壇上を降りた生徒会長。その姿に新入生達は感動や、憧憬の眼差しを一樣に送っていた。黒髪のロングを腰辺りまで伸ばし、前髪は奇妙な力チューシヤを付けている。それは彼女のトレードマークであり、畏怖の対象であった。見るものが見れば分かるその威容。いや、この会場にいる新入生はありとあらゆるエリートであり、それが分からない者には入学資格はない。

ここは『聖地』スワルダニシティのお膝元であり、「人類の守護者」レオリオパラディナイト直轄のハンター学園スワルダニシティ中央校。同様の学園が世界各地に設立されてはいるが、以前のハンター試験並の倍率と厳しさを保つこの学園は、正に世界屈指の最高の教育機関である。

受験生は、世界各地のエリートが集まって熾烈な凌ぎ合いを行い、それでも勝ち抜いたエリート中のエリートだ。彼らは単に勉強が得意なだけではない。心、技、体全てがエリートなのだ。この学園には年齢制限などはない。よって年齢層も若年が多いと言えど、成人した者も少なくはない。新入生にして百戦錬磨の猛者の様な雰囲気を出す者も少なからず存在する。

そんな彼らが、代表挨拶をした成人前の女性に圧倒されていた。

アレは敵わない、と。そして、一生徒である彼女を固めるメンツにも同様の気配を感じ取り、緩みかけた気を引き締める。やはり、トップになるには相当な努力が必要で、自分はまだまだである。だからこそ、必ずやあの域に至つてみせると決意を固めた。

彼女のスピーチは、短いとも言えども新入生達に絶大な効果を発揮した。彼らの学園生活は始まったばかり。過酷な修練と勉強が待っているが、それを乗り越えるモチベーションを得て、希望を持ってそれぞれの教室へと向かった。



「ねーアルカー。あのスピーチ短すぎじゃない?」

生徒会副会長である、桃色のおさげ髪の少女が生徒会室で高そうなソファーに寝転んでダベリながら言う。本日は授業がない。よって、生徒会の面々はこの部屋に集合して新年度の準備をしている。だが、それは建前で、準備などほぼ終わって、ただ駄弁っているだけだ。

「いや、ソフィアさん、会長はアレでいいと思うツス。新入生^{ルーキー}どもは気合い入ってましたし」

答えたのは、茶色の髪色を坊主に近い短さで刈り上げている筋肉質な太眉の青年。名をズシと言う。

「アンタねえ…あんまり甘やかさないでよね。で、アルカはテキトーにやってたんじゃないの？ そこんとこボーなの？」

ズシを無視してダル絡みを続ける少女の名は、ソフィアⅡアンダーソン。言わずと知れたマフィアのボスの系譜であり、直系の娘だ。ジョンの孫に当たる。実力とカリスマから次期ボスとも目される人物だが、本人はアンダーソンの例に漏れず、家を継ぐ気はサラサラ無い。将来は気ままにハンター生活を過ごしたいようだ。生徒会副会長という肩書きも、それを内外にアピールする為である。

「あら、私は私なりに適当にやったつもりなんだけど？」

ズズ…

普段は無視するか躲すアルカだが、今回は珍しく挑発に乗ったようだ。アルカからオーラが滲み出す。それは彼女のイメージに合う、黒く不吉を予感させるオーラ。しか

も、その量は一昔前の中堅ハンターの量を優に超え、上位ハンターのレベルに到達している。

それを間近で感じ取った2人も、慌てはしないが静かに臨戦態勢を整えた。緊張が高まる室内。つ、と冷や汗がソフィアの頬を伝わる。

「……文字通りの意味、って事?」

「ふふっ……どうしたの? 貴女の言う通りじゃない。私はあの場で適当なスピーチをした。それでいい?」

「……ちっ。まあそーいう事にしといてあげるわ。それでこそアルカよね」
「…毎回毎回肝が冷えるツス。勘弁してくださいよ」

3人のオーラが収まり、室内の緊張がほぐれる。いつものやりとり。しかし、勝ち負けで言えばアルカの勝利とも言える。2人も決して弱くはない。原作のゴンレベルの強さはある。しかし、それを一步も二歩も上回るアルカ。その出自にも関わらず、ソフィアやズシを差し置いて生徒会長になれる程の実力者というだけはある。

「乗ったのは向こうよ。私は関係ないわ!」

「いや、それ以前に毎回毎回ケンカ売るのやめたらどうツスカ…」

アピールの為にトップにはなっていないが、ソフィアも十分会長をやる実力者だ。本来彼女は気性が荒い。だからこそ、自分の上に立つに相応しくない者へは容赦しない。誠に面倒くさい人物である。しかし、アルカはそれをいつもサラリと躲している。それがソフィアには心地良くもあり、悔しくもある。いつか超えんとするライバルとして、アルカは良き友である。そのじゃれあい¹に苦言を呈するズシもまた然り。生徒会執行部は、その奇妙な結束によって成り立っている。

彼女達はこの学園の1期生。つまり8年近くの付き合いである。よって、ほぼ幼馴染に近い関係であるからこそその気安さでもある。

「あーなんか面白い事ないかな。卒業要件なんてとつくに満たしてるからさっさとハンター活動したいのにな」

「そつスねー。指定カード25枚はちよつとヌル過ぎるかもしれないツス」

「でしよ〜！ ま、あんなんでもギリギリの奴もいるみたいだから仕方ないんだらうけどねー」

2人が言うのは、G・Iの話である。あれからver. 3. 4まで進化したG・Iは、正式にこの学園の卒業試験に組み込まれている。ちなみに、クリア者はゴン以降は

1チームのみ。相変わらずの難易度である。

「アタシ達もあとちよつとでクリアだったのにな。あのNo. 1のカードの条件がわからな過ぎなのよ！」

「掲示板でも配信でも情報交換禁止ツスからね。書き込んだ瞬間に即BANはヤバイツス」

「卒業までには再挑戦したいわね…あー思い出したら腹立つわ〜！」

言いながらドサリとソファに寝転がるソフィア。

「いやいやソフィアさん。スカートで寝転がったらパンツ見えるツスよ。はしたない」
「このエロガキめ。1mmも思っていない事言うんじゃないわよ。メリルー紅茶お代わり」

メリルと呼ばれた少女が書類仕事から顔を上げて、やれやれという顔をしながらポツトに向かう。この喧騒の中眉一つ動かさず書類を書き上げるメリルも中々の者だ。メリルールチアーノ。アルバイトの1人娘である。

メリルから注がれた紅茶に手を付けながら、今度はズシに絡むソフィア。

「大体アンタもいー加減諦めなさいよね。アンタならよりどりみどりでしょ？」

「ちよつ…ソフィアさん！」

「あつ、ヤベ」

焦りながら、会長をチラ見するズシと、流星にヤバいと思ったソフィア。何を隠そう、彼の想い人はアルカの実姉である。天空闘技場で一方的に伸されてから、彼はカルトにゾッコンであった。そして、8年前のあの日、例の生実況のアーカイブを視聴したときに見た彼女の鮮烈な姿は、彼の純情な心に焼き付いて離れない。それは、あの実況を見た誰もが思ったことではあるが、彼は実際にカルトに会っている為、その想いはより強い。今まで彼がこの女性に囲まれた環境で浮き名一つ流さないのはそのためである。

そして、それはアルカにとってはタブーな話でもある。以前、それについて部外者に言われたときにブチ切れて、その相手を半殺しに処した過去がある。

「ん？ ああ、姉さんの話？ 気にしなくて良いよ。でも、外ではその話はしない方がいいかな」

「そ、そう…アルカはもう大丈夫なの？」

「ええ。私の目標でもある人だからね。それぐらいで怒りはしないから大丈夫よ……というか、私を何だと思ってるの？」

「いや……それは……ねえ」

「……ツスね……」

2人が顔を見合わせる。

その対応にアルカもその笑みを保ちながら青筋を立てる。先ほどよりもヤバげな雰囲気になりつつあったが、メリルがやれやれと口を挟む。

「本当に……お嬢様も奔放なのは結構ですが、機微をもう少しわきまえてくださいませ」

「な、何よメリル！ 保護者面しないでよね！」

「保護者面、というか、保護者同然ですね。私は現当主様トからの嚴命を受けておりますので。私は本来追放されてもおかしくない立場でしたからね。少しでも恩を返したいのですよ」

「ぐぬぬ……でもアタシは絶対に継がないわよ！」

「それはどうでしょうね。ソニー様もそのつもりだったそうですが、現に当主様ですか

らね」

「嫌よ！ 絶対に嫌！ アタシは気ままにハンター生活を楽しみながら世界を巡るって言う野望があるんだからね！」

「存分にその野望を叶えて頂ければと私は切に願っております。その後、御当主という形になるかと思いますので、その間であれば」

「だから！ それが嫌だっつってんでしょ!! そもそもアタシはドンってガラじや無いからね！」

「まあ…そう思いたければそうなんじゃ無いですかね。お嬢様の中では」

2人のやり取りに再び笑みを浮かべながら眺めているアルカ。矛先がそれたことでホツとするズシ。いつもの光景である。

アルカはあれからゾルディックで残された兄と共に徹底的に鍛えた。彼女は狂気とも言える訓練を自ら志願し、己を鍛え上げた。それは偏に彼女の目的の為。誰にも言わない、しかし確固たる信念の元で彼女は動いていた。

ピピピピピ…

そんな生徒会室で、電子音が響く。それは、生徒会室に据え付けられた専用回線。何らかのトラブルが授業外で起こったときに、生徒会の面々は対応を任されている。

「げげ…まあた新入生トラブル？」

「ああ、いつものことツスね。多分寮でイキったバカが騒いでるってとこツスよ」

メリルが何も言わず出て、話を聞く。しばらくして、彼女は了解の意を告げ、電話を切る。

「…男子寮の外で、新入生の念能力者2名が暴れているそうです。新入生最強を決めるとか何とか言ってるそうなので、いつものアレです」

「ハア…毎年毎年ホントバカね。で？寮長とか居るんじゃないの？教員は？」

「その…能力者といっても新入生なのでたいしたことは無いから任せる、と」

「それでなんでいつもアタシ達が駆り出されるのよ！理不尽でしょ！」

「まあ、対念能力者への訓練と捉えてるツスね。多分指示したのは師匠ツス」

「しゃーないわね…行ってくるわ」

「そッスね。じゃあ2人で行ってお互いを止めてくるッス」

新入生とはいえども、その年齢層は千差万別。そして、学園入学を果たすほどの人材であるため、その実力は折り紙付きである。稀に、でも無く念能力を既に習得している者が少なからずいる。そして、入学後すぐにそういった輩はマウントを取りたがる。念能力を習得しているなら、習得していない者をあしらうのは簡単だ。そして、新入生の中でも権力者でいようとする。この先の学園生活で、それはアドバンテージになり得るからであり、そうでなくとも権力に酔いしれたいのは人間の性である。アルカが挨拶に言外にそういったことは許さないと伝えはしたが、それでも止まらない奴等は一定数居る。そういった輩を取り締まるための生徒会執行部でもある。豊富な講師陣も勿論止めることは可能だ。しかし、できる限り生徒間で治めることができるようにという方針のため、こうして彼らは駆り出される。

ソフィアがダルそうに体を持ち上げたところで、アルカがそれを片手で押しとどめる。

「待って。それ、久しぶりに私がやろうかな。最近仕事もないしなまってるかもしれないからね。いい？」

「え……ちよ、ちよつと待つて！　それは……」

「何？　何か問題でも？」

「いや、それは……」

流石に躊躇う2人。それは会長への心配では無い。会長と対峙することになるであろう新人生の心配である。ゾルディックの名は伊達では無い。そして、この8年で築き上げられた数々の伝説が、彼女を対処に行かせることを躊躇わせている。

「あ、あのさ、私達が行くから大丈夫だよ……？」

「そうツス！　自分たちで止めてきますから！　何ならそのまま男子寮でそれ以外の奴等も全員分かせてやるツス!!」

「いや、今日はそういう気分なの。だからお願い、そいつらちよーだい？」
「うっ……」

アルカ、必殺のおねだりである。美少女の懇願に、2人もそれ以上言えなくなってしまう。それほどの破壊力がアルカのおねだりにはあつた。彼女がこのおねだりをはじめめた時、下手に逆らえば大惨事になり得る。無論すぐにはならないが、4回が限度であ

る。それ以上断れば恐ろしい事態が起こる、らしい。というのも、断る毎に彼女の圧が高まるからであり、4度目になる前に大抵折れる。その結果、彼女のおねだりを断った猛者が存在しないからではあるが。

2人は長い付き合いからそれを知っており、仕方なく新入生達の冥福を祈りながらアルカに任せようとしたとき、もう一つの電子音が鳴った。

ピピピピピピ…

「あれ、私か。ん〜仕事か…珍しい。最近無かったのにね。じゃあ、私はそっち行くから、新入生の件はお願いね」

そう告げて、さっと身支度をして生徒会室を出るアルカ。その後ろ姿を見送って心なしかホツとしている2人。

「……よかったわね。大惨事にならなくて」

「そツスね…じゃあ行きましょう。舐めた新入生共をボコりに」

「この鬱憤は晴らさせてもらおうわよ…！」

そう言いながら、好戦的なオーラを滲ませて2人も出て行く。結局大惨事になるのは、と残されたメリルは思ったが、いつものことかと開き直り、残った書類に向き合い始めた。いつものこと。世はなべて事も無し、である。



「……おい。遅いぞ」

「ごめんなさい、お兄様。生徒会に詰めていたもので」

「フン……まあいい。乗れ」

校門前に停められたスポーツカーの運転席からそう言って自動扉を開くのは、ゾルディック家の正式な跡継ぎのミルキ。

彼は8年前とは見た目がかなり変わってしまった。具体的には、圧倒的に痩せた。計3人も跡継ぎを失ったゾルディックにおいて、彼は貴重な跡継ぎ候補である。よっ

て、彼は哀れにも祖父や父からシゴキにシゴキまくられた。いずれゾルディックを継ぐ男として、最低限恥ずかしくない程度の教育を受けたのである。そのため、細身に見える彼の身体は完全に引き締まり、また、纏状態から発散されるオーラも並ではない。その鋭い目つきだけは変わらず、しかし、それを見せないようにサングラスを掛けている。その雰囲気は8年前とは大違いである。

傍から見たら、完全な金持ちのイケメンと化していた彼は、女子学生の間ではかなりの有名人であり、仕事の時にアルカをこうして迎えに来る度にキャーキャーと騒がれていた。しかし、彼としてはいまだに2次元にしか興味が無いため完全に無視しているし、何なら鬱陶しいときさえ思っていた。それが彼女たちをよりヒートアップさせているとも知らず。

アルカは、そんな女学生達をその威圧感で退け、優雅に車へと乗り込む。

「女学生達が今日も鬱陶しかったぞ。何とかならないのか？」

「あーそうねー。いつも通り無視して」

「チツ：お前は生徒会長だろ？ 今度から注意しておけ」

「はーいわかりましたー」

「ふん：で、仕事の話だ」

「今日はどんな奴？」

「いつも通りハグレだ。マフィアの残党らしい。カキンが集めていた奴らがまだ残っていたようだな。これが写真な」

「またー？ もうアイツら飽きたー。流星街の奴等の方がいいー」

「そう言うな。貴重な経験値稼ぎになるだろ？」

「私達だけって事はたいしたことない奴等よね…まあいいわ。それでも腹の足しにはなるか」

「そういうことだ。いつも言ってるが油断するなよ」

「誰に向かって言ってるのかしら、お兄様」

「お前にだ。アルカ」

会話を続けながら現場へと向かう。ゾルディックの仕事、それは当然暗殺である。彼らはあれから変わらず暗殺稼業だ。しかし、その相手は少しだけ変化があった。彼らはハンター協会とアンダーソングループと業務提携を行った。新しい世界での彼らの身の振り方として、彼らは主に野良念能力者を狩る。需要はいくらでもある。むしろありすぎて最初は回っていかなかったぐらいだ。一時期は一家総出で毎日のように依頼をこ

なしていた。最近はようやく落ち着いてきたが。

この話は、レオリオが直にククルーマウンテンに赴き、根強く交渉した結果だ。その頃には、レオリオ達も野良念能力者対応に頭を悩ませており、また、いい加減人類の加護を外したいというレオリオの思惑もあって、抑止力を欲していた。ゾルディックとしても、性懲りも無く依頼されるハンター協会関係者の暗殺依頼（特にレオリオ）に頭を悩ませていた。そのため、図らずも両者の思惑が一致した。だからこそ、そのアピールとしてアルカが1期生として学園に在籍しているのだ。

今回のターゲットは、その野良念能力者である。ハンター協会は、念能力者を全て登録制にし、武器携帯と同じ扱いの法律を作成することを世界に提唱した。そして、世界はそれを受け入れた。当然であるが、一般人からすれば太刀打ちできない武力があるとこののは恐怖以外の何物でも無い。よって、世論の突き上げも喰らい、そして実質世界の王であるハンター協会の長からの要請とあって、ほぼ全ての国が了承し、ハンター協会が出した条約を批准した上で法律を新たに作成した。

それでも従わない国や個人はいくらでもある。そこで、ゾルディックの出番である。特に犯罪行為を繰り返すような念能力者の集団や個人相手に彼らは暗殺という形で鉄槌を下す。

無論、現役ハンターにも賞金首ハンターがいるし、アンダーソンからもマファイアなりのやり方で駆逐しているが、実力が特に高い相手や集団相手に対してはゾルディックに頼ることも多い。

今回アルカ達に対応するのは、かつて行われたカキンの王位継承権争いのドサクサに紛れて、うまく粛正から逃げ出したマファイアの残党である。それ以外にも、流星街出身者や、東ゴルドーなどの独裁国家の能力者等を潜入して暗殺する事もある。そして、それらの中で特に難易度の高いミッションはシルバやゼノなどが請け負っている。

「さて………楽しめる相手だと良いわね、お兄様」

「………前から思っているが、オレ達の仕事は暗殺だからな。前みたいに馬鹿正直にやり合おうじゃ無いぞ」

「あら……私はスマートに殺ってるつもりよ？ 自分の修練も兼ねてね」

「………お前の獲物を齧る癖はカルトにそっくりだな」
「嬉しいわ。いつかあの域まで届いてみせるからね」

「そういうことを言いたいんじゃない……」

深い溜め息をついて、ミルキは車を走らせる。これ以上この弟に言っても無駄だと

思ったからだ。彼はアルカの思惑などとづくに見抜いている。狂気のような訓練を超えて、彼女は人類の上位層まで上り詰めている。だが、それでも彼女は上を目指している。あと2〜3年もすれば最上位層へも届くだろう。彼女は在学中も仕事にも積極的に参加し、対人の対応を磨いている。その為、実戦経験で言えば百戦錬磨とも言える。そのモチベーションがどこから来ているのか。それは、彼女が例の場所を目指しているからに他ならない。

7年前、加護を解除した頃に「人類の守護者」レオリオIIパラディナイトは記者会見で暗黒大陸について聞かれたときにこう答えている。

——暗黒大陸？ 行きたい奴は行けば良いんじゃないか？ オレは止めねえぞ。だがな、最低でもオレと渡り合えるか、例の映像で見た「英雄」クラスじゃねーと無様におつ死ぬだけだからな。行きたい奴はそのぐらいの実力もった上で、覚悟をキメて、帰って来ねーつもりで行け。再度言うが、行きたいなら止めねえ。だが、万が一帰ってきて厄災持ち込みでもしやがったら、オレが直々にぶっ潰してやるからそのつもりでな

ソレは、事実上の暗黒大陸渡航解禁宣言である。しかし、彼は暗に条件を付けている。

行きたい奴は行っても良い。ただし、帰つて来ないこと。そして、その基準は最低でも人類最上位であること。つまり、許可はでた。しかし、手段と資格と契約が途方も無く厳しくなっている。そして、8年経つたとは言え、彼らの脳裏には例の災害についての記憶が生々しい。よつて、しばらくは渡航者が出ないものと予測されている。それは非常に正しい。しかし、一部の者は、変わらず目指している。それこそがハンターだからだ。そして、その中にアルカも居るし、想い人に会いたいズシも居るといふことだ。

「あとどれぐらいで届くかしらね……」

と呟くアルカを、ミルキは複雑な気持ちで聞き流す。長兄は死んだ。その経緯も知っている。そして、その長兄を破り、一番の才能を持った弟も、その力故に旅立つた。未だの弟は「英雄」として、彼らに付き従つて同じく旅立つた。残された者は、自分とこの弟のアルカだけである。

本音で言えば止めて欲しい。しかし、その気持ちが若干分かる分、ミルキは強くは言えないでいた。彼もある意味被害者だ。ゾルディックの長い歴史上、最大の存続の危機でもあるため、彼らに大いに期待がのしかかるのは当然である。その重圧をほぼ一人ですべて受けているミルキも、たまに逃げ出したくなる時がある。ここまでやってこれたの

は、兄弟のうち最後に残されたこの弟の存在があつたからだ。忌み子に近い扱いを受け、隔離されていたアルカ。そして、例の事件でその厄災が抜けて、抜け殻になるかと思いきや、確固たる強い意志を持つて修練に取り組みだした。その才能は厄災の影響もあつてか計り知れない程のものだ。そんな弟に流石に兄としての意地を見せんが為ここまでやつてきた。そしてそれは一定以上の成果を彼にもたらしている。

アルカは暗黒大陸を目指している。何故なら、彼女の一番大好きな兄がそこに居るから。そして、自分の大切な半身だつた者の故郷だからだ。

ミルキはそれを分かっているからこそ、止められない。恐らく止めても行くだろう。ならば、せめてそれまでは一緒に過ごしたい。例えそれが仕事上の繋がりしかないとしても。

なぜならば——アルカは彼に残されたこの世界唯一の兄弟だからだ。

「アルカ」

「ん？ なーに？」

「楽しく殺るぞ」

「何当たり前の事言ってるの？　いつもそうでしょ」

「そうだな。その通りだ」

「……あれ？　笑ってる？　珍しい…変なお兄様」

彼らに乗せた車は、新しい世界の道を走っていく。それがこの先どんな結果をもたらすのか、それはまだ誰にも分からない。だが、確かに新しい世界は幕を開けた。そして、彼らが主役となり、新たな物語をこれからも紡いでいく――

外伝3、魔界騒乱

「また来てね！ 絶対よ！ 絶対だからね!!」

「わかった、わかったから…とりあえず行つてきます」

送別会を開かれ、いつの間にかクラッカーまで用意されて涙のお別れとなったステュクスの泉。かれこれここには2週間も滞在することになった。それというのも、ステュクスの引き留めが凄かったからだ。連日盛大なおもてなしを受け、そのため、直ぐに旅立つつもりが中々旅立てず、結局2週間も滞在してしまった。何とか引き留めようとするステュクスを説得し、ようやく旅立てる。それでも必ず立ち寄ることを約束させられた。よっぽど暇だったんだらうなあと思わず同情してしまう一同であった。

いよいよ、暗黒大陸本番。セーフティゾーンはもう無い。

ここからが本当の暗黒大陸だ。

「では、行こう。ステュクスが言うにはここから南へ2000 km程でイヴリスの支配領域に着くらしい。それぞれの身はそれぞれで守るように頼む」

「へっ、ようやくか。腕が鳴るぜ」

「イヴリス、母さん、か」

「強い武人はおるかのう」

一步泉から抜け出すと、そこは広大な山岳地帯が広がっていた。現在の場所はどちらかと言えば断崖絶壁だ。そして、その標高はメビウス湖内のソレとは桁違いの高さである。恐らく成層圏まで届いているのでは無いだろうか。眼下に見える雲は恐ろしいことに色彩豊かだ。明らかに身体に害を与えそうな雰囲気を放っているし、その動きから見ると風速も尋常では無い。同じ惑星とは思えない、むしろ別の星に来たかのような錯

覚を覚える。

「流石のスケールだな。メビウス湖内とは段違いの環境だ」

「……これさあ、南へ行くつてことはこの下越えなきやダメ？」

「んゝ馬鹿正直に行つたらヤベえが、今のオレ達ならなんとでもなんだろ。とりあえず飛んできやいーんじやね？」

「いきなり人外の方法を提示しないで欲しいわね……まあできるけど」

そういうことになった。そして、その雲海を眼下に収めながら飛行する一行。飛び方は様々だ。オーラジェットで飛ぶ者、オーラで翼を具現化して飛ぶ者、“聖光気”で飛行する者など、バリエーション豊かな彼らは、人類とは一線を画している。しかし馬鹿正直に歩いて行けば木星の表層の様な環境下で怪物達と対峙しなければならないので、飛んでいけるなら飛んでいった方が圧倒的に楽ではある。

「ねえ……アレ、何？」

カルトが飛行中にとあるモノを見付けた。

「ふむ…余には蛇…に見えるな。スケールは馬鹿げているが」

メンバーの中で一際視力が良いメルエムが答える。その周囲は針山の様になっており、細長い岩が所狭しと並んでいる。名付けるなら千剣山、と言ったところか。その間を巨大な長い物体が巻き付いている。問題は、ソレが動いていることだ。

「マジか…アレ何メートルあんだ？」

「すごいね、暗黒大陸。でも、アレ、オレ達に気付いたみたいだよ？」

ゴンの言うとおり、その蛇らしき生命体は明らかにこちらにその顔を向け、警戒していた。そのオーラは超越種に近い。恐らくはこの一帯の支配者であることが伺える。

「よし、じゃあ私が討伐してくる」

おもむろにカームが述べ、彼がオーラを戦闘モードに入れる。カームはその経験上、蛇と蟲だけは絶対許さないマンである。そもそも彼の中で敵に発見されたら、それ即ち

戦闘開始の合図である。そして、いざ行こうとしたときにジンからストップが掛かる。

「アホか。ちよつと待てや」

「え？ 何故です？ 見つかつてますよ？」

「いや、ただ見つかったただけだろ？ ありや警戒してるだけだ。これ以上近づけばヤバいな」

「……ここから戦闘回避できます？」

「まあ、見てな。オレに付いてこい。オーラは警戒程度の量な。敵意は含めるなよ」

一行はジンについてそのまま飛行する。すると蛇は警戒するだけで手を出してこない。遠距離専用の能力と思われる蒼白い隕石を周囲に複数出しているが、攻撃してくるまででは無い。ただこちらを見ているだけだ。そして、彼らはそのままその剣の様な山の横を通り過ぎ、蛇と睨み合いながらもソレすら通り過ぎる。横目で見た彼らは密かに驚愕する。その大きさはメートルを超えてキロ単位だ。正確には分かりかねるが、40kmほどあるだろう。昔カームが飲み込まれたワームと長さだけなら同等の大きさである。

そして、彼らはそのエリアを無事脱することができた。

「ホントに回避できましたね…」

「だから言っただろ？ 恐らくアレは産卵期だろうな。いや、既に産卵した後か。眼に当たる部分見りゃ分かるし、遠目に産卵床みてーなのが見えたからな。その時期の蛇は凶暴にはなるが積極的には襲ってこねえ。だから近づかなきゃOKだな」

「マジですか…今まで考えたこと無かったですね」

「オメー前にもそれ聞いたけどよ。良く生きてたな。それで生き残るってのはよっぽどのアホだな」

「いやあ、照れますね」

「褒めてねえよ！ これからはその辺も学べな？」

「ええ。真面目に勉強になります。マジで宜しく願いますね」

翼を作って飛行しているメルエムは興味深そうに聞いている。半分野生で生きていたゴンや、暗殺業としてサバイバルを叩き込まれたキルアとカルト、知識として知っていたクラピカと経験値が膨大なビスケが飛びながらうんうんと頷く。その彼らのリアクションを見て、カームはガビーンとした顔になる。あ、これもしかしてハンターのリア才能はこのメンバーでは最下位者じゃ？ と。そもそも彼はこれまでその体質でゴリ

押ししすぎであった。多少の能力や特性など真正面から吸収するスタイルであったため、そのスキルを磨くという考えは頭から無い。ある意味自業自得である。戦闘については自信があったカームだが、この件によって改めてハンター的な能力を身につけようと決意するのであった。

また、観音の掌の上に乗っているネテロは興味がなさそうだ。阿修羅観音の背には光臨が浮かび、その謎パワーで浮いている。彼は、興味が無いというよりは、あの蛇を見ながら自らの観音が通用するか考えていたようだ。「もつとサイズが必要か…」などと呟いていたため、もしかすると、今後観音がより巨大化するかもしれない。

そうこうしているうちに、山岳地帯を抜ける。広大な土地が眼前に広がる。一行が飛行している高度は5000メートル以上だ。地平線の先が見えない。見えないが、謎の建造物や飛行物体に飛行島、蠢く何か、そして明らかにおかしい気象現象などが見てとれる。いずれも遠近感がおかしい。つまりサイズがおかしいのだ。メビウス湖内とはスケールが違う。

「うっひょく!! スゲえぜ!! これぞ冒険! 楽しみだぜ!!」

「うん!! これは凄いね!!! 来て良かった!」

「そんな感想が出るのはお前等ぐらいだと思っぜ…」

「で、カーム。方向は合ってるのか？」

「恐らく、としか言えないけどね」

「全く：オメーは意外とノープラン野郎だな。そんなだろうと思つてオレもいいアイテム持つてきたぜ」

クラピカに問われたカームが曖昧に答えたが、ジンがその解決策を提示する。それは羅針盤。メビウス湖内で発見した、どんな状況でも南北を正確に指し示す優れものだ。

「さすがジン！ やるね」

「まあな。てか、これぐらいはハンターとして当然だろ。今までどうしてきたんだよ」

「え〜まあ：勘？」

「……そりや迷子になるわけだ。改めて良く生きてたな、オメーはよ」

「ドンⅡフリークスさんにも散々言われましたよ、それ。まあ回り道も楽しいし」

「そりや今だから言えることだろが！ まったく：それでも合つてるのが余計に腹立つぜ」

「じゃあ案内お願いしますね！」

「……まあ合ってるからいいか。行くぜ」

そうしてワイワイ言いながら羅針盤を頼りに飛行しようとしたその時、全員の脳裏に念話が届いた。

——遅かったじゃねエか。待ちわびたぜ。迎えをよこしたから早くこっちに来い。待ってるぜ——

「……………」

「……今の……イヴリス、だよね？」

「……ああ、間違いねえ。変わらねえな、アイツも」

ジンとゴンが確認し合う。どうやら今のはイヴリスで間違いないうだ。それにしても、迎えとは一体何だろうと全員が思っていたとき、前方の空間に歪みが発生する。そして、巨大な気配。瞬間、全員が警戒し、戦闘態勢を取る。ソレの姿が徐々に鮮明になってきた時、人の形であることを察したネテロが俄に興奮し始める。

「クツクツク……ようやくオレの出番だな……！」

ソレが完全に姿を現す前に、ネテロは祈りの姿を整えた。直ぐにでも三乃掌を放てるように。しかし、その直前に気配が消える。瞬間、ほとんどのメンバーが推定敵を見失ったとき、カームも姿を消し、全員の背後でそのヒトガタの胸ぐらを掴んでいた。

「背後からとは恐れ入るな……何用かな？ キミはお迎えか？」

その正体は、小さな少女。しかし、漏れ出す気配が冗談では無く強い。現在のゴン・キルアより若干下ぐらいだ。

「グツ……放して。もう分かったから……敵意は無い」

そう言ったので、カームは素直に手を放す。改めて見ると、薄手の扇情的な服を纏っているが、年齢的には8〜10歳と言ったところだろうか。その少女が警戒しながらも語り出す。

「……ようやく会えたわね。お兄様、お義父様。そして、楽園の英雄達。我が名はバイザク。魔王イヴリスの娘。貴方達を迎えに来たわ」

「え!? お兄様って、まさかオレに言ってる!?!」

「アイツ、あれから娘も産んだのか…相手は?」

「お義父様、我々は通常の生命体とは一線を画すのです。母は自らの細胞を培養し、私を創造なさいました。ですからどうぞ心配なさらず」

空中で器用にカーテシーをする自称イヴリスの娘。薄手のセミロングスカートを両手でつまみ、挨拶をする。その仕草はどこかぎこちない。

「ふくん、流石暗黒大陸。ありそうなおつた。言われてみりや確かに、イヴリスをガキにすればこんな感じか」

「へ〜キミってオレの妹なんだね! オレ、兄妹居なかったから新鮮かも!」

「さて…こんなところで長話も何でしょう。我が母の元へと案内します。付いてきてくださいまし」

そう言うと、彼女はおもむろに空中に手をかざし、空間をこじ開けた。中は奇妙なも

やががかかっている。それを見て、当然だが警戒する一同。代表してカームが質問する。

「……罨で無いという証拠は？」

「おや、英雄様ともあろう者が臆するの？」

「最低限の確認だ。キミが嘘を言っている可能性も否定できない。ここでは一瞬でも油断できないから当然だと思うが」

「……メンドクさ。小心者め」

「何と言われようが証拠を見せろ。話はそれからだ」

結局、一触即発の空気になりかけたその時

——おいコラ、早くしやがれ!! 迎バイザクえが来ただろ!! チビガキだからすぐ分かる筈だぞ! サツサとソイツが開けたポータル伝って来いってんだ! 早く来ねエとぶっ飛ばすぞ!!——

「……………」

「……………」

「……母が失礼しました。これで証明はできたはず。どうぞお通りください」

「うん、なんかごめん。じゃあ行くよ。皆もいいかい？」

「ああ、いいぜ。もしイヴリスがオレ等を蔽めようってんならぶっ飛ばすだけだしな」

「お嬢ちゃん、後でワシと手合わせ願いたいのだが」

「おいジジイ、流星に犯罪臭いから止めときなさい」

カームに続き、他の面々も続けてポータルに入る。最後にバイザクが入ってそのポータルを閉じた。そして、完全にその大地から彼らの姿は消え、残された雄大過ぎる光景だけが残った。



「おっと、無事はぐれずについたか」

一同が到着したのは、暗くて広いホールである。幾多の材質不明の柱が見上げるほど高く伸び、天上は遙か上空だ。

「我が支配領域、『万魔殿』バンデモニウムへようこそ。では、案内しますのでこちらへ」

そうやってバイザクはスタスタと歩き始める。一行は一瞬顔を見合わせたか、彼女に付いていった。広いホールを抜け、長い回廊を渡り、延々と続く階段を上る。そして、登り切ったその先に刺々しい巨大な玉座があり、そこに座っている人物がいた。その人物は、見た目上女性に見える。薄手の白い羽衣の様なノースリーブ衣装を纏い、玉座に悠然と座っている。髪は漆黒を思わせる様な色で、癖が強く、かつ腰辺りまで無造作に伸びている。その髪を留める為か、バンドナを額に巻いていた。

「よオ……息子。そしてジン」

その声は、威圧感を伴いゴンとジンに向けられる。男の様な乱暴な言い方だが確かに

女性の声ではある。しかし、それ以前に王者としての風格のある声だ。

「……なんか体調悪い？」

「なるほど。テメー自ら来なかった理由はそれか」

2人が出会い頭に指摘する。この重圧の中、彼らは気付いていた。目の前の超越種が弱っているという事に。

「ほう……確かにそうだな。オレは今体調が悪い。だからテメーらから来てくれて助かったぜ」

「……そう。でもそれはそれとして聞きたいんだけど……なんでオレの闘いをジャマしたの？」

「ふっ……お前はオレの掌の上だ。ケツの殻も取れてねエガキをどう扱おうがオレの自由だ」

「なっ……！」

「イヴリス、ようやくテメーに辿り着いたぜ。テメーは一発ぶん殴ってやらねーと気が済まねーんだ。覚悟しろや」

「ふふ…羽虫が少しマシになったじゃねーか…旦那様よオ。だが、そんなカスみてーな力でオレをどうこう出来るとか思ってたんならとんだお笑い草だな」

「母さ…いや、イヴリス。悪いけどオレもムカついてるから一発ぶん殴るから。覚悟してね」

「いいぜ…遊んでやる。かかってこい」

久しぶりに会ったとは思えない不穏な会話である。感動の再会は行方不明だ。そして、明らかに戦闘態勢に入っている。これは止められないなと他の面々は感じ取り、距離をとる。

—程なくして、激突が始まった。



「どうだ？ 気は済んだか？」

「くそっ……」

「これがガチの魔王の力ってか……」

2人はボロボロ倒れている。大小様々な傷が服の上から見える。対するイヴリスは傷一つない。なんなら彼らを座ったままあしらった。

「分かるか？ テメエらは、弱ってるオレを玉座から動かす事すらできねエのさ」

「……それにしちや、オレ達を待っていたようだが？」

「頭数は多い方がいい。『駒』としちや有能だからな」

「……駒？」

その言葉に、ゴンのこめかみに青筋が立つ。ジンも同様に。この親子はキレるポイントが同じであった。

「そうだ。オレは今戦争中だな。どうしても気にくわねエ奴がいる。ソイツらが仕掛け

てきやがるから手伝え」

「断る」

ノータイムで断る2人。まあそりやそうだよなあと後方で他人事の一同。

「まあ聞けや。ここら一帯は『魔界』と呼ばれている。古くからオレの一族が治めた。とは言え、統治なんざしてねエがな。強ええ奴が好き勝手に振る舞う素敵な樂園だった。だが、ある時クーデター起こされてな。んで、オレ等は生命からがら人間の樂園に逃げたんだ。その後は知ってるだろ？」

「まあ……な」

「で、10年前に帰って見れば……ズタボロになっててなあ。親族とか部下達は軒並み奴隷になってやがった。何とか僅かに残ったこの城と共に反撃の糸口を探ってたつーわけよ」

「……………」

「で、バチバチやってたんだが……あの野郎、人間の樂園にも興味持ちやがっててなあ」

「!? ……まさか」

「お前らも知ってるだろ？ その裏切り者はゾバエだ」

◆

——遙かなる昔から、この地一帯は魔族、所謂力を持つ人外の楽園であった。魔族とは、神族に反旗を翻して天界を追われた神族及びその手下達の末裔の総称である。彼らは、紆余曲折を経て暗黒大陸の地に根を下ろすことになった。魔族と呼ばれるようになった彼らが住まう地。それ故にその場所は魔界と呼ばれるようになったが、暗黒大陸に点々とそのような地域がある。現在いるこの場所は、その中でも強大な力を持つ魔族が根を下ろしていた。それがイヴリスの一族だ。彼らは彼らなりにその地で暮らしていた。

そんな彼らに転機が訪れる。3000年以上前、彼らの元に配下ができた。亜人種ではない、純粹な魔族だ。彼は放浪の魔王だった。そしてこの地に目を付け、支配しよう

と目論むが、イヴリスの父にこつぴどく敗れた。そして配下として彼らに組み込まれたのだ。

最初は下つ端だった彼も、元は魔王である。それから更にメキメキと頭角を伸ばし、No. 2の域まで到達した。とは言え、彼の力ではトップであるイヴリスの父には敵いはしなかつたが。

だが、彼には野心があつた。彼の本質は吸血鬼だ。隠していた権能を使つて同僚達に少しづつ自らの毒を浸透させてゆく。それによつて巻き起こる不信、不安、猜疑。

彼は同時に王に気づかれぬ様に少しづつ毒を盛つていった。魔王にすら通用する毒、それは冥界の産物である。彼は冥界とも繋がりを持つていた。

そうして、外部や内部から様々な方法で魔界を少しずつ侵蝕していき、最終的には部下を率いて魔王に対してクーデターを起こした。複雑怪奇な系統図を逆手に利用され、最終的に魔王は、親族同士の殺し合いにより死んだ。気付いた時には遅過ぎたのだ。魔王の最期は、周辺を更地にしながら、絶叫して相討ちとなつた。

娘の1人で、まだ幼いが王子であるイヴリスは、そんな政変の直前に事態に気付き、首謀者であるゾバエを追い詰めたが、後一步と言う所で数の暴力に屈し、瀕死の重症を負つた。ギリギリの所で逃げ出した彼女は、自分の最後の忠臣であるディアナの献身に

より、何とか魔界を脱出した。亜人種であるディアナもゾバエの侵食を受けていたが、彼女の持つ特性、と言うか権能（大天使の息吹の元になる能力）により辛うじて撃退できていた。ゾバエもそれは承知していたが、彼女の弱さとしぶとさによつてしばらく放置していた。結果的にはそれが裏目に出た形であった。

瀕死のイヴリスを抱え、何とか龍神の庇護する人間の楽園に逃げ込んだ彼女達。そこに至つて、追つ手を幾度となく出していたゾバエも、もう何もできまいと放置した。そして、ゾバエは自らの国を新たに魔界に樹立した。それがおよそ2000年前である。ゾバエはそれから2000年もの間、この地域一帯を支配するに至つたのだ。

そして、12年前。封印を喰らつていたイヴリスとディアナはジンに発見され、封印を解かれる。なんやかんやがあつてゴンが産まれたが、その後力がある程度回復したイヴリスは、その力故に龍神に楽園追放を喰らう。

飛ばされたのは、自らの領域よりやや東方の地。そこで彼女は鍛え直した。今度こそ必ず負けないために。そして、1年後に魔界に凱旋を果たすも、そこは既にゾバエに荒らされ、不毛の地と化していた。部下もいない、領地も何も無い。ただ一つ残つたのは、無残に破壊された「万魔殿」^{バンデモニウム}のみ。

そこから彼女は奮闘した。自らの力を大量に使い、領域を拡張し、闘いを挑む。手が足りない、自らの力を裂き、クローンを作つたり、無理して周辺地域や「万魔殿」^{バンデモニウム}を

復元したりと奮闘した。しかし、その頃ゾバエが楽園で暗躍を始めたという情報を入手したイヴリスは、単身で楽園の限界境界線に赴き、龍神と闘った。その頃には、ある理由から力も半減していたイヴリスはこっぴどくやられ、半死半生の目にあつてしまった。彼女の力が全盛であればもつと善戦していたかも知れないが、たればである。

そして、現在膠着状態である2大巨頭は、お互い睨みを効かせながら動けないでいる状態となっている。



「ま、そーいうわけだ」

落ち着いて話す為に、全員で巨大なテーブルを囲み、謎肉を頬張りながらイヴリスが言う。この謎肉も繊維一つ一つが輝いていて、極上の美味さだ。

一頻り自己紹介を終えた後、彼女はこれまでの事をかいつまんで話してくれた。

「なるほどな。だけどよ、オメーならそれでも覚悟決め込んでカチ込みに行つたら？
何でやらなかつたんだよ」

「……まあそうだな。敵が奴だけならオレもそうしたぜ。だがな、第3の勢力が絡んでやがつてなア」

「第3の勢力？」

「さつき話した中であつただろ？ 冥界勢力だ。正確には冥界の神な。冥界とは言え、神は神だからオレ達を目の敵にしてやがる奴等だな」

「冥界の……」

「テメーは関係ねエから気にするな。そもそも冥王ご本人じゃねエ。だが、正直奴より厄介な相手だ。この野郎、いや、女神だから女郎か。密かにゾバエの奴を支援してやがった。奴の目論見はオレ達を潰し合わせる事。そしてあわよくばこの界限を冥界に取り込みたいつてとこだろう。無論それはゾバエも分かつてるから膠着状態になつてゐるつて訳よ」

「…でも、イヴリス？ そもそもその体調不良さえ無ければ余裕で倒せるんじゃないの？」

「そうだな。だが、コレは治んねエ」

「我々の“奇跡”でも？」

「これは神の呪いだからな。見てみる」

そう言うとおもむろにイヴリスは衣装を豪快に脱ぎ、背中をはだける。その唐突さに男性陣は目を背けそこなった。だが、その直後に背中から無数に生える蛇の頭に覆われていた姿に目を奪われた。

「コイツはオレの身体に巣くって栄養を貪りやがる。抑えるのにも一苦勞だぜ。ジンは知ってるだろ？」

「まあ、な。分かったからサツサと服着ろ」

「へいへい……まあそういうわけで、『救世主』関連の奴には解除は無理だ。元を辿れば同じモノだからな」

「『星の意志』と神々は同種だと？」

「そうだ。神とは何かっつーそもそもその話になるがな……」

神とは何か。その正体はこの星そのものである。万物を受け入れるこの星は、この世における最強の存在。『星の意志』とも呼ばれるソレは、正に唯一神である。星は神々を始め、様々な生命体を創造した。数多のモデルケース、それが神々だ。

星の力は即ち神の力。そして、それを直に受け継いでいる神々だからこそ、
“では神の呪いの解除が難しい。” 聖光気

「だがよ……ここに来てチャンスが巡ってきた。なア、英雄殿よ」
「……………はっ……私？」

イヴリスの突然のご指名に気付いていなかったカームが驚く。彼は彼でキルアとメルエムと談笑していたからだ。

「そーだ。お前だ。お前の権能は中々イカすじゃねえか。奴の権能まで取り込んだんだろ？」

「ええ、まあ……」

「で、オメーは樂園で奴に散々いいようにされたらしいじゃねエか。そもそも一緒にここにきてんならコイツ等と目的は同じと見ていいんだろ？」

「そうですね。奴は滅する。それが大目標の一つですし」

「テメーはオレの話が無くても特攻しそうだな……それならいい。手を組もうぜ」

「いや、いきなり言われてもね。初対面だし」

「固いこと言うなよ。な？ 頼むぜ。終わった後ならばバイザクをくれてやってもいい」
「お母様!？」

「それは僕が断固拒否する」

「右に同じく、だわさ」

「そうだな。私もそれは拒否しよう」

カルト、ビスケ、クラピカが即座にそれを拒否する。

「おーおー愛されてんなあ。まあそれは冗談としてだ。どうする?」

「……お母様?」

「うくん……まあいいですよ。どうせやるつもりだったし」

「よし。なら早速作戦会議だ。ゴン、ジン。オメー等もいいな?」

「……まあ、いいぜ。オレも奴はぶちのめしたいと思つてたからな。テメーをブン殴るのはその後にしてやる」

「そうだね。オレもジンと同じ意見かな」

「ただ……その呪い、何とか外せないですかね。それが無ければ貴女一人で行けるでしょうに」

「ま、しゃーねーわ。ゾバエぶつ殺したら奴にもお礼参りしに冥界に行くつもりだ。幸いな事に何故か今奴は冥界に引っ込んでるからな」

「冥王より厄介な神……どんな奴です？」

「ん？ ああ、そうだな……大昔に神々以上の強さの巨人が居た。今は大部分が絶滅したんだがな。コイツらはクソ強いくせに神には殺せない、というか人間にしか殺せない厄介な権能持ちの奴らでな」

何故ここで巨人の話が？ というか、やっぱりアイツらクソ強だったんじゃない。そりゃ勝てんわとカームが考えていた時、イヴリスは衝撃の発言をした。

「奴は、それを無視して真正面から巨人の長を殴り殺せた唯一の神だ」